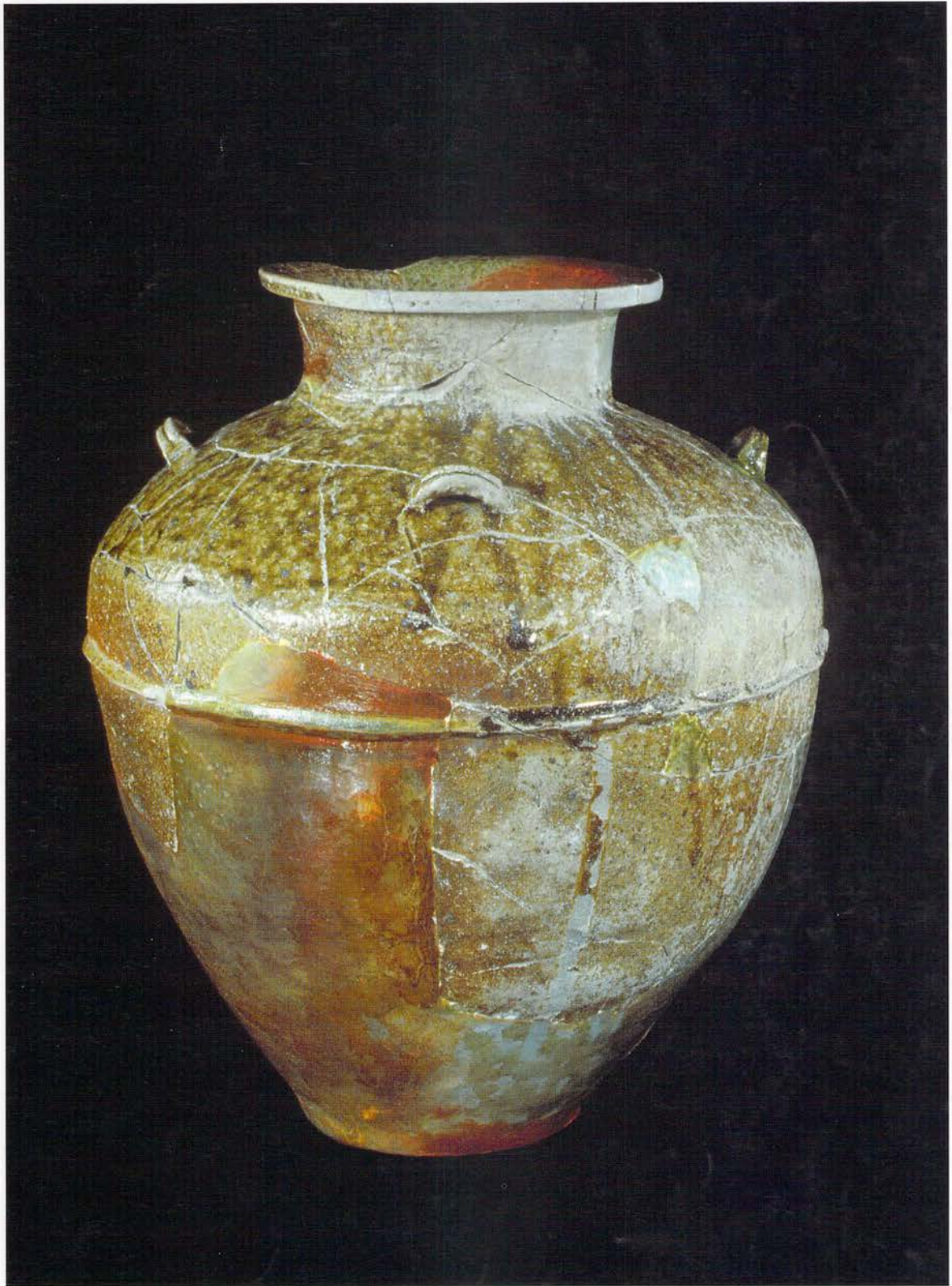


# 泉屋遺跡第 10・11・13・15 次発掘調査報告書

一 関遊水地事業関連遺跡発掘調査

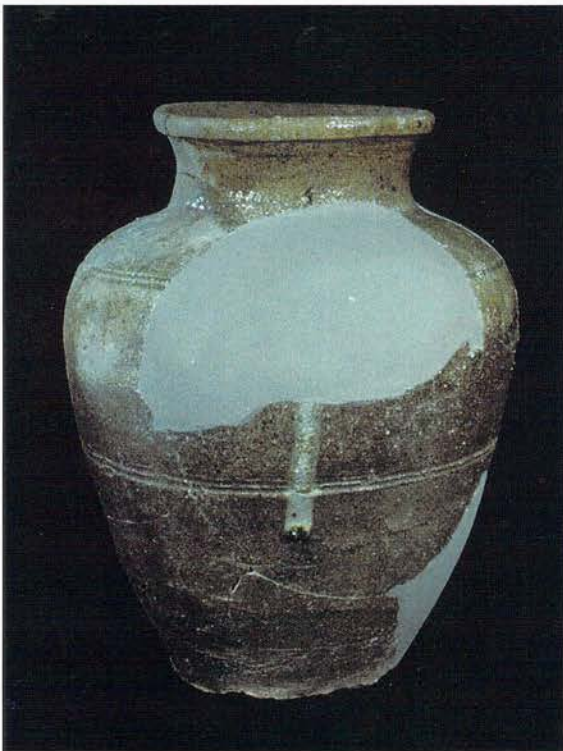


常滑産突帯付四耳壺 (1029)

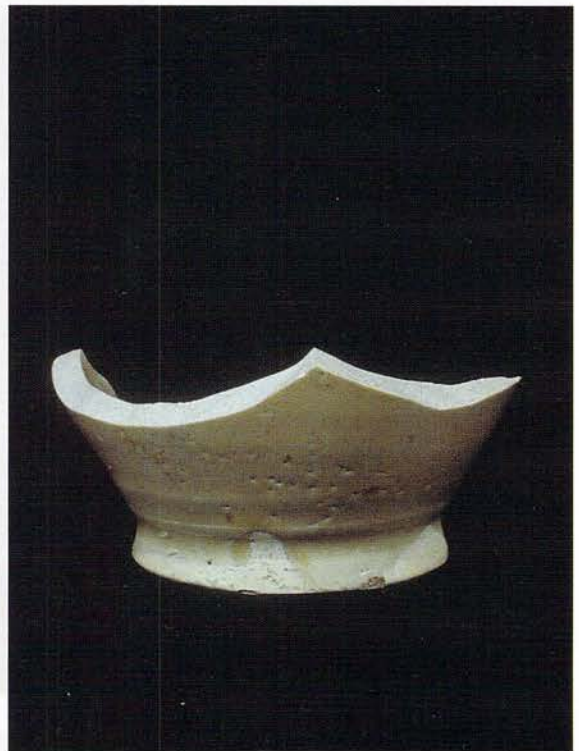




常滑産片口鉢（1302、1002）



常滑産二筋壺（1025）



中国産白磁壺（2071）



緑釉陶器、中国産白磁（西側調査区）



中国産青磁、青白磁、陶器（西側調査区）



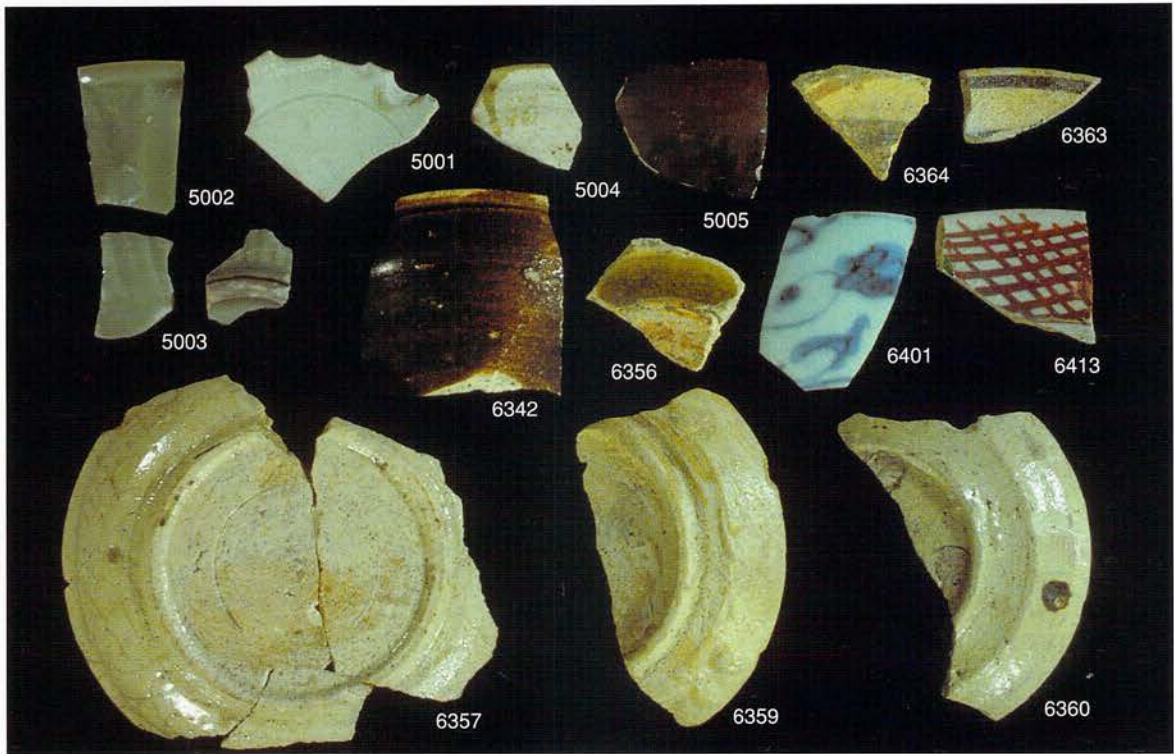


中国産白磁（東側調査区）



中国産白磁、青磁、青白磁、陶器（東側調査区）





中世～近世初頭の陶磁器



柱状高台かわらけ

# 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、平成7年3月現在9000ヵ所以上に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は一関遊水地事業に係わる太田川堤防建設工事及び国道4号線改修工事に関連して、平成5年度、6年度、7年度に実施した平泉町泉屋遺跡の調査結果をまとめたものであります。

発掘調査では奥州藤原氏の時代の建物跡や井戸などとそれに伴うかわらけ、陶磁器などが多数発見され、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました建設省東北工事局岩手工事事務所・平泉町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成9年3月

財団法人岩手県文化振興事業団

理事長 船越昭治

## 例 言

1. 本報告書は岩手県西磐井郡平泉町平泉字泉屋2-1他に所在する泉屋遺跡の第10次、第11次、第13次、第15次発掘調査の成果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、一関遊水地事業に係わる太田川堤防工事、国道4号線改良工事に伴う事前の発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と建設省東北地方建設局岩手工事事務所との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 岩手県遺跡台帳の遺跡番号はNE 76-1079、調査略号は調査次ごとにI Y 93-10、I Y 93-11、I Y 94-13、I Y 95-15である。
4. 発掘調査期間、調査面積、調査担当者は以下のとおりである。

第10次	平成5年4月9日～8月6日	1,523 m <sup>2</sup>	文化財専門調査員 佐々木 務 (現岩手県文化課文化財調査員) 文化財専門調査員 笹平 克子 (現姓佐々木、現滝沢村立篠木小学校教諭)
第11次	平成5年9月7日～9月30日	745 m <sup>2</sup>	文化財専門調査員 佐々木 務 文化財専門調査員 笹平 克子
第13次	平成6年4月14日～11月4日	3,050 m <sup>2</sup>	文化財専門調査員 笹平 克子 期限付専門職員 稲垣 雅宏 (現岩手県立盛岡第二高校教諭) 文化財専門調査員 羽柴 直人
第15次	平成7年4月12日～8月4日	2,982 m <sup>2</sup>	文化財専門調査員 羽柴 直人 期限付専門職員 吉田 理 (現私立宮城学院高校教諭)
調査面積合計			8,300 m <sup>2</sup>

5. 室内整理期間及び整理担当者は以下のとおりである。  
平成5年11月1日～3月31日 佐々木 務  
平成6年11月1日～3月31日 笹平 克子  
平成7年11月1日～3月29日 羽柴 直人、吉田 理  
平成8年8月1日～10月31日 羽柴 直人
6. 本報告書の執筆は、羽柴直人を中心に一部分を佐々木務、笹平克子、吉田理がおこなった。羽柴以外の執筆については文末に執筆者名を付した。編集は羽柴がおこなった。
7. 分析、鑑定、保存処理は以下の方に依頼した。(敬称略)  
樹種同定 高橋 利彦 木工舎「ゆい」  
木製品、金属製品の保存処理 新日鉄釜石文化財保存処理センター  
トイレ状土坑の土壌分析 株式会社古環境研究所  
石材鑑定 佐藤 二郎 長内水源工業
8. 本報告書の作成にあたっては下記の方々にご指導をいただいた。(順不同、敬称略)



飯村均（福島県文化センター）、井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、本田泰貴（東北陶磁文化館）、木村高（青森埋文）、半沢紀（北奥文化研究会）、本堂寿一（北上市立博物館）、金丸義一（芝浦工業大学）、斎木秀雄（鎌倉考古学研究所）、中野晴久（常滑市民俗資料館）、本澤慎輔、及川司、八重樫忠郎、千葉信胤、菅原計二、鈴木江利子（平泉町教育委員会）、前川佳代（古代学協会）、山本信夫（太宰府市教育委員会）、藤澤良祐（瀬戸市埋文）、

9. 調査成果はこれまでに現地説明会資料や調査略報に発表してきたが、本書の内容がこれらに優先するものである。
10. 土層の色調観察は、「新版標準土色帳」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修 1989）を用いた。
11. 本遺跡の調査で得られた一切の資料は岩手県埋蔵文化財センターが保管している。

## 目 次

序	
例言	
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	1
1 位置	1
2 地形	1
3 歴史的環境	3
4 これまでの泉屋遺跡の発掘調査	6
III 調査・整理の方法	9
1 調査の経過	9
2 野外調査の方法	10
3 室内整理の方法	11
4 本報告書の構成	11
IV 検出遺構	15
1 建物	15
2 井戸	72
3 土坑	94
4 溝	132
5 焼土、カマド遺構	169
6 縄文時代の遺構	187
V 出土遺物	188
1 縄文・弥生時代の遺物	188
(1) 土器	188
(2) 石器	188
2 古代の遺物	193
(1) 土師器	193
(2) 須恵器	193
(3) 緑釉陶器	193
3 12世紀の遺物	200
(1) 国産陶器	200
(2) 中国産陶磁器	258
(3) かわらけ	267
(4) 土製品	294
(5) 木製品	297
(6) 石製品	303
(7) 鉄製品	304
(8) 銅製品	307
4 13～15世紀の遺物	309
(1) 陶磁器	309
(2) かわらけ	309
5 16世紀～近世の遺物	311
(1) 陶磁器	311
(2) 木製品	352
(3) 金属製品	360
(4) 銭貨	363
(5) 石製品	368

VI考察	375	1 泉屋遺跡 15 次調査におけるトイレ遺構分析	389
1 近世以降の屋敷の範囲とその変遷	375	2 平泉町泉屋遺跡第 15 次調査出土材の樹種	401
2 12 世紀の遺構について	379		
VII付編	389		

## 〈図版目次〉

第1図	遺跡位置図	2	第55図	西側調査区の土坑(6) (15S K38~43)	104
第2図	地形分類図	3	第56図	西側調査区の土坑(7) (15S K44、45)	106
第3図	泉屋遺跡全体図	8	第57図	東側調査区の土坑(1) (11S K1~3、5~8)	107
第4図	周辺の地形と遺構配置図	13・14	第58図	東側調査区の土坑(2) (13S K1~6)	109
第5図	西側調査区の建物(1) (15S B5、6)	16	第59図	東側調査区の土坑(3) (13S K7~11)	111
第6図	西側調査区の建物(2) (15S B7、8)	17	第60図	東側調査区の土坑(4) (13S K12、14~18)	113
第7図	西側調査区の建物(3) (15S B9)	19	第61図	東側調査区の土坑(5) (13S K20~25)	114
第8図	西側調査区の建物(4) (15S B10、11、12)	21	第62図	東側調査区の土坑(6) (13S K27~30、32、33、35)	116
第9図	西側調査区の建物(5) (15S B13、14、15、16)	23	第63図	東側調査区の土坑(7) (13S K36~38、40~42)	118
第10図	西側調査区の建物(6) (15S B17、18、19)	26	第64図	東側調査区の土坑(8) (13S K43、47、55)	119
第11図	西側調査区の建物(7) (15S B20、21、25)	28	第65図	東側調査区の土坑(9) (13S K48、49、52、53)	121
第12図	西側調査区の建物(8) (15S B26)	30	第66図	東側調査区の土坑(10) (13S K54、56、57)	122
第13図	西側調査区の建物(9) (15S B27、28、29)	32	第67図	東側調査区の土坑(11) (15S K1~6)	124
第14図	15S B26、27、28の建物配置	34	第68図	東側調査区の土坑(12) (15S K7~14)	126
第15図	東側調査区の建物(1) (11S B1、2、3)	36	第69図	東側調査区の土坑(13) (15S K46~53)	128
第16図	東側調査区の建物(2) (11S B4)	37	第70図	東側調査区の土坑(14) (15S K54~62)	130
第17図	東側調査区の建物(3) (13S B1、2)	39	第71図	西側調査区の溝(1) (10SD1、3、7A、7B、9、10、11、15SD24、25)	133・134
第18図	東側調査区の建物(4) (13S B3)	40	第72図	西側調査区の溝(2) (10SD2、4、6、15SD46)	135・136
第19図	東側調査区の建物(5) (13S B4、5)	41	第73図	西側調査区の溝(3) (15SD14~19、22、23、26)	141・142
第20図	東側調査区の建物(6) (13S B6、7)	43	第74図	西側調査区の溝(4) (10SD5、15SD20、21、27、28、44)	143・144
第21図	東側調査区の建物(7) (13S B8)	44	第75図	西側調査区の溝(5) (15SD29~33、45)	146
第22図	東側調査区の建物(8) (13S B9)	46	第76図	東側調査区の溝(1) (11SD3~8、15SD13)	148
第23図	東側調査区の建物(9) (13S B10)	47	第77図	東側調査区の溝(2) (13SD1、2、5~8)	150
第24図	東側調査区の建物(10) (13S B11)	49	第78図	東側調査区の溝(3) (13SD3、4、9、14、23)	151・152
第25図	東側調査区の建物(11) (13S B12、13、15)	51	第79図	東側調査区の溝(4) (13SD10~13、15~21)	154
第26図	東側調査区の建物(12) (13S B17、18、19、20)	52	第80図	東側調査区の溝(5) (13SD25~33)	159・160
第27図	東側調査区の建物(13) (13S B21)	55	第81図	東側調査区の溝(6) (15SD1~4、11、12)	161・162
第28図	東側調査区の建物(14) (13S B22)	56	第82図	東側調査区の溝(7) (15SD5~10、43)	164
第29図	東側調査区の建物(15) (13S B23)	58	第83図	東側調査区の溝(8) (15SD34~42)	167・168
第30図	東側調査区の建物(16) (13S B24)	59	第84図	西側調査区の焼土・カマド状遺構(1) (10SX1~3)	169
第31図	東側調査区の建物(17) (13S B25)	60	第85図	西側調査区の焼土・カマド状遺構(2) (15SX14~18)	171
第32図	東側調査区の建物(18) (13S B26)	61	第86図	東側調査区の焼土・カマド状遺構(1) (11SX1、2、13SX1~4)	173
第33図	東側調査区の建物(19) (13S B27、28)	63	第87図	東側調査区の焼土・カマド状遺構(2) (13SX6~8、11~13)	175
第34図	東側調査区の建物(20) (13S B29、30)	64	第88図	東側調査区の焼土・カマド状遺構(3) (13SX10、14~22)	177
第35図	東側調査区の建物(21) (15S B1)	66	第89図	東側調査区の焼土・カマド状遺構(4) (13SX23、24、26、31~40)	181
第36図	東側調査区の建物(22) (15S B2、3、4)	68	第90図	東側調査区の焼土・カマド状遺構(5) (13SX32~40)	182
第37図	東側調査区の建物(23) (15S B22、23、24)	71	第91図	東側調査区の焼土・カマド状遺構(6) (15SX1~9)	184
第38図	西側調査区の井戸(1) (15SE2、3、4)	73	第92図	東側調査区の焼土・カマド状遺構(7) (15SX19~21)	186
第39図	西側調査区の井戸(2) (15SE5、6、7)	75	第93図	縄文時代の遺構(13陥し穴1、2、15陥し穴1)	187
第40図	西側調査区の井戸(3) (15SE8、9、10)	77	第94図	縄文・弥生時代の土器 1~12	189
第41図	西側調査区の井戸(4) (15SE11、12、13)	79	第95図	縄文・弥生時代の石器(1) 21~38	190
第42図	西側調査区の井戸(5) (15SE14、15、16)	81	第96図	縄文・弥生時代の石器(2) 39~48	191
第43図	西側調査区の井戸(6) (15SE17、18、19)	83	第97図	縄文・弥生時代の石器(3) 49~53	192
第44図	西側調査区の井戸(7) (15SE20、21、22)	85	第98図	縄文・弥生時代の石器(4) 54~57	193
第45図	西側調査区の井戸(8) (15SE23、26)	86	第99図	古代の土師器(1) 101~112	194
第46図	東側調査区の井戸(1) (11SE1、13SE1、2)	87	第100図	古代の土師器(2) 113~128	195
第47図	東側調査区の井戸(2) (13SE3、4、5)	89	第101図	古代の須恵器(1) 201~209	196
第48図	東側調査区の井戸(3) (13SE6、7)	91	第102図	古代の須恵器(2)・緑釉陶器 210~216	197
第49図	東側調査区の井戸(4) (15SE1、25)	92	第103図	古代の須恵器(3) 217~233	198
第50図	西側調査区の土坑(1) (10SK1~5)	94	第104図	古代の須恵器(4) 234~249	199
第51図	西側調査区の土坑(2) (15SK15~20)	96	第105図	西側調査区常滑産陶器(1) 1001~1007	201
第52図	西側調査区の土坑(3) (15SK21~27)	98	第106図	西側調査区常滑産陶器(2) 1008~1020	202
第53図	西側調査区の土坑(4) (15SK28~33)	100			
第54図	西側調査区の土坑(5) (15SK34~37)	102			



第107図	西側調査区常滑産陶器(3)	1021~1027	203	第163図	西側調査区かわらけ(2)	3023~3042	271
第108図	西側調査区常滑産陶器(4)	1028~1029	204	第164図	西側調査区かわらけ(3)	3043~3060	272
第109図	西側調査区常滑産陶器(5)	1030~1035	205	第165図	西側調査区かわらけ(4)	3061~3077	273
第110図	西側調査区常滑産陶器(6)	1036~1048	206	第166図	西側調査区かわらけ(5)	3078~3102	274
第111図	西側調査区常滑産陶器(7)	1049	207	第167図	西側調査区かわらけ(6)	3103~3122	275
第112図	西側調査区常滑産陶器(8)	1050~1056	208	第168図	西側調査区かわらけ(7)	3123~3141	276
第113図	西側調査区常滑産陶器(9)	1057~1063	209	第169図	西側調査区かわらけ(8)	3142~3160	277
第114図	西側調査区常滑産陶器(10)	1064~1072	210	第170図	西側調査区かわらけ(9)	3161~3171	278
第115図	西側調査区常滑産陶器(11)	1073~1077	211	第171図	東側調査区かわらけ(1)	3201~3222	279
第116図	西側調査区常滑産陶器(12)	1078~1083	212	第172図	東側調査区かわらけ(2)	3223~3243	280
第117図	西側調査区常滑産陶器(13)	1084~1089	213	第173図	東側調査区かわらけ(3)	3244~3263	281
第118図	西側調査区常滑産陶器(14)	1090~1095	214	第174図	東側調査区かわらけ(4)	3264~3277	282
第119図	西側調査区常滑産陶器(15)	1096~1103	215	第175図	東側調査区かわらけ(5)	3278~3293	283
第120図	西側調査区常滑産陶器(16)	1104~1111	216	第176図	東側調査区かわらけ(6)	3294~3312	284
第121図	西側調査区常滑産陶器(17)	1112~1125	217	第177図	東側調査区かわらけ(7)	3313~3340	285
第122図	西側調査区常滑産陶器(18)	1126~1137	218	第178図	東側調査区かわらけ(8)	3341~3366	286
第123図	西側調査区常滑産陶器(19)	1138~1149	219・220	第179図	東側調査区かわらけ(9)	3367~3384	287
第124図	西側調査区常滑産陶器(20)	1150~1154	221・222	第180図	東側調査区かわらけ(10)	3385~3407	288
第125図	西側調査区常滑産陶器(21)	1155~1157	223	第181図	東側調査区かわらけ(11)	3408~3426	289
第126図	西側調査区瀬美産陶器(1)	1158~1162	224	第182図	東側調査区かわらけ(12)	3427~3430	290
第127図	西側調査区瀬美産陶器(2)	1163~1174	225	第183図	東側調査区かわらけ(13)	3431~3446	291
第128図	西側調査区瀬美産陶器(3)	1175~1182	226	第184図	東側調査区かわらけ(14)	3447~3462	292
第129図	西側調査区瀬美産陶器(4)	1183~1185	227・228	第185図	東側調査区かわらけ(15)	3463~3478	293
第130図	西側調査区瀬美産陶器(5)	1186~1192	229・230	第186図	東側調査区かわらけ(16)	3479~3487	294
第131図	西側調査区瀬美産陶器(6)	1193~1200	231	第187図	12世紀の土製品(1)	4001~4007	295
第132図	西側調査区瀬美産陶器(7)	1201~1207	232	第188図	12世紀の土製品(2)	4008~4018	296
第133図	西側調査区瀬美産陶器(8)	1208~1212	233	第189図	12世紀の土製品(3)	4019~4022	297
第134図	西側調査区瀬美産陶器(9)	1213~1221	234	第190図	12世紀の木製品(1)	4101~4103	298
第135図	西側調査区瀬美産陶器(10)	1222~1227	235	第191図	12世紀の木製品(2)	4104~4109	299
第136図	西側調査区瀬美産陶器(11)	1228~1235	236	第192図	12世紀の木製品(3)	4110~4111	300
第137図	西側調査区瀬美産陶器(12)	1236~1249	237	第193図	12世紀の木製品(4)	4112~4113	301
第138図	西側調査区瀬美産陶器(13)	1250~1262	238	第194図	12世紀の石製品(1)	4201~4208	302
第139図	西側調査区瀬美産陶器(14)	1263~1271	239	第195図	12世紀の石製品(2)	4209~4211	303
第140図	西側調査区猿投産陶器	1272~1278	241・242	第196図	12世紀の石製品(3)	4212~4218	304
第141図	西側調査区須恵器系陶器・在地産陶器	1279~1286	243	第197図	12世紀の金属製品(1)	4301~4318	305
第142図	東側調査区常滑産陶器(1)	1301~1315	245	第198図	12世紀の金属製品(2)	4319~4330	306
第143図	東側調査区常滑産陶器(2)	1316~1329	246	第199図	12世紀の金属製品(3)	4331~4337	307
第144図	東側調査区常滑産陶器(3)	1330~1344	247	第200図	12世紀の金属製品(4)	4401~4406	308
第145図	東側調査区常滑産陶器(4)	1345~1354	248	第201図	13~15世紀の陶磁器(1)	5001~5005	309
第146図	東側調査区常滑産陶器(5)	1355~1367	249	第202図	13~15世紀の陶磁器(2)・かわらけ	5006~5012	310
第147図	東側調査区常滑産陶器(6)	1368~1388	250	第203図	西側調査区の近世陶磁器(1)	6001~6021	313
第148図	東側調査区瀬美産陶器(1)	1389~1411	252	第204図	西側調査区の近世陶磁器(2)	6022~6042	314
第149図	東側調査区瀬美産陶器(2)	1412~1421	253	第205図	西側調査区の近世陶磁器(3)	6043~6059	315
第150図	東側調査区瀬美産陶器(3)	1422~1432	254	第206図	西側調査区の近世陶磁器(4)	6060~6074	316
第151図	東側調査区瀬美産陶器(4)	1433~1447	255	第207図	西側調査区の近世陶磁器(5)	6075~6087	317
第152図	東側調査区瀬美産陶器(5)・猿投産陶器	1448~1457	256	第208図	西側調査区の近世陶磁器(6)	6088~6096	318
第153図	東側調査区須恵器系陶器・在地産陶器	1458~1462	257	第209図	西側調査区の近世陶磁器(7)	6097~6102	319
第154図	西側調査区中国産陶磁器(1)	2001~2013	259	第210図	西側調査区の近世陶磁器(8)	6103~6105	320
第155図	西側調査区中国産陶磁器(2)	2014~2024	260	第211図	西側調査区の近世陶磁器(9)	6106~6113	321
第156図	西側調査区中国産陶磁器(3)	2025~2037	261	第212図	西側調査区の近世陶磁器(10)	6114~6122	322
第157図	東側調査区中国産陶磁器(1)	2038~2054	262	第213図	西側調査区の近世陶磁器(11)	6123~6134	323
第158図	東側調査区中国産陶磁器(2)	2055~2069	263	第214図	西側調査区の近世陶磁器(12)	6135~6144	324
第159図	東側調査区中国産陶磁器(3)	2070~2080	264	第215図	西側調査区の近世陶磁器(13)	6145~6166	325
第160図	東側調査区中国産陶磁器(4)	2081~2090	265	第216図	西側調査区の近世陶磁器(14)	6167~6188	326
第161図	てづくねかわらけ分類図		268	第217図	西側調査区の近世陶磁器(15)	6189~6201	327
第162図	西側調査区かわらけ(1)	3001~3022	270	第218図	西側調査区の近世陶磁器(16)	6202~6211	328

第219図	西側調査区の近世陶磁器(17)	6212	329
第220図	西側調査区の近世陶磁器(18)	6213~6224	330
第221図	西側調査区の近世陶磁器(19)	6225~6229	331
第222図	西側調査区の近世陶磁器(20)	6230~6237	332
第223図	西側調査区の近世陶磁器(21)	6238~6246	333
第224図	西側調査区の近世陶磁器(22)	6247~6253	334
第225図	西側調査区の近世陶磁器(23)	6254~6265	335
第226図	II E 区の近世陶磁器(1)	6301~6317	337
第227図	II E 区の近世陶磁器(2)	6318~6328	338
第228図	II E 区の近世陶磁器(3)	6329~6341	339
第229図	II E 区の近世陶磁器(4)	6342~6358	340
第230図	II E 区の近世陶磁器(5)	6359~6370	341
第231図	II E 区の近世陶磁器(6)	6371~6384	342
第232図	II E 区の近世陶磁器(7)	6385~6390	343
第233図	II E 区の近世陶磁器(8)	6391~6397	344
第234図	II E 区の近世陶磁器(9)	6398~6399	345
第235図	II・III F 区の近世陶磁器(1)	6401~6416	346
第236図	II・III F 区の近世陶磁器(2)	6417~6429	347
第237図	II・III F 区の近世陶磁器(3)	6430~6446	348
第238図	II・III F 区の近世陶磁器(4)	6447~6458	349
第239図	II・III F 区の近世陶磁器(5)	6459~6467	350
第240図	II・III F 区の近世陶磁器(6)	6468~6477	351
第241図	近世の木製品(1)	7001~7004	352
第242図	近世の木製品(2)	7005~7012	353
第243図	近世の木製品(3)	7013~7016	354

第244図	近世の木製品(4)	7017~7019	355
第245図	近世の木製品(5)	7020~7022	356
第246図	近世の木製品(6)	7023	357
第247図	近世の木製品(7)	7024~7030	358
第248図	近世の木製品(8)	7031	359
第249図	近世の木製品(9)	7032~7034	360
第250図	近世の金属製品(1)	7101~7107	361
第251図	近世の金属製品(2)	7108~7120	362
第252図	近世の金属製品(3)	7121~7129	363
第253図	近世の銭貨(1)	7201~7211	364
第254図	近世の銭貨(2)	7212~7219	365
第255図	近代の貨幣	7220~7232	366
第256図	近世の銭貨(3)	7233~7243	367
第257図	近世の銭貨(4)	7244~7251	368
第258図	近世の石製品(1)	7301~7306	369
第259図	近世の石製品(2)	7307~7309	370
第260図	近世の石製品(3)	7310~7311	371
第261図	近世の石製品(4)	7312~7313	372
第262図	近世の石製品(5)	7314~7319	373
第263図	近世の石製品(6)	7320	374
第264図	調査区内の地割		376
第265図	12世紀の遺構配置図		381・382
第266図	平泉遺跡群全体図		386
第267図	12世紀の遺構と周辺の地形		387・388

## 〈写真図版目次〉

写真図版1	常滑産突帯付四耳壺	
写真図版2	常滑産片口鉢・常滑産二筋壺・中国産白磁壺	
写真図版3	緑釉陶器・中国産陶磁器(西側調査区)	
写真図版4	中国産陶磁器(東側調査区)	
写真図版5	中世~近世初頭の陶磁器・柱状高台かわらけ	
写真図版6	昭和30年代の調査区周辺	414
写真図版7	航空写真(1)	415
写真図版8	航空写真(2)	416
写真図版9	航空写真(3)	417
写真図版10	航空写真(4)	418
写真図版11	調査区の遺蹟、全景	419
写真図版12	西側調査区の建物(1)	420
写真図版13	西側調査区の建物(2)	421
写真図版14	西側調査区の建物(3)	422
写真図版15	西側調査区の建物(4)	423
写真図版16	東側調査区の建物	424
写真図版17	西側調査区の井戸(1)	425
写真図版18	西側調査区の井戸(2)	426
写真図版19	西側調査区の井戸(3)	427
写真図版20	西側調査区の井戸(4)	428
写真図版21	西側調査区の井戸(5)	429
写真図版22	西側調査区の井戸(6)	430
写真図版23	西側調査区の井戸(7)・東側調査区の井戸(1)	431
写真図版24	東側調査区の井戸(2)	432
写真図版25	東側調査区の井戸(3)	433
写真図版26	東側調査区の井戸(4)・西側調査区の土坑(1)	434
写真図版27	西側調査区の土坑(2)	435
写真図版28	西側調査区の土坑(3)	436

写真図版29	西側調査区の土坑(4)	437
写真図版30	西側調査区の土坑(5)	438
写真図版31	西側調査区の土坑(6)	439
写真図版32	西側調査区の土坑(7)	440
写真図版33	西側調査区の土坑(8)・東側調査区の土坑(1)	441
写真図版34	東側調査区の土坑(2)	442
写真図版35	東側調査区の土坑(3)	443
写真図版36	東側調査区の土坑(4)	444
写真図版37	東側調査区の土坑(5)	445
写真図版38	東側調査区の土坑(6)	446
写真図版39	東側調査区の土坑(7)	447
写真図版40	東側調査区の土坑(8)	448
写真図版41	東側調査区の土坑(9)	449
写真図版42	東側調査区の土坑(10)	450
写真図版43	東側調査区の土坑(11)	451
写真図版44	西側調査区の溝(1)	452
写真図版45	西側調査区の溝(2)	453
写真図版46	西側調査区の溝(3)	454
写真図版47	西側調査区の溝(4)	455
写真図版48	西側調査区の溝(5)	456
写真図版49	西側調査区の溝(6)	457
写真図版50	西側調査区の溝(7)	458
写真図版51	西側調査区の溝(8)・東側調査区の溝(1)	459
写真図版52	東側調査区の溝(2)	460
写真図版53	東側調査区の溝(3)	461
写真図版54	東側調査区の溝(4)	462
写真図版55	東側調査区の溝(5)	463
写真図版56	東側調査区の溝(6)	464

写真図版57	東側調査区の溝(7)	465	写真図版112	東側調査区の中国産陶磁器(2)	520
写真図版58	東側調査区の溝(8)	466	写真図版113	東側調査区の中国産陶磁器(3)	521
写真図版59	西側調査区のSX遺構	467	写真図版114	西側調査区のかわらけ(1)	522
写真図版60	東側調査区のSX遺構(1)	468	写真図版115	西側調査区のかわらけ(2)	523
写真図版61	東側調査区のSX遺構(2)	469	写真図版116	西側調査区のかわらけ(3)	524
写真図版62	東側調査区のSX遺構(3)	470	写真図版117	西側調査区のかわらけ(4)	525
写真図版63	東側調査区のSX遺構(4)	471	写真図版118	東側調査区のかわらけ(1)	526
写真図版64	陥し穴遺構	472	写真図版119	東側調査区のかわらけ(2)	527
写真図版65	縄文・弥生時代の土器・石器(1)	473	写真図版120	東側調査区のかわらけ(3)	528
写真図版66	縄文・弥生時代の石器(2)	474	写真図版121	東側調査区のかわらけ(4)	529
写真図版67	縄文・弥生時代の石器(3)	475	写真図版122	東側調査区のかわらけ(5)	530
写真図版68	古代の土師器	476	写真図版123	東側調査区のかわらけ(6)	531
写真図版69	古代の須恵器(1)	477	写真図版124	12世紀の土製品(1)	532
写真図版70	古代の須恵器(2)	478	写真図版125	12世紀の土製品(2)、木製品(1)	533
写真図版71	西側調査区の常滑産陶器(1)	479	写真図版126	12世紀の木製品(2)	534
写真図版72	西側調査区の常滑産陶器(2)	480	写真図版127	12世紀の木製品(3)	535
写真図版73	西側調査区の常滑産陶器(3)	481	写真図版128	12世紀の木製品(4)	536
写真図版74	西側調査区の常滑産陶器(4)	482	写真図版129	12世紀の石製品(1)	537
写真図版75	西側調査区の常滑産陶器(5)	483	写真図版130	12世紀の石製品(2)	538
写真図版76	西側調査区の常滑産陶器(6)	484	写真図版131	12世紀の金属製品(1)	539
写真図版77	西側調査区の常滑産陶器(7)	485	写真図版132	12世紀の金属製品(2)・13~15世紀の陶磁器(1)	540
写真図版78	西側調査区の常滑産陶器(8)	486	写真図版133	13~15世紀の陶磁器(2)、かわらけ	541
写真図版79	西側調査区の常滑産陶器(9)	487	写真図版134	西側調査区の近世陶磁器(1)	542
写真図版80	西側調査区の常滑産陶器(10)	488	写真図版135	西側調査区の近世陶磁器(2)	543
写真図版81	西側調査区の常滑産陶器(11)	489	写真図版136	西側調査区の近世陶磁器(3)	544
写真図版82	西側調査区の常滑産陶器(12)	490	写真図版137	西側調査区の近世陶磁器(4)	545
写真図版83	西側調査区の常滑産陶器(13)	491	写真図版138	西側調査区の近世陶磁器(5)	546
写真図版84	西側調査区の常滑産陶器(14)	492	写真図版139	西側調査区の近世陶磁器(6)	547
写真図版85	西側調査区の常滑産陶器(15)	493	写真図版140	西側調査区の近世陶磁器(7)	548
写真図版86	西側調査区の常滑産陶器(16)	494	写真図版141	西側調査区の近世陶磁器(8)	549
写真図版87	西側調査区の常滑産陶器(17)	495	写真図版142	西側調査区の近世陶磁器(9)	550
写真図版88	西側調査区の常滑産陶器(18)	496	写真図版143	西側調査区の近世陶磁器(10)	551
写真図版89	西側調査区の濠美産陶器(1)	497	写真図版144	II E区の近世陶磁器(1)	552
写真図版90	西側調査区の濠美産陶器(2)	498	写真図版145	II E区の近世陶磁器(2)	553
写真図版91	西側調査区の濠美産陶器(3)	499	写真図版146	II E区の近世陶磁器(3)	554
写真図版92	西側調査区の濠美産陶器(4)	500	写真図版147	II E区の近世陶磁器(4)	555
写真図版93	西側調査区の濠美産陶器(5)	501	写真図版148	II・III F区の近世陶磁器(1)	556
写真図版94	西側調査区の濠美産陶器(6)	502	写真図版149	II・III F区の近世陶磁器(2)	557
写真図版95	西側調査区の濠美産陶器(7)	503	写真図版150	II・III F区の近世陶磁器(3)	558
写真図版96	西側調査区の濠美産陶器(8)	504	写真図版151	近世の木製品(1)	559
写真図版97	西側調査区の濠美産陶器(9)	505	写真図版152	近世の木製品(2)	560
写真図版98	西側調査区の濠美産陶器(10)	506	写真図版153	近世の木製品(3)	561
写真図版99	西側調査区の濠美産陶器(11)	507	写真図版154	近世の木製品(4)	562
写真図版100	西側調査区の濠美産陶器(12)	508	写真図版155	近世の木製品(5)	563
写真図版101	西側調査区の濠美産陶器(13)	509	写真図版156	近世の木製品(6)	564
写真図版102	西側調査区の濠美産陶器(14)・狼投産陶器	510	写真図版157	近世の木製品(7)	565
写真図版103	西側調査区の須恵器系・在地産陶器、東側調査区の常滑産陶器(1)	511	写真図版158	近世の金属製品(1)	566
写真図版104	東側調査区の常滑産陶器(2)	512	写真図版159	近世の金属製品(2)	567
写真図版105	東側調査区の常滑産陶器(3)	513	写真図版160	近世の銭貨(1)	568
写真図版106	東側調査区の常滑産陶器(4)・濠美産陶器(1)	514	写真図版161	近世の銭貨(2)・近代の銭貨	569
写真図版107	東側調査区の濠美産陶器(2)	515	写真図版162	近世の銭貨(3)	570
写真図版108	東側調査区の濠美産陶器(3)	516	写真図版163	近世の石製品(1)	571
写真図版109	東側調査区の狼投産、須恵器系、在地産陶器	517	写真図版164	近世の石製品(2)	572
写真図版110	西側調査区の中国産陶磁器(1)	518	写真図版165	近世の石製品(3)	573
写真図版111	西側調査区の中国産陶磁器(2)・東側調査区の中国産陶磁器(1)519				



# I 調査に至る経過

一関遊水地事業は、北上川上流改修の一大プロジェクトとして、岩手県一関市・平泉町地区を洪水から守るため、二線堤方式による遊水地を建設するもので、上流ダム群とともに北上川治水計画の根幹をなすものである。遊水地は延長 25 km の地区堤と延長 18 km の小堤に囲まれた第一遊水地から第三遊水地まであわせて 1,450 ha からなり、洪水調整・市街地等の水害防除および土地の高度利用を目的とするものである。事業は、昭和 48 年に工事実施基本計画が決定されたのを受けて昭和 53 年から本格的な着工のはこびとなった。

この事業に関わる埋蔵文化財包含地の取扱いについては、岩手県教育委員会と建設省東北地方建設局岩手工事事務所との間で協議がおこなわれた。関連する遺跡は柳之御所跡・泉屋・志羅山の 3 遺跡であり、柳之御所跡は昭和 63 年度、泉屋遺跡は平成 3 年度、志羅山遺跡は平成 4 年度から財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業として調査が開始された。そのうち、事業に関連する太田川堤防建設および国道 4 号太田橋建設に伴う泉屋遺跡の発掘調査は平成 5 年度から行われることになり、平成 5 年の 4 月 9 日から調査を着手した。なお泉屋遺跡は平泉町教育委員会などにより幾度か調査がおこなわれており、一連の調査回数を与えてきた。そこで平泉町教育委員会と埋蔵文化財センターが協議のうえ、平成 5 年度の調査は第 10 次調査と第 11 次調査、平成 6 年度は第 13 次調査、平成 7 年度は第 15 次調査とすることとした。

## II 遺跡の立地と環境

### 1 位置

本遺跡の所在する岩手県西磐井郡平泉町は、県南部に位置し、面積 6,375 km<sup>2</sup>、人口は約 9,600 人の町である。町のほぼ中央部を北上川が流れ、南は一関市、北は胆沢郡前沢町と衣川村、東は東磐井郡東山町に接する。

泉屋遺跡は平泉町市街地の南東部に位置し、西側は旧国道 4 号線、南側は太田川がその境界になっている。本報告書の調査区は泉屋遺跡の南端の太田川に接した部分で、国道 4 号線と J R 東北本線にはさまれた地点である。

本遺跡は国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図「一関」(N J - 54 - 14 - 15)、及び 2 万 5 千分の 1 の地形図「平泉」(N J - 54 - 14 - 15 - 3) の図幅に含まれ、北緯 38°58'59"、東経 141°7'30" 付近にある。

### 2 地形

平泉町付近は中央に北上川が南に流れ低地が形成されており、西に奥羽山脈、東に北上高地が広がる。西岳付近に源を発し岩手県を縦断する北上川は延長約 247 km あり、一関の狐禅寺付近の狭窄部を経て宮城県に到り、追波湾に注いでいる。狐禅寺付近の狭窄部はこの地方で大洪水が起こる要因の一つとなっている。北上川は平泉の中心部で氾濫平野の西縁を平泉段丘と接するように流れ、泉屋遺跡の南を流れる太田川と合流した後東に流れを変える。北上高地西縁がのびてきている氾濫平野の東には北東に東稲山(標高 595.7 m)、東に観音山(325.2 m)がある。西側に比べて起伏量が大きく主に山地として分類されている。西側は主に丘陵地に分類され、平泉西方には衣川丘陵が広がる。本遺跡を含む平泉中心部は北上川の西にあり、平泉段丘の北半に立地する。平泉段丘は北上川によって形成された段丘で、範囲は狭く氾濫平野との比高もそれほど大きくないが、崖線は明瞭である。今回の調査区は泉屋遺跡の南端に位置し、太田川を挟んで沖積平野と接しており平泉遺跡群の南東部にあたる。

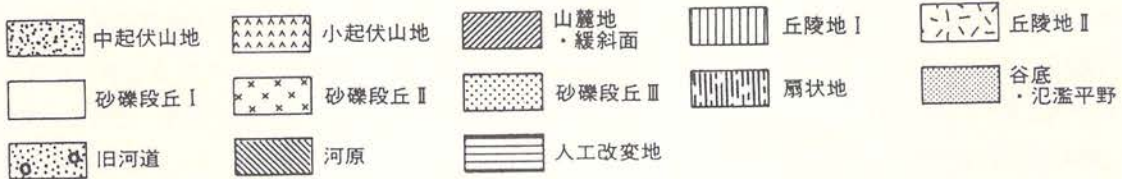
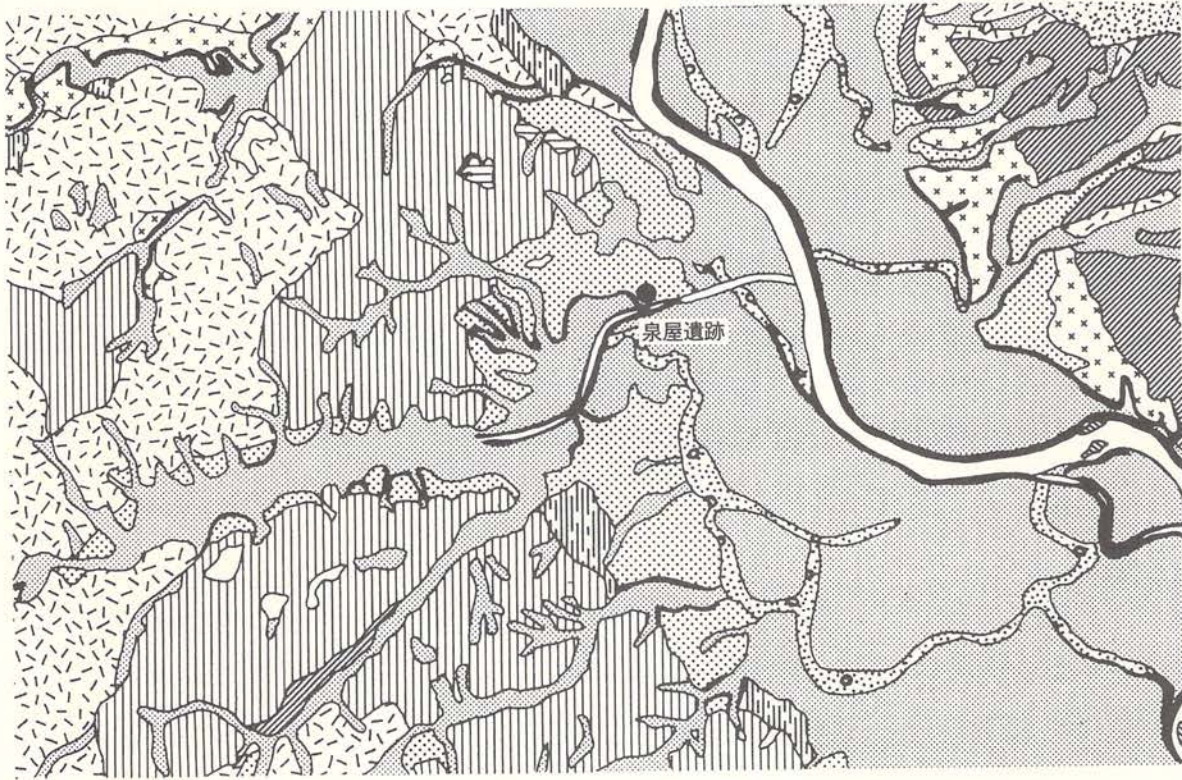




(国土地理院発行 5 万分の 1 地形図  
「水沢」・「一関」を使用)

第 1 図 遺跡位置図





第2図 地形分類図

### 3 歴史的環境

平泉といえば12世紀の奥州藤原氏に関連する事跡が取り沙汰されがちだが、もちろんそれ以外の時代にも人々の暮らしは営まれていた。

#### (1) 縄文・弥生時代

平泉町内でも縄文時代の遺跡が幾つか登録されているが、本格的な発掘調査がおこなわれた遺跡は北上川東岸の長島字月館に所在する新山権現社遺跡と、泉屋遺跡の7次調査などにすぎない。新山権現社遺跡の出土土器は縄文時代後期のものが中心で、報告書中で調査担当者の金子昭彦氏は「新山権現社1～3式」土器を設定した。(財)岩手県埋文センター1993新山権現社遺跡発掘調査報告書 第188集)。また泉屋遺跡7次調査では、JR東北本線より東側の区域で縄文後期から晩期初頭にかけての土器が出土している。(財)岩手県埋文センター1993泉屋遺跡発掘調査報告書 第184集)。平成8年度の泉屋遺跡16次調査区は第7次調査区東側部分に接する部分であるが、7次調査区と同様の時期の縄文土器が出土している。中でも晩期初頭の人面付きの注口土器の出土が特筆される。



弥生時代の土器片は新山権現社遺跡で微量に出土している程度で当地域での状況は明らかではない。その中で本報告書掲載遺物の弥生時代の土器は少量ではあるが貴重な資料と言えよう。

## (2) 9～10世紀

平泉は律令体制化の磐井郡に属していたと思われる。当時の平泉の状況は文献では明らかではないが、平泉町内の遺跡発掘調査でこの時期の遺構や遺物が検出されており、小規模であるかもしれないが、集落が営まれたことがわかる。柳之御所跡の埋蔵文化財センターの調査地域では、竪穴住居が検出されており、篋切りの須恵器坏とロクロ使用の土師器長胴甕、ロクロ不使用の土師器長胴甕が伴って出土している。9世紀前半のものであろう。他に瀬原Ⅰ遺跡（報告書平成8年度中に刊行予定）、志羅山遺跡14次調査（(財)岩手県埋文センター1995志羅山遺跡第14・25次発掘調査報告書 第216集）などで竪穴住居が検出されている。また志羅山遺跡14次調査などで東北地方の古代遺跡の鍵層となる、「十和田a」火山灰が検出されている。

## (3) 奥州藤原氏の時代

西暦1100年頃、藤原氏の初代清衡が江刺から居を平泉に移したとされている。その後2代基衡、3代秀衡の時代を経て、4代泰衡が1189年、源頼朝によって滅ぼされるまでの約1世紀の間が奥州藤原氏の時代である。この時代の繁栄は、中尊寺金色堂や平泉遺跡群の発掘調査での出土遺物、遺構からうかがい知ることができる。

しかし奥州藤原氏の時代の様子を具体的に表していると思われる文献は吾妻鏡中の記事などに限られ、当時の「都市」の実態はまだ明らかになっていないと言え難い。「柳之御所跡」にしてもそこが「平泉館」なのか加羅之御所と称される施設なのかは明らかではない。位置として明らかなのは中尊寺、毛越寺、無量光院、観自在王院の寺院だけといって良い状況である。先学の学問成果を過小評価するつもりは毛頭ないが、奥州藤原氏の時代の平泉の具体的な構造の検証はこれからの作業といえよう。

## (4) 中世

奥州藤原氏の滅亡後、平泉は「平泉保」として区分された様であるが、その具体的な様子は不明である。平泉遺跡群の発掘調査では藤原氏滅亡以後の出土遺物は12世紀の遺物に比べ極端に少なく、12世紀とは性格が異なった生活が営まれたことは確かである。

しかし中尊寺、毛越寺の両寺院は、かなりの荒廃があったものの連続して存在していたのであるから、これらの寺院を核とした一般的な農村とは異なった場所であったことは確かであろう。

中世の遺物が極端に少ないと上で記したが、これは12世紀と比較してのことで、平泉遺跡群の出土遺物を見ていくと13～16世紀の遺物もぼつぼつあることがわかる。この量は東国の中世居館などでの遺物の出土密度と比較して決して少なくないように感じる。今後平泉遺跡群の発掘担当者は12世紀以降の中世遺物の存在に注意し、それに伴う遺構の把握に努力を向けなければならない。

## (5) 近世

平泉は近世には仙台藩領であった。仙台藩の支配構造は、伊達氏の直轄地では各村々には肝入がおかれ、その上に幾つかの村の肝入を監督する大肝入がおかれていた。さらに大肝入を支配する代官がおかれ、その上には郡奉行がおかれていた。

平泉村は奥郡の郡奉行の支配下にあり、代官は山目町におかれていた。大肝入は一時期を除き、中里村の大槻家が担当していた。

平泉村は本村（本郷）と枝村である「端郷」高館に別れていた。平泉本村は西寄りのいわゆる上平泉地区、端郷の高館は概ね現在の国道沿いの地域が範囲である。泉屋遺跡地内は端郷高館に含まれる。（現在の行政区域である平泉町は、近世の平泉村と達谷村、中尊寺村、戸河内村、長部村、小嶋村の範囲が含まれる。）仙台藩が安永4（1775）年頃に領内の村々に書き出させた風土記書出によると、平泉村は本郷と端郷を合わせての記述になっているが、家数302軒、人口2,041人、田高2,406石5斗9升、畑高709石3斗7升と書き出されている。

平泉遺跡群の発掘調査をおこなうと12世紀の遺構・遺物とともに、近世に属するものが多く検出される。これらは奥州藤原氏の時代を対象とした調査で偶然に検出されるのであるが、当時の人々の具体的な生活を知る上で重要な資料を提示している。文献だけからでは近世の具体的な生活を知るには限界があるのである。泉屋遺跡でも近世の屋敷跡が良好な状態で検出され、ほとんど内容が明らかではない掘立柱の民家跡の資料を多数得ることができたのである。

また近世の遺構を調査し把握することは、近世の生活を解明するだけでなく、12世紀をはじめとする他の時期の遺構と区別するためにどうしても必要なことである。多くの地点で12世紀と他の時期の遺構の検出面が同一である平泉では、このことは特に必要である。

#### 4 これまでの泉屋遺跡の発掘調査

泉屋遺跡は、一閑遊水地事業に関わる発掘調査の他にも、幾度か調査がおこなわれている。これらの調査地点は今回報告の地点と近接した部分も多く、泉屋遺跡の全体像を考える上で欠かせない資料であるので、以下の表に調査の要項と概要をまとめた。

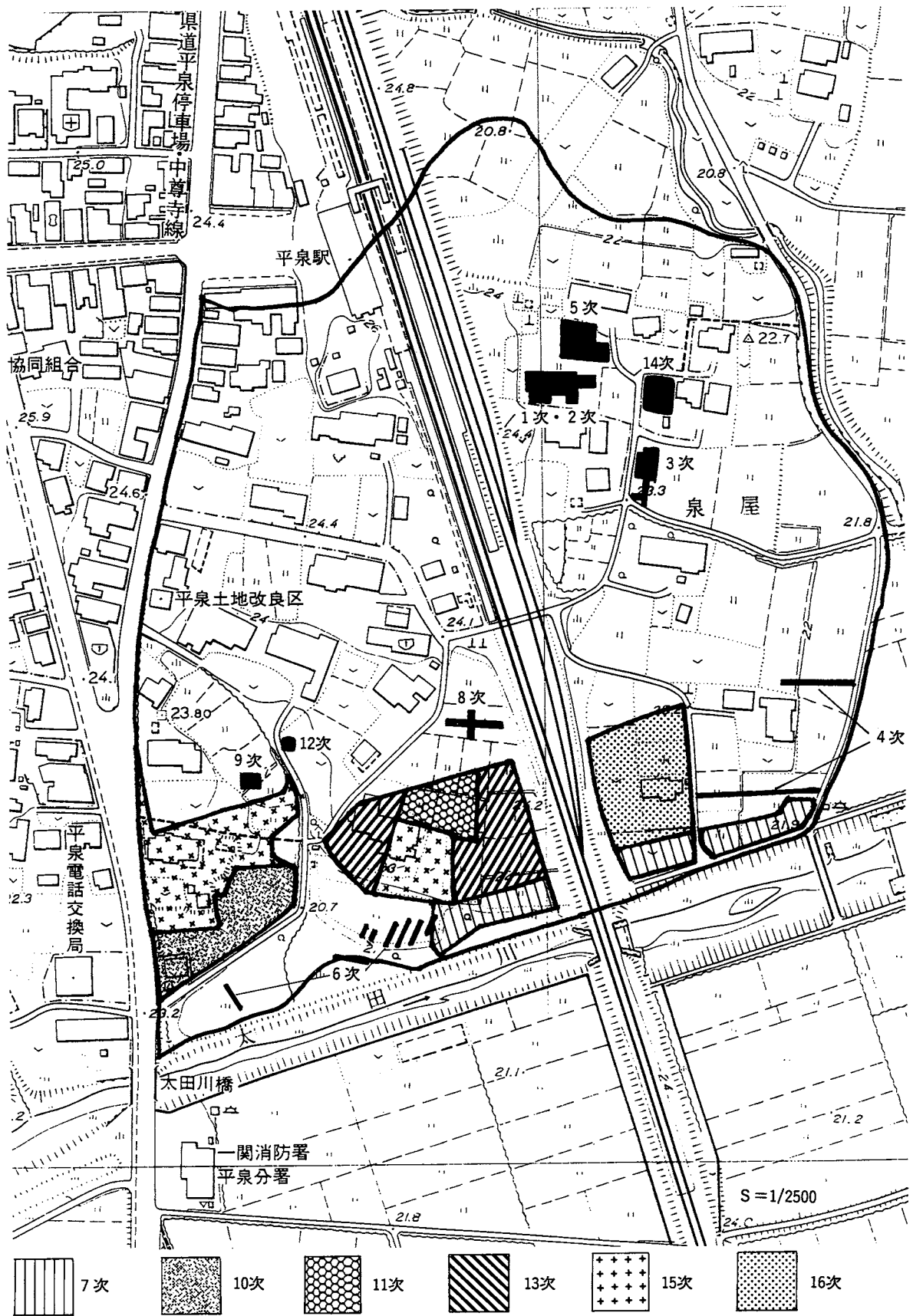
泉屋遺跡発掘調査要項一覧表

調査次	調査地点	地点原因	調査期間	調査面積	調査担当者
第1次	泉屋59-3	個人住宅建設	1990年3月1日～3月17日	120m <sup>2</sup>	平泉町教育委員会 及 川 司
第2次	泉屋59	個人住宅建設	1990年4月2日～4月21日	305m <sup>2</sup>	平泉町教育委員会 及 川 司
第3次	泉屋52	民間アパート新築	1990年5月30日～6月15日	161m <sup>2</sup>	平泉町教育委員会 及 川 司
第4次	泉屋28	一閑遊水地事業に伴う遺跡範囲確認調査	1990年9月1日～9月14日	219m <sup>2</sup>	平泉町教育委員会 八重樫 忠 郎
第5次	泉屋59-3	個人住宅建設	1990年9月10日～11月14日	198m <sup>2</sup>	平泉町教育委員会 及 川 司
第6次	泉屋	試掘調査	1991年3月18日～3月20日	不明	岩手県教育委員会
第7次	泉屋28-1	一閑遊水地事業にかかわる太田川暫定堤防建設	1991年5月7日～6月21日	2,000m <sup>2</sup>	（勸）岩手埋文 神 敏 明
第8次	泉屋22-3	個人住宅建設	1992年4月27日～5月21日	95m <sup>2</sup>	平泉町教育委員会 及 川 司
第9次	泉屋	下水道流入施設建設	1992年11月2日～12月4日	100m <sup>2</sup>	岩手県教育委員会 津 島 秀 章
第10次	泉屋2-1	一閑遊水地事業に関連する太田川堤防工事	1993年4月9日～8月6日	1,523m <sup>2</sup>	（勸）岩手埋文 佐々木 務
第11次	泉屋22	一閑遊水地事業に関連する太田川堤防工事	1993年9月7日～9月30日	745m <sup>2</sup>	（勸）岩手埋文 佐々木 務
第12次	泉屋21-3	石碑移転	1993年7月10日～8月2日	25.5m <sup>2</sup>	平泉町教育委員会
第13次	泉屋25-8	一閑遊水地事業に関連する太田川堤防工事	1994年4月14日～11月4日	3,050m <sup>2</sup>	（勸）岩手埋文 笹 平 克 子
第14次	泉屋57-6	個人住宅建設	1994年12月19日～1月13日	106m <sup>2</sup>	平泉町教育委員会 及 川 司
第15次	泉屋25	一閑遊水地事業に関連する太田川堤防工事	1995年4月12日～8月4日	2,982m <sup>2</sup>	（勸）岩手埋文 羽 柴 直 人
第16次	泉屋27-8	一閑遊水地事業に関連する太田川堤防工事	1996年4月9日～9月30日	1,760m <sup>2</sup>	（勸）岩手埋文 羽 柴 直 人



泉屋遺跡発掘調査概要一覧表

調査次	調 査 の 概 要
第1次	遺構確認調査 井戸、柱穴、土坑などを確認 出土遺物 縄文土器片(後、晩期)、石器、かわらけ、国産陶器(常滑、渥美)、中国産白磁壺、碗、青磁(鎬蓮弁文)天目茶碗、近世磁器、古銭
第2次	第1次調査の試掘成果をふまえての本調査 身舎2間×3間に四面庇の建物を検出。14世紀の青磁、瀬戸産陶器が出土。検出遺構 掘立柱建物1棟、柱列2条、土坑9基、井戸4基、暗渠1条、ピット約250個。出土遺物 かわらけ、国産陶器(常滑、渥美)、中国産白磁(壺・碗)、中国産青磁碗(連弁文)、瀬戸産陶器、古銭(嘉定通寶)、漆器碗、木製品(曲物、箸、桶、円盤状)
第3次	4号溝から底部穿穴のかわらけ6枚が正位の状態出土。検出遺構 溝6条、暗渠1条、土坑2基、ピット約70個。出土遺物 かわらけ、国産陶器(常滑、渥美、須恵器系)、古銭
第4次	12世紀、縄文時代の遺物が出土することを確認、また太田川の旧河道を一部確認。検出遺構 土坑、溝など遺構確認のみ。出土遺物 縄文土器、石器、土師器、かわらけ、国産陶器(常滑、渥美、須恵器系)、中国産白磁壺、白磁碗、青磁碗
第5次	12世紀以降と思われるかわらけが土坑から一括で出土した。検出遺構 掘立柱建物4棟、柱列1条、土坑11基、ピット約90個、暗渠1条。出土遺物 かわらけ、国産陶磁器、中国産磁器、木製品(鋏)、石製品(砥石)、土製品(さいころ、羽口)、鉄製品、古銭、縄文土器、石器、種子
第6次	遺構確認調査 出土遺物 縄文土器(晩期)、かわらけ片、陶磁器片
第7次	縄文時代後期、晩期の遺物がまとまった量で出土した。検出遺構 掘立柱建物1棟、土坑54基(この中には柱穴がかなり含まれるようである。)、溝1条、井戸1基、焼土遺構9基。出土遺物 縄文土器(後期～晩期)、石器、かわらけ、漆器、美濃産陶器(大窯Ⅱb期)
第8次	確認調査 検出遺構 柱穴、溝、焼土遺構など。出土遺物 かわらけ、国産陶器(常滑、渥美、須恵器系)、中国産白磁壺、碗、縄文土器。遺構確認面まで深く、住宅基礎工事の影響が及ばないものとし、盛土保存処理をとる。
第9次	白色火山灰が確認され、その上面から土師器が出土した。検出遺構 溝1条、遺物包含層。出土遺物 かわらけ、国産陶器(常滑)、中国産褐釉陶器四耳壺、中国産白磁碗、漆器片、砥石
第10次	本報告書で報告
第11次	本報告書で報告
第12次	12世紀代の土坑と溝を検出する。検出遺構 土坑1基、溝1条、カマド跡1基、柱穴5基。出土遺物 かわらけ、国産陶器(渥美、常滑、須恵器系)、縄文土器片、石器、鉄滓、移転した石碑5基(慶応3年～昭和7年)についても調査
第13次	本報告書で報告
第14次	12世紀代の掘立柱を1棟検出するが、中心は調査区域外にあるので全体規模は不明である。他に掘立柱建物の柱穴が3棟分と溝2条検出。出土遺物 縄文土器(後期)、石器、土師器、美濃産陶器(志野)、かわらけ
第15次	本報告書で報告
第16次	変遷がわかる近世民家跡を検出。検出遺構 掘立柱建物65棟、竪穴住居(9～10c)2棟、土坑(古代以降)54基、溝21条、井戸14基、土坑(縄文時代)9基。出土遺物 縄文土器(後期、晩期)、石器、土師器、須恵器、かわらけ、12cの国産陶器(常滑、渥美、須恵器系)、中国産磁器、木製品(曲物、棒状、チュウ木、杵、箱、桶)漆器皿、漆紙、壁土、中世の国産陶器(瀬戸、美濃、唐津)、板碑、銭(中国銭、寛永通寶)、近世陶磁器、砥石、挽き臼、かんざし、きせる、硯



第3図 泉屋遺跡全体図

### Ⅲ 調査・整理の方法

#### 1 調査の経過

本書で報告するのは泉屋第10次、11次、13次、15次発掘調査についてである。これ以外に一関遊水地事業の一環である太田川関係工事に伴う遺跡発掘は、平成3年度の泉屋遺跡7次調査と平成4年の志羅山遺跡14次調査、平成5年度の志羅山遺跡25次調査がおこなわれている。これらの調査の報告書はすでに発刊済みである。((財)岩手県埋文センター 1993 泉屋遺跡発掘調査報告書 第184集)、((財)岩手県埋文センター 1995 志羅山遺跡第14・25次発掘調査報告書 第216集)。また本報告書調査区の調査終了後も平成7年度に志羅山遺跡46次調査が、平成8年度に泉屋遺跡16次調査がおこなわれている。平成9年度以降も太田川堤防工事関係の泉屋遺跡の発掘調査は続けられる予定である。

以下本報告書に掲載の調査次の経過を述べる。

##### (1)第10次調査(平成5年度)

野外調査は4月9日から8月6日までおこなった。調査面積は1,523 m<sup>2</sup>である。調査担当者は佐々木務、笹平克子である。調査区域は西側調査区の南部で、検出遺構の中心は12世紀に属する溝であった。特筆すべき遺物としては常滑産突帯付四耳壺が出土した。

##### (2)第11次調査(平成5年度)

野外調査は9月7日から9月30日までおこなった。調査面積は745 m<sup>2</sup>である。調査担当者は佐々木務、笹平克子である。調査区域は東側調査区の中央部北側で、検出遺構は近世の建物跡などが検出された。焼土遺構に伴って柱状高台かわらけが多量出土した。

##### (3)第13次調査(平成6年度)

野外調査は4月14日から11月4日までおこなった。調査面積は3,050 m<sup>2</sup>である。調査担当者は笹平克子、稲垣雅宏(8月23日まで)、8月24日から羽柴直人である。調査区域は東側調査区の中央部分を除く東側と西側の2ヶ所に分かれている。検出遺構は12世紀、近世の柱穴が非常に多量に検出され、10、11次調査区に比べ遺構密度はかなり濃かった。遺物は12世紀と近世に属するものが多い。10月29日(土)には現地説明会をおこなった。

##### (4)第15次調査(平成7年度)

野外調査は4月12日から8月4日までおこなった。調査面積は2,982 m<sup>2</sup>である。調査担当者は羽柴直人、吉田理である。調査区域は東側調査区の中央部南側と西側調査区の北半部の二ヶ所に分かれている。検出遺構は主に12世紀、近世に所属する建物、井戸が多量に検出された。遺物は西側調査区で多く、特に15 S E 3の埋土からは12世紀の国産陶器が約230片出土した。現地説明会は7月29日(土)におこなった。

##### (5)室内整理

室内整理は平成5年度から8年度までおこなった。

平成5年度は11月1日から3月31日まで、担当は佐々木務である。



平成6年度は11月1日（1～4日は野外調査とだぶる）から3月31日まで、担当は笹平克子である。

平成7年度は11月1日から3月29日まで、担当は羽柴直人と吉田理である。

平成8年度は8月1日から10月31日まで、担当は羽柴直人である。

平成5～7年度の冬場は主にその年度の出土遺物、検出遺構の整理をおこなった。平成8年度は主にこれまでの整理のまとめや編集をおこなった。

## 2 野外調査の方法

### (1) グリッドの設定

グリッドの設定は志羅山遺跡14次調査に準拠しており、その名称の付し方も同じ基準である。

グリッドは平面直角座標のX系に沿って設定しており、大グリッドは1辺が50m、小グリッドは大グリッドの各辺を10等分して一辺5mとしている。グリッドの起点(I A 0 a)は $X = -112,945.000$  m、 $Y = 24,720.000$  mとし、ここから大グリッドは北に向かってローマ数字(I, II, III……)、東に向かって大文字のアルファベット(A, B, C……)とする。小グリッドは北に向かって(0, 1, 2……9, 0)、東に向かって(a, b, c……j)で示している。グリッドの名称はその南西隅の杭の名称による。基準杭設置は調査次毎に、第一航業株式会社に委託した。

### (2) 遺構の名称

遺構の名称は以下のように略号を付した。

建物・・S B    井戸・井戸状・・S E    土坑・・S K    溝・・S D    カマド、焼土遺構・・S X  
柱穴・・P

本報告書では調査次が複数にわたるため、遺構の略号の上に調査次数を付している。遺構の番号は検出順に算用数字を付していった。なおこの番号には調査の過程や調査後の検討で遺構になりえないと判断したものもあり欠番が生じていることもある。

### (3) 粗掘り・遺構検出

雑物撤去後にトレンチを設定し遺物の包含状況、遺構の確認面を把握した。調査区の大部分では12世紀の生活面は残存しておらず、多くは遺構確認面まで重機を用いて表土を除去した。12世紀の遺物を多く包含する層は人力によって表土を除去した。

遺構の確認は表土を除去した面を、ジョレン、両刃鎌で平滑にしプランを確認するようにした。

### (4) 遺構の精査

検出した遺構は土層を観察するベルトを設定して掘り下げることが基本とした。井戸の場合は一度に底面まで2分法で掘り下げることが安全上困難であった。よって上面から可能なかぎり2分法で掘り下げ、写真撮影、実測、土層観察をおこない、その後危険と判断した場合は、土層の変化に注意しながら、断面観察を行わず丸掘りした。柱穴は10次、11次調査では断面観察と記録を1つ1つについておこなっていた。しかし、13次調査以降は検出された数があまりに多いため、原則として土層観察のための立ち割りはおこなわず、平面で柱痕の確認、他の遺構との重複関係を把握することとした。そしてその分の余力は建物プランを把握することに注いだ。建物のプランが把握できなければ、個々の柱穴の観察の意味は低くなると考えたのである。

### (5) 遺物の取り上げ

遺構外の遺物はグリッド毎に取り上げた。遺構内の遺物は必要と思われる場合、地点とレベルを記録した。またそれ以外では可能なかぎり埋土の層位ごとに取り上げるように努めた。

### (6) 実測・写真撮影

平面実測は簡易遣り方測量で5 m グリッドを1 m に細分したメッシュを用いておこなった。原則として1/20の縮尺を用い、必要に応じて任意の縮尺を用いた。15次調査では遺構確認面の地形測量を平板を用いておこなった。等高線は20 cm 毎に記録した。

写真撮影は35 mm モノクロームとカラースライド各1台と6×7 cm モノクローム1台を使用した。撮影は埋土堆積状態や遺物の出土状況、遺構の完掘状況などについて行い、各調査次終了時にセスナ機により空中写真を撮影した。

## 3 室内整理の方法

出土遺物は水洗、注記を行い、必要なものは接合、復元作業を実施した。これらの作業終了後、報告書登載遺物を選びだし登録を行なった。各調査次の調査区が入り組み、調査次を越えて接合する遺物もあり、調査次ごとには遺物を区分していない。

遺物実測は原則として実寸で行った。野外調査で実測した実測図は必要なものについては第2原図を作成した。その後これらの遺物、遺構の実測図のトレースを行い、種別ごとに観察表と図版を作成した。

撮影したフィルムはネガアルバムにベタ焼き写真と一組にして収納した。カラースライドはスライドファイルに撮影順に収納した。また報告書掲載分の遺物の写真撮影を行い、写真図版を作成した。

これらの作業の終了後、原稿の執筆を行い、報告書を編集した。

## 4 本報告書の構成

(1) 本報告書は10次、11次、13次、15次の4次、3ヵ年に渡っての調査の記録である。通常であれば調査次ごとに成果を報告するべきであろう。しかし各調査次の調査区は土地買収の関係などで複雑に入り組み、同じ調査次でも東西2ヵ所に分かれる場合もあり、また複数の調査次にまたがる遺構や、調査次を越えて接合する遺物もあり、調査次ごとの報告は必ずしも適切でないと判断した。よって本報告書では調査次ごとの報告の形態をとらないことにする。

全体の調査区は国道4号線とJR東北本線に挟まれた部分である。この範囲の中を走る道路部分は調査対象から除外されており、調査区はこの道路によって東西に分断されている。この道路は旧河道に沿って構築されており、自然地形からも調査区は西側と東側に分かれる。よって調査区全体を西側調査区と東側調査区に分けて扱うことにする。

(2) 遺構は種別ごとに西側調査区、東側調査区の順に掲載した。遺構の所属時期ごとに報告することも考えたが、全ての遺構の所属時期が明らかではないので機械的に遺構番号順に掲載した。所属時期については各遺構の文章中に考えられる可能性を記した。遺構の縮尺は建物(SB)、溝(SD)が1/100、井戸・井戸状(SE)、土坑(SK)、カマド、焼土遺構(SX)が1/60を原則とした。各図版にスケールを付してある。

(3) 遺物は出土遺構ごとの掲載はおこなわず、器種ごとにまた可能なかぎり時期別に掲載した。時期の

区分は①縄文・弥生時代、②古代（9～10世紀）、③12世紀（奥州藤原氏の時代）、④13～15世紀、⑤近世（便宜上16世紀のものも含んでいる。又一部近代のものも含む）とした。多くの遺物は③の12世紀と⑤の近世に所属するものである。

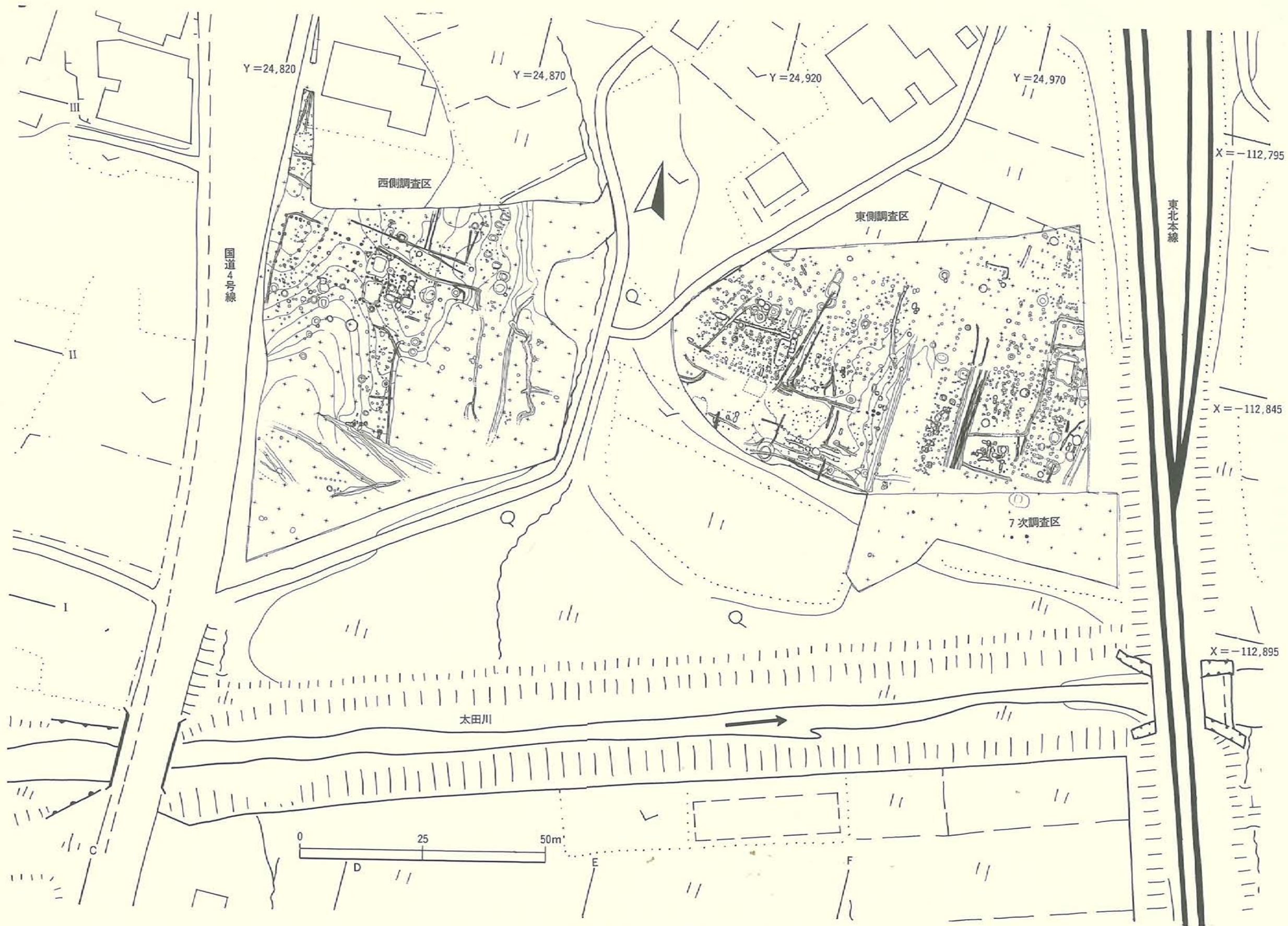
遺物は時代順に西側調査区、東側調査区の順で種別ごとに掲載した。近世遺物については、東側調査区に大グリッドのFライン付近を境に近世屋敷が2ヵ所あると推測されるため、それぞれの出土地点に分けて掲載した。

遺構からの出土遺物は、遺構の事実記載の文章中にその旨を記載してある。

遺物実測図の縮尺は、1/2、1/3を多く用いている。同じ種別のもは同一縮尺になるように掲載した。ただし木製品は1/3を原則としているが、一部大型のものはこのかぎりでない。各図版にはスケールを付してある。また遺物実測図の下に遺物観察表を付してある。よって文章では個々の遺物についての説明はかならずしもおこなっていない。

（4）遺構写真図版の縮尺は全て任意縮尺である。遺物写真の縮尺は実測図の縮尺と同じにしてある。しかし一部は掲載の都合上そのかぎりでない。遺物に付した番号は実測図の番号と共通である。





第4図 遺構配置図と周辺の地形

## IV 検出遺構

### 1 建物

建物跡は西側調査区では掘立柱建物が18棟、礎石建物が4棟検出できた。東側調査区では掘立柱建物が39棟検出できた。合計では61棟になる。平面図の縮尺は1/100である。平面図に付してある寸法は括弧内の数字の単位は尺、括弧の無い数字の単位はcmである。一尺は30.3cmとして計算した。また柱穴の深さは表で表したが深さの単位はcm、底面の標高の単位はmである。以下西側調査区の建物、東側調査区の建物の順に記載していく。

#### 15 S B 5 (第5図、写真図版12)

〔位置〕IIC 7 g～7 i に位置する。

〔重複〕15 S K 18 と重複するが本建物が古い。また15 S D 14、15 S D 15、15 S D 16 とプランが重なっているが、直接重複する柱穴が無く前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は5間で長方形のプランである。桁行は985cm、梁間は347cmで、面積は約10.3坪である。使用した柱穴は12個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はE-7°-Nである。

〔柱間寸法〕6尺5寸(約197cm)を基準にしている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕建物の大きさから考えて、付属小屋的な用途が想像される。

〔年代〕近世の所屬と考えられる。

#### 15 S B 6 (第5図、写真図版12)

〔位置〕IIC 8 e～8 g に位置する。

〔重複〕15 S E 4 と重複するが本建物が古い。また15 S E 10 と重複するが本建物が新しい。そして本建物のプラン内に15 S X 16 があるが、軸方位が本建物と同じで同時存在と考えられる。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は調査区外に伸びる可能性もあるが、確認できたのは5間である。長方形のプランである。桁行は950cm、梁間は408cmで面積は約11.7坪である。使用した柱穴は10個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はE-19°-Nである。

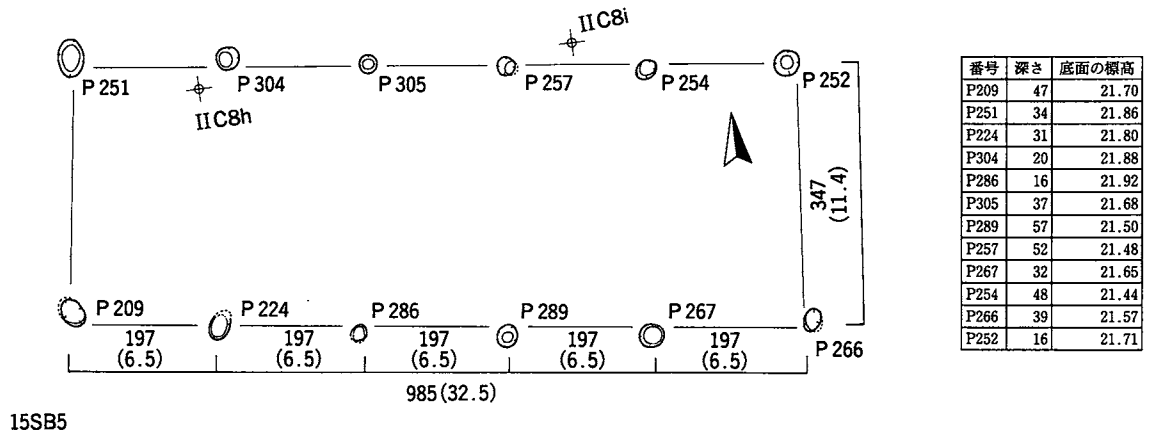
〔柱間寸法〕6尺3寸(約191cm)を基準にしている。

〔出土遺物〕なし

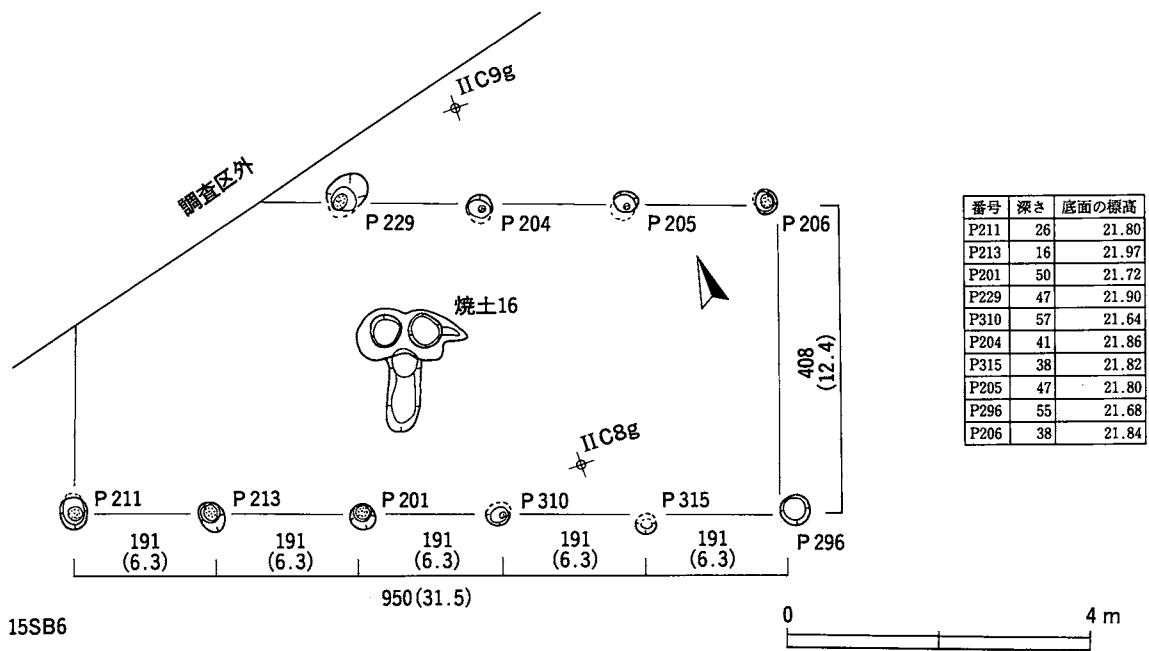
〔付属施設〕カマド遺構である15 S X 16 が本建物に伴うと考えられる。

〔建物の性格〕建物内にカマドを持つことから、調理、又は火を使用する作業をおこなった建物と考えられる。

〔年代〕近世の所屬と考えられる。



15SB5



15SB6

第5図 西側調査区の建物(1) (15SB5、6)

15SB7 (第6図、写真図版12)

〔位置〕 IIC6c~6e、7c~7eに位置する。

〔重複〕 15SB26と15SK33と重複するが本建物が古い。

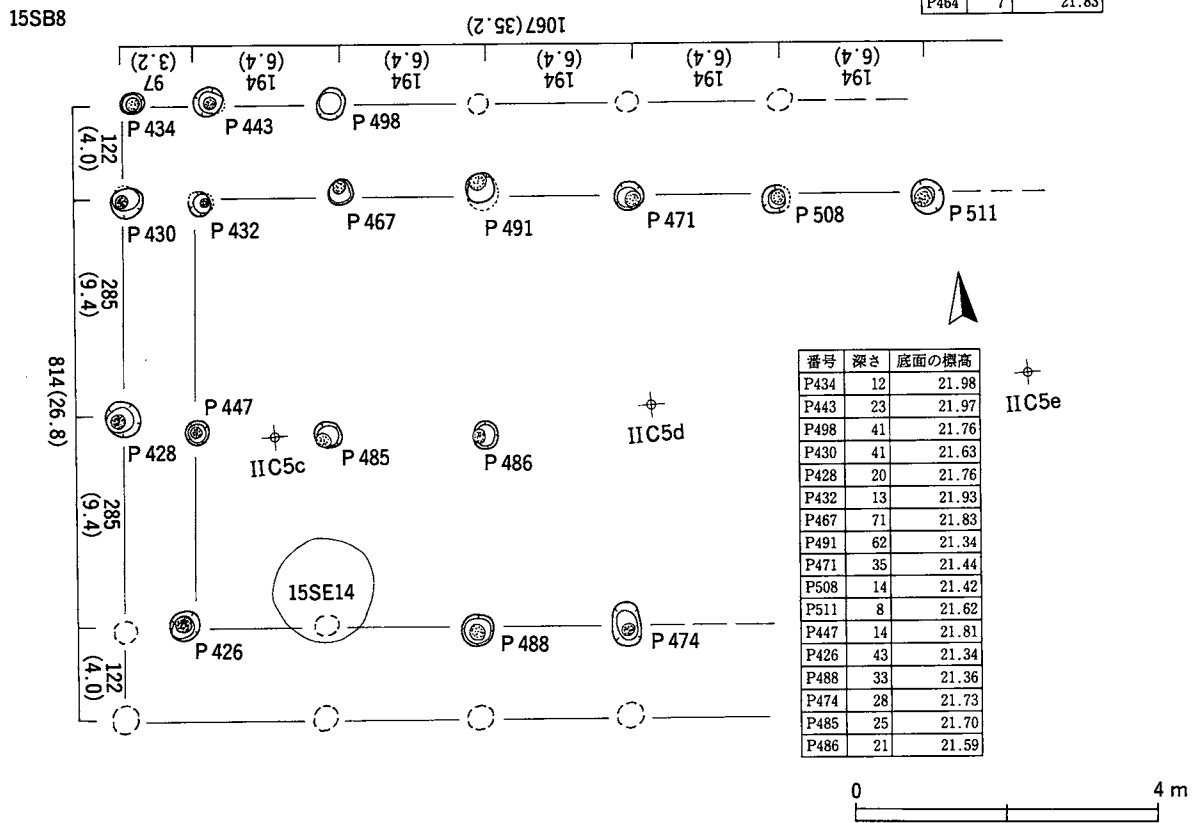
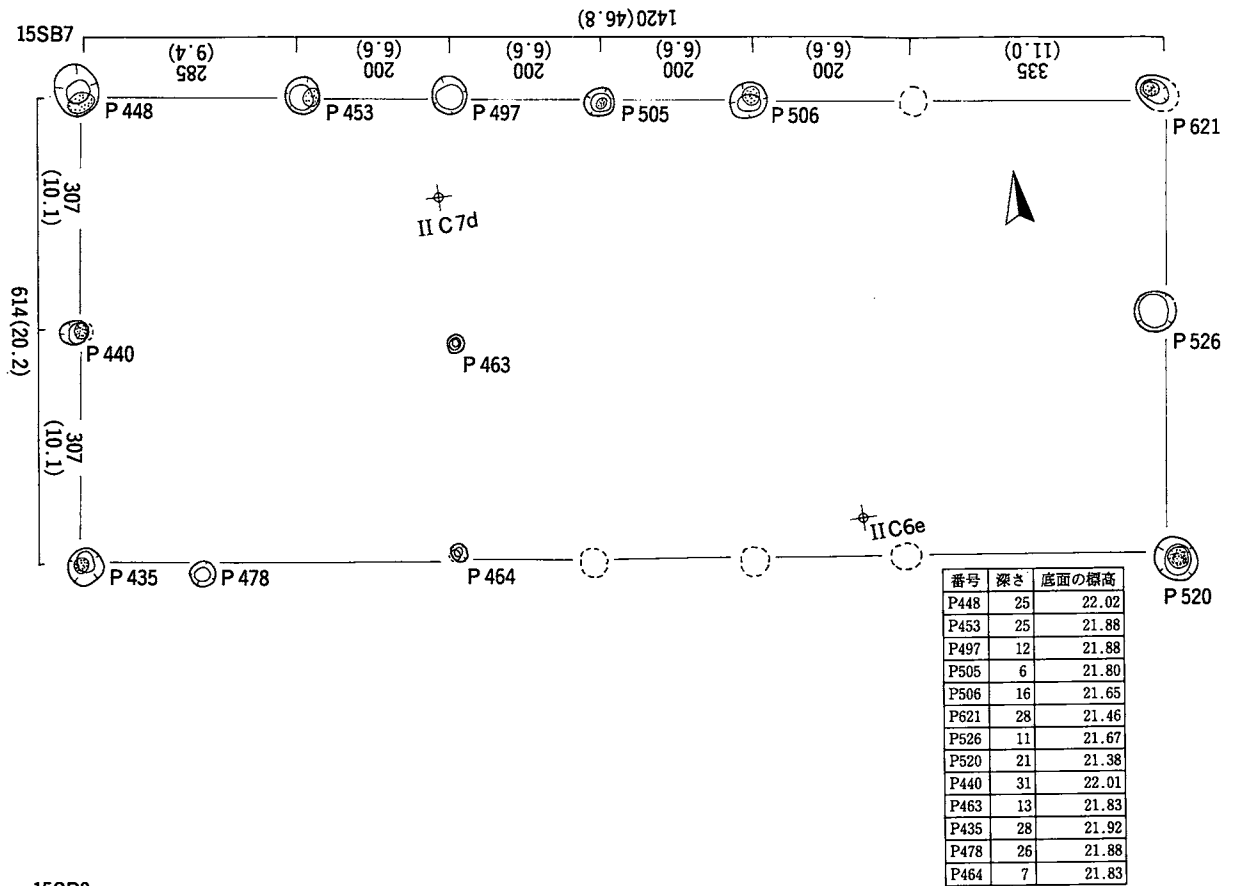
〔平面形式〕 掘立柱建物である。検出面を下げすぎて確認できない柱穴もあったが、桁行は6間と考えられる。長方形のプランである。使用した柱穴は13個である。下屋柱があった可能性が高いが検出はできなかった。これは下屋柱の掘込みが浅かったためと考えられる。また検出面を下げすぎたため、間仕切りの柱も明確に検出できなかった。このように本建物は完全な柱配置をとらせることができなかった。推定される桁行は1420cm、梁間は614cm、面積は約26.4坪である。

〔建物方位〕 桁行の軸方向はE-8°-Nである。

〔柱間寸法〕 6尺6寸(約200cm)を多用している。

〔出土遺物〕 なし





第6図 西側調査区の建物(2) (15SB7、8)

〔付属施設〕軸方位、建物配置から 15 S B 15、15 S B 16 が本建物に伴う付属屋の可能性が考えられる。

〔建物の性格〕大きさから、母屋と考えられる。

〔年代〕西側調査区で出土している陶磁器の年代と他の母屋と思われるの建物の年代を考え合わせて 18 世紀前半の所属と考えられる。

#### 15 S B 8 (第 6 図、写真図版 12)

〔位置〕II C 4 b～4 d、5 b～5 d に位置する。

〔重複〕15 S E 14 と 15 S K 27 と重複するが本建物が古い。また 15 S K 30 と重複するが本建物が新しい。プランが重なる 15 S B 10 とは直接重複する柱穴がないが本建物が新しいと推定される。

〔平面形式〕掘立柱建物である。検出面を下げすぎて東側の柱穴と南側の下屋柱を検出できなかった。確認した桁行は上屋柱で 5 間である。確認した長さは桁行 1067 cm、梁間 814 cm で、面積は 26.3 坪以上になる。使用した柱穴は 20 個である。上屋柱と下屋柱からなる構造である。西側は 2 室に分けられる可能性がある。いずれにせよ完全な形の建物プランを把握できなかったのだからこれ以上は語ることはできない。

〔建物方位〕桁行の軸方向は E - 4° - N である。

〔柱間寸法〕6 尺 4 寸 (約 194 cm) を基準にしているようである。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

#### 15 S B 9 (第 7 図、写真図版 12)

〔位置〕II C 3 e～3 h、4 e～4 h、5 e～5 h に位置する。

〔重複〕P 588 が 15 S K 38 と重複するが本建物が古い。また P 392 と P 408 が 15 S B 17 の柱穴 P 393、P 410 とそれぞれ重複するが本建物が新しい。P 408 は 15 S D 26 と重複するが本建物が古い。また 15 S E 15 のプラン内に本建物の柱穴があるべきはずなのに検出できなかったことから、15 S E 15 は本建物より新しいと考えられる。また 15 S E 19 とは直接重複する柱穴が無く前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。検出できた柱穴は掘方も柱痕も非常に大きいものであった。これらの柱穴だけで建物が成り立っているとは考えがたく、検出できた柱を上屋柱として、下屋柱の存在を仮定して大胆ではあるが建物プランを想定してみた。この建物プランは 15 S B 1 の柱配置を特に参考にしている。下屋柱は掘込みが上屋柱に比較して浅かったため残存していないと考えたい。また南西隅の上屋柱は確認面を下げすぎたため検出できなかったと考えられる。推定される大きさは桁行 1643 cm、梁間 794 cm で面積は約 39.5 坪である。使用した柱は 11 個である。

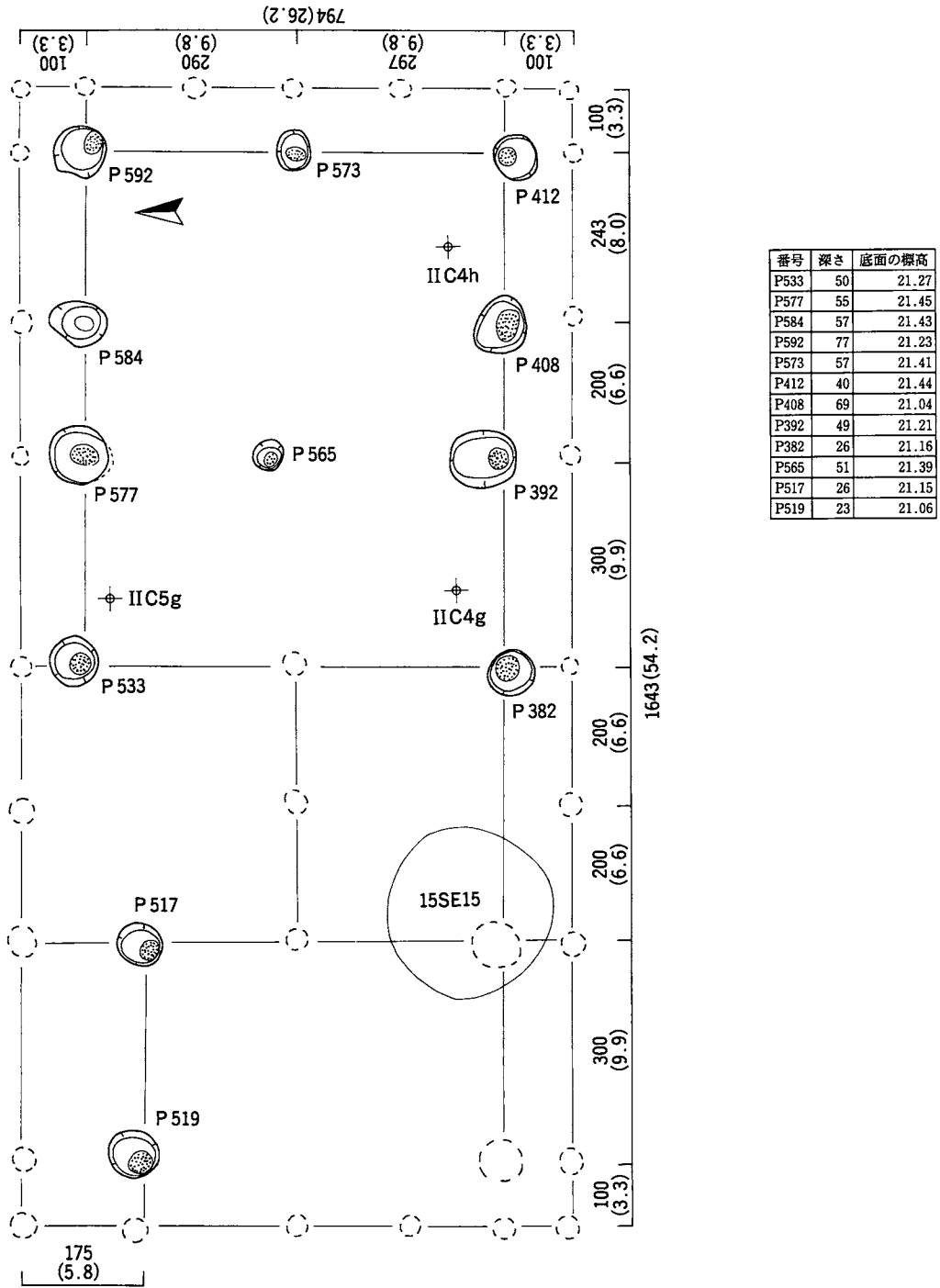
想定した間取りは広間型三間取で、上手には後に納戸、前に座敷、中には常居的な部屋、下手は土間が配される。中の部屋の常居は 15 S B 1 の事例から考えると、前後で 2 室に分かれていた可能性が高い。土間は建物全体の半分の面積を占めている。

〔建物方位〕桁行の軸方向は E - 2° - N である。

〔柱間寸法〕6 尺 6 寸 (約 200 cm) が多用されている。

〔出土遺物〕P 577 の掘方中から肥前産磁器碗 (6034)、肥前産磁器皿 (6078)、肥前産陶器碗 (6150) が、

15SB9



第7図 西側調査区の建物(3) (15SB9)



P 565 の掘方中から肥前産陶器碗 (6152) が出土した。また P 533、P 577、P 584 で柱材が残存していた。樹種はいずれもクリである。

〔付属施設〕 軸方位、建物配置から 15 S B 21 が本建物に伴う付属屋の可能性が考えられる。

〔建物の性格〕 大きさから母屋と考えられる。

〔年代〕 P 577 出土の肥前産磁器 (6034、6078) は 1690～1780 年、P 565、P 577 出土の肥前産陶器碗 (6150、6152) は 18 世紀前半のものであり、本建物の建築年代はこれらの陶磁器より新しいと考えられる。18 世紀後半頃の建築であろうか。

#### 15 S B 10 (第 8 図、写真図版 12)

〔位置〕 IIC 4 b～4 d、5 b～5 d に位置する。

〔重複〕 15 S E 18 と重複するが本建物が古い。また本建物のプラン内にある 15 S K 30、15 S K 31、15 S K 45 と前後関係は不明である。そしてプランが重なる 15 S B 8 とは直接重複する柱穴がないが、所属時期の推定から本建物が古いと考えられる。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は 3 間で長方形のプランである。桁行は 699 cm、梁間は 491 cm で面積は約 10.4 坪である。

〔建物方位〕 桁行の軸方向は E-1°-N である。

〔柱間寸法〕 7 尺 7 寸 (約 233 cm) を使用している。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 不明である。

〔年代〕 柱間寸法と柱穴埋土の色調、質感から 12 世紀の所属と考えられる。

#### 15 S B 11 (第 8 図、写真図版 12)

〔位置〕 IIC 6 g～6 j、7 g～7 j に位置する。

〔重複〕 P 603 が 15 S B 16 の柱穴 P 604 と、P 606 が 15 S B 12 の柱穴 P 607 と重複するが本建物が新しい。また 15 S K 23 と重複するが本建物が古い。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は 5 間で長方形のプランである。使用した柱穴は 11 個である。南西隅の柱は削平のため検出できなかった。桁行は 1096 cm、梁間は 435 cm で面積は約 14 坪である。

〔建物方位〕 桁行の軸方向は E-4°-N である。

〔柱間寸法〕 桁行では 6 尺 4 寸 (約 194 cm) と 7 尺 8 寸 (約 236 cm) の部分がある。

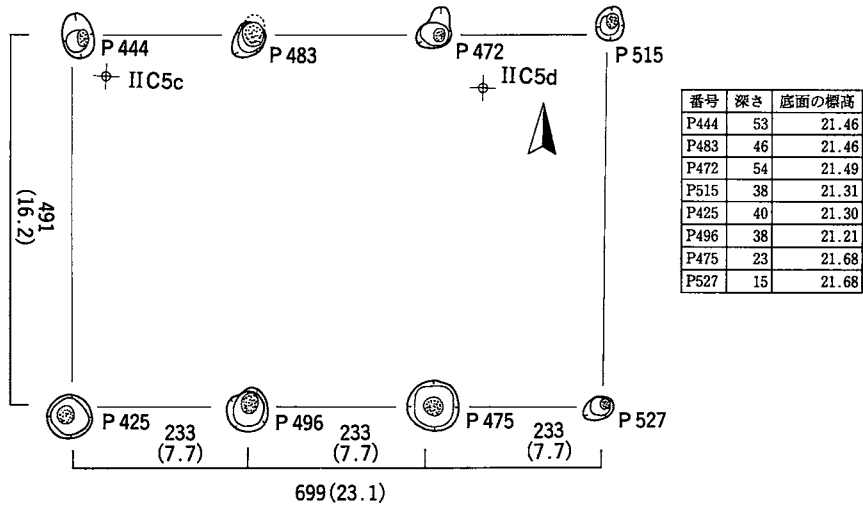
〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

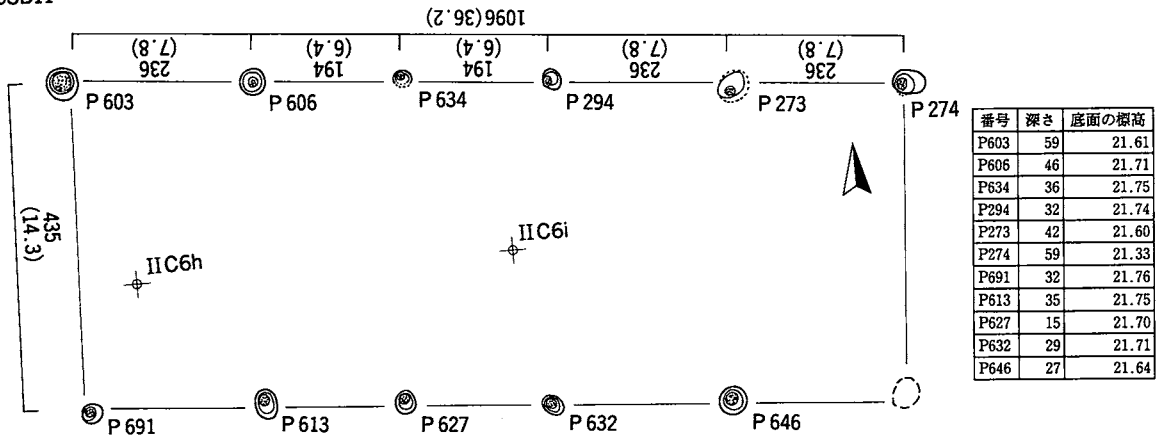
〔建物の性格〕 建物の大きさから考えて、付属小屋的な用途が想像される。

〔年代〕 近世の所属と考えられる。

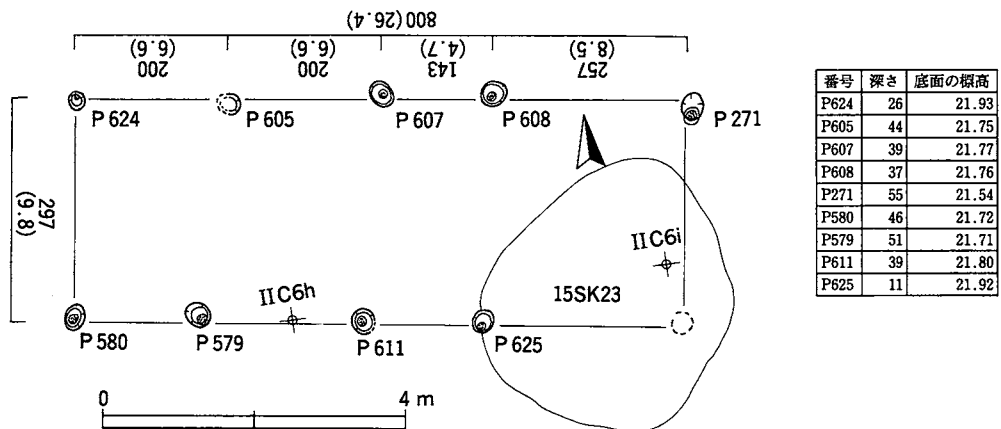
15SB10



15SB11



15SB12



第8図 西側調査区の建物(4) (15SB10、11、12)

### 15 S B 12 (第8図、写真図版12)

〔位置〕 IIC 5 i、6 g～6 i に位置する。

〔重複〕 P 624、P 605 がそれぞれ 15 S B 16 の柱穴 P 598、P 604 と、P 607 が 15 S B 11 の柱穴 P 606 と重複するが本建物が古い。また 15 S K 23 と重複するが本建物が古い。15 S K 37 は本建物のプラン内にあるが直接重複する柱穴が無く前後関係は不明である。同時存在の可能性も高い。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は4間で長方形のプランである。使用した柱穴は9個である。南西隅の柱は 15 S K 23 により失われている。桁行は 800 cm、梁間は 297 cm で面積は約 7.2 坪である。

〔建物方位〕 桁行の軸方向は E - 9° - N である。

〔柱間寸法〕 6 尺 6 寸 (約 200 cm) の部分が多い。

〔出土遺物〕 P 580、P 607 で柱材が残存していた。P 580 の樹種はクリ、P 607 の樹種はオニグルミである。

〔付属施設〕 桶埋設遺構である 15 S K 37 が本建物のプラン内に位置し、本建物に伴う可能性もある。

〔建物の性格〕 建物の大きさから考えて、付属小屋的な用途が想像される。15 S K 37 が本建物に伴うのであれば便所の建物の可能性が考えられる。

〔年代〕 近世の所属と考えられる。

### 15 S B 13 (第9図、写真図版13)

〔位置〕 IIC 6 g～6 i、7 g～7 i に位置する。

〔重複〕 15 S B 16、15 S B 12、15 S D 20 とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は4間で長方形のプランである。使用した柱穴は8個である。北西隅と P 599、P 609 の間の柱穴は検出できなかった。この部分は他の柱穴の確認面とほぼ同じ標高であったので、他の柱穴に比べ掘込みが浅かったと考えられる。桁行は 752 cm、梁間は 331 cm で面積は約 7.5 坪である。

〔建物方位〕 桁行の軸方向は E - 8° - N である。

〔柱間寸法〕 6 尺 2 寸 (約 188 cm) を基準にしている。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 建物の大きさから考えて、付属小屋的な用途が想像される。

〔年代〕 近世の所属と考えられる。

### 15 S B 14 (第9図、写真図版13)

〔位置〕 IIC 7 e～7 g に位置する。

〔重複〕 P 314 が 15 S E 4 と重複するが、本建物が古い。

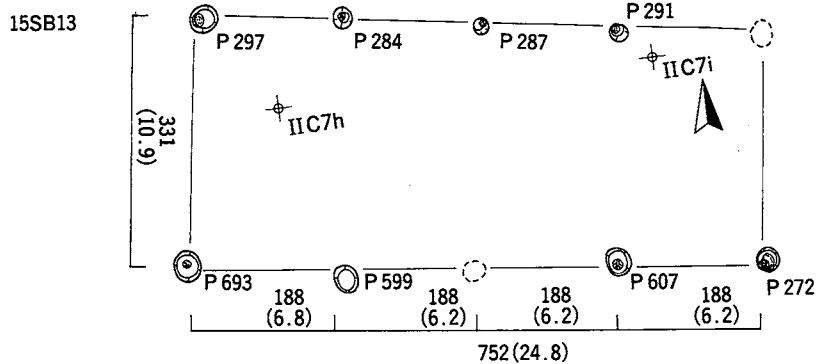
〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は3間で長方形のプランである。桁行は 703 cm、梁間は 143 cm で面積は約 3 坪である。使用した柱穴は8個である。

〔建物方位〕 桁行の軸方向は E - 2° - N である。

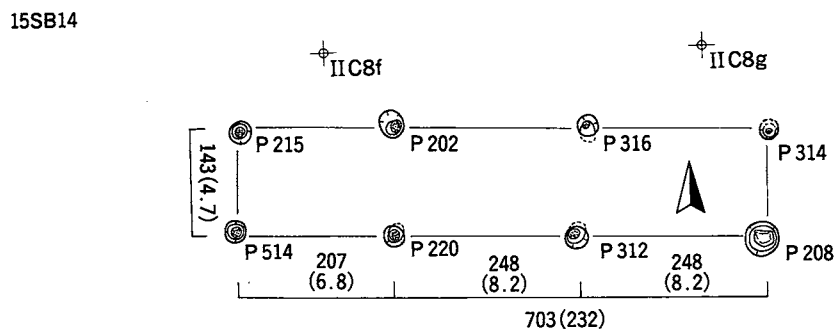
〔柱間寸法〕 桁行では 6 尺 8 寸 (約 207 cm) と 8 尺 2 寸 (約 248 cm) の部分がある。

〔出土遺物〕 なし





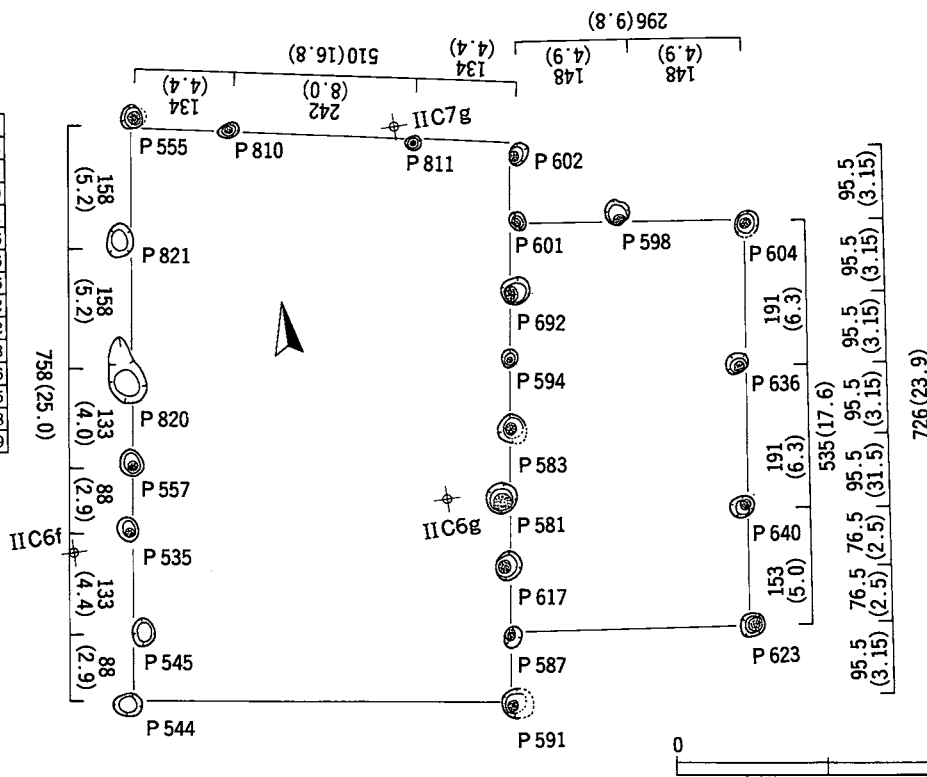
番号	深さ	底面の標高
P693	13	22.09
P297	41	22.15
P599	20	21.97
P284	43	21.75
P287	45	21.68
P607	39	21.77
P291	33	21.79
P272	19	21.88



番号	深さ	底面の標高
P514	25	21.72
P215	23	21.81
P220	26	21.81
P202	23	21.72
P312	42	21.84
P316	38	21.87
P208	13	22.09
P314	7	22.12

15SB15、16

番号	深さ	底面の標高
P544	28	21.33
P545	14	21.54
P535	27	21.49
P557	28	21.51
P820	32	21.36
P821	20	21.36
P555	52	21.56
P810	29	21.72
P811	19	21.72
P591	34	21.63
P617	52	21.56
P583	37	21.75
P692	18	21.98
P602	53	21.69



番号	深さ	底面の標高
P587	16	21.90
P581	42	21.70
P594	2	22.08
P601	23	21.92
P598	41	21.80
P623	38	21.64
P640	34	21.81
P636	23	21.96
P604	45	21.75

第9図 西側調査区の建物(5) (15SB13、14、15、16)

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕梁間の短さから付属小屋的な用途が想像される。稲を乾すための棒を収納する小屋などの用途が想像される。

〔年代〕近世の所属と考えられる。

### 15 S B 15 (第9図、写真図版13)

〔位置〕II C 5 f、5 g、6 f、6 gに位置する。

〔重複〕P 591が15 S K 34とP 617が15 S K 36とP 583が15 S B 27と重複するがいずれも本建物が古い。また15 S B 27に伴う厩のくぼみが本建物と重複するが本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は4間で長方形のプランである。桁行は758 cm、梁間は510 cmで面積は約11.7坪である。使用した柱穴は14個である。P 820、P 821は15 S B 27に伴う厩のくぼみの中から検出された。埋土も他の柱穴と異なり、柱痕も検出されなかったが、厩のくぼみを構築した時に、本建物の柱穴が柱根が残った状態で表れ、それを取り除くために掘られたのがP 820、P 821と解釈したい。また同じ図面に表したが15 S B 16は本建物の東側の桁の柱の中間にちょうど挟まる形で柱穴が配置されており、本建物と同時存在の可能性が考えられる。同時存在であれば、本建物とくっついて建っていたことになる。可能性としては柱配置と軸方向が同一なことから同時存在の可能性が非常に高い。

〔建物方位〕梁間の軸方向はE-10°-Nである。

〔柱間寸法〕やや不整であるが6尺3寸(約191 cm)を基準にしている。

〔出土遺物〕P 591の掘方中から肥前産磁器皿(6112)が出土した。またP 535、P 591、P 617で柱材が残存していた。P 535、P 591の樹種はクリ、P 617の樹種はスギである。

〔付属施設〕上述のように15 S B 16が本建物と同時存在で構造はそれぞれ別であっても、接して建っていた可能性が高い。

〔建物の性格〕建物の大きさから考えて、付属小屋的な用途が想像される。建物配置から母屋である15 S B 7の付属建物の可能性が高い。

〔年代〕P 591出土の肥前産磁器皿(6112)は1690~1780年の年代である。本建物の建築年代はこの陶器の製作年代より新しいことになる。また本建物より新しい15 S B 27の建築年代から考え合わせて、18世紀中の建築としたい。

### 15 S B 16 (第9図、写真図版13)

〔位置〕II C 5 g、6 gに位置する。

〔重複〕P 598とP 604がそれぞれ15 S B 12の柱穴P 624とP 605と重複するが本建物が新しい。またP 604は15 S B 11の柱穴P 603と重複するが本建物の方が古い。またP 623は15 S K 39と重複するが本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は3間で長方形のプランである。桁行は535 cm、梁間は296 cmで面積は約4.8坪である。使用した柱穴は9個である。また同じ図面に表したが、15 S B 15は本建物の西側の桁の柱の中間にちょうど挟まる形で柱穴が配置されており、本建物と同時存在の可能性が考えられる。同時存在であれば、本建物とくっついて建っていたことになる。可能性としては柱配置と軸方向が同一なことから同時存在の可能性が非常に高い。

〔建物方位〕 梁間の軸方向はE-10°-Nである。

〔柱間寸法〕 桁行では6尺3寸(約191cm)、梁間では4尺9寸(約148cm)を基準にしている。

〔出土遺物〕 南東隅の柱穴P 623の底面から寛永通寶(7202)が出土した。これは古寛永で初鑄年代は1636年である。またP 581で柱材が残存していたが樹種はクリである。

〔付属施設〕 上述のように15SB15が本建物と同時存在で、構造はそれぞれ別であっても、接して建てていた可能性が高い。

〔建物の性格〕 建物の大きさから考えて、付属小屋的な用途が想像される。建物配置から母屋である15SB7の付属建物の可能性が高い。

〔年代〕 近世の所屬と考えられる。P 623出土の寛永通寶は初鑄年代1636年で、それより新しい年代が想定される。

### 15SB17 (第10図、写真図版13)

〔位置〕 IIC1g、1h、2g、2h、3g、3hに位置する。

〔重複〕 P 393とP 410が15SB9の柱穴P 392、P 408とそれぞれ重複するが本建物が古い。また15SB25とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。東側は削平のため確認できないが、プランは更に伸びる可能性もある。検出できた梁間は3間である。桁行は検出面を下げすぎた訳ではないのだが検出できないものが多く、1間おきに柱穴が無い。これらの柱穴が実際に無かったとすれば、桁行の半間ないし1間先に下屋柱が存在したと考えられる。下屋柱は掘込みが浅く検出できなかったのであろう。桁行は1172cm、梁間は621cmで面積は約22坪である。使用した柱穴は12個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向はE-8°-Nである。

〔柱間寸法〕 梁間では6尺8寸(約207cm)を使用している。

〔出土遺物〕 P 359の掘方中位で天聖元寶(4403)と元豊通寶(4404)が出土した。この2枚は重なってくっついた状態で出土した。またP 341で柱材が残存していたが樹種はクリである。

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 不明であるが、ある程度の大きさを有しており単なる付属小屋とは思われない。

〔年代〕 P 359から出土した銭の初鑄年代は天聖元寶が1023年、元豊通寶が1078年である。よって本建物は1078年よりは新しい建物の可能性が高い。これまでの平泉遺跡群での調査では12世紀の柱穴に銭が入っていた事例は無いようであり、本建物も12世紀より後のものと考えたほうが妥当であろう。また北宋銭の出土から考えて近世に下る可能性も少ないだろう。よって本建物は中世の所屬と考えたい。本調査区本建物に直接伴うわけでないが、周辺で15世紀代の瀬戸産の灰釉小皿と鉄釉天目茶碗が出土しており、他にこの年代に当てはまりそうな建物は無いので、本建物が15世紀代の陶器に伴う可能性が高い。

### 15SB18 (第10図、写真図版13)

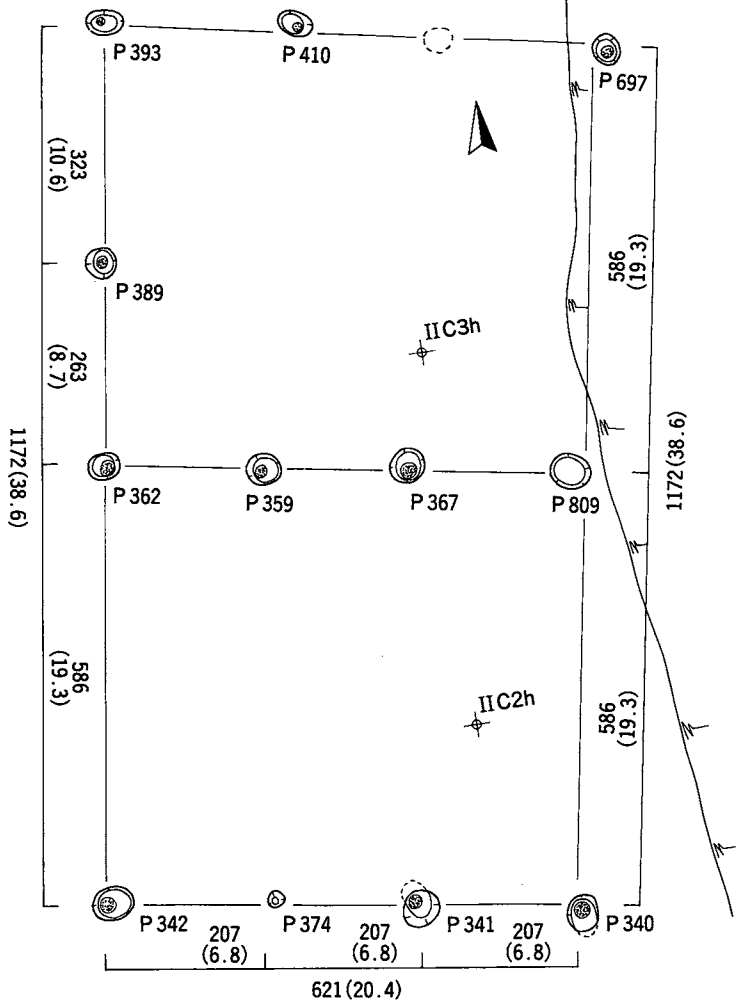
〔位置〕 IIC8i、8j、9i、9jに位置する。

〔重複〕 15SE2が本建物のプラン内にあるが直接重複する柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕 西側と北側が下水道施設により攪乱されており全体のプランを把握することができなかった。確認できたのは東西ラインが263cm、南北ラインは430cmで面積は3.4坪以上である。

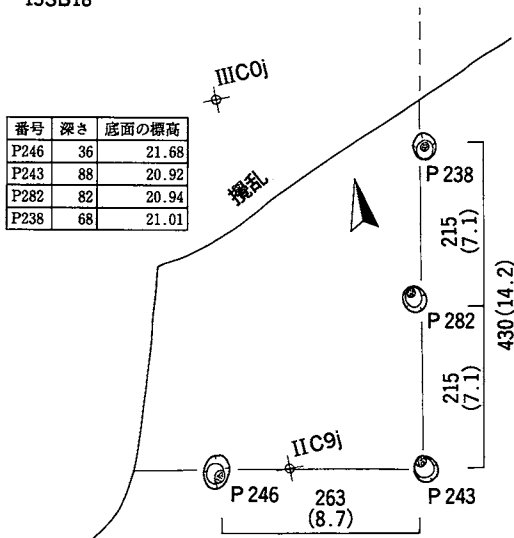


15SB17



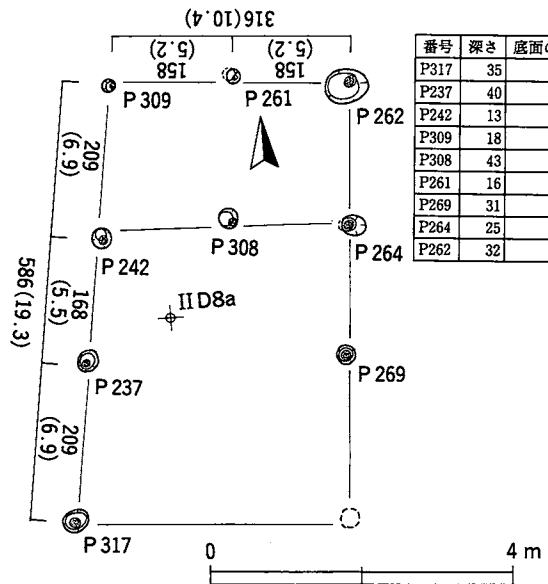
番号	深さ	底面の標高
P342	22	20.94
P362	26	21.12
P389	20	21.30
P393	13	21.60
P374	10	21.26
P359	50	21.10
P410	30	21.06
P341	55	20.86
P367	33	21.25
P340	30	21.06
P809	46	21.04
P697	21	21.65

15SB18



番号	深さ	底面の標高
P246	36	21.68
P243	88	20.92
P282	82	20.94
P238	68	21.01

15SB19



番号	深さ	底面の標高
P317	35	21.17
P237	40	21.58
P242	13	21.29
P309	18	21.28
P308	43	21.05
P261	16	21.01
P269	31	20.91
P264	25	20.78
P262	32	20.60

第10図 西側調査区の建物(6) (15SB17、18、19)

〔建物方位〕東西ラインの軸方向はE-11°-Nである。  
〔柱間寸法〕南北ラインでは7尺1寸（約215 cm）を使用している。  
〔出土遺物〕なし  
〔付属施設〕なし  
〔建物の性格〕不明である。  
〔年代〕柱間寸法と柱穴埋土の色調、質感から12世紀の所属と考えられる。

#### 15 S B 19（第10図、写真図版13）

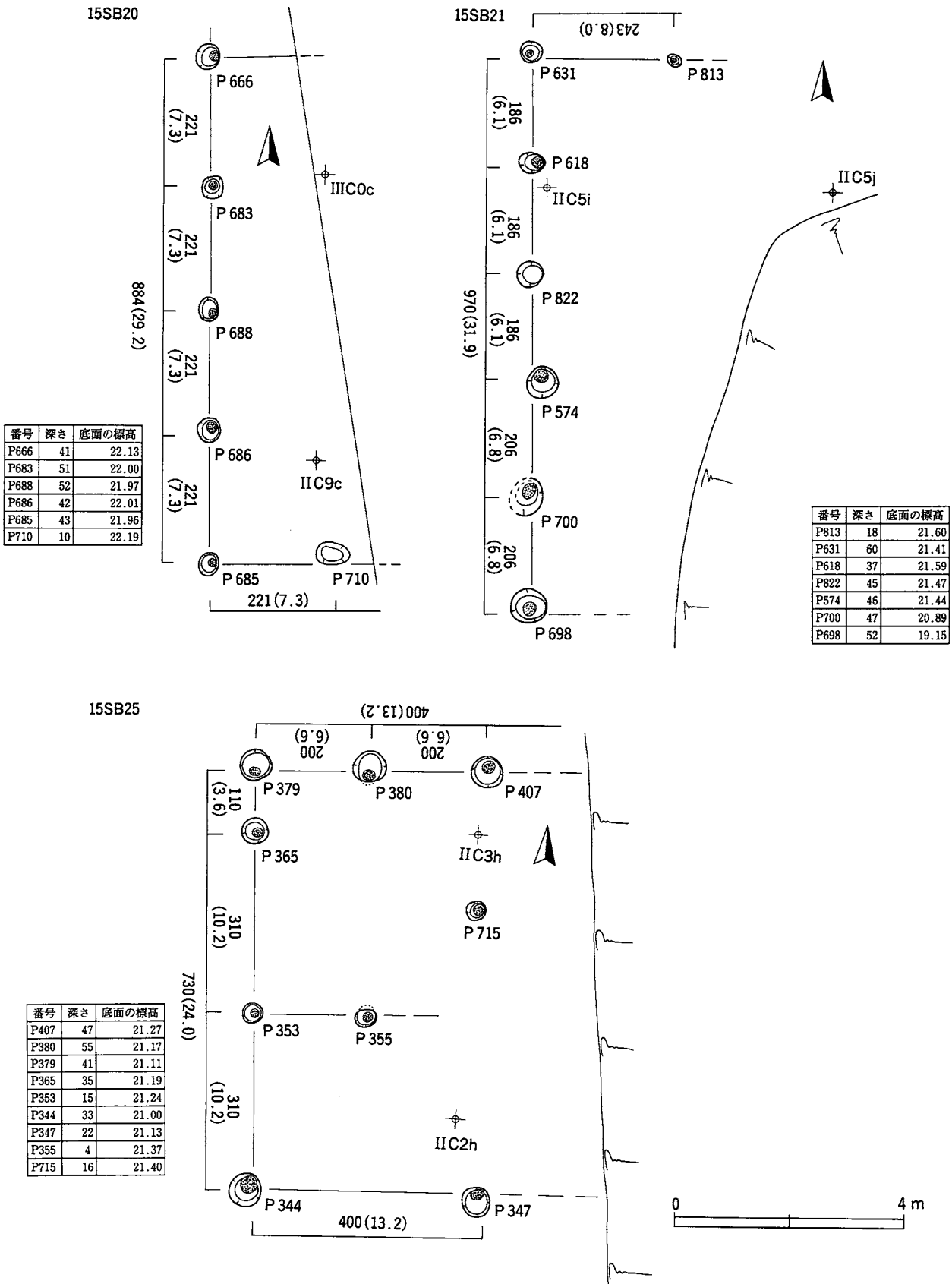
〔位置〕IIC 7 j、8 j、IID 7 a、8 aに位置する。  
〔重複〕P 242が15 S K 17と重複するが前後関係を把握できなかった。また15 S E 3、15 S E 22が本建物のプラン内にあるが直接重複する柱穴がなく前後関係は不明である。  
〔平面形式〕南東隅の柱穴を検出できなかったが、桁行は3間で長方形の建物である。北側と南側の2室からなっている。桁行は586 cm、梁間は316 cmで面積は約5.6坪である。使用した柱穴は9個である。  
〔建物方位〕梁間の軸方向はE-1°-Nである。  
〔柱間寸法〕梁間では5尺2寸（約158 cm）、桁行では6尺9寸（約209 cm）と5尺5寸（約168 cm）を使用している。  
〔出土遺物〕なし  
〔付属施設〕なし  
〔建物の性格〕不明である。  
〔年代〕不明であるが、近世以降の可能性が高い。

#### 15 S B 20（第11図、写真図版13）

〔位置〕IIC 8 b、8 c、9 b、9 c、IIIC 0 bに位置する。  
〔重複〕なし  
〔平面形式〕東側が調査区外にかかり全体形は不明であるが桁行は4間である。桁行は884 cm、梁間は221 cm分検出できた。面積は5.9坪以上である。使用した柱穴は6個である。  
〔建物方位〕梁間の軸方向はE-1°-Sである。  
〔柱間寸法〕桁行では7尺3寸（約221 cm）を使用している。  
〔出土遺物〕なし  
〔付属施設〕なし  
〔建物の性格〕不明である。  
〔年代〕柱間寸法と柱穴埋土の色調、質感から12世紀の所属と考えられる。

#### 15 S B 21（第11図、写真図版13）

〔位置〕IIC 3 h、3 i、4 h、4 i、5 h、5 iに位置する。  
〔重複〕P 700が15 S E 21と重複するが本建物が古い。  
〔平面形式〕掘立柱建物である。東側が削平のために失われているが桁行は5間で長方形のプランである。P 813は本建物に使用された柱穴なのか不明だが一応図示した。これを含めて使用した柱穴は7個である。



第11図 西側調査区の建物(7) (15SB20、21、25)



梁間は 243 cm 以上、桁行は 970 cm で面積は 7.1 坪以上である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向は E-1°-S である。

〔柱間寸法〕 桁行では 6 尺 1 寸 (約 186 cm) と 6 尺 8 寸 (約 206 cm) を使用している。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 建物の大きさから考えて付属小屋的な用途が想像される。建物配置の関係から母屋と思われる 15 S B 9 の付属建物の可能性が高い。

〔年代〕 近世の所属と考えられる。

### 15 S B 25 (第 11 図)

〔位置〕 II C 1 g、1 h、2 g、2 h、3 g、3 h に位置する。

〔重複〕 15 S B 17 とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。東側は削平のため失われており全体のプランをとらえることができない。東西、南北ラインのどちらが桁行なのか判断できないが、東西ラインは 3 間まで確認できた。東西ラインは 400 cm 以上、南北ラインは 730 cm で面積は 8.8 坪以上である。使用した柱穴は 9 個である。

〔建物方位〕 東西ラインの軸方向は E-3°-S である。

〔柱間寸法〕 東西ラインでは 6 尺 6 寸 (約 200 cm) を東西ラインでは 10 尺 2 寸 (約 310 cm) を使用している。

〔出土遺物〕 P 379 の掘方上位で美濃産の長石釉 (志野) の皿の細片が出土した。細片のため図示できなかったが大窯 V 期 (1585~1605 年) または登窯 I 期 (1605~1623 年) のものと考えられる。また P 407 で柱材が残存していたが樹種はクリである。

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 不明であるが、ある程度の大きさを有しており単なる付属小屋とは思われない。

〔年代〕 P 379 から出土した志野皿の年代観から 16 世紀末~17 世紀初頭の建築の可能性が高い。

### 15 S B 26 (1 号礎石建物) (第 12、14 図、写真図版 14)

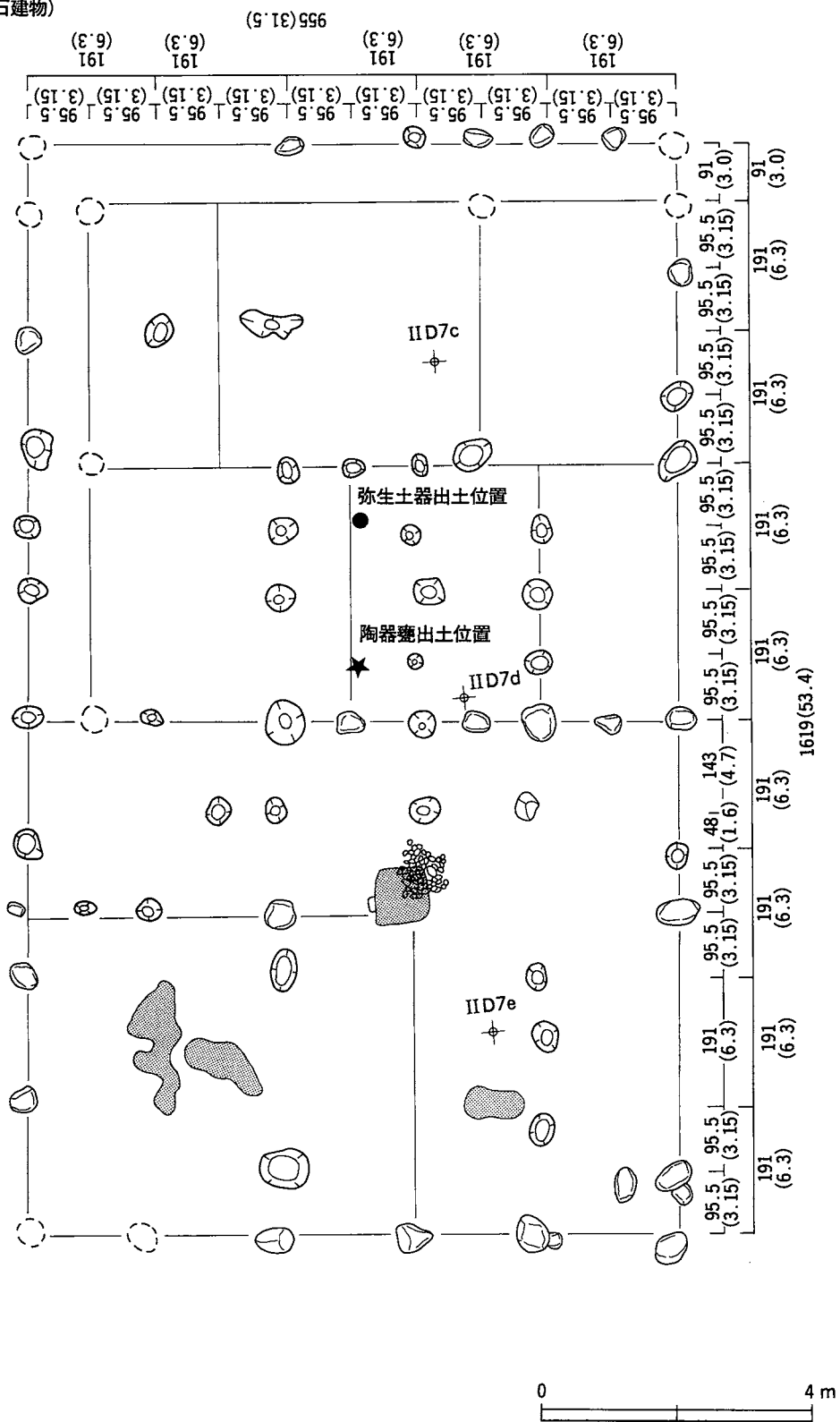
〔位置〕 II C 5 b~5 e、6 c~6 e、7 c~7 e に位置する。

〔重複〕 15 S B 7、15 S D 27 と重複するが本建物が新しい。

〔平面形式〕 礎石建物である。桁行は 1620 cm、梁間は 960 cm で、8 間半強×5 間強の大きさである。この建物は昭和 41 年に火災で焼失したのであるが、所有者の菅原惇氏によると、礎石の上に柱が直接立つ「石場建て」であったという。図に示した間取りと部屋の名称は菅原惇氏から聞き取ったものである。キバ座敷を持つ点や、丑梁を支える丑持ち柱を持つ点など岩手県南の旧伊達領の民家の典型的な特徴を有している。

ガイドコロと土間の境には炉の痕跡がみられた。炉の底面には礫が並べられていた。また土間の丑持ち柱の南側にコンクリート製の「ムロ」がある。ガイドコロは板張であったというが、その部分に焼けている面があり、建築当初は台所の板張は無かった可能性が考えられる。

この建物は礎石、又は礎石を起こした痕跡からやはずれてそれに対応する形で、細かい砂利を敷いた礎石の下に敷く「栗石」がみられる。これは終戦直後の台風 (アイオンかカサリンか正確に聞き取っていない) で家が少し流され、その修復のため家を引き戻し、ジャッキアップした際のものだという。この時に家が当



第12図 西側調査区の建物(8) (15SB26)

初の位置から若干ずれて当初の礎石と、ずれた後の礎石の下敷きにした「栗石」が対応する形で存在するのである。

〔建物方位〕桁行の軸方向はE-5°-Nである。

〔柱間寸法〕6尺3寸(約191cm)を基準にしている。

〔出土遺物〕本建物の四隅を結ぶ対角線の交点の付近から、地鎮具と思われる中に銭を取めた甕(6226)が出土した。本建物の構築面から23cmほど下からの出土であるので、甕を埋納した際の掘り方があったはずであるが確認できなかった。

甕は倒立の状態、銭の他には穀物などは確認できなかった。家が建てられた面の原地形はかなりの傾斜で南側に下がっており、北側を削平し、南側に盛り土をすることによって平坦面を作っていた。このため南側では明瞭な整地面が存在するが、甕が出土した部分には整地が施されていない状態であった。よって甕を埋納したのが整地後なのか、その前なのか確実に判断できない。

これがこの家を建てる際の地鎮具かどうか確定はできないが、出土した位置から考えて、この家に伴うものとしても誤りはなかろう。甕の内部の銭は錆のため癒着しており、取り外して確認していないが、形状と鉄銭であることから、仙台通寶が1枚と判断した。甕は小型のもので鉄釉に空色の釉を流しかけている。産地は特定できないが東北在地産で、18世紀末以降の製作年代と思われる。

また今回の事例に関連したものか不明だが、銭が入った甕から2m20cmほど離れて、弥生土器?の壺(4)が倒立の状態出土している。この周辺ではこの他にも弥生土器片が出土しているが、出土状態と出土レベルから考えて関連を全く否定もできない。また家の四隅付近も詳細に掘り下げてみたが地鎮に関連ありそうなものは検出できなかった。

この他に本建物の構築面から、陶磁器、銭などが多数出土しているがここでは一つ一つを示さない。

〔付属施設〕上述のように囲炉裏、「ムロ」、性格不明の焼土面がある。また15SB27は本建物に伴う厩の建物、15SB28は便所の建物である。また本建物と付属小屋の前面にある石敷きも同時存在のものである。

〔建物の性格〕母屋である。

〔年代〕廃絶は昭和41年(1966)の火災による。建築年代を明らかにすることはできないが、石場建てである点と6尺3寸を基準にしている点から、近代はもちろん幕末までは下らない時期と考えられる。また地鎮具と思われる甕の中の仙台通寶の初鑄年代は天明4年(1784)であるので、この年代よりは新しい建築になるはずである。これらの点を考えあわせて、建築年代は18世紀末頃としたい。

菅原惇氏によるとこの屋敷は、昭和の初め頃(惇氏の)父親が購入したもので、菅原氏の先祖伝来のものではないという。この屋敷の地番は、明治7年頃の作成と考えられる地籍図(広土絵図)では鈴木慶吉の宅地となっている。だが、菅原氏の前所有者は鈴木という姓の人ではなかったということであるので、鈴木氏と菅原氏の間にはもう一人の所有者があったことがわかる。鈴木氏が屋敷を手放したのは明治の末頃のことらしい。

## 15SB27(2号礎石建物)(第13、14図、写真図版14、15)

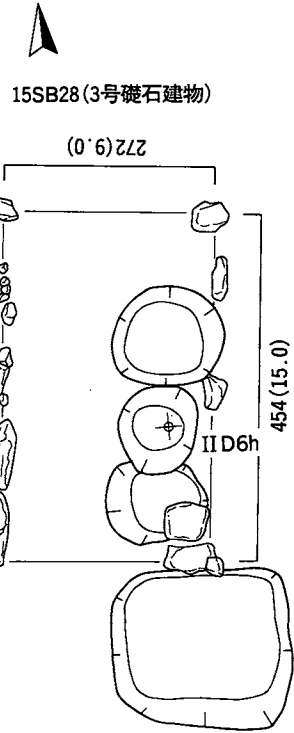
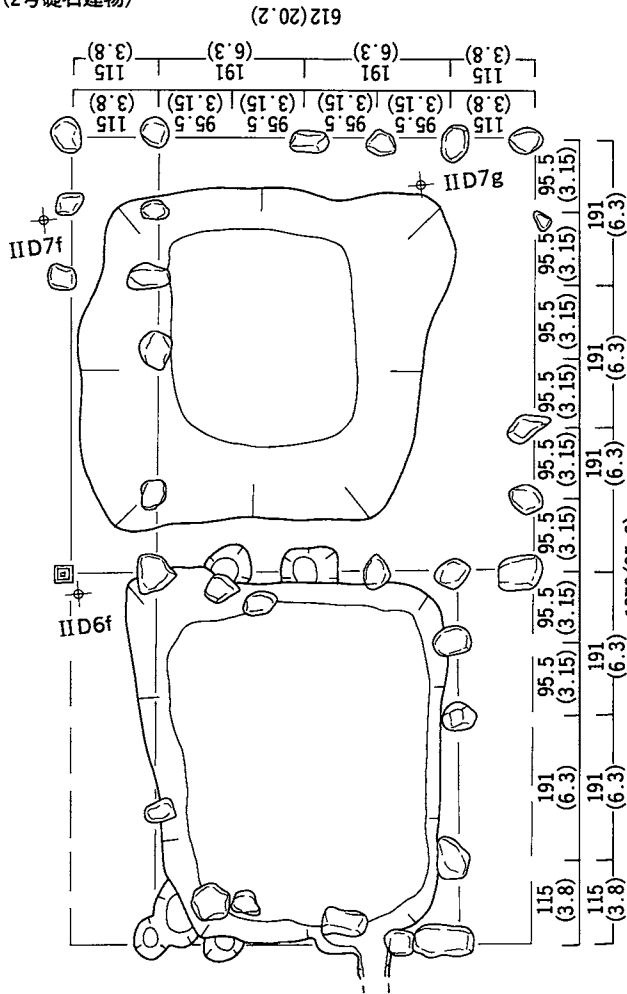
〔位置〕IIC5f、5g、6f、6g、7f、7gに位置する。

〔重複〕15SB15、15SK41、15SE20と重複するが本建物が新しい。

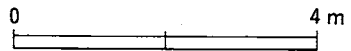
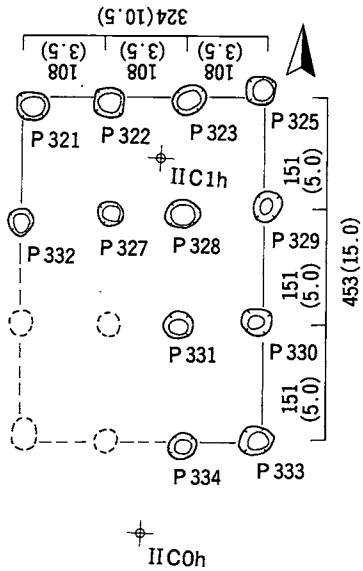
〔平面形式〕礎石建物である。桁行は1070cm、梁間は612cmである。この建物の中に厩のくぼみが2つあるが、同時存在ではなく南側が新しく北側が古い。旧厩のくぼみからプリント刷の磁器碗が出土したのでそ



15SB27(2号礎石建物)



15SB29(4号礎石建物)



第13図 西側調査区の建物(9) (15SB27、28、29)

の作り替えは20世紀になってからのことである。旧厩のくぼみは人為的に埋められていた。昭和41年の火災時には建物の南側に厩のくぼみがあり、北側の空間は作業場、物置として使用していたようである。

〔建物方位〕 梁間の軸方向はE-5°-Nである。

〔柱間寸法〕 6尺3寸(約191cm)を基準にしている。

〔出土遺物〕 図示しなかったが旧厩のくぼみの埋め土からプリント刷の磁器碗が出土している。

〔付属施設〕 上述のように厩のくぼみが本建物に伴う。

〔建物の性格〕 厩の建物である。

〔年代〕 廃絶は昭和41年(1966)の火災による。建築年代を明らかにすることはできないが、母屋とほぼ同時期と推定される。18世紀末頃の建築であろうか。

### 15 S B 28 (3号礎石建物) (第13、14図、写真図版14、15)

〔位置〕 II C 5 g、5 h、6 g、6 hに位置する。

〔重複〕 15 S B 11、12、13、16、15 S K 37と重複するが本建物が新しい。

〔平面形式〕 礎石建物である。桁行は454cm、梁間は272cmである。

〔建物方位〕 梁間の軸方向はE-5°-Nである。

〔柱間寸法〕 不明である。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 本建物のプラン内に15 S K 42と他に遺構名を付していない穴が2つある。これらは便所の桶を埋設した掘方である。これらの掘方各々が同時存在か否かは判断できなかった。また本建物の南に接する15 S K 35も出土遺物からごく新しいものであり、本建物と同時存在と思われる。

〔建物の性格〕 便所の建物である。

〔年代〕 廃絶は昭和41年(1966)の火災による。建築年代を明らかにすることはできないが、母屋とほぼ同時期と推定される。18世紀末頃の建築であろうか。

### 15 S B 29 (4号礎石建物) (第13図、写真図版15)

〔位置〕 II C 0 g、0 h、1 g、1 hに位置する。

〔重複〕 なし

〔平面形式〕 礎石建物と推定される。検出したピットは柱痕もなく、掘方も浅いので礎石を起こした跡と判断した。南西側はピットを検出できなかった。桁行は453cm、梁間は324cmで面積は約4.4坪である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向はE-4°-Sである。

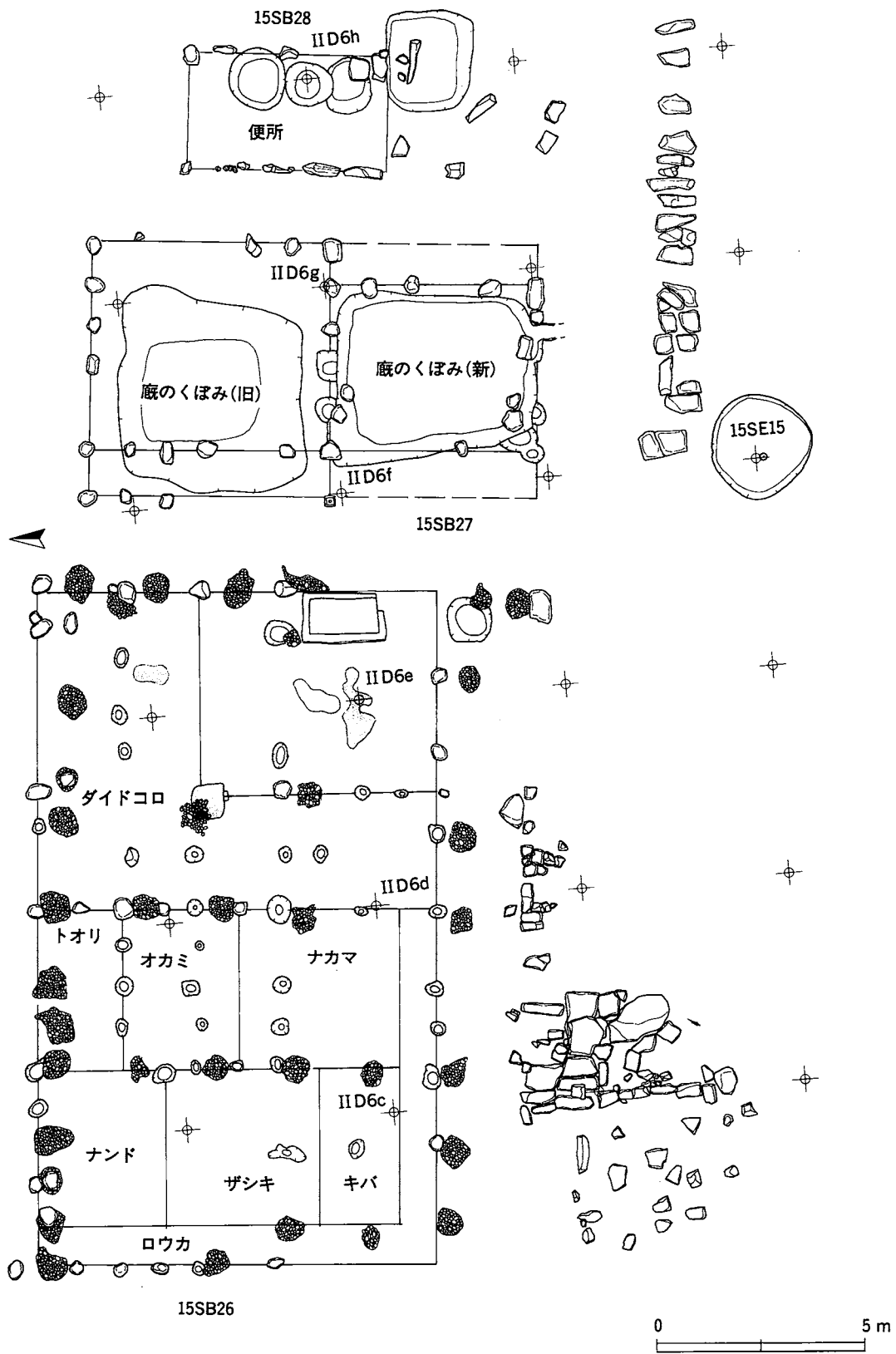
〔柱間寸法〕 桁行で5尺(約151cm)、梁間で3尺5寸(約108cm)を使用している。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 不明である。

〔年代〕 ごく新しい建物と思われる。



第14図 15SB26、27、28の建物配置

### 11 S B 1 (第 15 図、写真図版 16)

〔位置〕 III E 1 j、2 j、III F 1 a、2 a に位置する。

〔重複〕 11 S K 3 と重複するが、本建物が新しい。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。北側の桁行では細い柱を太い柱の間に配し、半間ごとの柱配置になっている。桁行は 761 cm、梁間は 428 cm で、面積は約 9.8 坪である。使用した柱穴は 13 個である。

〔建物方位〕 桁行の軸方向は E - 2° - N である。

〔柱間寸法〕 桁行では 6 尺 1 寸 (約 185 cm) を使用している。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 付属小屋と考えられる。

〔年代〕 近世の所属と考えられる。

### 11 S B 2 (第 15 図、写真図版 16)

〔位置〕 II E 8 i、8 j、9 i、9 j、III E 0 i、0 j に位置する。

〔重複〕 11 S K 1 と重複するが、本建物が古い。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。東側の桁行の南側では細い柱を太い柱の間に配し、半間毎の柱配置になっている。桁行は 844 cm、梁間は 422 cm で、面積は約 10.7 坪である。使用した柱穴は 10 個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向は E - 1° - N である。

〔柱間寸法〕 6 尺 6 寸 (約 200 cm) と 7 尺 3 寸 (約 222 cm) を使用している。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 付属小屋と考えられる。

〔年代〕 近世の所属と考えられる。

### 11 S B 3 (第 15 図)

〔位置〕 III E 0 f、0 g、III E 1 f、1 g に位置する。

〔重複〕 11 S B 4 とプランが重複するが、直接重複する柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は 846 cm、梁間は 458 cm で、面積は約 11.7 坪である。使用した柱穴は 7 個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向は E - 12° - N である。

〔柱間寸法〕 桁行では 7 尺 5 寸 (約 229 cm) を使用している。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

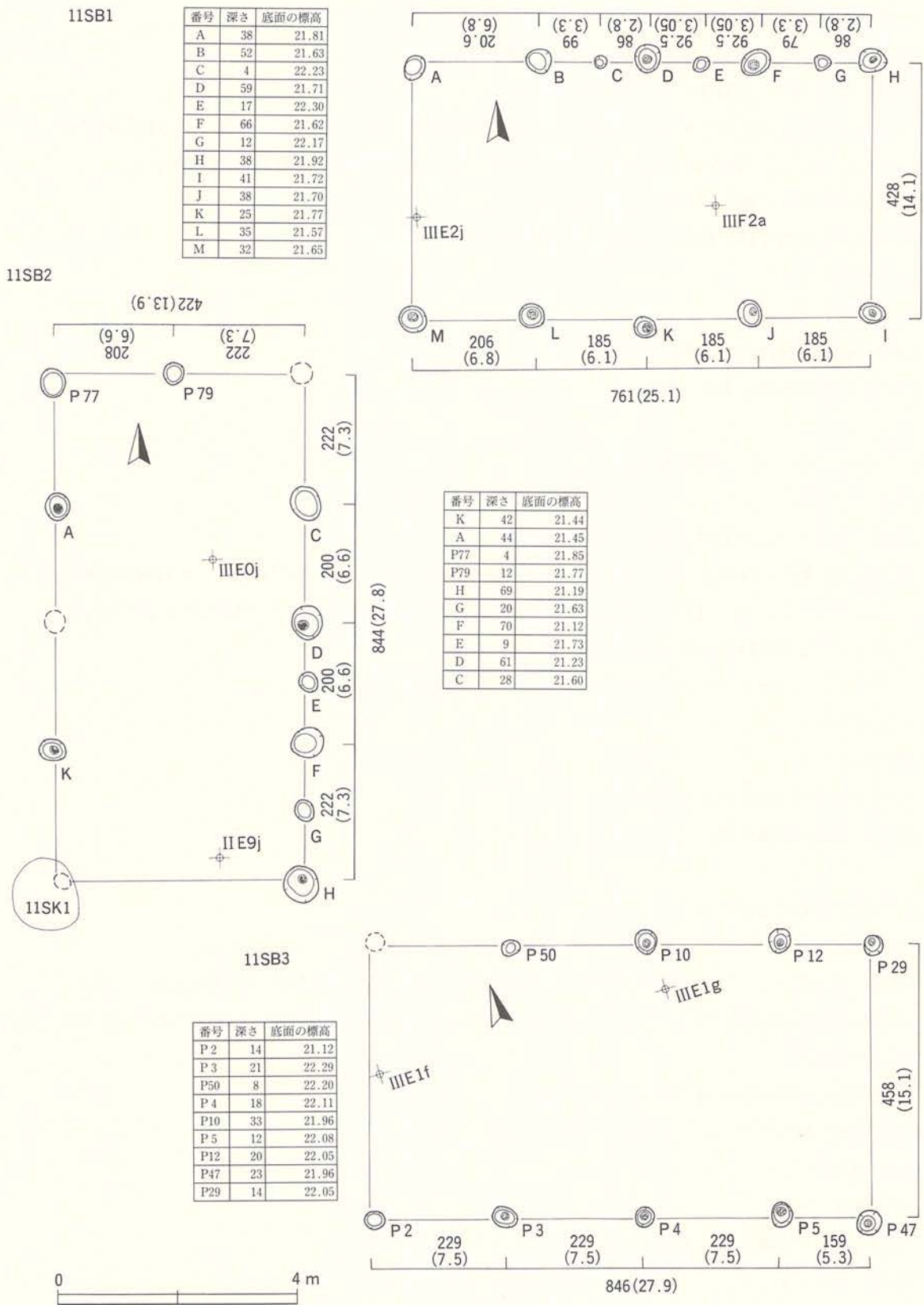
〔建物の性格〕 付属小屋と考えられる。

〔年代〕 不明であるが、12 世紀ないし中世の所属と考えられる。

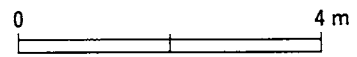
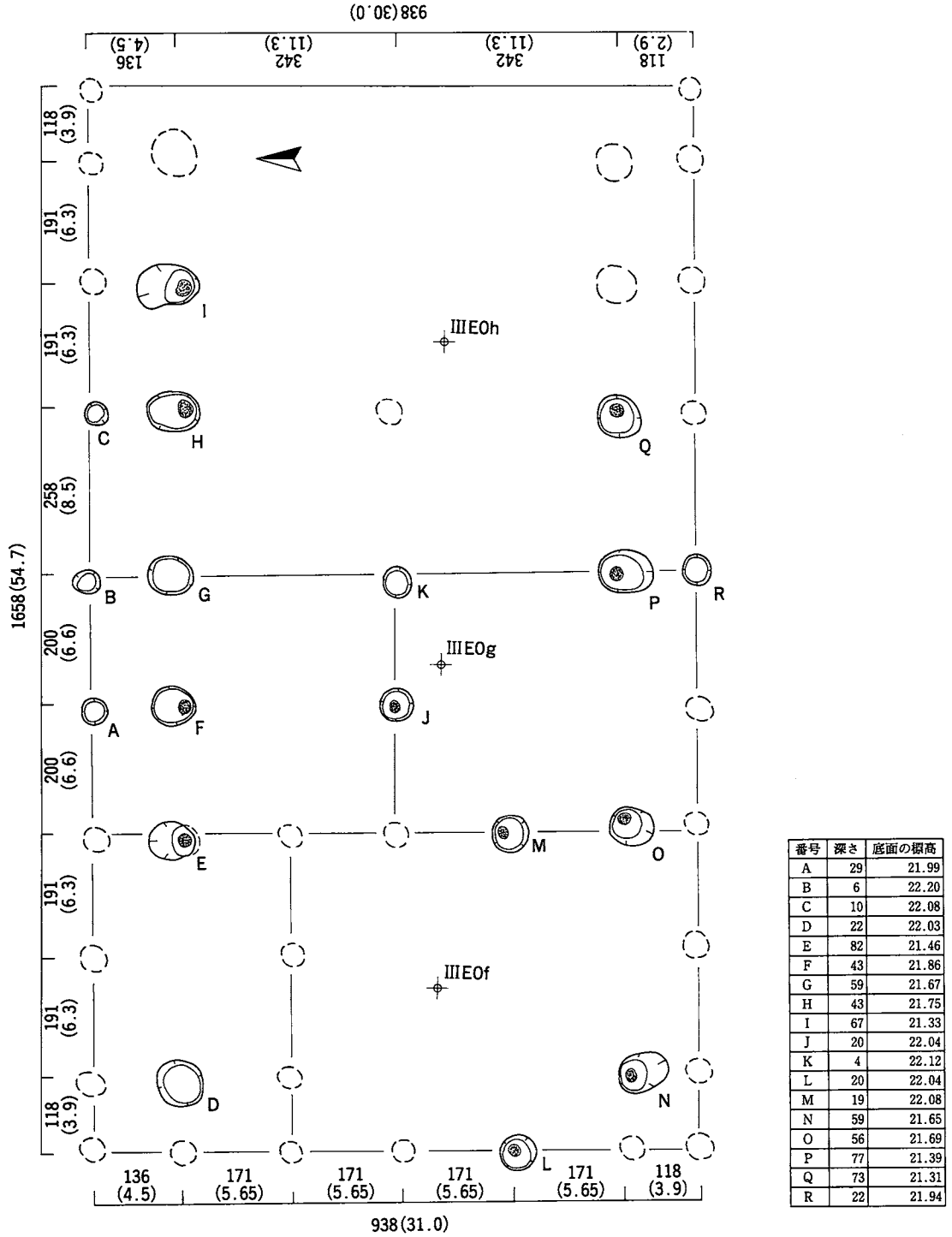
### 11 S B 4 (第 16 図)

〔位置〕 II E 9 e ~ 9 h、III E 0 e ~ 0 h、III E 1 e ~ 1 h に位置する。





第15図 東側調査区の建物(1) (11SB 1、2、3)



第16図 東側調査区の建物(2) (11SB4)

〔重複〕11 S D 8 と重複するが本建物が新しい。また11 S B 3 と15 S B 1 とプランが重複するが柱穴の直接の切り合いがなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。記録されている柱穴だけでは建物になりえず、大胆にそのプランを想定してみた。上屋柱と下屋柱からなる構造と考えられるが下屋柱は掘込みが浅くて検出されなかったと解釈したい。また本建物が検出された面は東側にかなり低く傾斜しており、そのために東側の柱穴が検出できなかったのであろう。本建物の想定には特に15 S B 1 のプランを参考にした。

桁行は1658 cm、梁間は938 cm と推定される。面積は約47.1坪である。間取りは東側が下手、西側が上手になると思われる。上手は北側に納戸、南側に座敷といった部屋を想定している。中の部屋は南側と北側で2室に分けられる。下手は土間と想定される。土間は建物の半分近くの面積を占めるとと思われる。土間には6本の上屋柱が立っていたと考えられる。使用した柱穴は18個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はE-1°-Nである。

〔柱間寸法〕様々な寸法を使用しており基準寸法を見つけにくい。6尺3寸(約191 cm)と6尺6寸(約200 cm)を多用している。

〔出土遺物〕P 51 の埋土から煙管の雁首(7109)が出土した。

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕大きさから母屋と考えられる。

〔年代〕近世の所属である。P 51 の埋土から出土した煙管の雁首は古泉弘氏の煙管の形態変遷に当てはめると、その4段階(18世紀前半)に相当する。よって本建物の建築はそれ以降ということになる。他の母屋と思われる建物の年代観との兼ね合いから、本建物は19世紀前半の所属と推定される。

### 13 S B 1 (第17図)

〔位置〕III F 2 b、2 c、3 b~3 cに位置する。

〔重複〕13 S B 2 と重複するが本建物が新しい。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行837 cm、梁間は460 cmである。面積は約11.6坪である。本建物と重複する13 S B 2 の形態から類推すると、本建物にも本来は西側と東側の2面に廂が付いていた可能性が高い。使用した柱穴は7個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はE-12°-Nである。

〔柱間寸法〕桁行では9尺2寸(約279 cm)を使用している。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明である。

〔年代〕12世紀ないし中世の所属と考えられる。本建物と重複する13 S B 2 は柱間寸法が同じであり、近接した時期が想定される。

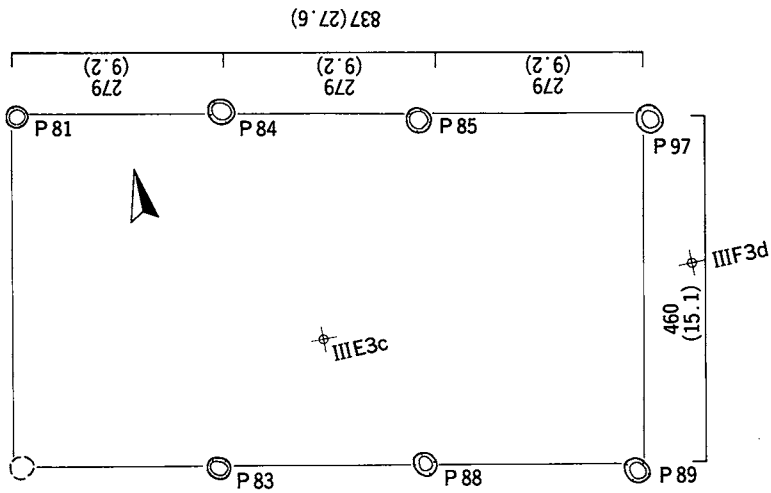
### 13 S B 2 (第17図)

〔位置〕III F 2 b、2 c、3 b~3 dに位置する。

〔重複〕13 S B 1 と重複するが本建物が古い。

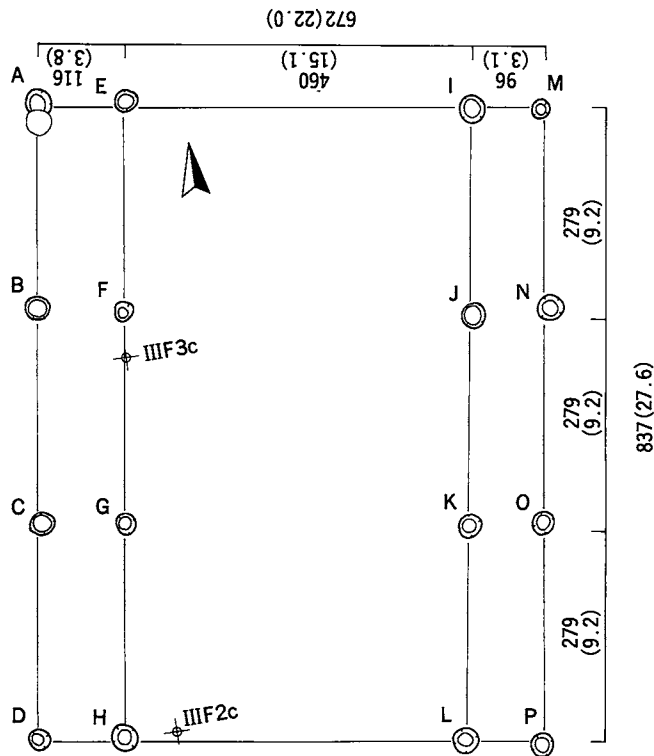
〔平面形式〕掘立柱建物である。西側と東側の2面に廂が付く形態である。廂を含めた長さは桁行837 cm、

13SB1

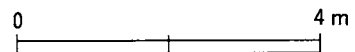


番号	深さ	底面の標高
P81	18	22.26
P84	18	22.26
P85	22	22.20
P97	14	22.24
P83	不明	不明
P88	26	22.14
P89	17	22.24

13SB2



番号	深さ	底面の標高
A	17	22.30
B	10	22.36
C	14	22.27
D	14	22.20
E	8	22.38
F	16	22.29
G	8	22.32
H	5	22.32
I	12	22.32
J	8	22.30
K	10	22.30
L	9	22.32
M	不明	不明
N	20	22.23
O	15	22.21
P	不明	不明



第17図 東側調査区の建物(3) (13SB1、2)



梁間は 672 cm である。面積は約 17 坪である。使用した柱穴は 12 個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向は E - 8° - N である。

〔柱間寸法〕 桁行では 9 尺 2 寸 (約 279 cm) を使用している。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 不明である。

〔年代〕 12 世紀ないし中世の所屬と考えられる。

### 13 S B 3 (第 18 図)

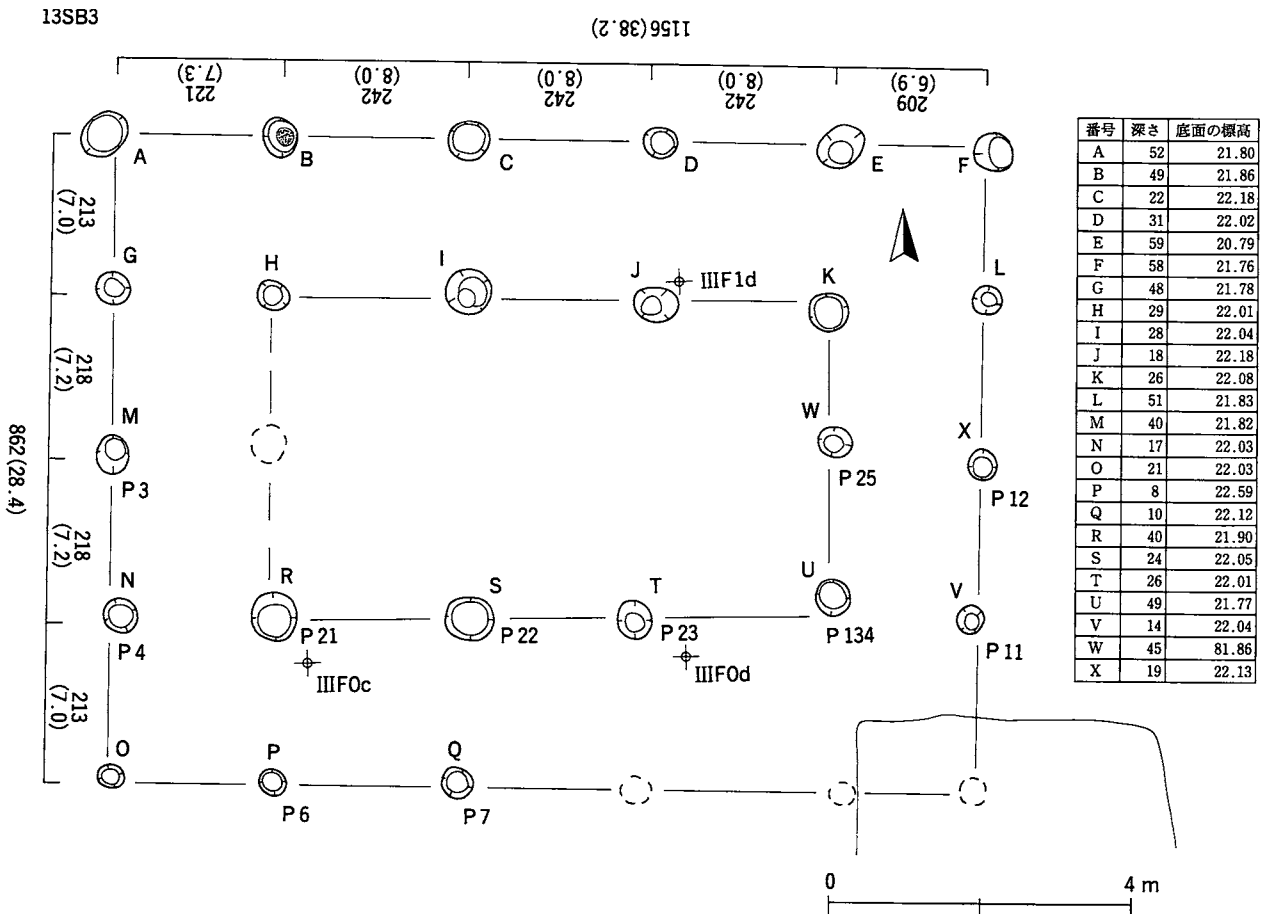
〔位置〕 IIF 9 b ~ 9 d、IIIF 0 b ~ 0 d、IIIF 1 b ~ 1 d に位置する。

〔重複〕 13 S D 4 と厩のくぼみと重複するが本建物が古い。また柱穴の直接の重複はないが、13 S B 8 とプランが重複する。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。柱穴 19 と 21 の間に柱穴が検出されていないが、ここにも柱穴があると仮定すれば身舎に四面に廂が付く形態である。身舎は 2 間 × 3 間で、廂を含めた長さは桁行 1156 cm、梁間は 862 cm である。面積は約 30.2 坪である。使用した柱穴は 24 個である。

〔建物方位〕 桁行の軸方向は E - 3° - N である。

〔柱間寸法〕 身舎の梁間では 7 尺 2 寸 (約 218 cm)、廂では 7 尺 (約 213 cm)、桁行の身舎は 8 尺 (約 242 cm)



第18図 東側調査区の建物(4) (13SB3)

を使用している。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明であるが、大きさから単なる付属小屋とは考えられない。

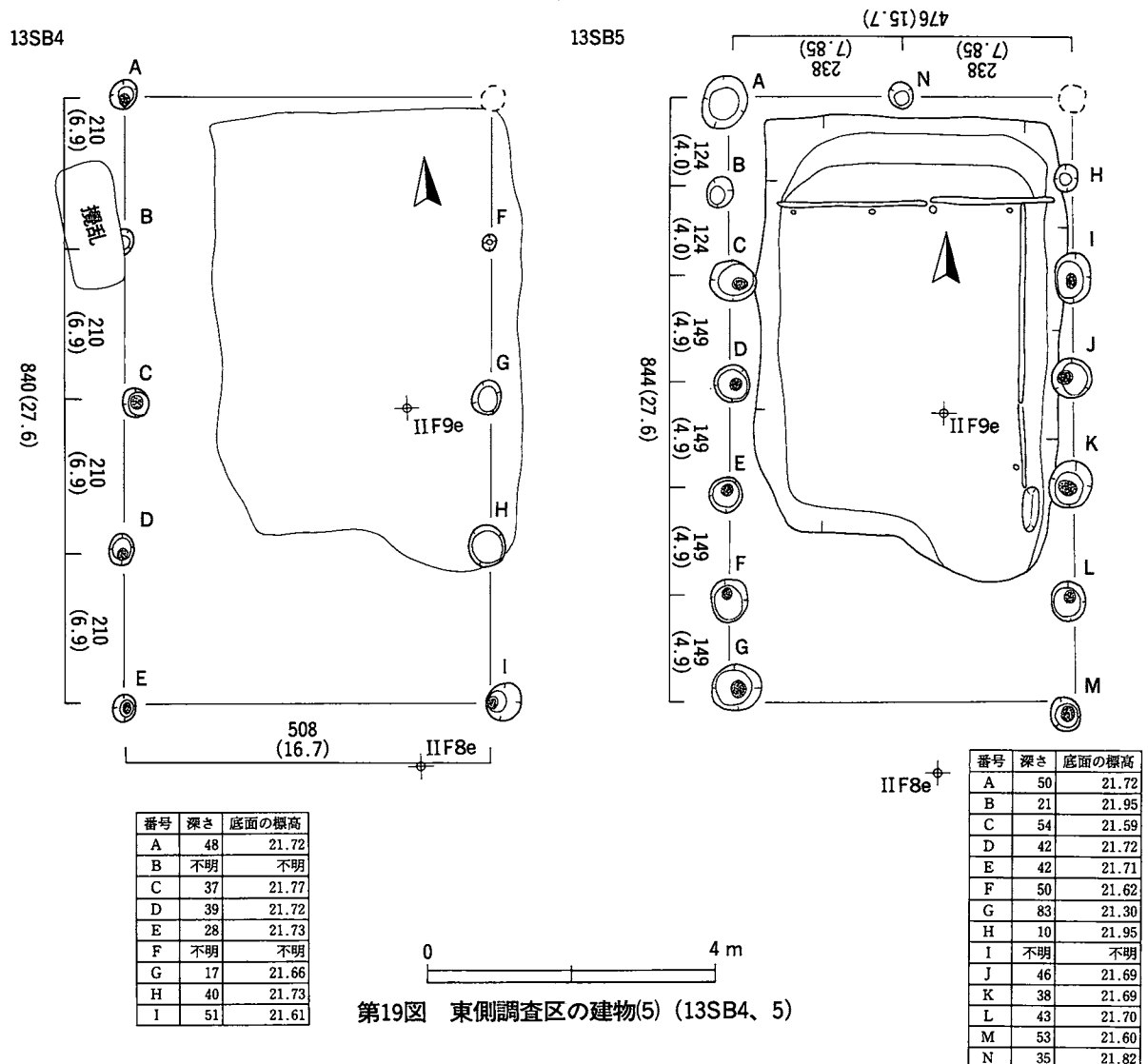
〔年代〕12世紀の所属である。プランが重複関係にある13SB8も12世紀の所属であるが、これとの前後関係は不明である。

### 13SB4 (第19図)

〔位置〕IIF8b、8c、9b、9cに位置する。

〔重複〕既のくぼみと重複するが本建物が古い。また柱穴の直接の重複はないが、13SB5、13SB6、13SB7、13SB9、13SB10とプランが重複する。また13SD3と柱穴が切り合っているが、前後関係についての記録が残されていないので不明である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は840cm、梁間は508cmの長方形のプランである。面積は約12.4坪である。使用した柱穴は9個である。



〔建物方位〕 梁間の軸方向はE-3°-Nである。  
〔柱間寸法〕 6尺9寸（約210cm）を基準にしている。  
〔出土遺物〕 なし  
〔付属施設〕 なし  
〔建物の性格〕 大きさから付属小屋と考えられる。  
〔年代〕 中世末～近世前半の所属と考えられる。

### 13SB5（第19図）

〔位置〕 IIF8b、8c、9b、9cに位置する。  
〔重複〕13SB6、13SB7の柱穴と重複するが本建物が新しい。また柱穴の直接の重複はないが、13SB4、13SB7、13SB9、13SB10、13SB12とプランが重複する。厩のくぼみは本建物の内部にちょうど納まり本建物に伴う可能性が高い。  
〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は844cm、梁間は476cmの長方形のプランである。面積は約13.3坪である。使用した柱穴は14個である。  
〔建物方位〕 梁間の軸方向はE-2°-Sである。  
〔柱間寸法〕 桁行では4尺9寸（約149cm）を基準にしている。  
〔出土遺物〕 なし  
〔付属施設〕 厩のくぼみが本建物に伴う可能性がある。  
〔建物の性格〕 大きさから付属小屋と考えられる。厩のくぼみに伴うのであれば厩の覆い屋になる。  
〔年代〕 近世後半の所属と考えられる。

### 13SB6（第20図）

〔位置〕 IIF8b、8c、9b、9cに位置する。  
〔重複〕13SB5の柱穴と重複するが本建物が古い。また柱穴の直接の重複はないが13SB4、13SB7、13SB9、13SB10、13SB11、13SB12と厩のくぼみとプランが重複する。  
〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は864cm、梁間は516cmの長方形のプランである。面積は約13.4坪である。使用した柱穴は9個である。  
〔建物方位〕 梁間の軸方向はE-2°-Sである。  
〔柱間寸法〕 6尺7寸（約204cm）を基準にしている。  
〔出土遺物〕 なし  
〔付属施設〕 なし  
〔建物の性格〕 大きさから付属小屋と考えられる。  
〔年代〕 近世の所属と考えられる。

### 13SB7（第20図）

〔位置〕 IIF8b、8c、9b、9cに位置する。  
〔重複〕13SB5、13SB6の柱穴と重複するが本建物が古い。また柱穴の直接の重複はないが13SB4、13SB7、13SB9、13SB10、13SB12と厩のくぼみとプランが重複する。

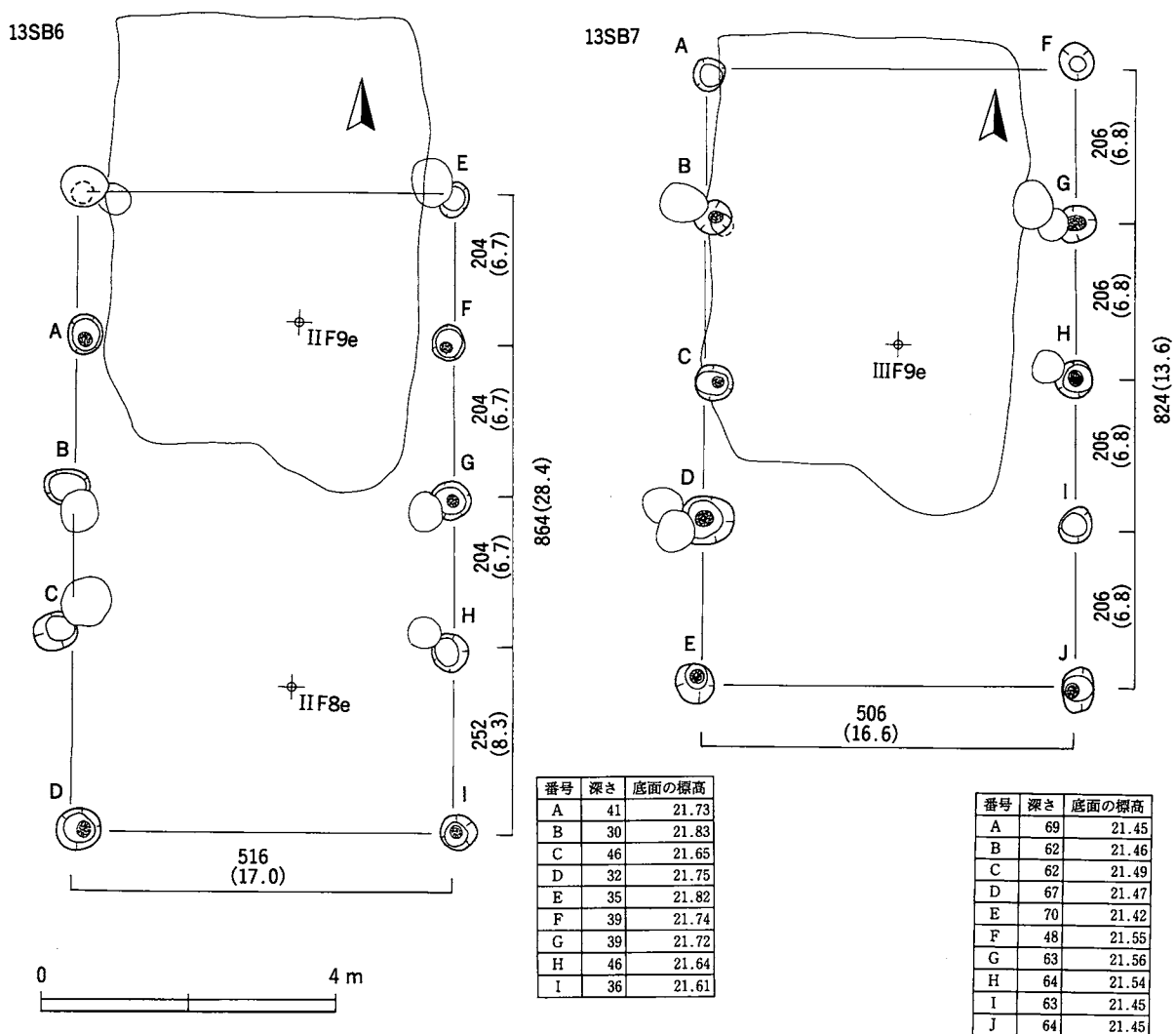
〔平面形式〕掘立柱建物である。桁行は824 cm、梁間は506 cmの長方形のプランである。面積は約12.6坪である。使用した柱穴は10個である。

〔建物方位〕梁間の軸方向はE-2°-Sである。

〔柱間寸法〕不整な部分もあるが6尺8寸(約206 cm)を基準にしているようである。

〔出土遺物〕柱穴Hで肥前産の磁器椀(6404)と陶器皿(6447)が出土した。

〔付属施設〕なし



第20図 東側調査区の建物(6) (13SB 6、7)



〔建物の性格〕 大きさから付属小屋と考えられる。

〔年代〕 近世の所屬と考えられる。柱穴Hで出土した陶磁器は18世紀代の製作であり、本建物はそれより新しい可能性が高い。

### 13SB8 (第21図)

〔位置〕 IIF8a～8d、IIF9a～9dに位置する。

〔重複〕 P395、P446が13SB10の柱穴P394、P445とそれぞれ重複するが本建物が古い。またP374、P375が13SD3と重複するが本建物が古い。また柱穴の直接の重複はないが13SB3、13SB9、13SB11、13SB12とプランが重複する。

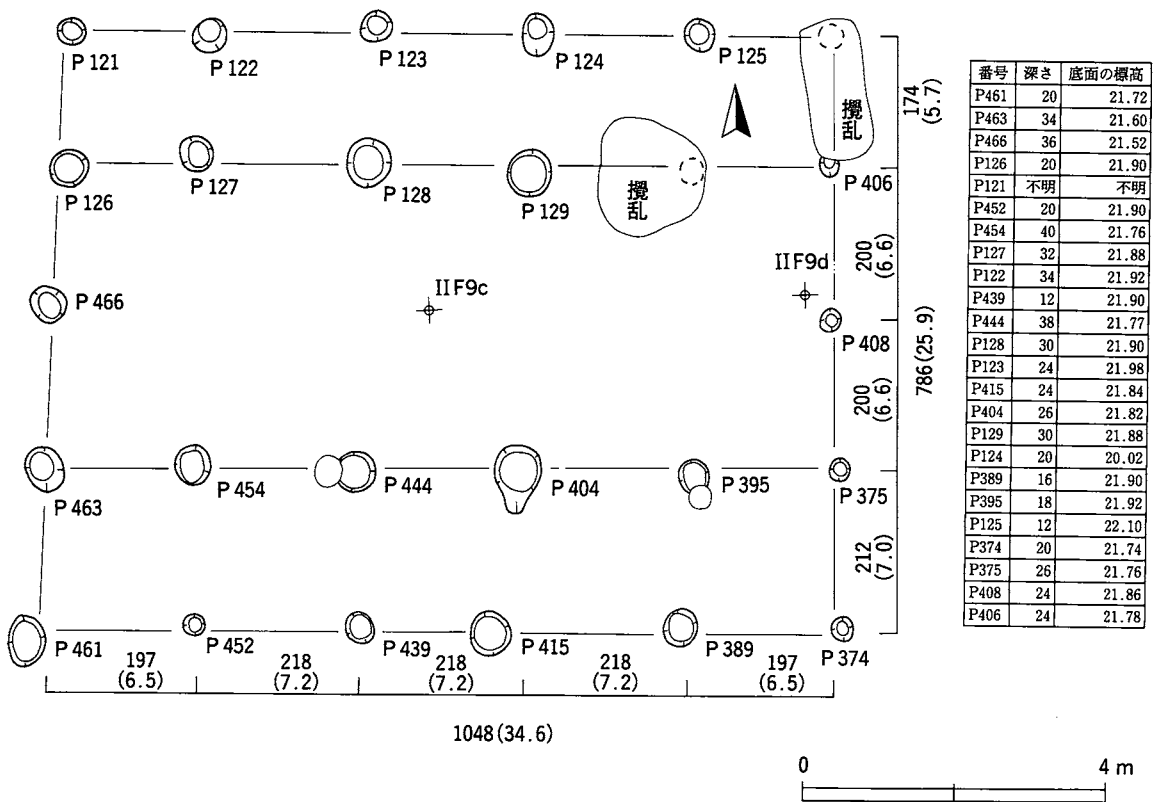
〔平面形式〕 掘立柱建物である。身舎に前面と背面の二面に廂が付く形態としたが、桁行の両端の柱間寸法は内側の柱間寸法に比べて短く四面廂建物の可能性もある。ここでは一応図示したような二面廂建物として説明する。身舎は2間×5間で、廂を含めた長さは桁行1048cm、梁間は786cmである。面積は約24.9坪である。使用した柱穴は24個である。

〔建物方位〕 桁行の軸方向はE-3°-Nである。

〔柱間寸法〕 桁行では内側が7尺2寸(約218cm)、両端が6尺5寸(約197cm)、梁間では6尺6寸(約200cm)を使用している。

〔出土遺物〕 なし

13SB8



第21図 東側調査区の建物(7) (13SB8)

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕不明であるが、大きさから単なる付属小屋とは考えられない。

〔年代〕12世紀の所属である。プランが重複関係にある13SB3も12世紀の所属であるが、これとの前後関係は不明である。

### 13SB9 (第22図)

〔位置〕II F 6 b～6 e、II F 7 b～7 e、II F 8 b～8 eに位置する。

〔重複〕P 418、P 496、P 372、P 316が13SB10の柱穴P 480、P 495、P 368、P 321とそれぞれ重複するが本建物が新しい。またP 176が13SB5の柱穴と、P 186が13SB7の柱穴と重複するがいずれも本建物が古い。また柱穴の直接の重複はないが、13SB4、13SB6、13SB8、13SB11、13SB12、13SB13、13SD3とプランが重複する。

〔平面形式〕掘立柱建物である。上屋柱と下屋柱からなる構造である。下屋柱は掘込みが浅いためか検出できなかったものもある。桁行は1680cm、梁間は890cmと推定される。面積は約45坪である。間取りは東側が上手、西側が下手になると思われる。上手は北側に納戸、南側に座敷といった部屋が想定される。中の部屋は南側と北側で2室に分けられる。下手は土間と想定される。土間は建物の半分近くの面積を占める。土間には5本の上屋柱が立っていたと考えられる。使用した柱穴は33個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はE-2°-Nである。

〔柱間寸法〕様々な寸法が使用されており基準寸法を見つけにくい。6尺4寸(約194cm)6尺6寸(約200cm)が多用されている。

〔出土遺物〕P 459の埋土から中国産のいわゆる呉須赤絵の磁器皿(6413)が出土した。またP 396で柱材が残存していた。樹種はクリである。

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕大きさから母屋と考えられる。

〔年代〕近世の所属である。P 459の埋土から出土した中国産の磁器皿(6413)は17世紀初めの所産であるので本建物の建築はそれより新しいと考えられる。推測ではあるが17世紀末から18世紀前半の所属と考えられる。

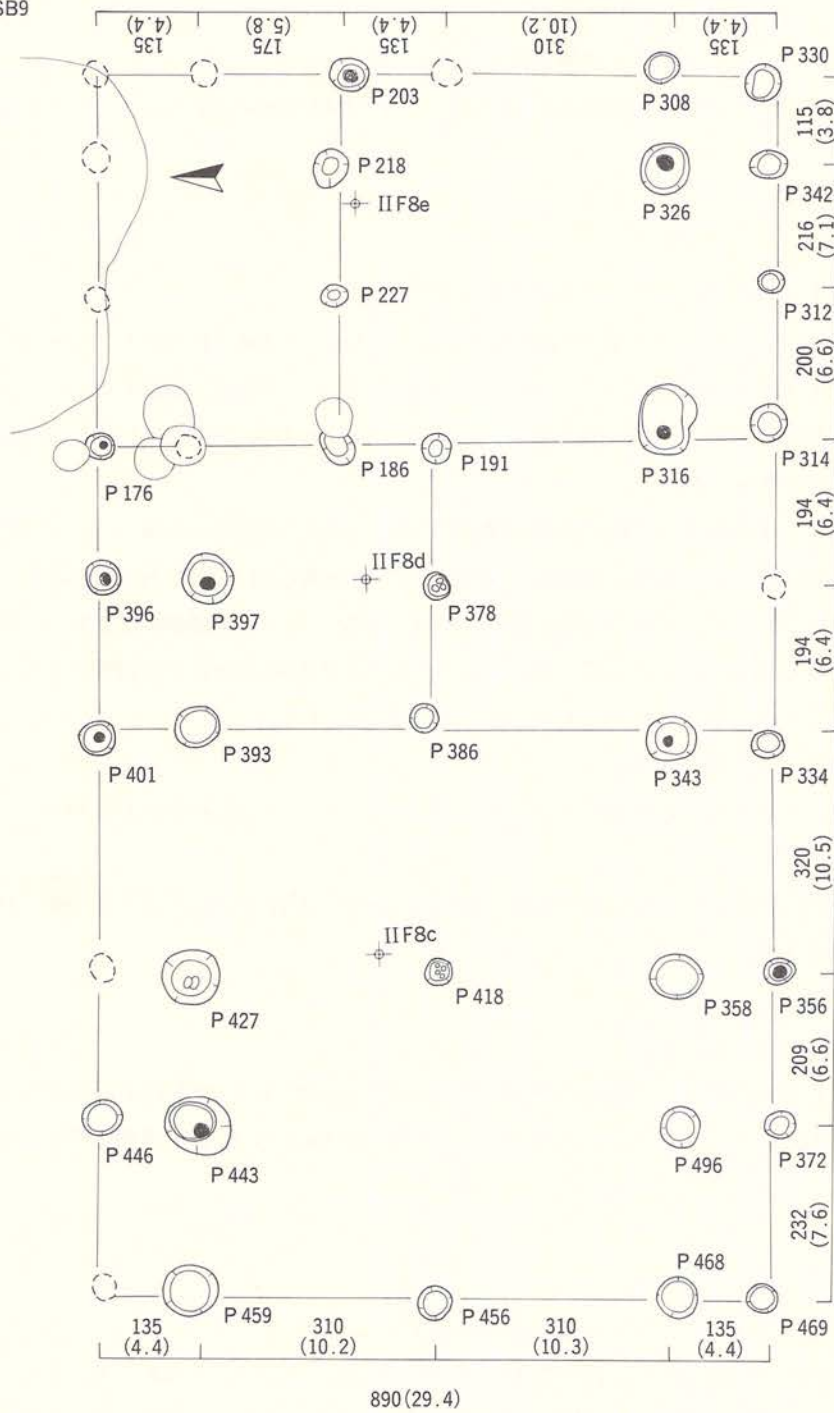
### 13SB10 (第23図)

〔位置〕II F 6 b～6 e、II F 7 b～7 e、II F 8 b～8 eに位置する。

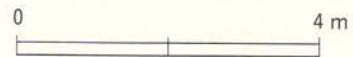
〔重複〕P 480、P 495、P 368、P 321が13SB9の柱穴P 418、P 496、P 372、P 316とそれぞれ重複するが本建物が古い。またP 394、P 445が13SB8の柱穴P 395、P 446とそれぞれ重複するが本建物が新しい。またP 368が13SB11の柱穴P 369と重複するが本建物が新しい。P 328が13SB13のP 327と重複するが本建物が新しい。またP 183が13SB5の柱穴と重複するが本建物が古い。また柱穴の直接の重複はないが、13SB4、13SB6、13SB7、13SB8、13SB12、13SD3とプランが重複する。

〔平面形式〕掘立柱建物である。上屋柱と下屋柱からなる構造である。下屋柱は掘込みが浅いためか検出できなかったものもある。桁行は1719cm、梁間は837cmと推定される。面積は約43.6坪である。検出した柱穴から間取りの想定は困難であるが、P 183～P 315の梁間の列は1間おきに柱穴が並び、ここに部屋の境界を設定することができる。本建物より新しい13SB9の間取りから類推すると東側が上手、西側が下手で、

13SB9

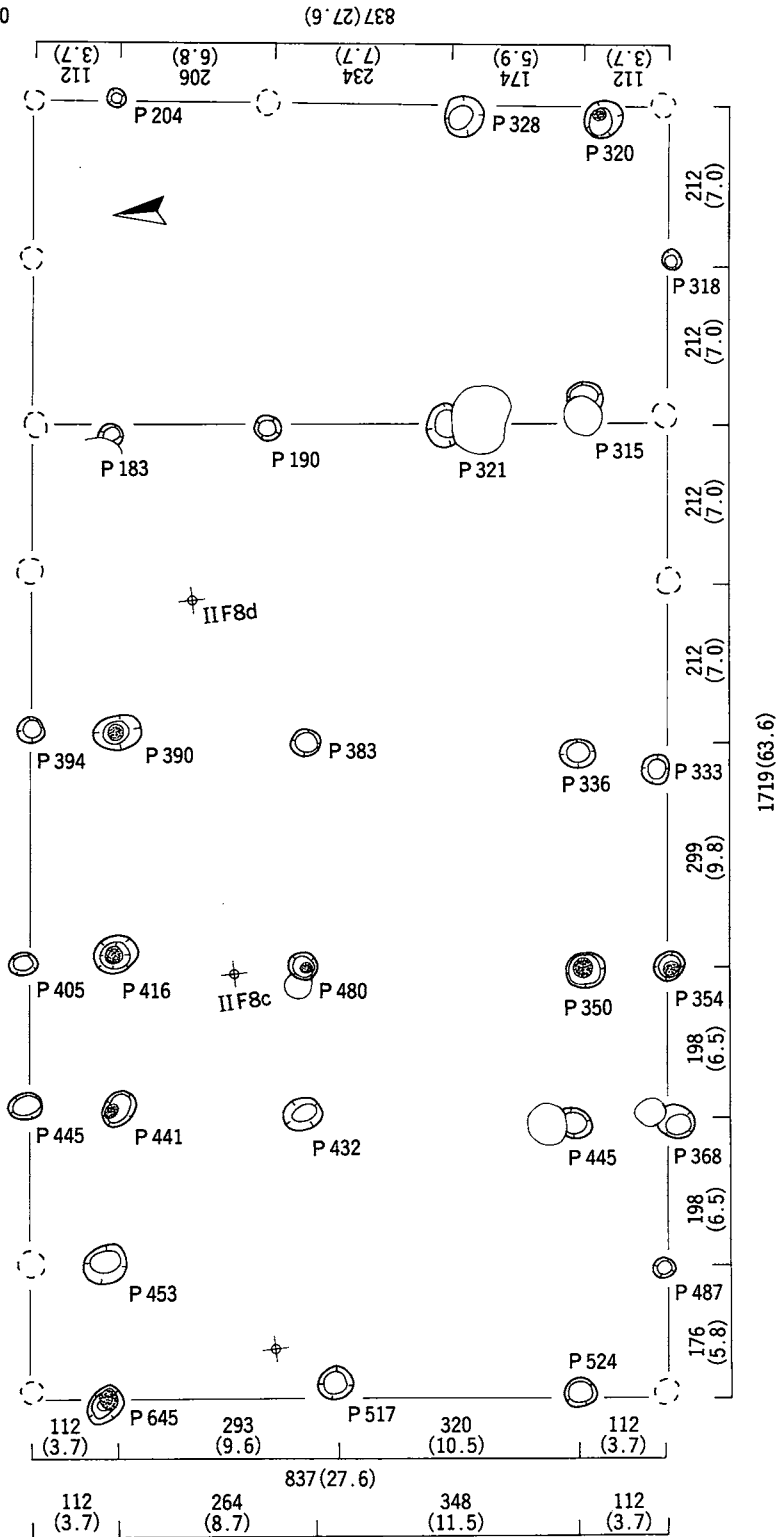


番号	深さ	底面の標高
P446	50	21.66
P401	54	21.58
P396	52	21.60
P176	40	21.73
P459	96	21.10
P443	104	21.12
P427	86	21.30
P393	49	21.62
P397	14	21.92
P186	25	21.80
P227	30	21.81
P218	22	21.88
P203	60	21.52
P456	38	21.62
P418	36	21.71
P386	14	21.92
P378	12	22.04
P191	14	21.95
P468	18	21.66
P496	72	21.30
P358	96	21.08
P343	16	21.76
P316	45	21.65
P326	76	21.24
P308	14	21.84
P469	14	21.74
P372	54	21.46
P356	30	21.65
P334	42	21.50
P314	25	21.78
P312	7	21.92
P342	10	21.80
P330	36	22.08

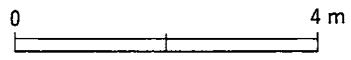


第22図 東側調査区の建物(8) (13SB9)

13SB10



番号	深さ	底面の標高
P445	46	21.70
P405	28	21.84
P394	38	21.73
P645	不明	不明
P453	72	21.38
P441	54	21.62
P416	55	21.57
P390	82	21.26
P183	20	21.96
P204	15	21.92
P517	28	21.48
P432	16	21.94
P480	50	21.56
P383	66	21.44
P190	11	21.96
P321	36	21.66
P328	50	21.50
P524	22	21.44
P445	47	21.66
P350	20	21.78
P336	40	21.55
P315	25	21.75
P320	50	21.42
P487	37	21.58
P368	68	21.30
P354	50	21.44
P333	45	21.44
P318	不明	不明



第23図 東側調査区の建物(9) (13SB10)

西側の空間が常居、土間といった部屋、東側が座敷、納戸といった性格の部屋と想像される。使用した柱穴は28個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はE-6°-Nである。

〔柱間寸法〕様々な寸法が使用されており基準寸法を見つけにくい、6尺5寸(約198cm)と7尺(約212cm)を多用している。

〔出土遺物〕P 416の埋土から煙管の雁首(7121)が出土した。またP 320で柱材が残存していた。樹種はクリである。

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕大きさから母屋と考えられる。

〔年代〕近世の所属である。P 416の埋土から出土した煙管の雁首は古泉弘氏の煙管の形態変遷に当てはめると、その2段階(17世紀前半)に相当する。よって本建物の建築はそれ以降ということになる。推定される年代は17世紀後半である。

### 13 S B 11 (第24図)

〔位置〕IIF 6 b~6 e、IIF 7 b~7 e、IIF 8 b~8 eに位置する。

〔重複〕P 369が13 S B 11の柱穴P 368と重複するが本建物が新しい。また柱穴の直接の重複はないが、13 S B 4、13 S B 5、13 S B 6、13 S B 7、13 S B 8、13 S B 9、13 S B 12、13 S B 13、13 S D 3とプランが重複する。

〔平面形式〕掘立柱建物である。南側では下屋柱が検出されなかったが、上屋柱と下屋柱からなる構造と思われる。下屋柱は掘込みが浅いためか検出できなかったのであろう。桁行は1658cm、梁間は南側の下屋分を想定して864cmである。本建物の基準寸法と考えられる7尺で桁行7.8間、梁間は4間分を数える。面積は約43.4坪である。検出した柱穴から間取りの想定は困難であるが、P 189~P 317の梁間の列は1間おきに柱穴が並び、ここに部屋の境界を設定することができる。本建物より新しい13 S B 9の間取りから類推すると東側が上手、西側が下手で、西側の空間が常居、土間といった部屋、東側が座敷、納戸といった性格の部屋と想像される。使用した柱穴は18個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はE-4°-Nである。

〔柱間寸法〕様々な寸法を使用しており基準寸法を見つけにくい、7尺(約212cm)を多用している。

〔出土遺物〕P 202とP 304で柱材が残存していた。樹種はいずれもクリである。

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕大きさから母屋と考えられる。

〔年代〕17世紀前半の所属と推定される。

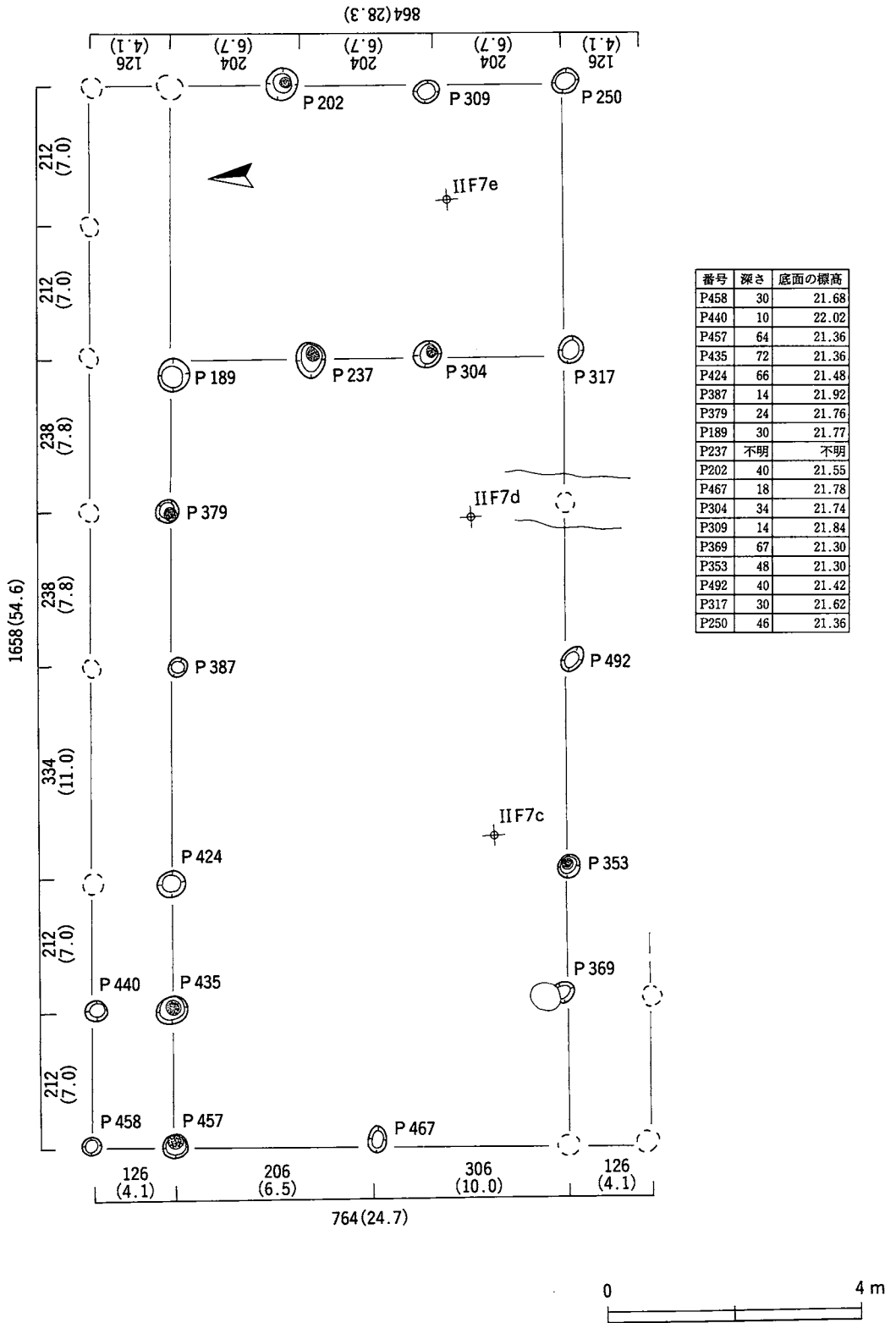
### 13 S B 12 (第25図)

〔位置〕IIF 7 c、7 d、8 c、8 d、9 c、9 dに位置する。

〔重複〕厩のくぼみと重複するが本建物が古い。また柱穴の直接の重複はないが、13 S B 4、13 S B 5、13 S B 6、13 S B 7、13 S B 8、13 S B 9、13 S B 10、13 S B 11、13 S B 12、13 S D 3とプランが重複する。

〔平面形式〕掘立柱建物である。厩のくぼみにより北東側の柱穴が失われているが、桁行は1052cm、梁間は





第24図 東側調査区の建物(10) (13SB11)

422 cm の長方形のプランである。面積は約 13.4 坪である。使用した柱穴は 9 個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向は E - 4° - N である。

〔柱間寸法〕 7 尺 (約 212 cm) が多用されている。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 大きさから付属小屋と考えられる。

〔年代〕 中世末～近世前半の所属と考えられる。

### 13 S B 13 (第 25 図)

〔位置〕 II F 5 d、5 e、6 d、6 e、7 d、7 e に位置する。

〔重複〕 13 S B 10 の柱穴と重複するが本建物が古い。また柱穴の直接の重複はないが、13 S B 9、13 S B 11 とプランが重複する。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は 792 cm、梁間は 488 cm の長方形のプランである。面積は約 11.7 坪である。使用した柱穴は 8 個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向は E - 3° - N である。

〔柱間寸法〕 桁行は 8 尺 7 寸 (約 264 cm) を使用している。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 大きさから付属小屋と考えられる。

〔年代〕 不明である。

### 13 S B 15 (第 25 図)

〔位置〕 II F 4 d、4 e、5 d、5 e に位置する。

〔重複〕 13 S B 17 とプランが重複するが柱穴の直接の切り合いは無く、前後関係は不明である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は 576 cm、梁間は 462 cm の長方形のプランである。面積は約 8.0 坪である。使用した柱穴は 12 個である。

〔建物方位〕 桁行の軸方向は E - 5° - N である。

〔柱間寸法〕 6 尺 3 寸 (約 192 cm) を基準にしているようである。

〔出土遺物〕 P 244、P 248、P 259、P 299 で柱材が残存していた。樹種はいずれもクリである。

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 大きさから付属小屋と考えられる。

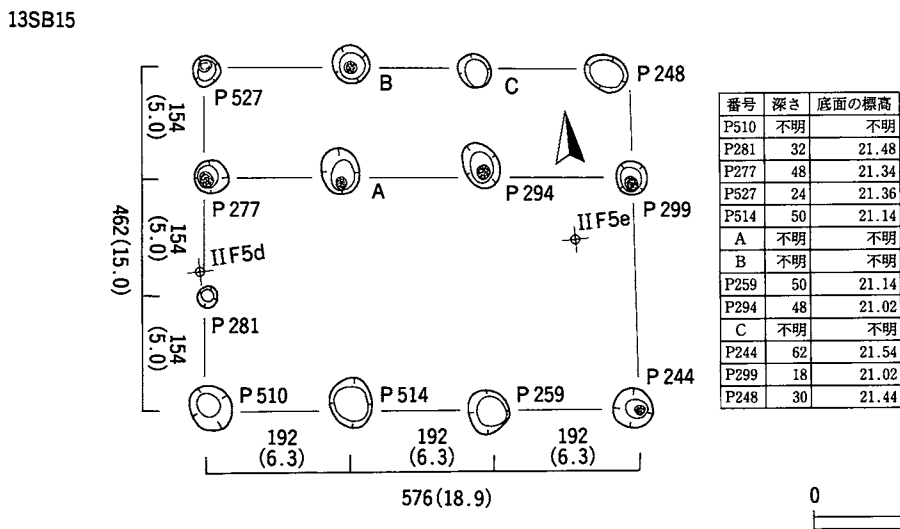
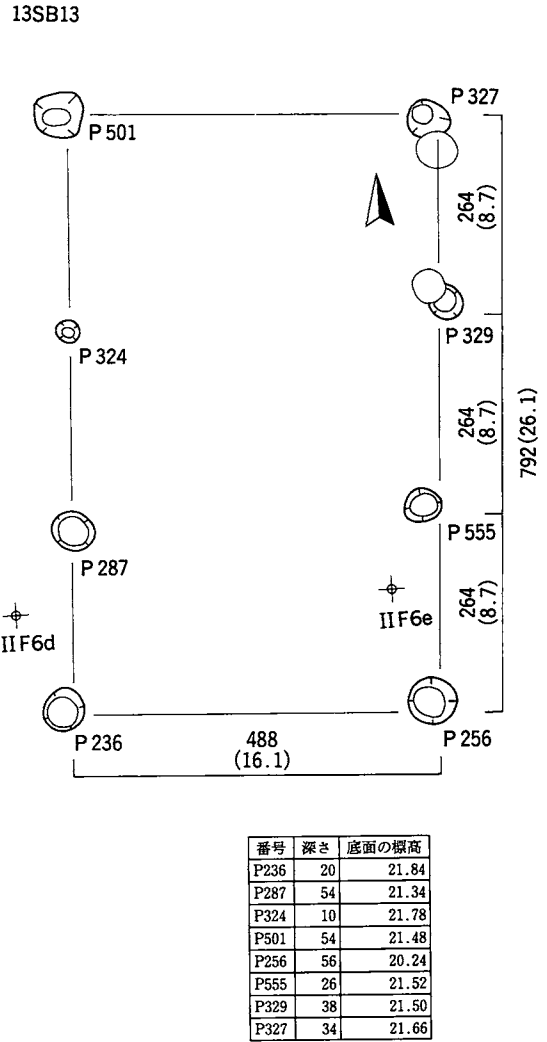
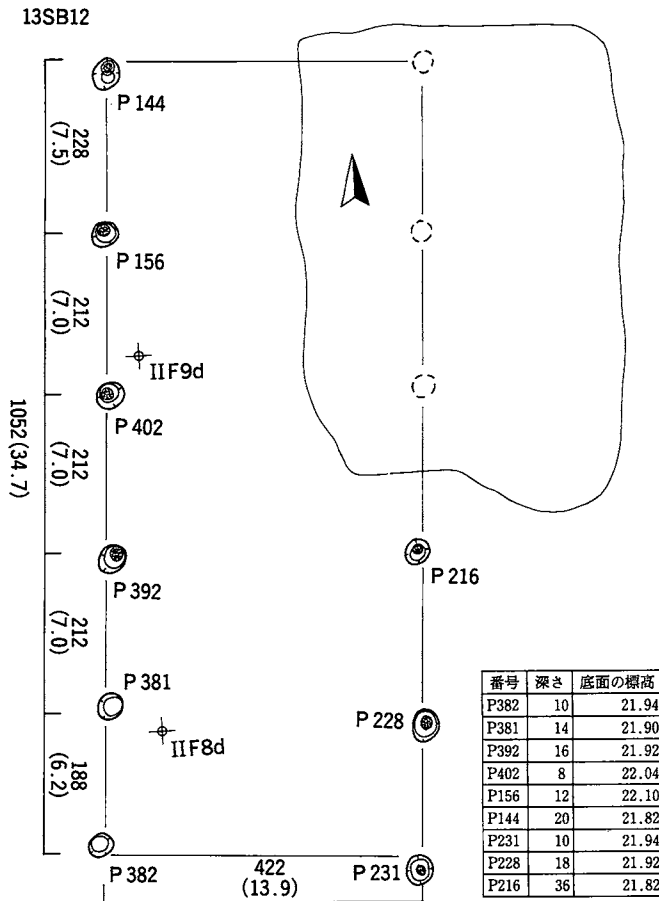
〔年代〕 近世の所属と考えられる。

### 13 S B 17 (第 26 図)

〔位置〕 II F 4 c～4 e、5 c～5 e に位置する。

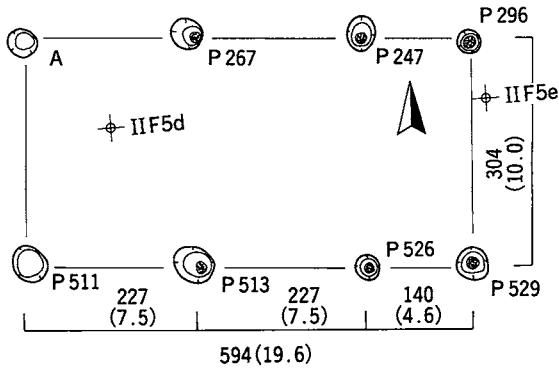
〔重複〕 13 S B 15 とプランが重複するが柱穴の直接の切り合いは無く、前後関係は不明である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は 594 cm、梁間は 304 cm の長方形のプランである。面積は約 5.4 坪である。使用した柱穴は 8 個である。



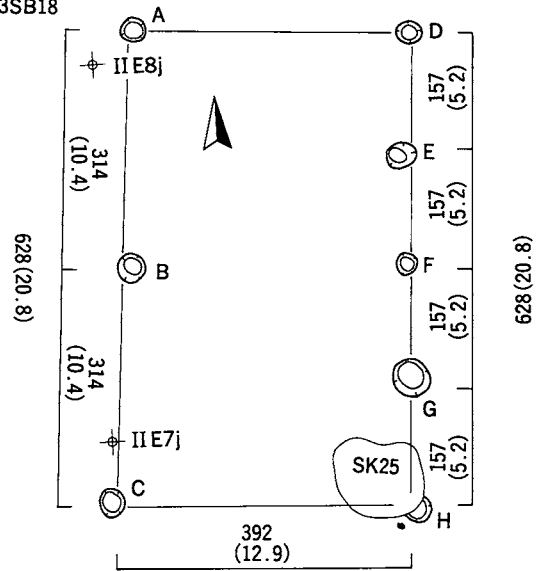
第25図 東側調査区の建物(1) (13SB12、13、15)

13SB17



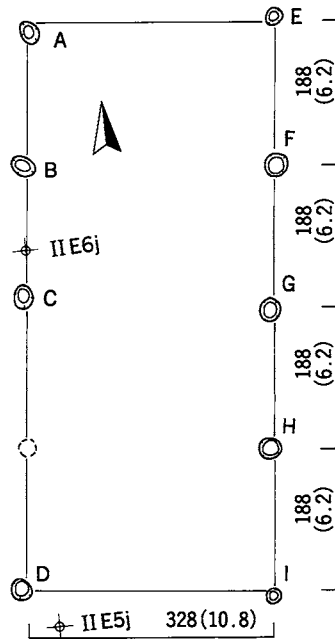
番号	深さ	底面の標高
P511	22	21.50
A	不明	不明
P513	38	21.32
P267	36	21.44
P526	28	21.36
P247	26	21.36
P529	不明	不明
P296	32	21.22

13SB18



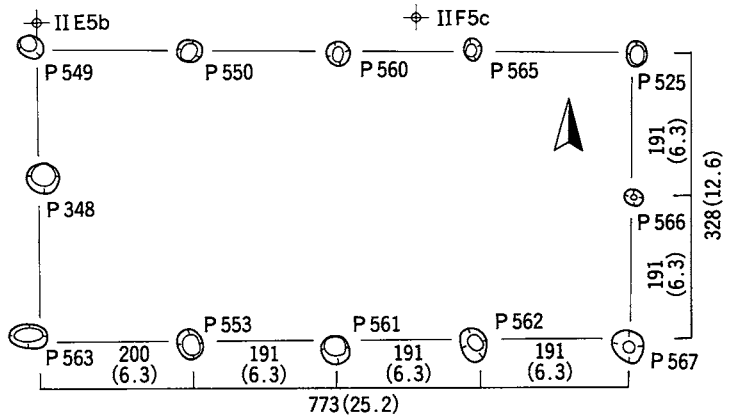
番号	深さ	底面の標高
A	82	20.59
B	31	20.89
C	27	20.93
D	不明	不明
E	18	21.13
F	32	20.90
G	18	21.02
H	32	20.84

13SB19

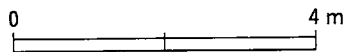


番号	深さ	底面の標高
A	44	20.78
B	70	20.37
C	41	20.56
D	45	20.32
E	33	20.84
F	不明	不明
G	52	20.58
H	33	20.70
I	28	20.57

13SB20



番号	深さ	底面の標高
P563	18	21.16
P348	12	21.86
P549	不明	不明
P553	24	21.28
P550	不明	不明
P561	46	21.04
P560	38	21.30
P562	48	21.06
P565	46	21.22
P567	60	21.00
P566	12	21.56
P525	40	21.38



第26図 東側調査区の建物(12) (13SB17、18、19、20)

〔建物方位〕 桁行の軸方向はE-4°-Nである。

〔柱間寸法〕 7尺5寸（約227cm）を基準にしているようである。

〔出土遺物〕 P 247で柱材が残存していた。樹種はクリである。

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 大きさから付属小屋と考えられる。

〔年代〕 不明である。

### 13 S B 18 (第26図)

〔位置〕 II E 6 j、7 j、8 jに位置する。

〔重複〕 13 S K 25と重複するが本建物が古い

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は628cm、梁間は392cmの長方形のプランである。面積は約7.4坪である。使用した柱穴は8個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向はE-2°-Nである。

〔柱間寸法〕 桁行では5尺2寸（約157cm）を基準にしている。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 大きさから付属小屋と考えられる。

〔年代〕 近世の所属と考えられる。

### 13 S B 19 (第26図)

〔位置〕 II E 5 j、6 jに位置する。

〔重複〕 なし

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は752cm、梁間は328cmの長方形のプランである。面積は約7.5坪である。使用した柱穴は9個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向はE-4°-Nである。

〔柱間寸法〕 6尺2寸（約188cm）を基準にしている。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 大きさから付属小屋と考えられる。

〔年代〕 近世の所属と考えられる。

### 13 S B 20 (第26図)

〔位置〕 II F 4 b、4 cに位置する。

〔重複〕 なし

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は773cm、梁間は382cmの長方形のプランである。面積は約8.9坪である。使用した柱穴は12個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向はE-1°-Nである。

〔柱間寸法〕 6尺3寸（約191cm）を基準にしている。



〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕大きさから付属小屋と考えられる。

〔年代〕近世の所属と考えられる。

### 13 S B 21 (第 27 図)

〔位置〕IID 6 j、IIE 6 a～6 c、IID 7 j、IIE 7 a～7 c に位置する。

〔重複〕P 628、P 624、P 634、P 827 が 13 S B 24 の柱穴 P 631、P 625、P 635、P 826 とそれぞれ重複するが本建物が古い。また P 626、P 693、P 770 が 13 S B 22 の柱穴 P 627、P 692、P 771 とそれぞれ重複するが本建物が新しい。13 S B 23 は 13 S B 22 より古いので本建物より古い。また P 632、P 619、P 726 が 13 S B 26 の柱穴 P 633、P 620、P 727 とそれぞれ重複するが本建物が新しい。また P 619 が 13 S B 25 の柱穴 P 621 と重複するが本建物が新しい。P 1016 は 13 S D 25 より古い。P 807、P 808 は 13 S K 56 より古い。P 648 は 13 S D 26 より古い。P 942 は 13 S E 3 と重複するが前後関係を把握できなかった。

〔平面形式〕掘立柱建物である。上屋柱と下屋柱からなる構造である。南西隅付近は確認面を下げすぎて検出できなかった柱穴がある。また下屋柱は掘込みが浅いためか検出できなかったものもある。桁行は 1924 cm、梁間は 801 cm と推定される。本建物の基準寸法と考えられる 6 尺 6 寸で桁行 9.6 間、梁間は 4 間分を数える。面積は約 46.7 坪である。間取りを判断するのは難しいが一応想定してみた。東側が上手、西側が下手になると思われる。上手は納戸と座敷といった部屋と思われるが、本建物では納戸らしい部屋が南側にある。通常納戸は建物の背面に配されるが普通であるので本建物は北側が前面の可能性も考えられる。また中の部屋は南側と北側で 2 室に分けられる。下手は土間と想定される。土間は建物の半分以上の面積を占める。土間には 10 本の上屋柱が立っていたと考えられる。使用した柱穴は 40 個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向は E - 4° - N である。

〔柱間寸法〕6 尺 6 寸 (約 200 cm) を基準にしているようである。

〔出土遺物〕P 632 で柱材が残存していた。樹種はクリである。

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕大きさから母屋と考えられる。

〔年代〕近世の所属である。他の重複関係にある母屋の年代観を考え合わせると本建物は 18 世紀前半の所属と推定される。

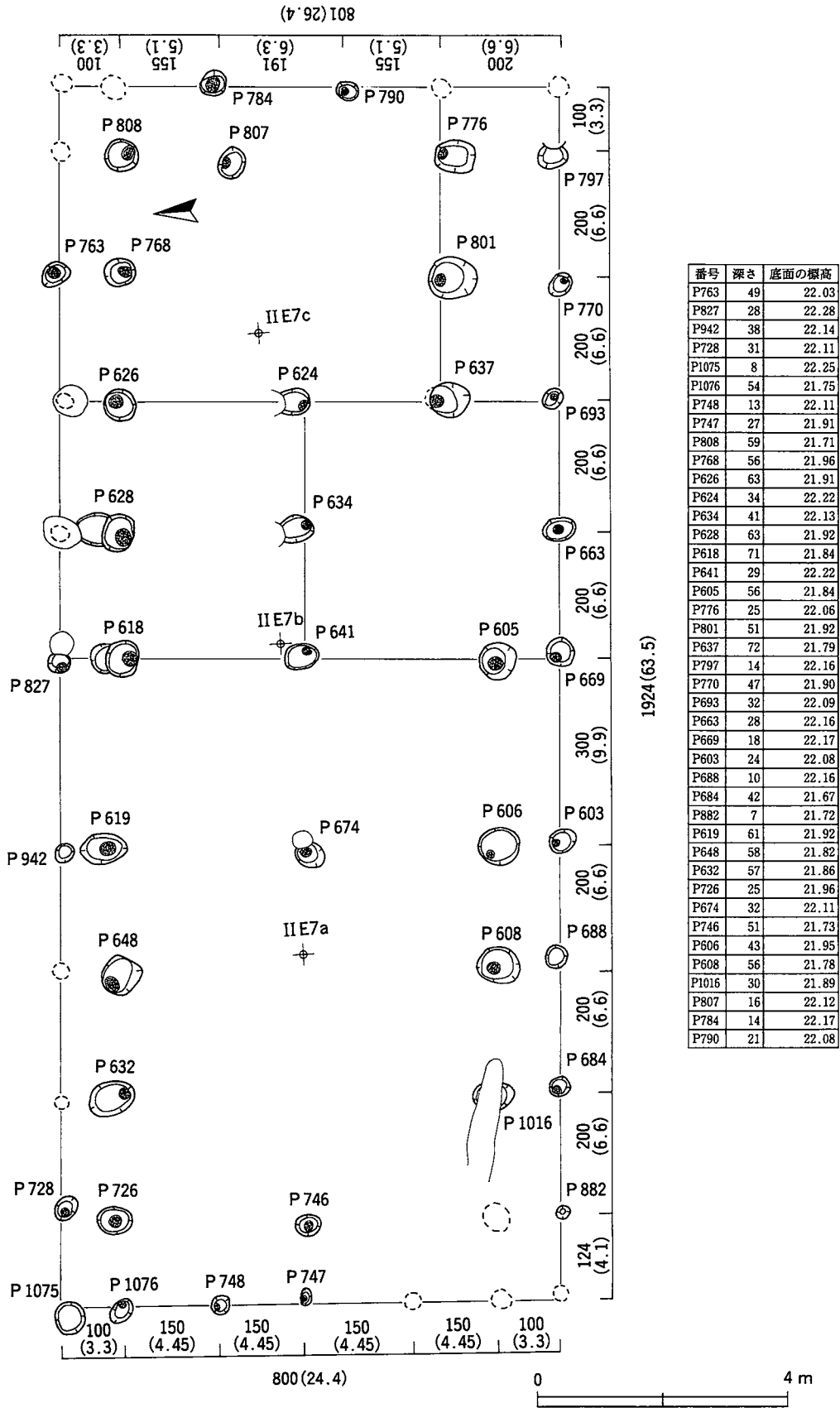
### 13 S B 22 (第 28 図)

〔位置〕IID 6 j、IIE 6 a～6 c、IID 7 j、IIE 7 a～7 c に位置する。

〔重複〕P 627、P 692、P 771 が 13 S B 21 の柱穴 P 626、P 693、P 770 とそれぞれ重複するが本建物が古い。P 715、P 683、P 737、P 771 が 13 S B 23 の柱穴 P 694、P 682、P 736、P 772 とそれぞれ重複するが本建物が新しい。また P 699 が 13 S B 26 の柱穴 P 700 と重複するが本建物が新しい。また P 619 が 13 S B 25 の柱穴 P 621 と重複するが本建物が新しい。P 805、P 806 は 13 S K 56 より古い。

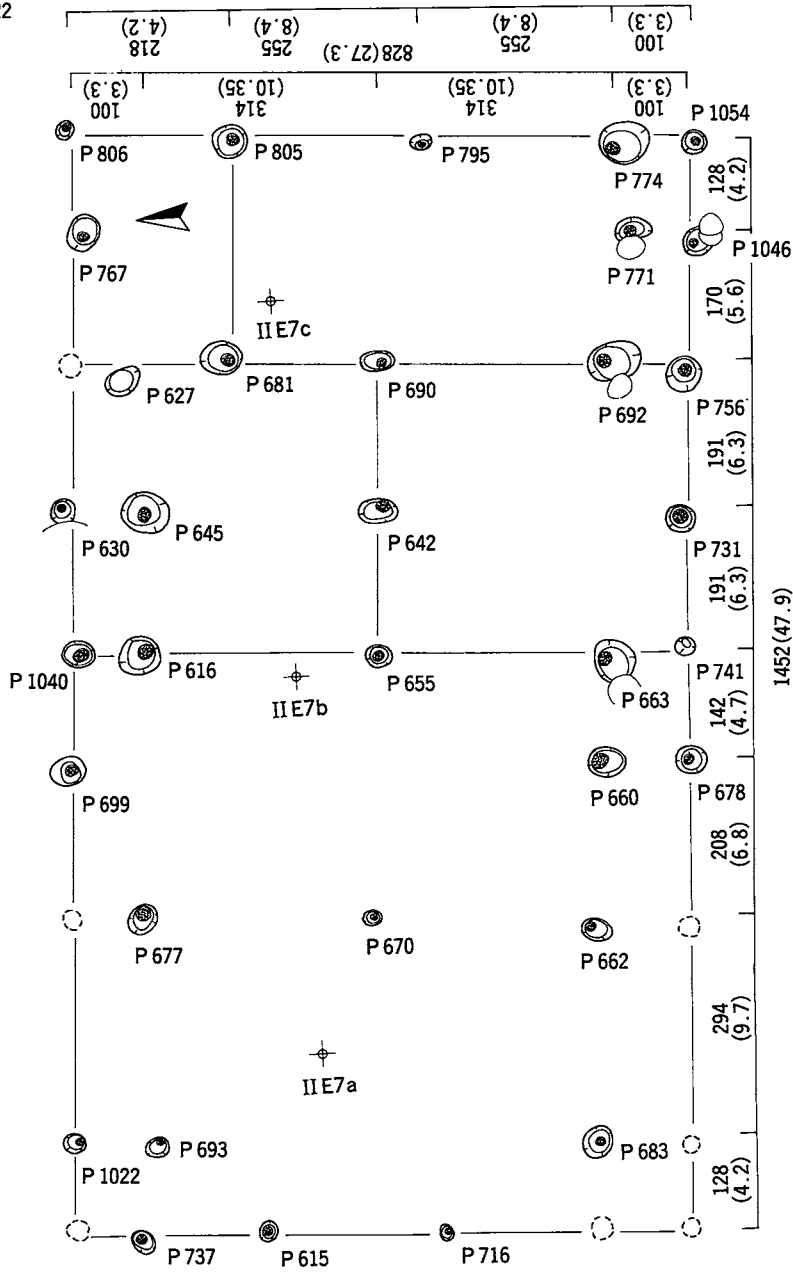
〔平面形式〕掘立柱建物である。上屋柱と下屋柱からなる構造である。下屋柱は掘込みが浅いためか検出できなかったものもある。桁行は 1452 cm、梁間は 828 cm と推定される。面積は約 36.4 坪である。想定した間取りは東側が上手、西側が下手である。上手は北側が納戸、南側が座敷といった部屋と推定される。また

13SB21

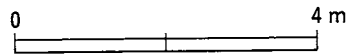


番号	深さ	底面の標高
P763	49	22.03
P827	28	22.28
P942	38	22.14
P728	31	22.11
P1075	8	22.25
P1076	54	21.75
P748	13	22.11
P747	27	21.91
P808	59	21.71
P768	56	21.96
P626	63	21.91
P624	34	22.22
P634	41	22.13
P628	63	21.92
P618	71	21.84
P641	29	22.22
P605	56	21.84
P776	25	22.06
P801	51	21.92
P637	72	21.79
P797	14	22.16
P770	47	21.90
P693	32	22.09
P663	28	22.16
P669	18	22.17
P603	24	22.08
P688	10	22.16
P684	42	21.67
P882	7	21.72
P619	61	21.92
P648	58	21.82
P632	57	21.86
P726	25	21.96
P674	32	22.11
P746	51	21.73
P606	43	21.95
P608	56	21.78
P1016	30	21.89
P807	16	22.12
P784	14	22.17
P790	21	22.08

第27図 東側調査区の建物(13) (13SB21)



番号	深さ	底面の標高
P806	16	22.13
P767	53	21.98
P630	40	22.16
P1040	23	22.34
P699	44	22.10
P1022	38	22.05
P805	68	21.62
P795	2	22.31
P774	58	21.80
P1054	43	21.86
P1046	17	22.20
P756	42	21.97
P731	52	21.89
P741	20	21.98
P678	38	21.91
P627	44	22.10
P681	47	22.01
P690	36	22.17
P692	75	21.66
P645	56	21.98
P642	43	22.12
P616	74	21.80
P655	11	22.37
P663	45	21.93
P660	54	21.81
P662	49	21.85
P683	29	21.94
P670	22	22.22
P677	65	21.90
P693	30	22.06
P737	29	21.87
P615	12	22.16
P716	12	22.10
P771	28	22.11



第28図 東側調査区の建物(14) (13SB22)

中の部屋は南側と北側で2室に分けられる。常居的な部屋であろう。下手は土間と想定される。土間は建物の半分以上の面積を占める。土間には6本の上屋柱が立っていたと考えられる。使用した柱穴は34個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はE-4°-Nである。

〔柱間寸法〕様々な寸法が使用されており、基準寸法を見いだすことができない。

〔出土遺物〕P 616の掘方中から瀬戸・美濃産の鉄釉が施された陶器碗(6342)が出土した。またP 677の掘方中から美濃産の長石釉に鉄絵が施された陶器皿(6363)が出土した。

P 85、P 86、P 90、P 113、P 148、P 149、P 155、P 160で柱材が残存していた。樹種はいずれもクリである。

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕大きさから母屋と考えられる。

〔年代〕近世の所属である。P 616の掘方中から出土した瀬戸・美濃産の陶器碗は17世紀第4四半期の製作年代である。本建物はこれより新しい時期の建築と思われる。そして他の重複関係にある母屋と思われる建物の年代観から推定して本建物は17世紀末から18世紀初頭の所属と推定される。

### 13 S B 23 (第29図)

〔位置〕IID 6 j、IIE 6 a～6 c、IID 7 j、IIE 7 a～7 cに位置する。

〔重複〕P 694、P 682、P 736、P 772が13 S B 22の柱穴P 715、P 683、P 737、P 771とそれぞれ重複するが本建物が古い。またP 977が13 S E 3と重複するが本建物が古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。上屋柱と下屋柱からなる構造である。下屋柱は掘込みが浅いためか検出できなかったものもある。桁行は1599 cm、梁間は856 cmと推定される。面積は約41.4坪である。検出した柱穴から間取りの想定は困難であるが、P 817～P 802の梁間の列は1間おきに柱穴が並び、ここに部屋の境界を設定することができる。本建物より新しい13 S B 21、13 S B 22の間取りから類推すると東側が上手、西側が下手で、西側の空間が常居、土間といった部屋、東側が座敷、納戸といった性格の部屋と想像される。使用した柱穴は30個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はE-4°-Nである。

〔柱間寸法〕様々な寸法が使用されているが、7尺6寸5分(約232 cm)が多用されている。

〔出土遺物〕P 667の掘方中から美濃産の長石釉が施された陶器皿(6360)が出土した。

P 85、P 86、P 90、P 113、P 148、P 149、P 155、P 160で柱材が残存していた。樹種はいずれもクリである。

〔付属施設〕なし

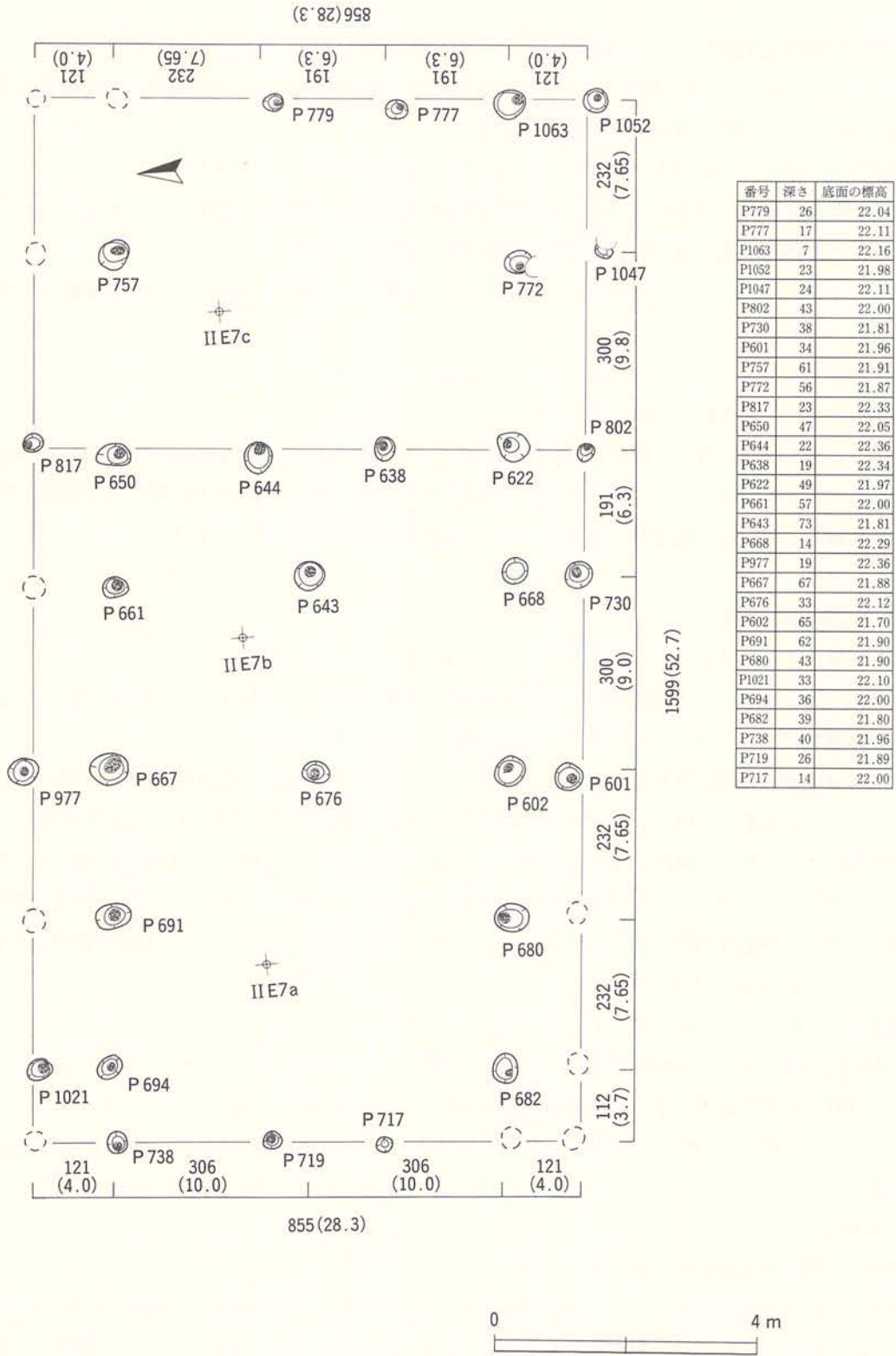
〔建物の性格〕大きさから母屋と考えられる。

〔年代〕近世の所属である。P 667の掘方中から出土した美濃産の陶器皿は17世紀前半の製作年代である。本建物はこれより新しい時期の建築である。そして他の重複関係にある母屋と思われる建物の年代観から推定して本建物は17世紀中葉の所属と推定される。

### 13 S B 24 (第30図)

〔位置〕IID 7 j、IIE 7 a、7 b、IID 8 j、IIE 8 a、8 bに位置する。

〔重複〕P 631、P 625、P 635、P 826が13 S B 21の柱穴P 628、P 624、P 634、P 827とそれぞれ重複



第29図 東側調査区の建物(15) (13SB23)



するが本建物が新しい。

またP 931 が 13 S B 25 の柱穴と重複するが本建物が新しい。またP 1036 が 13 S K 46 と重複するがおそらく本建物が古い。

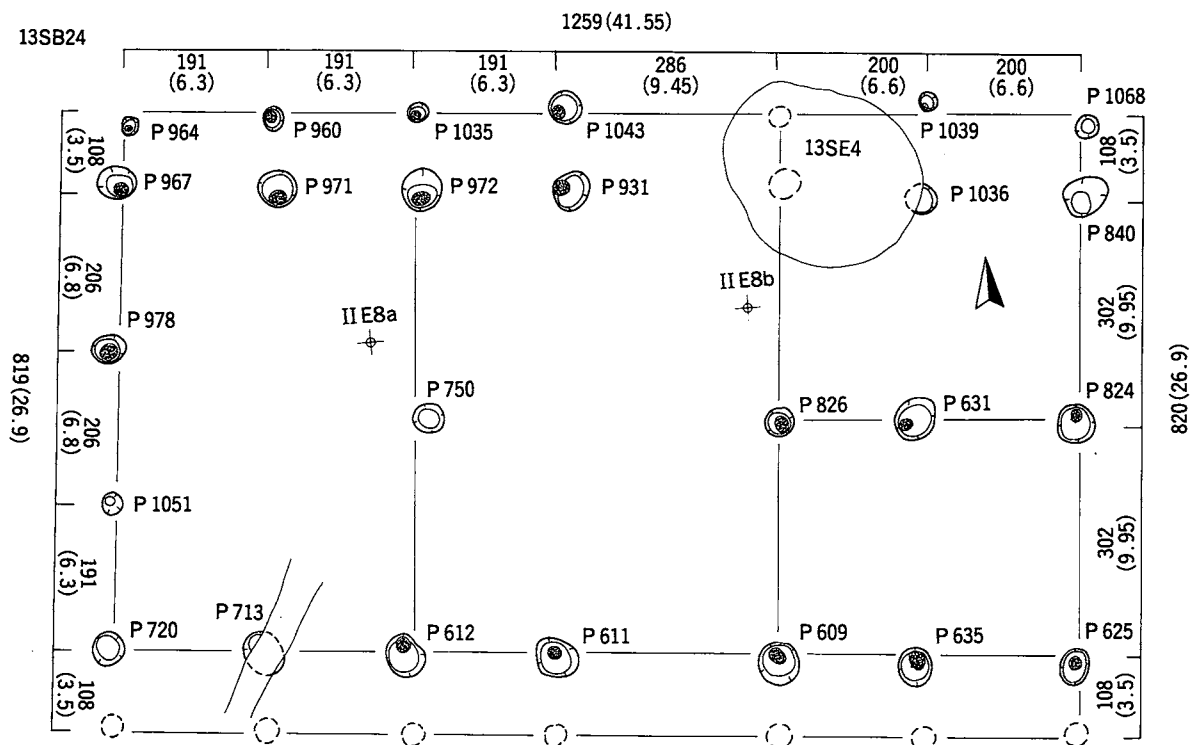
〔平面形式〕 掘立柱建物である。北側に半間の下屋？が付く。南側では1個も下屋柱を検出できなかったが本来はあった可能性が高い。南側は北側より検出面の標高が低いため検出できなかったのであろうか。桁行は1259 cm、梁間は南側の下屋を想定して819 cmと推定される。本建物の基準寸法と考えられる6尺3寸で桁行6.6間、梁間は4.3間を数える。面積は約31.2坪である。想定した間取りは東側が上手、西側が下手である。上手は北側が納戸、南側が座敷といった部屋と推定される。また中の部屋は常居的な部屋であろう。下手は土間と想定される。使用した柱穴は25個である。

〔建物方位〕 桁行の軸方向はE-6°-Nである。

〔柱間寸法〕 6尺3寸(約191 cm)が多用されている。

〔出土遺物〕 P 631 で柱材が残存していた。樹種はクリである。

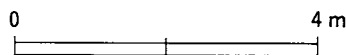
〔付属施設〕 なし



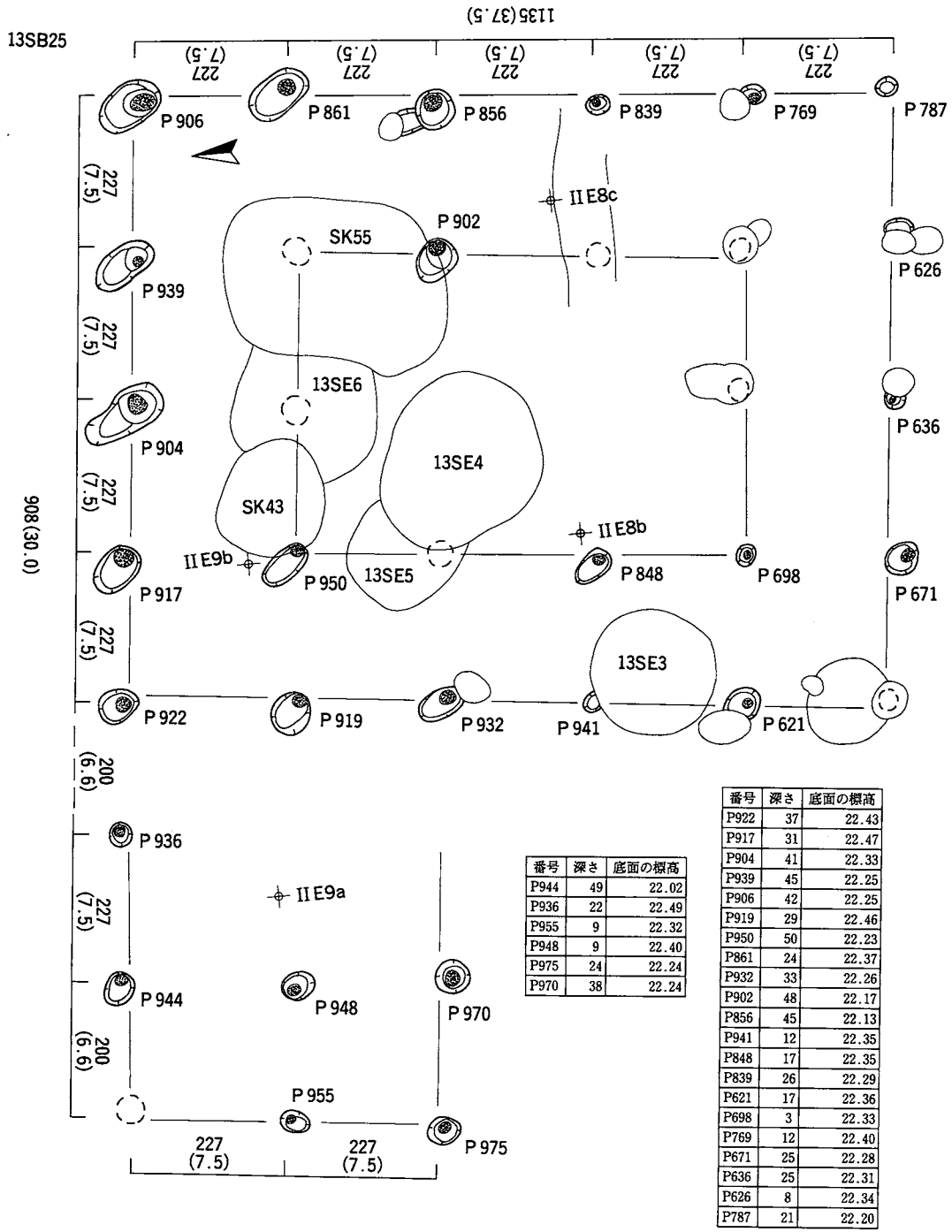
番号	深さ	底面の標高
P964	36	22.20
P960	41	22.24
P1035	17	22.50
P1043	17	22.44
P1039	11	22.53
P1068	8	22.56
P720	37	21.93
P713	16	22.15
P612	32	22.11

番号	深さ	底面の標高
P611	45	22.04
P609	37	22.18
P635	37	22.18
P625	46	22.14
P967	39	22.16
P978	31	22.16
P1051	5	22.33
P971	44	22.19

番号	深さ	底面の標高
P972	46	22.17
P750	22	22.28
P931	41	22.24
P1036	60	22.04
P826	32	22.25
P631	33	22.24
P840	43	22.21
P824	42	22.14



第30図 東側調査区の建物(16) (13SB24)



第31図 東側調査区の建物1f) (13SB25)

〔建物の性格〕 大きさから付属屋とは考えがたいが、重複関係にある 13 S B 21、21、23 より一回り小さい建物である。15 S B 1 と同時存在とあるとすれば、15 S B 1 が本屋で本建物は隠居屋と推定される。隠居屋とは敷地内に別棟として造った、家督を譲った老夫婦の居住棟を指す呼称である。

〔年代〕 近世の所属である。そして他の重複関係にある母屋と思われる建物の年代観から推定して本建物は 18 世紀後半の所属と推定される。

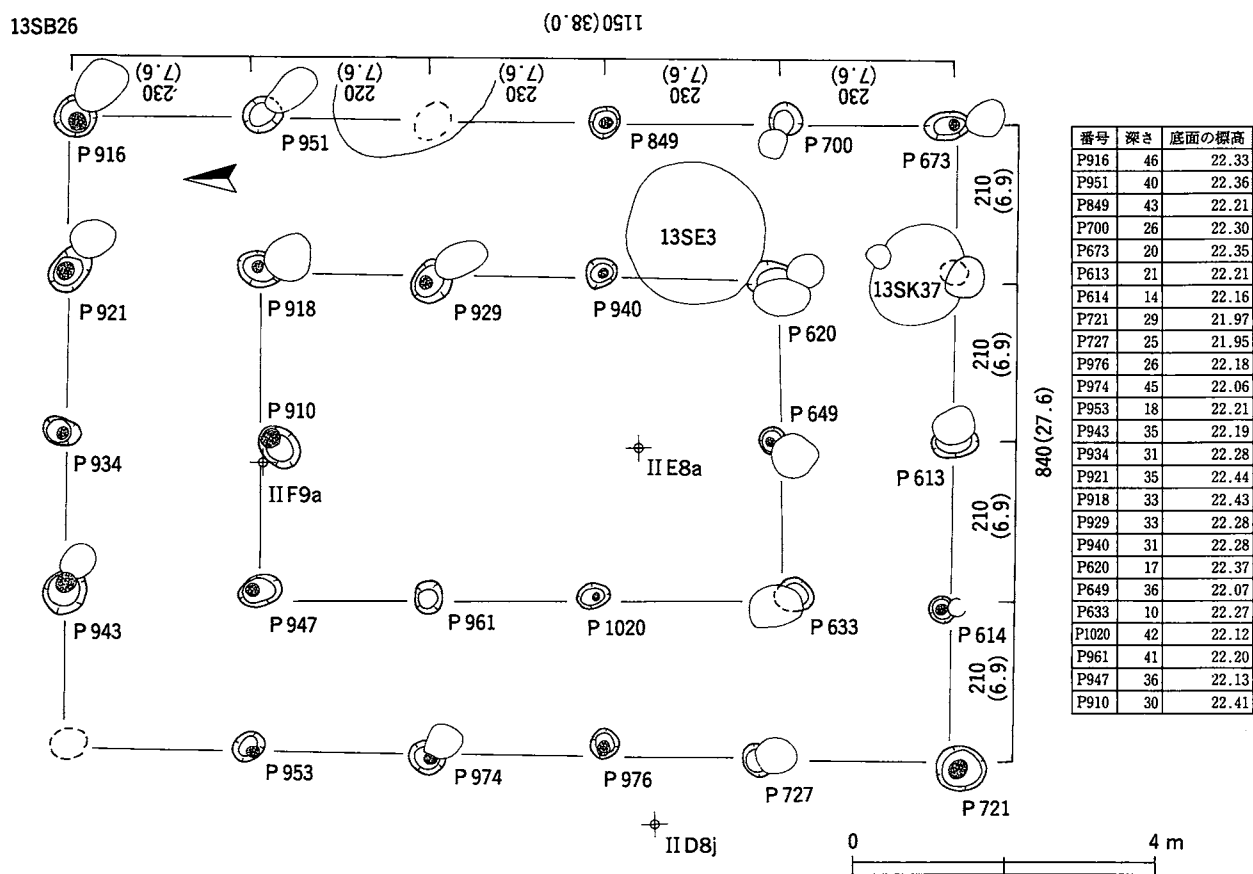
### 13 S B 25 (第 31 図)

〔位置〕 II E 7 a ~ 7 c、II E 8 a ~ 8 c、II E 9 a ~ 9 c に位置する。

〔重複〕 P 917、P 922、P 950、P 919、P 932、P 621、P 671 が 13 S B 26 の柱穴 P 916、P 921、P 931、P 918、P 929、P 620、P 673 とそれぞれ重複するが本建物が新しい。また P 626、P 636 がそれぞれ 13 S B 24 の柱穴 P 625、P 635 と重複するが本建物が古い。また 13 S E 3、13 S K 37、13 S K 47、13 S K 50、13 S K 55、13 S D 26、13 S D 27 は本建物より新しい。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。身舎に四面廂が付く形態である。身舎は 2 間 × 3 間で、廂を含めた長さは桁行 1135 cm、梁間は 908 cm である。面積は約 31.2 坪である。使用した柱穴は 21 個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向は E - 6° - N である。



第32図 東側調査区の建物(10) (13SB26)

〔柱間寸法〕 7尺5寸（約227cm）を基準にしている。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 本建物の西側に、同じ軸で柱穴が6個検出されている。本建物を構成する一部分の可能性も考えられるため図示した。

〔建物の性格〕 不明であるが、大きさから単なる付属小屋とは考えられない。

〔年代〕 12世紀の所属である。重複関係にある13SB26も12世紀の所属であるがこれよりは新しい。

### 13SB26（第32図）

〔位置〕 IID7j～9j、IIE7a～9aに位置する。

〔重複〕 P633、P620、P727が13SB21の柱穴P632、P619、P726とそれぞれ重複するが本建物が古い。またP916、P921、P913、P918、P929、P620、P673が13SB25の柱穴P917、P922、P950、P919、P932、P621、P671とそれぞれ重複するが本建物が古い。またP613が13SB24の柱穴P612と、P700が13SB22の柱穴P699と重複するが本建物が古い。P929は13SD26より古い。また13SK37は本建物より新しい。13SK49とはプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。北西隅の柱を検出できなかったが、身舎に四面廂が付く形態である。身舎は2間×3間で、廂を含めた長さは桁行1150cm、梁間は840cmである。面積は約29.2坪である。使用した柱穴は26個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向はE-3°-Nである。

〔柱間寸法〕 梁間では6尺9寸（約210cm）、桁行では7尺6寸（約230cm）を使用している。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 不明であるが、大きさから単なる付属小屋とは考えられない。

〔年代〕 12世紀の所属である。重複関係にある13SB25も12世紀の所属であるが、これよりは古い。

### 13SB27（第33図）

〔位置〕 IIE8a～8d、IIE9a～9dに位置する。

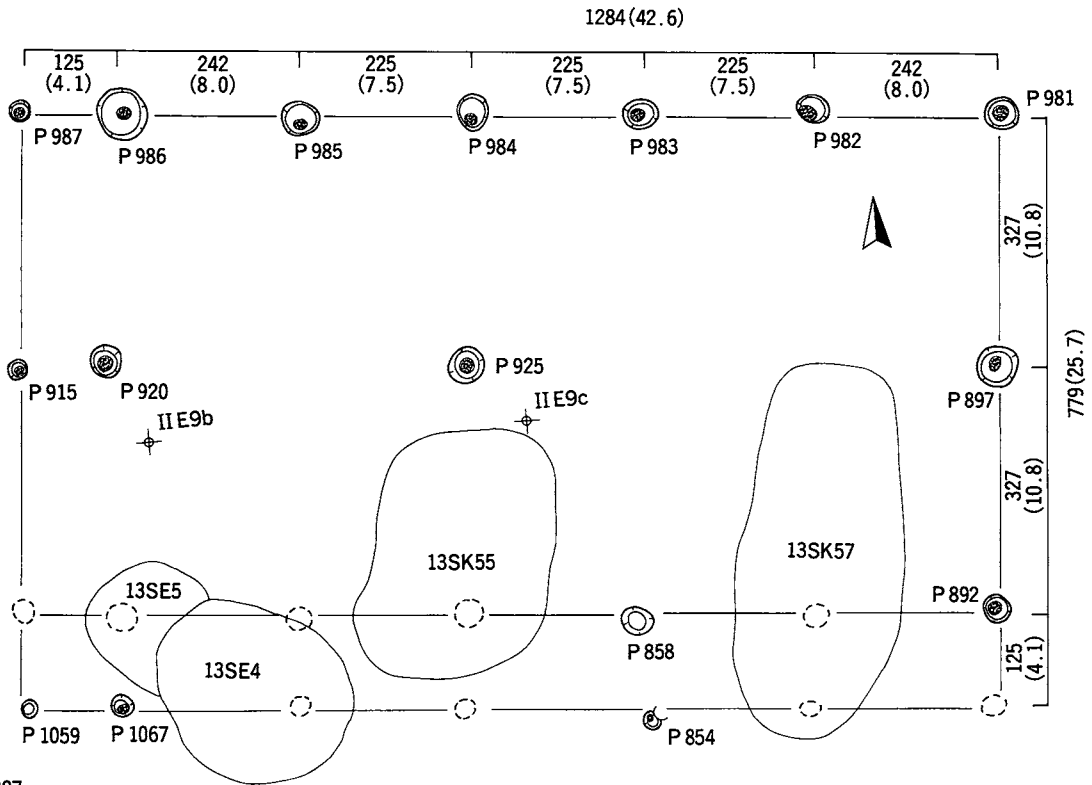
〔重複〕 P858が13SB25の柱穴P857と重複するが本建物が新しい。また本建物は13SK57、13SK46、13SK47、13SK55より古いと考えられる。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。南側に半間の下屋が付く。北側では1個も下屋柱を検出できなかったが本来はあった可能性が高い。北側部分は畑の耕作のために確認面が南側より一段下がっていたため、検出できなかったのであろう。桁行は1284cm、梁間は南側の下屋を想定して779cmと推定される。本建物の基準寸法と考えられる7尺5寸で桁行5.7間、梁間は3.5間を数える。面積は約30.3坪である。間取りを想定するのは困難であるが、P925の存在から西側と東側の2室に分けられる可能性が高い。使用した柱穴は15個である。

〔建物方位〕 桁行の軸方向はE-5°-Nである。

〔柱間寸法〕 7尺5寸（約225cm）を基準にしているようである。

〔出土遺物〕 なし

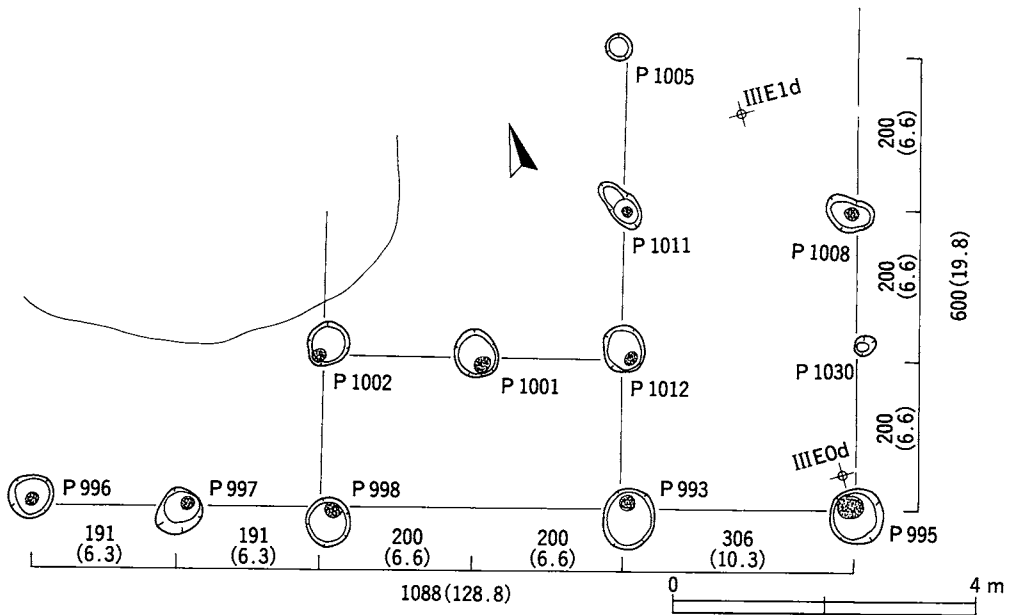


13SB27

番号	深さ	底面の標高	番号	深さ	底面の標高
P987	11	22.46	P892	20	22.25
P986	23	22.36	P858	21	22.36
P985	9	22.48	P854	11	22.48
P984	11	22.46	P1067	12	22.57
P983	19	22.40	P1059	7	22.60
P982	18	22.35	P915	14	22.66
P981	8	22.45	P920	24	22.56
P897	29	22.26	P925	22	22.47

13SB28

番号	深さ	底面の標高
P996	11	22.40
P997	24	22.34
P998	24	22.35
P993	27	22.30
P995	21	22.34
P1030	40	22.15
P1008	28	22.45
P1002	19	22.39
P1001	24	22.33
P1012	11	22.48
P1011	2	22.37
P1005	3	22.47



第33図 東側調査区の建物(19) (13SB27、28)

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕大きさから母屋と考えられる。

〔年代〕17世紀前半の建物と推定される。

### 13 S B 28 (第33図)

〔位置〕III E 0 a～0 d、III E 1 c～1 dに位置する。

〔重複〕P 993が13 陥し穴2と重複するが本建物が新しい。また本建物は13 S K 52より古い。

〔平面形式〕掘立柱建物である。調査区域外にプランが伸びるため全体形は不明である。確認できた分では桁行は1088 cm、梁間は600 cmである。本建物の基準寸法と考えられる6尺6寸で桁行5.9間、梁間は3間分を数える。全体のプランが検出されていないため間取りの想定は困難であるが、大きく3つの空間に分けられ、真中の空間は前と後ろで2つ以上の部屋に分けられるようである。使用した柱穴は12個である。

〔建物方位〕桁行の軸方向はE-16°-Nである。

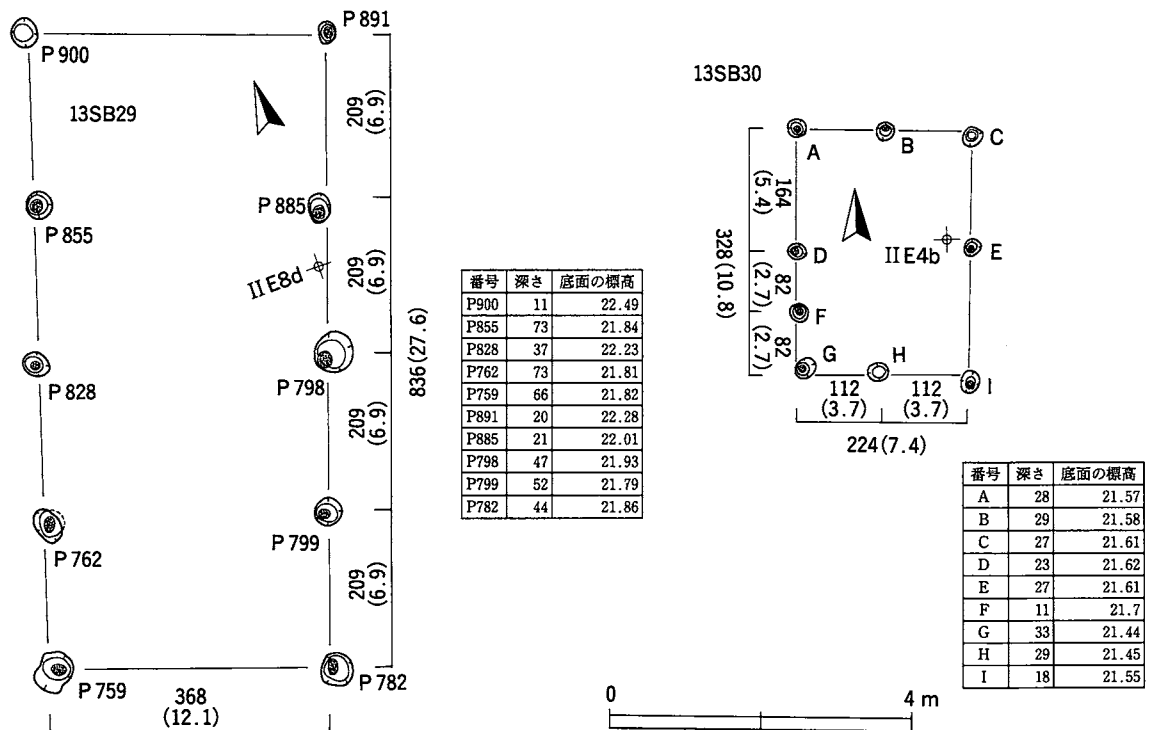
〔柱間寸法〕6尺6寸(約200 cm)を基準にしているようである。また6尺3寸(約191 cm)も使用されている。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕大きさから付属屋とは考えがたいが、他の母屋と考えられる建物より一回り小さい建物と推定される。11 S B 4と同時存在とあるとすれば、11 S B 4が本屋で本建物は隠居屋と推定される。

〔年代〕近世の所属である。そして他の重複関係にある母屋と思われる建物の年代観から推定して本建物は19世紀前半の所属と推定される。



第34図 東側調査区の建物(20) (13SB29、30)



### 13 S B 29 (第 34 図)

〔位置〕 II E 7 c、II E 8 c に位置する。

〔重複〕 P 782 が 13 S K 56 と、P 798、P 799 が 13 S K 38 と、P 885 が 13 S K 41 と重複するが本建物が古い。また 13 S B 21、13 S B 22、13 S B 23 とプランが重複するが直接重複する柱穴が無く前後関係を判断できない。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は 836 cm、梁間は 368 cm である。本建物の基準寸法と考えられる 6 尺 9 寸で桁行 4 間、梁間は 1.7 間を数える。面積は約 9.3 坪である。使用した柱穴は 10 個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向は E-19°-N である。

〔柱間寸法〕 6 尺 9 寸 (約 219 cm) を基準にしている。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 大きさから付属小屋と考えられる。

〔年代〕 近世の所属と考えられる。

### 13 S B 30 (第 34 図)

〔位置〕 II E 3 a、3 b、II E 4 a、4 b に位置する。

〔重複〕 本建物のプラン内に 13 S K 40 があるが、直接重複する柱穴がなく前後関係は不明である。同時存在の可能性もある。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。小規模な建物であり桁行は 328 cm、梁間は 224 cm である。面積は約 2.2 坪である。使用した柱穴は 9 個である。

〔建物方位〕 桁行の軸方向は E-1°-N である。

〔柱間寸法〕 桁行では 5 尺 4 寸 (約 164 cm)、梁間で 3 尺 7 寸 (約 112 cm) を使用している。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 プラン内に 13 S K 40 があり、本建物に伴う可能性もある。

〔建物の性格〕 大きさから付属小屋と考えられる。

〔年代〕 近世の所属と思われる。

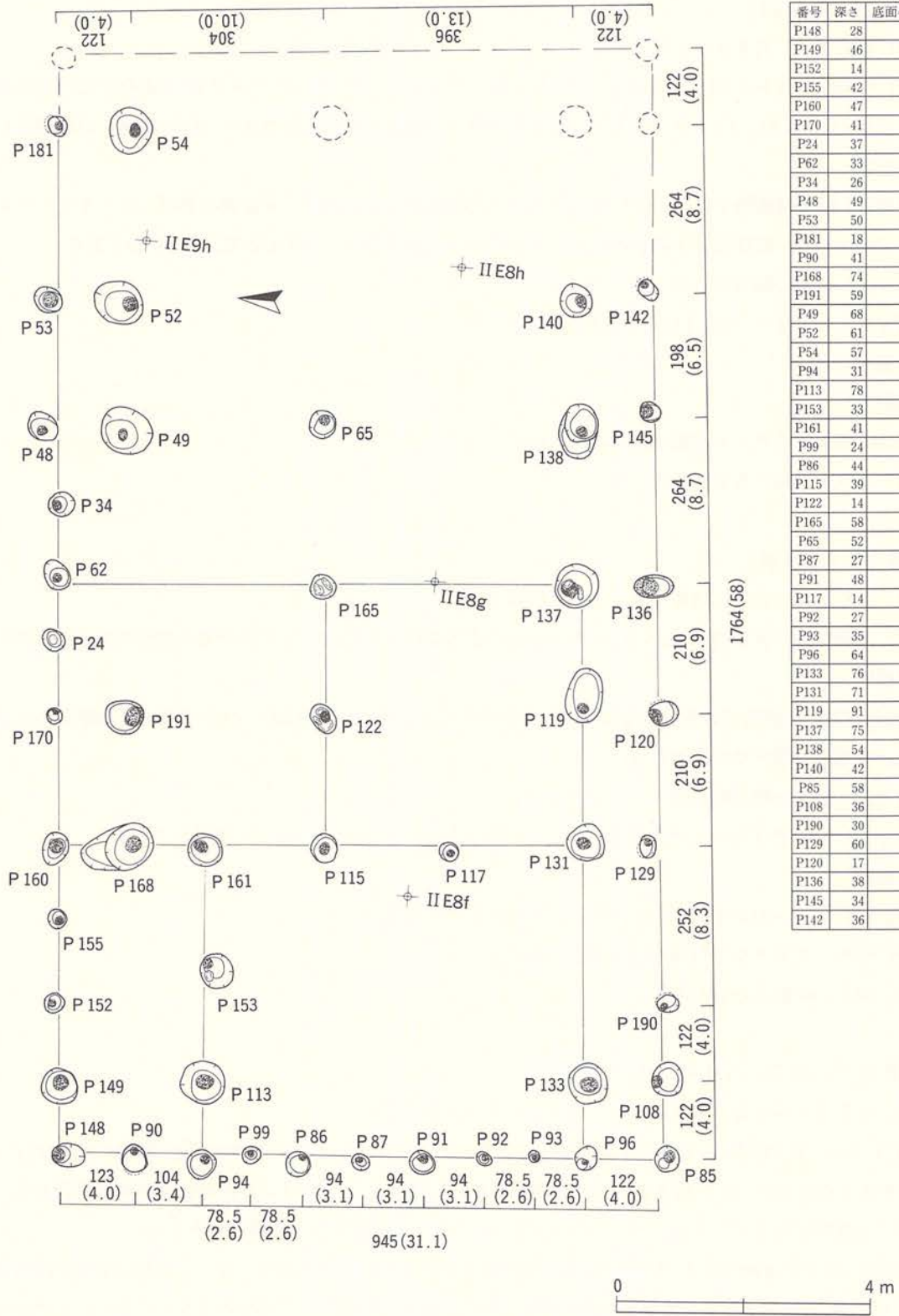
### 15 S B 1 (第 35 図、写真図版 16)

〔位置〕 II E 7 e~7 h、8 e~8 h、9 e~9 h に位置する。

〔重複〕 P 190、P 129 が 15 S B 3 の柱穴 P 110、P 128 とそれぞれ重複するが本建物が新しい。また P 122 が 15 S B 4 の柱穴 P 121 と重複するが本建物が新しい。15 S B 2 とはプランが重複するが直接切り合う柱穴が無く前後関係は不明である。そして P 191 が 15 S E 1 と重複するが本建物が新しい。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。東側の柱穴は確認面を下げすぎたため検出できなかったが、桁行は 1764 cm、梁間は 944 cm と推定される。面積は約 50.4 坪である。構造は上屋柱と下屋柱からなっており、上屋柱と下屋柱では柱穴の掘方の大きさと深さの差が著しい。間取りは上手に納戸と座敷があり、中の部屋は前後 2 つに分かれ、下手は土間と想定される。土間は建物の約半分の面積を占める。土間には 8 本の上屋柱が立っていたと考えられる。使用した柱穴は 48 個である。

〔建物方位〕 桁行の軸方向は E-5°-S である。



第35図 東側調査区の建物(2) (15SB1)

〔柱間寸法〕 様々な寸法を使用しており、基準寸法を見いだせない。

〔出土遺物〕 P 85、P 86、P 90、P 113、P 148、P 149、P 155、P 160 で柱材が残存していた。樹種はいずれもクリである。

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 大きさから母屋と考えられる。

〔年代〕 近世の所属である。確証はないが他の母屋と思われるの建物の年代観との関係から、18世紀後半頃の建物と推定される。

### 15 S B 2 (第 36 図、写真図版 16)

〔位置〕 II E 6 d、6 e、7 d、7 e、8 d、8 e に位置する。

〔重複〕 P 19、P 82、P 78 が 15 S D 5 と重複するが本建物が新しい。また 15 S B 1 とプランが重複するが直接切り合う柱穴が無く前後関係は不明である。そして本建物のプラン内に 15 S X 9 があるが、軸方位が本建物と同じで同時存在と考えられる。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は 872 cm、梁間は 408 cm で長方形のプランである。面積は約 10.7 坪である。使用した柱穴は 12 個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向は E-15°-N である。

〔柱間寸法〕 桁行では 7 尺 2 寸 (約 218 cm)、梁間では 4 尺 5 寸 (約 136 cm) を基準にしている。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 カマド遺構である 15 S X 9 が本建物に伴うと考えられる。

〔建物の性格〕 内部にカマドを持つことから、調理又は火を使用する作業をおこなった建物と考えられる。

〔年代〕 近世の所属と考えられる。

### 15 S B 3 (第 36 図、写真図版 16)

〔位置〕 II E 6 e、7 e、7 f、8 e～8 g に位置する。

〔重複〕 P 110、P 128 が 15 S B 1 の柱穴 P 190、P 129 とそれぞれ重複するが本建物が古い。また 15 S B 4 とは直接切り合う柱穴がないが、所属時期の推定から本建物が新しいと考えられる。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。南東側の柱穴は検出できなかったが、桁行 5 間、梁間 3 間で、南北に半間の下屋が付くプランを想定した。南西側の遺構確認面は他の部分に比べるとたしかに標高が低い、検出できた柱穴程度の深さがあれば十分生き残っている程度の低さである。この部分は調査時に丹念に柱穴を探したのであるが検出できなかったものである。この部分の柱穴は掘込みが浅かったのであろうか。このように図示した建物プランの想定は厳しいかもしれないが、きれいに並ぶ北側の柱穴を余らせないため、ここではこのプランを示しておきたい。使用した柱穴は 20 個である。桁行は 1084 cm、梁間は 842 cm で、面積は約 27.6 坪である。

〔建物方位〕 桁行の軸方向は E-4°-S である。

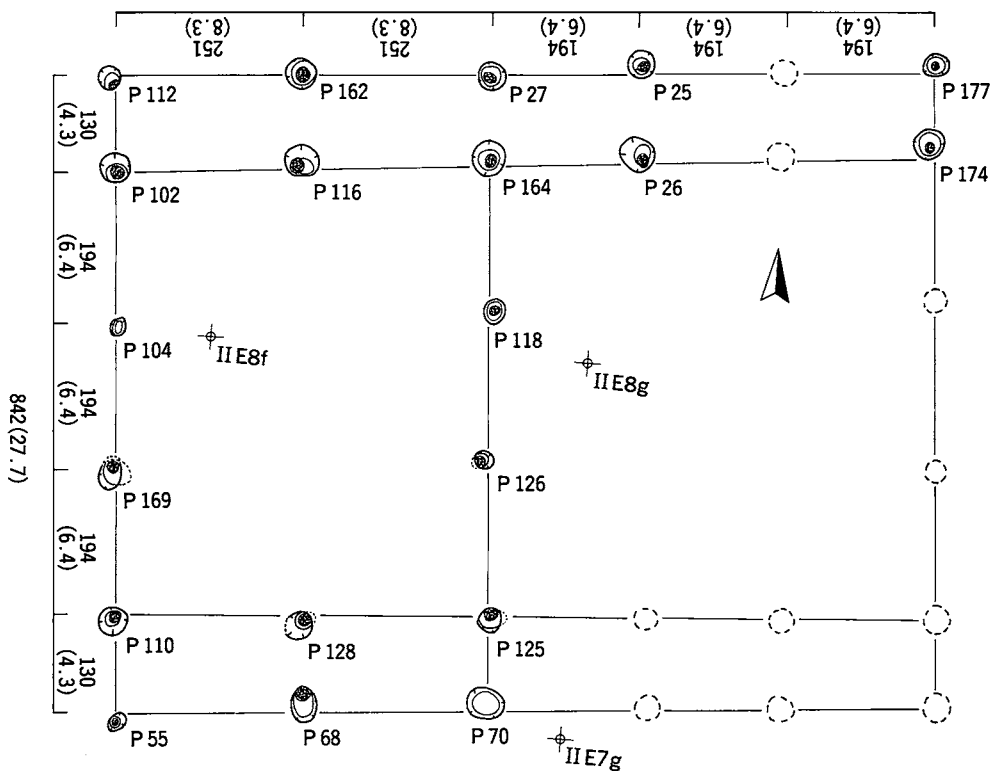
〔柱間寸法〕 梁間は 6 尺 4 寸 (約 194 cm)、桁行は 6 尺 4 寸 (約 194 cm) と 8 尺 3 寸 (約 251 cm) を使用している。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

15SB3

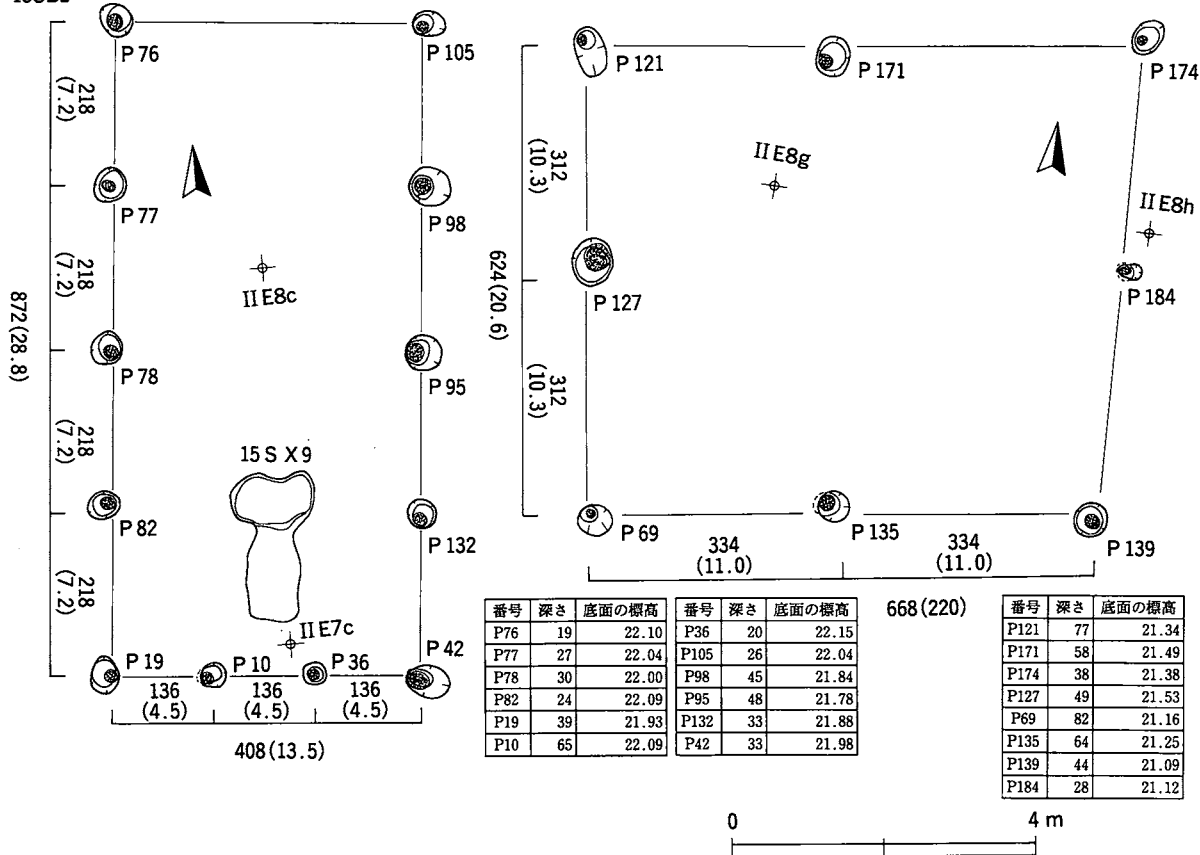
1084 (35.7)



番号	深さ	底面の標高
P112	29	21.96
P162	49	21.73
P27	45	21.80
P25	79	21.38
P177	60	21.26
P102	66	21.58
P116	75	21.44
P164	58	21.50
P26	58	21.56
P174	36	21.42
P104	4	22.19
P118	44	21.54
P169	39	21.78
P126	17	21.79
P110	63	21.59
P128	57	21.52
P125	67	21.24
P55	35	21.83
P68	21	21.89
P70	24	21.73

15SB2

15SB4



番号	深さ	底面の標高
P76	19	22.10
P77	27	22.04
P78	30	22.00
P82	24	22.09
P19	39	21.93
P10	65	22.09

番号	深さ	底面の標高
P36	20	22.15
P105	26	22.04
P98	45	21.84
P95	48	21.78
P132	33	21.88
P42	33	21.98

番号	深さ	底面の標高
P121	77	21.34
P171	58	21.49
P174	38	21.38
P127	49	21.53
P69	82	21.16
P135	64	21.25
P139	44	21.09
P184	28	21.12

第36図 東側調査区の建物(2) (15SB 2、3、4)

〔建物の性格〕 建物の大きさから単なる付属小屋とは考えがたく、母屋的な建物と推定される。

〔年代〕 不明であるが中世末から近世前半の所属と考えられる。

#### 15 S B 4 (第 36 図)

〔位置〕 II E 7 f、7 g、8 f、8 g に位置する。

〔重複〕 P 121 が 15 S B 1 の柱穴 P 122 と重複するが本建物が古い。また 15 S B 3 とは直接切り合う柱穴がないが、所属時期の推定から本建物が古いと考えられる。そして P 184 が 15 S D 13 と重複するが本建物が新しい。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。やや不整な形状であるが、掘方の形状と埋土の質感が類似した柱穴からなっており、プランに誤りは無いと考えられる。桁行は 668 cm、梁間は 624 cm である。面積は約 12.6 坪である。使用した柱穴は 8 個である。

〔建物方位〕 東西ラインの軸方向は E - 7° - S である。

〔柱間寸法〕 桁行では 11 尺 (約 334 cm)、梁間では 10 尺 3 寸 (約 312 cm) を使用している。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 不整なプランであり、臨時的な建物の可能性も考えられる。

〔年代〕 柱穴の埋土の色調と質感から 12 世紀代の可能性が高い。本建物より古い 15 S D 13 から初鑄年代が 1111 年の政和通寶が出土しており、本建物はそれよりは新しい年代のものとなる。

### 15 S B 22 (第 37 図、写真図版 16)

〔位置〕 II E 3 d、3 e、4 d、4 e、5 d、5 e に位置する。

〔重複〕 15 S K 49、50、15 S D 38 とプランが重複するが直接切り合う柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。北西隅の柱穴が検出できなかったが、桁行は 4 間の長方形のプランである。P 739 の存在により 2 つの部屋に分けられる。梁間は 394 cm、桁行は 864 cm で、面積は約 10.3 坪である。使用した柱穴は 12 個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向は E-10°-N である。

〔柱間寸法〕 梁間では 6 尺 5 寸 (約 197 cm) を使用している。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 建物の大きさから付属小屋的な用途が推測される。

〔年代〕 近世の所属と考えられる。

### 15 S B 23 (第 37 図、写真図版 16)

〔位置〕 II E 3 f、3 g、4 f、4 g に位置する。

〔重複〕 15 S K 59、15 S K 60、15 S D 38 と重複するが本建物が古い。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は 3 間の長方形のプランである。桁行は 542 cm、梁間は 328 cm で、面積は約 5.3 坪である。使用した柱穴は 6 個である。

〔建物方位〕 梁間の軸方向は E-10°-N である。

〔柱間寸法〕 桁行では 5 尺 9 寸～6 尺 (約 179～181 cm) を使用している。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 建物の大きさから付属小屋的な用途が推測される。

〔年代〕 近世の所属と考えられる。

### 15 S B 24 (第 37 図、写真図版 16)

〔位置〕 II E 3 d、3 e に位置する。

〔重複〕 P 720 が 15 S D 34 と重複するが前後関係を明らかにすることができなかった。また 15 S K 48、15 S K 51、15 S D 38 と重複するが直接重複する柱穴がなく前後関係は不明である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。桁行は 4 間の長方形のプランである。桁行 723 cm、梁間は 400 cm で、面積は約 8.7 坪である。使用した柱穴は 12 個である。

〔建物方位〕 桁行の軸方向は E-15°-N である。

〔柱間寸法〕 6 尺 6 寸 (約 200 cm) を多用している。

〔出土遺物〕 なし

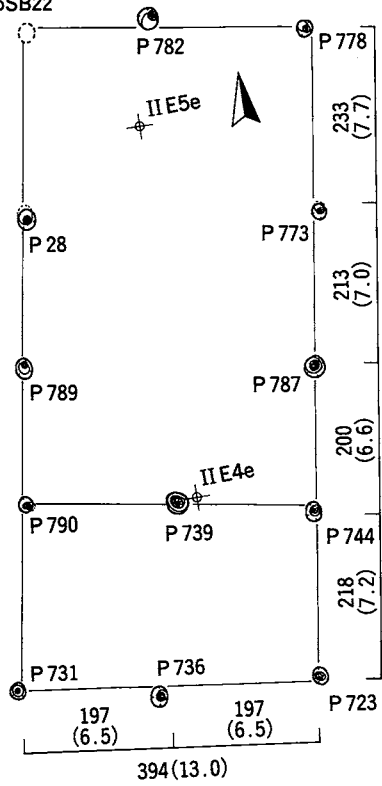
〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 建物の大きさから付属小屋的な用途が推測される。

〔年代〕 近世の所属と考えられる。

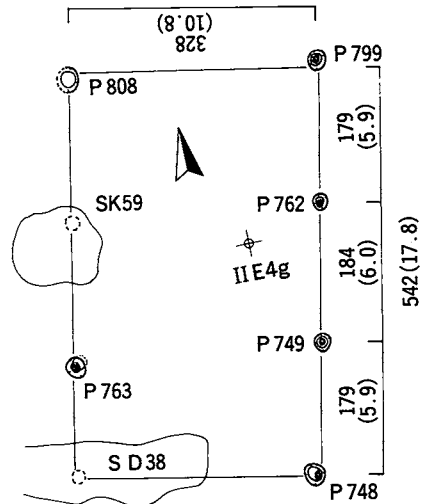


15SB22



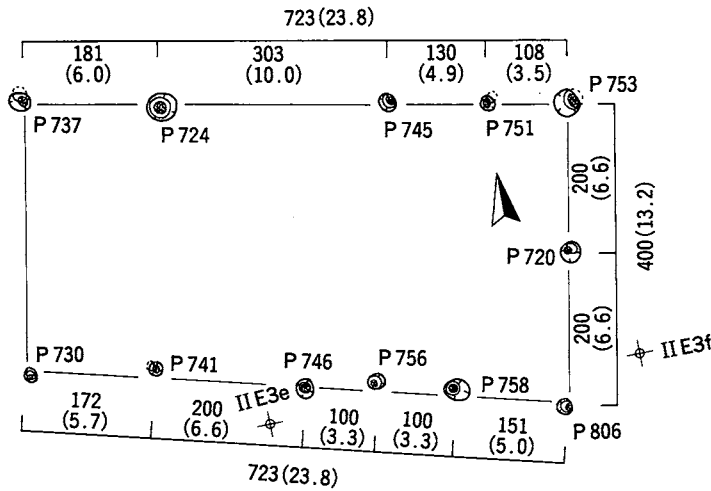
番号	深さ	底面の標高
P28	46	21.69
P789	35	21.72
P790	32	21.70
P731	20	21.65
P736	44	21.41
P723	7	21.76
P782	37	21.83
P778	33	21.87
P773	31	21.84
P787	35	21.73
P744	33	21.65
P739	54	21.52

15SB23

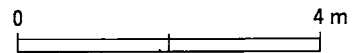


番号	深さ	底面の標高
P799	25	21.50
P762	38	21.43
P749	20	21.61
P748	11	21.63
P808	26	21.60
P763	21	21.54

15SB24



番号	深さ	底面の標高
P737	41	21.59
P724	29	21.71
P745	1	21.93
P751	21	21.66
P753	35	21.44
P730	26	21.41
P741	28	21.38
P746	39	21.62
P756	26	21.38
P758	34	21.24
P806	17	21.36
P720	27	21.70



第37図 東側調査区の建物(23) (15SB22、23、24)

## 2 井戸

1.8 m以上の深さを有する遺構を井戸状遺構とした。この中には井戸以外の用途のものもあるかもしれないが、それを区別することができないので一括して述べる。井戸状遺構は西側調査区で23基、東側調査区で9基検出された。以下西側調査区の遺構、東側調査区の遺構の順に記述していく。

### 15 S E 2 (第38図、写真図版17)

〔位置〕 IIC 8 i、8 j、IIC 9 i、9 jに位置する。

〔重複〕 15 S B 18とプランが重複するが直接切り合う部分がなく前後関係を判断できない。

〔底面、壁〕 底面は平坦で、壁は概ね垂直に立つ。調査時には水は全く湧いてこなかった。

〔埋土〕 6層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 埋土2層中から常滑産片口鉢片(1016)、常滑産甕片(1112)、渥美産甕片(1253)、砥石(4201、4202)が出土した。また4層中から渥美産甕片(1218、1246)が出土した。5層上面では板状の木製品(4105、4106)と端部を斜めに削ったチュウ木状?の木製品(4107、4108、4109)が出土した。2層出土の常滑産甕は15 S E 5埋土上部出土のものと接合した。また埋土中から手づくねかわらけ(3029、3055、3116)が出土している。

〔遺構の性格〕 5層下部に瓜類の種子混じりの土が堆積し、5層上部ではチュウ木状?木製品が出土したがその量はごくわずかで、いわゆるトイレ状土坑とは考えがたい。トイレとして使用されたとしても二次的な行為であっただろう。だが確認面からの深さが2 m程度と浅く井戸以外の用途の可能性も否定しきれない。ここでは一応井戸の可能性が高いとしておきたい。

〔年代〕 出土遺物から12世紀の所屬と考えられる。1112の常滑産甕は3型式と考えられるので、廃絶は12世紀第4四半期以降と考えられる。

### 15 S E 3 (第38図、写真図版17)

〔位置〕 IID 7 aに位置する。

〔重複〕 なし

〔底面、壁〕 底面は概ね平坦で、壁は一部不整な部分があるが、開口部に向かってやや開きながら立ち上がる。

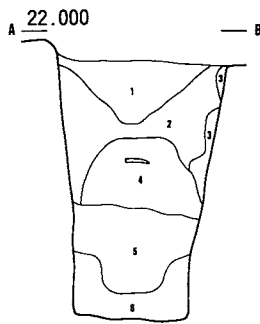
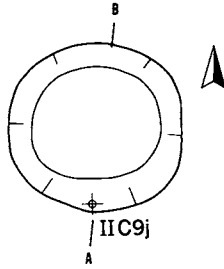
〔埋土〕 9層に分けられる。人為堆積である。埋土上部と下部から離れて出土した陶器片で接合するものも多く、一気に埋め戻されたものと考えられる。

〔出土遺物〕 埋土中から接合前で約230片の国産陶器片が出土した。いずれも甕、壺で片口鉢片は含まれていなかった。接合するものも多いが、接合する破片は離れた位置、レベルからばらばらの状態で出土しており、すでに破片となっていた陶器を土といっしょに捨てた状態と考えられる。図示したものは常滑産壺(1043)、常滑産甕(1049~1054、1059~1061、1063~1067、1072~1079、1081~1085、1090~1104、1127、1135、1142、1144、1147~1150)、渥美産壺(1175)、渥美産甕(1184、1186、1187、1189~1193、1196、1201~1205、1207~1211、1213、1216、1217)がある。

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 出土遺物から12世紀の所屬と考えられる。常滑産甕1095、1116、1140、1152は3型式と考えられ、廃絶は12世紀第4四半期以降と考えられる。

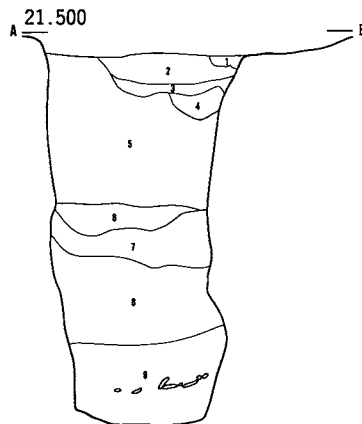
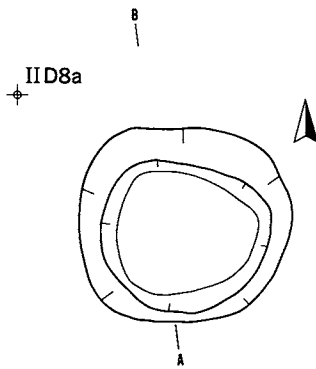
15SE2



15SE 2

- 1 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 7 / 2 におい黄橙色ロームブロック多量混入、10YR 7 / 8 黄橙色土少量混入、炭化物粒微量混入
- 2 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 7 / 2 におい黄橙色ロームブロック混じり、10YR 7 / 8 黄橙色土少量混入、炭化物粒少量混入 陶器片出土
- 3 10YR 7 / 2 におい黄橙色ローム 10YR 7 / 8 黄橙色土少量混入
- 4 10Y 6 / 1 灰色ローム 10YR 2 / 3 黒褐色ローム少量混入、10YR 7 / 8 黄橙色土少量混入 陶器片出土
- 5 10YR 4 / 1 褐灰色土 上部より木材、陶器出土、下部より種出土
- 6 10GY 7 / 1 明緑灰色ローム

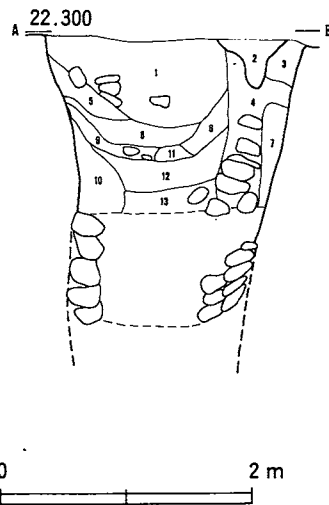
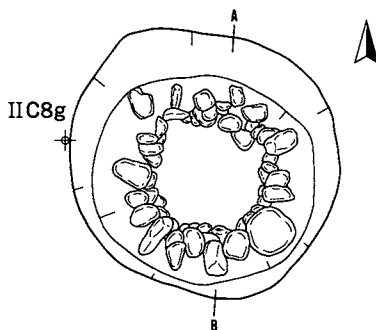
15SE3



15SE 3

- 1 10YR 3 / 4 暗褐色土
- 2 10YR 2 / 2 黒褐色土 10YR 7 / 8 黄橙色土ブロック少量混入、炭化物粒・焼土粒少量混入
- 3 10YR 2 / 3 黒褐色土 10YR 7 / 8 黄橙色土ブロック多量混入
- 4 10YR 2 / 2 黒褐色土 10YR 8 / 6 黄橙色土多量混入
- 5 10YR 8 / 4 浅黄褐色土 7.5YR 5 / 8 明褐色土少量混入 中部より陶器片出土 (P 1~90)
- 6 10YR 2 / 1 黒褐色土 10GY 7 / 1 明緑灰色ロームブロック多量混入 陶器片出土 (P 91~98)
- 7 10GY 7 / 1 明緑灰色ローム
- 8 10YR 2 / 2 黒褐色土 10GY 7 / 1 明緑灰色ロームブロック少量混入 陶器片出土 (P 99~128)
- 9 10YR 2 / 2 黒褐色土 中部より陶器片出土 (P 129~226)、底部より陶器片出土 (P 227~230)

15SE4



15SE 4

- 1 10YR 4 / 4 褐色土 10YR 6 / 6 明黄褐色ロームブロック少量混入、2.5Y 8 / 3 淡黄色ローム多量混入、炭化物粒少量混入、酸化鉄分少量混入
- 2 10YR 3 / 3 暗褐色土 炭化物粒微量混入、酸化鉄分少量混入
- 3 2.5Y 8 / 3 淡黄色ローム 酸化鉄分少量混入
- 4 10Y 5 / 1 灰色土 10Y 6 / 1 灰色ローム少量混入
- 5 10YR 6 / 6 明黄褐色ローム 10YR 4 / 4 褐色土多量混入、炭化物粒微量混入
- 6 2.5Y 8 / 3 淡黄色ローム 10YR 4 / 4 褐色土多量混入 10YR 3 / 3 暗褐色土ブロック少量混入
- 7 10YR 4 / 4 褐色土 2.5Y 8 / 3 淡黄色ロームブロック入り混じり 酸化鉄分混入
- 8 10YR 4 / 4 褐色土 2.5Y 8 / 3 淡黄色ロームブロック多量混入、10YR 6 / 6 明黄褐色ロームブロック多量混入、炭化物粒少量混入、酸化鉄分少量混入
- 9 2.5Y 8 / 3 淡黄色ローム 10YR 4 / 4 褐色土入り混じり 酸化鉄分混入
- 10 2.5Y 8 / 3 淡黄色ローム 10YR 6 / 6 明黄褐色ローム多量混入、10YR 4 / 4 褐色土少量混入
- 11 10YR 3 / 3 暗褐色土 炭化物粒少量混入
- 12 10YR 4 / 4 褐色土 10Y 6 / 1 灰色ローム多量混入、炭化物粒極微量混入、酸化鉄分多量混入
- 13 10YR 3 / 3 暗褐色土 10Y 6 / 1 灰色ローム少量混入、酸化鉄分少量混入

第38図 西側調査区の井戸(1)

#### 15 S E 4 (第 39 図、写真図版 17)

〔位置〕 IIC 7 g、8 g に位置する。

〔重複〕 15 S B 6 の柱穴 (P 315) と 15 S B 14 の柱穴 (P 314) と重複するが本遺構が新しい。また 15 S D 14 と重複するが本遺構が古い。

〔底面、壁〕 石を組んだ井戸である。石を組み、ローム質の土を塗り固めて壁を作っている。使用している石は丸い石である。石の崩落の危険があり底面まで掘り下げていない。掘方の壁は概ね垂直で開口部でやや開く。

〔埋土〕 13 層に分けられる。石を塗り固めた土と、それが崩れ再堆積した層に分けられる。

〔出土遺物〕 埋土中から常滑産片口鉢片 (1017) が出土した。

〔遺構の性格〕 井戸である。石組みが施されていることから、ある程度長期間使用した可能性が高い。

〔年代〕 近世の所属と考えられる。近世の建物と考えられる 15 S B 6 と 15 S B 14 のどちらよりも新しいことから近世でも後半の可能性が高い。

#### 15 S E 5 (第 39 図、写真図版 18)

〔位置〕 IID 7 a、8 a に位置する。

〔重複〕 15 S E 22 と重複するが本遺構が新しい。

〔底面、壁〕 底面は皿状で丸みを持つ。壁は開口部でやや開き、底面近くで再び外側に開くフラスコ状の断面を持っている。

〔埋土〕 11 層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 埋土の上部から中国産白磁四耳壺片 (2012)、常滑産壺片 (1043、1047)、常滑産甕片 (1071、1095、1116、1140、1152)、渥美産甕 (1247～1252)、須恵器大甕片 (206)、手づくねかわらけ (3027) が出土した。

〔遺構の性格〕 確認面からの深さが約 210 cm と浅く、また断面形がフラスコ状であり、井戸以外の性格の可能性も大きい。掘り下げ途中で放棄した井戸かもしれない。

〔年代〕 出土遺物から 12 世紀の所属と考えられる。常滑産甕 1095、1116、1140、1152 は 3 型式と考えられ、廃絶は 12 世紀第 4 四半期以降と考えられる。

#### 15 S E 6 (第 39 図、写真図版 18)

〔位置〕 IIC 6 i、6 j に位置する。

〔重複〕 15 S B 11 の柱穴 (P 274) と重複するが本遺構が古い。

〔底面、壁〕 底面は平坦で、壁は開口部に向かって開きながらやや斜めに立つ。調査時には水は全く湧いてこなかった。

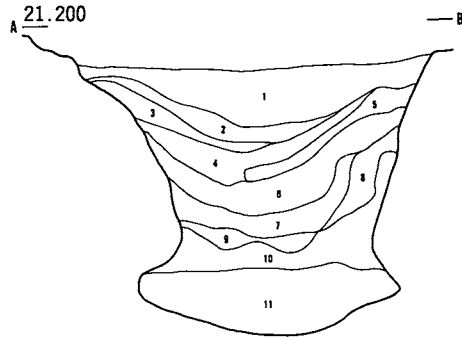
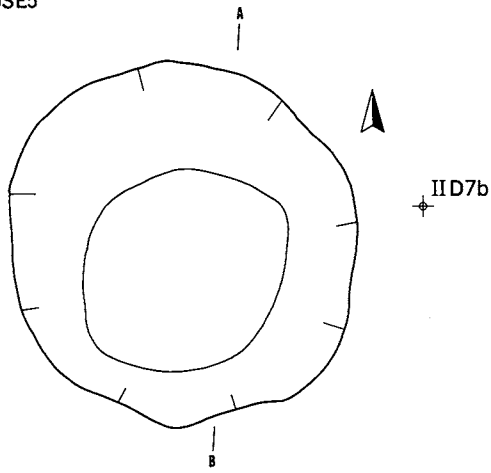
〔埋土〕 8 層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 埋土上部から常滑産壺口縁部破片 (1033)、渥美産甕片 (1240) が出土した。また 8 層中から加工痕の無い自然木片が出土した。

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 出土遺物から 12 世紀の可能性が高いが確証はない。

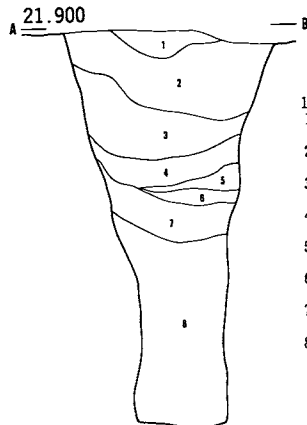
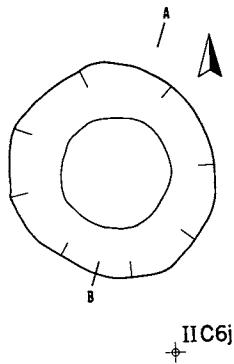
15SE5



15SE5

- 1 10YR 3 / 4 暗褐色土 10YR 7 / 3 において黄橙色ロームブロック多量混入、炭化物粒多量混入、焼土粒微量混入
- 2 10YR 3 / 2 黒褐色土 10YR 7 / 3 において黄橙色ロームブロック多量混入、炭化物粒多量混入、焼土粒微量混入、酸化鉄分多量混入
- 3 10YR 3 / 2 黒褐色土 炭化物粒少量混入、酸化鉄分多量混入
- 4 10YR 3 / 2 黒褐色土 炭化物粒少量混入、酸化鉄分多量混入
- 5 10YR 7 / 3 において黄橙色ローム 炭化物粒微量混入、酸化鉄分多量混入
- 6 10YR 2 / 2 黒褐色土 10YR 6 / 2 灰黄褐色ローム少量混入炭化物粒微量混入、酸化鉄分多量混入
- 7 10YR 2 / 2 黒褐色土 10YR 5 / 2 灰黄褐色ローム少量混入 10GY 6 / 1 緑灰色ローム少量混入、酸化鉄分多量混入
- 8 10YR 7 / 2 において黄橙色ローム 酸化鉄分多量混入
- 9 10YR 4 / 1 褐灰色土 10YR 2 / 2 黒褐色土少量混入
- 10 10GY 6 / 1 緑灰色ローム 10YR 2 / 2 黒褐色土ブロック少量混入、10YR 7 / 2 において黄橙色ローム少量混入、酸化鉄分微量混入
- 11 10YR 2 / 2 黒褐色土 10GY 6 / 1 緑灰色ローム多量混入、炭化物粒少量混入

15SE6

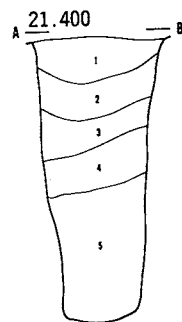
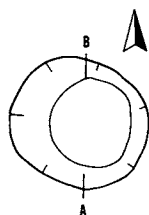


15SE6

- 1 10YR 4 / 1 褐灰色土 10YR 8 / 4 淡黄橙色ロームまだら状に少量混入
- 2 10YR 8 / 4 淡黄橙色ローム 10YR 4 / 1 褐灰色土まだら状に少量混入
- 3 10YR 8 / 4 淡黄橙色ローム 10YR 4 / 1 褐灰色土まだら状に多量混入
- 4 10YR 3 / 1 黒褐色土 10YR 8 / 4 淡黄橙色ロームブロック状に少量混入
- 5 10YR 8 / 4 淡黄橙色ローム 10YR 3 / 1 黒褐色土ブロック状に多量混入
- 6 10YR 3 / 1 黒褐色土 10YR 8 / 2 灰白色ロームまだら状に少量混入
- 7 10YR 8 / 2 灰白色ローム 10YR 2 / 1 黒色土、10GY 7 / 1 明緑灰色ロームまだら状に少量混入
- 8 10YR 2 / 1 黒色土 10GY 7 / 1 明緑灰色ロームまだら状に多量混入 木材出土

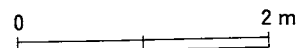
15SE7

IIC1g



15SE7

- 1 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 8 / 6 黄橙色ロームまだら状に少量混入
- 2 10YR 8 / 6 黄橙色ローム 10YR 4 / 2 灰黄褐色土まだら状に多量混入
- 3 10YR 7 / 8 黄橙色ローム 10YR 3 / 2 黒褐色土まだら状に多量混入
- 4 10YR 3 / 1 黒褐色土 10YR 7 / 8 黄橙色ローム粒少量混入 下駄出土
- 5 10YR 3 / 1 黒褐色土 10GY 7 / 1 明緑灰色ロームまだら状



第39図 西側調査区の井戸(2)

15 S E 7 (第 39 図、写真図版 18)

〔位置〕 IIC 0 g に位置する。

〔重複〕 なし

〔底面、壁〕 底面は概ね平坦で、壁はやや開きながら立つ。

〔埋土〕 5 層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 埋土の 4 層中から差し歯の下駄 (4103)、5 層中から曲物の底板 (4104) と側板がばらばらになって出土した。この底板は円形ではなく隅丸方形を呈する。

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 出土遺物から 12 世紀の所属と考えられる。

15 S E 8 (第 40 図、写真図版 19)

〔位置〕 IIC 1 f、1 g、2 f、2 g に位置する。

〔重複〕 なし

〔底面、壁〕 底面は概ね平坦で、壁はやや開きながら立つ。

〔埋土〕 埋土の密度が非常にゆるく崩落の危険が大きいため、断面の観察ができなかった。

〔出土遺物〕 埋土中から木製品が多量に出土した。桶把手 (7005)、桶底板? (7006)、くさび (7007、7008、7009、7010)、不明製品 (7011、7012、7013、7014、7015)、鈎状製品 (7016) がある。

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 出土遺物と埋土の状態から近世後半～近代のものと考えられる。

15 S E 9 (第 40 図、写真図版 19)

〔位置〕 IIC 1 g、1 h、2 g、2 h に位置する。

〔重複〕 15 S D 22 と重複するが本遺構が古い。

〔底面、壁〕 底面は概ね平坦で、壁はやや開きながら立つ。壁の中程で外側にえぐれる部分がある。

〔埋土〕 下半部は壁がえぐれている部分があり、危険なため断面を残さず掘り下げ、土層観察をおこなっていない。上半部は 6 層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 埋土中から多量の遺物が出土した。肥前産磁器碗 (6002、6006、6013、6015)、肥前産磁器皿 (6098)、肥前産磁器小杯 (6133、6134)、大堀相馬産陶器碗 (6166)、肥前産陶器鉢 (6212)、美濃産陶器香炉 (6219、6220)、瀬戸産陶器播鉢 (6234)、産地不明陶器播鉢 (6237、6260)、桶の底板 (7018、7022)、挽き白の下白片 (7309)、銅板を折り曲げたもの (7107) がある。

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 出土陶磁器で年代が把握できるものはいずれも 18 世紀代である。よって本遺構は 18 世紀中に廃絶されたと考えられる。

15 S E 10 (第 40 図、写真図版 19)

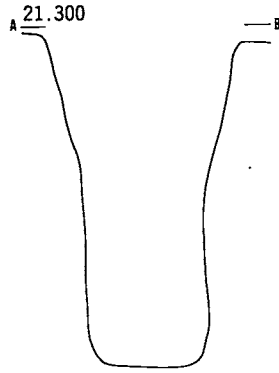
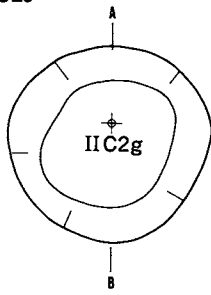
〔位置〕 IIC 7 f、8 f に位置する。

〔重複〕 15 S B 6 の柱穴 (P 310) と 15 S D 14 と重複するが本遺構が古い。

〔底面、壁〕 底面はやや丸みをおびる。壁は下半部でほぼ垂直に立ち、上半部では開口部に向かってやや開

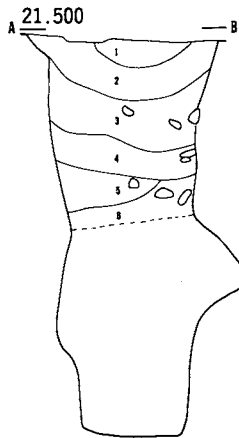
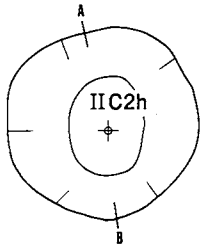


15SE8



15SE8  
(注記なし)  
※積落のため断面とれず。

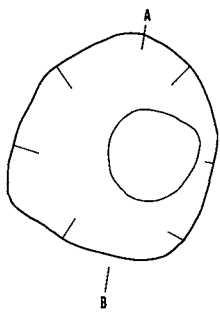
15SE9



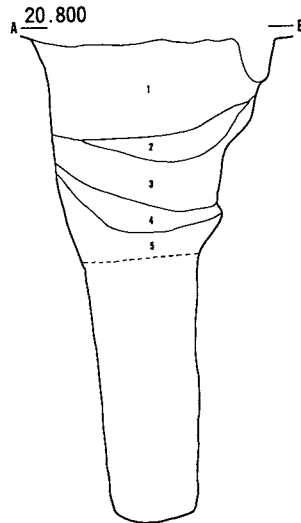
15SE9

- 1 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 3 / 3 暗褐色土多量混入、10YR 7 / 4 におい黄橙色ロームブロック多量混入、炭化物粒多量混入
  - 2 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 7 / 4 におい黄橙色ロームブロック混じり 炭化物粒少量混入、酸化鉄分微量混入
  - 3 10YR 5 / 1 におい黄褐色ローム 10YR 6 / 1 灰色ローム混じり 10YR 7 / 4 におい黄橙色ロームブロック微量混入、酸化鉄分多量混入
  - 4 10Y 5 / 1 灰色ローム 10GY 7 / 1 明緑灰色ロームブロック混じり 酸化鉄分多量混入
  - 5 10YR 4 / 2 灰黄褐色ローム 2.5YR 3 / 4 明赤褐色変色土混じり
  - 6 10YR 4 / 2 灰黄褐色ローム 10GY 6 / 1 緑灰色ローム多量混入
- ※近世井戸

15SE10



IIC8g



15SE10

- 1 5Y 7 / 3 浅黄色ローム 10GY 7 / 1 明緑灰色ローム多量混入、酸化鉄分多量混入
- 2 5Y 7 / 3 浅黄色ローム 10YR 4 / 1 褐灰色ロームブロック少量混入、10GY 7 / 1 明緑灰色ロームブロック少量混入、酸化鉄分少量混入
- 3 10YR 2 / 3 黒褐色土 5Y 7 / 3 浅黄色ロームブロック多量混入、酸化鉄分多量混入
- 4 10YR 2 / 2 黒褐色土 5Y 7 / 3 浅黄色ロームブロック少量混入、酸化鉄分層状に多量混入
- 5 10YR 2 / 3 黒褐色土 10GY 7 / 1 明緑灰色ロームブロック少量混入



第40図 西側調査区の井戸(3)

きながら立ち上がる。

〔埋土〕下半部は崩落の危険があるため断面観察をおこなわず丸掘りした。土層を観察した上半部は5層に分けられる。人為堆積の可能性が高い。

〔出土遺物〕埋土中から何らかの部材（7019）と加工痕の無い自然木が出土した。

〔遺構の性格〕井戸と考えられる。

〔年代〕確証はないが近世の所屬と考えられる。近世の建物と考えられる15SB6より古いことから近世でも前半の可能性が高い。

#### 15SE11（第41図、写真図版20）

〔位置〕IIC3dに位置する。

〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は開口部に向かってやや開きながら立ち上がる。

〔埋土〕4層に分けられる。人為堆積の可能性が高い。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕井戸と考えられる。

〔年代〕不明である。

#### 15SE12（第41図、写真図版20）

〔位置〕IIC4bに位置する。

〔重複〕15SD27と重複するが本遺構が古い。また15SB8とプランが重複するが、本遺構が新しい可能性が高い。

〔底面、壁〕底面は丸みをおびる。壁は開口部に向かってやや開きながら立つ。

〔埋土〕下半部は崩落の危険があるため断面を残さず掘り下げ、土層観察をおこなっていない。上半部は7層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕埋土上部から肥前産磁器碗（6001）、肥前産磁器皿（6104）、肥前産磁器瓶（6139）が出土した。

〔遺構の性格〕井戸と考えられる。

〔年代〕出土陶磁器で年代が把握できるものはいずれも18世紀代である。また本遺構より新しい15SD27は出土遺物から18世紀中の廃絶が考えられる。よって本遺構は18世紀でも前半に廃絶されたと考えられる。

#### 15SE13（第41図、写真図版20）

〔位置〕IIC2dに位置する。

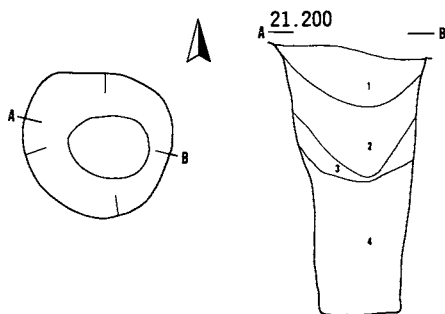
〔重複〕なし

〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は開口部に向かって開きながら立ち上がる。

〔埋土〕8層に分けられる。上部の1～3層を除くと人為堆積の可能性が高い。1～3層は人為堆積、自然堆積の別の判断は難しいが、4層以下の層が埋められて、その後幾らかの時間差をもって堆積したと考えられる。

〔出土遺物〕埋土の1～3層から手づくねかわらけ（3032、3058、3059、3060、3072、3073、3074、3101）、ロクロかわらけ（3123、3128、3159）が出土した。

15SE11

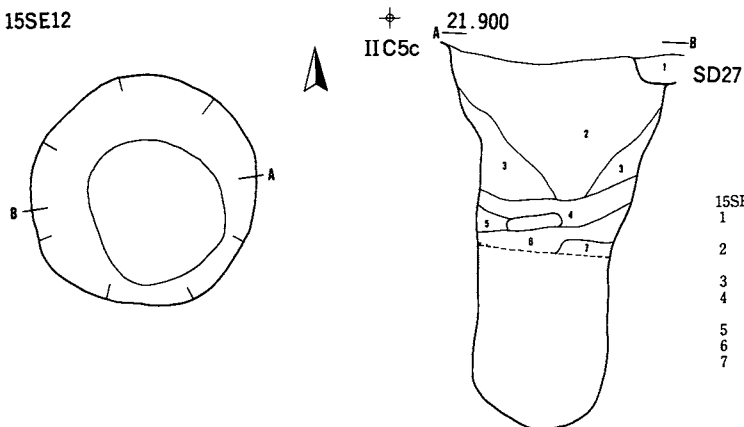


⊕ IIC3d

15SE11

- 1 10YR 7 / 2 において黄褐色ローム 10YR 3 / 2 黒褐色土多量混入、炭化物粒少量混入、酸化鉄分少量混入
- 2 10YR 3 / 2 黒褐色土 10YR 7 / 4 において黄褐色ロームブロック微量混入、炭化物粒微量混入
- 3 10YR 3 / 2 黒褐色土 10YR 7 / 4 において黄褐色ロームブロック多量混入
- 4 10YR 3 / 1 黒褐色土

15SE12

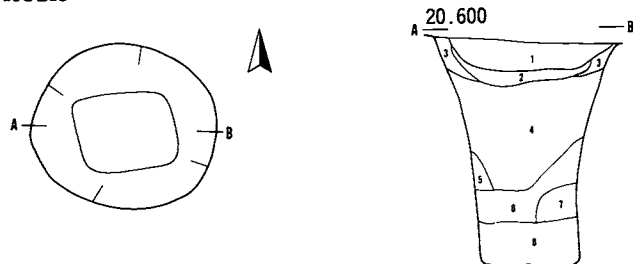


⊕ IIC5c

15SE12

- 1 10YR 3 / 2 黒褐色土 10YR 6 / 2 オリーブ灰色ロームまだら状に少量混入 この層は15SD27
- 2 10YR 3 / 2 黒褐色土 10YR 5 / 1 褐灰色土少量混入 10YR 5 / 8 黄褐色ローム微量混入、炭化物粒少量混入
- 3 10GY 7 / 1 明緑灰色ローム 10YR 4 / 1 褐灰色土少量混入
- 4 10YR 4 / 1 褐灰色土 10Y 6 / 2 オリーブ灰色ロームブロック少量混入
- 5 10Y 6 / 2 オリーブ灰色ローム 10YR 4 / 1 褐灰色土少量混入
- 6 10GY 6 / 1 緑灰色ローム 10YR 4 / 1 褐灰色土少量混入
- 7 10GY 6 / 1 緑灰色ローム 10YR 4 / 1 褐灰色土多量混入

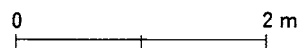
15SE13



⊕ IIC2e

15SE13

- 1 10YR 3 / 3 暗褐色土 炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入
- 2 10YR 3 / 3 暗褐色土 1層との間に炭化物粒の層あり
- 3 10YR 3 / 3 暗褐色土 10YR 8 / 6 黄褐色土少量混入、炭化物粒少量混入
- 4 10YR 3 / 1 黒褐色土 炭化物粒少量混入
- 5 10YR 3 / 1 黒褐色土 しまりなし
- 6 10YR 3 / 1 黒褐色土 10Y 6 / 1 灰色土ブロック少量混入
- 7 10YR 4 / 1 褐灰色ローム 10YR 8 / 6 黄褐色焼土6層との間に少量混入
- 8 10YR 2 / 2 黒褐色土 10GY 6 / 1 緑灰色土ブロック少量混入、10YR 6 / 8 明黄褐色土少量混入



第41図 西側調査区の井戸(4)

〔遺構の性格〕 確認面からの深さが2 mに満たないが井戸の可能性が高い。

〔年代〕 12世紀の所属と考えられる。

#### 15 S E 14 (第42図、写真図版20)

〔位置〕 II C 4 b、5 bに位置する。

〔重複〕 15 S B 8と重複するが本遺構が新しい。

〔底面、壁〕 底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部でやや開く。

〔埋土〕 7層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は判断できない。

〔出土遺物〕 底面から、肥前産陶器碗(6148)、木製のへら(7017)が出土した。

〔遺構の性格〕 確認面からの深さが2 mに満たず井戸以外の用途の可能性もある。

〔年代〕 底面から出土した肥前産陶器碗は18世紀前半の年代が与えられ、本遺構はそれよりも新しい時期の廃絶になる。

#### 15 S E 15 (第42図)

〔位置〕 II C 3 e、3 f、4 e、4 fに位置する。

〔重複〕 なし

〔底面、壁〕 底面まで掘り下げていない。壁は開口部に向かってやや開きながら立つ。

〔埋土〕 土層観察をおこなわなかった。

〔出土遺物〕 なし

〔遺構の性格〕 井戸である。土管を垂直に刺し、その中にポンプで水を汲み上げるためのビニールパイプを通してある。

〔年代〕 構築年代は不明だが、廃絶はごく近年である。

#### 15 S E 16 (第42図、写真図版21)

〔位置〕 II C 4 dに位置する。

〔重複〕 15 S B 8とプランが重複するが、直接切り合う部分がなく前後関係を判断できない。

〔底面、壁〕 底面は概ね平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり開口部の付近でやや開く。

〔埋土〕 9層に分けられた。断面図北端の1'～5'層は後に鉄分が染み込んで変色したものであり、ダッシュのつかない層と本来は同じ土である。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 埋土4層中から下駄(7003、7004)、桶(7021)が出土した。桶は横転していたが、原形を留めた状態で出土した。この他に加工痕の無い自然木も出土した。

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 近世から近代にかけてのものと考えられる。

#### 15 S E 17 (第43図、写真図版21)

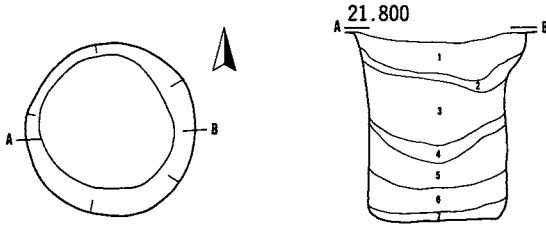
〔位置〕 II C 3 dに位置する。

〔重複〕 なし

〔底面、壁〕 底面はやや丸みをおび、壁は開口部に向かって開きながら立ち上がる。

15SE14

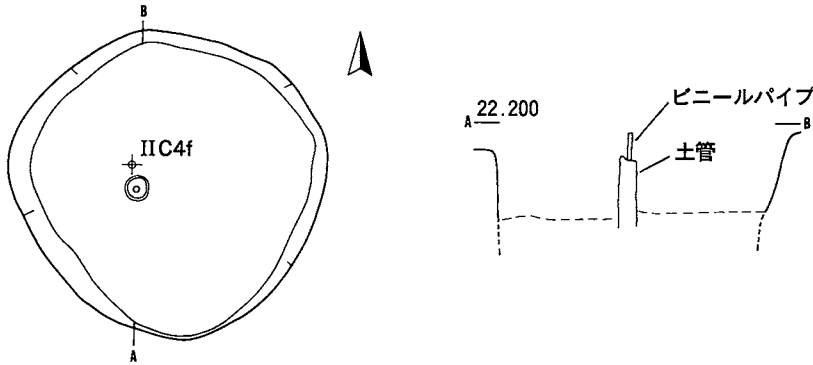
IIC5c



15SE14

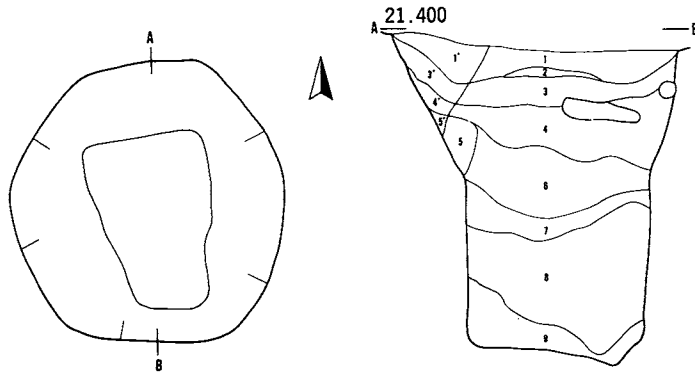
- 1 10Y 6 / 2 オリーブ灰色ローム、10YR 4 / 2 灰黄褐色土多量混入、炭化物粒微量混入、焼土粒少量混入
- 2 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10Y 6 / 2 オリーブ灰色ローム多量混入、炭化物粒微量混入
- 3 10Y 6 / 2 オリーブ灰色ローム 10YR 4 / 1 褐灰色土ブロック少量混入、炭化物粒微量混入、焼土粒多量混入
- 4 10YR 4 / 1 褐灰色土 炭化物粒少量混入
- 5 10Y 6 / 1 灰色ローム 10YR 4 / 1 褐灰色土ブロック少量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入
- 6 10Y 7 / 2 灰白色ローム 10Y 6 / 2 オリーブ灰色砂ブロック少量混入、10YR 4 / 1 褐灰色土少量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入

15SE15



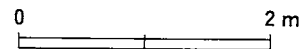
15SE16

IIC5e



15SE16

- 1 10YR 2 / 2 黒褐色土 炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入
  - 2 10GY 5 / 1 緑灰色ローム 10YR 2 / 2 黒褐色土少量混入
  - 3 10YR 4 / 3 灰黄褐色土
  - 4 10YR 2 / 2 黒褐色土 5 Y 7 / 3 浅黄色ロームブロック多量混入、炭化物粒微量混入 上部南側より掘出土
  - 5 10YR 3 / 1 黒褐色土 10Y 6 / 2 オリーブ灰色ローム塊多量混入
  - 6 10YR 2 / 2 黒褐色土 炭化物粒少量混入
  - 7 10YR 3 / 1 黒褐色土 10GY 6 / 1 緑灰色ブロック多量混入
  - 8 10YR 3 / 1 黒褐色土 10GY 6 / 1 緑灰色土ブロック少量混入、炭化物粒微量混入
  - 9 10GY 5 / 1 緑灰色土、10Y 6 / 2 オリーブ灰色土混じり
- ※ 1' 3' 4' 5' には酸化鉄分が多量に染み込んでいる



第42図 西側調査区の井戸(5)

〔埋土〕 9層に分けられる。人為堆積の可能性が高い。

〔出土遺物〕 埋土の上位からロクロかわらけ (3129、3158、3165、3166、3167、3170、3171) と不明土製品 (4020) が出土した。

〔遺構の性格〕 井戸の可能性が高い。

〔年代〕 12世紀の所属と考えられる。

#### 15 S E 18 (第43図、写真図版21)

〔位置〕 IIC 4 d、5 d に位置する。

〔重複〕 15 S B 10 の柱穴 (P 515) と重複するが本遺構が新しい。また 15 S K 27 と重複するが本遺構が古い。そして 15 S B 8 とプランが重なるが直接切り合う部分がなく前後関係を判断できない。

〔底面、壁〕 底面は丸みをおび、壁は外側にふくらんだりしながら不整に立ち上がる。

〔埋土〕 10層に分けられた。人為堆積である。

〔出土遺物〕 なし

〔遺構の性格〕 井戸の可能性が高い。

〔年代〕 近世から近代にかけてのものと考えられる。

#### 15 S E 19 (第43図、写真図版22)

〔位置〕 IIC 4 f に位置する。

〔重複〕 なし

〔底面、壁〕 底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近でやや開く。

〔埋土〕 下半部は崩落の危険があるため断面を残さず掘り下げ土層観察をおこなっていない。上半部は5層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 埋土中から肥前産磁器碗 (6016、6020)、肥前産磁器皿 (6076、6079)、肥前産陶器碗 (6145、6151) と砥石 (7305) が出土した。

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 出土陶磁器で年代が把握できるものはいずれも18世紀代である。その中でも前半代に位置付けられるものが多い。よって本遺構は18世紀前半頃の廃絶が考えられる。

#### 15 S E 20 (第44図、写真図版22)

〔位置〕 IIC 6 f、6 g、7 f、7 g に位置する。

〔重複〕 15 S D 20 と 15 S B 27 に伴う厩のくぼみと重複するが本遺構が古い。

〔底面、壁〕 底面はほぼ平坦である。壁は一部膨らむ部分があるがほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近でやや開く。

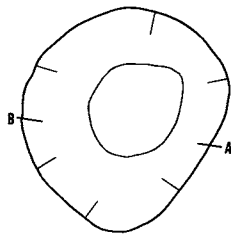
〔埋土〕 下半部は崩落の危険があるため断面を残さず掘り下げ土層観察をおこなっていない。上半部は10層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 底面から桶 (7020) がぼらぼらになった状態で出土した。

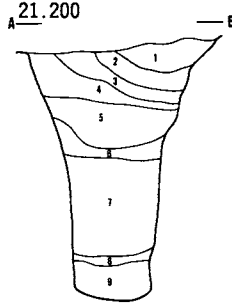
〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 桶が出土したことにより近世の所属と考えられる。また19世紀前半の構築と考えられる 15 S D 20

15SE17



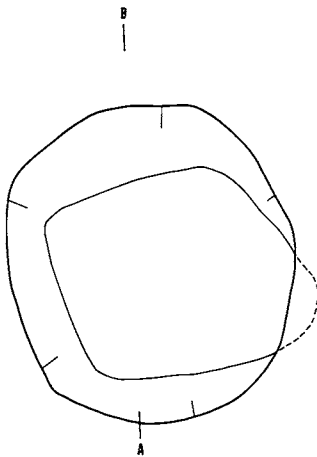
II C4e



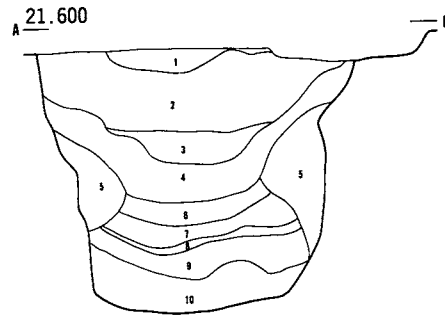
15SE17

- 1 10YR 3 / 2 黒褐色土 10YR 4 / 6 褐色土ブロック少量混入  
10YR 7 / 2 におい黄橙色ロームブロック多量混入、炭化物粒多  
量混入、焼土粒多量混入
- 2 10YR 3 / 3 暗褐色土 10YR 7 / 2 におい黄橙色ロームブロッ  
ク少量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒微量混入
- 3 10YR 3 / 2 黒褐色土
- 4 10YR 3 / 3 暗褐色土
- 5 10YR 3 / 2 黒褐色土 しまりなし
- 6 10YR 2 / 1 黒色土 10YR 7 / 2 におい黄橙色ロームブロック  
多量混入、10YR 8 / 8 黄橙色ロームブロック少量混入
- 7 10YR 2 / 1 黒色土
- 8 10YR 2 / 1 黒色土 10Y 7 / 2 灰白色ロームブロック多量混入
- 9 10YR 2 / 1 黒色土

15SE18



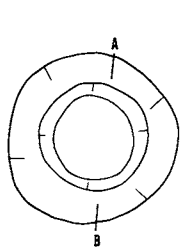
II C5e



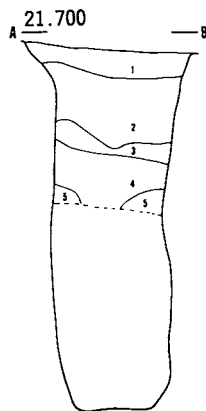
15SE18

- 1 10YR 2 / 3 黒褐色土 2.5Y 7 / 3 浅黄色ロームブロック少量混  
入、炭化物粒少量混入
  - 2 2.5Y 7 / 3 浅黄色ローム 10YR 2 / 3 黒褐色土ブロック少量混  
入、2.5Y 4 / 6 オリーブ褐色砂だら状に多量混入
  - 3 2.5Y 7 / 3 浅黄色ローム 10YR 2 / 3 黒褐色土ブロック少量混  
入、2.5Y 4 / 6 オリーブ褐色砂少量混入、焼土塊多量混入
  - 4 10YR 2 / 2 黒褐色土 10YR 3 / 4 暗褐色土ブロック微量混  
入、2.5Y 7 / 3 浅黄色ロームブロック少量混入、10Y 7 / 1 灰  
白色ロームブロック微量混入
  - 5 2.5Y 7 / 3 浅黄色ローム 10YR 2 / 2 黒褐色土層状に混入  
焼土多量混入
  - 6 5GY 7 / 1 明オリーブ灰色ローム 10YR 2 / 2 黒褐色土少量  
混入
  - 7 10GY 6 / 1 緑灰色ローム 10YR 4 / 1 褐灰色土ブロック微量  
混入
  - 8 10GY 6 / 1 緑灰色ローム 10YR 2 / 2 黒褐色土多量混入
  - 9 10GY 6 / 1 緑灰色ローム 2.5Y 7 / 1 灰白色土ブロック多量混  
入、10YR 4 / 1 褐灰色土ブロック少量混入、10YR 2 / 2 黒褐  
色土多量混入 三者が入り混じる
  - 10 10GY 6 / 1 緑灰色ローム しまりなし
- ※ 1～4 層は酸化鉄分が染み込んでいる

15SE19

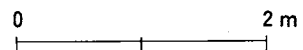


II C5g



15SE19

- 1 10YR 3 / 3 暗褐色土 2.5Y 7 / 4 浅黄色ロームブロック微量混  
入、炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入
  - 2 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 2.5Y 7 / 3 浅黄色ロームブロック多量  
混入、酸化鉄分多量混入
  - 3 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 2.5Y 7 / 3 浅黄色ロームブロック大  
量混入、酸化鉄分多量混入
  - 4 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10Y 8 / 2 灰白色ロームブロック少  
量混入
  - 5 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10Y 8 / 2 灰白色ロームブロック多  
量混入
- ※ 全体に酸化鉄分が染み込んでいる



第43図 西側調査区の井戸(6)



より古いので、本遺構は19世紀前半には下らない。

#### 15 S E 21 (第44図、写真図版22)

〔位置〕 IIC 3 h、4 h に位置する。

〔重複〕 15 S B 21 の柱穴 (P 700) と重複するが、本遺構が新しい。

〔底面、壁〕 底面はほぼ平坦である。壁は一部不整な部分もあるが、開口部に向かってやや開きながら立ち上がる。

〔埋土〕 14層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 埋土下部から加工痕の無い自然木が少量出土した。

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 確証はないが近世の所属と考えられる。

#### 15 S E 22 (第44図、写真図版22)

〔位置〕 IIC 7 a に位置する。

〔重複〕 15 S E 5 と重複するが本遺構が古い。

〔底面、壁〕 底面は概ね平坦である。壁は開口部に向かって開きながら立ち上がる。

〔埋土〕 8層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 なし

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 12世紀に所属すると考えられる。本遺構より新しい15 S E 5 の廃絶は12世紀第4四半期以降と考えられる。よって本遺構は12世紀第3四半以前の可能性が高くなる。

#### 15 S E 23 (第45図、写真図版23)

〔位置〕 IIC 3 h に位置する。

〔重複〕 なし

〔底面、壁〕 底面はほぼ平坦である。壁は一部不整になり外側に入り込む部分もあるが、それを除くと開口部に向かってやや開きながら立ち上がる形状である。

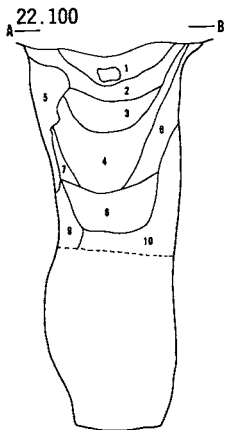
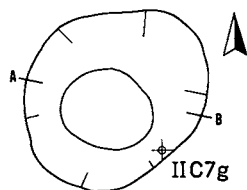
〔埋土〕 10層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 埋土中から肥前産磁器碗(6004)と下駄(7002)と崩壊して図示しえなかったが木製の浅い鉢が出土した。また渥美産の片口鉢片(1167)も出土した。

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

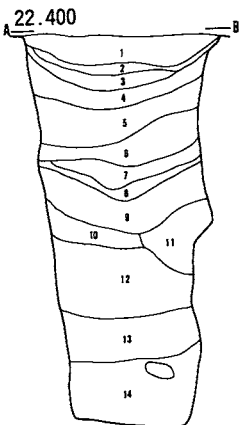
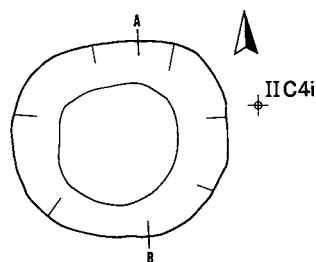
〔年代〕 肥前産磁器碗はIV期(1690～1780年)のもので、本遺構の廃絶はそれより新しいことになる。

15SE20



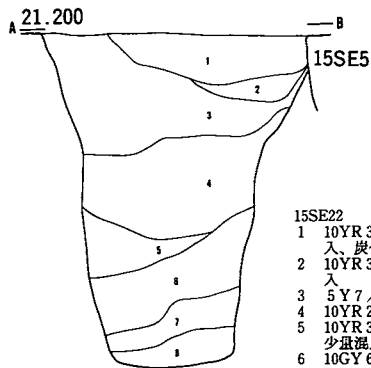
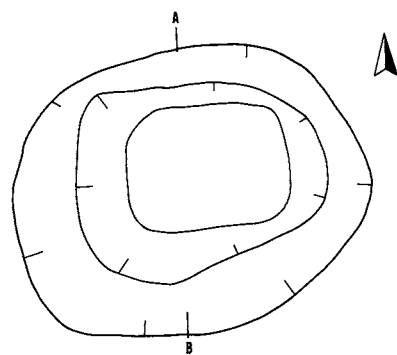
- 15SE20
- 1 10YR 3 / 1 黒褐色土 10Y 6 / 2 オリーブ灰色ロームブロック塊多量混入、酸化鉄分混入
  - 2 10YR 3 / 1 黒褐色土
  - 3 10YR 3 / 2 黒褐色土 しまりなし
  - 4 10YR 6 / 1 褐灰色土 10Y 5 / 2 オリーブ灰色ロームブロック少量混入
  - 5 2.5Y 5 / 4 黄褐色ローム 10Y 4 / 1 灰色土ブロック少量混入、10Y 6 / 1 灰色ロームブロック少量混入
  - 6 10Y 4 / 1 灰色土 10Y 6 / 1 灰色ロームブロック少量混入
  - 7 10YR 3 / 1 黒褐色土 2.5Y 5 / 4 黄褐色ローム少量混入
  - 8 10YR 4 / 1 褐灰色土 10GY 6 / 1 緑灰色ロームブロック少量混入 しまりなし
  - 9 5Y 6 / 2 灰オリーブ色ローム 10GY 6 / 1 緑灰色ロームブロック少量混入
  - 10 5Y 5 / 2 灰オリーブ色ローム 10GY 6 / 1 緑灰色ロームブロック微量混入

15SE21



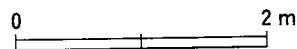
- 15SE21
- 1 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 炭化物粒少量混入、焼土粒多量混入
  - 2 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 6 / 6 明黄褐色ロームブロック多量混入
  - 3 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 6 / 4 にぶい黄褐色ロームブロック微量混入
  - 4 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 7 / 4 にぶい黄褐色ロームブロック塊多量混入、炭化物粒少量混入
  - 5 10GY 3 / 1 明緑灰色土 2.5GY 8 / 1 灰白色ロームブロック多量混入
  - 6 7.5Y 7 / 2 灰白色ローム 10YR 4 / 2 灰黄褐色土ブロック少量混入
  - 7 2.5Y 8 / 3 浅黄色ローム 10YR 4 / 1 褐灰色土ブロック少量混入
  - 8 2.5Y 6 / 2 灰黄色ローム 10YR 4 / 1 褐灰色土ブロック多量混入
  - 9 10Y 8 / 2 灰白色ローム
  - 10 10Y 7 / 2 灰白色ローム
  - 11 10Y 7 / 1 灰白色ローム 酸化鉄分多量混入
  - 12 5Y 5 / 2 灰オリーブ色ローム 10GY 7 / 1 明緑灰色ロームブロック少量混入、10GY 4 / 1 暗緑灰色土ブロック少量混入
  - 13 10GY 7 / 1 明緑灰色土 10YR 3 / 1 黒褐色土少量混入
  - 14 10GY 6 / 1 緑灰色土
- ※全体に酸化鉄分が染み込んでいる

15SE22



- 15SE22
- 1 10YR 3 / 2 黒褐色土 5Y 8 / 3 淡黄色ロームブロック多量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒多量混入
  - 2 10YR 3 / 2 黒褐色土 5Y 8 / 3 淡黄色ロームブロック多量混入
  - 3 5Y 7 / 3 淡黄色ローム
  - 4 10YR 2 / 2 黒褐色土 10GY 5 / 1 緑灰色ローム少量混入
  - 5 10YR 3 / 1 黒褐色土 10Y 5 / 2 オリーブ灰色ロームブロック少量混入
  - 6 10GY 6 / 1 緑灰色ローム 10YR 2 / 2 黒褐色土層状に混入
  - 7 10YR 2 / 2 黒褐色土
  - 8 10GY 5 / 1 緑灰色ローム
- ※1~4層まで酸化鉄分が多量染み込んでいる

IID7b



第44図 西側調査区の井戸(7)

15 S E 26 (第 45 図、写真図版 23)

〔位置〕 III C 3 a、3 b に位置する。プランの約半分が調査区外にかかる。

〔重複〕 なし

〔底面、壁〕 底面はほぼ平坦である。壁は一部不整になり外側に入り込む部分もあるが、それを除くとほぼ垂直に立ち上がり、開口部でやや開く形状である。

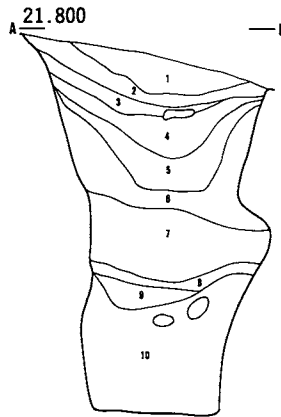
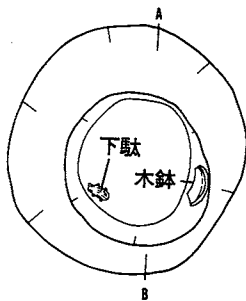
〔埋土〕 7 層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 なし

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 確証はないが 12 世紀の所属であろうか。

15SE23



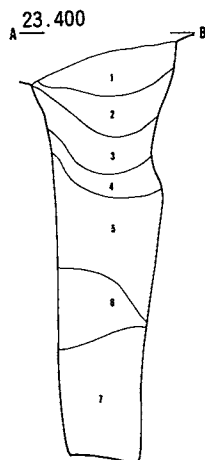
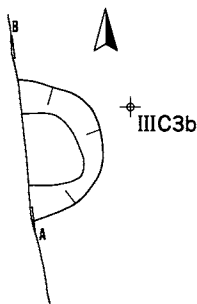
15SE23

- 1 10YR 4 / 1 褐灰色土 10YR 7 / 2 において黄褐色ロームブロック多量混入、10YR 6 / 3 において黄褐色ロームブロック多量混入、炭化物粒少量混入
  - 2 10YR 3 / 1 黒褐色土 10YR 6 / 3 において黄褐色ロームブロック少量混入、炭化物粒微量混入
  - 3 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 7 / 2 において黄褐色ローム粒入り混じり
  - 4 5Y 8 / 2 灰白色ローム 10YR 4 / 2 灰黄褐色土小ブロック少量混入、炭化物粒微量混入
  - 5 5Y 8 / 2 灰白色ローム 10YR 2 / 2 黒褐色土ブロック少量混入、10YR 4 / 2 灰黄褐色土ブロック多量混入、炭化物粒少量混入
  - 6 5Y 7 / 3 淡黄色ローム 10Y 7 / 1 灰白色ロームブロック少量混入
  - 7 10YR 4 / 1 褐灰色土 10Y 6 / 2 オリーブ灰色ロームブロックまだら状に混入
  - 8 10Y 5 / 2 オリーブ灰色ローム
  - 9 10Y 5 / 2 オリーブ灰色ローム 10YR 3 / 1 黒褐色土混入
  - 10 10Y 5 / 2 オリーブ灰色ローム 10Y 5 / 2 オリーブ灰色砂混じり
- ※ 1～7 層まで酸化鉄分が染み込んでいる

III C3i

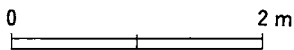


15SE26



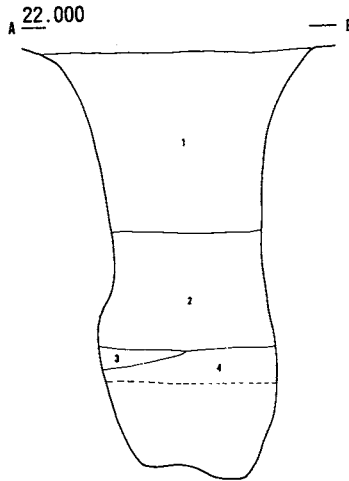
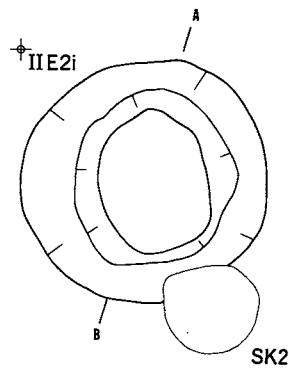
15SE26

- 1 10YR 3 / 3 暗褐色土 10YR 8 / 6 黄褐色土ブロック少量混入、炭化物粒多量混入
- 2 10YR 4 / 3 において黄褐色土 10YR 8 / 6 黄褐色土ブロック多量混入、5Y 7 / 4 浅黄色土ブロック多量混入、炭化物粒微量混入 全体にばやけている
- 3 10YR 3 / 2 黒褐色土 10YR 8 / 6 黄褐色土ブロック少量混入、炭化物粒多量混入、4 層との間に焼土混入
- 4 10YR 3 / 1 黒褐色土 炭化物粒多量混入
- 5 10YR 5 / 1 褐灰色土 5Y 7 / 3 浅黄色ローム混じり 10YR 8 / 6 黄褐色土ブロック少量混入、10YR 3 / 1 黒褐色土ブロック少量混入、炭化物粒多量混入、酸化鉄分混入



第45図 西側調査区の井戸(8)

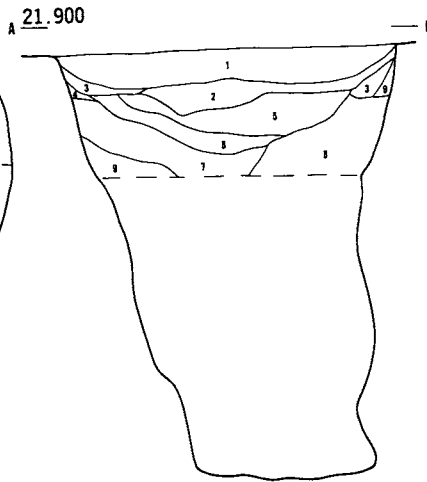
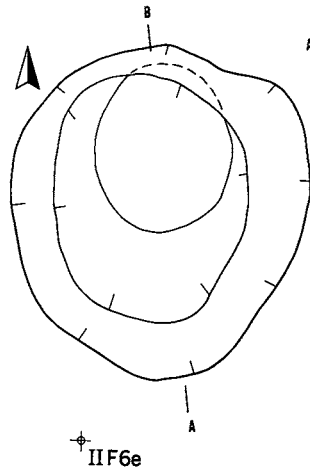
11SE1



11SE1

- 1 10YR3/2 黒褐色土 5Y7/4 浅黄色土塊含む 下部から材出土
- 2 10YR3/2 黒褐色土 5Y7/4 浅黄色土塊含む ややグライ化
- 3 5G5/1 緑灰粘土 砂含む
- 4 5G3/1 暗緑灰粘土 砂わずかに含む

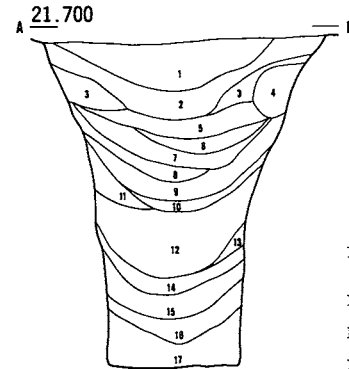
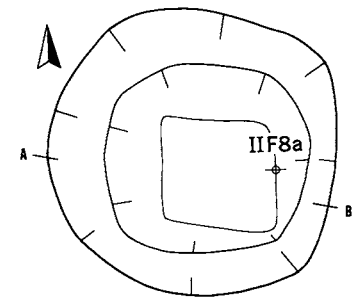
13SE1



13SE1

- 1 10YR3/2 黒褐 粘土質シルト 粘性有り しまりやや有り 粉炭を2cm以下5%含む。にぶい黄褐色粘土を1cm以下2%含む。下面に砂粒を含む
- 2 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性有り しまりやや有り 酸化鉄を粒子状に含む にぶい黄褐色粘土を5mm以下3%粒子状に含む。下面に砂粒を含む
- 3 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 粘性有り しまりやや有り 酸化鉄を粒子状に含む (2より少ない) にぶい黄褐色粘土を20mm以下ブロック状に含む。下面に砂粒を含む
- 4 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粘性しまりやや有り。粉炭を1mm以下1%含む。砂粒を含む
- 5 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粘性しまりやや有り。10YR7/3 にぶい黄褐色粘土を10cm以下ブロック状に15%含む
- 6 7.5YR4/1 灰色 粘土質シルト 粘性有り、しまりやや有り。10YR7/3 にぶい黄褐色粘土を10cm以下ブロック状に15%含む
- 7 2.5Y4/1 浅黄色 粘土 粘性有り、しまりやや有り。水酸化鉄をブロック状に含む
- 8 5Y4/1 灰色 粘土 粘性しまりやや有り、水酸化鉄をブロック状に含む 10YR7/3 にぶい黄褐色粘土を10cm以下ブロック状に15%含む
- 9 2.5Y8/3 淡黄色 粘土 粘性有り、しまりやや有り。暗褐色ブロックを縞状に2%含む 水酸化鉄を含む

13SE2

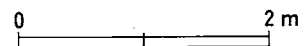


13SE2

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 5YR6/6 橙色土を10%含む。かわらけ片含む
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粉炭2cm以下10%焼土ブロック5cm以下。5YR6/6 橙色土焼土粒を1cm以下10%含む。遺物多量含む
- 3 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 10YR3/4 暗褐色粘土を縞状に3%含む。粉炭2cm以下7%含む
- 4 10YR3/4 暗褐色 シルト 10YR7/3 にぶい黄褐色粘土、10YR6/4 にぶい黄褐色粘土を縞状に25%含む
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄 粘土 水穴のため攪乱をうけている

13SE2

- 6 10YR2/4 灰黄褐 粘土質シルト 酸化鉄を斑点状に含む。2.5Y7/4 浅黄粘土を5cm以下40%含む。粉炭5mm以下3%含む
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐 粘土質シルト 酸化鉄を斑点状に含む。粉炭2mm以下3%含む。10YR7/4 にぶい黄褐色粘土を3cm以下10%含む
- 8 2.5Y3/2 黒褐 粘土質シルト 酸化鉄を斑点状に含む。粉炭1cm以下3%含む。5YR8/2 灰白粘土をブロック状に10%含む 砂粒をわずかに含む
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐 粘土質シルト 粉炭1cm以下3%含む。2.5Y7/3 浅黄粘土を1cm以下7%含む。2.5Y4/1 黄灰粘土をブロック状に20%含む
- 10 10YR3/2 黒褐 粘土質シルト 10YR7/3 にぶい黄褐色粘土、10YR7/6 明黄褐粘土をブロック状に40%含む。酸化鉄を縞状下面に含む
- 11 5Y4/1 灰 粘土 5Y7/2 灰白粘土を1cm以下20%含む。粉炭5mm以下1%含む
- 12 5Y8/2 灰白 粘土 黒褐色土を縞状に含む。下面に酸化鉄を縞状に含む
- 13 2.5Y4/1 黄灰 粘土 粉炭1cm以下1%含む。7.5Y7/2 灰白粘土を20%含む。酸化鉄を縞状に含む。虫物出土
- 14 7.5Y4/1 灰 粘土 7.5Y8/2 灰白粘土を1cm以下10%含む
- 15 2.5Y3/2 黒褐 粘土 10YR7/3 にぶい黄褐。2.5Y7/3 浅黄粘土を25%含む。酸化鉄を縞状に含む
- 16 5Y4/1 灰 粘土 10GY6/1 緑灰粘土を15%含む。酸化鉄を縞状に含む。2.5Y7/3 浅黄粘土を20%含む
- 17 2.5Y3/2 黒褐 粘土 粉炭5mm以下1%含む。2.5Y7/3 浅黄粘土を15%含む



第46図 東側調査区の井戸(1)

11 S E 1 (第46図、写真図版23)

〔位置〕 III E 1 i に位置する。

〔重複〕 11 S K 2 と重複するが本遺構が古い。

〔底面、壁〕 底面にはやや凹凸がある。壁は下半部が上半部より外側に入り込む。開口部はやや広がる。

〔埋土〕 5層に分けられる。人為堆積である。

〔出土遺物〕 埋土1層から中国産白磁碗破片(2050)が出土した。

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 不明であるが、近世以降の可能性が高い。

13 S E 1 (第46図、写真図版23)

〔位置〕 II F 6 e に位置する。

〔重複〕 なし

〔底面、壁〕 底面は平坦で、壁は概ね垂直に立つ。

〔埋土〕 9層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 なし

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 近世以降の所属である。

(笹平克子)

13 S E 2 (第46図、写真図版24)

〔位置〕 II F 8 a に位置する。

〔重複〕 なし

〔底面、壁〕 底面は概ね平坦で、開口部に向かってやや開きながら立ち上がる。

〔埋土〕 17層に分けられる。人為堆積である。埋土上部には焼土のブロックが混じる。

〔出土遺物〕 埋土中から渥美産山茶碗(1407、1408)、須恵器系陶器片口鉢(1458)、手づくねかわらけ(3210、3234、3235、3236、3237、3238、3257、3291、3330、3331、3332、3333、3379、3380、3399、3402)、ロクロかわらけ(3248)が出土した。また埋土の下部から完形の曲物(4101)が出土した。

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 12世紀の所属である。

(笹平克子)

13 S E 3 (第47図、写真図版24)

〔位置〕 II E 7 a に位置する。

〔重複〕 13 S D 27 と重複するが本遺構が新しい。

〔底面、壁〕 底面はほぼ平坦である。壁は垂直に立ち上がり、上半部でやや開く形状である。

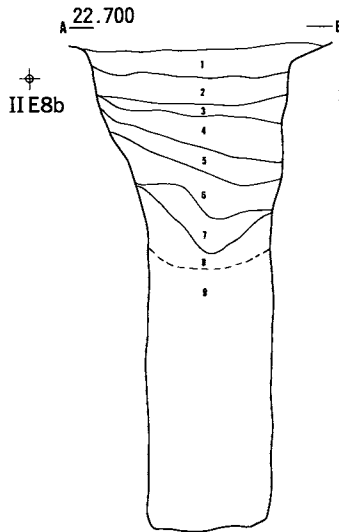
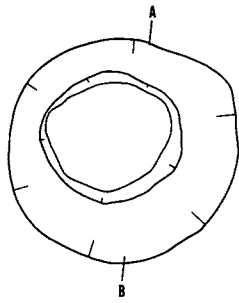
〔埋土〕 9層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 底面から桶(7023)が一個体分ばらばらの状態で出土した。また埋土中から美濃産の陶器皿(6359)が出土した。

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

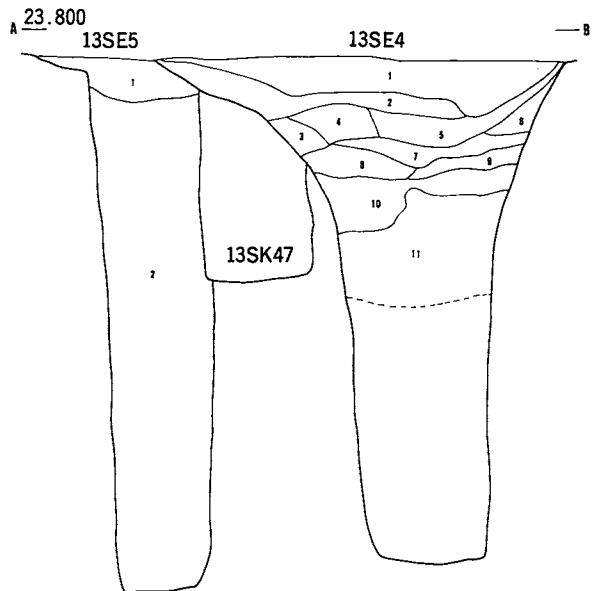
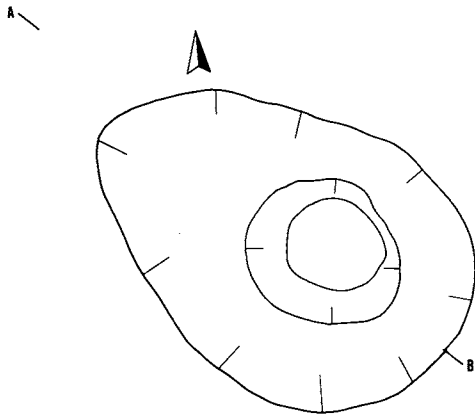
〔年代〕 近世以降の所属である。

13SE3



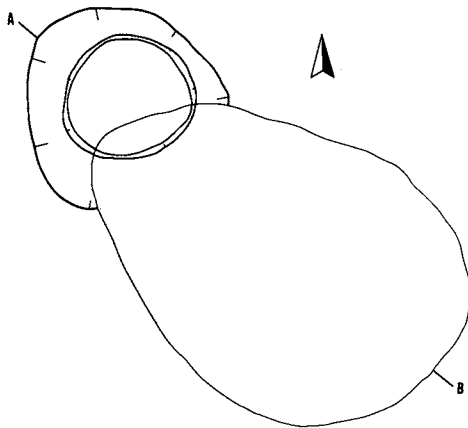
- 13SE3
- 1 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 粉炭、10YR 7 / 6 明黄褐色粘土粒を少量含む。
  - 2 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土をまだらに多量に含む。
  - 3 10YR 4 / 2 灰黄褐色 シルト 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土をブロック状に少量含む。
  - 4 7.5YR 4 / 1 褐灰色 シルト 7.5YR 6 / 2 灰オリーブ土粒少量含む。
  - 5 7.5YR 4 / 1 褐灰色 シルト 7.5YR 6 / 2 灰オリーブ土をまだらに多量に含む。
  - 6 10YR 4 / 1 褐灰色 シルト 10YR 7 / 4 におい黄褐色粘土粒を少量含む。
  - 7 10YR 7 / 4 におい黄褐色 粘土 10YR 4 / 1 褐灰色土をまだらに少量含む。酸化鉄を多量に含む。
  - 8 10YR 2 / 1 黒色 シルト 10YR 7 / 4 におい黄褐色粘土粒を少量含む。
  - 9 10YR 7 / 4 におい黄褐色 粘土 10YR 2 / 1 黒色土粒を多量に含む。

13SE4



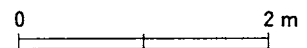
II E8b

13SE5



- 13SE4
- 1 2.5YR 8 / 2 灰白色 粘土 10YR 5 / 1 褐灰色粘土、10YR 7 / 6 明黄褐色粘土をまだらに多量含む。
  - 2 10YR 5 / 1 褐灰色粘土 2.5Y 8 / 2 灰白色、10YR 7 / 6 明黄褐色粘土をまだらに少量含む。
  - 3 2.5Y 8 / 2 灰白色 粘土 10YR 5 / 1 褐灰色粘土をまだらに少量含む。
  - 4 10YR 5 / 1 褐灰色 粘土 2.5Y 8 / 2 灰白色粘土をまだらに多量含む。
  - 5 10YR 5 / 1 褐灰色 粘土 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土をブロック状に多量含む。
  - 6 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土をブロック状に少量含む。
  - 7 10YR 7 / 6 明黄褐色 粘土 10YR 4 / 1 褐灰色粘土をまだらに少量含む。
  - 8 10YR 7 / 6 明黄褐色 粘土 10YR 4 / 1 褐灰色粘土をまだらに少量含む。
  - 9 10YR 5 / 1 褐灰色 シルト 2.5Y 8 / 2 灰白色粘土をまだらに多量含む。
  - 10 10YR 4 / 1 褐灰色 シルト 2.5Y 8 / 2 灰白色粘土をブロック状に少量含む。
  - 11 2.5Y 8 / 2 灰白色 シルト 10YR 5 / 1 褐灰色土をまだらに少量含む。
- 13SE5
- 1 10YR 4 / 1 褐灰色 シルト 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土をブロック状に少量含む。
  - 2 2.5Y 8 / 2 灰白色 粘土 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土をブロック状に少量含む。10YR 3 / 1 黒褐色土をまだらに少量含む。

II E8b



第47図 東側調査区の井戸(2)

### 13 S E 4 (第 47 図、写真図版 24)

〔位置〕 II E 8 a、8 b に位置する。

〔重複〕 13 S E 5、13 S K 47、13 S B 24 の柱穴 P 1036 と重複するが本遺構が新しい。

〔底面、壁〕 底面はほぼ平坦である。壁は垂直に立ち上がり、上半部で徐々に開く形状である。

〔埋土〕 11 層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 埋土中から肥前産の磁器碗(6302)、磁器皿(6316) と瀬戸・美濃産の陶器皿(6364) が出土した。

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 磁器碗(6302)、磁器皿(6316) は肥前IV期(1690～1780年)のもので廃絶はそれ以降である。また近世の掘立柱建物どうしの重複関係の中で新しい 13 S B 24 より本遺構は新しいので、近世でも後半の所属と考えられる。

### 13 S E 5 (第 47 図、写真図版 24)

〔位置〕 II E 8 a、8 b に位置する。

〔重複〕 13 S E 5、13 S K 47 と重複するが本遺構が古い。

〔底面、壁〕 底面はほぼ平坦である。壁は垂直に立ち上がり、最上部で急に開く形状である。

〔埋土〕 2 層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 なし

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 近世の所属と思われる。

### 13 S E 6 (第 48 図、写真図版 24・25)

〔位置〕 II E 8 b に位置する。

〔重複〕 13 S E 7 と重複するが本遺構が新しい。また 13 S K 43 と重複するが本遺構が古い。

〔底面、壁〕 崩落の危険性があり底面まで調査していない。壁は開口部でやや開く形状である。

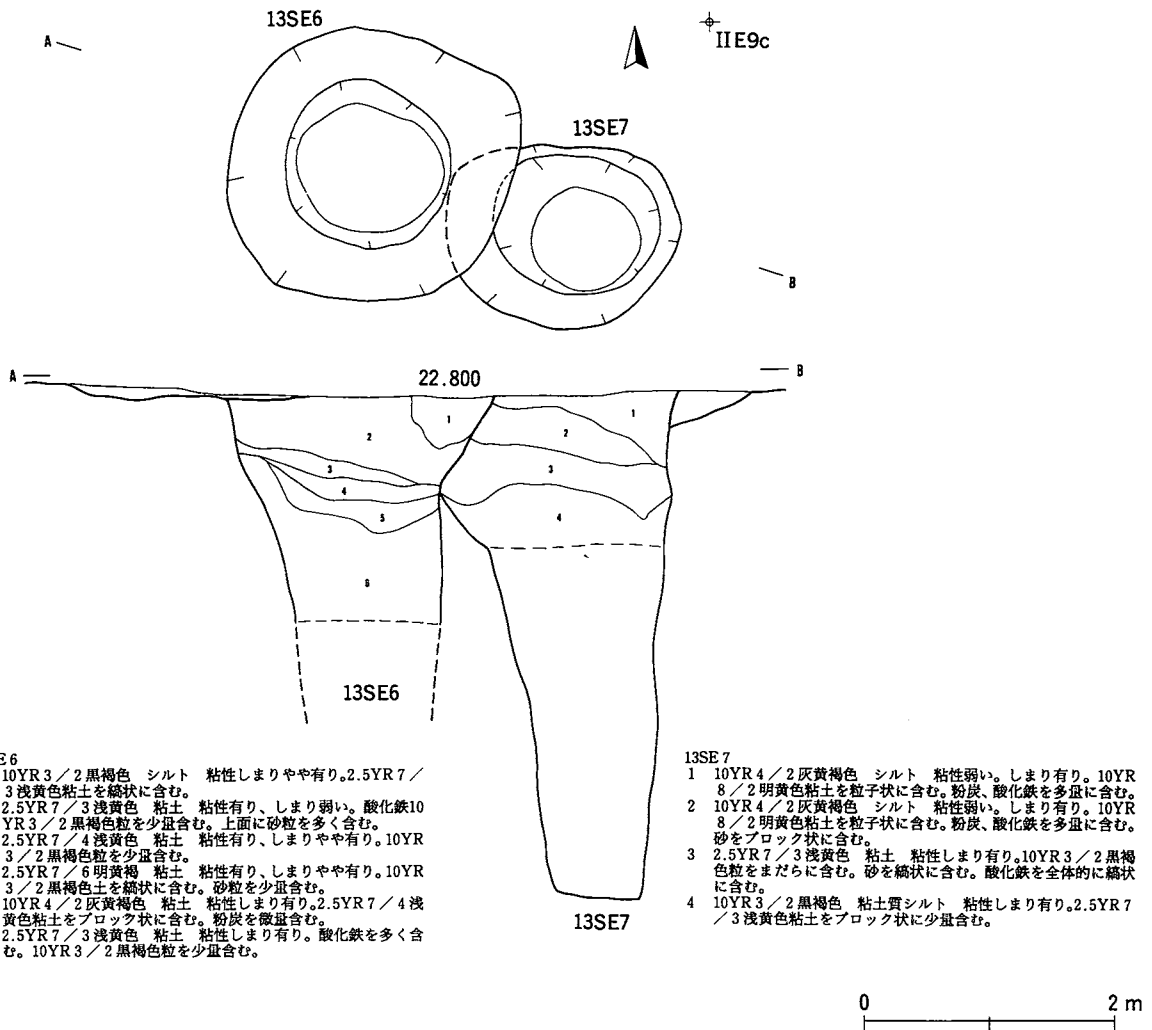
〔埋土〕 6 層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 埋土の中位の同じ位置から肥前産の磁器皿(6329) と美濃産の陶器皿(6371) が出土した。

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 磁器皿(6329) は肥前IV期(1690～1780年)、美濃産の皿(6371) は 18 世紀前半の製作年代である。この 2 枚の皿はいずれもほぼ完形であり、18 世紀代よりそれほど下った時代に廃棄されたとは考えがたい。よって井戸の廃絶年代は 18 世紀の中でのことと考えたい。





第48図 東側調査区の井戸(3)

13 S E 7 (第 48 図、写真図版 25)

〔位置〕 II E 8 b に位置する。

〔重複〕 13 S E 6 と重複するが本遺構が古い。また 13 S K 55 と重複するが本遺構が新しい。

〔底面、壁〕 底面は概ね平坦である。壁は一部を除きほぼ垂直に立つ。

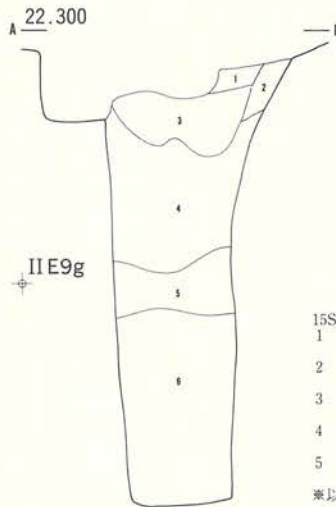
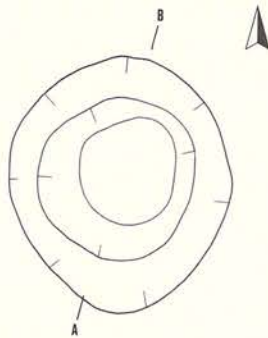
〔埋土〕 4 層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 埋土から肥前産の磁器皿(6317)、磁器瓶(6338) が出土した。

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 磁器皿(6317)、磁器瓶(6338) は肥前IV期 (1690~1780 年) の製作年代である。そして本遺構は 18 世紀代に廃絶したと推定される 13 S E 6 より古い。よって本遺構の廃絶年代は 18 世紀の前半と考えたい。

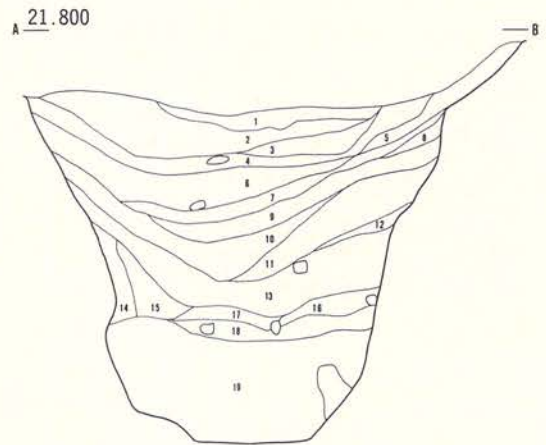
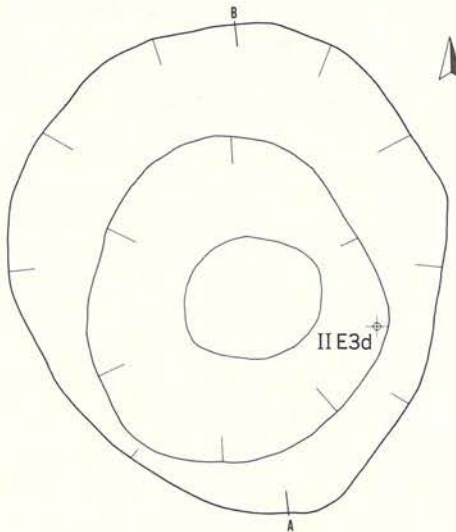
15SE1



15SE1

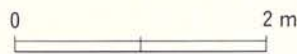
- 1 10YR 3 / 3 暗褐色土 10YR 8 / 2 灰白色ロームブロック少量混入
  - 2 10YR 7 / 6 明黄褐色ローム 10YR 8 / 2 灰白色ローム 10YR 3 / 3 暗褐色土まだら状に微量混入
  - 3 10YR 8 / 2 灰白色ローム 10YR 3 / 3 暗褐色土まだら状に少量混入
  - 4 10YR 7 / 6 明黄褐色ローム 10YR 3 / 3 暗褐色土ブロック多量混入
  - 5 10YR 7 / 6 明黄褐色ローム 10YR 3 / 3 暗褐色土ブロックまだら状に少量混入
- \*以上、すべて人為堆積

15SE25



15SE25

- 1 10YR 3 / 1 黒褐色土 炭化物粒多量混入、焼土粒多量混入 かわらけ片多量混入
- 2 10YR 7 / 8 黄橙色ローム 10YR 3 / 1 黒褐色土まだら状に多量混入
- 3 10YR 3 / 3 暗褐色土 炭化物粒多量混入、焼土粒多量混入
- 4 7.5YR1.7 / 1 黒色土 炭化物粒多量混入
- 5 10YR 6 / 8 明黄褐色ローム 7.5YR1.7 / 1 黒色土粒多量混入
- 6 10YR 2 / 1 黒色土 炭化物粒多量混入
- 7 10YR 4 / 1 褐色土 10Y 7 / 2 灰白色ロームまだら状に少量混入
- 8 10YR 6 / 8 明黄褐色ローム 10YR 4 / 1 褐色土まだら状に多量混入
- 9 10Y 7 / 2 灰白色ローム 10YR 4 / 1 褐色土 10YR 6 / 8 明黄褐色ローム共にまだら状に多量混入
- 10 10YR 4 / 1 褐色土 10Y 7 / 2 灰白色ロームブロック少量混入
- 11 10Y 7 / 2 灰白色ローム 10YR 4 / 1 褐色土ブロック少量混入
- 12 10YR 6 / 8 明黄褐色砂質土
- 13 10Y 7 / 2 灰白色ローム 10YR 4 / 1 褐色土まだら状に多量混入
- 14 10YR 6 / 8 明黄褐色砂質土
- 15 10Y 6 / 2 オリーブ灰色ローム 10YR 4 / 1 褐色土まだら状に多量混入
- 16 10YR1.7 / 1 黒色土 10Y 6 / 2 オリーブ灰色ロームまだら状に微量混入
- 17 10Y 7 / 2 灰白色ローム 10YR1.7 / 1 黒色土ブロック少量混入
- 18 10Y 6 / 2 オリーブ灰色ローム 10YR1.7 / 1 黒色土ブロックまだら状に多量混入
- 19 10Y 3 / 1 オリーブ黒色土 10Y 6 / 2 オリーブ灰色ロームブロック多量混入、石多量混入



第49図 東側調査区の井戸(4)

### 15 S E 1 (第 49 図、写真図版 25)

〔位置〕 II E 8 f、9 f に位置する。

〔重複〕 15 S B 1 の柱穴 (P 191) と重複するが本遺構が古い。

〔底面、壁〕 底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部でやや開く形状である。

〔埋土〕 6 層に分けられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 残存状態が極端に悪く図示できなかったが埋土中から曲物が出土した。径 30 cm 程で、横位の状態で出土した。また埋土中から手づくねかわらけ (3361) が出土した。

〔遺構の性格〕 井戸と考えられる。

〔年代〕 確証はないが曲物が出土したことと、近世建物である 15 S B 1 より古いことから 12 世紀に所属する可能性が高い。

### 15 S E 25 (第 49 図、写真図版 25)

〔位置〕 II E 2 c、2 d、3 c、3 d に位置する。

〔重複〕 15 S D 7、15 S D 39、15 S D 48 と重複するが、本遺構が古い。

〔底面、壁〕 底面は丸みを持っている。壁は開口部に向かって開きながら立ち上がる。

〔埋土〕 19 層に分けられる。人為堆積である。

〔出土遺物〕 埋土中から手づくねかわらけ (3201、3249、3250、3251、3305、3306、3307、3308、3352、3387)、曲物の底板 (4110)、建築部材? (4111、4112、4113) が出土している。

〔遺構の性格〕 開口部の径が大きく、そのわりに確認面からの深さは 3 m 弱と浅く井戸以外の用途の可能性もある。

〔年代〕 出土遺物から 12 世紀の所属と考えられる。

### 3 土坑

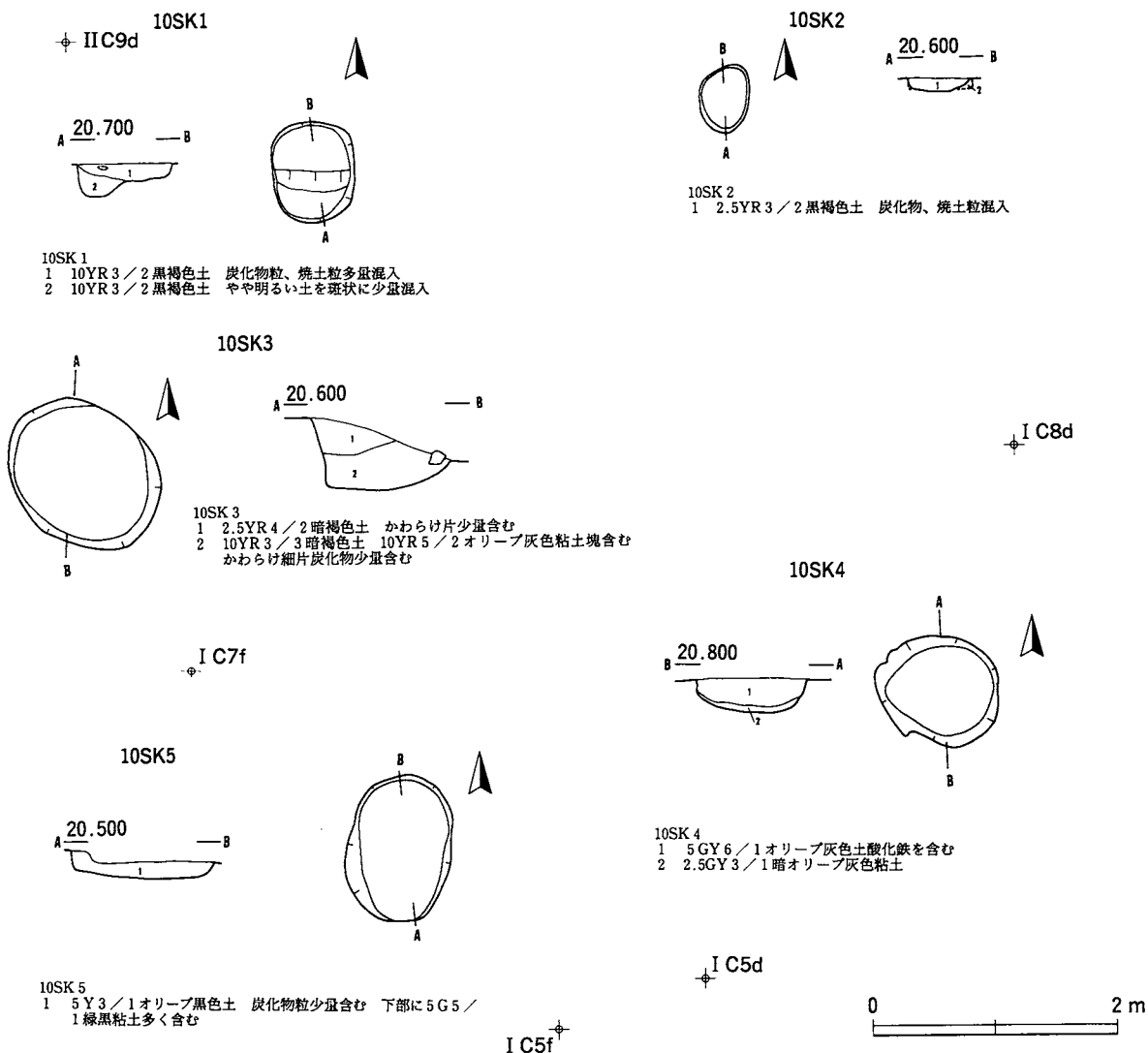
土坑は西側調査区で 36 基、東側調査区で 83 基検出された。西側調査区の土坑、東側調査区の土坑の順に述べていく。

#### 10SK1 (第50図)

〔位置〕 IC8d に位置する。〔重複〕 なし〔底面、壁〕 底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕 2層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 埋土中から手づくねかわらけ (3080、3081、3082)、ロクロかわらけ (3162) が出土した。〔遺構の性格〕 不明である。〔年代〕 12世紀に所属する可能性が高い。

#### 10SK2 (第50図)

〔位置〕 IC8C に位置する。〔重複〕 なし〔底面、壁〕 底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕 1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 不明である。〔年代〕 不明である。



### 10 S K 3 (第 50 図)

〔位置〕 I C 7 f に位置する。〔重複〕 なし〔底面、壁〕 底面は概ね平坦で壁はほぼ垂直に立つ。〔埋土〕 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 埋土中から常滑産片口鉢 (1013)、常滑産壺 (1031) が出土した。〔遺構の性格〕 不明である。〔年代〕 12 世紀に所属する可能性が高い。

### 10 S K 4 (第 50 図)

〔位置〕 I C 5 e に位置する。〔重複〕 なし〔底面、壁〕 底面は平坦で壁はほぼ垂直に立つ。〔埋土〕 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 不明である。〔年代〕 不明である。

### 10 S K 5 (第 50 図)

〔位置〕 I C 5 d に位置する。〔重複〕 なし〔底面、壁〕 底面は平坦で壁はなだらかに立つ。〔埋土〕 1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 不明である。〔年代〕 不明である。

### 15 S K 15 (第 51 図、写真図版 26)

〔位置〕 II C 9 j、II D 9 a に位置する。〔重複〕 なし〔底面、壁〕 底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 不明であるが、本遺構と並んでいる 15 S K 16、15 S K 17、15 S K 19 と規模、形状が類似しており同じ性格の遺構と考えられる。〔年代〕 不明である。

### 15 S K 16 (第 51 図、写真図版 26)

〔位置〕 II D 9 a、II D 9 b に位置する。〔重複〕 なし〔底面、壁〕 底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 不明であるが、本遺構と並んでいる 15 S K 15、15 S K 17、15 S K 19 と規模、形状が類似しており同じ性格の遺構と考えられる。〔年代〕 不明である。

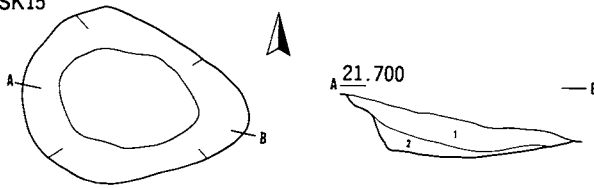
### 15 S K 17 (第 51 図、写真図版 26)

〔位置〕 II C 8 j、II D 8 a に位置する。〔重複〕 15 S B 19 の柱穴 (P242) と重複するが前後関係を把握することができなかった。〔底面、壁〕 底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 不明であるが、本遺構と並んでいる 15 S K 15、15 S K 16、15 S K 19 と規模、形状が類似しており同じ性格の遺構と考えられる。〔年代〕 不明である。

### 15 S K 18 (第 51 図、写真図版 27)

〔位置〕 II C 7 g、II C 7 h に位置する。〔重複〕 15 S B 25 の柱穴 (P224) と重複し、本遺構が新しい。〔底面、壁〕 底面は平らで、壁はほぼ垂直に立つ。〔埋土〕 2 層に分けられる。人為堆積と考えられる。〔出土遺物〕 底面に桶の底板があった。側板は底近くにわずかに残存していた。底板の樹種は松属複維管束亜種の一

15SK15

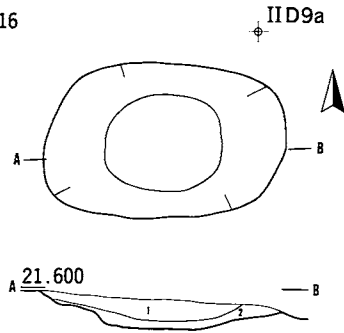


- 15SK15  
 1 10YR 4 / 2 灰褐色土 焼土粒少量混入、炭化物粒少量混入 か  
 わらけ片出土  
 2 10YR 4 / 2 灰褐色土 10YR 7 / 2 灰白色ローム粒少量混入  
 炭化物粒少量混入

IID9a

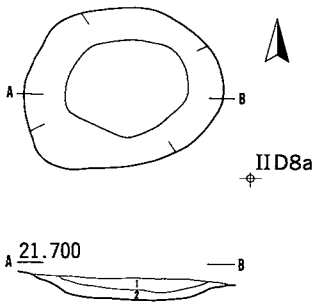
⊕

15SK16



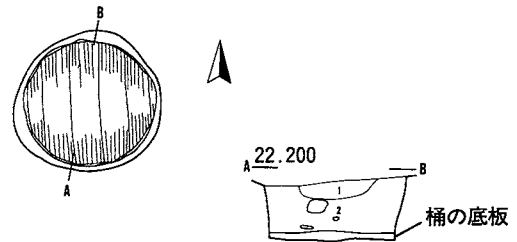
- 15SK16  
 1 10YR 4 / 2 灰褐色土 炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入  
 2 10YR 3 / 1 黒褐色土 10YR 8 / 2 灰白色ローム粒少量混入

15SK17



- 15SK17  
 1 10YR 4 / 1 褐灰色土 10YR 7 / 3 において黄褐色ローム少量混  
 入、炭化物粒少量混入  
 2 10YR 4 / 1 褐灰色土 10YR 7 / 3 において黄褐色ローム微量混  
 入、炭化物粒少量混入

15SK18

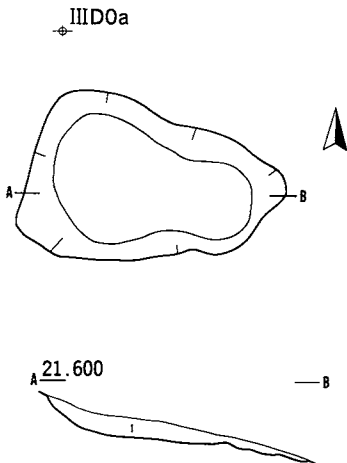


- 15SK18  
 1 10YR 7 / 8 黄褐色ローム 10YR 4 / 1 褐灰色土まだら状に少  
 量混入  
 2 10YR 4 / 1 褐灰色土 砂多量混入 しまりなし  
 ※桶を埋設している

IIC7h

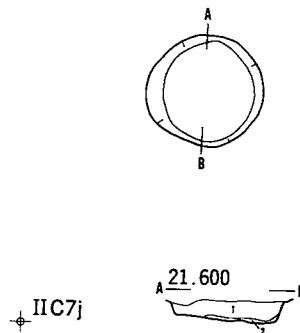
⊕

15SK19



- 15SK19  
 1 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 7 / 2 において黄褐色ローム粒少  
 量混入、炭化物粒微量混入、焼土粒微量混入

15SK20



- 15SK20  
 1 10YR 4 / 3 において黄褐色土 10YR 7 / 3 において黄褐色ローム  
 混じり  
 2 10YR1.7 / 1 黒色焼土 10YR 4 / 3 において黄褐色土少量混入

0 2 m

第51図 西側調査区の土坑(2)

種である。〔遺構の性格〕底面に桶の底板があり、桶を埋設した遺構である。用途は肥だめ又は便所と推測される。〔年代〕近世の遺構である。

#### 15 S K 19 (第 51 図、写真図版 27)

〔位置〕IIC 9 j、IID 9 a に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明であるが、本遺構と並んでいる 15 S K 15、15 S K 16、15 S K 17 と規模、形状が類似しており同じ性格の遺構と考えられる。〔年代〕不明である。

#### 15 S K 20 (第 51 図、写真図版 27)

〔位置〕IIC 7 j に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。〔埋土〕2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

#### 15 S K 21 (第 52 図、写真図版 27)

〔位置〕IID 7 b に位置する。〔重複〕15 S E 5 と重複するが、重複部がわずかで前後関係を判断できなかった。〔底面、壁〕底面はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。〔埋土〕2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

#### 15 S K 22 (第 52 図、写真図版 27、28)

〔位置〕IIC 5 i に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。〔埋土〕1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

#### 15 S K 23 (第 52 図、写真図版 28)

〔位置〕IIC 5 h、5 i、IIC 6 h、6 i に位置する。〔重複〕15 S B 11 の柱穴 (P627) と 15 S B 12 の柱穴 (P625)、15 S D 44 と重複し、本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は丸みを持ち、壁は斜めに立つ。〔埋土〕3 層に分けられる。人為堆積と考えられる。〔出土遺物〕図示しなかったが埋土の 2 層中に木片が多量に混入している。またこの層から磁器碗 (6004、6005、6044、6047、6050、6051、6052、6053、6054、6055、6056、6057、6058、6064)、磁器皿 (6115、6121)、磁器猪口 (6129)、磁器火入れ (6137)、陶器碗 (6177、6180、6182、6189)、陶器香炉 (6221)、陶器土瓶 (6224) 陶器搗鉢 (6231、6253、6256)、砥石 (7303、7304)、常滑産甕の破片 (1086) が出土した。〔遺構の性格〕多量の陶磁器の破片と木片が出土したことから、ゴミの廃棄坑と推定される。〔年代〕出土した陶磁器の年代観から幕末から明治時代初頭頃の廃棄行為と考えられる。

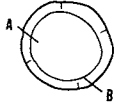
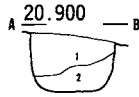
#### 15 S K 24 (第 52 図、写真図版 28)

〔位置〕IIC 0 g に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。〔埋土〕2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。



15SK21

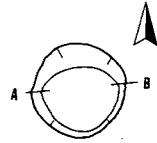
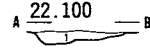
II D7b



- 15SK21  
 1 10YR 3 / 4 暗褐色土 炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入  
 2 10YR 3 / 4 暗褐色土 10YR 7 / 3 におい黄橙色ローム多量混入、10YR 7 / 8 黄橙色土多量混入、炭化物粒少量混入

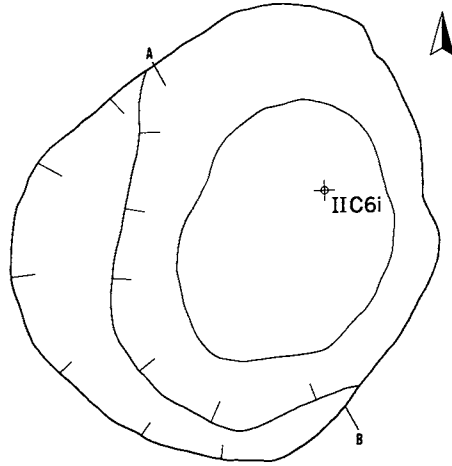
15SK22

II C6i



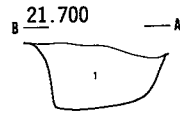
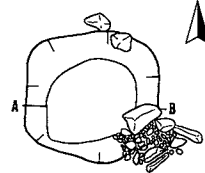
- 15SK22  
 1 10YR 3 / 4 暗褐色土 10YR 7 / 1 灰白色ロームブロック多量混入、炭化物粒少量混入、酸化鉄少量混入

15SK23



- 15SK23  
 1 10YR 3 / 1 黒褐色土 10YR 3 / 2 黒褐色土多量混入、10Y 6 / 1 灰色ロームブロック少量混入、炭化物粒多量混入、酸化鉄分多量混入  
 2 10YR 2 / 2 黒褐色土 10YR 6 / 1 灰色ロームブロック少量混入、炭化物粒多量混入 酸化鉄少量混入 炭化した木片群出土  
 3 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 炭化物粒少量混入

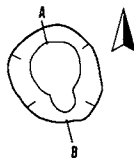
15SK25



- 15SK25  
 1 10GY 6 / 1 緑灰色砂 しまりなし

II C5e

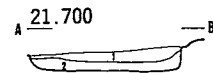
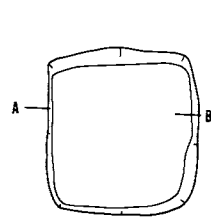
15SK24



- 15SK24  
 1 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 8 / 6 黄橙色ロームまだら状に多量混入  
 2 10YR 3 / 1 黒褐色土 炭化物粒少量混入

II C0g

15SK27



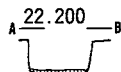
- 15SK27  
 1 10YR 2 / 3 黒褐色土 10YR 7 / 3 におい黄橙色ロームブロック少量混入、10YR 7 / 3 灰白色ロームブロック微量混入、炭化物粒微量混入、焼土粒微量混入  
 2 10YR 2 / 2 黒褐色土 10YR 7 / 4 におい黄橙色ロームブロック多量混入、10Y 7 / 3 灰白色ロームブロック少量混入、炭化物粒少量混入

II C5d

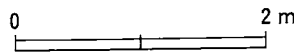
15SK26



II C6g



桶の底板



第52図 西側調査区の土坑(3)

#### 15 S K 25 (第 52 図、写真図版 28)

〔位置〕II C 5 e に位置する。〔重複〕15 S B 26 (1号礎石建物) と重複するが、礎石建物の構築のために造成された整地層に掘り込まれており、15 S B 26 の構築時に構築されたと考えられる。〔底面、壁〕底面はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積と考えられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明であるが上述のように、礎石建物の構築時になんらかの必要があつて掘り込まれ、すぐに埋めもどされたと考えられる。〔年代〕15 S B 26 の推定構築年代、18世紀末ごろと考えられる。

#### 15 S K 26 (第 52 図、写真図版 28)

〔位置〕II C 6 g に位置する。〔重複〕15 S B 15 の柱穴 (P583) と重複し、本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は平らで、壁はほぼ垂直に立つ。〔埋土〕当初柱穴と考えて掘り下げてしまい、埋土を観察しなかった。〔出土遺物〕底面に桶の底板があつた。底板の樹種は杉である。〔遺構の性格〕底面に桶の底板があり、桶を埋設した遺構である。用途は肥だめ又は便所と推測される。〔年代〕15 S B 15 の年代が近世と考えられ、それよりも新しい本遺構は近世以降の所属となる。

#### 15 S K 27 (第 52 図、写真図版 28、29)

〔位置〕II C 5 d に位置する。〔重複〕15 S B 8 の柱穴 (P508) と 15 S E 18 と重複し、本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。〔埋土〕2層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕近世～近代と考えられる。

#### 15 S K 28 (第 53 図、写真図版 29)

〔位置〕II C 4 c に位置する。〔重複〕15 S B 10 のプラン内に位置するが直接の重複がなく前後関係は不明である。〔底面、壁〕底面はやや丸みを帯び、壁は垂直に立ちあがる。〔埋土〕当初本遺構を柱穴と考え掘り下げてしまったため、埋土の観察をおこなわなかった。底面に瓜類と思われる種が堆積していた。〔出土遺物〕上述のように種子が出土した。〔遺構の性格〕平泉遺跡群で検出される「トイレ状土坑」である。〔年代〕他の平泉遺跡群で検出された「トイレ状遺構」の年代観から 12 世紀代に所属すると考えられる。

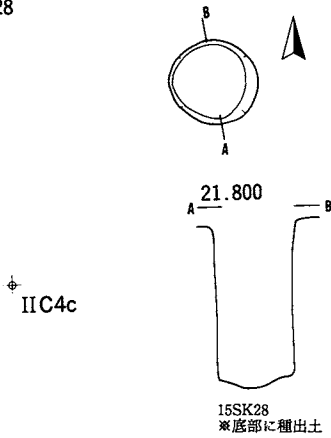
#### 15 S K 29 (第 53 図、写真図版 29)

〔位置〕II C 6 d に位置する。〔重複〕15 S B 7 のプラン内に位置するが直接の重複がなく前後関係は不明である。〔底面、壁〕底面はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。〔埋土〕2層に分けられる。おそらく人為堆積と考えられる。〔出土遺物〕常滑甕 (1049) の破片、常滑甕の破片 (1151、1153)、渥美甕の破片 (1215、1225)、在地産陶器の壺破片 (1283)、白磁水注の破片 (2014)、手づくねかわらけ (3102) が出土している。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕出土遺物から 12 世紀の所属と考えられる。

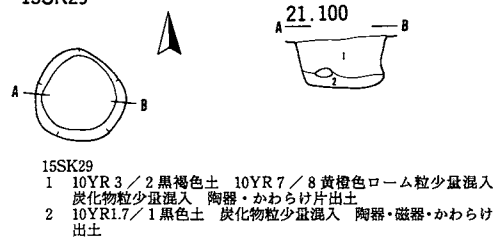
#### 15 S K 30 (第 53 図、写真図版 29)

〔位置〕II C 4 c に位置する。〔重複〕15 S B 8 の柱穴 (P474) と重複し、本遺構が古い。また 15 S B 10 のプラン内に位置するが直接の重複がなく前後関係は不明である。〔底面、壁〕底面はやや丸みを帯び、壁は垂直に立ちあがる。〔埋土〕4層に分けられる。3、4層は有機質分が多い土で、3層には瓜類の種が多量に混入する。1、2層は人為的に埋め戻したと考えられる。1層には大きな礫が混入している。〔出土遺物〕上述

15SK28

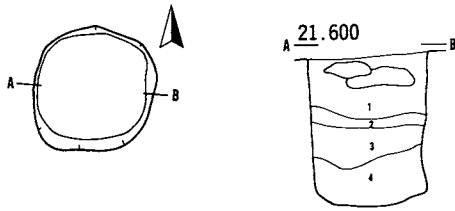


15SK29



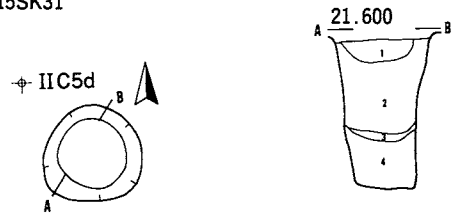
- 15SK29  
 1 10YR 3 / 2 黒褐色土 10YR 7 / 8 黄褐色ローム粒少量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入 陶器・かわらけ片出土  
 2 10YR 1.7 / 1 黒色土 炭化物粒少量混入 陶器・磁器・かわらけ出土

15SK30



- 15SK30  
 1 10YR 3 / 4 暗褐色土 10YR 7 / 3 において黄褐色ロームブロック微量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入  
 2 10YR 3 / 3 暗褐色土 10YR 7 / 4 において黄褐色ロームブロック多量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入  
 3 10YR 3 / 3 暗褐色土 炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入 種多量に出土  
 4 10YR 3 / 2 黒褐色土 炭化物粒多量混入、焼土粒微量混入

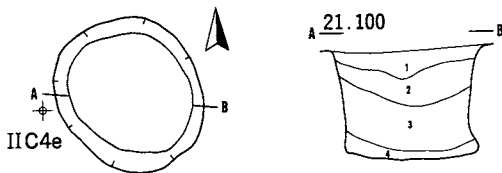
15SK31



- 15SK31  
 1 10YR 3 / 4 暗褐色土 5Y 7 / 4 浅黄色ロームブロック少量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入  
 2 5Y 7 / 4 浅黄色ローム 10YR 3 / 3 暗褐色土少量混入 焼土粒少量混入 しまりなし  
 3 10Y 6 / 1 灰色ローム  
 4 10YR 3 / 1 黒褐色土 上部より種・竹屑多量出土

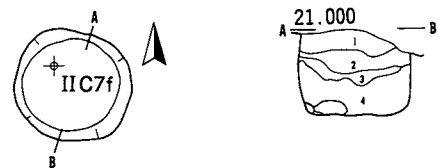
IIC4d

15SK32

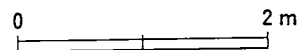


- 15SK32  
 1 10YR 3 / 2 黒褐色土 10YR 3 / 4 暗褐色土まだらに混じり 10YR 5 / 6 黄褐色土ブロック少量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒多量混入  
 2 10YR 2 / 2 黒褐色土 10YR 3 / 4 暗褐色土まだらに混じり 炭化物粒少量混入、焼土粒多量混入  
 3 10YR 2 / 2 黒褐色土 炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入  
 4 10Y 6 / 2 オリーブ灰色ローム 10YR 3 / 1 黒褐色土微量混入

15SK33



- 15SK33  
 1 10YR 3 / 2 黒褐色土 10Y 7 / 2 灰白色ロームブロック多量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒多量混入  
 2 10Y 6 / 1 灰色ローム 10YR 3 / 2 黒褐色土筋状に混入 10YR 5 / 3 において黄褐色土少量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒多量混入  
 3 10YR 3 / 2 黒褐色土 10Y 6 / 1 灰色ロームブロック多量混入、10YR 5 / 3 において黄褐色土少量混入、炭化物粒微量混入、焼土粒多量混入  
 4 10YR 3 / 2 黒褐色土 炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入  
 5 10Y 6 / 1 灰色ローム 酸化鉄分混入



第53図 西側調査区の土坑(4)

のように瓜類の種子が出土した。また渥美産片口鉢（1159）、渥美産甕の底部破片（1270）、手づくねかわらけ（3061、3115）、漆器椀（4102）が3層中から出土した。〔遺構の性格〕平泉遺跡群で検出される「トイレ状土坑」である。〔年代〕出土遺物と他の平泉遺跡群で検出された「トイレ状遺構」の年代観から12世紀代に所属すると考えられる。

#### 15 S K 31（第53図、写真図版30）

〔位置〕IIC 4 dに位置する。〔重複〕15 S B 10のプラン内に位置するが直接の重複がなく前後関係は不明である。〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は垂直に立ちあがる。〔埋土〕4層に分けられる。4層は有機質分が多い土で、瓜類と思われる種、竹屑？が多量に混入する。1、2、3層は人為的に埋め戻したと考えられる。〔出土遺物〕上述のように種子が出土した。また埋土中から常滑産甕の破片（1129）と渥美産片口鉢の破片（1164）、手づくねかわらけ（3099）が出土した。〔遺構の性格〕平泉遺跡群で検出される「トイレ状土坑」である。〔年代〕出土遺物と他の平泉遺跡群で検出された「トイレ状遺構」の年代観から12世紀代に所属すると考えられる。

#### 15 S K 32（第53図、写真図版30）

〔位置〕IIC 3 e、4 eに位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は垂直に立ちあがる。〔埋土〕4層に分けられる。人為堆積の可能性が高い。〔遺構の性格〕不明〔出土遺物〕なし〔年代〕12世紀代に所属する可能性が高い。

#### 15 S K 33（第53図、写真図版30）

〔位置〕IIC 6 e、6 f、IIC 7 e、7 fに位置する。〔重複〕15 S B 7の柱穴（P621）と重複し、本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立つ。〔埋土〕4層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕15 S B 7の年代が近世と考えられ、それより新しい本遺構も近世以降の所属となる。

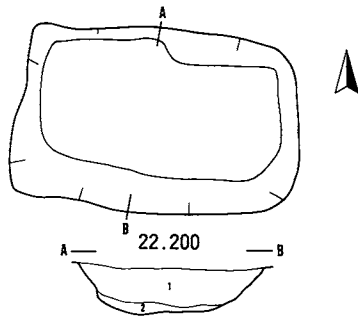
#### 15 S K 34（第54図、写真図版30）

〔位置〕IIC 5 gに位置する。〔重複〕15 S K 40と15 S B 15の柱穴（P591）と重複する。本遺構は15 S K 40より古く、15 S B 15の柱穴（P591）より新しい。〔底面、壁〕底面はやや丸みを持ち、壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕2層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕15 S B 15の年代が近世と考えられ、それより新しい本遺構は近世以降の所属となる。

#### 15 S K 35（第54図、写真図版30、31）

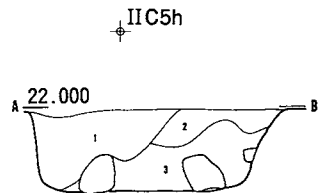
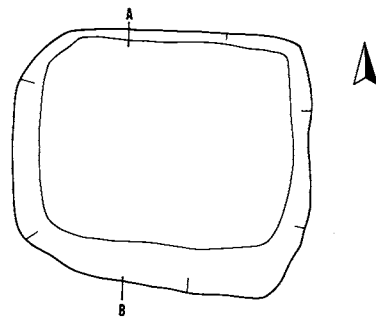
〔位置〕IIC 5 g、5 hに位置する。〔重複〕15 S K 39と重複し、本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。〔埋土〕3層に分けられる。人為堆積である。〔出土遺物〕埋土中からコンクリートのかげらが出土した。〔遺構の性格〕便所の建物である15 S B 28（3号礎石建物）と接しており、便所に関連するものと考えられる。〔年代〕本遺構と関連が考えられる15 S B 28は昭和41年（1966）に火災のため焼失しており、本遺構もこの時に廃絶したと考えられる。

15SK34



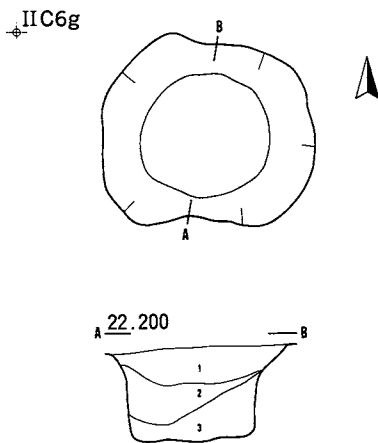
- 15SK34  
 IIC5g  
 1 5Y5/4 オリーブ色ローム 10YR2/2 黒褐色土多量混入  
 炭化物粒微量混入、焼土粒少量混入  
 2 5YR6/3 オリーブ黄色ローム 炭化物粒微量混入、焼土粒少  
 量混入

15SK35



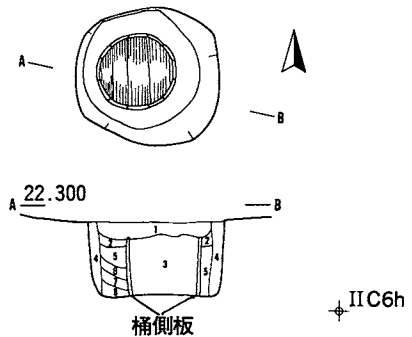
- 15SK35  
 IIC5h  
 1 5Y2/2 オリーブ黒色土 10Y7/2 灰白色ローム北側に混  
 入、酸化鉄分混入  
 2 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒微量混入 小石が多量混入  
 3 10Y6/2 オリーブ灰色ローム 5Y3/2 オリーブ黒色土混じ  
 り 焼土粒少量混入 鉄屑・鎌番など出土

15SK36

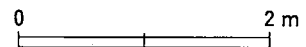


- 15SK36  
 IIC6g  
 SK36  
 1 10YR2/2 黒褐色土 2.5Y4/6 オリーブ褐色ロームブロック  
 上縁部に多量混入 炭化物粒多量混入、焼土粒微量混入  
 2 10YR3/2 黒褐色土 2.5Y5/4 黄褐色ロームブロック多量混  
 入、炭化物粒微量混入  
 3 10Y6/2 オリーブ灰色ローム 10YR3/2 黒褐色土ブロック  
 少量混入

15SK37



- 15SK37  
 IIC6h  
 1 10YR3/4 暗褐色土 炭化物粒多量混入  
 2 10YR3/1 黒褐色土 炭化物粒微量混入  
 3 10YR3/1 黒褐色土 炭化物粒少量混入、酸化鉄分多量混入  
 4 2.5Y6/2 灰黄色ローム 炭化物粒少量混入  
 5 10YR2/3 黒褐色土  
 6 10YR2/3 黒褐色土 10Y5/2 オリーブ灰色ロームブロック  
 塊多量混入  
 7 10YR2/2 黒褐色土 10Y5/2 オリーブ灰色ロームブロック  
 少量混入  
 8 2.5Y6/2 灰黄色ローム 10YR3/2 黒褐色土少量混入  
 ※1~2、5~8層に酸化鉄分微量混入  
 ※3層の下に桶の材出土



第54図 西側調査区の土坑(5)

15 S K 36 (第 54 図、写真図版 31)

〔位置〕II C 5 g に位置する。〔重複〕15 S B 16 の柱穴 (P617) と重複し、本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち開口部付近でやや広がる。〔埋土〕3 層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から磁器皿 (6110) が出土している。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕15 S B 16 の年代が近世と考えられ、それより新しい本遺構は近世以降の所属となる。

15 S K 37 (第 54 図、写真図版 31)

〔位置〕II C 6 g に位置する。〔重複〕15 S B 12、S B 16 のプラン内にあるが直接重複する柱穴がなく前後関係は不明である。どちらかの建物に伴う可能性も高い。〔底面、壁〕底面は平らで、壁はほぼ垂直に立つ。〔埋土〕桶を埋設するために埋めた土と桶の中に堆積した土に分けられる。桶の内部の土は人為堆積と考えられる。〔出土遺物〕桶が埋設されていた。底板の樹種は松属複雑維管束亜種の一つで、側板の樹種は杉である。また桶を埋設するための掘方の埋土から磁器皿 (6070)、陶器碗 (6190)、寛永通寶 (7211) が出土した。〔遺構の性格〕桶を埋設した遺構である。用途は肥だめ又は便所と推測される。建物に伴うのであれば便所の可能性が高い。〔年代〕掘方中から出土した寛永通寶は鑄所を判別できなかったが新寛永である。また磁器皿は肥前IV期 (1690～1780 年) の年代である。これらのことから、本遺構は 18 世紀中に構築されたと考えたい。

15 S K 38 (第 55 図、写真図版 31、32)

〔位置〕II C 5 g に位置する。〔重複〕15 S K 39 と 15 S K 40 と 15 S B 9 の柱穴 (P584) と重複する。本遺構は 15 S K 40 より古く、15 S K 39、15 S B 9 の柱穴 (P584) より新しい。〔底面、壁〕底面は段をもっている。壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕3 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕底面が円形に還元色を呈する部分があるが、その性格は不明である。〔年代〕15 S B 9 の年代が近世と考えられ、それより新しい本遺構は近世以降の所属となる。

15 S K 39 (第 55 図、写真図版 32)

〔位置〕II C 5 g に位置する。〔重複〕15 S K 35、15 S K 38、15 S K 40、15 S B 16 の柱穴 (P623) と重複する。本遺構はこれらの遺構より古い。〔底面、壁〕底面は平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。〔埋土〕3 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕近世と考えられる。

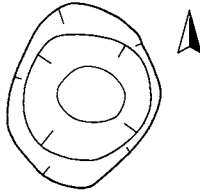
15 S K 40 (第 55 図、写真図版 32)

〔位置〕II C 5 g に位置する。〔重複〕15 S K 34、15 S K 38、15 S K 39 と重複する。本遺構はこれらの遺構より新しい。〔底面、壁〕本体部分とそれに付随するテラス状の部分からなる遺構である。本体部分は丸みをもった底面で、壁はやや斜めに立ち上がる。〔埋土〕3 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕近世以降の所属と考えられる。

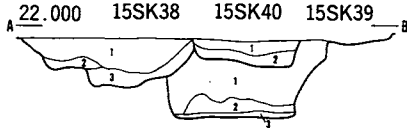
15 S K 41 (第 55 図、写真図版 32)

〔位置〕II C 6 f、6 g に位置する。〔重複〕15 S B 27 (2 号礎石建物) に伴う厩のくぼみより古く、15 S B 15 の柱穴 (P692) と重複するが、前後関係を把握できなかった。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底

15SK38

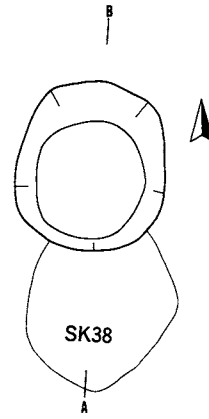


φ IIC5h



- 15SK38  
 1 10YR 3 / 1 黒褐色土 酸化鉄分混入  
 2 10Y 7 / 2 灰白色ローム 10YR 3 / 1 黒褐色土少量混入、酸化鉄分混入  
 3 10GY 7 / 1 明緑灰色ローム 10GY 3 / 1 暗緑灰色ローム粒多量混入 10YR 3 / 1 黒褐色土ブロック微量混入、焼土粒少量混入

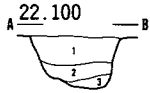
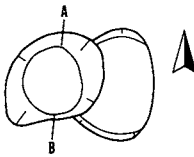
15SK39



φ IIC5h

- 15SK39  
 1 10GY 7 / 1 明緑灰色ローム 10GY 3 / 1 暗緑灰色ローム粒多量混入、酸化鉄分混入  
 2 10GY 7 / 1 明緑灰色ローム 10GY 3 / 1 暗緑灰色ローム粒少量混入 10YR 3 / 1 黒褐色土ブロック多量混入、酸化鉄分混入  
 3 5Y 6 / 3 オリーブ黄色砂 酸化鉄分混入

15SK40

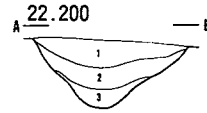
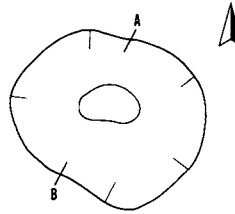


φ IIC5h

- 15SK40  
 1 10Y 6 / 2 オリーブ灰色ローム 10YR 4 / 1 褐灰色土ブロック少量混入、焼土粒多量混入、酸化鉄分混入 かない  
 2 10GY 7 / 1 明緑灰色ローム 10GY 3 / 1 暗緑灰色ローム多量混入、焼土粒多量混入、酸化鉄分混入 やわらかい  
 3 10GY 6 / 1 緑灰色ローム 10GY 3 / 1 暗緑灰色ローム少量混入

φ IIC7g

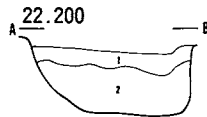
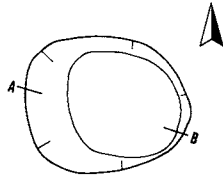
15SK41



- 15SK41  
 1 10YR 3 / 1 黒褐色土 10Y 6 / 1 灰色ロームブロック多量混入、酸化鉄分多量混入  
 2 10YR 3 / 2 黒褐色土 10Y 6 / 2 オリーブ灰色ロームブロック多量混入  
 3 10YR 4 / 1 褐灰色土 10Y 5 / 1 灰色ローム多量混入 10GY 6 / 1 緑灰色土ブロック少量混入

15SK42

φ IIC6h

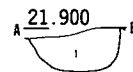
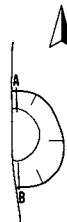


- 15SK42  
 1 5Y 3 / 1 オリーブ黒色土 5Y 7 / 4 浅黄色ロームブロック少量混入、酸化鉄分混入  
 2 10GY 6 / 1 緑灰色ローム 焼土粒少量混入



15SK43

φ IIIC0b



- 15SK43  
 1 10YR 2 / 3 黒褐色土 10YR 5 / 4 におい黄褐色土粒多量混入、炭化物多量混入 焼土粒微量混入

第55図 西側調査区の土坑(6)



面と壁面の区別ができない。〔埋土〕3層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕磁器碗（6018）が出土した。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕出土遺物から近世に所属する遺構と考えられる。

#### 15 S K 42（第55図、写真図版32）

〔位置〕II C 5 g、5 hに位置する。〔重複〕15 S B 28（3号礎石建物）のプラン内にあり、本遺構は15 S B 28に伴うと考えられる。〔底面、壁〕底面はほぼ平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。〔埋土〕2層に分けられる。人為堆積である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕便所の建物である15 S B 28の建物内にあり、便所に関連するものと考えられる。〔年代〕本遺構と関連が考えられる15 S B 28は昭和41年（1966）に火災のため焼失しており、本遺構もこの時に廃絶したと考えられる。本遺構の埋土のしまり具合からも、この年代は妥当である。

#### 15 S K 43（第55図、写真図版33）

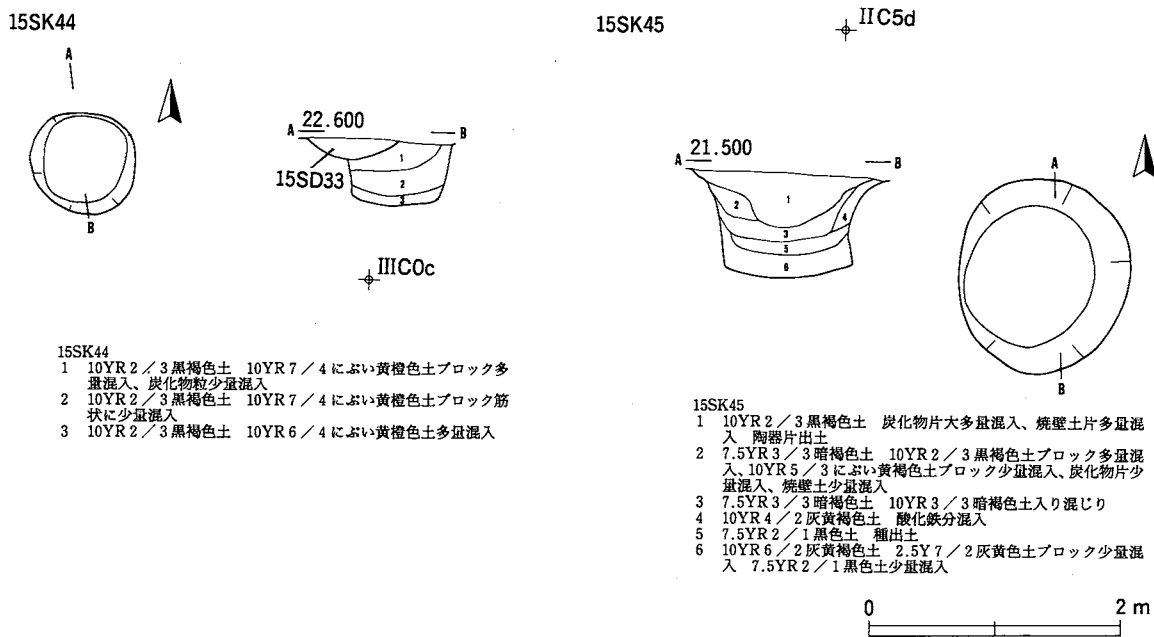
〔位置〕II C 9 bに位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

#### 15 S K 44（第56図、写真図版33）

〔位置〕III C 0 bに位置する。〔重複〕15 S D 33と重複し本遺構が古い。〔底面、壁〕底面はやや丸みを持ち、壁は垂直に立ち上がる。〔埋土〕3層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕12世紀に所属すると思われる15 S D 33より古く、12世紀代に所属する可能性が高い。

#### 15 S K 45（第56図、写真図版33）

〔位置〕II C 4 dに位置する。〔重複〕15 S B 8、15 S B 10のプラン内に位置するが直接の重複がなく前後関係は不明である。〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がり、開口部付近でやや開く。〔埋土〕6層に分けられる。人為堆積と考えられる。1層中には焼けた壁土、陶器、磁器片が多量に混入している。5層中にはわずかだが瓜類と思われる種子が混入していた。〔出土遺物〕1層中から焼けた壁土3.6 kg（9号ビニール袋2つ分）と常滑産片口鉢（1006、1007、1010）、常滑産二筋壺（1025、1026）、渥美産片口鉢（1160、1161、1662）、須恵器系陶器鉢（1279、1280）、在地産陶器壺（1285）、同安窯系青磁皿（2024～2032）、手づくねかわらけ（3026）が出土した。1025の二筋壺などはほぼ完形に復元できたが各破片は、ばらばらの状態で出土した。また6層の上面で、硯が2面（4209、4210）と手づくねかわらけ（3001、3025、3098）が出土した。〔遺構の性格〕不明であるが、わずかながら種子が出土しており、平泉遺跡群で検出される「トイレ状土坑」の可能性も考えられる。最上部の埋土である1層部分は土坑が完全に埋まりきらないうちに、焼けた壁土や陶磁器片を廃棄したのと考えられる。また6層上面での硯の出土状態は、たんなる廃棄とも考えがたく、何らかの祭祀的な意味合いがあるのかもしれない。〔年代〕出土遺物から12世紀後半の所属としたい。



第56図 西側調査区の土坑(7)

11 S K 1 (第57図、写真図版33)

〔位置〕II E 8 i に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕記録が残されておらず不明である。〔埋土〕不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

11 S K 2 (第57図、写真図版33、34)

〔位置〕III E 1 i に位置する。〔重複〕11 S E 11 と重複するが本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は垂直に立つ。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積と思われる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

11 S K 3 (第57図、写真図版34)

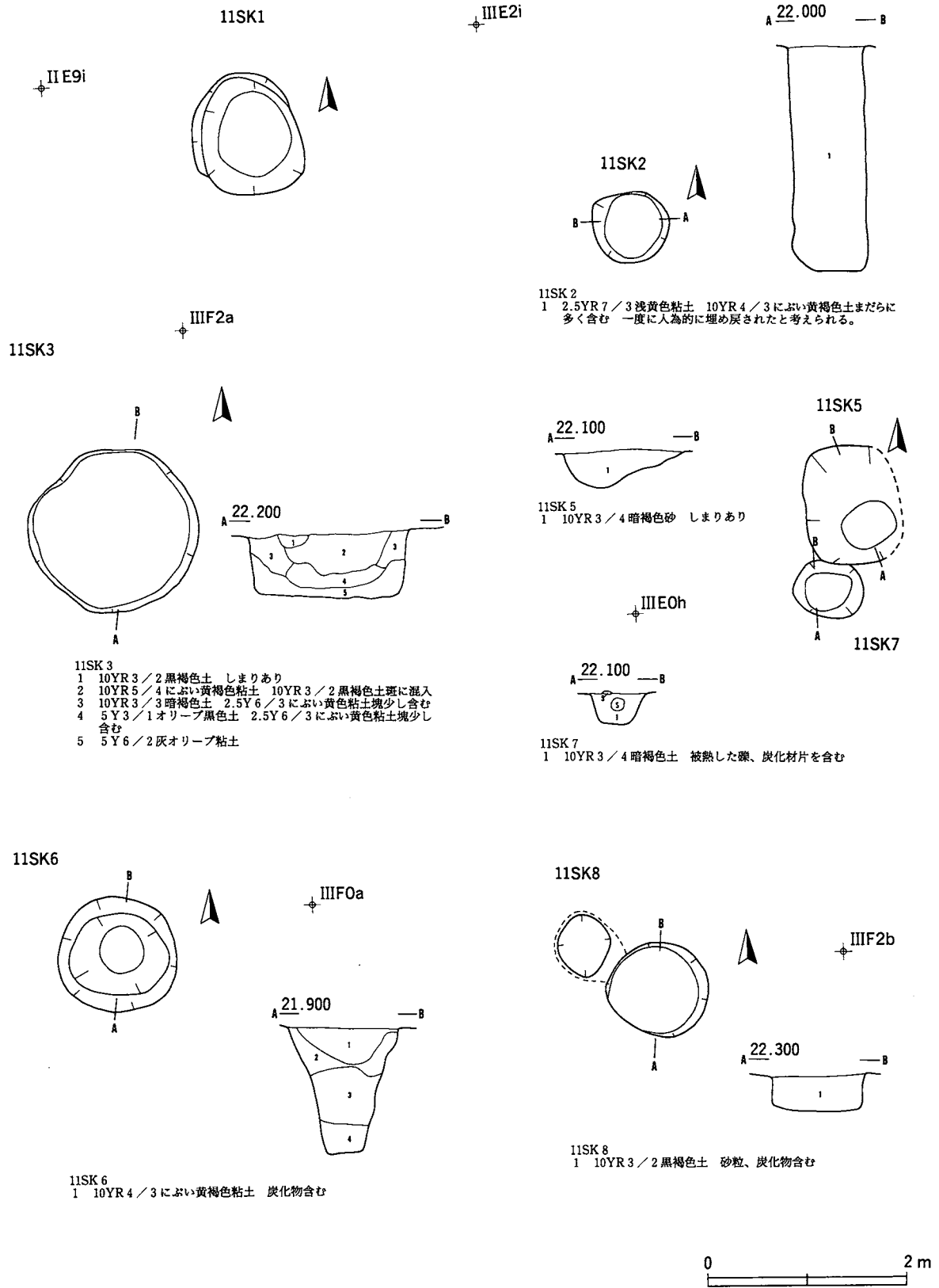
〔位置〕III E 1 j、III E 1 a に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は垂直に立つ。〔埋土〕5層に分けられる。人為堆積と思われる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

11 S K 5 (第57図、写真図版34)

〔位置〕III E 0 h に位置する。〔重複〕11 S K 7 と重複するが本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積と思われる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

11 S K 6 (第57図、写真図版34)

〔位置〕II E 9 j に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は斜めに立つ。〔埋土〕4層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。



第57図 東側調査区の土坑(1)

11 SK 7 (第57図、写真図版34)

〔位置〕 III E 0 h に位置する。〔重複〕 11 SK 5 と重複するが本遺構が古い。〔底面、壁〕 底面は概ね平坦で壁は斜めに立つ。〔埋土〕 1層に分けられる。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 不明である。〔年代〕 不明である。

11 SK 8 (第57図)

〔位置〕 III F 2 a に位置する。〔重複〕 なし〔底面、壁〕 底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立つ。〔埋土〕 1層に分けられる。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 不明である。〔年代〕 不明である。

13 SK 1 (第58図)

〔位置〕 II F 5 b に位置する。〔重複〕 なし〔底面、壁〕 底面は平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。〔埋土〕 1層に分けられる。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 不明である。〔年代〕 不明である。

13 SK 2 (第58図)

〔位置〕 III F 1 c、1 d に位置する。〔重複〕 なし〔底面、壁〕 底面は平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。〔埋土〕 1層に分けられる。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 不明である。〔年代〕 不明である。

13 SK 3 (第58図)

〔位置〕 III F 2 c に位置する。〔重複〕 なし〔底面、壁〕 底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。〔埋土〕 1層に分けられる。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 不明である。〔年代〕 不明である。

13 SK 4 (第58図)

〔位置〕 III F 3 b に位置する。〔重複〕 なし〔底面、壁〕 底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。〔埋土〕 1層に分けられる。〔出土遺物〕 底面に丸太が置かれていた。〔遺構の性格〕 電柱を支えるワイヤーを固定する穴である。〔年代〕 昭和時代まで下ると推定される。

13 SK 5 (第58図)

〔位置〕 III F 4 c に位置する。〔重複〕 なし〔底面、壁〕 底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕 3層に分けられる。〔出土遺物〕 埋土中から渥美産山茶碗(1389)、手づくねかわらけ(3292)が出土した。〔遺構の性格〕 不明である。〔年代〕 不明である。

13 SK 6 (第58図)

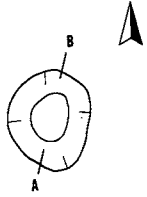
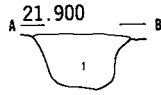
〔位置〕 III F 1 c に位置する。〔重複〕 なし〔底面、壁〕 底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕 7層に分けられる。〔出土遺物〕 埋土1層から宋銭の皇宋通寶が出土した。また埋土中から渥美産甕(1433、1440)が出土した。〔遺構の性格〕 不明である。〔年代〕 不明である。

13 SK 7 (第59図)

〔位置〕 III F 3 b に位置する。〔重複〕 なし〔底面、壁〕 底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕 3

13SK1

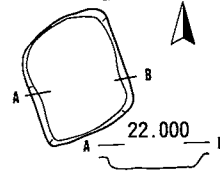
IIIF6c



13SK1  
1 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性なし 黄色土ブロック多数含む

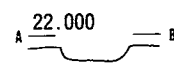
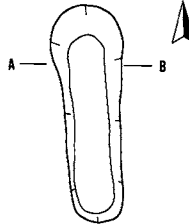
13SK2

IIIF2d

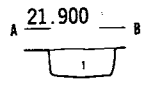


13SK4

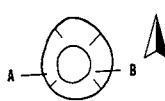
IIIF4d



IIIF3c



13SK3

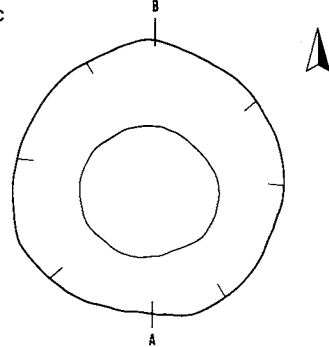


13SK3

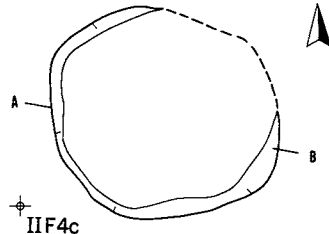
1 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。炭化物、かわらけ細片を含む。

13SK6

IIIF2c



13SK5

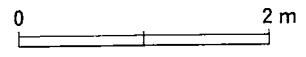


13SK5

- 1 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。粉炭を2mm以下10%含む。かわらけ細片を密に含む
- 2 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り 10YR4/4 褐色土を2mm以下7%綿状に含む
- 3 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。10YR4/4 褐色土を5mm以下3%綿状に含む。粉炭1mm以下1%含む。

13SK6

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。褐色土10%綿状に含む。粉炭、砂粒、かわらけ細片を含む
- 2 10YR2/1 黒色 粘土質シルト 粘性有り しまりやや有り 円礫、褐色土を含む
- 3 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 粘性有り しまりなし 円礫、角礫を含む
- 4 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。褐色土10%綿状に含む。砂粒を含む
- 5 2.5YR6/3 にぶい黄色 粘土 粘性有り しまりやや有り 黒褐色土をブロック状に含む
- 6 5Y3/1 オリーブ色 粘土 粘性有り しまりやや有り にぶい黄色土をブロック状に含む
- 7 2.5YR6/4 にぶい黄色 粘土 粘性有り しまりやや有り 黄褐色土を帯状に含む



第58図 東側調査区の土坑(2)

層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S K 8 (第 59 図)

〔位置〕III F 0 e に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は凹凸があり、壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕12 層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S K 9 (第 59 図)

〔位置〕II F 7 c、7 d に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕2 層に分けられる。〔出土遺物〕埋土中から常滑産片口鉢 (1316)、手づくねかわらけ (3240、3301、3302、3311、3312、3400)、ロクロかわらけ (3411) が出土した。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S K 10 (第 59 図)

〔位置〕III F 0 b に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。〔埋土〕4 層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S K 11 (第 59 図)

〔位置〕II F 5 c に位置する。〔重複〕13 S K 14 と重複するが前後関係について記録が残されていない。〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕4 層に分けられる。〔出土遺物〕埋土中から常滑産壺 (1331)、渥美産甕 (1446)、大堀相馬産の藁灰釉の陶器碗 (6441)、大堀相馬産の陶器蓋 (6443)、砥石が出土した。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕近世以降である。

### 13 S K 12 (第 60 図)

〔位置〕II F 9 b に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕4 層に分けられる。〔出土遺物〕埋土中から石鏃 (35)、渥美産山茶碗 (1392) が出土した。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S K 14 (第 60 図)

〔位置〕II F 5 c に位置する。〔重複〕13 S K 11 と重複するが前後関係について記録が残されていない。〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕2 層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

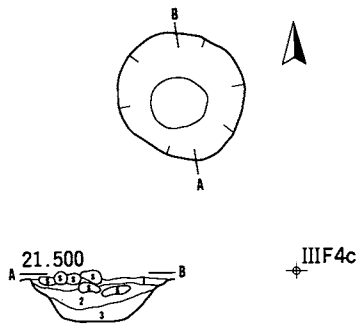
### 13 S K 15 (第 60 図)

〔位置〕II F 5 c に位置する。〔重複〕13 S D 11 と重複するが本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕2 層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S K 16 (第 60 図)

〔位置〕II F 5 d、5 e に位置する。〔重複〕13 S D 15 と重複するが本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は皿

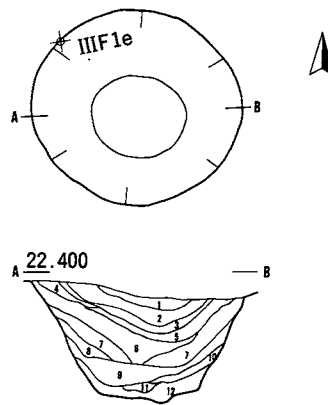
13SK7



13SK7

- 1 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 砂粒、礫、粉炭を含む
- 2 10YR 2 / 2 黒褐色 シルト 砂粒、礫を含む
- 3 10YR 2 / 1 黒色 シルト 砂粒、粉炭を含む

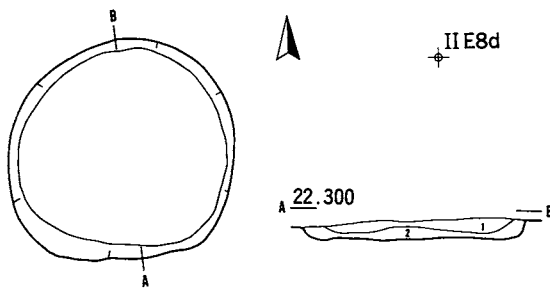
13SK8



13SK8

- 1 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。砂粒、粉炭を含む。
- 2 10YR 2 / 2 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り 上面に明黄褐色粘土を含む 下面に粉炭かわらけ片含む
- 3 10YR 2 / 3 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り 粉炭含む
- 4 10YR 3 / 1 黒褐色 粘土質シルト 粘性しまりやや有り。明黄褐色土、粉炭含む
- 5 10YR 3 / 1 黒褐色 粘土質シルト 粘性しまりやや有り。にぶい黄褐色粘土 粉炭を含む
- 6 10YR 2 / 2 黒褐色 粘土 粘性有り しまり有り。酸化鉄分縞状に含む にぶい黄褐色粘土ブロック状に含む
- 7 10YR 3 / 3 暗褐色 粘土 粘性有り しまりやや有り。にぶい黄褐色粘土を含む
- 8 10YR 2 / 1 黒褐色 粘土質シルト 粘性しまりやや有り。明黄褐色粘土を含む 酸化鉄わずかに含む
- 9 10YR 3 / 1 黒褐色 粘土 粘性しまり有り 黄褐色粘土をブロック状に含む 粉炭含む
- 10 10YR 3 / 3 暗褐色 シルト質粘土 粘性有り しまりやや有り。にぶい黄褐色粘土を縞状に含む
- 11 10YR 3 / 1 黒褐色 粘土 粘性有り しまりやや有り。粉炭を含む
- 12 10YR 3 / 2 黒褐色 粘土 粘性しまり有り 黄褐色粘土をブロック状に含む

13SK9

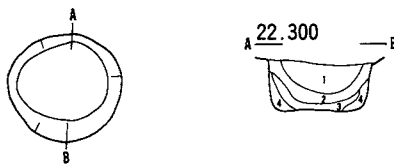


13SK9

- 1 10YR 3 / 4 暗褐色 シルト 粘性しまりやや有り。かわらけ細片を含む 粉炭を10mm以下3%含む。焼土粒10mm以下1%含む。
- 2 10YR 3 / 3 暗褐色 粘土質シルト 粘性有り しまりやや有り かわらけ細片を含む 粉炭を5mm以下10%含む。焼土粒5mm以下1%含む。

III F 1b

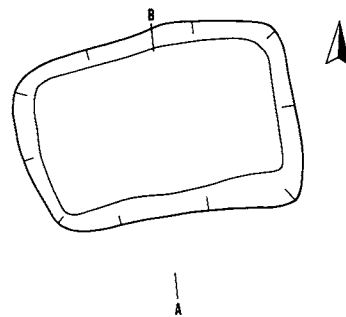
13SK10



13SK10

- 1 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。粉炭 にぶい黄褐色粘土 砂粒を含む
- 2 10YR 2 / 2 黒褐色 シルト 粘性有り しまりやや有り 粉炭 水酸化鉄を含む
- 3 10YR 3 / 1 黒褐色 粘土 粘性有り しまり有り。粉炭 にぶい黄褐色粘土を含む
- 4 10YR 7 / 3 にぶい黄褐色 粘土 粘性有り しまり有り 黒褐色を縞状に含む

13SK11

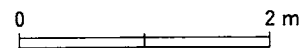


II F 5c

21.900

13SK11

- 1 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。黄褐色粘土ブロック30%、粉炭を3%含む
- 2 10YR 3 / 1 黒褐色 シルト 粘性有り しまりやや有り 黄褐色粘土粒20%、焼土粒を1%以下含む
- 3 10YR 2 / 3 黒褐色 粘土質シルト 粘性有り しまり有り にぶい黄褐色粘土を10%含む
- 4 10YR 3 / 2 黒褐色 粘土質シルト 粘性有り しまり有り にぶい黄褐色粘土を7%含む



第59図 東側調査区の土坑(3)

状で、壁との境が不明瞭である。〔埋土〕2層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。  
〔年代〕不明である。

### 13 S K 17 (第60図)

〔位置〕II F 5 e、5 fに位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は皿状で、壁との境が不明瞭である。〔埋土〕3層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S K 18 (第60図)

〔位置〕II F 6 e、6 fに位置する。〔重複〕13 S D 15、13 S D 21と重複するが本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は皿状で、壁との境が不明瞭である。〔埋土〕2層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S K 20 (第61図)

〔位置〕II E 4 jに位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は皿状で壁との境が不明瞭である。〔埋土〕1層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S K 21 (第61図)

〔位置〕III E 1 eに位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。〔埋土〕12層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S K 22 (第61図)

〔位置〕III E 0 e、0 fに位置する。〔重複〕13 S K 54と重複するが本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁は斜めに立つ。〔埋土〕1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中からロクロかわらけ(3415)、磁器碗(6409)が出土した。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕近世以降の所属である。

### 13 S K 23 (第61図)

〔位置〕II E 6 j、7 jに位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。〔埋土〕7層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

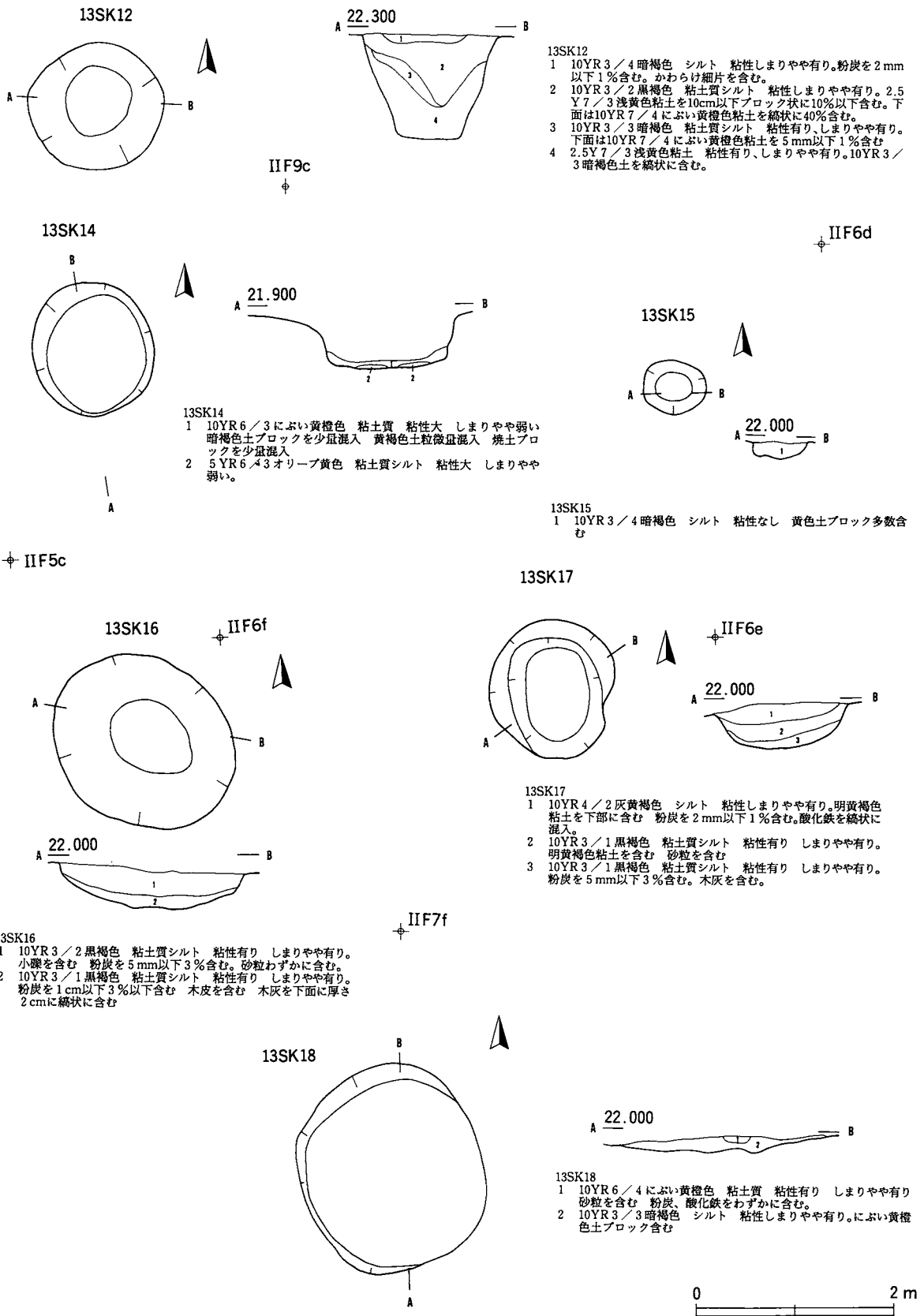
### 13 S K 24 (第61図)

〔位置〕III F 4 eに位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。〔埋土〕1層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S K 25 (第61図)

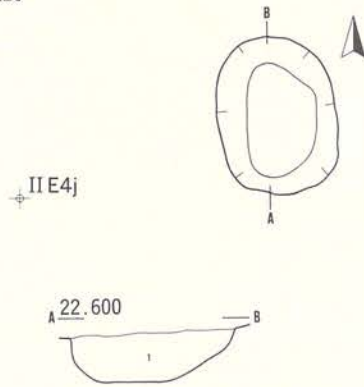
〔位置〕II F 6 aに位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕記録が残されていない。〔埋土〕記録が残されていない。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。





第60図 東側調査区の土坑(4)

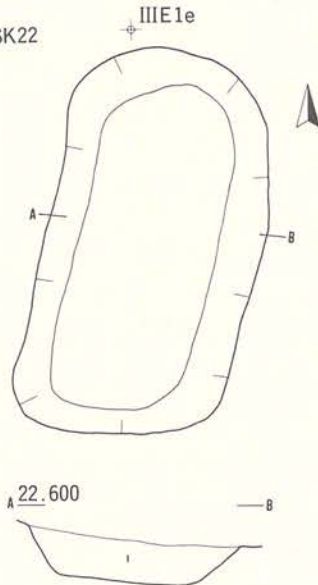
13SK20



13SK20

- 1 10YR 4 / 3 におい黄褐色 シルト 粘性しまりやや有り 粉炭を2mm以下3%含む。かわらけ細片上方に含む 砂粒含む

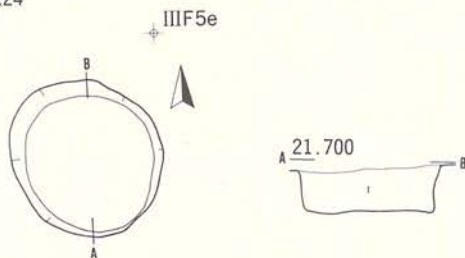
13SK22



13SK22

- 1 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。粉炭2mm以下3%、10YR 6 / 8 明黄褐色粘土ブロックを5mm以下1%に含む。小石2cm以下1%含む。砂粒をわずかに含む。

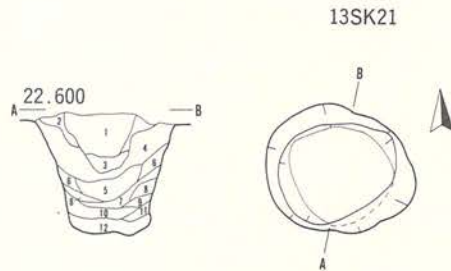
13SK24



13SK24

- 1 10YR 4 / 2 灰黄褐色 シルト 粘性しまりやや有り。粉炭、におい明黄褐色粘土を含む

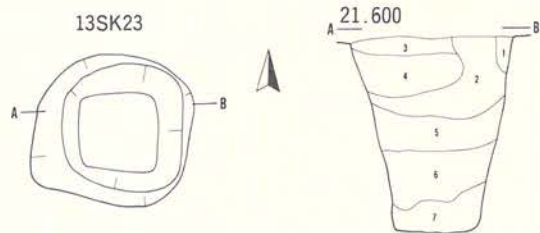
III E2e



13SK21

- 10YR 7 / 3 におい黄褐色粘土 粘性有り、しまりやや有り。砂粒、黒褐色土を塊状にわずかに含む。
- 10YR 2 / 3 黒褐色 粘土質シルト 粘性有り しまりやや有り。粉炭2mm以下3%、10YR 7 / 3 におい黄褐色土を5mm以下1%含む
- 10YR 2 / 2 黒褐色 粘土質シルト 粘性有り、しまりやや有り。粉炭5mm以下1%、10YR 7 / 3 におい黄褐色土を10mm以下10%含む。
- 10YR 2 / 3 黒褐色 粘土質シルト 粘性有り、しまりやや有り。酸化鉄を多く含む。10YR 7 / 3 におい黄褐色土を10mm以下ブロック状に含む。
- 10YR 7 / 4 におい黄褐色 粘土質シルト 粘性有り、しまりやや有り。酸化鉄を多く含む。10YR 2 / 3 黒褐色土を塊状に含む。
- 10YR 2 / 1 黒色 粘土 粘性しまり有り。10YR 7 / 4 におい黄褐色土を5mm以下7%、粉炭2mm以下1%含む。
- 10YR 2 / 2 黒褐色 粘土 粘性しまり有り。粉炭1mm以下3%、10YR 7 / 4 におい黄褐色土を5mm以下1%含む。
- 10YR 7 / 4 におい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや有り、しまりやや有り。黒褐色土を粒子状に含む。
- 10YR 7 / 4 におい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや有り、しまりやや有り酸化鉄多く含む。
- 10YR 2 / 1 黒色 粘土 粘性有り、しまり有り。におい黄褐色土5mm以下7%、粉炭を2mm以下1%含む。
- 10YR 2 / 2 黒褐色 粘土質 粘性有り、しまり有り。粉炭1mm以下3%含む。砂粒をわずかに含む。
- 10YR 2 / 2 黒褐色 粘土質 粘性有り、しまり有り。におい黄褐色土2mm以下3%含む。

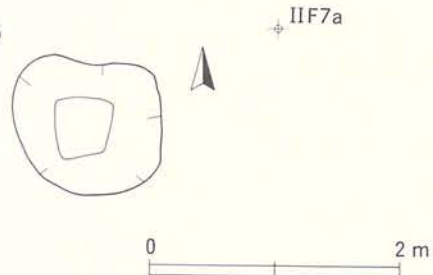
13SK23



13SK23

- 10YR 4 / 4 褐色 シルト におい黄褐色粘土 粘性しまりやや有り。粉炭、砂粒を含む
- 2.5Y 7 / 3 浅黄色 粘土 粘性有り、しまり有り。酸化鉄、褐色土を含む
- 2.5Y 7 / 4 浅黄色 粘土 粘性有り、しまり有り。酸化鉄、褐色土を含む
- 10YR 3 / 4 暗褐色 シルト 粘性しまりやや有り。浅黄色土を10%含む 酸化鉄を含む
- 10YR 4 / 2 灰黄褐色 粘土質シルト 粘性有り、しまりやや有り。粉炭、浅黄色粘土を含む
- 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 粘性しまり有り。浅黄色粘土を40%含む 酸化鉄、粉炭含む
- 5 YR 8 / 3 浅黄色 粘土 粘性しまり有り。酸化鉄を多く含む 黒褐色土を塊状に含む

13SK25



第61図 東側調査区の土坑(5)

### 13 S K 27 (第62図)

〔位置〕II F 4 eに位置する。〔重複〕13 S D 16と重複するが本遺構が古い。〔底面、壁〕底面は皿状で、壁との境が不明瞭である。〔埋土〕1層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明〔年代〕不明である。

### 13 S K 28 (第62図)

〔位置〕II E 4 jに位置する。〔重複〕13 S X 6と重複するが本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。〔埋土〕1層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S K 29 (第62図)

〔位置〕II E 6 jに位置する。〔重複〕13 S X 20と重複するが前後関係について記録がない。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕4層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S K 30 (第62図)

〔位置〕II E 6 jに位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕1層に分けられる。〔出土遺物〕埋土中から寛永通寶(7244)が出土した。これは古寛永である。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕近世以降である。

### 13 S K 32 (第62図)

〔位置〕II F 6 bに位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は皿状で壁との境が不明瞭である。〔埋土〕2層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S K 33 (第62図)

〔位置〕II F 6 bに位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は皿状で壁との境が不明瞭である。〔埋土〕2層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

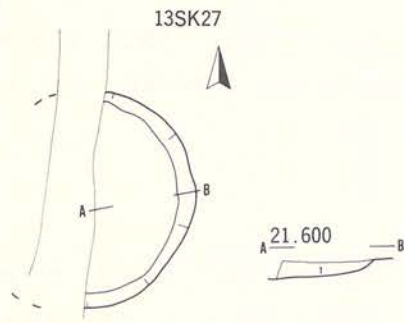
### 13 S K 35 (第62図)

〔位置〕II E 8 i、8 jに位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕1層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S K 36 (第63図)

〔位置〕II E 6 bに位置する。〔重複〕13 S B 22の柱穴P 692と重複するが本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕肥前産の磁器皿(6324)が出土した。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕出土した肥前産の磁器皿(6324)はIV期(1690～1780年)の製作年代である。よって本遺構の廃絶年代はそれより新しい。

II E5e



13SK27  
 1 10YR 3 / 2 黒褐色 粘土質シルト 粘性しまりやや有り。灰黄褐色粘土1%含む。

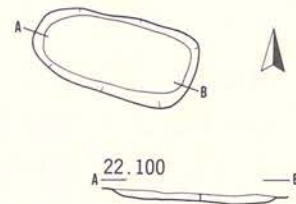
II E5j



13SK28  
 1 10YR 2 / 3 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。

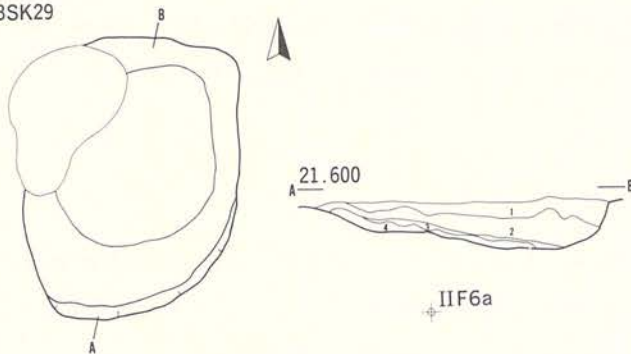
II D7j

13SK30



13SK30  
 1 10YR 5 / 3 に近い黄褐色 粘土 粘性しまり有り。粉炭を少量含む。

13SK29



13SK29  
 1 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。粉炭を2mm以下10%含む。  
 2 10YR 2 / 3 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。10YR 4 / 4 褐色土を2mm以下7%織状に含む。  
 3 10YR 2 / 2 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。10YR 4 / 4 褐色土を5mm以下3%織状に含む。粉炭1mm以下1%含む。  
 4 10YR 2 / 2 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。褐色土10%織状に含む。粉炭を含む。

II F6a

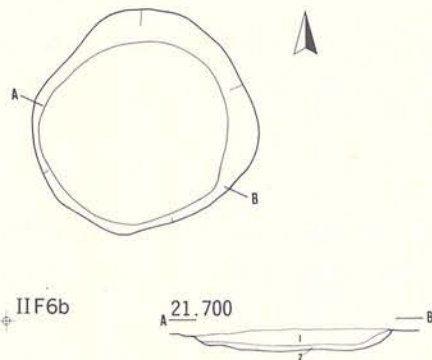
II F7b



13SK32  
 1 2.5YR 6 / 8 橙色焼土 炭化物粒微量混入  
 2 7.5YR 2 / 1 黒色土 炭化物粒微量混入

13SK32

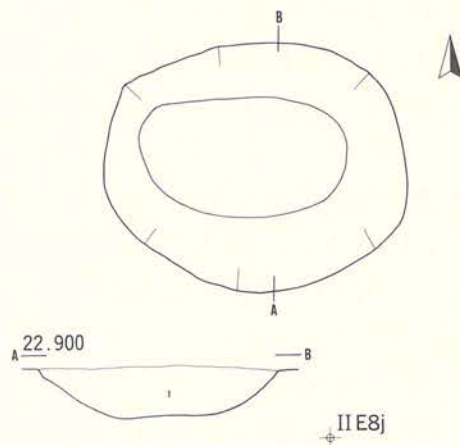
13SK33



13SK33  
 1 10YR 8 / 2 灰白色ローム 10YR 4 / 1 褐灰色土、10YR 7 / 6 明黄褐色ローム斑状に少量混入 人為的に埋めた土  
 2 10YR 8 / 2 灰白色ローム 焼土粒、炭化物粒多量混入底面は焼けていない。

II F6b

13SK35



13SK35  
 1 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土粒をブロック状に少量含む。

II E8j



第62図 東側調査区の土坑(6)

### 13 S K 37 (第 63 図)

〔位置〕II E 7 a に位置する。〔重複〕13 S B 24 の柱穴 P 611 と重複するが本遺構が古い。〔底面、壁〕壁は斜めに立ち上がり底面付近ですぼむ。〔埋土〕9 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S K 38 (第 63 図)

〔位置〕II E 7 c に位置する。〔重複〕13 S K 56 と重複するが本遺構が古い。〔底面、壁〕底面は概ね平坦で、壁面は垂直に立つ部分と斜めに立つ部分がある。〔埋土〕1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から瀬戸産の陶器播鉢 (6385) と常滑産の片口鉢 (1307) が出土した。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕出土した瀬戸産の陶器播鉢 (6385) は 18 世紀の製作年代である。よって本遺構の廃絶年代はそれより新しい。

### 13 S K 40 (第 63 図、写真図版 35)

〔位置〕II E 3 a、4 a に位置する。〔重複〕13 S B 30 のプラン内に位置するが、関係は不明である。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕3 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明であるが近世以降の所屬と考えられる。

### 13 S K 41 (第 63 図、写真図版 35)

〔位置〕II E 7 c、7 d、8 c、8 d に位置する。〔重複〕13 S K 42 と重複するが本遺構が新しい。また 13 S B 29 の柱穴 P 885 と重複するが前後関係を把握できなかった。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕1 層に分けられる。人為堆積自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕底面北側に礫が置かれていた。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明であるが近世と考えられる。

### 13 S K 42 (第 63 図)

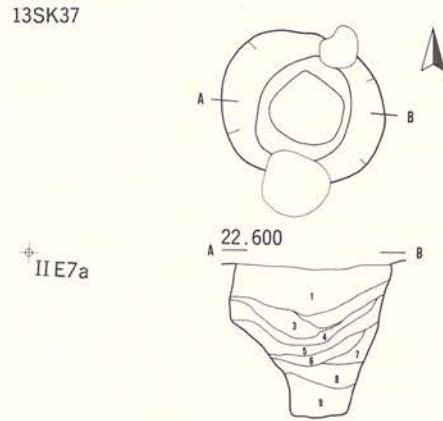
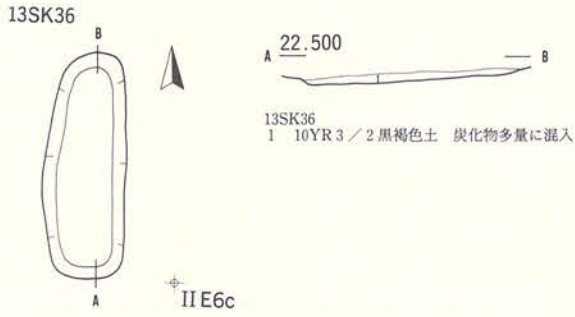
〔位置〕II E 7 c、7 d に位置する。〔重複〕13 S K 41 と重複するが本遺構が古い。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から肥前産の磁器小杯 (6334) が出土した。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕近世の所屬と考えられる。廃絶は出土した磁器小杯の製作年代 (18 世紀前半) より新しい。

### 13 S K 43 (第 64 図、写真図版 35)

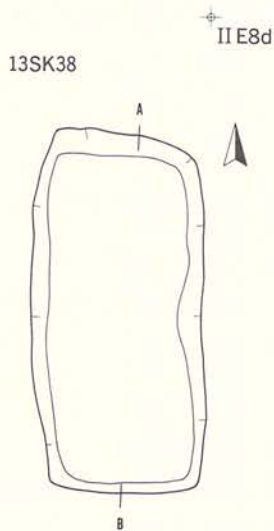
〔位置〕II E 8 b、9 b に位置する。〔重複〕13 S E 6 と重複するが本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕近世の所屬と考えられる。

### 13 S K 47 (第 64 図)

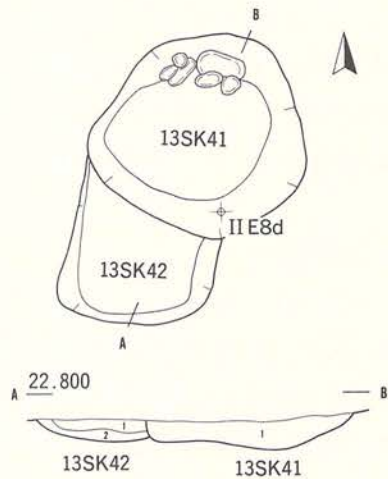
〔位置〕II E 8 a、8 b に位置する。〔重複〕13 S E 4 と重複するが本遺構が古い。また 13 S E 5 と重複するが本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕1 層に



- 13SK37
- 1 10YR 1 / 4 褐灰色 シルト 粉炭、酸化鉄を多量に含む。
  - 2 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土粒を多量に含む。
  - 3 10YR 7 / 6 明黄褐色 粘土 10YR 3 / 2 黒褐色を縞状に多量に含む。
  - 4 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土粒を少量含む。
  - 5 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土まだらに多量に含む。
  - 6 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土粒、10YR 8 / 2 灰白色粘土粒多量に含む。
  - 7 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 10YR 8 / 2 灰白色粘土ブロック状に多量に含む。
  - 8 10YR 8 / 2 灰白色 粘土 10YR 3 / 2 黒褐色土をまだらに少量含む。
  - 9 10YR 8 / 2 灰白色 粘土 10YR 3 / 2 黒褐色土粒少量含む。



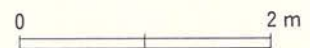
- 13SK38  
1 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 酸化鉄を少量含む。



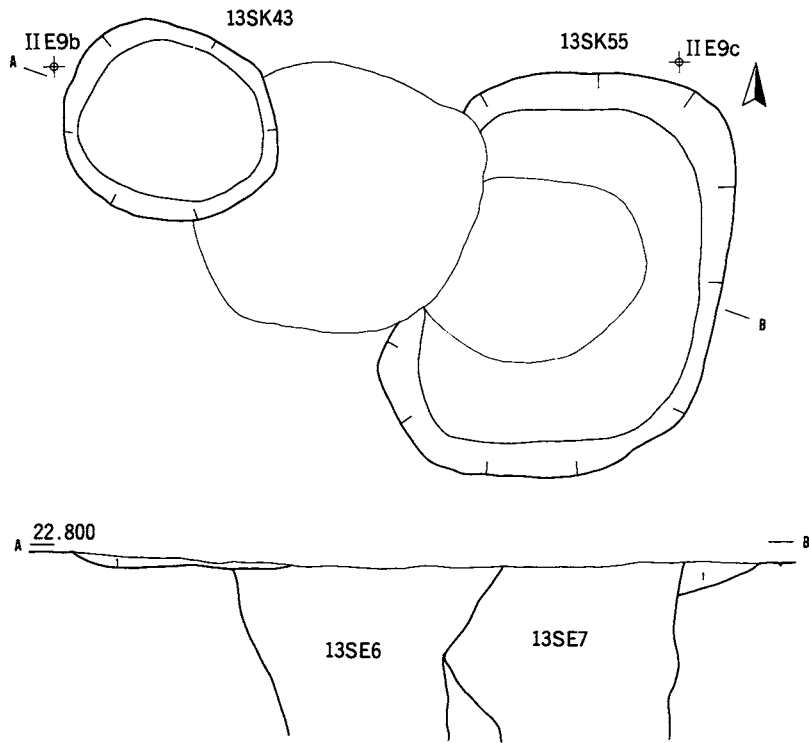
- 13SK41  
1 10YR 4 / 1 褐灰色 シルト 酸化鉄を多量に含む。

- 13SK42  
1 10YR 7 / 6 明黄褐色 粘土 10YR 8 / 2 灰白色粘土をまだらに少量含む。  
2 10YR 5 / 1 褐灰色 シルト 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土をまだらに少量含む。

- 13SK40  
1 10YR 4 / 3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性有り しまりなし 明黄褐色粘土20%含む  
2 10YR 3 / 3 暗褐色 シルト 粘性しまりなし 砂粒を含む  
3 2.5YR 3 / 2 黒褐色 粘性しまりなし 粉炭、砂粒含む

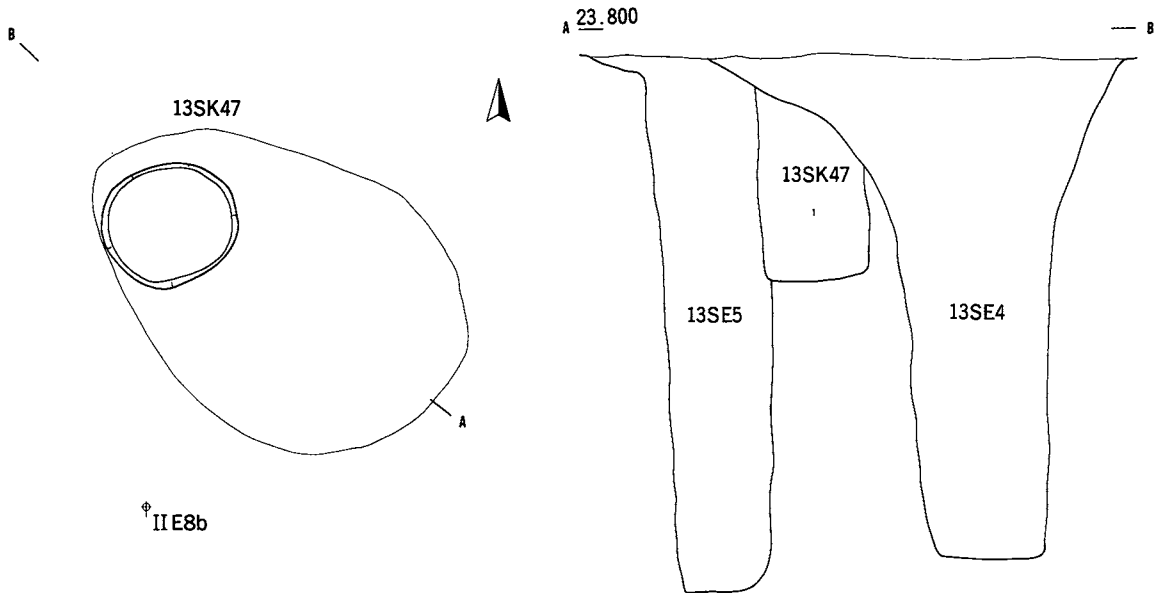


第63図 東側調査区の土坑(7)

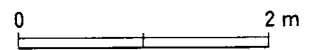


13SK43  
1 5Y8/3 浅黄色 粘土 10YR4/1 褐灰色土を縞状に少量含む。

13SK55  
1 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性弱い、しまり有り。酸化鉄を多く含む。粉炭を微量含む。



13SK47  
1 2.5Y8/2 灰白色 粘土 10YR7/6 明黄褐色粘土を粒子状に少量含む。



第64図 東側調査区の土坑(8)

分けられる。一気に埋め戻した人為堆積である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕近世の所属と考えられる。

### 13 S K 48 (第 65 図、写真図版 35)

〔位置〕II E 9 d に位置する。〔重複〕13 S D 14 と重複するが本遺構が古い。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕3 層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から磁器皿 (6332)、磁器瓶 (6337)、陶器挿鉢 (6397) が出土している。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕出土遺物から近世の所属と考えられる。

### 13 S K 49 (第 65 図、写真図版 35、36)

〔位置〕II D 7 j に位置する。〔重複〕13 S K 53 と重複するが本遺構が古い。また 13 S B 26 とプランが重複するが直接切り合う部分がなく前後関係は不明である。〔底面、壁〕底面は概ね平坦である。壁は上部よりも下部のほうが広がっており、フラスコ形の断面形になる。〔埋土〕12 層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から手づくねかわらけ (3211、3239、3381) と常滑産壺 (1330)、須恵器系陶器波状文四耳壺 (1460)、在地産 (水沼産か) 陶器壺 (1462) が出土している。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕出土遺物から 12 世紀の所属と考えられる。

### 13 S K 52 (第 65 図)

〔位置〕III E 0 b、0 c、1 b、1 c に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面まで掘り切っていない。検出した分の壁は概ね垂直に立ち上がる。〔埋土〕1 層に分けられる。人為堆積であろう。〔出土遺物〕埋土中から磁器碗 (6310)、磁器皿 (6332)、キセルの雁首 (7113)、鎌 (7120) が出土している。また常滑産陶器甕 (1358)、中国産の白磁の蓋のつまみと思われる部分 (2072) が出土している。〔遺構の性格〕ゴミを捨てた穴であろうか。〔年代〕磁器皿 (6332) の製作年代は近代にまで下る可能性がある。よって本遺構の年代も近代まで下る可能性が高い。

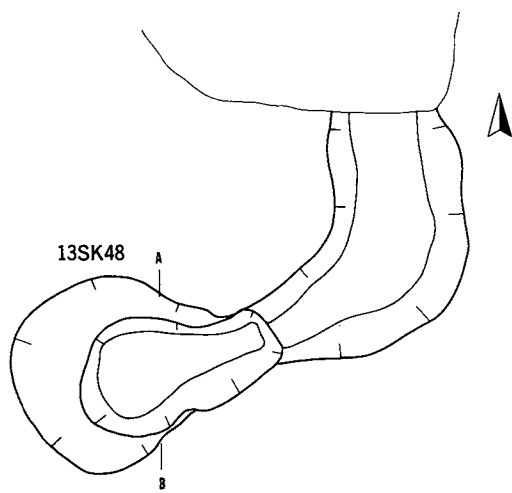
### 13 S K 53 (第 65 図、写真図版 36)

〔位置〕II D 7 j、8 j に位置する。〔重複〕13 S K 49 と重複するが本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕1 層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕近世の所属と考えられる。

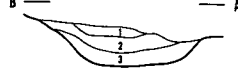
### 13 S K 54 (第 66 図、写真図版 36)

〔位置〕II E 9 e、9 f、0 e、0 f に位置する。〔重複〕13 S K 22 と重複するが本遺構が古い。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕3 層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から肥前産磁器碗 (6301)、瀬戸産挿鉢 (6386)、キセルの雁首 (7113)、キセルの吸口 (7115)、常滑産甕 (1346) が出土している。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕出土した陶磁器はどちらも 18 世紀代の製作年代である。本遺構の年代もこれに近いと思われる。





22.500

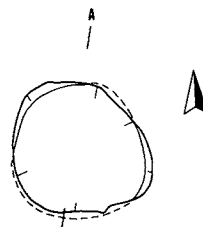


II E9c

13SK48

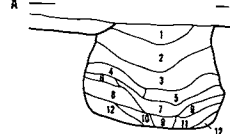
- 1 10YR 5 / 1 褐灰色 シルト 酸化鉄を多量に含む。
- 2 10YR 5 / 1 褐灰色 シルト 酸化鉄を少量含む。
- 3 10YR 4 / 1 褐灰色 シルト 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土粒を少量含む。

13SK49



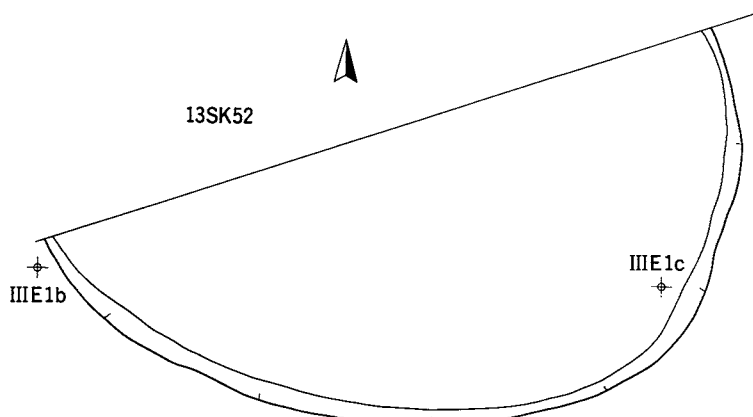
II E8a

22.600

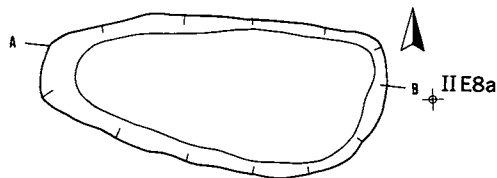


13SK49

- 1 10YR 4 / 1 褐灰色 シルト 粉炭、焼土粒を多量に含む。10YR 7 / 6 明黄褐色粘土を縞状に少量含む。
- 2 10YR 3 / 1 黒褐色 シルト 5 YR 5 / 8 明赤褐色焼土をブロック状に含む。粉炭多量に含む。かわらけ片微量に含む。
- 3 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土を縞状に少量含む。
- 4 10YR 7 / 6 明黄褐色 粘土 10YR 3 / 2 黒褐色土をまだらに少量含む。
- 5 10YR 4 / 1 褐灰色 シルト 粉炭、10YR 8 / 2 灰白色粘土粒を少量含む。
- 6 10YR 7 / 4 におい黄褐色 粘土 10YR 4 / 1 褐灰色土をまだらに多量に含む。かわらけ片含む。
- 7 7.5YR1.7 / 1 黒色 シルト 10YR 8 / 2 灰白色粘土粒を少量含む。粉炭を多量に含む。かわらけ片を含む。
- 8 10YR 7 / 6 明黄褐色 粘土 10YR 8 / 2 灰白色粘土を縞状に少量含む。
- 9 7.5YR1.7 / 1 黒色 シルト 粉炭を少量含む。
- 10 7.5YR1.7 / 1 黒色 シルト 10YR 8 / 2 灰白色粘土を縞状に多量に含む。
- 11 7.5YR7.5 / 1 黒色 シルト 10YR 8 / 2 灰白色粘土をブロック状に多量に含む。
- 12 10YR 8 / 2 灰白色 粘土 7.5YR1.7 / 1 黒色土を縞状に多量に含む。



13SK53

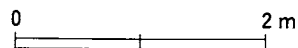


22.600



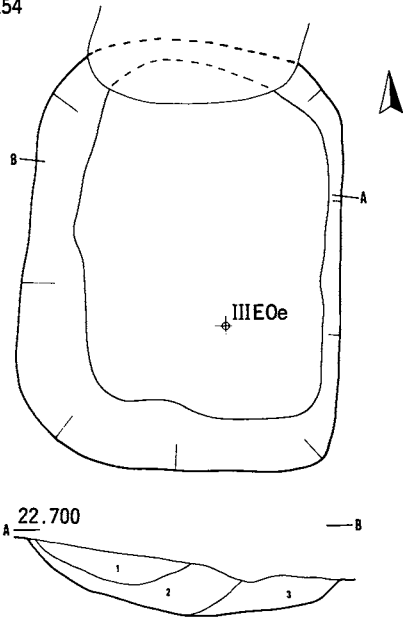
13SK53

- 1 10YR 4 / 1 褐灰色土 しまりあり 炭化物粒少量混入



第65図 東側調査区の土坑(9)

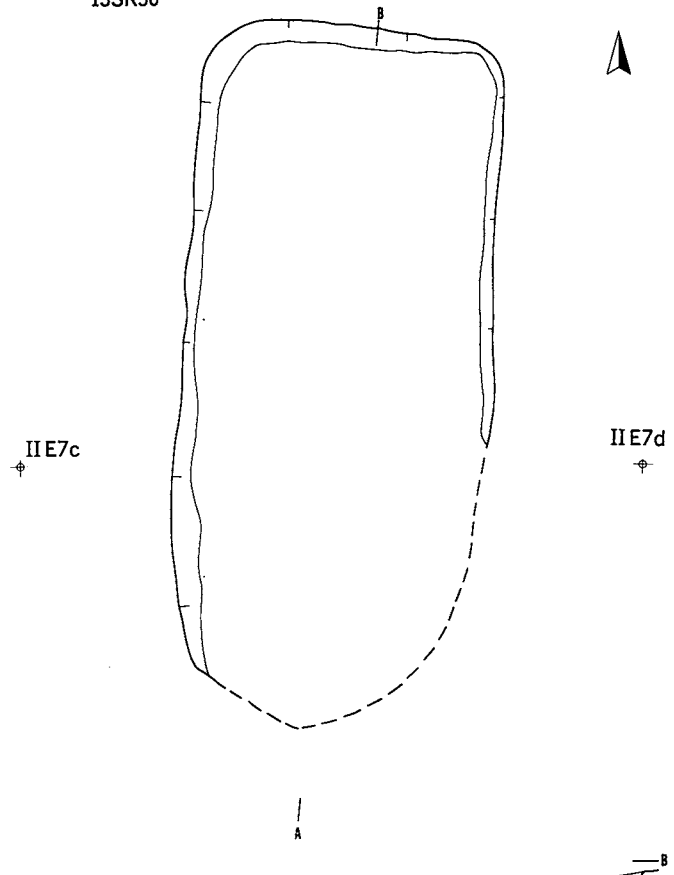
13SK54



13SK54

- 1 10YR 3 / 3 暗褐色 シルト 粘性弱い、しまり有り。粉炭 2 mm 以下 3 %、10YR 7 / 8 明黄褐色土ブロックをまだらに含む。
- 2 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。
- 3 2.5Y 7 / 3 浅黄色 粘土 砂粒、酸化鉄を多く含む。黒褐色土が混じる。

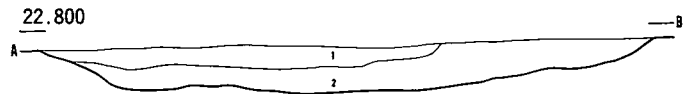
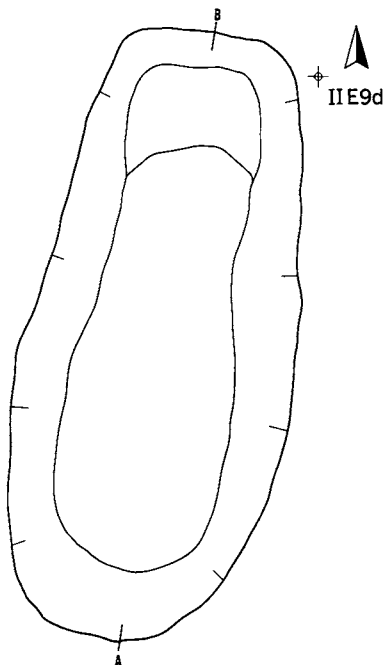
13SK56



13SK56

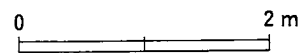
- 1 10Y 4 / 1 褐灰色土 10YR 7 / 6 明黄褐色ロームブロック状に少量混入

13SK57



13SK57

- 1 10YR 5 / 1 褐灰色 砂質シルト 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土をブロック状に多量に含む。
- 2 10YR 7 / 6 明黄褐色 粘土 10YR 5 / 1 褐灰色土をまだらに少量含む。



第66図 東側調査区の土坑(10)

13 S K 55 (第 64 図、写真図版 36)

〔位置〕 II E 8 b、8 c に位置する。〔重複〕 13 S E 7 と重複するが本遺構が古い。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から肥前産の陶器碗 (6343)、寛永通寶 (7243) が出土した。また手づくねかわらけ (3382) が出土した。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕出土した陶器碗は 18 世紀前半の製作であり、本遺構の廃絶はそれより新しい。

13 S K 56 (第 66 図、写真図版 36)

〔位置〕 II E 6 c、7 c に位置する。〔重複〕 13 S B 21 の柱穴 P 807、P 808 と 13 S B 22 の柱穴 P 805 と重複するが本遺構が新しい。また 13 S K 38 と重複するが本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から肥前産の磁器小杯 (6334) が出土した。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕本遺構より古い 13 S B 21、13 S B 22 が近世の所属である。よって本遺構も近世以降の所属になる。

13 S K 57 (第 66 図、写真図版 36)

〔位置〕 II E 8 c、9 c に位置する。〔重複〕なし。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から肥前産の磁器皿 (6330)、肥前産陶器碗 (6346)、大堀相馬産の陶器碗 (6352) が出土した。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕出土した大堀相馬産の陶器碗 (6352) は藁灰釉が施されており 19 世紀代の製作の可能性が高い。よって本遺構もそれ以降の所属になる。

15 S K 1 (第 67 図、写真図版 37)

〔位置〕 II E 6 d に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面には凹凸があり壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から土師器坏 (105)、須恵器大甕 (210) が出土した。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕出土遺物から 9～10 世紀に所属する可能性が高い。

15 S K 2 (第 67 図)

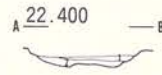
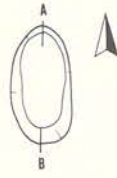
〔位置〕 II E 4 d に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

15 S K 3 (第 67 図、写真図版 37)

〔位置〕 II E 5 e、6 e に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

15 S K 4 (第 67 図、写真図版 37)

15SK1

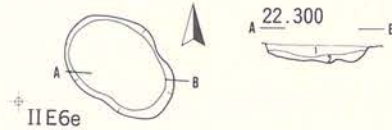


15SK1

- 1 10YR 2 / 2 黒褐色土 炭化物粒微量混入、焼土粒微量混入
- 2 7.5YR 3 / 3 暗褐色土 炭化物粒多量混入、焼土粒多量混入 壁と底面は焼けていない

II E6d

15SK3



15SK3

- 1 10YR 3 / 2 黒褐色土 10YR 7 / 6 明黄褐色ロームブロック少量混入
- 2 10YR 3 / 2 黒褐色土 10YR 7 / 6 明黄褐色ロームブロック微量混入

15SK2



15SK2

- 1 10YR 3 / 3 暗褐色土 しまりなし

II E4d

15SK4

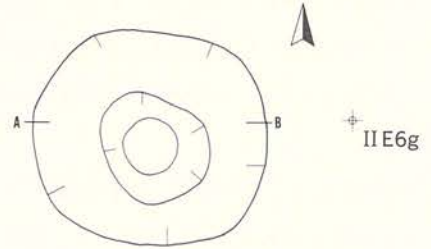


10SK4

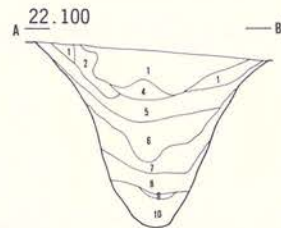
- 1 10YR 3 / 2 黒褐色土
- 2 10YR 3 / 2 黒褐色土 10YR 5 / 4 におい黄褐色土多量混入 10YR 7 / 6 明黄褐色ローム小ブロック少量混入

II E6f

15SK5



II E6g



15SK5

- 1 10YR 3 / 2 黒褐色土 10YR1.7 / 1 黒色土少量混入、10YR 7 / 3 におい黄褐色ローム混入 かわらけ出土
- 2 10YR 7 / 3 におい黄褐色ローム 10YR 3 / 2 黒褐色土微量混入
- 3 10YR 6 / 4 におい黄褐色ローム 10YR 3 / 2 黒褐色土混じり
- 4 10YR 3 / 2 黒褐色土 10YR 7 / 3 におい黄褐色ロームブロック多量混入
- 5 10YR 3 / 2 黒褐色土 10YR 7 / 3 におい黄褐色ロームブロック多量混入
- 6 10YR 7 / 6 明黄褐色土 10YR 3 / 3 暗褐色土少量混入
- 7 10YR 4 / 3 におい黄褐色土
- 8 10YR 7 / 6 明黄褐色ローム
- 9 10YR 4 / 3 におい黄褐色土 10YR1.7 / 1 黒色土多量混入
- 10 10YR 4 / 6 褐色土

15SK6



15SK6

- 1 10YR 3 / 2 黒褐色土 炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入
- 2 10YR 4 / 4 褐色土 炭化物粒多量混入、焼土粒多量混入 壁面・底面は焦けていない

II E8f



第67図 東側調査区の土坑(11)

〔位置〕II E 6 f に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面には凹凸があり壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕2層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から土師器坏(106)、土師器鉢?(107)、土師器長胴甕の破片(108、109)が出土した。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕出土遺物から9～10世紀に所属する可能性が高い。

#### 15 S K 5 (第67図、写真図版37)

〔位置〕II E 5 f、6 f に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面が丸く、壁と底面の区別ができない。〔埋土〕10層に分けられる。自然堆積の可能性が高い。〔出土遺物〕図示できなかったが、埋土中から手づくねかわらけ、ロクロかわらけが出土した。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕出土遺物から12世紀の所属としたい。

#### 15 S K 6 (第67図、写真図版37)

〔位置〕II E 8 e に位置する。〔重複〕15 S B 1、15 S B 3のプラン内に位置するが直接の重複がなく前後関係は不明である。〔底面、壁〕底面には凹凸があり壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕2層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から石鏃(36)が出土した。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

#### 15 S K 7 (第68図、写真図版38)

〔位置〕II E 8 f に位置する。〔重複〕15 S B 1、15 S B 3のプラン内に位置するが直接の重複がなく前後関係は不明である。〔底面、壁〕底面には凹凸があり壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕2層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明〔年代〕不明である。

#### 15 S K 8 (第68図、写真図版38)

〔位置〕II E 7 h に位置する。〔重複〕15 S D 12と重複し本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。〔埋土〕当初柱穴と考え、埋土の大部分を掘り下げてしまった。残った埋土は1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕底面付近で手づくねかわらけ(3203、3284)と釘(4319)が出土している。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕検出面と出土遺物から12世紀の所属としたい。

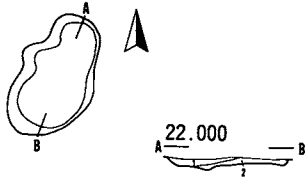
#### 15 S K 9 (第68図、写真図版38)

〔位置〕II E 6 g に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は凹凸があり、壁は垂直に立ち上がる。〔埋土〕埋土は5層に分けられる。おそらく人為堆積と思われる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕検出面から12世紀の所属としたい。

#### 15 S K 10 (第68図、写真図版38)

〔位置〕II E 6 g に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面はまるみを持ち、壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕埋土は1層に分けられる。おそらく人為堆積と思われる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

15SK7

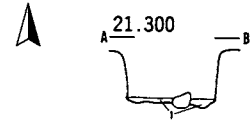
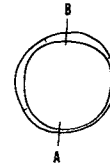


II E8f

- 15SK7  
 1 10YR3 / 2 黒褐色土  
 2 10YR3 / 2 黒褐色土 10YR6 / 6 明黄褐色土ブロック混入

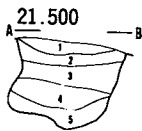
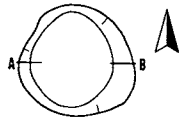
II E8h

15SK8



- 15SK8  
 1 10YR3 / 2 黒褐色土

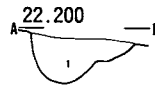
15SK9



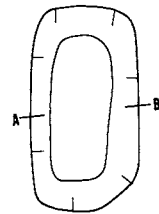
II E6h

- 15SK9  
 1 10YR8 / 2 灰白色ローム 10YR4 / 2 灰褐色土まだら状に少量混入  
 2 10YR4 / 2 灰褐色土 10YR8 / 2 灰白色ロームまだら状に少量混入  
 3 10YR3 / 4 暗褐色土  
 4 10YR3 / 2 黒褐色土 炭化物粒微量混入、焼土粒微量混入  
 5 10YR3 / 2 黒褐色土 10YR3 / 3 におい黄褐色ロームブロック少量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒微量混入

II E7g

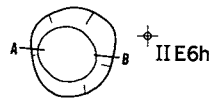


15SK10

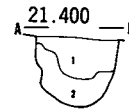


- 15SK10  
 1 10YR4 / 2 灰褐色土 10YR8 / 2 灰白色ロームブロック多量混入

15SK12

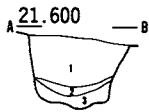
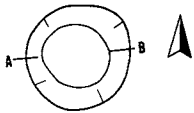


II E6h



- 15SK12  
 1 10YR4 / 4 褐色土 10YR7 / 3 におい黄褐色ロームブロック少量混入、炭化物粒微量混入  
 2 10YR4 / 4 褐色土 炭化物粒微量混入

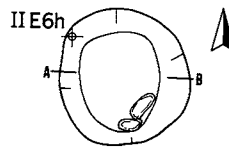
15SK11



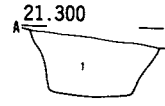
II E6h

- 15SK11  
 1 10YR4 / 2 灰褐色土 炭化物粒多量混入、かわらけ片混入  
 2 10YR8 / 6 黄褐色ローム 10YR4 / 2 灰褐色土まだら状に多量混入  
 3 10YR3 / 2 黒褐色土 10YR8 / 2 灰白色ローム粒少量混入

15SK13

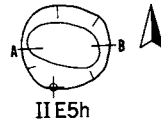


II E6h

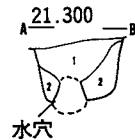


- 15SK13  
 1 10YR3 / 4 暗褐色土 炭化物粒少量混入

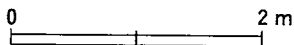
15SK14



II E5h



- 15SK14  
 1 10YR3 / 4 暗褐色土 炭化物粒微量混入、焼土粒微量混入  
 2 10YR4 / 3 におい黄褐色ローム 炭化物粒微量混入



第68図 東側調査区の土坑(12)

15 S K 11 (第 68 図、写真図版 39)

〔位置〕 II E 6 g に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は凹凸があり、壁は垂直に立ち上がる。〔埋土〕埋土は 3 層に分けられる。おそらく人為堆積と思われる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕検出面から 12 世紀の所属としたい。

15 S K 12 (第 68 図、写真図版 39)

〔位置〕 II E 5 g、6 g に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は丸みを持ち、壁は垂直に立ち上がる。〔埋土〕埋土は 2 層に分けられる。おそらく人為堆積と思われる。〔出土遺物〕埋土中から釘 (4303) が出土した。〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕検出面から 12 世紀の所属としたい。

15 S K 13 (第 68 図、写真図版 39)

〔位置〕 II E 6 g、6 h、II E 7 g、7 h に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は平坦であり、壁はやや斜めに立ち上がる。〔埋土〕埋土は 1 層に分けられる。おそらく人為堆積と思われる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕検出面から 12 世紀の所属としたい。

15 S K 14 (第 68 図、写真図版 39)

〔位置〕 II E 5 g、5 h に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は概ね平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面の一部が水穴 (伏流水の痕跡) により壊されている。〔埋土〕埋土は 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

15 S K 46 (第 69 図、写真図版 40)

〔位置〕 II E 3 e に位置する。〔重複〕15 S D 34 と重複するが、本遺構が古い。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕埋土は 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

15 S K 47 (第 69 図、写真図版 40)

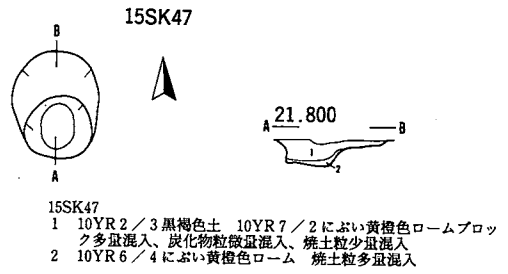
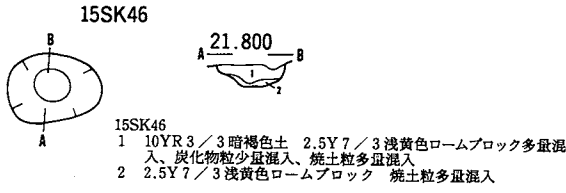
〔位置〕 II E 3 f に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面には段がつく。〔埋土〕埋土は 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

15 S K 48 (第 69 図、写真図版 40)

〔位置〕 II E 3 e に位置する。〔重複〕15 S D 34 と重複するが、本遺構が古い。〔底面、壁〕底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。〔埋土〕埋土は 1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

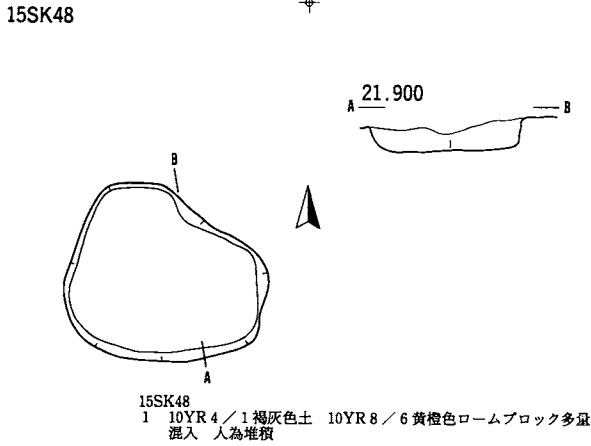
15 S K 49 (第 69 図、写真図版 40)

〔位置〕 II E 3 e に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕埋土は 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の

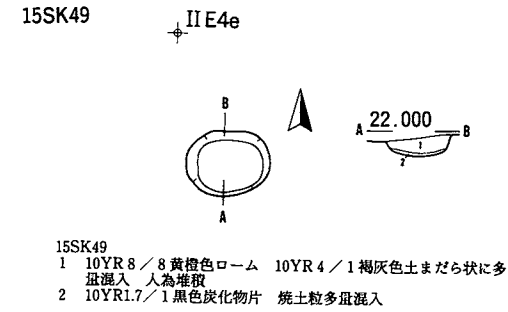


II E3f

II E3f

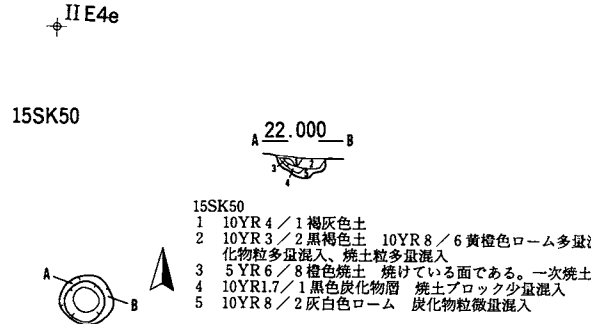


II E4f

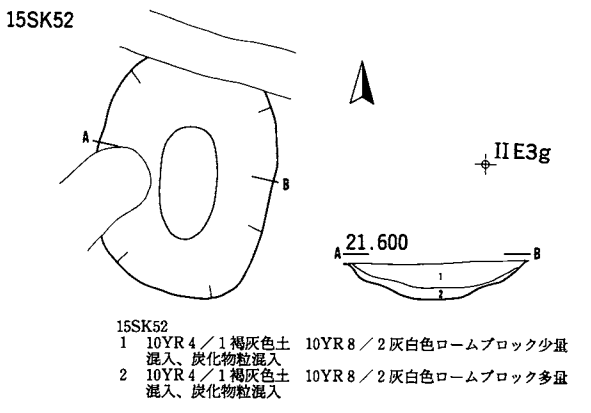
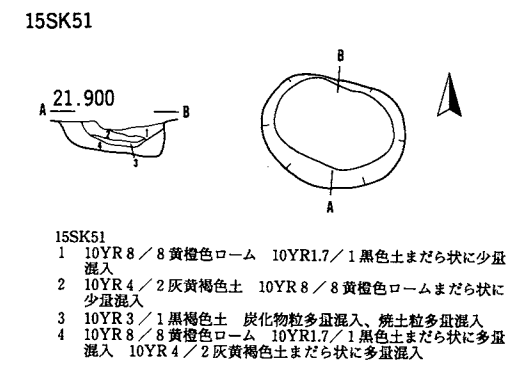


II E3f

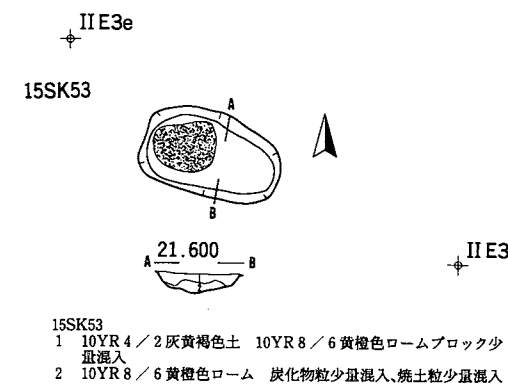
II E4e



II E4e

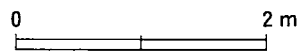


II E3g



II E3e

II E3h



第69図 東側調査区の土坑(13)



性格] 不明である。[年代] 不明である。

15 S K 50 (第 69 図、写真図版 41)

[位置] II E 3 e に位置する。[重複] 15 S D 36 と重複するが、本遺構が古い。[底面、壁] 底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。底面に 1 段窪む部分がある。[埋土] 埋土は 5 層に分けられる。人為堆積と思われる。[出土遺物] なし [遺構の性格] 不明である。[年代] 不明である。

15 S K 51 (第 69 図、写真図版 41)

[位置] II E 3 e に位置する。[重複] 15 S D 38 と重複するが、本遺構が古い。[底面、壁] 底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。[埋土] 埋土は 4 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。[出土遺物] なし [遺構の性格] 不明である。[年代] 不明である。

15 S K 52 (第 69 図、写真図版 41)

[位置] II E 2 f、3 f に位置する。[重複] 15 S D 34、15 S X 18 と重複するが、本遺構が古い。[底面、壁] 底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。[埋土] 埋土は 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。[出土遺物] なし [遺構の性格] 不明である。[年代] 不明である。

15 S K 53 (第 69 図、写真図版 41)

[位置] II E 3 g に位置する。[重複] なし [底面、壁] 底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。底面には木炭粒の分布がみられる。[埋土] 埋土は 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。[出土遺物] なし [遺構の性格] 不明である。[年代] 不明である。

15 S K 54 (第 70 図、写真図版 42)

[位置] II E 3 g に位置する。[重複] なし [底面、壁] 底面は概ね平坦で、壁は斜めに立ち上がる。[埋土] 埋土は 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。[出土遺物] なし [遺構の性格] 不明である。[年代] 不明である。

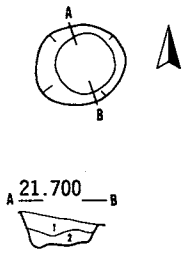
15 S K 55 (第 70 図、写真図版 42)

[位置] II E 3 g に位置する。[重複] なし [底面、壁] 底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。底面には礫の分布がみられる。[埋土] 埋土は 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。[出土遺物] なし [遺構の性格] 不明である。[年代] 不明である。

15 S K 56 (第 70 図、写真図版 42)

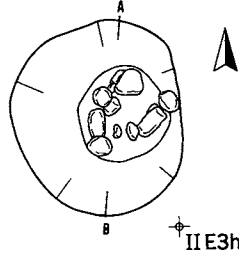
[位置] II E 3 h に位置する。[重複] 15 S D 12 と重複し、本遺構が新しい。[底面、壁] 底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。[埋土] 埋土は 2 層に分けられる。人為堆積と思われる。[出土遺物] なし [遺構の性格] 不明である。[年代] 検出面から 12 世紀の所属と考えられる。

15SK54

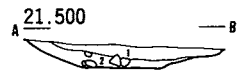


- 15SK54  
 1 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 炭化物粒少量混入  
 2 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 8 / 6 黄橙色ロームブロック少量混入、炭化物粒少量混入  
 II E3h

15SK55

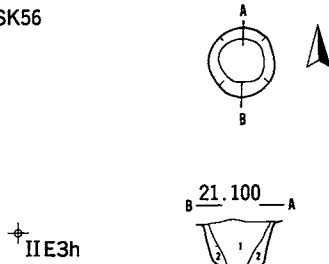


- 15SK55  
 1 10YR 3 / 1 黒褐色土 10YR 8 / 6 黄橙色ロームブロック少量混入、炭化物粒少量混入、焼土粒少量混入  
 2 10YR 3 / 1 黒褐色土 10YR 8 / 6 黄橙色ロームブロック多量混入



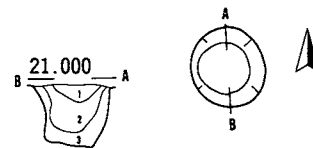
II E4h

15SK56



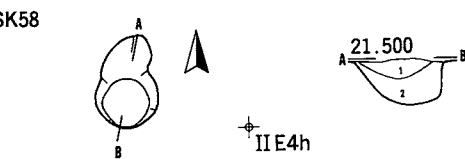
- 15SK56  
 1 10YR 3 / 1 黒褐色土 炭化物粒少量混入 さらにさらしている  
 2 10YR 3 / 1 黒褐色土 10YR 5 / 4 において黄褐色土粒少量混入  
 II E3h

15SK57



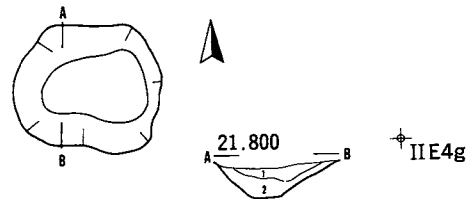
- 15SK57  
 1 10YR 8 / 2 灰白色ローム 10YR 4 / 1 褐灰色土まだら状に多量混入  
 2 10YR 4 / 1 褐灰色土 10YR 8 / 2 灰白色ロームブロック少量混入、炭化物粒少量混入  
 3 10YR 4 / 1 褐灰色土 炭化物粒少量混入

15SK58



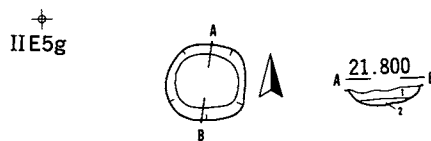
- 15SK58  
 1 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 7 / 6 明黄褐色ロームブロック少量混入  
 2 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 7 / 6 明黄褐色ロームブロック多量混入  
 II E4h

15SK59



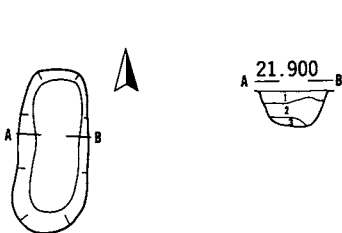
- 15SK59  
 1 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 7 / 3 において黄橙色ロームブロック微量混入、焼土粒溶け込んでいる、酸化鉄分混入  
 2 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 7 / 3 において黄橙色ロームブロック多量混入、焼土粒溶け込んでいる、酸化鉄分混入  
 II E4g

15SK61



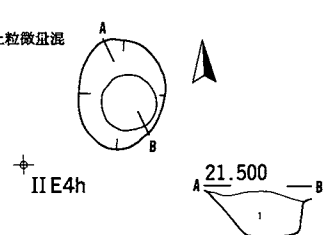
- 15SK61  
 1 10YR 4 / 3 において黄褐色土 炭化物粒少量混入、焼土粒微量混入  
 2 10YR 7 / 2 において黄橙色ローム 焼土粒少量混入  
 II E5g

15SK60

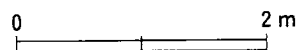


- 15SK60  
 1 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 炭化物粒少量混入  
 2 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 7 / 2 において黄橙色ロームブロック多量混入、炭化物粒多量混入、焼土粒多量混入  
 3 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 7 / 2 において黄橙色ロームブロック少量混入、炭化物粒少量混入  
 II E4h

15SK62



- 15SK62  
 1 10YR 3 / 4 暗褐色土 10YR 7 / 3 において黄橙色ロームブロック下部に多量混入、炭化物粒少量混入  
 II E4h



第70図 東側調査区の土坑(14)

15 S K 57 (第70図、写真図版42)

〔位置〕II E 3 hに位置する。〔重複〕15 S D 12と重複し、本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。〔埋土〕埋土は3層に分けられる。人為堆積と思われる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕検出面から12世紀の所属と考えられる。

15 S K 58 (第70図、写真図版43)

〔位置〕II E 4 gに位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕埋土は2層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

15 S K 59 (第70図、写真図版43)

〔位置〕II E 4 fに位置する。〔重複〕15 S B 23、15 S D 40と重複するが、前後関係を把握できなかった。〔底面、壁〕底面は皿状になっており、底面と壁面の区別ができない。〔埋土〕埋土は2層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

15 S K 60 (第70図、写真図版43)

〔位置〕II E 4 fに位置する。〔重複〕15 S B 23の柱穴P 808と重複するが、本遺構が新しい。〔底面、壁〕底面は丸みをもっており、壁はやや斜めに立ち上がる。〔埋土〕埋土は3層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕近世以降の所属と考えられる。

15 S K 61 (第70図、写真図版43)

〔位置〕II E 4 gに位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面はほぼ平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。〔埋土〕埋土は2層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

15 S K 62 (第70図、写真図版43)

〔位置〕II E 4 gに位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。〔埋土〕埋土は1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

#### 4 溝

溝は西側調査区で 31 条、東側調査区で 58 条検出された。文中で記している底面の傾斜角方向というのは、標高の高い方角から低い方角の方向を記している。また 10 S D 11・15 S D 25 というように調査次の異なる 2 つの遺構名が記されたものは、複数の調査次の調査区にまたがっていた溝に対して、各々の調査次に異なった遺構名を付したからである。以下西側調査区の溝、東側調査区の溝の順に述べていく。

##### 10 S D 1 (第 71 図、写真図版 44)

〔位置〕 I C 7 g、7 h、8 h に位置する。〔重複〕 10 S D 3 と重複しており、本遺構が新しい。〔平面形式〕 全体的にほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は北東から南西で、北東から南西へ水が流れるようになっている。〔埋土〕 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 なし〔溝の性格〕 不明である。〔年代〕 不明である。

##### 10 S D 2 (第 72 図、写真図版 44)

〔位置〕 I I D 3 d に位置する。〔重複〕 なし〔平面形式〕 ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕 1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 なし〔溝の性格〕 不明である。〔年代〕 不明である。

##### 10 S D 3 (第 71 図、写真図版 44)

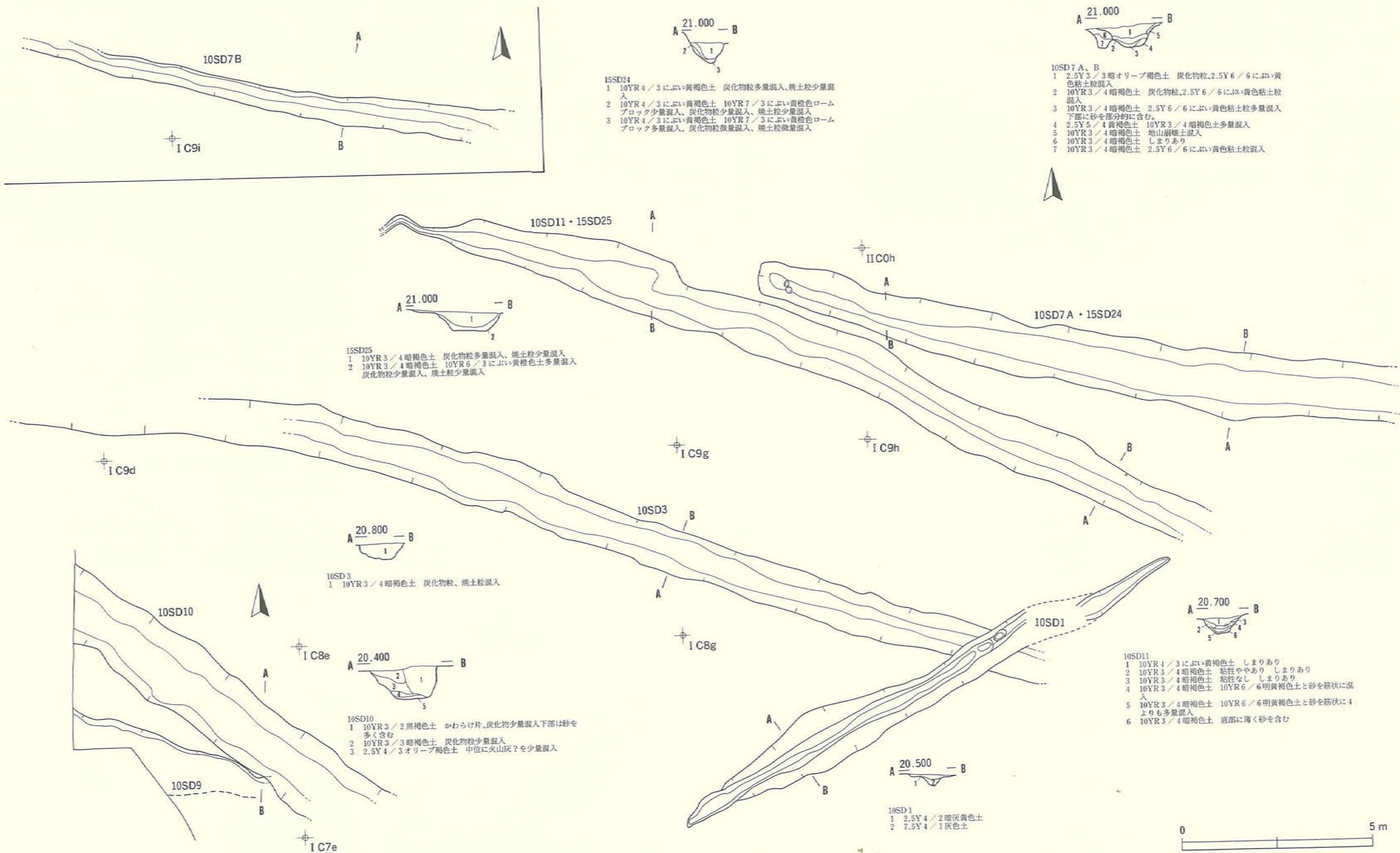
〔位置〕 I C 9 d、9 e、8 g、8 h、7 h に位置する。〔重複〕 10 S D 1 と重複しており、本遺構が古い。〔平面形式〕 全体的にほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は北西から南東である。〔埋土〕 1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 埋土中から須恵器甕(203)、須恵器大甕(205)、常滑産三筋壺(1024)、常滑産壺(1048)、常滑産甕(1075、1088、1089)、渥美産壺(1179)、渥美産袈裟襷文壺(1182)、渥美産甕(1188、1206、1230、1233、1234、1244)、中国産白磁四耳壺(2006)、手づくねかわらけ(3037、3041、3062)、ロクロかわらけ(3134)、砥石(4203、4207)、釘(4315、4316、4332)が出土した。〔溝の性格〕 不明である。〔年代〕 出土遺物から 12 世紀の溝と思われる。

##### 10 S D 4・15 S D 46 (第 72 図、写真図版 45)

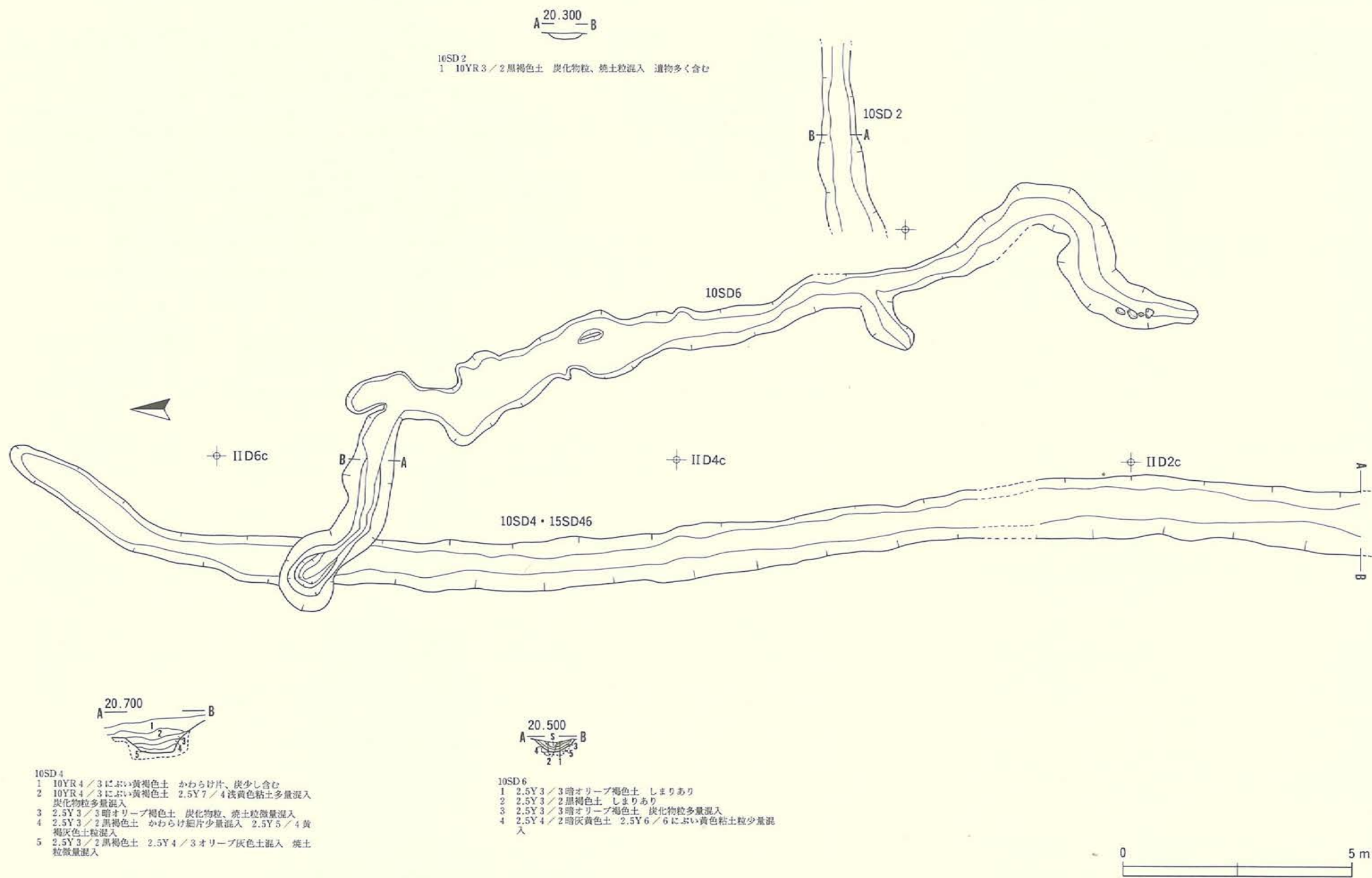
〔位置〕 I I D 1 b～7 b に位置する。〔重複〕 10 S D 6 と重複するが本遺構が古い。〔平面形式〕 ほぼ真っ直ぐであるが北側でやや東にそれる。底面の傾斜角方向は北から南である。〔埋土〕 5 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 埋土中から常滑産片口鉢(1003、1005)、常滑産甕(1154)、手づくねかわらけ(3004、3033、3038、3078)、ロクロかわらけ(3135、3136、3151、3152)が出土した。〔溝の性格〕 不明である。〔年代〕 検出面と出土遺物から 12 世紀の所屬と考えられる。

##### 10 S D 5 (第 74 図、写真図版 45)

〔位置〕 I I D 1 a～5 a に位置する。〔重複〕 なし〔平面形式〕 ほぼ真っ直ぐであるが南側で二股になる。底面の傾斜角方向は北から南である。〔埋土〕 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 なし〔溝の性格〕 15 S D 20 とつながる可能性が高い。そうだとすると 15 S D 20 と同様に排水の目的の溝と思われる。〔年代〕 近世に所屬する可能性が高い。



第71図 西側調査区の溝(1)



第72図 西側調査区の溝(2)



#### 10 S D 6 (第 72 図、写真図版 46)

〔位置〕 I I D 5 b、1 c～5 c に位置する。〔重複〕 10 S D 4・15 S D 46 と重複しており、本遺構が新しい。  
〔平面形式〕 全体的に不整な形状である。底面の傾斜角方向は北側が高く南側が低い。〔埋土〕 4 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 埋土中から石鏃(37)、須恵器大甕(209)、常滑産片口鉢(1005)、常滑産突帯付四耳壺(1029)、常滑産壺(1042)、常滑産甕(1068、1113、1154、1156)、渥美産甕(1241、1261)、中国産青磁皿(2021)、中国産青白磁合子(2034)、手づくねかわらけ(3002、3014、3034、3042、3079、3112)、ロクロかわらけ(3137、3138、3153)、砥石(4205、4206)、釘(4309、4322、4323)が出土した。〔溝の性格〕形状から考えて人為的に作られた溝とは思われない。自然の水流によって形作られた溝であろう。〔年代〕出土遺物から 12 世紀、またはその直後に形成された溝と思われる。

#### 10 S D 7 A・15 S D 24 (第 71 図、写真図版 46)

〔位置〕 I C 9 g～9 j に位置する。〔重複〕 15 S D 22 と重複するが本溝が古い。〔平面形式〕 ほぼ真っ直ぐに伸びる。西端は明瞭に完結している。底面の傾斜角方向は西から東で、西から東へ水が流れるようになっている。〔埋土〕 3～5 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 埋土中から石匙(46)、常滑産短頸壺(1028)、常滑産壺(1035)、渥美産甕(1212)、手づくねかわらけ(3003、3057、3103)、砥石(4204)、釘(4304)が出土した。〔溝の性格〕不明である。〔年代〕出土遺物から 12 世紀の所屬と考えられる。

#### 10 S D 7 B (第 71 図、写真図版 46)

〔位置〕 I C 9 h～9 j に位置する。〔重複〕 10 S D 7 A と重複するが本溝が古い。〔平面形式〕 ほぼ真っ直ぐに伸びる。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 なし〔溝の性格〕不明である。〔年代〕12 世紀の所屬である 10 S D 7 A より古いので、本溝も 12 世紀の所屬と考えられる。

#### 10 S D 9 (第 71 図、写真図版 47)

〔位置〕 I C 7 c、7 d に位置する。〔重複〕 10 S D 10 と重複するが本溝が古い。〔平面形式〕 ほぼ真っ直ぐに伸びると推定される。〔埋土〕 1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 なし〔溝の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

#### 10 S D 10 (第 71 図、写真図版 47)

〔位置〕 I C 7 c～7 e、8 c～8 e に位置する。〔重複〕 10 S D 9 と重複するが本溝が新しい。〔平面形式〕 ほぼ真っ直ぐに伸びると推定される。〔埋土〕 人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 埋土中から中国産青磁碗(2018)、手づくねかわらけ(3043、3075、3104)、平瓦(4001)が出土した。〔溝の性格〕不明である。〔年代〕出土遺物から 12 世紀の所屬の可能性が高い。

#### 10 S D 11・15 S D 25 (第 71 図、写真図版 47、49、50)

〔位置〕 I C 8 h、8 i、9 f～9 i、I I C 0 f～0 h に位置する。〔重複〕 カマド遺構である 15 S X 14 と重複するが本溝が古い。〔平面形式〕 ほぼ真っ直ぐに伸びる。底面の傾斜角方向は西から東で、西から東へ水が流れるようになっている。〔埋土〕 2 層～6 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出

土遺物) 埋土中から常滑産甕口縁部破片(1139)、渥美産壺底部破片(1180)、渥美産甕体部破片(1190、1229、1242、1265)、在地産陶器壺(1284、1285)、同安窯系青磁皿(2023)、手づくねかわらけ(3100、3118)が出土している。〔溝の性格〕不明である〔年代〕出土遺物から12世紀代の所属である。

#### 15 S D 14 (第73図、写真図版48)

〔位置〕IIC 7 d～7 j、IIC 8 c～8 gに位置する。〔重複〕15 S E 4、15 S E 10、15 S D 19と重複しており本遺構がこれらの遺構より新しい。また15 S D 15、15 S D 16、15 S D 17は本遺構にぶつかる部分で途切れており同時存在の遺構と考えられる。また15 S B 5、15 S B 6とはプランが重なるが直接重複する部分はない。だが15 S B 6は本遺構より古い15 S E 10より古いので、本遺構より古い。〔平面形式〕全体的にほぼ真っ直ぐであるが、東端部で南に曲がる。底面の傾斜角方向は西から東で、西から東へ水が流れるようになっている。〔埋土〕2層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から磁器碗(6038、6043、6063、6067)、磁器皿(6080、6081、6082、6095、6107、6108、6120、6125)、磁器鉢(6135)、磁器瓶(6141)、陶器碗(6162、6169、6171)、陶器皿(6202)、陶器香炉(6222)、常滑産片口鉢片(1014)、中国産青白磁合子(2035)が出土している。〔溝の性格〕15 S D 15、15 S D 16、15 S D 17は本遺構にぶつかる部分で途切れており、これらの溝からの水が本溝に流れこむようになっている。よって本溝も排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕出土陶磁器の多くは19世紀中葉のものである。よって19世紀中葉以降に廃絶されたと考えられる。

#### 15 S D 15 (第73図、写真図版48)

〔位置〕IIC 7 h、8 h、9 hに位置する。〔重複〕15 S B 5とはプランが重なるが直接重複する部分はなく前後関係は不明である。また本遺構は15 S D 14にぶつかる部分で途切れており、15 S D 14と同時存在と考えられる。〔平面形式〕北側でやや幅が広がるが、全体的にほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕2層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕15 S D 14と同時存在であり、19世紀中葉頃に廃絶されたと考えられる。

#### 15 S D 16 (第73図、写真図版48)

〔位置〕IIC 7 h、8 h、9 hに位置する。〔重複〕15 S B 5とはプランが重なるが、直接重複する部分はなく前後関係は不明である。また本遺構は15 S D 14にぶつかる部分で途切れており、15 S D 14と同時存在と考えられる。〔平面形式〕全体的にほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1層に分けられる。小礫が詰められており、本溝は暗渠である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕15 S D 14と同時存在であり、19世紀中葉頃に廃絶されたと考えられる。

#### 15 S D 17 (第73図、写真図版48)

〔位置〕IIC 7 i、8 iに位置する。〔重複〕15 S D 18と重複し、本溝が新しい。また本溝は15 S D 14にぶつかる部分で途切れており、15 S D 14と同時存在と考えられる。〔平面形式〕全体的にほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1層に分けられる。



礫が詰められており、本溝は暗渠である。〔出土遺物〕埋土中から陶器甕(6227)が出土している。〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕礫とともに18世紀末～19世紀代の陶器甕が暗渠の構築材として入れられており、構築年代はこの陶器甕の年代によって決められる。そして廃絶年代は、本溝が15SD14と同時存在であることから、19世紀中葉頃と考えられる。

#### 15SD18 (第73図、写真図版48)

〔位置〕IIC7j、8jに位置する。〔重複〕15SD17と重複し、本溝が古い。〔平面形式〕全体的にほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕不明であるが、近世の所属と考えられる。

#### 15SD19 (第73図、写真図版48)

〔位置〕IIC7h、7iに位置する。〔重複〕15SD14と重複しているが、前後関係を明確にできなかった。おそらく本溝が古い。また15SB5とはプランが重なるが直接重複する部分はない。〔平面形式〕全体的にほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は西から東で、西から東へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から磁器皿(6085)が出土している。〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕出土した磁器皿は肥前IV期(1690～1780年)のもので、本溝の廃絶はこの年代より新しい。

#### 15SD20 (第74図、写真図版49)

〔位置〕IID5a、IIC5j、IIC6h、6j、IIC7f、7gに位置する。〔重複〕15SE20と重複しており、本遺構が新しい。また15SD21、15SD44と重複しているが前後関係を把握できなかった。また15SB13とはプランが重なるが直接重複する部分はない。〔平面形式〕西から東にほぼ真っ直ぐに伸びたあと南側に曲がる。底面の傾斜角方向は西から東そして南で、西から東へ水が流れその後南に曲がるようになっている。〔埋土〕2層に分けられる。2層目は礫を詰めた層で、本溝は暗渠である。〔出土遺物〕埋土中から磁器碗(6023、6028、6029、6040、6068)、磁器皿(6089、6111、6113)、磁器瓶(6140)、陶器碗(6161、6168)、陶器皿(6197、6199、6203)、陶器播鉢(6238、6240、6247、6250、6252、6258、6261)、常滑産甕片(1108、1133、1134、1155)、渥美産甕(1254、1255)、丸瓦(4003)が出土している。〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕出土陶磁器は暗渠の構築材として礫とともに溝に詰められたものである。この中で新しいものは、19世紀前半代のものである。よって本溝の構築年代は19世紀前半と考えられる。

#### 15SD21 (第74図、写真図版49)

〔位置〕IIC6i、6jに位置する。〔重複〕15SD20と重複しているが前後関係を把握できなかった。〔平面形式〕西から東にほぼ真っ直ぐに伸びたあと南側に曲がる。底面の傾斜角方向は西から東そして南で、西から東へ水が流れその後南に曲がるようになっている。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から陶器皿(6191、6194)、陶器播鉢(6235)が出土している。〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕出土陶磁器中の2点の陶器皿は16世紀末の年代であるが、陶器播鉢は瀬戸産で18世紀中頃のものである。よって、本溝の廃絶年代は18世紀中頃より新しいことになる。

15 S D 22 (第73図、写真図版47)

〔位置〕I C 9 h、II C 0 h～3 hに位置する。〔重複〕15 S B 17の柱穴P 340、P 407と15 S E 9と重複するが本溝が新しい。また15 S D 23、15 S D 26と重複するが本溝が古い。〔平面形式〕北側部分で少し曲がるが、あとはほぼ真っ直ぐに伸びる。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から陶器碗(6155)、陶器鉢(6215)が出土している。〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕埋土から出土した陶器鉢は19世紀前半頃の年代であり、本溝の廃絶年代は19世紀前半頃より新しいことになる。

15 S D 23 (第73図、写真図版49)

〔位置〕II C 1 g、1 hに位置する。〔重複〕15 S B 17の柱穴P 340と15 S D 22と重複するが本溝が新しい。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐに伸びる。底面の傾斜角方向は東から西で、東から西へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中からビニール屑が出土した。〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕埋土中からビニール屑が出土しておりごく近年の廃絶である。

15 S D 26 (第73図、写真図版50)

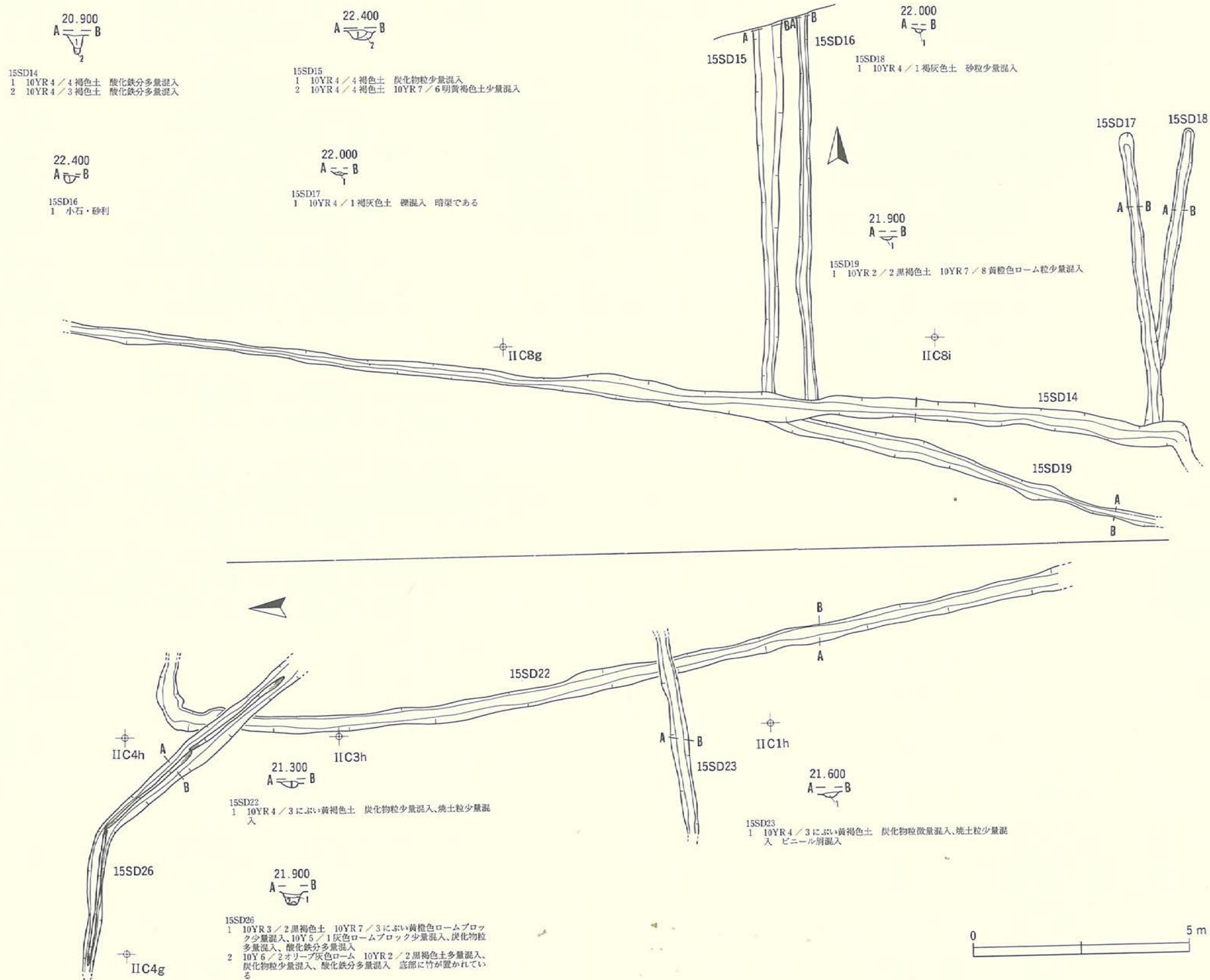
〔位置〕II C 3 g、3 h、II C 4 gに位置する。〔重複〕15 S B 9の柱穴P 408、15 S B 17の柱穴P 409、15 S D 22と重複するが本溝が新しい。〔平面形式〕西から東に伸びた後、南東方向に曲がる。底面の傾斜角方向は西から東で、西から東へ水が流れるようになっている。〔埋土〕2層に分けられる。2層中に節を抜いた竹を置いてあり、本溝は暗渠と考えられる。よって埋土は竹を埋める際の人為的な埋め土である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕本溝より古い15 S D 22が19世紀前半以降の廃絶と考えられ、本溝はそれより新しいことになる。

15 S D 27 (第74図、写真図版50)

〔位置〕II C 3 b～7 b、II C 7 c～7 dに位置する。〔重複〕15 S B 26(1号礎石建物)と重複するが本溝が古い。また15 S E 12と重複するが本溝が新しい。〔平面形式〕北側部分では、東から西に伸び、その後南に向かって曲がる。底面の傾斜角方向は東から西である。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から磁器火入(6136)、陶器碗(6189)、陶器皿(6196)、キセルの雁首(7101)、砥石(7306、7307)が出土している。〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕本溝より古い15 S E 12の埋土からは18世紀代の磁器が出土している。また本溝より新しい15 S B 26(1号礎石建物)は18世紀末頃の建築と考えられる。よって本溝の年代も18世紀代に納まるはずである。出土陶磁器は18世紀代より下るものはなく矛盾はない。

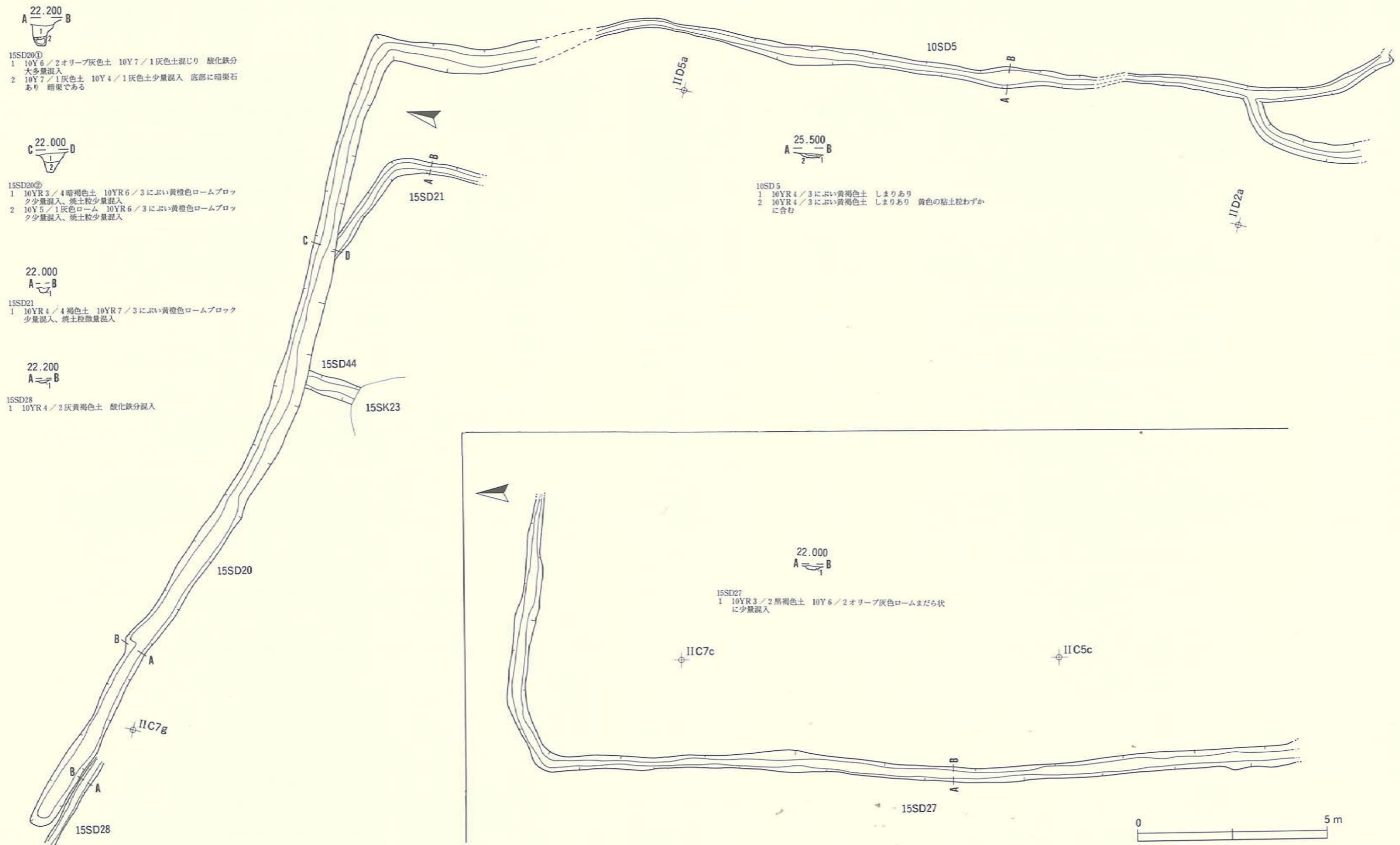
15 S D 28 (第74図、写真図版50)

〔位置〕II C 7 fに位置する。〔重複〕15 S E 20と重複しているが本溝が新しい。〔平面形式〕西から東にはほぼ真っ直ぐに伸びる。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から陶器播鉢(6244、6248)が出土している。〔溝の性格〕不明である。〔年代〕出土遺物から近世の所屬と考えられる。



第73図 西側調査区の溝(3)





第74図 西側調査区の溝(4)

#### 15 S D 29 (第75図、写真図版50)

〔位置〕II C 4 hに位置する。〔重複〕15 S B 9とプランが重複するが、直接切り合う部分がなく前後関係は不明である。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から小柄(7106)が出土している。〔溝の性格〕不明である。〔年代〕出土遺物から近世の所属である。

#### 15 S D 30 (第75図、写真図版50、51)

〔位置〕III C 1 b～2 bに位置する。〔重複〕なし〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐに伸びる。北端は明瞭に完結する。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明である。〔年代〕12世紀代の所属と考えられる。

#### 15 S D 31 (第75図、写真図版50、51)

〔位置〕III C 1 b～2 bに位置する。〔重複〕なし〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐに伸びる。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明である。〔年代〕12世紀代の所属と考えられる。

#### 15 S D 32 (第75図、写真図版51)

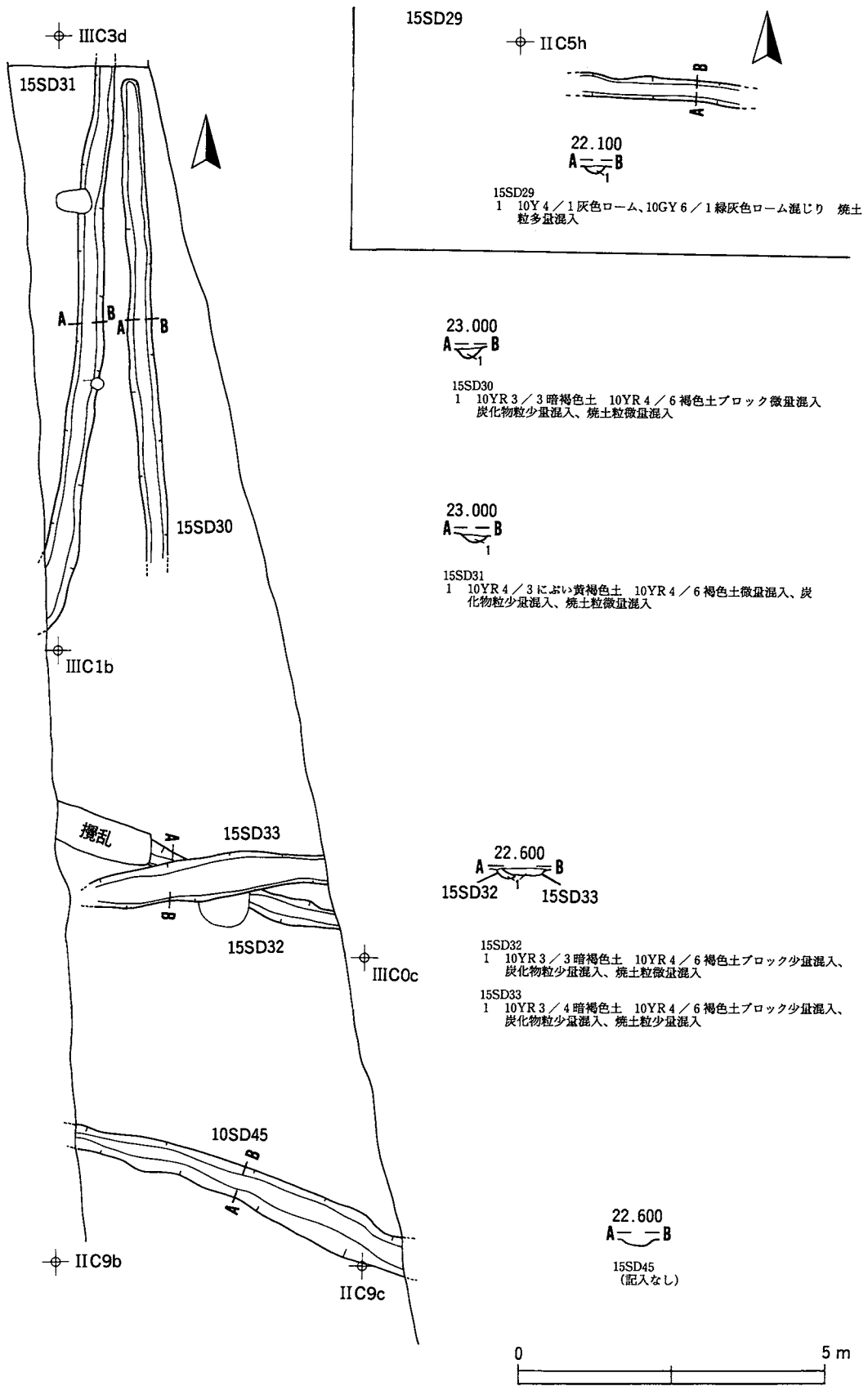
〔位置〕III C 0 bに位置する。〔重複〕15 S D 33、15 S K 44と重複するが本溝が古い。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐに伸びる。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明である。〔年代〕12世紀の所属と考えられる。

#### 15 S D 33 (第75図、写真図版51)

〔位置〕III C 0 bに位置する。〔重複〕15 S D 32、15 S K 44と重複するが本溝が新しい。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐに伸びる。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明である。〔年代〕12世紀の所属と考えられる。

#### 15 S D 44 (第74図)

〔位置〕II C 6 h、6 iに位置する。〔重複〕15 S K 23と重複し、本溝が古い。また15 S D 20と重複しているが前後関係を把握できなかった。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐに伸びる。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕断面観察をおこなわなかった。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕不明であるが、近世に所属すると思われる。



第75図 西側調査区の溝(5)

#### 15 S D 45 (第75図)

〔位置〕II C 9 b、9 cに位置する。〔重複〕15 S B 20とプランが重複するが、直接切り合う部分がなく前後関係は不明である。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明である。〔年代〕12世紀の所属と考えられる。

#### 11 S D 3 (第76図、写真図版51)

〔位置〕II F 8 a、9 aに位置する。〔重複〕なし〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐであるが両端部が西側に曲がる。〔埋土〕埋土についての記録は残されていない。〔出土遺物〕埋土から常滑産甕(1376)が出土した。〔溝の性格〕不明である。〔年代〕近世または近代の所属と考えられる。

#### 11 S D 4 (第76図、写真図版51)

〔位置〕II E 9 j、II F 8 a、9 aに位置する。〔重複〕なし〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐであるが両端部が西側に曲がる。〔埋土〕埋土についての記録は残されていない。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明である。〔年代〕近世または近代の所属と考えられる。

#### 11 S D 5 (第76図)

〔位置〕III E 2 j、III F 2 aに位置する。〔重複〕11 S D 6と重複するが前後関係についての記録は残されていない。〔平面形式〕コの字型をしている。〔埋土〕埋土についての記録は残されていない。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕11 S B 1を取り囲む形になっており建物に関連する施設と思われる。〔年代〕近世の所属と考えられる。

#### 11 S D 6 (第76図)

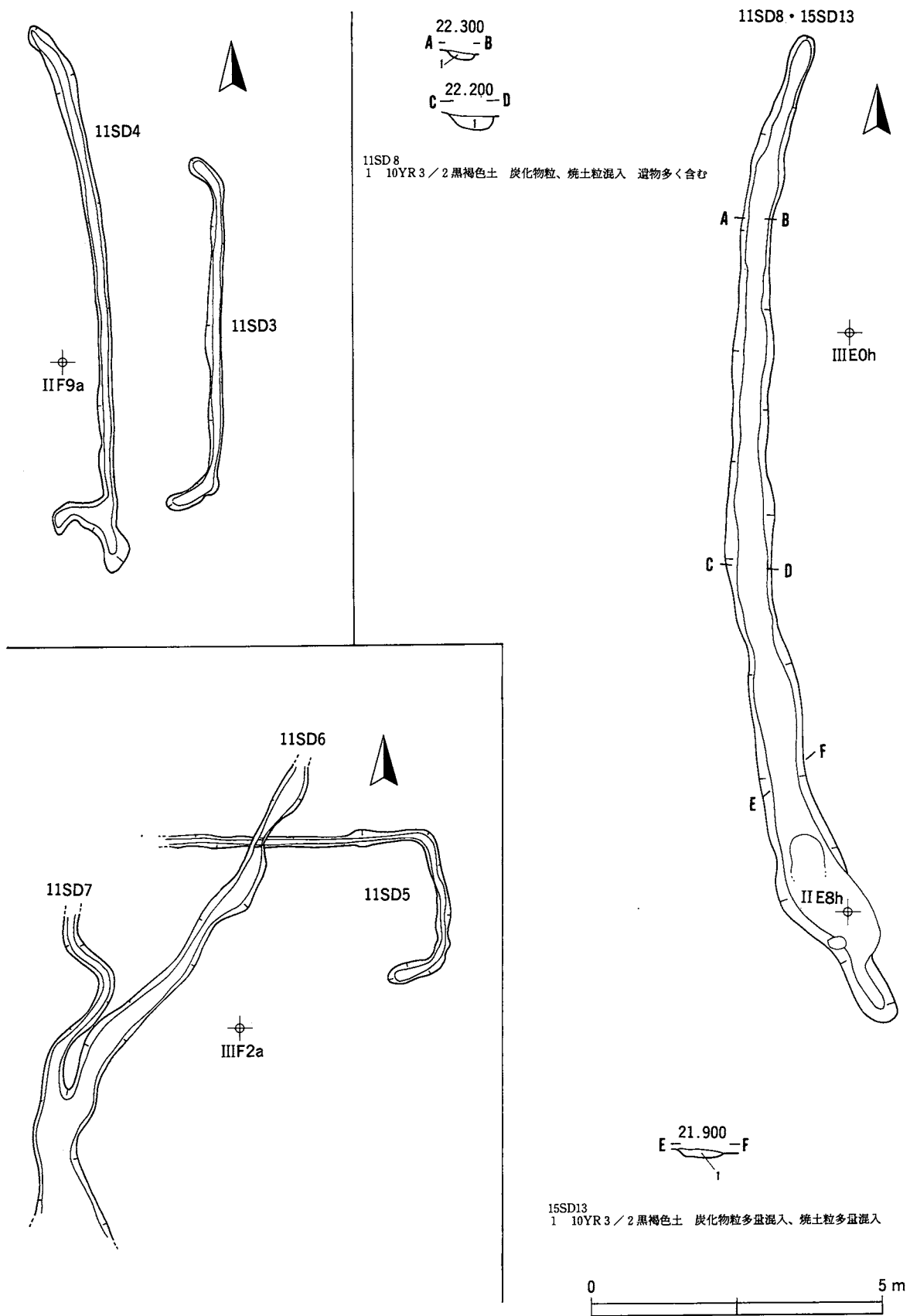
〔位置〕III E 1 j、2 j、III F 2 aに位置する。〔重複〕11 S D 5と重複するが前後関係についての記録は残されていない。〔平面形式〕不整な形状である。〔埋土〕埋土についての記録は残されていない。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕形状から考えて自然の水流によってできた溝と推定される。〔年代〕不明である。

#### 11 S D 7 (第76図)

〔位置〕III E 1 j、2 jに位置する。〔重複〕なし〔平面形式〕不整な形状である。〔埋土〕埋土についての記録は残されていない。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕形状から考えて自然の水流によってできた溝と推定される。〔年代〕不明である。

#### 11 S D 8・15 S D 13 (第76図、写真図版51、56)

〔位置〕III E 0 g、II E 7 g～9 g、7 h、8 hに位置する。〔重複〕15 S B 4の柱穴(P 184)と重複するが本溝が古い。〔平面形式〕概ね真っ直ぐに伸びるが幅は一定でない。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南に水が流れるようになっている。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から石錐(42)、須恵器大甕片(241、243)、政和通寶(4405)、穿孔した手づくねかわらけ片(4022)が出土した。〔溝の性格〕形状が不整であり自然の水の流れ跡と考えられる。〔年代〕政和通寶の初鑄年代は



第76図 東側調査区の溝(1)



1111年であり、溝の廃絶はそれより新しいことになる。また本溝より新しい15SB4は12世紀の所属と考えられ、本溝は12世紀代に廃絶されたと考えられる。

### 13SD1 (第77図)

〔位置〕IIE2b～3bに位置する。〔重複〕なし〔平面形式〕真っ直ぐであるがさらに、南北に伸びていたものと思われる。方向はほぼ南北である。埋土の残りは悪い。〔埋土〕1層である。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土から大堀相馬産の陶器皿(6451、6453)、土瓶蓋(6458)が出土した。〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕近世以降であろう。(笹平克子)

### 13SD2 (第77図)

〔位置〕IIIE4c～4dに位置する。〔重複〕なし〔平面形式〕全体的にほぼ真っ直ぐである。底面の大きな傾斜は見られないが西側が深くなっている。東西の向きであるが両方向とも調査区外に伸びるため流れの向きは不明である。〔埋土〕3層に分けられる。西壁側では3層の埋土が見られるが東側では2層のみである。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土から手づくねかわらけ(3230、3231、3309、3310、3329、3377、3378)、ロクロかわらけ(3420)、瀬戸美濃産の登窯I期の天目茶碗片(6431)、近世以降の在産産播鉢(6469、6472)が出土した。〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕近世以降である。

(笹平克子)

### 13SD3 (第78図)

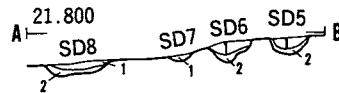
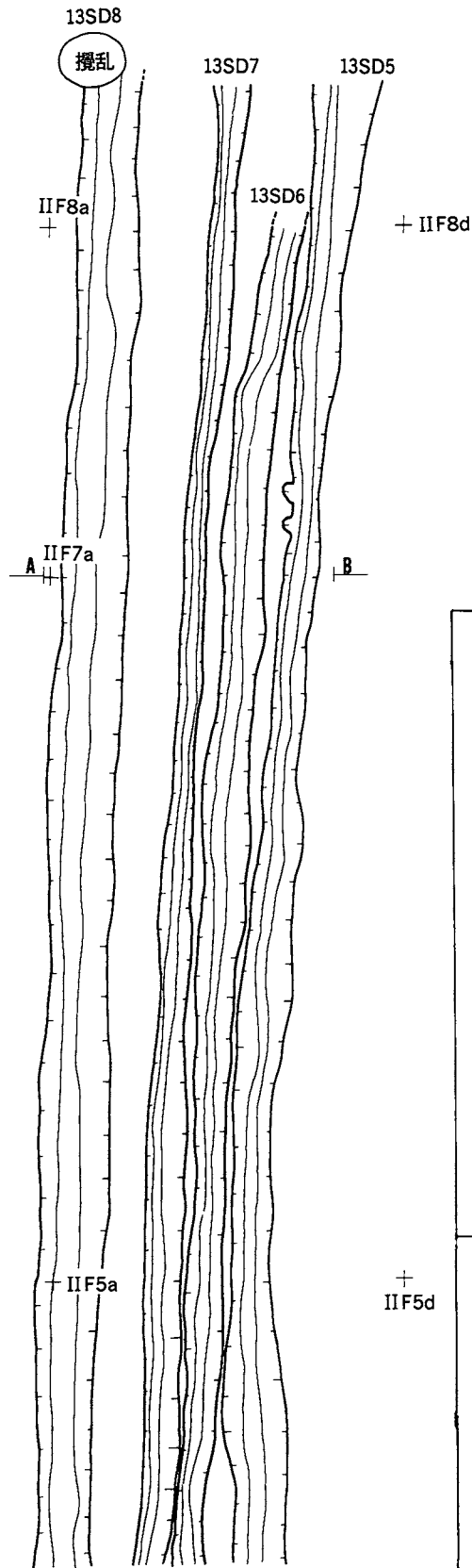
〔位置〕IIIF1e～1d、IIF0d～6d、IIF6c～6aに位置する。〔重複〕13SD4より古い。13SD9と重複するが攪乱により前後関係は不明である。13SD11、13SD17とも重複関係が見られるが前後関係は不明である。同時存在の可能性も考えられる。〔平面形式〕底面の傾斜角方向は西側の調査区外から伸びてきて、東から西に流れ、IIIF1付近から南下する。さらに、IIF6c付近では東から西側に流れる。〔埋土〕2層に分けられる。礫が詰められている部分と見られない部分があり、北側ほど大きな礫である。〔出土遺物〕埋土から石篋(47)、常滑産片口鉢(1324)、常滑産甕(1348、1351、1372、1379)、12世紀以降と思われる東北在産の陶器甕(5006)、肥前産陶器碗(6434、6436)、肥前産陶器皿(6448)、近世以降の在産産播鉢(6463)が出土した。〔溝の性格〕暗渠排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕18世紀末～19世紀代の陶器甕が暗渠の構築材として入れられていたことからその年代よりは新しいと思われる。(笹平克子)

### 13SD4 (第78図)

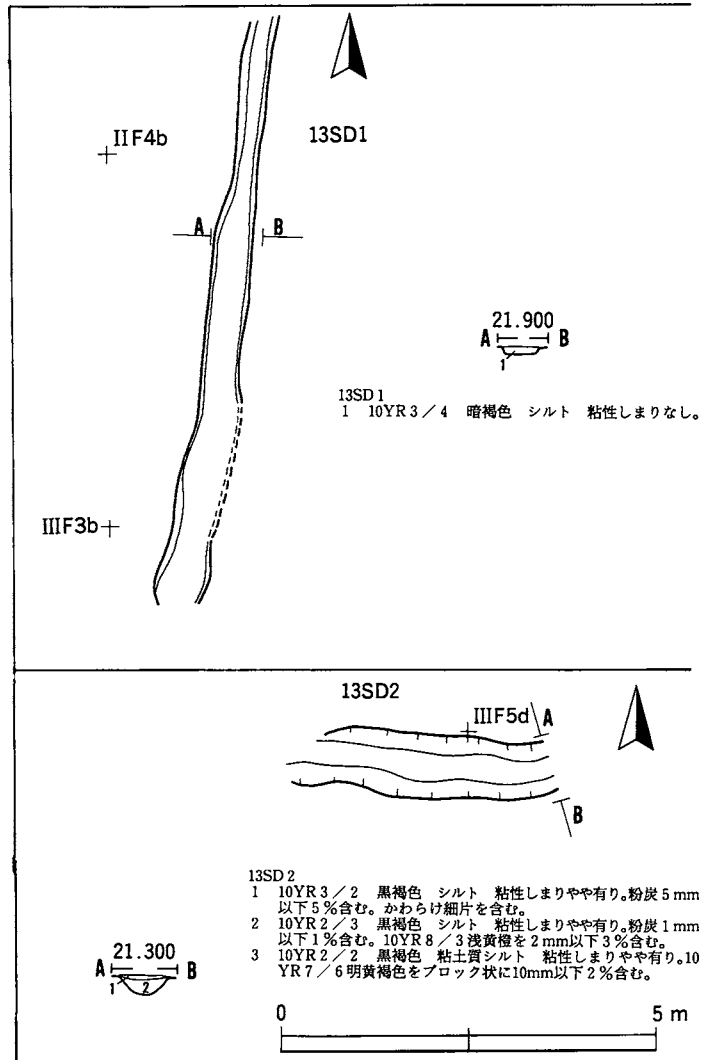
〔位置〕IIIF1e～1dに位置する。〔重複〕13SD3と重複し、本溝が新しい。〔平面形式〕全体的にほぼ真っ直ぐである。西側の調査区外から伸びてきて、東から西に流れ、底面の傾斜角方向は東から西で、東から西へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕不明であるが、近世の所属と考えられる。(笹平克子)

### 13SD5 (第77図)

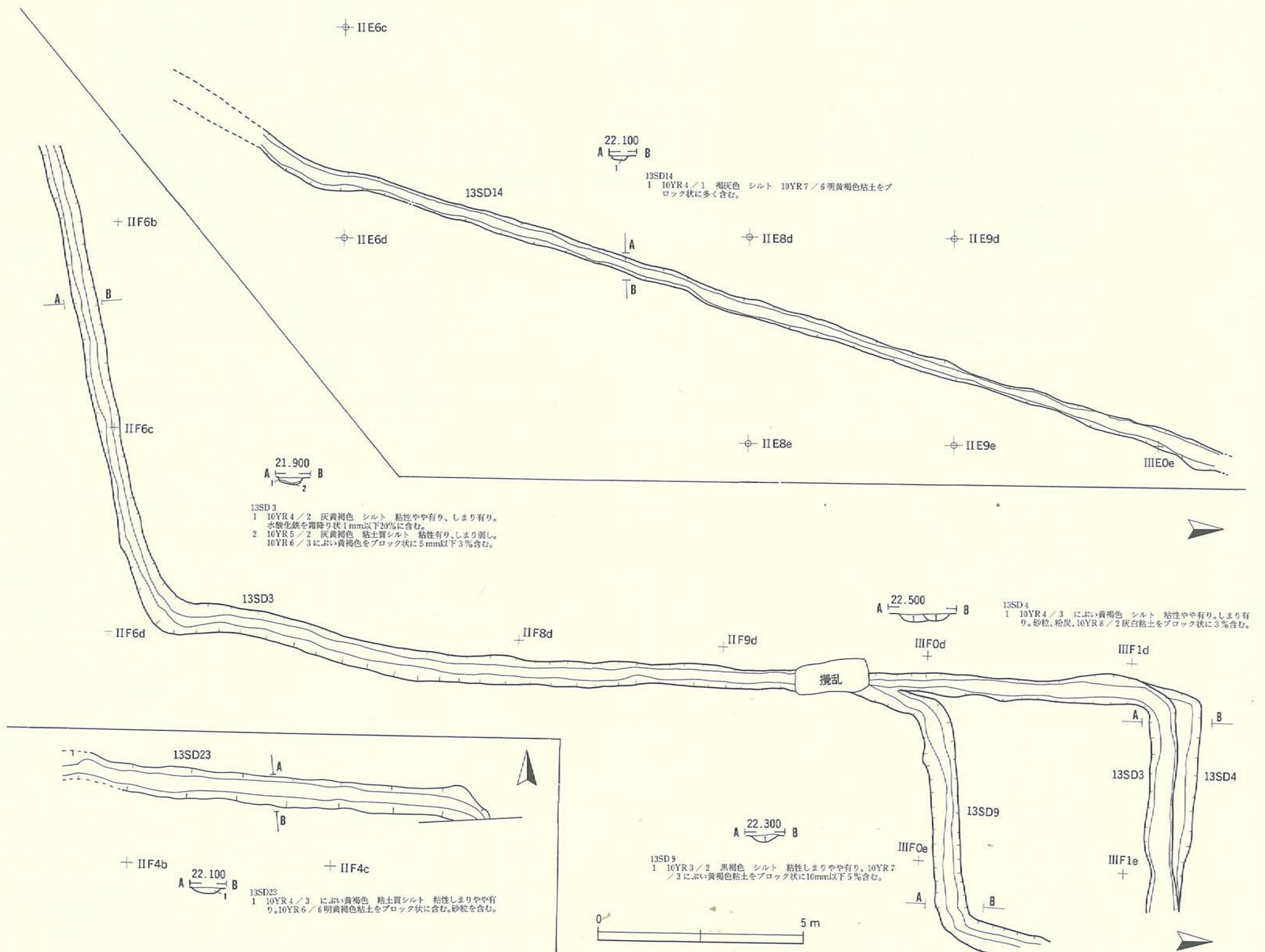
〔位置〕IIF8a～4aに位置する。〔重複〕なし。13SD6と一部重なる部分が見られるが前後関係を把握



- 13SD5
- 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性やや有り、しまりあり。10YR6/4 明黄褐色を5mm以下1%含む。水酸化鉄を1mm以下10%含む。粉炭を1mm以下10%含む。
  - 10YR4/3 におい黄褐色 シルト 粘性しまり弱し。10YR6/6 明黄褐色をブロック状に5mm以下2%含む。7.5YR4/6 灰黄褐色をブロック状に1mm以下2%含む。
- 13SD6
- 10YR4/3 におい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや有り、しまりあり。10YR6/6 明黄褐色をブロック状に5mm以下1%含む。水酸化鉄を1mm以下10%含む。粉炭を1mm以下3%含む。
  - 10YR5/3 におい黄褐色 シルト 粘性しまり弱し。10YR6/6 明黄褐色をブロック上に5mm以下3%含む。水酸化鉄を1mm以下10%含む。粉炭を1mm以下3%含む。
- 13SD7
- 10YR5/3 におい黄褐色 シルト 粘性やや有り、しまり有り。10YR6/6 明黄褐色をブロック状に5mm以下3%含む。水酸化鉄を1mm以下10%含む。粉炭1mm以下1%含む。
- 13SD8
- 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性ややあり、しまり有り。10YR6/6 明黄褐色をブロック状に10mm以下3%含む。10YR4/2 灰黄褐色をブロック状に10mm以下5%含む。水酸化鉄を1mm以下10%含む。粉炭1mm以下1%含む。
  - 10YR4/3 におい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや有り、しまり弱し。10YR6/4 におい黄褐色をブロック状に10mm以下20%含む。10YR4/2 灰黄褐色をブロック状に5mm以下5%含む。水酸化鉄を1mm以下5%含む。



第77図 東側調査区の溝(2)



第78図 東側調査区の溝(3)

できなかった。北側に伸びていたものと思われる。13SD7、13SD8と平行して走る。〔平面形式〕全体的にはほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕2層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土から瀬戸・美濃産の陶器皿(6429)、猿をかたどった土製品(6477)が出土した。〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕近世以降と思われる。(笹平克子)

#### 13SD6 (第77図)

〔位置〕II F 8 a～4 aに位置する。〔重複〕13SD5と重複しており前後関係は不明。また13SD5、13SD7、13SD8と平行して走る。北側にさらに伸びていたものと思われる。〔平面形式〕全体的にはほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕2層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土から常滑産甕(1386)、渥美産甕(1450)、近世の磁器碗(6407)、大堀相馬産陶器碗(6437)が出土した。〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕近世以降と思われる。(笹平克子)

#### 13SD7 (第77図)

〔位置〕II F 8 a～4 aに位置する。〔重複〕なし。11SD3との関係は不明。〔平面形式〕全体的にはほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕近世以降と思われる。(笹平克子)

#### 13SD8 (第77図)

〔位置〕II F 8 a～4 aに位置する。〔重複〕11SD4と同一である可能性が高い。〔平面形式〕全体的にはほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕2層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から中国産白磁壺片(2057)、12世紀以降と思われる東北在地産の陶器甕(5010)、大堀相馬産と思われる陶器瓶(6456)、キセルの吸い口(7112、7124)、寛永通寶(7251)が出土した。〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕近世以降と考えられる。(笹平克子)

#### 13SD9 (第78図)

〔位置〕II F 9 d～9 eに位置する。〔重複〕13SD3と重複するが攪乱により前後関係は不明である。〔平面形式〕調査区外から南に伸びて、底面の傾斜角方向は東から西で、東から西へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕礫の入る部分も見られ、暗渠排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕近世以降と思われる。(笹平克子)

#### 13SD10 (第79図)

〔位置〕II F 4 d～4 eに位置する。〔重複〕13SD16と重複するが本溝が古い。13SB15は本遺構が埋まってから作られたと思われる。〔平面形式〕さらに西側から伸びていたものと思われる。底面の傾斜角方向は西から東で、西から東に流れるようになっている。〔埋土〕1層である。人為堆積、自然堆積の別は不明で

22.200



13SD18  
1 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 粘性しまり有り。砂粒を多く含む。粉炭 1mm以下 3%含む。

13SD19  
1 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 粘性有り。しまりやや有り。砂粒、円礫を含む。

21.900

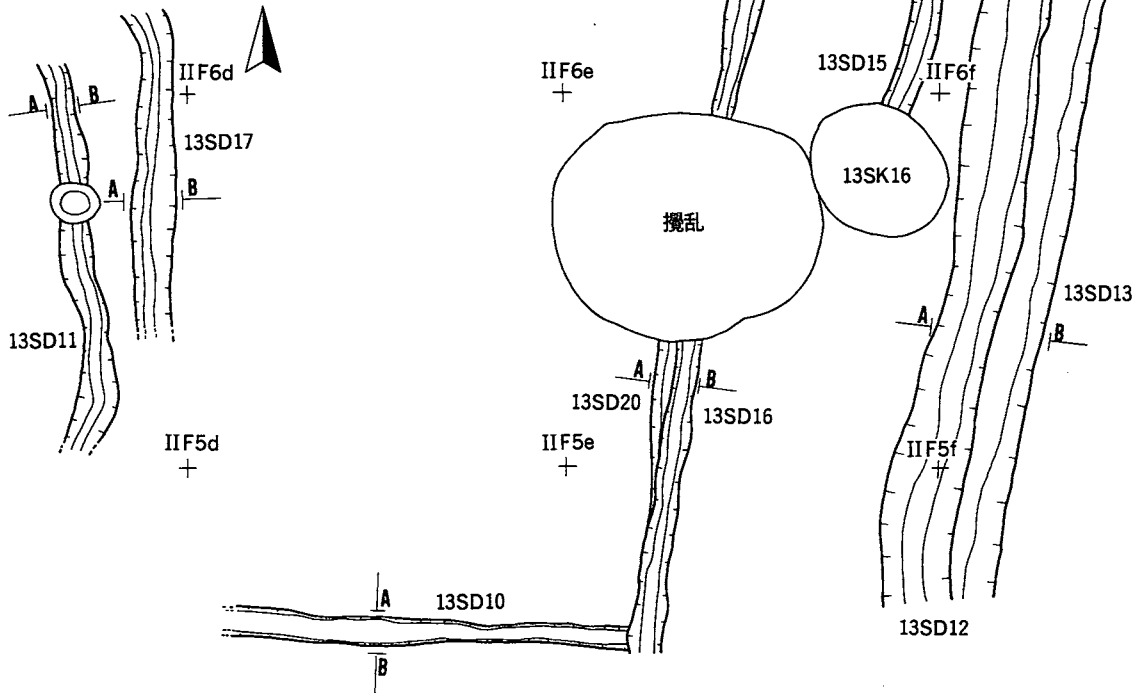


13SD17  
1 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。水酸化鉄を含む。砂粒をわずかに含む。

21.900



13SD11  
1 10YR 5 / 3 におい黄褐色 シルト 粘性やや有り、しまり有り。10YR 6 / 6 明黄褐色をブロック状に 5mm以下 3%含む。水酸化鉄を 1mm以下 10%含む。粉炭 1mm以下 1%含む。



21.600



13SD16  
1 10YR 3 / 1 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。水酸化鉄を縞状に含む。砂粒をわずかに含む。

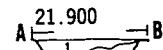
13SD20 13SD16

13SD20  
1 10YR 4 / 3 におい黄褐色 粘土質シルト 粘性有り。しまりやや有り。砂粒をわずかに含む。

22.900



13SD10  
1 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 粘性しまりやや有り。10YR 7 / 3 におい黄褐色粘土をブロック状に 10mm以下 5%含む。



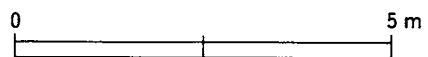
13SD12 13SD13

13SD12

1 10YR 3 / 3 暗褐色 シルト 粘性しまりやや有り。水酸化鉄を縞状に含む。砂粒をわずかに含む。  
2 10YR 3 / 1 黒褐色 粘土質シルト 粘性有り。しまりやや有り。水酸化鉄を縞状に含む。10mm以下の角礫を含む。

13SD13

1 10YR 3 / 3 暗褐色 シルト 粘性しまりやや有り。水酸化鉄を縞状に含む。砂粒をわずかに含む。  
2 10YR 3 / 2 黒褐色 粘土質シルト 粘性有り。しまりやや有り。水酸化鉄を含む。砂粒をわずかに含む。10YR 7 / 3 におい黄褐色粘土をブロック状に 10mm以下 1%含む。粉炭 5mm以下 1%含む。5 cm以下の角礫を含む。下面に水酸化鉄を縞状に多く含む。



第79図 東側調査区の溝(4)

ある。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明である〔年代〕近世と思われる。(笹平克子)

### 13 S D 11 (第79図)

〔位置〕II F 5 c に位置する。〔重複〕13 S D 3 と重複するが前後関係は不明である。同時存在も考えられる。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐに伸びる。底面の傾斜角方向は南から北で、南から北へ水が流れるようになっている。さらに南へ伸びていたと思われる。〔埋土〕1層である。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水目的の溝と考えられる。〔年代〕近世以降と思われる。(笹平克子)

### 13 S D 12 (第79図)

〔位置〕II F 7 f ～ 4 f に位置する。〔重複〕13 S D 13 と重複し本遺構が新しい。〔平面形式〕調査区北側より伸びてきて、調査区南側へ伸びていく。底面の斜角方向は北から南で、北から南へ流れるようになっている。直線的な溝である。〔埋土〕2層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土から渥美産片口鉢(1416、1418)、渥美産甕(1429、1430、1442、1443)、手づくねかわらけ(3232、3233、3300)が出土した。〔溝の性格〕不明である。〔年代〕12世紀の所属と思われる。(笹平克子)

### 13 S D 13 (第79図)

〔位置〕II F 6 f ～ 4 f に位置する。〔重複〕13 S D 12 と重複し本遺構が古い。〔平面形式〕調査区北側より伸びてきて、調査区南側へ伸びていく。底面の斜角方向は北から南で、北から南へ流れるようになっている。直線的な溝である。13 S D 12 より底面のレベルが高い部分がみられる。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土からアメリカ式石鏟(40)、常滑産甕(1356、1359)、渥美産甕(1429、1430)、釘(7127)、砥石(7315)が出土した。〔溝の性格〕不明である。〔年代〕12世紀と思われる。(笹平克子)

### 13 S D 14 (第78図)

〔位置〕II E 0 d ～ 5 c に位置する。〔重複〕15 S D 1、15 S D 2 と重複するが、前後関係は不明である。〔平面形式〕北から南にほぼ真っ直ぐに伸びる。底面の斜角方向は北から南であり、北から南に水が流れるようになっている。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明である。〔年代〕近世以降と考える。(笹平克子)

### 13 S D 15 (第79図)

〔位置〕II E 5 e、6 e、6 f に位置する。〔重複〕13 S K 18、13 S K 16 と重複するが、前後関係は不明である。〔平面形式〕二つのS Kを結ぶように南北に伸びる。底面の斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明である。〔年代〕近世以降と考える。(笹平克子)

### 13 S D 16 (第79図、写真図版52)

〔位置〕III E 7 f ～ 4 f に位置する。〔重複〕13 S D 14、柱穴1個と重複するが、前後関係は不明である。13 S D 14、13 S D 20 より新しい。〔平面形式〕北側は調査区外から伸びてくるものと思われ、南側は調査区

外へ伸びる。底面の傾斜角方向は北から南に流れるようになっている。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明である。〔年代〕近世以降と考えられる。

(笹平克子)

### 13 S D 17 (第79図、写真図版52)

〔位置〕III F 5 d～5 cに位置する。〔重複〕13 S D 3と重複するが前後関係は不明である。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐに伸びる。底面の傾斜角方向は南から北で、南から北へ水が流れるようになっている。南側はさらに伸びていたものの削平を受けたものと思われる。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から磁器皿(6427)が出土した。〔溝の性格〕不明である。〔年代〕近世以降と考えられる。

(笹平克子)

### 13 S D 18 (第79図、写真図版52)

〔位置〕III F 6 e、6 fに位置する。〔重複〕13 S D 19と重複するが前後関係は不明である。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐに伸びる。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明〔年代〕近世以降と考えられる。

(笹平克子)

### 13 S D 19 (第79図、写真図版52)

〔位置〕III F 6 e、6 fに位置する。〔重複〕13 S D 18と重複するが前後関係は不明である。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐに伸びる。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕1層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明〔年代〕近世以降と考えられる。

(笹平克子)

### 13 S D 20 (第79図)

〔位置〕II F 4 e、5 eに位置する。〔重複〕13 S D 16と重複し、本溝が古い。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐに伸びる。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1層である。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕不明であるが、近世に所属すると思われる。

(笹平克子)

### 13 S D 21 (第79図)

〔位置〕II F 6 eに位置する。〔重複〕13 S D 16、13 S K 18と重複しているが重複関係は不明である。〔平面形式〕北から南にほぼ真っ直ぐに伸びる。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕1層に分けられる。削平されているため人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明である。〔年代〕近世以降と考えられる。

(笹平克子)

### 13 S D 23 (第78図、写真図版52)

〔位置〕II F 4 a、4 b、4 cに位置する。〔重複〕13 S B 20と重複するが前後関係は不明である。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕1層に分けられる。〔出土遺物〕埋土から中国産青磁小碗片(5003)が出土した。〔溝の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S D 25 (第 80 図、写真図版 52)

〔位置〕IID 6 i、6 j に位置する。〔重複〕13 S D 26、13 S B 21 の柱穴 P 1016 と重複するが本遺構が新しい。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕3 層に分けられる。下部の 3 層は粉状の木炭が詰められた層で、本溝は暗渠である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝である。〔年代〕近世または近代の所属と考えられる。

### 13 S D 26 (第 80 図、写真図版 52)

〔位置〕IID 6 j、7 j、IIE 7 a、8 a に位置する。〔重複〕13 S D 25 と重複するが本遺構が古い。また 13 S B 21 の柱穴 P 648、13 S B 24 の柱穴 P 713 と重複するが本遺構が新しい。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐである。北東側に行くにしたがって幅が広がる。そして北東側では溝の両側の縁が一段下がり溝状になっている。底面の傾斜角方向は北東から南西である。〔埋土〕2 層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝であろうが、北東部の両縁が溝状になっている部分の目的については判断できない。〔年代〕近世の所属である 13 S B 21、24 より新しいので、近世または近代の所属と考えられる。

### 13 S D 27 (第 80 図、写真図版 53)

〔位置〕IIE 7 a、7 b、7 c に位置する。〔重複〕13 S E 3 と重複するが本遺構が古い。また 13 S D 27 と重複するが前後関係を判断できなかった。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕2 層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土から肥前産の磁器皿(6314)とキセルの吸口(7116)が出土した。〔溝の性格〕近世の母屋と推定される 13 S B 21、22、23 のちょうど背後にあり、これらの建物の雨落ちの排水の目的、または区画の目的の溝と推定される。〔年代〕出土した肥前産の磁器皿(6314)はIV期(1690～1780)の製作で本遺構の廃絶はそれより新しくなる。また上述のように本溝は 13 S B 21、22、23 に伴う可能性が高いので、所属する時期もこれらの建物と同時期ということになる。

### 13 S D 28 (第 80 図、写真図版 53)

〔位置〕IID 6 j～IIE 6 a に位置する。〔重複〕13 S D 29、13 S D 30 と重複し、本遺構が古い。〔平面形式〕東西にやや湾曲しながら伸びる。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕1 層に分けられる。人為、自然堆積の別は不明である。東側では 20 cm 程度の礫が入る。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕礫を伴う暗渠排水の溝と思われる。〔年代〕近世以降と考えられる。(笹平克子)

### 13 S D 29 (第 80 図、写真図版 53)

〔位置〕IID 5 i、5 j に位置する。〔重複〕13 S D 28 と重複し、本遺構が新しい。〔平面形式〕北から西に向かって湾曲する。底面の傾斜角方向は北から西と思われる。〔埋土〕1 層に分けられる。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明である。〔年代〕近世の所属と考えられる。(笹平克子)

### 13 S D 30 (第 80 図、写真図版 53)

〔位置〕IID 5 i、5 j に位置する。〔重複〕13 S D 28 と重複し本遺構が新しい。〔平面形式〕北から西に向かって湾曲する。底面の傾斜角方向は北から西である。〔埋土〕1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別



は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明〔年代〕近世の所屬と考えられる。 (笹平克子)

### 13 S D 31 (第 80 図、写真図版 53)

〔位置〕II E 4 a、3 a、3 b に位置する。〔重複〕13 S D 32 と重複する。本遺構の方が新しい。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土から近世磁器の瓶(6340)が出土した。〔溝の性格〕不明である。〔年代〕近世の所屬と考えられる。 (笹平克子)

### 13 S D 32 (第 80 図、写真図版 53)

〔位置〕II E 4 a、3 a、3 b に位置する。〔重複〕13 S D 31 と重複する。本遺構が古い。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明〔年代〕近世の所屬と考えられる。 (笹平克子)

### 15 S D 1 (第 81 図、写真図版 54)

〔位置〕II E 5 c、5 d に位置する。〔重複〕なし〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕1 層に分けられる。粉状の木炭が詰められた層で、本溝は暗渠である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝である。〔年代〕近世の所屬と考えられる。

### 15 S D 2 (第 81 図、写真図版 54)

〔位置〕II E 5 c～5 f に位置する。〔重複〕東側を水穴(伏流水の流れ跡)によって壊されている。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は西から東で、西から東へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から磁器碗(6306、6308)、磁器皿(6322、6326)、常滑産壺片(1367)が出土している。〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕出土した陶磁器の中では 6308 の磁器碗の製作年代が 18 世紀後半～19 世紀前半で最も新しい。よって本溝の廃棄年代はそれ以降になる。

### 15 S D 3 (第 81 図、写真図版 54)

〔位置〕II E 5 c、5 d に位置する。〔重複〕なし〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は西から東で、西から東へ水が流れるようになっている。〔埋土〕不明〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕近世の所屬と考えられる。

### 15 S D 4 (第 81 図、写真図版 54)

〔位置〕II E 5 c、5 d に位置する。〔重複〕なし〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は西から東で、西から東へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕近世の所屬と考えられる。

22.100  
A—B  
2  
3

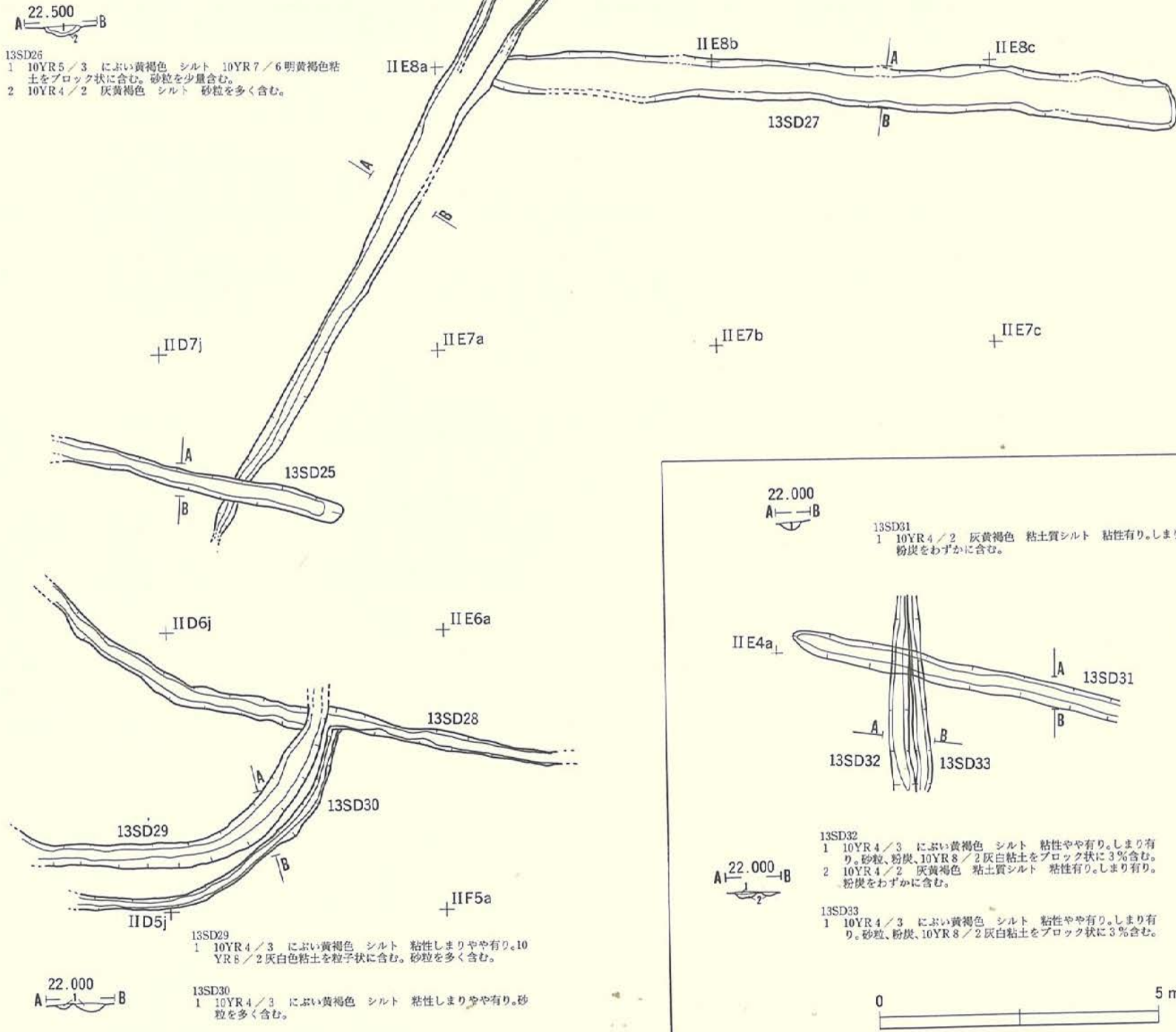
- 13SD25  
1 10YR 5 / 3 におい黄褐色 シルト 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土をブロック状に含む。粉炭を多く含む。  
2 10YR 7 / 6 明黄褐色 粘土 10YR 5 / 3 におい黄褐色を多く含む。  
3 10YR 1.7 / 1 黒色 炭化物層 3~1mmの粉炭である。

22.500  
A—B  
2

- 13SD26  
1 10YR 5 / 3 におい黄褐色 シルト 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土をブロック状に含む。砂粒を少量含む。  
2 10YR 4 / 2 灰黄褐色 シルト 砂粒を多く含む。

22.500  
A—B  
2

- 13SD27  
1 10YR 4 / 1 褐灰色 シルト 10YR 7 / 6 明黄褐色粘土をブロック状に多く含む。  
2 10YR 4 / 1 褐灰色 砂質シルト



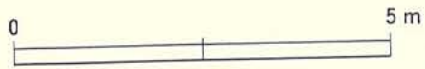
22.000  
A—B  
2

- 13SD31  
1 10YR 4 / 2 灰黄褐色 粘土質シルト 粘性有り。しまり有り。粉炭をわずかに含む。

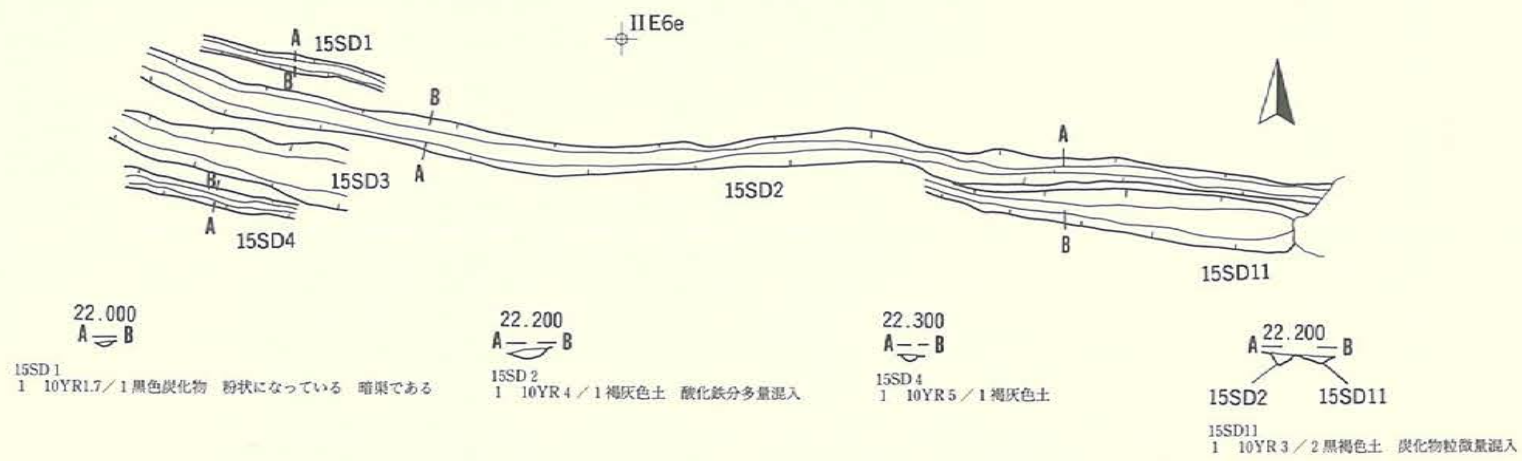
22.000  
A—B  
2

- 13SD32  
1 10YR 4 / 3 におい黄褐色 シルト 粘性やや有り。しまり有り。砂粒、粉炭、10YR 8 / 2 灰白粘土をブロック状に3%含む。  
2 10YR 4 / 2 灰黄褐色 粘土質シルト 粘性有り。しまり有り。粉炭をわずかに含む。

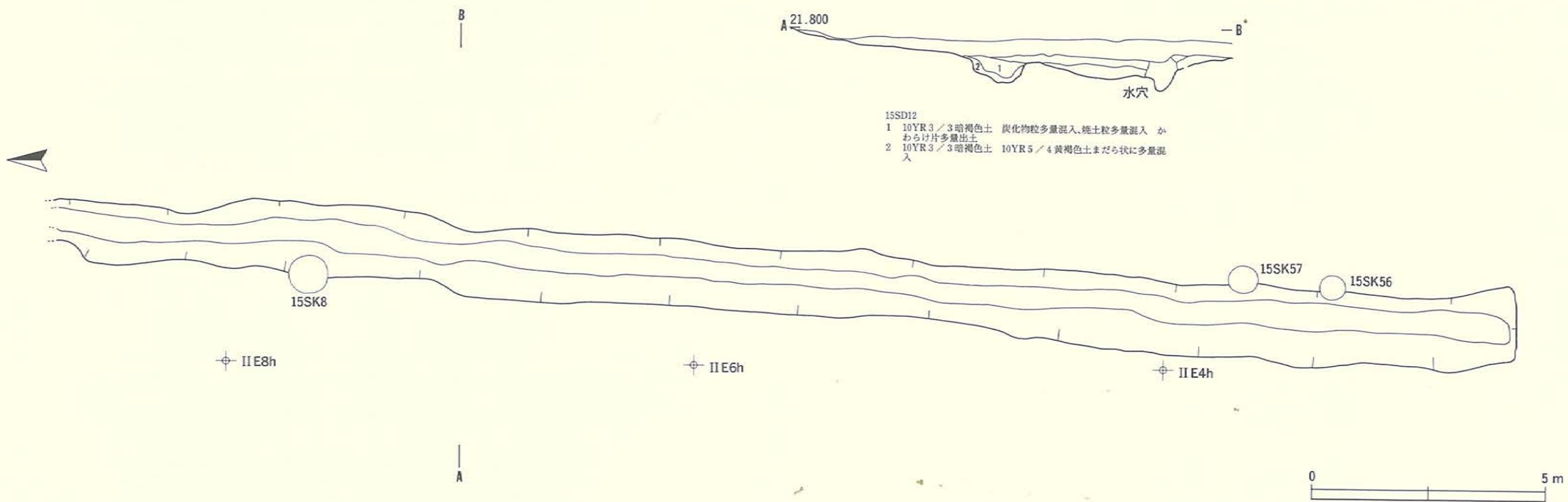
- 13SD33  
1 10YR 4 / 3 におい黄褐色 シルト 粘性やや有り。しまり有り。砂粒、粉炭、10YR 8 / 2 灰白粘土をブロック状に3%含む。



第80図 東側調査区の溝(5)



15SD12



第81図 東側調査区の溝(6)

#### 15 S D 5 (第 82 図、写真図版 55)

〔位置〕 IIE 6 d～8 d に位置する。〔重複〕 15 S B 2 の柱穴 (P 19、P 78、P 82、P 83) と 15 S D 6 と重複するが本溝が新しい。〔平面形式〕 ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は北から南で北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕 1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 なし〔溝の性格〕 排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕 近世の所屬と考えられる。

#### 15 S D 6 (第 82 図、写真図版 55)

〔位置〕 IIE 6 d、7 d に位置する。〔重複〕 15 S D 5 と重複するが本溝が古い。〔平面形式〕 ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕 1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 なし〔溝の性格〕 排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕 近世の所屬と考えられる。

#### 15 S D 7 (第 82 図、写真図版 55)

〔位置〕 IIE 4 c、4 d に位置する。〔重複〕 15 S D 8 にぶつかる部分で途切れ、同時存在の可能性が考えられる。〔平面形式〕 ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は西から東で、西から東へ水が流れるようになっている。〔埋土〕 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 なし〔溝の性格〕 排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕 近世の所屬と考えられる。

#### 15 S D 8 (第 82 図、写真図版 55)

〔位置〕 IIE 3 d、4 d に位置する。〔重複〕 15 S D 7 が本溝にぶつかる部分で途切れ、同時存在の可能性が考えられる。また 15 S E 25 と重複するが本溝が新しい。そして 15 S D 34 が本溝に接しているが前後関係を把握できなかった。〔平面形式〕 ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は西から東で、西から東へ水が流れるようになっている。〔埋土〕 2 層に分けられる。2 層中には握りこぶし大の礫が詰め込まれており、本溝は暗渠である。〔出土遺物〕 なし〔溝の性格〕 排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕 近世の所屬と考えられる。

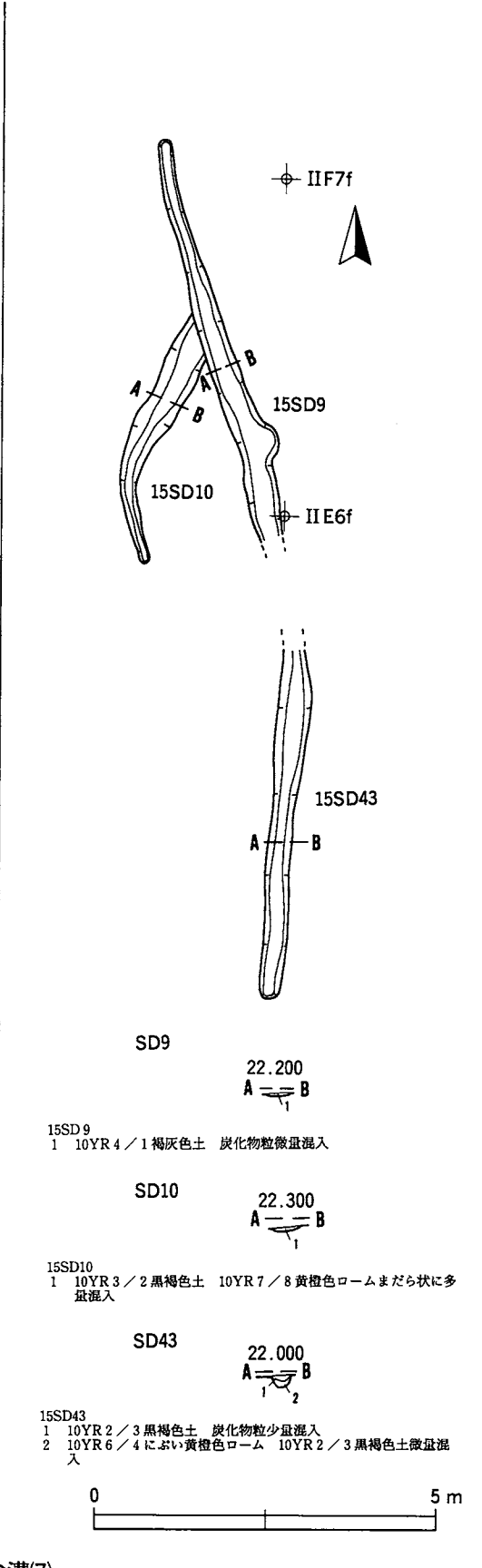
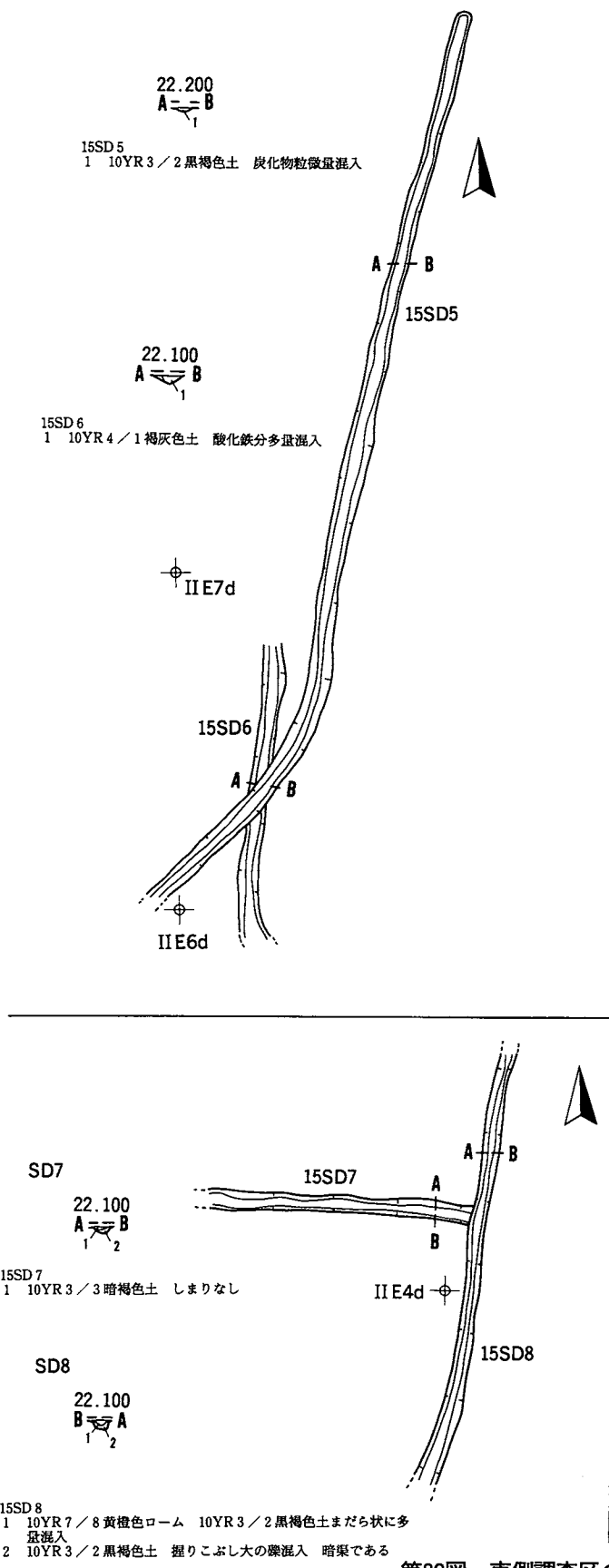
#### 15 S D 9・15 S D 43 (第 82 図、写真図版 55、58)

15 S D 9、15 S D 43 は調査時は別々の溝として調査したが、ここでは同一の溝と考え、まとめて記す。

〔位置〕 IIE 4 e、4 f、5 e、5 f、6 e、7 e に位置する。〔重複〕 15 S D 10 と重複するが本溝が新しい。〔平面形式〕 やや弓なりになるが概ね真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕 北側では 1 層、南側では 2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕 南側の埋土で肥前産の磁器碗 (6303) が出土した。〔溝の性格〕 排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕 出土した磁器碗は肥前 IV 期 (1690～1780 年) のものである。よって本溝の廃絶はそれ以降の年代になる。

#### 15 S D 10 (第 82 図、写真図版 55)

〔位置〕 IIE 5 e、6 e に位置する。〔重複〕 15 S D 9 と重複するが本溝が古い。〔平面形式〕 やや弓なりになる形状である。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕 1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不



第82図 東側調査区の溝(7)

明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

#### 15 S D 11 (第 81 図、写真図版 54)

〔位置〕II E 5 d、5 f に位置する。〔重複〕東側を水穴(伏流水の流れ跡)によって壊されている。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は西から東で、西から東へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕近世の所属と考えられる。

#### 15 S D 12 (第 81 図、写真図版 56)

〔位置〕II E 2 h～8 h に位置する。〔重複〕II E 区の遺物包含層の下から検出された。また 15 S K 8、15 S K 56、15 S K 57 と重複するが本溝が古い。そして 15 S D 41 と重複するが本溝が新しい。〔平面形式〕真っ直ぐに伸びる形状である。北端では壁があいまいになっている。南端は明瞭に完結している。底面の傾斜角方向は北から南であるが、南端は閉じているため、水は流れていかない。〔埋土〕2 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から常滑産片口鉢片(1313)、常滑産甕破片(1336)、渥美産片口鉢片(1416)、土師器甕(128)、手づくねかわらけ(3282、3285、3294、3349、3354、3355、3356)、ロクロかわらけ(3414、3421)、釘(4331)、素焼きの手あぶりの類の破片(4012)、砥石(4212)、滑石製温石(4217)が出土した。〔溝の性格〕規模の大きいこと、南端が閉じていることから単純な排水の溝とは考えがたい。都市または屋敷地の区画溝といった可能性が考えられる。〔年代〕検出面と出土遺物から 12 世紀代の所属と考えられる。

#### 15 S D 34 (第 83 図、写真図版 56、57)

〔位置〕II E 2 g、3 d～3 g に位置する。〔重複〕15 S K 46、15 S K 52 と重複するが本溝が新しい。また 15 S D 35 と重複するが本溝が古い。そして 15 S D 8 が本溝に接しているが前後関係を把握できなかった。〔平面形式〕やや弓なりになるが、概ね真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は西から東で、西から東へ水が流れるようになっている。〔埋土〕1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕近世～近代の所属と考えられる。

#### 15 S D 35 (第 83 図、写真図版 57)

〔位置〕II E 2 f、3 f に位置する。〔重複〕15 S D 34 と重複するが本溝が新しい。また 15 S D 36 と重複するが本溝が古い。〔平面形式〕ほぼ真っ直ぐである。北端は段を持っているが明瞭に完結する。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南へ水が流れるようになっている。〔埋土〕2 層に分けられる。2 層目には礫が詰められており、本溝は暗渠である。1 層目は 2 層目の礫を覆うため人為的に埋めた土である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕近世～近代の所属と考えられる。

#### 15 S D 36 (第 83 図、写真図版 56、57)

〔位置〕II E 2 c～2 h、3 c～3 e に位置する。〔重複〕15 S D 35、15 S E 25 と重複するが本溝が新しい。〔平面形式〕やや弓なりになるが、概ね真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は西から東で、西から東へ水が流れるようになっている。〔埋土〕2 層に分けられる。礫が詰められた埋土で、本溝は暗渠である。〔出土遺物〕なし

物)暗渠の礫とともに挽き白の下白片(7312)、石鉢片(7313)が出土した。〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕近世～近代の所屬と考えられる。

#### 15 S D 37 (第 83 図、写真図版 57)

〔位置〕II E 3 b、3 c に位置する。〔重複〕なし〔平面形式〕弓なりの形状である。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕1 層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土から手づくねかわらけ(3283)が出土した。〔溝の性格〕不明である。〔年代〕近世～近代の所屬と考えられる。

#### 15 S D 38 (第 83 図、写真図版 56)

〔位置〕II E 3 d～3 f に位置する。〔重複〕15 S K 48、15 S K 51 と重複するが、本溝が新しい。〔平面形式〕概ね真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は西から東で、西から東へ水が流れるようになっている。〔埋土〕2 層に分けられる。礫が詰められた埋土で、本溝は暗渠である。〔出土遺物〕埋土中から寛永通寶が 7 枚(7234、7235、7236、7237、7238、7239、7240)が出土した。3 枚が古寛永、4 枚が元文年間鑄造の新寛永である。〔溝の性格〕排水の目的の溝の可能性が高い。〔年代〕出土した寛永通寶で初鑄年代が最も新しいのは、7240 の 1738 年(摂津加島所鑄造)である。よって本溝の廃絶年代はそれより新しい。

#### 15 S D 39 (第 83 図、写真図版 57)

〔位置〕II E 3 e～3 f に位置する。〔重複〕15 S D 42 と重複するが本溝が新しい。〔平面形式〕概ね真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕1 層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明である。〔年代〕近世～近代の所屬と考えられる。

#### 15 S D 40 (第 83 図、写真図版 51、56、58)

〔位置〕II E 3 f～3 g に位置する。〔重複〕なし〔平面形式〕概ね真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕2 層に分けられる。土層断面の形状から人為堆積と思われる。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕不明である。〔年代〕近世～近代の所屬と考えられる。

#### 15 S D 41 (第 83 図、写真図版 58)

〔位置〕II E 3 h、3 i に位置する。〔重複〕15 S D 12 と重複するが本溝が古い。〔平面形式〕やや弓なりになるが概ね真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は明瞭でない。〔埋土〕2 層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。〔出土遺物〕埋土中から須恵器甕破片(234、239、240)が出土した。これらは同一個体の破片である。〔溝の性格〕不明である。〔年代〕出土遺物と検出面から古代又は 12 世紀の所屬の可能性が考えられるが、詳細な年代については判断できない。

#### 15 S D 42 (第 83 図、写真図版 58)

〔位置〕II E 3 f、4 f、5 f に位置する。〔重複〕15 S D 39 と重複するが本溝が古い。〔平面形式〕概ね真っ直ぐである。底面の傾斜角方向は北から南で、北から南に水が流れるようになっている。〔埋土〕1 層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。〔出土遺物〕なし〔溝の性格〕排水の目的の溝と考えられる。〔年代〕近世～近代の所屬と考えられる。



21.700  
A—B  
1  
15SD34  
1 10YR 3 / 3 暗褐色土 2.5Y 7 / 4 浅黄色ロームブロック少量混入、炭化物粒微量混入、焼土粒微量混入

21.700  
A—B  
1  
15SD35  
1 2.5Y 7 / 4 浅黄色ローム 10YR 6 / 8 明黄褐色ローム入り混じり 10YR 3 / 4 暗褐色土少量混入  
2 10YR 4 / 4 褐色土 底部に石多量

21.500  
A—B  
1  
15SD36  
1 10YR 3 / 2 黒褐色土 10YR 7 / 3 におい黄褐色ローム多量混入  
2 10YR 3 / 2 黒褐色土 底部に石多量

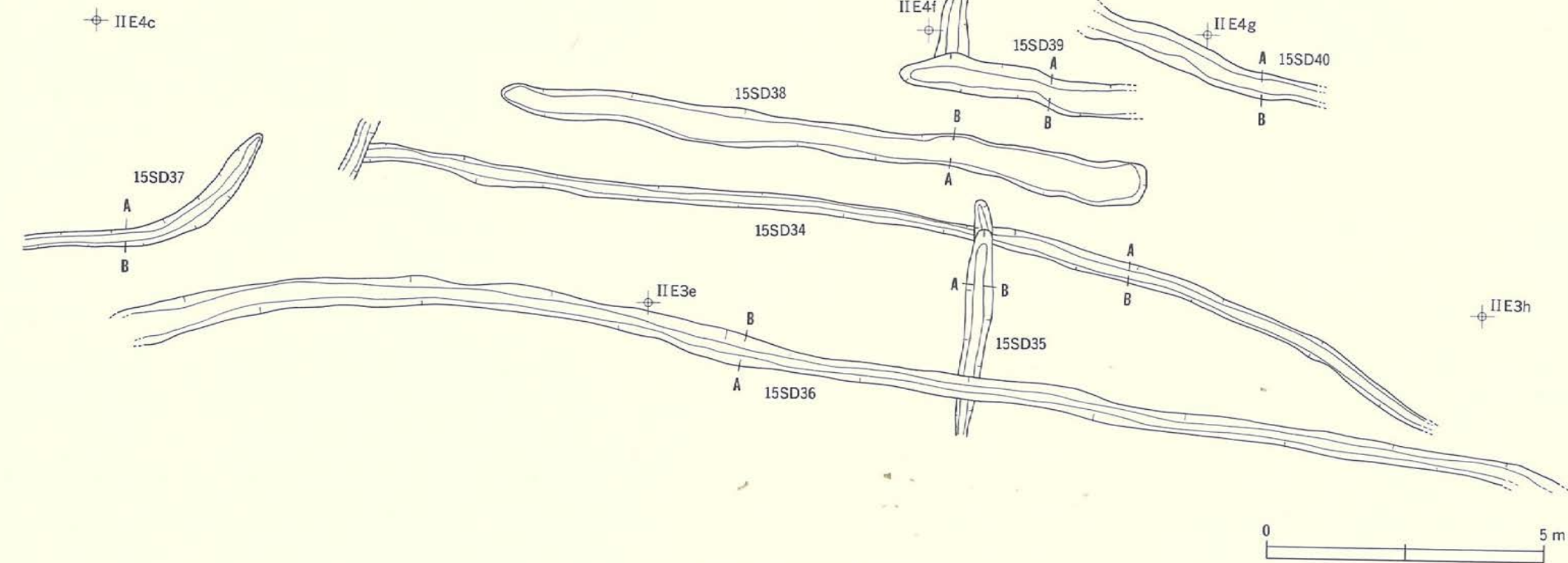
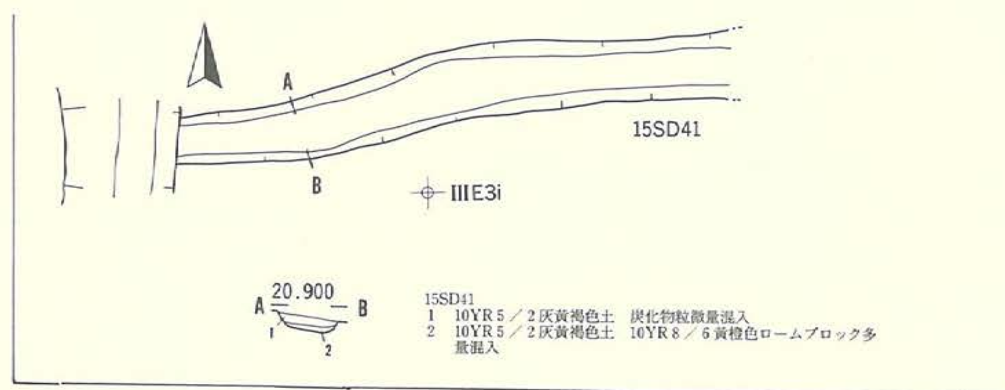
21.700  
A—B  
1  
15SD37  
1 10YR 3 / 3 暗褐色土 炭化物粒微量混入、焼土粒微量混入

21.800  
A—B  
1  
15SD38  
1 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 8 / 2 灰白色ロームまだら状に少量混入  
2 10YR 8 / 2 灰白色ローム 10YR 4 / 2 灰黄褐色土少量混入

21.900  
A—B  
1  
15SD39  
1 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 8 / 1 灰白色ロームまだら状に少量混入

21.900  
A—B  
1  
15SD40  
1 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 10YR 7 / 6 明黄褐色ロームまだら状に少量混入  
2 10YR 7 / 6 明黄褐色ローム 10YR 4 / 2 灰黄褐色土まだら状に少量混入

21.900  
A—B  
1  
15SD42  
1 10YR 4 / 3 におい黄褐色土 炭化物粒微量混入、焼土粒多量混入



第83図 東側調査区の溝(8)



## 5 焼土、カマド遺構

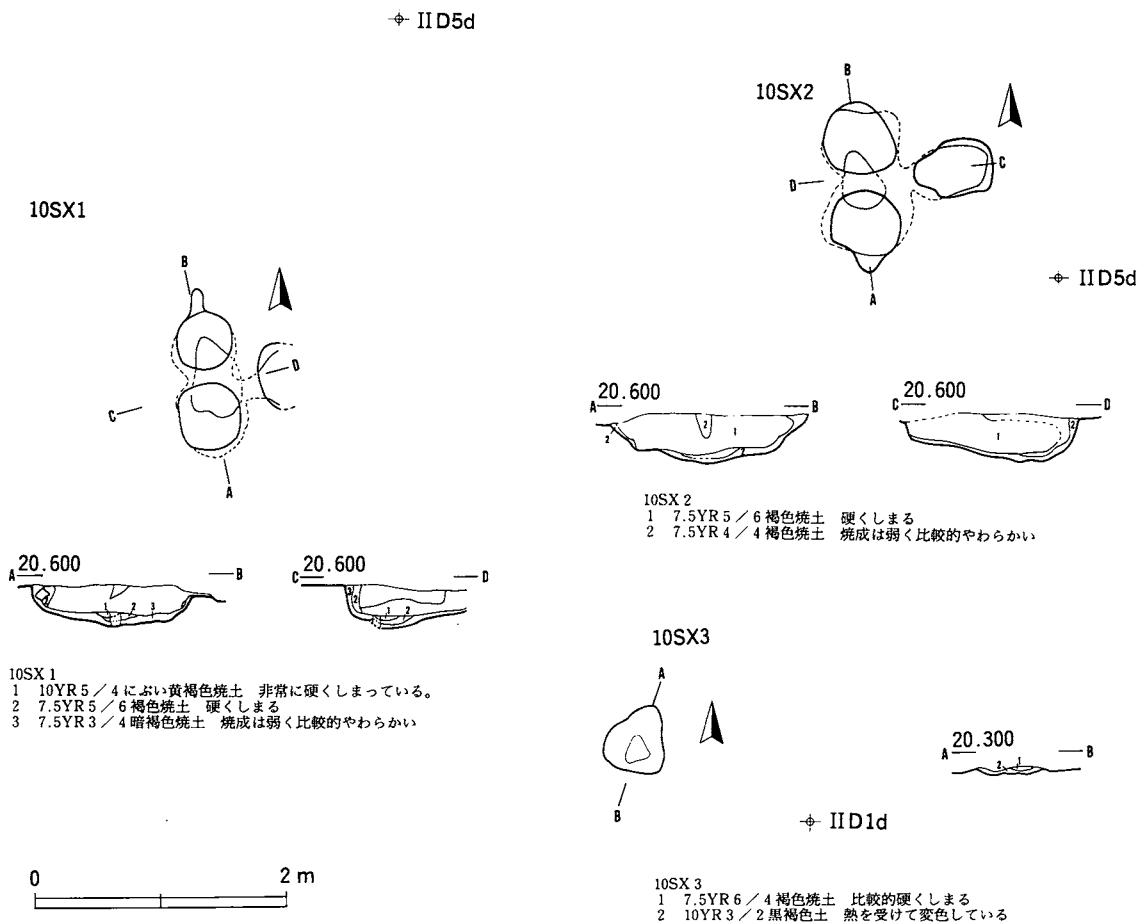
焼土遺構、カマド遺構、どちらも判断できないものを一括してS Xの記号を付した。S X遺構は西側調査区で8基、東側調査区で48基検出された。以下西側調査区の遺構から記していく。

### 10 S X 1 (第84図)

〔位置〕IID 4 cに位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と2つの掛け口、煙出しからなる。〔埋土〕粘土で作られた掛け口と、後から堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。具体的な用途には言及することができない。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

### 10 S X 2 (第84図)

〔位置〕IID 5 cに位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と2つの掛け口、煙出しからなる。〔埋土〕粘土で作られた掛け口と、後に堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。具体的な用途には言及することができない。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。



第84図 西側調査区の焼土、カマド状遺構(1)

### 10 S X 3 (第84図)

〔位置〕IID 1 cに位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕火焼面のみからなる。〔埋土〕埋土は無く、地面が熱変化した部分からなる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 15 S X 14 (第85図、写真図版 59)

〔位置〕IIC 0 f、0 gに位置する。〔重複〕15 S D 25と重複するが本遺構が新しい。〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と1つの掛け口、煙出しからなる。火床面は前庭部と掛け口の境目にある。〔埋土〕粘土で作られた掛け口と、後から堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。具体的な用途には言及することができない。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

### 15 S X 15 (第85図、写真図版 59)

〔位置〕IIC 0 gに位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と1つの掛け口、2つの煙出しからなる。火床面は掛け口の中にある。〔埋土〕粘土で作られた掛け口と、後から堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。具体的な用途には言及することができない。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

### 15 S X 16 (第85図、写真図版 59)

〔位置〕IIC 8 fに位置する。〔重複〕15 S B 6のプラン内に位置するが、この建物の中軸線上に本遺構が位置し、同時存在の可能性が考えられる。即ち15 S B 6は本遺構の上屋と解釈できる。〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と2つの掛け口、煙出しからなる。火床面は前庭部と掛け口の境目にある。〔埋土〕粘土で作られた掛け口と、後から堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。上屋がある点と掛け口が2つある点から恒常的に使用されたと推定される。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

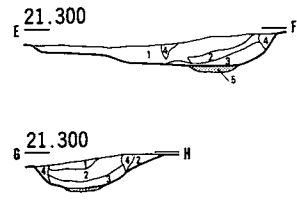
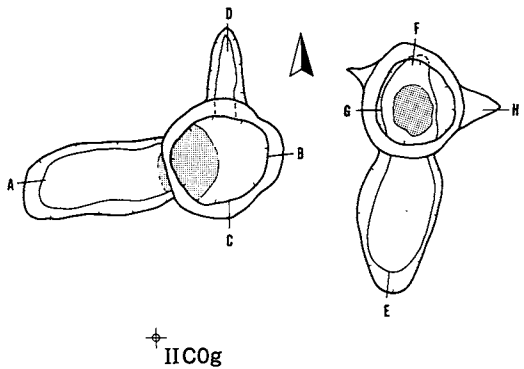
### 15 S X 17 (第85図、写真図版 59)

〔位置〕IIC 9 jに位置する。〔重複〕15 S B 18とプランが重なるが、直接切り合う部分がなく前後関係を判断できない。〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と1つの掛け口からなる。火床面は掛け口の中にある。煙出しの有無は削平のため不明である。〔埋土〕掛け口の構築部分は削平のため失われている。埋土は後に堆積した土のみである。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。具体的な用途には言及することができない。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

### 15 S X 18 (第85図、写真図版 59)

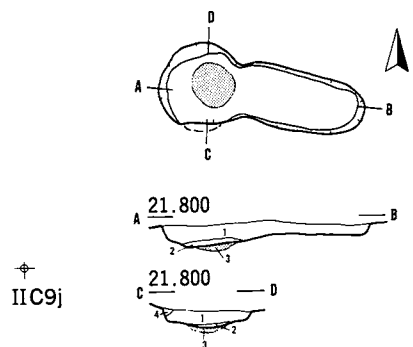
〔位置〕IC 9 h、IIC 0 hに位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と1つの掛け口からなる。火床面は掛け口の中にある。煙出しの有無は削平のため不明である。〔埋土〕掛け口の構築部分は削平のため失われている。埋土は後に堆積した土のみである。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。具体的な用途には言及することができない。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

15SX14



- 15SX14
- 1 10YR 4 / 4 褐色土 炭化物ブロック少量混入
  - 2 5 YR 5 / 8 明赤褐色焼土 10YR 4 / 4 褐色土斑状に多量混入
  - 3 10YR 6 / 4 におい黄橙色土 焼土ブロック多量混入
  - 4 2.5YR 5 / 8 明赤褐色焼土 地山の熱変化したもの

15SX17

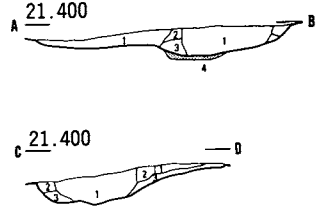


- 15SX17
- 1 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 炭化物粒、焼土粒少量混入
  - 2 10YR 4 / 4 褐色土 焼土粒少量混入 炭化物粒多量混入
  - 3 5 YR 6 / 6 橙色焼土 地山の熱変化したもの
  - 4 2.5YR 4 / 8 赤褐色焼土 10YR 4 / 2 灰黄褐色土斑状に多量混入



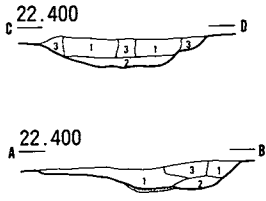
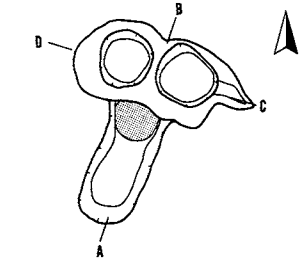
第85図 西側調査区の焼土、カマド状遺構(2)

15SX15



- 15SX15
- 1 10YR 4 / 4 褐色土 炭化物ブロック少量混入
  - 2 10YR 4 / 4 褐色土 焼土粒多量混入 炭化物粒微量混入
  - 3 10YR 4 / 4 褐色土 焼土ブロック少量混入
  - 4 5 YR 5 / 8 明赤褐色焼土 10YR 4 / 4 褐色土斑状に多量混入
  - 5 2.5YR 5 / 8 明赤褐色焼土 地山の熱変化したもの

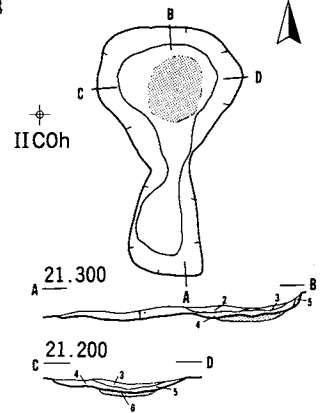
15SX16



IIC8g

- 15SX16
- 1 10YR 5 / 1 褐灰色土 炭化物粒、焼土粒多量混入
  - 2 10YR 4 / 1 褐灰色土 焼土ブロック非常に多量混入
  - 3 5 YR 5 / 8 明赤褐色焼土 10YR 4 / 4 褐色土斑状に多量混入
  - 4 2.5YR 5 / 8 明赤褐色焼土 地山の熱変化したもの

15SX18



- 15SX18
- 1 10YR 3 / 2 黒褐灰色土 炭化物粒、焼土粒少量混入
  - 2 10YR 3 / 2 黒褐灰色土 焼土ブロック多量混入
  - 3 5 YR 8 / 3 淡橙色焼土 非常に硬い
  - 4 5 YR 6 / 8 橙色焼土 黒褐色土斑状に少量混入
  - 5 10YR 3 / 2 黒褐色土 焼土粒少量混入
  - 6 5 YR 6 / 6 橙色焼土 地山の熱変化したもの

### 11 S X 1 (第 86 図)

〔位置〕 II E 9 g、9 h に位置する。〔重複〕 なし〔平面形、構造〕 浅い楕円形の掘込みを掘り、その上で火を焚いている。〔埋土〕 1 層の埋土と地面が熱変化したものである。〔出土遺物〕 埋土から手づくねかわらけ (3224) が出土している。〔遺構の性格〕 不明である。〔年代〕 不明である。

### 11 S X 2 (第 86 図、写真図版 60)

II E 9 g、9 h に位置する。遺構は 11 次調査区の西側で焼土の一部とまとまって出土した破損した柱状高台かわらけによって検出された。11 S K 5 と重複するが本遺構が古い。平面形は南北に長い楕円形の両側面がえぐれたような形で、全体的に浅くくぼんでいる。焼土は北半を中心に形成され、破損した柱状高台かわらけは焼土の上から出土している。焼土は硬く焼きしまった部分とその下のそうでない部分の 2 層に分けられるが南側半分では硬く焼きしまった部分が疎らで薄く、断面には表れていない。従って焼成はそれほど良好な訳でない。また焼土の一部は北西の方でくぼんだ部分をはみ出している。破損した柱状高台かわらけの間を埋める埋土は焼土粒を含む暗褐色土である。焼土の中央付近には径 18 cm ほどの杭跡と思われる不整形の攪乱が入っている。

くぼんでいる部分の南北の長さは 136 cm、幅 87 cm、深さ 12 cm である。焼土の厚さは上下 2 層あわせて最大で 4 cm である。

柱状高台かわらけは以上のような焼土遺構の焼土上を覆うような形でいずれも破片で出土し破片数は全部で 240 片になる。投げ入れる際に破損したのではなく、全て破損したあとで投げ入れられているとみられ、接合する破片は必ずしも隣接していない。(佐々木 務)

### 13 S X 1 (第 86 図)

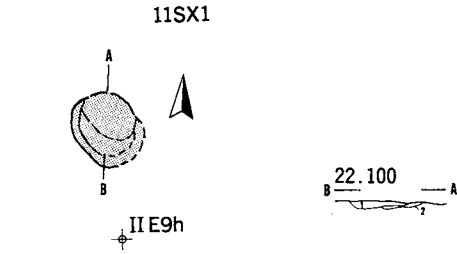
〔位置〕 II F 9 b に位置する。〔重複〕 なし〔平面形、構造〕 不整形の現地性焼土である。〔埋土〕 なし〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 具体的な用途は言及することができない。〔年代〕 遺物包含層より上面で検出されたことから、近世以降である可能性が高い。(13 S X 1～13 S X 40 まで笹平克子)

### 13 S X 2 (第 86 図、写真図版 61)

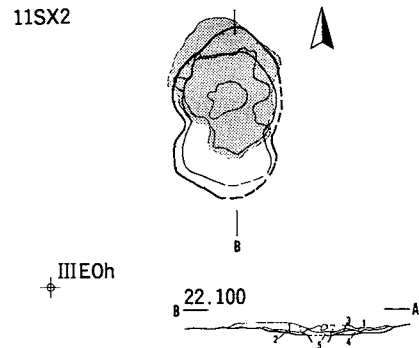
〔位置〕 II F 7 b に位置する。〔重複〕 なし〔平面形、構造〕 カマド遺構である。前庭部と 1 つの掛け口からなる。火床面は掛け口の中にある。煙出しは、掛け口の北側にあったと思われるがはっきりとしたプランは検出できなかった。〔埋土〕 粘土で作られた掛け口と、後に堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 カマド遺構である。〔年代〕 確証はないが近世に所属すると思われる。

### 13 S X 3 (第 86 図)

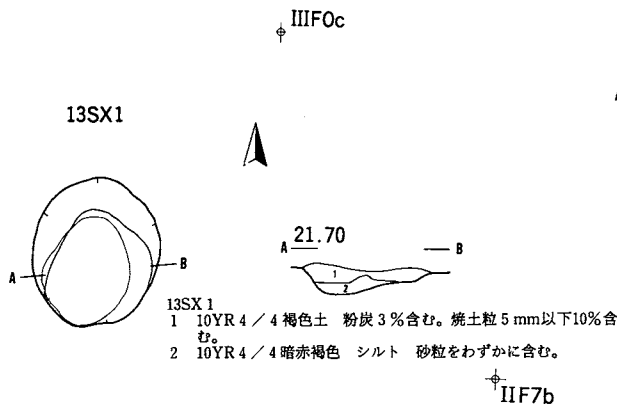
〔位置〕 II F 5 c に位置する。〔重複〕 13 S K 11、S K 14 と重複し、本遺構の方が先行する。〔平面形、構造〕 カマド遺構である。前庭部は破壊されていて、不明である。1 つの掛け口のみ見られる。火床面は、掛け口の中に見られ、焼けた石が数個が残っていた。焼土はあまり厚く残っていない。〔埋土〕 粘土で作られた掛け口と、後に堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 カマド遺構と思われる。具体的な用途は不明である。火床面の焼土が薄い。〔年代〕 確証はないが近世に所属すると思われる。



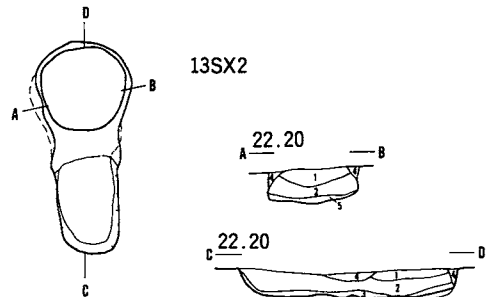
- 11SX1
- 10YR3 / 2 黒褐色土 シルト 粘性無 しまり有り 粘土粒 粘土塊、炭化物、かわらけ片含む
  - 2.5Y7 / 4 浅黄粘土 粘性あり しまりなし



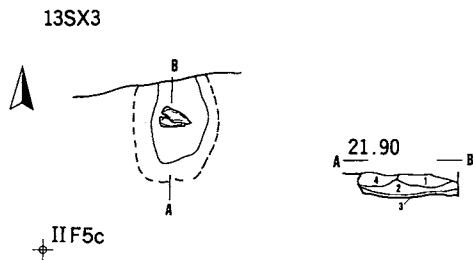
- 11SX2
- 10YR3 / 3 暗褐色土 しまりあり 粘土の上部に柱状高台の破片を多量に含む 炭・焼土粒含む
  - 10YR3 / 2 黒褐色土 粘性・しまりあり 焼土粒多い、炭含む
  - 5 YR5 / 6 明赤褐色焼土 硬く焼きしめる
  - 7.5YR3 / 2 黒褐色焼土 焼成は弱い
  - 10YR3 / 2 黒褐色土 粘性・しまりあり
- ※ 2、5層とその上部は撥乱



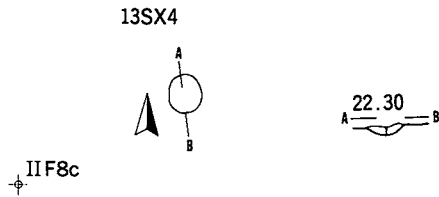
- 13SX1
- 10YR4 / 4 褐色土 粉炭3%含む。焼土粒5mm以下10%含む。
  - 10YR4 / 4 暗赤褐色 シルト 砂粒をわずかに含む。



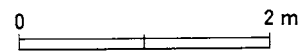
- 13SX2
- 10YR3 / 4 暗褐色 シルト 10YR7 / 4 におい黄橙を5mm以下3%含む。
  - 10YR3 / 4 暗褐色 粘土質シルト 10YR7 / 4 におい黄橙を10mm以下15%含む。炭化物を線状に含む。
  - 10YR3 / 2 黒褐色 粘土質シルト しまりやや有り。
  - 5 YR5 / 6 明赤褐色 シルト 10YR3 / 2 黒褐色を上面に含む。粉炭5mm以下15%含む。
  - 5 YR3 / 2 暗赤褐色 粘土質シルト しまりなし。炭化物を5mm以下20%含む。



- 13SX3
- 7.5YR4 / 4 褐色 シルト 粉炭3mm以下1%含む。焼土粒5mm以下3%含む。
  - 10YR3 / 4 暗褐色 シルト しまりなし。砂粒をわずかに含む。粉炭1mm以下1%含む。
  - 5 YR5 / 4 におい赤褐色 焼土 粘性しまりなし。



- 13SX4
- 5 YR5 / 4 におい赤褐 シルト 粘性しまりなし。



第86図 東側調査区の焼土、カマド状遺構(1)

### 13 S X 4 (第 86 図)

〔位置〕II F 8 c に位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と1つの掛け口からなる。火床面は掛け口の中にある。煙出しの有無は削平のため不明である。〔埋土〕掛け口の構築部分は削平のため失われている。埋土は後に堆積した土のみである。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。具体的な用途には言及することができない。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

### 13 S X 6 (第 87 図、写真図版 61)

〔位置〕II E 4 j に位置する。〔重複〕13 S K 28 より先行する。南側の掛け口が柱穴状ピットによって壊されている。〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と2つの掛け口からなる。火床面は掛け口の中にあり、硬くしまっていた。煙出しは西側に位置する。〔埋土〕粘土で作られた掛け口と、後に堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。火床面の焼土が硬くしまっていたことから、長期間使用された可能性が高い。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

### 13 S X 7 (第 87 図、写真図版 61)

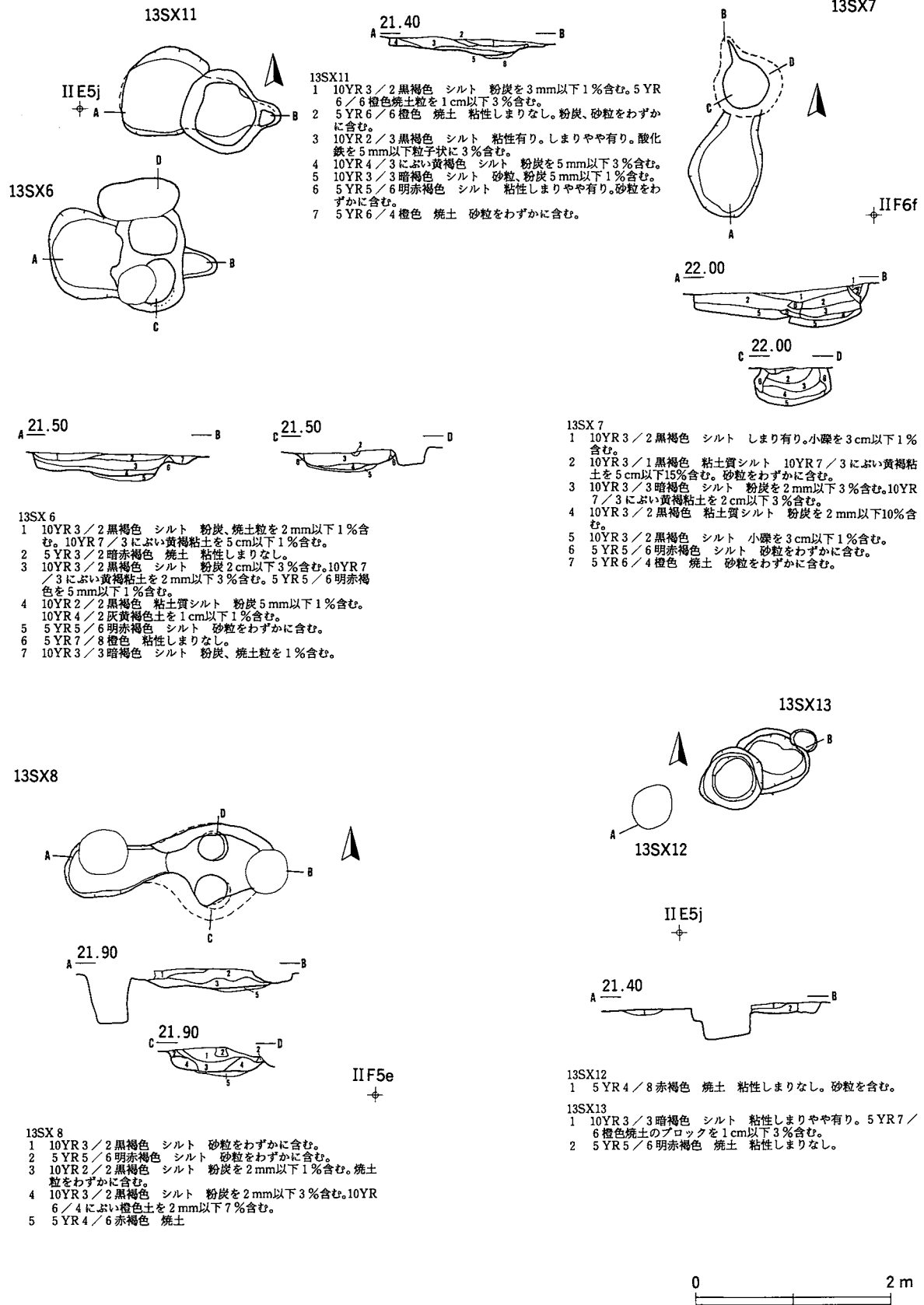
〔位置〕II F 6 e に位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と1つの掛け口からなる。火床面は掛け口の中にあつた。〔埋土〕粘土で作られた掛け口と掛け口から火床面まで炭がつまった状態がみられた。ただし、燃やされていたもののなかには、木の燃えかすなどは見られず、炭のみ見られた。前庭部には後に堆積した土が見られた。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。掛け口と火床面の間に炭がつまっていたことから、消火直後に廃棄された可能性も考えられる。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

### 13 S X 8 (第 87 図、写真図版 61)

〔位置〕II F 5 d に位置する。〔重複〕P 268, 260 に切られる。〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と2つの掛け口からなる。掛け口の構築部分が削平のため一部しか残っていなかった。火床面は硬くしまっており、長期間使用されたものと思われる。〔埋土〕粘土で作られた掛け口の一部と掛け口付近から火床面までわずかに炭が残っていた。また、後に堆積した土も見られた。火床面の下に埋土があり、その下からもう一面の火床面が検出された。下の火床面の焼土が厚く上面の火床面は薄かった。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構跡である。具体的な用途は不明である。一度の作り替えがみられ、同じ場所で2回使われていたと思われる。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

### 13 S X 10 (第 88 図)

〔位置〕II E 5 j に位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕カマド遺構と思われるが火床面と思われる部分のみ残存し、掛け口は削平のため不明である。〔埋土〕火床面と思われる焼土と前庭部に堆積した土も見られた。火床面の下に埋土があり、その下からもう一面の火床面が検出された。下の火床面の焼土が厚く上面の火床面は薄かった。〔出土遺物〕埋土中から渥美産甕片(1437)、軒平瓦片(4007)が出土した。〔遺構の性格〕カマド遺構である。具体的な用途は不明である。一度の作り替えがみられ、同じ場所で2回使われていたと思われる。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。



第87図 東側調査区の焼土、カマド状遺構(2)

### 13 S X 11 (第 87 図)

〔位置〕 II E 5 j に位置する。〔重複〕 なし〔平面形、構造〕 カマド遺構である。前庭部と 1 つの掛け口と煙出しからなる。火床面は掛け口の中にあり、硬く締まっていた。〔埋土〕 掛け口の構築部分は削平のため失われている。埋土は後に堆積した土の下に炭がわずかに残っていた。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 カマド遺構である。具体的な用途には言及することができない。〔年代〕 確証はないが近世に所属すると思われる。

### 13 S X 12 (第 87 図)

〔位置〕 II E 5 i に位置する。〔重複〕 なし〔平面形、構造〕 円形を呈する。地面が火により熱変化したものである。表面は硬く熱変化も見られた。〔埋土〕 廃棄後堆積した土のみ見られた。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 火を焚いた跡であるが熱変化の度合いからかなり長期間火を焚いたことはわかる。具体的な用途は不明である。上部が削平されていることから、カマド遺構の火床面である可能性も考えられる。〔年代〕 確証はないが近世に所属すると思われる。

### 13 S X 13 (第 87 図、写真図版 61)

〔位置〕 II E 5 j に位置する。〔重複〕 P 143 に切られる。〔平面形、構造〕 カマド遺構である。煙出しと思われる凹みと一つの掛け口が検出された。前庭部は P 143 に切られて不明である。〔埋土〕 廃棄後堆積した土のみ見られた。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 カマド遺構である。上部が削平されているため火床面のみが残っていたとおもわれる。火床面の焼土は薄いことから、あまり使われていないものと思われる。用途は不明である。〔年代〕 近世に属する可能性が高い。

### 13 S X 14 (第 88 図、写真図版 61)

〔位置〕 II E 5 j に位置する。〔重複〕 13 S X 15 より古い。〔平面形、構造〕 カマド遺構である。前庭部と 2 つの掛け口からなる。火床面や前庭部の底面部分は確認できたが、上部は削平を受けたために残っていない。火床面はかなり硬く熱変化もかなり下まで及んでいる。煙出しと思われる部分は南側に尖っており、火床面と続いている。〔埋土〕 廃棄後堆積した土のみ見られた。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 カマド遺構である。火床面の熱変化の度合いからかなり長期間火を焚いたことがわかる。用途は不明である。〔年代〕 近世に属する可能性が高い。

### 13 S X 15 (第 88 図、写真図版 61)

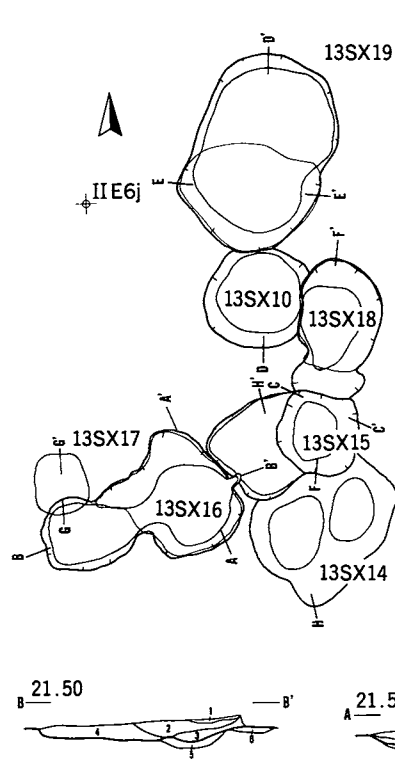
〔位置〕 II E 5 j に位置する。〔重複〕 13 S X 14 より新しく、13 S X 18 より古い。〔平面形、構造〕 カマド遺構である。前庭部と 1 つの掛け口からなる。煙出しの位置は南側と思われる。火はかなり硬く熱変化を受けている。掛け口は削平されており、上部は残っていない。前庭部も半分切りあっているため不明である。

〔埋土〕 廃棄後堆積した土のみ見られた。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 カマド遺構である。火床面は硬く熱変化していることから、長期間使われたものと思われる。〔年代〕 不明である。

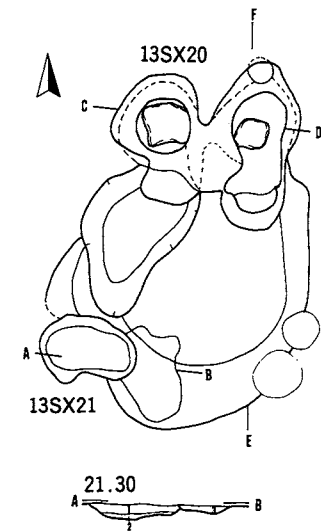
### 13 S X 16 (第 88 図)

〔位置〕 II E 4 j、5 j に位置する。〔重複〕 13 S X 14 より古く、13 S X 17 より新しい。〔平面形、構造〕 カマド遺構である。前庭部と 1 つの掛け口からなる。掛け口は削平されており、上部は残っていない。火床

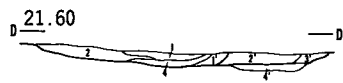




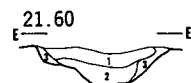
- 13SX16
- 10YR 3 / 3 暗褐色 シルト 5 YR 6 / 6 橙色焼土を含む。
  - 10YR 4 / 3 におい黄褐色土 シルト 粉炭を1cm以下3%含む。
  - 10YR 3 / 2 黒褐色 7.5YR 6 / 6 橙色焼土粒10%含む。
  - 5 YR 5 / 8 明赤褐色 焼土 粘性しまりなし。
  - 7.5YR 6 / 6 橙色 焼土 粘性しまりなし。



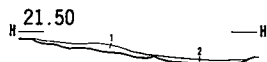
- 13SX21
- 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 5 YR 6 / 6 橙色焼土粒を1cm以下3%含む。10YR 7 / 3 におい黄褐色粘土を7%含む。
  - 10YR 4 / 4 褐色 粘土質シルト 焼土粒、粉炭を1%含む。
  - 5 YR 4 / 4 におい赤褐色 焼土 粘性しまりなし。



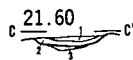
- 13SX10
- 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 砂粒、粉炭5mm以下1%含む。
  - 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 5 YR 6 / 8 橙色焼土粒を5mm以下1%含む。粉炭1cm以下7%含む。
  - 10YR 4 / 3 におい黄褐色土 シルト 粉炭5mm以下1%含む。
  - 5 YR 6 / 6 橙色 焼土 粘性しまりなし。



- 13SX19
- 10YR 3 / 3 暗褐色 シルト 粉炭を1cm以下3%含む。
  - 10YR 2 / 3 黒褐色 粘土質シルト 粉炭2mm以下1%含む。
  - 5 YR 6 / 8 橙色 焼土 粉炭を5mm以下總状に10%含む。
  - 5 YR 6 / 6 橙色 焼土 粉炭を1mm以下3%含む。



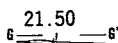
- 13SX14
- 5 YR 5 / 6 明赤褐色 焼土 粘性しまりなし。
  - 10YR 3 / 4 暗褐色 シルト 粘性しまりや有り。7.5YR 7 / 6 明赤褐色焼土粒を1cm以下10%含む。



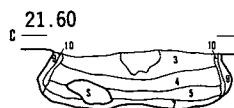
- 13SX15
- 10YR 3 / 3 暗褐色 シルト 粘性しまりやや有り。粉炭を2mm以下3%含む。5 YR 5 / 8 明赤褐色焼土を40%含む。
  - 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 7.5YR 5 / 8 明褐色焼土粒を1mm以下10%含む。粉炭を5mm以下7%含む。
  - 5 YR 3 / 4 暗赤褐色 シルト 粉炭を2mm以下3%含む。



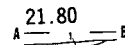
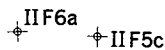
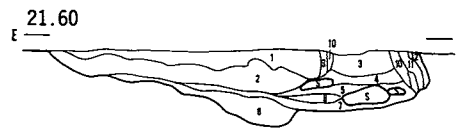
- 13SX18
- 7.5Y 7 / 1 灰白色 シルト 粘性なし。焼成をうけた粘土。
  - 5 YR 6 / 6 暗赤褐色 シルト 粘性しまりなし。
  - 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 5 YR 6 / 6 暗赤褐色焼土を2cm以下10%含む。粉炭を1cm以下7%含む。



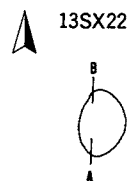
- 13SX17
- 5 YR 5 / 6 明赤褐色 焼土。



- 13SX20
- 10YR 3 / 3 暗褐色 シルト 粉炭を1cm以下1%含む。
  - 10YR 3 / 3 暗褐色 シルト 明黄褐色粘土を7%含む。
  - 10YR 4 / 3 におい黄褐色 シルト 黄褐色粘土を20%含む。
  - 5 Y 8 / 2 灰白色 粘土 粘性有り。粉炭を2mm以下3%含む。
  - 10YR 3 / 2 黒褐色 粘土質シルト 粉炭を2mm以下10%含む。
  - 5 YR 4 / 6 赤褐色 焼土 粉炭をわずかに含む。
  - 10YR 2 / 3 黒褐色 粘土質シルト 粉炭を總状に含む。
  - 10YR 4 / 3 におい黄褐色 におい黄褐色粘土を總状に含む。
  - 5 YR 5 / 6 明赤褐色 焼土
  - 5 YR 3 / 2 明赤褐色 焼土
  - 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 粉炭を3%含む。
  - 2.5Y 6 / 2 灰赤色 粘土 粉炭をわずかに含む。



- 13SX22
- 2.5YR 5 / 8 明褐色 焼土 粘性しまりなし。砂粒を含む。



第88図 東側調査区の焼土、カマド状遺構(3)

面は硬く、熱変化を受けている。煙出しは火床面から北西側にのびている。〔埋土〕廃棄後堆積した土のみ見られた。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。長期間使用されたと思われる。具体的な用途には言及することができない。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

### 13 S X 17 (第 88 図)

〔位置〕II E 4 j に位置する。〔重複〕13 S X 16 と重複するが本遺構が古い。〔平面形、構造〕楕円形のプランと思われる。南側は重複により不明である。焼土は硬く熱変化を受けている。上面は削平されたと思われ、掛け口などの施設はない。〔埋土〕廃棄後堆積した土のみである。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕具体的な用途は不明である。カマド遺構の密集する地区にあることやカマド遺構と直接切りあうことから、カマド遺構である可能性が高い。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

### 13 S X 18 (第 88 図)

〔位置〕II E 5 j に位置する。〔重複〕13 S X 15 より新しい。13 S X 19 と接するが前後関係は不明である。〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と一つの掛け口からなる。粘土で作られた掛け口部分は削平されて残っていない。火床面は掛け口の中にあつたと思われ、硬く熱変化を受けている。また煙出しの有無は不明である。〔埋土〕廃棄後堆積した土のみ見られた。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。具体的な用途は不明である。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

### 13 S X 19 (第 88 図)

〔位置〕II E 5 j、6 j に位置する。〔重複〕13 S X 18 と接するが新旧関係は不明である。〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と1つの掛け口からなる。上面は削平を受けているため火床面しかのこっていない。形態から火床面は掛け口の中にあると推察される。また、火床面の延長が南側に見られることから、煙出しは南側にあつたと思われる。〔埋土〕廃棄後堆積した土のみ見られた。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。具体的な用途は不明である。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

### 13 S X 20 (第 88 図)

〔位置〕II E 6 j に位置する。〔重複〕13 S X 21 と重複するが13 S X 21 より新しい。〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と2つの掛け口からなる。前庭部は攪乱を受けているため、規模は不明であるが、II E 6 j 区で密集して検出されたものと比べ規模が大きく構造的に違いがみられる。煙出しは、明確なものではないが、西側の掛け口の北側に出っ張りがあることから、この部分であると予想される。〔埋土〕廃棄の際埋めた土と燃えかすの炭を多く含む層、崩落した掛け口、火床部の焼土、前庭部の埋土など残りがよかつた。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕火を焚いた跡であるが具体的な用途は不明である。掛け口の内側には多量の炭化物と掛け口の底部を覆うように石が置いてあつた。さらに、1度の掛け口内部の作り替えがみられた。1度使用した掛け口の内側に3 cm 程度の厚さの粘土を補強していた。掛け口内部の粘土は幅13 cm 程度の縦長の板で円になるように内側から押さえられた痕跡が認められた。底部に置かれた石の上面に火を受けた痕跡があることから、このカマド遺構内部の施設として利用されたものとも考えられるし、廃棄の際に利用したもの（消火する際）に使用されたものとも考えられる。

### 13 S X 21 (第 88 図)

〔位置〕 II F 6 j に位置する。〔重複〕 13 S X 20 と重複するが本遺構が古い。〔平面形、構造〕一つの掛け口と前庭部の上部を削平されたカマド状遺構と考えられ、火床面と前庭部の底面のみ残っていた。〔埋土〕くぼみの埋土と、地面が熱変化した部分からなる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。〔年代〕近世以降と思われる。

### 13 S X 22 (第 88 図)

〔位置〕 II F 4 c に位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕楕円形の現地性焼土である。〔埋土〕地面が熱変化した部分のみ検出された。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

### 13 S X 23 (第 89 図)

〔位置〕 II E 3 a、4 a に位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕一つの掛け口と前庭部の上部を削平されたカマド遺構と考えられる。〔埋土〕廃棄後堆積した埋土が見られた。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。〔年代〕近世以降と考えられる。

### 13 S X 24 (第 89 図)

〔位置〕 II E 3 b、4 b に位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕一つの掛け口と前庭部の上部を削平されたカマド遺構と考えられる。〔埋土〕くぼみの埋土と、地面が熱変化した部分からなる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構であるが具体的な用途は不明である。〔年代〕近世以降と考えられる。

### 13 S X 26 (第 89 図、写真図版 61)

〔位置〕 II D 4 j に位置する。〔重複〕攪乱を受けている。〔平面形、構造〕掛け口の部分と思われ、前庭部は攪乱のため不明である。〔埋土〕くぼみの埋土と、地面が熱変化した部分からなる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構であるが具体的な用途は不明である。〔年代〕近世以降と考えられる。

### 13 S X 31 (第 89 図)

〔位置〕 II F 8 d に位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕不整形の現地性焼土である。〔埋土〕地面が熱変化した部分のみであった。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕火を焚いた跡であるが具体的な用途は不明である。〔年代〕検出面から近世以降と考えられる。

### 13 S X 32 (第 89、90 図)

〔位置〕 II F 4 c に位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕楕円形の現地性焼土である。〔埋土〕地面が熱変化した部分からなる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕火を焚いた跡であるが具体的な用途は不明である。〔年代〕検出面から近世以降と考えられる。

### 13 S X 33 (第 89、90 図)

〔位置〕 II E 4 c に位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と1つの掛け口からなる。火床面は掛け口の中にある。煙出しは掛け口の西側にあり、煙出しの底面にも火を受けた後が見られ

た。〔埋土〕粘土で作られた掛け口と、後に堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

#### 13 S X 34 (第 89、90 図)

〔位置〕II f 4 c、4 d に位置する。〔重複〕13 S X 35、13 S X 37、13 S X 40 と重複するがいずれも本遺構が新しい。〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と 1 つの掛け口からなる。火床面は掛け口の中にある。煙出しは、掛け口の北側にある。〔埋土〕粘土で作られた掛け口と、後に堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

#### 13 S X 35 (第 89、90 図)

〔位置〕II E 5 b に位置する。〔重複〕13 S X 34 と重複するが本遺構が古い。〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と 2 つの掛け口からなる。火床面は掛け口の中にある。煙出しは、掛け口の東側にある。〔埋土〕粘土で作られた掛け口と、後に堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

#### 13 S X 36 (第 89、90 図)

〔位置〕II E 4 c、5 c に位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と 1 つの掛け口からなる。火床面は掛け口の中にある。煙出しは、掛け口の東側にある。〔埋土〕粘土で作られた掛け口と、後に堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

#### 13 S X 37 (第 89、90 図)

〔位置〕II E 5 b、3 h に位置する。〔重複〕13 S X 34 と重複するが本遺構が古い。〔平面形、構造〕カマド遺構と思われる。切り合いのため前庭部は不明である。1 つの掛け口のみ検出された。火床面は掛け口の中にある。煙出しは、掛け口の北側にあった。〔埋土〕粘土で作られた掛け口と、後に堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

#### 13 S X 38 (第 89、90 図)

〔位置〕II F 5 c に位置する。〔重複〕13 S X 39 と重複するが本遺構が新しい。〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と 2 つの掛け口からなる。火床面は掛け口の中にある。煙出しは、掛け口の北側にある。〔埋土〕粘土で作られた掛け口と、後に堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

#### 13 S X 39 (第 89、90 図)

〔位置〕II E 5 a、5 b に位置する。〔重複〕13 S X 38 と重複するが本遺構が古い。〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と 1 つの掛け口からなる。上部が削平されており、残りが悪い。火床面は掛け口の中にある。煙出しは、掛け口の南側にあると思われるがプランをつかむことができなかった。〔埋土〕粘土で作られた掛け口と、後に堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。〔年代〕

13SX23

II E4a



21.90

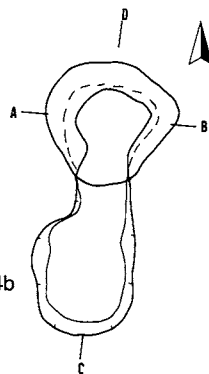


13SX23

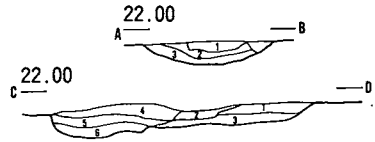
- 1 10YR 3 / 2 黒褐色 焼土ブロックをわずかに含む。
- 2 10YR 2 / 3 黒褐色 粉炭、焼土粒を10%含む。
- 3 10YR 3 / 1 黒褐色 炭化物をブロック状に40%含む。
- 4 5 YR 5 / 6 明黄褐色 焼土

13SX24

II F4b



22.00

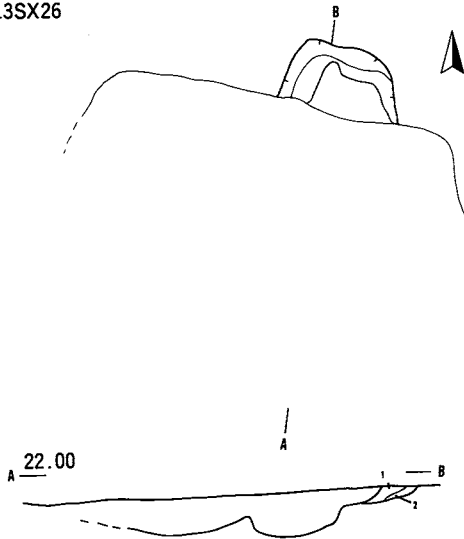


13SX24

- 1 5 YR 6 / 8 橙色 焼土、硬くしまっている。
- 2 10YR 4 / 3 におい黄褐色 シルト 粉炭を塊状に含む。
- 3 10YR 5 / 3 におい黄褐色 シルト 焼土塊、焼土粒を含む。
- 4 2.5Y 4 / 2 暗灰黄色 粘土 におい黄褐色粘土、灰白色粘土をブロック状に含む。焼土をブロック状に含む。
- 5 2.5Y 3 / 2 黒褐色 粘土 におい黄褐色粘土を塊状に含む。
- 6 10YR 3 / 2 黒褐色 シルト 灰白色粘土を塊状に含む。

13SX26

II E4a



22.00

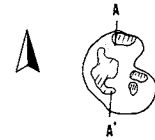


13SX26

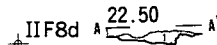
- 1 10YR 4 / 4 褐色 焼土ブロックを多く含む。
- 2 5 YR 4 / 1 褐灰色 焼土

13SX31

II F8d

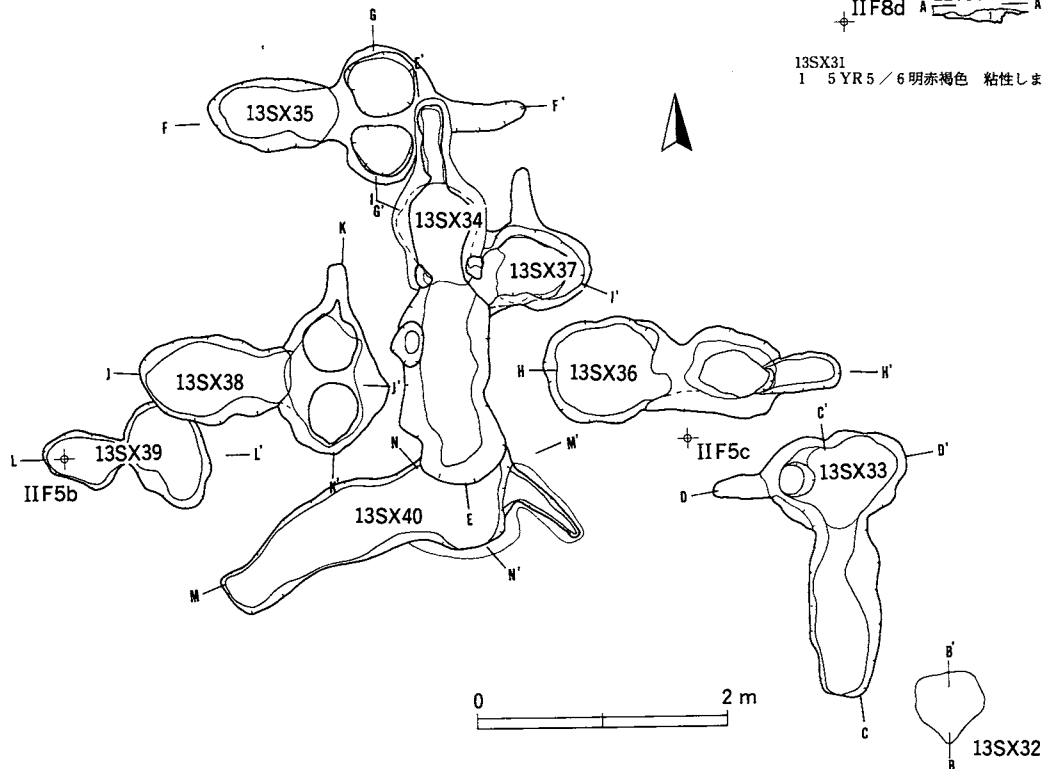


22.50



13SX31

- 1 5 YR 5 / 6 明赤褐色 粘性しまりなし。

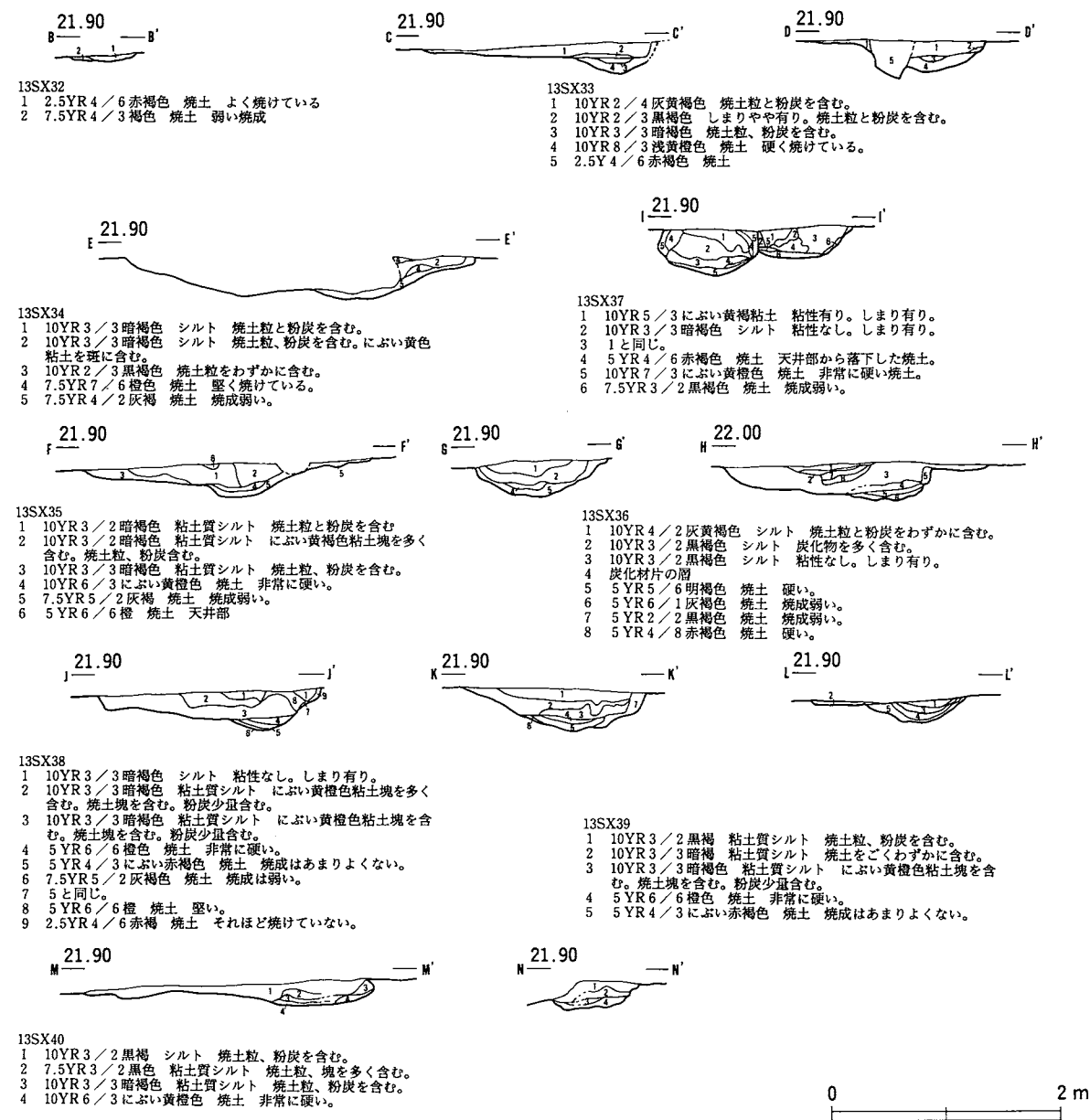


第89図 東側調査区の焼土、カマド状遺構(4)

確証はないが近世に所属すると思われる。

### 13 S X 40 (第 89、90 図)

〔位置〕 II E 4 b, 5 b に位置する。〔重複〕 15 S X 34 と重複するが本遺構が古い。〔平面形、構造〕 カマド遺構である。前庭部と二つの掛け口からなる。上部が削平を受けており、前庭部の残りが悪い。火床面は掛け口の内側にある。煙出しは掛け口の東側にある。〔埋土〕 粘土で作られた掛け口と、後に堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 カマド遺構である。〔年代〕 確証はないが近世に所属すると思われる。  
(13 S X 1 ~ 13 S X 40 まで笹平克子)



第90図 東側調査区の焼土、カマド状遺構(5)

#### 15 S X 1 (第91図、写真図版62)

〔位置〕II E 6 eに位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕浅い楕円形の掘込みを埋め、その上で火を焚いている。〔埋土〕埋土が火により熱変化したものである。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕不明である。〔年代〕不明である。

#### 15 S X 2 (第91図、写真図版62)

〔位置〕II E 5 gに位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕円形を呈する。地面が火により熱変化したものである。表面はかなり硬く熱変化もかなり下まで及んでいる。〔埋土〕なし〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕火を焚いた跡であるが熱変化の度合いからかなり長期間火を焚いたことはわかる。具体的な用途は不明である。類似した15 S X 3～6が近接しており同じ用途と考えられる〔年代〕検出面から12世紀の所属と考えられる。

#### 15 S X 3 (第91図、写真図版62)

〔位置〕II E 5 gに位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕円形を呈する。地面が火により熱変化したものである。表面はかなり硬く熱変化もかなり下まで及んでいる。〔埋土〕なし〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕火を焚いた跡であるが熱変化の度合いからかなり長期間火を焚いたことはわかる。具体的な用途は不明である。類似した15 S X 2、4～6が近接しており同じ用途と考えられる〔年代〕検出面から12世紀の所属と考えられる。

#### 15 S X 4 (第91図、写真図版62)

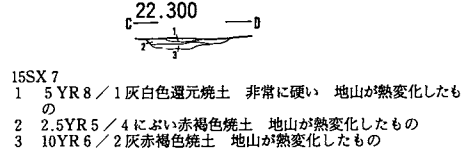
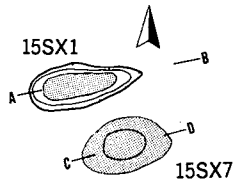
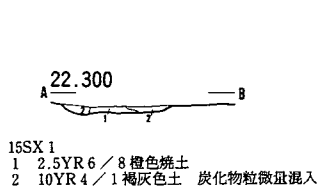
〔位置〕II E 5 gに位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕円形を呈する。地面が火により熱変化したものである。表面はかなり硬く熱変化もかなり下まで及んでいる。〔埋土〕なし〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕火を焚いた跡であるが熱変化の度合いからかなり長期間火を焚いたことはわかる。具体的な用途は不明である。類似した15 S X 2、3、5、6が近接しており同じ用途と考えられる〔年代〕検出面から12世紀の所属と考えられる。

#### 15 S X 5 (第91図、写真図版62)

〔位置〕II E 5 gに位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕円形を呈する。地面が火により熱変化したものである。表面はかなり硬く熱変化もかなり下まで及んでいる。〔埋土〕なし〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕火を焚いた跡であるが熱変化の度合いからかなり長期間火を焚いたことはわかる。具体的な用途は不明である。類似した15 S X 2～4、6が近接しており同じ用途と考えられる。〔年代〕検出面から12世紀の所属と考えられる。

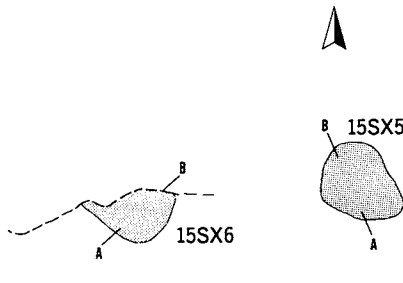
#### 15 S X 6 (第91図、写真図版62)

〔位置〕II E 5 gに位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕円形を呈すると思われるが、水穴(伏流水の流れ跡)によりプランの半分ほどが壊されている。地面が火により熱変化したものである。表面はかなり硬く熱変化もかなり下まで及んでいる。〔埋土〕なし〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕火を焚いた跡であるが熱変化の度合いからかなり長期間火を焚いたことはわかる。具体的な用途は不明である。類似した15 S X 2～5が

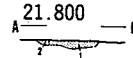
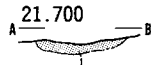
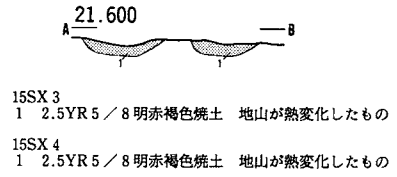
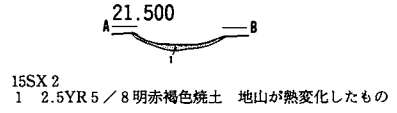


⊕ II E6e

⊕ II E6g

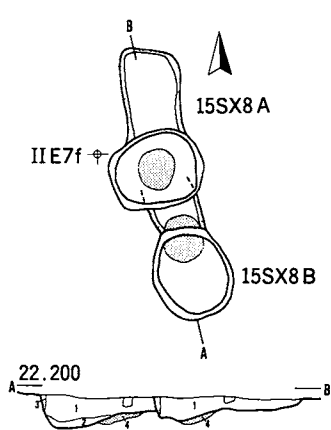


⊕ II E6h

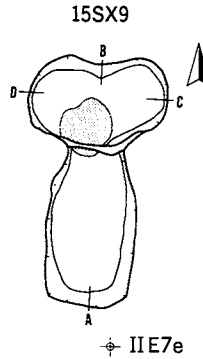


15SX5  
1 2.5YR 5 / 8 明赤褐色焼土 地山が熱変化したもの

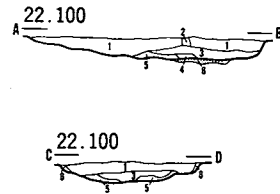
15SX6  
1 2.5YR 6 / 6 橙色焼土 地山が熱変化したもの  
2 10YR 4 / 3 におい黄褐色焼土 地山が熱変化したもの



15SX8  
1 10YR 3 / 2 黒褐色土  
2 7.5YR 5 / 8 明褐色土  
3 2.5YR 2 / 4 極暗赤褐色焼土  
4 2.5YR 6 / 8 橙色焼土 地山が熱変化したもの



15SX9  
1 10YR 3 / 1 黒褐色土 10YR 6 / 3 におい黄褐色土ブロック少量混入  
2 5YR 6 / 6 橙色焼土の塊  
3 10YR1.7 / 1 黒色炭化物層  
4 10YR 3 / 4 明褐色土 焼土粒多量混入  
5 10YR 3 / 1 黒褐色土 炭化物粒微量混入  
6 2.5YR 5 / 8 明赤褐色焼土 地山の熱変化したもの



第91図 東側調査区の焼土、カマド状遺構(6)



近接しており同じ用途と考えられる。〔年代〕検出面から12世紀の所属と考えられる。

#### 15 S X 7 (第91図、写真図版62)

〔位置〕II E 6 eに位置する。〔重複〕なし〔平面形、構造〕楕円形のプランで地面が火により熱変化したものである。プランの中央部分は還元色を呈している。〔埋土〕なし〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕還元色を呈している部分があることから、かなり高温の火を焚いたことがわかる。可能性としては鍛冶がおこなわれた痕跡が考えられる。〔年代〕不明である。

#### 15 S X 8 A (第91図、写真図版62)

〔位置〕II E 6 f、7 fに位置する。〔重複〕15 S X 8 Bと重複するが本遺構が新しい〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と1つの掛け口からなる。火床面は掛け口の中にある。煙出しの有無は削平のため不明である。〔埋土〕掛け口を構築した粘土と後に埋まった土からなる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。具体的な用途には言及することができない。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

#### 15 S X 8 B (第91図、写真図版62)

〔位置〕II E 6 f、7 fに位置する。〔重複〕15 S X 8 Aと重複するが本遺構が古い。〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と1つの掛け口からなる。火床面は掛け口と前庭部の境目にある。煙出しの有無は削平のため不明である。〔埋土〕掛け口を構築した粘土と後から埋まった土からなる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。具体的な用途には言及することができない。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

#### 15 S X 9 (第91図、写真図版63)

〔位置〕II E 7 d、7 eに位置する。〔重複〕15 S B 2のプラン内に位置するが、この建物の中軸線上に本遺構が位置し、同時存在の可能性が考えられる。即ち15 S B 2は本遺構の上屋と解釈できる。〔平面形、構造〕カマド遺構である。前庭部と掛け口からなる。火床面は前庭部と掛け口の境目にある。掛け口は削平のため1つになっているが本来は2つであったと推定される。また煙出しの有無は不明である。〔埋土〕粘土で作られた掛け口と、後から堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。上屋がある点と掛け口が2つある点から恒常的に使用されたと推定される。〔年代〕確証はないが近世に所属すると思われる。

#### 15 S X 19 (第92図、写真図版63)

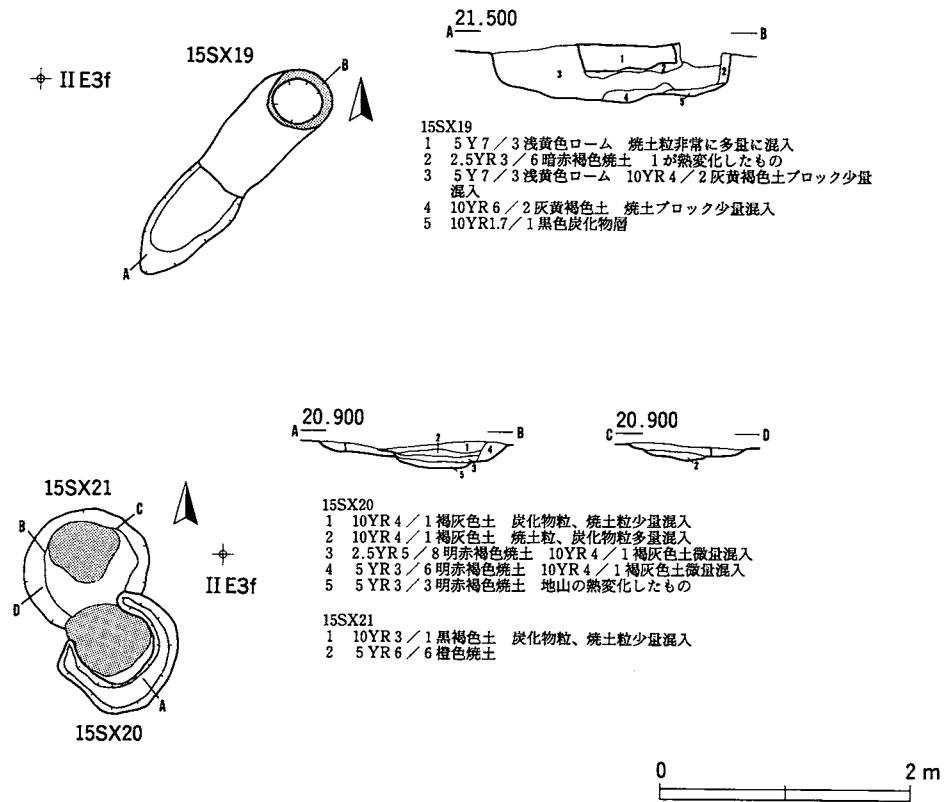
〔位置〕II E 2 f、3 fに位置する。〔重複〕15 S K 52と重複するが本遺構が新しい。〔平面形、構造〕カマド遺構である。全体形は細長い楕円形を呈する。前庭部と1つの掛け口からなる。火床面範囲はとらえることができなかった。〔埋土〕粘土で作られた掛け口と、後に堆積した土に分けられる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕カマド遺構である。他のカマド遺構とプランや構造が異なっている。具体的な用途は不明である。〔年代〕不明である。

15 S X 20 (第92図、写真図版63)

〔位置〕 IIE 2 h に位置する。〔重複〕 15 S X 21 と重複するが本遺構が新しい。〔平面形、構造〕 火床面とそれをコの字に囲む土手からなる。〔埋土〕 なし〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 火を焚いた跡であるが具体的な用途は不明である。〔年代〕 検出面から 12 世紀の所属と考えられる。

15 S X 21 (第92図、写真図版63)

〔位置〕 IIE 2 h、3 h に位置する。〔重複〕 15 S X 20 と重複するが本遺構が古い。〔平面形、構造〕 浅い皿状のくぼみを造り、その中で火を焚いている。〔埋土〕 くぼみの埋土と、地面が熱変化した部分からなる。〔出土遺物〕 なし〔遺構の性格〕 火を焚いた跡であるが具体的な用途は不明である。〔年代〕 検出面から 12 世紀の所属と考えられる。



第92図 東側調査区の焼土、カマド状遺構(7)

## 6 縄文時代の遺構

### 13 陥し穴 1 (第 93 図、写真図版 64)

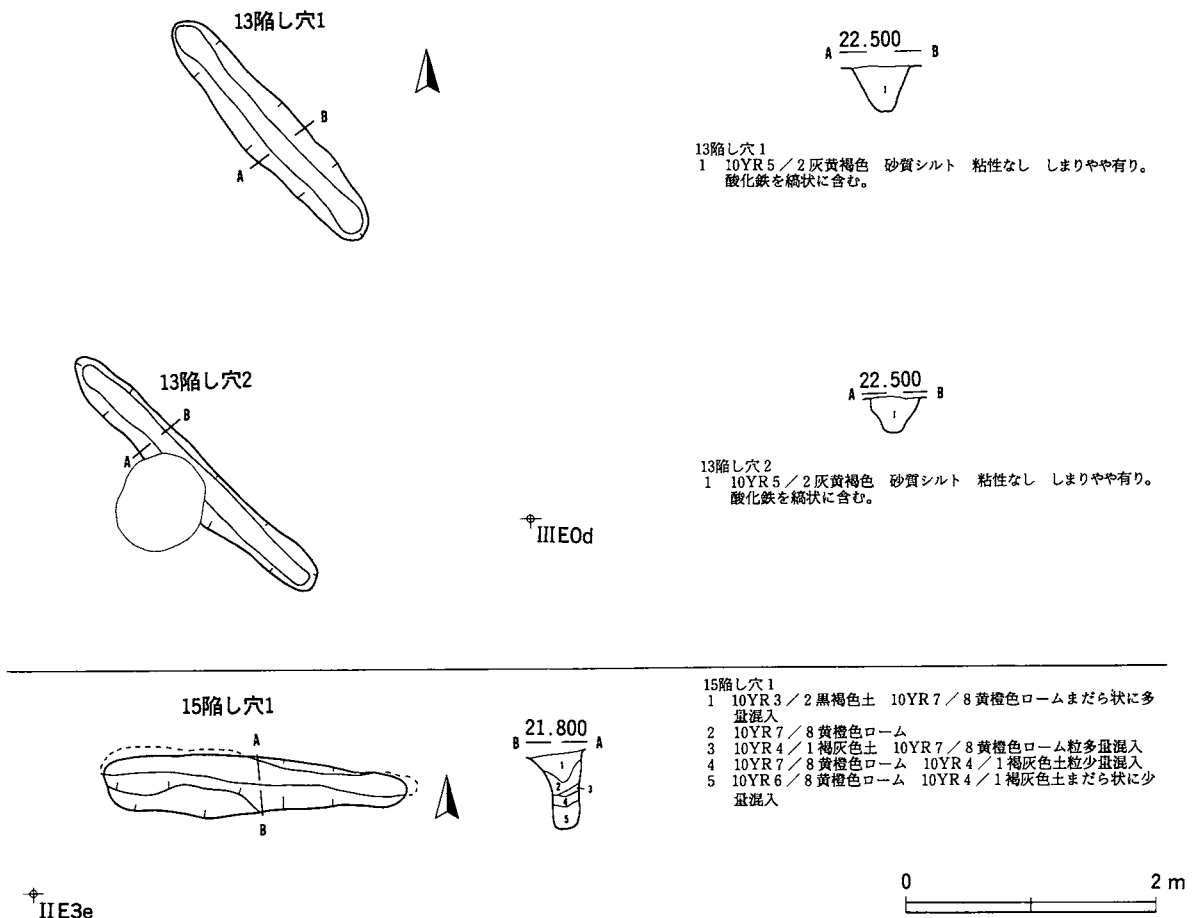
〔位置〕 III E 0 c に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕1 層に分けられる。自然堆積と思われる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕陥し穴と考えられる。〔年代〕縄文時代と考えられるが、詳細な時期は不明である。

### 13 陥し穴 2 (第 93 図、写真図版 64)

〔位置〕 II E 9 c、III E 0 c に位置する。〔重複〕13 S B 28 の柱穴と重複するが、本遺構が古い。〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。〔埋土〕1 層に分けられる。自然堆積であろう。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕陥し穴と考えられる。〔年代〕縄文時代と考えられるが、詳細な時期は不明である。

### 15 陥し穴 1 (第 93 図、写真図版 64)

〔位置〕 II E 3 e に位置する。〔重複〕なし〔底面、壁〕底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がり開口部近くでやや開く。〔埋土〕埋土は 5 層に分けられる。自然堆積と思われる。〔出土遺物〕なし〔遺構の性格〕陥し穴と考えられる。〔年代〕縄文時代と考えられるが、詳細な時期は不明である。



第93図 縄文時代の遺構

## V 出土遺物

### 1 縄文・弥生時代の遺物

西側調査区と東側調査区のいずれからも少量ではあるが、縄文時代・弥生時代の遺物が出土している。調査区内ではこれらの時期に所属する住居跡などの検出はなかった。近接する地域に集落が存在するのであろうか。

#### (1) 土器 (第 94 図 写真図版 65)

1、2 は東側調査区出土の縄文時代後期と思われる土器である。東側調査区の東北本線を挟んださらに東の地区には縄文時代後期～晩期の土器が割合多く散布しており、これらが流れこんで来たのであろう。

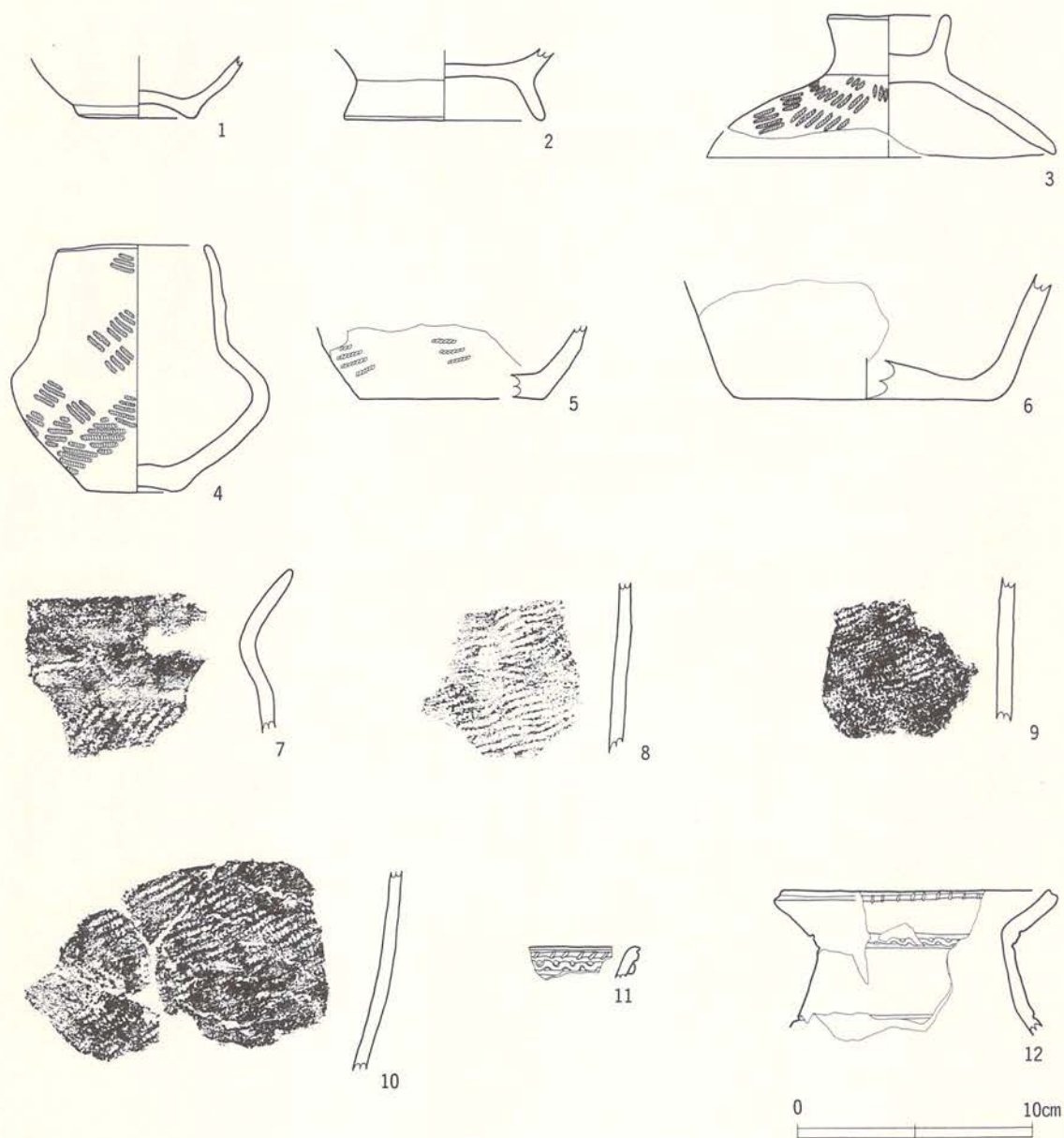
3～10 は西側調査区出土の弥生時代前半の所属の土器である。7 は口縁部には縄文が施されていない。

11、12 は交互刺突文が施される弥生時代後半の土器である。

#### (2) 石器 (第 95～98 図 写真図版 65～67)

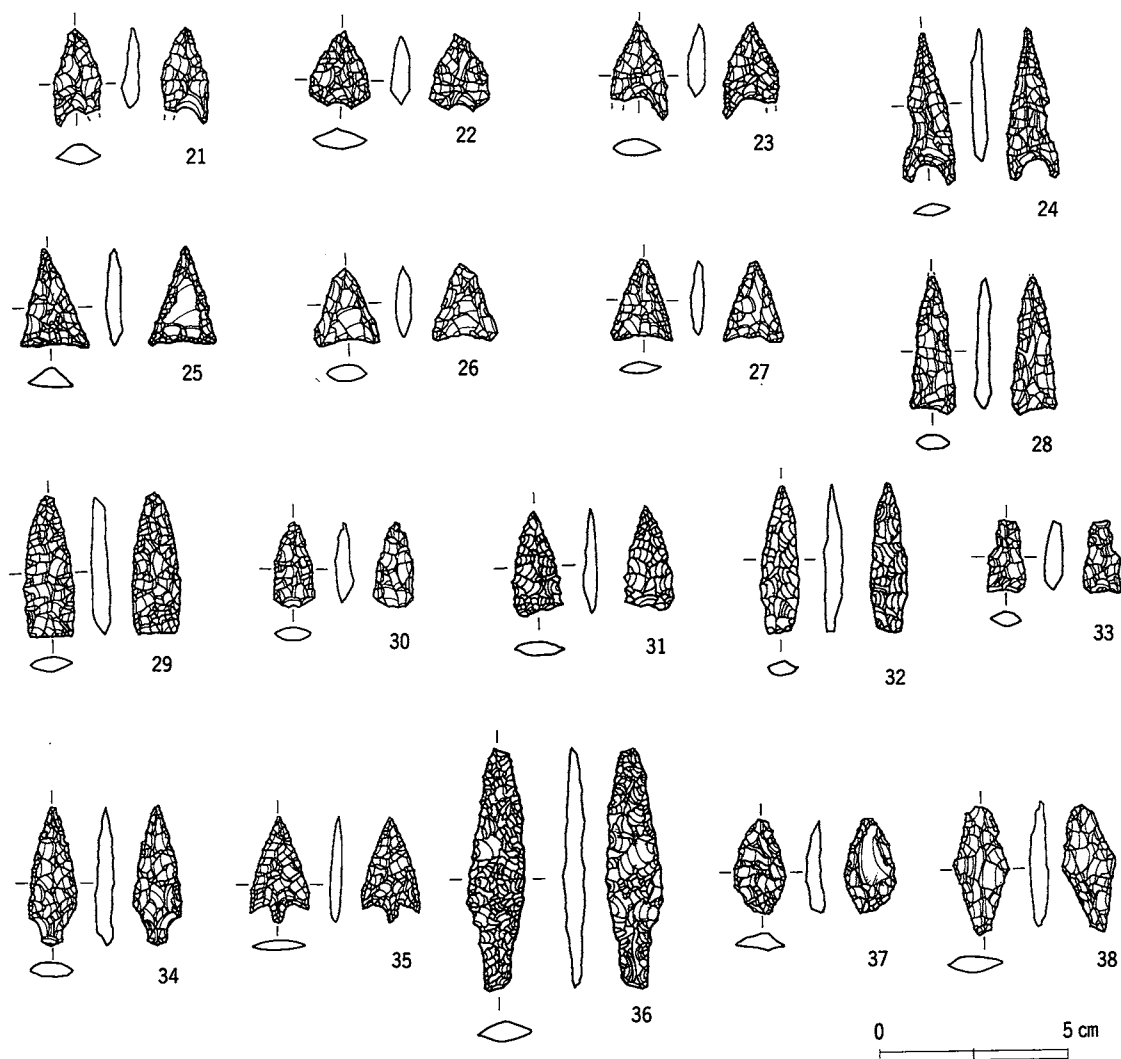
21～40 は石鏃である。21～33 は無茎鏃、34～38 は有茎鏃である。39、40 は所謂アメリカ式石鏃である。

41 は尖頭器の可能性がある。42 は石錐、43～46 は石匙、47～50 は石篋、51 は柄付石斧、52～57 はスクレイパーである。いずれの石器も遺構に伴うものは無く、詳細な時期は判断することができない。



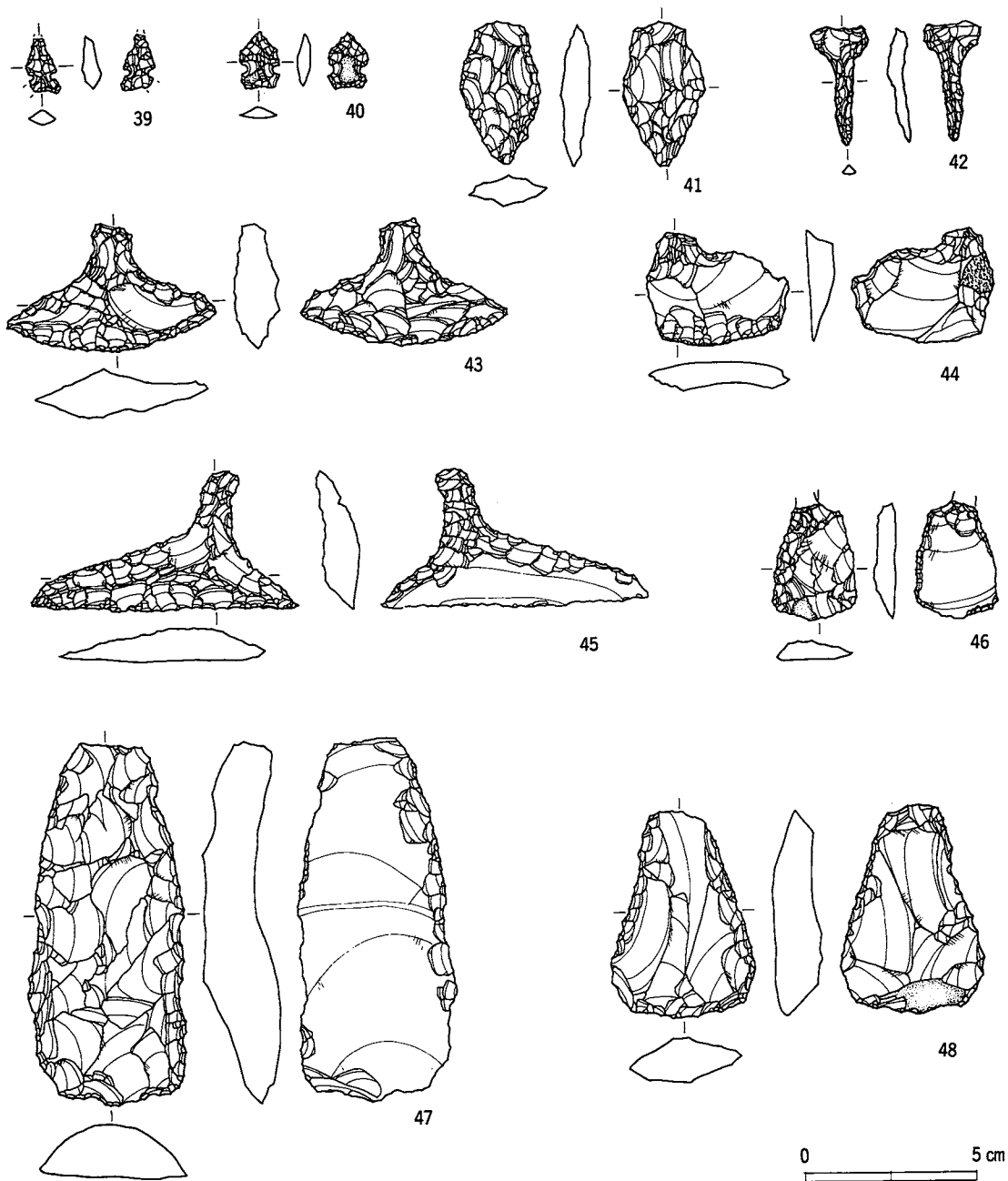
番号	器種	出土位置	文様	時期など
1	鉢?	II E8h表土	無文	縄文時代後期?
2	台付鉢	III E1i表土	無文	縄文時代後期?
3	蓋	II C2fIV層	単節LR縄文	弥生時代前半
4	壺	II C5e礎石面下	単節RL縄文	〃
5	深鉢	II C5i礎石面下	単節LR縄文	〃
6	〃	II C1gIV層	なし	〃
7	〃	II C1gIV層	単節LR縄文	〃
8	〃	II C6gIV層	〃	〃
9	〃	II C6cIV層	〃	〃
10	〃	II C6dIV層	〃	〃
11	深鉢か壺	II D1bIV層	交互刺突文	弥生時代末
12	壺	II E9g包含層	〃	〃

第94図 縄文・弥生時代の土器



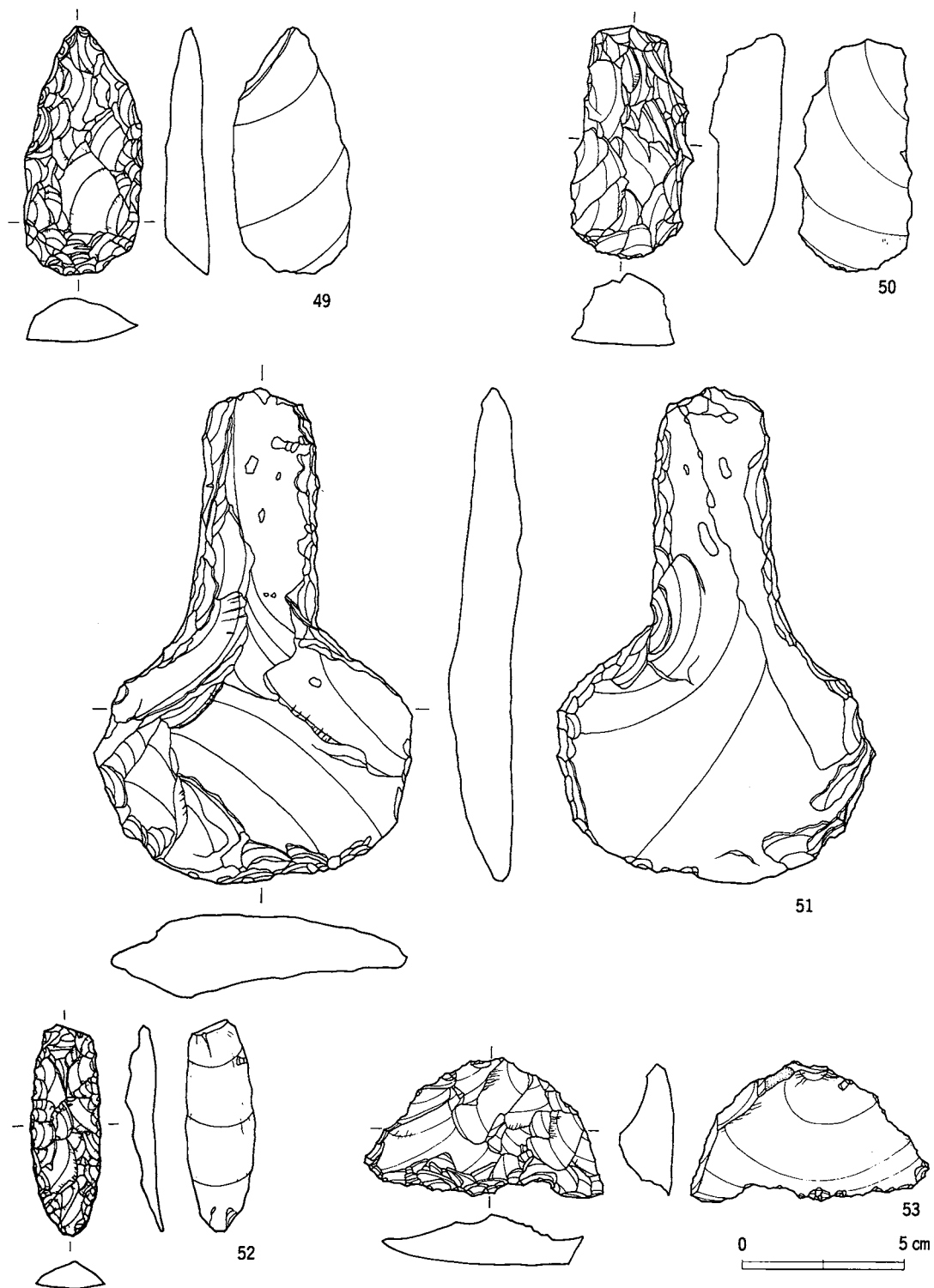
番号	器種	出土位置	石質	その他
21	石鏃	II E区表土(11次)	粘板岩	
22	〃	II F6d	珪質泥岩	
23	〃	II F9d I層	黒曜石	
24	〃	13次調査区	細粒凝灰岩	側部のえぐれは新しいもの
25	〃	II F5e I層	〃	
26	〃	II F6e	〃	
27	〃	II F7c I層	硬質凝灰岩質泥岩	
28	〃	II F区(13次)	細粒凝灰岩	
29	〃	II F6f I層	〃	
30	〃	13P770埋土	〃	
31	〃	II E6d表土	硬質泥岩	
32	〃	15次調査区	玻璃質流紋岩	柄部欠損
33	〃	II F7c I層	細粒凝灰岩	
34	〃	II F5c I層	硬質泥岩	
35	〃	13SK12埋土	チャート	
36	〃	15SK7埋土	硬質泥岩	
37	〃	10SD6埋土(II SD5c)	極細粒珪質凝灰岩	
38	〃	13P609埋土	硬質凝灰岩質泥岩	

第95図 縄文・弥生時代の石器(1)



番号	器種	出土位置	石質	その他
39	石鏃	II E6h 包含層	赤褐色凝灰岩	アメリカ式石鏃
40	〃	13SD13埋土 (II F6f)	粘板岩	
41	尖頭器?	II E区 (11次)	凝灰質泥岩	
42	石錐	11SD8埋土 (II E9g)	硬質泥岩	
43	石匙	II D区 (10次)	珪質泥岩	
44	〃	III F3d 表土	硬質凝灰質泥岩	つまみ部分欠損
45	〃	I C9f III層	極細粒珪質凝灰岩	
46	〃	10SD7A埋土	泥質凝灰岩	つまみ部分欠損
47	石篋	13SD3埋土 (II F8d)	硬質凝灰質泥岩	
48	〃	13P789埋土	粘板岩	

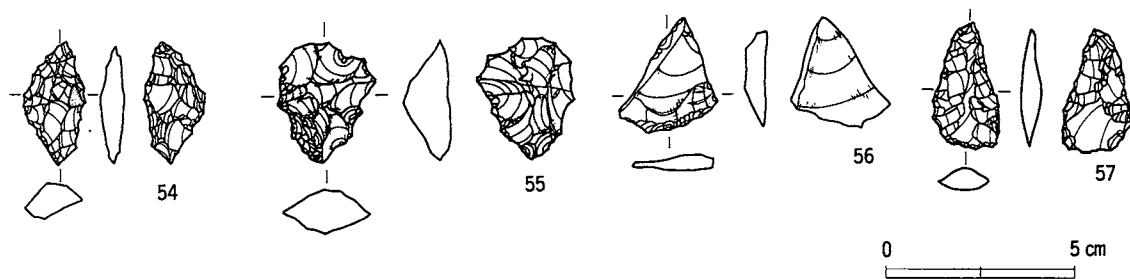
第96図 縄文・弥生時代の石器(2)



番号	器種	出土位置	石質	その他
49	石筥	III E0h包含層	粘板岩	
50	〃	II F区(13次)	粘板岩	
51	柄付石斧	II E7h包含層	粘板岩	
52	スクレイパー	II E7e表土	硬質泥岩	
53	〃	13P609埋土	硬質泥岩	

第97図 縄文・弥生時代の石器(3)





番号	器種	出土位置	石質	その他
54	スクレイパー	13P798埋土	赤褐色凝灰岩	
55	〃	II C6e礎石建物下	硬質泥岩	
56	〃	15SK6埋土	凝灰質泥岩	
57	〃	IIIF4b I層	細粒凝灰岩	

第98図 縄文・弥生時代の石器(4)

## 2 古代の遺物

西側、東側調査区のいずれでも少量であるが、古代の土器が出土している。今回の調査区では当該期のはっきりした遺構は検出されていない。

### (1)土師器 (第99、100図 写真図版68)

101～103は西側調査区出土の土師器である。103の長胴甕の頸部には弱い段が施されている。101、102は9～10世紀、103は8～9世紀の所属であろう。

105～128は東側調査区から出土した土師器である。多くはII E区東側の遺物包含層から12世紀の遺物とともに出土した。坏は105、112～116のように底辺部と底面に再調整を施すものが多い。切離し方法は回転糸切りである。118は高台付きの坏である。119～126はロクロ使用の長胴甕である。119、120はロクロ調整の下地にタタキ目が観察できる。127、128はロクロ不使用の長胴甕である。107は器種の判断が難しいが、煮沸に使用された痕跡がみられず埴ではなく鉢であろう。これら東側調査区出土の土師器の多くは9世紀代の所属と考えられる。

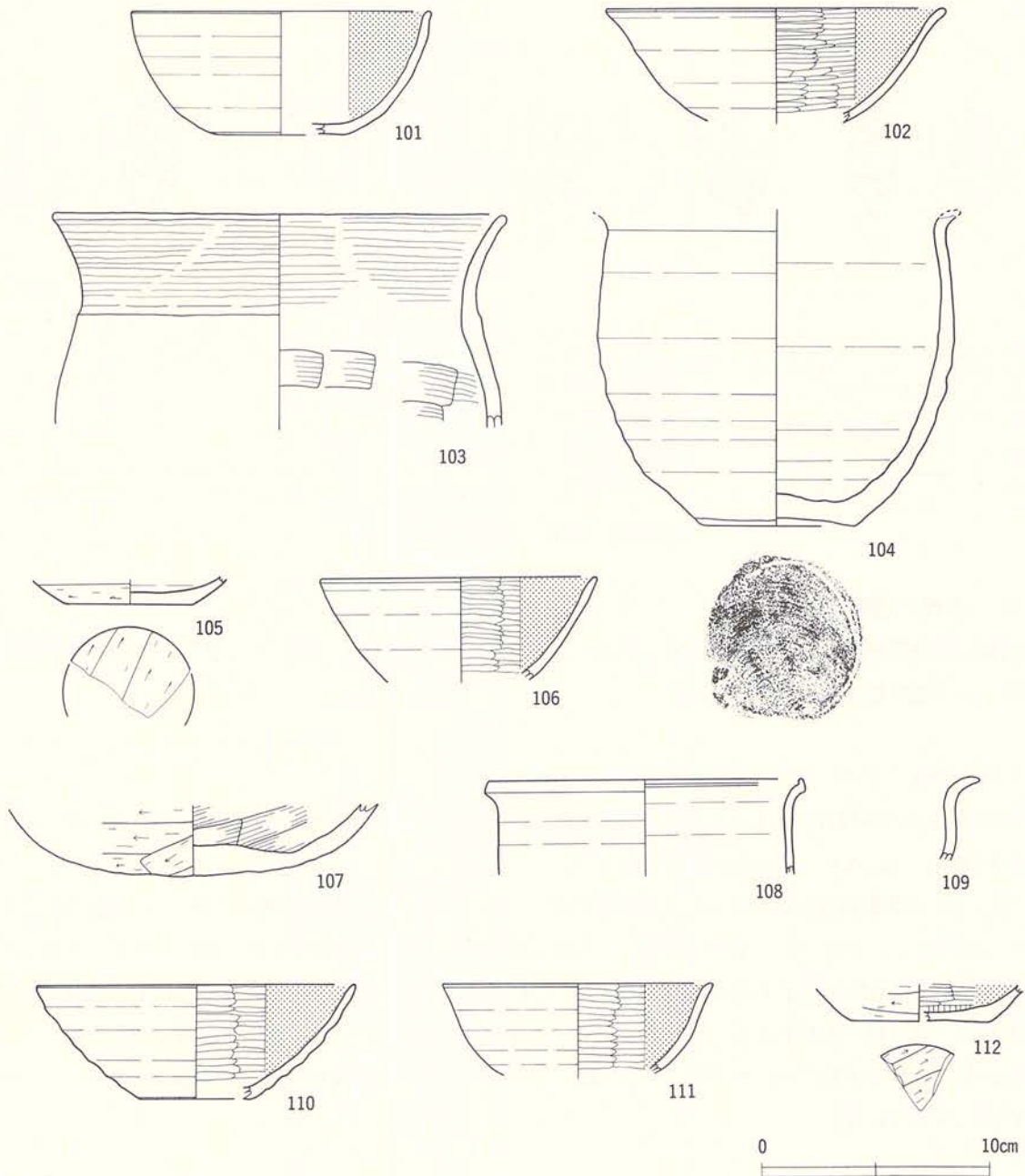
### (2)須恵器 (第101～104図 写真図版69、70)

ここでは須恵器と考えられるものを図示したが、中には12世紀代の須恵器系の国産陶器が混じっている可能性も否定できない。磐井郡の古代の須恵器、12世紀の須恵器系陶器の実態がはっきりしていない現在の状況では、須恵器と須恵器系陶器の分類にも限界がある。

201～215は西側調査区、217～249は東側調査区の出土である。234～243は同一個体の破片と思われる。それぞれの時期の判断は難しいが、東側調査区出土の土師器の所属年代は9世紀代のものが多いと考えられ、須恵器も東側調査区出土のものは9世紀代のものが多いと推定される。

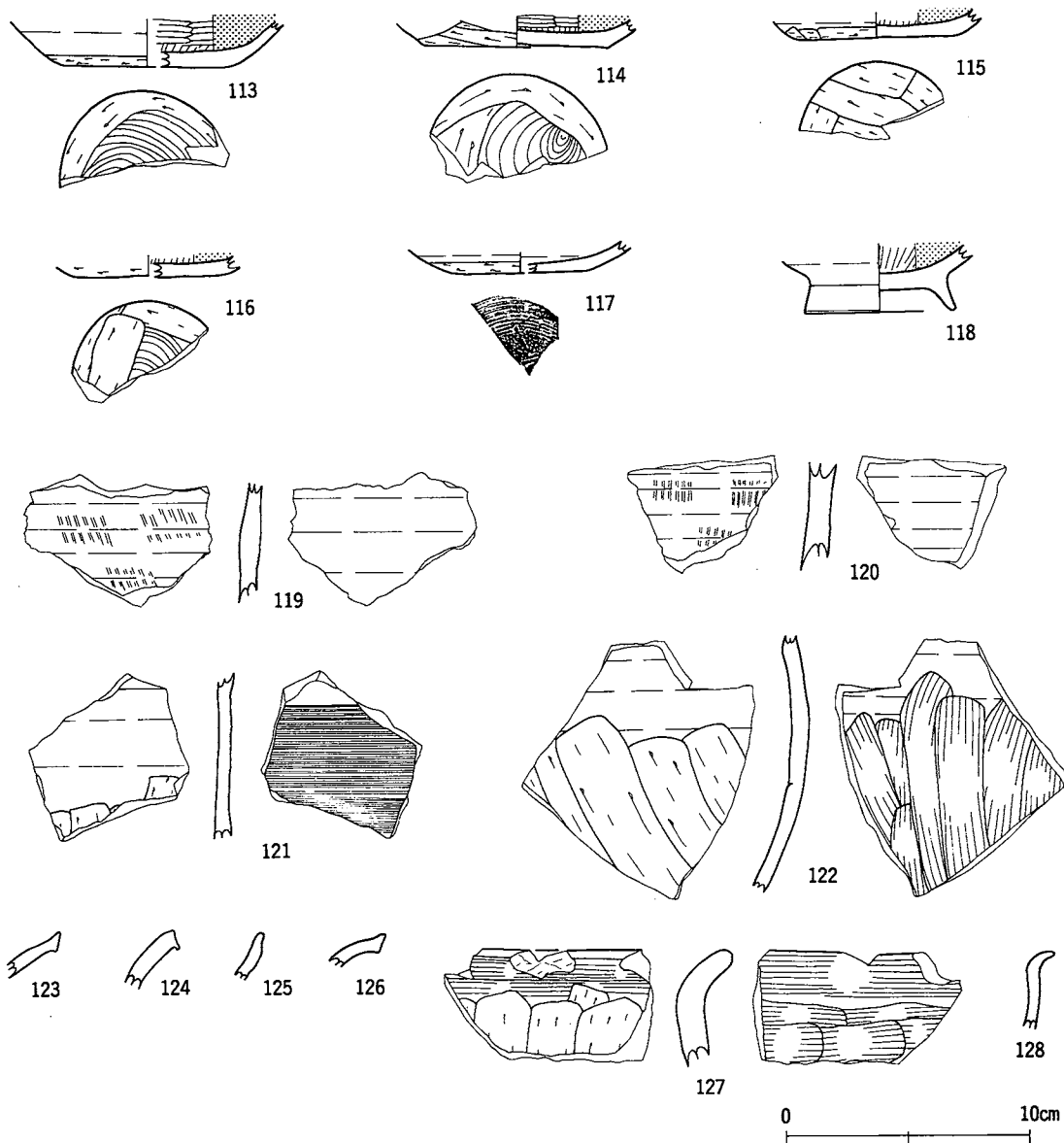
### (3)緑釉陶器 (第102図 写真図版69)

1点であるが緑釉陶器が西側調査区で出土している。器種は皿か碗か容易に判断できない。見込みには陰刻花文が施される。おそらく猿投産で黒笹90号窯式に当てはまると考えられる。そうであれば、概ね9世紀後半頃の年代が与えられる。



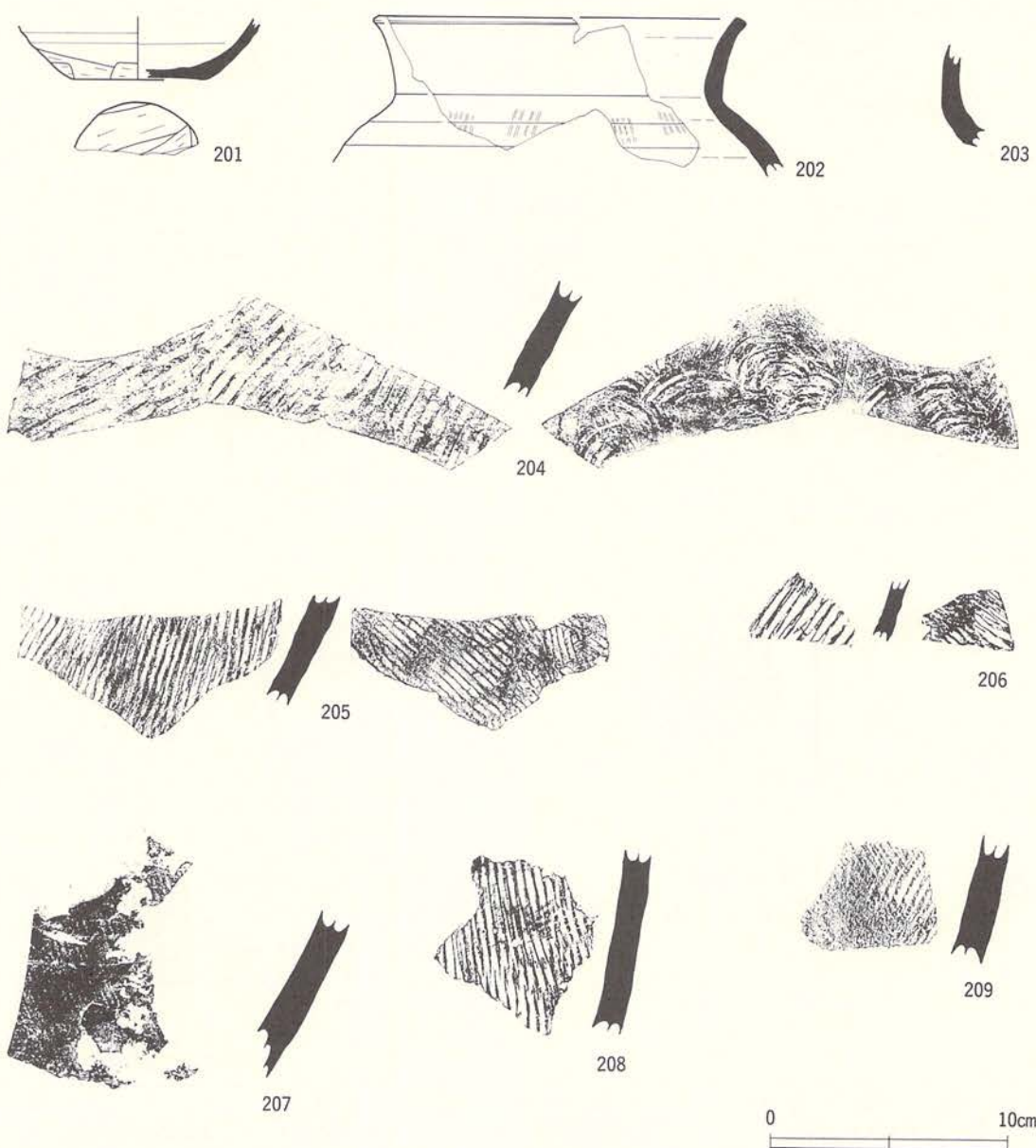
番号	器種	出土位置	外面調整	内面調整	その他
101	坏	IID5bV層	ロクロ	ヘラミガキか? 黒色処理	底面の切り離しは不明、内面磨耗
102	〃	IC7fIV層	〃	ヘラミガキ、黒色処理	
103	長胴甕	IID1bIV層	口縁ヨコナデ、体部不明	口縁ヨコナデ、体部ヘラナデ	外面磨耗著しい、頸部は段というほどではない
104	〃	11SD10埋土上面	ロクロ	ロクロ	底面回転糸切
105	坏	15SK1埋土	ロクロ、底辺部回転ヘラケズリ	ロクロ	底面にヘラケズリ
106	坏	15SK4埋土	ロクロ	ヘラミガキ、黒色処理	
107	鉢?	〃	ヘラケズリ	ヘラナデ	底面もヘラケズリ、被熱しておらず場とは思われない
108	長胴甕	〃	ロクロ	ロクロ	
109	〃	〃	口縁ヨコナデ、体部ヘラナデ	ヘラナデ	ロクロは使用していない
110	坏	II E5i包含層	ロクロ	ヘラミガキ、黒色処理	底面の切り離しは不明
111	〃	〃	ロクロ	ヘラミガキ、黒色処理	
112	〃	〃	底辺部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	底面ヘラケズリ

第99図 古代の土師器(1)



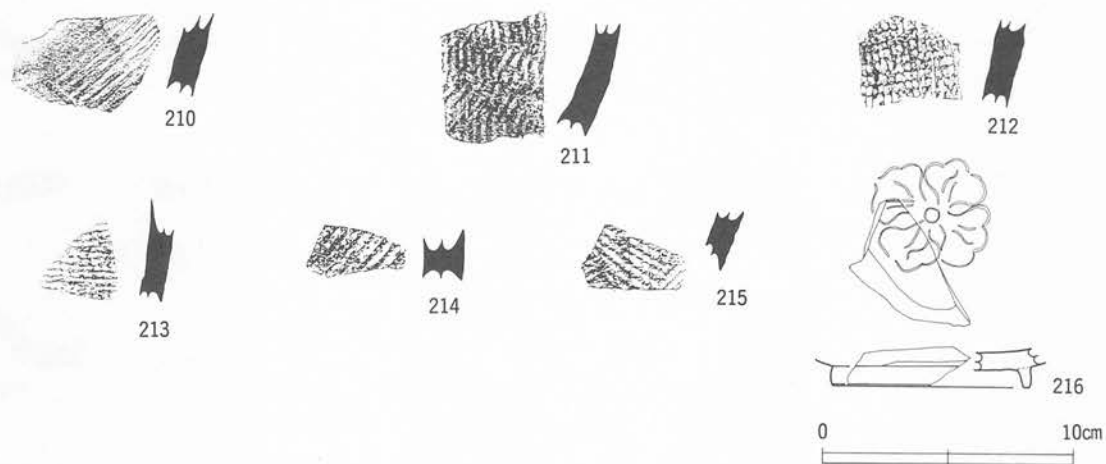
番号	器種	出土位置	外面調整	内面調整	その他
113	坏	II E6h包含層	ロクロ、底辺部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	底面回転糸切に回転ヘラケズリ
114	〃	II E5h包含層	底辺部ヘラケズリ	〃	〃
115	〃	II E6h包含層	ロクロ、底辺部ヘラケズリ	〃	底面ヘラケズリ
116	〃	II E5i包含層	底辺部ヘラケズリ	〃	底面回転糸切にヘラケズリ
117	〃	II E7g包含層	ロクロ、底辺部回転ヘラケズリ	ロクロ	底面回転糸切
118	〃	II E6i包含層	ロクロ	ヘラミガキ、黒色処理	付け高台
119	長胴甕	II E6h包含層	ロクロ、タタキ目	ロクロ	ロクロの下地にタタキ目
120	〃	II E6h包含層	〃	〃	〃
121	〃	II E4i包含層	ロクロ、ヘラケズリ	カキ目	
122	〃	II E5i包含層	〃	ロクロ、ヘラナデ	
123	〃	II E4i包含層	ロクロ	ロクロ	
124	〃	II E7h包含層	〃	〃	
125	〃	II E7h包含層	〃	〃	
126	〃	II E5i包含層	〃	〃	
127	〃	II E5h包含層	口縁ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁ヨコナデ、体部ヘラナデ	ロクロ不使用
128	〃	15SD12埋土 (II E5i)	口縁ヨコナデ、体部ヘラケズリ	〃	〃

第100図 古代の土師器(2)



番号	器種	出土位置	外面調整	内面調整	その他
201	坏	IIC7d礎石面下	ロクロ、底辺部ヘラケズリ	ロクロ	底面ヘラケズリ、灰色で軟質な焼成
202	甕	IID4bV層	ロクロ、下地にタタキ目	ロクロ	内面赤褐色を呈する
203	甕	10SD3埋土	ロクロ	ロクロ	内外面暗灰色を呈する
204	大甕	IID4dV層	タタキ目	アテ具痕	胎土は赤褐色を呈する
205	〃	10SD3埋土(I C7h)	〃	〃	胎土灰色で硬質
206	〃	15SE5埋土上位	〃	〃	胎土は赤褐色で硬質
207	〃	I C8cIII層	〃	横位のナデ	胎土は橙色で軟質
208	〃	I C9eII層	〃	軽いアテ?	胎土は赤褐色で硬質
209	〃	10SD6埋土(IID5b)	〃	〃	〃

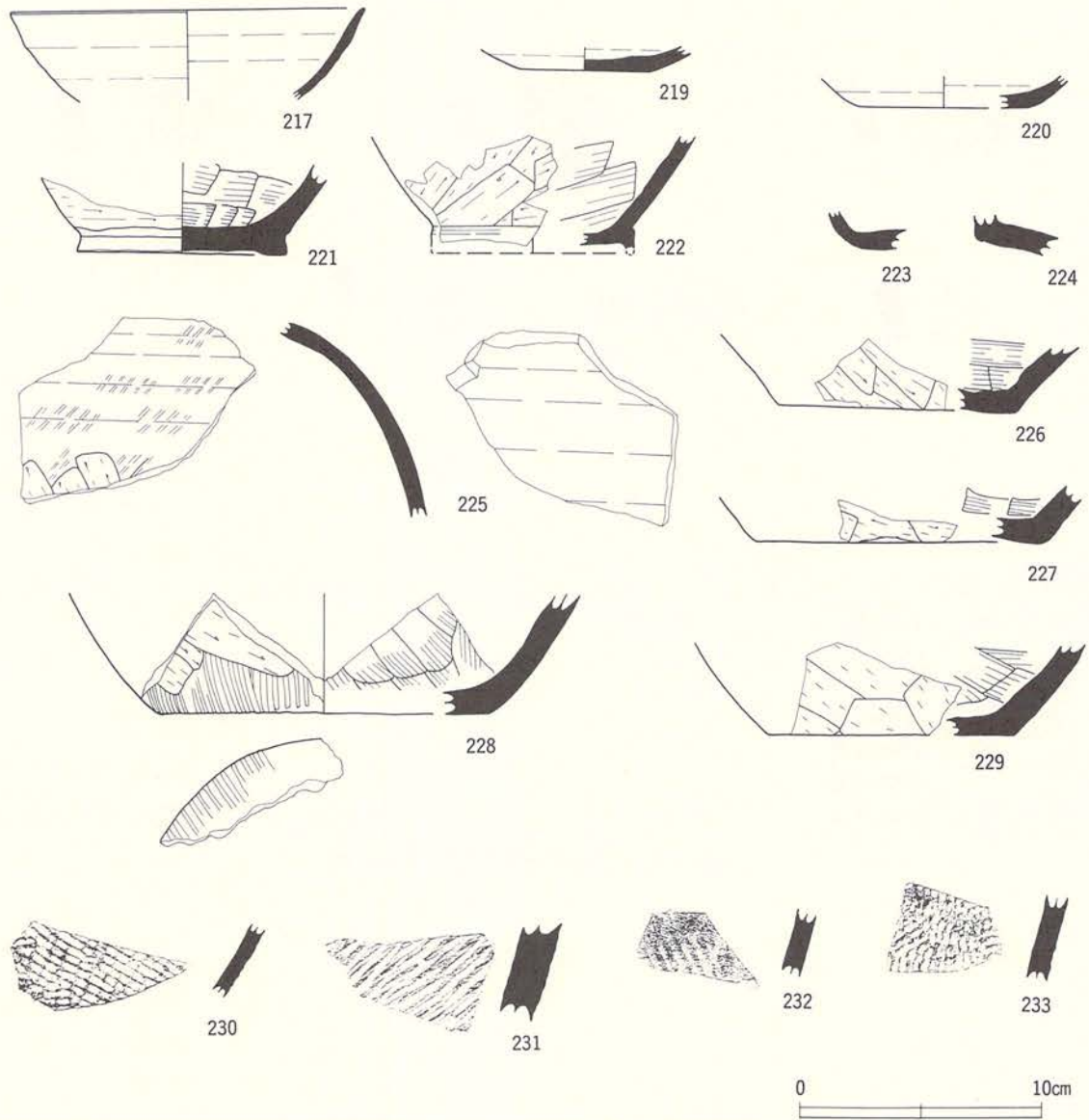
第101図 古代の須恵器(1)



番号	器種	出土位置	外面調整	内面調整	その他
210	大甕	IIC4c表土	タタキ目		
211	〃	IC区	〃		
212	〃	IIIC0d	〃		
213	〃	IID2bV層	〃		
214	〃	IID4dV層	〃		
215	〃	IID0bIII層	〃		
216	皿又は碗	IID4bIV層	ロクロ	ロクロ、陰刻花文	緑釉陶器、内面やや磨耗

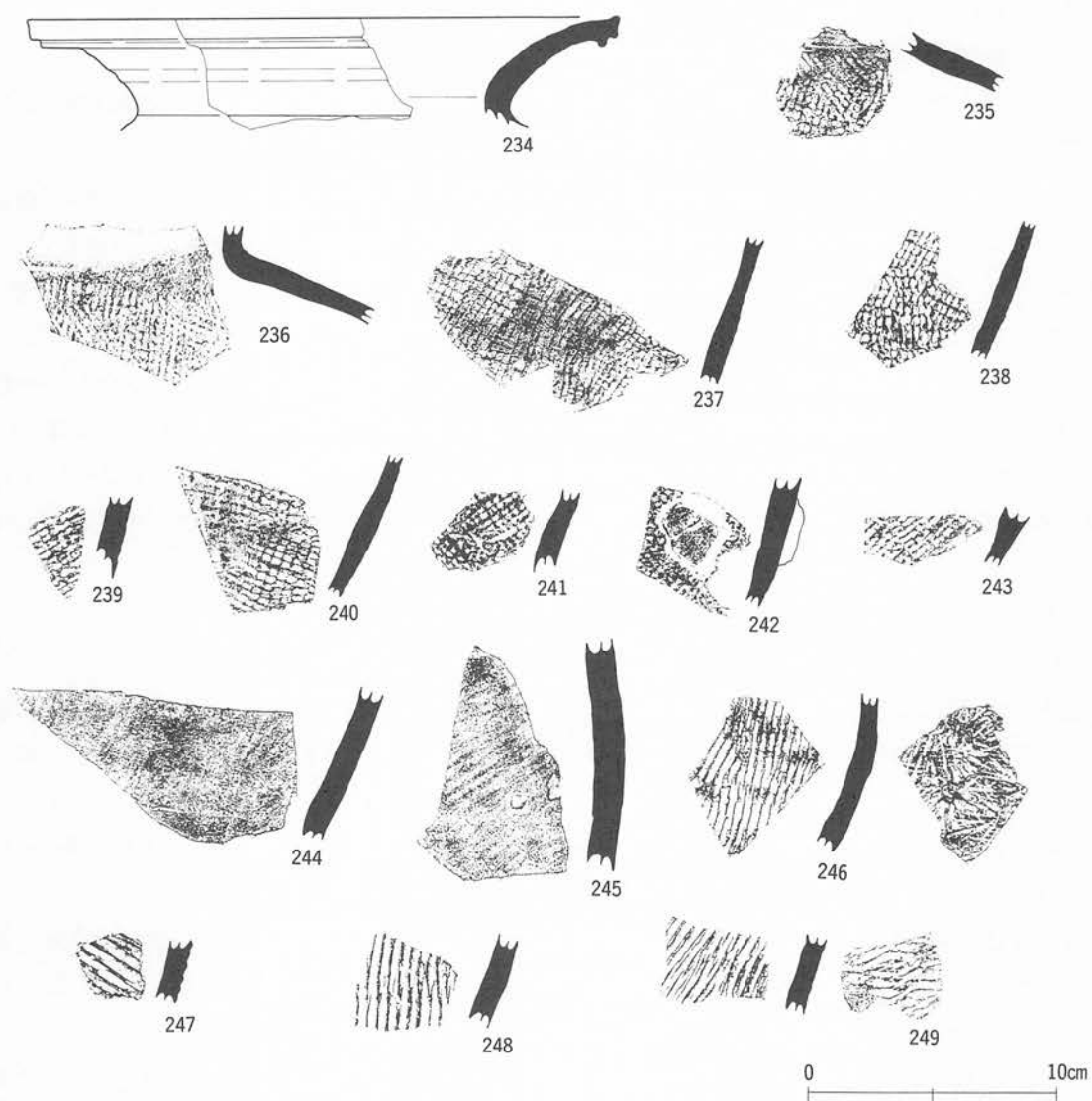
第102図 古代の須恵器(2)・緑釉陶器





番号	器種	出土位置	外面調整	内面調整	その他
217	坏	15SK1埋土	ロクロ	ロクロ	軟質な胎土
219	〃	II E7g包含層	〃	〃	
220	〃	II E7g包含層	〃	〃	
221	長頸瓶	II E5h包含層	回転、ヘラケズリ	ヘラナデ	高台は付け高台
222	〃	II F区表土	ヘラケズリ	〃	〃
223	甕	II E6h包含層	ロクロ	ロクロ	
224	〃	II E7h包含層	〃	〃	胎土は橙色
225	〃	13P70埋土(III F1d)	ロクロヘラケズリ、下地タタキ目	ロクロ	軟質な胎土
226	〃	III E0h包含層	ヘラケズリ	ヘラナデ	
227	〃	II E6h包含層	〃	〃	
228	〃	II F9b表土	ヘラケズリ、下地タタキ目	ヘラナデ	底面にもタタキ目
229	〃	II E7g包含層	ヘラケズリ	ヘラナデ	胎土は赤褐色
230	大甕	II E6h包含層	タタキ目	軽いアテ具痕?	胎土は橙色で軟質
231	〃	II E8h表土	〃		内面を擦っている
232	〃	II E7i包含層	〃		
233	〃	II E7h包含層	〃	軽いアテ具痕?	223と同一個体か

第103図 古代の須恵器(3)



番号	器種	出土位置	外面調整	内面調整	その他
234	大甕	15SD41埋土	ロクロ	ロクロ	235~243と同一個体と思われる
235	〃	IIIF4b表土	タタキ目		灰色で硬質な胎土
236	〃	13次調査区	〃		
237	〃	II E7h包含層	〃		
238	〃	〃	〃		
239	〃	15SD4埋土	〃		
240	〃	〃	〃		
241	〃	11SD8埋土(II E9g)	〃		
242	〃	II E9i表土	〃		他の須恵器片が窯着している
243	〃	11SD8埋土(II E9g)	〃		
244	〃	II E5hの水穴	〃	ナデ	245と同一個体か
245	〃	II E7h包含層	〃		
246	〃	II E5h包含層	〃	アテ具痕	赤褐色で硬質な胎土
247	〃	II E9i包含層	〃		
248	〃	II E9h包含層	〃	アテ具痕	
249	〃	II E6g表土	〃	アテ具痕	

第104図 古代の須恵器(4)

### 3 12世紀の遺物

#### (1) 国産陶器 (第105～153図 写真図版71～109)

12世紀のものと思われる国産陶器は、常滑、渥美、猿投?、須恵器系、東北地方在地産がある。陶器の分類については平泉町教育委員会の八重樫忠郎氏に労を賜った。

陶器の出土量を数値で示すのはなかなか難しいが、破片数で示してみる。接合したものは個々の破片を数えず接合した状態を1点と数えた。その結果は常滑656点、渥美323点、猿投?12点、須恵器系9点、東北在地産9点、他に常滑産か渥美産か判断できない片口鉢片が26点ある。掲載したのは常滑244点、渥美179点、猿投?9点、須恵器系8点、東北在地産5点である。常滑、渥美産陶器の場合押印が施されているものは掲載した。常滑産陶器の編年は1994年のシンポジウム「中世常滑焼をおって」で示された赤羽・中野生産地編年に従う。本報告書の常滑産陶器が多く属する2型式は1150年～1175年に、3型式は1175年～1190年頃の年代が示されている(中野晴久 1994 赤羽・中野「生産地における編年について」シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所編)。以下西側調査区、東側調査区の順に記述していく。

#### ① 西側調査区の陶器

##### 常滑 (第105～125図 写真図版71～88)

出土した器種には小皿、片口鉢、三筋壺、二筋壺、短頸壺、突帯付四耳壺、広口壺、甕がある。八重樫氏によると、片口鉢は常滑産と渥美産のものに分類するのは容易でないとのことであるが、無理に分類していただいた。

小皿は(1001)の1点のみの出土である。西側調査区で供膳具はこの他に渥美産の山茶碗が1点出土しているのみである。

片口鉢は口唇部を面取りするもの(1002～1004)としないもの(1005～1013)がある。面取りするものは2型式、しないものは3型式に所属する可能性が高いという。また口唇部の形態が異なっても、いずれにも底辺部には回転ヘラケズリが施されている。

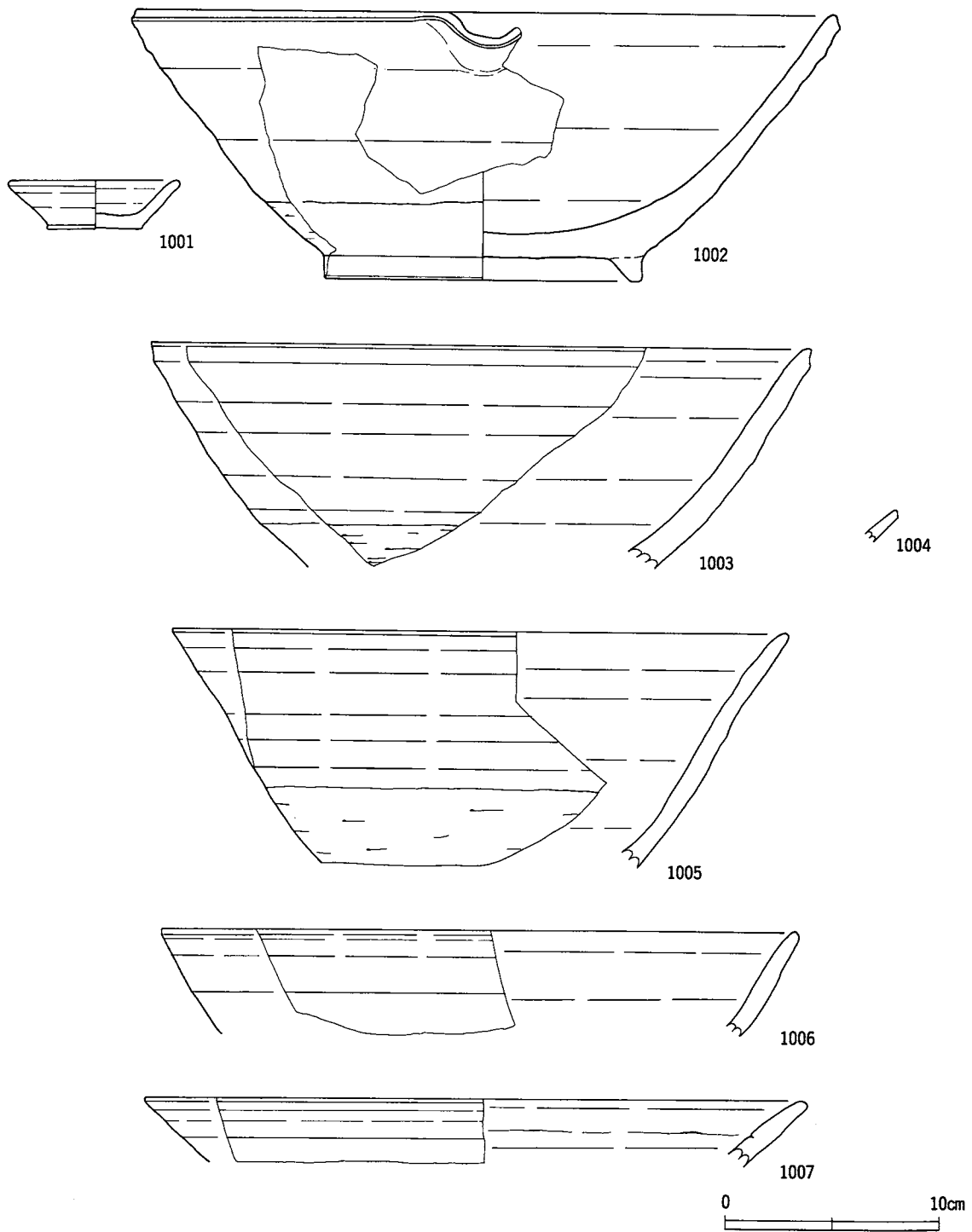
二筋壺、三筋壺は(1021～1027)の7点が図示できた。二筋文、三筋文の線は1026は3本線だが他は単線である。1025は全体の器形を知ることができる資料であるが、口縁部が玉縁口縁で、一般的な12世紀の常滑産の三筋壺の口縁形態とは異なっている。常滑産の壺で玉縁口縁がみられるのは、その6型式(13世紀後半)頃のもので、それらと1025は全体のプロポーションは大きく異なっている。常滑市民俗資料館の中野晴久氏は「この壺は全体のプロポーションから12世紀第4四半期頃の年代が考えられる。口縁部の形態はこの時期の常滑産としては特異だが、猿投の壺に玉縁口縁のものがあり、その影響の可能性が考えられる。また猿投産そのものである可能性もあるが、この時期の猿投陶器の様相は明瞭ではなく、はっきり断言はできない。常滑産としても知多半島北部産の可能性が高い。」とご教示を賜った。1026、1027も1025に沈線の形態、胎土が類似しており、同じ産地の可能性が高い。

短頸壺は1028のみの出土である。薄手の作りで2型式に属する。

突帯付四耳壺(1029)は胎土の観察から常滑産のものであろうと複数の方からご教示を賜った。薄手で非常に良い作りをしている。2型式に属すると思われる。耳は横耳で突帯の断面形は三角形をしている。外底面には灰が僅かに付着している。

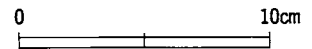
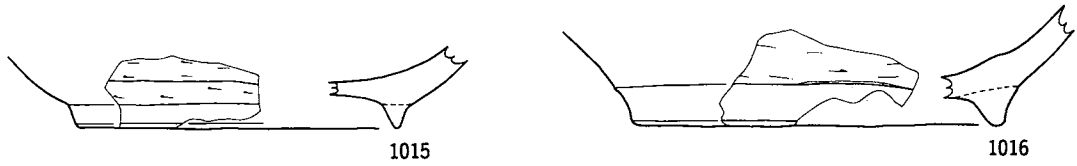
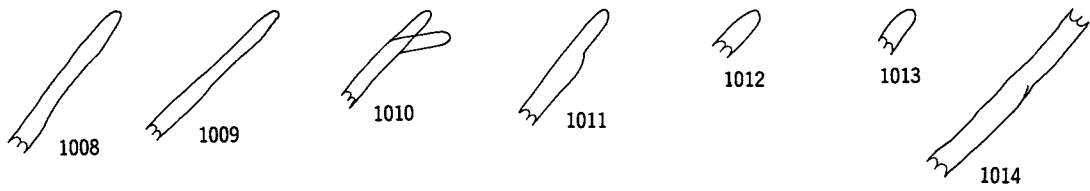
広口壺は2型式の属するもの(1030～1042)と3型式に属するもの(1043～1048)がある。口縁部内面上部に沈線状の段を持つものが多い。





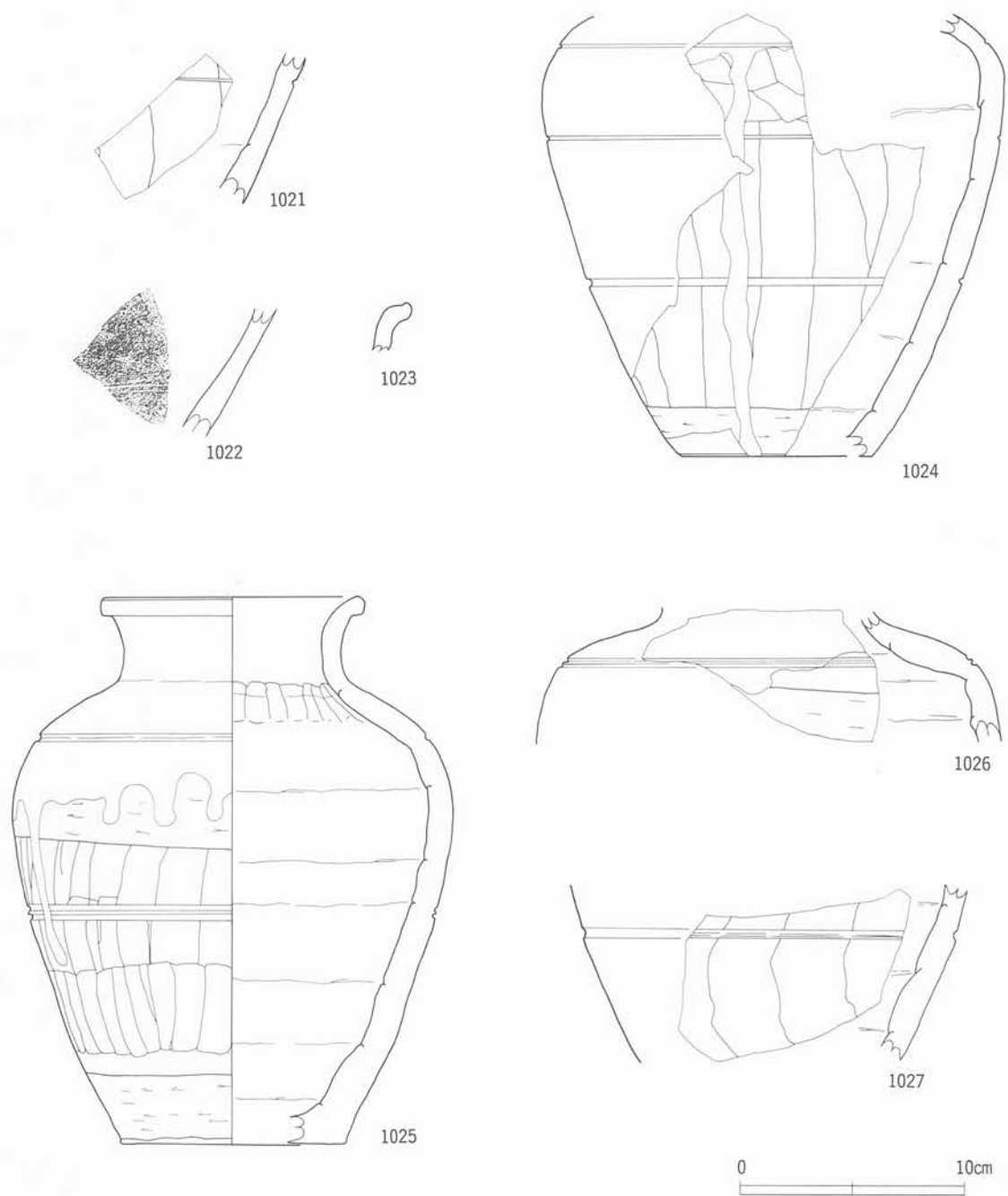
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1001	常滑	小皿	完存	IID3dIII層	2型式	灰白色	底面回転糸切
1002	〃	片口鉢	完存	IID1bIV層	2型式	灰白色	体部下半ヘラケズリ、内面磨耗
1003	〃	〃	口～体	10SD4埋土	〃	褐色	体部下半ヘラケズリ、内面磨耗
1004	〃	〃	口縁	IID5bIV層	〃	灰色	口縁部面取り
1005	〃	〃	口～体	10SD6(IID5b)埋土	3型式	灰色	内面あまり磨耗なし、体部下半ヘラケズリ
1006	〃	〃	口縁	15SK45 I層	〃	外褐色、内褐～緑色	内外面自然釉
1007	〃	〃	口縁	15SK45 I層	〃	灰色	

第105図 西側調査区常滑産陶器(1)



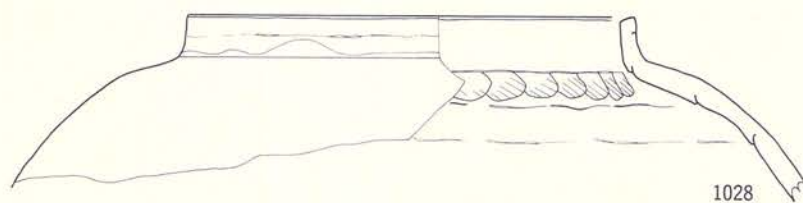
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1008	常滑	片口鉢	口～体部	IID4bIV層	3型式	灰色	口縁部内外面に自然釉
1009	〃	〃	〃	IID5bV層	〃	灰色	内面に薄く自然釉
1010	〃	〃	口縁	15SK45 I層	〃	灰色	内面にうすく緑色の自然釉
1011	〃	〃	〃	15SE5埋土上部	〃	外灰色、内緑色	内面に自然釉
1012	〃	〃	〃	15SD25埋土	〃	うすい緑色	内外面に自然釉
1013	〃	〃	〃	10SK3埋土	〃	外灰白色、内オリーブ色	内面に自然釉
1014	〃	〃	体部	15SD14埋土	2～3型式	灰色	下半部にヘラケズリ
1015	〃	〃	底部	IIC区南側表土	〃	外灰白色、内自然釉	外底面砂付着
1016	〃	〃	〃	15SE2 2層	〃	灰色	内面磨耗著しい
1017	〃	〃	〃	15SE4埋土	〃	灰白色	外底面砂付着、内面磨耗著しい
1018	〃	〃	〃	15SD25埋土	〃	灰色	内面磨耗みられず、外底面にナデ
1019	〃	〃	〃	I C6dIII層	〃	灰色	内面磨耗している、外底面に灰付着
1020	〃	〃	〃	IID3cV層	〃	灰色～緑色	内面磨耗著しい、外底面に灰付着

第106図 西側調査区常滑産陶器(2)

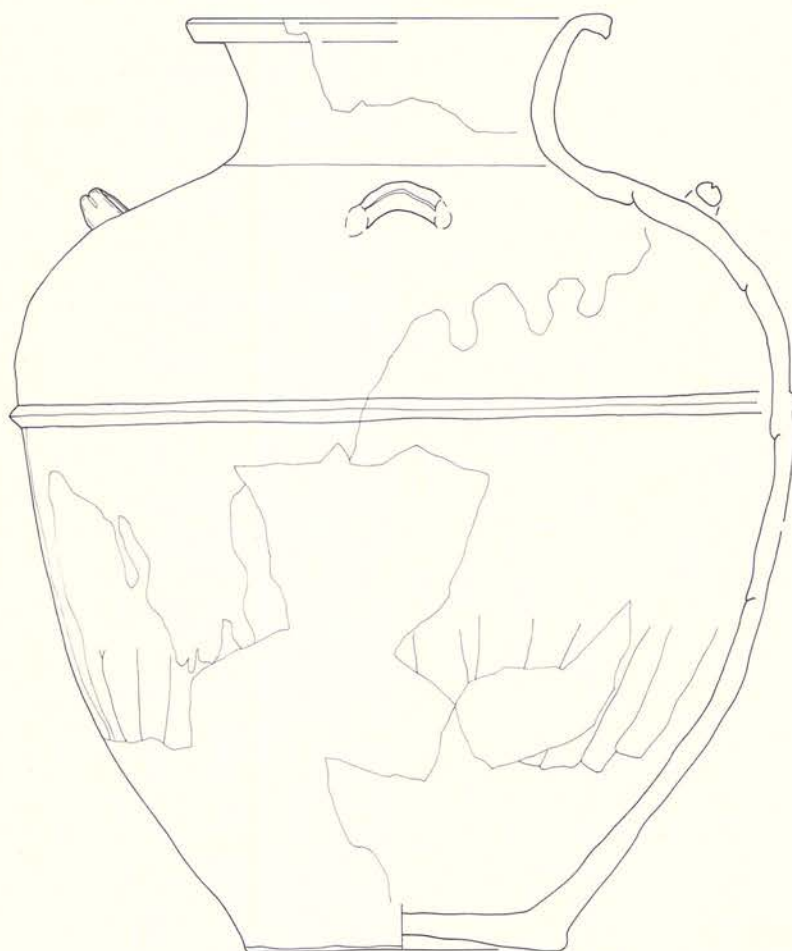


番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1021	常滑	壺	体下	15SD19埋土	2型式後半	暗灰色	単線
1022	〃	〃	〃	IID3dIV層	2型式	赤褐色	3本線
1023	〃	〃	口縁	IIC6c礎石面	2~3型式	暗灰色	
1024	〃	三筋壺	体~底	10SD3 ( I C7h)埋土	3型式か	灰色、部分的に自然釉	単線
1025	常滑?	二筋壺	完存	15SK45 1層	3型式相当	〃	単線、玉縁口縁、猿投の胎土に似る
1026	常滑?	壺	体上	〃	〃	〃	単線、猿投の胎土に似る
1027	常滑?	〃	体下	IID5bIV層	〃	〃	〃

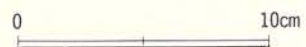
第107図 西側調査区常滑産陶器(3)



1028

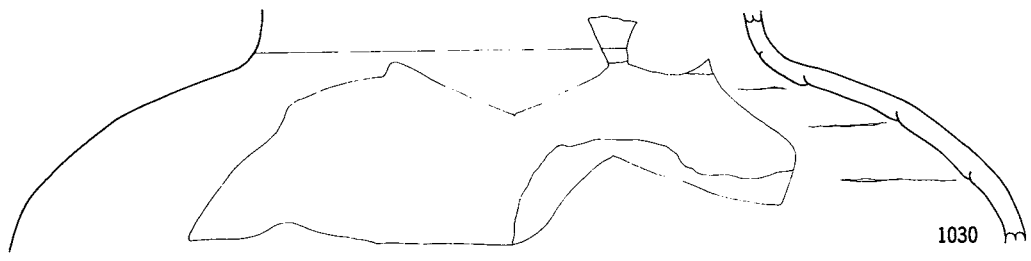


1029

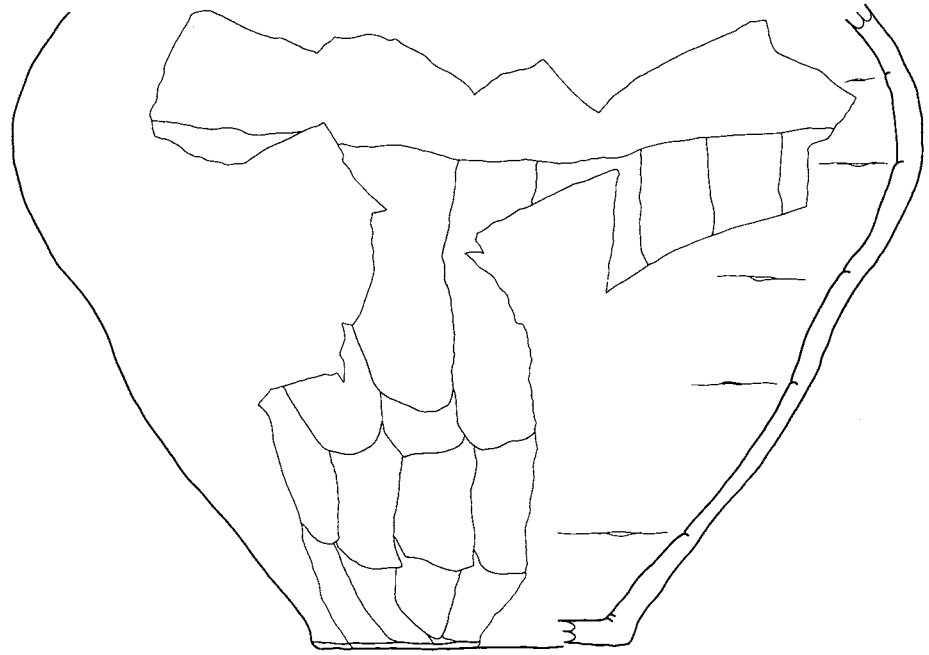


番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1028	常滑	短頸壺	上半部	10SD7a埋土	2型式	灰色、表面自然釉	内面積み上げ痕明瞭
1029	〃	四耳壺	完存	10SD6埋土下部(11D5b)	2型式	赤褐色、表面上半自然釉	胸部上半に断面三角形の突帯と肩部に4単位の横耳

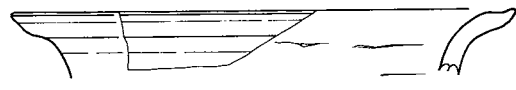
第108図 西側調査区常滑産陶器(4)



1030



1031



1032



1033



1034

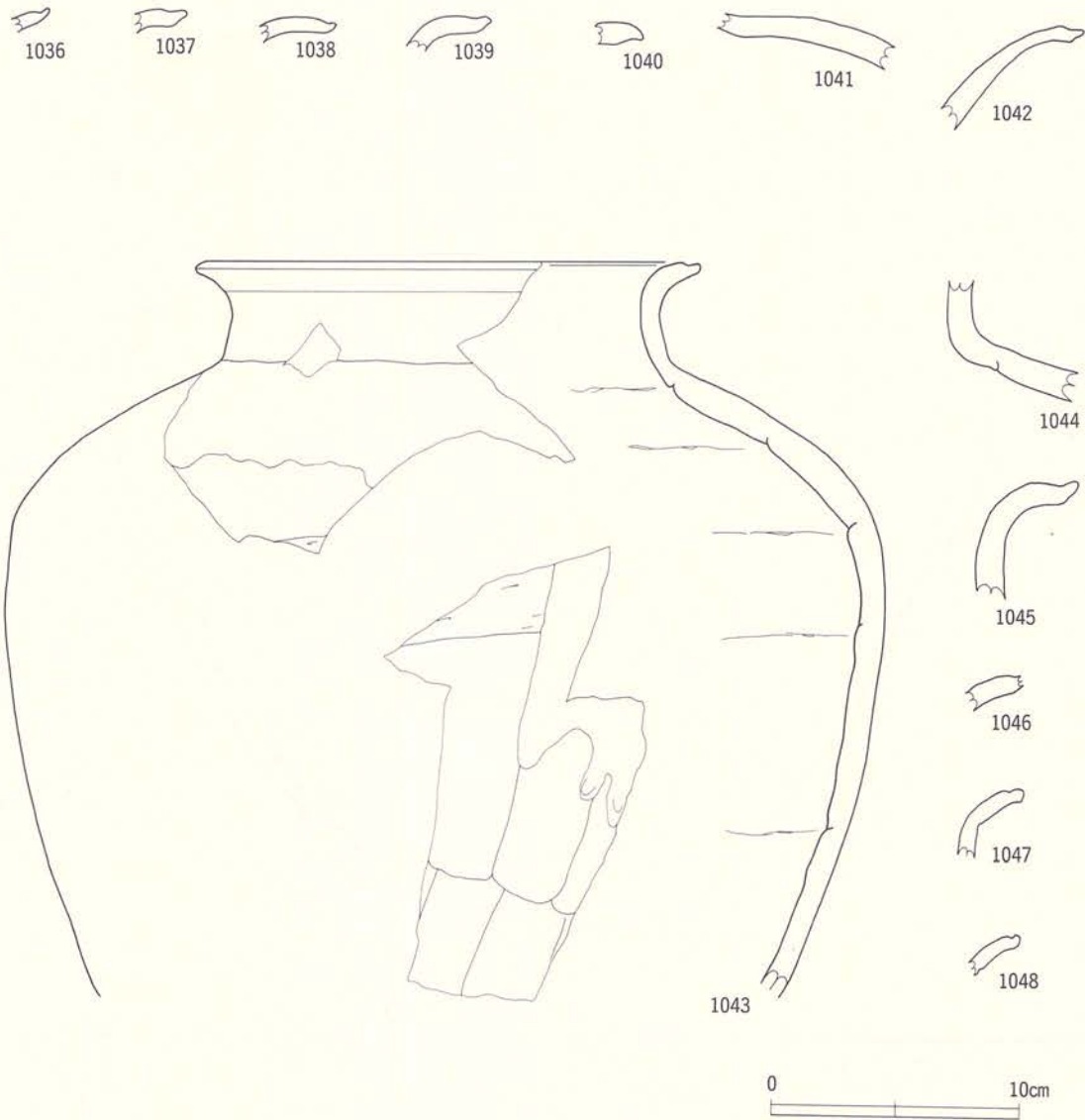


1035



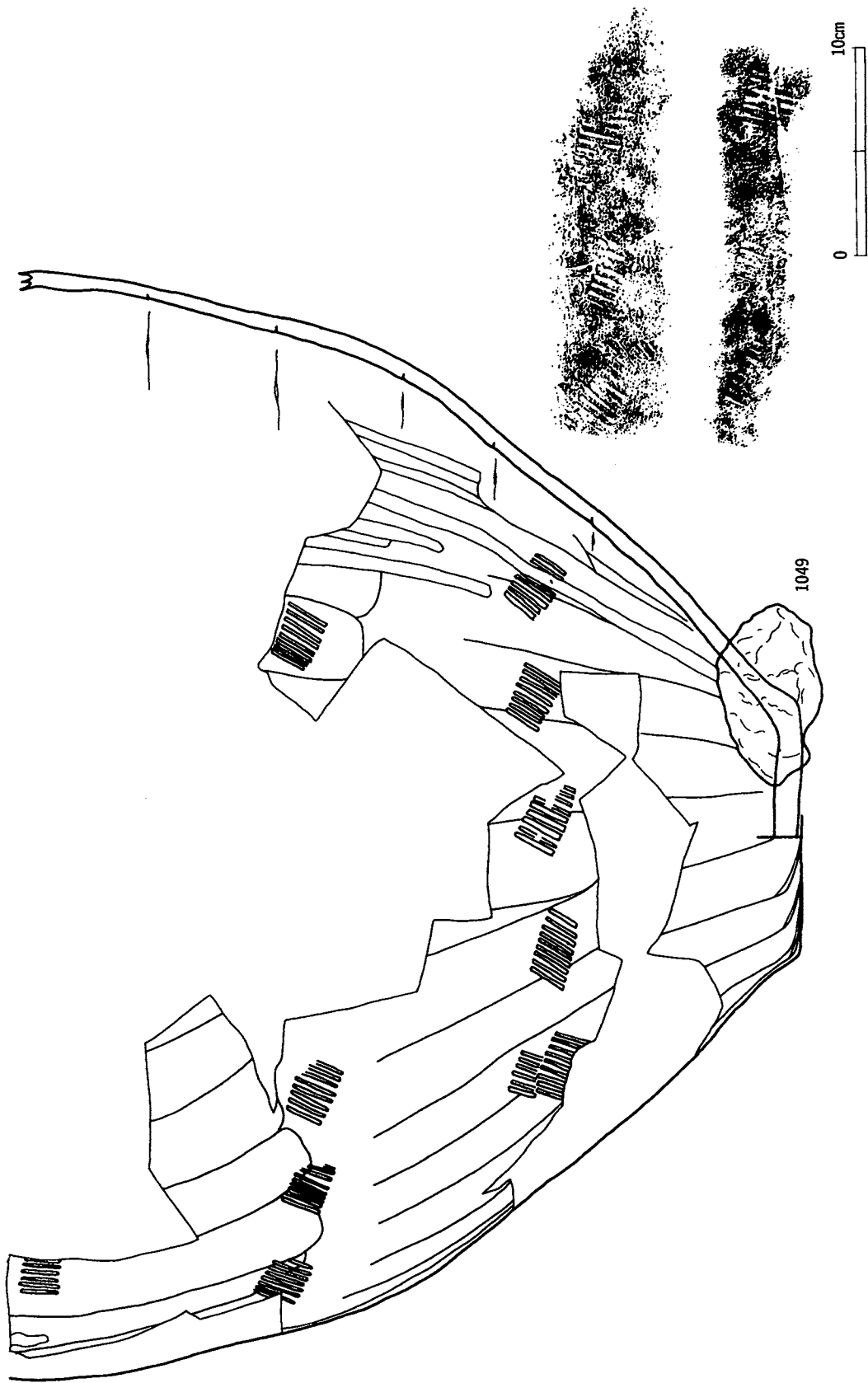
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1030	常滑	広口壺	肩	IID5bV層	2型式	内面暗灰色、外面自然釉	胎土に少量の石英?混入
1031	〃	〃	体~底	10SK3埋土	2型式	黒褐~茶褐色	外面上半部に自然釉、外底面に砂付着
1032	〃	〃	口縁	IID2cIV層	〃	外面赤褐色、内面自然釉	口縁部内面に沈線状のくぼみあり
1033	〃	〃	〃	15SE6埋土上部	〃	黒褐~茶褐色	〃
1034	〃	〃	〃	IID5bV層	〃	外面赤褐色、内面自然釉	1029に口縁部の形態が似る
1035	〃	〃	底	10SD7a埋土中位	〃	灰色	外底面に砂少量付着

第109図 西側調査区常滑産陶器(5)



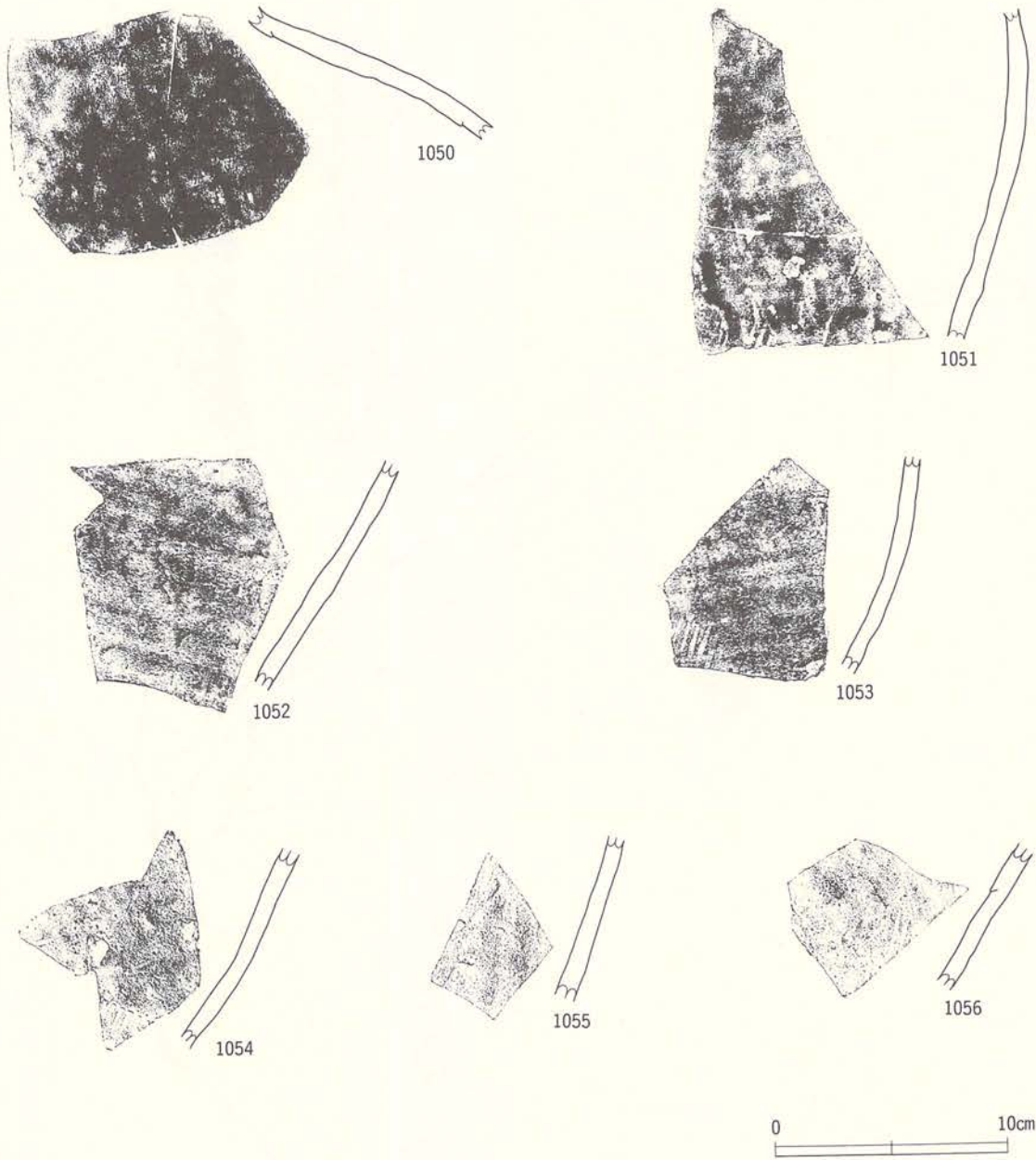
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1036	常滑	壺	口縁	10次のIID区排土中	2型式	外灰色、内自然釉	口縁部内面に沈線状のくぼみあり
1037	〃	〃	〃	I C8iIII層	〃	〃	〃
1038	〃	〃	〃	IIC7h表土	〃	〃	〃
1039	〃	〃	〃	IIC4cIV層	〃	外茶褐色、内自然釉	〃
1040	〃	〃	〃	15次のIIC区排土中	〃	内外面自然釉	〃
1041	〃	〃	肩	IID5b V層	〃	外自然釉、内褐色	内面の積み上げ痕跡
1042	〃	〃	口縁	10SD6埋土(IID5b)	〃	外赤褐色、内自然釉	口縁部がラッパ状に広がる
1043	〃	〃	口～体下	15SE3埋土	3型式	赤褐色～自然釉	15SE5埋土、IID3cIII層からも出土、内外面に鉄分
1044	〃	〃	肩	IID2bIV層	〃	外自然釉、内赤褐色	内外面に鉄分がふき出している
1045	〃	〃	口縁	15次のIIC区排土中	〃	茶褐色	〃
1046	〃	〃	〃	I C8e	〃	外灰色、内自然釉	口縁部内面に沈線状のくぼみあり
1047	〃	〃	〃	15SE5埋土上部	〃	外茶褐色、内灰色	〃
1048	〃	〃	〃	10SD3埋土(I C8g)	〃	〃	〃

第110図 西側調査区常滑産陶器(6)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1049	常滑	甕	体部	15SE3埋土	2型式	外黒色、内自然釉	底辺部に紫体付着、15SK29埋土からも出土

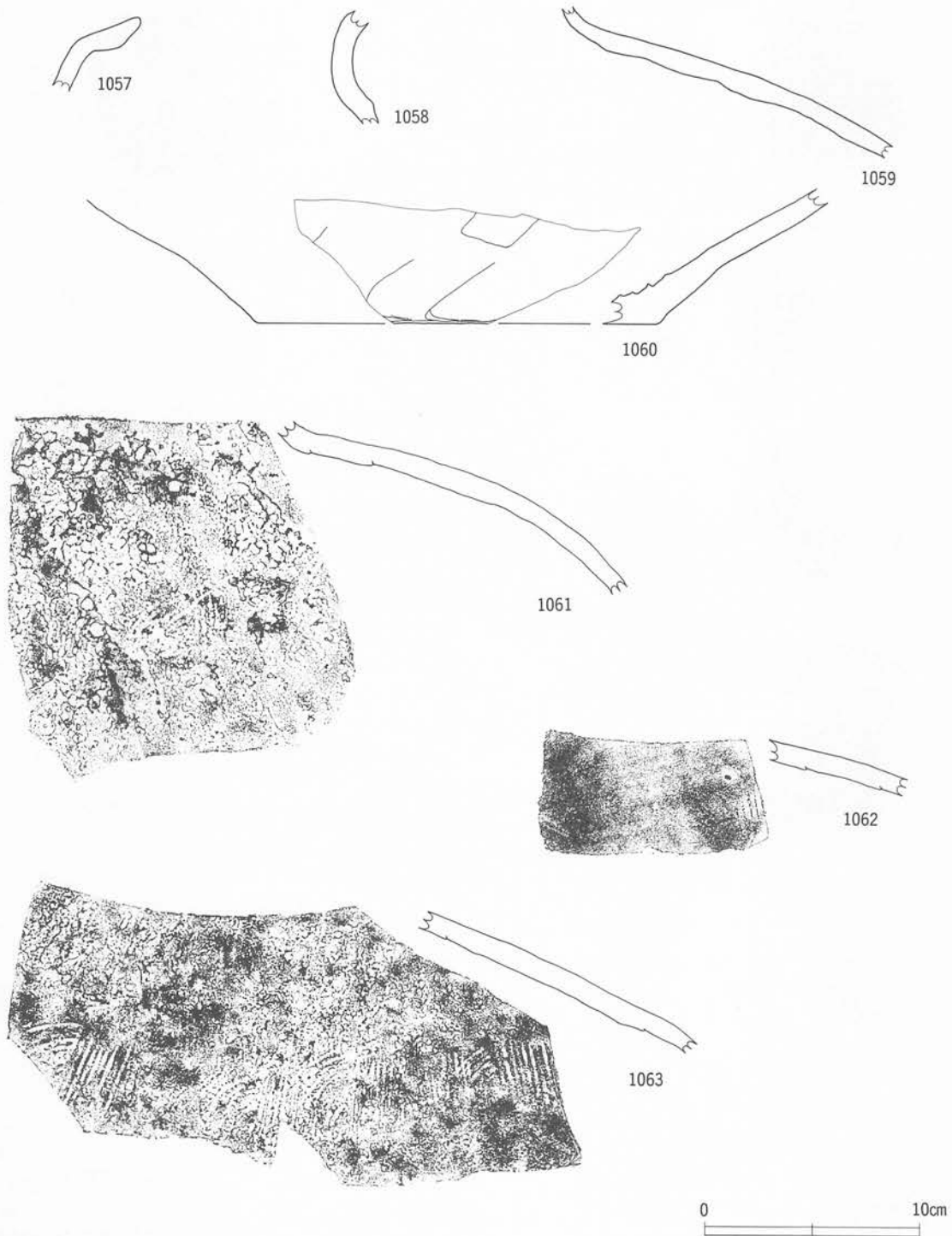
第111図 西側調査区常滑産陶器(7)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1050	常滑	甕	肩	15SE3埋土P27、P35	2型式	外自然釉、内褐灰色	1049と同一個体
1051	〃	〃	体中	15SE3埋土P102、P121	〃	〃	1049と同一個体
1052	〃	〃	体下	15SE3埋土P33、P203	〃	〃	〃
1053	〃	〃	〃	15SE3埋土P45、P62	〃	外黒色、内自然釉	〃
1054	〃	〃	〃	15SE3埋土P37、P42、P54	〃	〃	〃
1055	〃	〃	〃	10次のIID区排土中	〃	外灰色、内自然釉	1049と同一個体、外面は自然釉が剥落
1056	〃	〃	〃	15SK29埋土P9	〃	外黒色、内自然釉	1049と同一個体

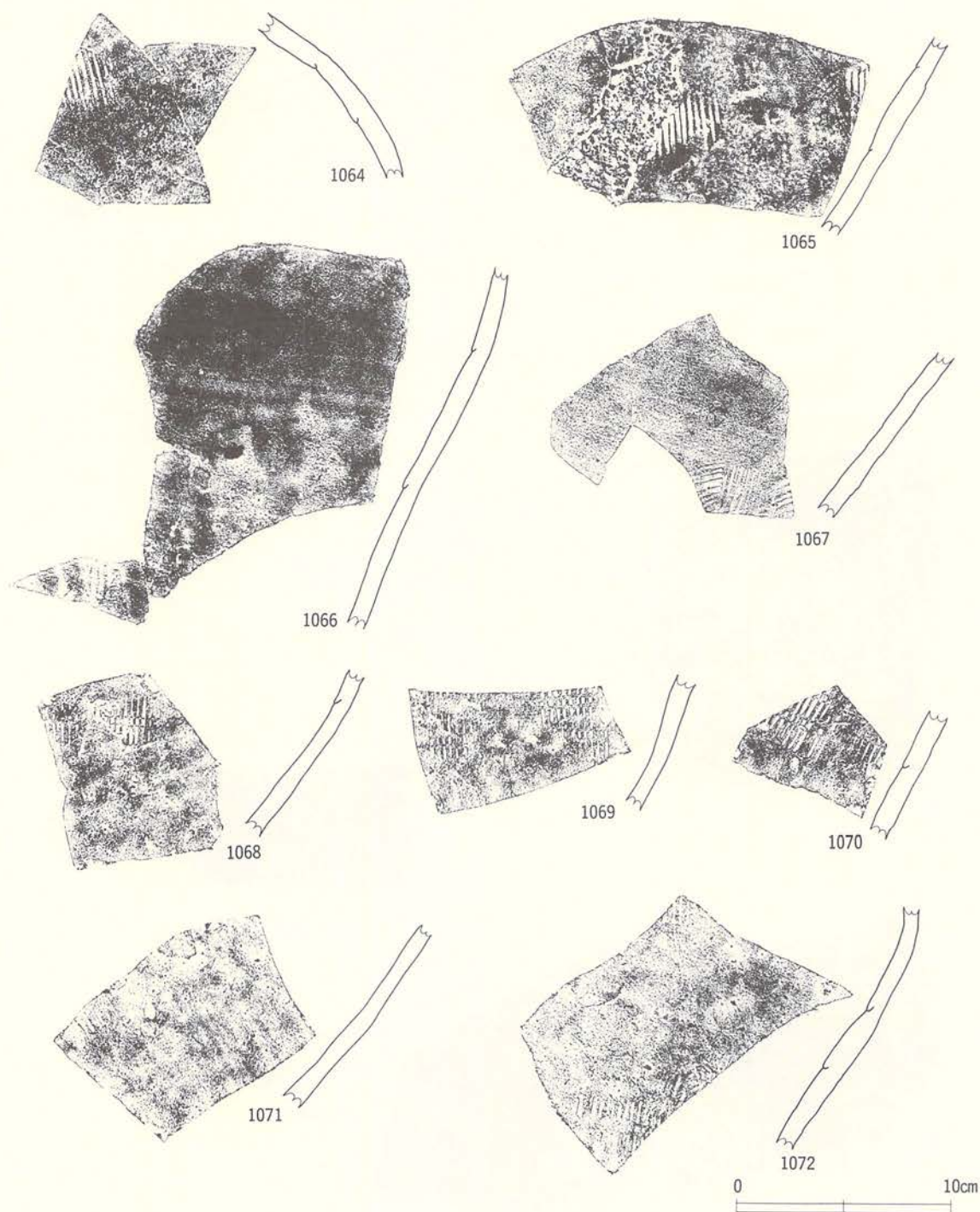
第112図 西側調査区常滑産陶器(8)





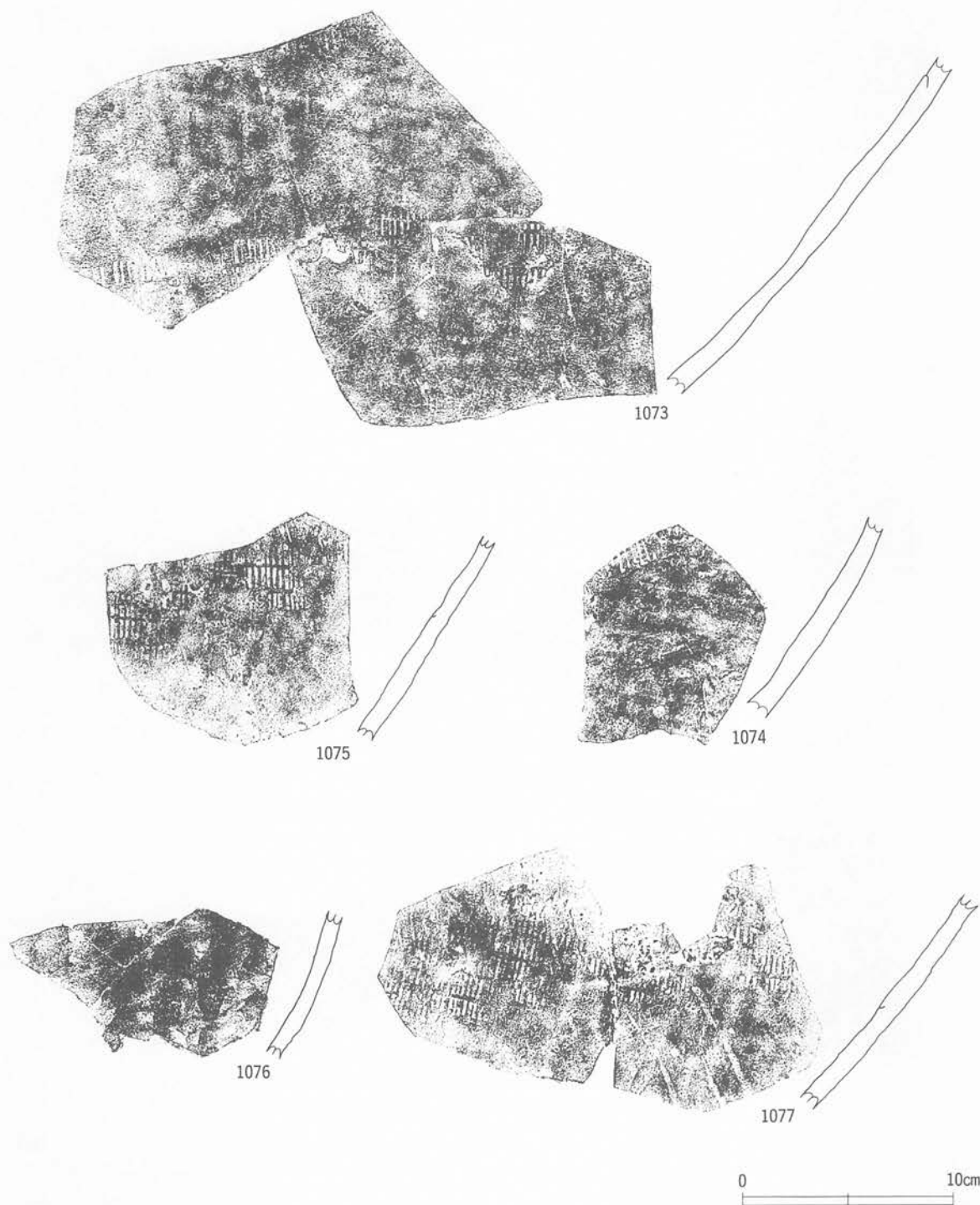
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1057	常滑	甕	口縁	10次のIIC区排土中	2型式	自然釉	口縁部外面に沈線状のくぼみあり
1058	〃	〃	頸	IIC5cIII層	〃	外黒褐色、内暗赤褐色	内面に丁寧なナデ調整が施される
1059	〃	〃	肩	15SE3埋土P95、P109	〃	外自然釉、内灰色	内面にナデ調整が施される
1060	〃	〃	底	15SE3埋土P112	〃	外灰色、内自然釉	内面に鉄分の吹き出しあり
1061	〃	〃	肩	15SE3埋土P161、P173、P226	〃	外自然釉、内茶褐色	1062～1067と同一個体と思われる
1062	〃	〃	〃	I C8hIII層	〃	〃	
1063	〃	〃	〃	15SE3埋土P137、P194	〃	〃	

第113図 西側調査区常滑産陶器(9)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1064	常滑	甕	体上	15SE3埋土P200、P221	2型式	外自然釉～灰色、内茶褐色	1061～1063、1065～1067と同一個体と思われる
1065	〃	〃	体下	15SE3埋土P152	〃	外自然釉～茶褐色、内茶褐色	
1066	〃	〃	〃	15SE3埋土P103、P104、P113	〃	外自然釉～赤褐色、内茶褐色	
1067	〃	〃	〃	15SE3埋土P158、P159	〃	外茶褐色、内暗灰色	
1068	〃	〃	〃	10SD6底面(IID3c)	〃	明赤褐色	1069～1074と同一個体と思われる
1069	〃	〃	〃	IID5bV層	〃	〃	
1070	〃	〃	〃	IID4cV層	〃	〃	
1071	〃	〃	〃	15SE5埋土上部	〃	〃	
1072	〃	〃	〃	15SE3埋土P157	〃	外灰色、内自然釉	

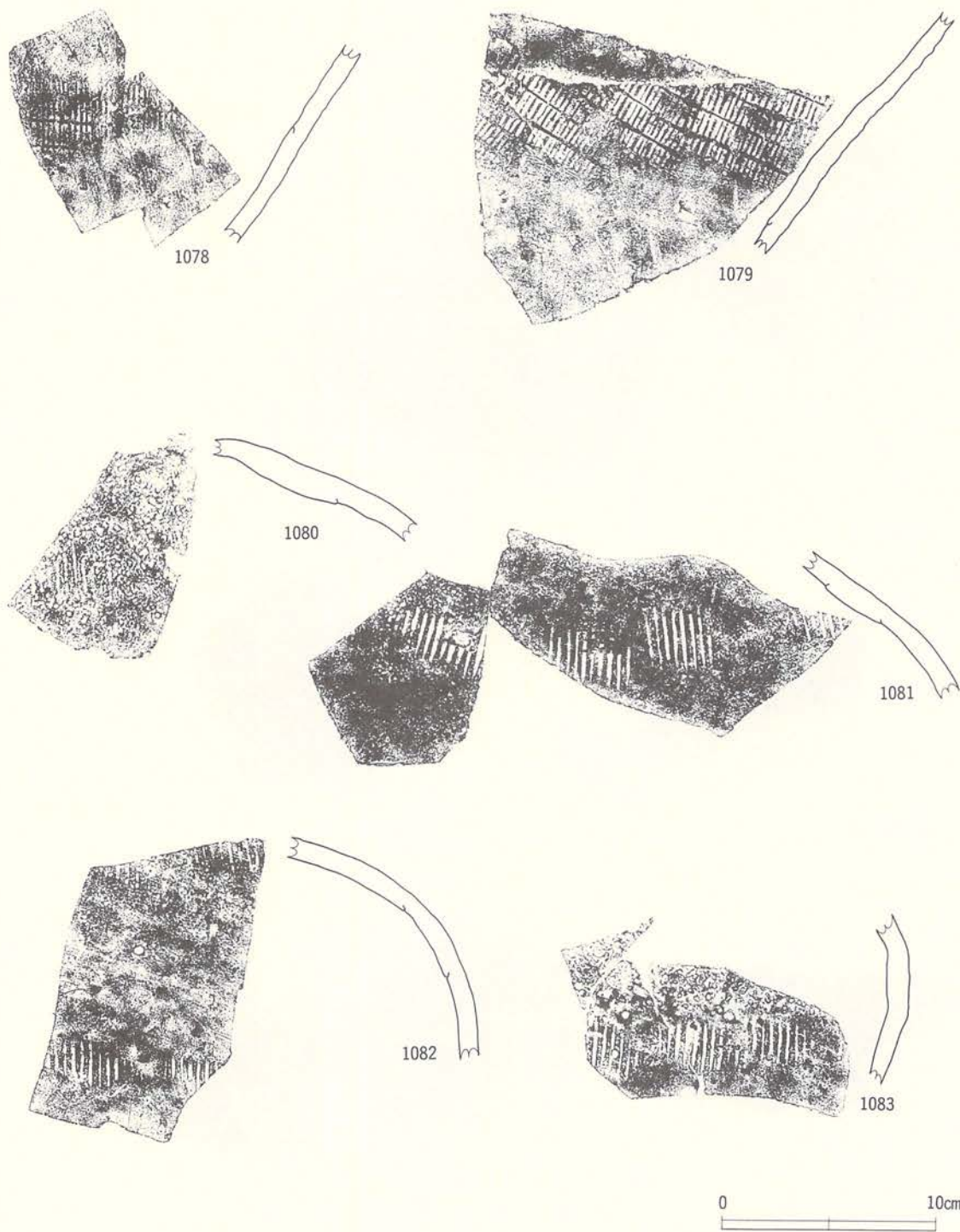
第114図 西側調査区常滑産陶器(10)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1073	常滑	甕	体下	15SE3埋土	2型式	赤褐色	SE03P67、P151、P170、P178、P179、P193
1074	〃	〃	〃	15SE3埋土P73	〃	外赤褐色、内自然釉	1068~1073と同一個体と思われる
1075	〃	〃	〃	10SD3底面( I C8f)	〃	灰色	1076~1079と同一個体と思われる
1076	〃	〃	〃	15SE3埋土P179	〃	〃	
1077	〃	〃	〃	15SE3埋土P90、P145、P177	〃	〃	

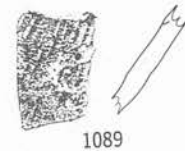
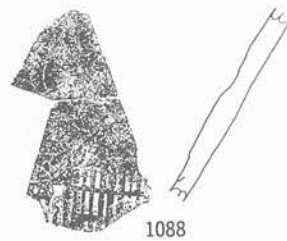
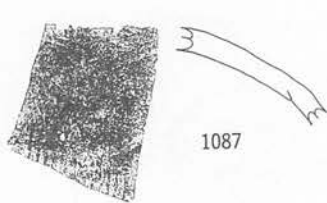
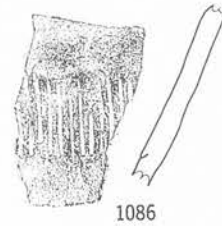
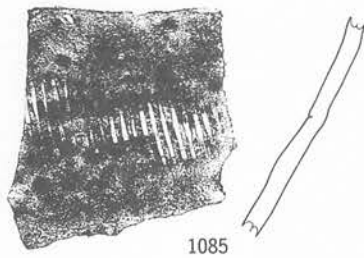
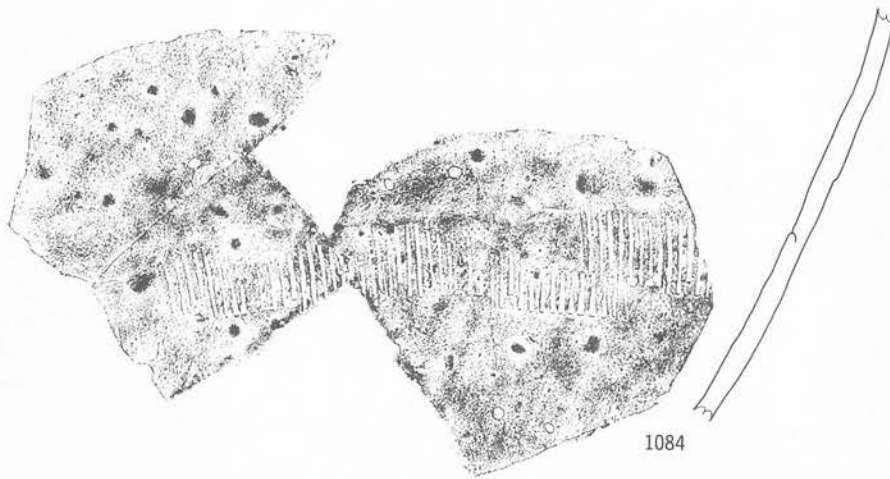
第115図 西側調査区常滑産陶器(11)





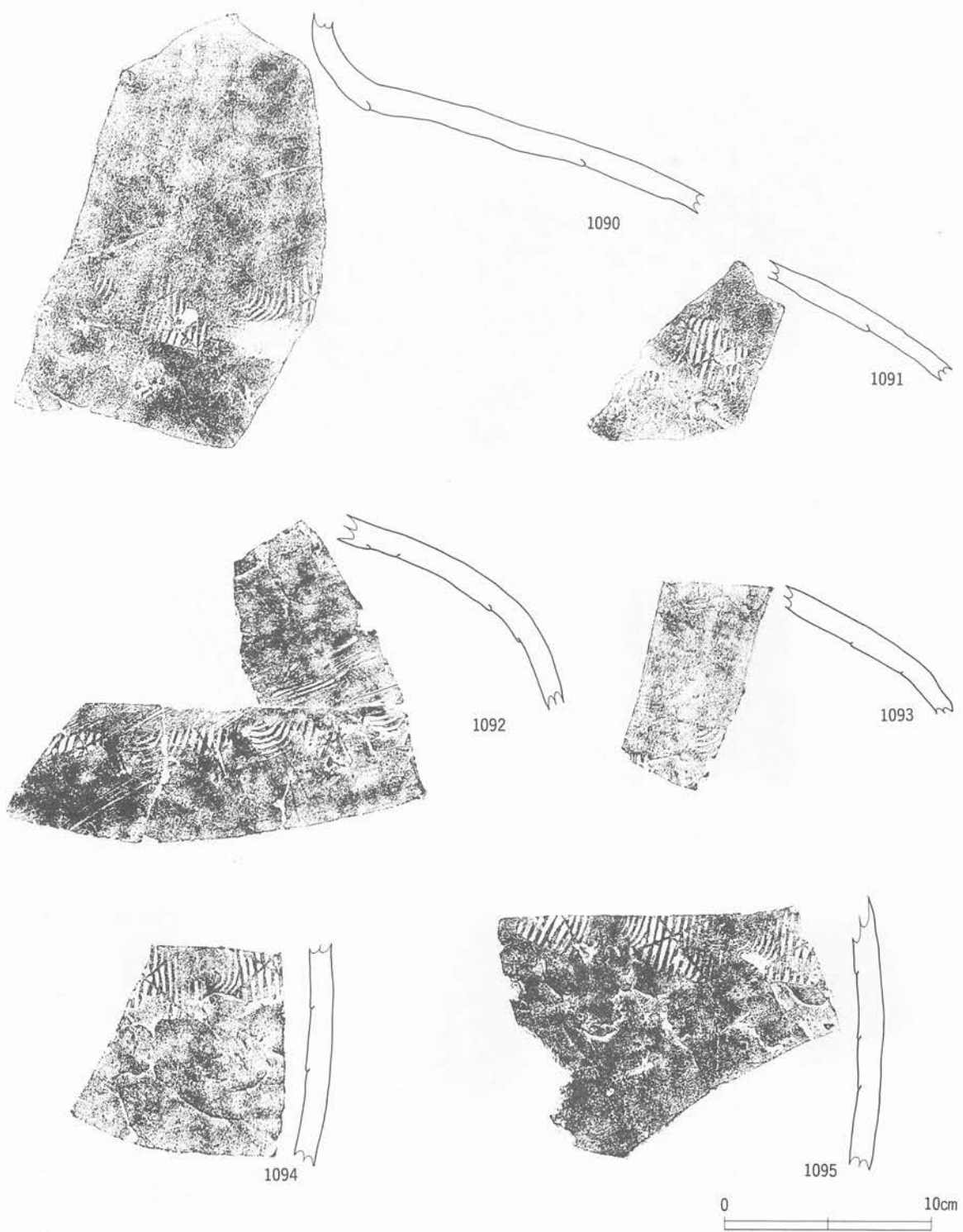
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1078	常滑	甕	体下	15SE3埋土P128、P138	2型式	灰色	1075~1077、1079と同一個体と思われる
1079	〃	〃	〃	15SE3埋土P52、P78	〃	〃	「シンゼ」の痕がある
1080	〃	〃	肩	10次のIID区	〃	外自然釉、内茶褐色	1082~1086と同一個体と思われる
1081	〃	〃	〃	15SE3埋土P99、P218	〃	〃	
1082	〃	〃	〃	15SE3埋土P11	〃	外茶褐色~自然釉	内面茶褐色
1083	〃	〃	体上	15SE3埋土P5	〃	〃	内面茶褐色

第116図 西側調査区常滑産陶器(12)



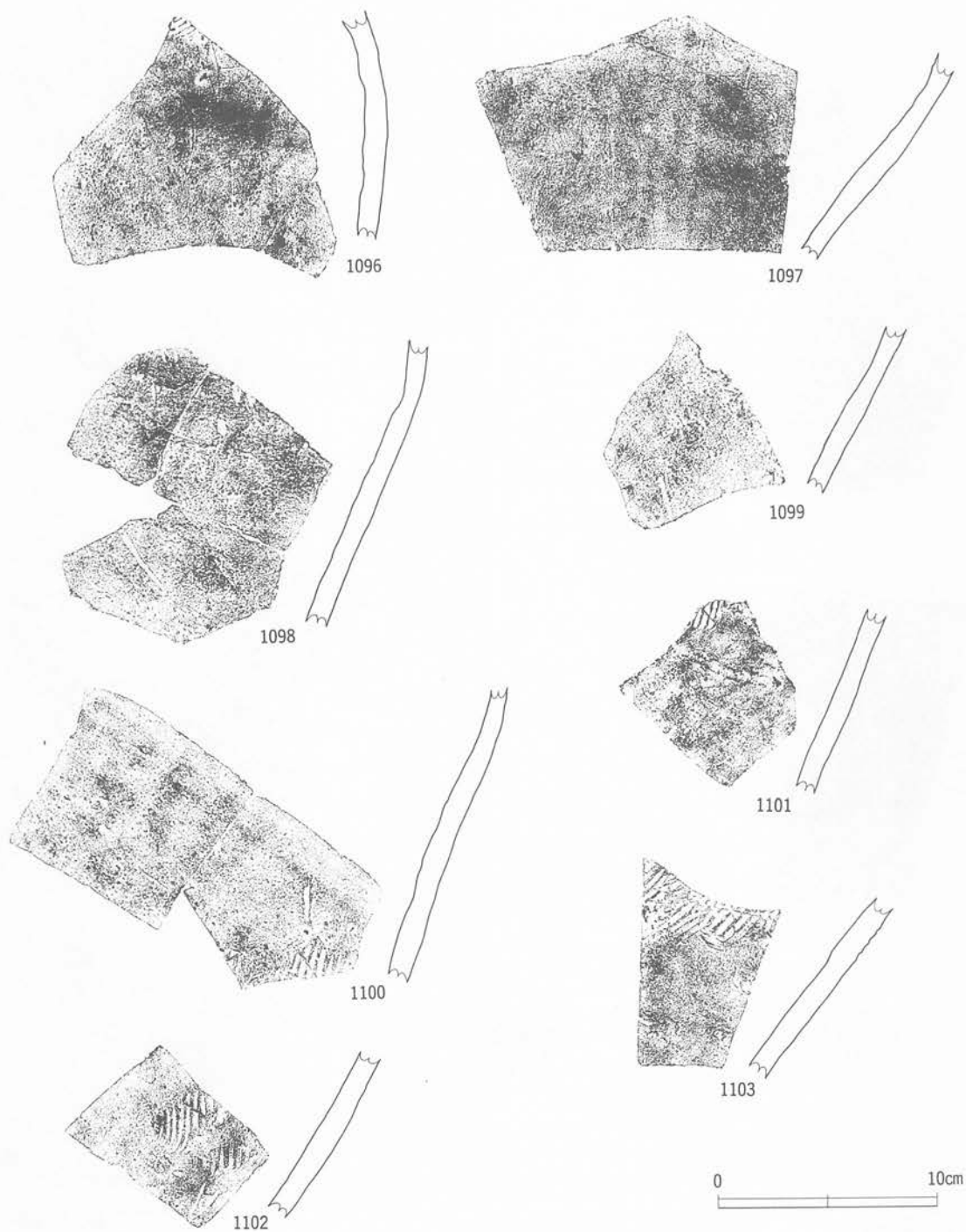
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1084	常滑	甕	体下	15SE3埋土P118、P166、P198	2型式	茶褐色	1082、1083、1085、1086と同一個体と思われる
1085	〃	〃	〃	15SE3埋土P14、P15	〃	〃	
1086	〃	〃	〃	15SK23埋土	〃	〃	
1087	〃	〃	体上	II C区礎石面	〃	褐灰色	1088、1089と同一個体と思われる
1088	〃	〃	体下	10SD3埋土 (I C8f)	〃	〃	断面明赤褐色を呈する
1089	〃	〃	〃	〃	〃	〃	

第117図 西側調査区常滑産陶器(13)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1090	常滑	甕	頸～肩	15SE3埋土P214	3型式	外自然釉、内灰色	1091～1111と同一個体と思われる
1091	〃	〃	肩	15SE5埋土上位	〃	〃	
1092	〃	〃	〃	15SE3埋土P4、P20、P34、P81	〃	灰色	
1093	〃	〃	〃	15SE2埋土P4	〃	〃	
1094	〃	〃	体中	15SE3埋土P22	〃	〃	
1095	〃	〃	体中	15SE5埋土上位	〃	〃	

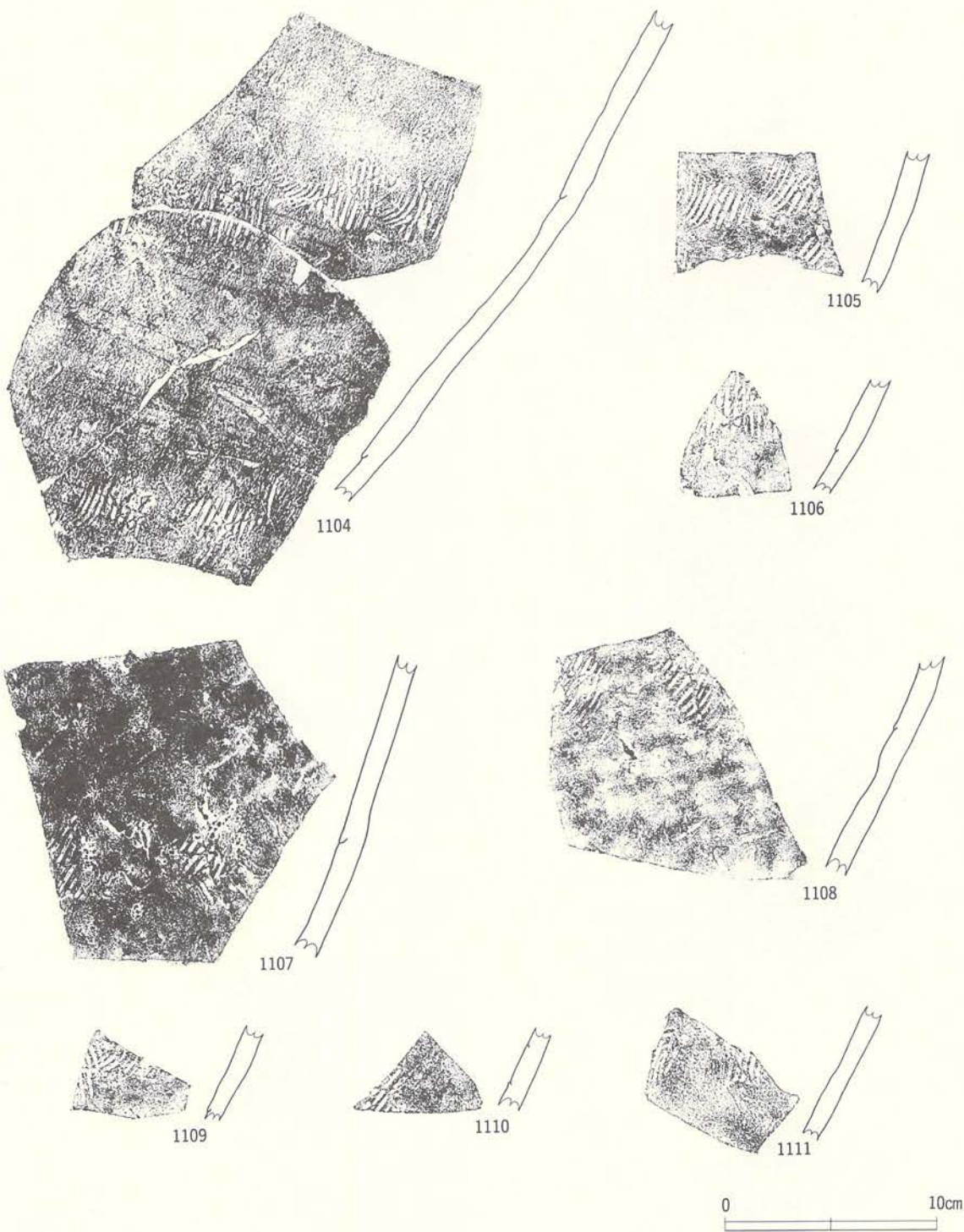
第118図 西側調査区常滑産陶器(14)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1096	常滑	甕	体中	15SE3埋土P18、P61	3型式	褐灰色	1090~1095、1097~1111と同一体と思われる
1097	〃	〃	体下	15SE3埋土P215、P216	〃	外褐灰色、内茶褐色	
1098	〃	〃	〃	15SE3埋土P130、P180、P206	〃	褐灰色	
1099	〃	〃	〃	15SE3埋土P119	〃	〃	
1100	〃	〃	〃	15SE3埋土P96、P100	〃	〃	
1101	〃	〃	〃	15SE3埋土P71	〃	〃	
1102	〃	〃	〃	15SE3埋土P6	〃	〃	
1103	〃	〃	〃	15SE3埋土P213	〃	外褐灰色、内茶褐色	

第119図 西側調査区常滑産陶器(15)

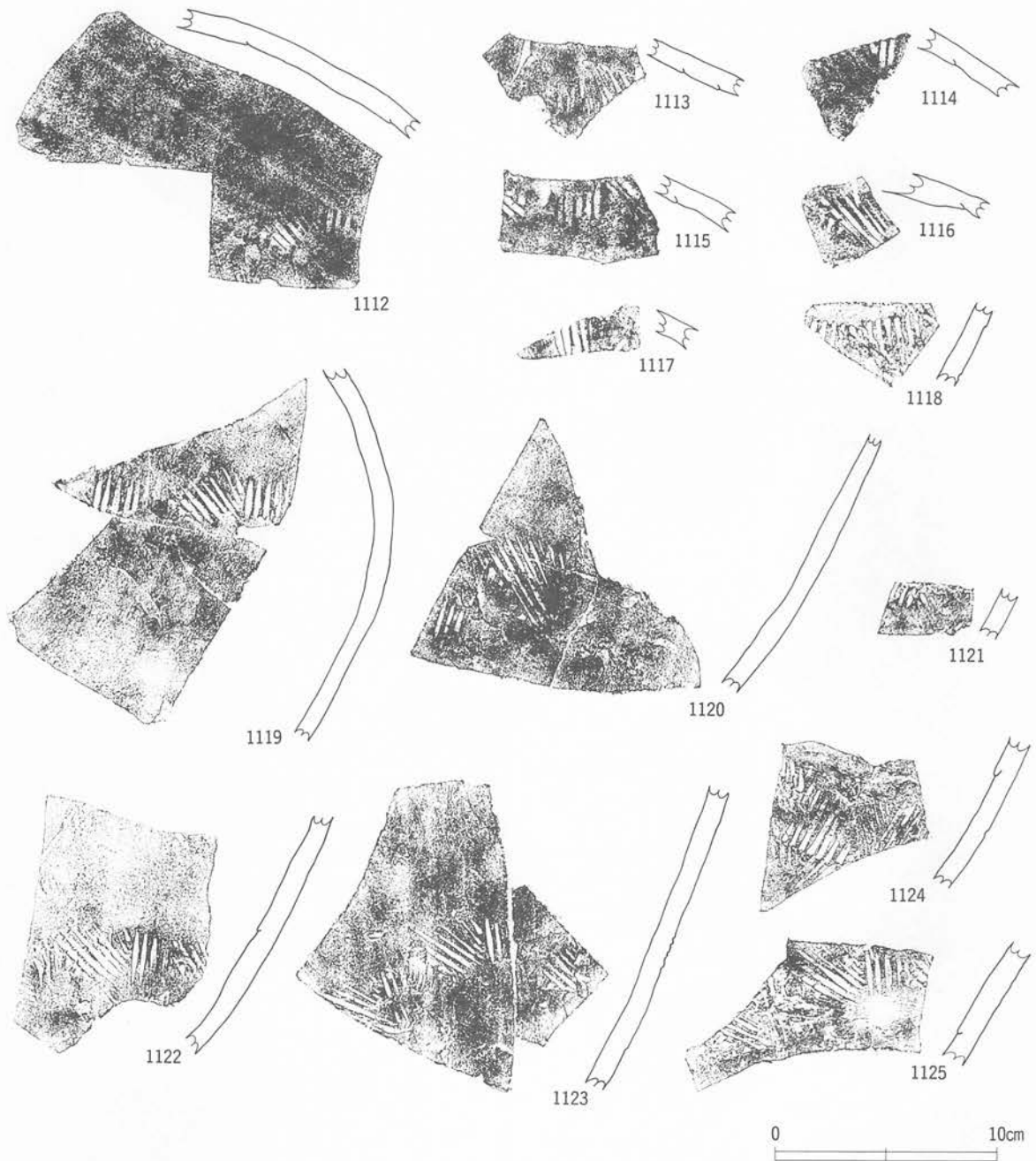




番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1104	常滑	甕	体下	15SE3埋土	3型式	茶褐色	15SE3P52、P160、P165、P222
1105	〃	〃	〃	IID4cV層	〃	灰色	1090~1104、1106~1111と同一体と思われる
1106	〃	〃	〃	IID0a	〃	灰色	
1107	〃	〃	〃	IID5cV層	〃	灰色	
1108	〃	〃	〃	15SD20埋土	〃	灰色	
1109	〃	〃	〃	IID5bIV層	〃	〃	
1110	〃	〃	〃	IID6bIV層	〃	〃	
1111	〃	〃	〃	IID8c表土	〃	茶褐色	

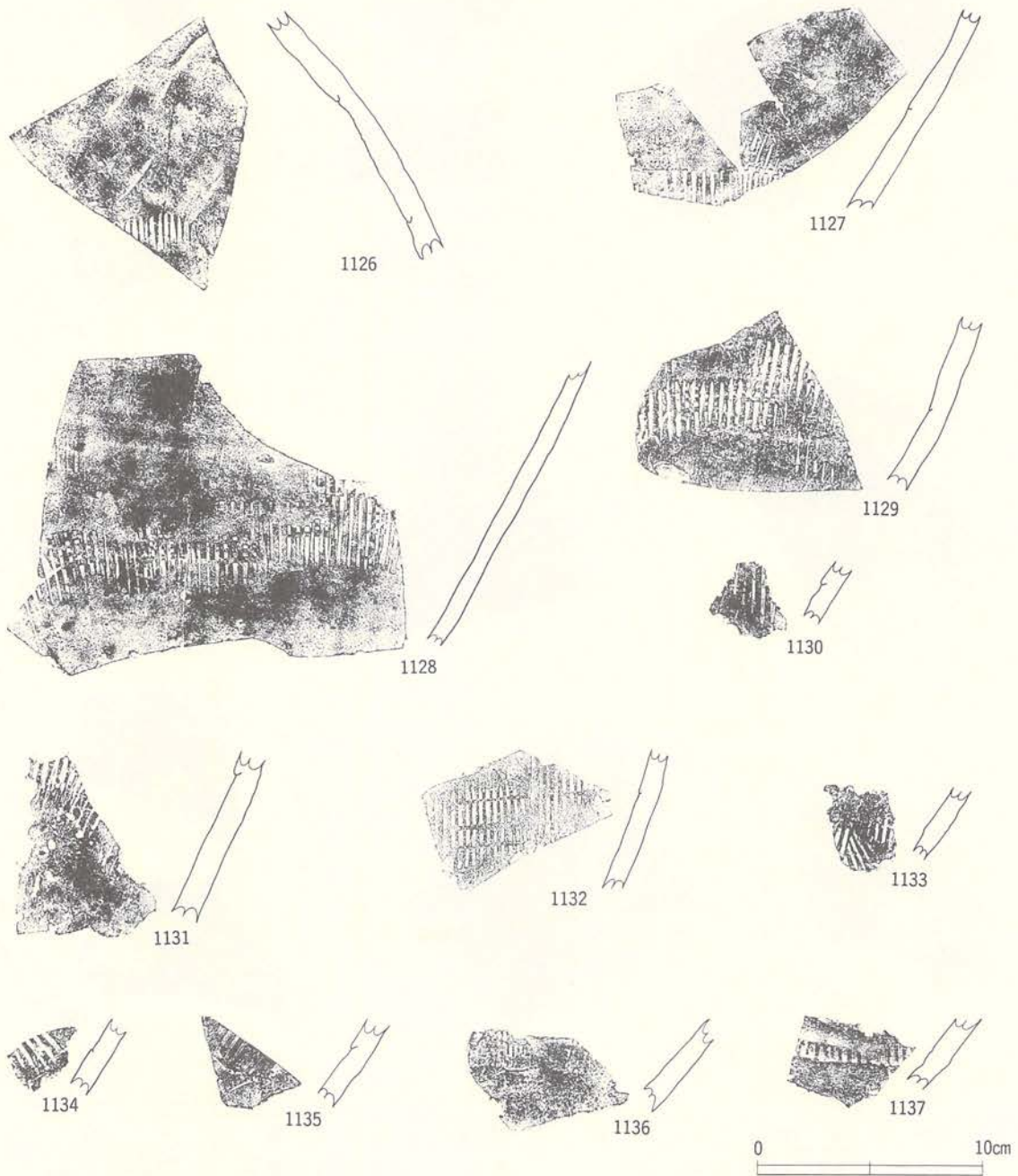
第120図 西側調査区常滑産陶器(16)





番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1112	常滑	甕	肩	15SE2 2層	3型式	外自然釉、内橙色	15SE5埋土上部からも出土 1073~1125と同一個体
1113	〃	〃	〃	10SD6埋土	〃	黒褐色	
1114	〃	〃	〃	IIC7j表土	〃	外自然釉、内橙色	
1115	〃	〃	〃	IID1cV層	〃	〃	
1116	〃	〃	〃	15SE5埋土上部	〃	〃	
1117	〃	〃	〃	10P15埋土	〃	〃	
1118	〃	〃	体下	IID2aIII層	〃	赤褐色	
1119	〃	〃	体中	IID5cIII層	〃	〃	
1120	〃	〃	体下	IID5cV層	〃	〃	
1121	〃	〃	〃	IID2cIII層	〃	〃	
1122	〃	〃	〃	IID5cV層	〃	外灰色、内自然釉	
1123	〃	〃	〃	IID5bIV層	〃	外赤褐色、内自然釉	大きい方の破片の表面を擦っている
1124	〃	〃	〃	IID5cV層	〃	赤褐色	
1125	〃	〃	〃	IID4cIV層	〃	外灰色、内自然釉	

第121図 西側調査区常滑産陶器(17)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1126	常滑	甕	体上	IID3dIII層	2型式	灰色	内面指によるナデあり
1127	〃	〃	体下	15SE3埋土P132	〃	外褐色、内灰色	内面に白い斑点あり、1128、1129と同一か
1128	〃	〃	〃	IID5bV層	〃	〃	〃
1129	〃	〃	〃	15SK31埋土	〃	外褐色、内自然釉	
1130	〃	〃	〃	10次のIC区	〃	赤褐色	
1131	〃	〃	〃	IIC9b攪乱中	〃	外茶褐色、内自然釉	
1132	〃	〃	〃	15SD20埋土	〃	灰色	
1133	〃	〃	〃	10次のIC区	〃	茶褐色	
1134	〃	〃	〃	15SD20埋土	〃	灰色	
1135	〃	〃	〃	15SE3埋土	〃	外茶褐色、内暗灰色	
1136	〃	〃	〃	IC8e	〃	灰色	
1137	〃	〃	〃	IC6dIII層	〃	外面赤褐色～灰色	内面自然釉

第122図 西側調査区常滑産陶器(18)

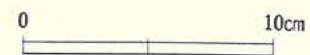
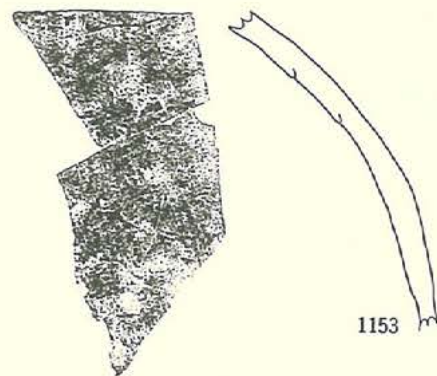
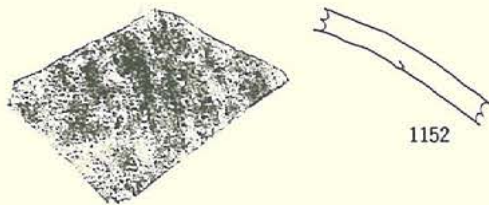
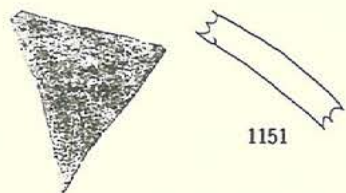
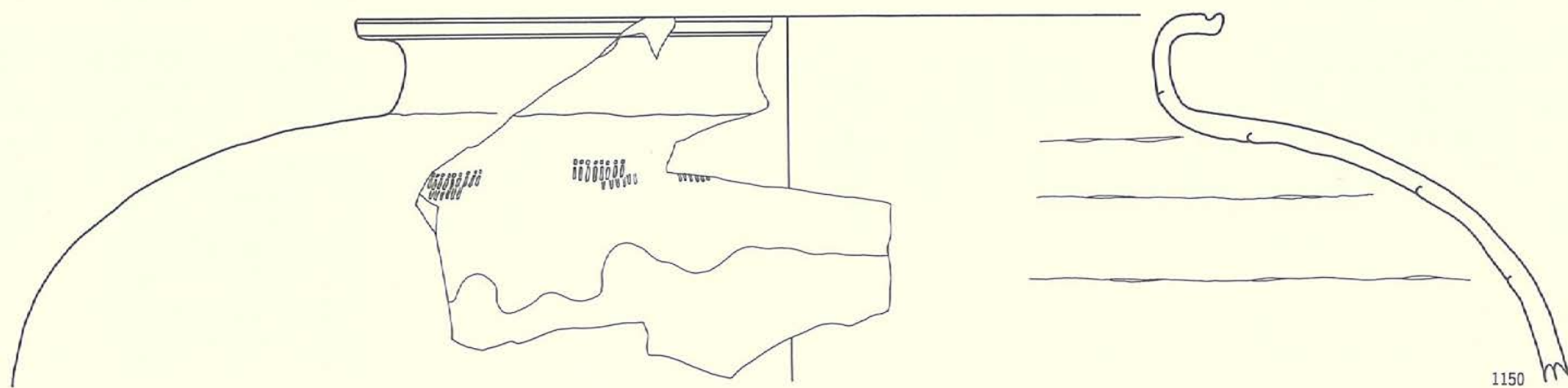




番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1138	常滑	甕	口～体	IID5bV層	3型式		1139～1149と同一個体と思われる
1139	〃	〃	口縁	15SD25埋土	〃	自然釉	
1140	〃	〃	肩	15SE5埋土上部	〃	外自然釉、内暗褐色	
1141	〃	〃	体上	IID8c表土	〃	〃	
1142	〃	〃	体下	15SE3P199、P217	〃	外茶褐色、内自然釉	外面に窯体付着
1143	〃	〃	体下	I C7e	〃	外茶褐色、内自然釉	内面暗褐色
1144	〃	〃	肩～体上	15SE3埋土P29、P122	3型式	外自然釉、茶褐色	内面茶褐色 15SK30埋土上部、IID5bIV層からも出土
1145	〃	〃	体下	IIIC9i表土	〃	外赤褐色、内暗褐色	
1146	〃	〃	〃	IID5bV層	〃	外自然釉、茶褐色	内面うすく自然釉
1147	〃	〃	〃	15SE3埋土P197	〃	外赤褐色、内自然釉	
1148	〃	〃	〃	15SE3埋土P174	〃	〃	
1149	〃	〃	〃	15SE3埋土P192、P229	〃	〃	「シンゼ」の痕跡あり

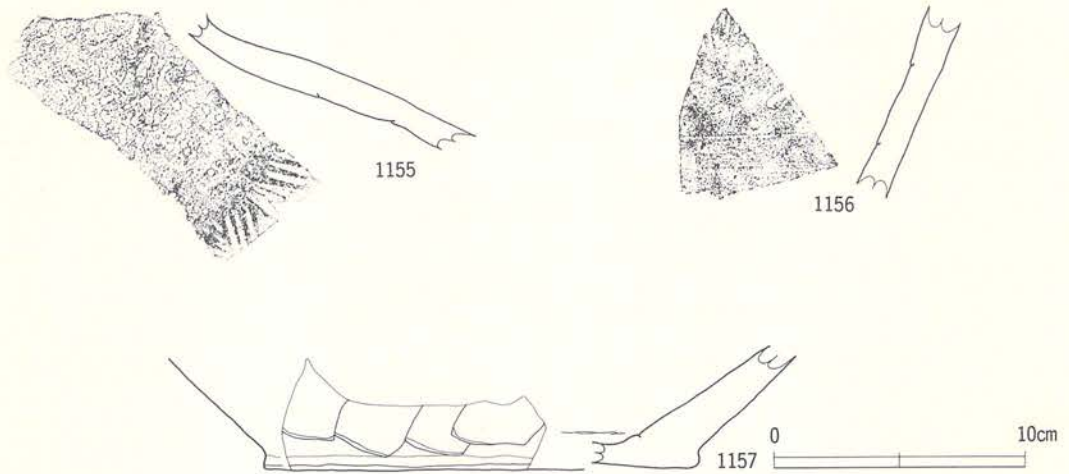
第123図 西側調査区常滑産陶器(19)





番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1150	常滑	甕	口～肩	15SE3埋土P46、P167、P202	3型式	外赤褐色、自然釉	内面褐色、1151～1154と同一個体と思われる
1151	〃	〃	体上	15SK29埋土	〃	外自然釉、内褐色	
1152	〃	〃	〃	15SE5埋土上部	〃	〃	
1153	〃	〃	〃	15SK29埋土	〃	外赤褐色、自然釉	内面褐色、10SD3埋土(II C8g)からも出土
1154	〃	〃	〃	10SD4埋土(II D3d)	〃	外自然釉、内褐色	

第124図 西側調査区常滑産陶器(20)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1155	常滑	甕	肩	15SD20礫層	3型式	外自然釉、内橙色	1112~1125と同一個体と思われる
1156	//	//	体下	10SD6埋土(II D5b)	//	灰白色	
1157	//	//	底	II D5b V層	//	外赤褐色、内自然釉	外底面に砂少量附着

第125図 西側調査区常滑産陶器(2)

甕の出土量は他の器種に比べると非常に多い。これらの破片の大部分は15 S E 3の埋土と、その近くの西側調査区の東側の旧河道に向かって下がる部分から出土している。2型式、3型式に属するものがそれぞれあるが、2型式に属する方が多い。図示した数は109点である。1049の底部には窯体が付着しており、平らに置くことができない。このような甕は埋設して使用するであろうから差し支えないであろう。1138は押印帯がきれいに並んでいる。やや厚手で3型式の典型といえよう。1150は口唇部が平らで次の4型式に近い形態をしている。3型式であってもその後半に属するのであろう。

#### 渥美 (第126~139図 写真図版89~102)

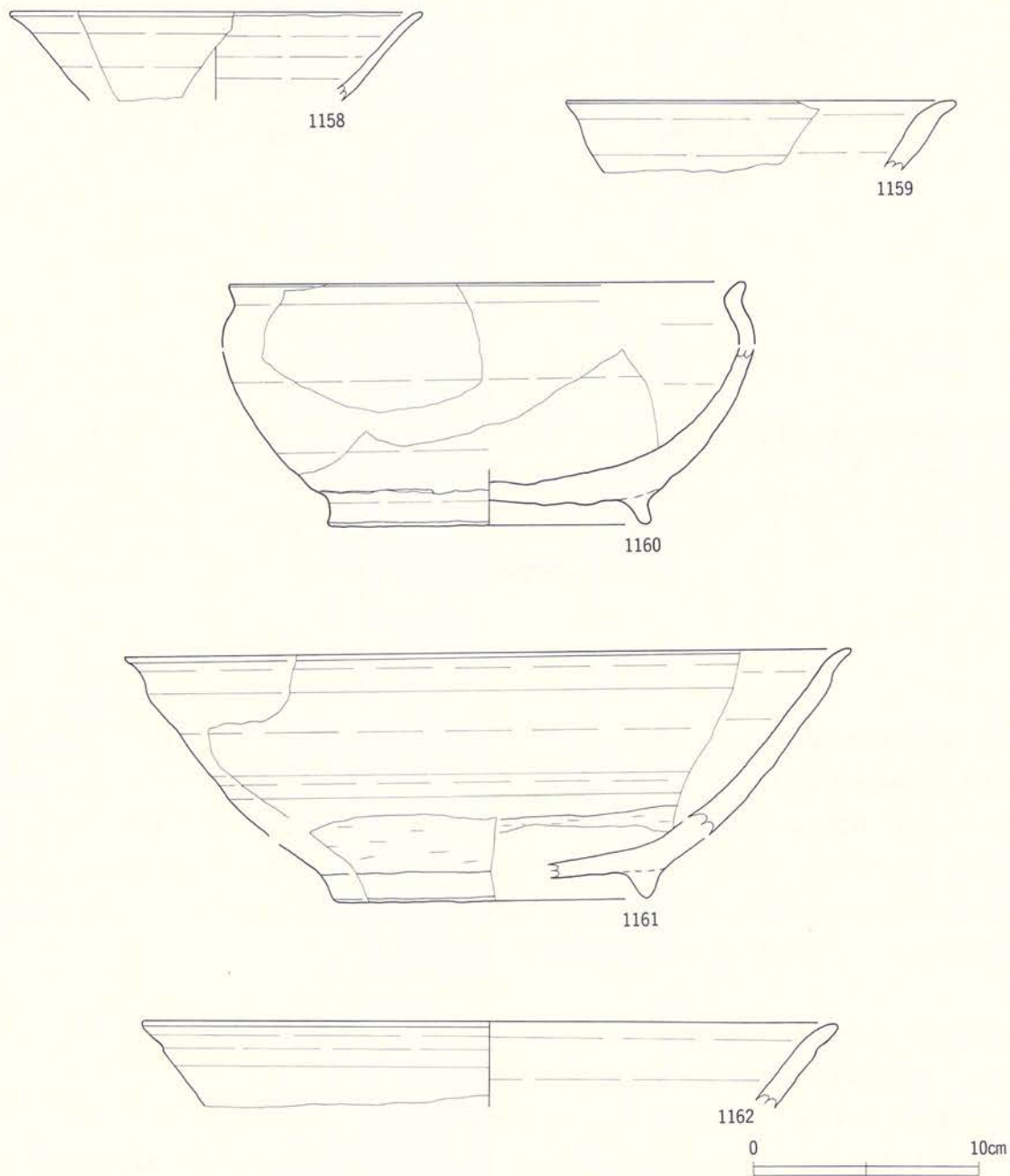
出土した渥美産陶器には山茶碗、片口鉢、壺、甕がある。

山茶碗は1158の1点のみの出土である。口縁部がやや外反する。

片口鉢は口縁部上端と口唇部の間がやや窪むものが多い。また常滑産のものとは異なり底辺部に回転ヘラケズリが施されないものがほとんどである。1160は口縁部が内湾し古手の様相を示す。12世紀前半の所属であろうか。

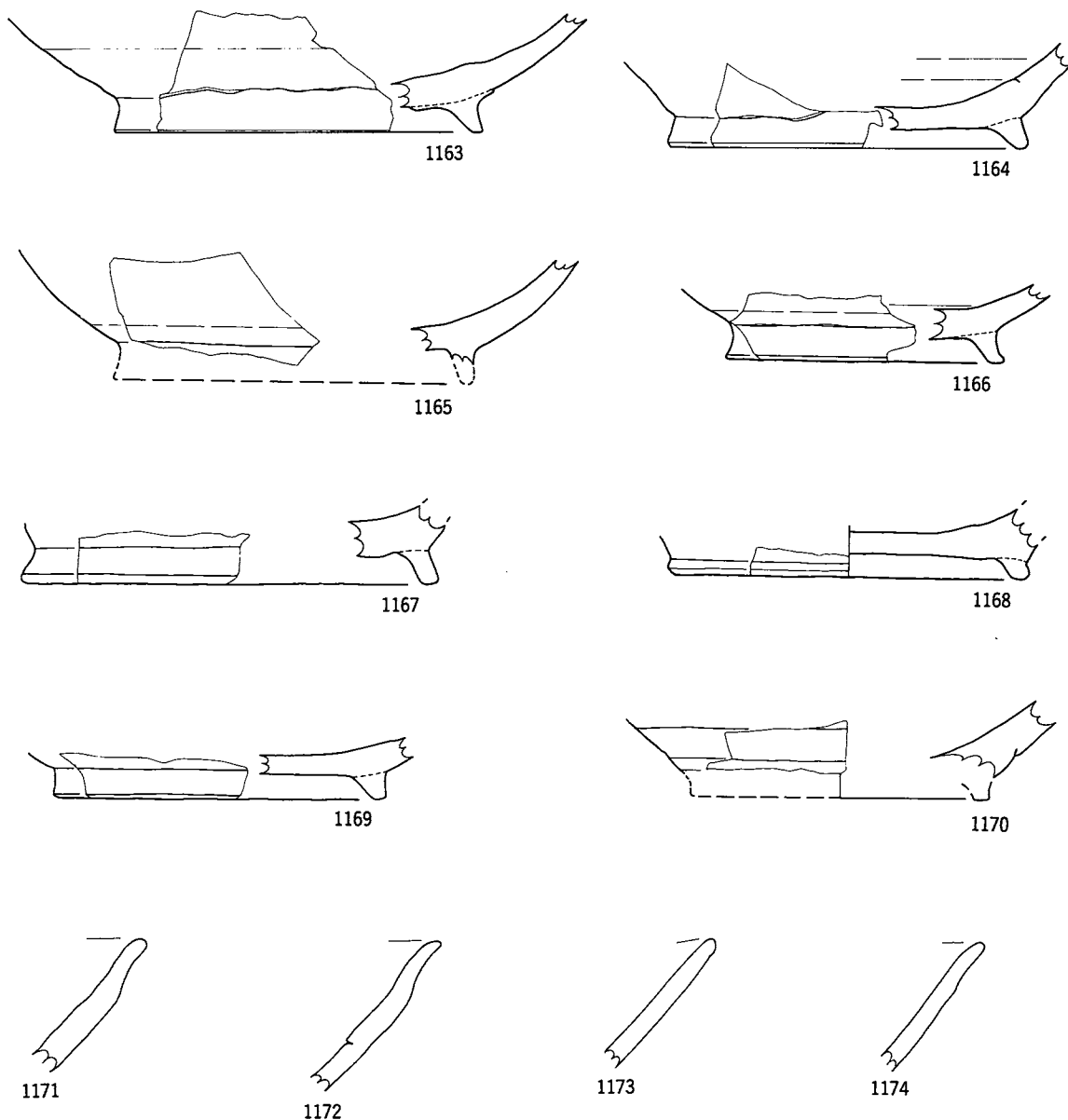
壺は全体形がわかる個体はないが、様々な大きさのものがある。1182は体部上半に袈裟襷文が施されている。

甕は常滑産陶器と同様に他の器種よりも多い量が出土している。出土位置も常滑産の甕と同様に15 S E 3とその周辺から多く出土している。1183は複合押印がランダムに施されている。これと同一個体と思われる1184には「×」という線刻が刻まれている。また押印を施す前に、工具の木目が残る調整(土師器の調整のハケメに似る)を施しているもの、また体部上半に灰釉を刷毛塗りしているものが多い。



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1158	渥美	山茶碗	口縁	I C5eIII層	12C	灰色	内面に部分的に釉
1159	〃	片口鉢	〃	15SK3c 3層	〃	外灰色、内自然釉	厚いので片口鉢とした
1160	〃	〃	完存	15SK45 1層	12C前半	灰色	内面磨耗、胎土に粗粒混じる
1161	〃	〃	完存	15SK45 1層	12C	外灰色、内自然釉	内底面磨耗
1162	〃	〃	口縁	15SK45 1層	〃	外自然釉、内灰褐色	

第126図 西側調査区渥美産陶器(1)

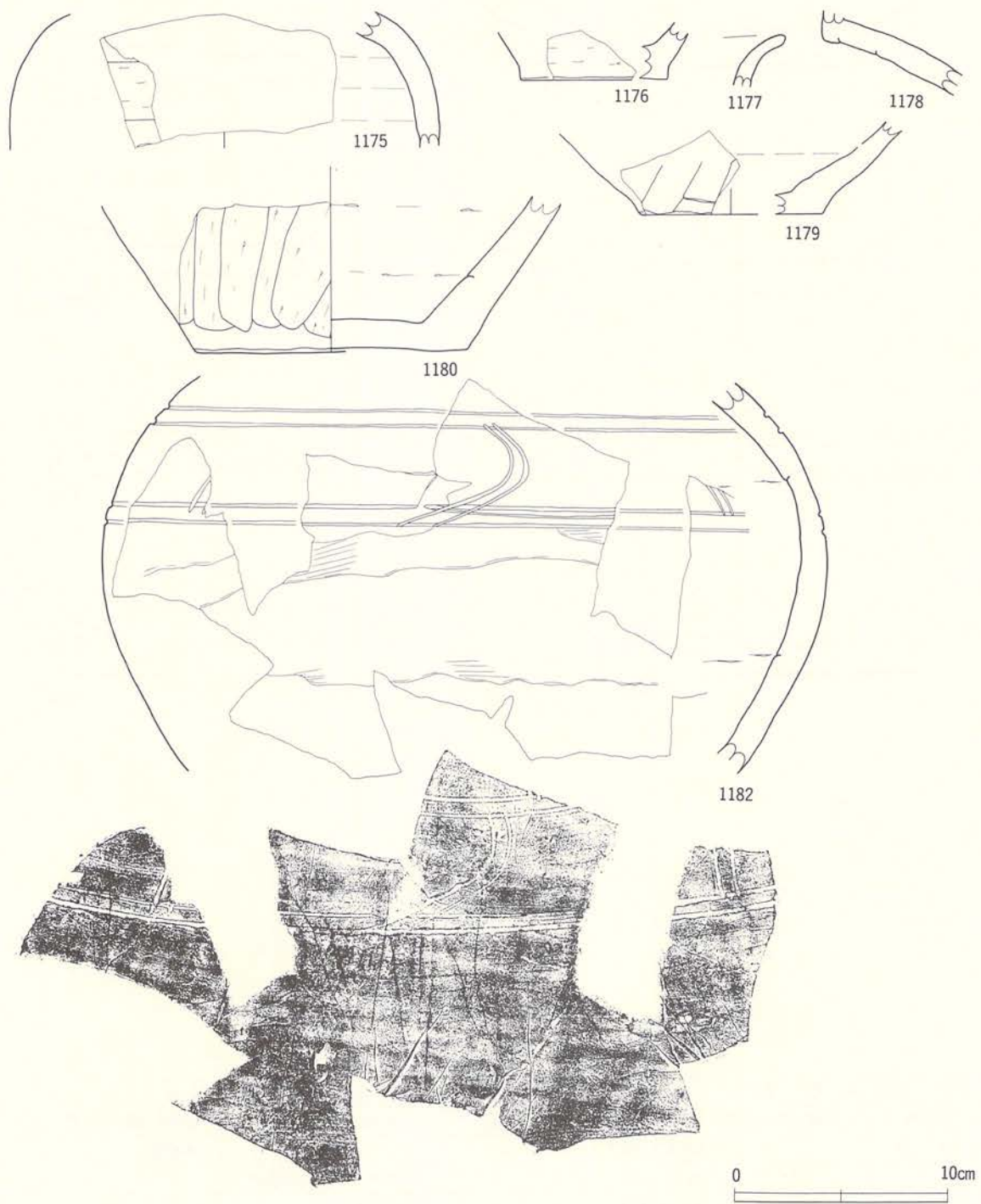


0 10cm

番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1163	渥美	片口鉢	体～底部	IID5cV層	12C	灰色	内面磨耗、体部下半に軽いケズリ
1164	〃	〃	〃	15SK31埋土	〃	〃	内面磨耗
1165	〃	〃	〃	IIC9iIII層	〃	外灰色、内浅黄橙色	〃
1166	〃	〃	〃	IC8fIII層	〃	浅黄橙色	〃
1167	〃	〃	底部	15SE9埋土上位	〃	灰色	〃
1168	〃	〃	〃	IC区	〃	褐灰色	内面磨耗、胎土に砂多量混入
1169	〃	〃	〃	IID6bIII～IV層	〃	灰色	内面磨耗、外底面に灰付着
1170	〃	〃	〃	10次調査区内	〃	灰色	内面磨耗
1171	〃	〃	口縁	IC8dIII層	〃	浅黄橙色	
1172	〃	〃	〃	IC区	〃	〃	
1173	〃	〃	〃	IC区	〃	灰色	
1174	〃	〃	〃	IC7e	〃	〃	

第127図 西側調査区渥美産陶器(2)

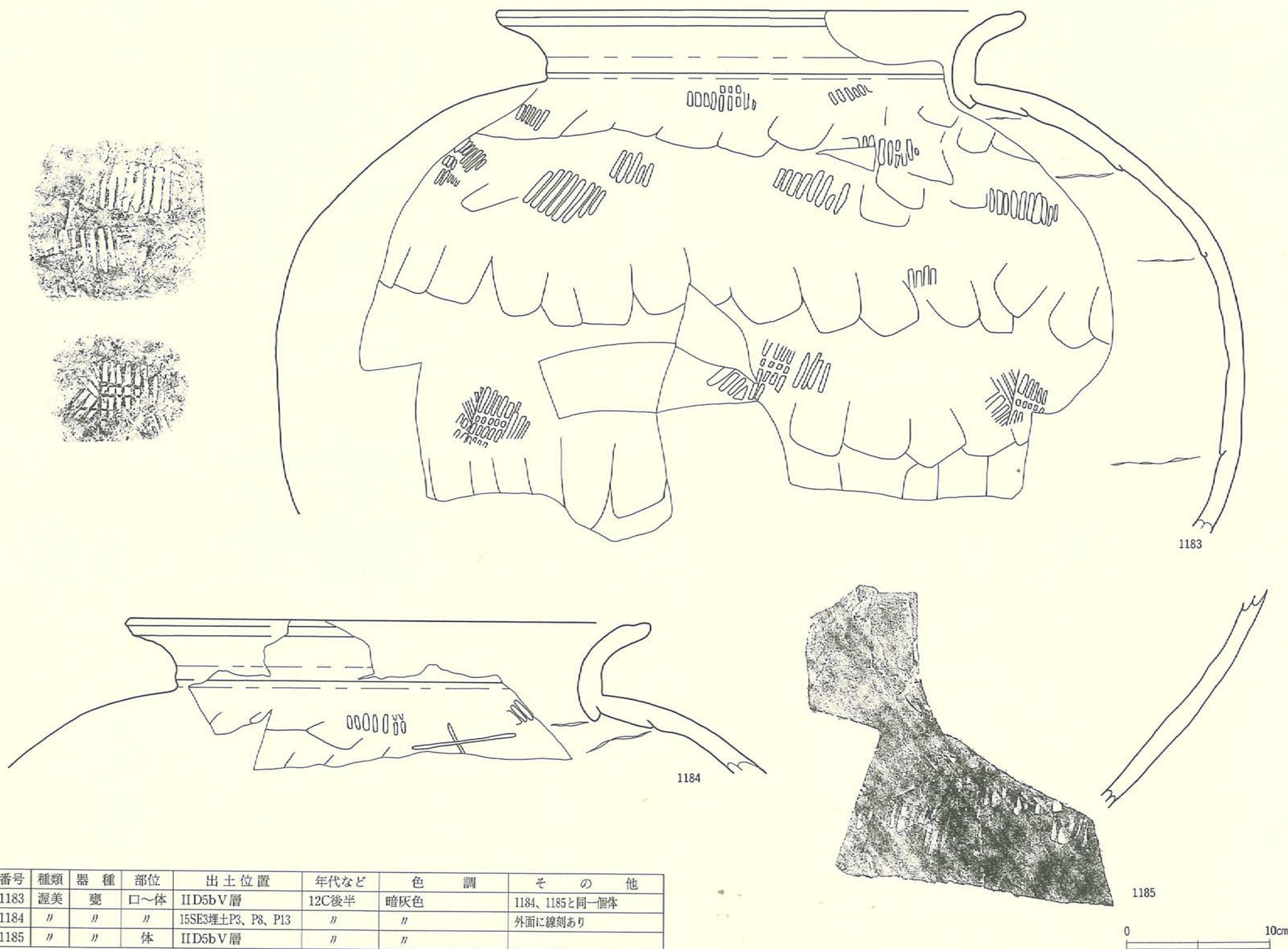




番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1175	渥美	壺	肩	15SE3埋土P149	12C	外自然釉、内灰色	
1176	〃	〃	底	15SK30埋土上位	〃	外黒褐色、内自然釉	
1177	〃	〃	口縁	II C6i表土	〃	外黒褐色、内自然釉	
1178	〃	〃	肩	IID3bIV層	〃	外黒褐色、部分的に釉	内面黒褐色
1179	〃	〃	底	10SD3埋土(I C7h)	〃	外褐色、内茶褐色	
1180	〃	〃	底	15SD25埋土	〃	外灰色、内浅黄橙色	内底面に自然釉付着
1182	〃	〃	体	10SD3埋土(I C9e)	〃	外上自然釉、下灰褐色	内面灰褐色、体部上半に袈裟襷文

第128図 西側調査区渥美産陶器(3)

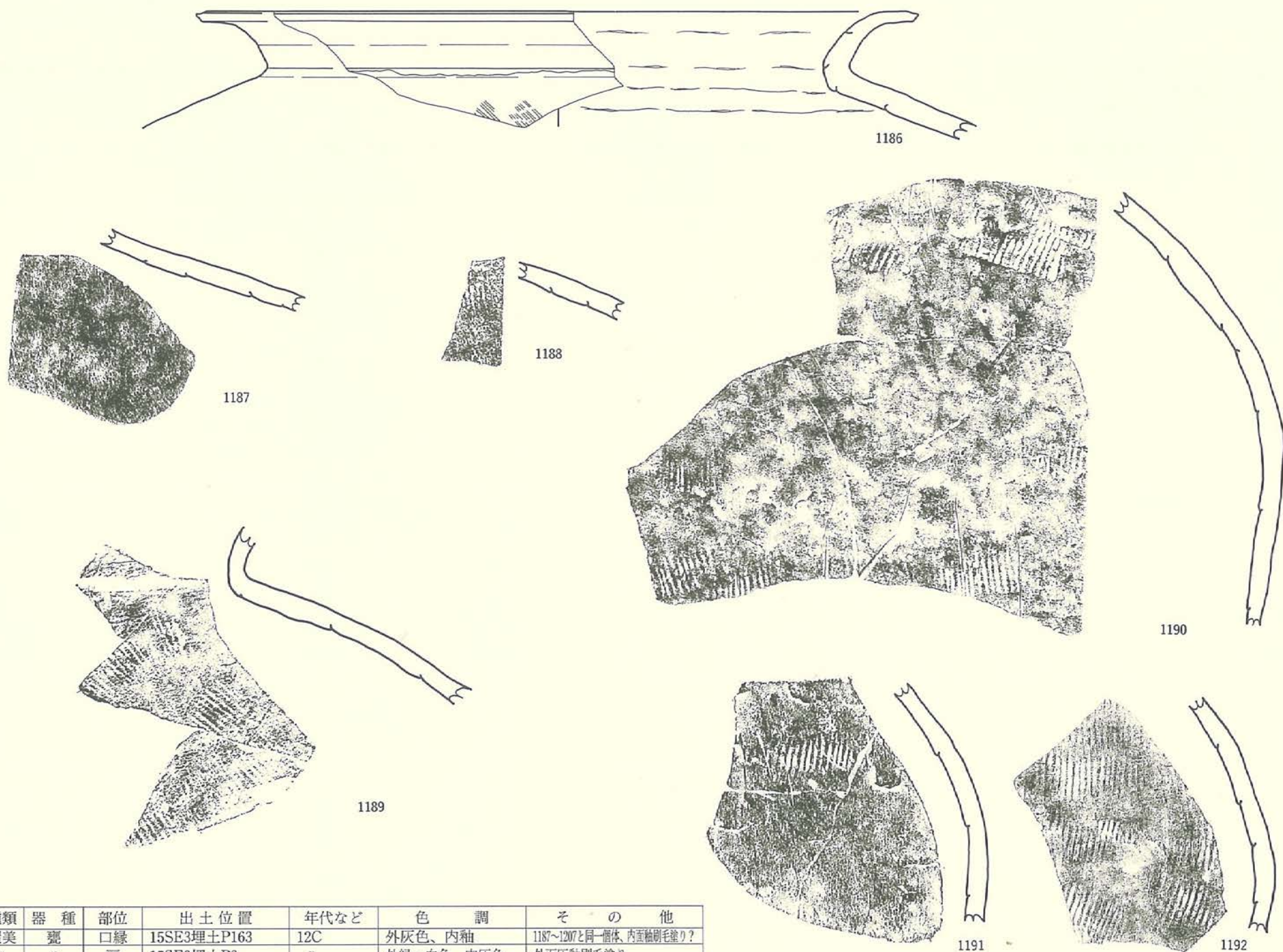




番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1183	渥美	甕	口～体	IID5bV層	12C後半	暗灰色	1184、1185と同一個体
1184	〃	〃	〃	15SE3埋土P3、P8、P13	〃	〃	外面に線刻あり
1185	〃	〃	体	IID5bV層	〃	〃	

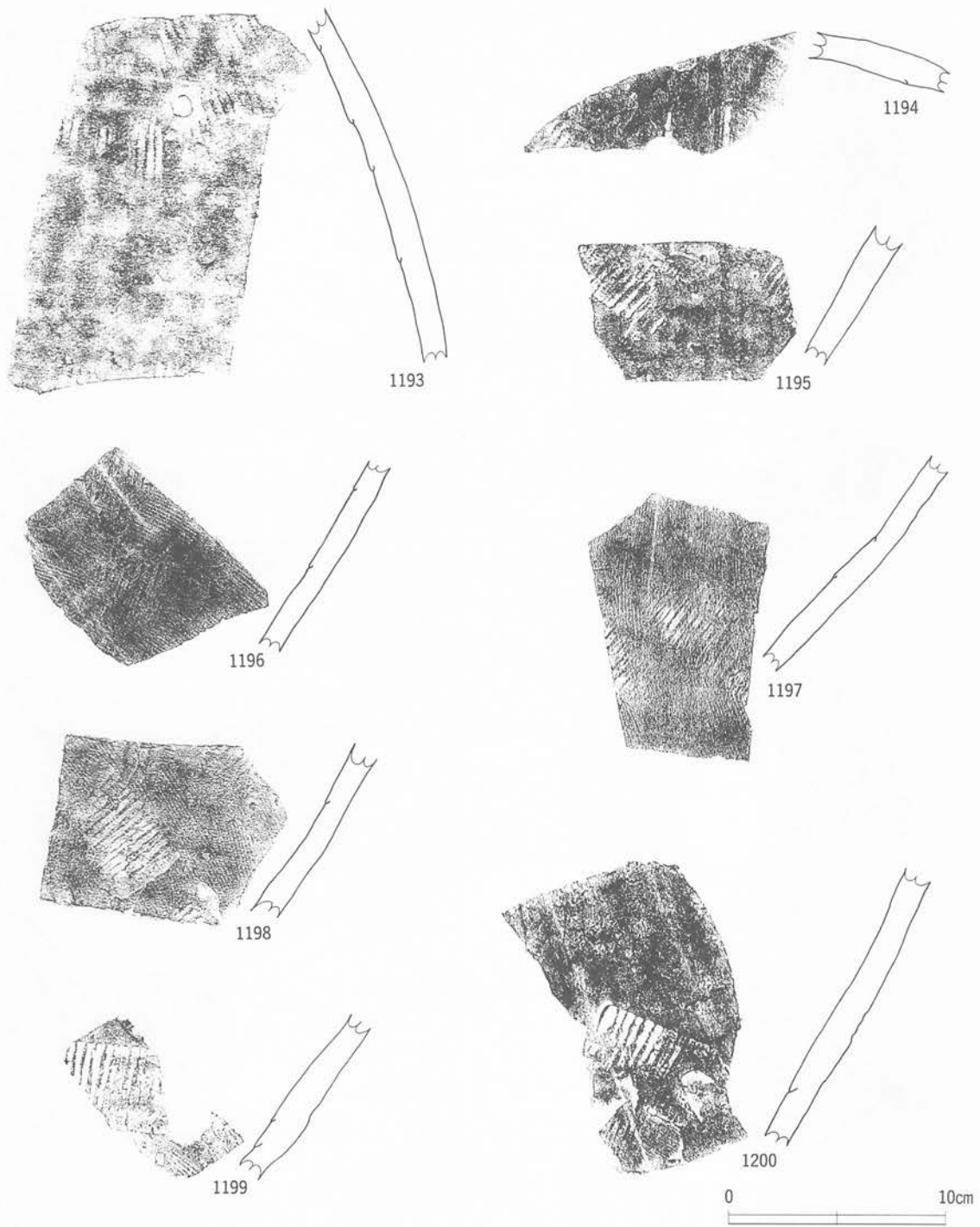
第129図 西側調査区渥美産陶器(4)





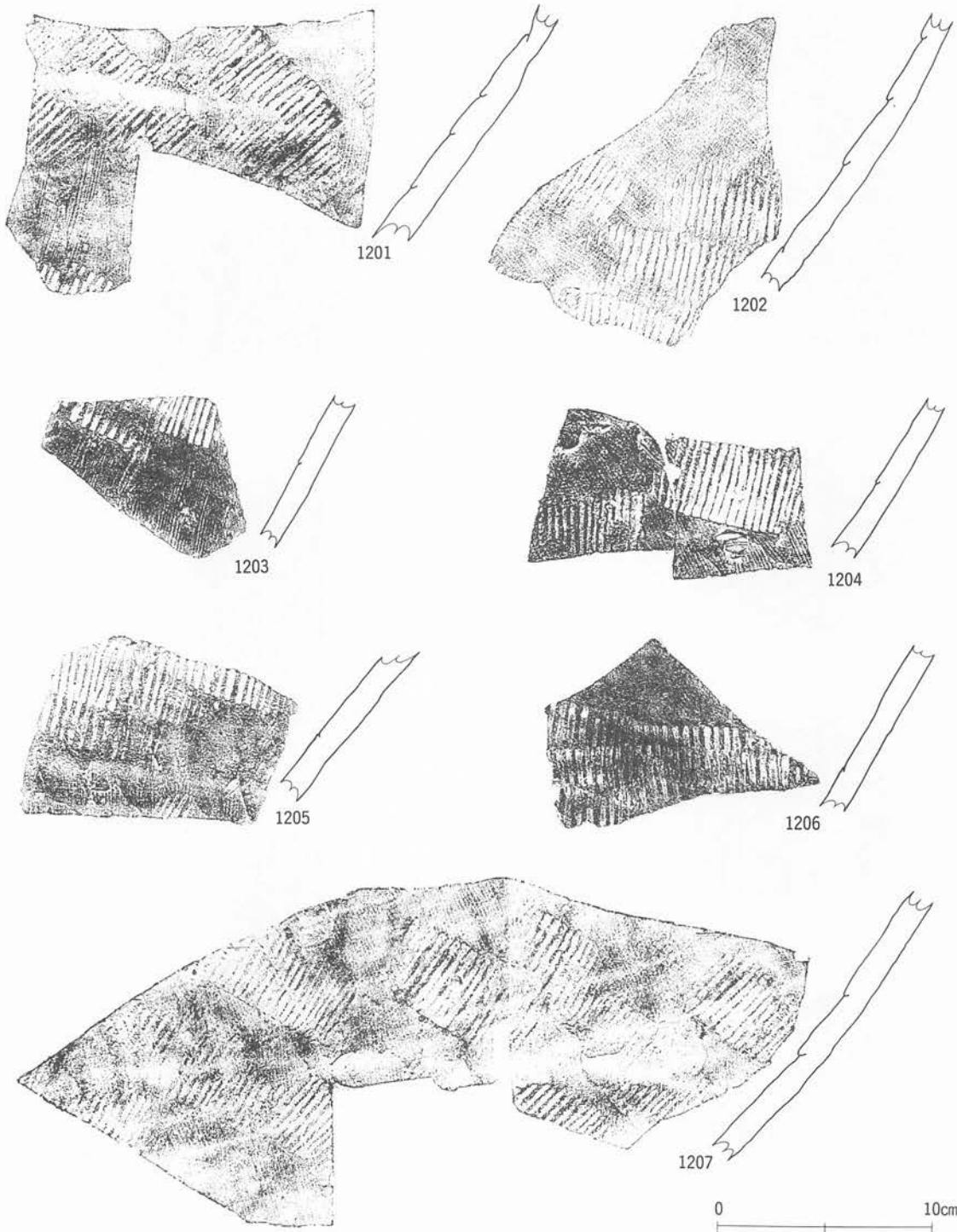
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1186	渥美	甕	口縁	15SE3埋土P163	12C	外灰色、内釉	1187~1207と同一個体、内面釉刷毛塗り?
1187	〃	〃	肩	15SE3埋土P2	〃	外縁~白色、内灰色	外面灰釉刷毛塗り
1188	〃	〃	〃	10SD3埋土(I C9e)	〃	〃	〃
1189	〃	〃	頸	15SE3埋土P204	〃	〃	外面灰釉刷毛塗り、10SD11埋土からも出土
1190	〃	〃	体上	15SE3埋土P131、P169、P185	〃	〃	外面灰釉刷毛塗り、IID4cV層からも出土
1191	〃	〃	〃	15SE3埋土P28、P172、P186	〃	〃	外面上半灰釉刷毛塗り
1192	〃	〃	〃	IID4cV層	〃	〃	〃

第130図 西側調査区渥美産陶器(5)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1193	渥美	甕	体上	15SE3埋土P210	12C	外緑～白色、内灰色	外面灰釉刷毛塗り、1186～1192、1194～1207と同一
1194	〃	〃	肩	IID5bV層	〃	〃	〃
1195	〃	〃	体下	15SD25埋土	〃	灰色	
1196	〃	〃	〃	15SE3埋土P10	〃	〃	外面ハケメ調整の後に押印
1197	〃	〃	〃	IID5bIV層	〃	〃	〃
1198	〃	〃	〃	15次のIID区の排土	〃	〃	〃
1199	〃	〃	〃	10次調査区	〃	〃	〃
1200	〃	〃	〃	IIC7c表土	〃	〃	〃

第131図 西側調査区渥美産陶器(6)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1201	渥美	甕	体下	15SE3埋土P207、P223	12C	暗灰色	1186~1200、1202~1207と同一個体 ハケメ調整の後に押印
1202	〃	〃	〃	15SE3埋土P144	〃	灰色	ハケメ調整の後に押印
1203	〃	〃	〃	15SE3埋土P175	〃	〃	〃
1204	〃	〃	〃	15SE3埋土P24、P146	〃	〃	〃
1205	〃	〃	〃	15SE3埋土P36	〃	〃	〃
1206	〃	〃	〃	10SE3埋土(I C9e)	〃	〃	〃
1207	〃	〃	〃	15SE3埋土P123、P219	〃	〃	ハケメ調整の後に押印、IID5bV層からも出土

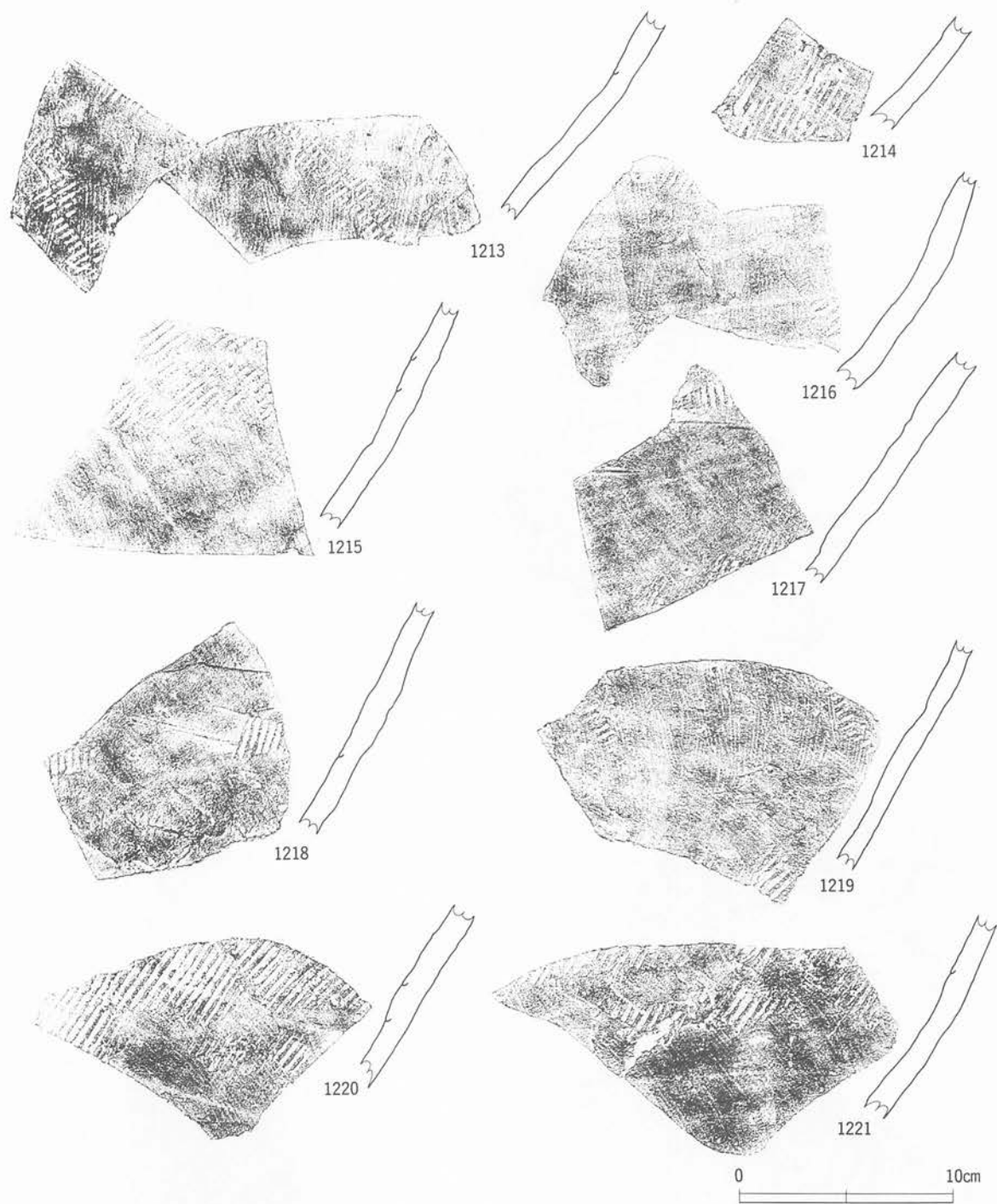
第132図 西側調査区渥美産陶器(7)





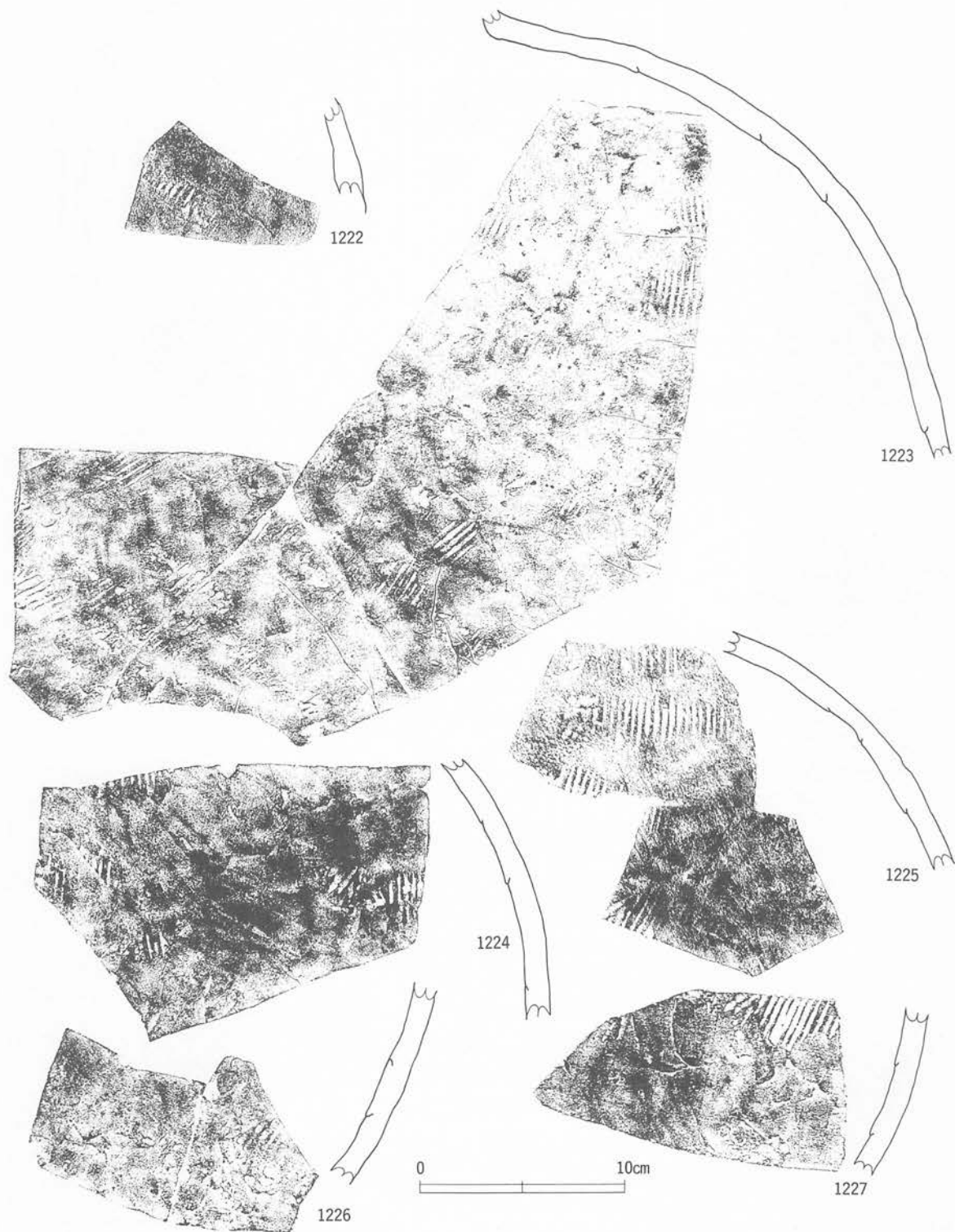
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1208	渥美	甕	体部	15SE3埋土P139、P164、P191	12C	灰色	1209～1221と同一個体と思われる SE3P205もあり
1209	〃	〃	体下	15SE3埋土P140	〃	〃	
1210	〃	〃	〃	15SE3埋土P89	〃	〃	
1211	〃	〃	〃	15SE3埋土P224	〃	外灰色、内自然釉	「シンゼ」の痕がある
1212	〃	〃	〃	10SD7A埋土	〃	灰色	外面を擦っている

第133図 西側調査区渥美産陶器(8)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1213	渥美	甕	体下	15SE3埋土P114、P133	12C	灰色	1208~1212、1214~1221と同一、ハケメの後に押印
1214	〃	〃	〃	IIC区礎石面	〃	〃	
1215	〃	〃	〃	15SK29底面	〃	〃	ハケメの後に押印
1216	〃	〃	〃	15SE3埋土P77	〃	〃	IID3dII層からも出土、ハケメの後に押印
1217	〃	〃	〃	15SE3埋土P129	〃	〃	ハケメの後に押印
1218	〃	〃	〃	15SE3埋土 4層	〃	〃	〃
1219	〃	〃	〃	15SE3埋土P229	〃	〃	〃
1220	〃	〃	〃	15SE3埋土P108	〃	〃	〃
1221	〃	〃	〃	15SE3埋土P125、P183	〃	〃	〃

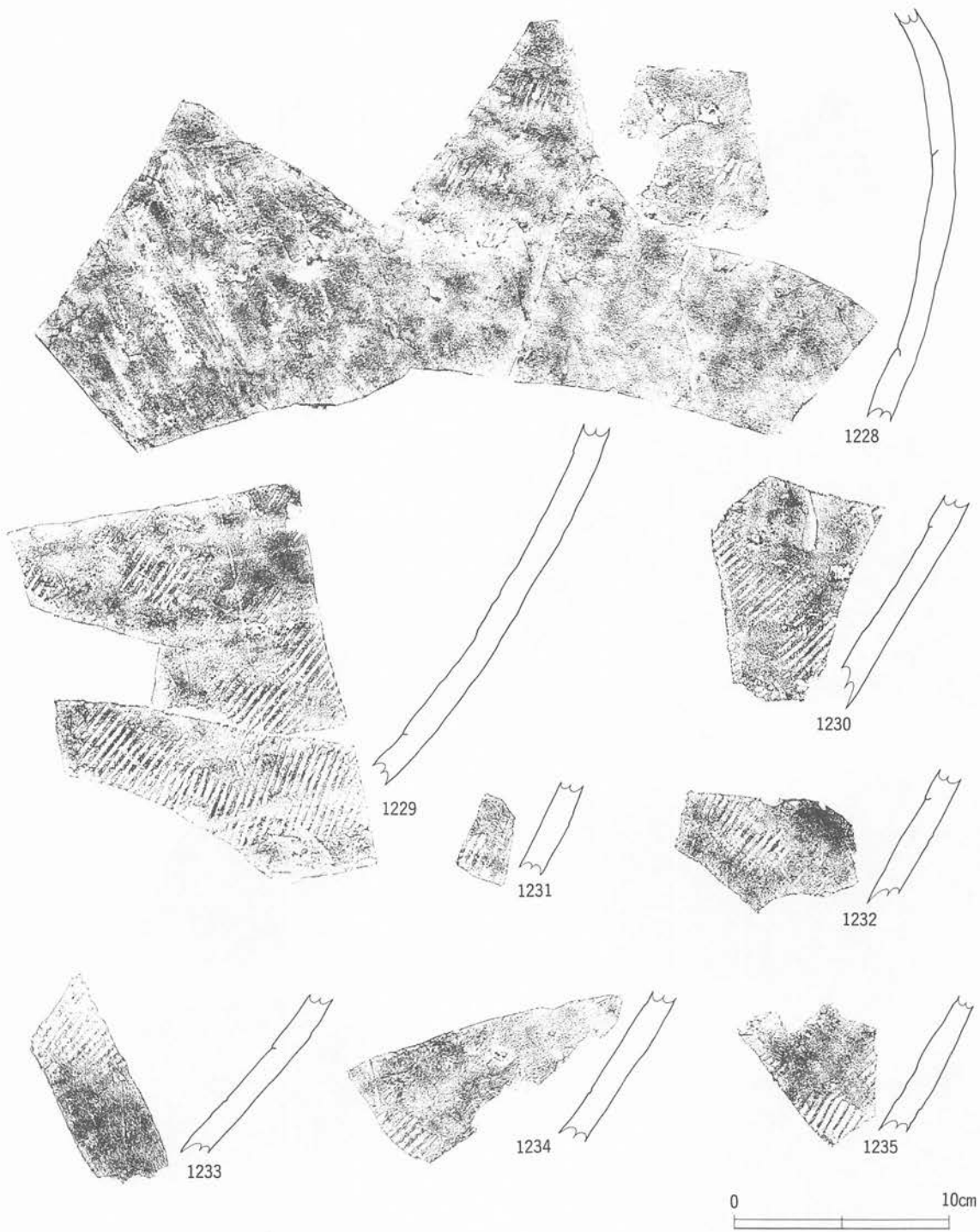
第134図 西側調査区渥美産陶器(9)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1222	渥美	甕	体上	15SE3埋土P107	12C	外黒褐色、内灰褐色	1223～1228と同一個体、外面上半灰釉刷毛塗り
1223	〃	〃	〃	15SE3埋土P150、P156	〃	外灰釉、内灰褐色	SE3P189、P201、P220もある 外面上半灰釉刷毛塗り
1224	〃	〃	〃	15SE3埋土P182	〃	外黒褐色、内灰褐色	外面一部灰釉刷毛塗り
1225	〃	〃	〃	15SK29埋土	〃	灰色	10SD7A埋土からも出土、外面上半灰釉刷毛塗り
1226	〃	〃	体中	15SE3埋土P101	〃	外灰褐色、内灰色	
1227	〃	〃	〃	15SE3埋土P80	〃	外灰褐色、内灰色	外面上半灰釉刷毛塗り

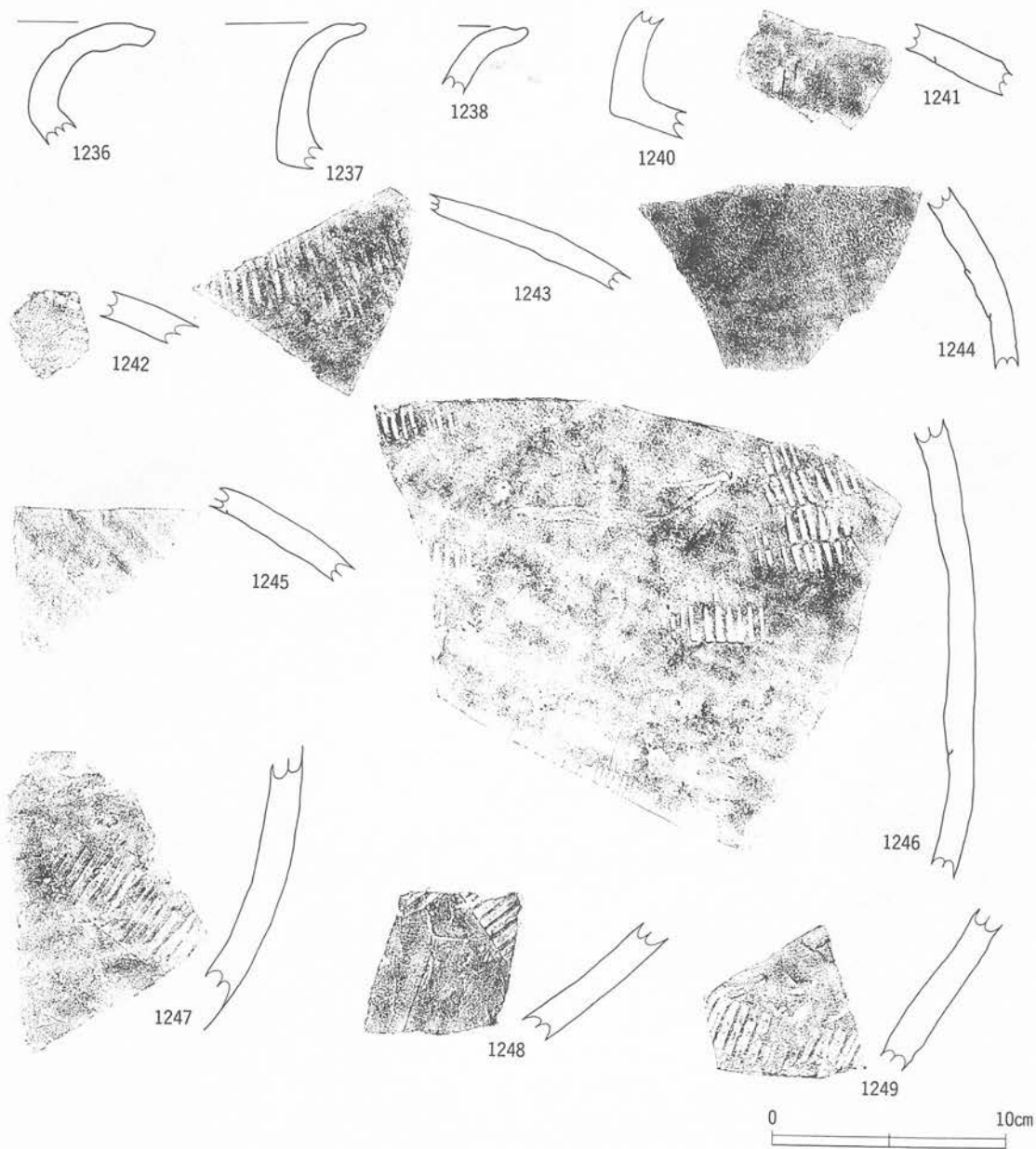
第135図 西側調査区渥美産陶器(10)





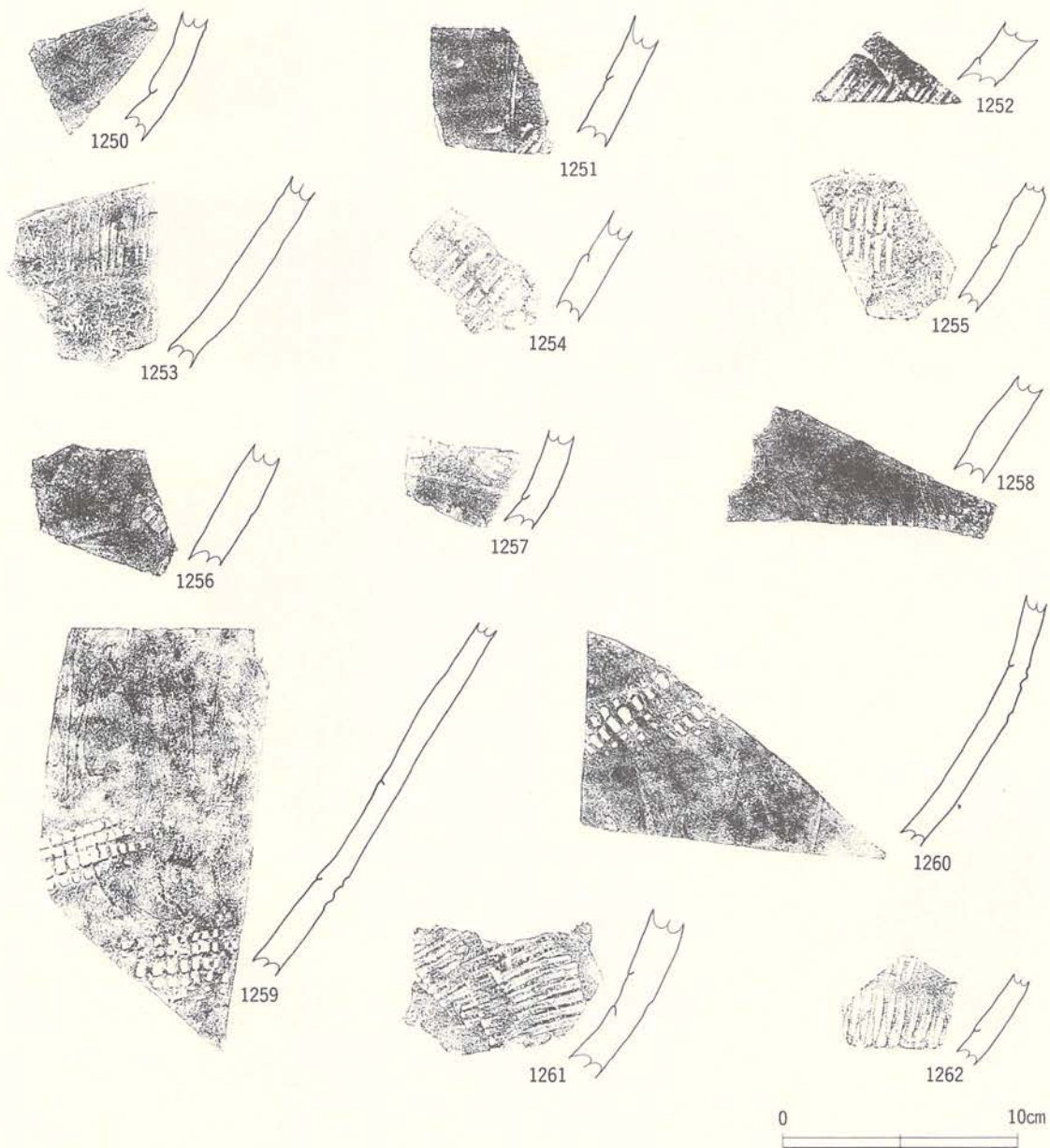
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1228	渥美	甕	体中	15SE3埋土P82、P83、P116	12C	外褐灰色、内灰～黒褐色	15SE3P195もある、外面一部に灰釉
1229	〃	〃	体下	15SD25埋土	〃	灰白色	10SD3埋土からも出土、1230～1235と同一個体
1230	〃	〃	〃	10SD3埋土上部(I C9e)	〃	〃	
1231	〃	〃	〃	I C8eIII層	〃	〃	
1232	〃	〃	〃	I C8gIII層	〃	〃	
1233	〃	〃	〃	10SD3埋土(I C8e)	〃	〃	
1234	〃	〃	〃	10SD3埋土(I C8e)	〃	〃	
1235	〃	〃	〃	II C4c表土	〃	〃	

第136図 西側調査区渥美産陶器(11)



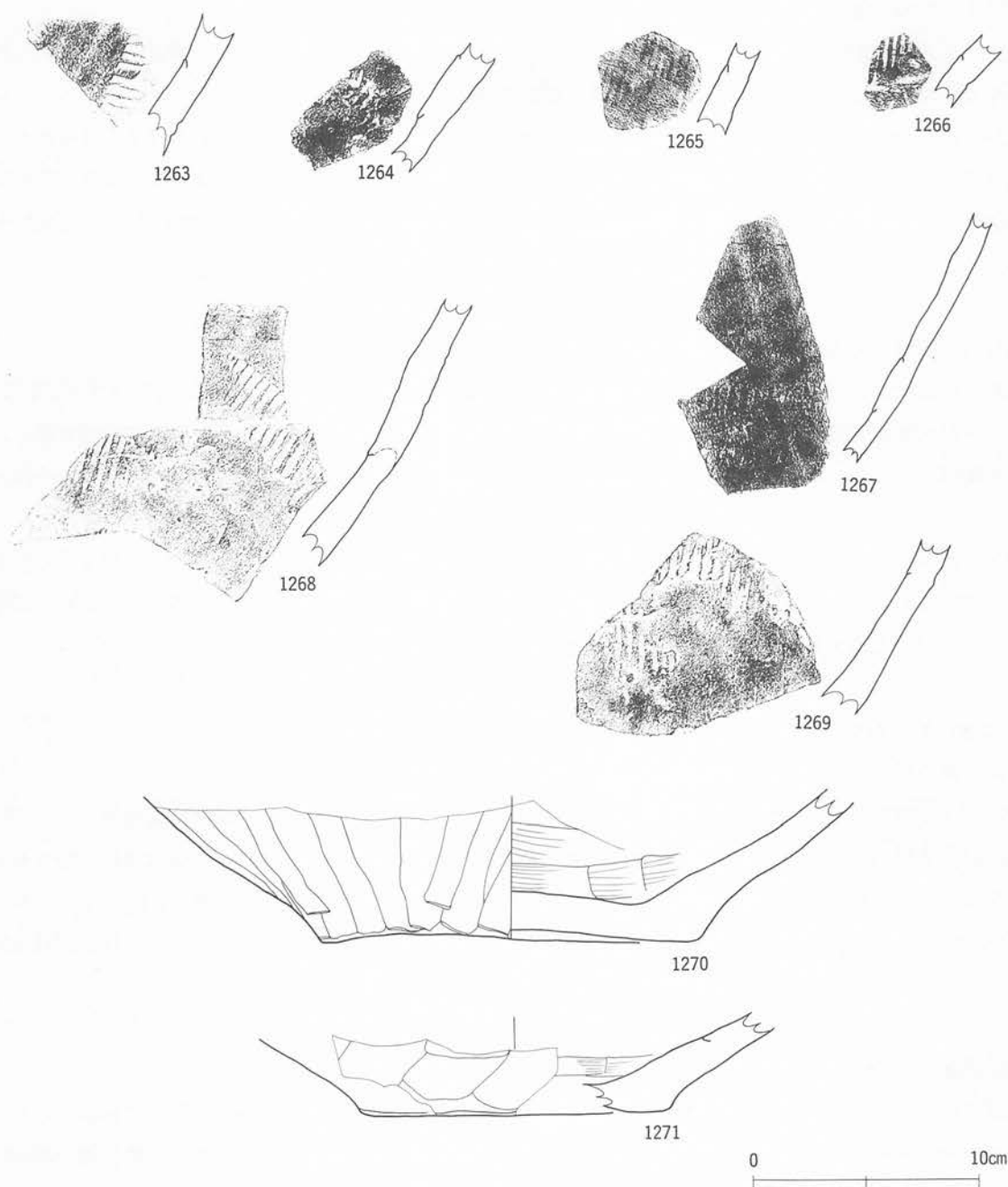
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1236	渥美	甕	口縁	10次調査区	12C	茶褐色	内外面に灰釉刷毛塗り
1237	〃	〃	〃	10次調査区	〃	外暗灰色、内オリーブ色	内面に釉
1238	〃	〃	〃	IIC6e礎石面	〃	白色	内外面に釉
1240	〃	〃	頸	15SE6埋土上位	〃	茶褐色	肩部外面に釉
1241	〃	〃	肩	10SD6埋土	〃	外オリーブ色の釉、内灰色	
1242	〃	〃	〃	15SD25埋土	〃	灰色	
1243	〃	〃	〃	I C7dIII層	〃	外オリーブ色の釉、内灰色	
1244	〃	〃	体上	10SD3埋土(IIC8g)	〃	〃	
1245	〃	〃	肩	15SE埋土P212	〃	外白色の釉、内暗灰色	
1246	〃	〃	体中	15SE2埋土4層	〃	外黒褐、内暗灰色	外面に灰釉を刷毛塗り
1247	〃	〃	〃	15SE5埋土上位	〃	暗灰色	1248、1249と同一個体の可能性あり
1248	〃	〃	体下	15SE5埋土上位	〃	〃	
1249	〃	〃	〃	15SE5埋土上位	〃	〃	

第137図 西側調査区渥美産陶器(12)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1250	渥美	甕	体下	15SE5埋土上位	12C	灰色	
1251	〃	〃	〃	15SE5埋土上位	〃	外茶褐色、内灰色	
1252	〃	〃	〃	15SE5埋土上位	〃	灰色	
1253	〃	〃	〃	15SE2 2層	〃	外緑～白色、内灰色	外面灰釉刷毛塗りか
1254	〃	〃	〃	15SD20埋土	〃	黒褐色	
1255	〃	〃	〃	15SD20埋土	〃	外黒褐色、内褐灰色	
1256	〃	〃	〃	II C6c礎石面	〃	褐灰色	
1257	〃	〃	〃	II C7d礎石面下	〃	灰白色	外面の一部に釉
1258	〃	〃	〃	I C7dIII層	〃	暗灰色	ハケメの後に押印
1259	〃	〃	〃	II C7c表土	〃	〃	1260と同一個体
1260	〃	〃	〃	II C7c表土	〃	〃	1259と同一個体
1261	〃	〃	〃	10SD6底面	〃	外茶褐色、内暗灰色	
1262	〃	〃	〃	10次調査区	〃	外オリーブ色の釉、内灰色	

第138図 西側調査区渥美産陶器(13)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1263	渥美	甕	体下	10次調査区	12C	暗灰色	
1264	〃	〃	〃	〃	〃	灰色	
1265	〃	〃	〃	15SD25埋土	〃	〃	
1266	〃	〃	〃	IID3eIII層	〃	〃	
1267	〃	〃	〃	10次調査区	〃	〃	断面部を擦っている
1268	〃	壺	〃	I C8cIII層	〃	外灰色、内浅黄橙色	積み上げ痕明瞭
1269	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
1270	〃	甕	底	15SK30 3層	〃	暗灰色	
1271	〃	〃	〃	10次調査区	〃	外浅黄橙色、内灰色	

第139図 西側調査区渥美産陶器(14)

#### 猿投? (第 140 図 写真図版 102)

確証はないが猿投産の可能性が高いものが出土している。八重樫氏によると胎土が常滑産、渥美産のものと異なり緻密な感じがするという。器種には甕、壺(三筋壺?)がある。

1272~1276 は同一個体である。格子目状の押印が施され、それらは規則正しく帯状にめぐるのである。器種は甕と分類するべきなのであろうが、口頸部はかなりすばみ壺に近い器形と推定される。1277、1278 は壺の破片である。三筋壺ではないかと思われる。1278 は沈線が施されている。これらは同一個体の可能性も高い。

#### 須恵器系陶器 (第 141 図 写真図版 103)

産地は特定できないが須恵器系の陶器と推定されるものがある。器種は鉢と壺?がある。この西側調査区では古代の土師器や緑釉陶器が出土しており、それにとまなう須恵器も出土している。これらの須恵器と須恵器系陶器を分類することは非常に難しいが、ここでは一応 12 世紀の須恵器系陶器と考えられるものを図示した。

1279~1281 は鉢である。いずれも 15 S K 45 の 1 層から出土している。胎土は砂粒が非常に多く混じり 3 点とも類似している。同一個体の可能性が高いが、実測図を合成しても器形のカーブがうまくつながらず疑問が残る。1282 の器種は壺であろうか。古代の須恵器の可能性も高い。

#### 東北地方在地産陶器 (第 141 図 写真図版 103)

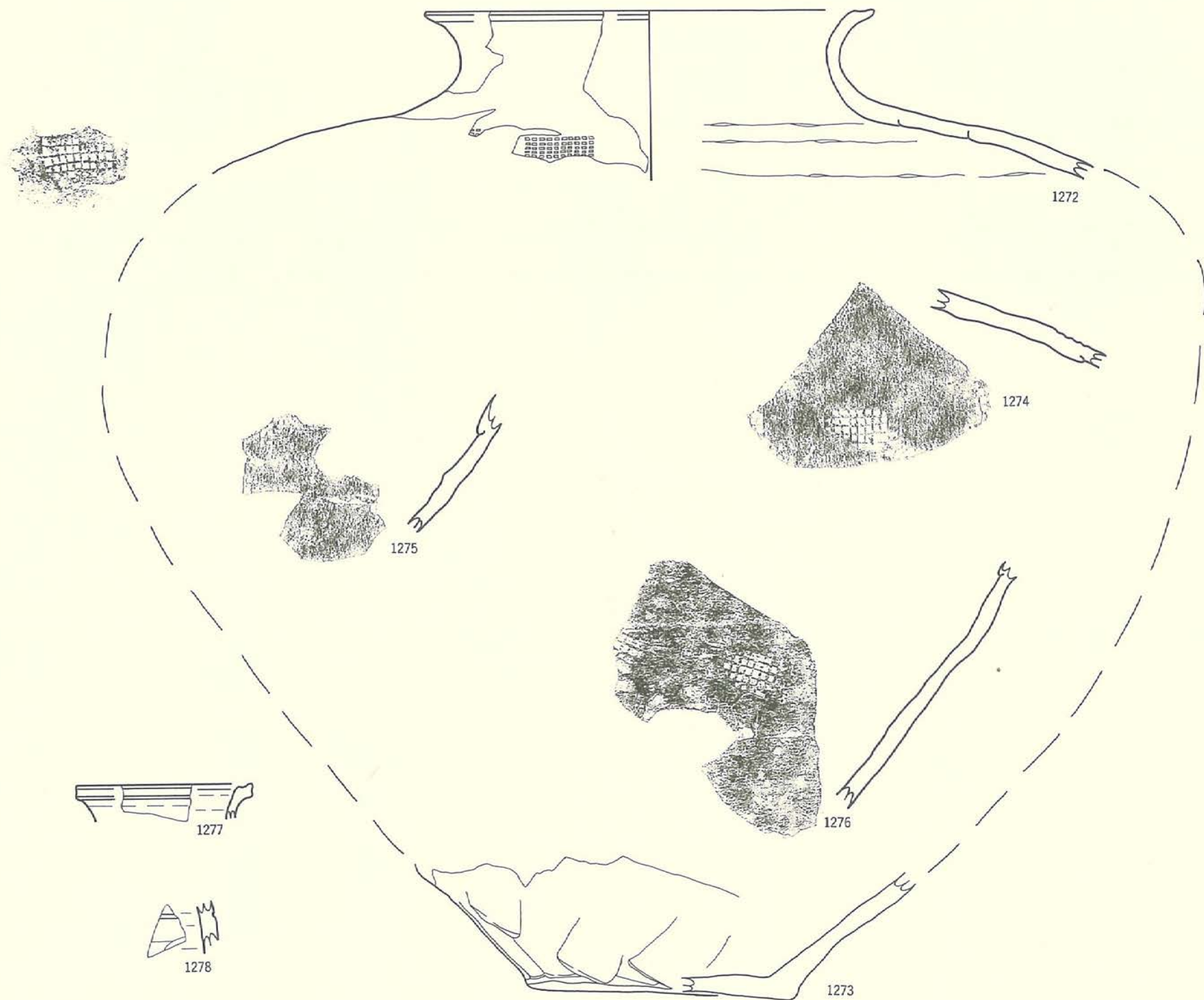
少量であるが出土している。器種はいずれも壺と推定される。

1283 の表面は赤黒色で胎土が赤褐色を呈する。焼成はやや軟質な感じである。水沼産と推定される。1284 は表面が赤黒色、胎土が赤褐色で硬質な感じの焼成である。水沼産の可能性が高い。1285 は表面も胎土も赤褐色を呈する。外面体部下半には回転ヘラケズリが施されている。水沼産の可能性が高い。1286 は外面が暗赤褐色で胎土は暗灰色を呈する。胎土が非常に堅緻で砂粒が混じる。産地は東北地方産と思われるが具体的な窯は不明である。12 世紀以降の可能性もある。

#### 西側調査区での国産陶器の出土状況

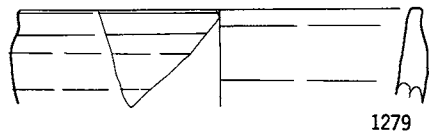
西側調査区の国産陶器の多くは 15 S E 3 の埋土と、その近くの西側調査区の東側の旧河道に向かって下がる部分から集中的に出土している。この付近から出土した器種はほとんどが甕、壺類で片口鉢、碗の類が少ないのが特徴的である。15 S E 3 の埋土からは約 230 片の陶器が出土しているが、この井戸から出土した陶器は埋土上部出土の破片と下部出土の破片が接合しており、ほぼ一気に陶器片を土とともに捨てた状況と考えられる。そしてそれらの陶器は幾つかの個体の破片が混在し、破片数の割に接合する率が低く、井戸に捨てられる段階ですでにばらばらの状態の破片になっていたと思われる。またこの 15 S E 3 出土の陶器片とそれ以外の周辺から出土した陶器片が接合したり、また接合しなくても同一個体と考えられる破片もかなり多い。この状況は何処かの場所で甕を使用し、それらが割れた後に破片の形で本調査区に持ち込まれ、その時開口していた 15 S E 3 とその周辺に陶器の破片を廃棄したと思われる。これらの陶器の中には常滑産の 2 型式のものもあるが、3 型式のものもあるのでその廃棄は 12 世紀第 4 四半期のことと考えられる。この陶器が集中した付近では片口鉢、碗の類の器種がほとんど無いと記したが、かわらけ類の破片も少ない。意図的に貯蔵具である陶器の破片のみ集めて廃棄したのではないかと想像される。



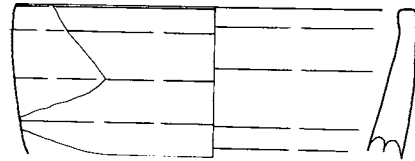


番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1272	猿投?	甕	口縁	15SE3埋土P76、P92	12C	外緑色の釉、内灰褐色	IID5bV層からも出土 1273~1276と同一個体
1273	〃	〃	底	15SE3埋土P7、P9、P16	〃	外茶褐色~灰褐色	内白~緑色の釉、15SE3P26、P50、 P98、P230もある
1274	〃	〃	肩	15SE3埋土P162	〃	外緑色の釉、内灰褐色	灰褐色の胎土 砂粒珪石粒少量混入
1275	〃	〃	体下	15SE3埋土P124、P177	〃	灰褐色	
1276	〃	〃	〃	15SE3埋土P190	〃	〃	IID5bIII層からも出土
1277	〃	壺	口縁	I C7eIII層	〃	灰白色	灰白色の胎土
1278	〃	〃	体	10次調査区	〃	〃	灰白色の胎土 三筋壺か

第140図 西側調査区猿投産陶器



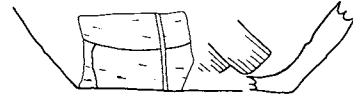
1279



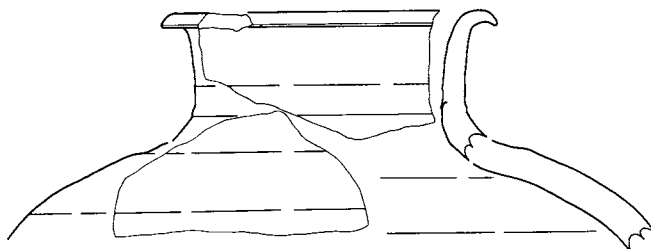
1280



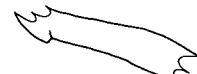
1281



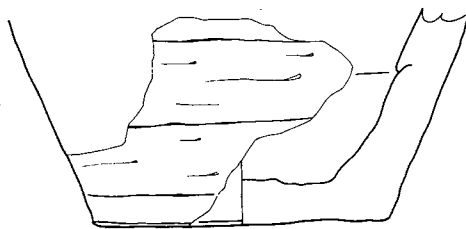
1282



1283



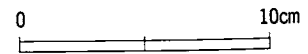
1284



1285



1286



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1279	須恵器系	鉢	口縁	15SK45 1層	12Cか	青灰色	砂粒の多量に混じる粗い胎土
1280	〃	〃	〃	15SK45 1層	〃	〃	1279に胎土非常に似る
1281	〃	〃	底部	15SK45 1層	〃	〃	1279に胎土非常に似る、底面回転糸切
1282	〃	壺?	〃	15次のIIC区表採	〃	灰色	砂粒の混じる粗い胎土
1283	在地産	壺	口~肩	15SK29埋土 15SK45 1層	12C	赤黒色	水沼または伊豆沼産か、胎土赤褐色
1284	〃	〃	肩	10SD11埋土	〃	〃	水沼産か、胎土赤褐色
1285	〃	〃	底	15SK45 1層 10SD11埋土	〃	赤褐色	水沼産か、胎土赤褐色
1286	〃	〃	体下	I C7e	12C以降か	暗赤褐色	胎土は暗灰色で非常に堅緻砂粒混じる

第141図 西側調査区須恵器系陶器・在地産陶器



これらの壺、甕の破片は接合はしないものの、質感や押印の種類を観察するとそれほど多くない個体数にまとまりそうである。もちろん大きな甕ともなると、火裏と火表では同じ個体と思えないほど顔つきが異なり、また同じ産地で同時期のものであれば別個体であっても非常に似ている場合があり、同一個体に帰属する破片を判断するのは難しいことを承知している。それでも個体数を算出してみる。15 S E 3とその周辺とすると出土範囲があいまいになるので15 S E 3の埋土から出土したものにかぎって考える。常滑産の甕は10個体、広口壺1個体、渥美産の甕4個体、猿投産の甕1個体分についての破片がある程度の量まとまっている。記しておくがこの個体数の算出は多分に主観的な曖昧な方法でおこなっており、算出した数は絶対的な数ではなく目安程度のものであっていただきたい。また15 S E 3からは破片が出土していないが、1029の突帯付四耳壺1個体も一緒に廃棄されたものにとらえてよかろう。これらの陶器がある一ヶ所でまとまって使用されていたものの破片が一括して運ばれてきて廃棄されたのか、様々な場所で使用されていた陶器を集めて来て廃棄したのかは判断できない。また貯蔵具であるこれらの壺、甕が具体的に何の目的に使用されていたか判断する事象をとらえることはできなかった。

## ②東側調査区の国産陶器

常滑（第142～147図 写真図版103～106）

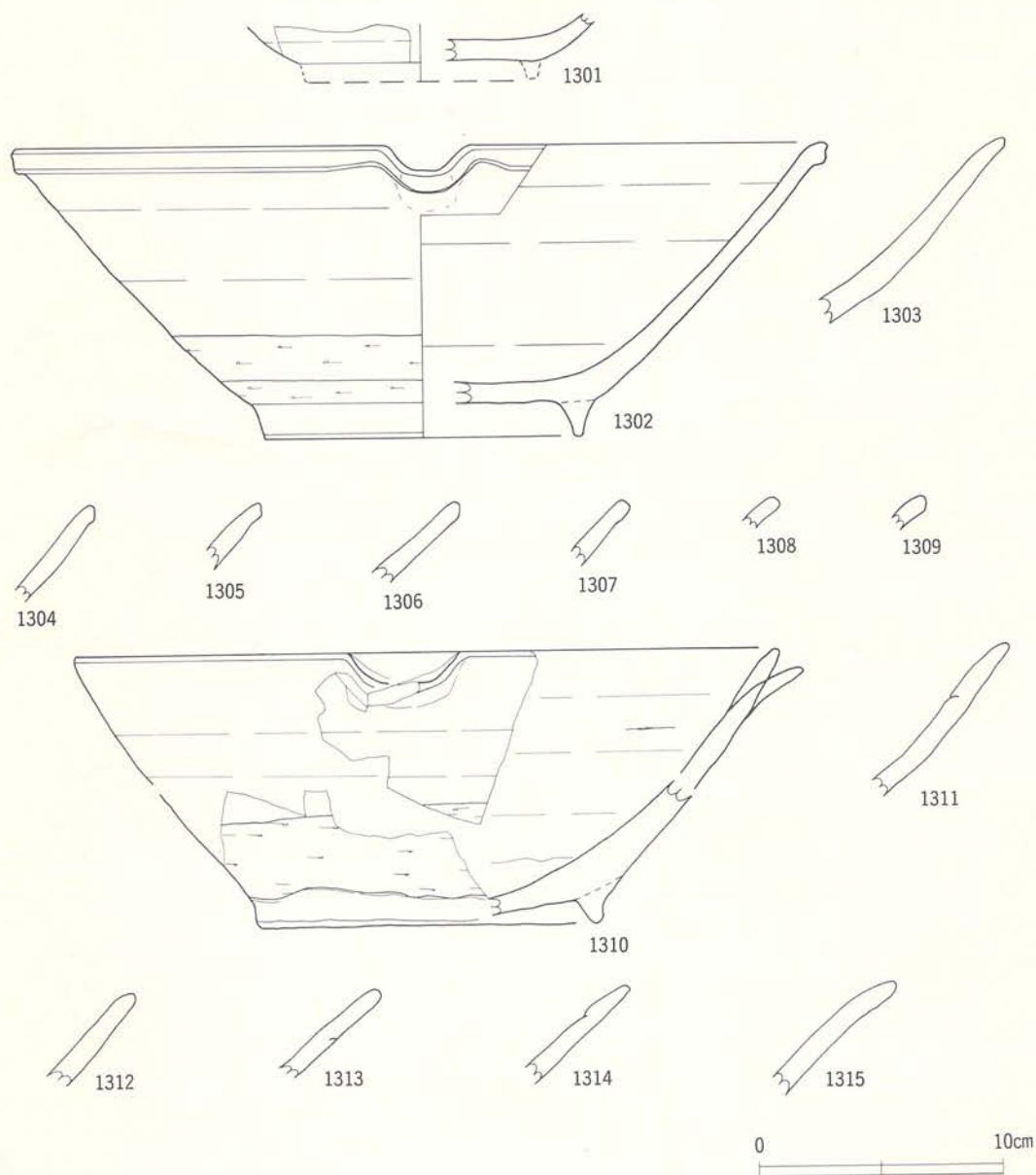
出土した器種には山茶碗、片口鉢、三筋壺、広口壺、甕がある。

山茶碗は1301の1点である。常滑産の山茶碗はこの個体のみであるが、渥美産の山茶碗は幾つかの個体が東側調査区では出土している。内面はかなり磨耗しており、ものを搦るといった片口鉢的な使用がなされたと考えられる。

片口鉢は口唇部を面取りするもの(1302～1309)としないもの(1310～1322)がある。面取りするものは2型式、しないものは3型式に所属する可能性が強いという。また口唇部がいずれの形態のものも、底辺部には回転ヘラケズリが施されている。1302は口唇部の形態から、1b形式までさかのぼる可能性も考えられる。

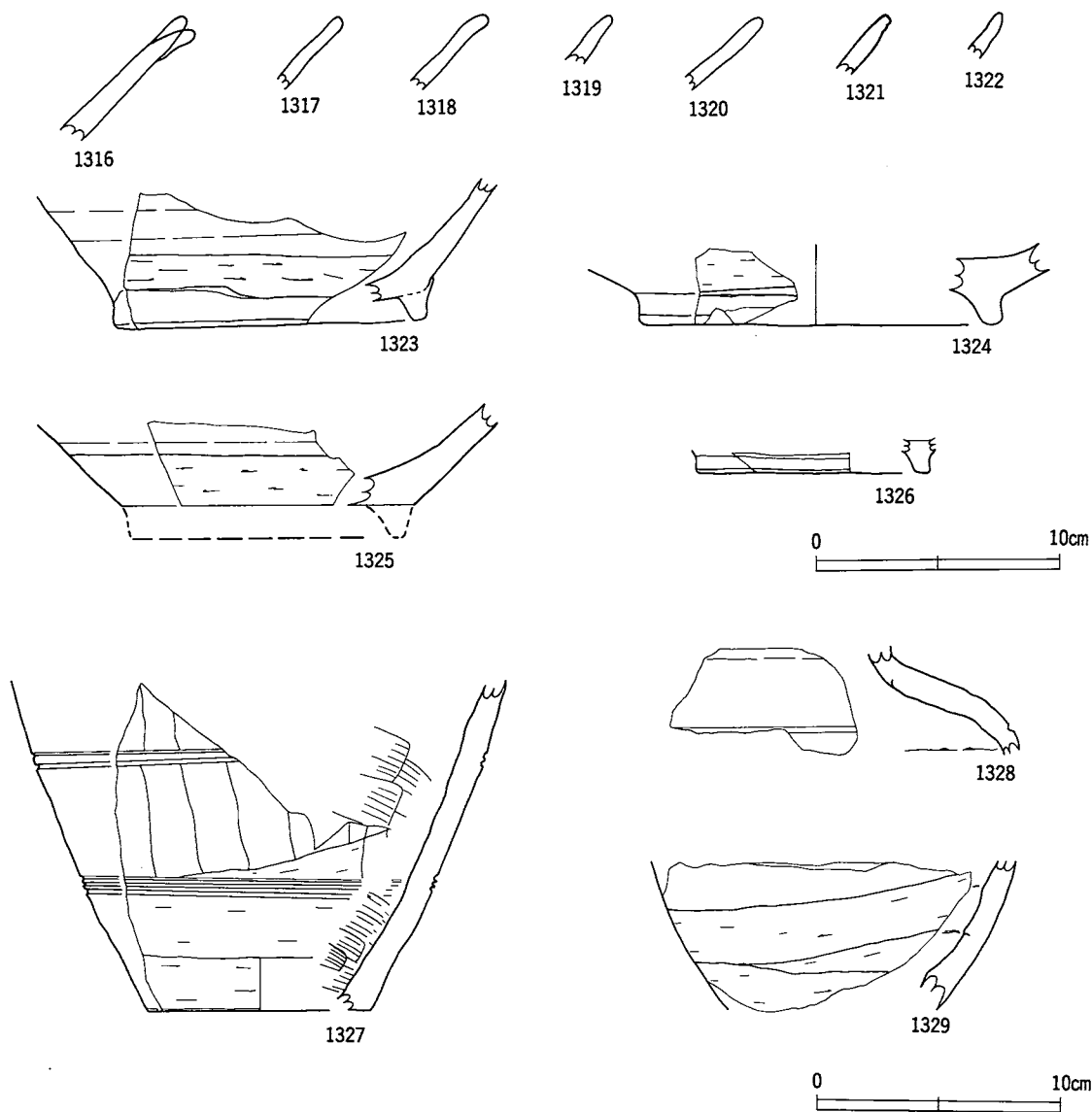
三筋壺は3点が図示できた。1327の線は楕円描きの3本線で1b形式までさかのぼる可能性が考えられる。1329は線が施された部位が無い破片であるが、形態から三筋壺の類と考えた。

広口壺は2型式の属するもの(1330、1334)と破片が小さく、2型式か3型式か分類の困難なものがある。いずれも口縁部内面上部に沈線状の段を持つものが多い。甕は西側調査区と異なり出土量も他の器種を圧倒するほど多くなく、またある程度の接合や同一個体の把握ができるものはない。2型式、3型式のいずれもみられるが、2型式の方が非常に多い。1381は破断面に漆と思われるものが付着しており、修復がおこなわれたと考えられる。



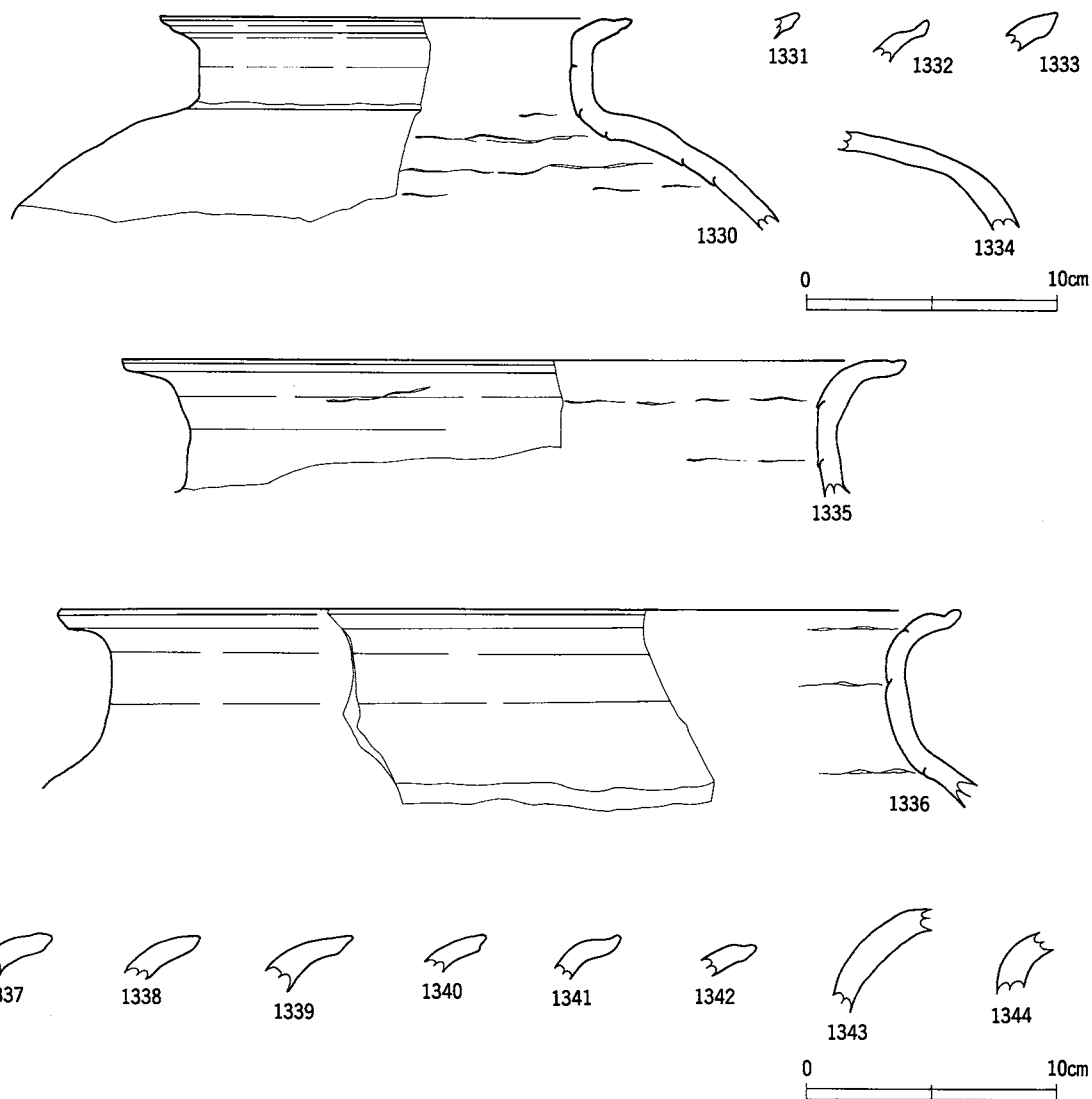
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1301	常滑	山茶碗	底	III E0h包含層	2~3型式	灰白色	内面かなり磨耗している
1302	〃	片口鉢	完存	II E6h、7h包含層	16~2型式	灰色、部分的に自然釉	内面磨耗している、外底面少量附着
1303	〃	〃	口縁	II E6h包含層	2型式	灰色	外面下半部ケズリ、内面磨耗している
1304	〃	〃	〃	II E5h包含層	〃	〃	
1305	〃	〃	〃	II E8h表土	〃	外灰~黒褐、内灰色	
1306	〃	〃	〃	II E9h包含層	〃	外暗灰色、内自然釉	
1307	〃	〃	〃	13SK38埋土上位	〃	外灰色、内自然釉	
1308	〃	〃	〃	II E6g包含層	〃	灰色	
1309	〃	〃	〃	II E6i包含層	〃	外黒部、内自然釉	
1310	〃	〃	完存	II E8h表土 II E9h表土	3型式	外にふい赤褐色、内自然釉	内底面磨耗している
1311	〃	〃	口縁	11次調査区	〃	外茶褐色、内自然釉	外面下半にケズリ
1312	〃	〃	〃	II E7i包含層	〃	茶褐色	内面に薄い自然釉
1313	〃	〃	〃	15SD12埋土(II E4i)	〃	外灰色、内自然釉	
1314	〃	〃	〃	II F区	〃	外灰色	
1315	〃	〃	〃	13次調査の排土中	〃	外灰色、内自然釉	口縁端部外反する

第142図 東側調査区常滑産陶器(1)



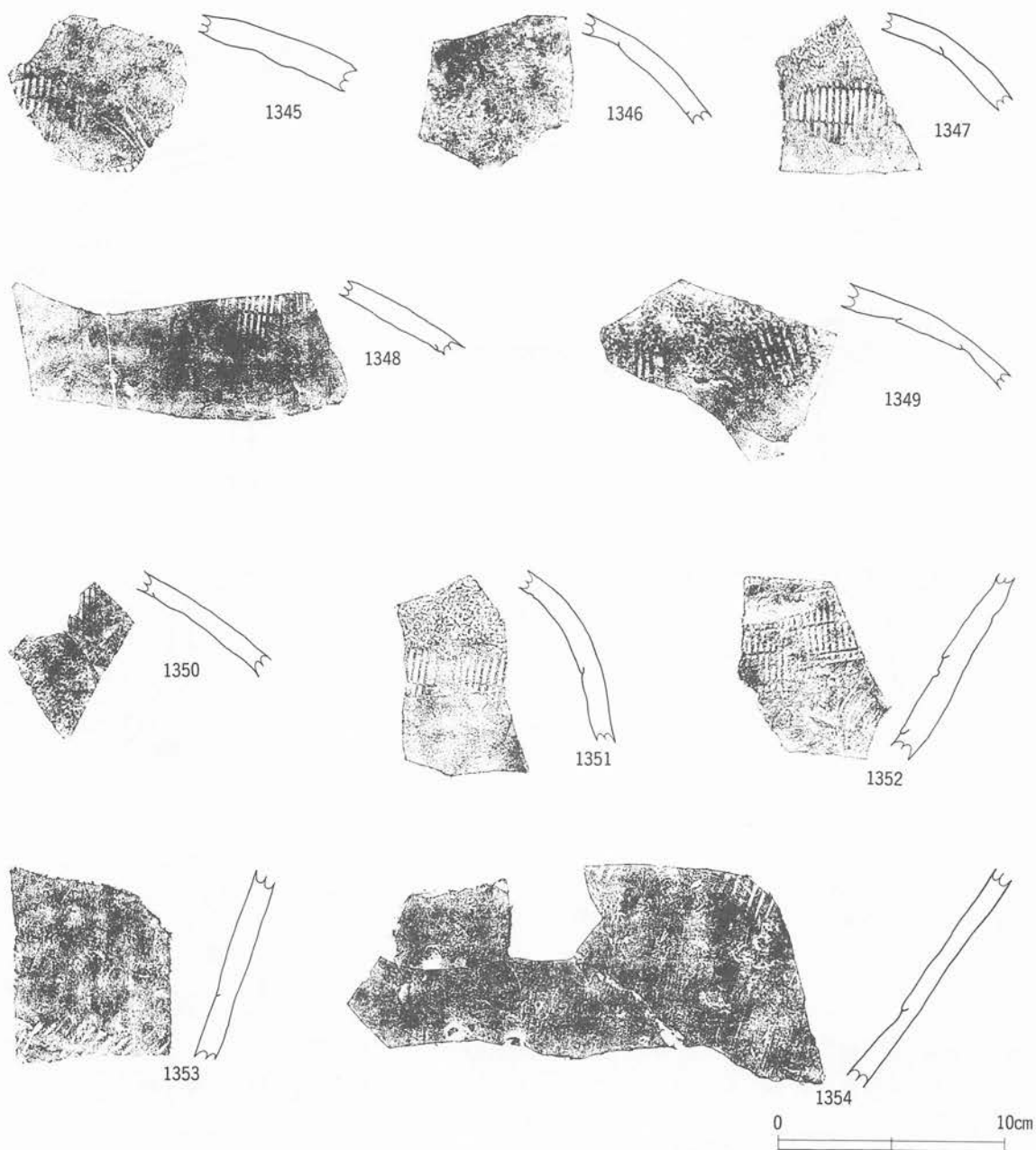
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1316	常滑	片口鉢	口縁	13SK9埋土	3型式	外灰色、内自然釉	
1317	〃	〃	〃	II E9h包含層	〃	灰色～黒褐色	
1318	〃	〃	〃	II E5i包含層	〃	灰色～黒褐色	口縁部端部が外反
1319	〃	〃	〃	II E5i包含層	〃	外灰色、内自然釉	
1320	〃	〃	〃	II E5iの水穴	〃	灰色	
1321	〃	〃	〃	II E6h包含層	〃	外灰色、内自然釉	
1322	〃	〃	〃	IIIF3b表土	〃	外茶褐色、内自然釉	
1323	〃	〃	底	II E9h表土	2～3型式	灰色	内面かなり磨耗
1324	〃	〃	〃	13SD3 (II F0d)埋土	〃	〃	〃
1325	〃	〃	〃	IIIF4b表土	〃	〃	内面磨耗、外底面灰付着
1326	〃	〃	〃	11次調査区	〃	灰色	
1327	〃	壺	体下～底	〃	16型式か	茶褐色一部自然釉	櫛描き3本線
1328	〃	〃	肩	〃	2型式後半	外自然釉、内褐色	単線
1329	〃	〃	体下	II F区表土	2～3型式	外暗赤褐色、内茶褐色	三筋壺と思われる

第143図 東側調査区常滑産陶器(2)



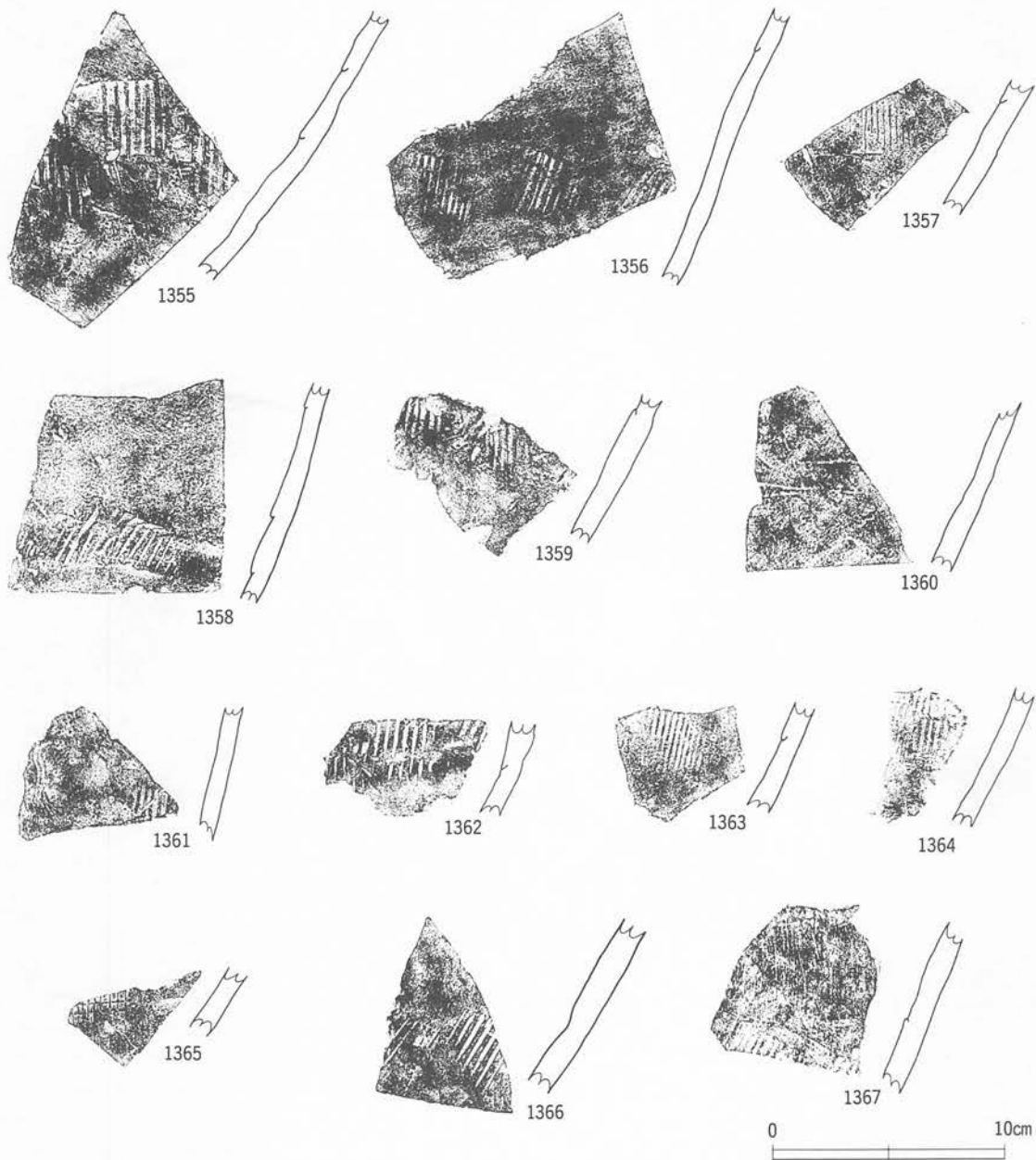
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1330	常滑	広口壺	口～肩	13SK49埋土下位	2型式	外赤褐色、自然釉	内面赤褐色
1331	〃	〃	口縁	13SK11埋土	2～3型式	灰～黒色	
1332	〃	〃	〃	II E8h表土	〃	暗灰色	
1333	〃	〃	〃	13P248埋土	〃	自然釉	
1334	〃	〃	肩	II E区表採	2型式	外赤褐色、自然釉	内面赤褐色、1330と同一個体か
1335	〃	甕	口縁	II E8h表土	〃	にぶい赤褐色	口縁部内面に沈線状のくぼみあり
1336	〃	〃	〃	15SD12埋土(II E9h)	2～3型式	外灰色、内茶褐色	〃
1337	〃	〃	〃	II E9i表土	2型式	外茶褐色、内自然釉	〃
1338	〃	〃	〃	II E9h表土	〃	〃	〃
1339	〃	〃	〃	II E7j表土	〃	〃	
1340	〃	〃	〃	11次調査区表採	〃	外赤褐色、内自然釉	
1341	〃	〃	〃	II E5hの水穴	〃	灰色	口縁部内面に沈線状のくぼみあり
1342	〃	〃	〃	11次調査区	〃	自然釉	
1343	〃	〃	〃	II E6h包含層	〃	赤褐色	
1344	〃	〃	〃	III E0h表土	〃	黒色	

第144図 東側調査区常滑産陶器(3)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1345	常滑	甕	肩	II F6f	2 型式	外自然釉、内明褐色	
1346	〃	〃	〃	13SK54埋土	〃	外自然釉、内黒褐色	
1347	〃	〃	〃	13P447埋土	〃	外灰色、内自然釉	内面黒褐色を呈する
1348	〃	〃	〃	13SD3埋土(II F8d)	〃	外灰色、内褐灰色	
1349	〃	〃	〃	II E9i	〃	外自然釉、内赤褐色	
1350	〃	〃	〃	II E8h表土	〃	外自然釉、内暗灰色	
1351	〃	〃	体上	13SD3埋土	〃	外自然釉、褐灰色	内面灰色を呈する
1352	〃	〃	体下	III F2dIII層	〃	灰色	
1353	〃	〃	〃	15SE25埋土	〃	褐色	
1354	〃	〃	〃	II E9h包含層	〃	赤褐色	

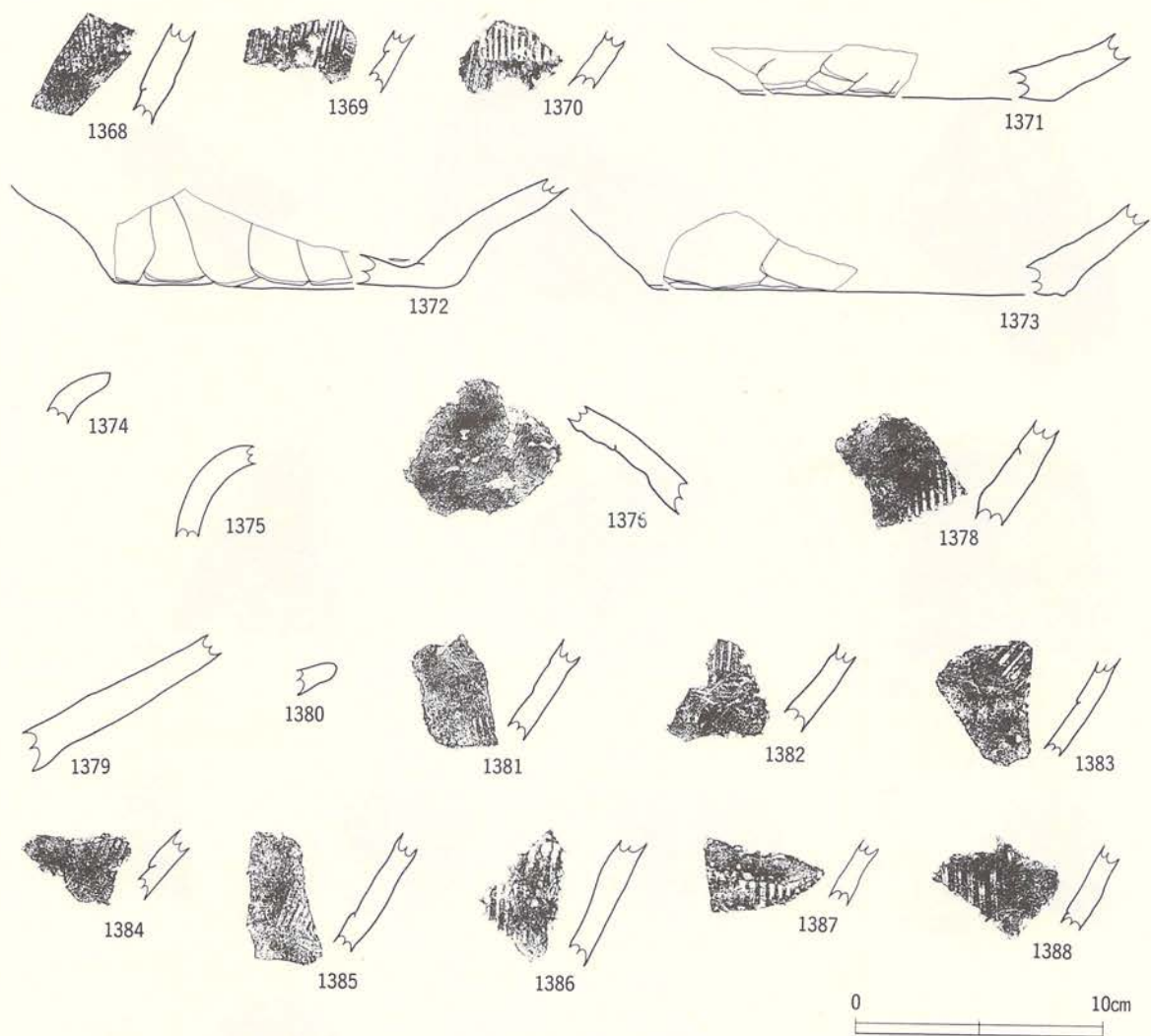
第145図 東側調査区常滑産陶器(4)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1355	常滑	甕	体下	II E9h包含層	2型式	赤褐色	1354と同一個体と思われる
1356	〃	〃	〃	13SD13埋土(II F5i)	〃	外灰色、内自然釉	
1357	〃	〃	〃	II E6h包含層	〃	灰色	
1358	〃	〃	〃	13SK52埋土	〃	褐灰色	
1359	〃	〃	〃	13SD13埋土(II F5i)	〃	外赤褐色、内褐灰色	
1360	〃	〃	〃	II E7h包含層	〃	褐色	
1361	〃	〃	〃	III F1d表土	〃	外暗褐色、内褐色	
1362	〃	〃	〃	II E7h包含層	〃	褐灰色	
1363	〃	〃	〃	II E8h表土	〃	外赤褐色、内褐灰色	
1364	〃	〃	〃	13次調査区表採	〃	灰色	
1365	〃	〃	〃	13P388埋土	〃	外赤褐色、内自然釉	
1366	〃	〃	〃	II E7h包含層	〃	外灰色、内褐灰色	
1367	〃	〃	〃	15SD2埋土	〃	褐灰色	

第146図 東側調査区常滑産陶器(5)





番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1368	常滑	甕	体下	II E7h包含層	2型式	灰色	
1369	〃	〃	〃	II E5i包含層	〃	〃	
1370	〃	〃	〃	II E5h包含層	〃	外茶褐色、内黒褐色	
1371	〃	〃	底	II E7h包含層	〃	外褐灰色、内自然釉	
1372	〃	〃	〃	13SD3埋土(II F0d)	〃	赤褐色	
1373	〃	〃	〃	II E区表土	〃	外赤褐色、内自然釉	
1374	〃	〃	口縁	II E7h包含層	3型式	黒褐色	
1375	〃	〃	〃	II E7h包含層	〃	外暗赤褐色、自然釉	内面黒褐色を呈する
1376	〃	〃	肩	11次調査区	〃	外自然釉、内橙色	
1378	〃	〃	体下	11次調査区	〃	外茶褐色、内橙色	
1379	〃	〃	底辺	13SD3埋土(II F0d)	〃	外赤褐色、内自然釉	
1380	〃	〃	口縁	13SB7-8埋土	2~3型式	外自然釉、内茶褐色	
1381	〃	〃	体下	II E0h表土	〃	外茶褐色、内褐灰色	漆?による接着をおこなっている
1382	〃	〃	〃	11次調査区	〃	外茶褐色、内自然釉	
1383	〃	〃	〃	II E8g包含層	〃	外黒褐色、内褐灰色	
1384	〃	〃	〃	II E6i包含層	〃	〃	
1385	〃	〃	〃	II E7i包含層	〃	外茶褐色、内灰色	
1386	〃	〃	〃	13SD6埋土下位	〃	外赤褐色、内自然釉	
1387	〃	〃	〃	13次調査区	〃	外灰色、内自然釉	
1388	〃	〃	〃	〃	〃	外灰赤色、内自然釉	

第147図 東側調査区常滑産陶器(6)



#### 渥美 (第 148～152 図 写真図版 106～108)

出土した渥美産陶器には山茶碗、蓋、片口鉢、壺、甕がある。

山茶碗は個体数の判別はできないが、割合に多くの数が出土している。多くはⅡE区東端の遺物包含層から出土している。口縁部は外反するものが多いが、内湾するものもある。また灰釉を人為的に施釉しているものも多い。1409 と 1410 は内面にベンガラと思われる赤色の物質が付着している。1410 は内面のみならず破断面にも赤色の物質が付着している。これらの内面はかなり磨耗しており赤色のものを塗ったのではなく、搦ったものと解釈できる。これらの他に 1406、1408 の内面もかなり磨耗しており、供膳具としての使用ではなく、物を搦るといった行為にも山茶碗が使用されたことがわかる。

蓋は二つの破片に別れて少し離れた位置から出土した。上面の高台状の部分は貼りつけてなく削り出している。

片口鉢は口縁部上端と口唇部の間がやや窪むものが多い。また常滑産のものと同様に底辺部に回転ヘラケズリが施されない。1412 は口縁部が内湾し古手の様相を示す。12 世紀前半の所属であろうか。

壺は 1421 の 1 点のみである。底部付近の破片である。

甕は常滑産と同様に、出土量も他の器種に比べてそれほど多くなく、またある程度の接合や同一個体の把握ができるものはない。1442 は複合押印が押されている。

#### 猿投? (第 152 図 写真図版 109)

西側調査区のものと同様に確証はないが猿投産の可能性が高いものが出土している。胎土は常滑産、渥美産のものと同様に緻密な感じがするものである。器種には短頸壺、甕がある。

1456 は短頸壺である。灰白色で緻密な胎土を呈する。短頸壺はこの個体の他に、西側調査区で常滑産のものが 1 点出土しているのみである。

甕は 1457 である。灰褐色で堅緻な胎土を呈する。八重樫氏によると渥美産の可能性も捨てきれないとのことである。

#### 須恵器系陶器 (第 153 図 写真図版 109)

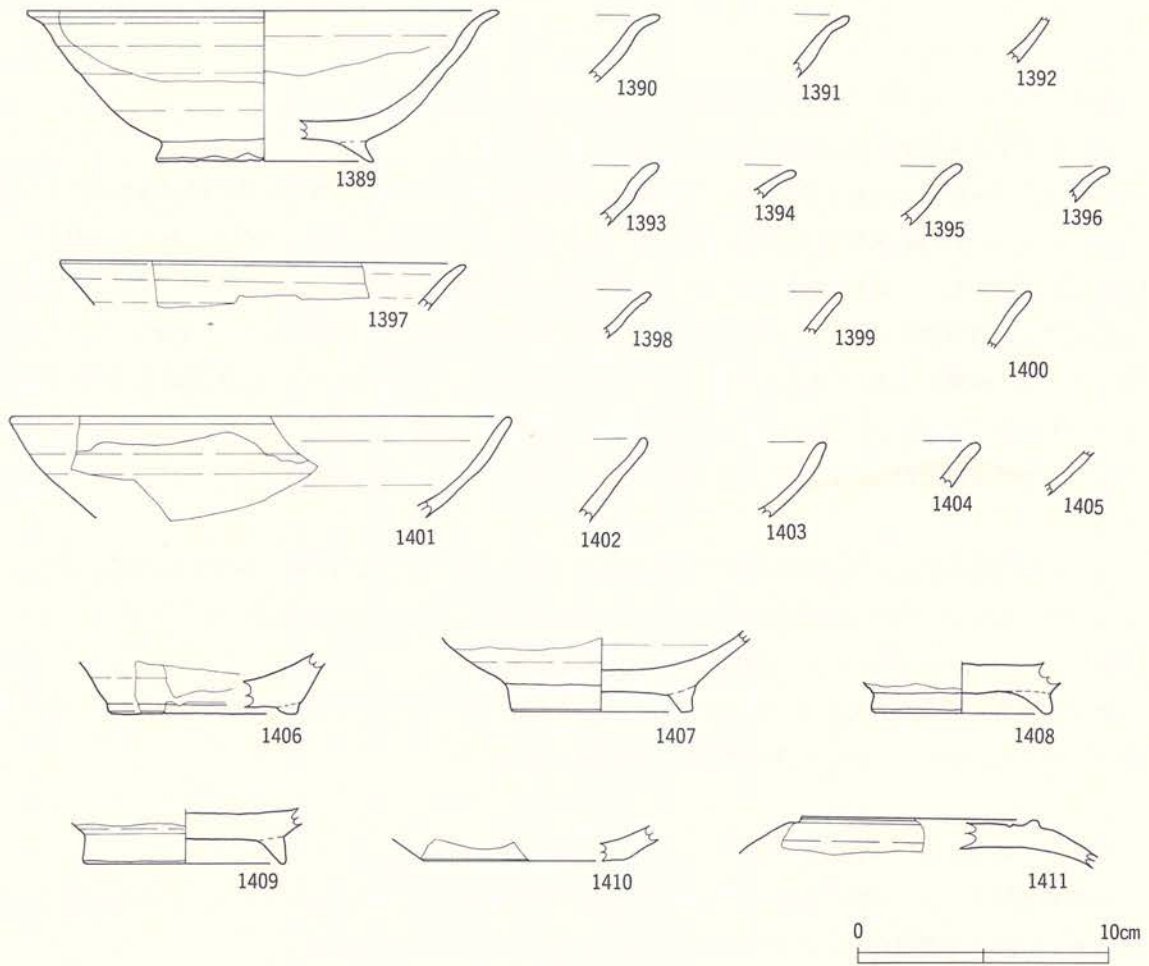
産地は特定できないが須恵器系の陶器と推定されるものがある。器種は鉢と波状文四耳壺、甕がある。西側調査区でも述べたが、須恵器と須恵器系陶器を分類することは非常に難しく、ここでは一応 12 世紀の須恵器系陶器と考えられるものを図示した。

1458 は片口鉢である。灰色～赤灰色の胎土を呈する。焼成は良好である。1459 も片口鉢である。胎土は赤褐色～灰色で焼成は良好である。

1460 は波状文四耳壺である。耳の部分は 2 ヲ所残存しているがその配置から四耳であったことがわかる。八重樫氏によると珠洲産の胎土とは異なっているとのことである。1461 は甕の破片である。厚手のもので外面にタタキ目が施されている。

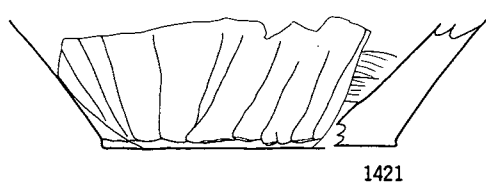
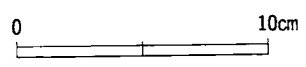
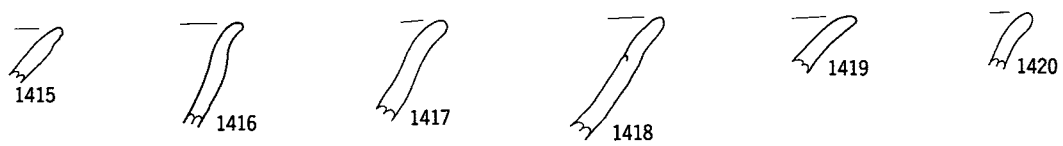
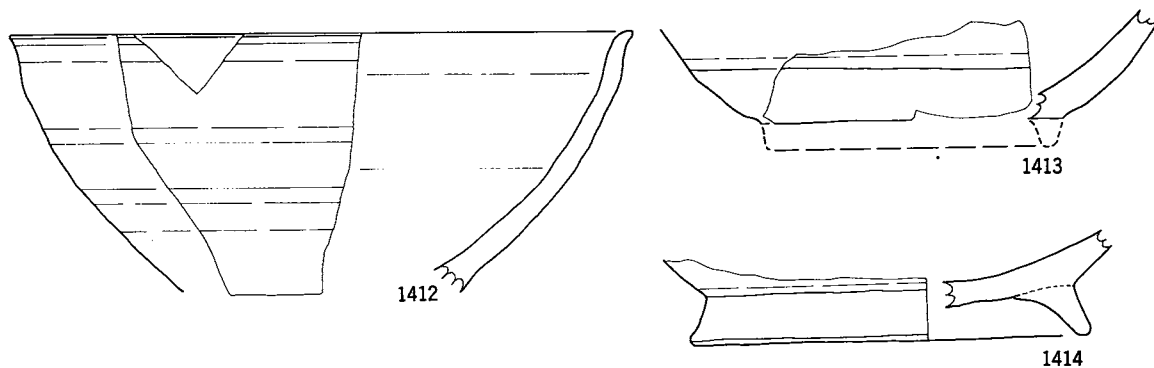
#### 東北地方在地産陶器 (第 153 図 写真図版 109)

壺が 1 点のみ 13 SK 49 の埋土から出土している。水沼産と考えられるものである。外面の色調は赤灰色を呈し、破断面に表れる胎土は赤褐色で非常に堅緻である。全体的に器厚がやや厚く、手に持ってみると大きさの割に重い感じがする。外底面にはもみがらが付着している。



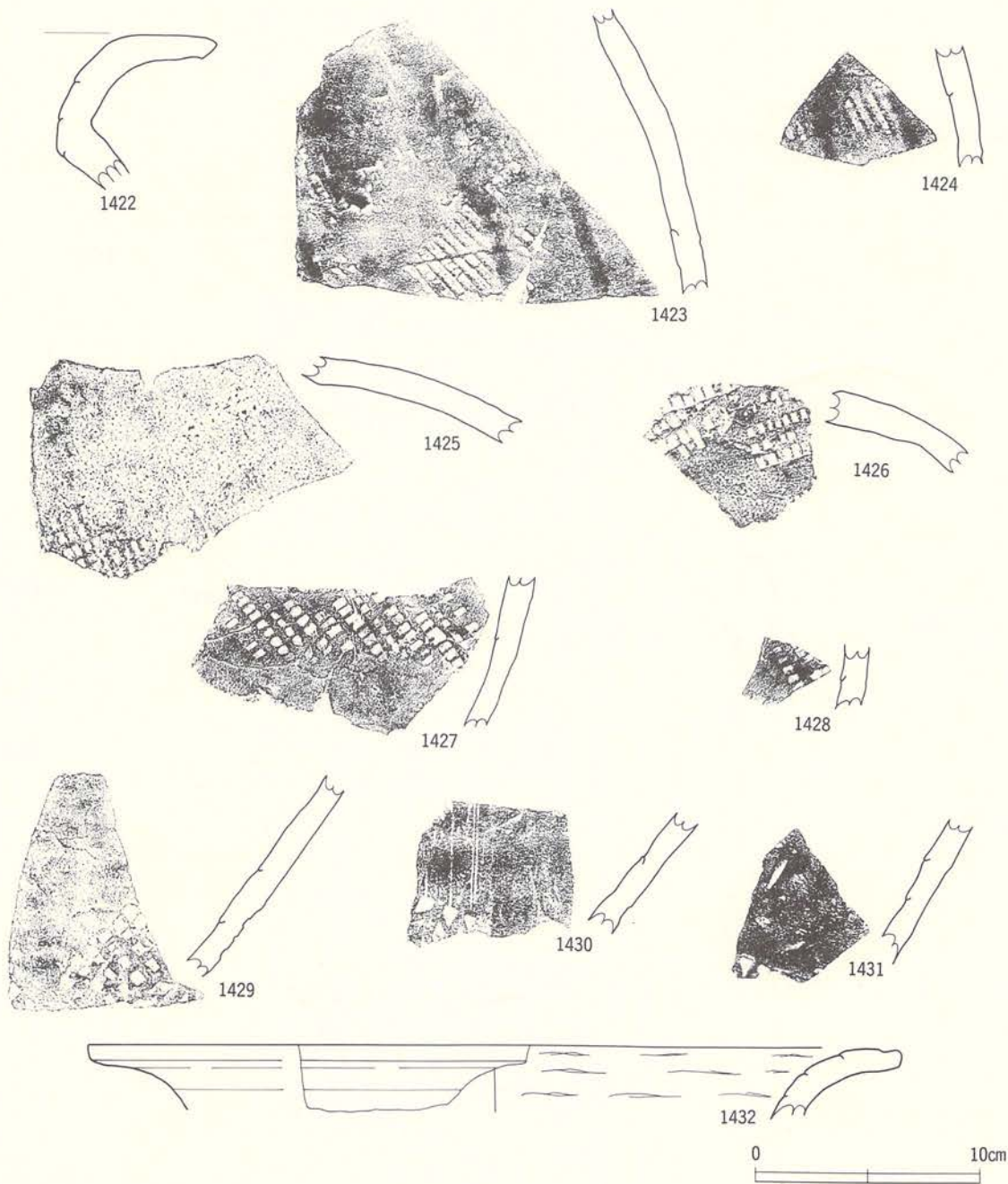
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1389	渥美	山茶碗	完存	13SK5埋土(III F4c)	12C	灰色、高台部暗灰色	口縁内外面に施釉
1390	〃	〃	口縁	III F4d表土	〃	灰色	口縁内外面に施釉、1389と同一個体か
1391	〃	〃	〃	II E7h包含層	〃	灰色	1389、1390と同一個体か
1392	〃	〃	〃	13SK12埋土	〃	外灰色、内緑色	1389～1391と同一個体か
1393	〃	〃	〃	III F4c表土	〃	外灰色、内緑色	内面に釉
1394	〃	〃	〃	II F5b表土	〃	灰色	内外面に施釉
1395	〃	〃	〃	13次調査区	〃	灰色	内面に釉わずかに付着
1396	〃	〃	〃	〃	〃	褐灰色	
1397	〃	〃	〃	II E6h包含層	〃	外灰色、内緑～白色	内面釉付着
1398	〃	〃	〃	II E9c表土	〃	灰色	
1399	〃	〃	〃	II E6h包含層	〃	灰色	
1400	〃	〃	〃	II E6h包含層	〃	灰色	1397と同一個体か
1401	〃	〃	〃	III E1h包含層	〃	灰色	外面口縁部に施釉
1402	〃	〃	〃	II E5h包含層	〃	褐灰色	
1403	〃	〃	〃	III E0h表土	〃	灰色	
1404	〃	〃	〃	11次調査区	〃	白～オリーブ色	内外面に釉
1405	〃	〃	体部	II E6h包含層	12C	灰色	1397、1400と同一個体か
1406	〃	〃	底	II E7i包含層	〃	灰黄色	内面著しく磨耗
1407	〃	〃	〃	13SE2埋土上位	〃	灰白色	外底面回転糸切
1408	〃	〃	〃	13SE2埋土	〃	灰色	内面磨耗、外底面回転糸切
1409	〃	〃	〃	III E0h包含層	〃	灰色、高台のみ暗灰	内面磨耗し赤色の顔料付着
1410	〃	小皿	〃	13次調査区	〃	暗灰色	内面と断面に赤色顔料付着
1411	〃	蓋	〃	II E7j包含層	〃	灰黄色	II E9h包含層からも出土、上面の高台状部分は削り出し

第148図 東側調査区渥美産陶器(1)



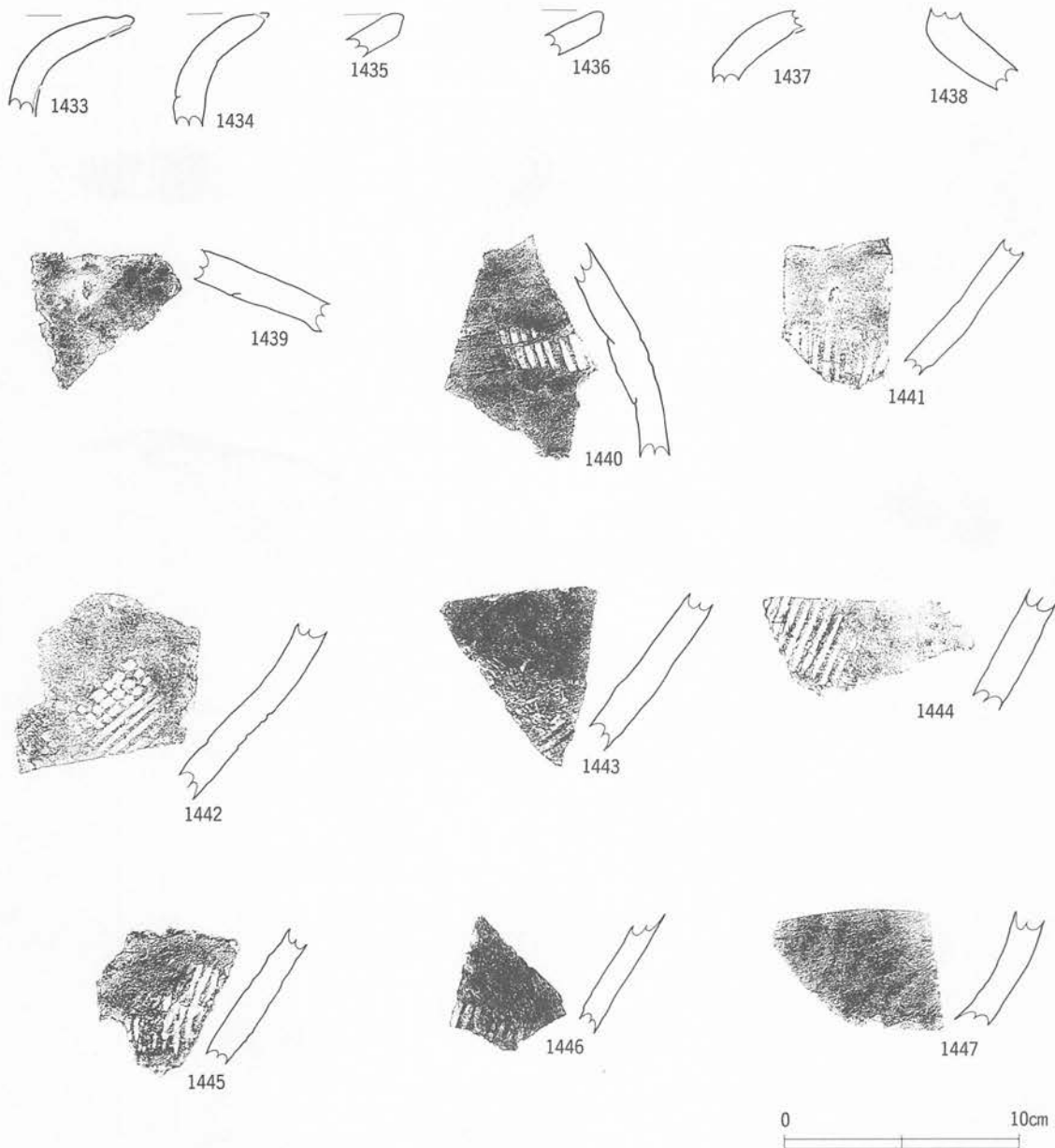
番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1412	渥美	片口鉢	口～体	II E6h包含層	12C	灰色	内面磨耗
1413	〃	〃	底	II E8h包含層	〃	〃	〃
1414	〃	〃	〃	II E1h表土	〃	にぶい赤褐色	〃
1415	〃	〃	口縁	II E6h包含層	〃	灰色	
1416	〃	〃	〃	15SD12 (II E9h)	〃	外暗灰色、内赤褐色	
1417	〃	〃	〃	II E8h包含層	〃	外灰色、内釉	
1418	〃	〃	〃	13SD12埋土 (II F6f)	〃	灰色	内面口縁部上部に自然釉
1419	〃	〃	〃	II E7i包含層	〃	黒褐色	
1420	〃	〃	〃	13SD13埋土 (II F5i)	〃	灰色	
1421	〃	壺	底	II E5hの水穴	〃	灰色	

第149図 東側調査区渥美産陶器(2)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1422	渥美	甕	口縁	II E8g表土	12C	茶褐色に緑色の釉	1423、1424と同一個体と思われる
1423	〃	〃	体上	III E0h包含層	〃	外茶褐色に緑色の釉	内面灰色
1424	〃	〃	〃	II E7i包含層	〃	〃	〃
1425	〃	〃	肩	II E6i包含層	〃	茶褐色	外面に灰付着
1426	〃	〃	〃	11次調査区	〃	〃	〃
1427	〃	〃	体下	II E7h包含層	〃	〃	1425、1426と同一個体と思われる
1428	〃	〃	〃	II E6h包含層	〃	〃	1425～1427と同一個体と思われる
1429	〃	〃	〃	13SD12埋土(II F6f)	〃	灰色	
1430	〃	〃	〃	13SD3埋土(III F0d)	〃	〃	
1431	〃	〃	〃	II F区表土	〃	〃	1429と同一個体と思われる
1432	〃	〃	口縁	II E7h包含層	〃	外灰色、内オリーブ色	内面釉付着

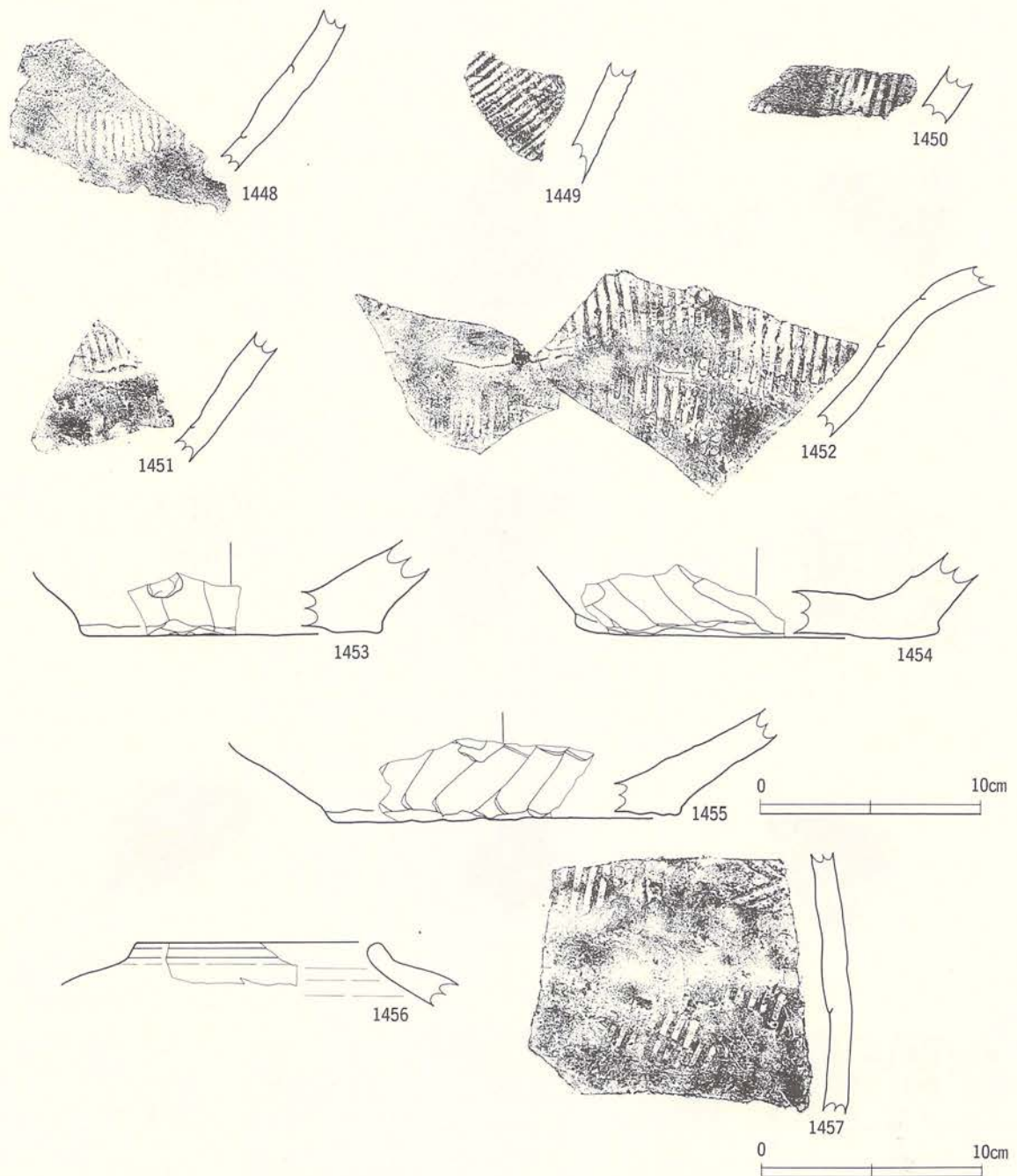
第150図 東側調査区渥美産陶器(3)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1433	渥美	甕	口縁	13SK6埋土1層	12C	外黒褐色、内緑色	内面袖付着
1434	〃	〃	〃	II E8h表土	〃	外茶褐色、内暗灰色	内面を擦っている
1435	〃	〃	〃	II E9h表土	〃	緑色の釉	
1436	〃	〃	〃	III E1f表土	〃	外黒褐色、内緑色	内面袖付着
1437	〃	〃	〃	13SX10埋土	〃	外灰色、内黒褐色	
1438	〃	〃	頸～肩	II F区	〃	外緑色、内灰色	
1439	〃	〃	肩	III E0j表土	〃	〃	
1440	〃	〃	体上	13SK6埋土	〃	暗灰色	
1441	〃	〃	体下	II F区表採	〃	〃	
1442	〃	〃	〃	13SD12埋土(II F6f)	〃	外褐灰色、内灰色	
1443	〃	〃	〃	〃	〃	暗灰色	
1444	〃	〃	〃	III F3b表土	〃	灰色	
1445	〃	〃	〃	II E5i包含層	〃	外暗灰色、内緑色	内面自然袖付着
1446	〃	〃	〃	13SK11埋土(II F5e)	〃	灰色	外面を擦っている
1447	〃	〃	〃	13次調査区	〃	暗灰色	外面上部に灰釉の刷毛塗り

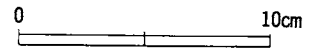
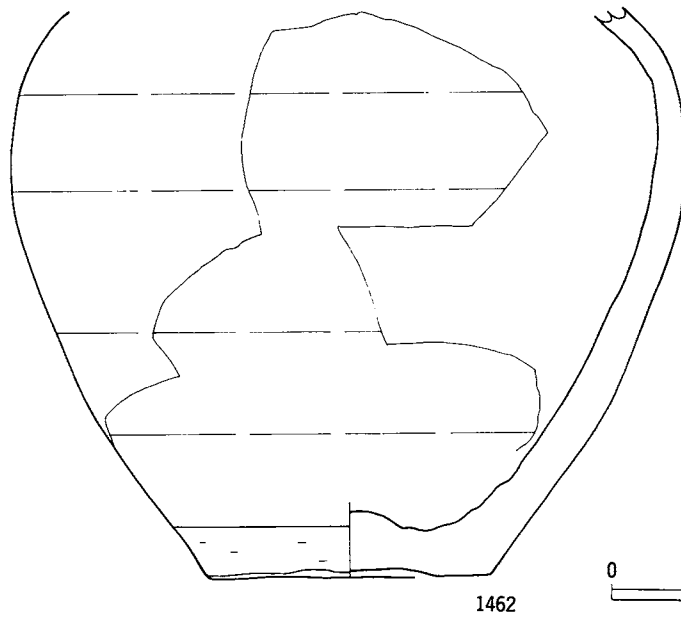
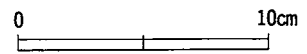
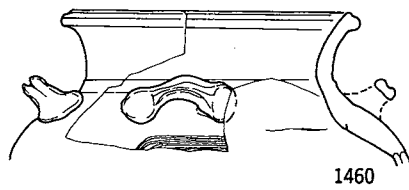
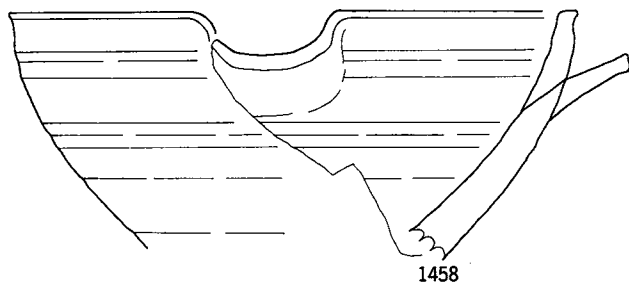
第151図 東側調査区渥美産陶器(4)





番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1448	渥美	甕	体下	IIIF区	12C	暗赤褐色	外面に釉が少量付着
1449	〃	〃	〃	11次調査区	〃	暗灰色	
1450	〃	〃	〃	13SD6埋土下位	〃	灰色	
1451	〃	〃	〃	II E7h包含層	〃	暗灰色	
1452	〃	〃	〃	15SD12埋土(II E4h)	〃	外茶褐色、内緑色	内面に釉付着
1453	〃	〃	底	II E9h包含層	〃	外暗灰色、内白色	内面に厚く釉が付着
1454	〃	〃	〃	II E9i包含層	〃	明黄褐色	内面に釉、灰が付着
1455	〃	〃	〃	II E区	〃	明黄褐色	〃
1456	猿投か	短頸壺	口～肩	IIIE0h表土	〃	外自然釉、内灰色	灰白色で堅緻な胎土
1457	〃	甕	体上	11SD8埋土	〃	灰褐色	灰褐色で堅緻な胎土、渥美の可能性も大

第152図 東側調査区渥美産陶器(5)・猿投産陶器



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
1458	須恵器系	片口鉢	口～体	13SE2埋土	12Cか	赤灰色	灰～赤灰色の胎土
1459	〃	鉢	口縁	11次調査区	〃	暗灰色	赤褐色～灰色の胎土
1460	〃	四耳壺	口～肩	13SK49埋土	〃	灰色	灰色の胎土
1461	〃	甕	体	IIE4h表土	〃	暗灰色	暗灰色の胎土
1462	在地産	壺	体～底	13SK49埋土	12C	赤灰色	赤褐色の胎土、外底面にもみがつら付着、水沼産

第153図 東側調査区須恵器系陶器・在地産陶器



## (2) 中国産陶磁器 (第 154～160 図 写真図版 110～113)

12 世紀に属する中国産の陶磁器は白磁が 112 片、青磁 30 片、青白磁 10 片、陶器 2 片、褐釉が施された合子 1 片が出土した。国産陶器と同様に接合したものは 1 点として数えた。図示したのは白磁 50 点、青磁 26 点、青白磁 10 点、陶器 2 点、褐釉が施された合子 1 点である。2001～2037 は西側調査区、2038～2090 は東側調査区の出土である。

分類、編年は太宰府市教育委員会の基準に準拠している。(太宰府市教育委員会 1983「大宰府条坊跡Ⅱ」太宰府市の文化財 7)、(山本信夫 1988 北宋期貿易陶磁器の編年—大宰府出土例を中心として 貿易陶磁研究 No. 8) など。

### ① 西側調査区の陶磁器

#### 白磁 (第 154、155 図 写真図版 110)

2001～2015 の 15 点がある。器種は碗、皿、四耳壺、水注がある。碗では 12 世紀前葉と思われるⅣ類が 1 点で、他の 3 点は 12 世紀中～後半と思われるⅤ 4 ないしⅧ 1、3 類の碗である。皿はⅣ 1 b 類である。四耳壺は内面施釉ではあるが化粧土がありⅡ系と思われる 2006～2010 とⅢ系と思われる 2011～2013 がある。Ⅱ系の 2007～2009 は近接した場所から出土しており同一個体の可能性も考えられる。2014 は注口部と把手の部分と思われる膨らみが割れ口付近で確認でき、水注と判断できる。2015 もこれと同一個体と思われる。内面は無釉であるが化粧土が無くⅢ系に相当すると思われる。

#### 青磁 (第 155、156 図 写真図版 111)

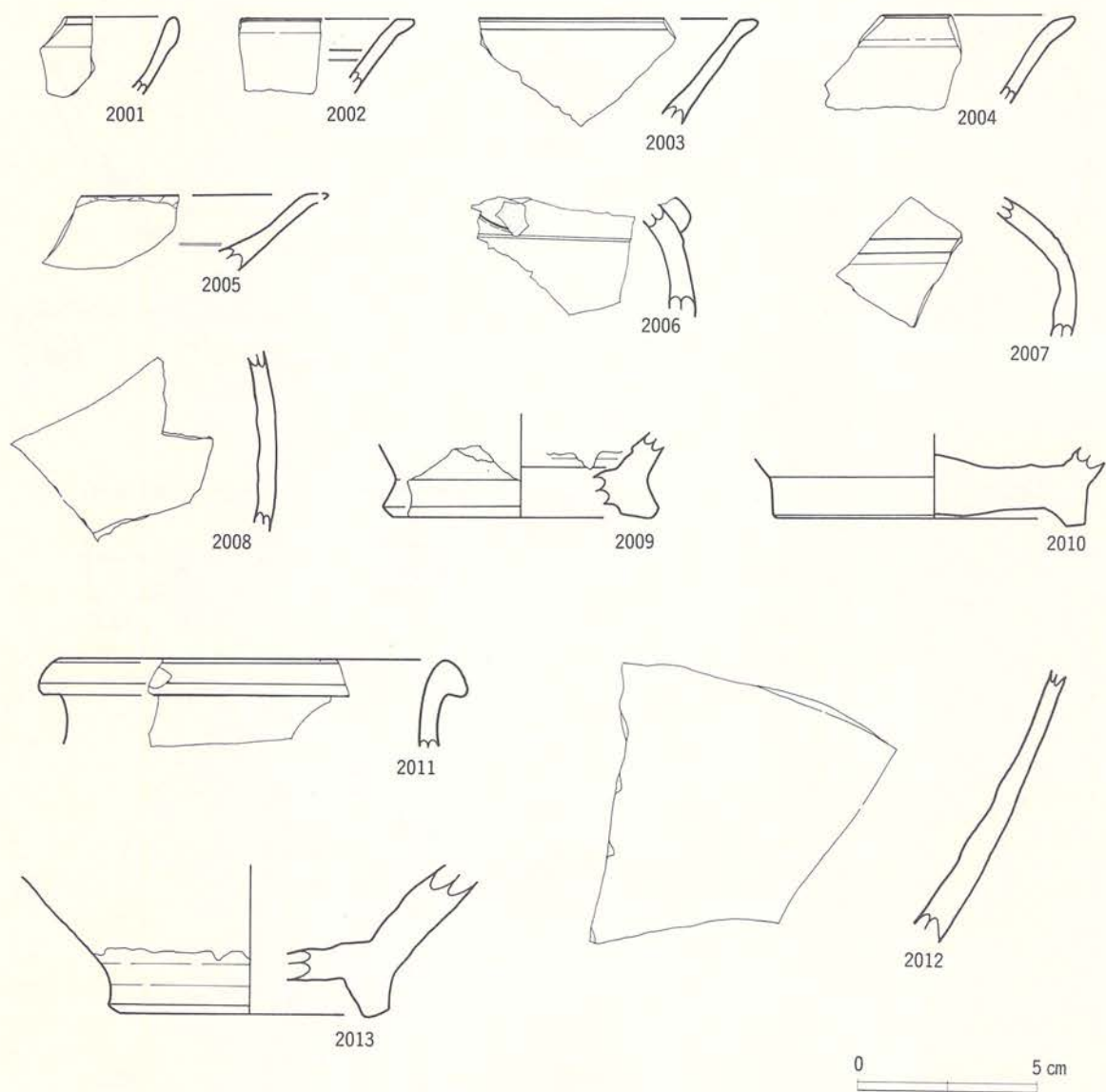
2016～2033 の 18 点がある。2016～2021 は龍泉窯系の製品である。2016～2018、2020 は内面に篋描きが施される。2018 は口縁部外面上端がやや膨らんでいる。2022～2033 は同安窯系の製品である。2022 のみが碗で他は皿である。皿は 11 点であるがこの内 9 点が 15 S K 45 の 1 層から出土している。これらが割れる前は何個体だったか判断は難しいが、底部破片を観察すると、少なくとも 4 個体はあることがわかる。2022 の碗は外面に櫛目文、内面に櫛描きが施される。2023～2027 の皿は内面に櫛描きと篋描きが施される。2028～2033 も文様が施される部位が無い破片であるが、同様の文様が施されていたのであろう。2023、2024 は外底面の釉をかきとっている。

#### 青白磁 (第 156 図 写真図版 111)

2034、2035 の 2 点がある。どちらも合子の身である。2034 は全体の器形がわかる資料である。

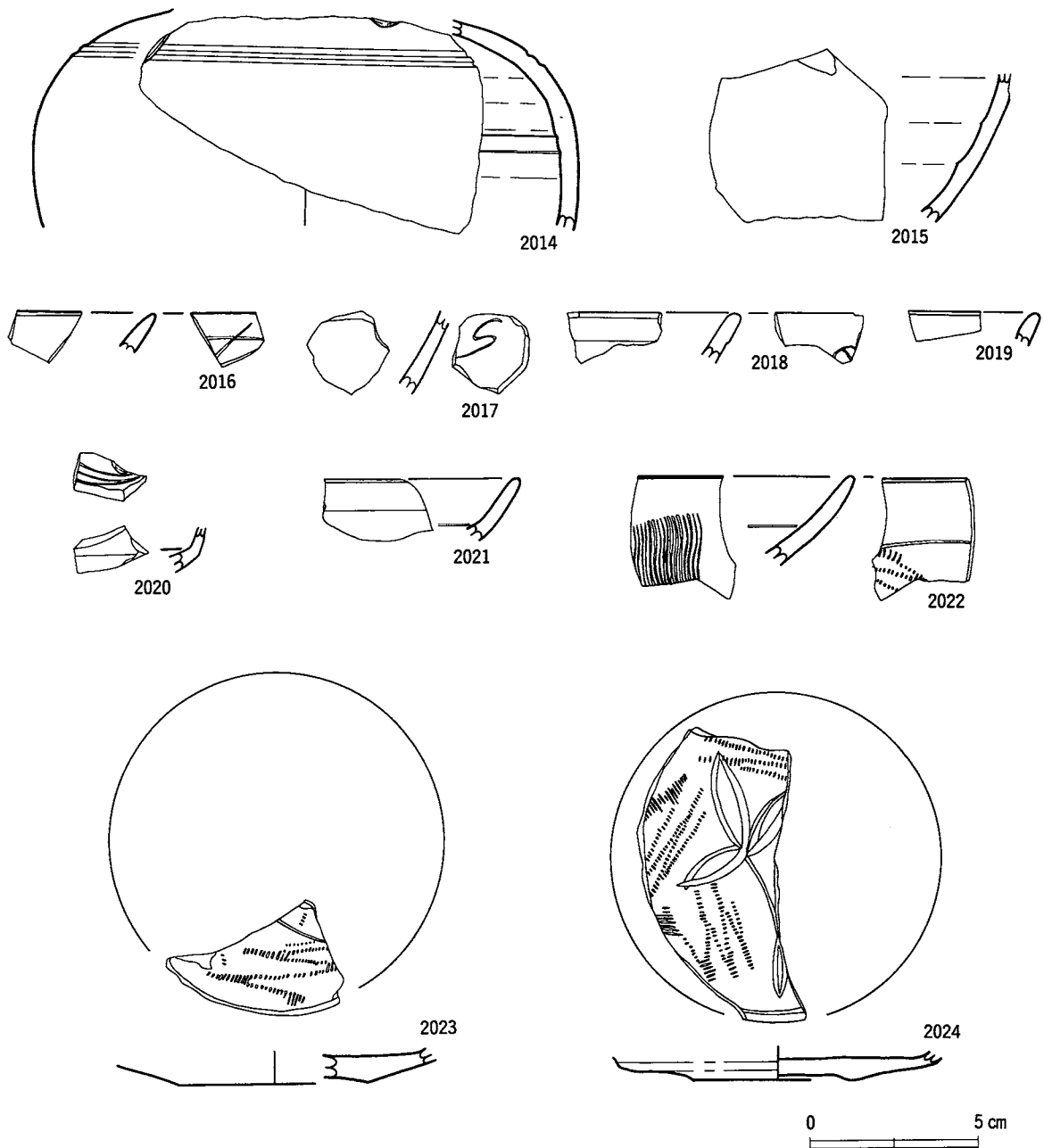
#### 陶器 (第 156 図 写真図版 111)

2037 の 1 点である。壺の底部破片で灰色で黒い粒が入る胎土である。



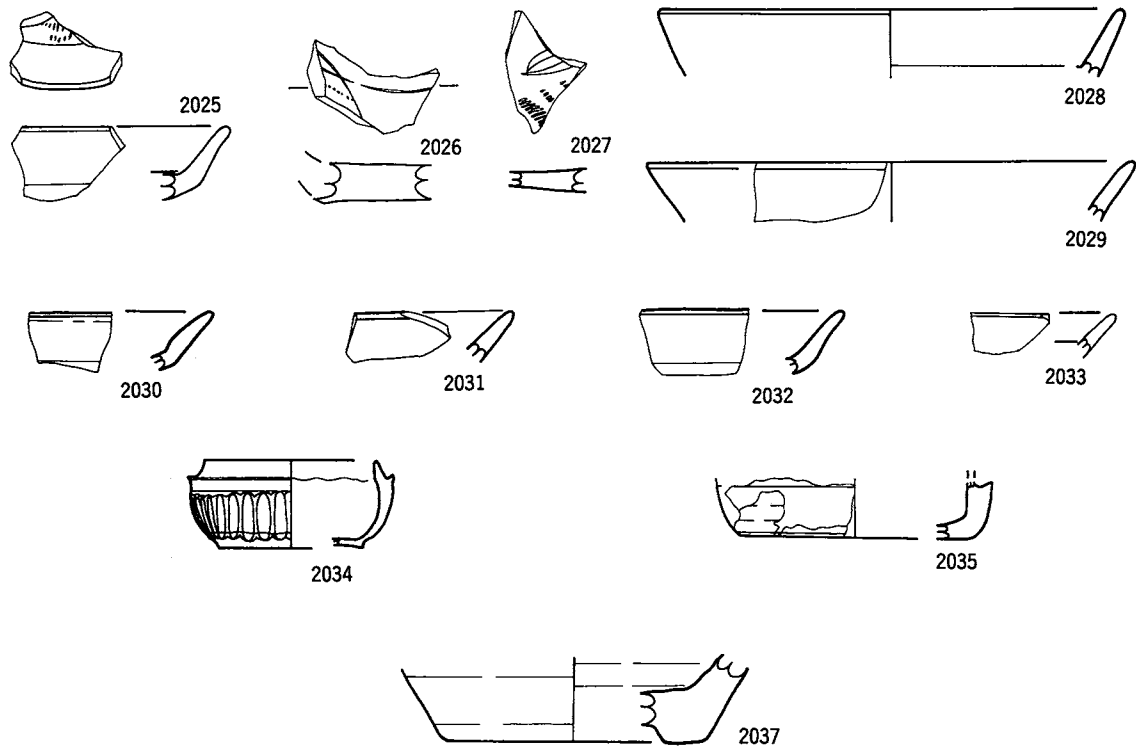
番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
2001	白磁	碗	口縁	I C区	IV	11C後半～12C前半	
2002	〃	〃	〃	I C6eIII層	V4 or VIII.3	12C中～後半	
2003	〃	〃	〃	I C8g II層	〃	〃	
2004	〃	〃	〃	I C8gIII層	〃	〃	
2005	〃	皿	〃	IID5bIV層	IV1b	〃	
2006	〃	四耳壺	肩	10SD3埋土(I C9d)	II系	11C後半～12C前半	化粧土あり、内面施釉
2007	〃	〃	〃	IID4cIII層	〃	〃	〃
2008	〃	〃	体	IID4cIII層	〃	〃	〃
2009	〃	〃	底	IID5cIII層	〃	〃	高台が低い、内面施釉
2010	〃	〃	〃	IID5bIII層	〃	〃	内面施釉
2011	〃	〃	口縁	IID1cIII層	III系	12C中～後半	内面施釉
2012	〃	〃	体	15SE5埋土上位	〃	〃	〃
2013	〃	〃	底	IID1bIV層	〃	〃	〃

第154図 西側調査区中国産陶磁器(1)



番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
2014	白磁	水注	体上	15SK29埋土	III系	12C中～後半	内面無釉、化粧土なし
2015	〃	水注か	体下	10次調査区	〃	〃	内面無釉、2014と同一個体と思われる
2016	青磁	碗	口縁	15焼土16覆土	龍泉 I <sub>2</sub>	〃	
2017	〃	〃	体	IID4dIII層	〃	〃	
2018	〃	〃	口縁	10SD10埋土(I C7d)	龍泉 I <sub>3</sub>	〃	
2019	〃	〃	〃	I C8fIII層	龍泉 I	〃	
2020	〃	皿	体	IID1cIII層	龍泉 I <sub>2</sub>	〃	
2021	〃	〃	口縁	10SD6埋土(IID5b)	龍泉 I <sub>1a</sub>	〃	
2022	〃	碗	〃	I C8d	同安 I b	〃	灰色の胎土
2023	〃	皿	底	15SD25埋土	同安 I <sub>2</sub>	〃	灰色で黒い粒が入る胎土、底面の釉をかきとっている
2024	〃	〃	〃	15SK45 1層	〃	〃	〃

第155図 西側調査区中国産陶磁器(2)



0 5 cm

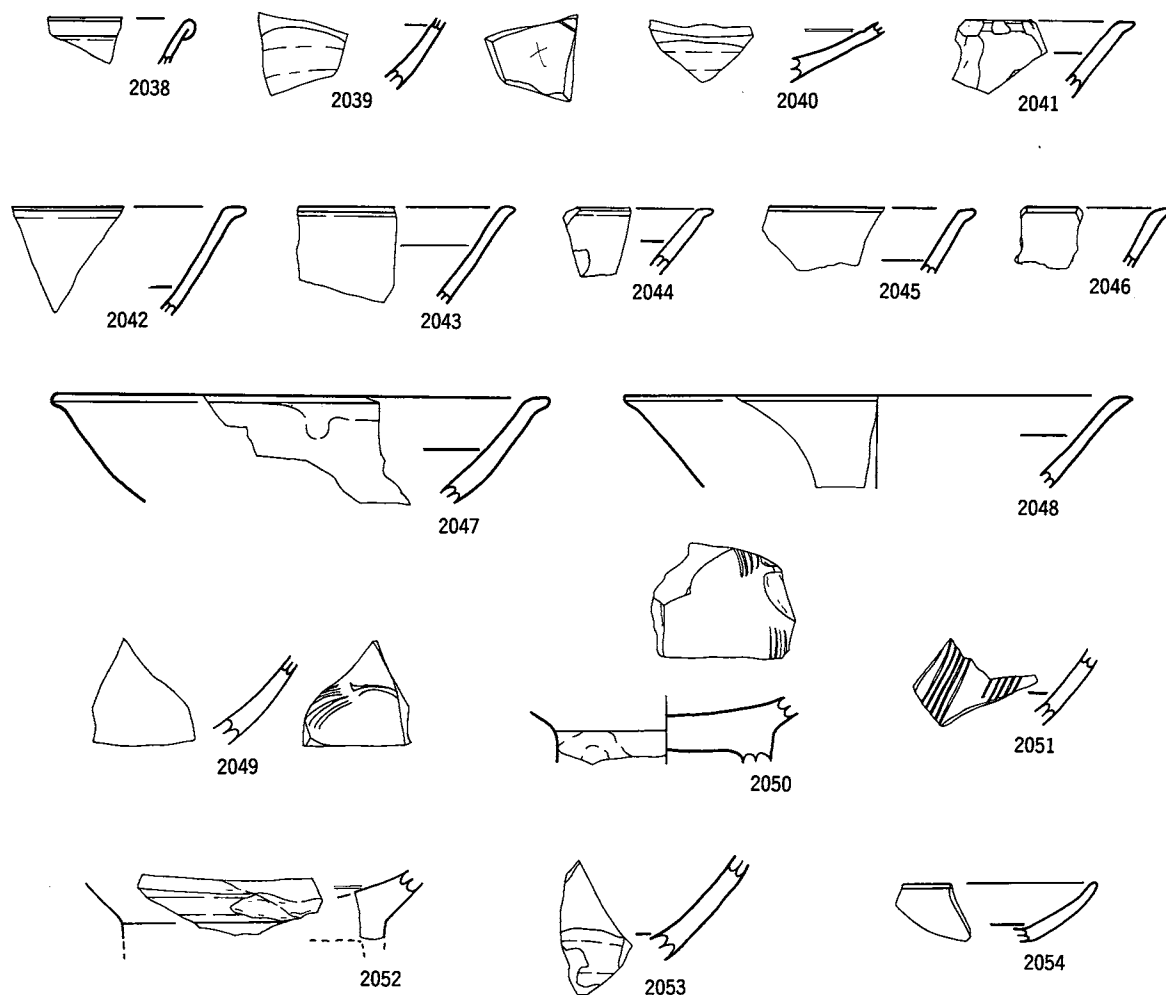
番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
2025	青磁	皿	口縁	15SK45 1層	同安 I	12C中～後半	
2026	〃	〃	底	〃	同安 I <sub>2</sub>	〃	底面の釉をかきとっている
2027	〃	〃	〃	〃	同安 I	〃	
2028	〃	〃	口縁	〃	〃	〃	被熱している
2029	〃	〃	〃	〃	〃	〃	被熱している
2030	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
2031	〃	〃	〃	〃	〃	〃	被熱している
2032	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
2033	〃	〃	〃	10次調査の I C区	同安 I か	〃	釉が黄色がかった
2034	青白磁	合子	完存	10SD6埋土 (IID5c)	—	〃	外底面無釉
2035	〃	〃	体～底	15SD14埋土	—	〃	
2037	褐釉陶器	壺	底	I C8fIII層	—		灰色で黒い粒が入る胎土

第156図 西側調査区中国産陶磁器(3)

②東側調査区の陶磁器

白磁 (第 157～159 図 写真図版 111～113)

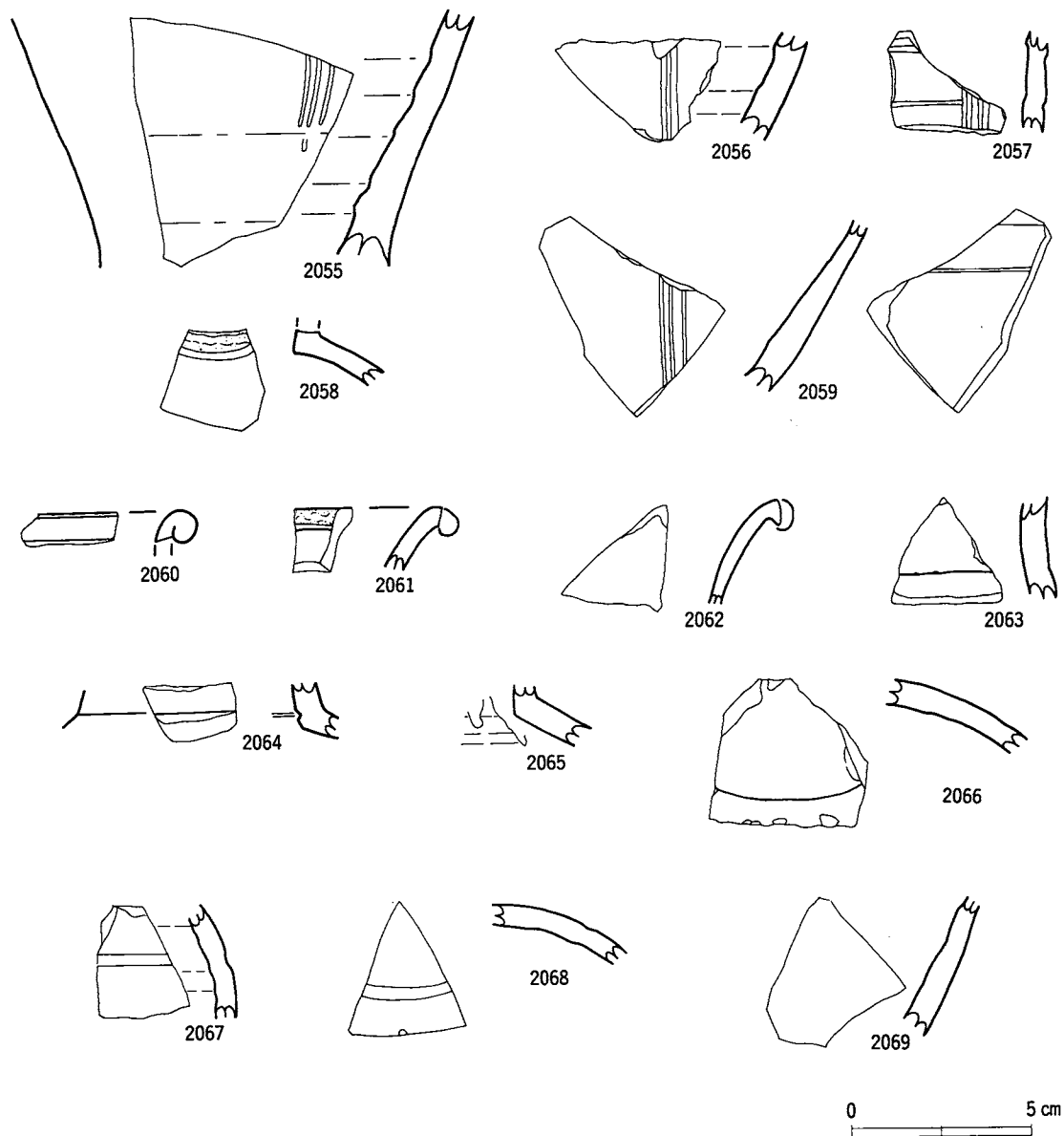
2038～2072 の 35 点がある。器種は碗、皿、四耳壺、蓋？がある。碗では 12 世紀前葉と思われる化粧土のある II 類が 3 点で、他は 12 世紀中～後半と思われる V 4 ないし VIII 1、3 類の碗が 8 点、内面に櫛描きがある V 4 b が 2 点、外面に櫛描きがある V 3 b が 1 点ある。他に底辺部の破片が 2 点ある。皿は化粧土が施され内面に沈線がある IV 1 b 類である。四耳壺は内面無釉で化粧土が施され外面に縦の櫛描きがある 2055、2056 がある。これらは同一個体と推定される。これは典型的な II 系である。また内面施釉ではあるが化粧土があ



0 5 cm

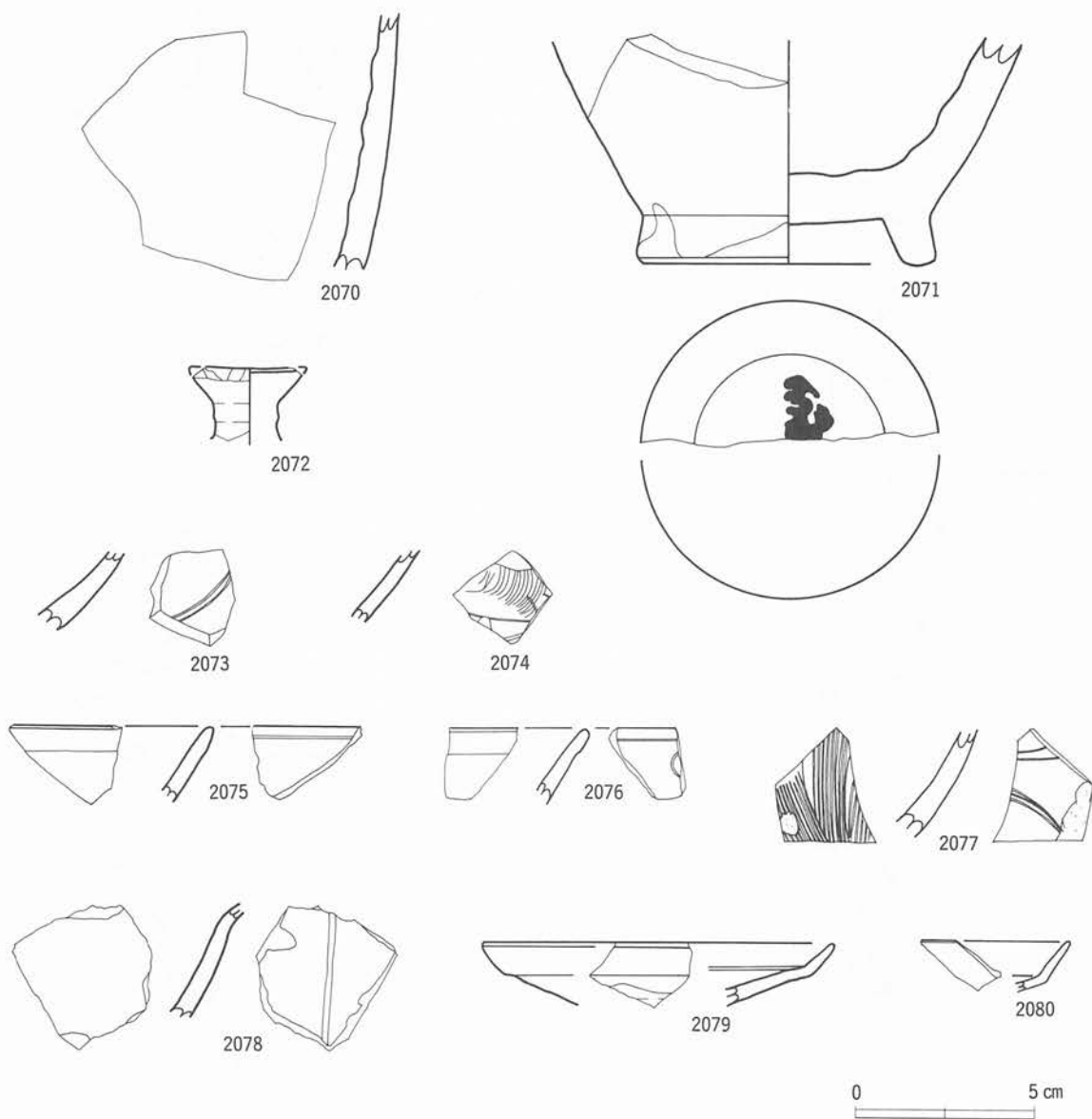
番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
2038	白磁	碗	口縁	II E9j 包含層	II	11C後半～12C前半	化粧土あり
2039	〃	〃	体下	II E6h 包含層	〃	〃	化粧土あり、内面に沈線
2040	〃	〃	〃	II E5i 包含層	〃	〃	〃
2041	〃	〃	口縁	II E7h 包含層	V4 or VIII.3	12C中～後半	内面に沈線
2042	〃	〃	〃	II E8i 包含層	〃	〃	〃
2043	〃	〃	〃	II E8j 包含層	〃	〃	〃
2044	〃	〃	〃	13次のII F区	〃	〃	〃
2045	〃	〃	〃	II E8i 包含層	〃	〃	〃
2046	〃	〃	〃	III E0h 表土	〃	〃	〃
2047	〃	〃	〃	III F4c 表土	〃	〃	〃
2048	〃	〃	〃	II E9h 包含層	〃	〃	〃
2049	〃	〃	体下	II E7g 包含層	V4b	〃	内面に櫛描き
2050	〃	〃	底	11SE1 1層	〃	〃	〃
2051	〃	〃	体下	11次調査区	V3b	〃	外面に櫛描き、被熱している
2052	〃	〃	底	II E5h 包含層	IV2、VIか	—	内面に沈線
2053	〃	〃	体下	II F7j 表土	IV or V	—	〃
2054	〃	Ⅲ	口縁	15SD12埋土(II E8h)	VI1b	11C後半～12C前半	化粧土あり、内面に沈線

第157図 東側調査区中国産陶磁器(1)



番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
2055	白磁	四耳壺	体下	III E0h表土	II系	11C後半～12C前半	内面無釉、化粧土あり、外面櫛描き
2056	〃	〃	〃	III E0h包含層	〃	〃	2055と同一個体か
2057	〃	〃	体	13SD8埋土(II F7a)	〃	〃	化粧土あり、内面施釉、外面櫛描き
2058	〃	〃	肩	II E9h包含層	〃	〃	化粧土あり、内面施釉
2059	〃	〃	体下	II F9e表土	II系か	11C後半～12C前半?	化粧土の有無不明、内面施釉
2060	〃	〃	口縁	13次のII E区	III系	12C中～後半	
2061	〃	〃	〃	III E1f表土	〃	〃	
2062	〃	〃	〃	II E8i包含層	〃	〃	
2063	〃	〃	首	II F5e表土	〃	〃	
2064	〃	〃	頸	III F3c表土	〃	〃	頸部内面に沈線
2065	〃	〃	肩	11次調査区	〃	〃	内面無釉の部分あり
2066	〃	〃	肩	II F9b表土	〃	〃	外面に沈線状の段がめぐる
2067	〃	〃	体上	II E6i包含層	〃	〃	内面無釉、外面に沈線状の段がめぐる
2068	〃	〃	肩	II E6h包含層	〃	〃	外面に沈線状の段がめぐる
2069	〃	〃	体下	II E5i包含層	〃	〃	

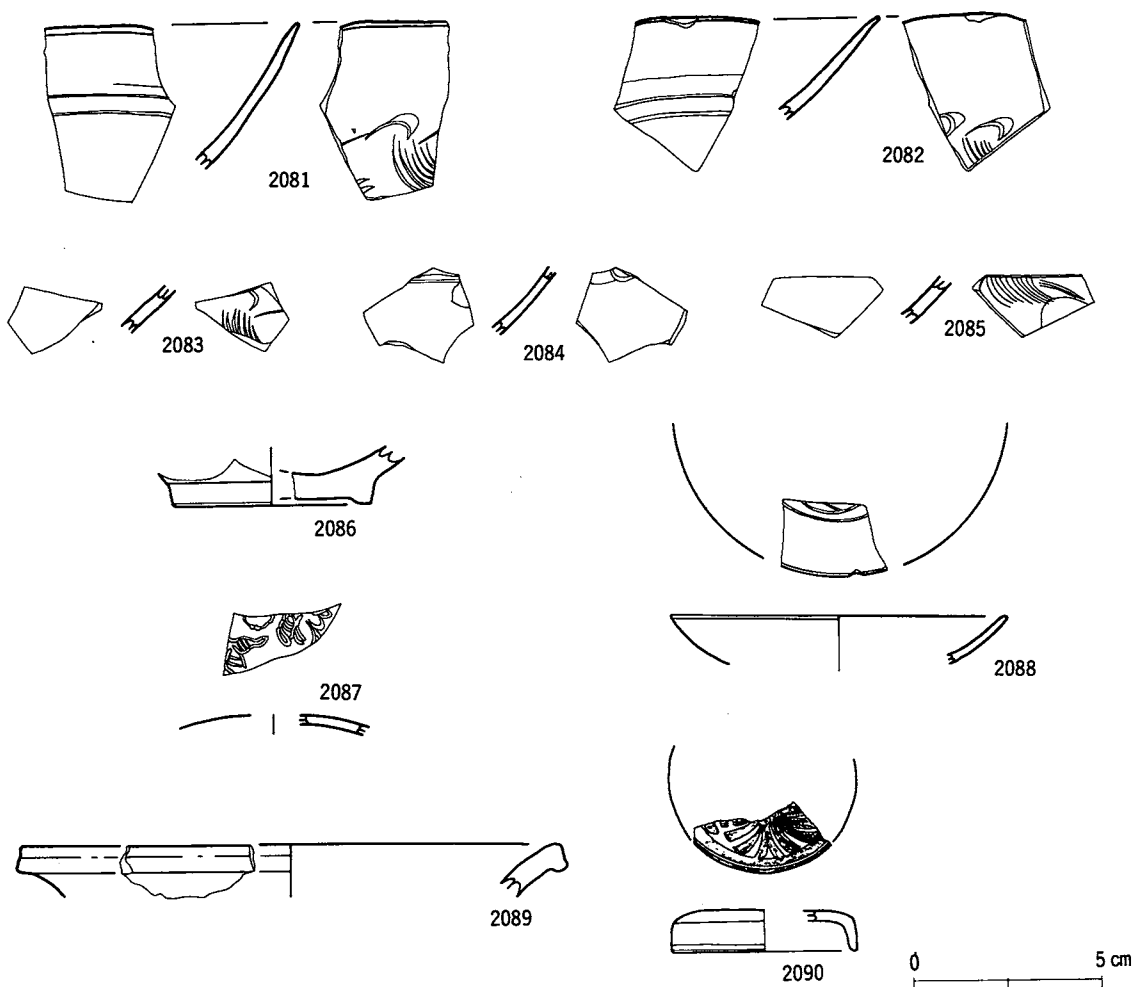
第158図 東側調査区中国産陶磁器(2)



番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
2070	白磁	壺	体	13P871埋土	III系	12C中～後半	内面クロ目明瞭
2071	〃	〃	体下～底	II E7g包含層	〃	〃	壺付磨耗している、底面に墨書あり
2072	〃	蓋	上半	13SK52埋土	〃	〃	上端部が欠けている
2073	青磁	碗	体下	11次調査区	龍泉 I 2	〃	内面にヘラ描き
2074	〃	〃	〃	II E9h包含層	〃	〃	内面にヘラと櫛描き
2075	〃	〃	口縁	II E9h表土	龍泉 I 3	〃	
2076	〃	〃	〃	II E5i包含層	〃	〃	内面にヘラ描き
2077	〃	〃	体下	II E5j包含層	龍泉 I 6b	12C末か	外面に櫛描き
2078	〃	〃	体上	III F2d表土	同安 I A	12C中～後半	内面に白垂線
2079	〃	皿	口縁	II E9h包含層	同安 I 1	〃	釉が黄色がかっている、内面に沈線
2080	〃	〃	〃	II E6h包含層	〃	〃	〃

第159図 東側調査区中国産陶磁器(3)





番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
2081	青白磁	碗	口縁	II E6h 包含層	—	12C	内面へら、櫛描き、2082~2085と同一個体
2082	〃	〃	〃	〃	—	〃	内面へら、櫛描き
2083	〃	〃	体下	〃	—	〃	〃
2084	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃
2085	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃
2086	〃	〃	底	13次調査区	—	〃	外底面無釉
2087	〃	合子	蓋	II E4f 表土	—	〃	型おこし、内面にも施釉
2088	〃	皿	口縁	II E7i 包含層	—	〃	内面にへら描き
2089	褐釉陶器	壺	〃	13P70埋土(III F1d)	—	〃	外面無釉、内面に釉
2090	不明	合子	蓋	11次調査区	—	—	外面褐釉、類例がみあたらない

第160図 東側調査区中国産陶磁器(4)

りII系と思われる2057~2058もある。2059は縦の櫛描きがあるが、化粧土の有無の判別が難しい。おそらくII系なのであろう。III系は2060~2071がある。2071は底部の破片であるが外底面に墨書がある。判読はできない。2072は蓋のつまみと思われる。上面は無釉である。平泉遺跡群ではあまりみかけない器種である。

青磁 (第159図 写真図版113)

2073~2080の8点がある。2073~2077は龍泉窯系の碗である。2073と2076は内面に篋描き、2074は内面に篋描きと櫛描きが施される。2077は外面に櫛描き、内面に篋描きが施される。12世紀末のものであろう。

2078～2080 は同安窯系の製品である。2078 は碗で内面に白垂線がある。2079、2080 は皿である。どちらも釉が黄色がかっている

#### 青白磁 (第 160 図 写真図版 113)

2081～2088 の 8 点がある。このうち 2081～2085 は同一個体である。これらは碗で内面に櫛描きと篋描きが施される。2086 はこれとは別個体の碗の底部破片である。2087 は合子の蓋である。浮彫りの文様がある。2088 は皿で内面に篋描きがある。非常に薄手である。

#### 陶器 (第 160 図 写真図版 113)

2089 は褐釉陶器の壺の口縁部破片である。灰色の胎土である。

#### 褐釉の施された合子 (第 160 図 写真図版 113)

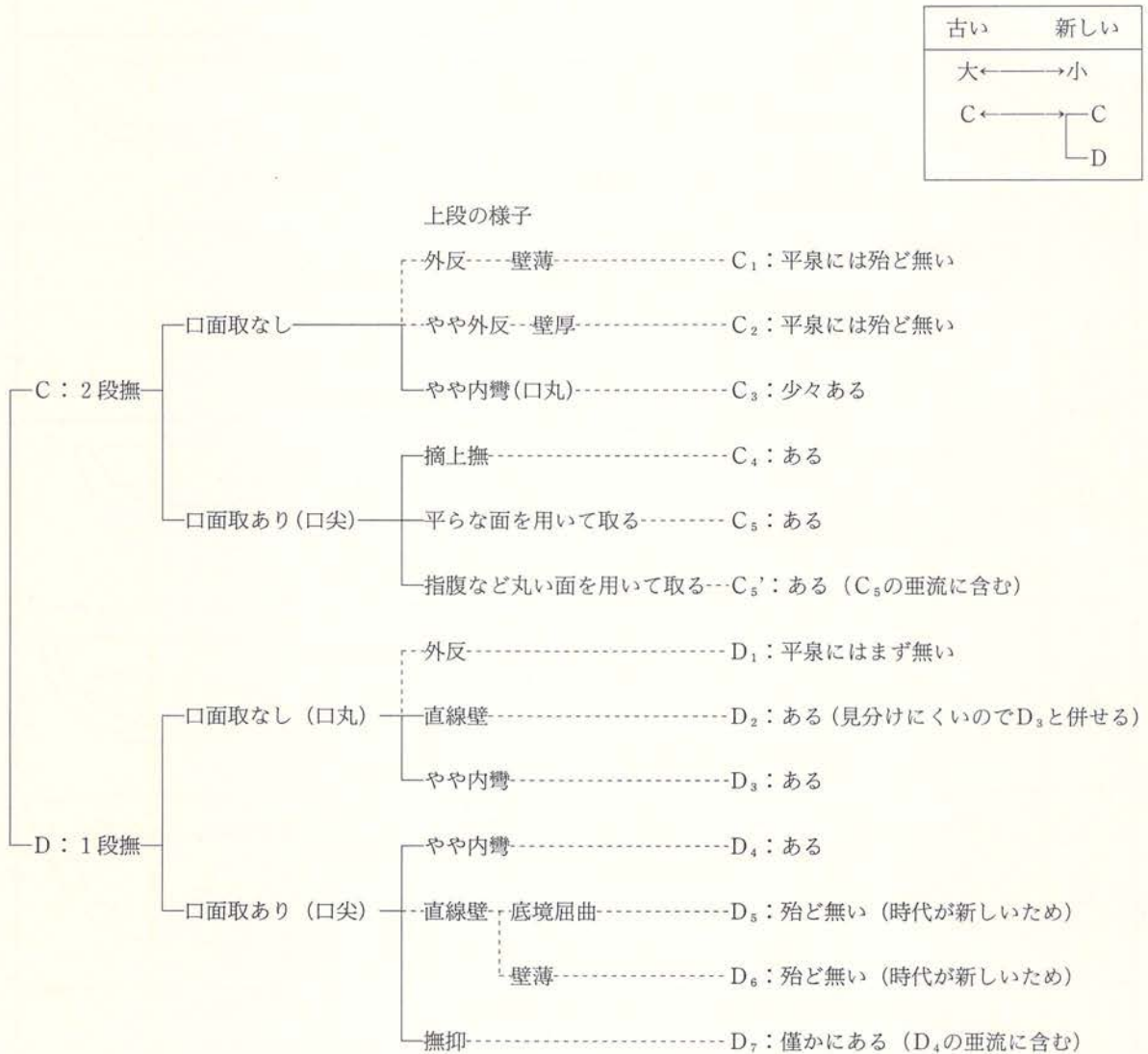
2090 は浮き彫りのある合子の蓋であるが褐色の釉薬が施されている。胎土は青白磁の合子(2034、2035)に似ている。このような製品の類例は平泉遺跡群では無く、他でも管見の及ぶかぎり無いようである。これを中国産の 12 世紀の製品と判断するのは困難かもしれないが、その可能性が高いものとしてここに示しておきたい。

(3)かわらけ (第 161~186 図 写真図版 114~123)

かわらけは今回報告の調査区からは全部で 302 kg の量が出土した。11 S X 2 から柱状高台かわらけが集中して出土したが、それ以外では何らかの儀礼をおこなったと推察される状態で出土したものはない。

手づくねかわらけとロクロかわらけの分類は次項の表と分類図に従っておこなう。この分類基準は松本建速氏の分類(松本建速 1993「柳之御所跡出土かわらけ分類試案」紀要XIII (財)岩手県埋蔵文化財センター)、(松本建速 1995「かわらけの形態分類と編年」柳之御所跡報告書分冊3 考察編 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 228 集)などを参考にして吉田が作成した。(吉田 理)

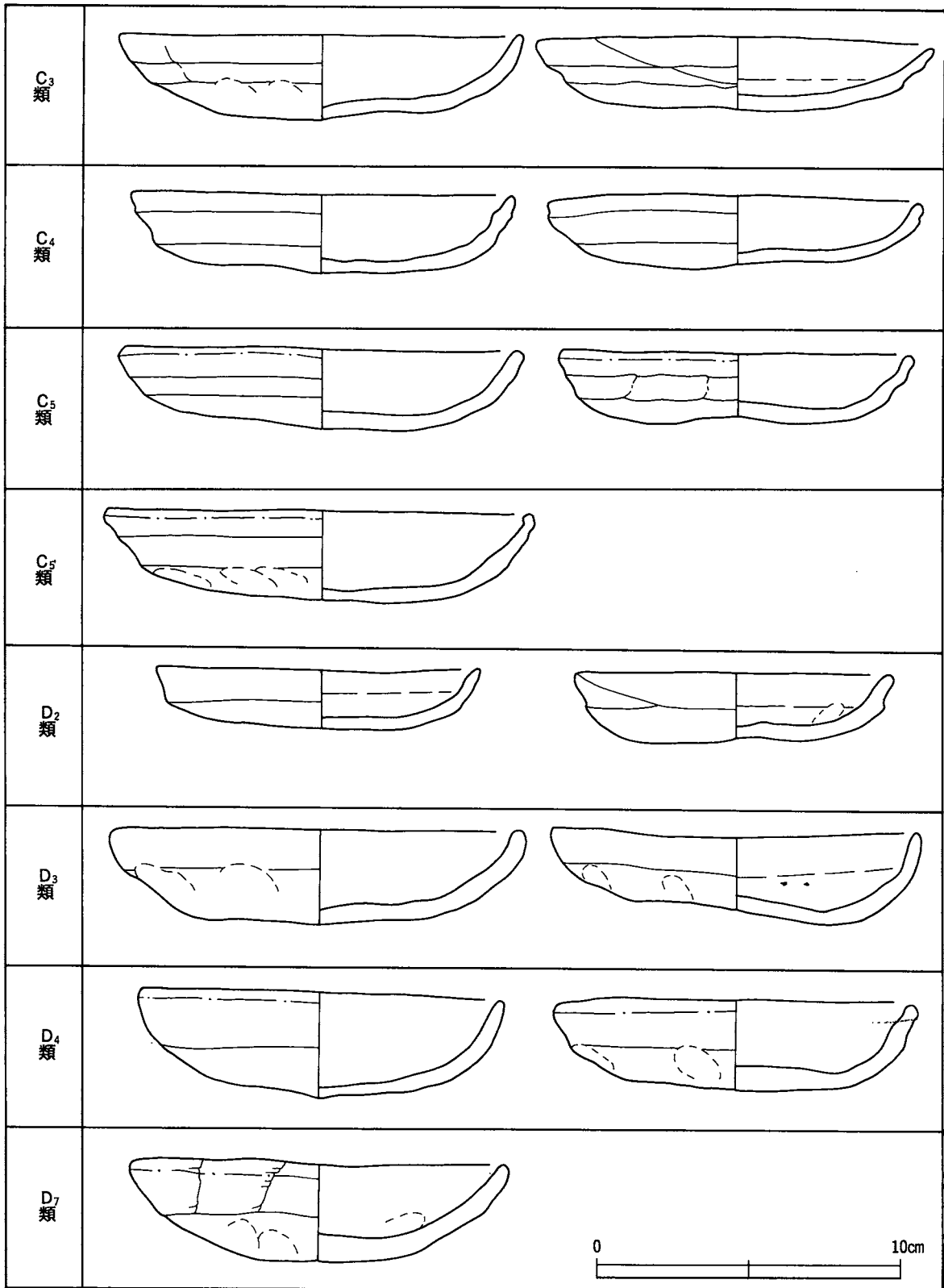
手づくねかわらけ分類表



※ 1 段を潰すように撫があった場合は C (2段撫) とする

※ 2 C<sub>4</sub>と D<sub>4</sub>との判別方法 → C<sub>4</sub>…下段と同じくらい上段が長い (よって 2 段になる)  
 → D<sub>4</sub>…下段よりも上段が短い

※ 3 面取 (例 C<sub>3</sub>D<sub>3</sub>) とつまみ (例 C<sub>4</sub>D<sub>4</sub>) との違い → 面取…断面が三角形に尖る (口尖) △  
 (なお両方ともつまむため内彎する) → つまみ…断面が丸い (口丸) ○



松本建速 1993「柳之御所跡出土かわらけ分類試案」の図1を一部改変

第161図 手づくねかわらけ分類図

ロクロかわらけ分類表

R d' 1 0 - 1

皿<高さ 4.1 ㍉<碗 小<径 13.6 ㍉<大 (大体 11 ㍉で分けて良い)
--

R d : ロクロ大皿

r d : ロクロ小皿

R b : ロクロ大碗

r b : ロクロ小碗

'有 : 高台が全く無い

'無 : 高台が有る

初めの数字…外形 (撫の形)

- 0 : 丸い
- 1 : 直線的
- 2 : 直線的で 2 段

後の数字……撫の数 (外面)

- 0 : 撫が無い・見えない※
- 1 : 1 段見える
- 2 : 2 段見える
- 3 : 3 段見える
- 4 : 4 段見える
- 5 : 5 段以上見える

内面の形

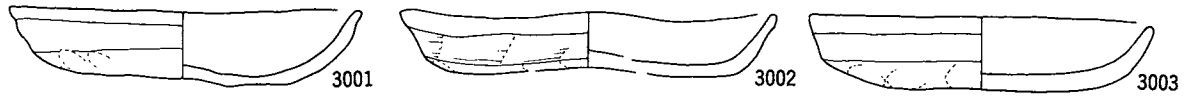
- 0 : ゆるやか
- 1 : 底に対し壁面が垂直的 多くはこの形をとる

※他の数字は総て 1 段・2 段と撫の数を表す数字であるが、0 の場合は、撫の跡が見えないことを表すものである。高台と口縁部との境がはっきり見えないときの方が多い。

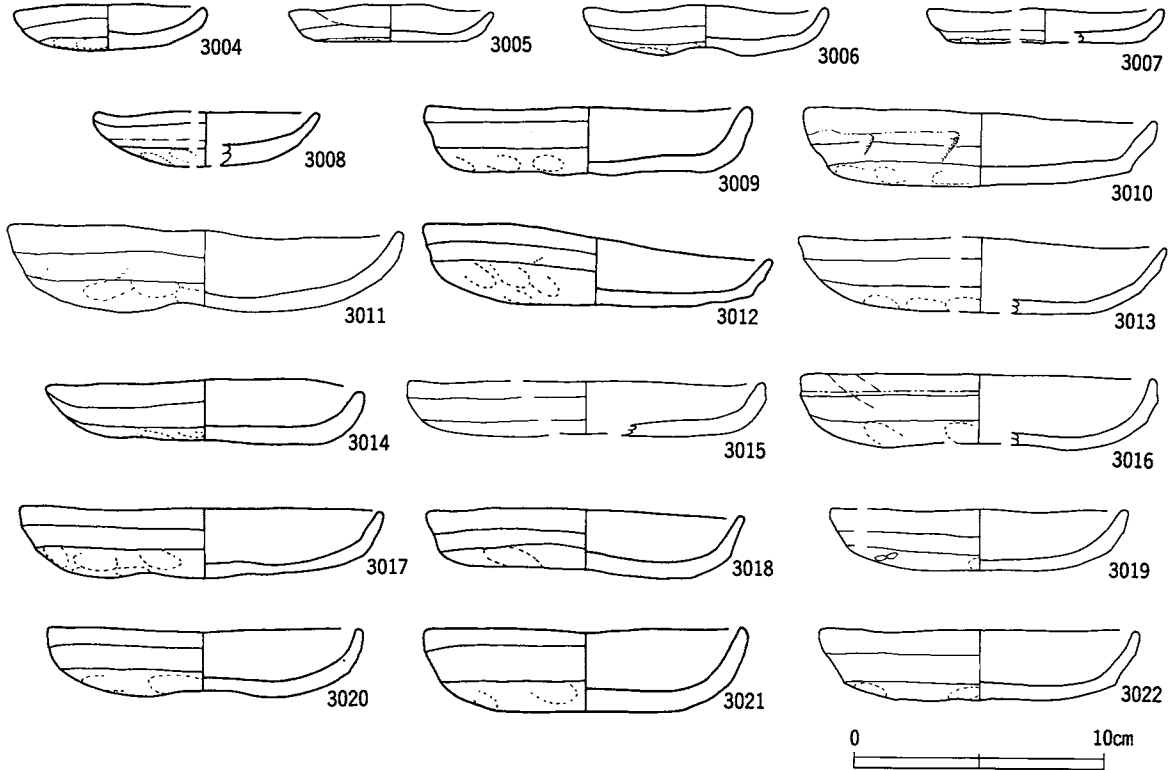
○このほか底の様子も見なくてはならないが、砂粒等の動きで以て回転方向を見定めるものである。帚星のように尻尾があるので、尾の方から本体へ向かって回転したと判断する。多くは右回転である。(このとき底の回転方向が左回転のとき、かわらけ自体は右回転していることに注意する。図表にはかわらけ自体の回転方向を記す。)

○分別困難な場合、実測図を見て判断・訂正する。  
(例…外形の 0 型と 2 型、内面の 0 型と 1 型)

○以上の分類は、大小、皿と碗、高台有無、外形、撫の数、内面の形について分別しているが、今後更に細分するときには、撫の数と内面の形との間 ( - : ハイフンの前 ) に数字をつける。

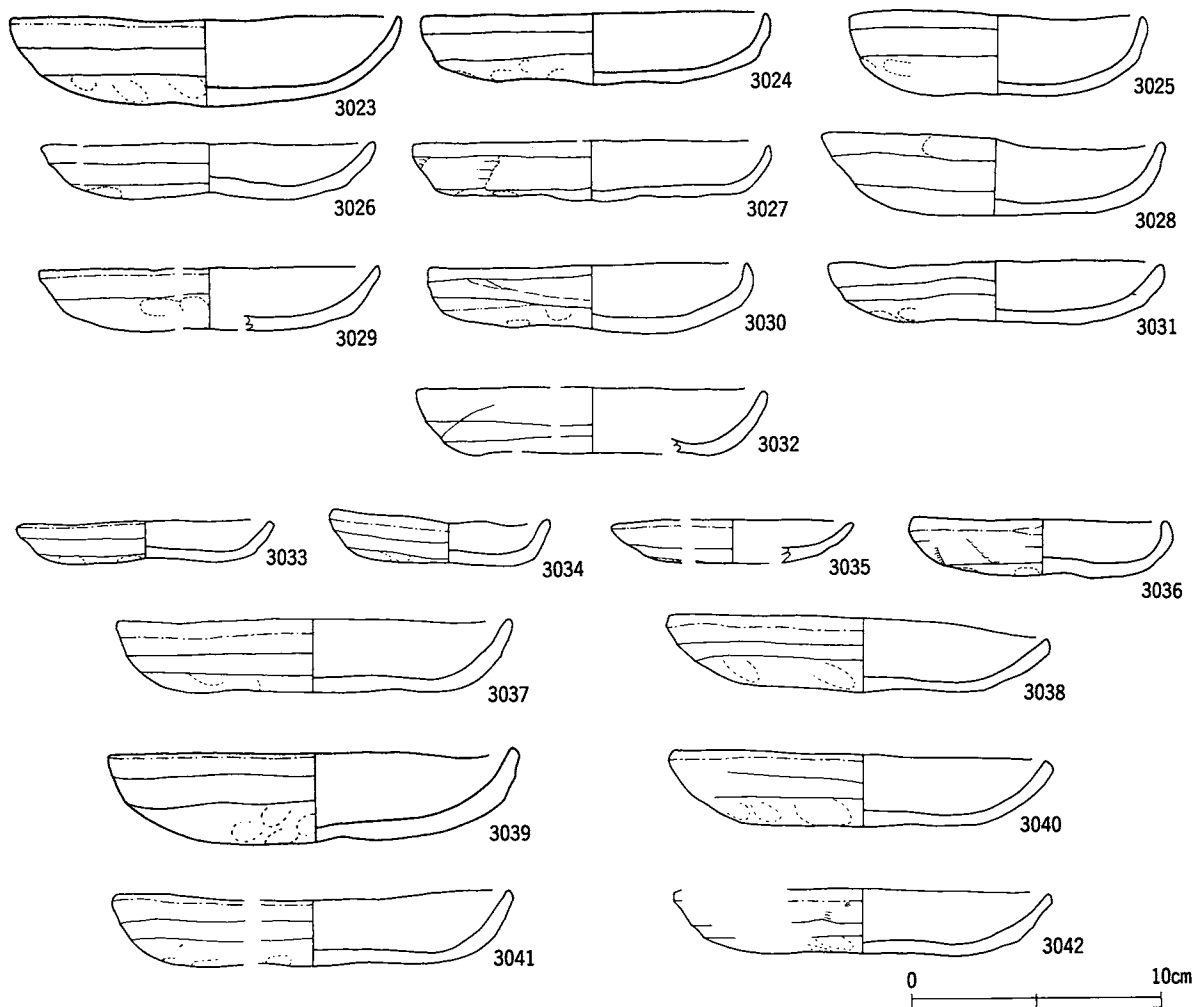


番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3001	15SK45 6層上	C <sub>2</sub>	14.2	3.1	弱い圧痕	完形	
3002	10SD6埋土(IID5c)	C <sub>3</sub>	14.8	2.6	圧痕	1/4	
3003	10SD7A埋土(I C9i)	C <sub>3</sub>	13.5	3.0	〃	完形	



番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3004	10SD4埋土(IID3d)	C <sub>4</sub>	7.5	1.8	圧痕	ほぼ完形	
3005	I C8dIII層	C <sub>4</sub>	8.2	1.5	〃	1/4	
3006	IID5bIV層	C <sub>4</sub>	9.5	2.0	〃	1/2	
3007	IID5bIV層	C <sub>4</sub>	9.5	1.4	〃	1/4	
3008	IID5bIV~V層	C <sub>4</sub>	9.1	2.2	弱い圧痕	1/2	
3009	10SD8埋土(I C7e)	C <sub>4</sub>	12.9	2.7	圧痕	1/4	
3010	I C8e攪乱部	C <sub>4</sub>	13.9	3.0	〃	ほぼ完形	
3011	10次調査区	C <sub>4</sub>	15.5	3.5	〃	3/4	
3012	I C7g	C <sub>4</sub>	13.7	3.2	〃	3/4	
3013	I C9bIII層	C <sub>4</sub>	14.8	3.0	〃	1/4	
3014	10SD6埋土(IID5c)	C <sub>4</sub>	12.3	3.1	〃	2/3	
3015	IID区北東部	C <sub>4</sub>	14.5	2.2	弱い圧痕	1/4	
3016	IID6bIII~IV層	C <sub>4</sub>	13.3	3.0	圧痕	1/2	
3017	IID1bIV層	C <sub>4</sub>	14.2	2.9	〃	3/4	
3018	〃	C <sub>4</sub>	12.4	2.8	〃	3/4	
3019	IID3bIV層	C <sub>4</sub>	12.9	2.5	〃	1/4	
3020	IID5bIV層	C <sub>4</sub>	12.2	2.7	弱い圧痕	1/4	
3021	〃	C <sub>4</sub>	12.5	3.3	圧痕	1/4以上	
3022	IID5cIV層	C <sub>4</sub>	12.9	2.9	〃	〃	

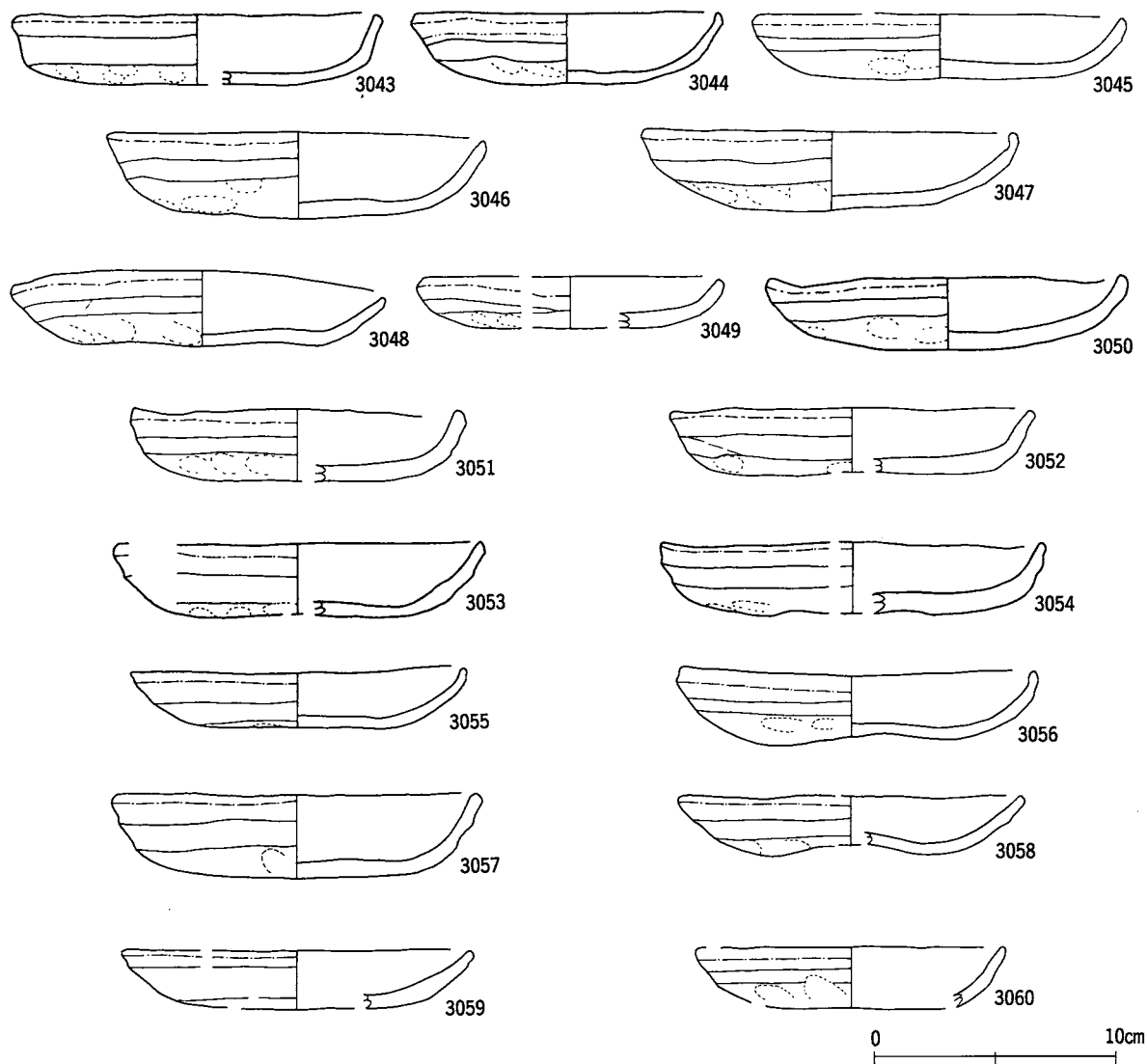
第162図 西側調査区のかわけ(1)



番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3023	IID5bIV~V層	C <sub>4</sub>	15.3	3.6	圧痕	3/4以上	
3024	IID5cV層	C <sub>4</sub>	13.7	2.9	〃	〃	
3025	15SK45 6層上	C <sub>4</sub>	12.0	3.4	弱い圧痕	ほぼ完形	
3026	15SK45 1層	C <sub>4</sub>	13.3	2.3	圧痕	1/4	
3027	15SE5埋土上部	C <sub>4</sub>	14.3	2.5	〃	〃	
3028	IID5cV層	C <sub>4</sub>	13.8	3.3	〃	ほぼ完形	
3029	15SE2埋土	C <sub>4</sub>	13.6	2.5	〃	1/4以下	
3030	IIC6C	C <sub>4</sub>	13.0	2.8	〃	1/2	
3031	IID5cV層	C <sub>4</sub>	15.9	2.5	〃	1/2	
3032	15SE13埋土	C <sub>4</sub>	13.9	2.8	圧痕なし	1/4以下	
3033	10SD4埋土(IID3b)	C <sub>5</sub>	10.0	1.8	弱い圧痕	3/4	
3034	10SD6埋土(IID5b)	C <sub>5</sub>	8.5	2.1	圧痕	1/4	
3035	IC8eIII層	C <sub>5</sub>	9.6	1.8	〃	1/4以上	
3036	IID5bIV層	C <sub>5</sub>	10.0	2.4	〃	ほぼ完形	
3037	10SD3埋土(IC8f)	C <sub>5</sub>	15.5	3.0	〃	1/4	
3038	10SD4埋土(IID1b)	C <sub>5</sub>	15.0	3.0	〃	ほぼ完形	
3039	IID1b表土	C <sub>5</sub>	15.8	3.7	〃	完形	
3040	〃	C <sub>5</sub>	14.8	3.0	〃	1/2	
3041	10SD6底面(IID5b)	C <sub>5</sub>	16.6	3.0	〃	1/4以上	
3042	10SD6底面(IID5b)	C <sub>5</sub>	14.9	2.7	〃	1/2	

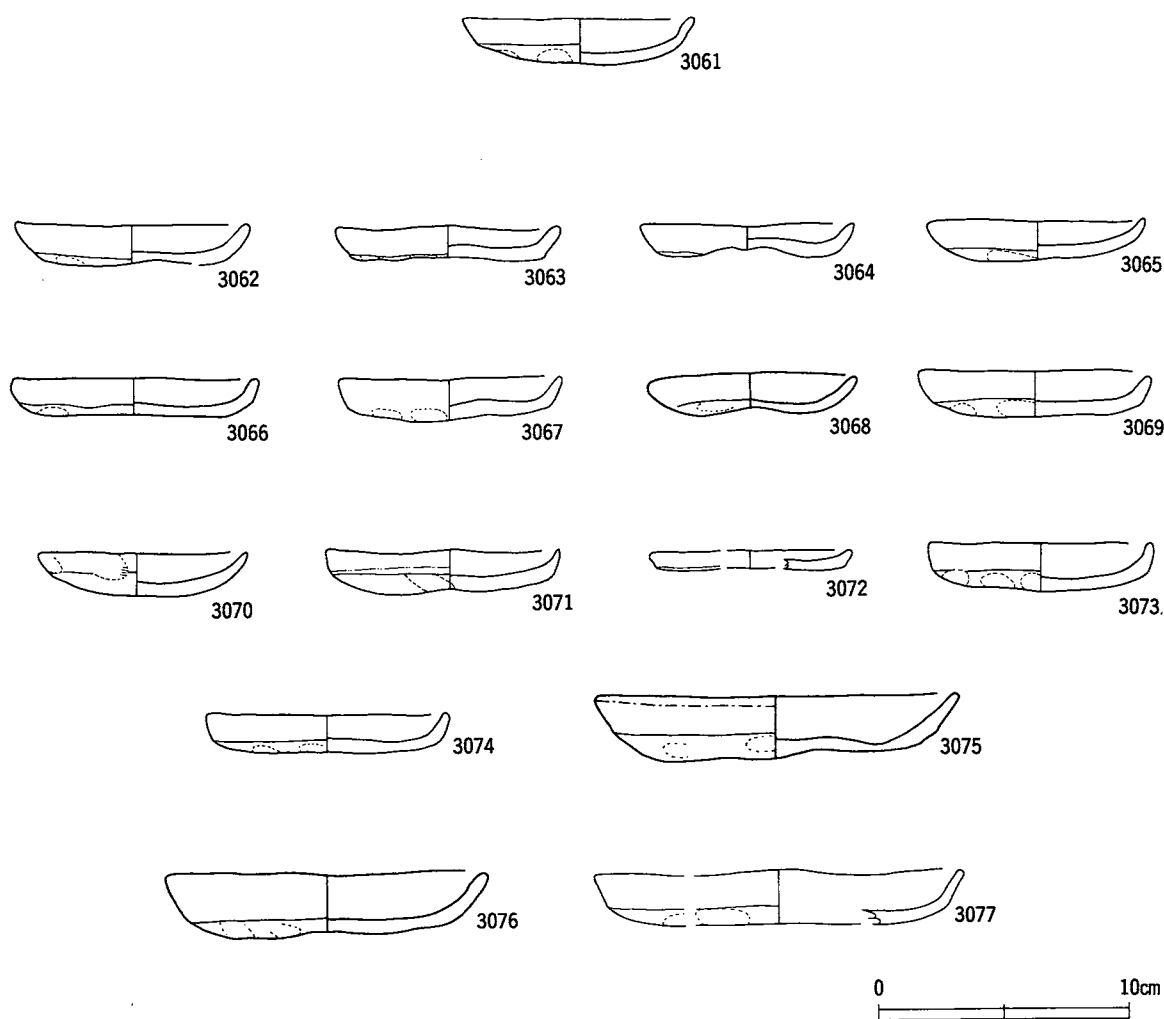
第163図 西側調査区のかかわりけ(2)





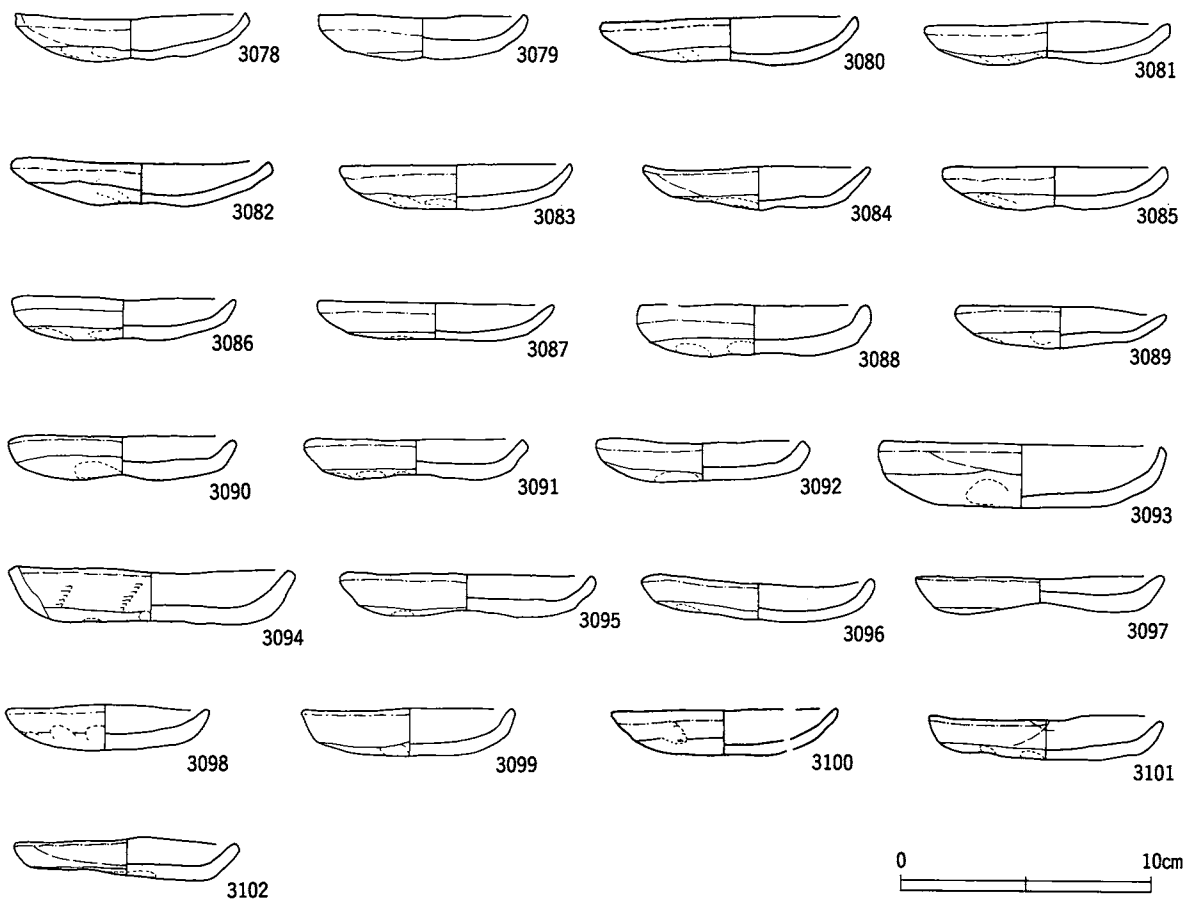
番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3043	10SD10埋土下部	C <sub>s</sub>	15.1	3.0	圧痕	1/4	
3044	I C4dIII層下位	C <sub>s</sub>	12.5	3.1	〃	1/2	
3045	I C6dIII層下位	C <sub>s</sub>	15.1	2.8	〃	1/4	
3046	I C8d	C <sub>s</sub>	15.4	3.6	〃	3/4以上	
3047	IID1bIII層	C <sub>s</sub>	15.1	3.4	〃	1/4以上	
3048	〃	C <sub>s</sub>	15.2	3.2	〃	3/4	
3049	IID区北東側III層	C <sub>s</sub>	12.6	2.2	〃	1/4	
3050	IID3cIV層	C <sub>s</sub>	14.4	3.0	弱い圧痕	3/4	
3051	IID5bIV層	C <sub>s</sub>	13.8	3.0	圧痕	1/4	
3052	〃	C <sub>s</sub>	14.9	2.8	弱い圧痕	1/2	
3053	IID5bV層	C <sub>s</sub>	15.3	3.1	圧痕	1/4以上	
3054	10次調査区	C <sub>s</sub>	15.9	3.0	〃	1/4	
3055	15SE2埋土	C <sub>s</sub>	14.0	2.6	弱い圧痕	1/2	
3056	IID6cV層	C <sub>s</sub>	14.9	3.3	〃	〃	
3057	15SD24埋土	C <sub>s</sub>	15.4	3.5	圧痕	1/2	
3058	15SE13埋土	C <sub>s</sub>	14.3	2.5	〃	1/4以下	
3059	〃	C <sub>s</sub>	14.4	2.5	圧痕なし	〃	
3060	〃	C <sub>s</sub>	12.8	2.6	圧痕	1/4以下	

第164図 西側調査区のかわらけ(3)



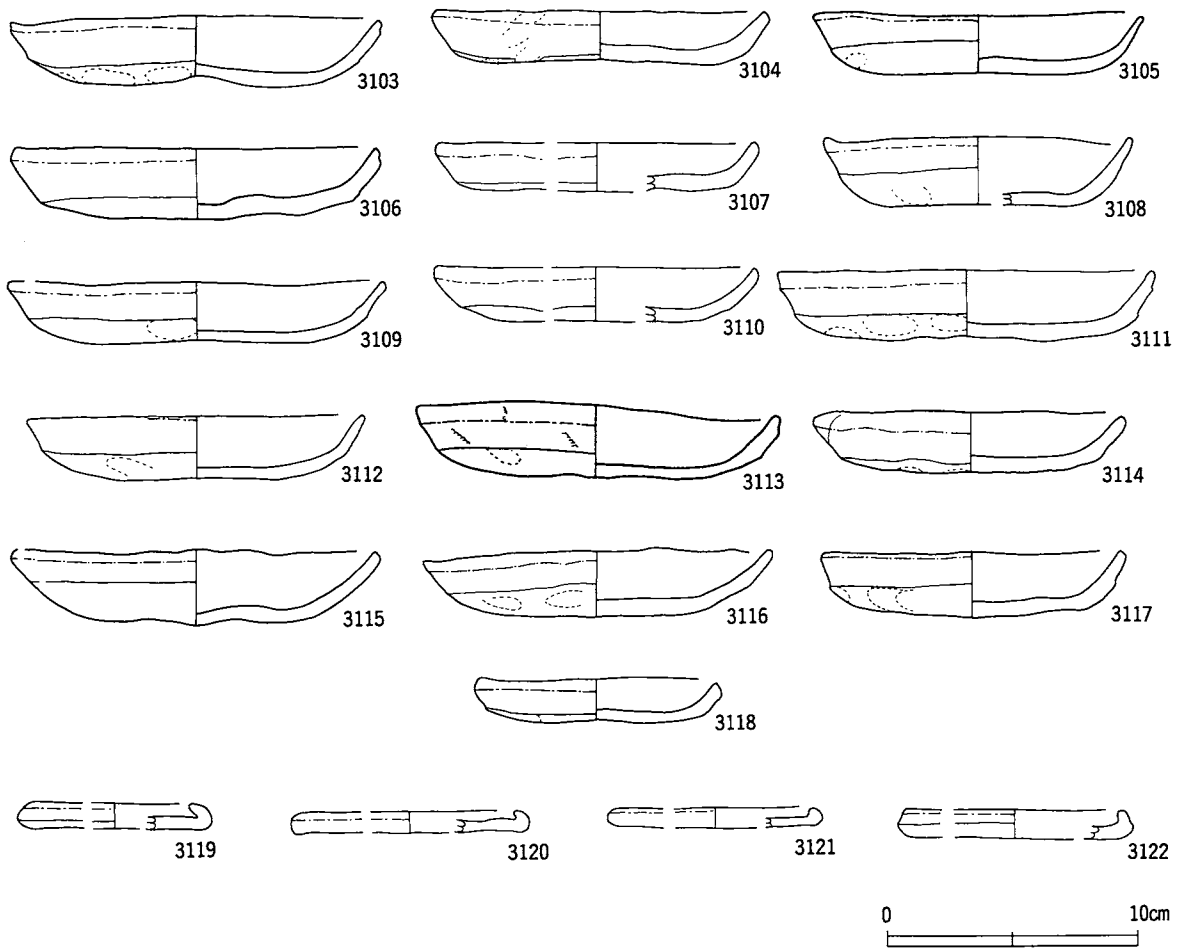
番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3061	15SK30埋土	D <sub>2</sub>	9.3	1.9	圧痕	1/2	
3062	10SD3埋土(I C8f)	D <sub>3</sub>	9.2	1.8	弱い圧痕	1/2	
3063	IID5bIII層	D <sub>3</sub>	8.7	1.5	圧痕	1/2	
3064	I C区	D <sub>3</sub>	8.4	1.4	〃	〃	
3065	IID5bIV層	D <sub>3</sub>	8.5	1.7	〃	ほぼ完形	
3066	IIC4bIV~V層	D <sub>3</sub>	9.9	2.1	〃	1/4	
3067	IID3dV層	D <sub>3</sub>	8.8	1.8	〃	1/2	
3068	IID5bV層	D <sub>3</sub>	8.1	1.7	弱い圧痕	〃	
3069	10次調査区	D <sub>3</sub>	9.0	1.9	圧痕	ほぼ完形	
3070	IIC7d I層	D <sub>3</sub>	8.5	1.8	〃	完形	
3071	〃	D <sub>3</sub>	9.4	1.8	〃	ほぼ完形	
3072	15SE13埋土	D <sub>3</sub>	8.0	0.8	圧痕なし	1/4以下	
3073	〃	D <sub>3</sub>	8.9	2.0	圧痕	1/4	
3074	〃	D <sub>3</sub>	9.8	1.6	布目痕	1/4	
3075	10SD10埋土(I C7d)	D <sub>3</sub>	14.2	2.7	圧痕	1/4以上	
3076	I C8eIII層	D <sub>3</sub>	12.6	2.8	〃	1/2	
3077	IID5bIII層	D <sub>3</sub>	14.9	2.3	〃	1/4以上	

第165図 西側調査区のかわけ(4)



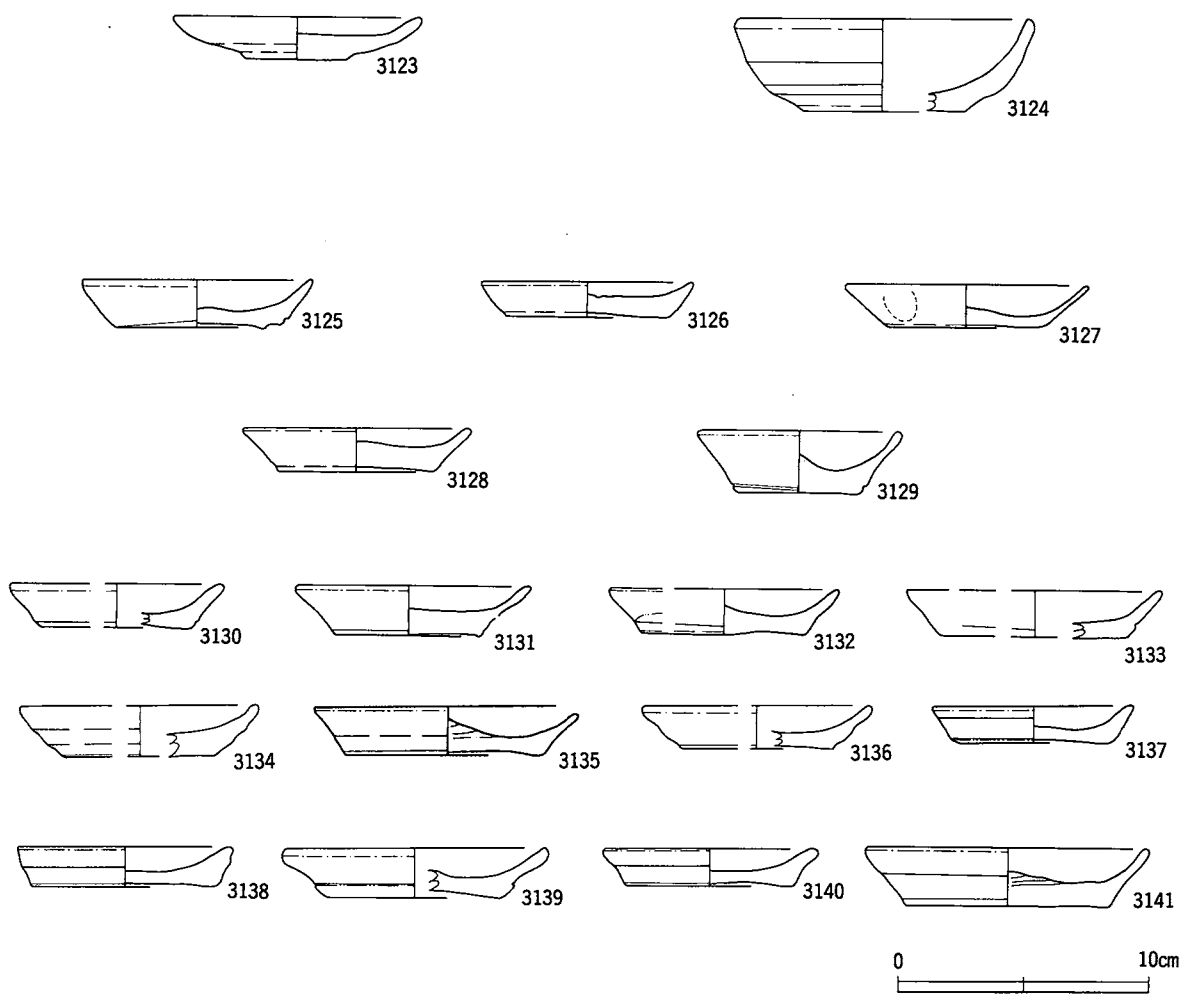
番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3078	10SD4埋土(II D1b)	D <sub>4</sub>	9.1	2.0	圧痕	完形	
3079	10SD6埋土	D <sub>4</sub>	8.1	1.8	弱い圧痕	1/4以下	
3080	10SK1埋土	D <sub>4</sub>	10.0	1.9	圧痕	ほぼ完形	
3081	10SK1埋土	D <sub>4</sub>	9.7	1.8	〃	完形	
3082	10SK1埋土	D <sub>4</sub>	10.3	1.9	〃	〃	
3083	I C7dIII層	D <sub>4</sub>	9.0	1.9	〃	1/4	
3084	I C8eIII層	D <sub>4</sub>	8.8	1.8	〃	1/2	
3085	I C8dIII層	D <sub>4</sub>	9.1	1.8	弱い圧痕	1/4	
3086	IID3cIII層	D <sub>4</sub>	8.8	1.8	圧痕	1/2	
3087	IID5cIII層	D <sub>4</sub>	9.2	1.5	〃	3/4	
3088	IID区(10次調査)	D <sub>4</sub>	8.9	2.1	〃	1/4	
3089	I C8e	D <sub>4</sub>	8.1	1.7	〃	完形	
3090	IID5bIV層	D <sub>4</sub>	8.8	1.8	弱い圧痕	3/4	
3091	〃	D <sub>4</sub>	8.5	1.7	圧痕	1/2	
3092	〃	D <sub>4</sub>	8.1	1.7	〃	ほぼ完形	
3093	〃	D <sub>4</sub>	11.1	2.6	〃	1/4	
3094	IID5cIV層	D <sub>4</sub>	11.0	2.3	〃	1/4	
3095	IID5bIV層	D <sub>4</sub>	9.9	1.7	〃	〃	
3096	IID4dV層	D <sub>4</sub>	9.0	1.8	弱い圧痕	1/2	
3097	IID5bV層	D <sub>4</sub>	9.7	1.6	圧痕	1/4	
3098	15SK45 6層上	D <sub>4</sub>	8.2	1.8	〃	ほぼ完形	
3099	15SK31埋土	D <sub>4</sub>	8.6	1.9	〃	完形	
3100	15SD25埋土	D <sub>4</sub>	10.0	1.8	〃	3/4以上	
3101	15SE13埋土	D <sub>4</sub>	9.4	1.8	圧痕	〃	
3102	15SK29埋土	D <sub>4</sub>	9.0	1.7	〃	3/4	

第166図 西側調査区のかわれけ(5)



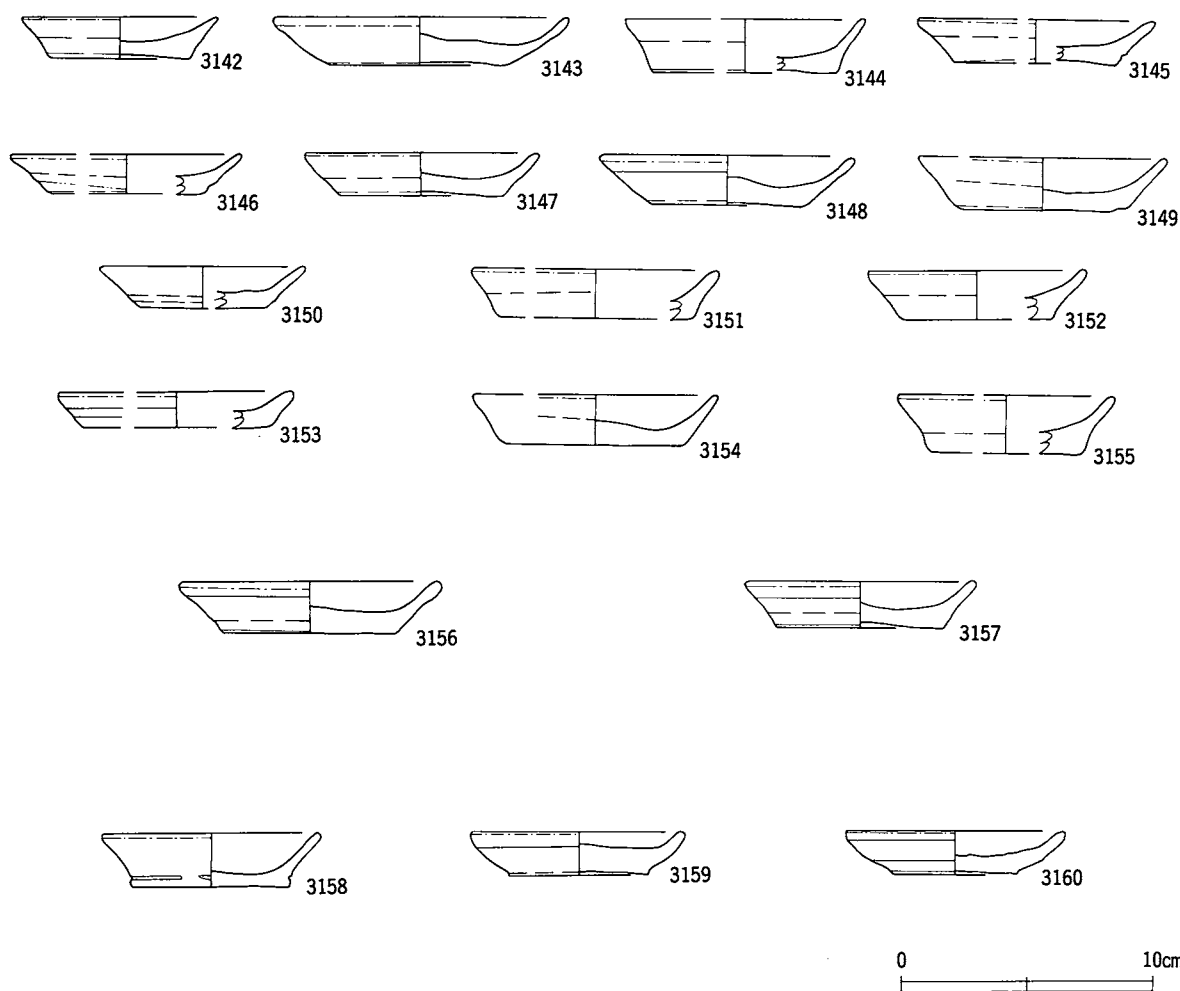
番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3103	10SD7A埋土(I C9i)	D <sub>4</sub>	14.7	2.9	圧痕	完形	
3104	10SD10底面	D <sub>4</sub>	13.0	2.2	圧痕	1/4以上	
3105	I C4eIII層	D <sub>4</sub>	13.0	2.6	〃	1/4	
3106	I C8e	D <sub>4</sub>	14.4	3.0	弱い圧痕	ほぼ完形	
3107	I C8eIII層	D <sub>4</sub>	12.9	2.0	圧痕	1/4	
3108	I C8fIII層	D <sub>4</sub>	12.2	2.8	〃	1/2	
3109	I C8gIII層	D <sub>4</sub>	14.8	2.7	弱い圧痕	1/4以上	
3110	〃	D <sub>4</sub>	12.9	2.3	圧痕	1/4	
3111	IID1bIII層	D <sub>4</sub>	14.8	2.9	〃	1/4	
3112	10SD6埋土	D <sub>4</sub>	13.4	2.5	〃	1/4	
3113	IID5bIV層	D <sub>4</sub>	14.2	3.0	〃	ほぼ完形	
3114	IID5cV層	D <sub>4</sub>	12.4	2.5	〃	1/4	
3115	15SK30埋土	D <sub>4</sub>	14.8	3.0	圧痕なし	1/4	
3116	15SE2埋土	D <sub>4</sub>	14.0	2.8	圧痕	1/2	
3117	IIC6c I層	D <sub>4</sub>	12.0	2.6	〃	1/4	
3118	15SD25埋土	D <sub>7</sub>	10.0	1.9	〃	3/4以上	
3119	IID2dIII層	内折れ	6.9	1.1		1/4以下	
3120	IID3dIII層	〃	9.0	0.9		〃	
3121	〃	〃	8.0	9.0		1/4以上	
3122	IID5bV層	〃	8.8	1.2		1/4以下	

第167図 西側調査区のかわれけ(6)



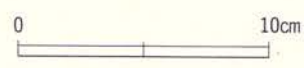
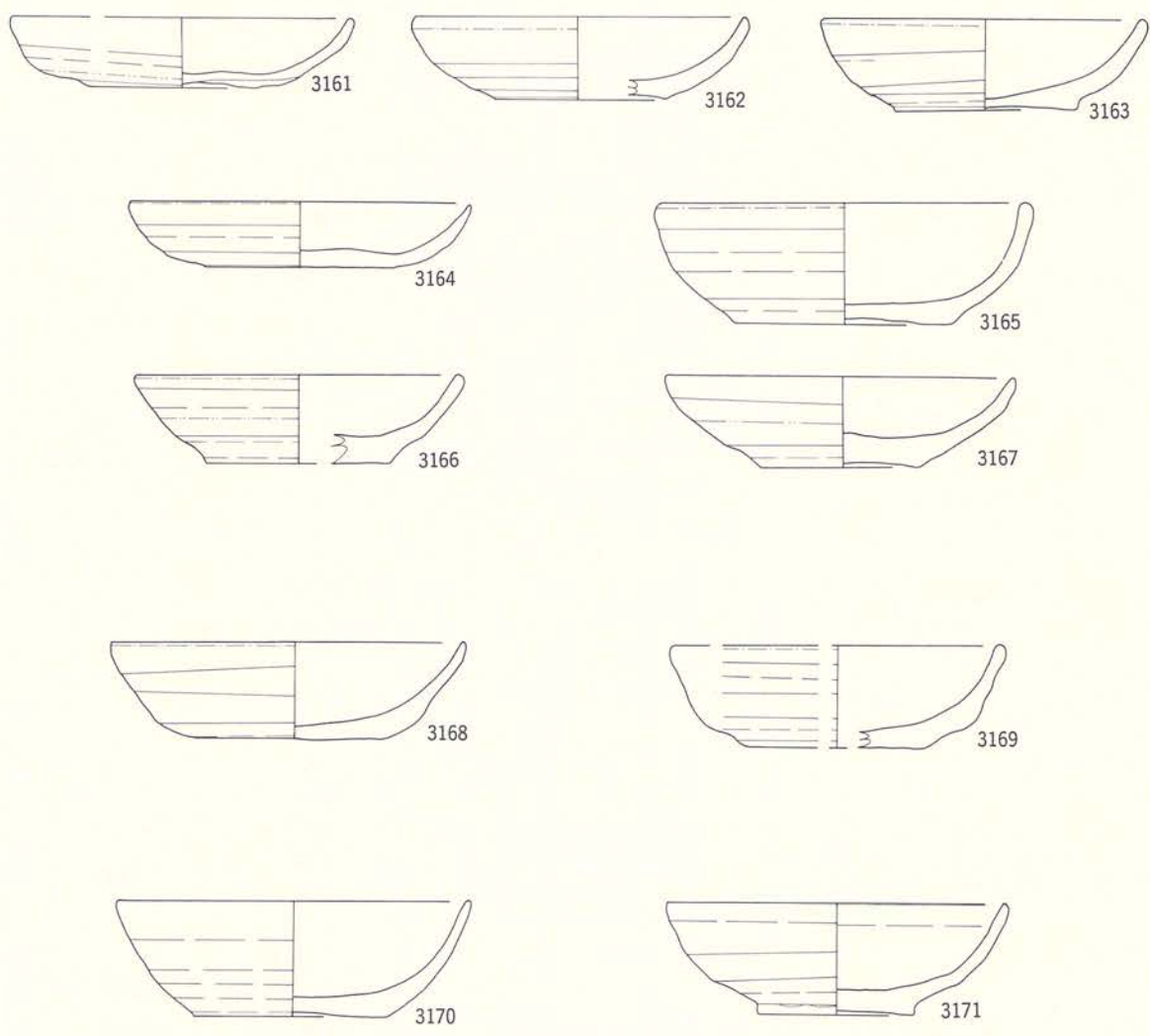
番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3123	15SE13埋土	rd02-1	9.6	1.7	右回転	2/3	
3124	IID1dIII層	rd04-0	12.0	3.7	不明	1/4以下	
3125	IIC4cIV層	rd10-1	9.1	1.9	右回転	1/4	
3126	IID1bIV層	rd10-1	8.3	1.4	不明	1/4	
3127	IIC4bIV層	rd10-1	9.5	1.7	不明	1/4以上	
3128	15SE13埋土	rd10-1	9.0	1.7	右回転	2/3	
3129	15SE17埋土	rd10-0	8.2	2.5	右回転	1/3以下	
3130	IID3dIII層	rd11-1	8.6	1.7	不明	1/4以下	
3131	IIC4bIV層	rd11-1	9.1	2.0	不明	1/2	
3132	〃	rd11-1	9.0	1.8	右回転か	1/2以下	
3133	〃	rd11-1	10.2	1.9	不明	1/4以下	
3134	10SD3埋土(I C8h)	rd12-1	9.5	2.0	不明	1/4以下	
3135	10SD4埋土(IID3d)	rd12-1	10.4	1.9	不明	2/3	
3136	〃	rd12-1	9.2	1.7	不明	1/4	
3137	10SD6埋土(IID5b)	rd12-1	7.7	1.6	不明	1/4以下	
3138	〃	rd12-1	8.5	1.7	右回転	1/4以下	
3139	IID3d	rd12-1	10.6	2.0	不明	1/4	
3140	IID3cIII層	rd12-1	8.3	1.5	不明	1/4以下	
3141	IID3cIII層	rd12-1	11.3	2.4	不明	1/2	

第168図 西側調査区のかわけ(7)



番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3142	IID区III層(10次調査区)	rd12-1	7.7	1.6	不明	1/4	
3143	IIC4bIV層	rd12-1	11.6	1.9	不明	3/4	
3144	〃	rd12-1	9.5	2.1	不明	1/4	
3145	〃	rd12-1	9.5	1.7	不明	1/4以下	
3146	〃	rd12-1	9.7	1.6	不明	1/4以下	
3147	IID3bV層	rd12-1	9.2	1.7	不明	1/4	
3148	IID4dV層	rd12-1	10.0	2.0	不明	1/4	
3149	IID5dV層	rd12-1	9.7	2.1	不明	1/4	
3150	15SK32埋土	rd12-1	8.2	1.7	不明	1/3以下	
3151	10SD4埋土(IID3d)	rd'12-1	9.9	2.0	不明	1/4以下	
3152	〃	rd'12-1	8.7	2.0	不明	1/4以下	
3153	10SD6埋土(IID5c)	rd'12-1	9.4	1.5	不明	1/4以下	
3154	IIC4bIV層	rd'12-1	9.6	2.0	不明	3/4	
3155	IID4dV層	rd'12-1	8.6	2.3	不明	1/4以下	
3156	IID3bV層	rd13-1	10.2	2.1	右回転か	1/4以上	
3157	IID4cIII層	rd13-1	8.9	9.2	不明	1/4	
3158	15SE17埋土	rd20-0	8.7	2.1	右回転か	1/3	
3159	15SE13埋土	rd22-1	8.3	1.8	右回転	完形	
3160	10次調査区	rd23-1	8.5	1.7	不明	1/4	

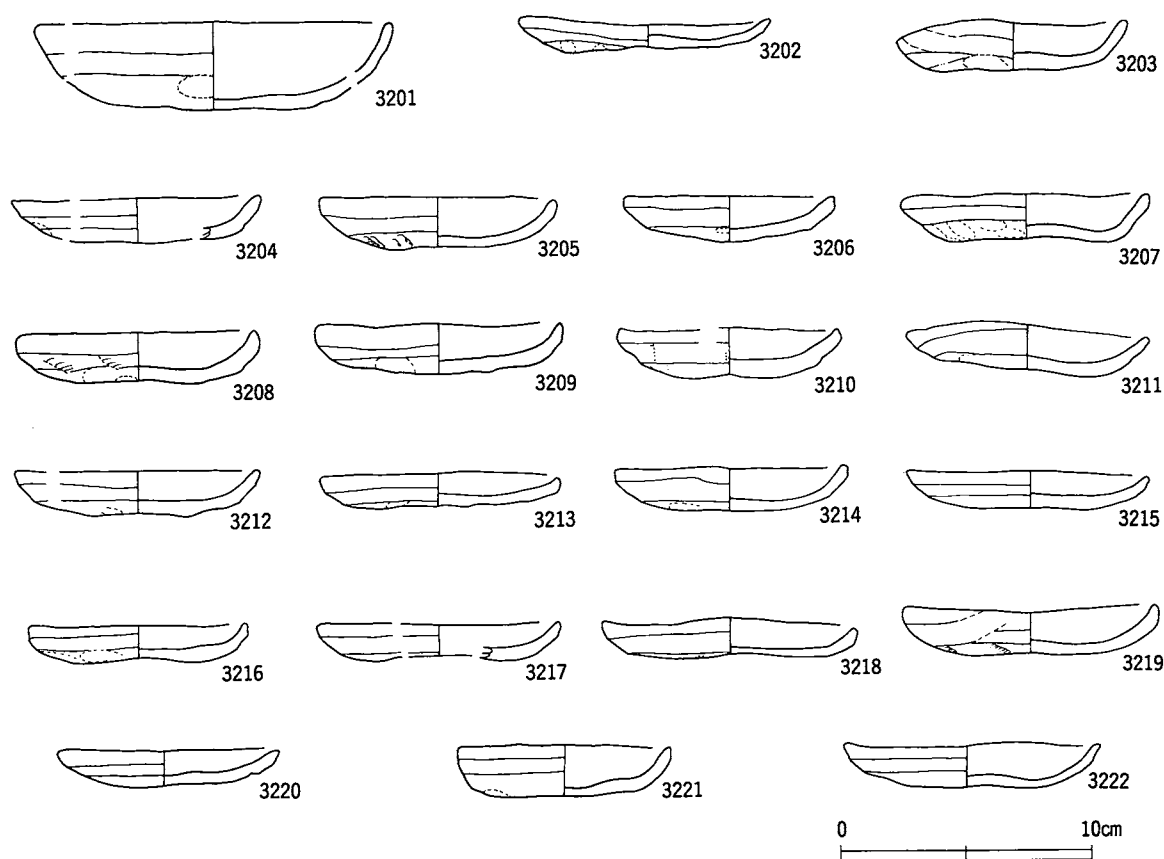
第169図 西側調査区のかわれけ(8)



番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3161	I C8eIII層	Rd23-1	13.8	2.9	右回転	3/4	
3162	10SK1埋土	Rd04-1	13.6	3.3	右回転	1/2	
3163	I C7e	Rd25-0	13.2	3.7	不明	3/4以上	
3164	IID2dIII層	Rd04-1	13.8	2.7	右回転	1/2	
3165	15SE17埋土	Rd24-0	14.7	4.9	右回転	2/3	
3166	〃	Rd25-0	13.3	3.6	左回転か	1/3	
3167	15SE17埋土	Rd03-0	14.0	3.7	右回転か	2/3以上	
3168	I C8cIII層	Rb24-0	14.1	4.0	右回転	3/4	
3169	IID1bIV層	Rb25-0	13.5	4.2	不明	1/4	
3170	15SE17埋土	Rb05-0	14.2	4.6	右回転	1/3	
3171	15SE17埋土	Rb25-0	13.7	4.5	右回転	1/3	

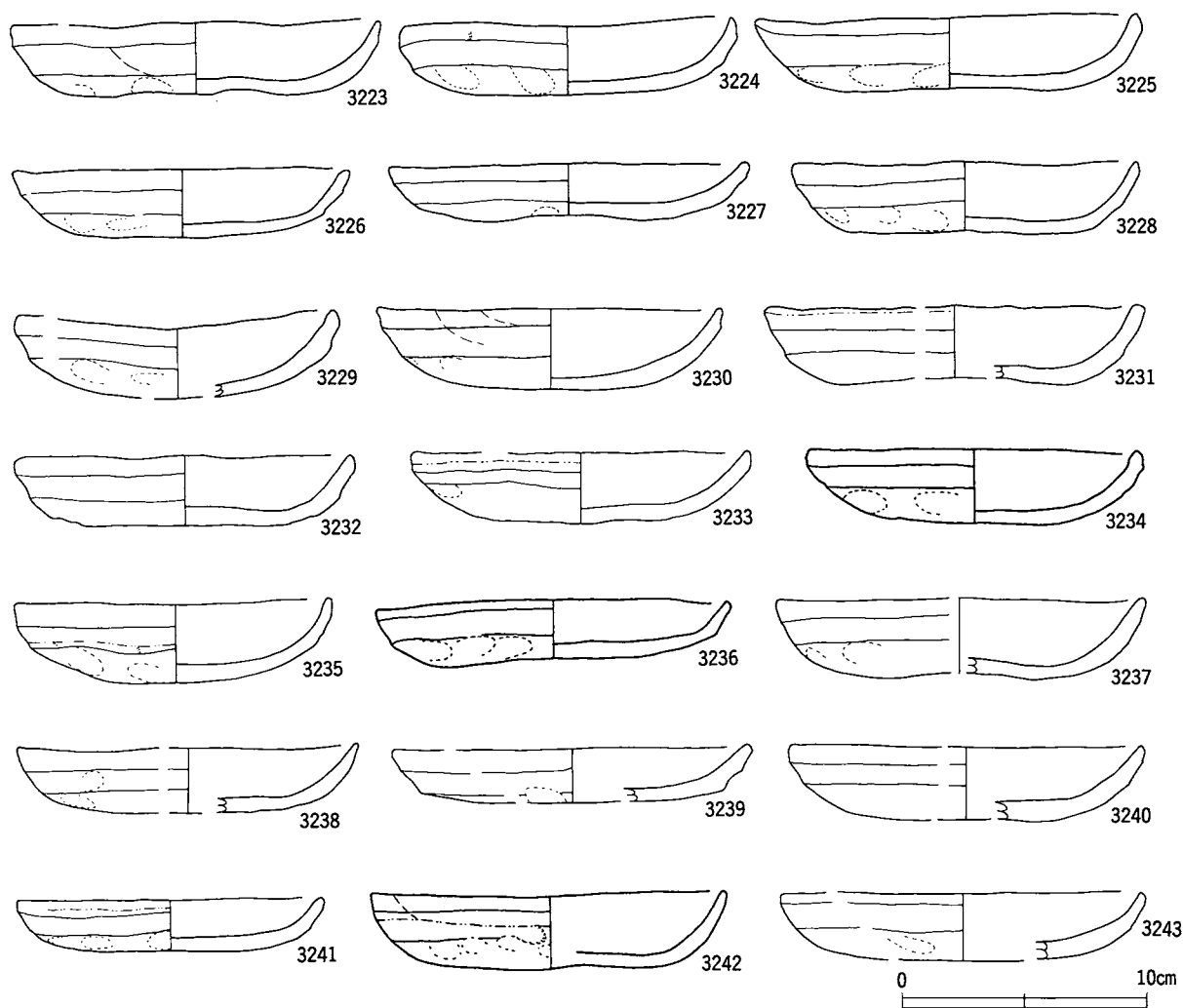
第170図 西側調査区のかわけ(9)





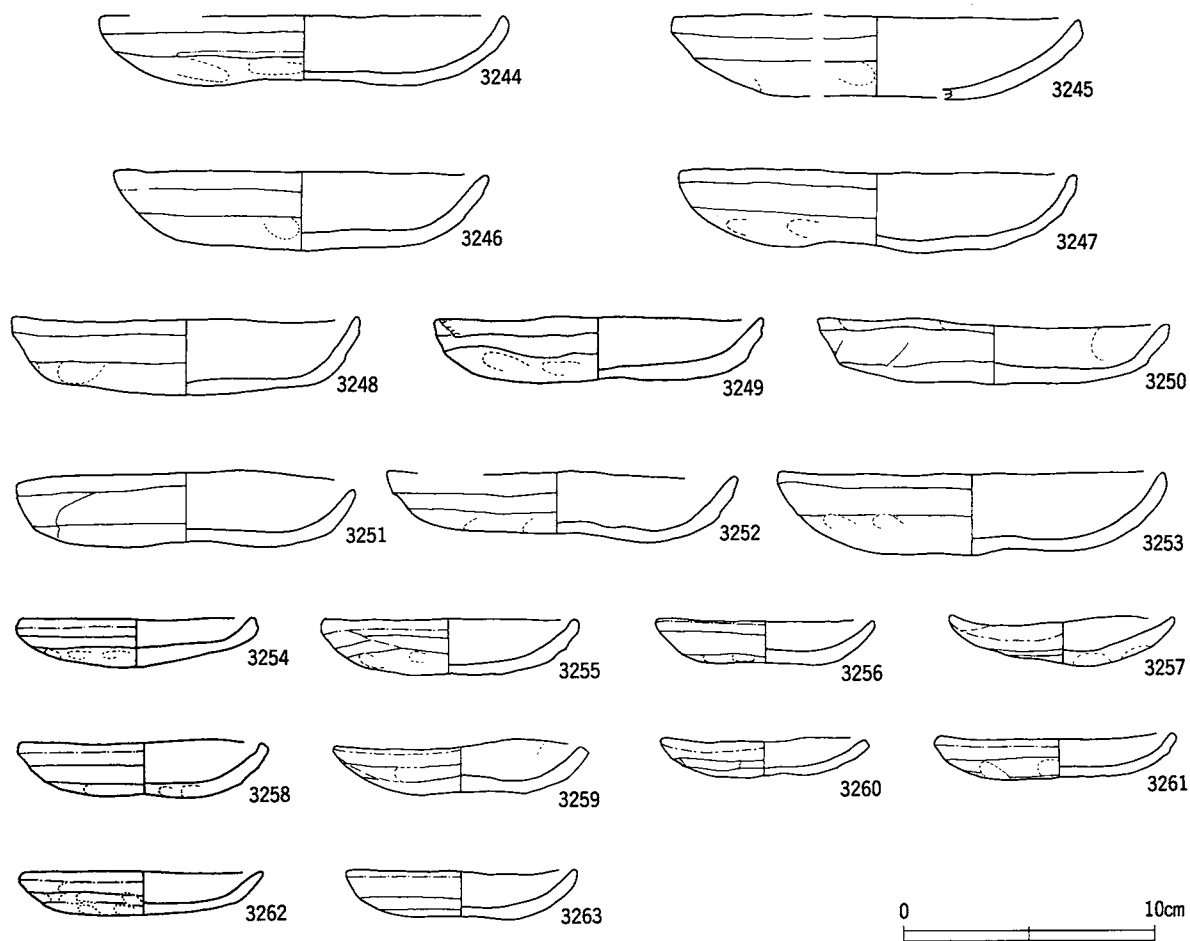
番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3201	15SE25埋土	C <sub>2</sub>	14.2	3.5	圧痕	1/4以上	
3202	III E1h包含層	C <sub>3</sub>	9.8	1.5	〃	3/4以上	
3203	15SK8埋土	C <sub>3</sub>	9.3	2.1	圧痕	完形	
3204	II E9g包含層	C <sub>4</sub>	9.9	1.9	弱い圧痕	1/4	
3205	III E0i包含層	C <sub>4</sub>	9.3	2.1	布目痕	ほぼ完形	
3206	II E9h包含層	C <sub>4</sub>	8.5	1.8	圧痕	1/4以上	
3207	III E1h包含層	C <sub>4</sub>	9.6	2.0	〃	ほぼ完形	
3208	II E8i包含層	C <sub>4</sub>	9.2	2.1	〃	3/4	
3209	II E9h包含層	C <sub>4</sub>	9.7	2.0	弱い圧痕	1/4以上	
3210	13SE2埋土	C <sub>4</sub>	8.6	2.0	圧痕	1/2	
3211	13SK49埋土	C <sub>4</sub>	9.7	2.2	弱い圧痕	ほぼ完形	
3212	II E4j包含層	C <sub>4</sub>	9.9	1.9	圧痕	1/4	
3213	II E5i包含層	C <sub>4</sub>	9.5	1.5	〃	3/4	
3214	II E7i包含層	C <sub>4</sub>	9.2	1.9	弱い圧痕	完形	
3215	II E7i包含層	C <sub>4</sub>	9.6	1.5	不明	1/4	
3216	II E8g包含層	C <sub>4</sub>	7.6	1.6	圧痕	3/4	
3217	II E8j包含層	C <sub>4</sub>	9.6	1.6	圧痕なし	1/4以下	
3218	III F3c	C <sub>4</sub>	10.0	1.7	弱い圧痕	ほぼ完形	
3219	II E5h包含層	C <sub>4</sub>	10.2	2.1	布目痕	ほぼ完形	
3220	〃	C <sub>4</sub>	8.9	1.5	圧痕なし	3/4以上	
3221	〃	C <sub>4</sub>	8.6	2.0	圧痕	2/3	
3222	II E8i包含層	C <sub>4</sub>	10.3	1.8	弱い圧痕	1/2	

第171図 東側調査区のかわけ(1)



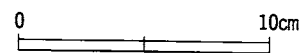
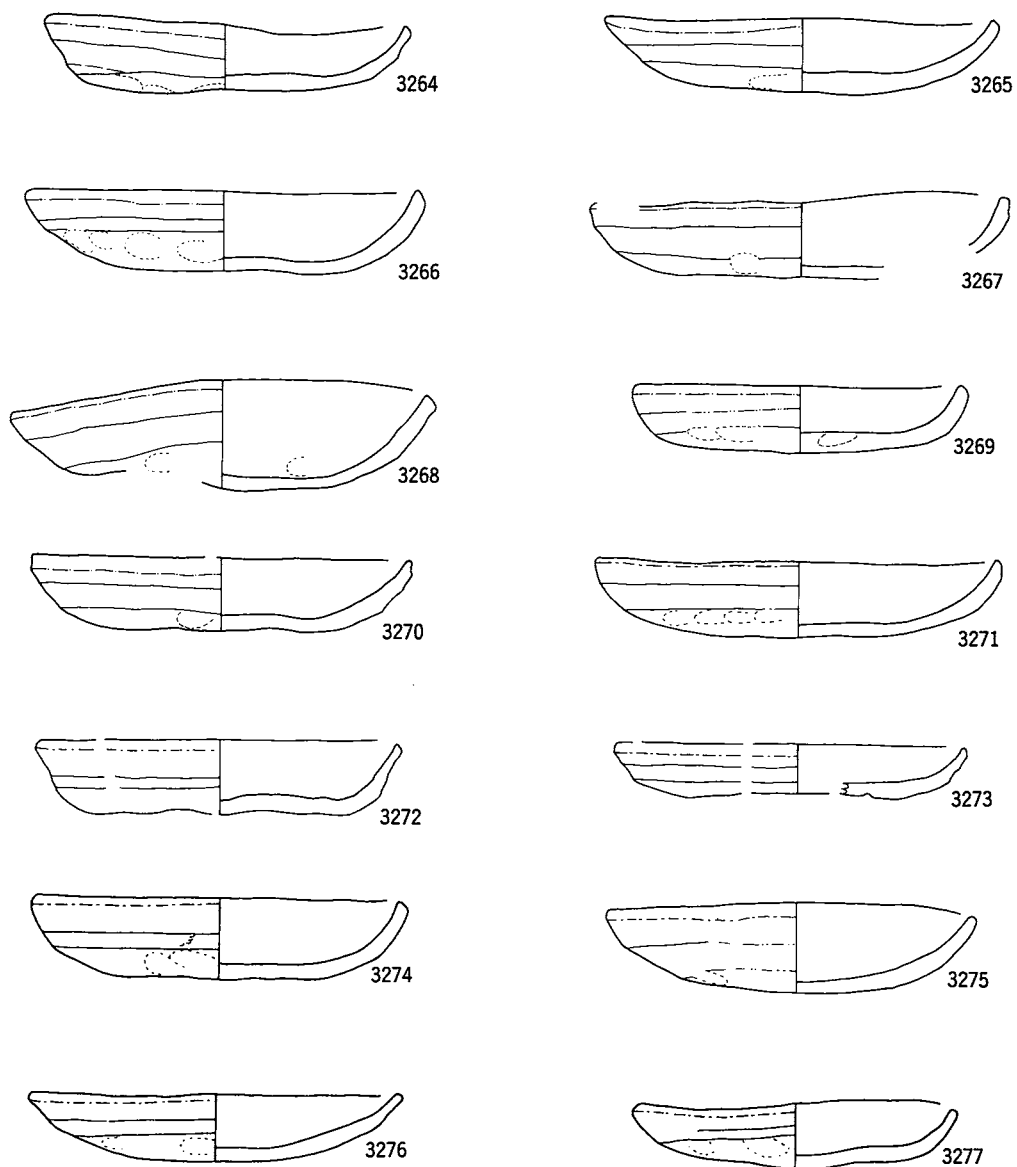
番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3223	11次調査区	C <sub>4</sub>	15.0	3.0	圧痕	1/4以下	
3224	11SX1 1層	C <sub>4</sub>	13.4	3.1	〃	1/2	
3225	II E9h包含層	C <sub>4</sub>	18.4	3.2	〃	3/4	
3226	III E1h包含層	C <sub>4</sub>	13.4	2.9	〃	3/4	
3227	II E8h包含層	C <sub>4</sub>	14.5	2.4	弱い圧痕	1/4	
3228	II E9h表土	C <sub>4</sub>	14.0	3.0	圧痕	1/4以上	
3229	〃	C <sub>4</sub>	13.2	2.9	〃	1/4	
3230	13SD2埋土(III F4d)	C <sub>4</sub>	14.0	3.4	弱い圧痕	1/4	
3231	〃	C <sub>4</sub>	15.5	3.3	圧痕なし	1/4	
3232	13SD12埋土(II F6f)	C <sub>4</sub>	13.5	3.0	弱い圧痕	1/2	
3233	〃	C <sub>4</sub>	13.6	3.0	圧痕	1/4	
3234	13SE2 5層より下	C <sub>4</sub>	13.5	3.1	〃	ほぼ完形	
3235	13SE2埋土	C <sub>4</sub>	12.8	3.4	〃	3/4以上	
3236	〃	C <sub>4</sub>	14.4	2.9	〃	3/4	
3237	〃	C <sub>4</sub>	15.1	3.4	〃	1/2	
3238	〃	C <sub>4</sub>	14.1	2.9	〃	1/4以上	
3239	13SK49埋土	C <sub>4</sub>	14.5	2.4	〃	1/4	
3240	13SK9埋土	C <sub>4</sub>	14.6	3.1	弱い圧痕	1/4以下	
3241	II E6g包含層	C <sub>4</sub>	12.4	2.1	圧痕	1/2	
3242	II E7g包含層	C <sub>4</sub>	14.3	3.2	〃	ほぼ完形	
3243	〃	C <sub>4</sub>	15.0	2.8	〃	1/4以下	

第172図 東側調査区のかわけ(2)



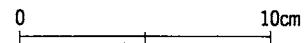
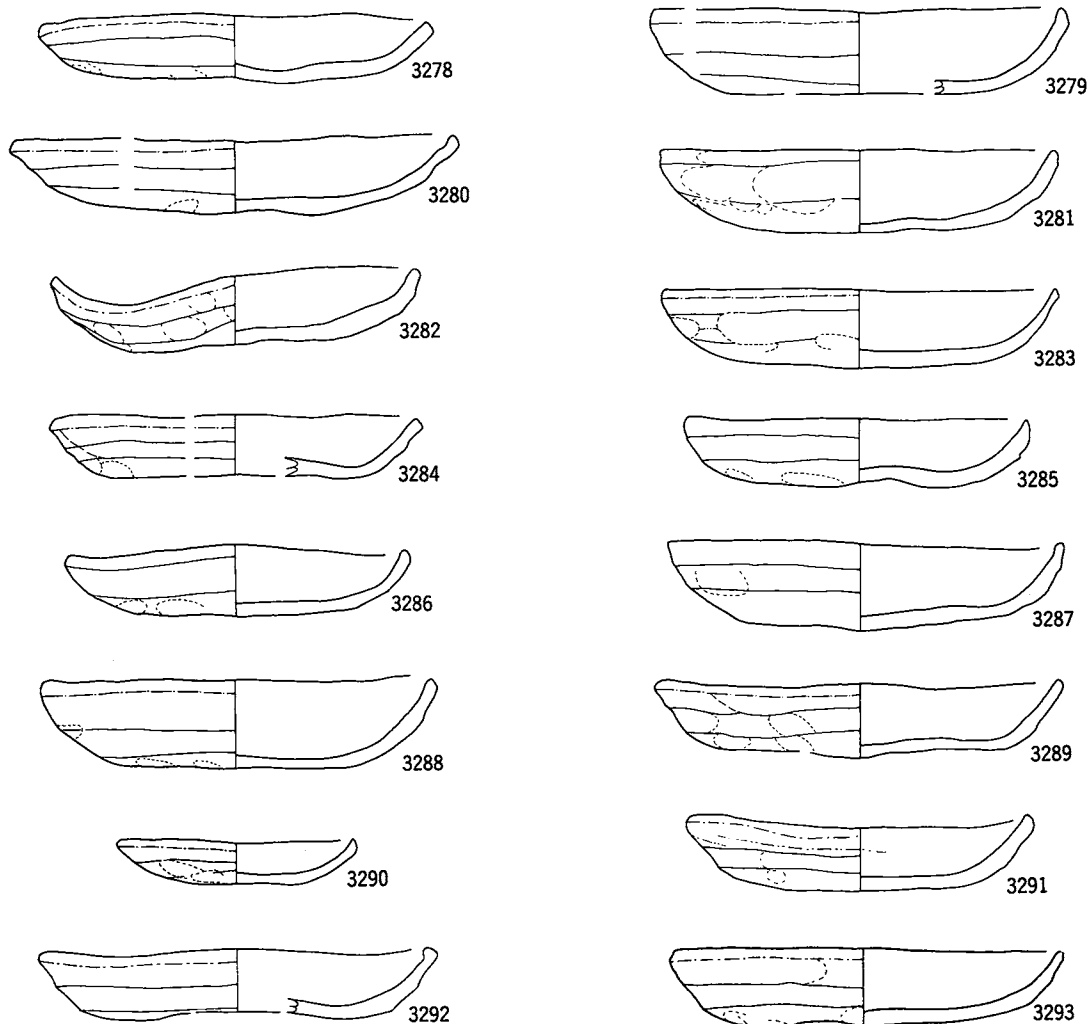
番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3244	IIIF3c表土下	C <sub>4</sub>	16.3	3.0	圧痕	1/4	
3245	IIIF4c	C <sub>4</sub>	16.2	3.5	弱い圧痕	1/4以下	
3246	IIIF8c	C <sub>4</sub>	15.0	3.2	圧痕	1/4	
3247	IIIE6i包含層	C <sub>4</sub>	15.9	3.3	弱い圧痕	3/4以上	
3248	IIIE3h包含層	C <sub>4</sub>	14.0	3.1	圧痕	1/2	
3249	15SE25埋土	C <sub>4</sub>	13.2	2.6	〃	ほぼ完形	
3250	〃	C <sub>4</sub>	14.1	2.6	〃	3/4以上	
3251	〃	C <sub>4</sub>	13.5	3.1	弱い圧痕	完形	
3252	IIIE7h包含層	C <sub>4</sub>	14.0	2.9	圧痕	3/4	
3253	〃	C <sub>4</sub>	15.6	3.4	〃	〃	
3254	IIIE0h包含層	C <sub>5</sub>	9.3	2.0	圧痕	完形	
3255	IIIE1h包含層	C <sub>5</sub>	10.2	2.2	圧痕	1/2	
3256	IIIE0g包含層	C <sub>5</sub>	8.9	1.9	圧痕	1/2	
3257	13SE2 5層以下	C <sub>5</sub>	8.9	2.0	圧痕	1/2	
3258	IIIE区(11次調査)	C <sub>5</sub>	9.7	2.3	圧痕	ほぼ完形	
3259	IIIE6h包含層	C <sub>5</sub>	10.3	2.3	弱い圧痕	3/4	
3260	IIIE3h包含層	C <sub>5</sub>	8.4	1.6	布目痕	ほぼ完形	
3261	IIIE7h包含層	C <sub>5</sub>	9.7	1.7	圧痕	完形	
3262	〃	C <sub>5</sub>	9.7	1.7	圧痕	ほぼ完形	
3263	IIIE4h包含層	C <sub>5</sub>	9.4	2.0	不明	3/4	

第173図 東側調査区のかわけ(3)



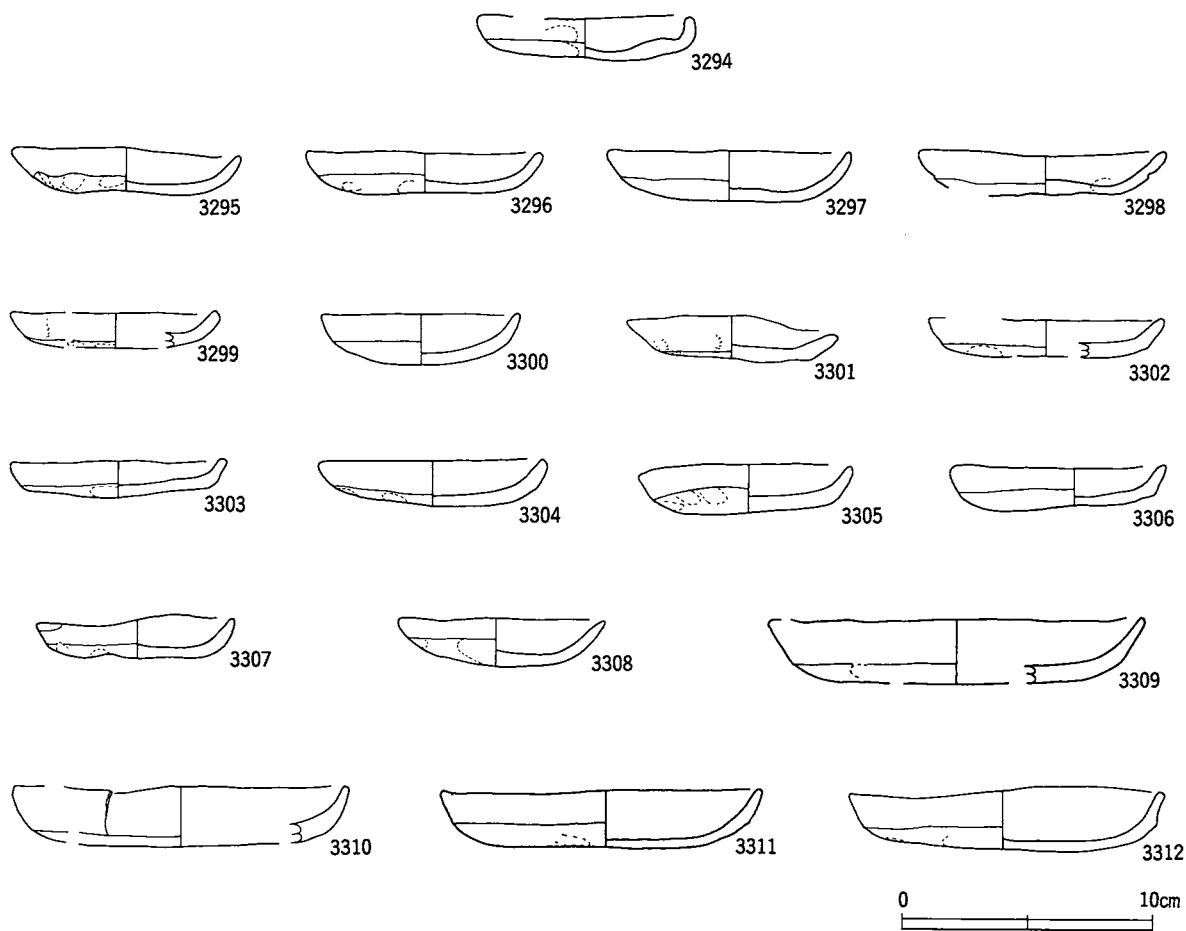
番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3264	11次調査区	C <sub>5</sub>	14.4	3.1	圧痕	完形	
3265	〃	C <sub>5</sub>	15.2	3.1	〃	1/2	
3266	〃	C <sub>5</sub>	15.7	3.4	〃	〃	
3267	〃	C <sub>5</sub>	16.3	3.5	弱い圧痕	1/2	
3268	〃	C <sub>5</sub>	16.6	4.5	圧痕	1/2	
3269	〃	C <sub>5</sub>	12.9	2.8	〃	ほぼ完形	
3270	〃	C <sub>5</sub>	15.0	3.0	〃	1/2	
3271	〃	C <sub>5</sub>	15.9	3.1	〃	1/2	
3272	〃	C <sub>5</sub>	14.3	3.0	弱い圧痕	1/4	
3273	II E5h包含層	C <sub>5</sub>	14.1	2.3	圧痕なし	1/4以下	
3274	II E6g包含層	C <sub>5</sub>	15.0	3.4	圧痕	1/4	段を撫でつぶしている
3275	II E7g包含層	C <sub>5</sub>	14.5	3.6	〃	3/4	
3276	〃	C <sub>5</sub>	14.6	2.8	〃	1/4	
3277	II E7h包含層	C <sub>5</sub>	12.6	2.8	〃	1/2	段の一部が撫でつぶされている

第174図 東側調査区のかかわり(4)



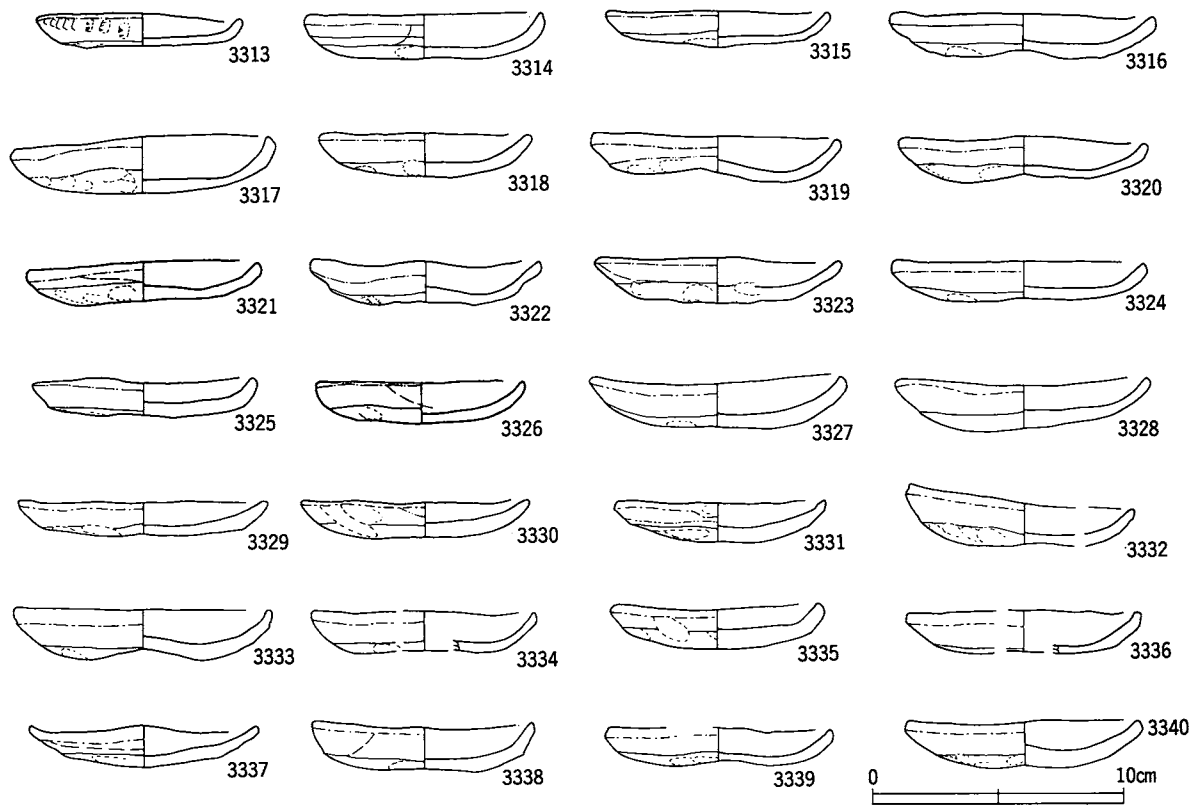
番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3278	II E7i 包含層	C <sub>5</sub>	15.4	2.8	圧痕	1/2以上	
3279	II F区	C <sub>5</sub>	16.7	3.5	不明	1/4	
3280	II F9c 表土	C <sub>5</sub>	17.4	3.2	圧痕	1/4以下	段を撫でつぶしている
3281	II E6h 包含層	C <sub>5</sub>	15.9	3.4	圧痕	完形	
3282	15SD12 埋土 (II E6h)	C <sub>5</sub>	14.8	3.2	〃	ほぼ完形	
3283	15SD37 埋土	C <sub>5</sub>	15.9	3.3	〃	〃	
3284	15SK8 埋土	C <sub>5</sub>	14.9	2.5	〃	1/4以下	
3285	15SD12 埋土 (II E7h)	C <sub>5</sub>	13.8	2.8	〃	3/4以上	
3286	II E7g 包含層	C <sub>5</sub>	13.7	2.9	〃	3/4	
3287	II E7i 包含層	C <sub>5</sub>	15.8	3.7	弱い圧痕	3/4	
3288	II E8i 包含層	C <sub>5</sub>	15.9	3.6	圧痕	3/4	
3289	II E5i 包含層	C <sub>5</sub>	16.4	3.1	〃	1/2	
3290	II E7i 包含層	C' <sub>5</sub>	9.6	1.9	〃	3/4	
3291	13SE2 2層	C' <sub>5</sub>	13.4	3.1	〃	ほぼ完形	
3292	13SK5 埋土	C' <sub>5</sub>	15.9	2.9	〃	1/4	
3293	II E7i 包含層	C' <sub>5</sub>	15.6	3.2	弱い圧痕	完形	

第175図 東側調査区のかわけ(5)



番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3294	15SD12埋土(II E8h)	D <sub>2</sub>	8.8	1.8	圧痕	3/4以上	
3295	11P12埋土	D <sub>3</sub>	8.8	2.0	圧痕	完形	
3296	II E9h包含層	D <sub>3</sub>	9.2	1.7	弱い圧痕	〃	
3297	III E1h包含層	D <sub>3</sub>	9.6	2.1	〃	1/2	
3298	〃	D <sub>3</sub>	9.7	1.8	〃	3/4	
3299	II E9h包含層	D <sub>3</sub>	8.4	1.5	圧痕	1/4	
3300	13SD12埋土(II F6f)	D <sub>3</sub>	7.9	2.1	弱い圧痕	1/4	
3301	13SK9埋土	D <sub>3</sub>	8.5	1.8	圧痕	完形	
3302	〃	D <sub>3</sub>	9.4	1.6	弱い圧痕	1/4	
3303	II E7g包含層	D <sub>3</sub>	8.4	1.6	〃	1/2	
3304	II E区(11次調査区)	D <sub>3</sub>	8.8	1.9	圧痕	3/4	
3305	15SE25埋土	D <sub>3</sub>	8.6	2.0	〃	完形	
3306	〃	D <sub>3</sub>	8.7	1.9	不明	3/4	
3307	〃	D <sub>3</sub>	7.9	1.7	圧痕	完形	
3308	〃	D <sub>3</sub>	8.3	2.0	圧痕	完形	
3309	13SD2埋土	D <sub>3</sub>	14.9	2.6	〃	1/4	
3310	〃	D <sub>3</sub>	13.4	2.5	不明	1/4以下	
3311	13SK9埋土	D <sub>3</sub>	12.7	2.3	圧痕	ほぼ完形	
3312	〃	D <sub>3</sub>	12.6	2.6	〃	3/4以上	

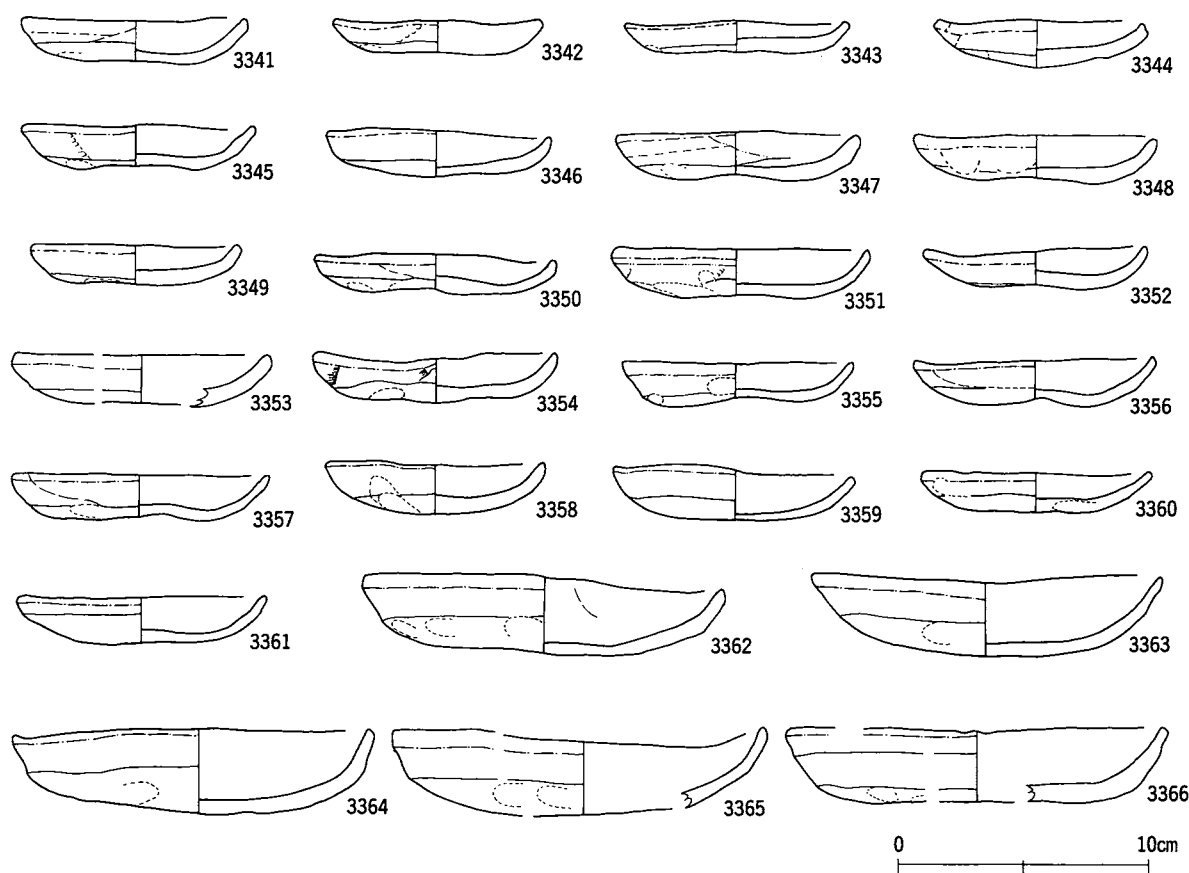
第176図 東側調査区のかわれけ(6)



番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3313	III E0h包含層	D <sub>4</sub>	8.1	1.4	圧痕	完形	
3314	II E3h包含層	D <sub>4</sub>	10.1	1.9	圧痕?	1/4	
3315	III E0h包含層	D <sub>4</sub>	9.0	1.4	圧痕	1/4	
3316	〃	D <sub>4</sub>	10.4	1.8	〃	1/4	
3317	III E0i包含層	D <sub>4</sub>	10.1	2.4	圧痕	完形	
3318	II E9h包含層	D <sub>4</sub>	8.5	1.8	〃	1/4以上	
3319	III E1h包含層	D <sub>4</sub>	9.7	1.9	〃	完形	
3320	〃	D <sub>4</sub>	9.6	1.8	〃	〃	
3321	〃	D <sub>4</sub>	9.1	1.7	〃	ほぼ完形	
3322	〃	D <sub>4</sub>	10.0	1.9	布目痕	1/4	
3323	〃	D <sub>4</sub>	9.8	1.9	圧痕	1/2	
3324	〃	D <sub>4</sub>	10.2	1.7	圧痕	1/2	
3325	III E0h包含層	D <sub>4</sub>	8.8	1.6	〃	3/4以上	
3326	II E9h包含層	D <sub>4</sub>	8.2	1.7	弱い圧痕	完形	
3327	II E9i包含層	D <sub>4</sub>	10.0	2.1	圧痕	ほぼ完形	
3328	〃	D <sub>4</sub>	9.9	2.1	弱い圧痕	3/4	
3329	13SD2埋土(III F4d)	D <sub>4</sub>	10.0	1.5	圧痕	1/4	
3330	13SE2埋土	D <sub>4</sub>	9.0	1.6	〃	完形	
3331	〃	D <sub>4</sub>	8.4	1.7	〃	ほぼ完形	
3332	〃	D <sub>4</sub>	9.2	2.4	〃	1/4以上	
3333	〃	D <sub>4</sub>	10.2	2.1	弱い圧痕	1/4	
3334	II E5i包含層	D <sub>4</sub>	9.0	1.7	圧痕なし	1/4	
3335	II E6g包含層	D <sub>4</sub>	8.2	1.8	圧痕	ほぼ完形	
3336	II E6i包含層	D <sub>4</sub>	9.4	1.7	圧痕なし	1/2	
3337	II E7g包含層	D <sub>4</sub>	9.1	1.7	圧痕	3/4	
3338	〃	D <sub>4</sub>	8.7	2.0	〃	3/4	
3339	II E7h包含層	D <sub>4</sub>	8.7	1.6	〃	ほぼ完形	
3340	〃	D <sub>4</sub>	9.5	1.9	〃	1/4	

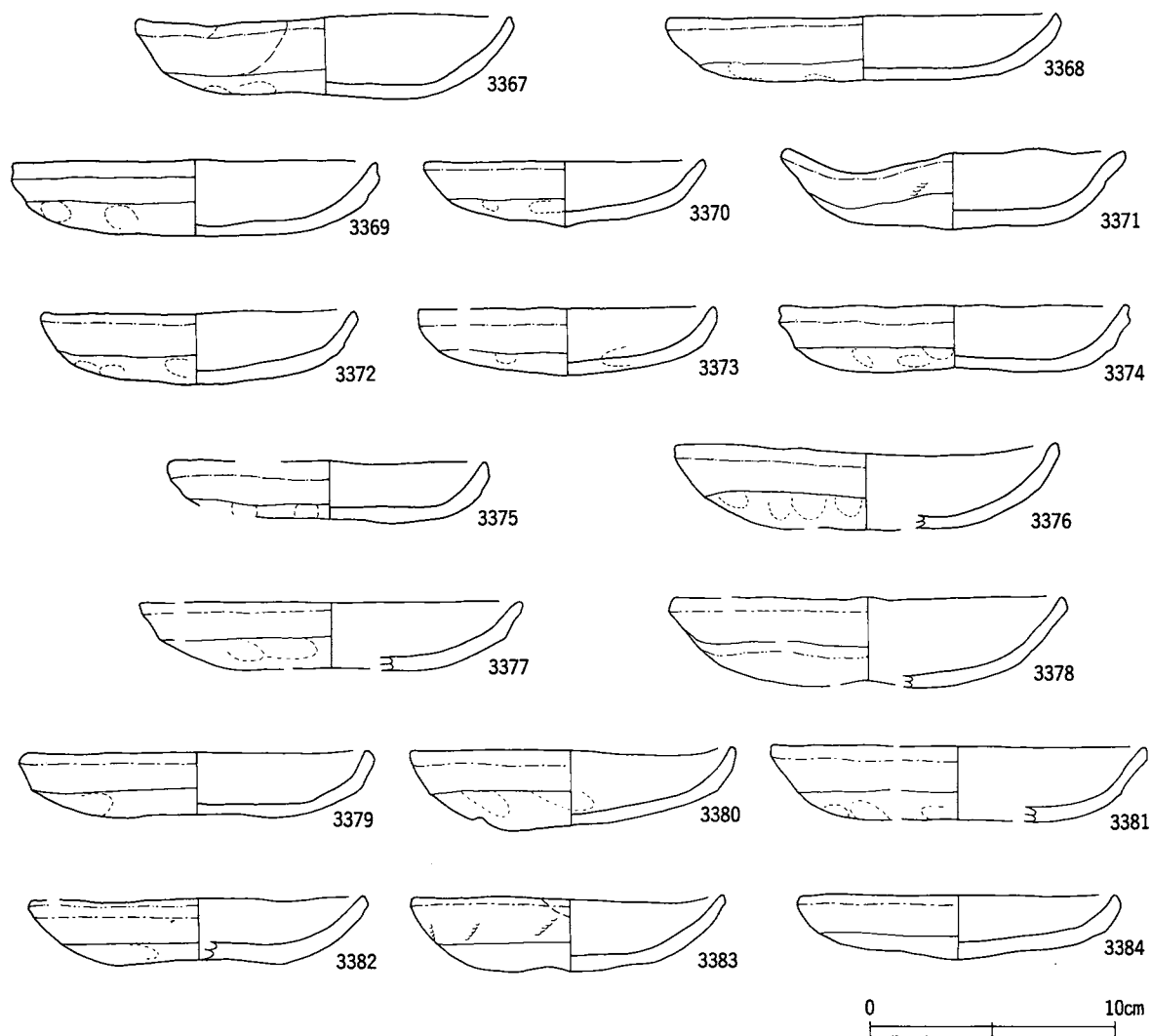
第177図 東側調査区のかわけ(7)





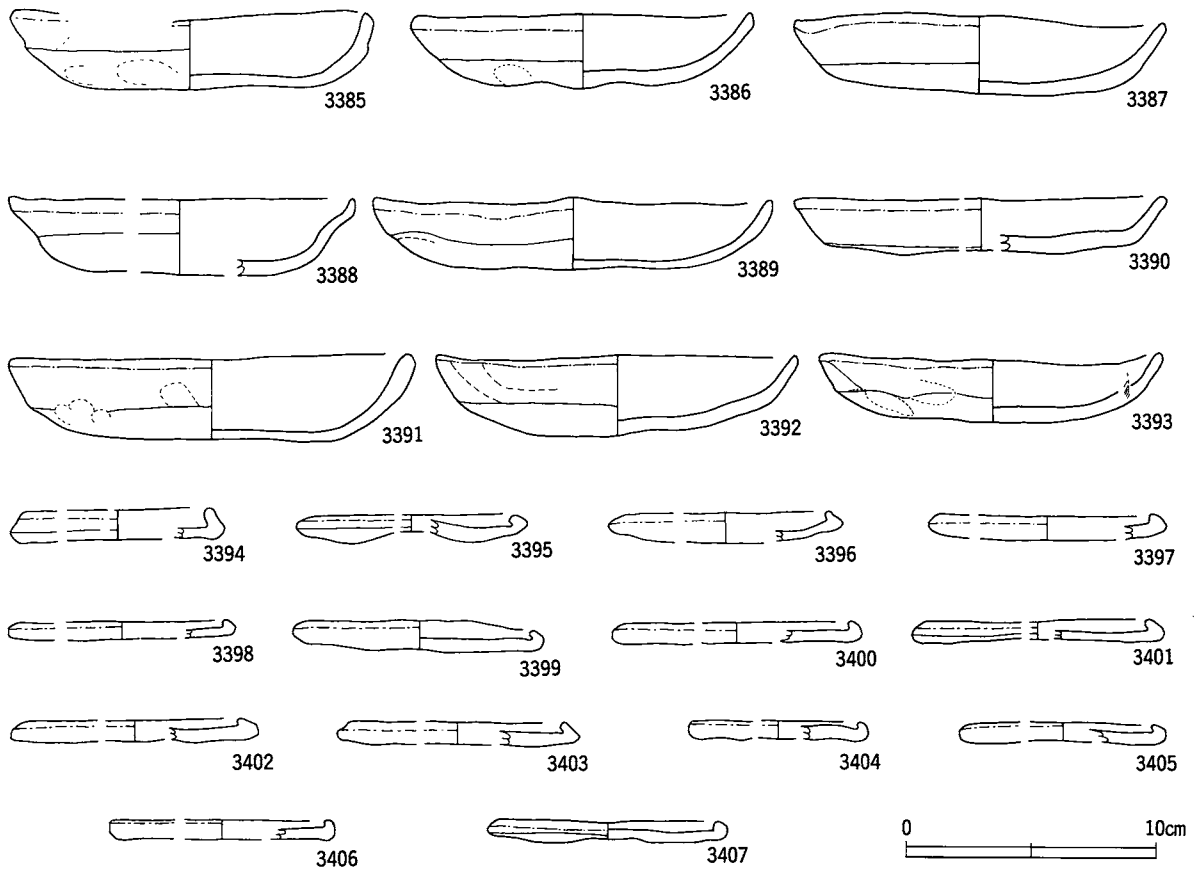
番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3341	II E7h 包含層	D <sub>4</sub>	8.7	1.8	圧痕	ほぼ完形	
3342	〃	D <sub>4</sub>	8.2	1.4	〃	1/4	
3343	〃	D <sub>4</sub>	8.7	1.3	弱い圧痕	1/2	
3344	II E7i 包含層	D <sub>4</sub>	8.1	1.9	圧痕	3/4	
3345	II F区	D <sub>4</sub>	9.1	1.8	〃	完形	
3346	II E6h 包含層	D <sub>4</sub>	9.0	2.0	圧痕	完形	
3347	〃	D <sub>4</sub>	9.8	2.0	〃	〃	
3348	II E7h 包含層	D <sub>4</sub>	9.7	2.0	弱い圧痕	ほぼ完形	
3349	15SD12 埋土 (II E6h)	D <sub>4</sub>	8.4	1.7	圧痕	ほぼ完形	
3350	II E3h 包含層	D <sub>4</sub>	9.7	1.6	〃	完形	
3351	II E3i 包含層	D <sub>4</sub>	10.4	2.0	〃	〃	
3352	15SE25 埋土	D <sub>4</sub>	9.0	1.7	布目痕	1/2	
3353	II E7h 包含層	D <sub>4</sub>	10.4	2.2	弱い圧痕	1/4	
3354	15SD12 埋土 (II E7h)	D <sub>4</sub>	9.8	2.1	圧痕	3/4以上	
3355	〃	D <sub>4</sub>	9.3	1.9	〃	〃	
3356	〃	D <sub>4</sub>	9.8	2.0	弱い圧痕	〃	
3357	II E8i 包含層	D <sub>4</sub>	10.4	1.9	圧痕	完形	
3358	II E7h 包含層	D <sub>4</sub>	8.8	2.1	〃	ほぼ完形	
3359	II E7i 包含層	D <sub>4</sub>	9.7	2.2	不明	〃	
3360	〃	D <sub>4</sub>	9.2	1.7	弱い圧痕	1/2	
3361	15SE1 埋土	D <sub>4</sub>	10.0	2.0	圧痕なし	1/2	
3362	11次調査区	D <sub>4</sub>	14.3	3.2	圧痕	3/4	
3363	II E8g 包含層	D <sub>4</sub>	14.8	3.3	弱い圧痕	ほぼ完形	
3364	〃	D <sub>4</sub>	14.2	3.4	〃	〃	
3365	III E0h 包含層	D <sub>4</sub>	15.0	3.6	圧痕	1/4以上	
3366	II E9h 包含層	D <sub>4</sub>	15.2	3.0	圧痕	1/2	

第178図 東側調査区のかわれけ(8)



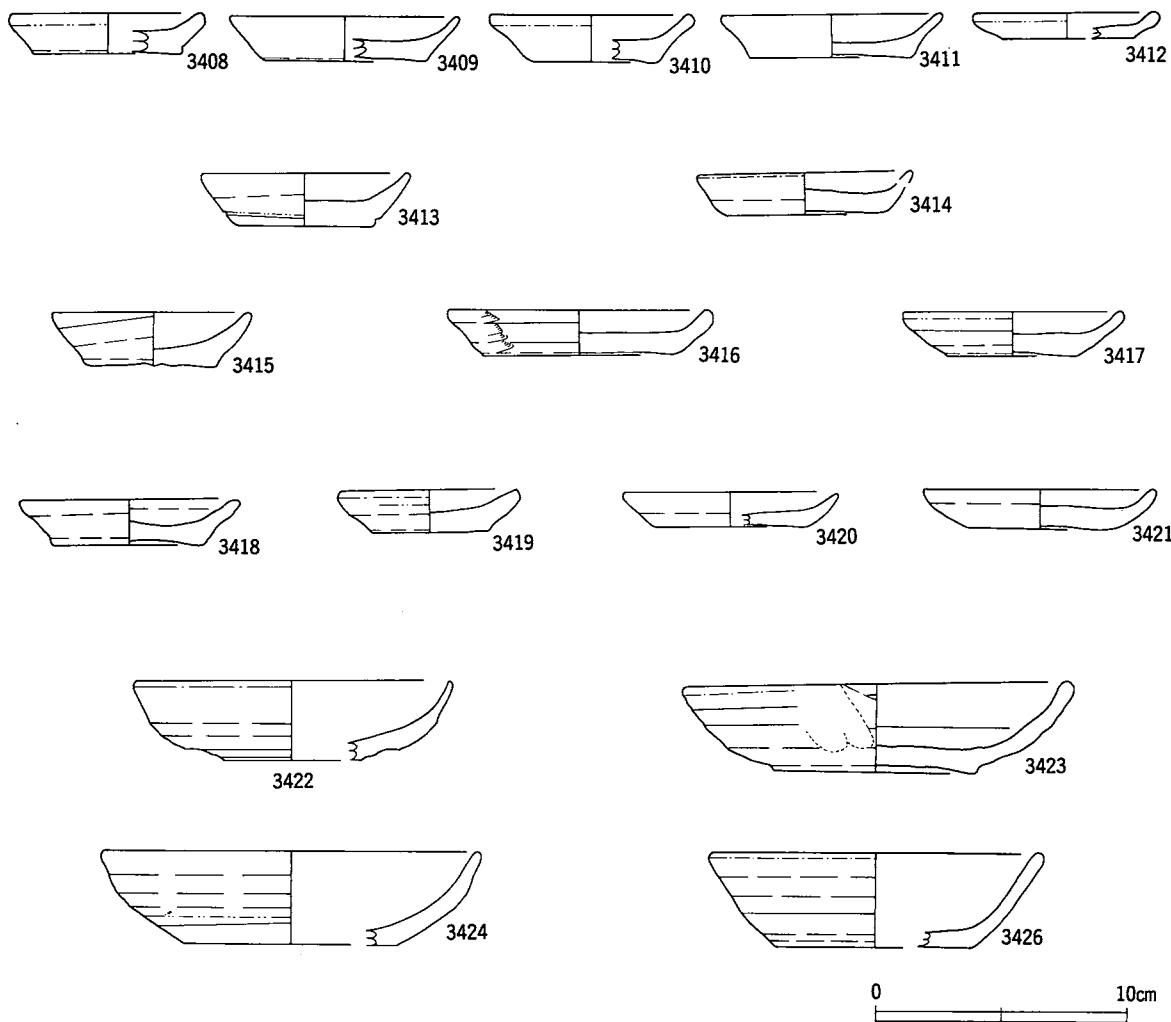
番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3367	III E1h包含層	D <sub>4</sub>	15.2	3.5	圧痕	ほぼ完形	
3368	〃	D <sub>4</sub>	15.7	2.7	〃	1/4	
3369	〃	D <sub>4</sub>	14.8	3.1	〃	1/2	
3370	III E0g包含層	D <sub>4</sub>	11.3	2.7	〃	1/4	
3371	II E8h包含層	D <sub>4</sub>	14.1	3.3	弱い圧痕	3/4	
3372	〃	D <sub>4</sub>	12.6	3.1	〃	3/4	
3373	〃	D <sub>4</sub>	12.3	2.8	圧痕	1/4	
3374	II E9h包含層	D <sub>4</sub>	14.1	2.8	弱い圧痕	1/2	
3375	〃	D <sub>4</sub>	12.8	2.7	〃	1/2	
3376	〃	D <sub>4</sub>	15.7	3.6	圧痕	1/2	
3377	13SD2埋土(III F4d)	D <sub>4</sub>	15.7	2.8	圧痕	1/4	
3378	〃	D <sub>4</sub>	15.9	3.7	圧痕なし	1/4	
3379	13SE2埋土	D <sub>4</sub>	14.1	2.7	圧痕	1/4以上	
3380	13SE2埋土1層	D <sub>4</sub>	13.3	3.4	〃	〃	
3381	13SK49埋土	D <sub>4</sub>	15.4	3.1	弱い圧痕	1/4	
3382	13SK55埋土	D <sub>4</sub>	13.9	2.8	〃	〃	
3383	II E6g包含層	D <sub>4</sub>	12.7	3.1	圧痕	3/4	
3384	II E7h包含層	D <sub>4</sub>	13.2	2.7	不明	1/4	

第179図 東側調査区のかわけ(9)



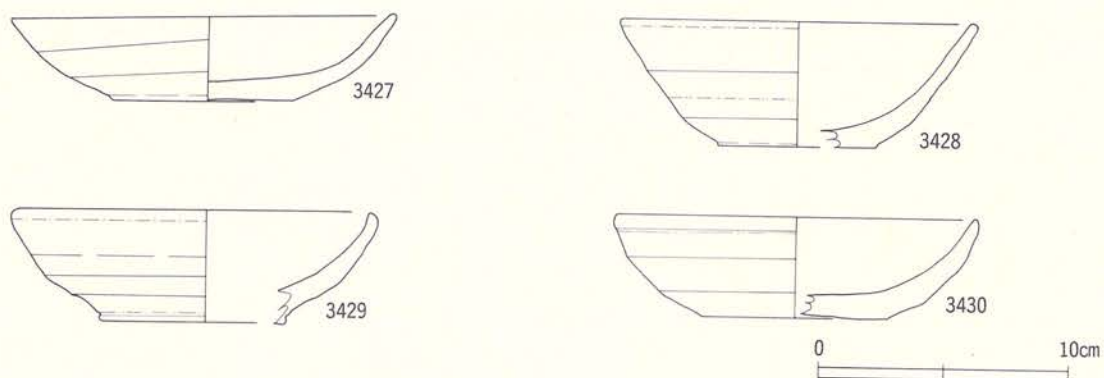
番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3385	II E6h包含層	D <sub>4</sub>	14.5	3.2	圧痕	ほぼ完形	
3386	II E3h包含層	D <sub>4</sub>	13.7	3.0	圧痕?	1/4	
3387	15SE25埋土	D <sub>4</sub>	14.9	3.3	弱い圧痕	完形	
3388	II E5i包含層	D <sub>4</sub>	13.9	3.1	圧痕なし	1/4	
3389	II E7h包含層	D <sub>4</sub>	21.0	2.9	弱い圧痕	1/2	
3390	15P184埋土	D <sub>4</sub>	14.9	2.3	圧痕なし	1/4以下	
3391	II E7h包含層	D <sub>4</sub>	15.0	3.5	不明	1/2	
3392	II E6g包含層	D <sub>4</sub>	14.5	3.4	圧痕	3/4	
3393	II E8h包含層	D <sub>4</sub>	13.8	2.8	〃	〃	
3394	II E9h包含層	内折れ	8.5	1.4	指で持ち回す	1/4以下	
3395	11P51埋土	内折れ	9.3	1.2	〃	1/4	
3396	III E1h包含層	内折れ	9.3	1.3	〃	1/4	
3397	III E0h包含層	内折れ	9.5	1.1	〃	1/4以下	
3398	II E9i包含層	内折れ	9.1	0.9	〃	1/4以下	
3399	13SE2埋土	内折れ	10.0	1.4	〃	完形	
3400	13SK9埋土	内折れ	10.0	1.0	〃	1/4以下	
3401	II E5h包含層	内折れ	10.1	1.1	〃	1/4	
3402	13SE2埋土	内折れ	9.9	1.0	〃	1/4以下	
3403	II E6h包含層	内折れ	9.7	1.0	〃	1/4以下	
3404	II E7h包含層	内折れ	7.2	0.8	〃	1/4以下	
3405	II E8g包含層	内折れ	8.3	0.9	〃	1/4以下	
3406	II E8h包含層	内折れ	9.0	0.8	〃	1/4以下	
3407	II E7h包含層	内折れ	9.6	1.0	〃	完形	

第180図 東側調査区のかわらけ(10)



番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3408	II E6h包含層	rd10-1	7.8	1.6	不明	1/4以下	
3409	II E8h包含層	rd10-1	9.2	1.7	右回り	1/3以上	
3410	II E5i包含層	rd10-1	8.2	1.9	不明	1/3以下	
3411	13SK9埋土	rd'10-1	8.7	1.8	右回り	1/4以下	
3412	II F区	rd'10-1	7.5	1.0	不明	1/4以下	
3413	II E6h包含層	rd12-1	8.2	2.1	右回転	3/4以上	
3414	15SD12埋土 (II E8h)	rd'12-1	8.4	1.6	右回転	2/3	
3415	13SK22埋土	rd13-0	7.8	2.2	右回転か	1/4以上	
3416	III E1h包含層	rd13-1	10.2	1.8	右回転	完形	
3417	II E7h包含層	rd13-1	8.8	1.8	不明	1/4以上	
3418	II E7h包含層	rd22-0	8.6	1.9	不明	2/3	
3419	III E0h包含層	rd22-1	8.8	1.2	不明	1/4	
3420	13SD2埋土 (III F4d)	rd'22-1	8.6	1.4	右回転か	1/4以下	
3421	15SD12埋土 (II E6g)	rd'22-1	9.3	1.6	右回転	1/3	
3422	II E9h包含層	Rd24-0	12.8	3.2	不明	1/4以下	
3423	II E5h包含層	Rd24-1	14.5	3.7	右回転	2/3以上	
3424	III E1h包含層	Rd'14-0	15.2	3.7	右回転	1/4	
3426	II E4i包含層	Rd'15-0	13.4	3.9	不明	1/3以下	

第181図 東側調査区のかわらけ(II)



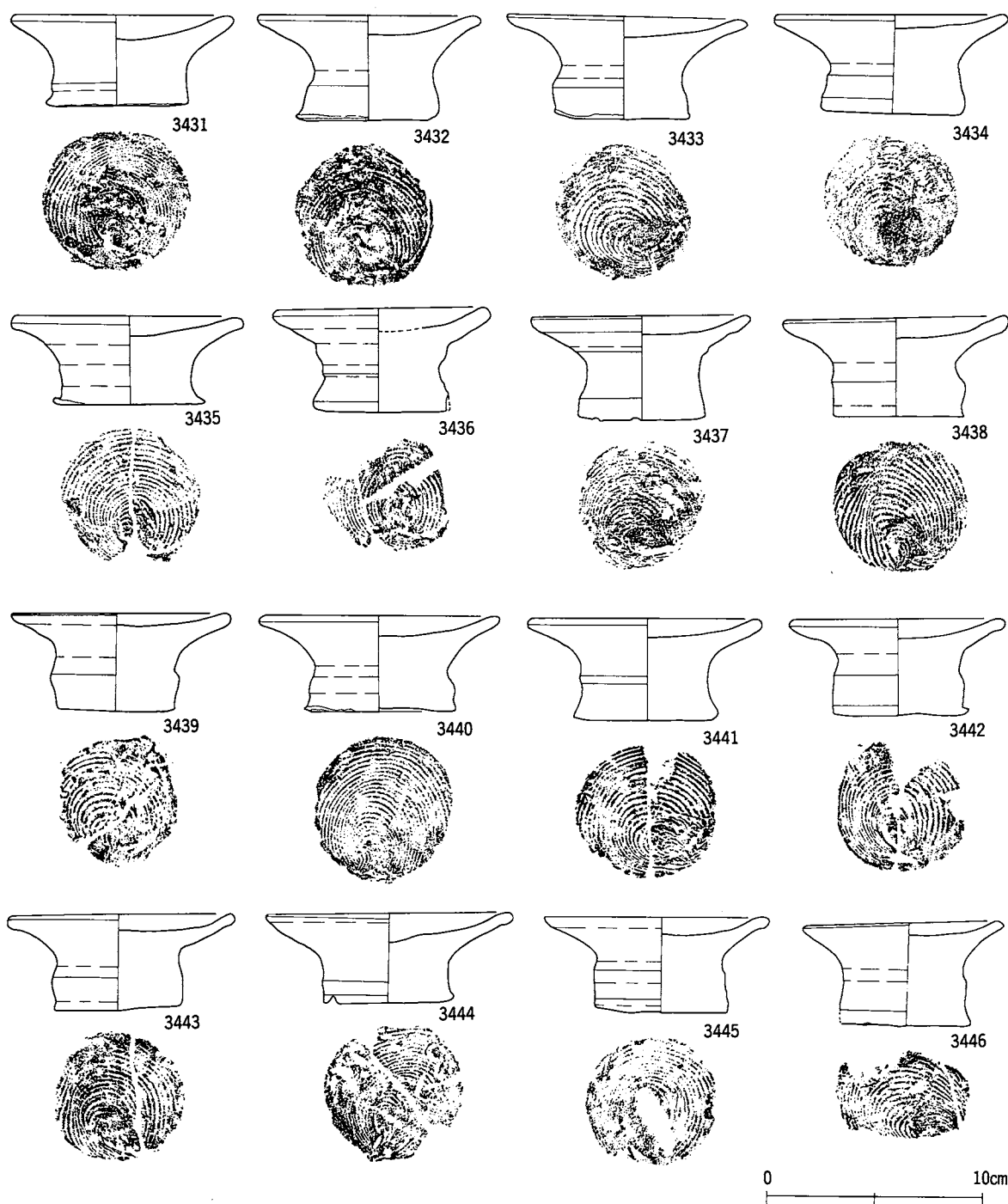
番号	出土位置	分類	径(cm)	器高(cm)	圧痕/回転方向	残存状態	特徴など
3427	II E3i 包含層	Rb03-0	15.2	3.7	右回転	2/3以上	
3428	13SE2埋土	Rb23-0	14.3	5.0	不明	1/4以下	
3429	III E0h 包含層	Rb24-0	14.6	4.5	不明	1/4	
3430	III E1h 包含層	Rb04-0	14.6	4.1	右回転	1/4	

第182図 東側調査区のかわれけ(12)

柱状高台かわらけ (第 183~186 図 写真図版 121~123)

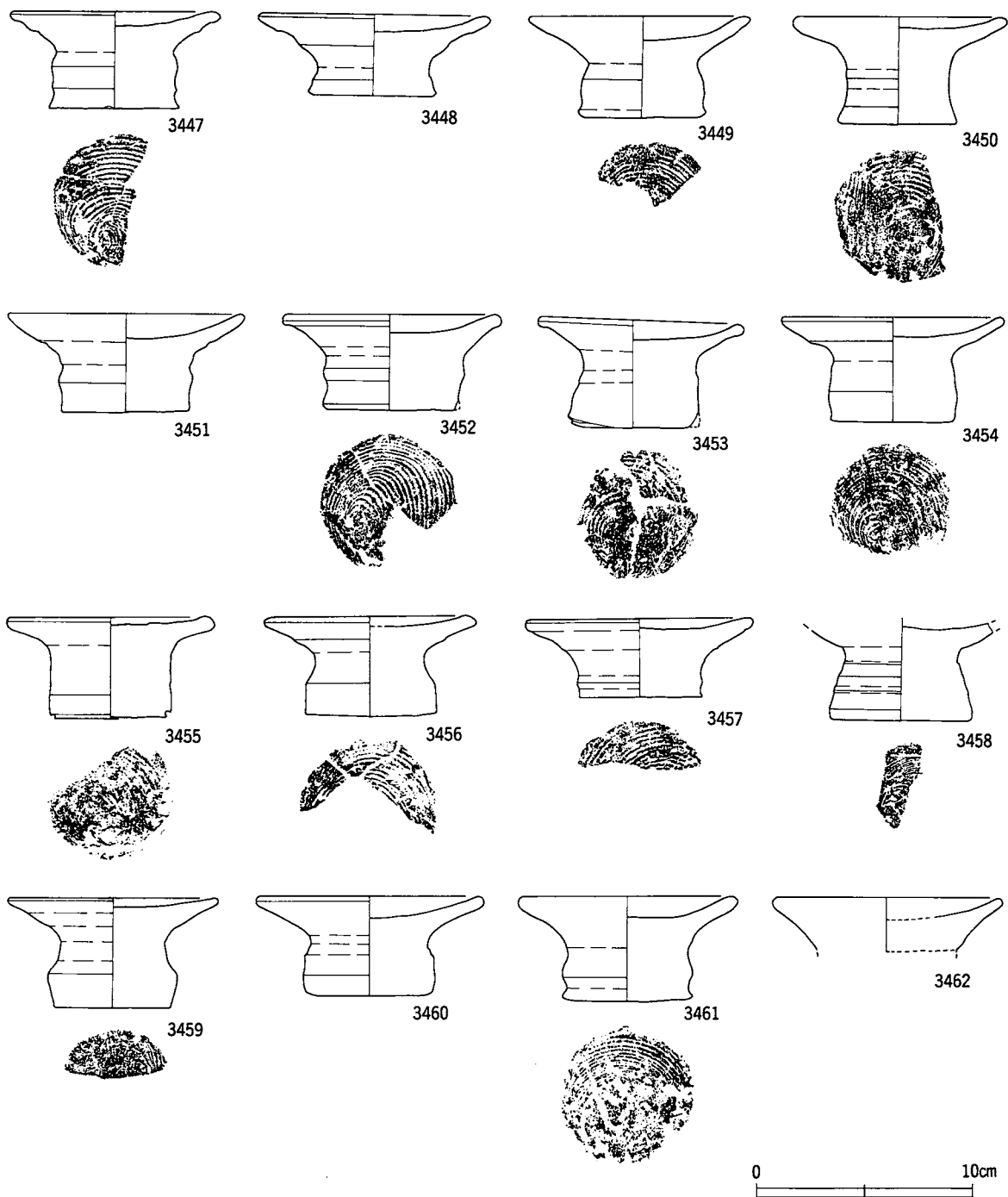
柱状高台かわらけは 11 S X 2 からまとまって出土した。これらの柱状高台かわらけは焼土遺構の焼土上を覆うような形でいずれも破片で出土し破片数は全部で 240 片になる。投げ入れる際に破損したのではなく、全て破損したあとで投げ入れられているとみられ、接合する破片は必ずしも隣接していない。

接合後、口縁あるいは底部が 4 分の 1 以上のものについて実測しており、遺構の周囲から出土したのものも含めて実測点数は 57 点である。周囲から出土した破片は遺構が表土直下で検出されたことからすれば本来はこの遺構に伴うと考えられる。遺構内の破片と接合するものもある。いずれもロクロによって成形され、底部は回転糸切りで再調整はしていない。台部分の上部はややくびれるが、これは皿の部分の成形の際に生じたと考えられる。口径・器高・底径の計測値は変異の幅が若干広いが器高と底径の値がいくらか小さい個体がある他は、計測値からは分類できない。色調は赤みが強くほとんどが橙色である。焼成は全体的にあまいが他のかわらけと大きく違うわけではない。(佐々木 務)



No	出土位置	層位	口径	器高	底径	厚さ	接合破片数	No	出土位置	層位	口径	器高	底径	厚さ	接合破片数
3431	11SK7	底	10.5	4.3	6.7	0.9	1	3439	11SX2		10	4.7	5.2	0.6	4
3432	11SX2		10.5	5	6.6	0.9	2	3440	11SX2		11.2	4.5	7	0.8	4
3433	11SX2		11.2	4.9	6.3	0.9	7	3441	11SX2		10.9	4.7	6.7	0.9	3
3434	11SX2		10.9	4.7	6.4	1.1	6	3442	11SX2		10.1	4.5	6	0.9	3
3435	11SX2		(10.8)	4.3	(7.1)	0.9	3	3443	11SX2		10.2	4.5	6.1	0.7	6
3436	11SX2		10.1	4.9	(6.3)	0.9	8	3444	11SX2		11.2	4.4	6.1	0.6	7
3437	11SX2		10	4.9	5.9	0.5	5	3445	11SX2		10	4.4	6	0.6	6
3438	11SX2		10.3	4.7	6.1	0.7	4	3446	11SX2		9.4	4.2	6.1	0.9	5

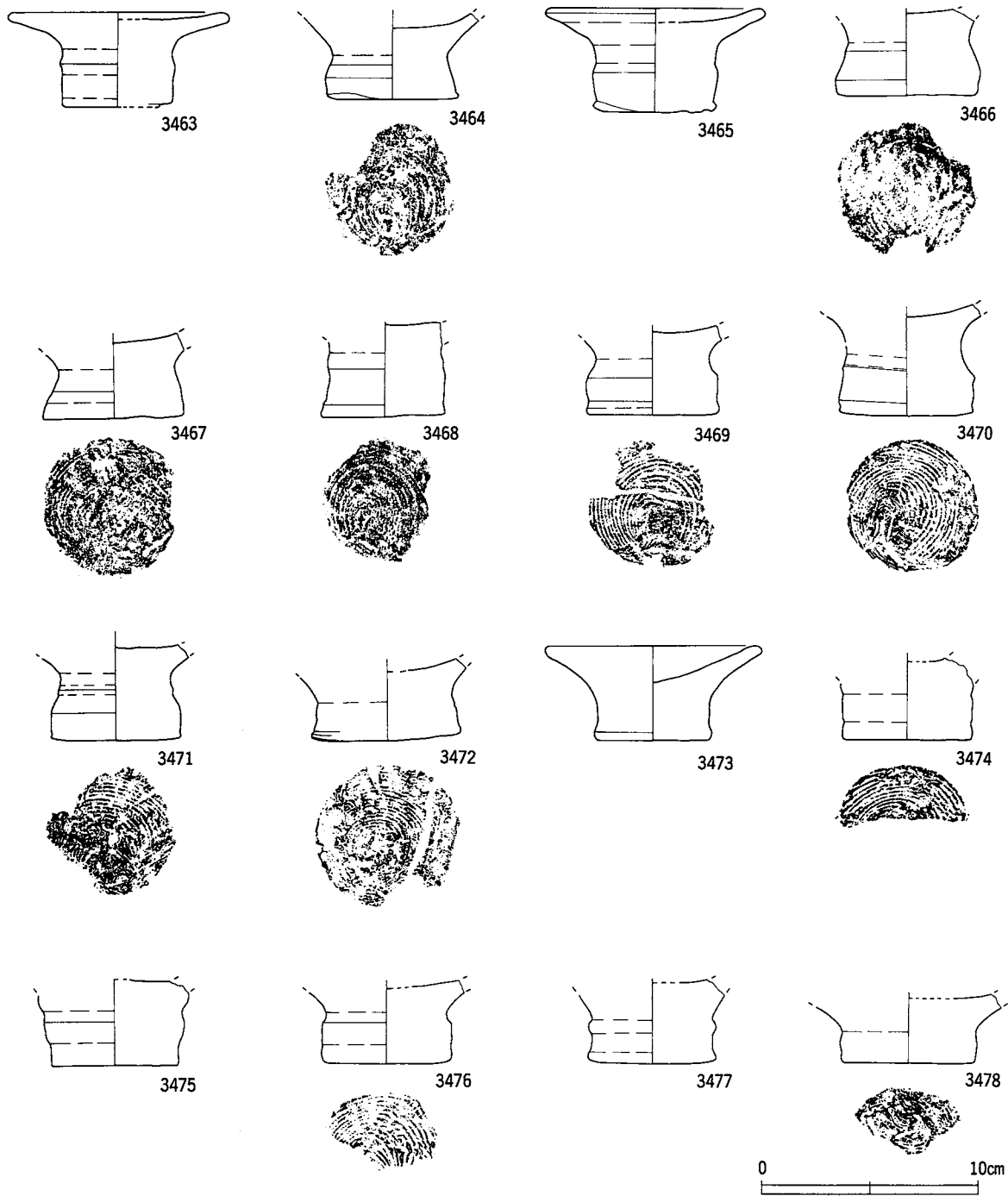
第183図 東側調査区のかわれけ(13)



No	出土位置	層位	口径	器高	底径	厚さ	接合破片数	No	出土位置	層位	口径	器高	底径	厚さ	接合破片数
3447	11SX2		9.8	4.5	6	1	1	3455	11SX2		9.6	4.7	5.8	0.7	2
3448	11SX2		10.8	3.8	6	1.1	2	3456	11SX2		10	4.7	6	0.6	3
3449	11SX2		10.4	4.9	6	0.8	2	3457	11SX2		10.4	3.7	5.7	0.6	1
3450	11SX2		(10)	5.1	6	1	1	3458	II E9~h				(6.6)	0.9	1
3451	11SX2		10.8	4.6	6	0.7	4	3459	II E9~h		(9.8)	5.1	(6.4)	1.1	2
3452	11SX2		(10.2)	4.4	(6.4)	1.2	2	3460	11SX2		(10.6)	4.7	(5.8)	1.1	1
3453	11SX2		(9.6)	5.2	(6.1)	0.9	3	3461	11SX2		10.2	4.9	6	0.6	1
3454	11SX2		(10.4)	4.8	5.8	1.1	2	3462	11SX2		10.6			0.6	3

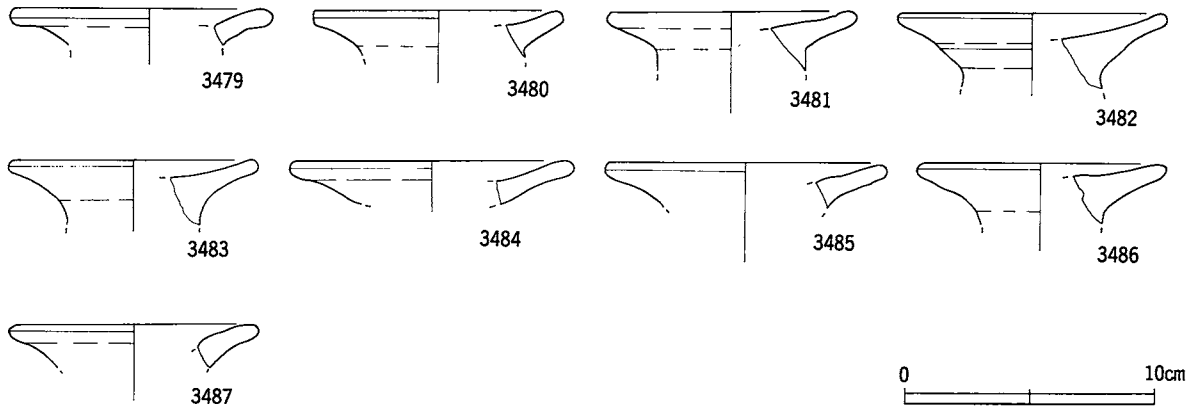
第184図 東側調査区のかわけ(14)





No	出土位置	層位	口径	器高	底径	厚さ	接合破片数	No	出土位置	層位	口径	器高	底径	厚さ	接合破片数
3463	11SX2		10.2	4.5	(5.2)	0.6	2	3471	11SX2				(6)	0.8	1
3464	II E9~h				6.1	0.7	1	3472	11SX2				(6.9)	0.8	2
3465	11SX2		(10.2)	4.9	(5.7)	0.9	2	3473	III E0h	表土	(10)	(4.3)	(5.2)	0.7	1
3466	11SX2				6.4		1	3474	11SX2				6		1
3467	11SX2				6.4	0.8	1	3475	III E0h				6		1
3468	II E9~h				5.8		1	3476	11SX2				(6)	0.8	1
3469	11SX2			0.8	6.1		1	3477	11SX2				(6)		1
3470	11SX2				6.2	0.8	1	3478	III E0h	V			(6.2)	0.9	1

第185図 東側調査区のかわれけ(15)



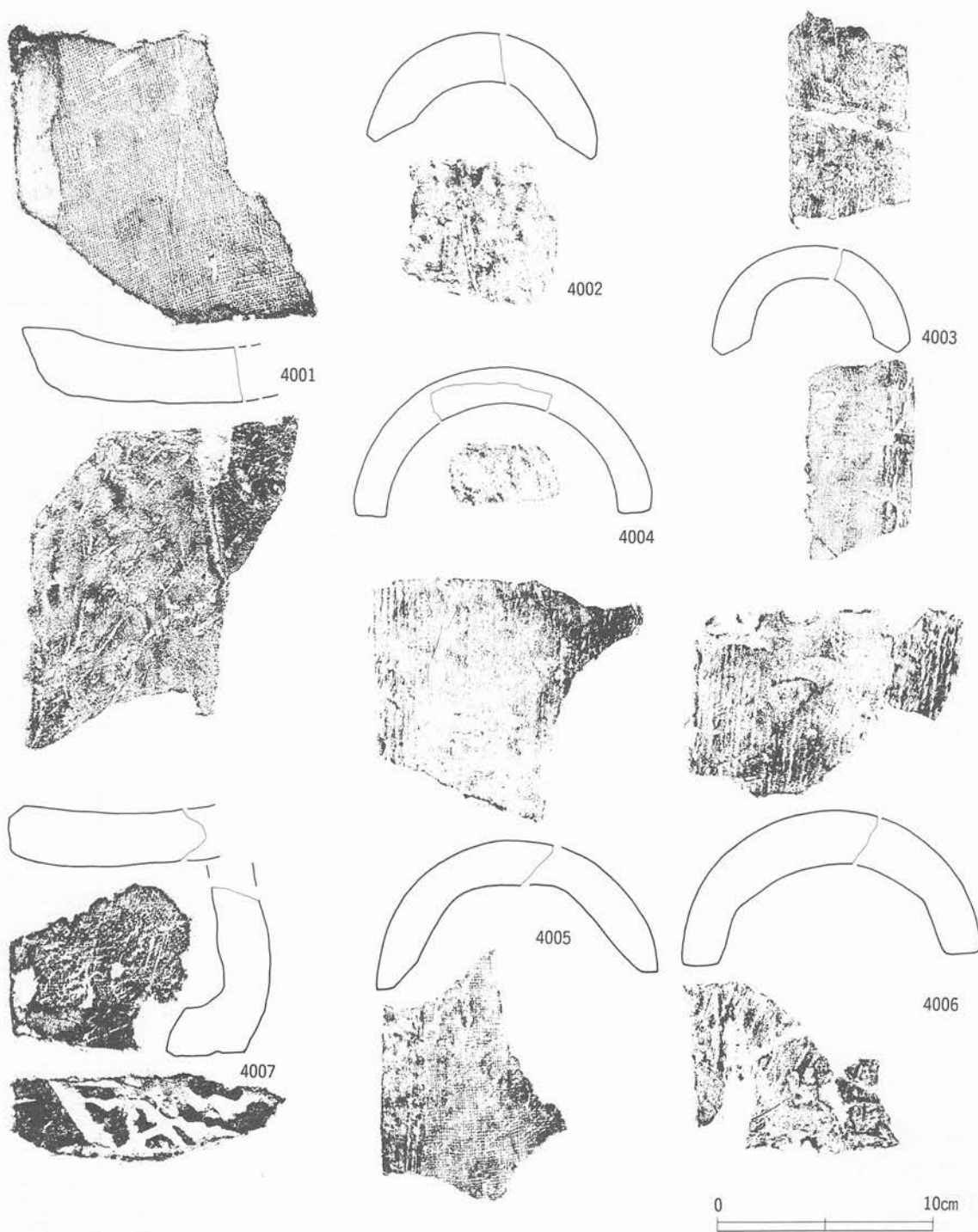
No.	出土位置	層位	口径	器高	底径	厚さ	接合破片数	No.	出土位置	層位	口径	器高	底径	厚さ	接合破片数
3479	11SX2		10.5			0.7	4	3484	11SX2		(11.4)			0.9	2
3480	11SX2		10			0.7	2	3485	11SX2		(11.2)			0.7	1
3481	11SX2		10			0.6	2	3486	11SX2		(10)			0.7	1
3482	11SX2		(10.8)			0.8	1	3487	11SX2		(10)			0.8	1
3483	11SX2		(10)			0.9	2								

第186図 東側調査区のかかわりけ(16)

(4)土製品 (第187～189図 写真図版124、125)

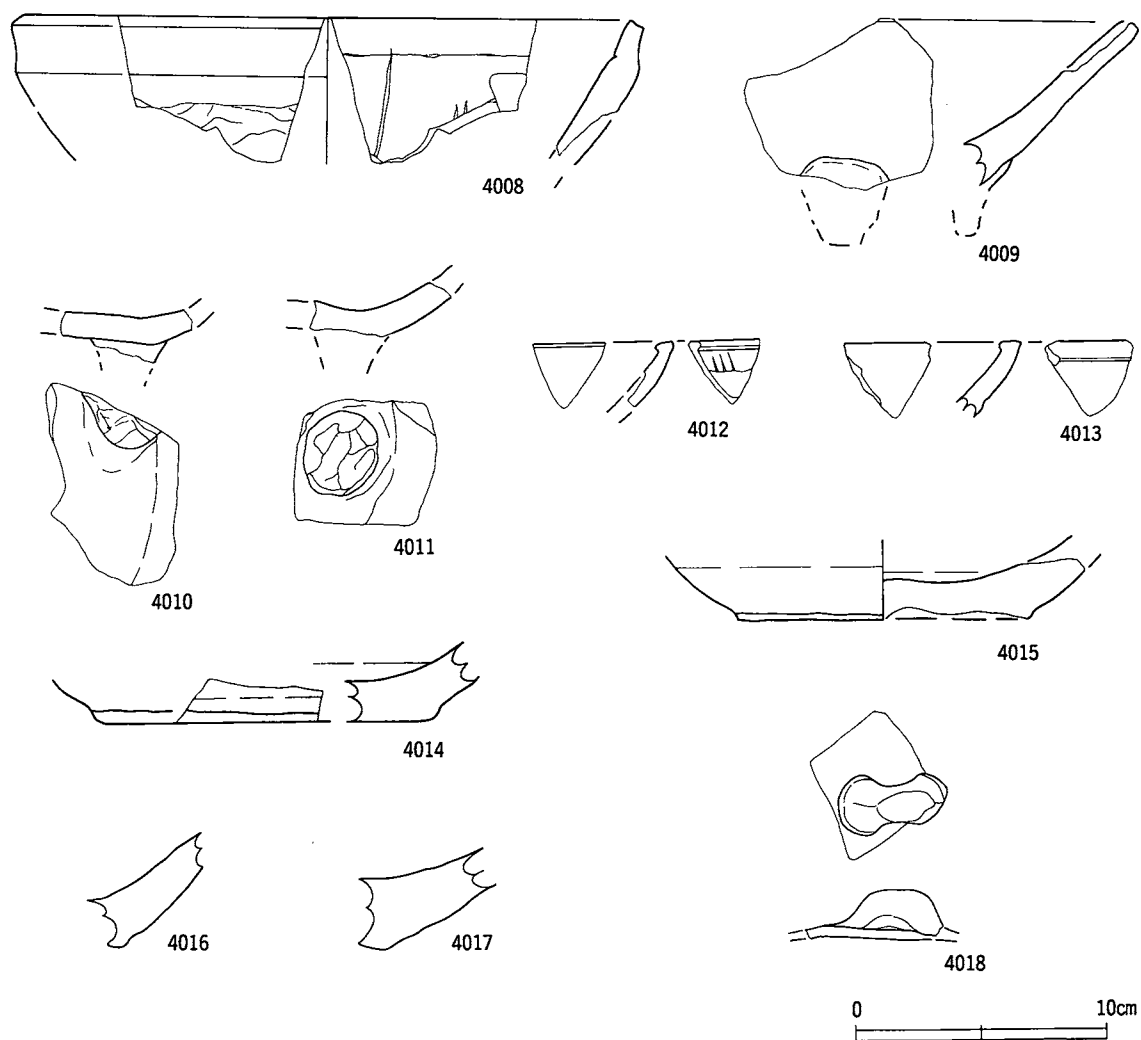
4001～4006は瓦である。4001は平瓦、4002～4006は丸瓦、4007は軒平瓦である。これらの瓦は東側調査区と西側調査区の双方で出土しているが、図示したものが出土した全てで、その出土量は非常に少ないといえる。よって付近に瓦葺きの建物があった可能性は低いと思われる。

4008～4017は素焼きの土器で、手あぶりの類と考えられる。4009～4011は脚の部分が確認できる破片である。4008、4012は内面に線刻がみられる。4008～4013の胎土は手づくねかわらけのものによく似る。これらと似た形状で、その全体形がほぼわかるものは町教育委員会の調査による志羅山遺跡17次調査12号土坑で出土している(平泉町教育委員会1993志羅山遺跡第13・15・16・17・18・20次発掘調査報告書)。4014～4017も手あぶりの類と思われるがロクロ調整によるもので胎土も4008～4013とは異なっている。4018は耳状のものを張り付けた破片である。破片の部位は判断できず、どのような器種か不明である。耳の部分は体部と密着しており穴は貫通していない。4019は土馬と思われるものである。頭部は欠損しており、背にはたてがみの表現であろう緒状のつまみ出しがある。腹部には木の枝を差し込むと足が表現される穴が4つある。尻部にも同様の穴がありこれは尻尾用の穴であろう。胎土は手づくねかわらけの胎土に似る。この土製品の出土状態からは儀礼を行なった形跡は全く読み取れなかった。今のところ平泉遺跡群では土馬の出土は無いようである。4020は不明土製品である。素焼きの土器質で中実である。端部が尖っており何らかの脚だとも考えられない。4021は土錘である。II E区東部の遺物包含層出土である。この遺物包含層からは土師器、須恵器も出土しており、この土錘も古代の所属の可能性もある。4022はかわらけ片に穿孔があるものである。かわらけの完形時に穿孔したのか、破片になってから穿孔したのか判断できない。いずれにせよ焼成後の穿孔である。



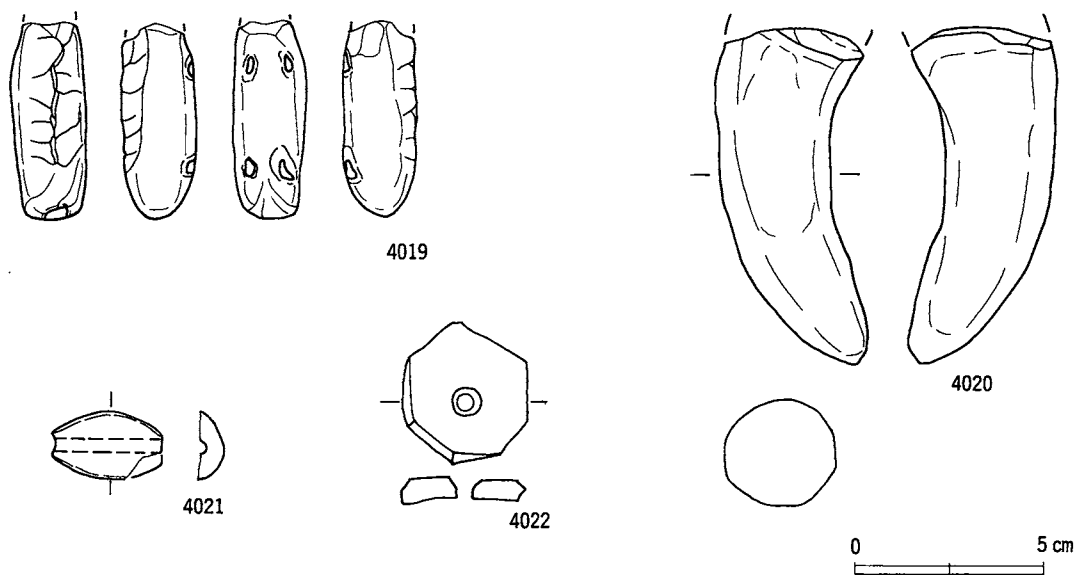
番号	器種	出土位置	その他
4001	平瓦	10SD10埋土上部	灰褐色の色調、胎土に海綿状骨針混入
4002	丸瓦	IIC4dV層	橙色の色調、胎土に海綿状骨針混入せず
4003	〃	15SD20埋土	黒褐色の色調、胎土に海綿状骨針混入せず
4004	〃	IC7e	橙色の色調、胎土に海綿状骨針混入せず
4005	〃	IIIE0h包含層	橙色の色調、胎土に海綿状骨針混入せず
4006	〃	II E9h包含層	灰褐色の色調、胎土に海面状骨針混入せず
4007	軒平瓦	13SX10埋土	黒褐色の色調、胎土に海綿状骨針混入

第187図 12Cの土製品(瓦)(1)



番号	器種	出土位置	その他
4008	手あぶり類	II E5h包含層	手づくねかわらけと同じ胎土、内面に線刻(焼成前)あり
4009	〃	III E0h包含層	手づくねかわらけと同じ胎土、脚の付いている痕跡あり
4010	〃	III E0h包含層	〃 4009と同一個体
4011	〃	II E6h包含層	〃
4012	〃	15SD12埋土(II E6h)	手づくねかわらけと同じ胎土、口唇内面が突き出る 内面に線刻(焼成前)あり
4013	〃	II E7i包含層	手づくねかわらけと同じ胎土、口唇内面が突き出る
4014	〃	II E9i包含層	ロクロ調整
4015	〃	III E0h包含層	〃
4016	〃	II E3i包含層	ロクロ調整と思われる
4017	〃	III E1h包含層	〃
4018	不明	II D5bV層	耳状のものを貼り付け、破片の部位も不明

第188図 12Cの土製品(2)



番号	器種	出土位置	その他
4019	土馬?	II E5h包含層	頭部と思われる部分が欠損、四肢と尾をさしこむ穴がある
4020	不明	15SE17 5層下部	中実である
4021	土鉢	II E6i包含層	
4022	かわらけ片	11SD8埋土	かわらけ片に穿孔している

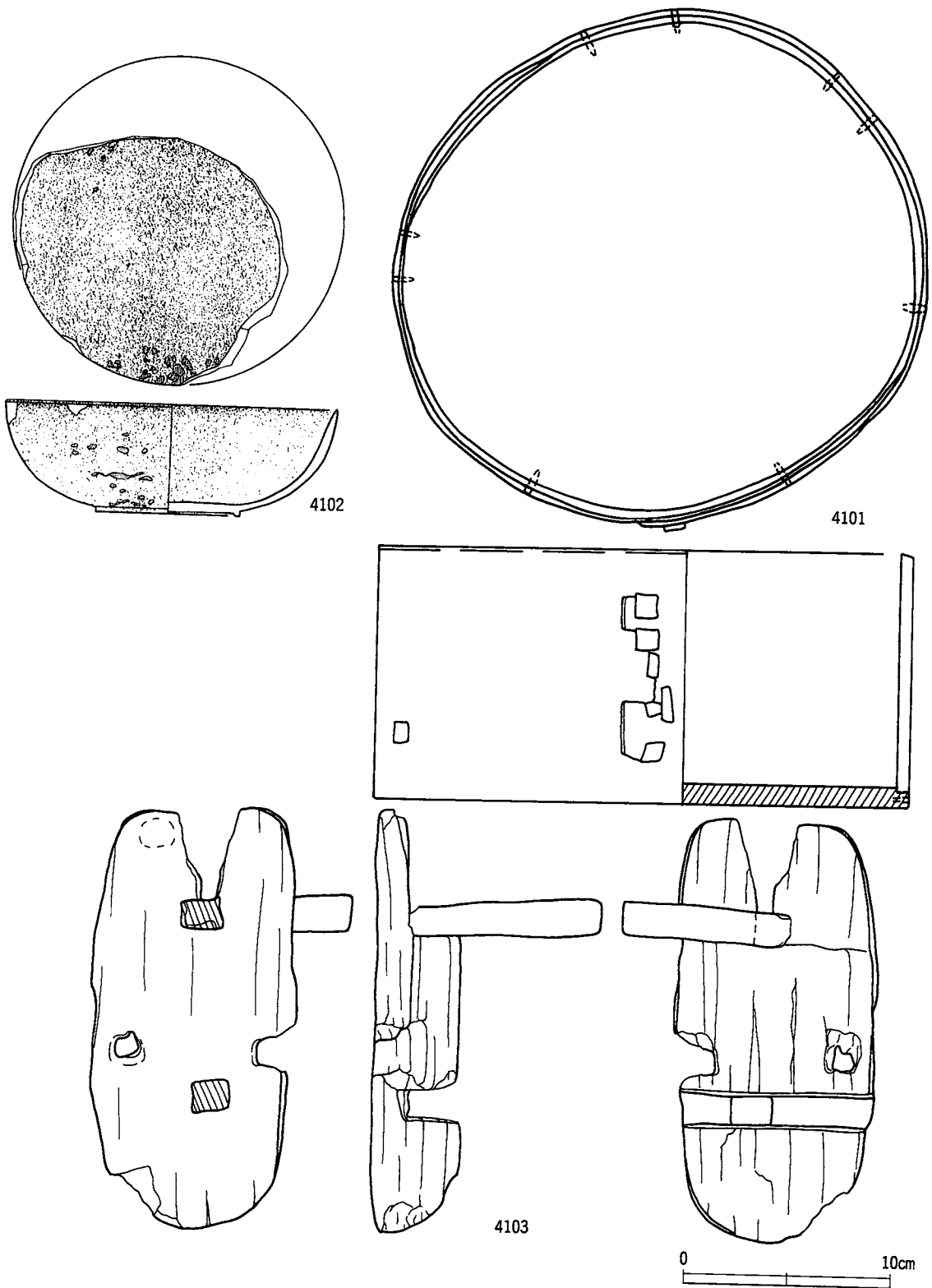
第189図 12Cの土製品(3)

(5)木製品 (第 190～193 図 写真図版 125～128)

12世紀に所属する木製品は13点出土している。4102はトイレ状土坑からの出土で、他はいずれも井戸状遺構からの出土である。

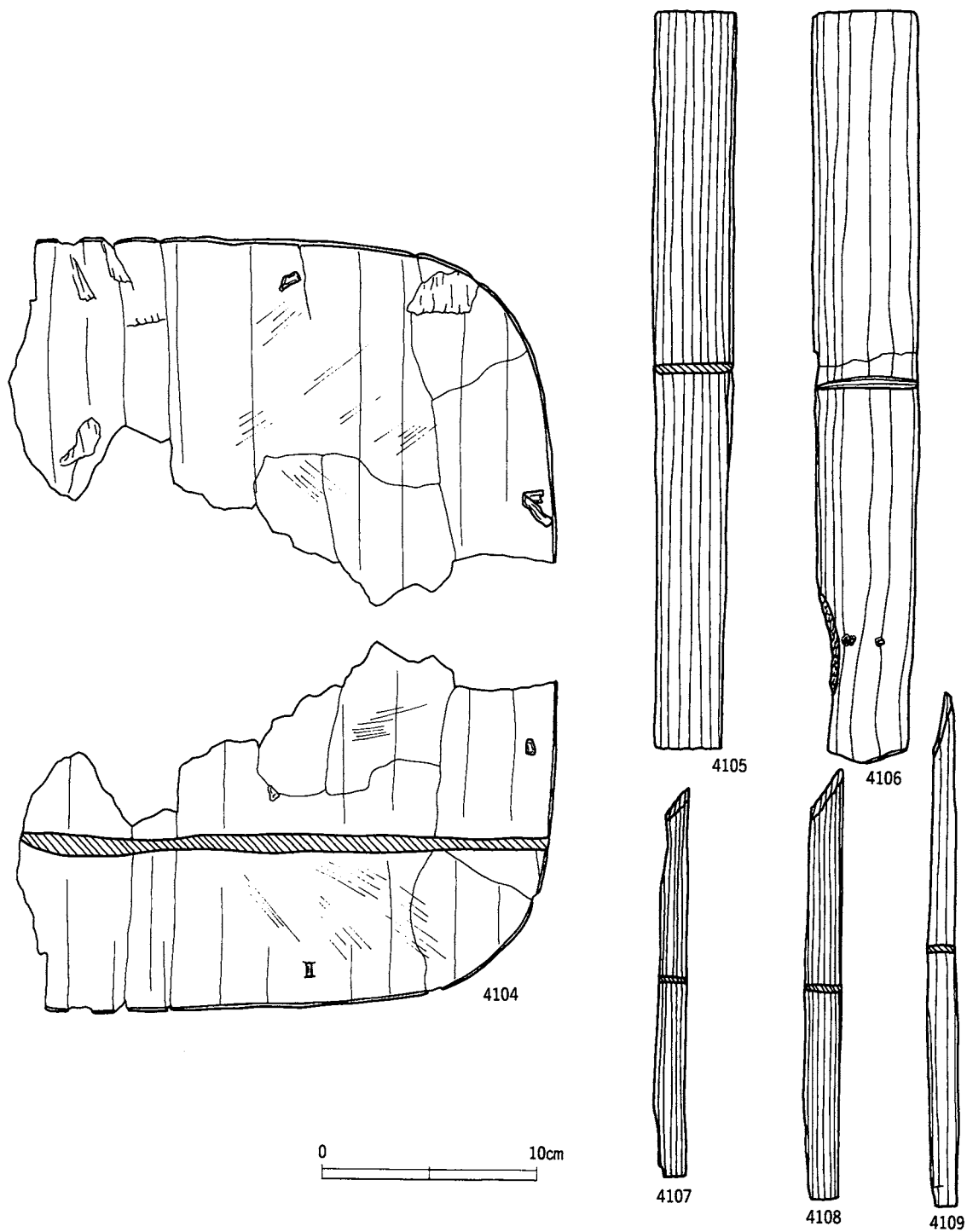
4102の漆器椀は黒漆地の内外面に、赤漆で花と思われる文様を描いている。平泉遺跡群で出土する12世紀代の漆器はいずれも内外面黒漆のみで、赤漆による上絵が施されるものはないという。だがこの漆器椀が出土した15SK30は、平泉遺跡群で多く検出されているトイレ状土坑で、それらは12世紀の所属と理解されており、15SK30のみが12世紀以降の所属とは考えがたい。またこの土坑では渥美産甕の大型破片(1270)も出土しており、15SK30が12世紀の所属である可能性を強めている。よってこの漆器椀も12世紀のものとしておきたい。この赤漆の上絵は下地の黒漆の塗りに比べて稚拙な感じがするもので、手慣れた仕事とは感じられない。手慰みに上絵を施したのであろうか。

4103は差し歯の下駄である。台と歯で樹種が異なっている。4104は曲物の底板である。円形ではなく隅丸の方形を呈する。この底板は綴皮が縁よりも内側にとり付けられており、底板が側板の中にはめ込まれた形態ではなく、底板の方が側板の口径より大きい形態のものである。このような形態の曲物は神饌容器の器台として用いられた例が多いという。(岩井宏實1994「曲物」214頁ものと人間の文化史75法政大学出版局)。図示できなかったがこの底板に伴うと思われる側板が同一遺構から出土している。4105～4109は15SE2から出土している。4107～4109は先端を削って尖らせている。4110～4113は15SE25から出土している。4111は板状のもので、えぐり部分に鉄釘が打たれている。建築部材であろうか。4112も板状のものであるが中程に削って作られたくぼみがある。これも建築部材であろうか。



番号	器種	出土位置	樹種	その他	樹種同定番号
4101	曲物	13SE2埋土下位	クリ(底板)	側板はヒノキ科の一種 木釘はスギ	13-11
4102	漆器碗	15SK30 3層	ケヤキ	黒漆地に赤うるしによる文様	15-35
4103	下駄	15SE7埋土	モクレン属の一種(台)	歯の樹種はクリ	15-7

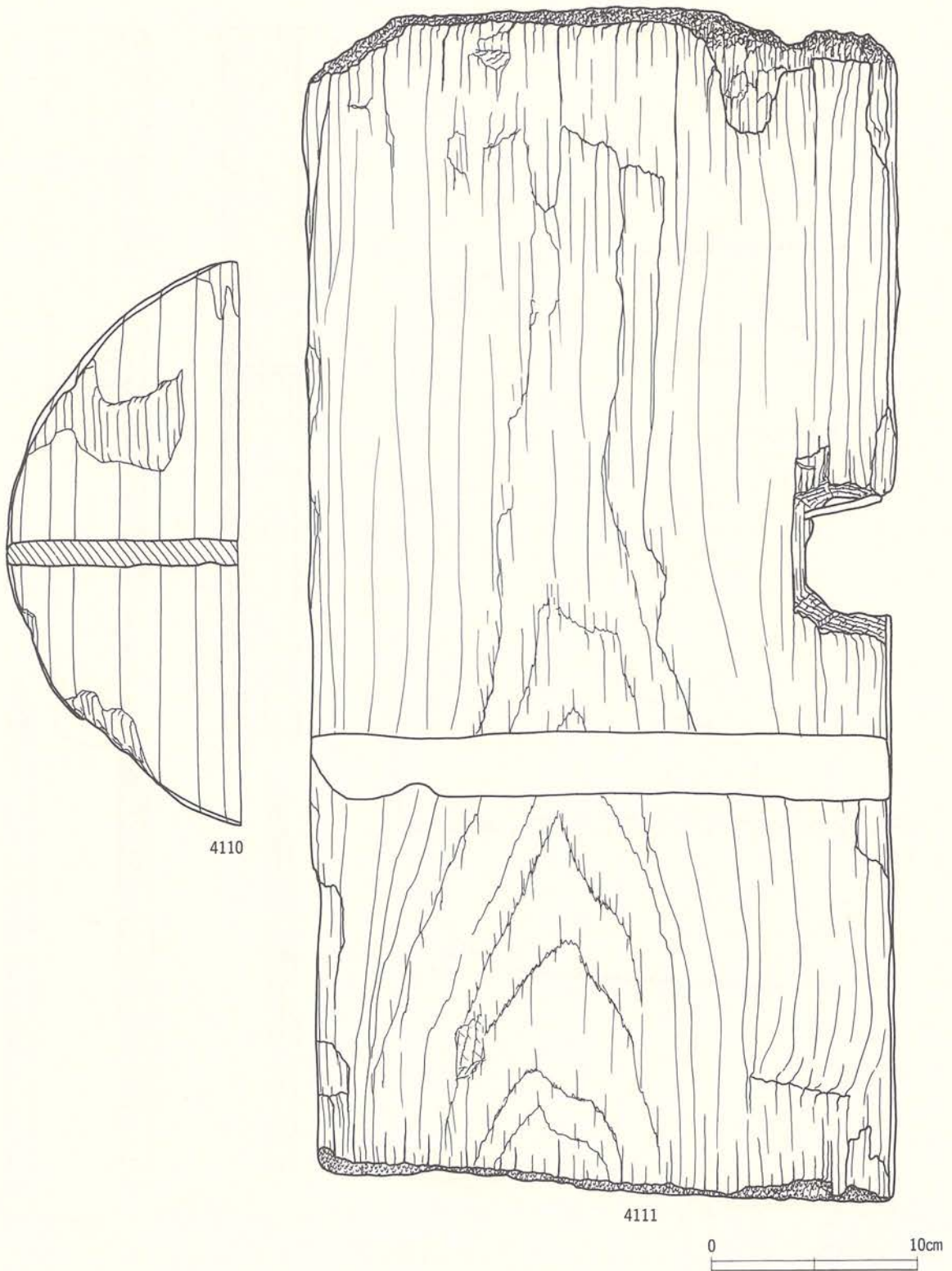
第190図 12Cの木製品(1)



番号	器種	出土位置	樹種	その他	樹種同定番号
4104	曲物底板	15SE7埋土	トチノキ	隅丸方形と思われる	15-8
4105	板材	15SE2埋土	スギ		15-1
4106	板材	15SE5埋土	スギ	釘穴がある	15-5
4107	杵状?	15SE2埋土	スギ	先端を削っている	15-2
4108	〃	15SE2埋土	スギ	〃	15-3
4109	〃	15SE2埋土	スギ	〃	15-4

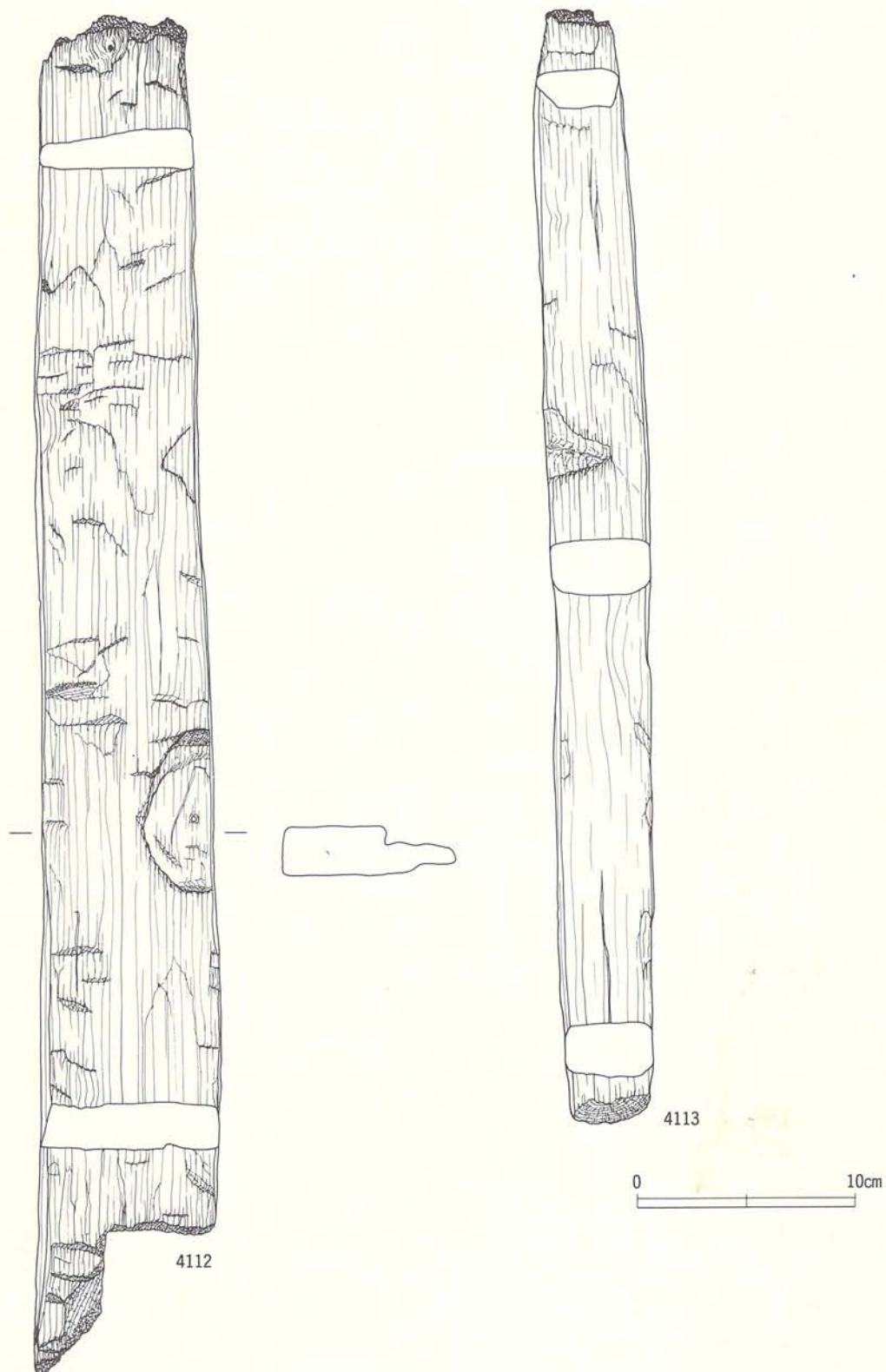
第191図 12Cの木製品(2)





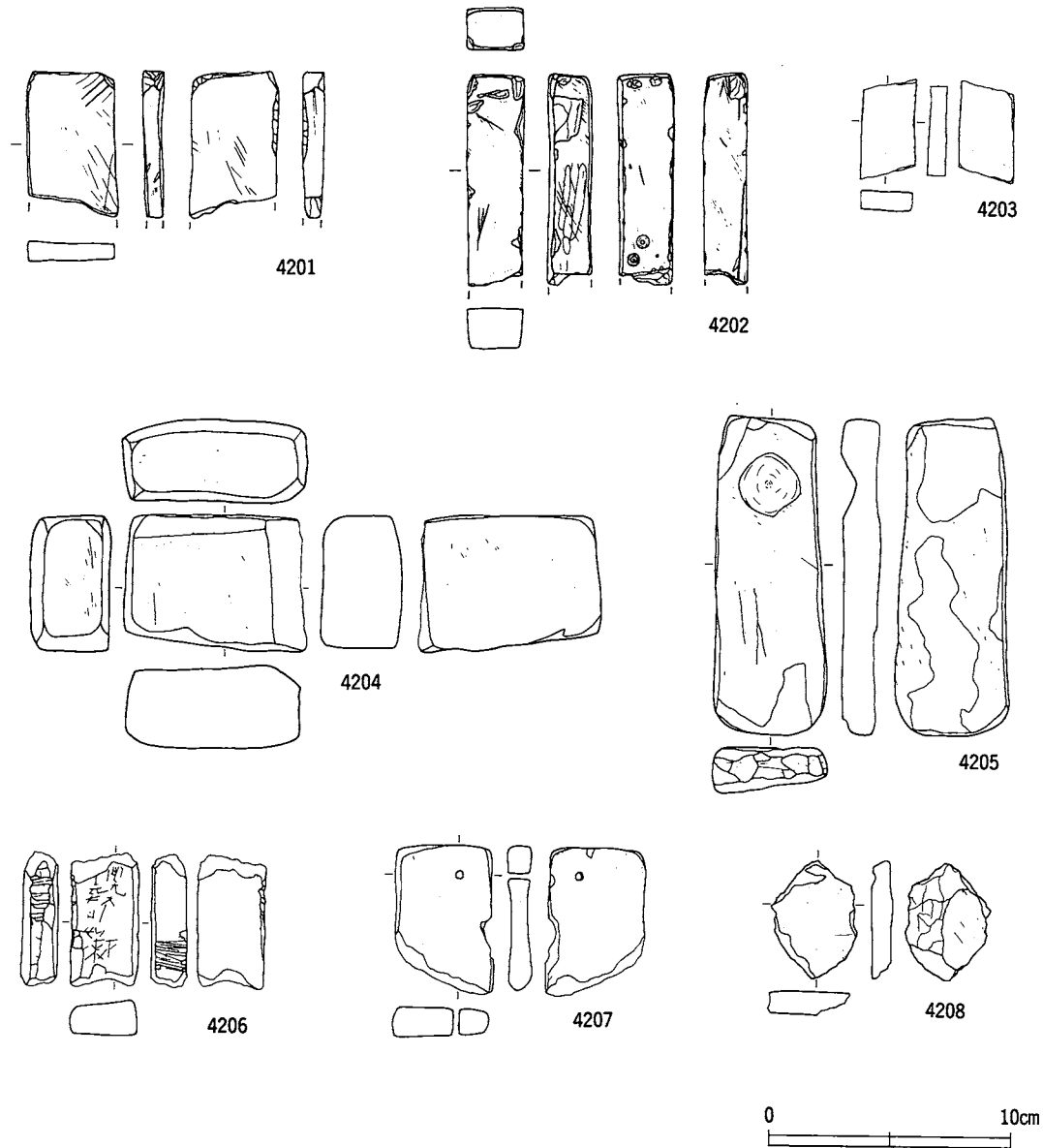
番号	器種	出土位置	樹種	その他	樹種同定番号
4110	曲物底板	15SE25埋土	ヒノキ属の一種		15-12
4111	部材	15SE25埋土	クリ	えぐり部分に釘が打たれている	15-9

第192図 12Cの木製品(3)



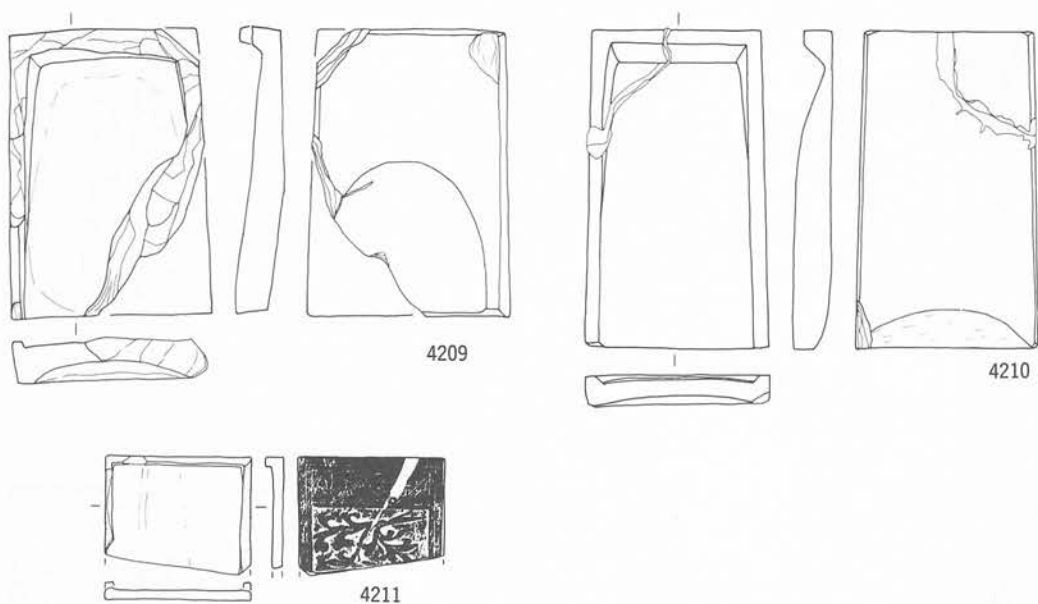
番号	器種	出土位置	樹種	その他	樹種同定番号
4112	部材	15SE25埋土	クリ	手斧削痕あり 削ってくぼみを造りだしている	15-10
4113	部材	15SE25埋土	クリ	手斧削痕あり	15-11

第193図 12Cの木製品(4)



番号	器種	出土位置	石質	その他
4201	砥石	15SE2 2層	細粒凝灰岩	4面使用
4202	〃	〃	細粒凝灰岩	5面使用
4203	〃	10SD3埋土(I C9c)	緑色凝灰岩	2面使用
4204	〃	10SD7埋土	〃	4面使用
4205	〃	10SD6埋土(II D5b)	〃	3面使用
4206	〃	10SD6埋土(II D5b)	赤褐灰凝灰岩	4面使用 文字と思われるものが刻まれている
4207	〃	10SD3埋土(I C8i)	粘板岩	4面使用 貫通する穴がある
4208	不明	IID3cIII層	滑石片岩	1面を擦っている

第194図 12Cの石製品(1)



番号	器種	出土位置	石質	その他
4209	硯	15SK45 6層上面	粘板岩	
4210	硯	〃	〃	割れた部分を漆で接着している
4211	硯	I C8eIII層	〃	背面に彫り込んだ文様がある

第195図 12Cの石製品(2)

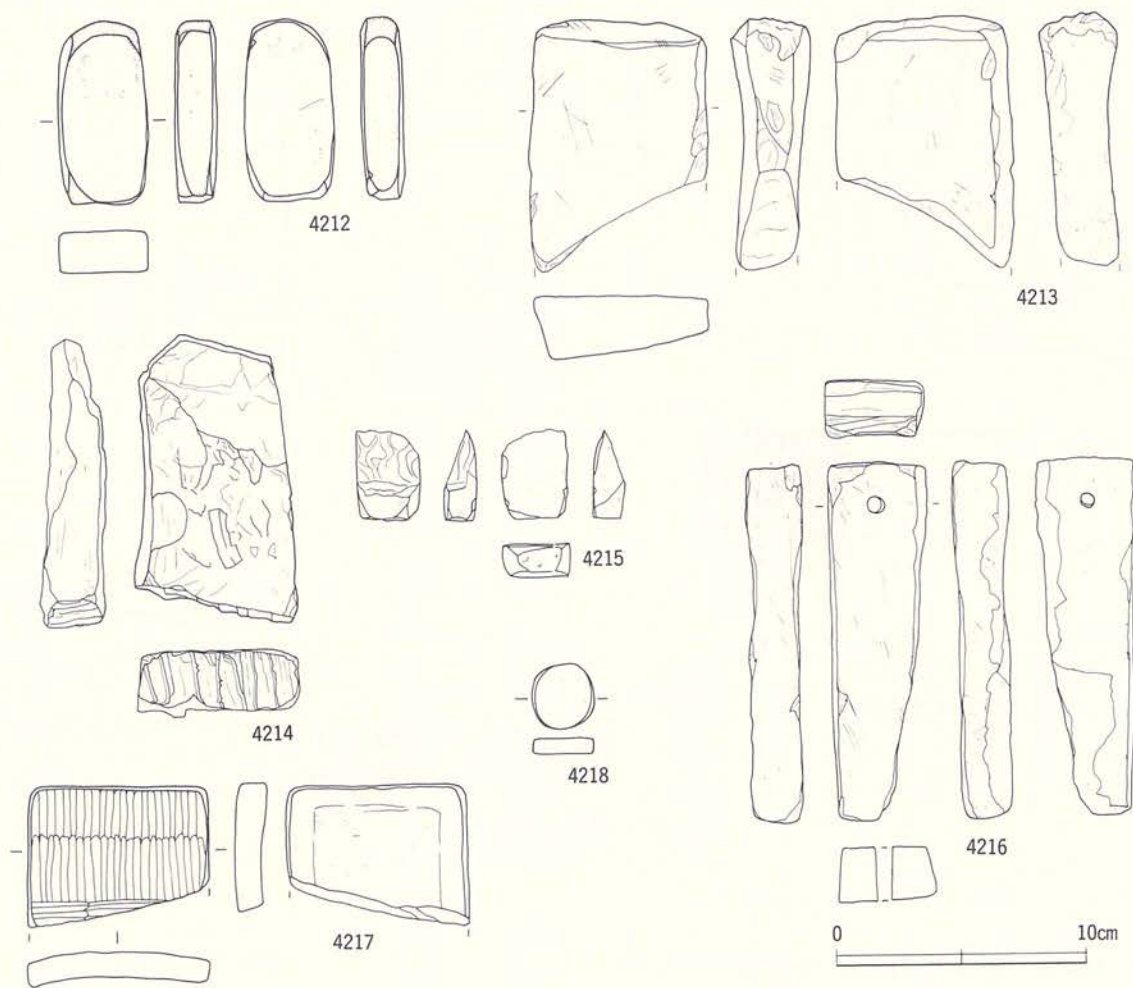
(6)石製品 (第194~196図 写真図版129、130)

砥石などはその形状から時期判断ができないが、12世紀の遺構から出土したものは12世紀の所属とした。4201~4211は西側調査区、4212~4218は東側調査区の出土である。

4201~4205は砥石である。4206は砥石に似た形状であるが、片面に文字らしい線刻がある。判読はできなかった。4207は砥石と思われるが貫通する穴がある。4208は滑石のかけらである。平泉近辺では滑石が産出しないので、自然物とは思われない。石鍋の破片であろうか。4209~4211は硯である。4209、4210は15SK45の6層上面から出土した。4210は欠けた部分を漆で接着している。4211は12世紀の所属であるという確証はないが、形状から近世以降のものとは考えがたく、12世紀のものとした。背面に植物の文様を浮彫りと線刻で彫っている。

西側調査区の石製品の多くはII E区の東側の遺物包含層とその下から検出された15SD12の埋土から出土している。4212~4216は砥石である。4216は貫通する穴がけられている。4217は滑石製の温石である。石鍋の転用であろう。4218は円形の製品であるが用途は不明である。



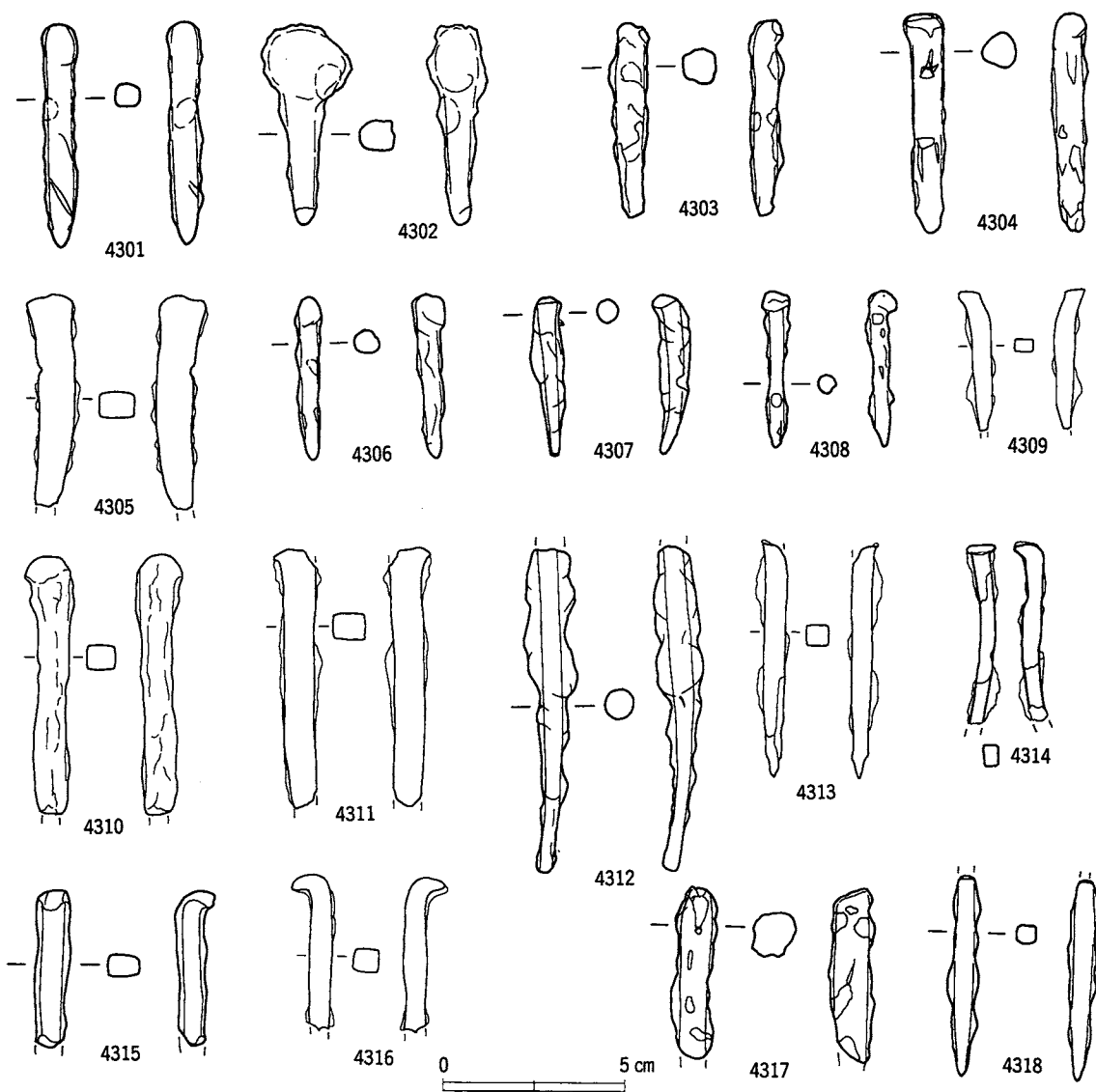


番号	器種	出土位置	石質	その他
4212	砥石	15SD12埋土 (IIE6h)	細粒凝灰岩	4面使用
4213	〃	13SB3柱穴E埋土	斜長石流紋岩	4面使用
4214	〃	IIE6g包含層	粘板岩	3面使用
4215	〃	IIE6h包含層	斜長石流紋岩	5面使用
4216	〃	IIE6g包含層	粘板岩	5面使用 貫通する穴がある
4217	温石	15SD12埋土 (IIE4h)	滑石片岩	石鍋の転用と思われる
4218	不明	IIE7g包含層	細粒凝灰岩	表裏面と側面を擦っている

第196図 12Cの石製品(3)

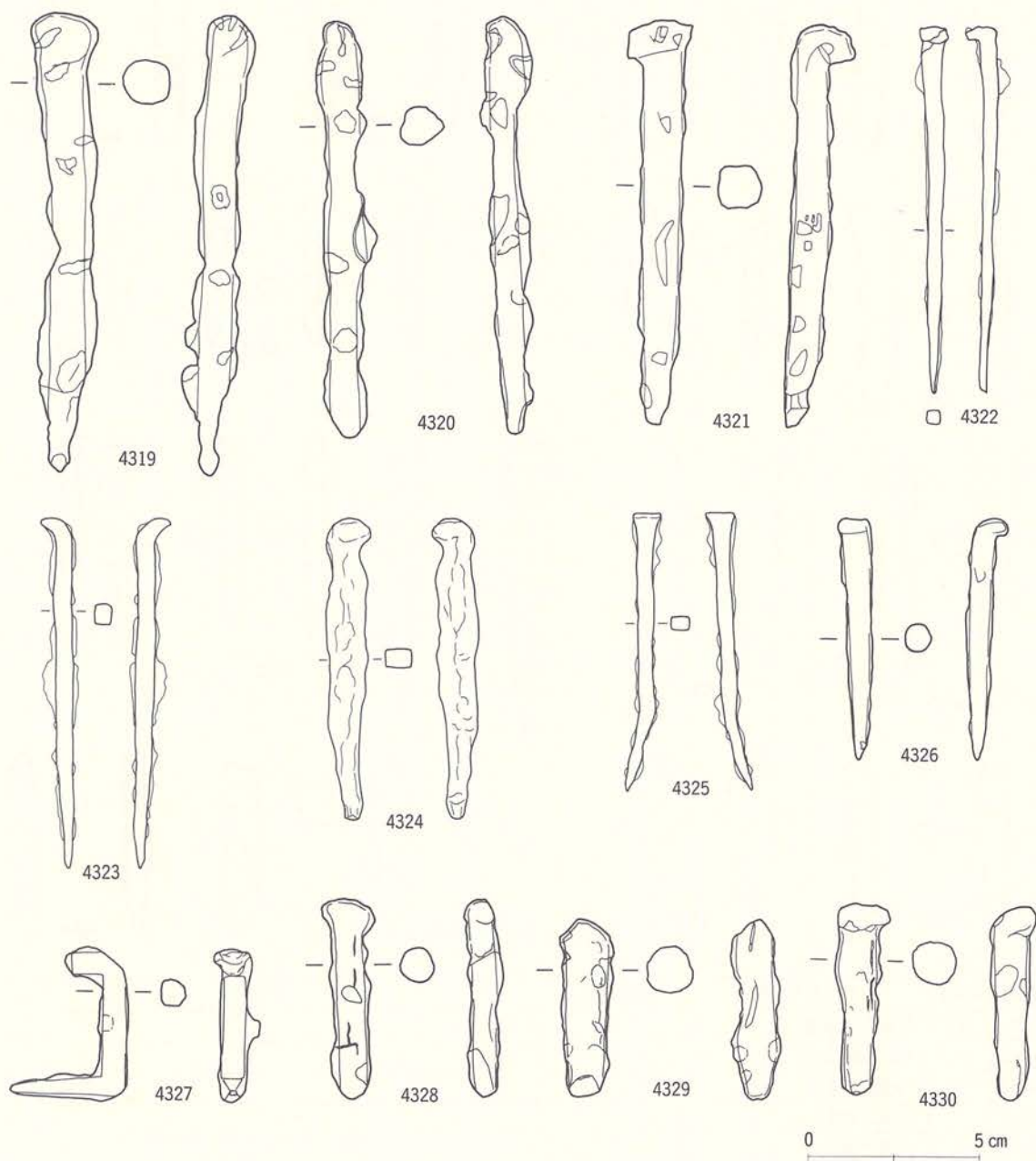
(7)鉄製品 (第197～199図 写真図版131)

砥石などと同様に鉄製品はその形状から時期判断が難しいが、12世紀の遺構から出土したものは12世紀の所属とした。4301～4332は釘である。最長は4319の13cm(約4寸2分)、最短は4309の3.93cm(約1寸3分)である。いずれも断面は角型で頭を折っている。4333、4334は両端が尖る棒状の製品である。4335は刀子と思われる。4336は鉄鏃、4337は製品名不明である。



番号	器種	出土位置	金属の種類	その他
4301	釘	II E9h包含層	鉄	
4302	〃	II E5h包含層	〃	
4303	〃	15SK12埋土	〃	
4304	〃	15SD24埋土	〃	
4305	〃	10SD3埋土	〃	
4306	〃	II E6h包含層	〃	
4307	〃	II E5i包含層	〃	
4308	〃	II E5h包含層	〃	
4309	〃	10SD6埋土	〃	
4310	〃	III E1h包含層	〃	
4311	〃	〃	〃	
4312	〃	II E7i包含層	〃	
4313	〃	III E1h包含層	〃	
4314	〃	〃	〃	
4315	〃	II E6i包含層	〃	
4316	〃	10SD3埋土	〃	
4317	〃	II E5h包含層	〃	
4318	〃	II E6h包含層	〃	

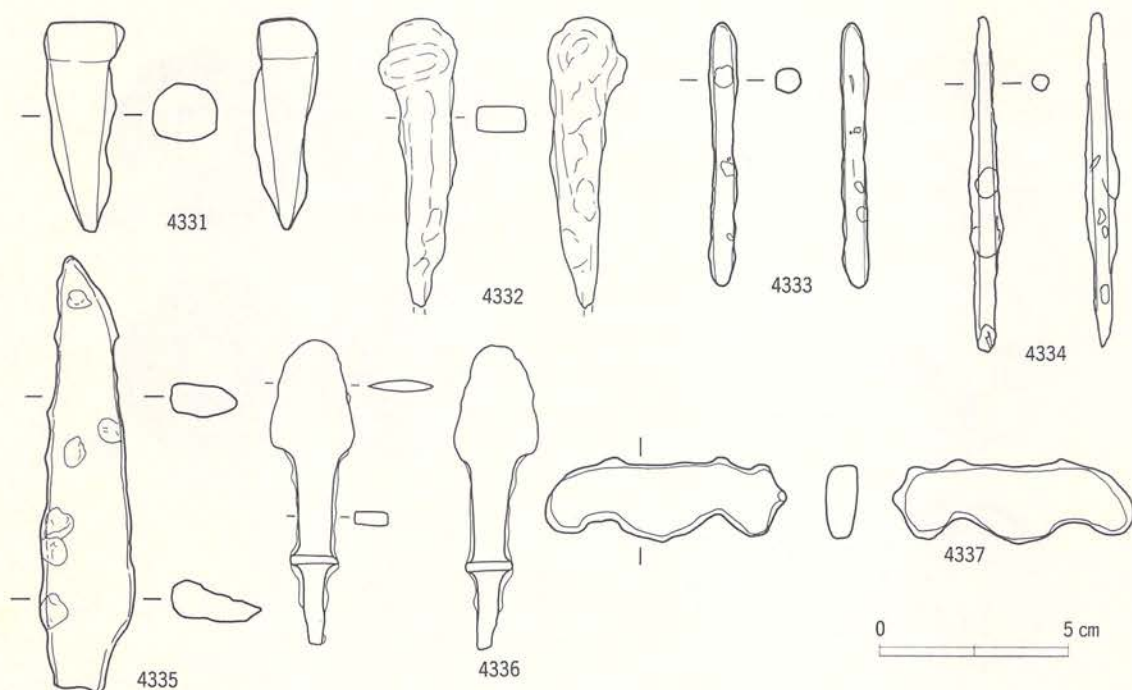
第197図 12Cの金属製品(1)



番号	器種	出土位置	金属の種類	その他
4319	釘	15SK8埋土	鉄	
4320	〃	II E7i包含層	〃	
4321	〃	II E5h包含層	〃	
4322	〃	10SD6埋土	〃	
4323	〃	10SD6埋土	〃	
4324	〃	II E9h包含層	〃	
4325	〃	〃	〃	
4326	〃	15SD12埋土 (II E5h)	〃	
4327	〃	II E6h包含層	〃	
4328	〃	II E5i包含層	〃	
4329	〃	II E5h包含層	〃	
4330	〃	II E8h包含層	〃	

第198図 12Cの金属製品(2)





番号	器種	出土位置	金属の種類	その他
4331	釘?	15SD12埋土(II E4h)	鉄	
4332	釘	10SD3埋土	〃	
4333	不明	II E6h包含層	〃	棒状で両端が尖る
4334	不明	II E7h包含層	〃	棒状で両端が尖る
4335	刀子	II E6h包含層	〃	柄部一部欠損
4336	鏃	III E0h包含層	〃	
4337	不明	II E6h包含層	〃	

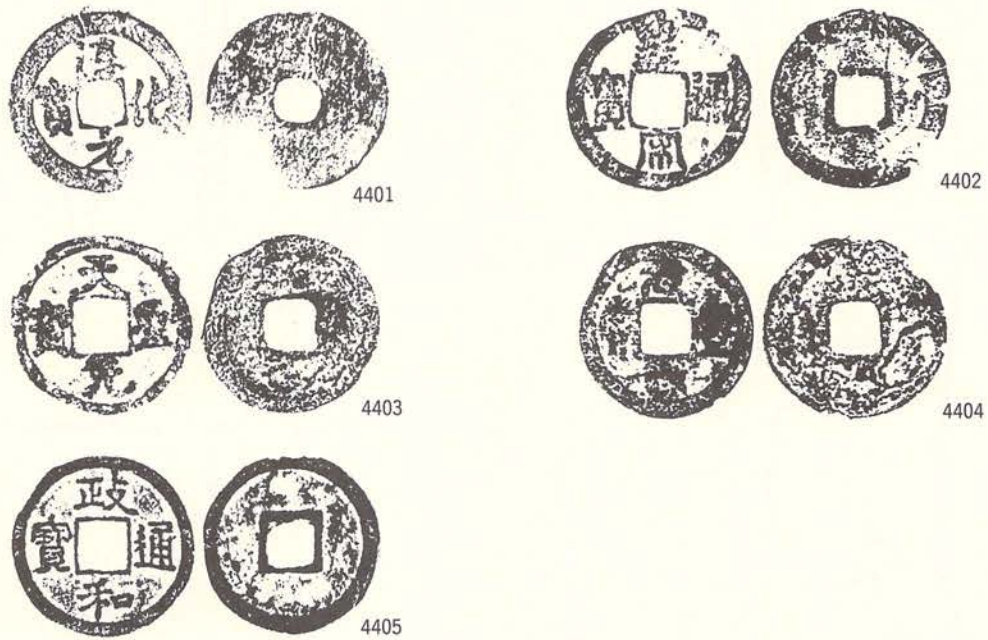
第199図 12Cの金属製品(3)

(8)銅製品 (第200図 写真図版132)

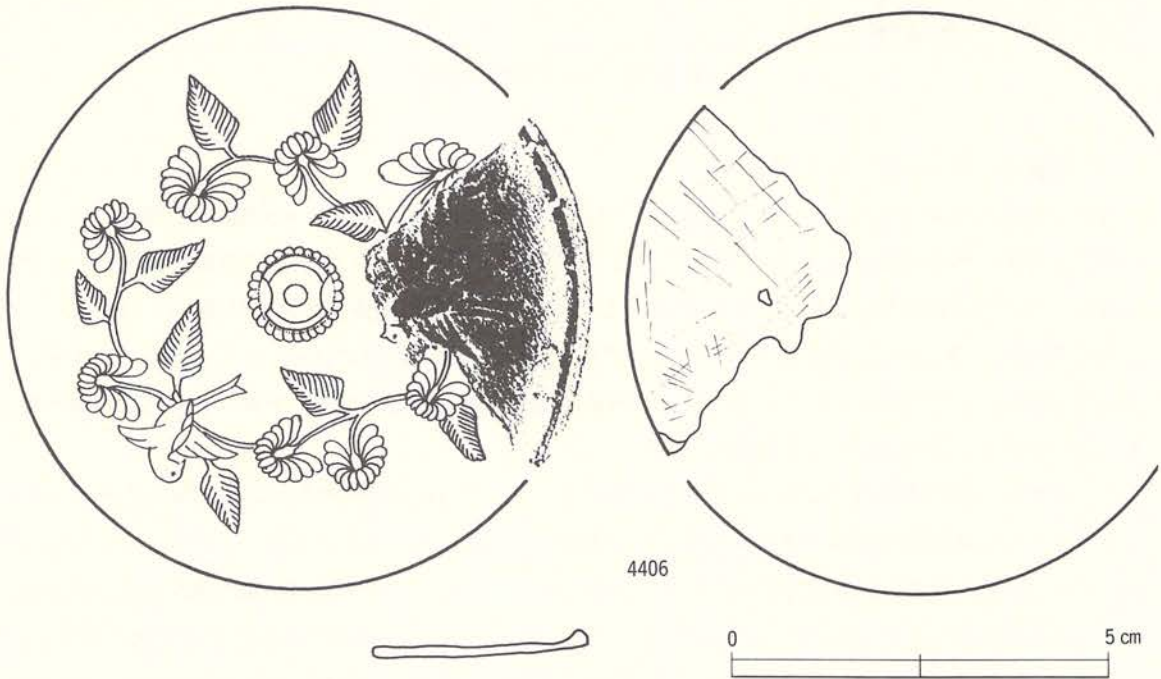
4401～4405は銭貨である。いずれも北宋銭で12世紀以前の铸造であるが、本遺跡の12世紀の生活に伴うものであるかは判断が難しい。4405の政和通寶は、出土した15SD13が12世紀の所属と考えられる建物より古いので、12世紀に伴うと考えられる。他はむしろ中世後半の生活に伴う可能性が高いのではなかろうか。

4406は銅製の鏡である。表土直下からの出土であり、特殊な出土状況ではなかった。出土した部分から鏡全体の文様について当埋文センター期限付専門職員千葉和弘が考察してみた。千葉によると文様の考察は以下の通りである。また図中の文様復元も千葉による。

この鏡片からは二種類の文様をよみとることができる。一つは比較的尾の長い小型の鳥と思われるものであり、もう一つは大振な花卉を持つ花を模した文様の一部と推定されるものである。前者については、尾の部分に鶴の脚部とみられることも可能だが、これとは別に足とみられる二つの突起が看取される点、また翼の広げかたに特徴がみられる(翼が鳥の姿勢からみて上方に反っている)ことなどを合わせると鶴とは考え難い。後者については、当初、松とも考えられたが、和鏡にみられる松葉の一般的な形態が扁平であるのに対し、この文様の花卉は下方にも広がりを見せているので、単に花とした。ただしいずれも明確な呼称は断定し難く、従って「瑞花」や「瑞鳥」をあしらった文様とみられることもできるであろう。仮称として「瑞花双鳥鏡」という名を与えたい。



番号	種類	出土位置	直径(cm)	重さ(g)	金属の種類	鑄造年代	鑄所など
4401	淳化元寶	I C8cIII層	2.5	1.78	銅	990年	北宋
4402	皇宋通寶	13SK6 1層	2.9	0.99	銅	1039年	北宋
4403	天聖元寶	15P359(15SB17)	2.5	2.29	銅	1023年	北宋
4404	元豐通寶	15P359(15SB17)	2.4	2.72	銅	1078年	北宋
4405	政和通寶	15SD13埋土	2.9	2.81	銅	1111年	北宋



番号	器種	出土位置	金属の種類	その他
4406	鏡	III F4d	銅	

第200図 12Cの金属製品(4)

#### 4 13世紀～15世紀の遺物

13～15世紀に属する遺物が少量であるが出土している。今回の調査ではこれらの遺物の伴う遺構をはっきり把握することはできなかった。可能性としては15 S B 17が15世紀代に属するかもしれない。

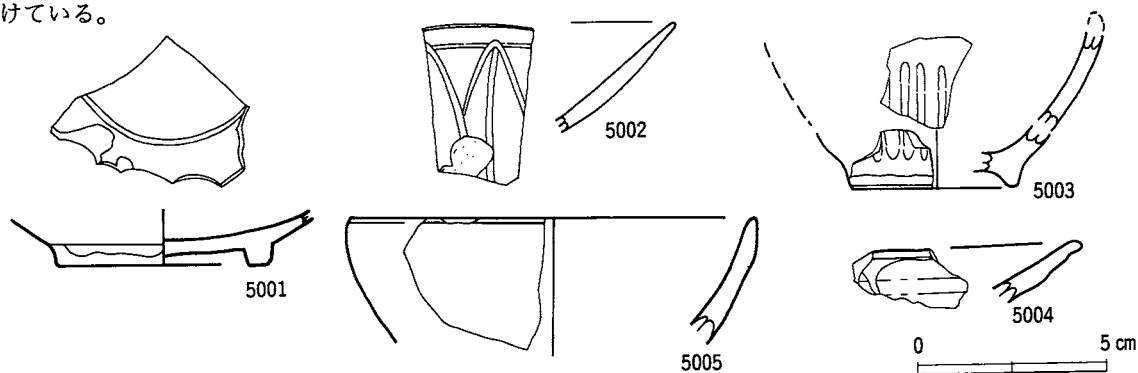
##### (1)陶磁器 (第201、202図 写真図版132、133)

中国産磁器と国産陶器がある。5001は白磁の皿で高台部は露胎、内面見込みには沈線による圏線がある。13世紀中頃のものであろう。5002は青磁の碗で鎬蓮弁文が施されている。13世紀中頃の年代であらう。5003の青磁は2破片から合成したが小碗と推定される。露胎部分と施釉部分の境付近は赤く発色している。14世紀前半のものであろう。5004は瀬戸産の灰釉皿、5005は瀬戸産の鉄釉の碗である。いずれも15世紀後半のもものと推定される。5006は東北地方在地産の陶器甕である。窯は特定できないが宮城県付近の産地と思われる。時期は13～14世紀前半のものであろう。5007～5010は図版作成時には、12世紀以降の東北地方在地産陶器として扱っていたのであるが、その後これらは、12世紀代の水沼系の陶器の可能性が高いとの指摘を平泉町教育委員会の八重樫氏から受けた。よってこれらを12世紀に所属する遺物に訂正したい。

##### (2)かわらけ (第202図 写真図版133)

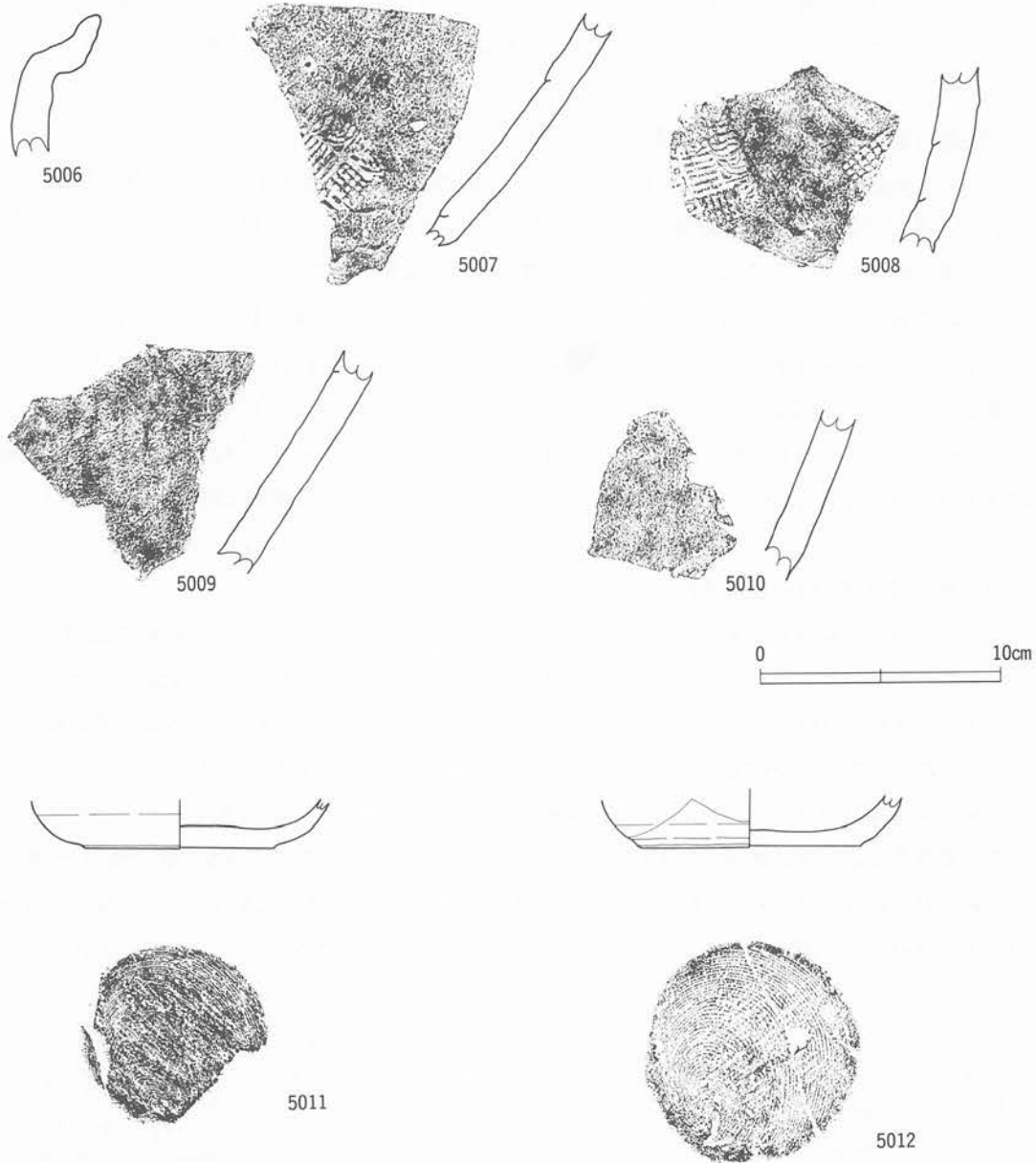
5011、5012はロクロ調整のかわらけであるが、胎土や形状、調整から、12世紀以降の所属と考えられる。これらのかわらけが出土したのは、12世紀の遺物を包含する土層より下にある水穴(伏流水の流れた痕跡)中からである。伏流水の流れとともに何処からか流れてきたものであり、12世紀の包含層の下から出土していても何ら不都合はない。13世紀中頃と思われる5001の白磁の皿も同じ位置から出土している。

5011、5012はともにガサガサの胎土で、内底面にナデ調整が施されている。このかわらけのそっくりなものは町教育委員会による泉屋遺跡第5次調査の6号土坑で多量に出土している(平泉町教育委員会1991平泉遺跡群発掘調査報告書平泉町文化財調査報告書第23集)。時期については、八重樫忠夫氏の論考(八重樫忠夫1996「藤原氏以後の平泉」考古学ジャーナルNo.407)ではこのタイプのかわらけを14世紀前半頃に位置付けている。



番号	種類	器種	部位	出土位置	大宰府分類	大宰府の年代観	その他
5001	白磁	皿	底	II E5hの水穴中	IX類	13C中か	口はげの皿か 胎土灰白色
5002	青磁	碗	口～体	II F9b表土	III 2類	13C中か	鎬蓮弁文 胎土灰色
5003	青磁	小碗?	体～底	13SD23埋土	III 2類	14C前か	胎土灰色 露胎部分と施釉部分の境は赤色に発色
5004	陶器	皿	口	10次調査区	—	—	瀬戸産15C後半 口縁内外面にのみ灰釉
5005	陶器	碗	口	10次調査区	—	—	瀬戸産15C後半 内外面鉄釉

第201図 13～15Cの陶磁器(1)



番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	色調	その他
5006	在地産	甕	口縁	13SD3埋土(III F0d)	13~14C	赤灰色	伊豆沼窯産の可能性あり
5007	水沼系	〃	体	II E6h包含層	12C	〃	12Cの陶器
5008	〃	〃	〃	II E6h包含層	〃	外黄緑の釉 内赤灰色	5007、5009、5010と同一個体か
5009	〃	〃	〃	〃	〃	赤灰色	
5010	〃	〃	〃	13SD8埋土(II F7a)	〃	〃	
5011	かわらけ	—	下半部	II E4i水穴中	13~14C	茶褐色	砂粒海綿状骨針の混じるガサガサした胎土
5012	かわらけ	—	下半部	II E4i水穴中	13~14C	〃	内底面にナデあり

第202図 13~15Cの陶磁器(2)、かわらけ



## 5 16世紀～近世の遺物

検出された近世屋敷跡の中には16世紀末から連続的に営まれた可能性があるものがあり、16世紀の遺物を近世の遺物と合わせてここに記す。

近世の遺物には陶磁器、木製品、金属製品、銭貨、石製品がある。

今回報告の調査区域には、明治初年の旧平泉村端郷高館の地籍図である「広土絵図面」（平泉町花立 鈴木泰三氏藏）で地目が宅地になっている地番が4ヵ所ある。西側調査区には「五番 鈴木慶吉」、「六番 菅原浅吉」が、東側調査区には「廿二番 小松代良作」、「廿五番 佐藤長太夫」がある。具体的な範囲は第VI章考察、近世以降の屋敷の範囲とその変遷の第264図を参照されたい。これを素直に解釈すれば、明治初年にはこの調査区内に4つの屋敷があったことになる。これらの屋敷が近世初頭から途切れなく営まれたという確証は全くないが、ここでは出土した近世遺物を屋敷別に分けて示したい。

西側調査区の「六番 菅原浅吉」の屋敷は今回の調査区ではその縁の部分が一部引っ掛かっているのみであり、便宜的に西側調査区の全部を「五番 鈴木慶吉」の屋敷に対応させる。東側調査区の「廿二番 小松代良作」と「廿五番 佐藤長太夫」はその境がちょうど大グリッドのFラインに重なるので、このFラインより西を小松代の屋敷に、東を佐藤の屋敷とする。これらの境界は多分に便宜的なものであることを断っておく。

### (1) 陶磁器 (第203～240図 写真図版134～150)

陶器と磁器、また素焼きの土器質のものもまとめて掲載した。近代以降に下る時代の陶磁器も多数出土したが今回の報告では原則として割愛する。肥前産陶磁器の編年は大橋康二氏の編年（大橋康二1993「肥前陶磁」考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社）に準拠し、瀬戸・美濃産陶器は主に井上喜久男氏の編年（井上喜久男1992「尾張陶磁」ニューサイエンス社）に準拠した。

### 西側調査区の陶磁器 (第203～225図 写真図版134～143)

西側調査区では磁器144点、陶器121点の計265点を図示した。6190～6194の陶器皿の4点が16世紀末～17世紀初めのものであるが、他の陶磁器はいずれも古くみても17世紀末以降のものであり、17世紀初めから17世紀末の間の空白期間を指摘できる。よってこの区域が屋敷として連続的に営まれるようになったのは17世紀末よりも後の18世紀初め頃からと考えたい。16世紀末～17世紀初頭の陶器は17世紀末以降に営まれた屋敷のものとは無関係なのであろう。

磁器は18世紀以前のもものはもちろん肥前産が多い。19世紀以後のものは肥前産と思われるものや、東北在地産の可能性が高いものが多い。6043～6057の碗は一見したところ瀬戸産の磁器碗に類似する。しかし実際に瀬戸の窯から出土した磁器と比較させていただいたのであるが（瀬戸市埋文センターの藤澤良祐氏のご好意による）、染付の色調が、紺色の強い工業コバルト的な色で、瀬戸産のものに比べると濃い感じがするという印象を持った。藤澤氏からは「瀬戸産のものとはやはり異なるので、東北地方の窯に産地を求めた方がよいのではないか」との意見を賜った。現在のところこれらの磁器碗の生産された窯を特定することは難しいが、ここでは東北地方産の可能性が高いとしておきたい。

6058、6059は切込産の磁器に似るが確証はない。6060～6064は平清水産の磁器と思われる。6065～6068は産地を特定できないが東北在地産でないかと思われる。6066、6067には焼継ぎ痕がある。

磁器皿の6063、6064は底部に墨書がある。文字ではなく染みといった感じのものである。6120～6122は角

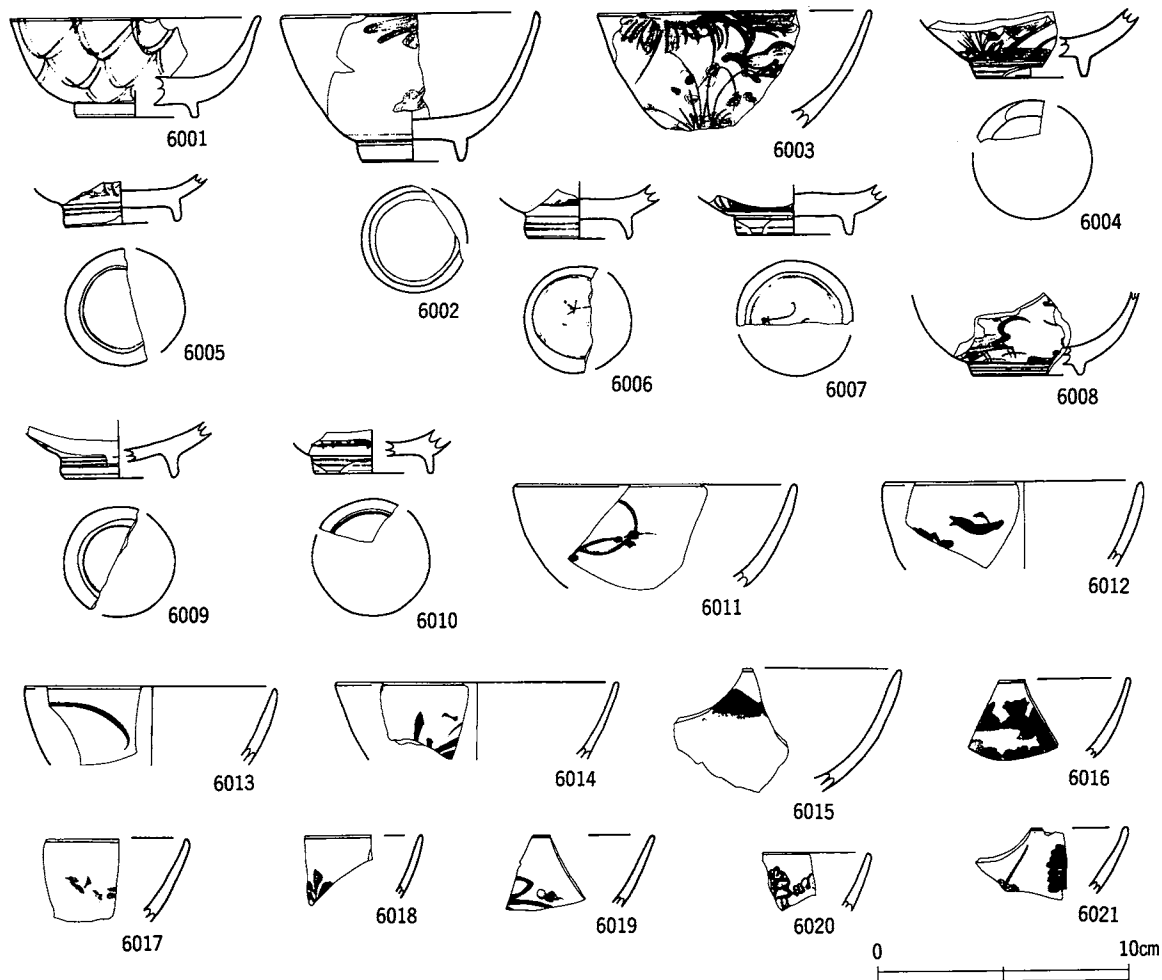
型の型おこしの皿である東北地方在地産であろう。6125～6127 は「壽」の字を図案化した文様の型おこしの皿で、「壽文皿」と称されるものである。藤澤氏のご教示によると「壽文皿」は瀬戸で生産されていたという記録が存在するそうである。だが陶磁器の文様は売れるものであれば、すぐに他の窯場でもコピーするであろうから、これらが瀬戸産だという根拠にはなりえないだろう。むしろこの遺跡で出土した、一見瀬戸産の磁器碗に似るが、それとは異なる 6043～6057 の碗の存在は、これらの「壽文皿」が、瀬戸以外の産地の可能性が高いことを示しているだろう。6136 の火入は胎土が軟質で陶胎染付に分類できるのかもしれないが、ここでは磁器として扱っている。底面に墨書があり「安」と書かれている。

陶器には肥前産、瀬戸産、京焼系、大堀相馬産、その外の東北在地産のものがある。

肥前産の碗には 6145～6152 の呉器手、6153 の陶胎染付がある。いずれも 18 世紀前半のものであろう。大堀相馬の碗は多数出土している。6154、6155 は灰釉と鉄釉の掛け分け碗、6156～6159 は灰釉のおそらく丸碗。6160～6180 は 6173 を除き失透性の藁灰釉が施された碗である。6173 は銅緑釉と褐釉が施されている。6182 は外面に馬が描かれている。おそらく大堀相馬産であろう。6184～6188 は瀬戸産の陶胎染付碗である。広東碗型の器形である。6189 は上絵付けの施された碗で京焼系と推定される。

6200 の皿は陶胎染付である。産地を特定することは難しいが胎土の感じから大堀相馬産の可能性が高い。6201 は大堀相馬産で鉄釉と銅緑釉による絵付けが施されている。大堀相馬産の土瓶によくみられる絵付けのパターンである。6207 は型おこしの皿で馬の文様である。6210～6212 は肥前産の陶器の鉢である。赤褐色の胎土である。6226～6229 は具体的な窯は特定できないが東北在地産の陶器の甕である。いずれも下半部は鉄釉で上半部には失透性の空色の釉が流し掛けられている。6226 は内面に仙台通寶と思われる鉄銭が癒着している。15 S B 26（1号礎石建物）の四隅を結んだ交点から倒立の状態出土している。

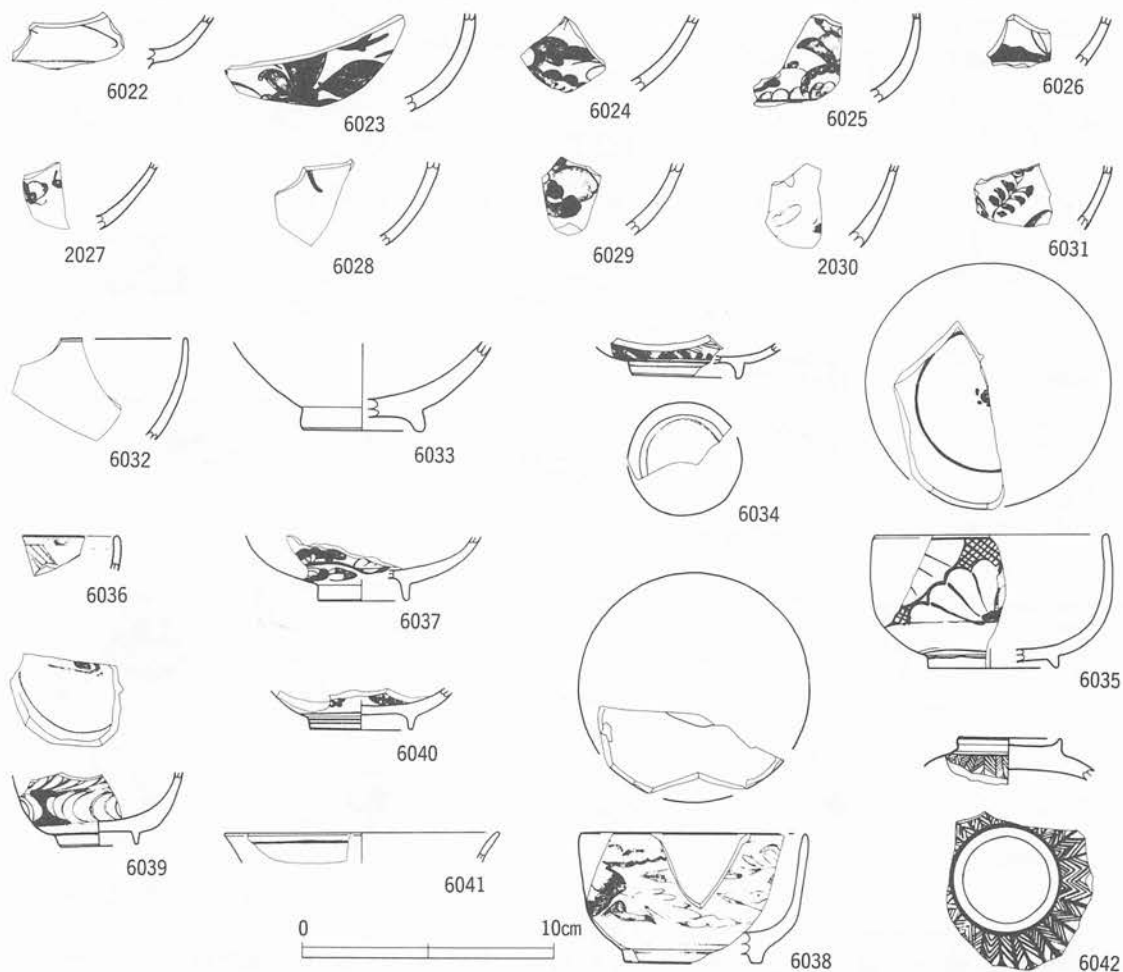
6230～6236 は瀬戸産の播鉢である。概ね 18 世紀代に納まる。6237～6262 は具体的な窯は特定できないが、東北在地産の播鉢と思われる。時期も特定できないが東北在地の窯が隆盛を迎える 18 世紀末以降のものであろう。6263 は磁器の型おこしの人形である。大黒天をかたどっている。時期、産地ともに不明である。6264 は東北在地産の甕である。体部に線刻による馬の絵が描かれている。この絵は上に鉄釉が施されているため不明瞭なものになっている。6265 の徳利は陶胎に白化粧を施し染付をおこなっている。おそらく平清水産のもので明治時代になってからの製作であろう。



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6001	磁器碗	15SE12埋土上位	10.0	(5.0)	4.1	灰白色	染付	肥前	1690~1780	
6002	〃	15SE9埋土	10.5	4.1	6.0	灰白色	染付	〃	〃	IIC7j表土からも出土
6003	〃	IIC7d表土	11.0	-	(4.7)	灰白色	染付	〃	18C前半	
6004	〃	15SE23埋土	-	(4.5)	(2.7)	白色	染付	〃	1690~1780	
6005	〃	15SK23埋土	-	(4.7)	(1.9)	灰白色	染付	〃	〃	
6006	〃	15SE9埋土上位	-	(4.2)	(2.2)	白色	〃	〃	〃	
6007	〃	15次のIIC区の排土中	-	(4.7)	(2.0)	白色	〃	〃	〃	底部に銘あり
6008	〃	IIC7i表土	-	(4.5)	(3.3)	灰白色	〃	〃	〃	底部に銘あり
6009	〃	IIC区礎石面	-	(4.7)	(2.3)	灰白色	〃	〃	〃	染付が暗緑色を呈する
6010	〃	IIC7h表土	-	(4.8)	(1.8)	灰白色	〃	〃	〃	
6011	〃	IIC7d礎石面下	11.4	-	(4.1)	灰白色	〃	〃	〃	
6012	〃	15SD28埋土	10.5	-	(3.5)	灰白色	〃	〃	〃	染付が暗緑色を呈する
6013	〃	15SE9埋土	10.2	-	(3.2)	灰白色	〃	〃	〃	
6014	〃	IIC7h表土	11.4	-	(3.1)	灰白色	〃	〃	〃	
6015	〃	15SE9埋土	-	-	(5.0)	白色	〃	〃	〃	
6016	〃	15SE19埋土	-	-	(3.2)	白色	〃	〃	〃	
6017	〃	IIC7h表土	-	-	(3.4)	灰白色	〃	〃	〃	
6018	〃	15SK41埋土	-	-	(2.5)	白色	〃	〃	〃	染付の色 紺色であざやか
6019	〃	IIC7e礎石面下	-	-	(2.9)	白色	〃	〃	〃	
6020	〃	15SE19埋土	-	-	(2.3)	白色	〃	〃	18C前半	コンニャク印判
6021	〃	IIC7e礎石面下	-	-	(2.6)	白色	〃	〃	18C前半	コンニャク印判

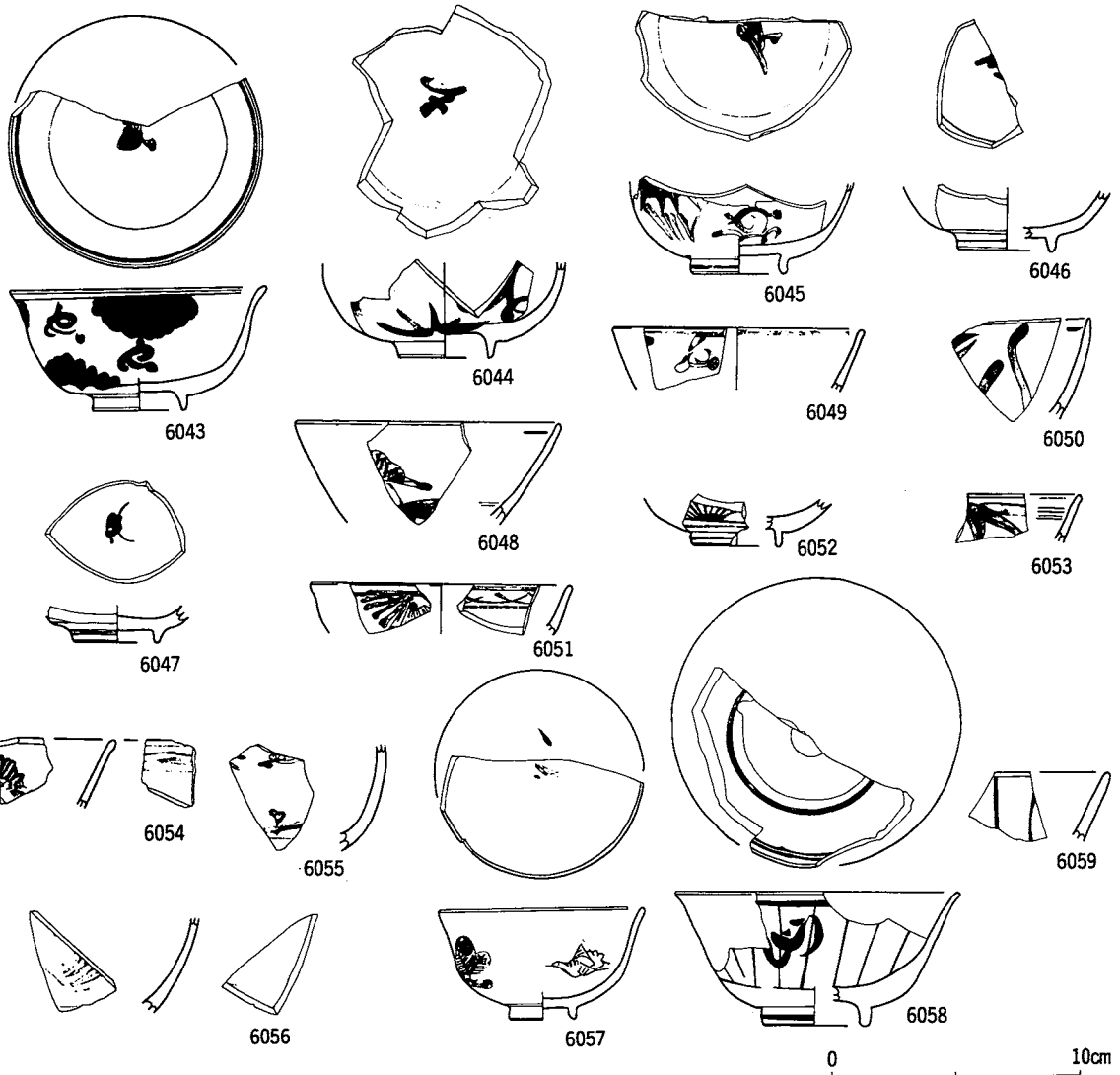
第203図 西側調査区の近世陶磁器(1)





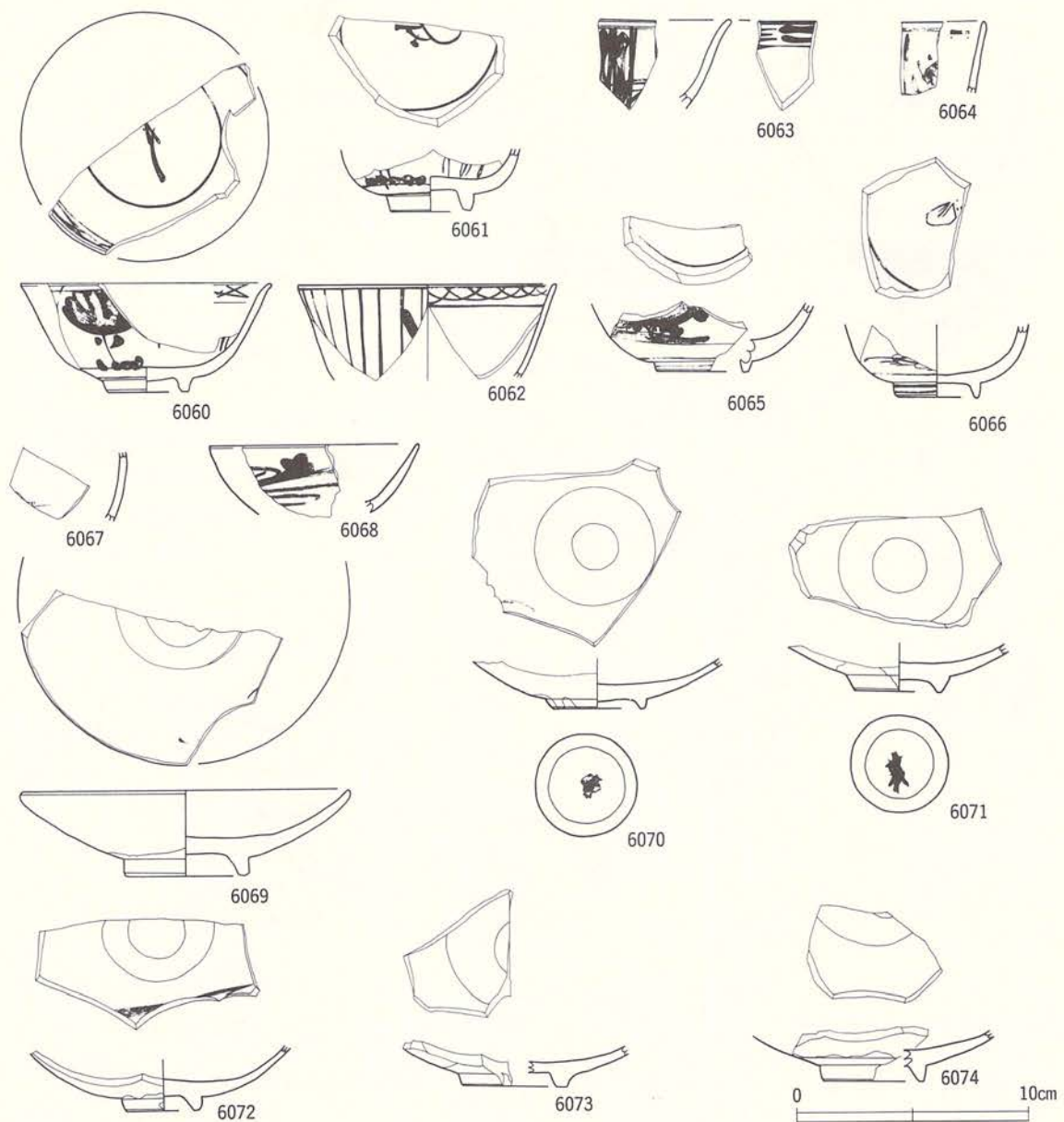
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6022	磁器碗	IIC7d礎石面下	—	—	(2.2)	白色	染付	肥前	1690~1780	
6023	〃	15SD20礫層	—	—	(4.0)	灰白色	〃	〃	〃	
6024	〃	15SE9埋土	—	—	(2.8)	白色	〃	〃	〃	
6025	〃	IIC7d礎石面下	—	—	(3.5)	白色	〃	〃	〃	
6026	〃	IIC区礎石面	—	—	(1.9)	白色	〃	〃	〃	染付の色 暗緑色
6027	〃	15SE9埋土	—	—	(2.5)	白色	〃	〃	〃	
6028	〃	15SD20埋土	—	—	(3.4)	白色	〃	〃	〃	
6029	〃	15SD20埋土	—	—	(3.0)	白色	〃	〃	〃	
6030	〃	IIC7g表土	—	—	(3.3)	灰白色	〃	〃	〃	
6031	〃	I C9a検出面	—	—	(2.5)	白色	〃	〃	〃	
6032	〃	15SE9埋土	—	—	(4.1)	白色	透明釉	〃	〃	器厚がうすい
6033	〃	15SE4埋土	—	(5)	(3.5)	灰白色	透明釉	〃	〃	
6034	〃	15P577埋土	—	(4.5)	(1.8)	白色	染付	〃	〃	器厚がうすい
6035	〃	IIC7h表土	9.5	(5.2)	5.4	灰白色	〃	〃	18C後半~19C前	
6036	〃	IIC8e表土	—	—	(1.4)	灰白色	〃	〃	〃	6035と同じ絵柄
6037	〃	IIC7f表土	—	(3.6)	(2.7)	白色	〃	不明	1780~1860	
6038	〃	15SD14埋土	9.0	(5.6)	(5.2)	灰白色	〃	肥前?	〃	見込蛇目釉はぎ
6039	〃	IIC7g表土	—	3.2	(2.9)	灰白色	〃	不明	〃	小型の碗
6040	〃	15SD20礫層	—	4.1	(1.5)	白色	〃	肥前?	〃	
6041	磁器碗?	IID区表採	10.9	—	(1.2)	白色	〃	不明	1780~1860?	染付の色 暗緑色
6042	磁器蓋	15次のIIC区排土中	—	4.2	(1.9)	白色	〃	肥前	1780~1860	

第204図 西側調査区の近世陶磁器(2)



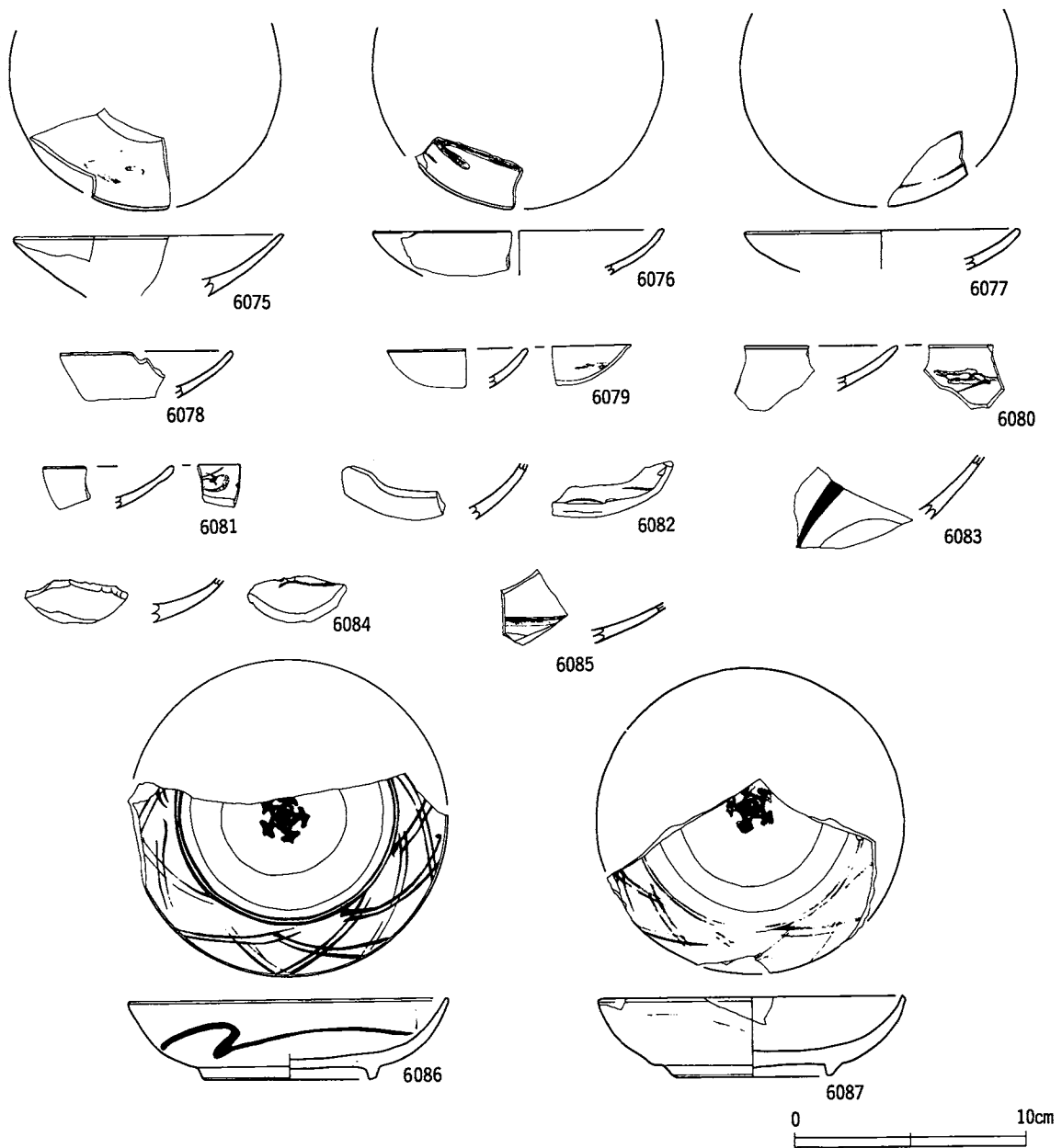
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6043	磁器碗	15SD14埋土	10.5	3.8	5.0	ガラス質黒い粒が入る	染付	東北産?	19C初~幕末	染付の色が工業コバルト的
6044	〃	15SK23埋土	—	3.8	(4.0)	〃	〃	〃	〃	染付の色が工業コバルト的
6045	〃	15次のIIC区排土中	—	3.8	(3.8)	〃	〃	〃	〃	染付の色が工業コバルト的
6046	〃	IIC7h表土	—	(4.0)	(3.6)	〃	〃	〃	〃	6043、6044、6045より染付の色があわい
6047	〃	15SK23埋土	—	3.5	(1.5)	〃	〃	〃	〃	被熱している
6048	〃	IIC9b	10.6	—	(4.2)	〃	〃	〃	〃	広東碗 染付の色ややあわい
6049	〃	IIC8e表土	10.2	—	(2.4)	〃	〃	〃	〃	染付の色が工業コバルト的
6050	〃	15SK23埋土	—	—	(4.0)	〃	〃	〃	〃	染付の色ややあわい
6051	〃	15SK23埋土	(10.6)	—	(2.1)	〃	〃	〃	〃	染付の色が工業コバルト的
6052	〃	15SK23埋土	—	(3.6)	(2.1)	〃	〃	〃	〃	染付の色が工業コバルト的
6053	〃	15SK23埋土	—	—	(1.4)	〃	〃	〃	〃	染付の色が工業コバルト的
6054	〃	15SK23埋土	—	—	(2.7)	〃	〃	〃	〃	染付の色が工業コバルト的
6055	〃	15SK23埋土	—	—	(4.3)	〃	〃	〃	〃	染付の色が工業コバルト的
6056	〃	15SK23埋土	—	—	(3.3)	〃	〃	〃	〃	染付の色ややあわい
6057	〃	15SK23埋土	8.2	2.7	4.6	〃	〃	〃	〃	陰刻の上に染付 口紅
6058	〃	15SK23埋土	11.5	4.4	5.4	灰色	〃	切込産?	〃	見込蛇目軸はぎ
6059	〃	IIC3h削平部	—	—	(2.8)	灰色	〃	〃	〃	

第205図 西側調査区の近世陶磁器(3)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6060	磁器碗	IIC区	10.8	3.6	4.7	ガラス質	染付	平清水	19C初~幕末	10次調査出土
6061	〃	IIC7g表土	—	3.4	(2.7)	ガラス質	〃	〃	〃	染付の色うすい
6062	〃	10次調査出土	11.0	—	(4.2)	ガラス質	〃	〃	〃	染付の色うすい
6063	〃	15SD14埋土	—	—	(3.8)	ガラス質	〃	〃	〃	染付の色工業コバルト的
6064	〃	15SK23埋土	—	—	(3.1)	ガラス質	〃	〃	〃	染付の色うすい
6065	〃	IIC7h表土	—	4.0	(3.0)	ガラス質 黒い粒入る	〃	東北産?	〃	染付の色工業コバルト的
6066	〃	IIC7d表土	—	4.6	(3.1)	白色 粘土質	〃	東北産?	〃	焼き継痕あり
6067	〃	15SD14埋土	—	—	(3.0)	〃	〃	東北産?	〃	焼き継痕あり6066と同一か
6068	〃	15SD20礫層	9.0	—	3.2	灰色 ガラス質	〃	東北産?	〃	染付の色灰色
6069	磁器皿	IIC7e礎石面下	14.2	5.4	(3.7)	白色	〃	肥前	1690~1780	
6070	〃	15SK37掘方	—	4.0	(2.2)	灰色	〃	〃	〃	底面に墨書あり
6071	〃	IIC7f礎石面下	—	3.8	(2.1)	灰色	〃	〃	〃	底面に墨書あり
6072	〃	IIC7h表土	—	3.2	(2.2)	灰色	〃	〃	〃	
6073	〃	IIC7d礎石面下	—	(4.6)	(2.1)	灰色	〃	〃	〃	
6074	〃	IIC7h表土	—	(4.5)	(2.4)	灰色	〃	〃	〃	

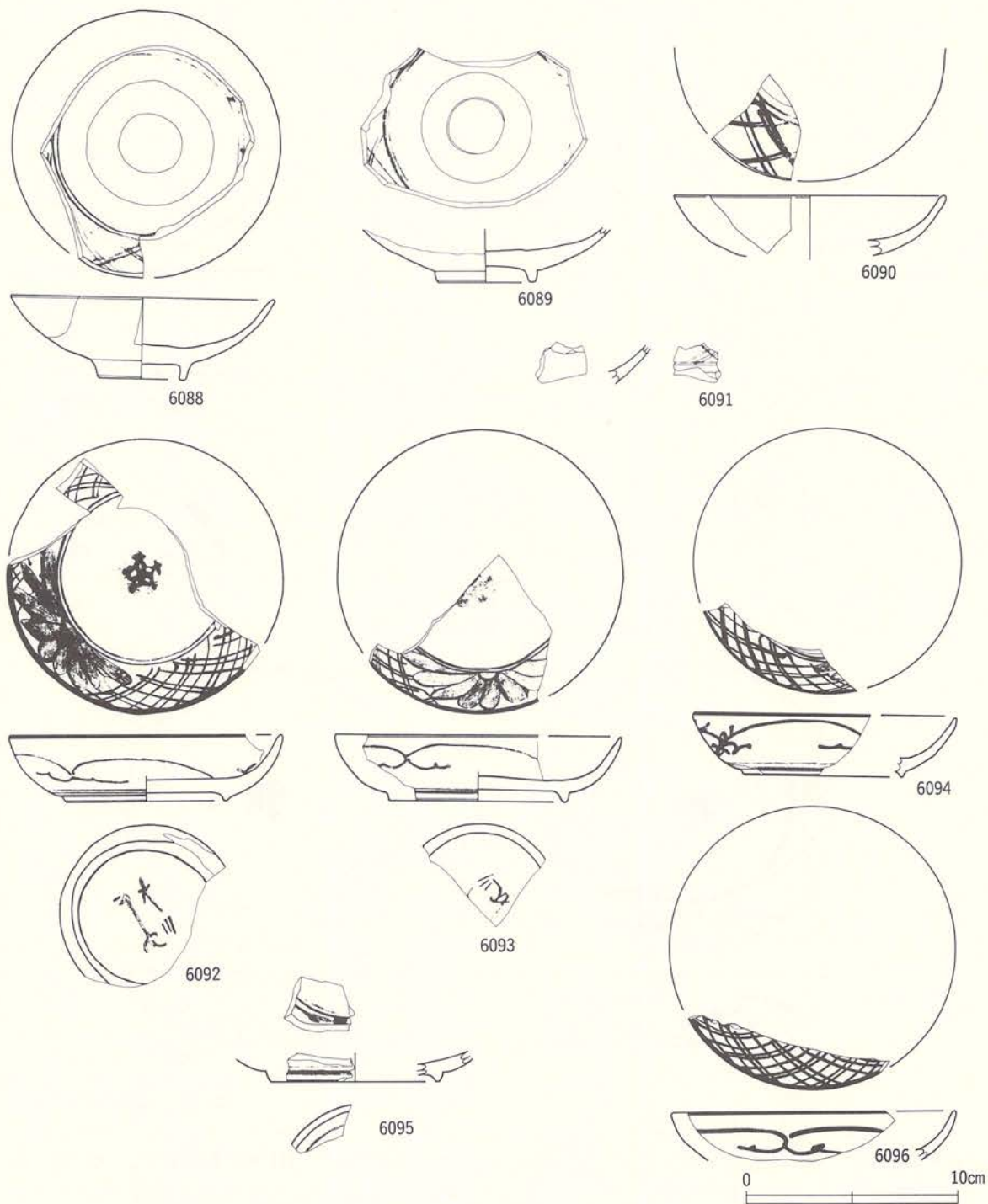
第206図 西側調査区の近世陶磁器(4)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6075	磁器皿	IIC7f礎石面下	11.7	—	(2.6)	白色	染付	肥前	1690~1780	
6076	〃	15SE19埋土	12.6	—	(1.9)	白色	〃	〃	〃	釉むらが著しい
6077	〃	IID0b	12.0	—	(1.6)	白色	〃	〃	〃	10次調査出土
6078	〃	15P577埋土	—	—	(2.1)	白色	〃	〃	〃	
6079	〃	15SE19埋土	—	—	(1.8)	白色	〃	〃	〃	
6080	〃	15SD14埋土	—	—	(2.0)	白色	〃	〃	〃	染付の色 暗緑色
6081	〃	15SD14埋土	—	—	(1.8)	白色	〃	〃	〃	
6082	〃	15SD14埋土	—	—	(2.5)	灰白色	〃	〃	〃	
6083	〃	I C6f	—	—	(2.8)	白色	〃	〃	〃	10次調査出土
6084	〃	IIC7d礎石面下	—	—	(1.9)	白色	〃	〃	〃	染付の色 緑色
6085	〃	15SD19埋土	—	—	(1.7)	白色	〃	〃	〃	
6086	〃	IIC7c礎石面下	13.8	7.4	3.5	白色	〃	〃	〃	見込みにコンヤク印判
6087	〃	15次のIIC区排土中	13.2	6.8	3.5	白色	〃	〃	〃	〃

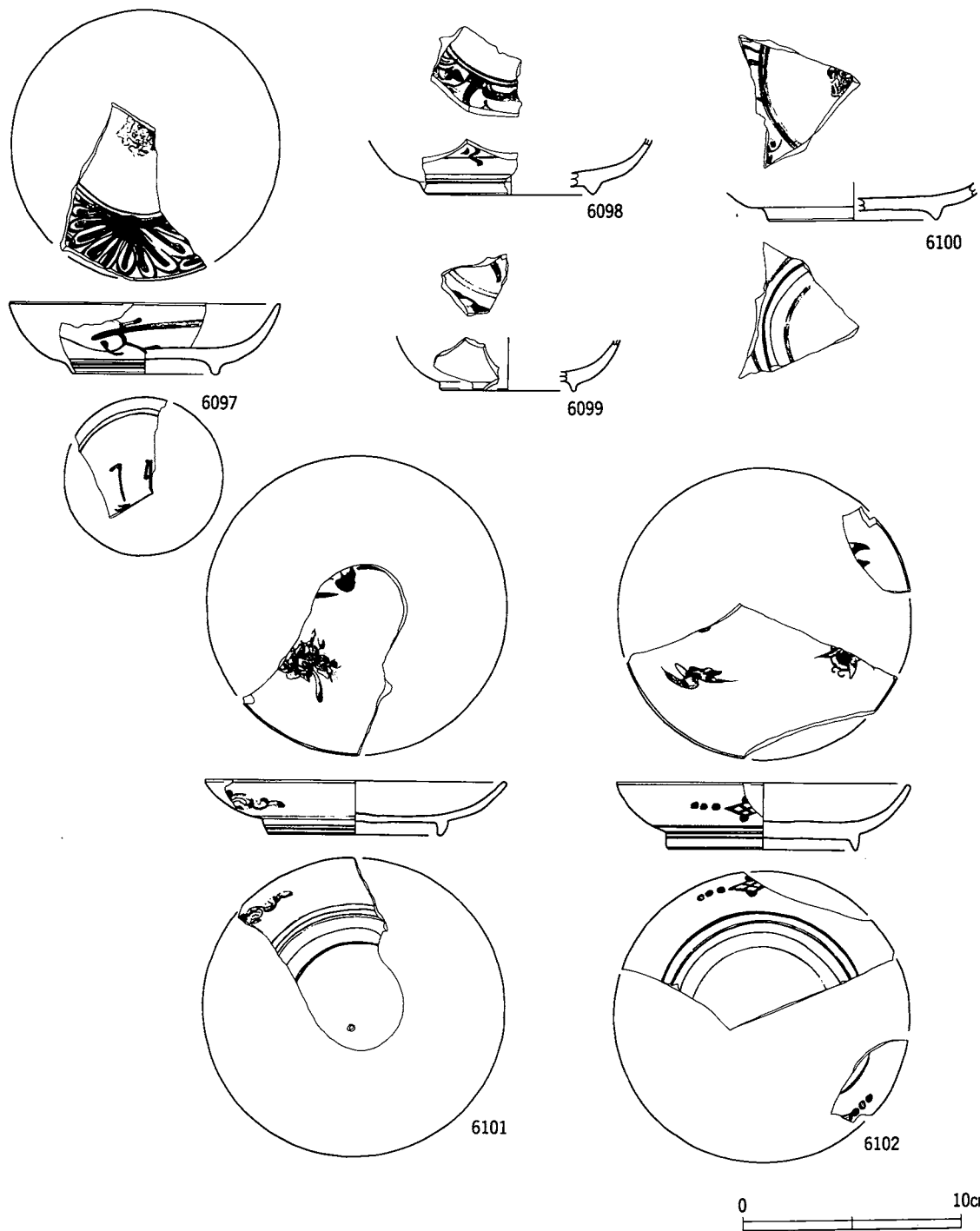
第207図 西側調査区の近世陶磁器(5)





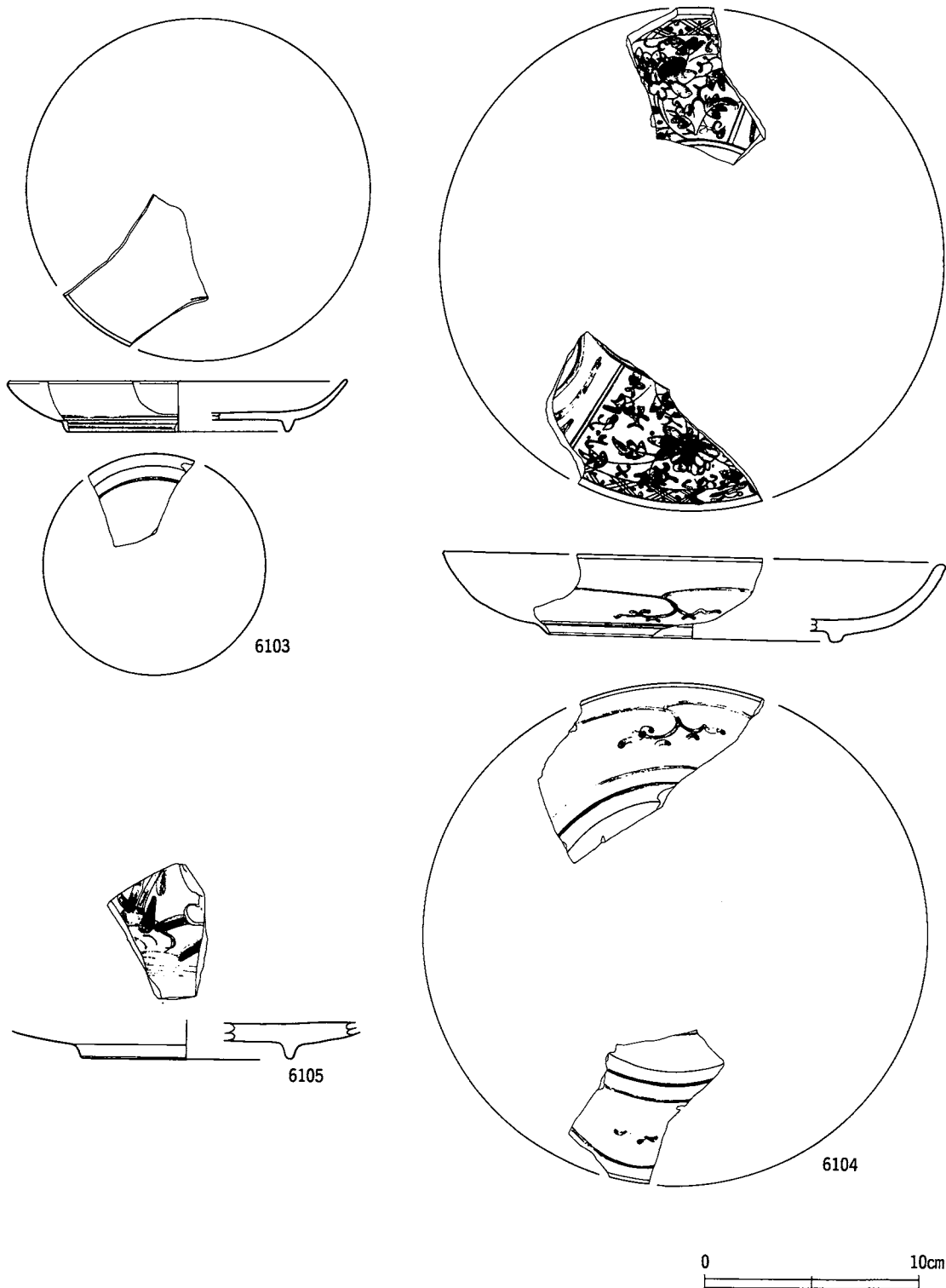
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6088	磁器皿	IIC7d表土	7.6	4.2	3.8	白色	染付	肥前	1690~1780	
6089	〃	15SD20礫層中	—	4.6	(2.5)	白色	〃	〃	〃	
6090	〃	IID1b	13.0	—	(3.1)	白色	〃	〃	〃	10次調査出土
6091	〃	15SK23埋土	—	—	(1.9)	白色	〃	〃	〃	6088などと同じ絵柄
6092	〃	IIC7c礎石面下	13.0	7.6	2.7	白色	〃	〃	〃	口紅、見込みコンニャク印判
6093	〃	IIC7d礎石面下	13.6	8.5	3.2	白色	〃	〃	〃	〃
6094	〃	15次のIIC区排土中	12.5	7.6	3.0	白色	〃	〃	〃	6092、6093と同じ絵柄
6095	〃	15SD14埋土	—	8.0	(1.4)	白色	〃	〃	〃	6092、6093と同じ絵柄
6096	〃	IIC7c礎石面下	13.0	—	(2.3)	白色	〃	〃	〃	6092、6093と同じ絵柄

第208図 西側調査区の近世陶磁器(6)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6097	磁器皿	IIC7g表土	12.5	6.6	3.2	白色	染付	肥前	1690~1780	焼き継ぎ痕あり
6098	〃	15SE9埋土	—	9.6	(2.4)	白色	〃	〃	〃	底面に鬚線文あり
6099	〃	IIC7d礎石面下	—	7.8	(1.8)	白色	〃	〃	〃	
6100	〃	10次調査出土	—	6.2	(2.6)	白色	〃	〃	〃	出土地点不明
6101	〃	IIC7c礎石面下	13.8	8.0	2.4	白色	〃	〃	〃	「ハリ」跡あり
6102	〃	IIC6c礎石面下	13.1	8.8	2.9	白色	〃	〃	〃	15SD20礫層からも出土

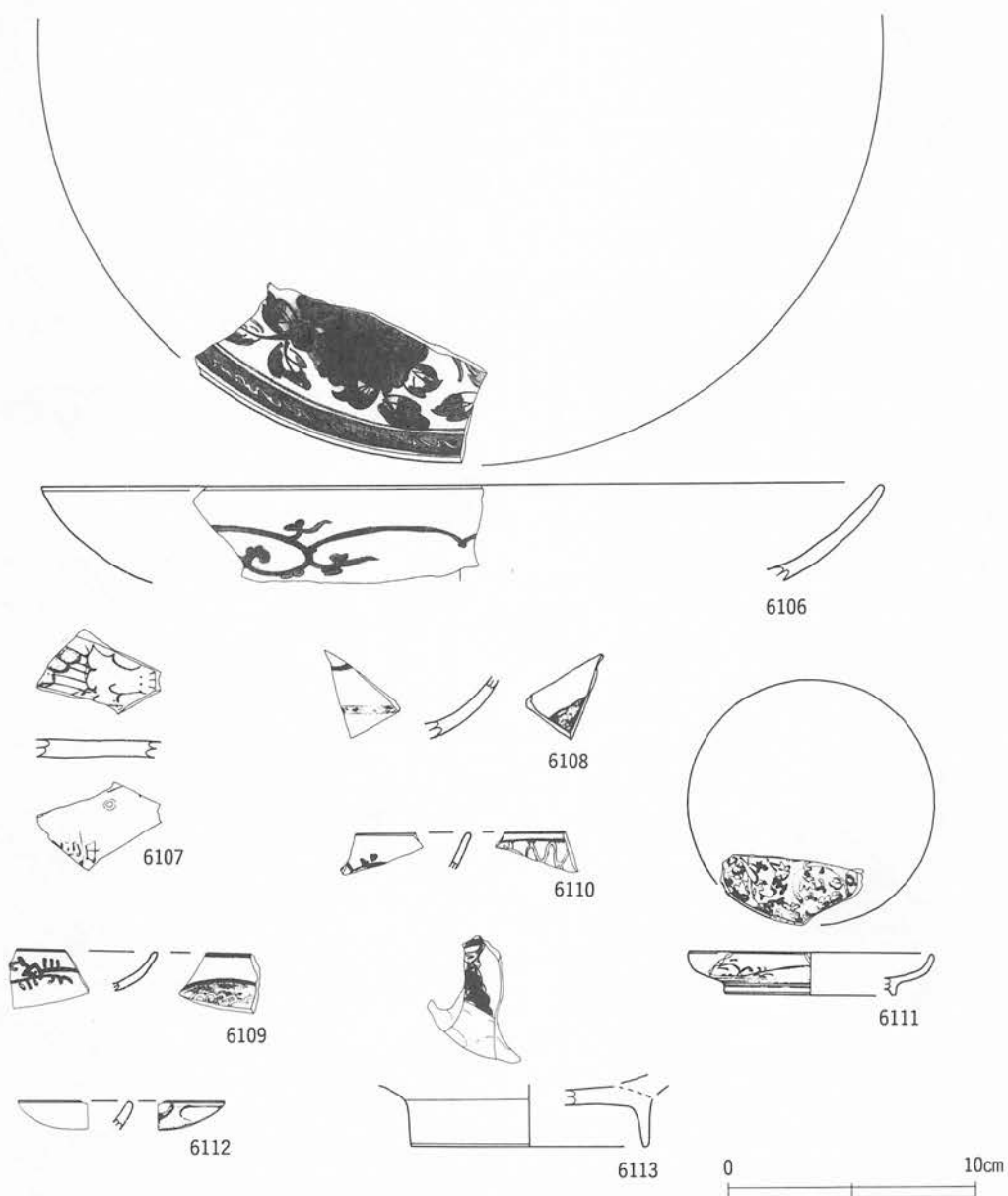
第209図 西側調査区の近世陶磁器(7)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6103	磁器皿	IIC7d表土	15.9	10.5	2.5	白色	染付	肥前	1690~1780	6101に胎土、器形が似る
6104	〃	15SE12埋土上部	23.5	13.8	3.9	白色	〃	〃	〃	IID6a表土からも出土
6105	〃	IIC7d礎石面下	—	10.0	—	白色	〃	〃	〃	

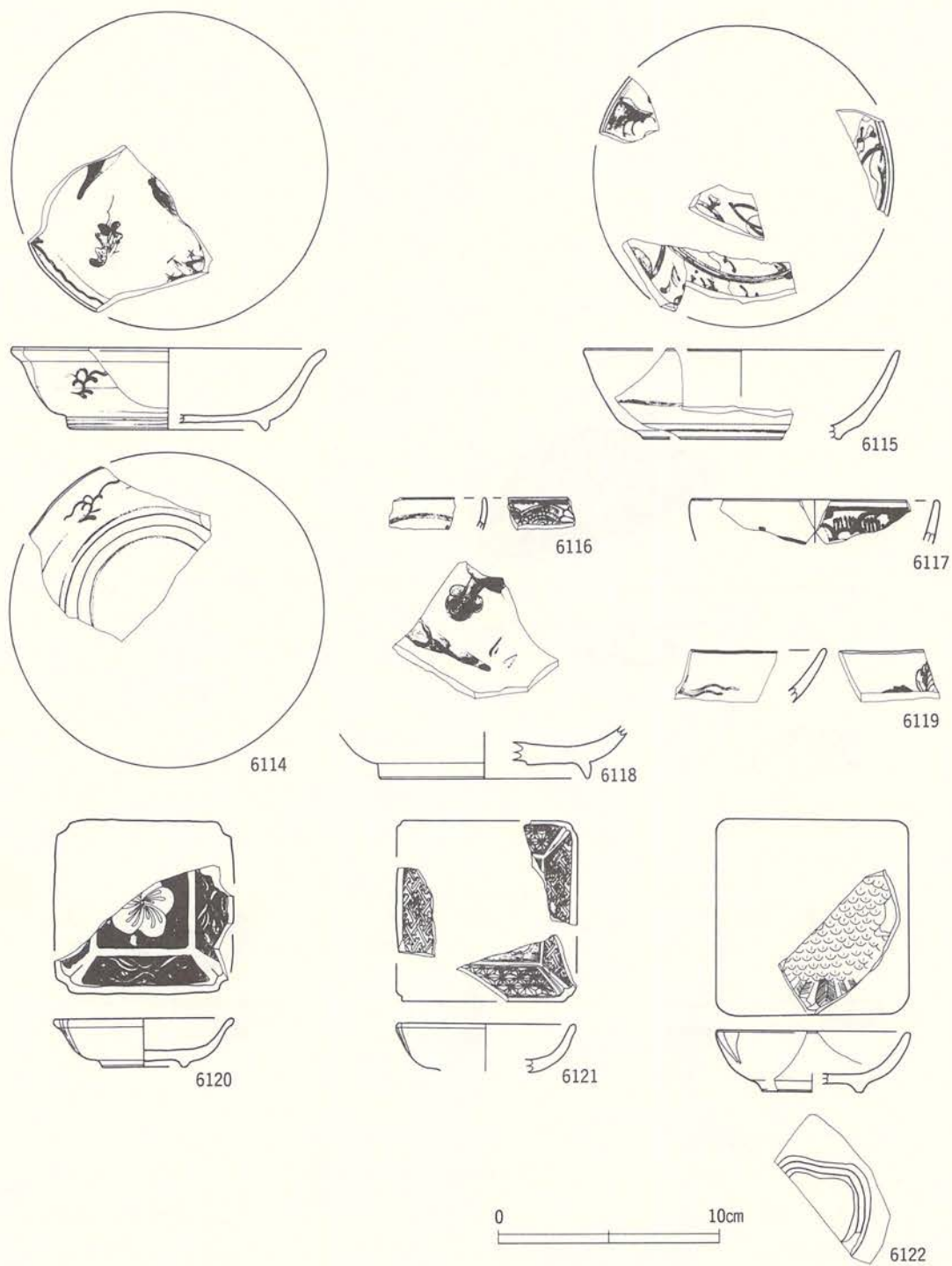
第210図 西側調査区の近世陶磁器(8)





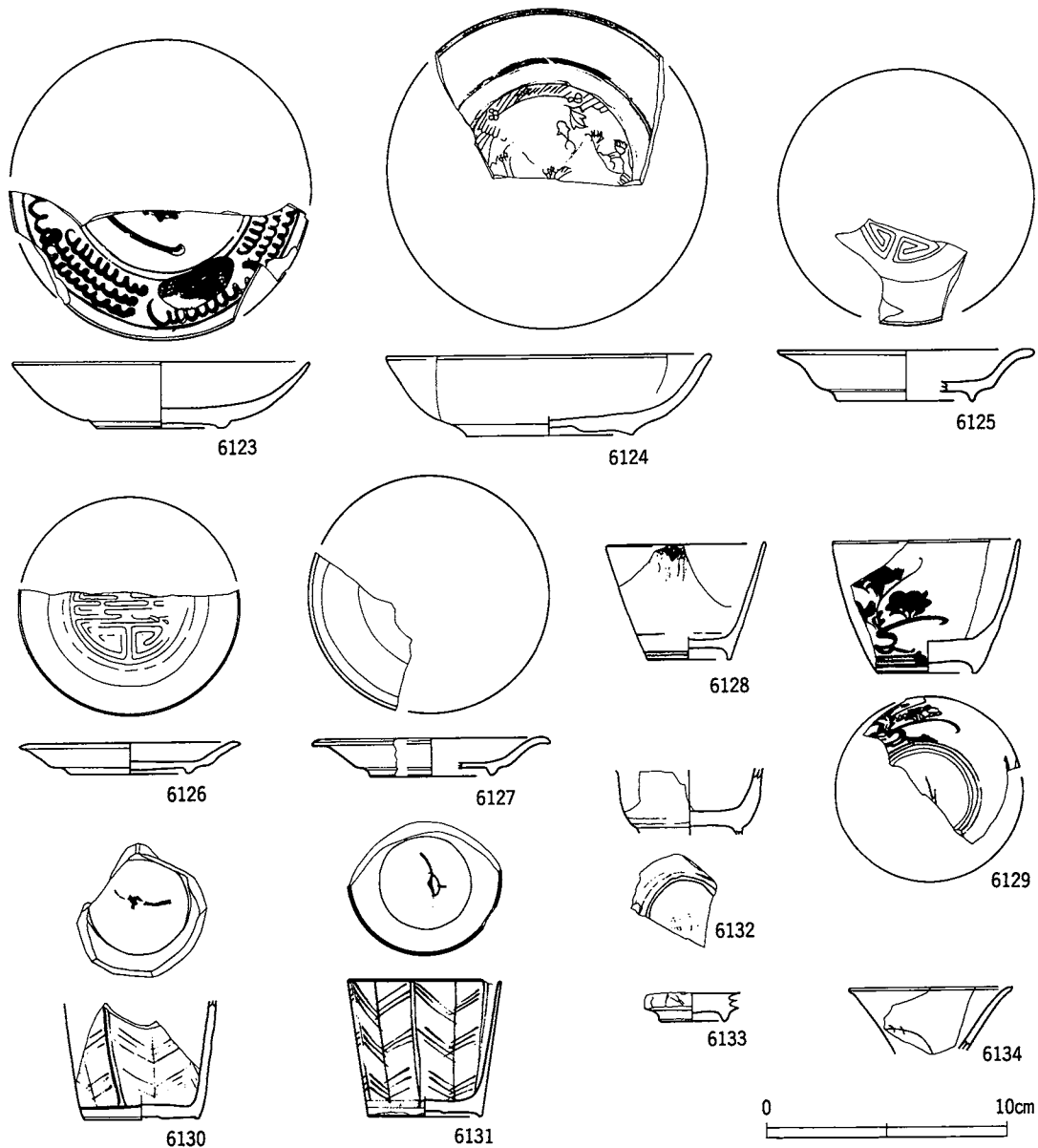
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6106	磁器皿	15次のIIC区排土中	34.0	—	(3.7)	白色	染付	肥前	18C後半～幕末	
6107	〃	15SD14埋土	—	—	—	白色	〃	〃	〃	銘は「富貴長春」と思われる
6108	〃	15SD14埋土	—	—	(2.4)	白色	〃	〃	〃	大型の皿と思われる
6109	〃	10次調査区	—	—	(1.6)	白色	〃	〃	〃	口紅、墨弾き 出土地点不明
6110	〃	15SK36埋土	—	—	(1.5)	白色	〃	〃	〃	墨弾き
6111	〃	15SD20埋土	10.0	7.0	(1.8)	白色	〃	〃	1690～1780	
6112	〃	15P591埋土	8.4	—	(1.2)	白色	〃	〃	18C後半～幕末	
6113	磁器皿?	15SD20礫層	—	9.6	(2.5)	白色	〃	〃	〃	

第211図 西側調査区の近世陶磁器(9)



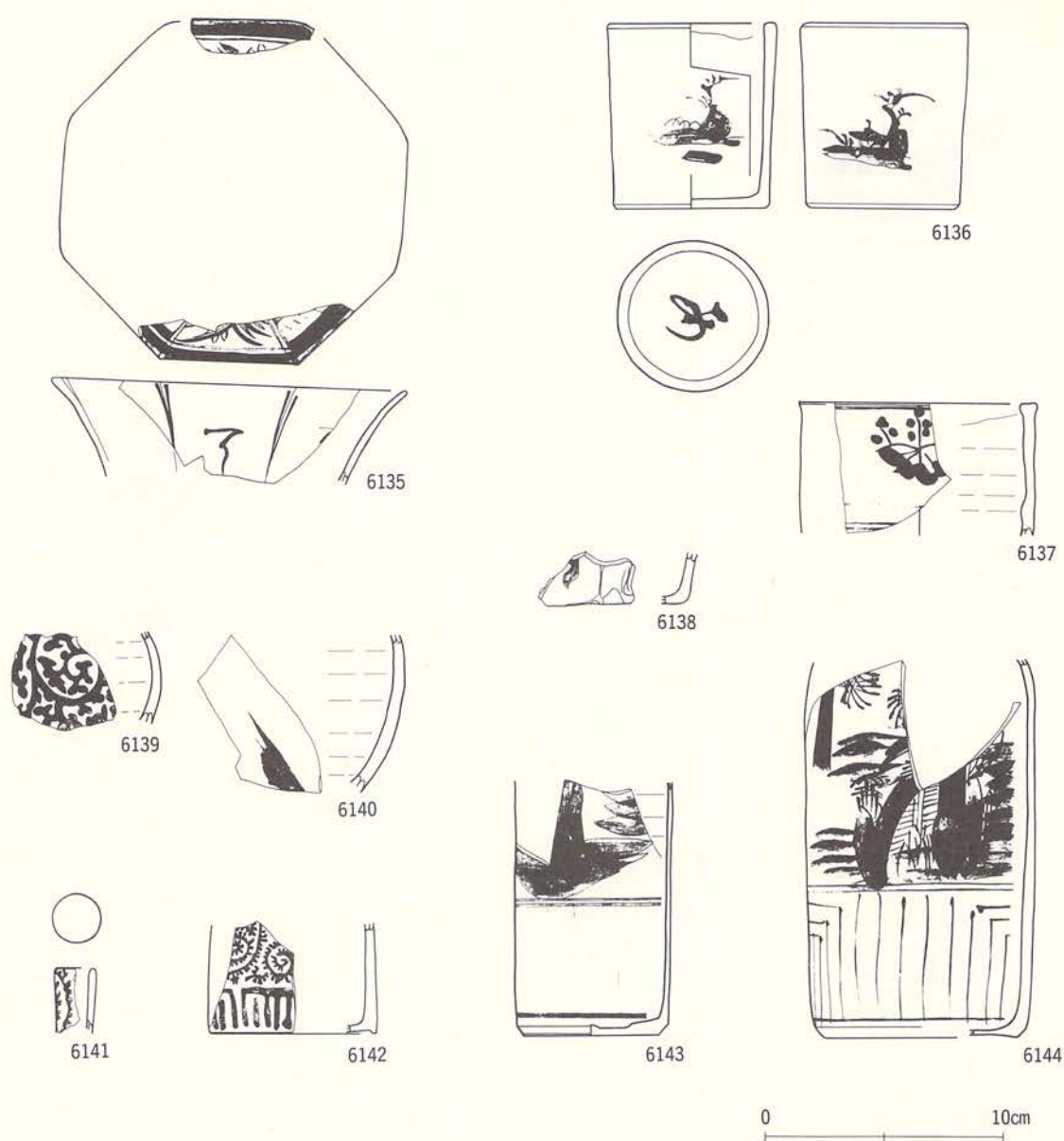
番号	器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	そ の 他
			口径	底径	高さ					
6114	磁器皿	10P39底部	14.3	9.1	3.7	白色	染付	肥前?	18C後半~19C前	
6115	〃	15SK23埋土	14.4	8.9	4.1	白色	〃	肥前	18C後半~19C前	凹蛇目高台
6116	〃	IIC区礎石面	—	—	(1.5)	白色	〃	肥前	18C後半~19C前	
6117	〃	IIC7g表土	11.3	—	(2.0)	白色に黒い粒入る	〃	不明	19C前半?	
6118	〃	IIC3b表土	—	9.5	(2.4)	白色	〃	肥前?	幕末	凹蛇目高台
6119	〃	10次調査区	—	—	(2.4)	白色	〃	肥前?	幕末	口紅
6120	〃	15SD14埋土	8.2	3.9	2.3	白色ガラス質	〃	不明	幕末	型おこし
6121	〃	15SK23埋土	8.2	—	2.3	白色ガラス質	〃	不明	幕末	型おこし
6122	〃	IIC4g表土	8.9	(4.6)	2.8	白色ガラス質	透明釉	不明	幕末	型おこし

第212図 西側調査区の近世陶磁器(10)



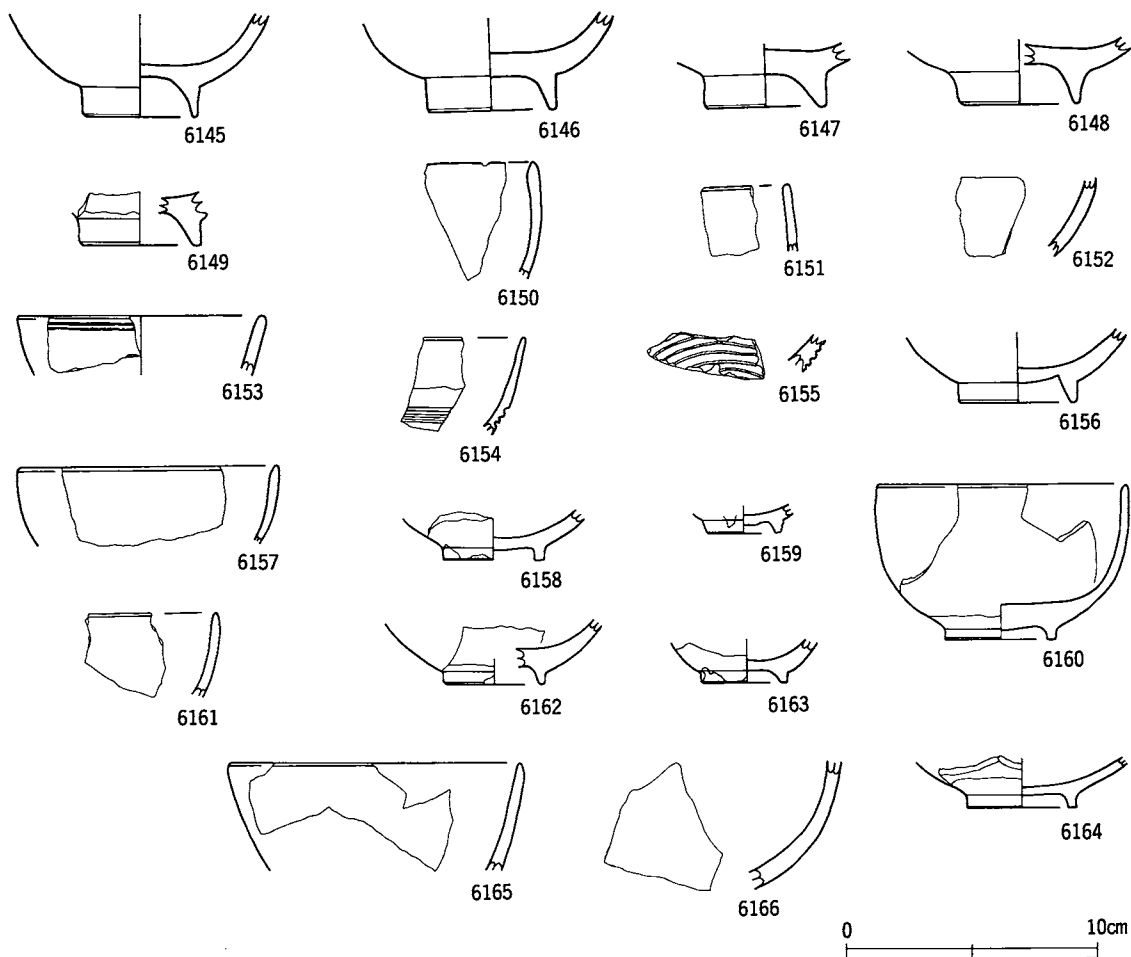
番号	器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6123	磁器皿	IIC3h削平部	12.4	5.5	2.8	ガラス質	染付	不明	19C前～幕末	染付は工業コバルト的な色
6124	〃	IIC7g表土	13.4	7.0	3.4	ガラス質 黒い粒入る	〃	不明	19C	凹蛇目高台、型おこし、口紅
6125	〃	15SD14埋土	10.6	5.8	2.1	ガラス質	〃	不明	19C	壽文皿 型おこし
6126	〃	IIC3h削平部	9.2	5.2	1.3	〃	〃	〃	19C	釉の発色悪く白濁している
6127	〃	IIC区礎石面	10.0	5.2	1.6	〃	〃	〃	19C	壽文皿 型おこし
6128	磁器猪口	IIC7h表土	6.6	3.5	4.9	白色	〃	肥前	1690～1780	
6129	〃	15SK23埋土	7.8	4.4	5.6	灰色、黒い粒入る	〃	肥前?	1780～1860	
6130	〃	IIC3b表土	—	4.8	(5.0)	ガラス質 黒い粒入る	〃	不明	19C前～幕末	染付は工業コバルト的な色
6131	〃	IIC5c表土	6.4	4.8	5.8	ガラス質 黒い粒入る	〃	不明	19C前～幕末	染付は工業コバルト的な色 口紅
6132	磁器小杯	15SE12埋土上部	—	(4.4)	(2.7)	白色	〃	肥前	1690～1780	
6133	〃	15SE9埋土	—	2.9	(1.2)	白色	透明釉	肥前	1690～1780?	
6134	〃	15SE9埋土	6.4	—	(2.7)	白色	〃	肥前	1690～1780	

第213図 西側調査区の近世陶磁器(1)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6135	磁器鉢	15SD14埋土	15.0	—	(4.0)	白色	染付	肥前	1780~1860	IIC7h表土からも出土
6136	磁器火入	15SD27埋土	7.2	6.4	7.9	橙色	〃	肥前	1690~1780	底面に墨書 内面無釉
6137	〃	15SK23埋土	10.0	—	(5.8)	白色	〃	肥前	1780~1860	内面無釉
6138	磁器水筒?	IIC区礎石面	—	—	(2.4)	白色	〃	肥前	不明	内面、底面無釉
6139	磁器瓶	15SE12埋土上部	—	—	(3.6)	白色	〃	肥前	18C後~19C前	内面無釉
6140	〃	15SD20礫層	—	—	(6.4)	白色	〃	肥前	1690~1780	〃
6141	〃	15SD14埋土	1.8	—	(2.8)	白色	〃	肥前	18C後~19C前	〃
6142	〃	IIC7h表土	—	7.1	(4.2)	白色ガラス質	〃	不明	19C前~幕末	〃
6143	磁器徳利	IIC7h表土	—	5.8	(10.7)	白色ガラス質	〃	平清水	幕末	〃
6144	〃	10次調査区出土	—	8.1	(16.0)	白色ガラス質	〃	平清水	幕末	〃

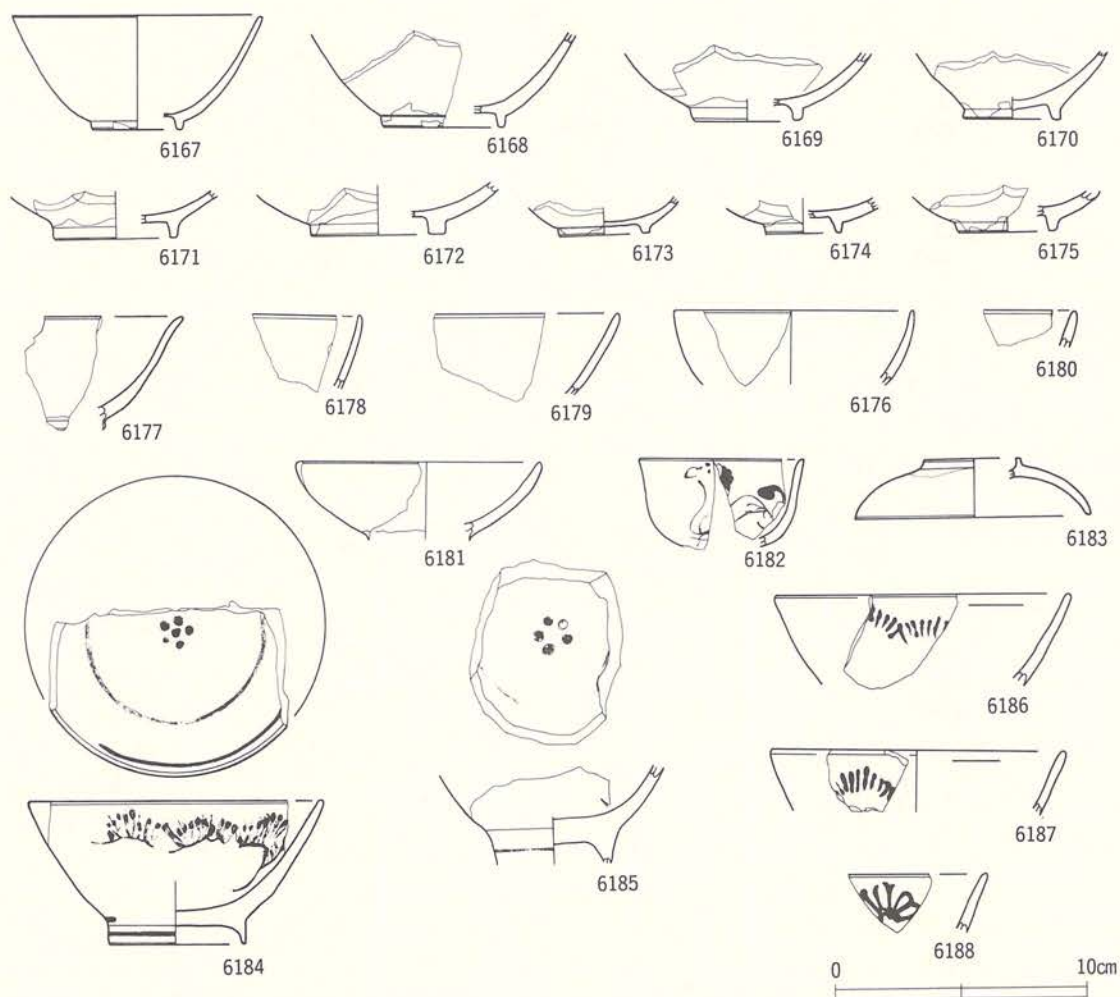
第214図 西側調査区の近世陶磁器(12)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6145	陶器碗	15SE9埋土上位	—	4.5	(4.1)	黄白色	透明釉	肥前	18C前半	呉器手碗
6146	〃	IIC7d礎石面下	—	5.2	(3.9)	〃	〃	〃	〃	〃
6147	〃	IIC8e表土	—	4.8	(2.6)	〃	〃	〃	〃	〃
6148	〃	15SE14底面	—	(4.6)	(2.7)	〃	〃	〃	〃	〃
6149	〃	10次調査出土	—	(4.8)	(2.2)	〃	〃	〃	〃	〃
6150	〃	15P577埋土	—	—	(4.7)	〃	〃	〃	〃	〃
6151	〃	15SE9埋土	—	—	(2.7)	〃	〃	〃	〃	〃
6152	〃	15P565埋土	—	—	(2.5)	〃	〃	〃	〃	〃
6153	〃	15SK23埋土	9.9	—	(2.4)	灰色	染付透明釉	〃	〃	陶胎染付碗
6154	〃	15次のIIC区排土中	—	—	(3.9)	灰白色	灰釉、鉄釉	大堀相馬	18C	外面上半灰釉、下半鉄釉
6155	〃	15SD22埋土	—	—	(1.1)	灰白色	灰釉、鉄釉	大堀相馬	18C	外面鉄釉、内面灰釉
6156	〃	IIC7e礎石面下	—	4.7	(2.9)	灰白色	灰釉	大堀相馬	18C	高台部無釉
6157	〃	IIC7e礎石面下	10.5	—	(3.2)	灰白色	灰釉	大堀相馬	18C	釉の色 緑色
6158	〃	IID7~9e	—	4.1	(2.1)	灰白色	灰釉	大堀相馬	18C	釉の色 緑色
6159	〃	IIC7h表土	—	3.0	(1.2)	灰白色	灰釉	大堀相馬	18C	釉の色 緑色
6160	〃	IID1b	10.0	4.4	6.2	灰白色	藁灰釉	大堀相馬	18~19C	10次調査出土
6161	〃	15SD20礫層	—	—	(3.4)	灰白色	〃	大堀相馬	18~19C	6160と同一個体か
6162	〃	15SD14埋土	—	(4.1)	(2.9)	灰白~ 橙色	〃	大堀相馬	〃	〃
6163	〃	15SD22埋土	—	3.5	(1.7)	灰白色	〃	大堀相馬	〃	〃
6164	〃	I C6e	—	4.4	(2.0)	暗灰色	白化粧、透明釉	大堀相馬?	〃	白化粧の刷毛目の上に透明釉
6165	〃	IIC7d礎石面下	11.7	—	(4.3)	暗灰色	灰釉	大堀相馬?	18C	ガサガサした胎土
6166	〃	15SE9埋土上位	—	—	(4.6)	暗灰色	灰釉	大堀相馬	18C	6165に胎土似る

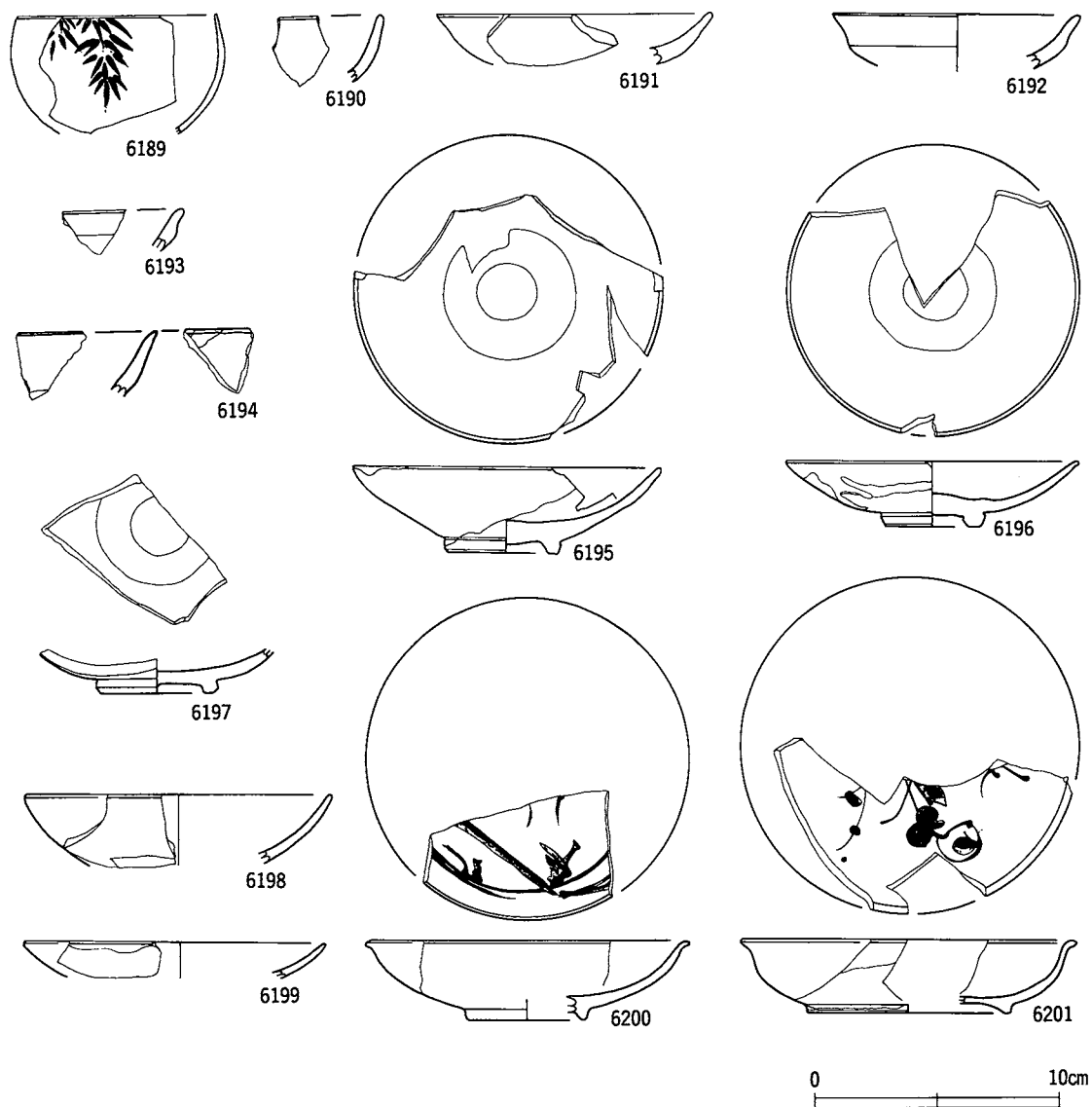
第215図 西側調査区の近世陶磁器(13)





番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6167	陶器碗	I C7d	10.0	3.6	4.6	灰色	藁灰釉	大堀相馬	19C	
6168	〃	15SD20埋土	—	4.8	(3.8)	灰色	〃	〃	〃	
6169	〃	15SD14埋土	—	(4.2)	3.1	灰色	〃	〃	〃	
6170	〃	IIC5c表土	—	4.0	(2.7)	灰色	〃	〃	〃	
6171	〃	15SD14埋土	—	5.0	(1.9)	灰色	〃	〃	〃	
6172	〃	10P39底部	—	5.4	(1.8)	灰色	〃	〃	〃	
6173	〃	10次調査区	—	3.6	(1.3)	灰色	褐釉、銅緑釉	〃	〃	外面褐釉、内面銅緑釉
6174	〃	I C9a	—	(3.6)	(1.1)	灰色	藁灰釉	〃	〃	10次調査出土
6175	〃	IIC7h表土	—	4.0	(1.8)	灰色	藁灰釉	〃	〃	
6176	〃	IID0a	9.6	—	(3.0)	灰色	〃	〃	〃	10次調査出土
6177	〃	15SK23埋土	—	—	(4.6)	灰色	〃	〃	〃	端反り碗
6178	〃	IIC8e表土	—	—	(3.0)	灰色	〃	〃	〃	
6179	〃	IIC7h表土	—	—	(3.3)	灰色	〃	〃	〃	
6180	〃	15SK23埋土	—	—	(1.4)	灰色	〃	〃	〃	
6181	〃	IIC0a盛土	9.8	—	(3.1)	灰色	銅緑釉、藁灰釉	〃	〃	外面銅緑釉、内面藁灰釉
6182	〃	15SK23埋土	6.6	—	(3.6)	灰色	褐釉、藁灰釉	〃	〃	褐釉で馬の絵
6183	陶器蓋	IIC区礎石面	3.8	9.6	2.3	灰色	藁灰釉	〃	〃	
6184	〃	IIC7g表土	11.8	5.5	5.7	粗い土灰色	染付、透明釉	瀬戸	19C中葉	陶胎染付
6185	〃	IIC7h表土	—	4.6	(3.7)	〃	〃	〃	〃	〃
6186	〃	IIC7g表土	11.8	—	(3.7)	〃	〃	〃	〃	〃
6187	〃	IIC区礎石面	10.8	—	(2.5)	〃	〃	〃	〃	〃
6188	〃	IIC7h表土	—	—	(2.3)	〃	〃	〃	〃	〃

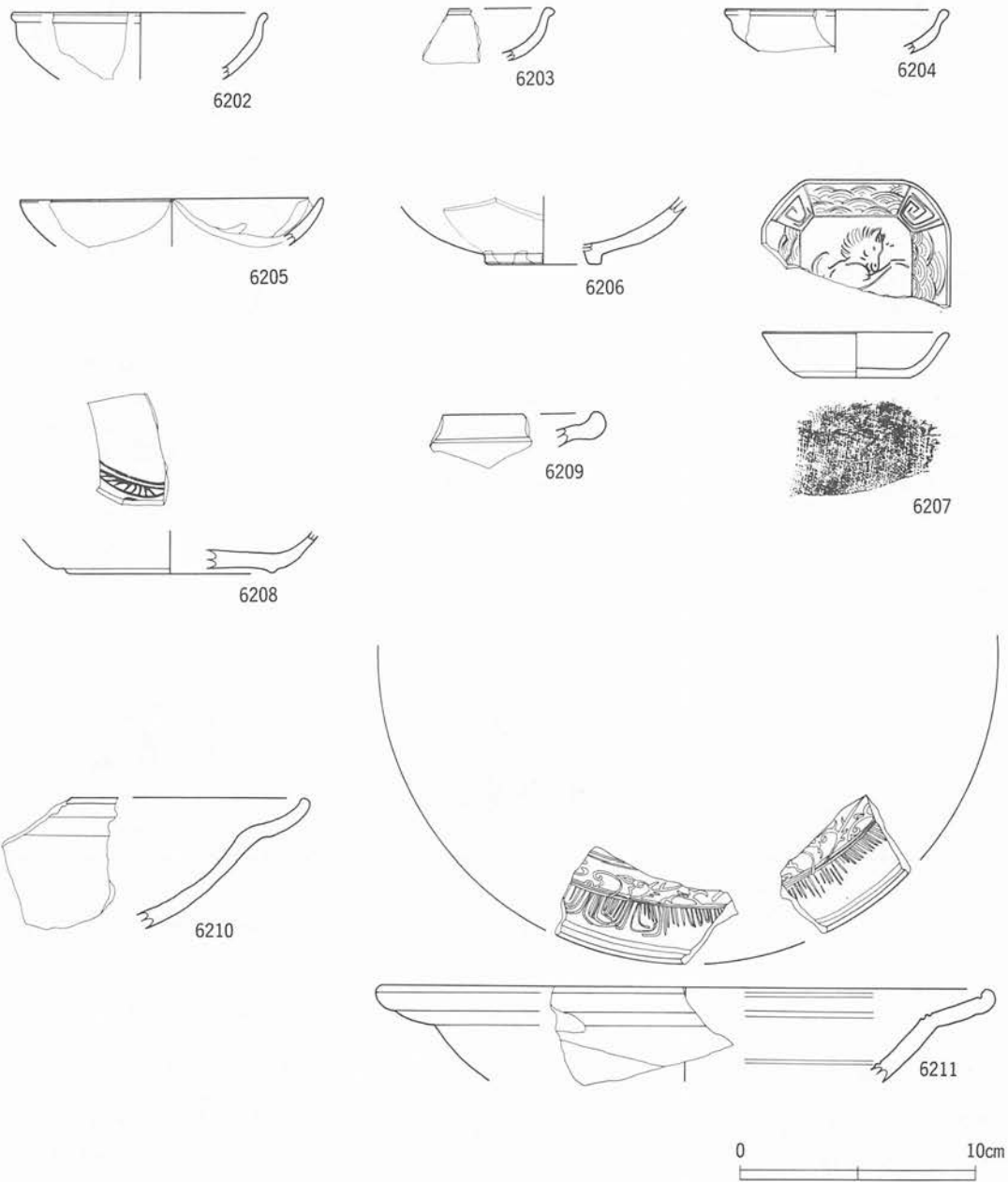
第216図 西側調査区の近世陶磁器(14)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6189	陶器碗	15SD27埋土	8.3	—	(4.9)	黄灰色	透明釉、上絵付	京、信楽系	18C?	上絵の色は赤、緑、青
6190	〃	15SK37掘方	—	—	(2.8)	灰色の粗い土	灰釉	不明	不明	小型の碗
6191	陶器皿	15SD21埋土	11.3	—	(2.1)	黄色の粗い土	長石釉	美濃	大塚V期	志野皿
6192	〃	10次調査区	10.1	—	(2.2)	灰色の粗い土	〃	美濃	登窯I期	
6193	〃	IIC区礎石面	—	—	(1.8)	灰色の粗い土	〃	〃	〃	6192と同一個体か
6194	〃	15SD21埋土	—	—	(2.7)	赤褐色	長石釉、鉄絵	唐津	16C末~17C初	
6195	〃	15SD27埋土	12.6	4.6	3.6	灰白色	透明釉、銅緑釉	肥前	1690~1780	
6196	〃	IIC7d礎石面下	12.0	4.0	2.7	灰白色	〃	〃	〃	
6197	〃	15SD20礫層	—	4.7	(1.9)	〃	〃	〃	〃	
6198	〃	IIC7h表土	12.6	—	(2.8)	〃	〃	〃	〃	
6199	〃	15SD20埋土	12.4	—	(1.5)	〃	〃	〃	〃	
6200	〃	15次のIIC区排土	13.3	5.0	3.3	灰白色	染付、透明釉	大塚相馬?	18~19C?	
6201	〃	IIC7g表土	13.8	8.3	3.0	灰色	透明釉、白い釉	大塚相馬	19C中葉	鉄釉と銅緑釉による絵付

第217図 西側調査区の近世陶磁器(15)





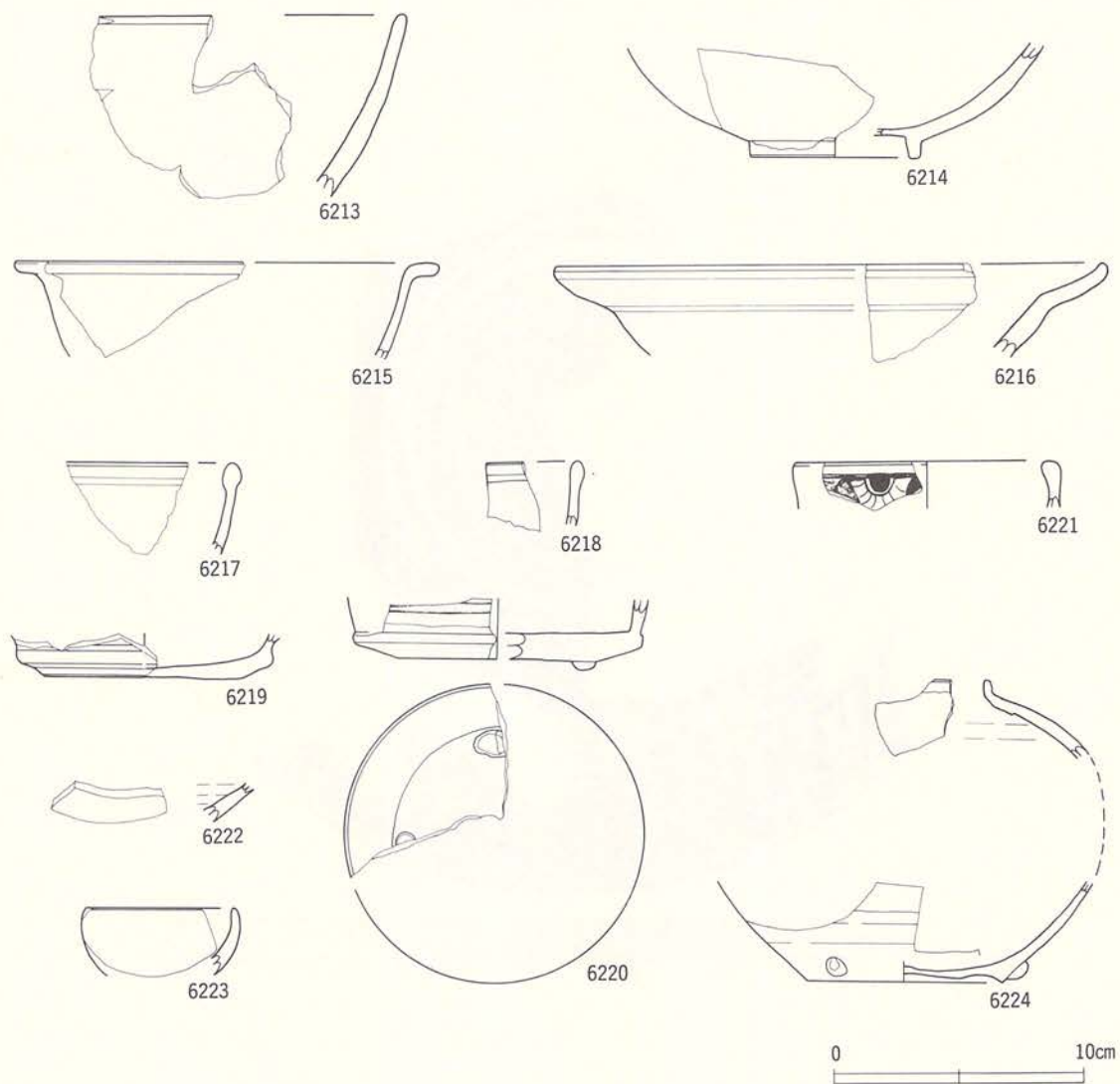
番号	器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	そ の 他
			口径	底径	高さ					
6202	陶器皿	15SD14埋土	10.8	—	(2.9)	灰色	藁灰釉	大堀相馬	19C	
6203	〃	15SD20埋土	—	—	(2.2)	灰色	〃	〃	〃	
6204	〃	IIC7h表土	9.4	—	(1.4)	灰色	〃	〃	〃	
6205	〃	IIC6j表土	12.8	—	(2.0)	灰色	藁灰釉、褐釉	〃	〃	内面に褐釉流しがけ
6206	〃	IIC7h表土	—	5.0	(2.9)	灰色	藁灰釉	〃	〃	
6207	〃	10次調査区	8.0	4.6	2.0	灰色	銅緑釉	〃	19C	型おこし、底面無釉
6208	〃	IIC区礎石面	—	8.8	(1.6)	灰色	透明釉、染付	不明	19C ?	陶胎染付
6209	陶器鉢	IIC7g表土	—	—	(1.4)	灰白色 で粗い	長石釉	美濃	18C初	いわゆる笠原鉢
6210	〃	10次調査区	—	—	(5.6)	赤褐色	長石釉	肥前	17C後~18C前	
6211	〃	IIC7d礎石面下	26.0	—	(4.1)	赤褐色	鉄釉、白化粧	肥前	17C後~18C前	

第218図 西側調査区の近世陶磁器(16)



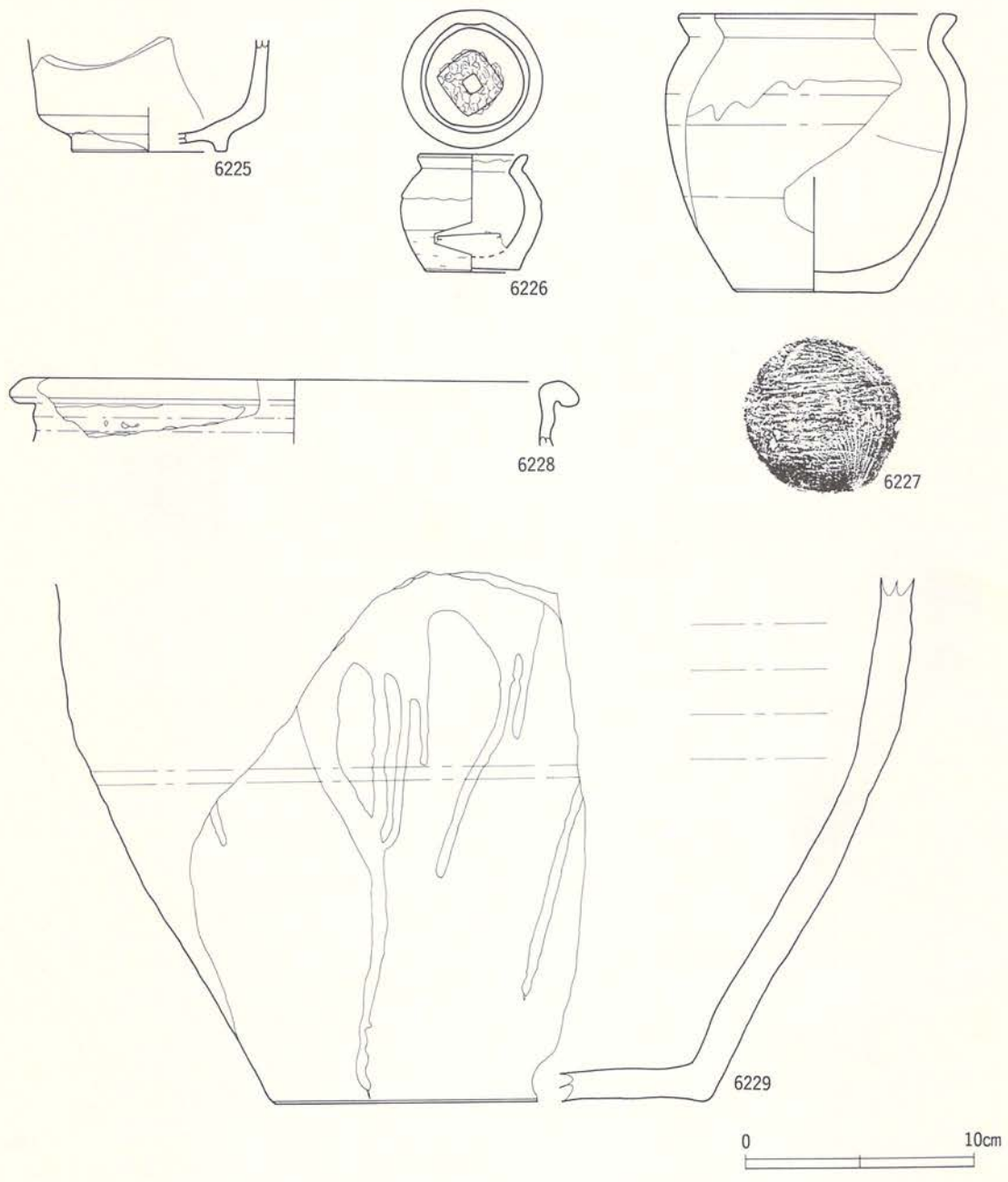
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6212	陶器鉢	15SE9埋土上位	36.0	12.6	12.2	赤褐色	白化粧、鉄釉、褐釉	肥前	17C後~18C前	スクリーントーンは鉄釉

第219図 西側調査区の近世陶磁器(17)



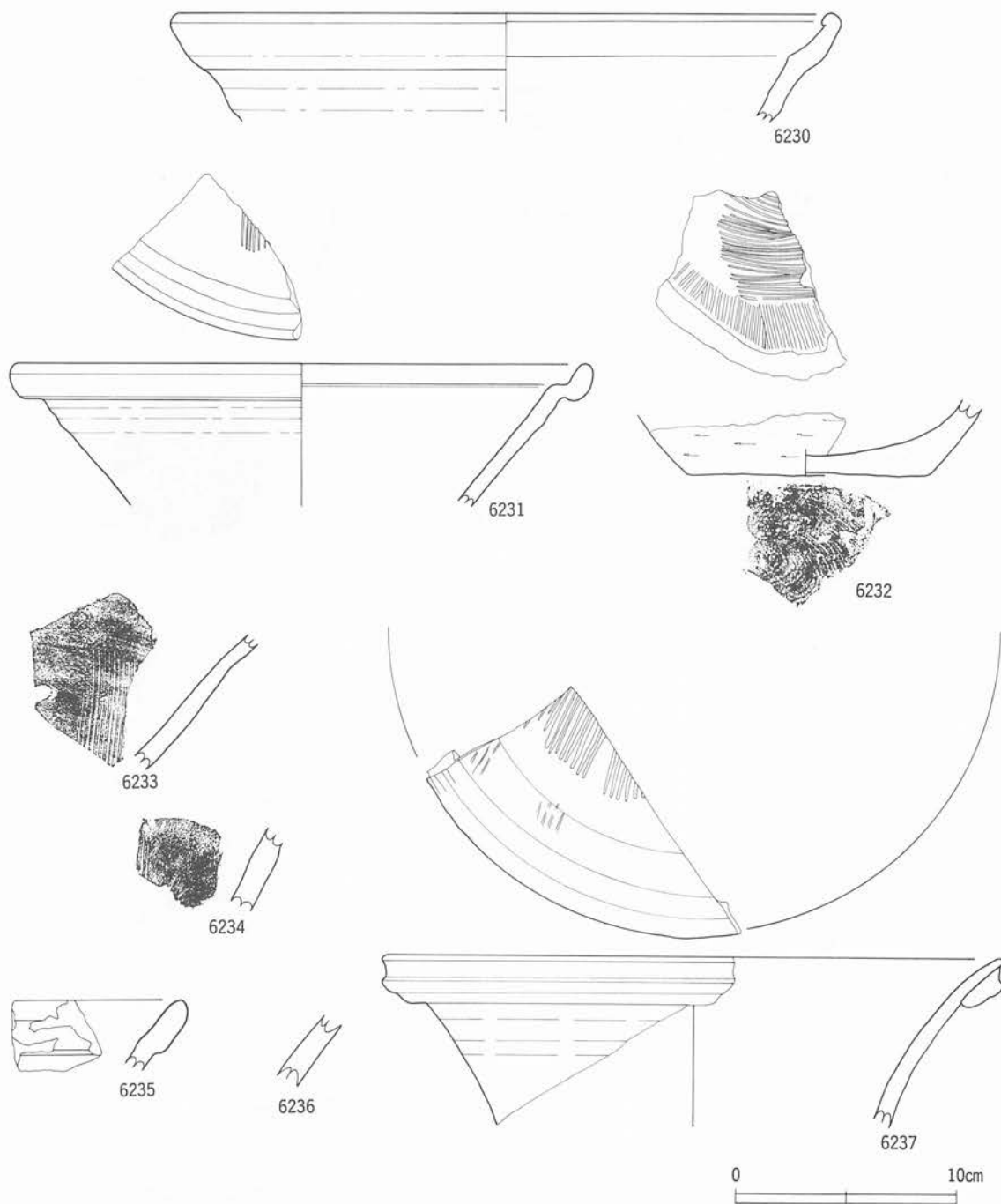
番号	器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6213	陶器鉢	IIC7e礎石面下	—	—	7.4	灰色で粗い	珪酸分の多い灰釉	大堀相馬?	18C?	釉の色調空色
6214	〃	15次のIIC区排土中	—	(6.9)	(4.6)	灰色	藁灰釉	大堀相馬	19C	
6215	〃	15SD22埋土	17.1	—	(3.9)	灰色	〃	〃	〃	
6216	〃	IIC7f礎石面下	22.1	—	(3.8)	黒褐色	珪酸分の多い灰釉	東北産	19C	釉の色調空色
6217	〃	IID0b	—	—	(3.7)	灰色	藁灰釉	大堀相馬	19C	
6218	〃	IIC7g表土	—	—	(2.6)	灰色	〃	〃	〃	
6219	陶器香炉	15SE9埋土上位	—	8.0	(1.8)	灰色	褐釉	美濃	18C前半	内面と底面無釉
6220	〃	15SE9埋土上位	—	8.0	(2.5)	黄灰色	褐釉	美濃	18C前半	〃
6221	〃	15SK23埋土	10.7	—	(1.9)	灰色	染付、透明釉	不明	19C?	陶胎染付、内面施釉
6222	〃	15SD14埋土	—	—	(1.6)	灰白色	灰釉	大堀相馬	18C?	内面無釉
6223	仏飯器	IIC6j表土	6.2	—	(2.7)	黄灰色	灰釉	大堀相馬	18C?	
6224	土瓶	15SK23埋土	—	7.9	(12.1)	黄灰色	銅緑釉	大堀相馬	19C中葉	内面、底面無釉

第220図 西側調査区の近世陶磁器(18)



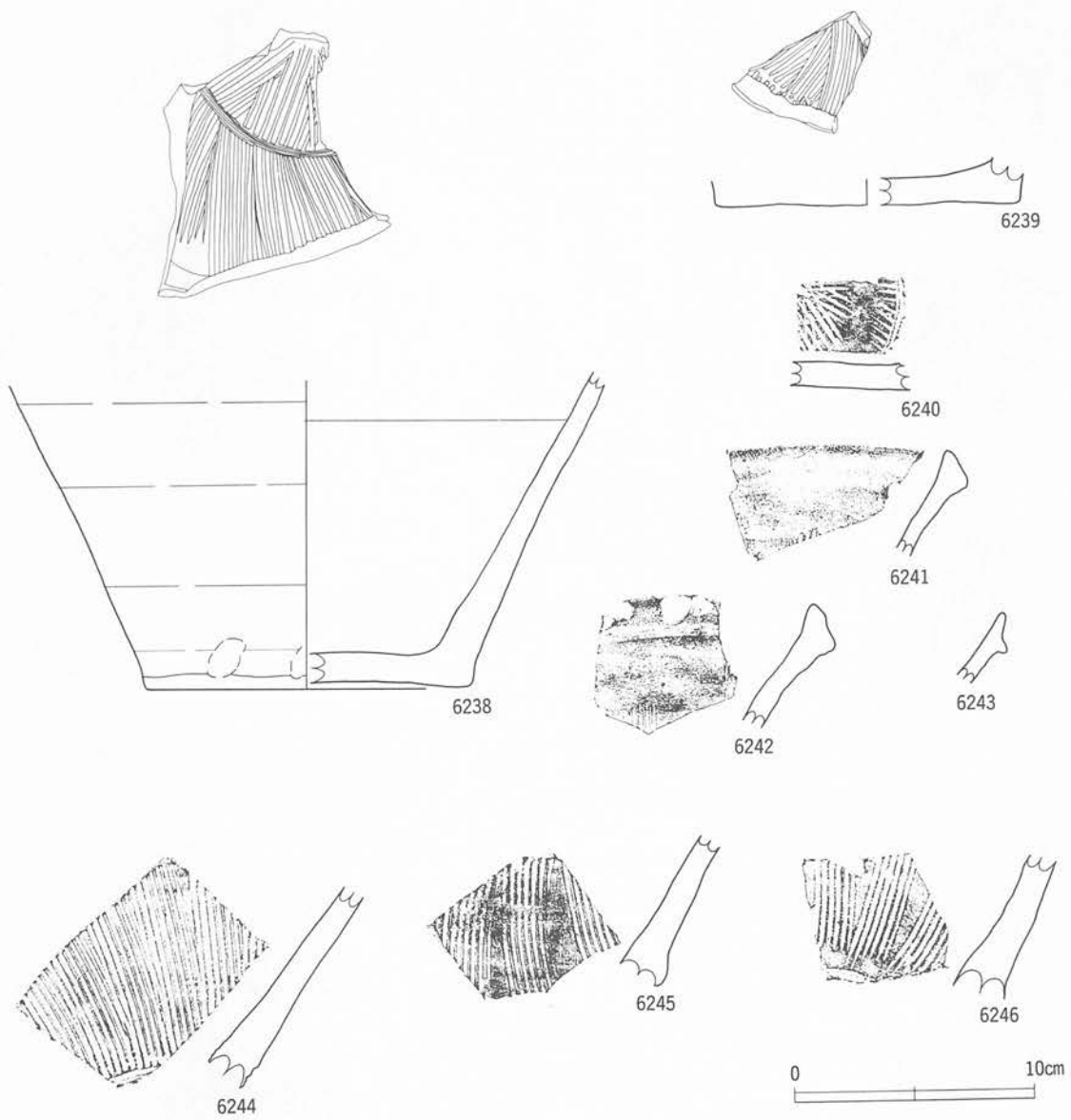
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6225	陶器瓶?	IIC8e表土	—	6.8	(5.0)	灰色	藁灰釉	大塚相馬?	19C?	内面一部無釉
6226	陶器甕	IIC6e礎石面下	4.8	4.1	5.2	灰褐色	鉄釉 空色の釉	東北産	18C末~19C	鉄釉に空色の藁灰釉?流しかけ
6227	〃	15SD17礫層	12.2	7.0	12.2	赤褐色	鉄釉 藁灰釉	東北産	19C	鉄釉に藁灰釉流しかけ
6228	〃	IIC区礎石面	23.4	—	(2.8)	灰褐色	鉄釉 空色の釉	東北産	19C	鉄釉に空色の藁灰釉?流しかけ
6229	〃	10次調査区	—	19.0	(23.3)	灰褐色	鉄釉 空色の釉	東北産	19C	鉄釉に空色の藁灰釉?流しかけ

第221図 西側調査区の近世陶磁器(19)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6230	陶器搦鉢	IIC7f礎石面下	30.0	—	(5.0)	淡黄色で粗い	鉄釉	瀬戸	18C中	
6231	〃	I C8i	26.0	—	(6.5)	〃	〃	〃	18C前	口縁部折りかえし
6232	〃	15SK23埋土	—	11.0	(2.7)	〃	〃	〃	18C	
6233	〃	IIC区表採	—	—	(6.2)	〃	〃	〃	18C	
6234	〃	15SE9埋土上位	—	—	(3.3)	〃	〃	〃	18C	
6235	〃	15SD21埋土	(7.6)	—	(3.2)	〃	〃	〃	18C中	
6236	〃	IIC7f礎石面下	—	—	(2.8)	〃	〃	〃	18C	
6237	〃	15SE9埋土上位	28.0	—	(7.6)	暗赤褐色	無釉	東北産?	18~19C	

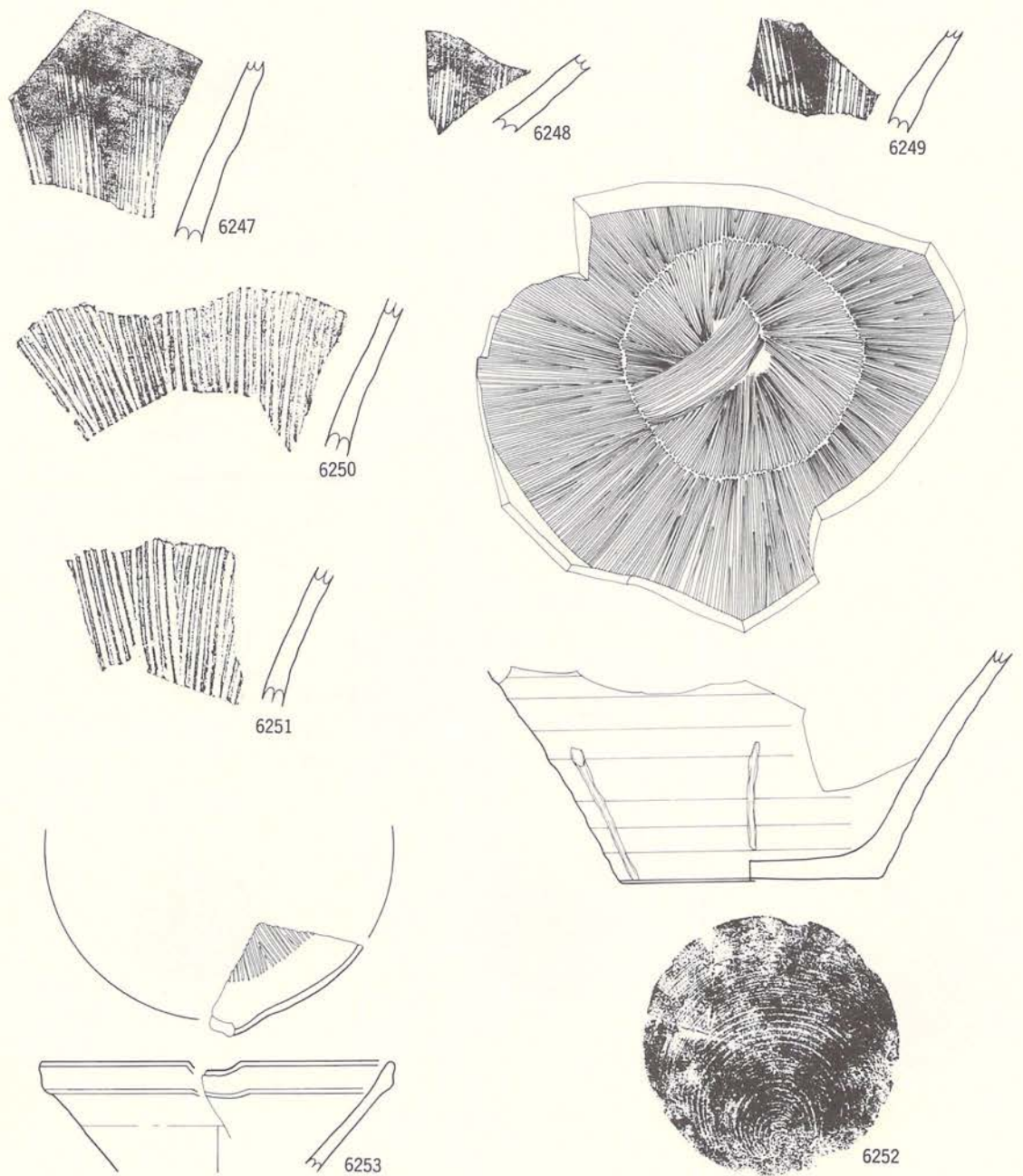
第222図 西側調査区の近世陶磁器(20)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6238	陶器擂鉢	15SD20礫層	—	13.7	(13.2)	暗赤褐色 ～赤褐色	鉄釉	東北地方	18～19C	
6239	〃	I C7e	—	12.8	(2.0)	暗灰色～ 赤褐色	鉄釉	〃	〃	
6240	〃	15SD20埋土	—	—	—	橙色	鉄釉	〃	〃	
6241	〃	IIC区南側	—	—	(4.4)	暗赤褐色	鉄釉	〃	〃	
6242	〃	IIC区礎石面	—	—	(5.3)	暗赤褐色	鉄釉	〃	〃	
6243	〃	10次調査区	—	—	(3.0)	暗褐色	鉄釉	〃	〃	
6244	〃	15SD28埋土	—	—	(9.6)	灰色	鉄釉	〃	〃	
6245	〃	IIC7d礎石面下	—	—	(6.1)	暗赤褐色	鉄釉	〃	〃	
6246	〃	I C7f	—	—	(6.0)	赤褐色	鉄釉	〃	〃	10次調査出土

第223図 西側調査区の近世陶磁器(2)

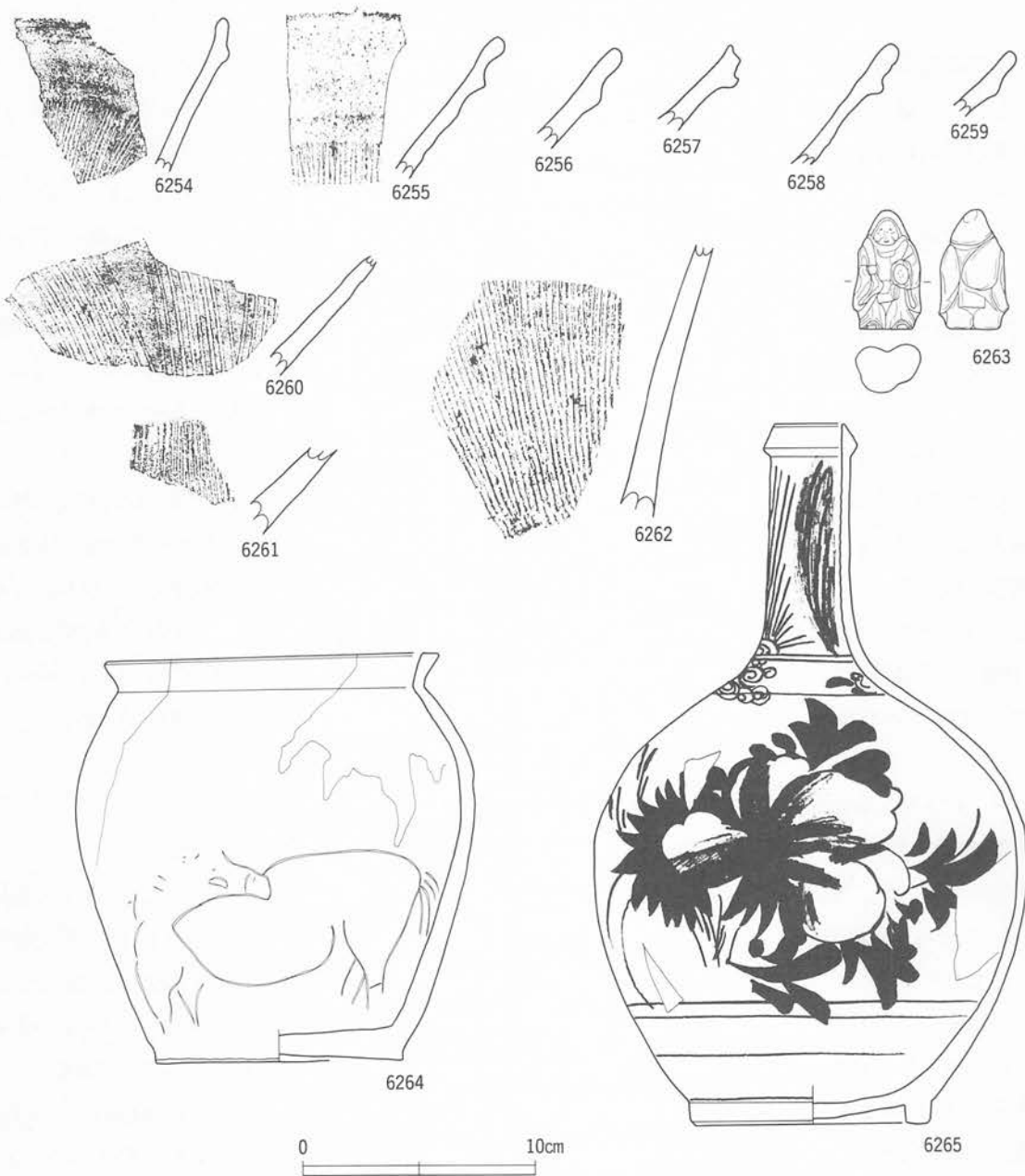




番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6247	陶器摺鉢	15SD20礫層	—	—	(7.9)	暗赤褐色	鉄釉	東北地方	18~19C	
6248	〃	15SD28埋土	—	—	(3.2)	暗灰色	〃	〃	〃	6252と同一個体か
6249	〃	IIC7d礎石面下	—	—	(4.2)	暗赤褐色	〃	〃	〃	
6250	〃	15SD20礫層	—	—	(6.6)	赤褐色~暗灰色	〃	〃	〃	6251と同一個体
6251	〃	〃	—	—	(5.8)	〃	〃	〃	〃	6250と同一個体
6252	〃	15SD20礫層	—	11.5	(10.5)	暗灰色	〃	〃	〃	6248と同一個体か
6253	〃	15SK23埋土	15.7	—	(5.4)	黒褐色	〃	〃	〃	

第224図 西側調査区の近世陶磁器(2)





番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6254	陶器攪鉢	10P40埋土	—	—	(6.6)	赤褐色	鉄釉	東北産	19~20C	胎土に海綿状骨針混入
6255	〃	IID4a攪乱部	—	—	(5.4)	褐灰色	〃	〃	〃	
6256	〃	15SK23埋土	—	—	(4.2)	暗灰色	〃	〃	19C	胎土に海綿状骨針混入
6257	〃	10次調査区	—	—	(3.5)	赤褐色	無釉	〃	19C~20C	10次調査出土
6258	〃	15SD20礫層	—	—	(5.3)	灰色	鉄釉	〃	18~19C	
6259	〃	IIC7h表土	—	—	(2.8)	赤褐色	〃	〃	19C~20C	
6260	〃	15SE9埋土	—	—	(4.6)	黒褐色土	〃	〃	18~19C	
6261	〃	15SD20埋土	—	—	(11.6)	赤褐色土	〃	〃	〃	胎土に海綿状骨針混入
6262	〃	IIC5c表土	—	—	(3.5)	暗赤褐色	〃	〃	〃	
6263	磁器人形	IIC7i表土	—	—	5.1	白色	透明釉	不明	不明	型おこし
6264	陶器甕	IIC3h削平部	14.4	10.8	17.2	暗灰色	鉄釉、空色の釉	東北産	19C	線刻による馬の絵
6265	陶器瓶	〃	3.1	10.4	30.3	灰色	白化粧、染付	東北産	19C	平清水産か

第225図 西側調査区の近世陶磁器(23)

## II E 区の陶磁器 (第 226～234 図 写真図版 144～147)

II E 区 (一部 II D 区も含む) の陶磁器は磁器 41 点、陶器 57 点、瓦器 1 点の計 99 点を図示した。

磁器の産地は西側調査区と同様に肥前産と東北地方在地産がある。6312、6336 の文様は瀬戸産のものにみられるが、これらの染付の色調はくっきりとした紺色で、瀬戸産のものとは異なるようである。やはり東北在地産の可能性が高い。6331 は型おこしの皿である。産地、年代ともに確定できない。明治以降に下る可能性もある。

陶器は瀬戸・美濃産、肥前産、京焼系、大堀相馬産、その他の東北在地産がある。6342 は瀬戸・美濃産の天目茶碗である。17 世紀の第 4 四半期の製作年代である。6343～6346 は肥前産の呉器手碗、6347 は陶胎染付碗である。6348～6353 は大堀相馬の碗である。6348～6351 は透明性のある灰釉、他は失透性の藁灰釉が施されている。6354 は緑色の上絵付けが施されているが京焼系であろう。

6356 は瀬戸・美濃産の灰釉皿で、製作年代は大窯 III 期 (1570～1580 年頃)。6357～6364 は美濃産の長石釉が施される皿である。時期は大窯 V 期から登窯 II 期にわたる。6365 は唐津産の皿で胎土目がある。16 世紀末の製作年代であろう。6379 は大堀相馬産の土瓶であるが、無釉の底面と底辺部に黒褐色の漆と思われるものが塗られている。用途などは不明である。6383 は灯明皿である。藁灰釉が施されており大堀相馬産と思われる。播鉢は西側調査区と同様に瀬戸産と具体的な窯は特定できないが東北在地産と推定されるものからなる。6399 は瓦器の火鉢に取り付けられた獅嚙 (しがみ) の装飾である。産地、時代ともに不明である。

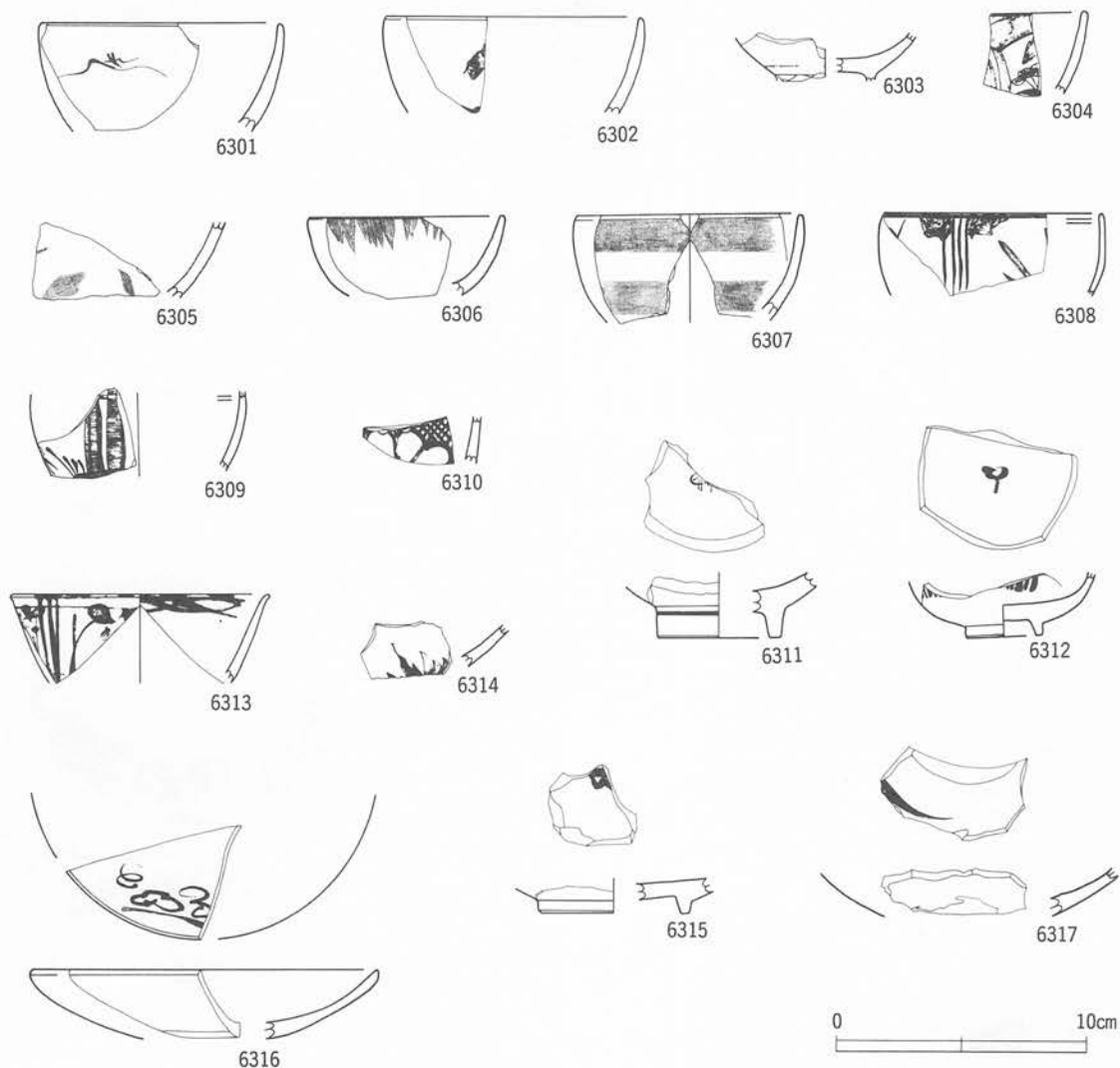
## II F、III F 区の陶磁器 (第 235～240 図 写真図版 148～150)

磁器 29 点、陶器 46 点、土器質の甕 1 点、土製の猿形製品 1 点の計 77 点を図示した。

磁器には中国産、肥前産、東北地方在地産がある。6401 の碗と 6413 の皿は中国産である。6401 の碗は染付、6413 は内面に赤と緑による上絵が施され、「呉須赤絵」と呼ばれるものである。いずれも 17 世紀初頭頃のものであろう。6401 は堺環濠都市遺跡から出土した青花碗 (土岐市美濃陶磁歴史館 1996「特別展堺衆のやきもの図録」20 頁 69 に掲載) に文様が類似する。6410～6412 は平清水産と思われる。6424～6427 の壽文皿は西側調査区のものと同様に、瀬戸産とは言い難いものであろう。6429 は外面が青磁の花生である。

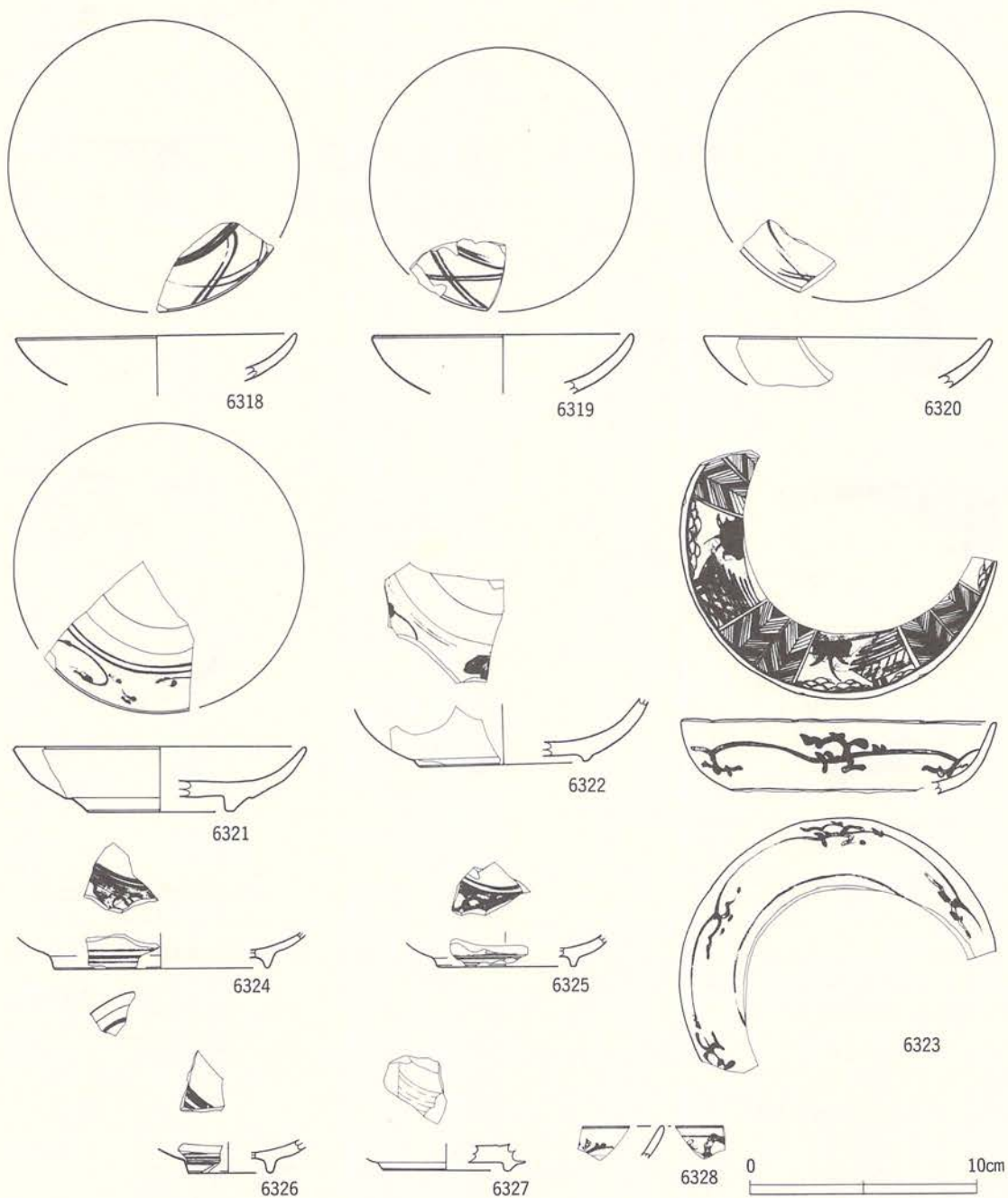
陶器は瀬戸・美濃産、肥前産、大堀相馬産、その他の東北在地産がある。6430、6431 は美濃産の天目茶碗の高台部分の破片である。6430 は外面に鉄化粧が施されている。大窯 III 期 (1570～1580 年頃) のものである。6431 は高台部外面は露胎である。登窯 I 期 (1605～1623 年) のものである。6432、6433 は瀬戸産の甕である。「錢甕」と称されるもので、瀬戸市東部の赤津村で生産されていたと藤澤良祐氏からご教示を賜った。6434～6436 は肥前産の碗である。呉器手と陶胎染付がある。6437～6442 は大堀相馬産の碗である。6437 は灰釉と鉄釉の掛け分け、他は藁灰釉が施される。6444、6445 は美濃産の長石釉が施される皿、17 世紀前半のものであろう。6446 は唐津産の皿で見込みに砂目、底面に糲殻が付着した痕跡がある。17 世紀初頭のものであろう。6457 は土瓶の蓋、鮫肌釉が施され、製作年代は明治時代まで下る。6459～6461 は東北地方在地産であるが窯は特定できない。

播鉢は西側調査区と同様に瀬戸産と具体的な窯は特定できないが東北在地産と推定されるものからなる。6476 は小型の素焼きの甕である。墨で内外面に文字らしいものが書かれているが判読できない。胎土には海綿状骨針が混入する。6477 は猿をかたどった土製品である。中実で、素焼きであるが硬く締まった胎土である。産地年代ともに不明である。



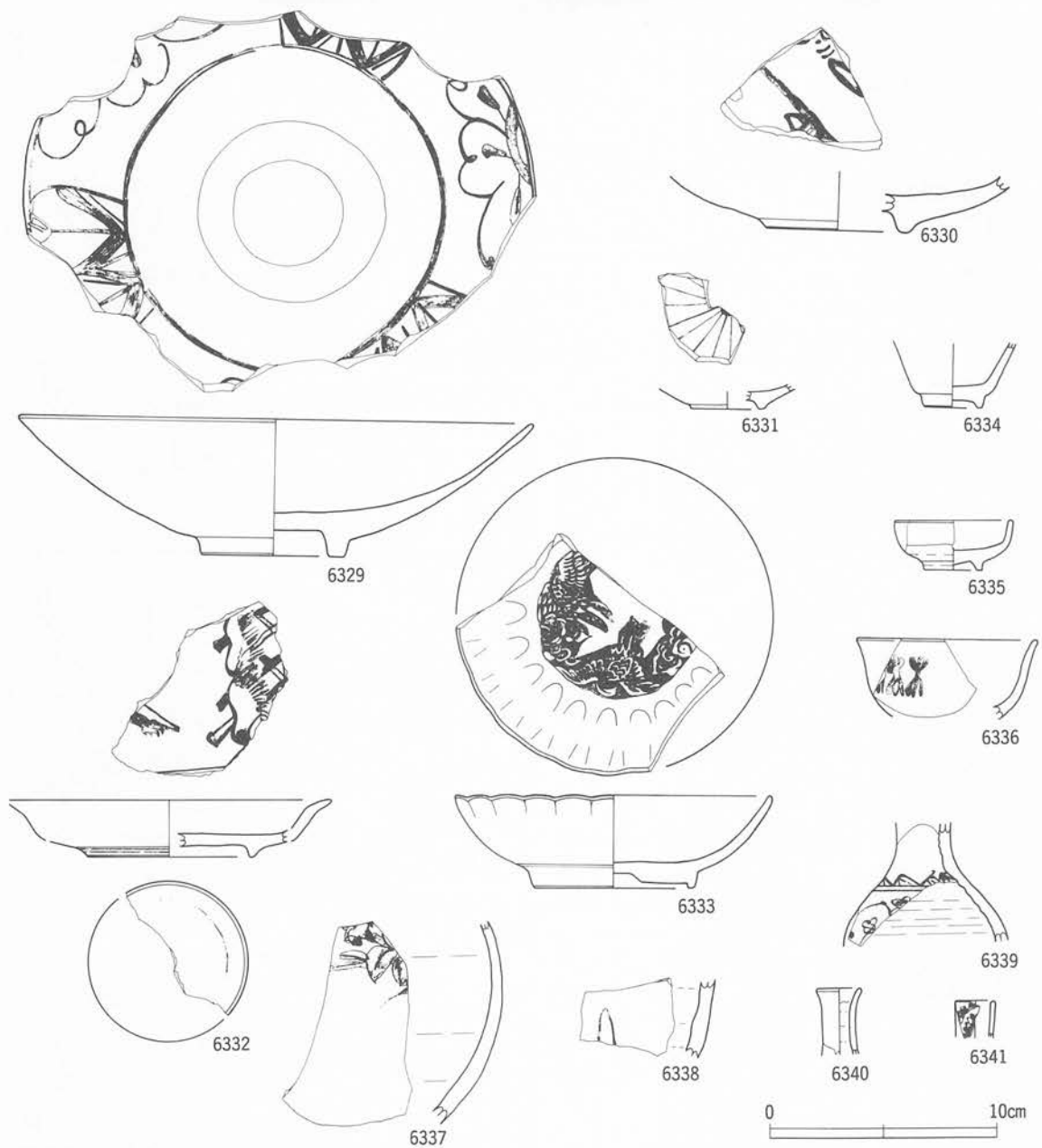
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6301	磁器碗	13SK54埋土	9.9	—	(4.4)	白色	染付	肥前	1690~1780	うるし継ぎをおこなっている
6302	〃	13SE4埋土	10.4	—	(3.9)	白色	染付	肥前	1690~1780	
6303	〃	15SD43埋土	—	(4.0)	(1.9)	白色	〃	〃	〃	被熱している
6304	〃	II E8j暗褐色土層	—	—	(3.3)	白色	〃	〃	〃	11次調査出土
6305	〃	13SE5埋土	—	—	(2.8)	灰白色	〃	〃	〃	
6306	〃	15SD2埋土	8.0	—	(3.2)	白色	染付	肥前	1690~1780	
6307	〃	II E区表採	9.2	—	(4.3)	白色	染付	〃	18C後半~19C前	
6308	〃	15SD2埋土	8.8	—	(3.3)	白色	〃	〃	〃	
6309	〃	II E7h表土	—	—	(3.2)	〃	〃	〃	〃	
6310	〃	13SK52埋土	—	—	(1.8)	〃	〃	〃	〃	筒形碗
6311	〃	11次調査区、東側の水穴	—	5.0	(2.7)	白色、黒い粒入る	〃	肥前?	1780~1860	広東碗か
6312	〃	II E9h表土	—	3.1	(2.6)	白色ガラス質	〃	瀬戸?	19C前~幕末	染付の色工業コバルト的
6313	〃	II E9h表土	10.2	—	(3.5)	白色ガラス質	〃	平清水	19C中葉	
6314	磁器皿	13SD27埋土	—	—	—	白色	〃	肥前	1690~1780	
6315	〃	II E6i褐色土層	—	6.0	(1.5)	白色、黒い粒入る	〃	〃	1690~1780?	高台無釉
6316	〃	13SE4埋土	14.0	—	(2.8)	白色	〃	肥前	1690~1780	
6317	〃	13SE7埋土	—	—	(1.8)	〃	〃	〃	〃	

第226図 II E区の近世陶磁器(1)



番号	器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6318	磁器皿	II E5i表土	12.4	—	(2.7)	白色	染付	肥前	1690~1780	
6319	〃	II E4e表土	12.0	—	(2.6)	〃	〃	〃	〃	
6320	〃	II E7j黒褐色土中	12.7	—	(2.2)	〃	〃	〃	〃	
6321	〃	11次調査区	12.9	7.0	2.9	〃	〃	〃	〃	
6322	〃	15SD2埋土	7.6	—	(2.7)	〃	〃	〃	〃	
6323	〃	11次調査区	13.8	—	(3.3)	〃	〃	〃	〃	
6324	〃	13SK36埋土	—	9.6	(1.5)	〃	〃	〃	〃	
6325	〃	II E6c表土	—	6.2	(1.2)	〃	〃	〃	〃	
6326	〃	15SD2埋土	—	3.8	(1.3)	〃	〃	〃	〃	
6327	〃	II E6i黒褐色土	—	5.6	(1.3)	〃	透明釉	〃	〃	見込み蛇目釉はぎ
6328	〃	15P18掘方	—	—	(1.4)	〃	染付	〃	〃	

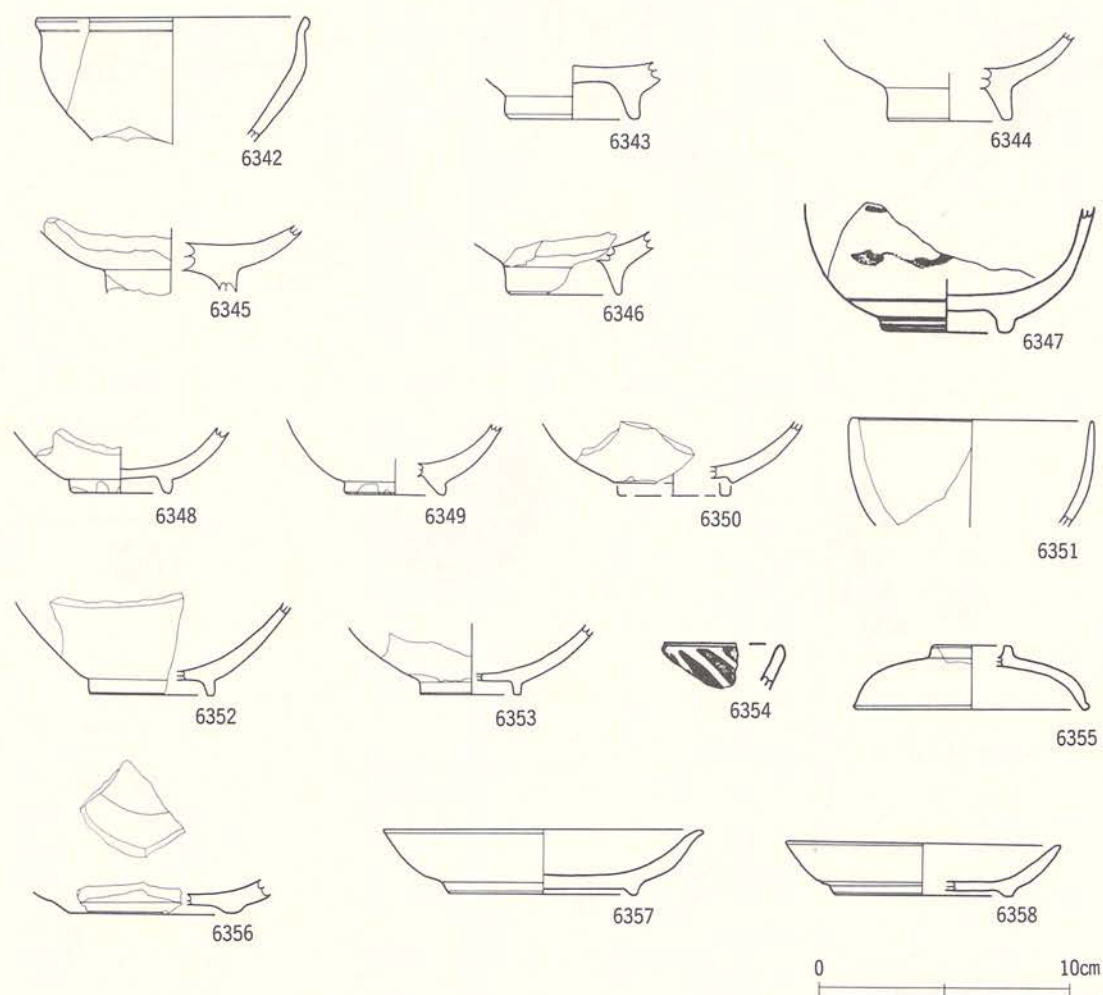
第227図 II E区の近世陶磁器(2)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6329	磁器皿	13SE6埋土中位	22.8	6.4	6.0	白色	染付	肥前	1690~1780	漆継ぎをおこなっている
6330	〃	13SK57埋土	—	6.5	(2.5)	灰色	〃	〃	〃	
6331	〃	II E8i暗褐色土	—	(3.3)	(1.2)	白色	〃	〃	〃	
6332	〃	13SE5埋土	(14.4)	7.4	(2.6)	橙色	〃	肥前?	1690~1780	
6333	〃	13SK52埋土	14.0	7.1	4.1	白色ガラス質	〃	不明	19C中葉	型おこし凹蛇目高台
6334	磁器小杯	13SK56埋土	—	2.6	(2.9)	白色	透明釉	肥前	1690~1780	内外面、割れ口に漆?が付着
6335	〃	IID7~9C	5.3	(2.6)	(2.2)	灰白色	透明釉	肥前	〃	体部下半無釉
6336	磁器小碗	II E4a盛土	8.1	—	(3.5)	白色ガラス質	染付	不明	19C中葉	染付の色工業コバルト的
6337	磁器瓶	13SE5埋土	—	—	(8.4)	白色	染付	肥前	1690~1780	内面無釉
6338	〃	13SE7埋土中位	—	—	(3.4)	灰色	染付	不明	1780~1860?	〃
6339	〃	11次調査区	—	—	5.5	白色	〃	肥前	1690~1780	〃
6340	〃	13SD31埋土	2.0	—	(3.0)	白色	透明釉	〃	18~19C	内面口縁部以外無釉
6341	〃	II E6g黒褐色土	1.8	—	(1.7)	白色	染付	〃	〃	〃

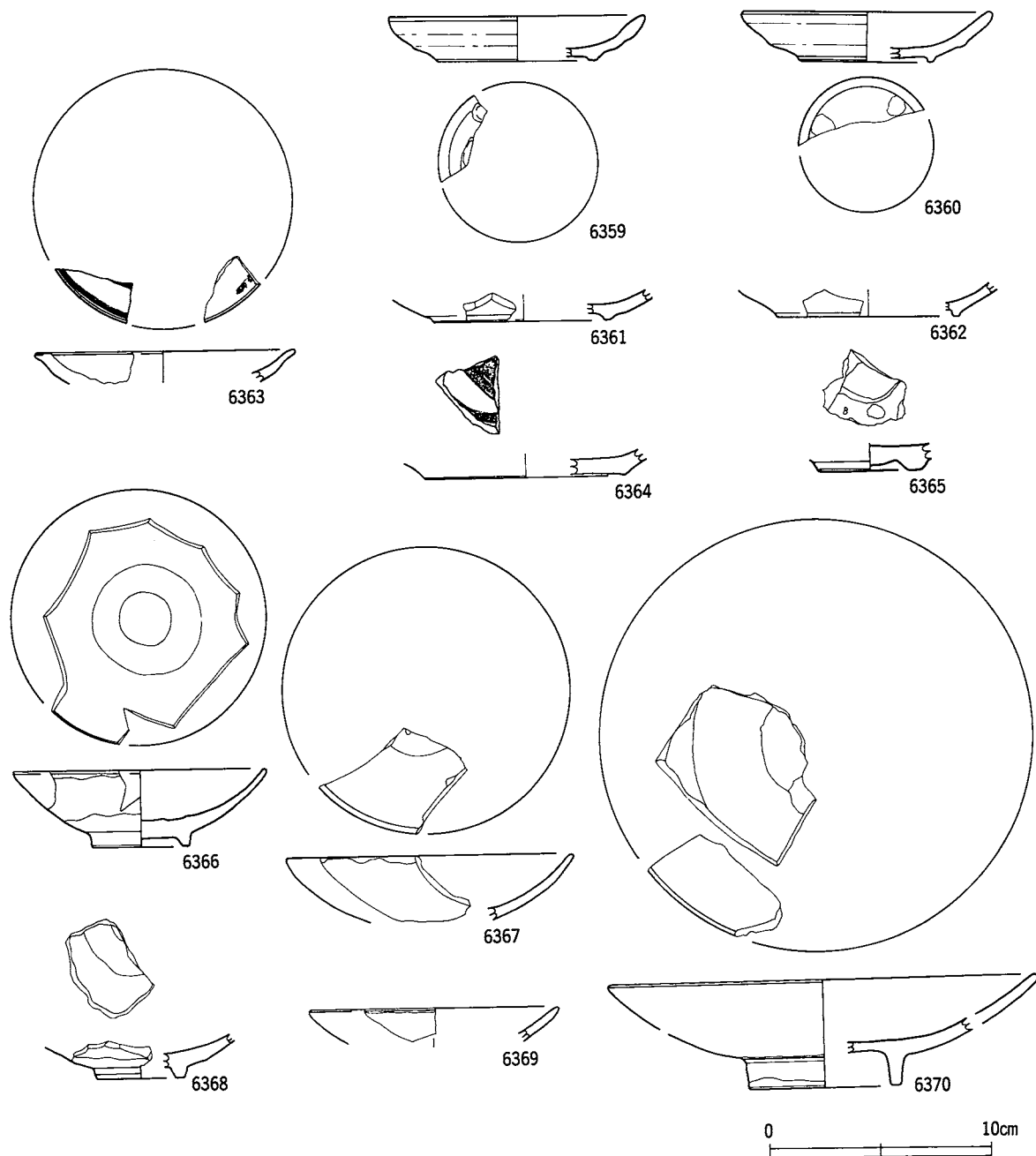
第228図 II E区の近世陶磁器(3)





番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6342	陶器碗	13P616埋土 (13SB22)	10.8	—	(5.0)	淡黄色	鉄釉	瀬戸・美濃	17C第4四半	外面体部下半無釉
6343	〃	13SK55埋土	—	5.2	(2.2)	黄白色	透明釉	肥前	18C前半	呉器手碗
6344	〃	13SK42埋土	—	5.0	(3.9)	〃	〃	〃	〃	〃
6345	〃	II E4e表土	—	—	(2.6)	〃	〃	〃	〃	〃
6346	〃	13SK57埋土	—	4.4	(2.0)	〃	〃	〃	〃	〃
6347	〃	II E9c表土	—	5.2	(3.3)	灰色	染付	〃	〃	陶胎染付碗
6348	〃	II E6g	—	4.0	(2.5)	灰白色	灰釉	大堀相馬	18C	11次調査出土
6349	〃	III E2d盛土	—	4.0	(2.7)	〃	〃	〃	〃	13次調査出土
6350	〃	11P2埋土?	—	(4.6)	(3.0)	〃	〃	〃	〃	
6351	〃	II E9h表土	9.7	—	(4.2)	〃	〃	〃	〃	11次調査出土
6352	〃	13SK57埋土		5.0	(3.5)	灰色~橙色	薬灰釉	〃	19C	
6353	〃	II E7e表土		4.0	(2.7)	灰色	〃	〃	〃	
6354	〃	II E9d表土	—	—	(1.8)	〃	透明釉、上絵	京、信楽系	18C?	上絵の色は緑
6355	陶器蓋	II E6h黒褐色土	3.4	9.6	2.5	灰白色	灰釉	大堀相馬	18~19C	
6356	陶器皿	II E8h黒褐色土	—	6.9	(1.1)	淡黄色	〃	瀬戸・美濃	大窯III期	見込の釉をかきとっている
6357	〃	II E5i黒褐色土	12.8	7.6	2.6	灰白色	長石釉	美濃	大窯V~登窯I	13次調査出土
6358	〃	11P65埋土上位	11.0	7.2	2.1	〃	〃	〃	登窯I~II期	

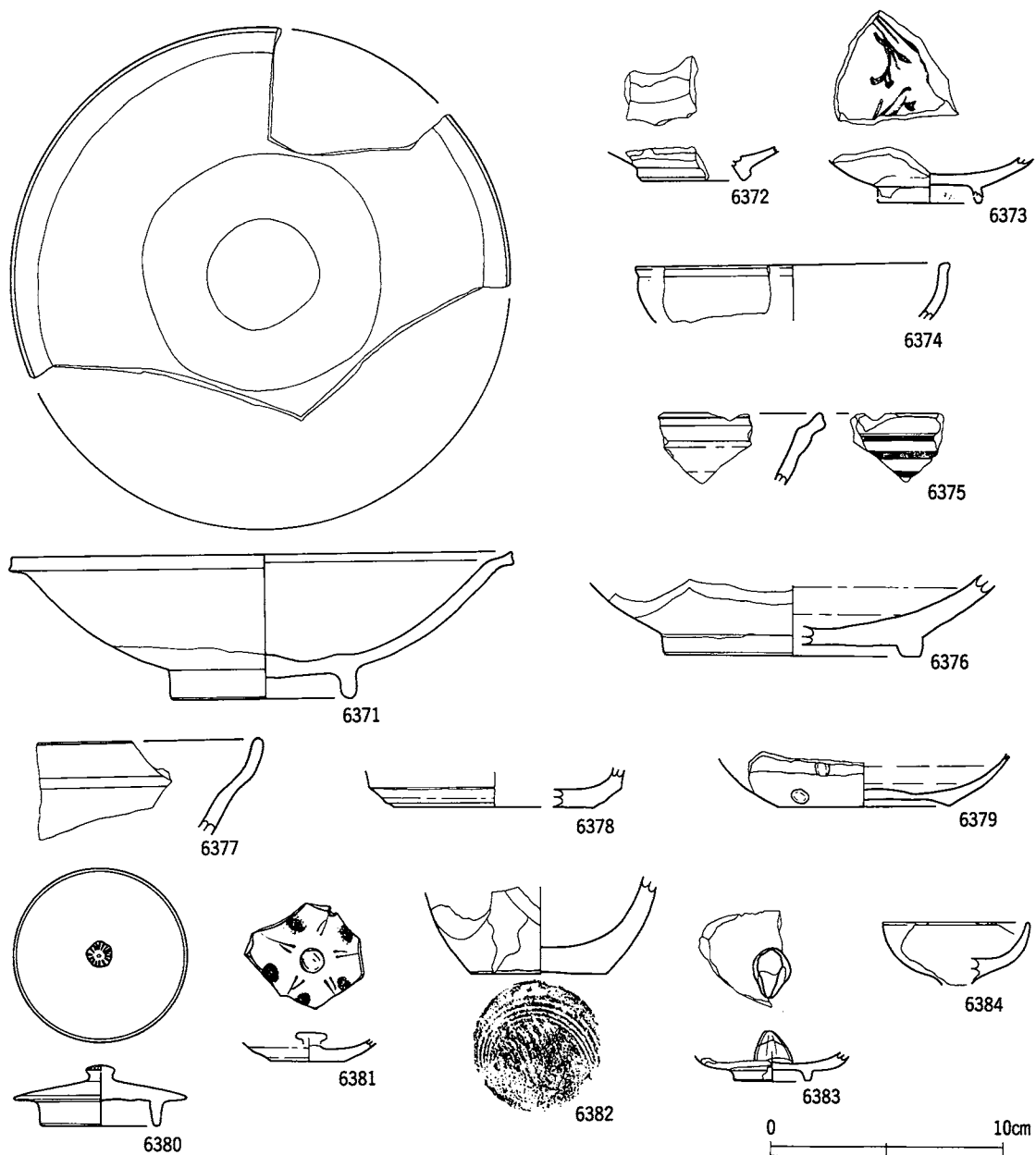
第229図 II E区の近世陶磁器(4)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6359	陶器皿	13SE3埋土中位	11.6	7.2	2.1	灰白色	長石釉	美濃	登窯I~II期	
6360	〃	13P667埋土(SB23)	11.4	6.2	2.3	〃	〃	〃	〃	
6361	〃	II E5i黒褐色土	-	8.1	(1.4)	〃	〃	〃	〃	
6362	〃	II E5i黒褐色土	-	8.2	(1.6)	〃	〃	〃	〃	
6363	〃	13P677埋土(SB22)	11.8	-	(1.4)	淡黄色	鉄絵、長石釉	〃	〃	
6364	〃	13SE4埋土	-	9.1	(1.3)	〃	〃	〃	〃	6363と同一個体か
6365	〃	II E9h表土	-	4.8	(1.2)	橙色	灰釉	唐津	16C末	胎土目あり
6366	〃	11次調査区	11.5	4.5	3.5	灰白色	銅緑釉、透明釉	肥前	1690~1780	
6367	〃	II E9j	13.0	-	(2.9)	〃	〃	〃	〃	
6368	〃	II E8i暗褐色土	-	4.1	(2.0)	〃	〃	〃	〃	
6369	〃	II E8i	11.3	-	(1.6)	〃	〃	〃	〃	
6370	〃	II E4j褐色土	19.5	7.0	(5.0)	淡黄色	透明釉	〃	〃	見込み蛇目釉はぎ

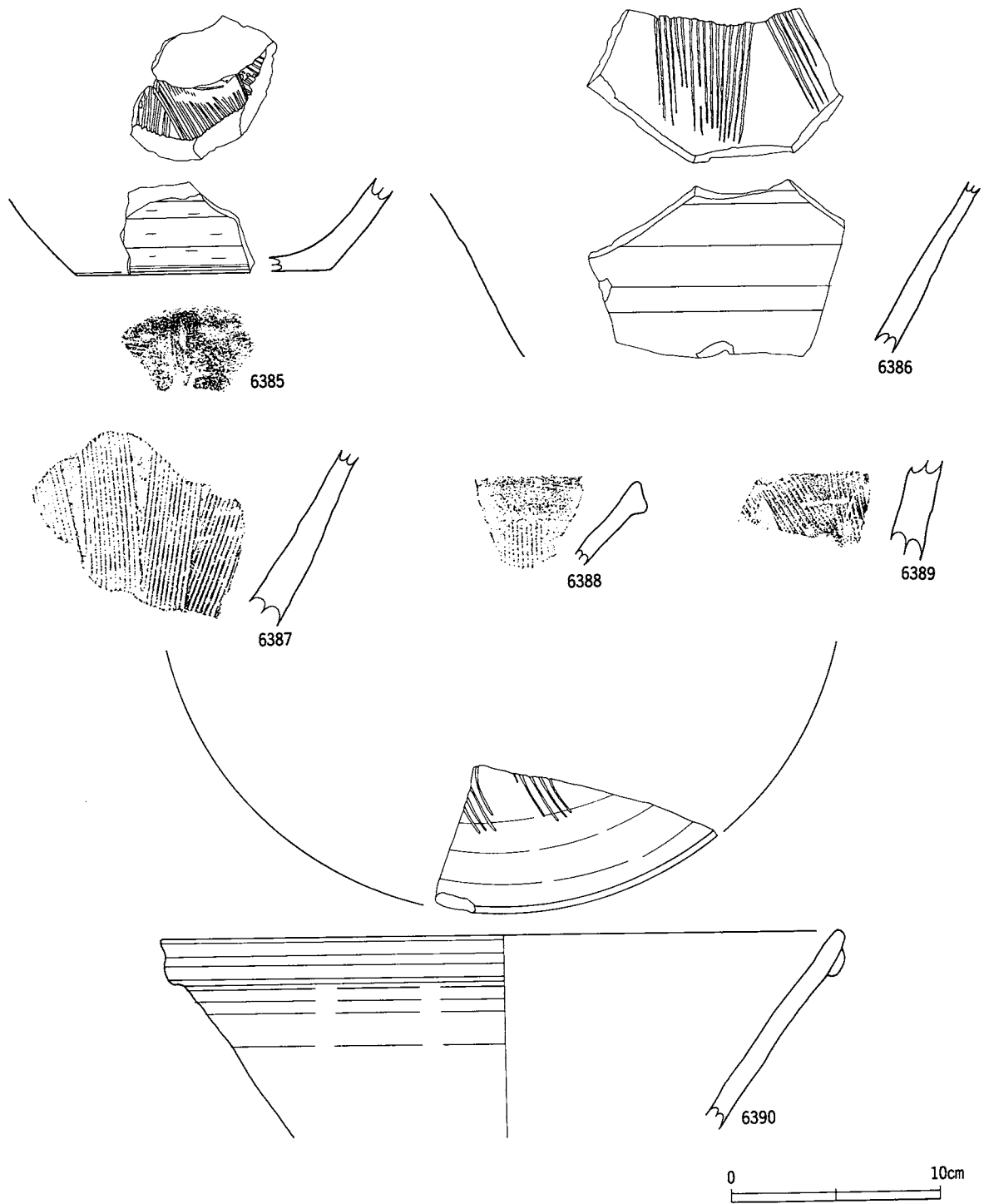
第230図 II E区の近世陶磁器(5)





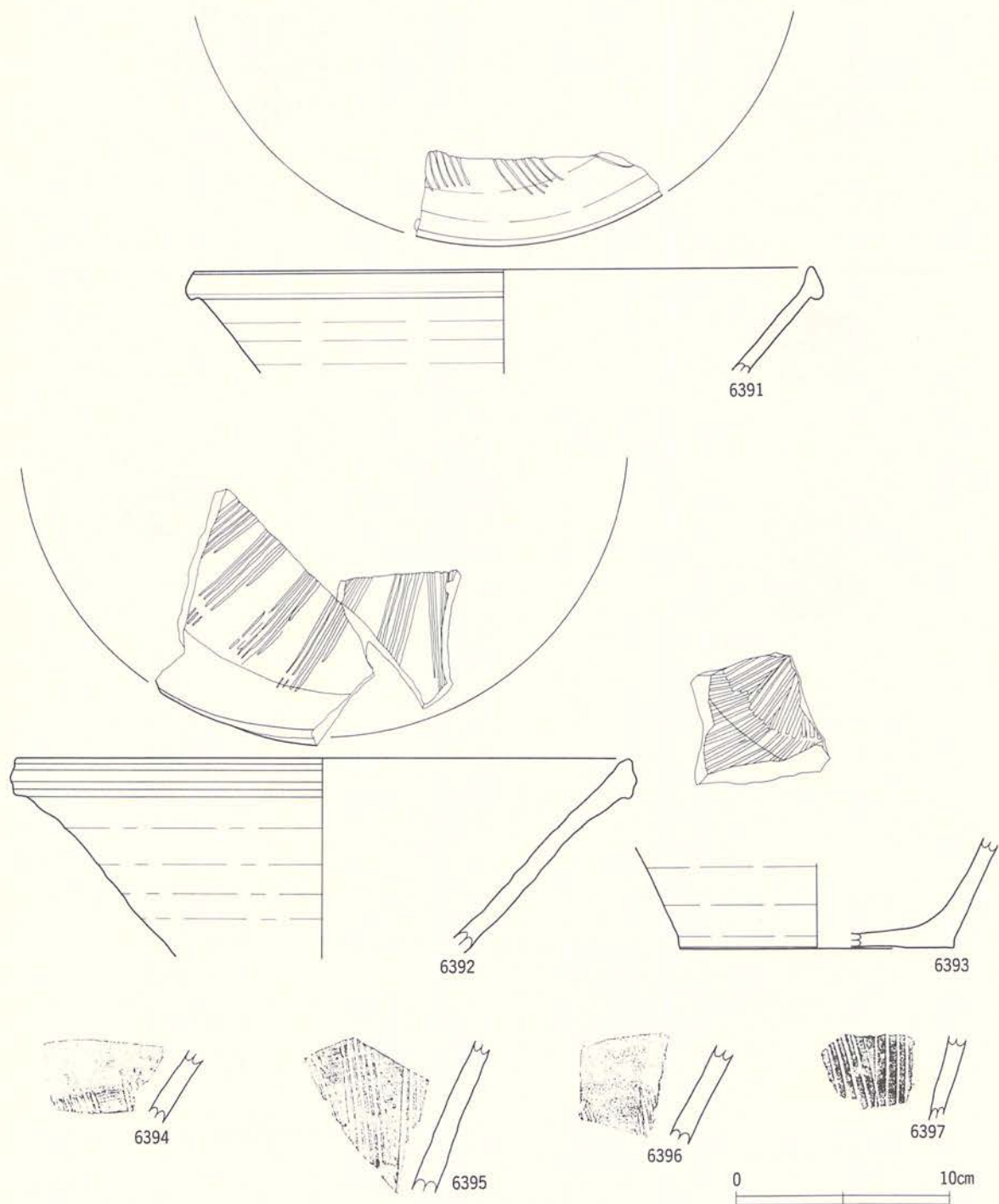
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6371	陶器皿	13SE6埋土中位	21.6	8.0	6.3	灰白色	灰釉	美濃	18C前半	6329と同位置から出土
6372	〃	11次調査区	—	4.4	(1.3)	浅黄色	オリブ色の釉	不明	18Cか	見込蛇目釉はぎ肥前産ではない
6373	〃	II E4a盛土	—	4.5	(1.9)	灰白色	染付、灰釉	大堀相馬?	18~19C	陶胎染付
6374	〃	III E1j表土	13.6	—	(2.4)	灰色	灰薬釉	大堀相馬	19C	
6375	陶器鉢	II E4f表土	—	—	(3.2)	赤褐色	刷毛目、鉄釉	肥前	18C	内面白化粧による刷毛目
6376	〃	II E7j黒褐色土	—	11.0	(3.3)	赤褐色	暗青色の釉	東北産	19C	内面無釉
6377	〃	II E9h表土	—	—	(4.2)	暗赤褐色	褐釉	〃	〃	
6378	陶器香炉	II E区表土	—	8.6	(1.6)	淡黄色	鉄釉	美濃	18C前半	内面にも鉄釉を施している
6379	陶器土瓶	II E7h攪乱坑	—	7.4	(2.1)	灰白色	灰釉	大堀相馬	19C中葉	外面下半に漆?を塗っている
6380	陶器土瓶蓋	11次調査区	—	5.2	2.6	灰白色	銅緑釉	〃	〃	
6381	〃	II E7j攪乱坑	—	—	(1.2)	灰白色	白い釉、上絵	〃	〃	鉄釉と銅緑釉による絵付
6382	陶器甕	II E7h攪乱坑	—	5.8	(3.6)	暗灰色	鉄釉、白い釉	東北産	19C	鉄釉に白い釉(薬灰釉)流しがけ
6383	陶器灯明皿	II E8j水穴	—	3.4	(1.3)	灰色	薬灰釉	大堀相馬	19C	
6384	陶器仏飯器	II E7h攪乱坑	6.4	—	(2.8)	灰白色	灰釉	〃	18~19C	

第231図 II E区の近世陶磁器(6)



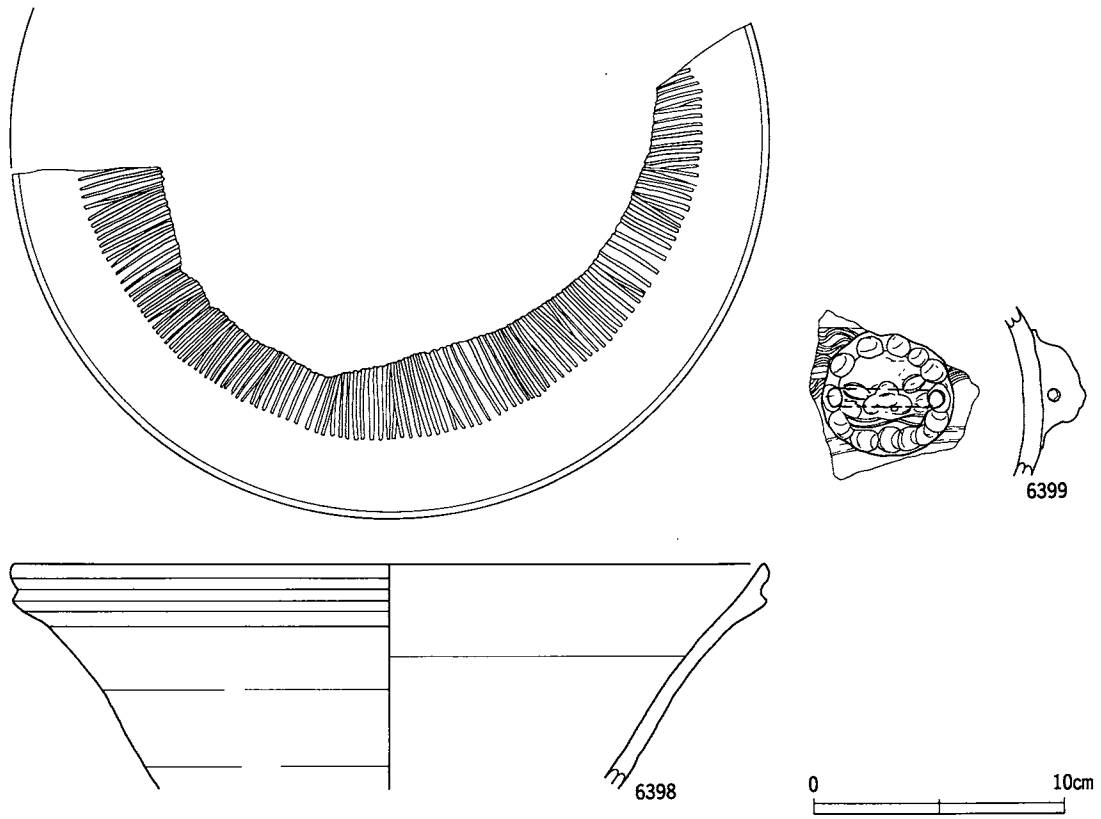
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6385	陶器楕鉢	13SK38埋土	-	12.2	(4.9)	灰白色	鉄釉	瀬戸	18C	内底面磨耗著しい
6386	〃	13SK54埋土	-	-	(8.0)	灰白色	〃	〃	〃	
6387	〃	11SD1埋土上位	-	-	9.0	にぶい 橙色	〃	不明	不明	6388と同一個体
6388	〃	13P447埋土	-	-	(3.9)	〃	〃	〃	〃	6387と同一個体
6389	〃	II E8i暗褐色土		-	(4.4)	灰白色	〃	瀬戸	18C	
6390	〃	11次調査区	32.8	-	(9.7)	黒褐色	〃	東北産?	18~19C	

第232図 II E区の近世陶磁器(7)



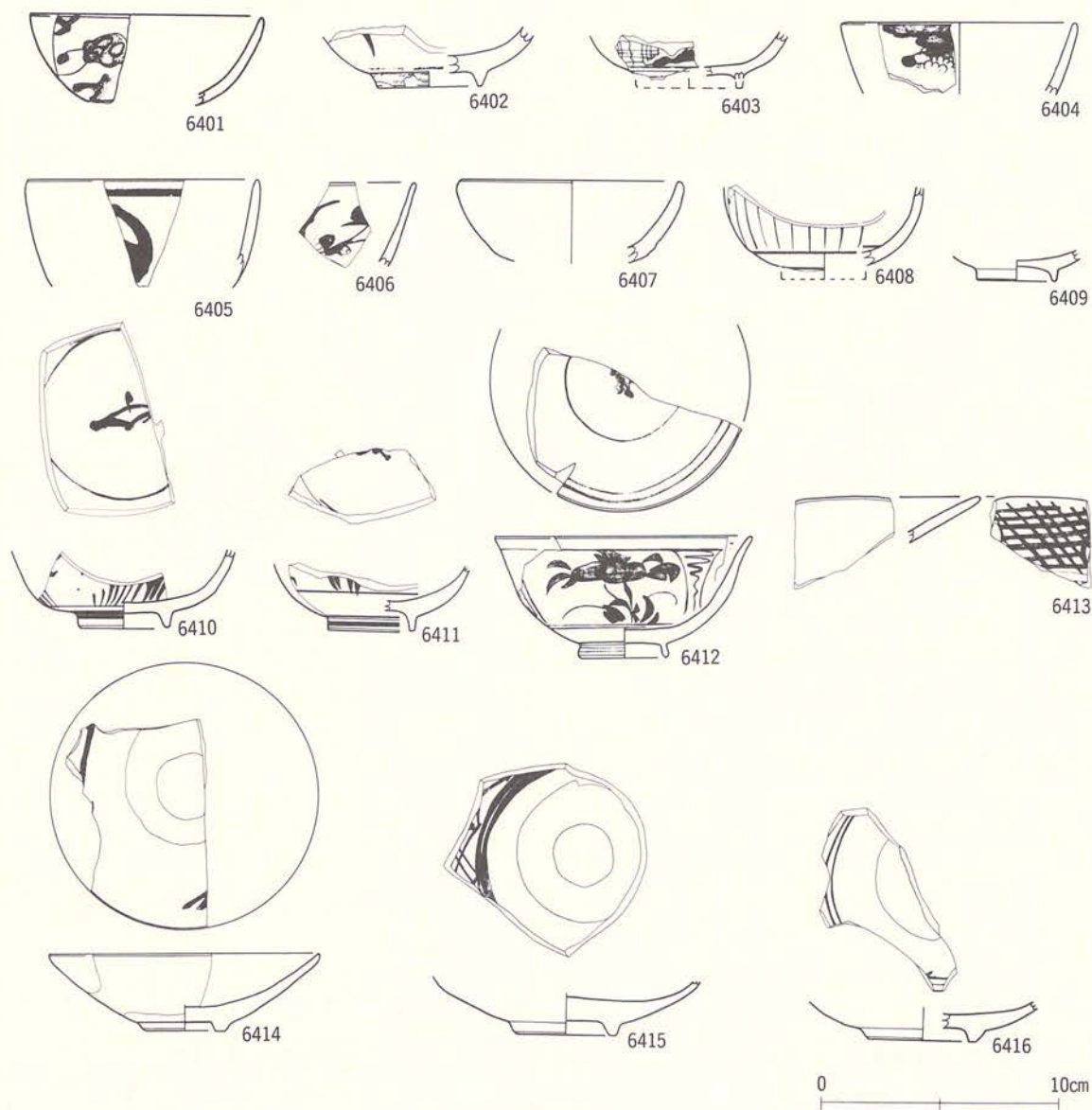
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6391	陶器播鉢	11次調査区	29.2	—	(5.0)	黒褐色	鉄釉	東北地方	18~19C	
6392	〃	13次調査区	2.9	—	(9.4)	暗赤褐色	〃	〃	〃	6393と同一個体か
6393	〃	13次調査区	—	12.8	(5.0)	〃	〃	〃	〃	底面に回転糸切痕
6394	〃	13P447埋土	—	—	(3.0)	褐灰色	〃	〃	〃	
6395	〃	13次調査区	—	—	(6.7)	暗赤褐色	〃	〃	〃	6393、6394と同一個体か
6396	〃	13次調査区	—	—	(4.3)	黒褐色	〃	〃	〃	
6397	〃	13SE5埋土	—	—	(3.5)	橙色	〃	〃	〃	

第233図 II E区の近世陶磁器(8)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6398	陶器 罎鉢	13次調査区	30.4	—	(9.0)	黒褐色	鉄釉	東北地方	18~19C	
6399	瓦器 火鉢	IIIE0h暗褐色土	—	—	(7.4)	におい黄橙色	なし	不明	近世か	胎土に海綿状骨針混じる

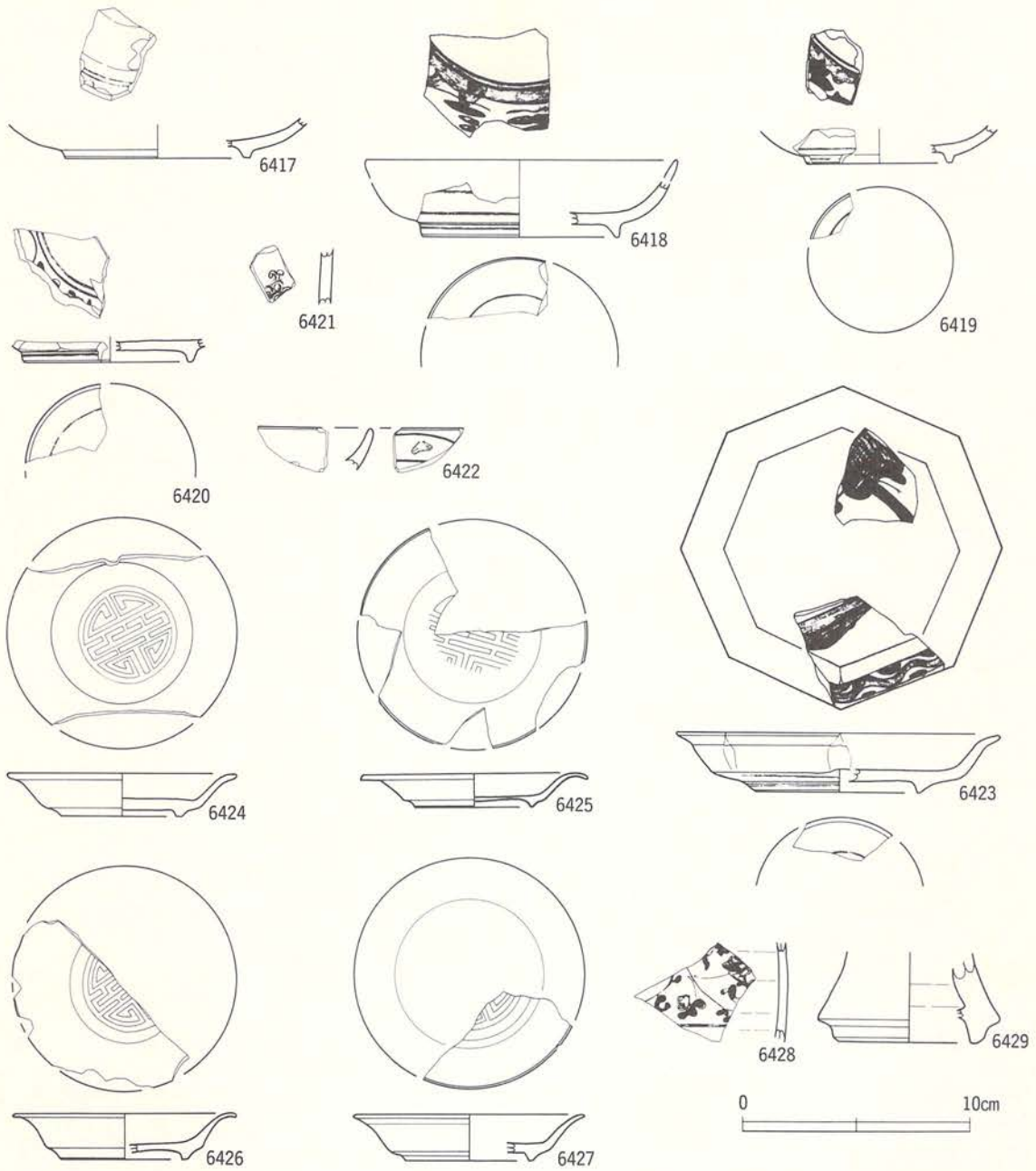
第234図 II E区の近世陶磁器(9)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6401	磁器碗	IIIF1d黒褐色土	10.0	—	(3.9)	白色、黒い粒入る	染付	漳州窯系	16C末~17C初	
6402	〃	IIF区	—	(4.4)	(2.5)	白色	染付	肥前	1690~1780	
6403	〃	IIF区表採	—	(4.4)	(2.1)	〃	〃	〃	〃	
6404	〃	13SB7・H埋土上位	10.0	—	(3.0)	〃	〃	〃	〃	
6405	〃	IIF区	9.8	—	(4.6)	〃	〃	〃	〃	
6406	〃	IIF区	—	—	(3.6)	〃	〃	〃	〃	
6407	〃	13SD6埋土	9.4	—	(3.5)	〃	透明釉	〃	〃	
6408	〃	IIF区	—	—	(3.9)	〃	染付	〃	18C後~19C前	
6409	〃	13SK22埋土	—	3.4	(0.9)	〃	透明釉	〃	1780~1860?	
6410	〃	IIF区	—	4.0	(3.2)	ガラス質黒い粒入る	染付	平清水	19C中葉	
6411	〃	IIIF2b	—	3.8	(2.8)	白色、黒い粒入る	〃	〃	〃	
6412	〃	IIF7j黒褐色土	10.8	3.8	5.1	ガラス質黒い粒入る	〃	〃	〃	
6413	磁器皿	13P459埋土(13SB9)	—	—	(2.0)	淡黄色	透明釉、上絵	中国	16C末~17C初	上絵は赤と緑、呉須赤絵
6414	〃	IIIF区	11.4	3.5	3.3	白色	染付	肥前	1690~1780	
6415	〃	IIF9d表土	—	4.2	(2.3)	〃	〃	〃	〃	
6416	〃	13SK13埋土下位	—	4.6	(1.4)	〃	〃	〃	〃	

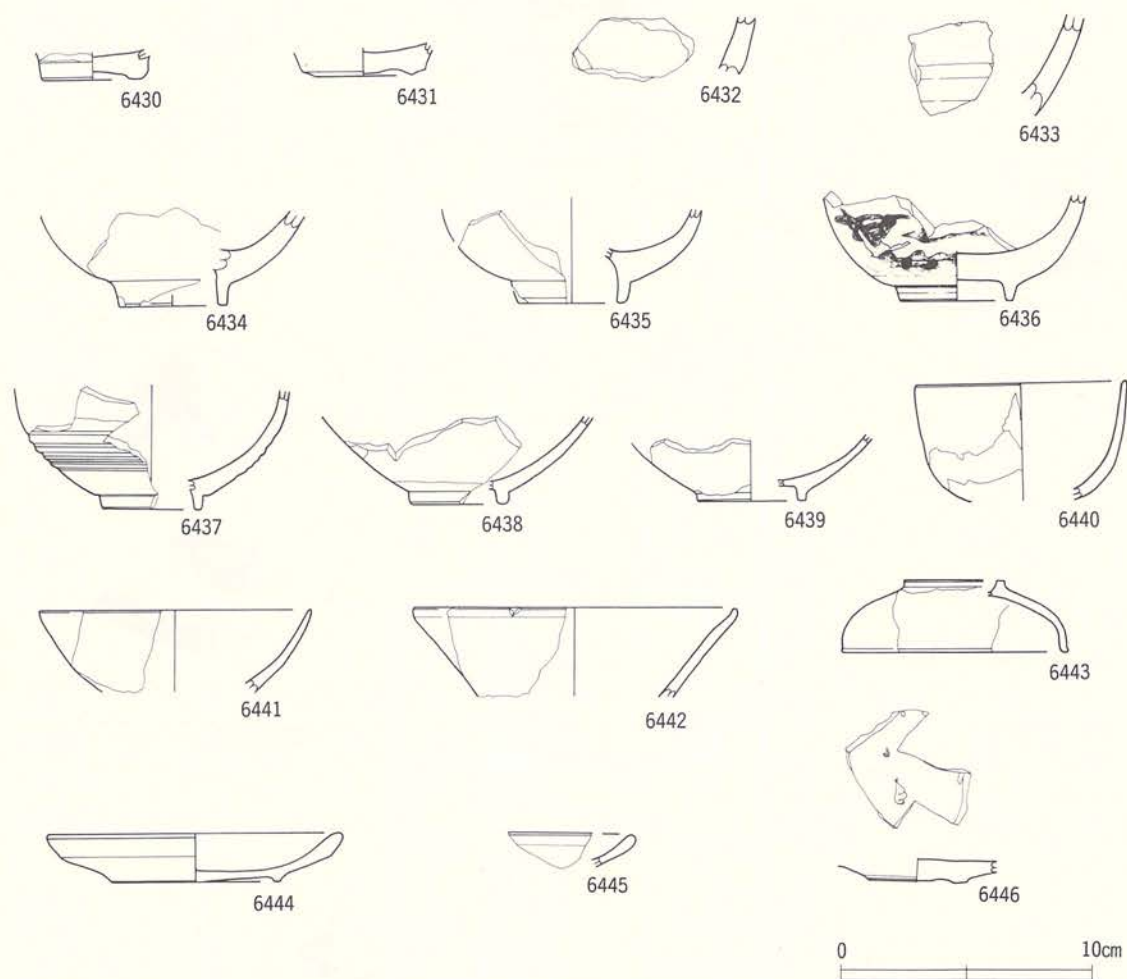
第235図 II、IIIF区の近世陶磁器(1)





番号	器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6417	磁器皿	IIIF0d	—	(8.3)	(1.8)	白色	染付	肥前	1690~1780	
6418	〃	13SK13埋土上部	—	8.8	(3.5)	〃	〃	〃	〃	
6419	〃	13P438埋土	—	(6.6)	(1.6)	〃	〃	〃	〃	
6420	〃	IIF6b	—	7.5	(1.1)	〃	〃	〃	〃	
6421	〃	IIF区表採	—	—	—	〃	〃	〃	〃	見込みに手描き五弁花
6422	〃	IIF2c表土	—	—	(1.9)	〃	〃	〃	〃	
6423	〃	IIF9d表土	14.3	(7.3)	2.6	灰白色	〃			胎土陶器質
6424	〃	IIF7j黒褐色土	10.2	(5.4)	1.9	白色ガラス質	透明釉	不明	19C	壽文皿
6425	〃	IIF7a黒褐色土	10.1	(5.3)	1.5	〃	〃	〃	〃	
6426	〃	IIIF2b耕作土	9.9	(5.7)	2.0	〃	〃	〃	〃	
6427	〃	13SD17埋土	10.2	(6.6)	2.1	〃	〃	〃	〃	
6428	磁器瓶	IIF区	—	—	(4.2)	〃	染付	肥前	1690~1780	内面無釉
6429	磁器花生	IIF区表土	—	6.3	(4.0)	白色	青磁	〃	〃	〃

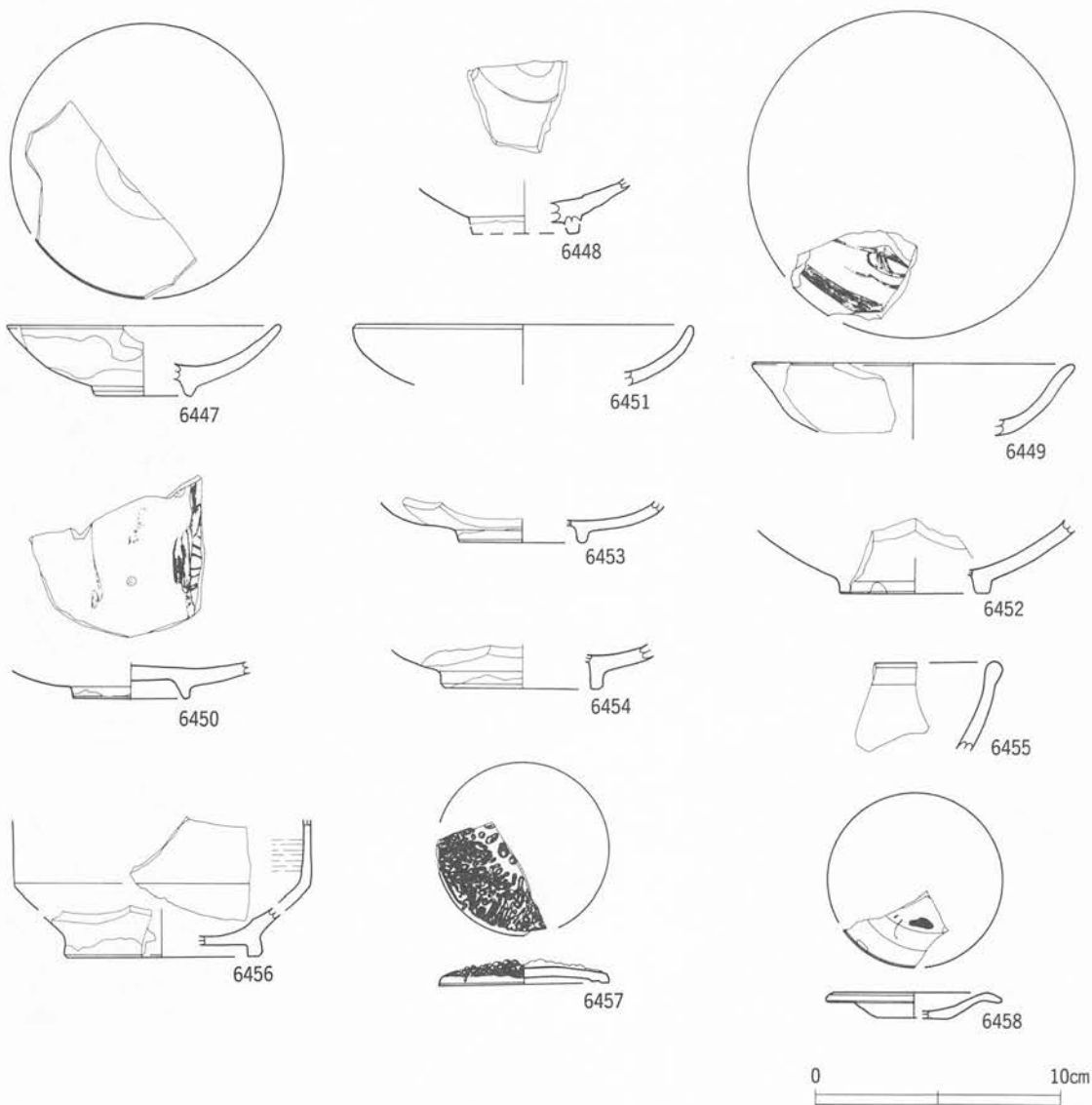
第236図 II、IIIF区の近世陶磁器(2)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6430	陶器碗	II F2c表土	—	4.0	(1.1)	淡黄色	鉄釉、鉄化粧	美濃	大窯III期	高台部鉄化粧
6431	〃	13SD2(II F9d)埋土	—	3.8	(1.1)	灰白色	鉄釉	〃	登窯I期	天目茶碗
6432	陶器甕	IIIF4b黒褐色土	—	—	(2.1)	淡黄色	〃	瀬戸	18C	いわゆる「銭甕」
6433	〃	IIIF区	—	—	(3.9)	〃	〃	〃	〃	6432と同一個体か
6434	陶器碗	13SD3(II F8d~6d)埋土	—	4.3	(4.0)	灰白色	透明釉	肥前	18C前半	呉器手碗
6435	〃	II F区うまや跡	—	4.4	(4.7)	〃	〃	〃	〃	〃
6436	〃	13SD3(IIIF0d)埋土	—	4.6	(4.9)	灰色	染付、透明釉	〃	〃	陶胎染付碗
6437	〃	13SD6(IIIF1a)埋土	—	4.0	(5.0)	灰白色	灰釉、鉄釉	大塚相馬	18C	外面上半灰釉、下半鉄釉
6438	〃	13P285埋土	—	4.0	(3.5)	灰色	藁灰釉	〃	19C	II F7黒褐色土からも出土
6439	〃	13次調査区	—	4.4	(2.4)	〃	〃	〃	〃	
6440	〃	II F8d表土	8.5	—	(4.6)	〃	〃	〃	〃	
6441	〃	13SK11埋土	10.9	—	(3.3)	〃	〃	〃	〃	
6442	〃	13SK13埋土	13.0	—	(3.5)	〃	藁灰釉、銅緑釉	〃	〃	外面銅緑釉、内面藁灰釉
6443	陶器蓋	13SK11埋土	3.8	8.6	2.9	〃	藁灰釉	〃	〃	
6444	陶器皿	IIIF1d攪乱部	11.8	6.8	2.0	灰白色	長石釉	美濃	登窯I~II期	
6445	〃	II F7a茶褐色土	—	—	(1.4)	淡黄色	〃	〃	〃	
6446	〃	13次調査区	—	4.0	(1.0)	橙~灰白色	灰釉	唐津	17C初	砂目、底面に初殻?

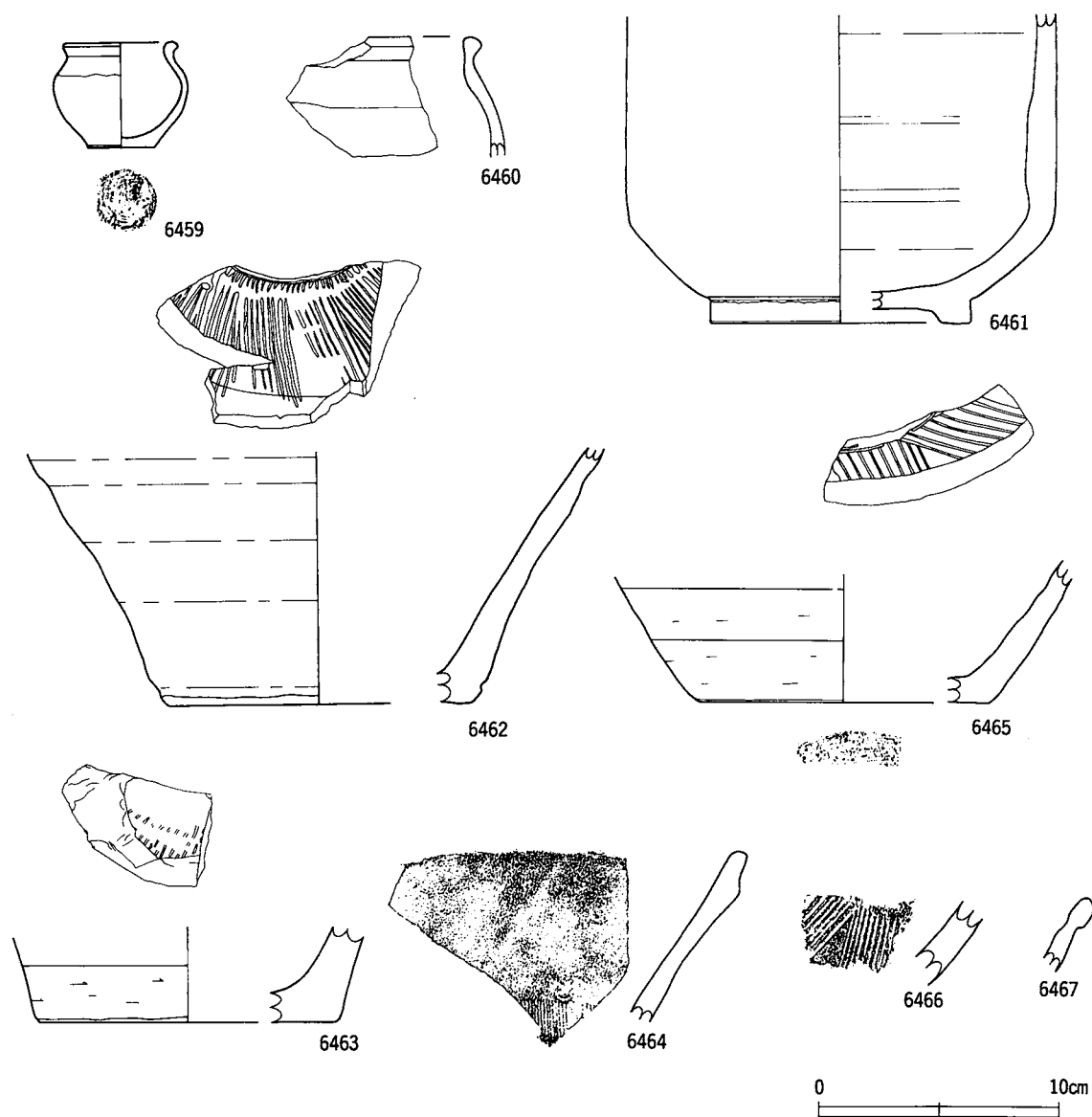
第237図 II、IIIF区の近世陶磁器(3)





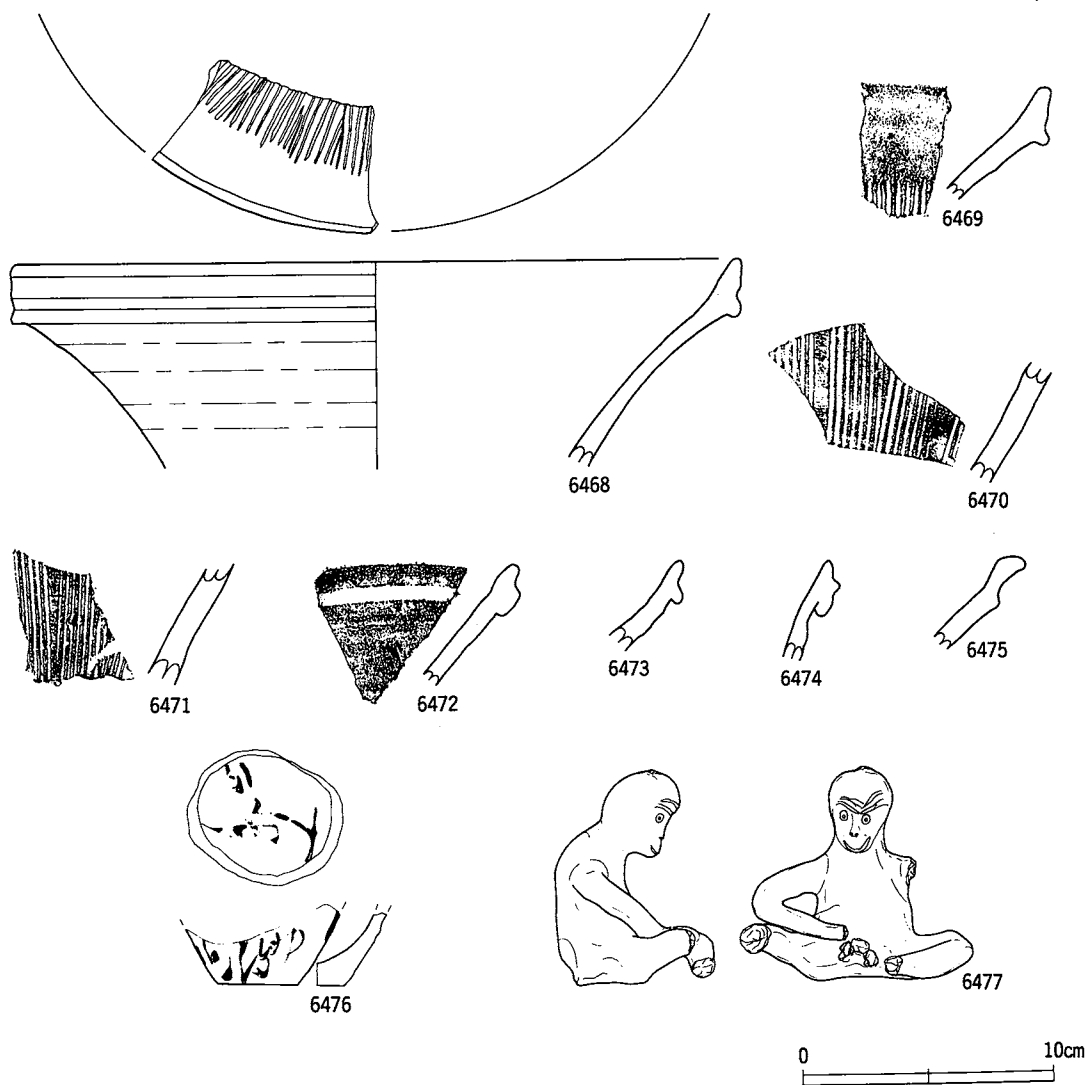
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6447	陶器皿	13SB7柱穴H	11.2	4.0	2.9	灰白色	銅緑釉、透明釉	肥前	1690~1780	
6448	〃	13SD3 (IIF6b)埋土	—	(4.4)	(2.9)	〃	〃	〃	〃	
6449	〃	13SD5埋土	13.2	—	(3.0)	〃	染付、透明釉	瀬戸、美濃	18C末	陶胎染付皿
6450	〃	IIF8d表土	—	4.8	(1.5)	淡黄色	染付、灰釉	大堀相馬	18C~19C	見込みに目跡あり
6451	〃	IIF区	14.0	—	(2.5)	灰白色	灰釉	〃	18C	
6452	〃	13SK13埋土上位	—	6.2	(3.1)	灰色	透明釉、藁灰釉	〃	18C~19C	
6453	〃	13SD1埋土下位 (III F3b)	—	5.4	(1.7)	〃	藁灰釉	〃	19C	III F2b表土からも出土
6454	〃	13SD1埋土下位 (III F3b)	—	6.7	(1.9)	灰色	〃	〃	〃	
6455	陶器鉢	13SK13埋土上位	—	—	(3.7)	〃	〃	〃	〃	
6456	陶器瓶	13SD8 (IIF7a)	—	(8.1)	(6.1)	〃	灰釉	〃	18C~19C	内面無釉
6457	陶器土瓶蓋	IIF5d表土	—	6.8	(1.0)	〃	鮫肌釉	〃	19C後半	
6458	〃	13SD1埋土下位 (III F3b)	7.2	(3.1)	1.1	〃	鉄絵、透明釉	〃	19C中葉	

第238図 II、III F区の近世陶磁器(4)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6459	陶器甕	IIIF1b盛土	4.8	2.8	4.4	暗灰色	鉄釉、空色の釉	東北産	19C	鉄釉に空色の釉(葉灰釉)流しがけ
6460	〃	IIIF2b表土	—	—	(5.0)	黒褐色	〃	〃	〃	〃
6461	陶器徳利?	IIF7a表土	—	10.9	(12.8)	赤褐色	鉄釉	〃	〃	内面無釉、鉄釉の発色悪い
6462	陶器播鉢	IIF8a表土	—	12.6	(10.6)	赤褐色	無釉	〃	18C~19C	
6463	〃	13SD3埋土(IIF0d)	—	12.4	(4.0)	赤褐色	〃	〃	〃	
6464	〃	IIF9d表土	—	—	(7.1)	赤褐色	鉄釉	〃	〃	
6465	〃	IIF8e黒褐色土	—	12.0	(5.4)	淡黄色	鉄釉	瀬戸	18C	
6466	〃	IIF8a黒褐色土	—	—	(3.5)	〃	〃	〃	〃	
6467	〃	IIF区出土	—	—	(3.0)	〃	〃	〃	18C前半	

第239図 II、IIIF区の近世陶磁器(5)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	その他
			口径	底径	高さ					
6468	陶器擂鉢	II F区	29.2	—	(8.2)	赤褐色	鉄釉	東北産	18~19C	
6469	〃	13SD2(IIIF4d)埋土	—	—	(4.5)	〃	〃	〃	〃	6468と同一個体
6470	〃	IIIF0d黒褐色土	—	—	(4.6)	灰色	〃	東北産	18~19C	
6471	〃	II F9d黒褐色土	—	—	(4.5)	黒褐~赤褐色	無釉	〃	〃	
6472	〃	13SD2(IIIF4d)埋土	—	—	(4.8)	暗灰色	鉄釉	〃	〃	
6473	〃	II F6b	—	—	(3.6)	暗灰色	〃	〃	〃	
6474	〃	II F区	—	—	(4.0)	暗赤褐色	〃	〃	〃	
6475	〃	IIIF4b黒褐色土	—	—	(3.7)	褐色	〃	〃	〃	
6476	素焼きの壺	IIIF2b黒褐色土	—	3.2	(3.2)	橙色	内外面に墨書	不明	不明	胎土に海綿状骨針が混入
6477	素焼きの像	13SD5埋土	—	—	8.6	赤褐色		不明	不明	猿をかたどっている

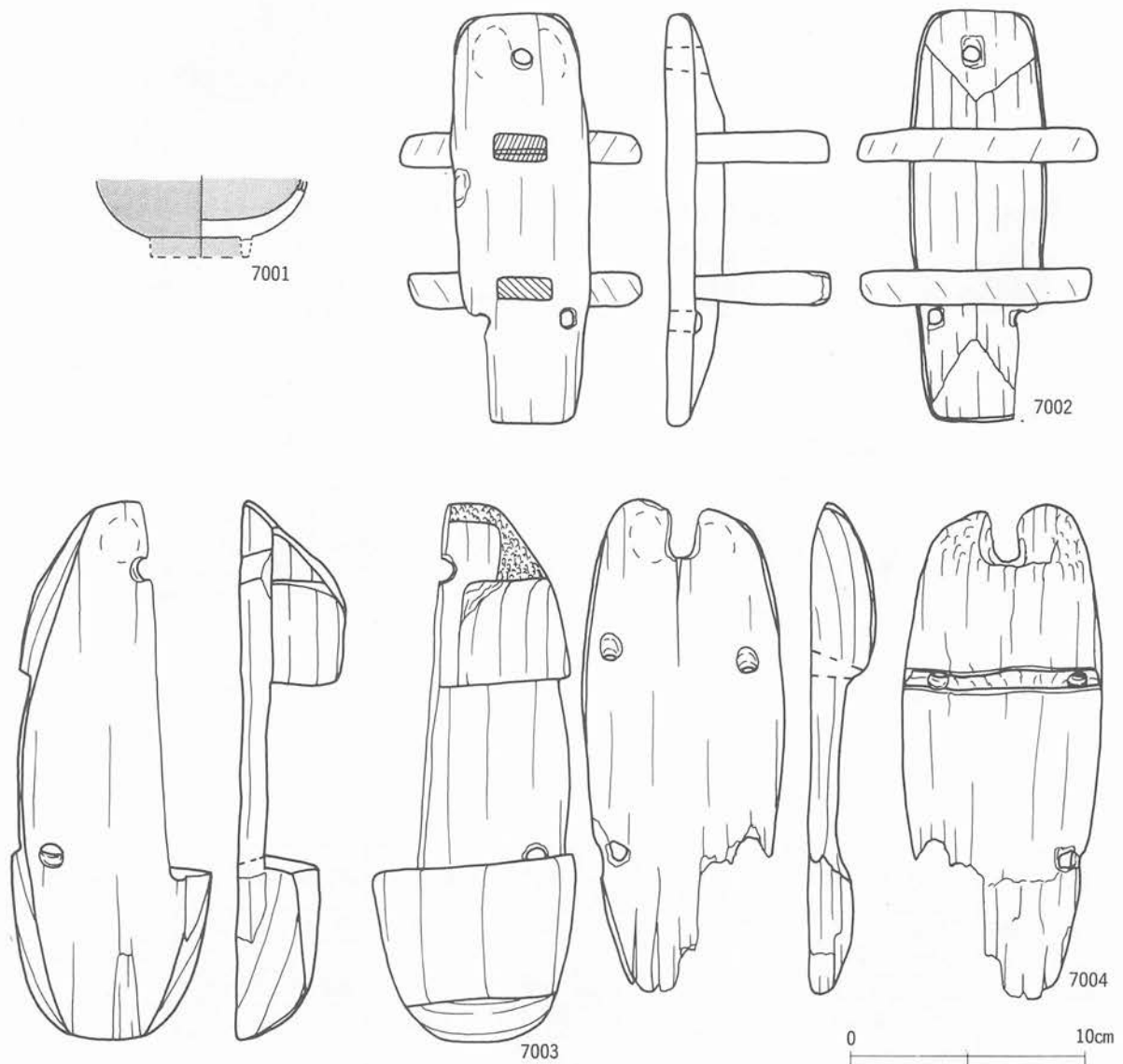
第240図 II、IIIF区の近世陶磁器(6)

(2)木製品 (第 241～249 図 写真図版 151～157)

34 点を図示した。多くは井戸からの出土であるが、II F 区の厩のくぼみからも多く出土している。

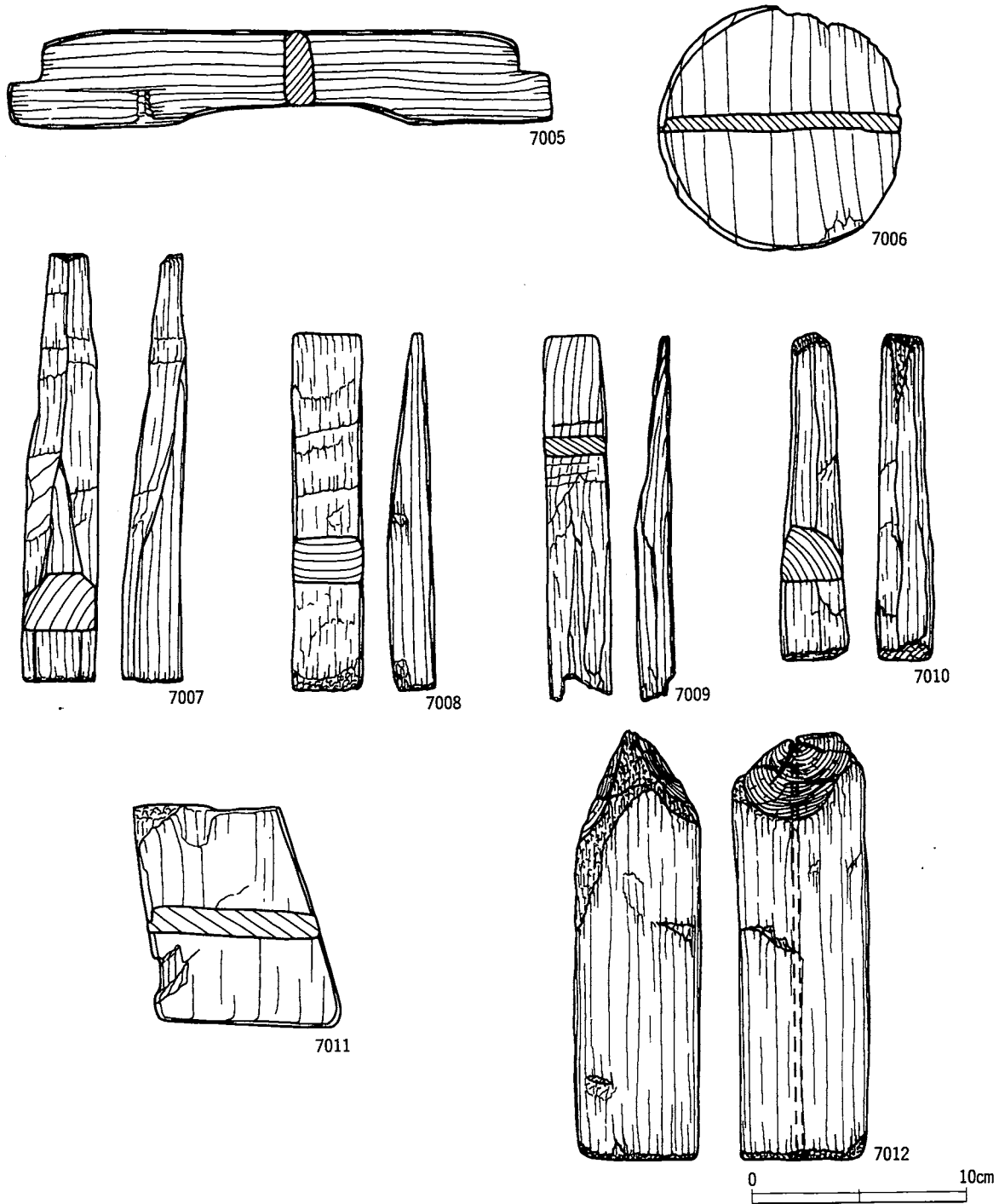
漆器は 7001、7024、7025、7026、7027 がある。7025～7027 は蓋である。当地域では漆器の編年が完成していないので、これらの漆器の詳細な年代を今示すことはできない。これは漆器に限らず他の木製品についてもいえる。

下駄は 7002、7003、7004、7028、7029、7030 の 6 点がある。7002 のみが差歯下駄で、他は連歯下駄である。6 点中、4 点の樹種がクリである。7004 は鼻緒の穴の他にも穴がある。



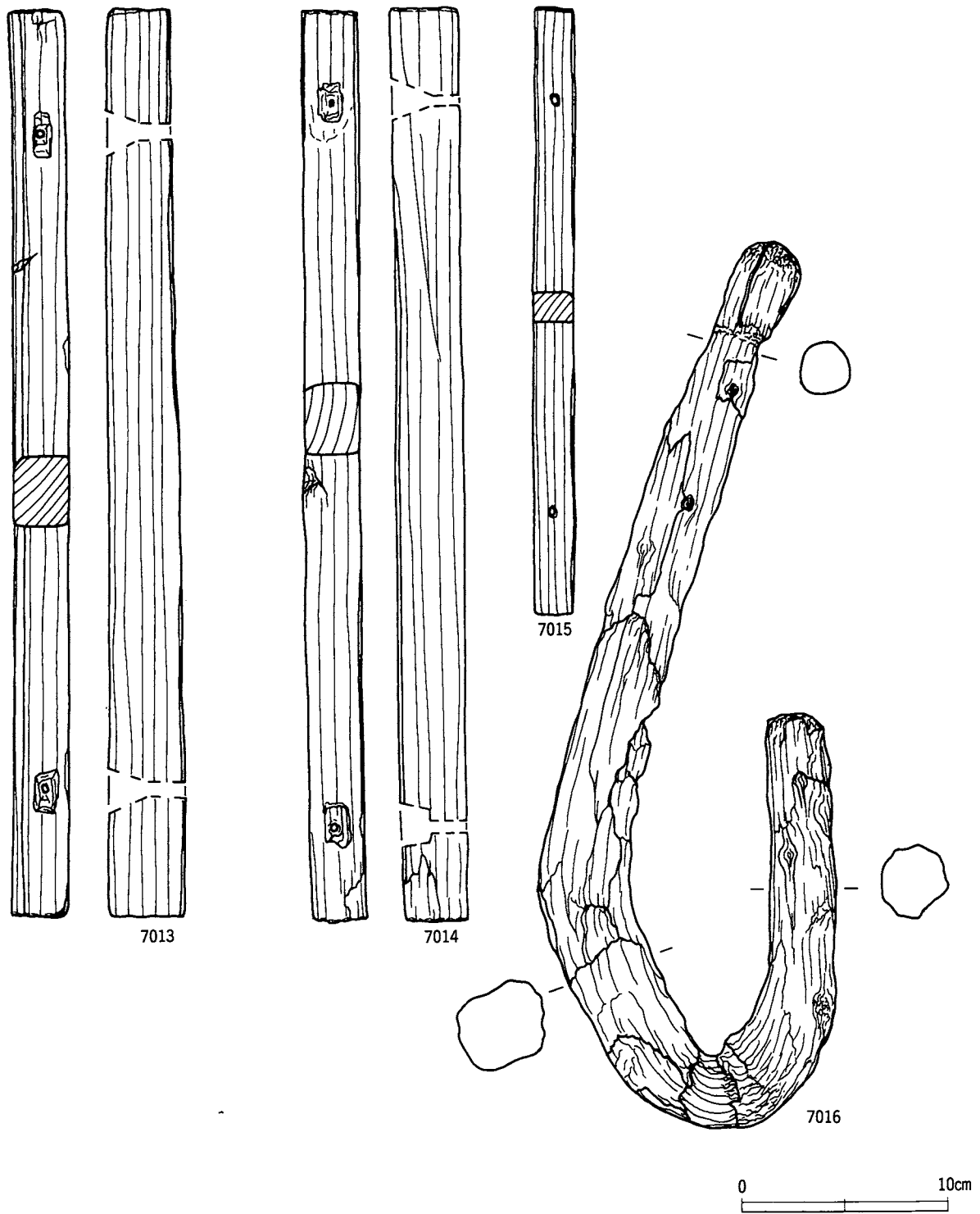
番号	器種	出土位置	樹種	その他	樹種同定番号
7001	漆器碗	15SE16埋土	ブナ属の一種	内外面黒漆	15-37
7002	下駄	15SE23埋土	コナラ属	台、歯ともに樹種はコナラ属コナラ亜属	15-28
7003	〃	15SE16埋土	クリ		15-33
7004	〃	15SE16埋土	モクレン属の一種		15-32

第241図 近世の木製品(1)



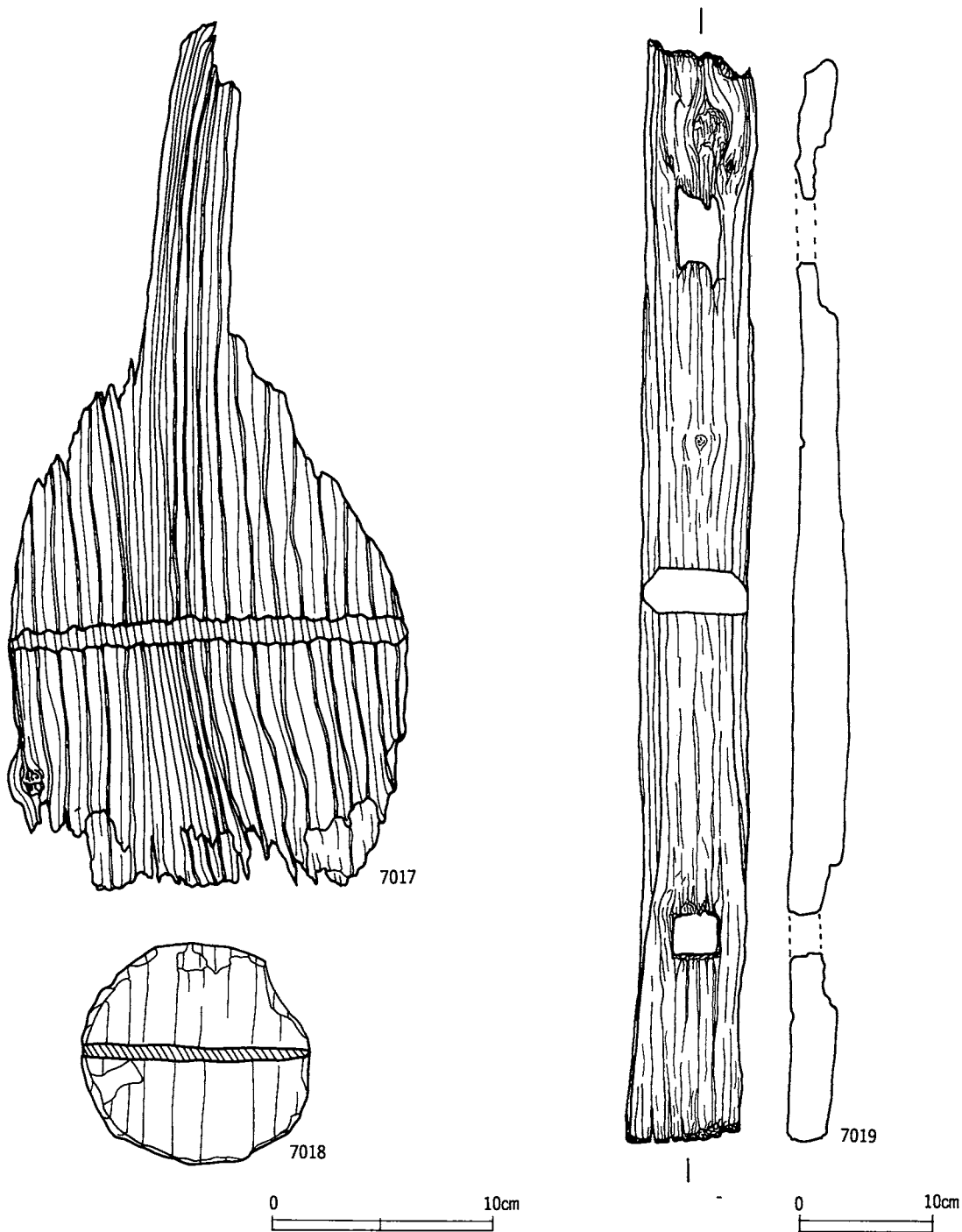
番号	器種	出土位置	樹種	その他	樹種同定番号
7005	桶把手	15SE8埋土	スギ		15-14
7006	桶底板?	〃	ヒノキ属の一種	桶底かどうかは疑問	15-23
7007	くさび	〃	クリ		15-16
7008	〃	〃	スギ		15-17
7009	〃	〃	ヒノキ属の一種		15-18
7010	〃	〃	クリ		15-19
7011	不明	〃	ケヤキ		15-24
7012	〃	〃	モクレン属の一種	長軸方向に穿孔がある	15-15

第242図 近世の木製品(2)



番号	器種	出土位置	樹種	その他	樹種同定番号
7013	不明	15SE8埋土	スギ	14と同じ形状	15-20
7014	〃	〃	〃		15-21
7015	〃	〃	〃	釘穴あり	15-22
7016	鈎状製品	〃	マツ属	上部にくびれあり	15-13

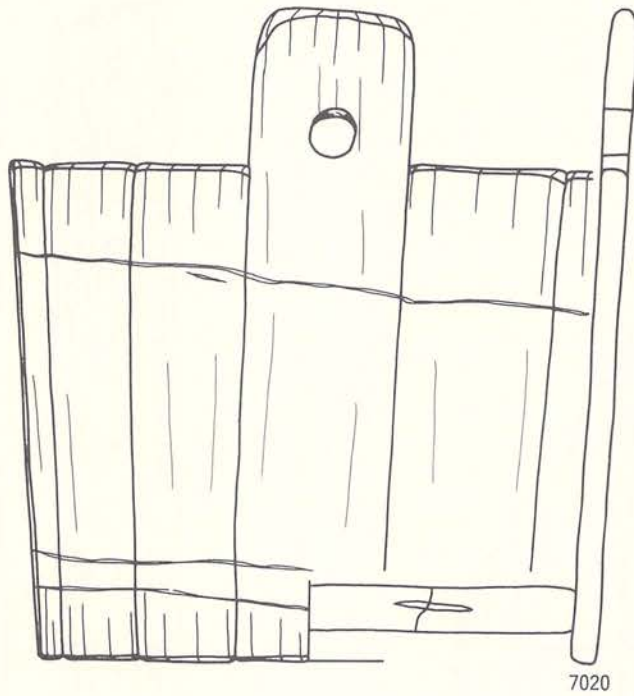
第243図 近世の木製品(3)



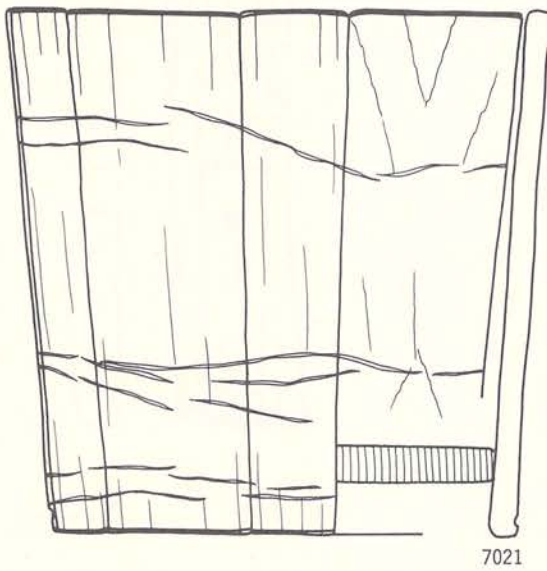
番号	器種	出土位置	樹種	その他	樹種同定番号
7017	へら	15SE14底面	スギ	腐食が著しい	15-30
7018	桶底板?	15SE9埋土	ヒノキ属の一種	桶底板かどうかは疑問	
7019	部材?	15SE10埋土	クリ	貫穴が2つある	15-29

第244図 近世の木製品(4)

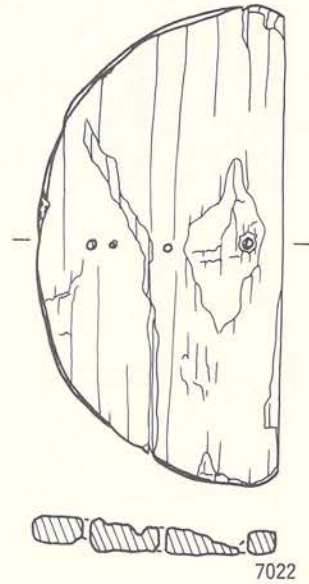




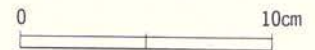
7020



7021

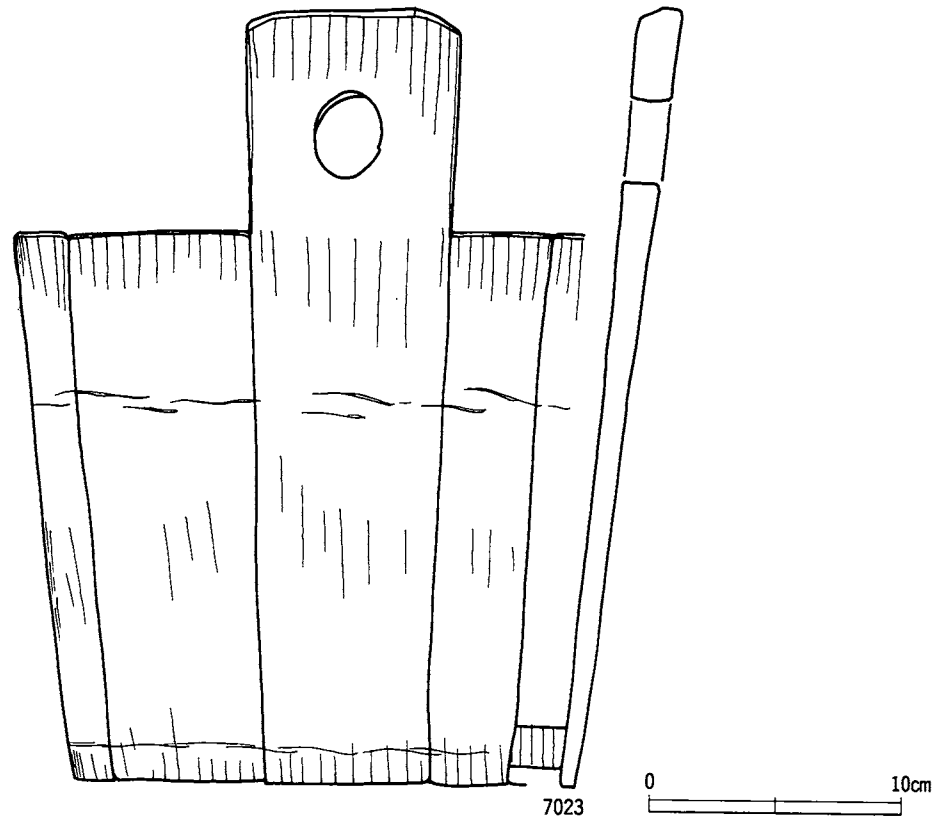


7022



番号	器種	出土位置	樹種	その他	樹種同定番号
7020	桶	15SE20底面	ヒノキ属の一種	底板に木釘あり、樹種はイネ科タケ亜科の一種	15-34
7021	〃	15SE16埋土上位	スギ	把手がない桶	15-31
7022	桶底板	15SE9埋土	ヒノキ属の一種	木釘あり、樹種はヒノキ属の一種、蓋に転用している	15-27

第245図 近世の木製品(5)



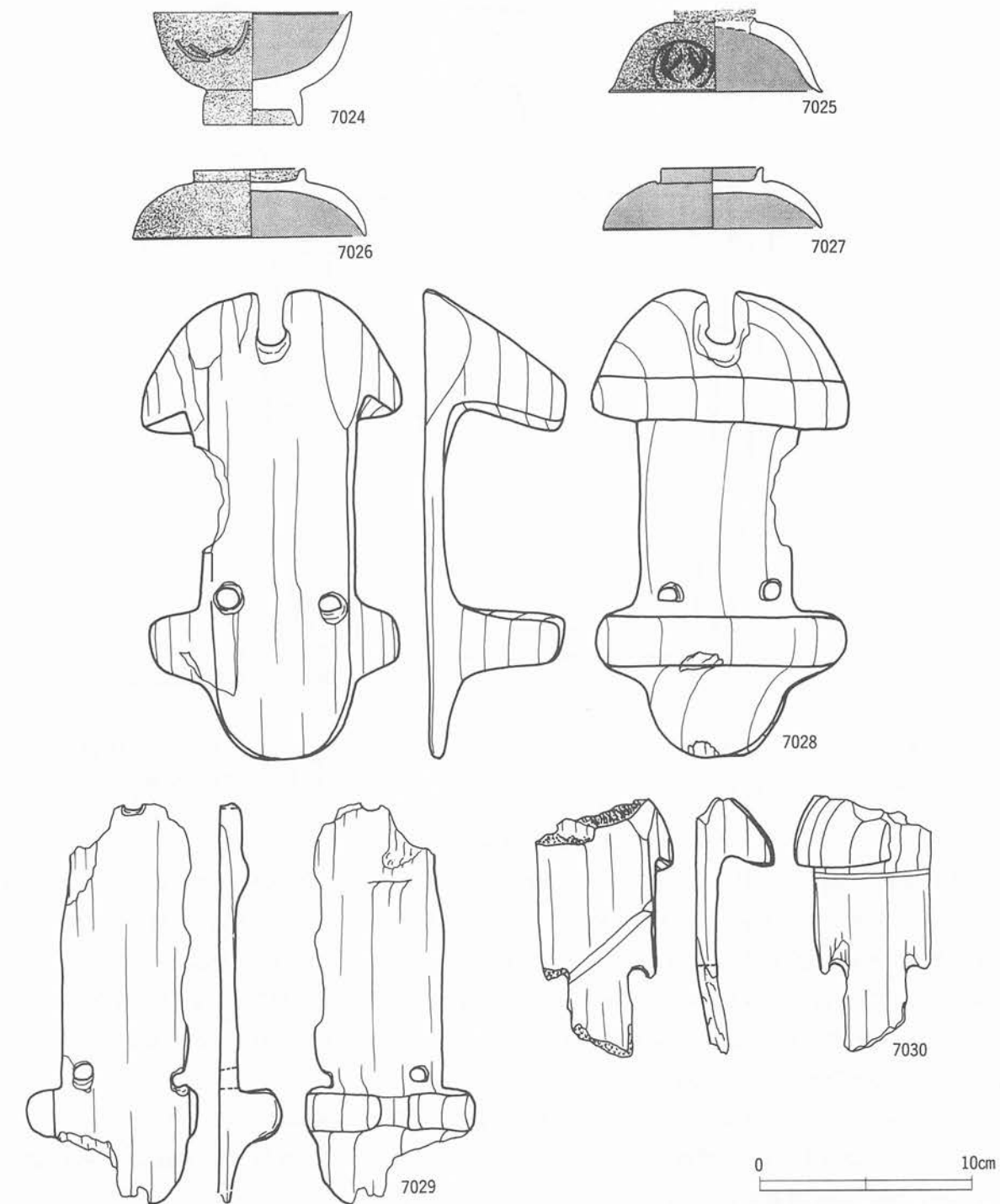
番号	器種	出土位置	樹種	その他	樹種同定番号
7023	桶	13SE3底面	スギ	ばらばらの状態で出土、竹のたがもあった	13-10

#### 第246図 近世の木製品(6)

桶は7020、7021、7023がある。桶の底板は7006、7018、7022がある。また桶の把手と思われる7005、樽の上板と思われる7032がある。これらの桶関係のものの樹種はスギまたはヒノキ属の一種がほとんどである。7020、7021、7023は井戸から出土しており釣瓶の桶の可能性が高い。これらとは図示できなかったが竹製のたがも共に出土している。7020の底板は割れたものを木釘でつないで使用している。7022は本来は桶の底板であったと推定されるが、上面に釘穴の跡がみられ、蓋(鍋の?)に転用されている。7006、7018は小型であり、桶の底板となりうるか疑問も残る。

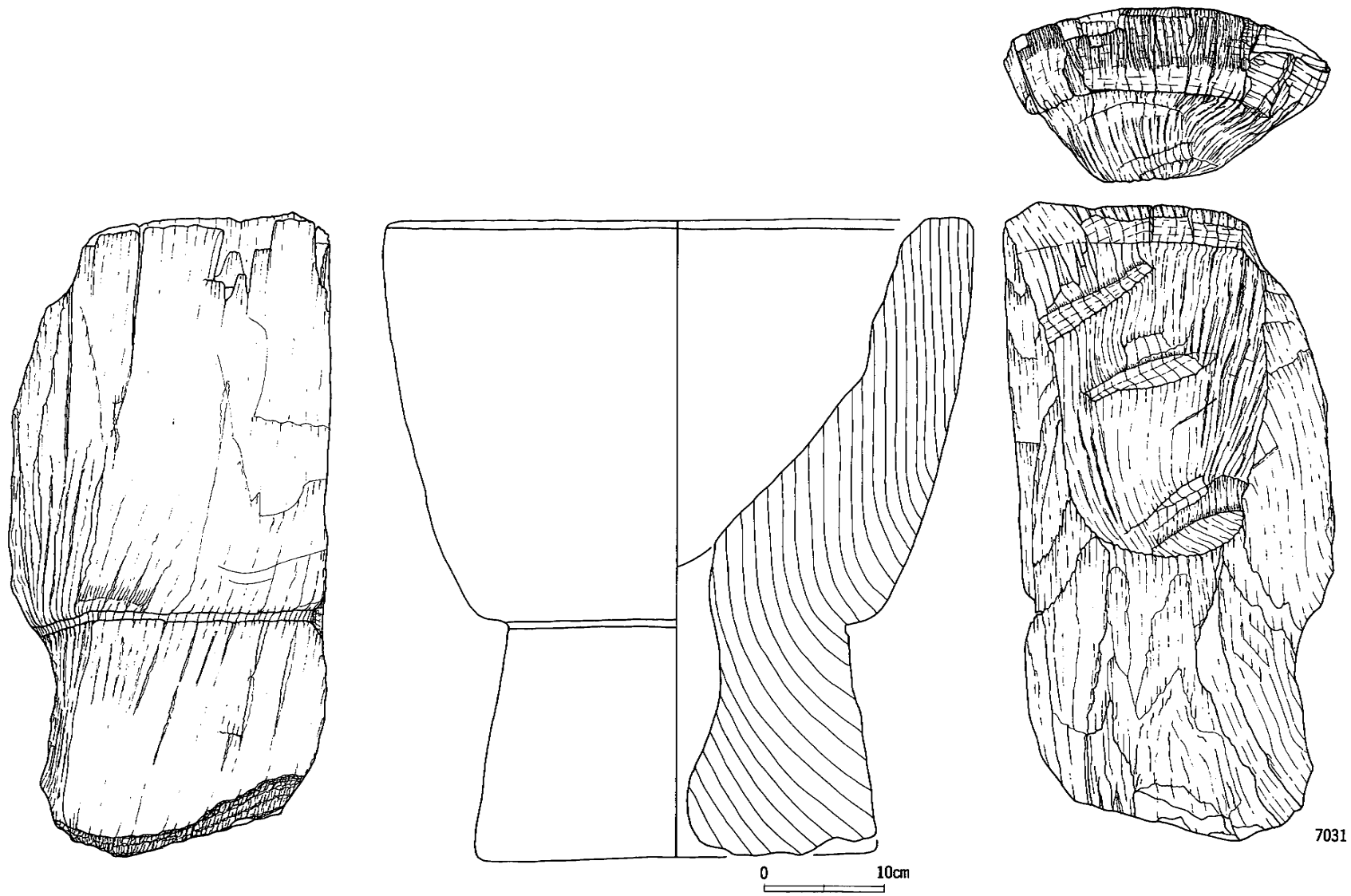
15 S E 8からはくさびが4点(7007~7010)出土している。建築物に使用されたものであろうか。またこの15 S E 8からは鈎状の7016、器種不明なもの7011~7015が出土している。7012は短い棒状のもの的一端を尖らせ、長軸方向に貫通する孔が穿たれている。用途は不明である。

7017はへら状の製品である。大振りなものである。7019は建築部材であろうか。7031は臼である。下半部にくびれがある形状で、意図的に縦方向に割られている。約1/6程の残存である。7034は小型の曲物の底板である。湾曲しているが廃棄後に曲がったのであろう。7033の製品名は不明である。



番号	器種	出土位置	樹種	その他	樹種同定番号
7024	漆器椀	IIF区うまや跡	ブナ属の一種	黒漆に赤漆で上絵、内面赤漆	13-2
7025	漆器椀蓋	〃	〃	黒漆に赤漆で上絵、内面黒漆	13-1
7026	〃	〃	〃	外面黒漆、内面赤漆	13-3
7027	〃	〃	〃	内外面赤漆	13-4
7028	下駄	〃	クリ	連齒下駄、齒はあまり磨耗していない	13-5
7029	〃	〃	〃		13-6
7030	〃	〃	〃		13-7

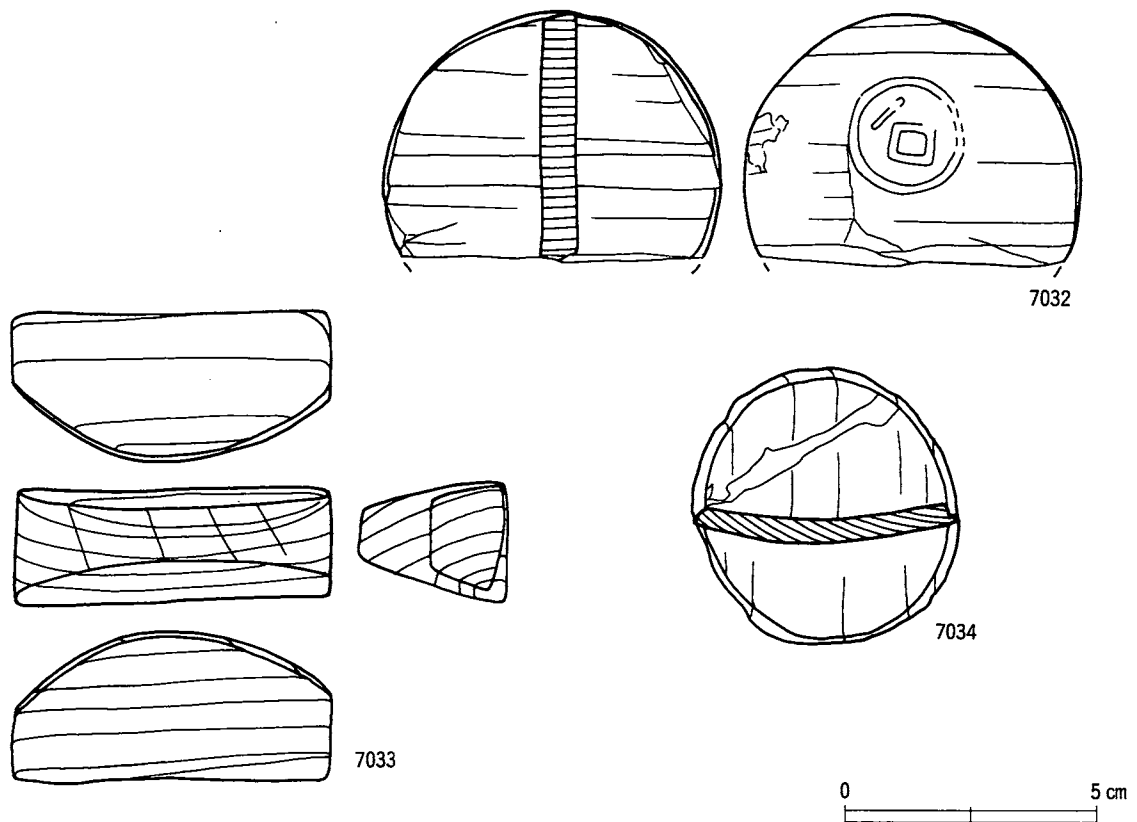
第247図 近世の木製品(7)



7031

番号	器種	出土位置	樹種	その他	樹種同定番号
7031	臼	IIF区うまや跡	ケヤキ	縦に割られている	13-12

第248図 近世の木製品(8)



番号	器種	出土位置	樹種	その他	樹種同定番号
7032	樽上板	IIF区うまや跡	スギ	焼き印を押している	13-8
7033	不明	〃	〃		13-15
7034	曲物底板	〃	アスナロ類似種	断面の湾曲は後のもの	13-9

第249図 近世の木製品(9)

(3) 金属製品 (第 250~252 図 写真図版 158、159)

29 点図示した。銅製品には煙管、かんざし、柄鏡、小柄?、銅板、何であるか不明のものがある。

煙管は様々の形態のものがある。7121 はその形態から 17 世紀前半のものと思われる。出土した煙管の中では最も古手である。7102 は雁首と吸口が一体になった煙管である。18 世紀後半頃のものであろうか。

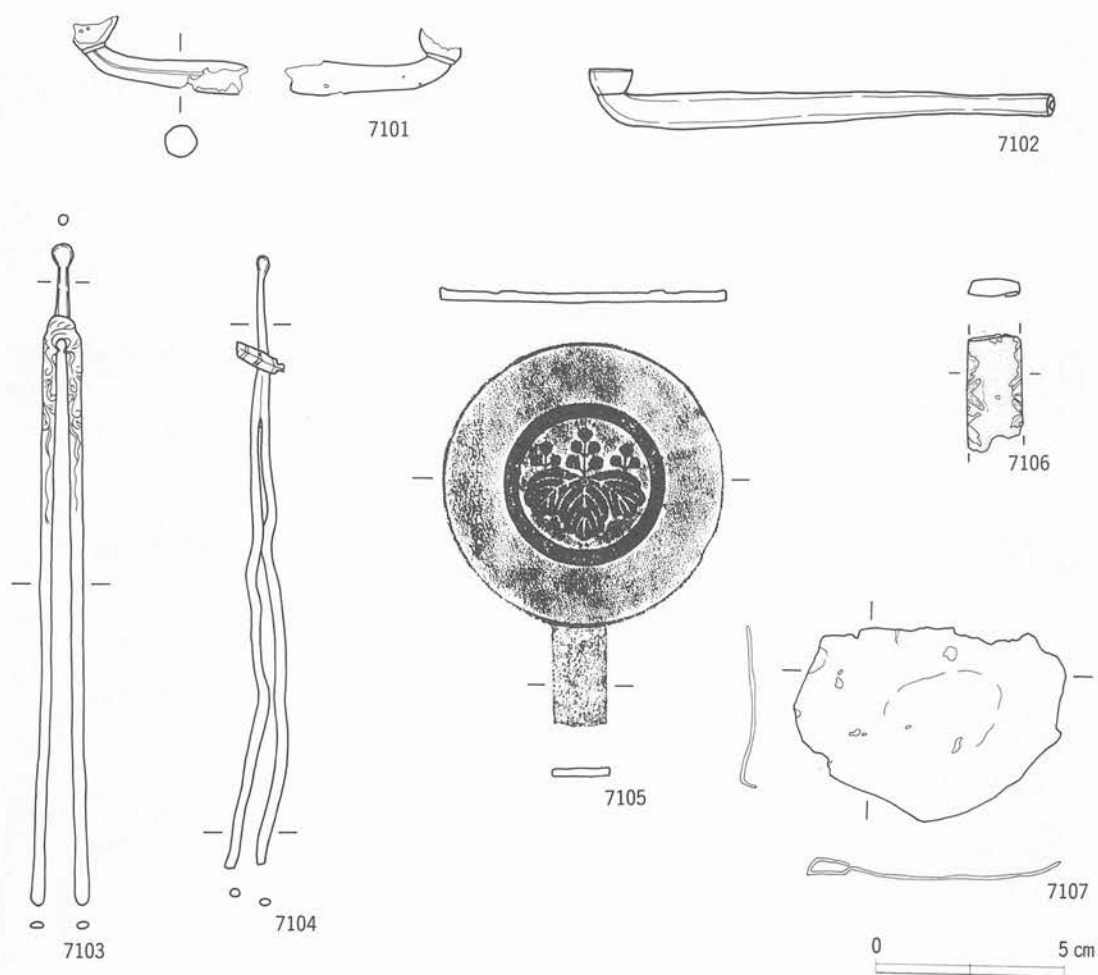
かんざしは 3 点ある。7103 は毛彫りによる文様が施されている。7126 は耳かきの部分が欠損している。

柄鏡は 1 点(7105)が出土した。柄部の下側が欠損している。15 S B 26(1号礎石建物)の面から出土し、この建物に伴う時期に使用されたことになる。

7106 は小柄の柄の部分と思われる。表面に細かい模様は施されているが、剥落している部分が多く、どのような文様がよくわからない。

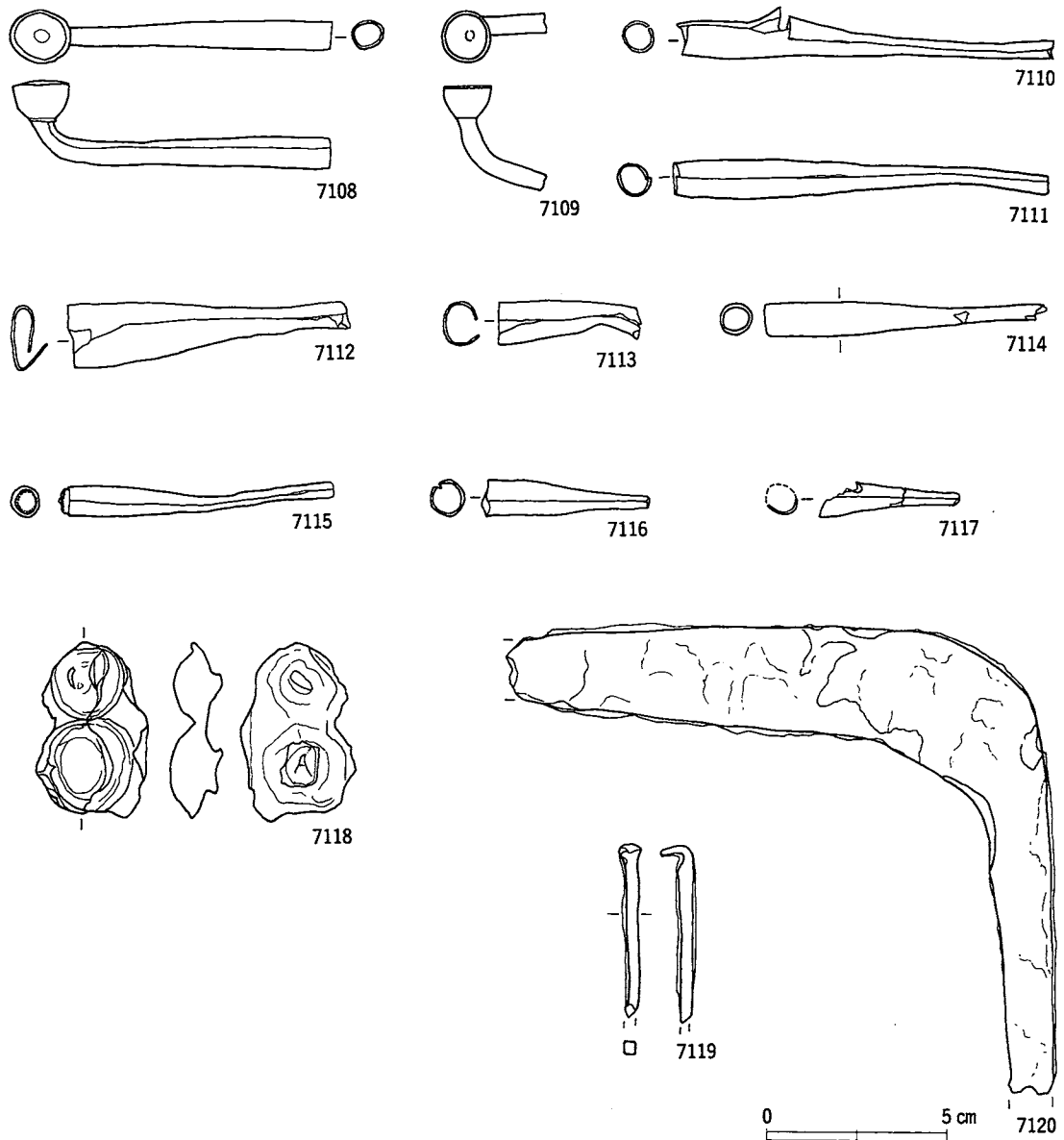
7107 は銅板を折り曲げたものである。用途は不明である。7108 は銅と思われるものであるが、不整形な形状をしている。銅が溶解したものであろうか。

鉄製品には鎌、釘、あおり止めがある。7120 の鎌は柄の端部が少し欠けているが、穴があるのが確認できる。柄に固定するための釘を通す穴である。7119、7127、7128 の釘は角釘である。7129 はあおり止めであろう。



番号	器種	出土位置	金属の種類	その他
7101	煙管(雁首)	15SD27埋土	銅	古泉弘分類の3段階相当(17C後半頃)か
7102	煙管	IIC区礎石面	〃	古泉弘分類の5段階相当(18C後半頃)か
7103	かんざし	〃	〃	毛彫りが施されている
7104	〃	〃	〃	
7105	柄鏡	〃	〃	津田薩摩守藤原家重と書いている
7106	小柄?	15SD29埋土	〃	表面の金属部大部分剥落している
7107	不明	15SE9埋土	〃	銅板を折り曲げている

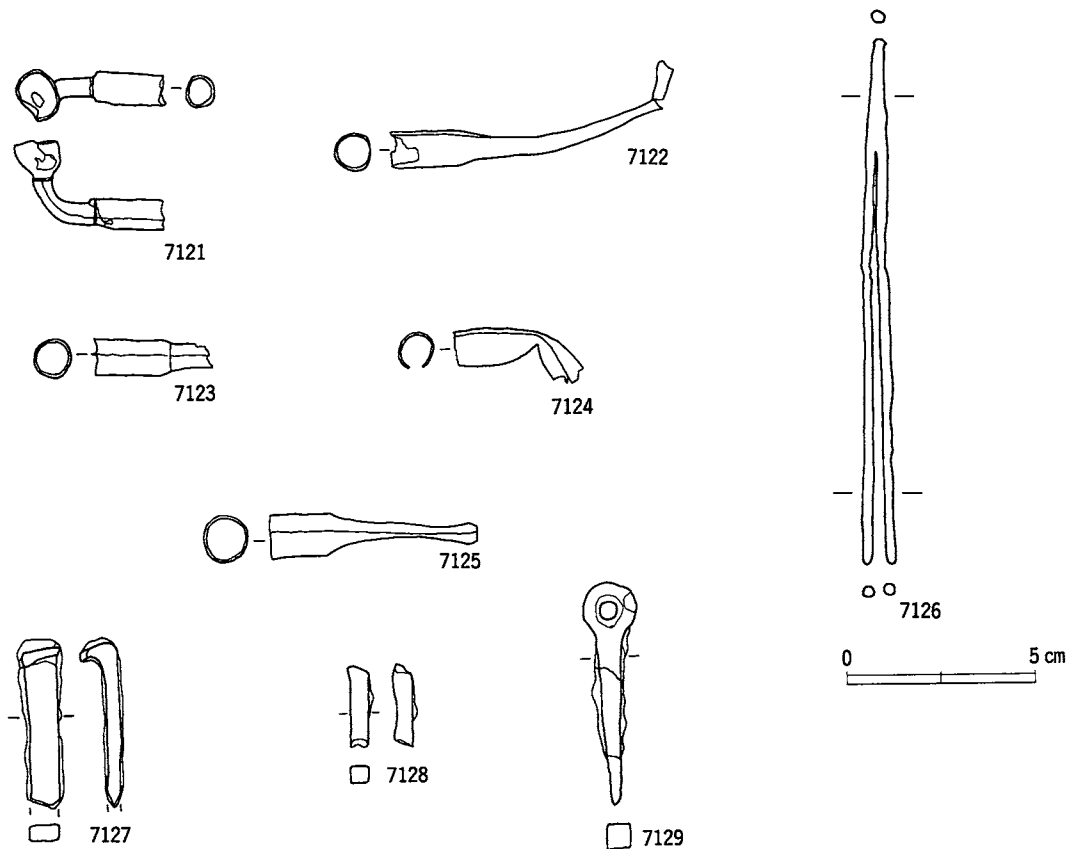
第250図 近世の金属製品(1)



番号	器種	出土位置	金属の種類	その他
7108	煙管(雁首)	13SK54底面	銅	古泉弘分類の3段階(17C後半)に相当か
7109	〃	11P51(11SB4)	〃	古泉弘分類の4段階(18C前半)に相当か
7110	煙管(吸口)	II E6f表土	〃	
7111	〃	II E区表探	〃	
7112	〃	〃	〃	
7113	煙管(雁首?)	13SK52埋土	〃	
7114	煙管(吸口)	11次調査区	〃	
7115	〃	13SK54埋土	〃	7108と組み合わせか ラウ一部残る
7116	〃	13SD27埋土	〃	
7117	〃	II E9b表土	〃	
7118	不明	II E区表探	〃	
7119	釘	13P824埋土	鉄	角釘
7120	鎌	13SK52埋土	〃	

第251図 近世の金属製品(2)





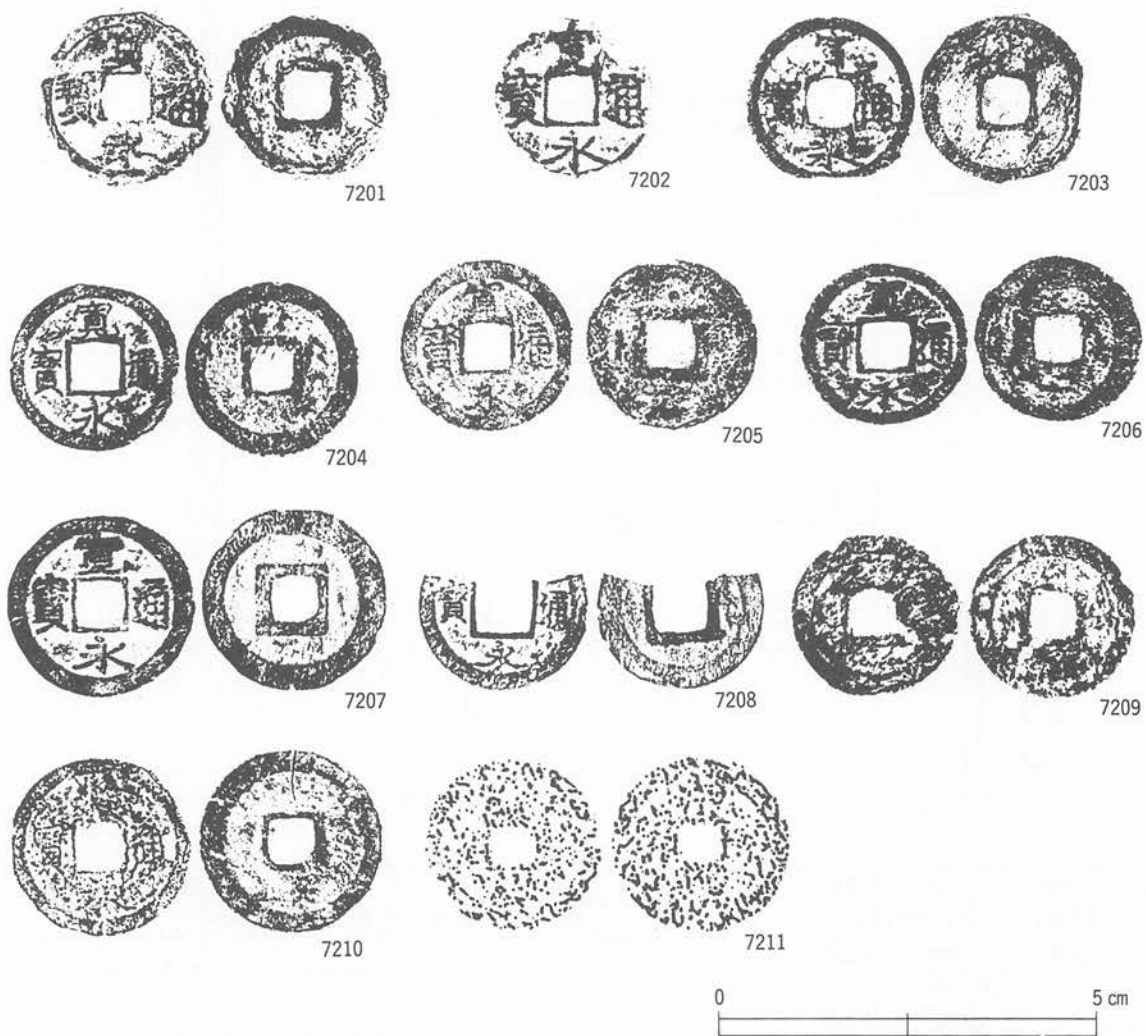
番号	器種	出土位置	金属の種類	その他
7121	煙管(雁首)	13P416(13SB20)	銅	古泉弘分類の2段階(17C前半)相当か
7122	煙管(吸口)	13SD8埋土(II F7a)	〃	
7123	〃	II F7a表土	〃	
7124	〃	13SD8埋土(II F7a)	〃	
7125	〃	II F区表土	〃	
7126	かんざし	II F区表土	〃	耳かき部欠損
7127	釘	13SD13埋土(II F6f)	鉄	
7128	〃	13P457埋土	〃	
7129	あおり止め	13P431埋土	〃	

第252図 近世の金属製品(3)

(4) 銭貨 (第253～257図 写真図版160～162)

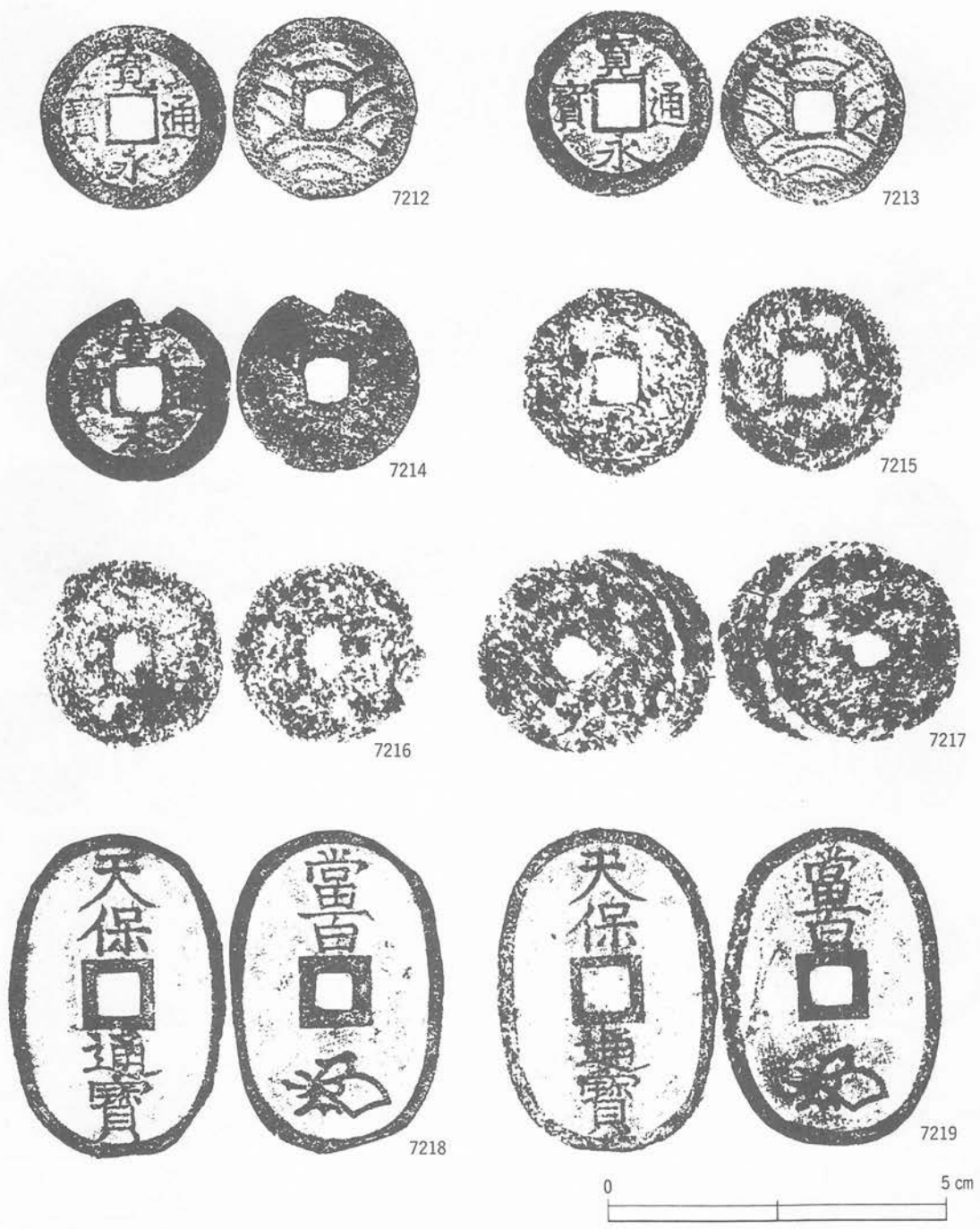
近世の貨幣は38点、近代以降の貨幣は13点図示した。寛永通寶の分類は「図録日本の貨幣3 (東洋経済新報社1974)」の分類に従い、鑄所、銭の名称もそれに従った。近世の貨幣には寛永通寶の銅一文銭、銅と鉄の四文銭、天保通寶がある。またここでは図示していないが、6226の陶器甕の中に鉄銭である仙台通寶が入れている。7202、7247の寛永通寶は掘立柱建物の柱穴から出土しているが、それが意味あるものかどうか判断は難しい。また7234～7240の7枚の寛永通寶は15SD38からばらばらの状態で出土したが、何故銭が7枚も溝に入っていたか判断できなかった。

近代以降の貨幣はいずれも西側調査区の15SB26(1号礎石建物)が建てられた面から出土した。明治23年(1890)の5銭白銅貨から昭和16年の10銭アルミ貨までである。



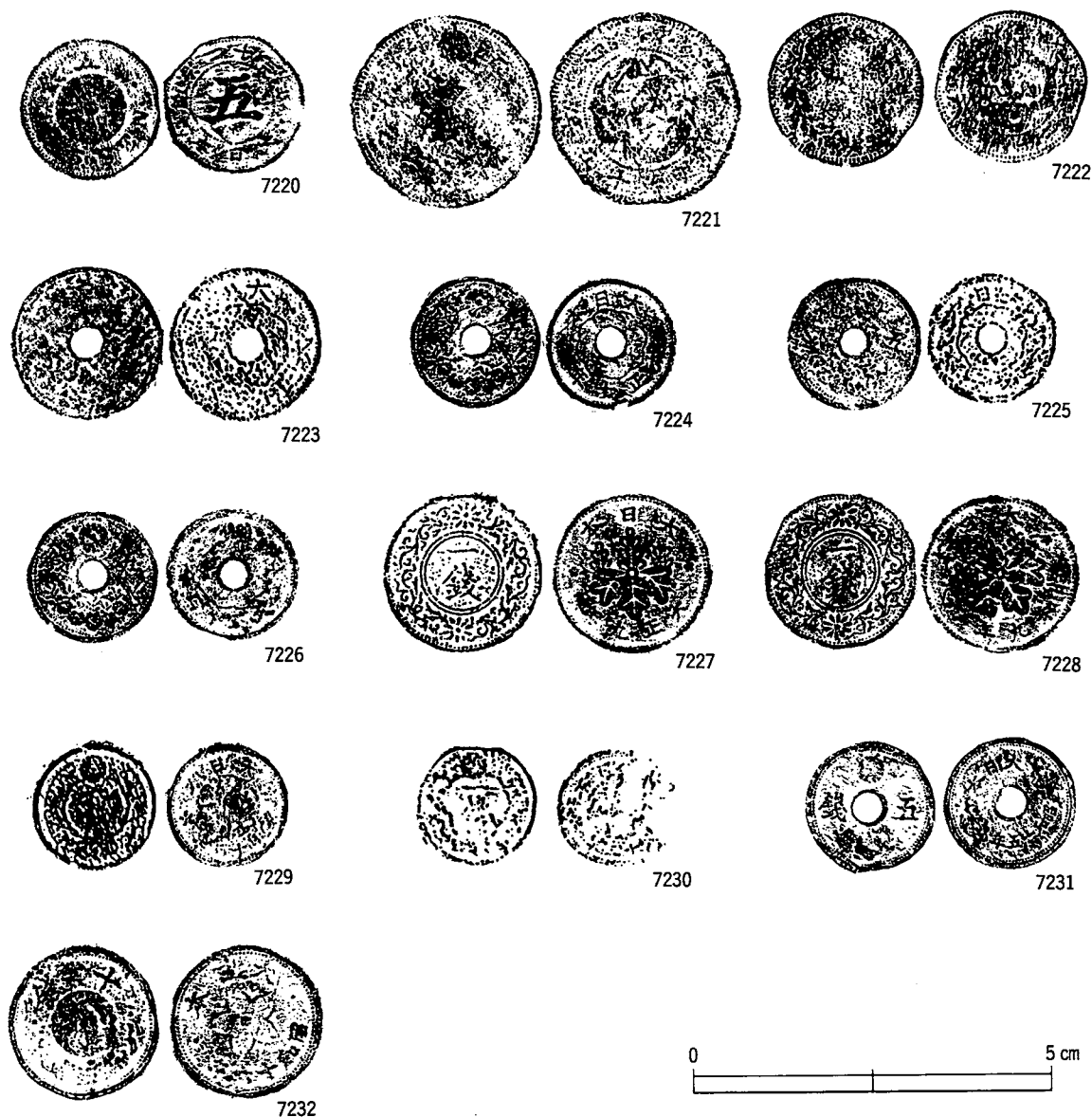
番号	種類	出土位置	直径(cm)	重さ(g)	金属の種類	铸造年代	铸所など
7201	寛永通寶	IIC3g表土	2.3	2.01	銅	1636年	古寛永
7202	寛永通寶	15P623(15SB16)	2.0	0.97	銅	1636年	古寛永
7203	寛永通寶	IIC区礎石建物面	2.3	1.46	銅	1736年	元文山城横大路所
7204	寛永通寶	IIC区礎石建物面	2.3	3.05	銅	1738年	元文摂津加島所
7205	寛永通寶	IIC区礎石建物面	2.3	1.87	銅	1738年	元文摂津加島所
7206	寛永通寶	IIC区礎石建物面	2.2	2.01	銅	1738年	元文摂津加島所
7207	寛永通寶	IIC区礎石建物面	2.5	2.97	銅	1739年	元文相模藤澤・吉田島所
7208	寛永通寶	IIC区礎石建物面	2.2	1.57	銅	1739年	元文江戸深川平野新旧所
7209	寛永通寶	IIC区礎石建物面	2.3	2.03	銅		不明
7210	寛永通寶	IIC区礎石建物面	2.4	2.87	銅		//
7211	寛永通寶	15SK37掘方	2.4	2.79	銅		//

第253図 近世の銭貨(1)



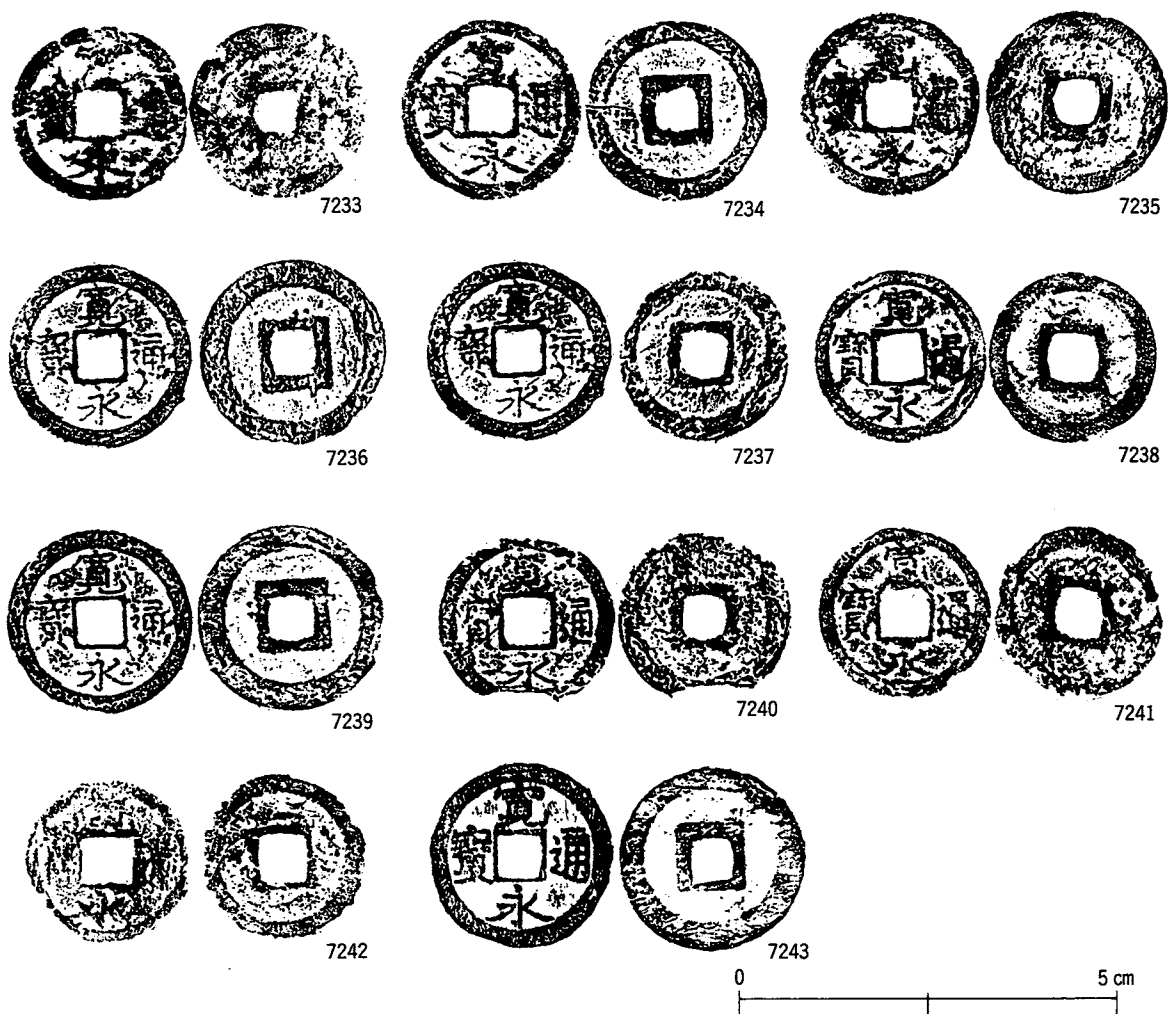
番号	種類	出土位置	直径(cm)	重さ(g)	金属の種類	鑄造年代	鑄所など
7212	寛永通寶	IIC区礎石建物面	2.8	4.49	銅	1768年	明和江戸十萬坪所 四文銭
7213	寛永通寶	IIC区礎石建物面	2.8	4.84	銅	1768年	明和江戸十萬坪所 四文銭
7214	寛永通寶	IIC区礎石建物面	2.8	4.20	銅	1821年	文政江戸十萬坪所 四文銭
7215	寛永通寶	IIC区礎石建物面	2.8	5.11	鉄		不明 四文銭
7216	寛永通寶	IIC区礎石建物面	2.8	5.22	鉄		不明 四文銭
7217	寛永通寶	IIC区礎石建物面	3.5	10.23	鉄		不明 2枚がくっついている
7218	天保通寶	IIC区礎石建物面	4.8	22.82	銅	1835年	
7219	天保通寶	IIC区礎石建物面	4.8	19.09	銅	1835年	

第254図 近世の銭貨(2)



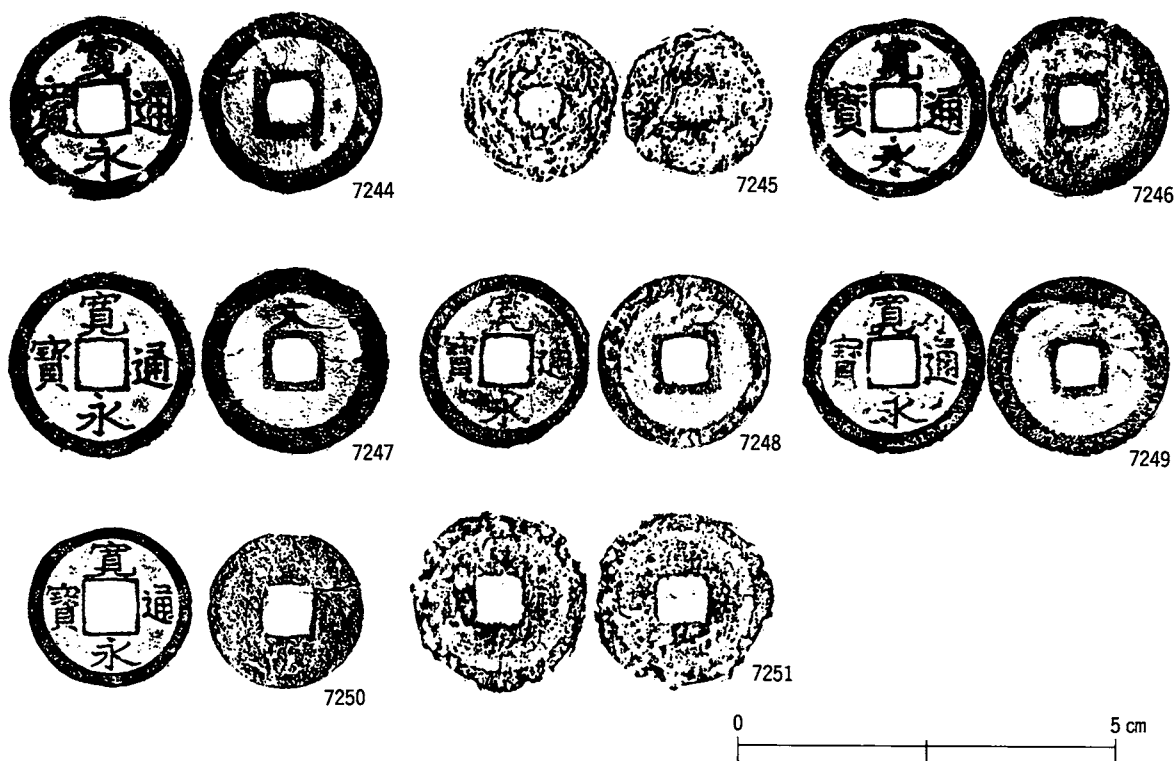
番号	種類	出土位置	直径(cm)	重さ(g)	金属の種類	鑄造年代	鑄所など
7220	五銭	II区礎石建物面	2.0	4.37	白銅	1890年	明治23年
7221	一銭	II区礎石建物面	2.2	6.16	銅	1882年	明治15年
7222	半銭	II区礎石建物面	2.2	2.34	銅	1887年	明治20年
7223	十銭	II区礎石建物面	2.2	3.14	白銅	1920年	大正9年
7224	五銭	II区礎石建物面	1.8	2.21	白銅	1921年	大正10年
7225	五銭	II区礎石建物面	1.8	2.18	白銅	1922年	大正11年
7226	五銭	II区礎石建物面	1.9	2.37	白銅	1923年	大正12年
7227	一銭	II区礎石建物面	2.3	3.63	銅	1920年	大正9年
7228	一銭	II区礎石建物面	2.3	3.23	銅	1934年	昭和9年
7229	一銭	II区礎石建物面	1.7	0.89	アルミ	1940年	昭和15年
7230	一銭	II区礎石建物面	1.7	0.77	アルミ	1940年	昭和15年
7231	五銭	II区礎石建物面	1.8	2.74	アルミ、銅	1940年	昭和15年
7232	十銭	II区礎石建物面	2.2	1.22	アルミ	1941年	昭和16年

第255図 近代の銭貨



番号	種類	出土位置	直径(cm)	重さ(g)	金属の種類	铸造年代	铸所など
7233	寛永通寶	13P1037埋土	2.3	1.93	銅	1636年	古寛永
7234	寛永通寶	15SD38埋土	2.9	3.99	銅	1636年	古寛永
7235	寛永通寶	15SD38埋土	2.9	3.16	銅	1636年	古寛永
7236	寛永通寶	15SD38埋土	2.9	2.78	銅	1636年	古寛永
7237	寛永通寶	15SD38埋土	2.3	2.97	銅	1736年	元文江戸小梅所
7238	寛永通寶	15SD38埋土	2.3	2.37	銅	1737年	元文江戸亀戸所
7239	寛永通寶	15SD38埋土	2.5	3.44	銅	1737年	元文下野日光所
7240	寛永通寶	15SD38埋土	2.3	2.61	銅	1738年	元文摂津加島所
7241	寛永通寶	IIIIE0h	2.3	2.68	銅	1739年	元文相模藤澤・吉田島所
7242	寛永通寶	IIIIE0j	2.2	1.51	銅		不明
7243	寛永通寶	13SK55埋土	2.5	2.20	銅	1636年	古寛永

第256図 近世の銭貨(3)



番号	種類	出土位置	直径(cm)	重さ(g)	金属の種類	鑄造年代	鑄所など
7244	寛永通寶	13SK30	2.5	3.26	銅	1636年	古寛永
7245	寛永通寶	IIF7e表土	2.1	1.35	銅		不明 新寛永であろう
7246	寛永通寶	IIF区表採	2.4	3.23	銅	1636年	古寛永
7247	寛永通寶	13SB7柱穴E	2.5	2.49	銅	1668年	江戸所(寛文銭)
7248	寛永通寶	埋土3層中	2.3	1.88	銅	1737年	元文出羽秋田所
7249	寛永通寶	埋土3層中	2.4	2.69	銅	1739年	元文相模藤澤・吉田島所
7250	寛永通寶	埋土3層中	2.2	1.11	銅	1741年	元文肥前長崎所
7251	寛永通寶	13SD3(IIF8c)	2.3	2.07	銅		不明

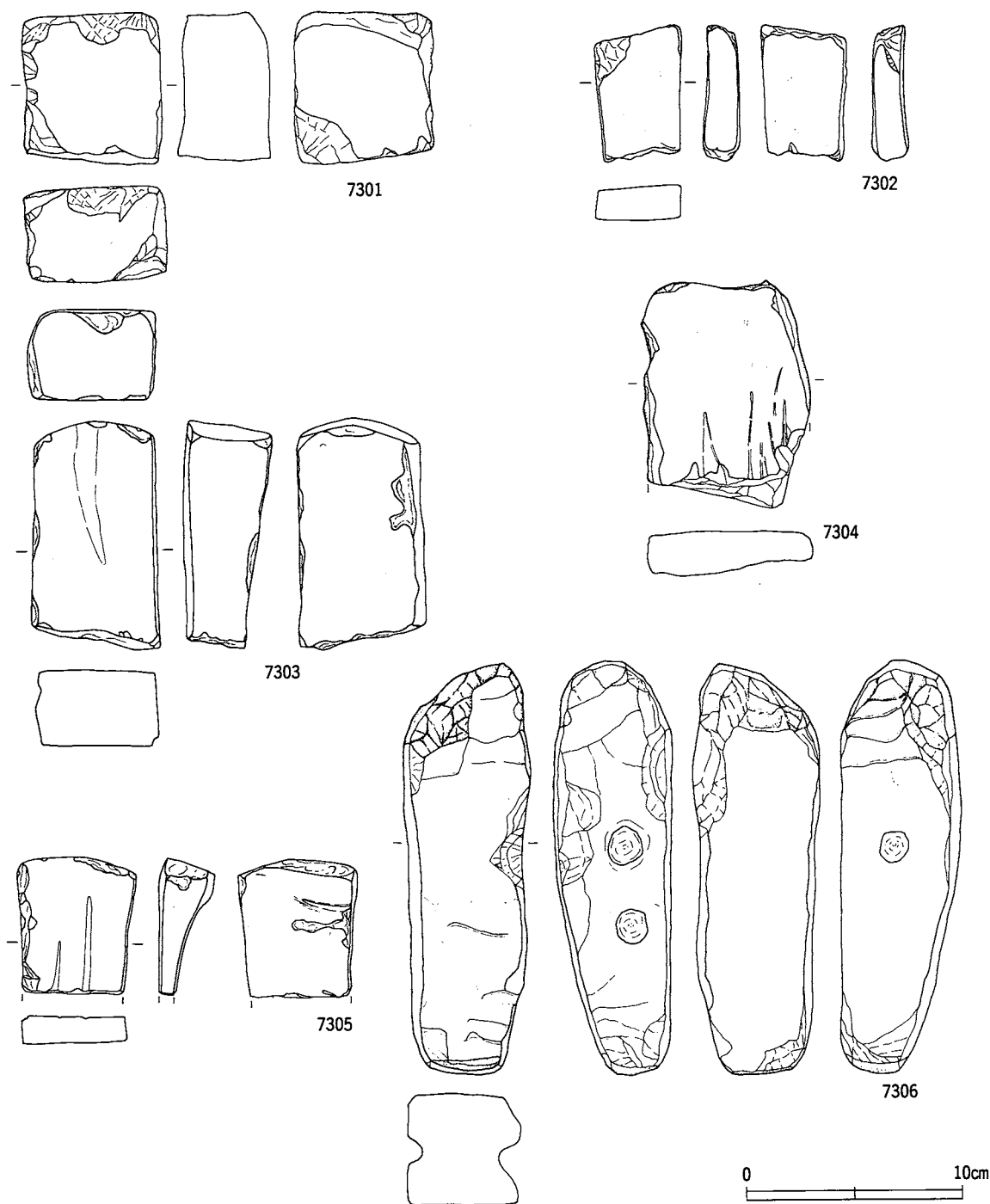
第257図 近世の銭貨(4)

(5) 石製品 (第 258～263 図 写真図版 163～165)

20 点を図示した。砥石、硯、挽き臼、石鉢がある。砥石はその形状からでは時期判断ができないので、近世の遺構から出土したものを近世に所属する砥石と考えた。7306 は 2 面にえぐった痕跡がある。7319 はかなり使い込んでいる。

硯は 7308 の 1 点のみの出土である。15 S B 16 の南東隅の柱穴から出土した。

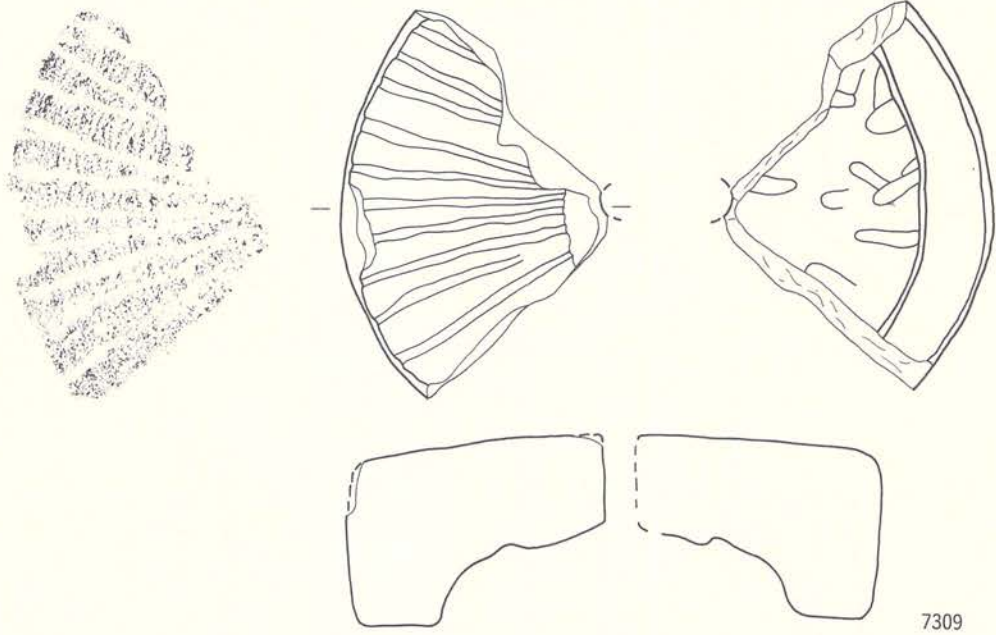
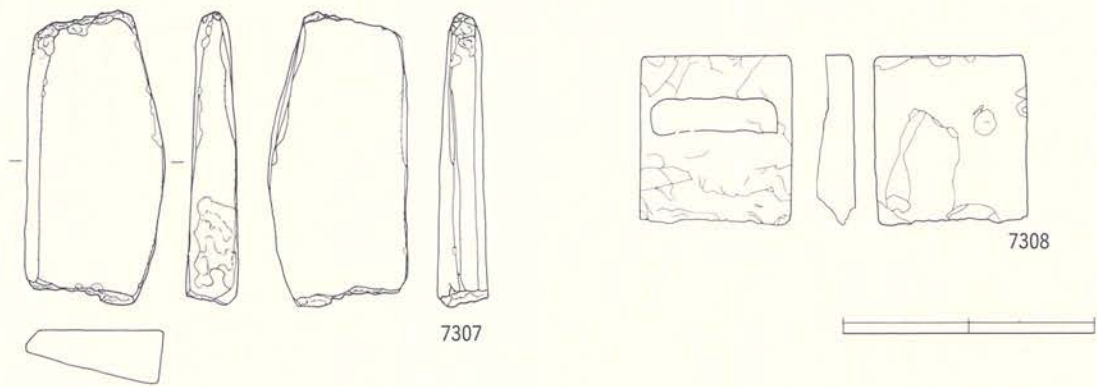
挽き臼は 5 点出土した。上臼が 2 点、下臼が 3 点である。通常の場合、挽き臼の目のパターンは中心から放射状に出る主溝とそれに平行する副溝からなっているが、本遺跡の資料はいずれも中心から放射状に出る溝のみのパターンである。出土した挽き臼が、全てこの目のパターンなので、用途による特別な目のパターンではなく、当地域では放射状に出るパターンが一般的な時期があったことがわかる。(平成 8 年度に調査し



番号	器種	出土位置	石質	その他
7301	砥石	IIC7f礎石面下	凝灰質砂岩	3面使用
7302	〃	IIC7e礎石面下	細粒凝灰岩	4面使用
7303	〃	15SK23埋土	凝灰質砂岩	4面使用
7304	〃	15SK23埋土	〃	1面使用
7305	〃	15SE19埋土	細粒凝灰岩	3面使用
7306	〃	15SD27埋土	〃	4面使用 2面にえぐった痕跡あり

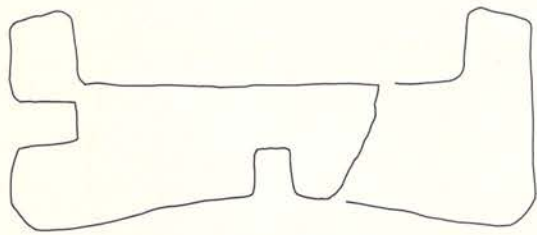
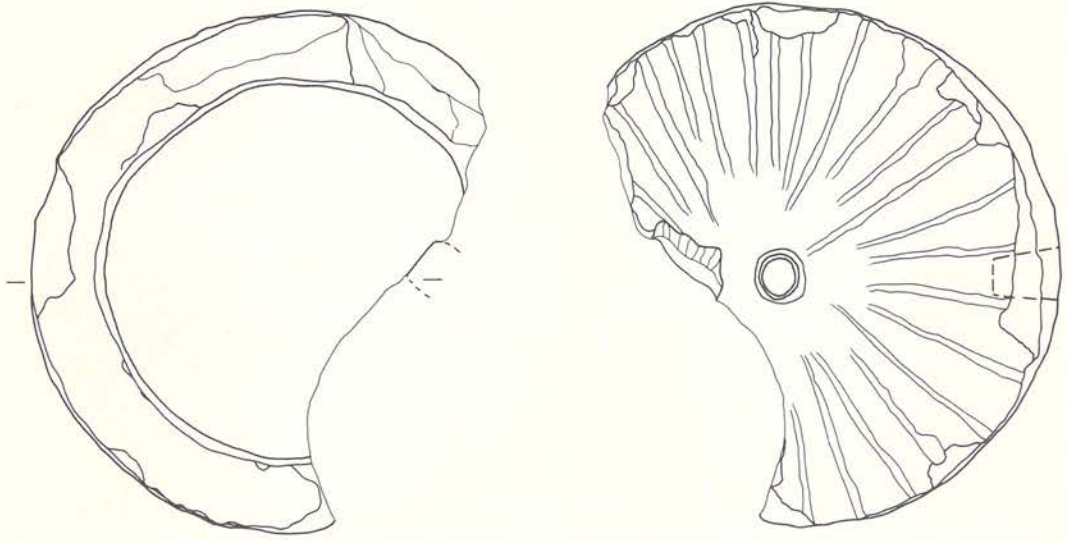
第258図 近世の石製品(1)



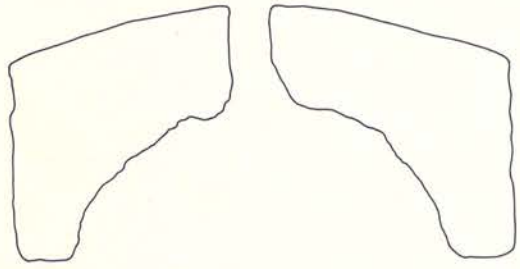
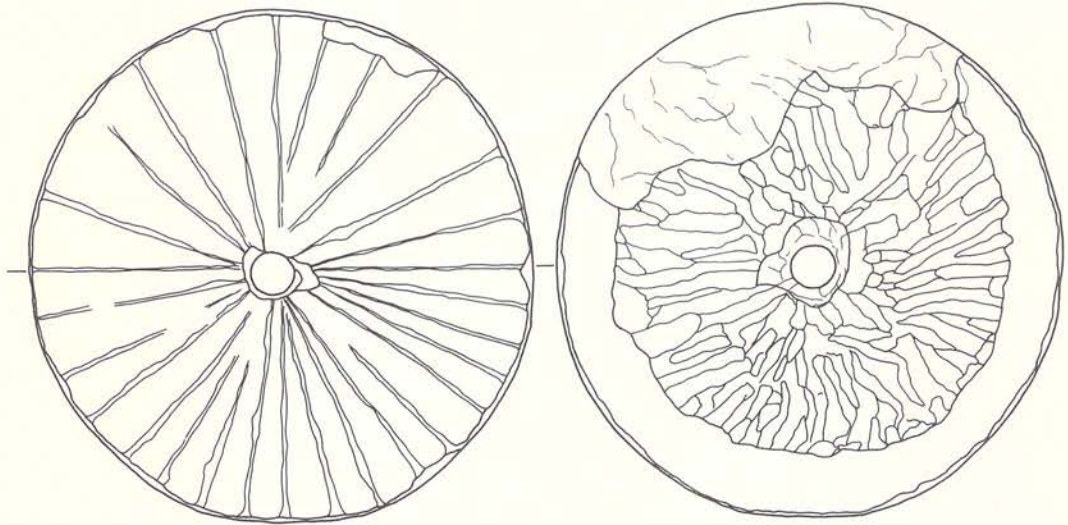


番号	器種	出土位置	石質	その他
7307	砥石	15SD27埋土	細粒凝灰岩	4面使用
7308	硯	15P623埋土	粘板岩	表面剝離 海の部分をわずかに残す
7309	挽き臼	15SE8埋土	溶結凝灰岩	下臼、目のパターンは放射状

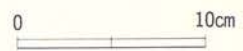
第259図 近世の石製品(2)



7310

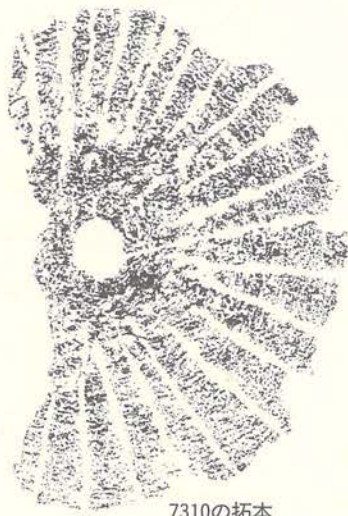


7311

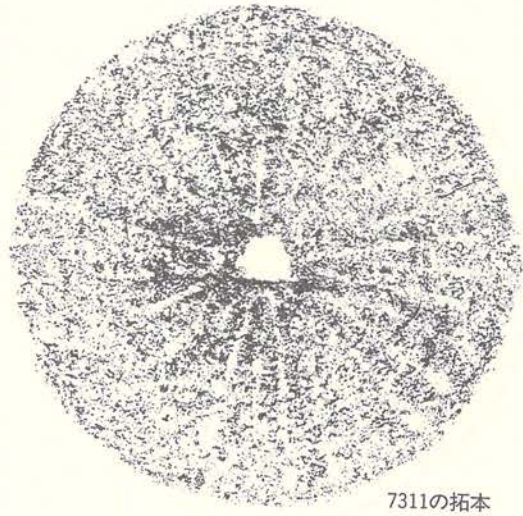


番号	器種	出土位置	石質	その他
7310	挽き臼	I5SD36磔中	溶結凝灰岩	上臼、目のパターンは放射状、目のある面が被熱している
7311	〃	III E0h表土	溶結凝灰岩	下臼、目のパターンは放射状、目のある面が被熱している

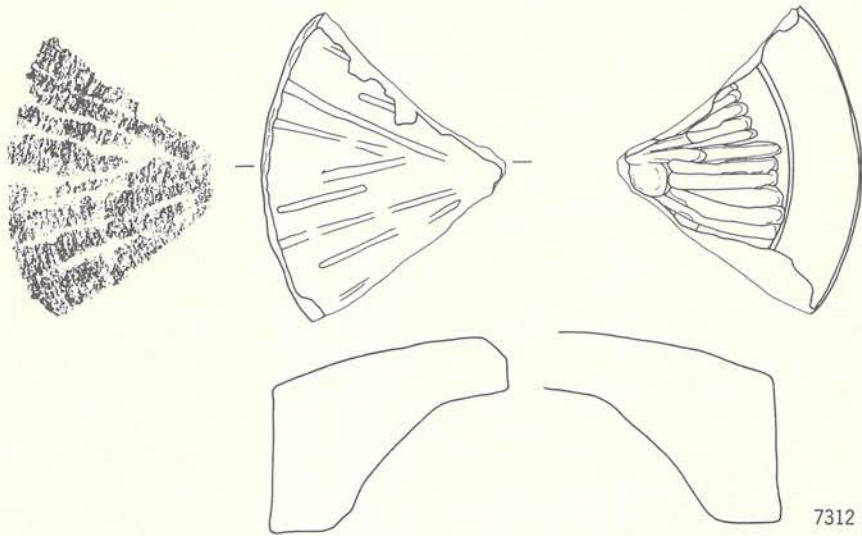
第260図 近世の石製品(3)



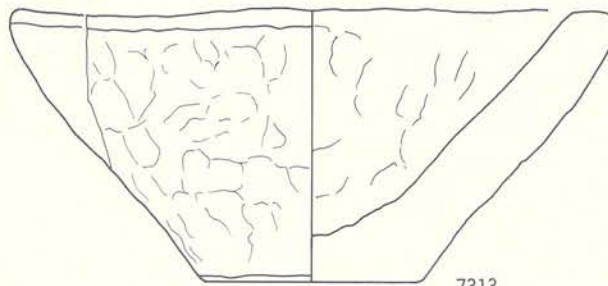
7310の拓本



7311の拓本



7312



7313



番号	器種	出土位置	石質	その他
7312	挽き臼	15SD36磔中	溶結凝灰岩	下臼、目のパターンは放射状
7313	石鉢	〃	溶結凝灰岩	内面磨耗せず

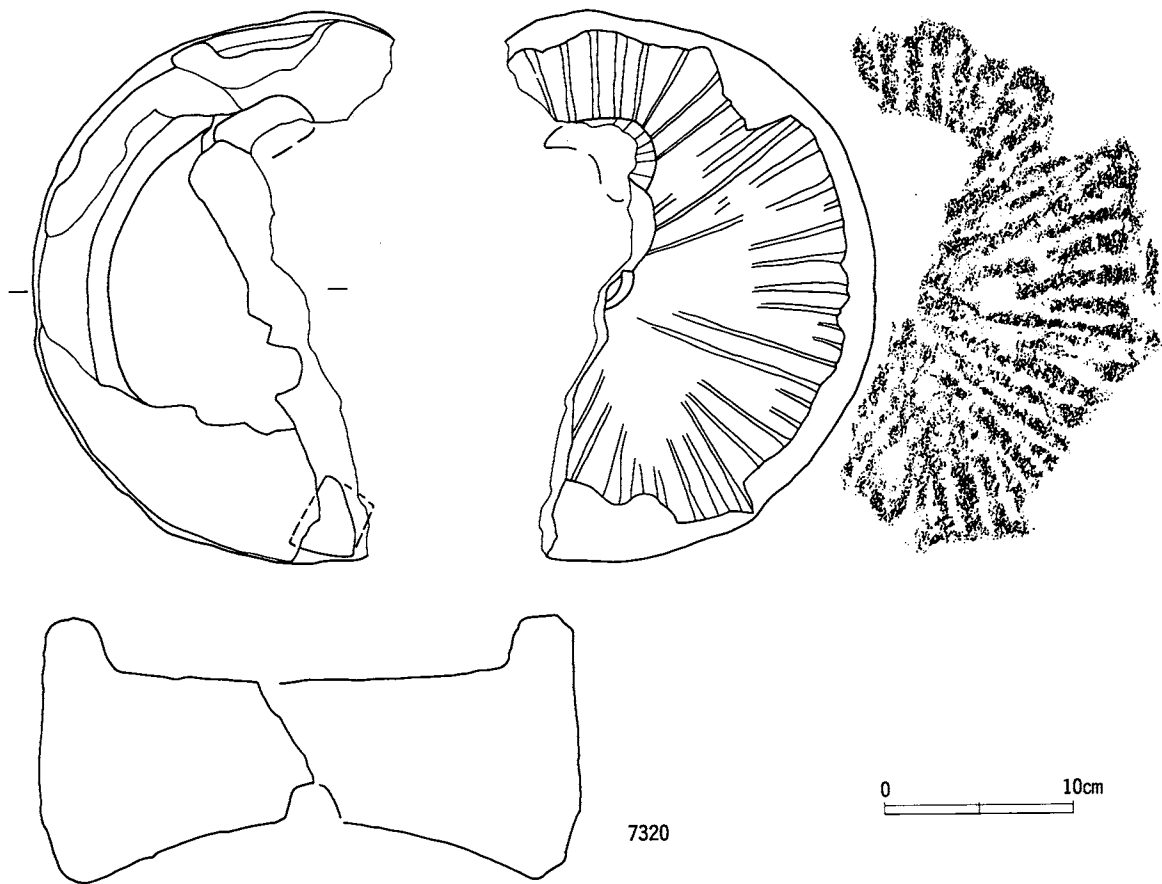
第261図 近世の石製品(4)



0 10cm

番号	器種	出土位置	石質	その他
7314	砥石	13P369埋土	斜長石流紋岩	3面使用
7315	〃	13SD13埋土(II F6f)	赤褐色凝灰岩	4面使用
7316	〃	II F区うまや跡	斜長石流紋岩	4面使用
7317	〃	〃	斜長石流紋岩	3面使用
7318	〃	〃	斜長石流紋岩	5面使用
7319	〃	〃	斜長石流紋岩	4面使用

第262図 近世の石製品(5)



番号	器種	出土位置	石質	その他
7320	挽き臼	13P296	溶結凝灰岩	上臼、目のパターンは放射状、両面被熱している

第263図 近世の石製品(6)

ている泉屋遺跡16次調査でも、5個挽き臼が出土しているが、いずれも目のパターンは放射状であった。) これらの挽き臼の詳細な年代は判断できないが、近代まで下ることはあるまいと思われる。

石鉢は7313も1点の出土である。約1/4の残存で3つに割れていた。7312の挽き臼とともに礫を詰めた暗渠である15SD36に入れられていた。内面は磨耗はしておらずまた被熱もしていない。用途は不明である。



## VI 考察

### 1 近世以降の屋敷の範囲とその変遷

今回の調査では多くの近世以降の遺構が検出されており、複数の屋敷が調査区内に存在している。これらのまとめりとその変遷について考えてみたい。

屋敷のまとめりを考えるために遺構配置図と地籍図を重ねる作業をおこなう。地籍は明治の初めごろに地租改正作業の際に土地一筆毎に地番が定められたものであり、そこには近世以来の土地の使い方がある程度反映されているはずである。今回直接に遺構配置図に重ねたのは、今回の調査の原因でもある一関遊水地事業の太田川堤防工事に係わって作成された、工事用地内の地割と土地所有者を記した地図である。これは昭和63年頃の作成である。この図には平面直角座標X系の数値が記されており平面直角座標に沿ってグリッドを設定した遺構配置図とは容易に重ねることができた。(第264図)

平泉町内の地籍図で最も古いのは明治7年頃に作成されたと考えられる「広土絵図面」である。これは平泉町花立の鈴木泰三氏が所有しているもので、平泉村の端郷高館分<sup>(1)</sup>の地籍図が字ごとに記されている。この図は測量した地図ではないので、土地が正確な形をなしておらずそのまま現代の図に重ねることはできない。だがこの時につけられた地番が基本的には現在の地番と基本的には同一であろうから、現在の地籍図から土地の位置は概ね把握できる<sup>(2)</sup>。

西側調査区からみると、調査区は2番、3番、5番、6番の地割が含まれる。広土絵図面では2番、3番が畑、5番、6番が宅地の地目になっている。5番が含まれる部分からは礎石民家である15SB26や掘立柱の民家と推定される15SB7、9が検出されており近世から宅地、屋敷であったことがわかる。15SD14は概ね5番と6番の境に沿っており、地境に作られた溝と考えられる。また15SD20、15SD27の東西に走る部分は15SD14はほぼ平行で、15SD20、15SD27も地境を意識して作ったと推定される。

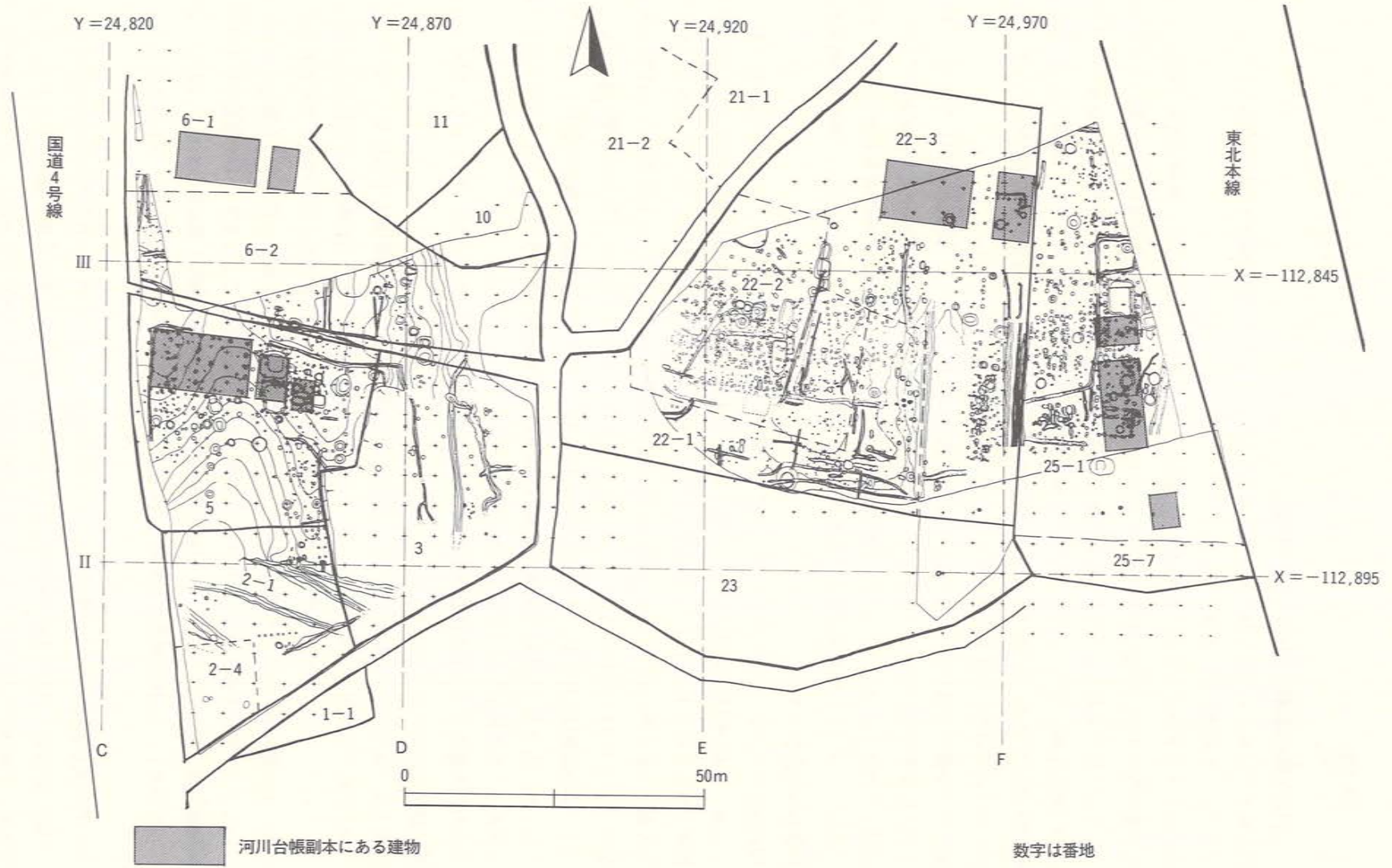
15SD14の廃絶は近代以降に下る可能性があるが、15SD20は出土遺物から廃絶が近代には下らないと推定され、また15SD27は18世紀末頃建築と推定される礎石民家である15SB25より古く、広土絵図面作成以前からここが地境であったことがわかる。

調査区内の6番からは民家の跡は検出されていないが、6番は調査区外にも広がっており、現在の6番1の付近に屋敷の中心があったと思われる。

東側調査区では22番、25番の地割が含まれる。広土絵図面ではいずれの地目も宅地になっており、広土絵図面作成の段階では屋敷が2ヵ所あったことになる。発掘調査ではどちらの地番からも近世の掘立柱民家が検出されており、これらの屋敷が近世まで上ると考えて良からう。22番地は今回の移転まで小松代實氏の所有であり、広土絵図面に記された宅地や調査で検出された建物は小松代氏の先祖のものと推定される。小松代氏の話によると東北本線開通時に線路の近くの家は移転させられることになり、小松代氏の先祖も現在の国道4号線付近に転居したという。その後昭和の初め頃今度は国道の改修工事にひっかかり、再び22番地に家を移したのだという。鉄道開通前に建っていた家は22番の中の東北よりにあったと言われているという。

25番は用地買収時にはすでに屋敷ではなく、広土絵図面の所有者の姓と、買収時の所有者の姓も異なっており、明治以降のある時期に屋敷が廃絶されたことがわかる。25番は東北本線に分断されており、東北本線の工事に伴って何処かへ移転したため、25番の屋敷は廃絶した可能性も考えられる。よって調査がおこなわれていない東北本線の下にもこの屋敷に伴う遺構が続いているはずである。22番と25番の境付近には13S

第264図 調査区内の地割





D5、6、7、8が走っており、境界に沿って作られた溝と理解できる。この22番と25番の境界は概ね大グリッドのFラインに沿っており、本報告書では便宜的にFラインを2つの屋敷の境界としている。

地籍図ではないが屋敷の範囲などを考える上で参考になる資料がある。正確な年代と経緯は不明であるが明治40年代に河川管理のために国で作成したと思われる「河川台帳副本」と記された地図である。この地図のコピーを平泉町文化センターで所蔵しており、ご好意により見せていただいた。原本は平泉町役場にあったというが、現在の所有の有無は不明である。この地図には北上川とその周辺の地形、建物などが測量されている。幸いなことに今回の調査区もその範囲に入っており建物も記載されている。この地図には平面直角座標X系の数値は記されていない。よって正確に遺構配置図、地籍図と重ねることはできないが、概ねの位置を按配して建物を重ねてみた。この地図中の建物の中には西側調査区の15SB26、27、28も掲載されているが、これらの遺構の位置とはズレがかなりあり、建物の測量はかなりラフのようである。それでも明治時代又はそれ以前の調査区の景観の復元には有効な資料である。

5番にある建物、15SB26、27、28は昭和41年に火災になるまで存在したのであるから、河川台帳副本に掲載されていて当然である。

22番の小松代氏の地所にある建物は、鉄道開通前にあった言い伝えられている母屋の位置と符合する。だが不都合なのは、河川台帳副本の作成は明治40年代であり、この年代は鉄道開通後で地図中にも東北本線が記載されていることである。これは鉄道開通に伴って家を移転したという言い伝えと矛盾する。考えられることは、移転した後もこれまでの母屋は明治40年代に至るまでそのままにしておいたのかもしれない。また河川台帳副本は明治40年代に全く新たに測量したのではなく、鉄道開通以前の作成の地図に加筆した可能性もある。どのように考えたら良いのか判断に苦しむ。だが鉄道開通のころの小松代氏の先祖の母屋は図の位置にあったと解釈して良いだろう。この母屋は礎石建物で、検出された掘立柱の民家に直接後続する建物であろう。その建立は19世紀前半までさかのぼると推定される<sup>(3)</sup>。25番も鉄道建設に伴い屋敷が廃絶したと推測したのであるが、ここには建物が記載されている。これも22番と同様にどのように解釈すれば良いかわからないが、これも25番で検出された掘立柱建物の民家に後続する礎石建ての建物と考えたい。残念ながらこれら22番、25番に記載されている建物の痕跡は発掘調査では確認できなかったようである<sup>(4)</sup>。

それぞれの屋敷跡の変遷を出土遺物、検出遺構、聞き取りなどから推定して下の表にまとめた。これらは推定の要素もかなり含んでいることを断っておく。それぞれの屋敷における掘立柱民家の変遷は別稿で考えたい。(助岩手県埋文センター「紀要XVII」に掲載予定)

## 註

(1) 藩政時代平泉村は平泉本村と端郷(枝村)の高館に別れていた。泉屋遺跡は端郷高館に含まれる。

(2) もう一つ手元に地籍図がある。これは平泉町教育委員会の千葉信胤氏からコピーをいただいたものである。これは測量した図で、作成された時期の詳細は不明であるが、昭和になってからのものと思われる。この図に記された地番の位置、形と上記の工事用地内の地割図のもので多少異なっている部分があり、地番、地割の形状も時代の流れのうちに変更されることもあることを示している。よって広土絵図面の地番を現在の地番にそのまま重ねることができない場合もある。だが多くの場合、地割の形状、地番は基本的には変更がなく(地番を細分している例は多くみられるが)現在の地番と広土絵図の地番を同じ位置と考えても大過はないと思う。

(3) 屋敷の営みが開始された年代に、検出した掘立柱民家の数をその推定耐久年数を掛けてたものを加えて算出した年代である。

(4) 筆者が直接担当した区域ではないので詳細はわからない。いずれにせよそれらしい記録は残されていない。

## 2 12世紀の遺構について

12世紀に属する遺構は第265図に示したものがあつた。時期を特定できなかった遺構の中にも12世紀に属するものが若干あつたかもしれないが、極端に増える可能性はない。非常に疎い遺構配置と感ぜられるが、奥州藤原氏の時代の存続期間は11世紀末から1189年までの約100年間、その中でも出土遺物が多くなるのはその後半からで、遺構が多くなるのもその後半の数十年間であらうから、この期間の短さが遺構の密度を薄くしているのである。本報告の調査区で多いのは近世以降の遺構であるが、近世は260年以上続いたのであるから、12世紀に比べて遺構密度が濃くて当然である。

### 1 建物跡

建物は8棟検出された。13SB3、13SB25、13SB26が身舎2×3間の四面廂の建物である。13SB8は2×5間の前面と背面に二面に廂の建物として報告した。だが桁行の5間のうち、両側の外側が6尺5寸で内側の3間の7尺2寸に比べて短く、外側のそれぞれ1間は廂になる可能性も高い。柱穴が検出されなかつたため前後に二面の廂のプランとしたが、重複する13SB3のプランから類推しても四面廂建物の可能性が高いかもしれない。15SB10は桁行3間、15SB4は桁行2間でどちらも廂のない建物である。15SB18、15SB20は調査区外にプランが伸びており全体の形状がわからない。

柱間寸法はそれぞれの建物で異なつており、同じ建物内でも梁、桁、廂でそれぞれ異なつてゐるものもある。それぞれの寸法は報告書中に記してあるのでそれを参照して戴きたい。この中で15SB25はどの部分の寸法も7尺5寸で統一されておいて整つてゐる。15SB4は梁10尺3寸、桁11尺と長い柱間寸法であるが建物の規模はわずか2×2間で定型的な建物とは思われない。この15SB4を除けば今回報告の調査区からは、柳之御所跡で検出されたような8尺、10尺台の柱間寸法を使用した大型建物は無い。平面積は本調査区の四面廂建物は身舎が8.8坪から9.6坪、廂部分の平面積は20.4坪～21.8坪、身舎と廂を合わせた総平面積は29.2坪～30.2坪の間に分布する。もちろんこの平面積は柳之御所跡の8尺、10尺台の四面廂建物の規模より小さい。柳之御所以外の泉屋遺跡2次調査、志羅山遺跡21次調査でも身舎2×3間の四面廂建物が検出されているが、本報告の建物よりは一回り大きいものである。

四面廂建物(13SB8も含めて)は13SB3と13SB8が、13SB25と13SB26がそれぞれ重複関係にあり、ほぼ同規模の建物がそれぞれ前後関係をもつてゐることになる。これは建て替えが行われる程度の長い期間、同じ用途の建物によって占地がおこなわれてたことを示している。建物の用途を直接推定できる事象は調査では確認できなかったが何らかの固定した性格の建物が存在してゐたのである。

15SB18、15SB23は全体形が不明であるが、その占地している場所から考へて13SB25などの四面廂建物程度の規模を有していると推定される。これらが一時的な小規模建物であるとすると、西側調査区で検出された複数の井戸や土坑に建物に伴わないことになり不都合である。

これらの12世紀の建物と井戸は対応関係がある程度見いだせる。13SB3、8に伴う可能性が高いのが13SE2と7次調査の井戸状遺構である。13SB25、26は15SE25、15SB18が15SE3、5、6、22、15SB20には15SE11、13、17である。これらの建物と井戸は約25m程度離れてゐるのが多い。よつて建物と井戸の間の空間も建物に伴う敷地であると解釈できる。これらの建物はその本体たる建物だけが存在してゐたのではなく、建物とある程度の広さの敷地からなつてゐたのである。かならずしも広くない平泉拠点地域の中である程度の広さではあれ敷地を占地できたのであるから、商工業者の居住区といったものではなく、権力に多少とも近い階層の居住地といったような性格が強いのではないか。いずれにせよ都市の一画



を構成する要素の一つであったことはいえる。

15 S B 4、15 S B 10 は廂がつかず建替えを示す重複もなく、四面廂建物とは異なった性格の建物と推定される。これらは恒常的にその場所を占地していたのではなく一時的に建てられた可能性もある。

本報告の調査区からは建物に関連する遺物が少量であるが出土している。それには壁土、瓦、建材と思われる板材がある。壁土は調査区の各地で焼けたものが非常に磨耗して出土している。その量はわずかである。唯一ある程度まとめて出土したのは西側調査区の 15 S K 45 の 1 層からである。まとまった量とはいっても重さ 3.4 kg にすぎなかった。壁の心材である木舞の組み方を観察できる破片はなかった。瓦の出土は少量で全調査区で合わせて 7 点にすぎない。このことから断言するのは危険かもしれないが、調査区内で検出された建物、または調査区外ではあっても調査区の近辺の建物には瓦葺きのものがなかったと推定される。

建築部材の可能性ある板材は 15 S E 25 から出土している。4111～4113 の 3 点である。4111 は厚手の板材で長軸の一端にえぐりがありその部分に鉄釘が打たれている。4112 も厚い板材である。中央よりややずれた部分に削って作った凹がある。この凹が床束を受ける部分であれば、この板は床板とも考えることができる。だが断定はできない。

## 2 井戸状遺構

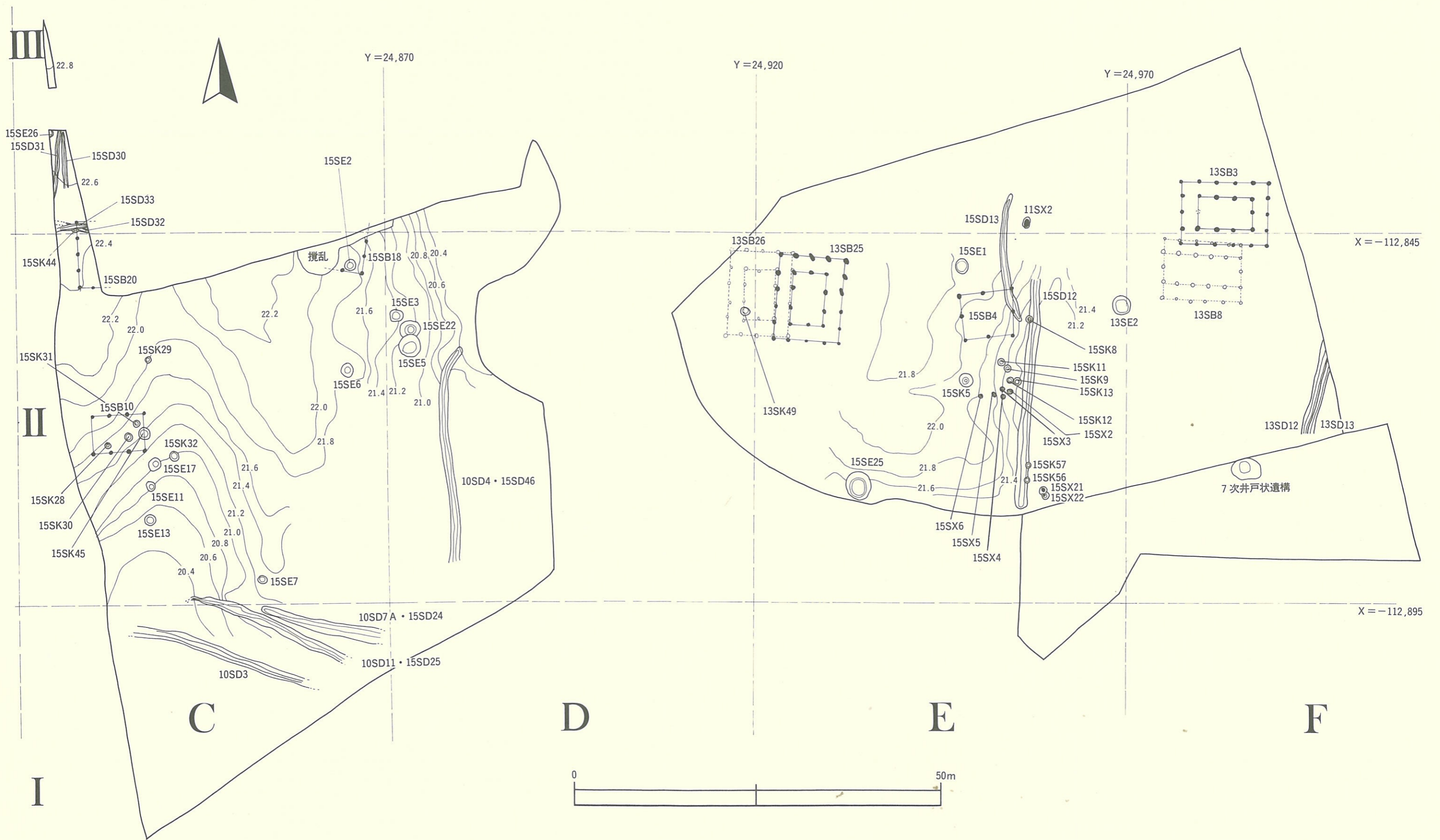
12 世紀に属する可能性が高い井戸は西側調査区で 10 基、東側調査区で 3 基検出されている。なお 7 次調査の際に東側調査区に接する部分で 12 世紀に属すると思われる井戸が 1 基検出されており、これを加えると東側調査区では 4 基の検出になる。

これらの井戸は全て井戸枠の無い素堀のものであった。確認面からの深さは、最も浅いのが 15 S E 13 の 180 cm、最深は 15 S E 1 の 350 cm である。多くは 2 m 代で、平均値を計算するとその深さは約 255 cm になる。埋蔵文化財センターで調査した柳之御所跡（(財)岩手県埋文センター 1995「柳之御所跡」第 228 集）の調査区でも深さ 2～3 m 台の井戸状遺構の数は多いが、それ以外に 4 m 台、最深では 6 m 台のものなどがいくつかみられる。本調査区の井戸にはそのように極端に深い井戸がなく、どれも似たような程度の深さの井戸で占められるという点に特徴がある。この井戸の深さは確認面からの深さなので、本来の掘込み面からの深さは示していない。そこで井戸底面の標高で比較してみると最も標高の低いのは 15 S E 3 の 18.55 m、高いのが 15 S E 26 の 20.10 m である。この比高差は確認面からの深さの比較との差よりも小さい値になる。このように底面の標高を比較するとなおも当調査区の井戸の深さは同程度のものが多いといえる。

本調査区の近世以降の考えられる井戸も深さが 2 m 強から 3 m 弱のものが多く、12 世紀の井戸と同じような深さであるといえる。よって時期を越えて井戸の深さが同じであるということは、当調査区の区域ではこの程度の深さ、標高で水が湧いたことを示しているであろう。逆にいうと本調査区の井戸状遺構は井戸としての用途のものが多かったといえることができるであろう。

ところで今回の調査区の井戸状遺構で調査中に水が湧いてきたものは 1 基もなかった。これは次のように考えている。本調査区は全体的に太田川に向かって傾斜している地形である。そして調査区のあちこちには地元の人々に「水穴」と呼ばれる伏流水の流れた痕跡がみられた。おそらく井戸の底面あたりの地層でも安定した地下水の層があるのではなく、伏流水が太田川に向かって流れている状態と考えられる。そしてその流れは時々変わると推測される。掘込んだ井戸がうまく伏流水の流れ道にあたりと井戸として利用され、その流れが変わって水が濁ると井戸は廃棄されるのであろう。本調査区で井戸状遺構の数が多いのはこれに起因していると思われる。井戸状遺構の中には掘ったものの、うまく伏流水の流れにあらず井戸として使





第265図 12Cの遺構配置図

用できず、そのまま埋め戻したのもあると考えられる。

### 3 土坑（トイレ状遺構）について

12世紀に所属する土坑は西側調査区で7基、東側調査区で9基である。多くの土坑はその用途を判断できないが、特異な遺構に「トイレ状遺構」がある。「トイレ状遺構」は西側調査区の15SK28、30、31の3基である。15SK45の埋土からも種子が出土し、その付近の土には多量の寄生虫卵が含有されており、人糞が存在していたとの分析結果が得られている。だが上の3つの土坑は有機質分の多い感じの特異な埋土であったのに、15SK45の埋土は種子の出土したわずかな層を除くとこの特異な土とは異なっており、15SK45が「トイレ状遺構」に含まれるかどうかは判断が難しい。また15SE2も底面から種子混じりの土が出土し、寄生虫卵の存在から人糞の存在が推定されているが、遺構の形状と全体の埋土から「トイレ状遺構」には含まれないと考える。ここでは一応15SK45と15SE2は「トイレ状遺構」に含めず扱う。

「トイレ状遺構」である15SK28、30、31は西側調査区のHC4c、d付近に近接する形で集中している。平面形はいずれも円形である。確認面からの深さは15SK28が125cm、15SK30が128cm、15SK31が118cmで概ね均一といえよう。また壁はいずれもほぼ垂直に立ち上り、ピーカー型の断面形をなす。このように形状の点は3つの土坑ともほぼ同じと断じて良いであろう。埋土は15SK28は断面を観察していないが、15SK30と31は下半の有機質分の多い種子混じりの土と、上半の他の遺構の埋土にみられるような普通のシルト質の土に大きく二分される。これは下半部の有機質分が多い土が堆積した後に上半部を人為的に一挙に埋めたものと判断できる。特に15SK30の最上層には大きな礫が入れられており、人為的な埋め戻しの行為であることを裏付けている。15SK28も検出面の状態では有機質分の多い埋土ではなかったので、15SK30、31と同じ埋土のパターンであったと思われる。このように3つの土坑は埋土も同じ形態といえる。

それぞれの土坑の下部の種子混じりの土はサンプルを採集し(株)古環境研究所で、寄生虫卵、花粉、種子について分析していただいた。その詳細は第七章の「1 泉屋遺跡15次調査におけるトイレ遺構分析」を見ていただきたいが、結論をかいつままで言うと、いずれの土壌にも寄生虫卵が多量に含まれ、種子はアケビ、ゴマ、ウリなどの食用となる果実がほとんどで人糞の存在は確実であるとなっている。

だが人糞の存在が確実であるということが即この土坑が「トイレ」であるということにはならない。直接この土坑に排泄行為を行なったのではなく2次的に人糞を廃棄した可能性も考えられるからである。トイレ状遺構が多数検出された柳之御所跡の報告書の考察編VII「便所遺構について」(財)岩手県埋文センター1995)で三浦謙一氏もこの両者の可能性を上げ、結論は避けている。

これら15SK28、30、31とほぼ同じ位置に柱間寸法から12世紀に所属すると思われる15SB10がある。15SB10のプラン内にちょうど3つ土坑のいずれもが納まっているのである。この建物と土坑は直接重複する部分が無く前後関係については判断はできない。もし建物と土坑が同時に存在していたとすれば俄然これらの土坑が直接に排泄行為をする「トイレ」である可能性が高くなる。だが建物のプラン内に土坑が納まるものの、その位置は建物との整合性が感じられる位置にはない。よって確実な結論は出せないが、建物と土坑は同時存在ではないと考えたい。これまで平泉遺跡群で検出された「トイレ状遺構」では上屋構造が検出されたものは無いようである。このことも土坑と建物が無関係であると考えられる材料の一つになろう。

また15SK30では人糞混じりの土である3層中から渥美産陶器の大型の底部破片と漆器椀が出土している。トイレとして使用している穴の中にこのようなものを投げ込むとは考え難く(現代人の感覚であるが)、

2次的に人糞を捨てる際に同時にこれらのゴミを捨てたと考えたほうが釈然とする。このように考えていくとこれらの土坑の人糞は直接土坑に排泄されたのではなく、何処かで排泄したものを2次的に廃棄したと考えた方が良いでしょう。

また15SK45の性格を考えてみる。15SK45の埋土にも種子混じりの有機質分の多い土が存在していた。これは埋土中位の5層の土である。この層はブロック状ではなく層状になっていたが薄い層で、15SK30、31のこの種の土量に比較すると非常に少ない。この5層の土壌は分析してもらったのであるが寄生虫卵が多く人糞が存在していたという結果であった。この状況は土坑の埋没過程(人為的か、自然かは別として)の途中に人糞が少量堆積して、その後再び別な土が堆積したことを示している。人糞が含まれる5層の下からは硯が2面とほぼ完形のかかわりが出土した。上の層から焼けた壁土と、接合するとほぼ完形になる常滑産二筋壺などが出土し、上下の層いずれも人的な堆積層である。このように人糞の含まれる5層の土は、それ以外の土、ゴミにを捨てる穴に混じって捨てられたということになる。よって15SK45はゴミ(人糞も含めて)を廃棄するための土坑と解釈したい。

このような主に人糞以外のものも捨てる目的がある15SK45が「トイレ状遺構」である15SK28、30、31に近接しているということは、「トイレ状遺構」も廃棄する主たるものが人糞である「廃棄坑」と考えることもできる。

しかしこのまま、この種の土坑は2次的に人糞を捨てる用途のものとして判断するのも早計であろう。単に人糞を廃棄する穴ならば、土坑の形態に共通性を持たせる必要がないのかもしれない。本報告書の3つの土坑のみが形態が類似するのではなく、平泉遺跡群で検出される「トイレ状遺構」の多くは共通する形状を持っているのである。多くの遺構が共通した形状であるということは何らかの機能的なものからくる必然性があったはずである。単に人糞を捨てるためであればもっと掘り込み面の面積が広く、壁もそれほど垂直ではないラフな穴の方が掘りやすいと思える。また捨てる人糞の量を増やすために井戸なみの深さに掘り込んでも良いように思える。また人為的に穴を掘らなくても川や低地に捨てても良いように思える(もっともそのような行為をおこなっていたとしても痕跡としては残らないだろう)。このような点からここでは「トイレ状遺構」の性格がトイレなのか人糞を捨てる目的の穴なのか結論づけることができない。

いずれの用途であっても言えることは、また本報告書の3つの土坑もそうであるが、「トイレ状遺構」は複数以上のものが近接して集中している場合があるようである。排泄する場所あったのか、廃棄する場所であったのか判断できないが、どちらにしても場所としての規制があったことがわかる。また15SK30、31の埋土の上半は人糞混じりの土とは明らかに異なる人為的に埋めた土であった。これは人糞を忌諱して、それを覆い隠すために埋めた土と思われる。衛生的な見地からか感覚的な見地からかはわからないが、人糞を忌諱する感覚は強かったのではないだろうか。

#### 4 溝

溝は12条検出されている。この中の11SD8・15SD13は自然の流路で他の溝とは性格が異なる。人為的な溝の中で西側調査区の北側にある15SD30、31、32、33は幅、深さ共に小規模であるが、他はそれに比べ幅が1m以上と大きい。これらの溝の性格づけをおこなうことはできないが、大規模な溝と小規模な溝は用途に差異があるのであろう。

溝の角度は10SD3がN-71°-W、10SD7A・15SD24がN-76°-W、10SD11・15SD25がN-69°-W、10SD4・15SD46がN-4°-W、15SD30がN-4°-W、15SD31がN-5°-E、15SD



32がN-70°-W、13SD12、13がN-11°-E、15SD12がN-5°-Eである。このように角度は様々で一定方位をみつけるのは困難である。

溝の中で10SD3、10SD7A・15SD24、10SD11・15SD25の3条は近接して存在し規模も角度も同程度である。よってこれらはおそらく同時存在ではなく造り替えが行なわれたと考えられる。何度も造り替えが行なわれるということは何かしらこの位置に溝を掘る必要性があったのであろう。もっとも考えやすいのは排水の目的である。この位置に溝を掘れば太田川に向かって水はうまく流れていく。

一方10SD4・15SD46、15SD12は概ね南北の軸に沿っている。どちらの溝も斜面の途中で等高線に沿って作られており、それほど排水には有利な作り方をしていない。15SD12は水が流れていく方向の南端が閉じており排水の目的には成り得ない。このように排水の目的ではないからこそ、ほぼ南北の軸に合わせて作られているのかもしれない。そうであれば区画溝といった用途が推定される。

## 5 12世紀の遺構配置と周辺と地形

### (1) 周辺の自然地形

12世紀の遺構と周辺の地形は第267図のようになる。西側調査区と東側調査区の境界には埋没沢があることが確認されている。この沢の存在によって西側調査区と東側調査区は地形的にも隔てられていることになる。15次調査でも西側調査区の最も東側でこの沢の一部がひっかかっている。この埋没沢は岩手県教育委員会による泉屋遺跡9次調査(西側調査区の北側)でもひっかかっている。本調査でも9次調査でも十和田a火山灰が堆積する面が検出され、その面から考えると12世紀の段階ではかなり埋没が進んでいたことがわかる。埋没は進んでいたとはいえほぼ常時水の流れはあったと思われる。この埋没沢に関する部分は未調査の部分が多く、図に示した沢の範囲はかなり推定も含んでいることを断っておく。この埋没沢の続き(上流)は西側調査区の北西に調査区が位置する志羅山遺跡第46次調査((財)岩手県埋文センターで95年に調査、報告書未刊)で検出されている。この部分では埋没沢の幅は12mほどで本調査区周辺よりはだいぶ幅も小さい。ここでも下部から十和田a火山灰が検出されていた。この部分でも12世紀には埋没が進んでおり、12世紀の遺物を含む土で沢を埋めて整地を行なっていることが確認されている。だがこの整地後もその上を再び水が流れた痕跡があり完全に沢を埋め切った状態にはならなかったようである。

本調査区の南側には北上川の支流である太田川が東に向かって流れている。現在太田川は河川改修されてほぼ真っすぐになっている。だが昭和30年代の航空写真をみるとかなり蛇行していることがわかる。図に示した太田川の旧河道は、明治40年代の作成の地図と推定される「河川台帳副本」にある河道を重ねたものである。この河道が12世紀の太田川の河道を示していることにはならないが、河川改修後の河道よりは12世紀の河道に近いはずである。この旧河道をみると西側調査区と東側調査区の境界の埋没沢にぶつかる部分で北側に出っ張っているのがわかる。埋没沢は12世紀にもだいぶ埋没が進んでいたのだから、この点からこの明治時代の河道は12世紀の河道とあまり変化がないと推定される。

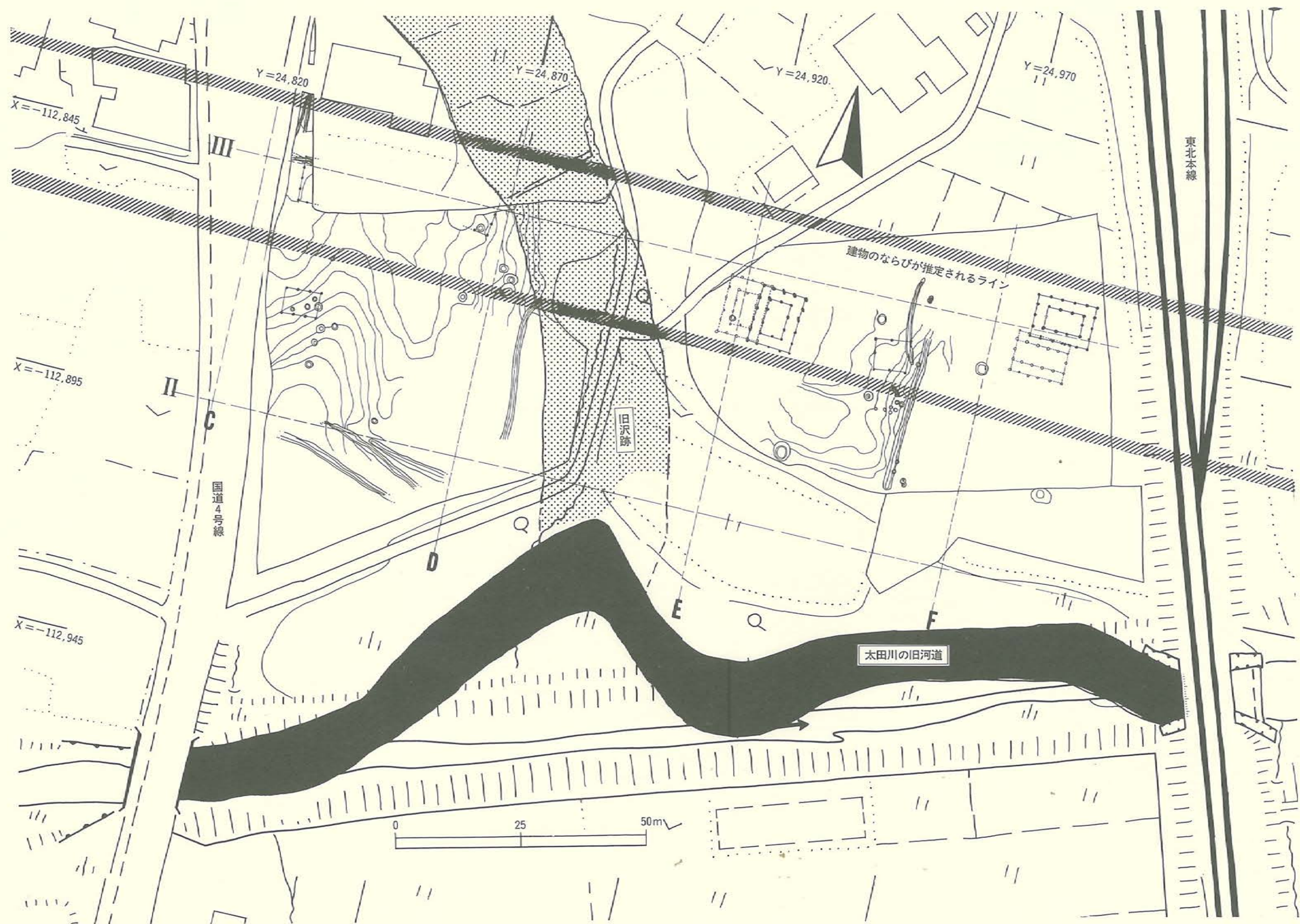
### (2) 建物の並ぶ軸

本報告書の調査で12世紀の建物は8棟検出されたが、この内7棟がほぼ同一線上に並んでいるのがわかる。この軸は概ね公共座標の $X = -112,863$ から $X = -112,833$ に挟まれた部分である。だがこのラインは約2°ほど東から北に偏しているので、西に行くとXの値は増え、東に行くとやや減ることになる。

西側調査区の国道4号線を挟んだ地点は志羅山遺跡46次調査区である。この調査区は建物が並ぶと考えられる軸よりやや南側の地点になる。ここでは12世紀に属する井戸が4基検出されているが、12世紀の建物は







第267図 12世紀の遺構と周辺の地形

## VII 付編

### 1 泉屋遺跡 15 次調査におけるトイレ遺構分析

株式会社 古環境研究所

#### 1. はじめに

トイレ遺構等の糞便堆積物は、堆積物中の寄生虫卵密度、花粉組成、種実組成にそれぞれ特異性が認められる。したがって、これらの分析を総合的に行うことによって、対象となる堆積物が糞便であるか否かがわかり、トイレ遺構を示唆することが可能である。また、寄生虫の特異な生活史や食用とされた花粉や種実を復元することによって、それらを排泄した人々の飲食物や食生活の検討を行うことも可能である。

さて、泉屋遺跡 15 次調査では、複数の井戸状遺構と土坑が検出され、これらがトイレあるいはそれに関連する遺構である可能性が考えられた。そこで、これらの遺構内の堆積物について寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定を合わせて行うトイレ遺構分析を行い、トイレの可能性について検討を行うことにした。

#### 2. 試料

調査の対象は、12 世紀とされる 2 号井戸状遺構 (SE2)、28 号土坑 (SK28)、30 号土坑 (SK30)、31 号土坑 (SK31)、45 号土坑 (SK45) の 5 遺構である。

試料は、それぞれ SE2 では種子を含む 6 層底部の堆積土 (サンプル 1)、SK28 では土坑底面付近の種子を含む堆積土 (サンプル 2)、SK30 では種子を多量に含む 3 層下位の堆積土 (サンプル 3)、SK31 では種子、木片を多く含む 4 層上位の堆積土 (サンプル 4)、SK45 では種子の混入する 5 層堆積土 (サンプル 5) の計 5 点である。

表 1 試料

サンプル	遺構・堆積層
1	SE2 6 層
2	SK28 底面
3	SK30 3 層
4	SK31 4 層
5	SK45 5 層

#### 3. 寄生虫卵分析

##### (1) 方法

寄生虫卵の分離、抽出は金原 (1992、1994) を踏襲し、試料に以下の処理を施して行った。

- 1) サンプルを裁量する。
- 2) 脱イオン水を加え攪拌する。
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
- 4) 25 %フッ化水素酸を加え 30 分静置。(2・3 度混和)
- 5) 水洗後サンプルを 2 分する。

6) 片方にアセトリシス処理を施す。

7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。

8) 検鏡・計数を行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500 rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

#### (2) 結果

検出された寄生虫卵の分類群ならびに検出密度を表2に示す。

各サンプルから回虫卵、鞭虫卵が普遍的に検出された。サンプル1～4で肝吸虫卵、サンプル2から異形吸虫類卵、サンプル2、4で日本海裂頭条虫卵が検出された。寄生虫卵の密度は各サンプルとも1 cm<sup>3</sup>中に1,000個を大きく越える。サンプル2、4では10,000個を越え、サンプル4では90,000個に達する。

### 4. 花粉分析

#### (1) 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

2) 水洗した後、0.5 mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。

5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500 rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974、1977)を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、固体変化や類似種があることからイネ属型とした。

#### (2) 結果

出現した分類群は、樹木花粉16、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉21、シダ植物孢子2形態の計42である。これらの学名と和名および粒数を表3に示す。主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

#### 〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属—アサダ、クリーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、サンショウ属、ニシキギ科、トチノキ、ニワトコ属—ガマズミ属



〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科ーイラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科ーヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ソラマメ属、ノブドウ、セリ科、センブリ属ーツルリンドウ属ーリンドウ属、シソ科、ナス科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属、ベニバナ

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

#### 1) SE2 6層 (サンプル1)

樹木花粉は極めて低率である。センブリ属ーツルリンドウ属ーリンドウ属、イネ属型を含むイネ科、クワ科ーイラクサ科、アカザ科ーヒユ科の出現率が高い。他にアブラナ科、ソバ属などが出現する。

#### 2) SK28 底面 (サンプル2)

樹木花粉は極めて低率である。イネ属型を含むイネ科、アカザ科ーヒユ科、クワ科ーイラクサ科の出現率が高い。他にアブラナ科、ソバ属、ヨモギ属などが出現する。

#### 3) SK30 3層 (サンプル3)

樹木花粉は極めて低率である。イネ属型を含むイネ科、アカザ科ーヒユ科、クワ科ーイラクサ科、アブラナ科、ヨモギ属の出現率が高い。他にソバ属などが出現する。

#### 4) SK31 4層 (サンプル4)

樹木花粉は極めて低率である。イネ属型を含むイネ科、アブラナ科の出現率が高い。他にアカザ科ーヒユ科、ソバ属、センブリ属ーツルリンドウ属ーリンドウ属などが出現する。

#### 5) SK45 5層 (サンプル5)

樹木花粉は極めて低率である。イネ属型を含むイネ科、アブラナ科、アカザ科ーヒユ科、の出現率が高い。他にソバ属、センブリ属ーツルリンドウ属ーリンドウ属など出現する。

## 5. 種実同定

### (1) 方法

試料(堆積物)100 cc を 0.25 mm の篩を用いて水洗選別を行い、その残渣を双眼実体顕微鏡下で観察した。必要に応じて生物顕微鏡観察も行った。同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、節、種の階級で示した。

### (2) 結果

全体のサンプルから、樹木 7、草本 18 の計 25 が同定された。このうち、サンプル 1 (SE2, 6層) では、ウリ類、ナス、キイチゴ属が多い。他にヒエ属、ナス科などが出現する。サンプル 2 (SK28, 底面) では、ウリ類、マタタビ属、ナスが多い。他にアケビ、キイチゴ属、グミ属が出現する。サンプル 3 (SK30, 3層) からは、ウリ類、マタタビ属、ナスなどが出現する。サンプル 4 (SK31, 4層) では、ナス、ゴマが多く、キイチゴ属、マタタビ属、ウリ類が出現する。サンプル 5 (SK45, 5層) では、キイチゴ属、ナス、ウリ類などが出現する。

学名、和名および粒数を表 4 に示し、主要な分類群を写真に示す。

以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

a. クワ属 *Morus* 種子 クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。長さ2.0 mm、幅1.5 mm。

b. アケビ *Akebia quinata* Decne 種子 アケビ科

光沢のある黒色で卵形を呈し、下端にヘソがある。断面は楕円形である。長さ6.1~6.7 mm、幅4.0~4.5 mm。

c. キイチゴ属 *Rubus* 核バラ科

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。長さ1.9~2.3 mm、幅1.2~1.3 mm。

d. ブドウ属 *Vitis* 種子 ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には楕円形のカラザがある。長さ3.4~4.2 mm、幅2.7~3.4 mm。

e. マタタビ属 *Actinidia* 種子 マタタビ科

茶褐色で楕円形を呈す。表面には規則的に並ぶ孔がある。長さ1.8~2.6 mm、幅1.3~1.9 mm。

f. グミ属 *Elaeagnus* 種子 グミ科

茶褐色で長楕円形を呈す。表面には、縦方向に8本の筋が走る。長さ6.5~9.2 mm、幅3.1~4.0 mm。

g. ガマズミ属 *Viburnum* 核 スイカズラ科

茶褐色で楕円形を呈す。腹面に1本と背面に2本の浅い溝が走り、下端に小さなヘソがある。長さ5.2 mm、幅3.7 mm。

〔草本〕

h. イネ *Oryza sativa* L. 穎 イネ科

穎の破片である。茶褐色を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。

i. ヒエ *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno 穎 イネ科

茶褐色で楕円形を呈す。表面には微細な縦方向の模様がある。長さ3.2~3.9 mm、幅1.8~2.3 mm。内穎の長細胞の側壁が深く切れ込み、側枝も長い。

j. イネ科 *Gramineae* 穎

黄褐色で長楕円形を呈す。長さ2.1 mm、幅0.8 mm。

k. ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色でやや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起がある。長さ2.1~2.2 mm、幅1.9~2.0 mm。

l. イボクサ *Aneilema Keisak* Hassk. 種子 ツユクサ科

黒褐色~黒色で楕円形を呈す。片面に一文字状のへそがあり、側面にくぼんだ発芽孔がある。長さ3.4~3.5 mm、幅1.8~2.1 mm。

m. コナギ *Monochoria vaginalis* Presl var. *plantaginea* Solms-Laub. 種子 ミズアオイ科

淡褐色で楕円形である。表面には縦方向に8~10本程度の隆起があり、その間には横方向に微細な隆線がある。種皮は薄く、半透明である。長さ1.0 mm、幅0.5 mm。

n. タデ属 A・B *Polygonum* A・B 果実 タデ科

タデ属Aは黒褐色で卵形を呈し、基部に突起を持つ。表面には網目模様があり、断面は両凸レンズ形である。長さ2.7~2.9 mm、幅1.9~2.0 mm。



タデ属Bは黒褐色で卵形を呈し、先端がややとがる。断面は両凸レンズ形である。長さ2.2 mm、幅1.5 mm。

o. アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科

黒色で光沢があり、円形を呈す。中央にくぼんだヘソがあり、ヘソから周縁まで浅い溝がはしる。径1.0~1.1 mm。

p. ヒユ属 *Amaranthus* 種子 ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、1ヶ所が切れ込みヘソがある。断面は両凸レンズ形である。径1.2~1.3 mm。

q. ナデシコ科 *Caryophyllaceae* 種子

黒色で円形を呈し、一端がくびれてヘソがある。表面には小突起が密に分布する。径0.9 mm。

r. カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科

茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に6~8本の隆起が走る。長さ1.5 mm、幅0.8 mm。

s. シソ属 *Perilla* 果実 シソ科

茶褐色で球形を呈し、下端にヘソがある。表面には大きい網目模様がある。径1.5~1.7 mm。

t. シソ科 *Labiatae* 果実

茶褐色で長倒卵形を呈し、一端は切形である。表面は粗い。断面は三角形である。長さ2.1 mm、幅1.2 mm。

u. ナス *Solanum melongena* L. 種子 ナス科

茶褐色~黄褐色で円形を呈し、一端にくぼみがある。表面には不規則で微細な網目模様がある。断面は偏平である。径3.0~3.4 mm。

v. ナス科A・B *Solanaceae* A・B 種子

Aは黄褐色で円形を呈す。表面には網目模様がある。径2.0~2.3 mm。

Bは黄褐色で楕円形を呈す。表面には網目模様がある。長さ1.7~2.0 mm、幅1.3~1.5 mm。

w. ゴマ *Sesamum indicum* L. 種子 ゴマ科

黄褐色~茶褐色で楕円形を呈し、一端がややとがる。表面には微細な網目模様がある。長さ2.6~2.9 mm、幅1.7~1.8 mm。

x. ウリ類 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

淡褐色~黄褐色で長楕円形を呈す。上端は「ハ」字状にくぼむ。

SE2出土の種子を任意に100個体を取り出し、長さについて計測し、その傾向を調べた(表5)。藤下(1992)は現生種子の分類から、6.0 mm以下の小粒種子(雑草メロン型)、6.1~8.0 mmの中粒種子(マクワウリ・シロウリ型)、8.0 mm以上の大粒種子(モモルディカメロン型)に分類した。本試料では雑草メロン型が12個、マクワウリ・シロウリ型が64個体、モモルディカメロン型が24個体であった。最大粒長は9.8 mm、最小粒長は4.8 mmで、平均粒長は7.3 mmである。

y. キカラスウリ *Trichosanthes kiriiwii* Maxim. var. *japonica* Kitam. 種子 ウリ科

茶褐色で長楕円形を呈す。一端にへそがありその両側は小さく翼状に発達する。断面は偏平である。表面はやや粗い。長さ12.8 mm、幅8.0 mm。

## 6. 考察

### (1) トイレ遺構の可能性

寄生虫卵分析では、SE2 6層（サンプル1）、SK28 底面（サンプル2）、SK30 3層（サンプル3）、SK31 4層（サンプル4）、SK45 5層（サンプル5）の5試料ともに1 cm<sup>3</sup>中に1,000個を大きく越える密度の寄生虫卵が検出され、なかでもSK31 4層（サンプル4）では90,000個に達する量である。

花粉分析では、各試料とも樹木花粉は極めて低率であり、イネ属型を含むイネ科の出現率が高く、SK30 3層（サンプル3）、SK31 4層（サンプル4）、SK45 5層（サンプル5）ではアブラナ科、SE2 6層（サンプル1）ではセンブリ属—ツルリンドウ属—リンドウ属の出現率が高い。これらの花粉は、食用や薬用になる植物である。また、試料によってはアカザ科—ヒユ科とクワ科—イラクサ科の出現率がやや高いが、これらについては摂食された植物に起因するか、周囲に繁茂していた植物の反映かは判断しにくい。種実同定では組成がやや異なるものの、各試料ともアケビ、キイチゴ属、マタタビ属、グミ属、ナス、ゴマ、ウリ類の食用となる果実がほとんどを占める。

以上からみて、SE2 6層（サンプル1）、SK28 底面（サンプル2）、SK30 3層（サンプル3）、SK31 4層（サンプル4）、SK45 5層（サンプル5）は明らかに人の糞便の累積した堆積物とみなされる。よって、遺構自体もトイレ遺構か糞便が意識的に集積された肥溜のような遺構と考えられる。

### (2) 食生活と薬用植物について

寄生虫卵の組成では、各試料とも回虫卵、鞭虫卵の占める割合が高い。回虫、鞭虫は一般的には定住農耕によって農作物などの摂食によって感染して蔓延する。花粉で多いイネ属型ないしイネ科の穀類やアブラナ科の野菜類が頻繁に食べられ、これらが回虫、鞭虫の主要な感染源であったと考えられる。肝吸虫卵はやや少なく、コイ科の淡水魚も少しは食べられていたとみなされる。SK31 4層（サンプル4）では日本海裂頭条虫卵が検出されたことから、サケ・マス類の摂食が示唆される。他の試料ではほとんど出現していないため、サケ・マス類の摂食になんらかの制限があったことが考えられよう。なお、寄生虫卵密度が高いことから、寄生虫症が蔓延しており、本遺跡の人々が野菜類や魚類を不完全調理ないし生に近い状態で食べていたことが推察される。

花粉ではイネ属型およびイネ科が多くみられる。SE2 6層（サンプル1）からイネとヒエの類が検出されていることから、イネやヒエの果実（穎果）に起因する花粉と考えられる。つまり、イネやヒエ等のイネ科の穀類は穎のなかに多くの花粉が残存するため、脱穀した後でも穎果に花粉が付着している可能性が高い。したがって、これらを摂食した際にそこに付着していたであろう花粉も一緒に摂食され、それが便とともに排泄されたものと考えられる。なお、イネやヒエは主食であったとみなされる。花粉の多いアブラナ科は野菜として花芽も含めた植物が摂食されたとみなされる。クワ科—イラクサ科とアカザ科—ヒユ科あるいはヨモギ属は、食用、香辛料、薬用になる種類も含まれるが、他に花粉生産量の高い風媒花の人里の雑草もあり、人体より排泄されたものか外部より混入したものかの判断はできない。センブリ属—ツルリンドウ属—リンドウ属にはSE2 6層（サンプル1）で出現率が高く、SK31 4層（サンプル4）、SK45 5層（サンプル5）でも出現する。この分類群には薬用となるセンブリ *Swertia japonica* Makino が含まれる。センブリを薬用とする際には全草を用いるため十分に花粉が反映されると考えられる。当時、センブリが胃薬として用いられていたことが示唆される。

食用となる果実はクワ属、アケビ、キイチゴ属、ブドウ属、マタタビ属、グミ属、ガマズミ属、ナス、ゴマ、ウリ類と多様である。試料によって組成がかなり異なり、SE2 6層（サンプル1）ではウリ類、ナス、

キイチゴ属、SK28 底面（サンプル 2）ではウリ類、マタタビ属、ナス、SK30 3 層（サンプル 3）では全体に少なく、SK31 4 層（サンプル 4）ではナス、ゴマ、SK45 5 層（サンプル 5）ではキイチゴ属、ナス、ウリ類が多く、それぞれ果実として多く摂食されていたとみなされる。なお、遺構による異なりは堆積部位や個体差による偏り、季節性、しいては食べ物の嗜好などを反映していると推定される。なお、ナス科はイヌホオズキなどに類似するもので食用となった可能性もある。

以上、イネ、ヒエの穀類とアブラナ科の野菜類が多く食べられ、ナス、ウリ類等の作物、キイチゴ属、マタタビ属等の果物、サケ・マス類の摂食が示唆される。

### 参考文献

- 金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扇形動物。医動物学，新版臨床検査講座，8，医歯薬出版，p.9-55.
- 金原正明（1994）便所堆積物からさぐる古代人の食生活。助成研究の報告 4，味の素の文化センター，p.35-48.
- 金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫。藤原京跡の便所遺構—藤原京 7 条 1 坊一，奈良国立文化財研究所，p.14-15.
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集，60 p.
- 中村純（1973）花粉分析。古今書院，p.82-110.
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として、第四紀研究，13，p.187-193.
- 中村純（1977）稲作とイネ花粉。考古学と自然科学，第 10 号，p.21-30.
- 中村純（1980）日本産花粉の標徴。大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91 p.
- Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Jounal of Archaeological Science*, 19, p.231-245.

表 2 泉屋遺跡 15 次調査における寄生虫卵分析結果

分類群 (試料 0.1 cc 中)		サンプル 1	サンプル 2	サンプル 3	サンプル 4	サンプル 5
学 名	和 名	SE2 6 層	SK28 底面	SK30 3 層	SK31 4 層	SK45 5 層
Helminth eggs	寄生虫卵					
<i>Ascaris</i>	回虫卵	608	1332	122	4770	474
<i>Trichuris</i>	鞭虫卵	197	812	87	4400	769
<i>Clonorchis sinensis</i>	肝吸虫卵	8	8	1	35	
<i>Metagonimus-Heterophyes</i>	異形吸虫類卵		4			
<i>Diphyllothrium nihonkaiense</i>	日本海裂頭条虫卵		28		299	
Total	計	813	2184	210	9504	1243
	(試料 1 cc 中に算定)	8130	21840	2100	95040	12430

表3 泉屋遺跡 15 次調査における花粉分析結果

分類群		サンプル 1	サンプル 2	サンプル 3	サンプル 4	サンプル 5
学名	和名	SE2 6層	SK28 底面	SK30 3層	SK31 4層	SK45 5層
Arboreal pollen	樹木花粉					
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	2	1	1		1
<i>Pinus subgen. Haploxylon</i>	マツ属単維管束亜属	1		1		
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	2	1	3		1
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ				1	1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属			4	1	1
<i>Betula</i>	カバノキ属			1	1	1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ					1
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シイ属	4	1	5	2	4
<i>Fagus</i>	ブナ属			4	2	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属			5	3	
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属			2	1	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	1		1	1	
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	1				
Celastraceae	ニシキギ科					1
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	2	1	1		1
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属	1				
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	73	31	31	4	21
Rosaceae	バラ科	1				
Leguminosae	マメ科	1			2	
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Gramineae	イネ科	97	97	126	131	119
<i>Oryza type</i>	イネ属型	14	62	6	40	41
Cyperaceae	カヤツリグサ科		1	4	1	12
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1	4	3	1	
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	3	4	2	12	4
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	42	91	39	24	146
Caryophyllaceae	ナデシコ科			38	5	5
<i>Ranunculus</i>	キンボウゲ属					1
Cruciferae	アブラナ科	6	12	48	176	118
<i>Vicia</i>	ソラマメ属				1	2
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>	ノブドウ					2
Umbelliferae	セリ科	1		2		
<i>Swertia-Tripterispermum-Gentiana</i>	センブリ属-ツルリンドウ属 -リンドウ属	127		1	11	22
Labiatae	シソ科				1	1
Solanaceae	ナス科		1		2	11
<i>Plantago</i>	オオバコ属	9		1		
Lactucoideae	タンポポ科		1	6	1	
Asteroideae	キク亜科		1	1		
<i>Xanthium</i>	オナモミ属			1		2
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	7	19	45	12	47
<i>Carthamus tinctorius</i>	ベニバナ					1
Fern spore	シダ植物孢子					
Monolate type spore	単条溝孢子		1	4		3
Trilate type spore	三条溝孢子	4		4	2	5
Arboreal pollen	樹木花粉	14	4	28	12	12
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	75	31	31	6	21
Nonarboreal pollen	草本花粉	307	293	323	418	534
Total pollen	花粉総数	396	328	382	436	567
	(1 cc中に算定)	7128	6560	30560	76736	27216
Unknown pollen	未同定花粉	4	0	2	3	7
Fern spore	シダ植物孢子	4	1	8	2	8

表4 泉屋遺跡15次調査における種実同定結果

分類群 (100 cc中)			サンプル1	サンプル2	サンプル3	サンプル4	サンプル5
学名	和名	部位	SE2 6層	SK28 底面	SK30 3層	SK31 4層	SK45 5層
arbor							
樹木							
<i>Morus</i>	クワ属	種子					1
<i>Akebia quinata Decaisne</i>	アケビ	種子		15			
<i>Rubus</i>	キイチゴ属	核	162	8	3	64	68
<i>Vitis</i>	ブドウ属	種子	4				3
<i>Actinidia</i>	マタタビ属	種子		193	6	47	3
<i>Elaeagnus</i>	グミ属	種子		40	2	2	
<i>Viburnum</i>	ガマズミ属	核		1	1		
herb							
草本							
<i>Oryza sativa L.</i>	イネ	穎	1				
<i>Echinochloa utilis Ohwi et Yabuno</i>	ヒエ	穎	17	1			
Gramineae	イネ科	穎	1				
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実		2	1	2	
<i>Aneilema keisak Hassk.</i>	イボクサ	種子	1			1	
<i>Monochoria vaginalis Presl</i> <i>var. plantaginea Solms Laub.</i>	コナギ	種子		1			
<i>Polygonum A</i>	タデ属A	果実	4	1	1		
<i>Polygonum B</i>	タデ属B	果実	1				
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	1	1	5	1	
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子	1	3	4	2	2
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子			1		
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子			1		
<i>Perilla</i>	シソ属	果実 破片		4		15 4	1
Labiatae	シソ科	果実	1				
<i>Solanum melongena L.</i>	ナス	種子 破片	204 38	100 35	24 19	129 111	10 11
Solanaceae A	ナス科A	種子	4	2	1	34	1
Solanaceae B	ナス科B	種子	40		1	11	
<i>Sesamum indicum L.</i>	ゴマ	種子	1	3	1	85	
<i>Cucumis melo L.</i>	ウリ類	種子 破片	289 14	232 4	10 6	14 14	4 4
<i>Trichosanthes kirilowii Maxim.</i> <i>var. japonica Kitam</i>	キカラスウリ	種子			2		
Total	合計		784	646	89	536	108
Unknown	不明		1			13	

表5 泉屋遺跡第15次調査  
SE2 6層ウリ類計測値

長さ(mm)			
8.6	6.1	7.1	8.0
8.1	8.7	7.8	7.3
7.7	6.3	8.2	8.2
9.8	6.4	8.2	7.2
8.6	6.8	6.9	7.5
8.8	6.6	7.7	6.5
7.6	9.1	8.1	6.6
9.4	6.4	7.5	7.7
8.4	6.7	5.0	6.8
6.3	7.7	7.1	8.6
8.4	7.4	7.5	6.2
8.2	8.0	7.7	7.6
8.4	6.6	5.4	7.0
7.8	7.5	7.4	7.7
6.8	5.6	7.1	5.7
6.8	5.9	6.6	6.8
9.0	6.9	6.9	6.3
7.0	5.6	7.0	6.0
7.1	6.8	7.5	5.8
7.0	6.9	7.9	4.8
7.0	6.3	8.1	7.6
4.6	7.7	7.8	7.7
8.2	8.1	5.4	8.5
7.1	7.9	5.9	7.4
8.2	6.8	7.0	8.3
	平均値		7.3

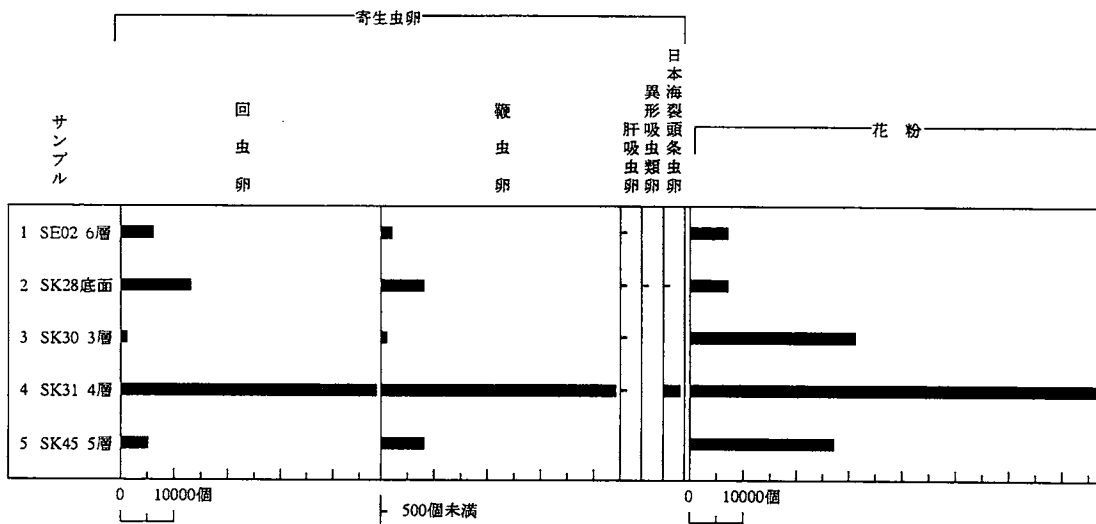


図1 泉屋遺跡15次調査における寄生虫卵および花粉の出現密度 (試料1cc中)

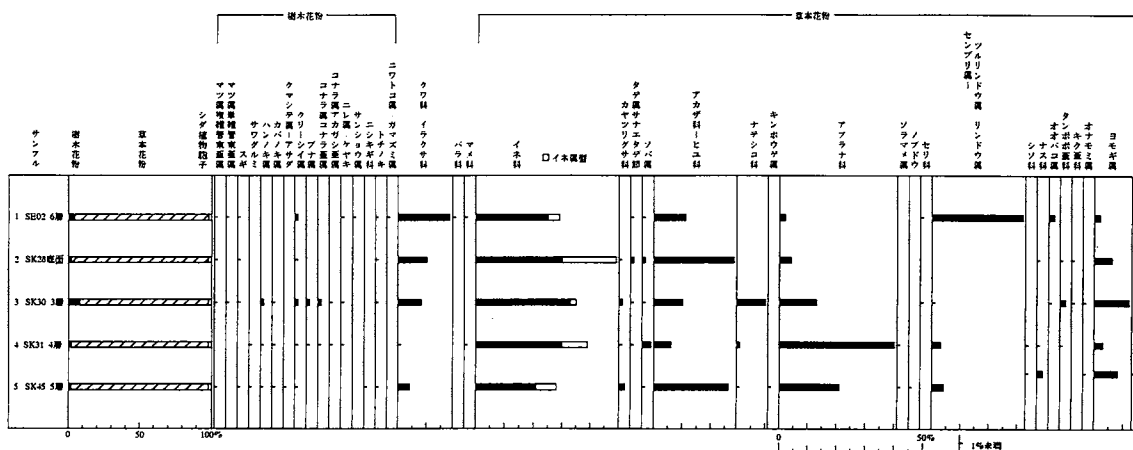


図2 泉屋遺跡15次調査における花粉組成図 (花粉総数が基数)

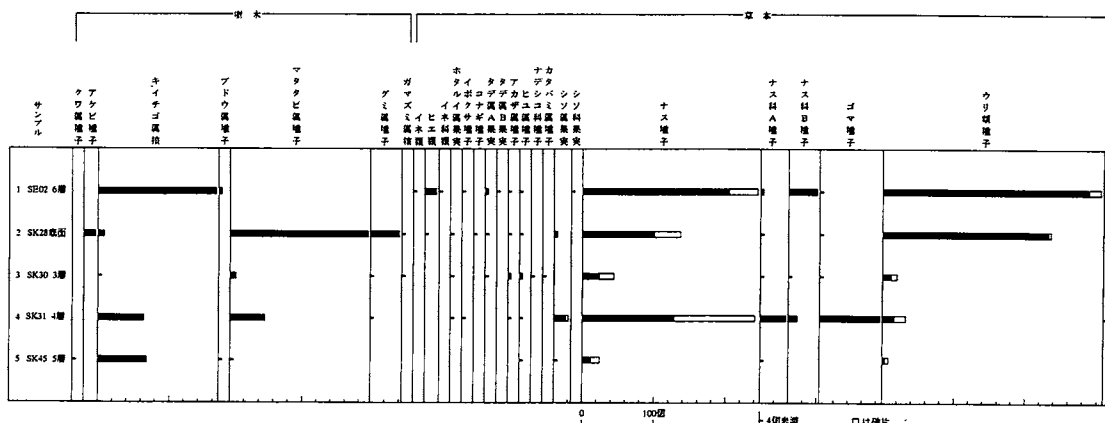
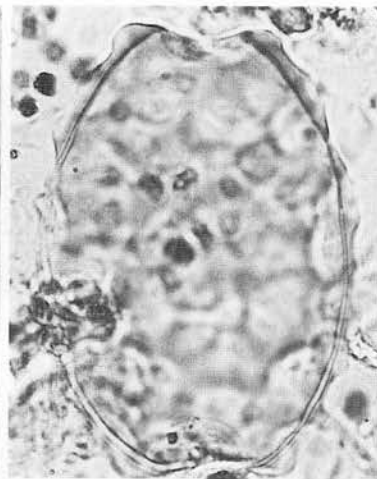


図3 泉屋遺跡15次調査における種実検出図 (試料100cc中)

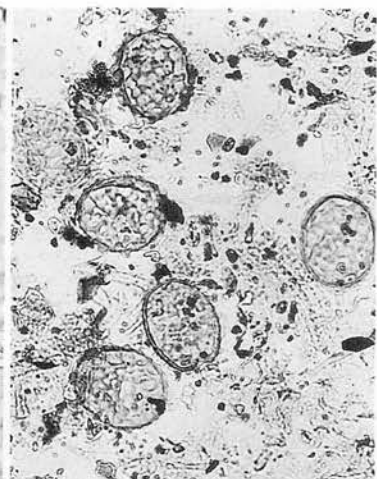
泉屋遺跡の寄生虫卵・花粉・孢子遺体



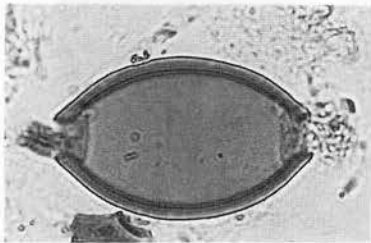
1 回虫卵



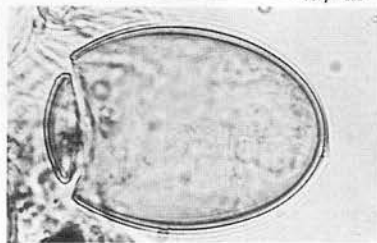
2 回虫卵  
45 μm



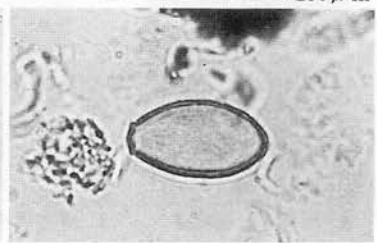
3 回虫卵  
180 μm



4 鞭虫卵



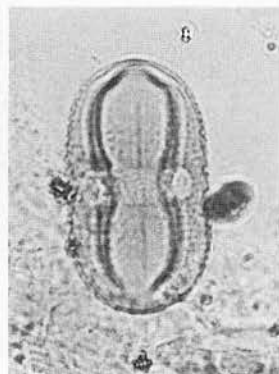
5 日本海裂頭条虫卵



6 肝吸虫卵



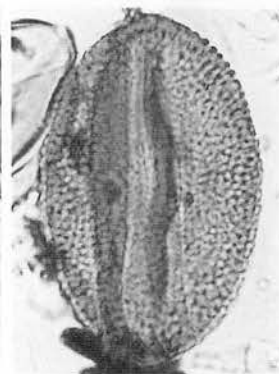
7 カラハナソウ属



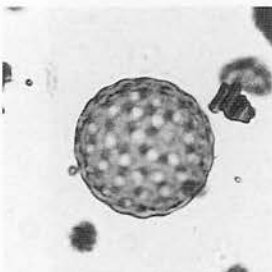
8 マメ科



9 イネ属型



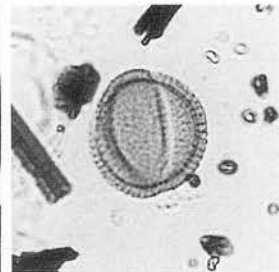
10 ソバ属



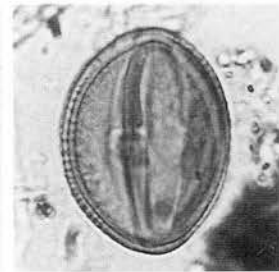
11 アカザ科-ヒユ科



12 ナデシコ科



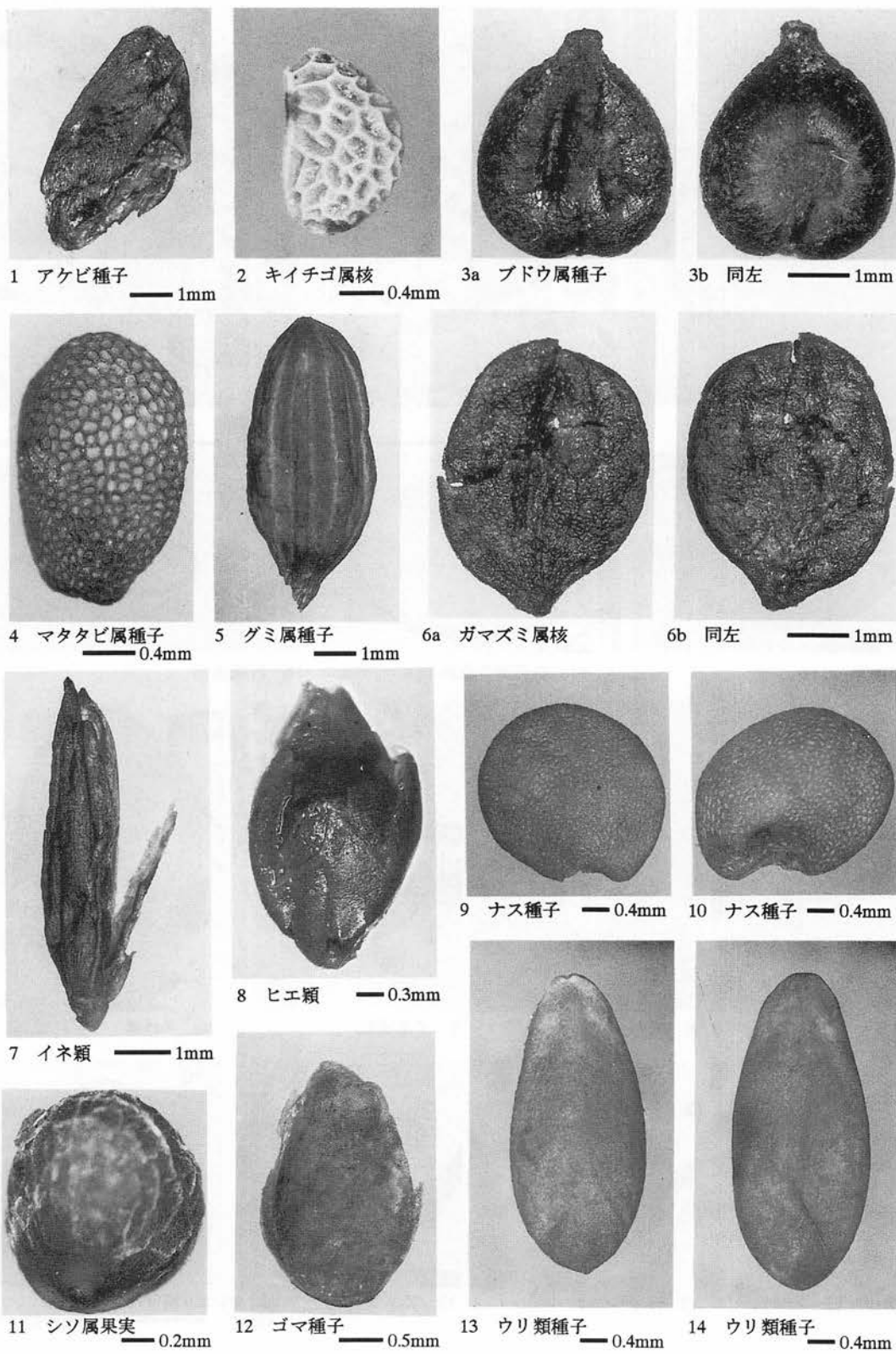
13 アブラナ科



14 センブリ属-ツルリンドウ属-リン  
ドウ属  
45 μm



泉屋遺跡第15次調査出土種実



## 2 平泉町泉屋遺跡第 15 次調査出土材の樹種

高橋 利彦 (木工舎「ゆい」)

### 1. 試料

試料は No. 1～62 であるが、切片作製用の材片試料を採取する際に下駄の台と差歯、桶の側板と底板など複数の部材からなるものは a,b,c の枝番をつけて取り上げたため、試料総数は 69 点となる。試料は 12 世紀・12～13 世紀・中世後半?・近世・近世～近代のものとする井戸跡や土坑・柱穴から検出された木製品・加工材で、曲物や下駄・桶などの日用品、柱などの建築部材などと推定されている。(表 1 参照)

### 2. 方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柀目・板目の 3 面の徒手切片を作製、ガム・クロラル (Gum Chloral) で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版 (図版 1～4) も作製した。なお作製したプレパラートはすべて木工舎「ゆい」に保管されている。

### 3. 結果

試料は以下の 11 Taxa (分類群、ここでは属・亜属・節・種の異なった階級の分類単位を総称している) に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、各 Taxon の科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物 木本 I・II」(1989) にしたがった。また、一般的性質などについては「木の事典 第 1 巻～第 17 巻」(1979～1982) も参考にした。

・マツ属複維管束亜属の一種 (*Pinus* subgen. *Diploxylon* sp.) マツ科 No.13,38,39b,62.

早材部から晩材部への移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞よりなり、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状。放射組織は単列、1～15 細胞高のものとして樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

複維管束亜属 (いわゆる二葉松類) にはクロマツ (*Pinus thunbergii*)・アカマツ (*P. densiflora*) と琉球列島特産のリウキュウマツ (*P. luchuensis*) の 3 種がある。アカマツは北海道南部から九州に、クロマツは本州から琉球に分布するが暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途が知られている。

・スギ (*Cryptomeria japonica*) スギ科 No. 1, 2, 3, 4, 5, 14, 17, 20, 21, 22, 30, 31a, 31b, 39a, 40, 57.

早材部から晩材部への移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型 (Taxodioid) で 2～4 個。放射組織は単列、1～20 細胞高。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では現在ヒノキに次ぐ植林面積をもち、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

・ヒノキ属の一種 (*Chamaecypris* sp.) ヒノキ科 No. 6,12,18,23,26,27a,27b,34a,34b.

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型(Cupressoid)で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

ヒノキ属にはヒノキ (*Chamaecypris obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは本州(福島県以南)・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内では現在植林面積第1位の重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きいが強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州(岩手県以南)・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが、耐水性が高いため樽や桶にするほか各種の用途がある。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* var. *sachalinensis*) クルミ科 No.54.

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独および2～4個が複合、横断面では楕円形。道管は単穿孔をもつ。放射組織は同性～異性Ⅲ型、1～4細胞幅、1～40細胞高。柔組織は短接線状、周囲状。年輪界は明瞭。

オニグルミは北海道から九州までの川沿いなどに生育する落葉高木である。材の硬さは中程度、加工は容易で狂いが少なく、保存性は低い。銃床として広く用いられるほか、各種器具・家具材などの用途も知られている。

・ブナ属の一種 (*Fagus* sp.) ブナ科 No.36,37.

散孔材で管孔は単独または放射方向に2～3個が複合、横断面では多角形、管壁はやや薄く、分布密度は高い。道管は単穿孔および段(bar)数が10前後の階段穿孔をもち、壁孔は大型で対列状～階段状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は同性～異性Ⅲ型、単列・数細胞高のものから複合組織まである。柔組織は短接線状および散在状。年輪界は明瞭～やや不明瞭。

ブナ属にはブナ (*Fagus crenata*) とイヌブナ (*F. japonica*) の2種がある。ブナは北海道南西部(黒松内低地帯以南)・本州・四国・九州に、イヌブナは本州(岩手県以南)・四国・九州の主として太平洋側に分布する。イヌブナのほうがブナより低標高地から生育し、またブナのような大群落をつくることはない。ブナは日本の冷温帯落葉樹林を代表する樹木で、かつては東日本の山地に広く生育していた。材はやや重硬で、強度は大きい加工はそれほど困難ではなく、耐朽性は低い。木地・器具・家具・薪炭材などの用途があったが、最近では各種の用途に用いられている。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* sp.) ブナ科 No.28a,28b.

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形～楕円形、小道管は管壁はやや薄く、横断面では多角形、ともに単独。単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものとの複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で果実(いわゆるドングリ)が1年目に熟するグループで、カシワ (*Quercus dentata*)・ミズナラ (*Q. crispula*)・コナラ (*Q. serrata*)・ナラガシワ (*Q. aliena*) とい

くつかの変・品種を含む。ミズナラ・カシワ・コナラは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。このうち平野部で普通に見られるのはコナラである。コナラは樹高 20 m になる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ (*Q. acutissima*) に次ぐ優良材である。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No.7b, 9, 10, 11, 16, 19, 29, 33, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 55, 56, 58, 59, 60, 61.

環孔材で孔圏部は 1～4 列またはそれ以上、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および 2～3 個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単（～2）列、1～15 細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、櫓木や海苔粗朶などの用途が知られている。

・ケヤキ (*Zelkova serrata*) ニレ科 No.24, 35.

環孔材で孔圏部は 1～2 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線～斜方向の紋様をなす。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独、小道管は管壁はやや薄く、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性 III 型、1～10 細胞幅、1～30 細胞高であるが時に 60 細胞高を越える。しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高 50 m にも達する。材はやや重硬で、強度は大きい加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途が知られ、国産広葉樹材の中で最良のものの一つに上げられる。

・モクレン属の一種 (*Magnolia* sp.) モクレン科 No.7a, 15, 32.

散孔材で管壁はやや薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および 2～4 個が放射方向に複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は階段状～対列状に配列、放射組織との間では網目状～階段状となる。放射組織は異性 II 型、1～2 細胞幅、1～40 細胞高。柔組織はターミナル状。年輪界は明瞭。

モクレン属はホオノキ (*Magnolia obovata*)・コブシ (*M. praecocissima*) など 5 種が自生する。ホオノキ・コブシは北海道から九州の適潤～湿性地に生育するが、コブシは西日本にはやや少ない。ホオノキの材は軽軟で、割裂性が大きく、加工は極めて容易で欠点が少ないことから、器具・建築・家具・建具材などのほか、指物・木地・下駄歯・刃物鞘など特殊な用途が知られている。また木炭は金・銀・銅・漆器の研磨に用いられた。コブシの材はホオノキに似るがやや硬く、ホオノキより劣るものとされホオノキに準じた使われ方をする。

・トチノキ (*Aesculus turbinata*) トチノキ科 No.8,25.

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2～5個が複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状～篩状となり、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層状に配列し、肉眼では横縞のリプル・マーク (ripple mark) として認められる。柔組織はターミナル状。年輪界はやや明瞭。

トチノキは北海道 (南西部)・本州・四国・九州の主として谷沿いの肥沃地に生育する落葉高木で、東北地方に多く九州には少ない。材は軽軟で、加工・乾燥が容易で、耐朽性は小さい。器具・家具材や旋作材・木地などに用いられる。

・イネ科タケ亜科の一種 (*Gramineae* subfam. *Bambusoideae* sp.) No.34c.

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。

タケ亜科 (タケ・ササ類) には多数の種が含まれるが、解剖学的には区別できない。

以上の同定結果を出土遺構や推定される用途・所属年代とともに一覧表で示す (表1)。

#### 4. 考察

12世紀のものとされる曲物底板3点 (No.6,8,12) はヒノキ属 (2点) とトチノキに同定された。ヒノキ属製の2点はその一部あるいは半分以上が欠けているが、ともに円形のものである。これに対しトチノキ製のNo.8は、側板を取り付けたと思われる「樺皮」が残っていることから曲物底板とみてほぼまちがいなく、方形隅丸の底板のようである。最大残存長は約27cmあるが樺皮の綴じ目の位置と木取りから判断して、35cm程度の方形またはそれ以上の長方形<sup>1)</sup>と考える。13次調査2号井戸状遺構から出土した12世紀のものとされる曲物も側板はヒノキ科であったが底板はクリが用いられていた (前報)。前報でも指摘したように、曲物の用材は出土遺物・現行ともスギやヒノキが主であり、広葉樹の出土例は福島市御山千軒遺跡 (嶋倉 1983) などごく限られている (伊東ほか 1987, 伊東 1990)。

12世紀のものとされる差歯下駄 (No.7) は台はモクレン属、歯はクリが用いられていた。両Taxaとも近世～近代のものとされる連歯下駄 (No.32,33) の用材ともなっている。また13次調査出土の近世とされる下駄3点もクリ製であった (前報)。類例は、試料よりやや古い時代のものとされるが、仙台市中田南遺跡出土試料でも報告されている<sup>2)</sup> (高橋 1994a)。一方、近世のものとされる差歯下駄 (No.28) は、ほぼ完形で、大きさ (長さ約17cm、幅約10cm) から女性または子供用のものと思うが、台・歯ともにコナラ節が用いられていた。コナラ節 (ナラ) の材は重く、女性や子供には向かないように思う。湯田町白木野II遺跡5号池底面出土の18世紀のものとされる差歯下駄もコナラ節製で (高橋 1994b)、大きさもほぼ同じ (長さ約18cm、幅約7cm) であった。試料とほぼ同時期とされる仙台城三ノ丸跡出土下駄はヒノキアスナロやケヤキなど10Taxa<sup>3)</sup>が用いられているがコナラ節は認められていない<sup>4)</sup> (仙台市教育委員会 1984)。コナラ節の用材は2例目となる (伊東ほか 1987, 伊東 1990) が、東京都青戸・葛西城址出土の中世のものとされる連歯下駄1点 (大人用とされる) は同属のクヌギ<sup>5)</sup>とされている。 (山内 1974)。

漆器は椀3点が検討され、12～13世紀のものとされるNo.35はケヤキ、近世および近世～近代とされる2点 (No.36,37) はともにブナ属であった。13次調査出土試料でも近世のものとされる椀1点と蓋3点がともにブナ属に同定されている (前報)。

柱は8建物址から検出された20点(No.41~60)と所属不明の2柱穴検出の2点(No.61,62)が検討され、近世のものとされるSB12・SB15と時期不明のP375検出試料がそれぞれオニグルミ(No.54)・スギ(No.57)・複雑管束亜属(No.62)に同定されたほかは、いずれもクリに同定された。13次調査でも12世紀から近世以降とされる柱30点のうち種類不明の広葉樹1点を除く29点がクリであった(前報)。耐朽性に優れ強度も大きく掘立柱には最適といえるクリが多用されていることはまちがいないが、ここで認められた3 Taxaに加えて、志羅山遺跡第47次調査ではアサダとコナラ節、松本館跡ではヒノキ属も認められている(別稿)。今後はこうしたクリ以外の樹種にも注目する必要があると考えている。

<注>

- 1) 添付資料の残存長とされているものは板の幅に当たり、欠損部は長さ方向(資料の幅とされる方向)により大きいと判断した。
- 2) 中世後半のものとされる連歯下駄5点はクリに、差歯下駄台はモクレン属、歯はケヤキ(3点)・ヤマグワ(1点)・ケンボナシ(1点)に同定されている。
- 3) 手元の資料では下駄としかわからないが、ヒノキアスナロ(12点)・ケヤキ(10点)・ホオノキ(4点)・不明広葉樹(同一種とされる)(3点)・クルミ属・クリ・キハダ?・ハリギリ?・ミズキ・トネリコ属(各1点)が認められている(光谷 拓実氏の同定による)。
- 4) ただ、遺跡や検出遺構の性格が異なることから単純な比較はできないであろう。
- 5) 山内氏も、'クヌギは下駄の歯として用いられることはあるが、削下駄として使用する例はあまり記録にはないようである'としている。

引用文献

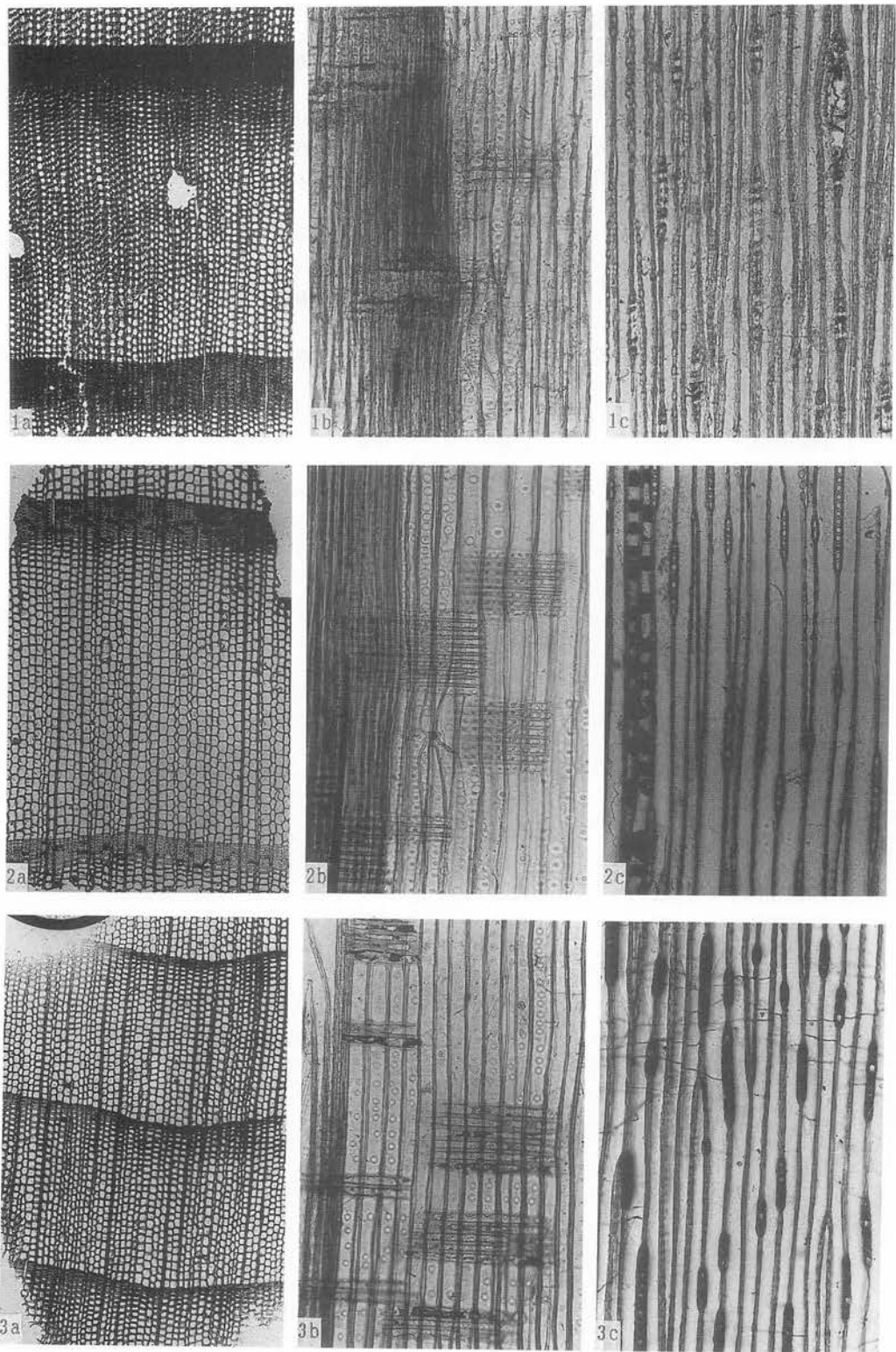
- 平井 信二 1979~1982 「木の事典 第1巻~第17巻」, かなえ書房。
- 伊東 隆夫・山口 和穂・林 昭三・布谷 知夫・島地 謙 1987 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途, 「木材研究・資料」, 第23号, 42-210。
- …………… 1990 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途 II, 「木材研究・資料」, 第26号, 91-189。
- 佐竹 義輔・原 寛・亘理 俊次・富成 忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本I・II」, 平凡社, 321・305 pp.
- 仙台市教育委員会 1985 樹種同定結果について, 「仙台市文化財調査報告書第76集 仙台城三ノ丸跡 発掘調査報告書」, 197-199。
- 鳴倉 巳三郎 1983 御山千軒遺跡から出土した木質遺物, 「福島県文化財調査報告書第109集 東北新幹線関連遺跡発掘調査報告書VI 御山千軒遺跡」, 福島県教育委員会・日本国有鉄道, 付編 9-30。
- 高橋 利彦 1994 a 仙台市中田南遺跡出土材の樹種, 「仙台市文化財調査報告書第182集 仙台市中田南遺跡-古代・中世の集落跡の調査-」, 仙台市教育委員会, 406-422。
- …………… 1994 b 湯田町白木野II遺跡出土材の樹種, 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第200集 白木野I・II・III遺跡発掘調査報告書 東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査報告書」, (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 226-237。
- 山内 文 1974 木製品および自然遺物, 「青戸・葛西城址調査報告 II 東京都・葛飾区・青戸」, 東京都

表1 泉屋遺跡第15次調査出土材の樹種

試料番号	出土遺構	用途	所属年代	種名
1	SE2	ちゅう木状	12世紀	スギ
2	SE2	ちゅう木状	12世紀	スギ
3	SE2	ちゅう木状	12世紀	スギ
4	SE2	ちゅう木?	12世紀	スギ
5	SE5	板	12世紀	スギ
6	SE5	曲物底板	12世紀	ヒノキ属の一種
7a	SE7	差齒下駄台	12世紀	モクレン属の一種
7b	SE7	同上差齒	12世紀	クリ
8	SE7	曲物底板	12世紀	トチノキ
9	SE25	部材	12世紀	クリ
10	SE25	部材	12世紀	クリ
11	SE25	部材	12世紀	クリ
12	SE25	曲物底板	12世紀	ヒノキ属の一種
13	SE8	鈎状製品	近世～近代	マツ属複維管束亜属の一種
14	SE8	桶把手	近世～近代	スギ
15	SE8	不明	近世～近代	モクレン属の一種
16	SE8	くさび	近世～近代	クリ
17	SE8	くさび	近世～近代	スギ
18	SE8	くさび	近世～近代	ヒノキ属の一種
19	SE8	くさび	近世～近代	クリ
20	SE8	不明	近世～近代	スギ
21	SE8	不明	近世～近代	スギ
22	SE8	不明	近世～近代	スギ
23	SE8	桶底板	近世～近代	ヒノキ属の一種
24	SE8	不明	近世～近代	ケヤキ
25	SE23	鉢	近世	トチノキ
26	SE9	桶底板	近世	ヒノキ属の一種
27a	SE9	桶底板	近世	ヒノキ属の一種
27b	SE9	同上木釘	近世	ヒノキ属の一種
28a	SE23	差齒下駄台	近世	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
28b	SE23	同上差齒	近世	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
29	SE10	部材?	近世	クリ
30	SE14	へら	近世	スギ
31a	SE16	桶側板	近世～近代	スギ
31b	SE16	同上底板	近世～近代	スギ

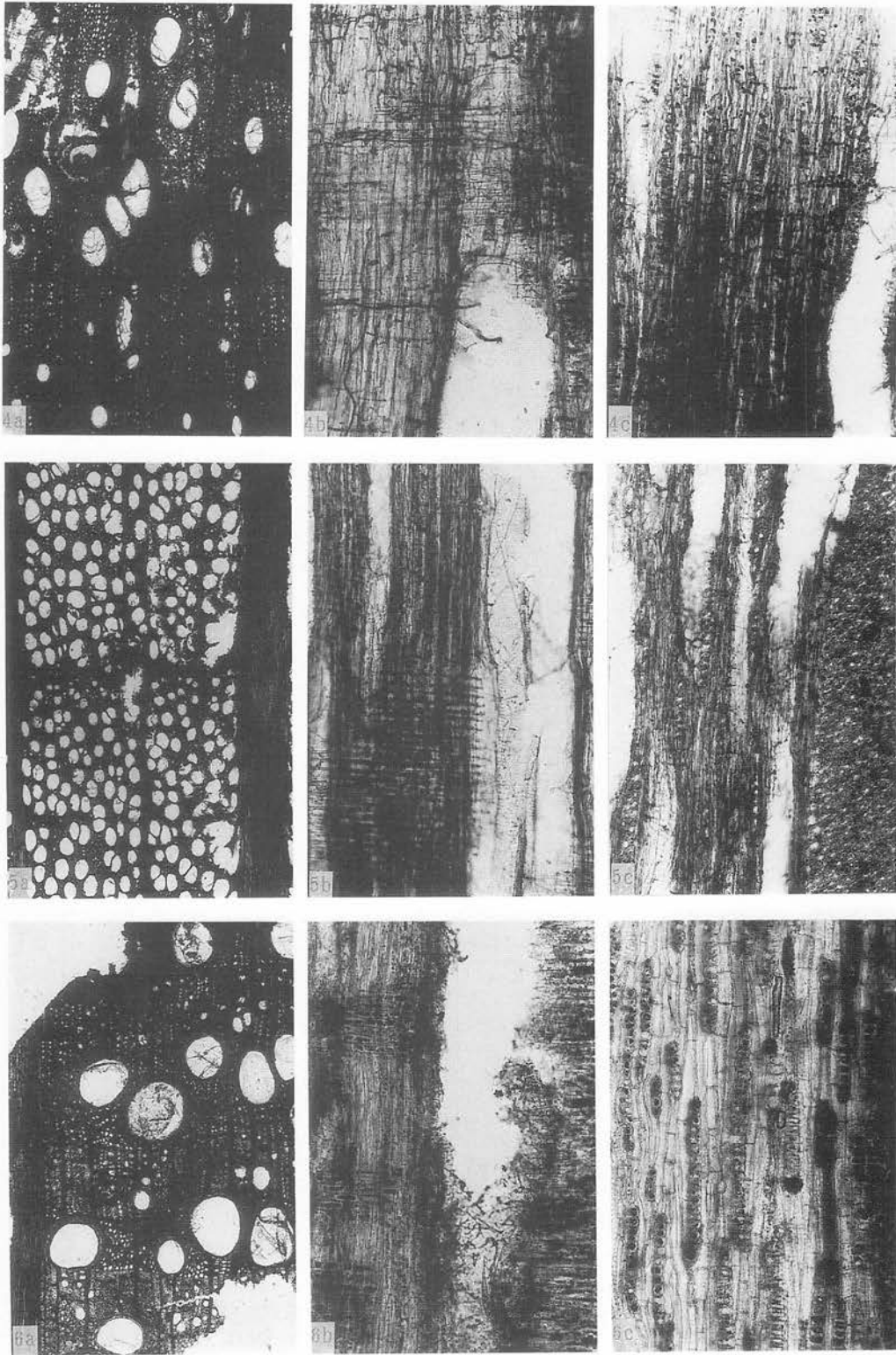


試料番号	出土遺構	用途	所属年代	種名
32	SE16	連齒下駄	近世～近代	モクレン属の一種
33	SE16	連齒下駄	近世～近代	クリ
34a	SE20	桶側板	近世～近代	ヒノキ属の一種
34b	SE20	同上底板	近世～近代	ヒノキ属の一種
34c	SE20	同上木釘	近世～近代	イネ科タケ亜科の一種
35	SK35	漆塗椀	12～13世紀	ケヤキ
36	SE9	漆塗椀	近世	ブナ属の一種
37	SE16	漆塗椀	近世～近代	ブナ属の一種
38	SK18	桶底板	近世	マツ属複雑管束亜属の一種
39a	SK37	桶側板	近世	スギ
39b	SK37	同上底板	近世	マツ属複雑管束亜属の一種
40	SK26	桶底板	近世	スギ
41	P85(SB1)	柱	近世	クリ
42	P86(SB1)	柱	近世	クリ
43	P90(SB1)	柱	近世	クリ
44	P113(SB1)	柱	近世	クリ
45	P148(SB1)	柱	近世	クリ
46	P149(SB1)	柱	近世	クリ
47	P155(SB1)	柱	近世	クリ
48	P160(SB1)	柱	近世	クリ
49	P153(SB3)	柱	不明	クリ
50	P533(SB9)	柱	近世	クリ
51	P577(SB9)	柱	近世	クリ
52	P584(SB9)	柱	近世	クリ
53	P580(SB12)	柱	近世	クリ
54	P607(SB12)	柱	近世	オニグルミ
55	P535(SB15)	柱	近世	クリ
56	P591(SB15)	柱	近世	クリ
57	P617(SB15)	柱	近世	スギ
58	P581(SB16)	柱	近世	クリ
59	P341(SB17)	柱	中世後半?	クリ
60	P407(SB25)	柱	中世後半?	クリ
61	P154	柱	不明	クリ
62	P375	柱	不明	マツ属複雑管束亜属の一種



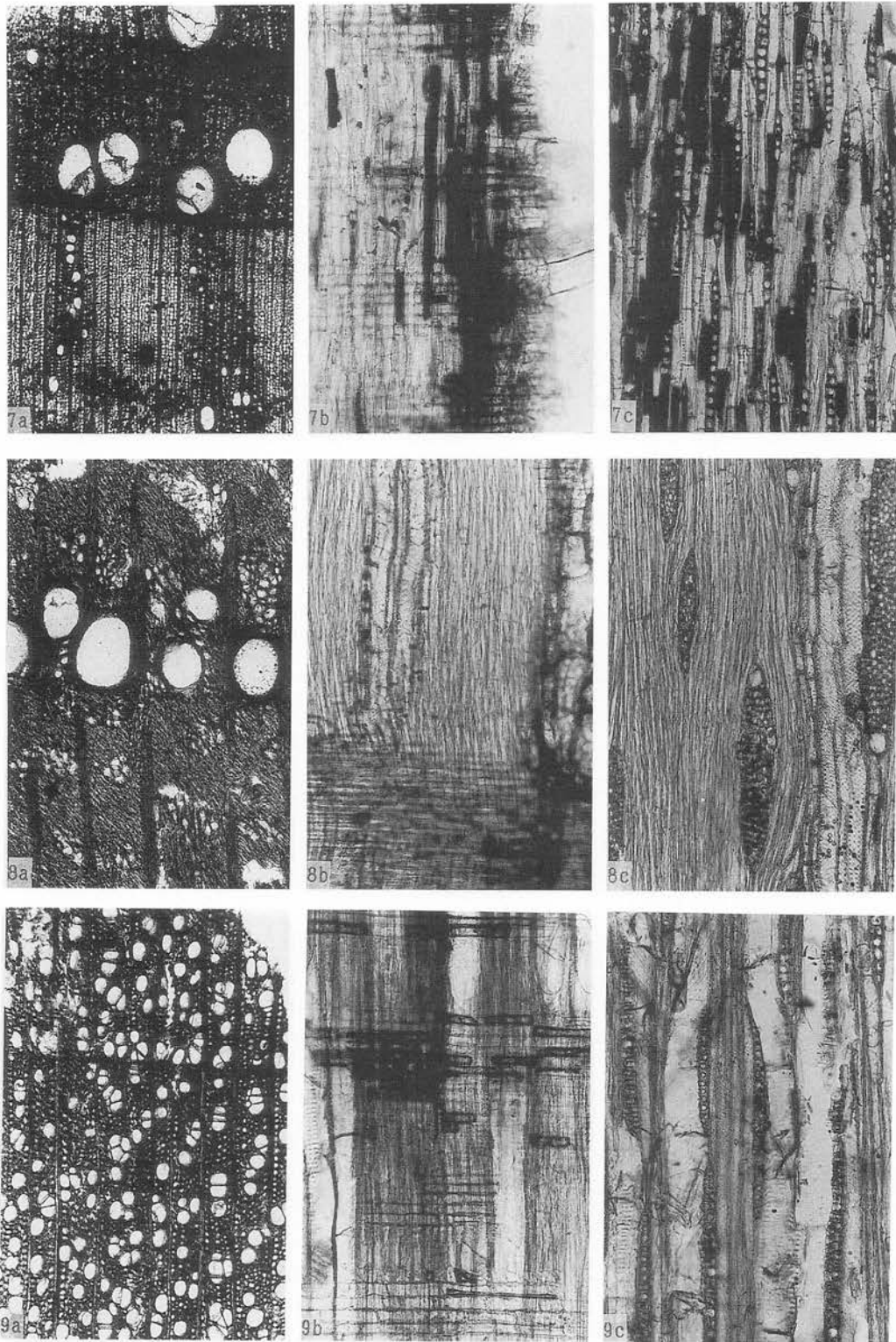
図版1 1. マツ属複維管束亜属の一種 No.13  
 2. スギ No.3  
 3. ヒノキ属の一種 No.27a

a:木口  $\times 40$  b:柾目  $\times 100$  c:板目  $\times 100$   
 樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上  
 柾目では左から右.



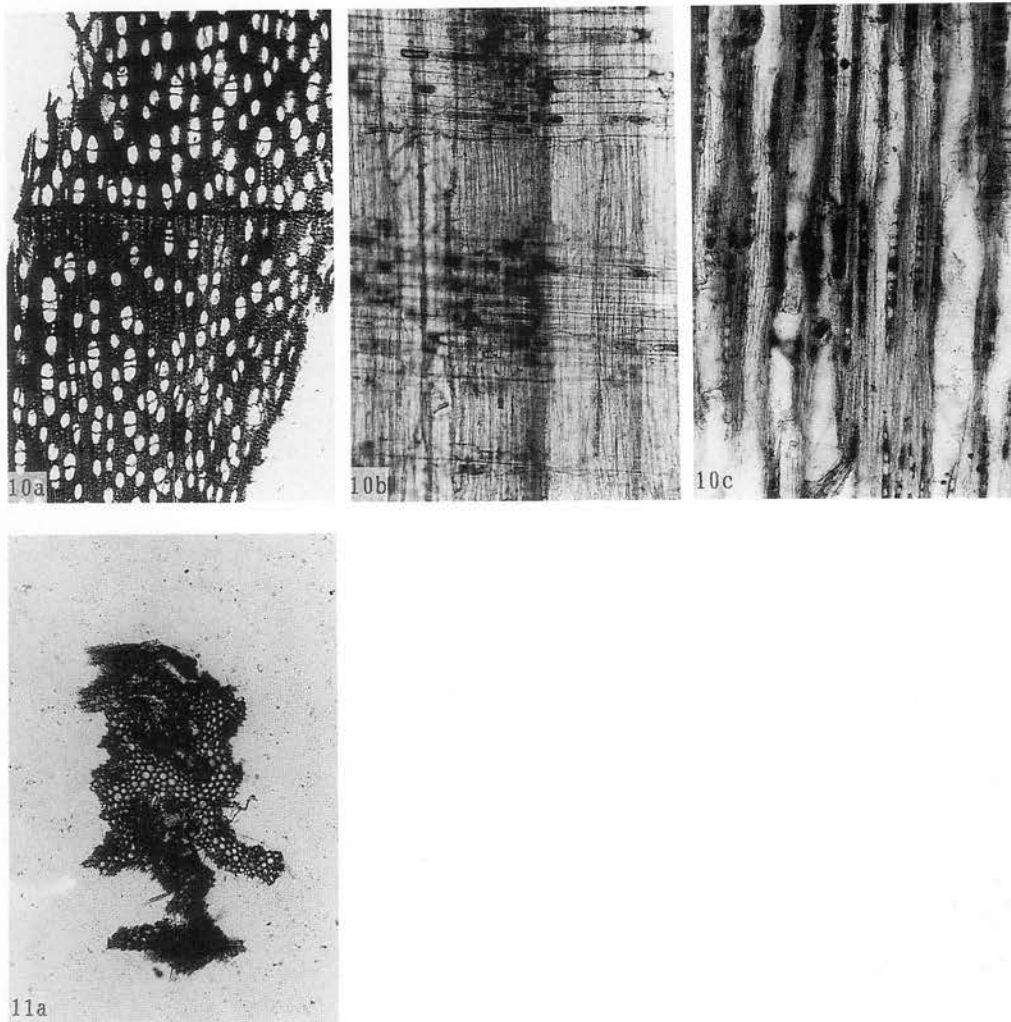
図版2 4. オニグルミ No.54  
 5. ブナ属の一種 No.36  
 6. コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 No.28b

a:木口  $\times 40$ 、b:柾目  $\times 100$  c:板目  $\times 100$   
 樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上  
 柾目では左から右。



図版3 7. クリ No.42  
 8. ケヤキ No.24  
 9. モクレン属の一種 No.32

a:木口  $\times 40$  b:柱目  $\times 100$  c:板目  $\times 100$   
 樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上  
 柱目では左から右。



図版 4 10. トチノキ No.25  
 11. イネ科タケ亜科の一種 No.34c

a:木口  $\times 40$  b:柎目  $\times 100$  c:板目  $\times 100$   
 樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上 (11aを除く),  
 柎目では左から右.

# 写真図版





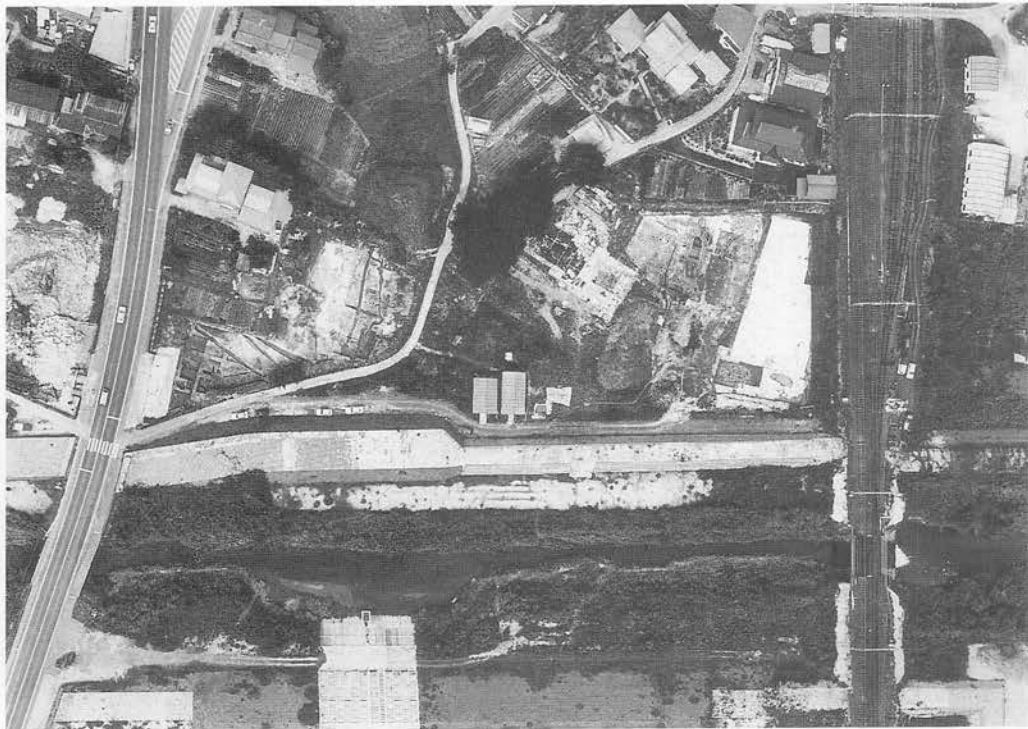
昭和30年代の調査区周辺の航空写真である。写真中央やや下寄りの国道と線路に挟まれた部分が調査区である。国道に接して東側部分に昭和41年に焼失した15SB26、27、28が写っている。15SB26は萱葺き屋根であるが、それ以外の民家の多くも萱葺き屋根であり、近世以来の屋敷の分布、景観を色濃く残している。太田川は現在は河川改修のため直線的になっているが、この写真ではずいぶん蛇行している。

写真提供 国土地理院日本地図センター



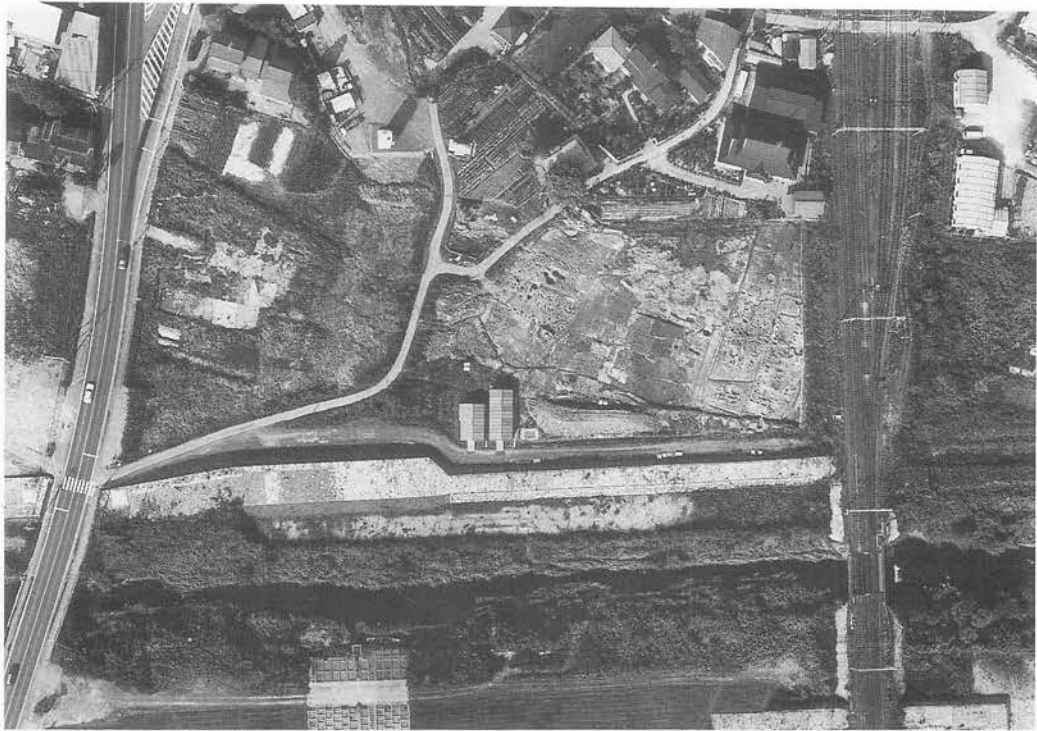


昭和30年代の空撮



10、11次調査空撮

写真図版 7 航空写真(1)



13次調査空撮

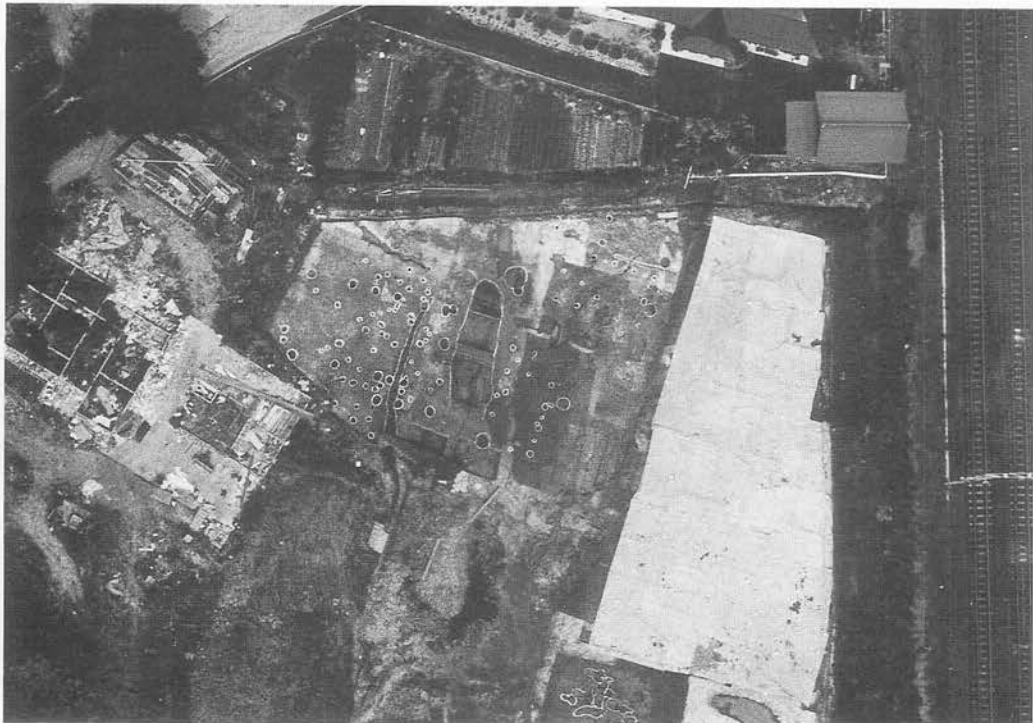


15次調査空撮(豪雨後に撮影)

写真図版 8 航空写真(2)



10次調査区

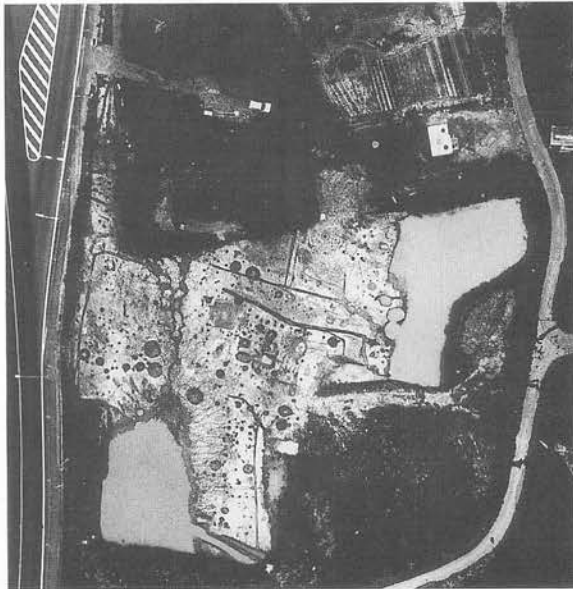


11次調査区

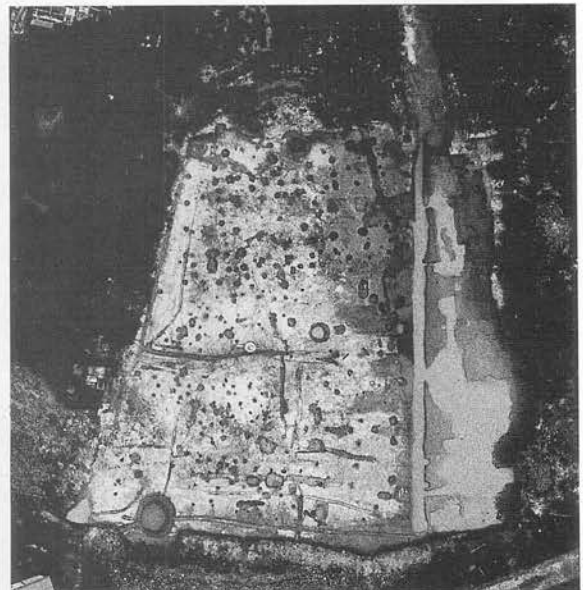
写真図版9 航空写真(3)



13次調査区



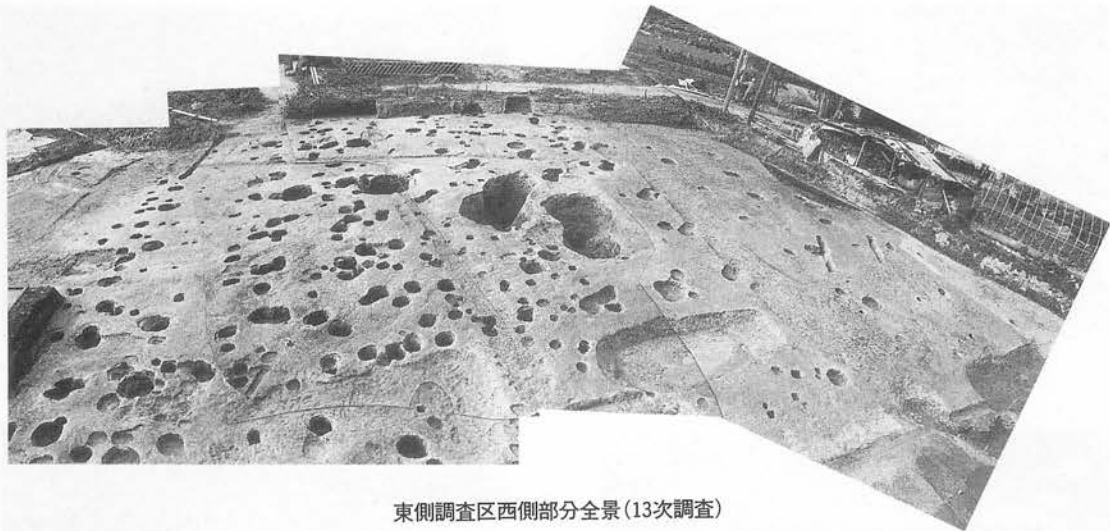
15次調査区(西側調査区)



15次調査区(東側調査区)

写真図版10 航空写真(4)





東側調査区西側部分全景(13次調査)



東側調査区中央南半部分全景(15次調査)



東側調査区東側部分遠景(13次調査)



西側調査区15次調査前遠景

写真図版11 調査区の遠景、全景



15SB5 全景



15SB6 全景



15SB7 全景



15SB8 全景



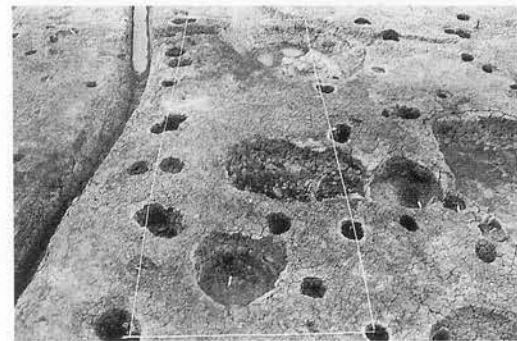
15SB9 主要柱穴



15SB10 全景



15SB11 全景



15SB12 全景

写真図版12 西側調査区の建物(1)



15SB13 全景



15SB15・16 全景



15SB17 全景



15SB18 全景



15SB19 全景



15SB20 全景



15SB14 全景



15SB21 全景

写真図版13 西側調査区の建物(2)

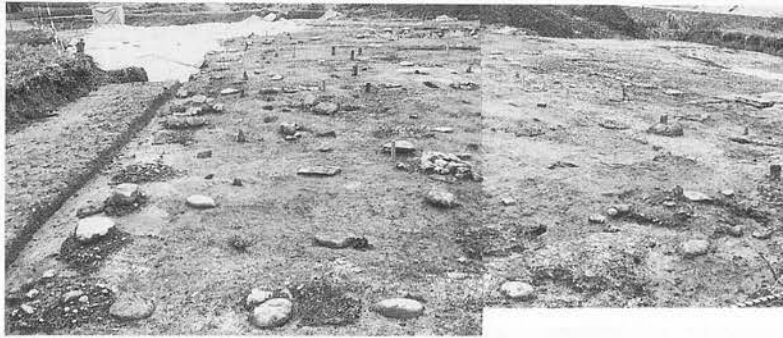




礎石建物面遠景 (15SB26・27・28)



15SB26 全景



15SB26 全景



15SB26のいろり跡



いろり跡下に敷かれた石



15SB26中央に埋設の甕



埋設甕近くの弥生土器

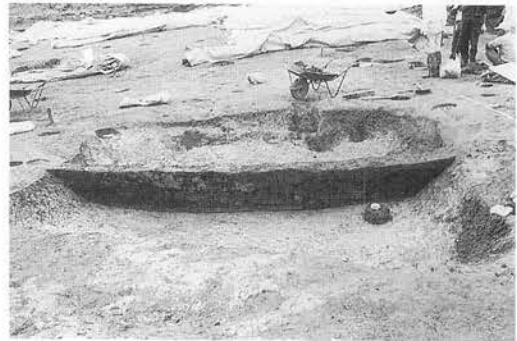
写真図版14 西側調査区の建物(3)



15SB27 全景



うまやのくぼみ(新)検出



うまやのくぼみ(旧)断面



うまやのくぼみ(旧)完掘



15SB28 完掘



15SB29 完掘



15SB26

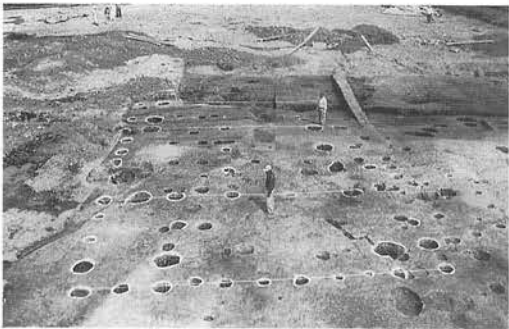
写真図版15 西側調査区の建物(4)



11SB1 全景



11SB2 全景



15SB1 完掘



15SB2 完掘



15SB3 完掘



15SB22 完掘

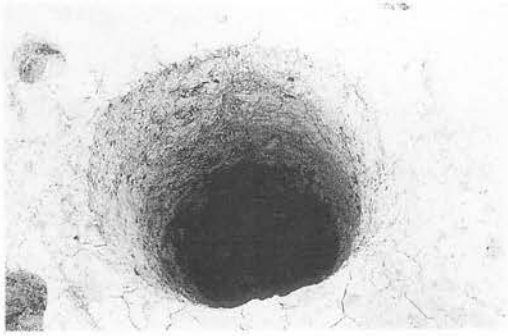


15SB23 完掘

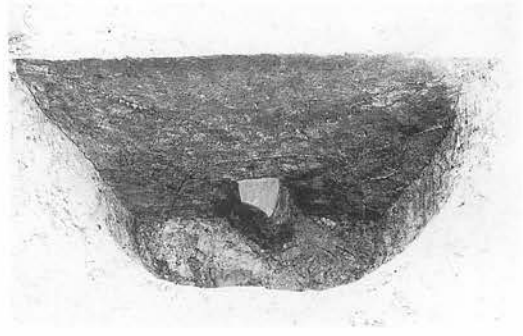


15SB24 完掘

写真図版16 東側調査区の建物



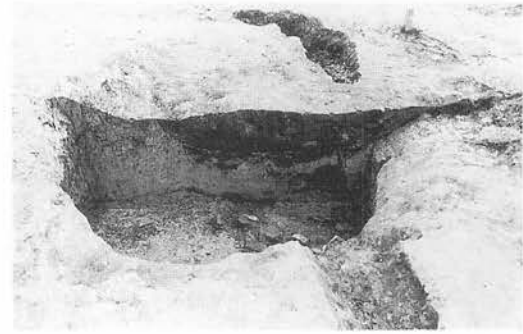
15SE2 完掘



15SE2 断面



15SE3 完掘



15SE3 断面



15SE3 断面・遺物出土状況



15SE3 遺物出土状況



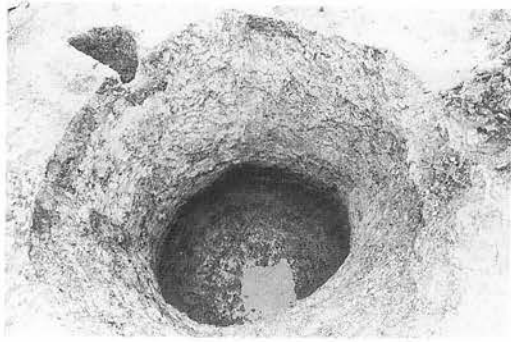
15SE4 完掘



15SE4 断面

写真図版17 西側調査区の井戸(1)

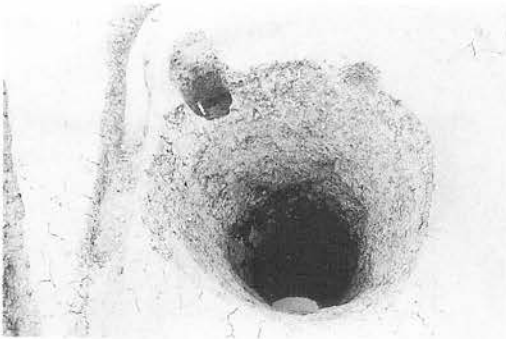




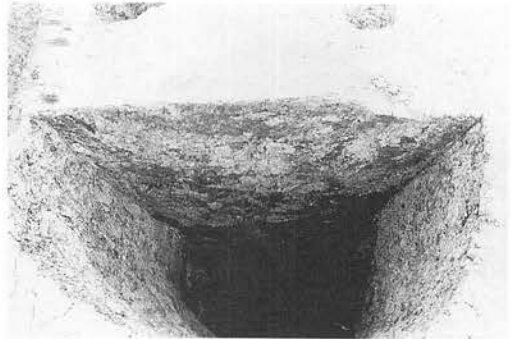
15SE5 完掘



15SE5 断面



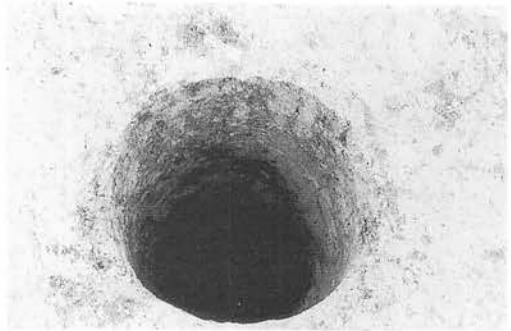
15SE6 完掘



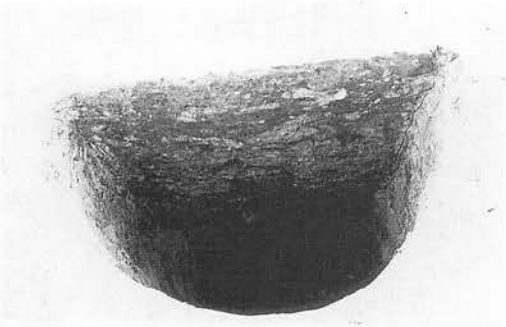
15SE6 断面



15SE6 材出土状況



15SE7 完掘

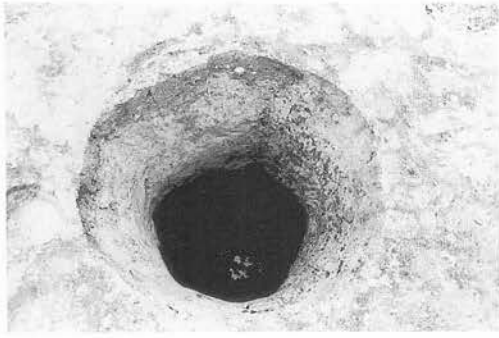


15SE7 断面

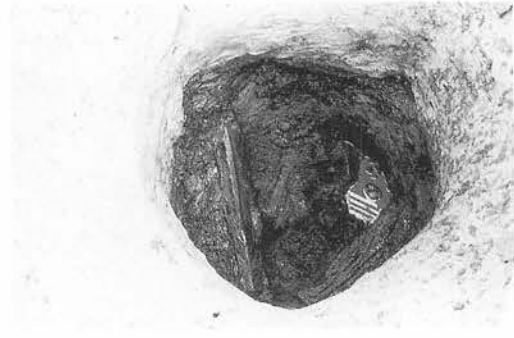


15SE7 下駄出土状況

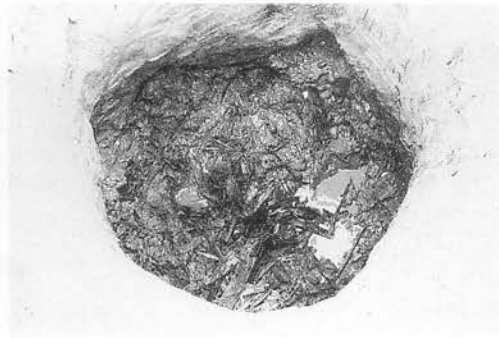
写真図版18 西側調査区の井戸(2)



15SE8 完掘



15SE8 材出土状況



15SE8 材出土状況



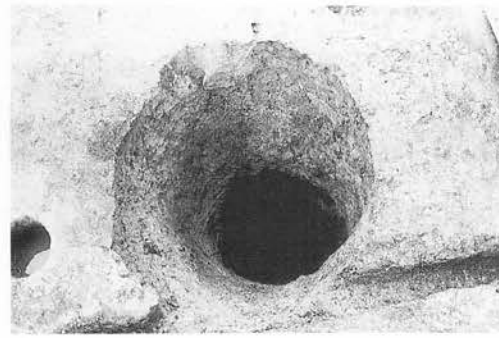
15SE9 完掘



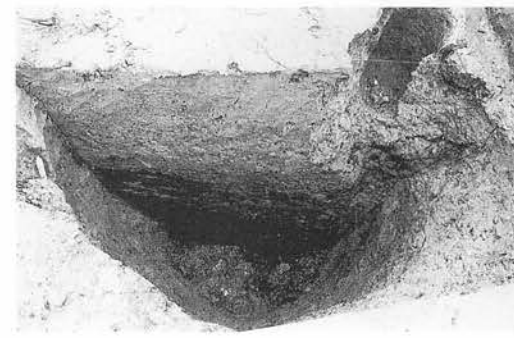
15SE9 断面



15SE9 遺物出土状況

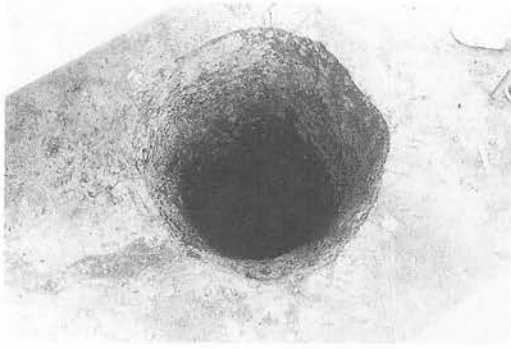


15SE10 完掘

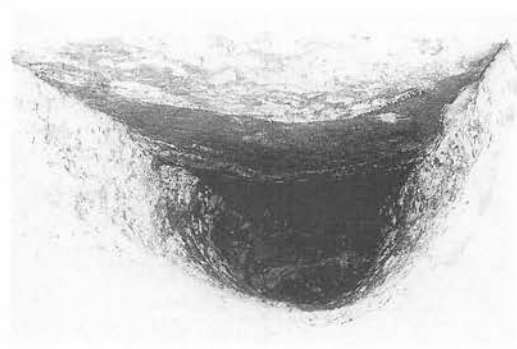


15SE10 断面

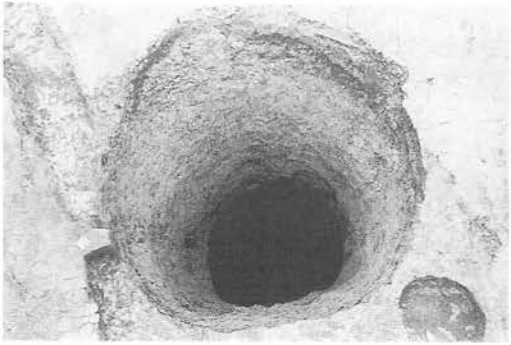
写真図版19 西側調査区の井戸(3)



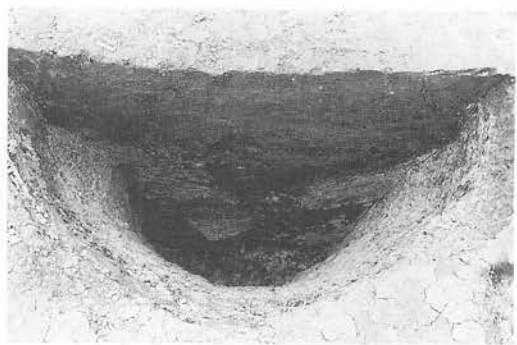
15SE11 完掘



15SE11 断面



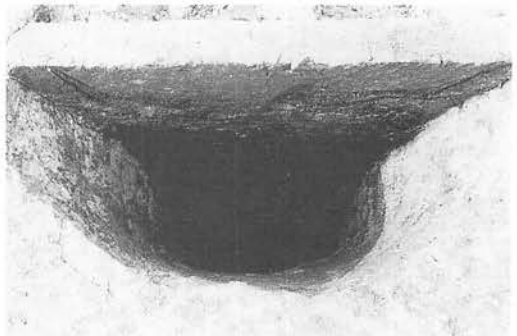
15SE12 完掘



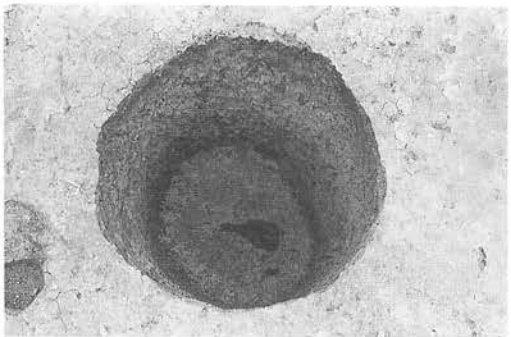
15SE12 断面



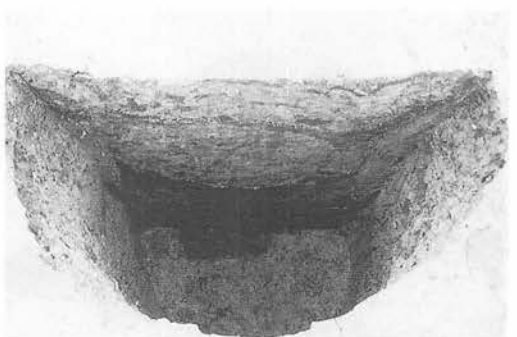
15SE13 完掘



15SE13 断面



15SE14 完掘



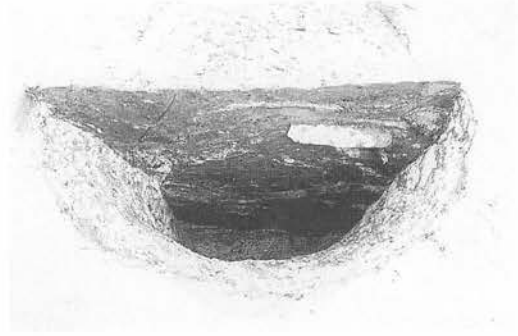
15SE14 断面

写真図版20 西側調査区の井戸(4)

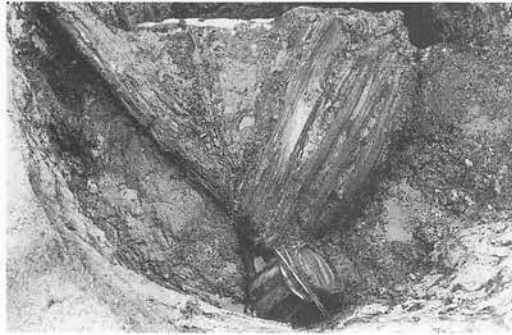




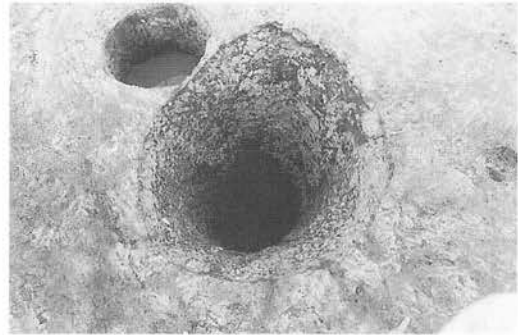
15SE16 完掘



15SE16 断面



15SE16 遺物出土状況



15SE17 完掘



15SE17 断面



15SE17 土製品出土状況

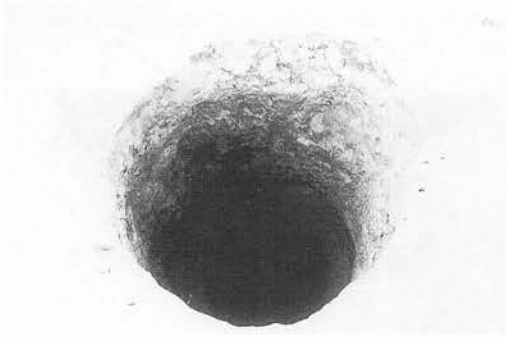


15SE18 完掘

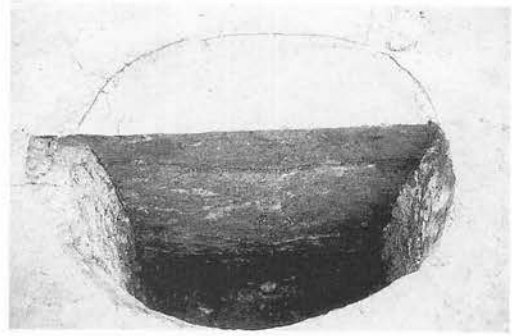


15SE18 断面

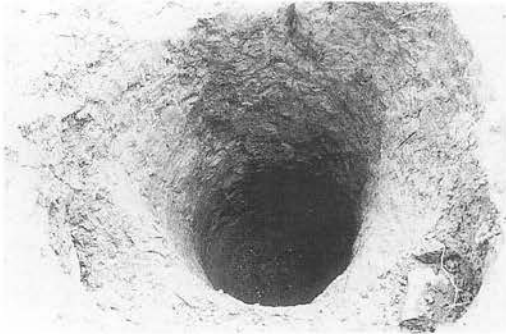
写真図版21 西側調査区の井戸(5)



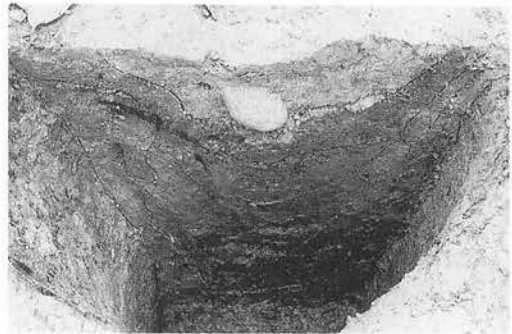
15SE19 完掘



15SE19 断面



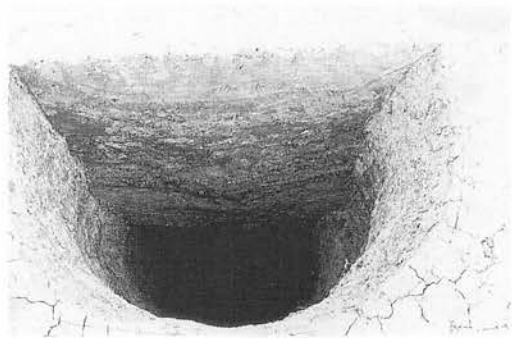
15SE20 完掘



15SE20 断面



15SE21 完掘



15SE21 断面



15SE22 完掘

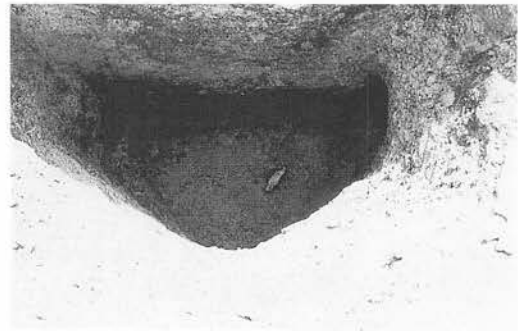


15SE22 断面

写真図版22 西側調査区の井戸(6)



15SE23 完掘



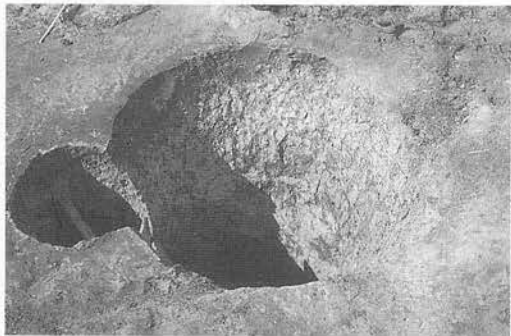
15SE23 下駄出土状況



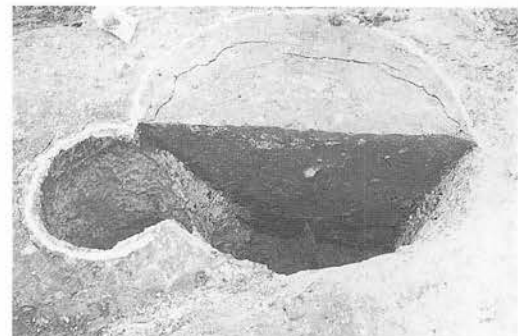
15SE23 木鉢出土状況



15SE26 断面



11SE1 完掘



11SE1 断面

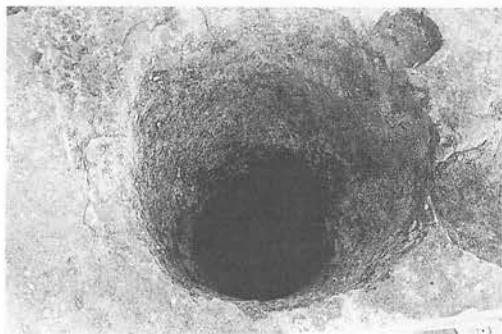


13SE1 完掘

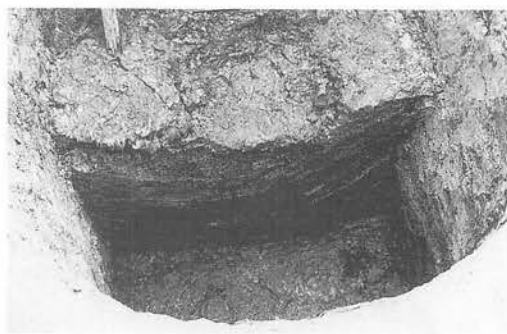


13SE1 遺物出土状況

写真図版23 西側調査区の井戸(7)・東側調査区の井戸(1)



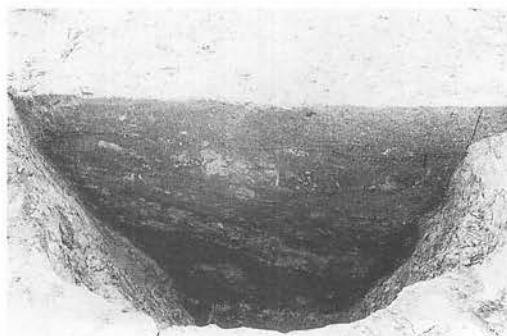
13SE2 完掘



13SE2 断面



13SE3 完掘



13SE3 断面



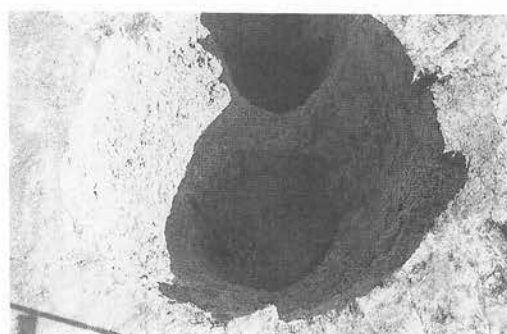
13SE4 完掘



13SE4 断面



13SE5 完掘



13SE6 完掘

写真図版24 東側調査区の井戸(2)





13SE6 断面



13SE6 遺物出土状況



13SE7 完掘



13SE7 断面



15SE1 完掘



15SE1 断面

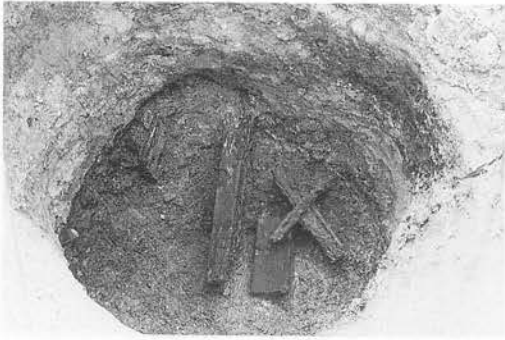


15SE25 完掘



15SE25 断面

写真図版25 東側調査区の井戸(3)



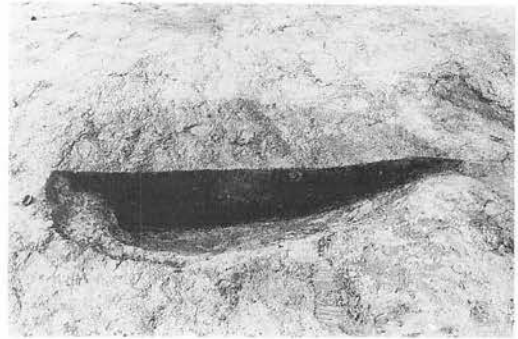
15SE25 材出土状況



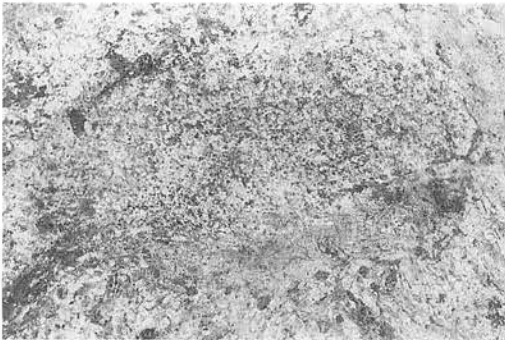
15SE25 材出土状況



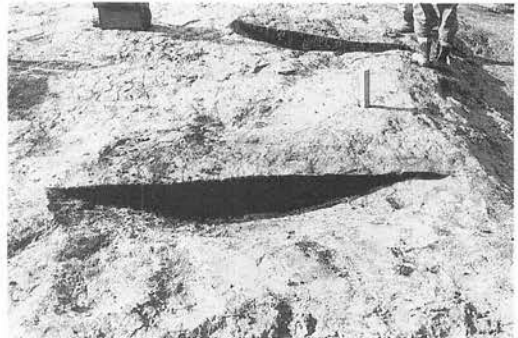
15SK15 完掘



15SK15 断面



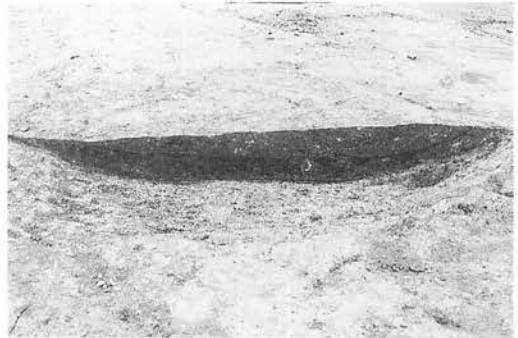
15SK16 完掘



15SK16 断面

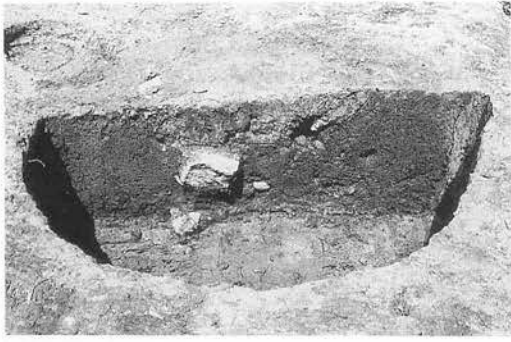


15SK17 完掘



15SK17 断面

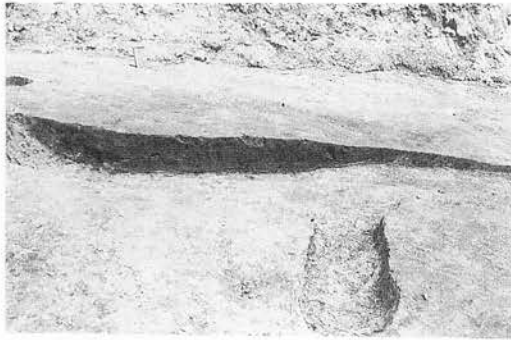
写真図版26 東側調査区の井戸(4)・西側調査区の土坑(1)



15SK18 断面



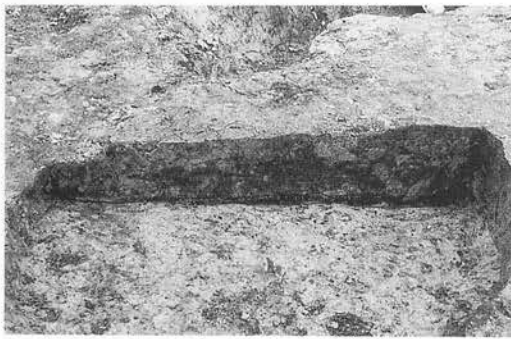
15SK19 完掘



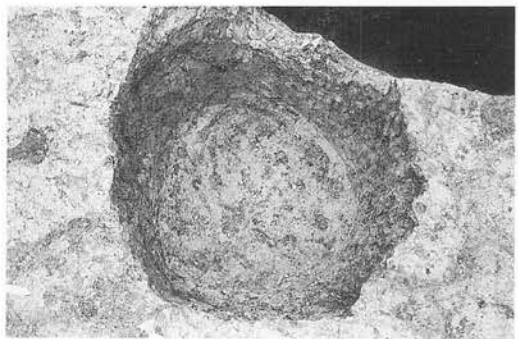
15SK19 断面



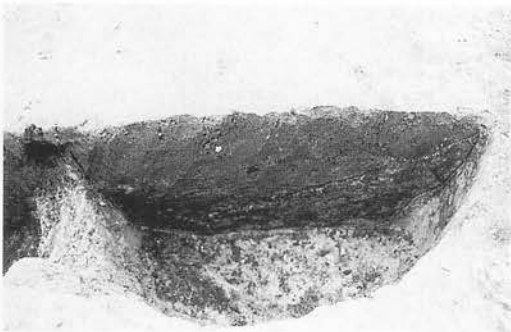
15SK20 完掘



15SK20 断面



15SK21 完掘



15SK21 断面



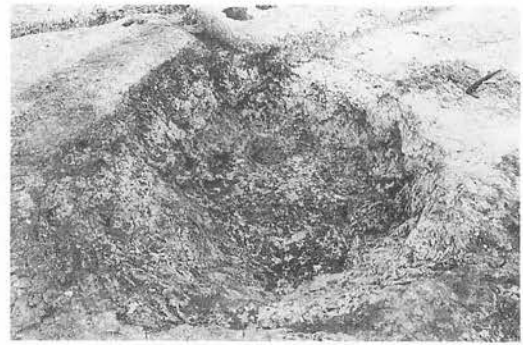
15SK22 完掘

写真図版27 西側調査区の土坑(2)





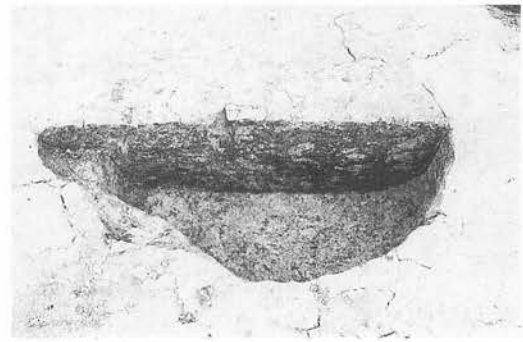
15SK22 断面



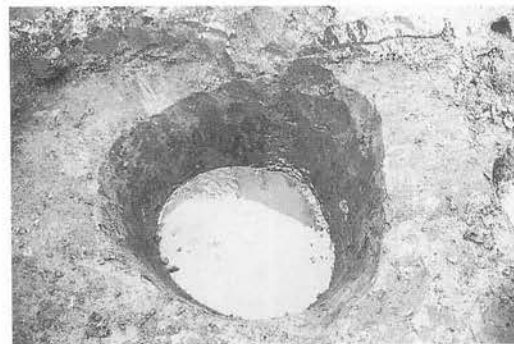
15SK23 完掘



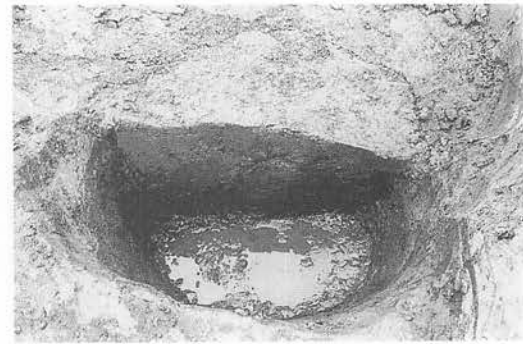
15SK23 断面



15SK24 断面



15SK25 完掘



15SK25 断面

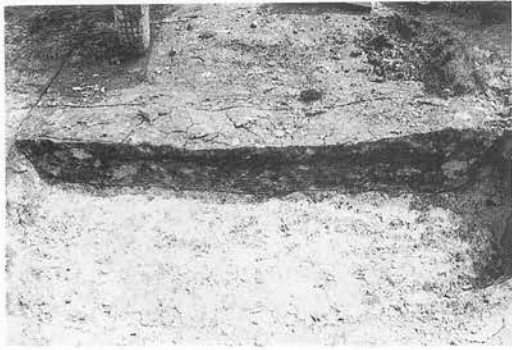


15SK26 桶底板

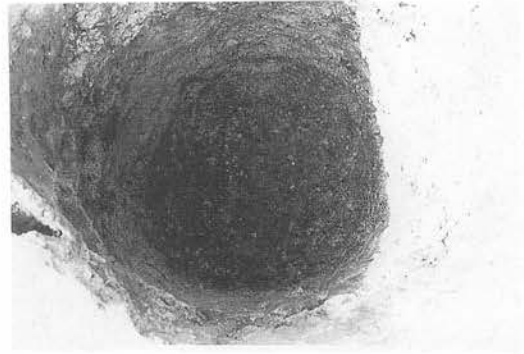


15SK27 完掘

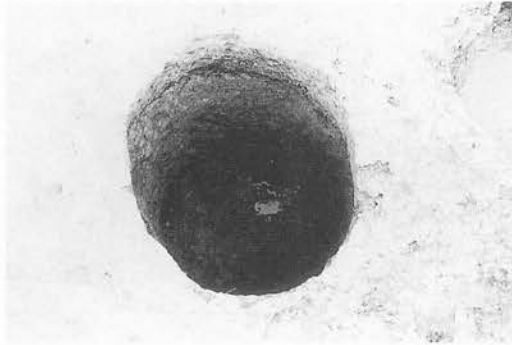
写真図版28 西側調査区の土坑(3)



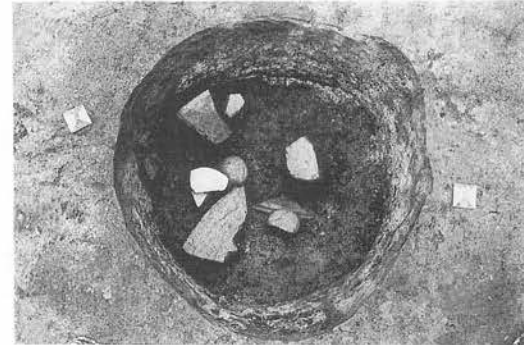
15SK27 断面



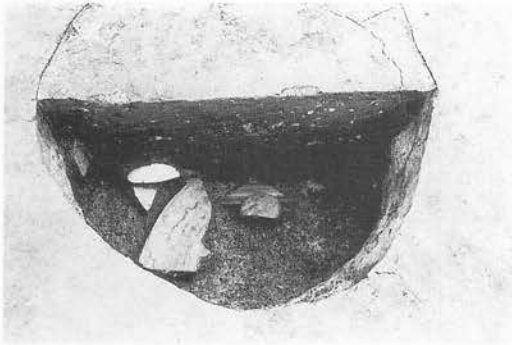
15SK28 種子出土状況



15SK28 完掘



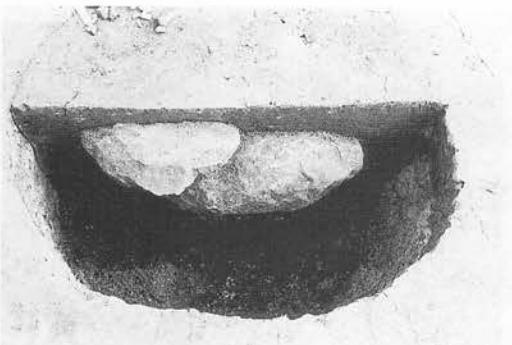
15SK29 遺物出土状況



15SK29 断面



15SK30 完掘

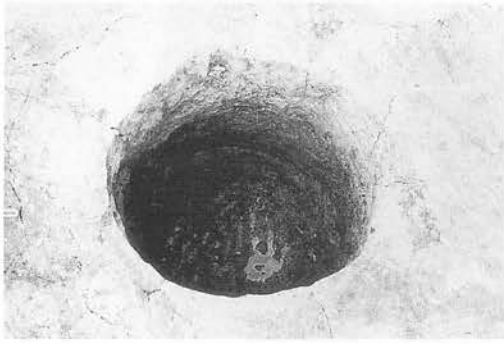


15SK30 断面

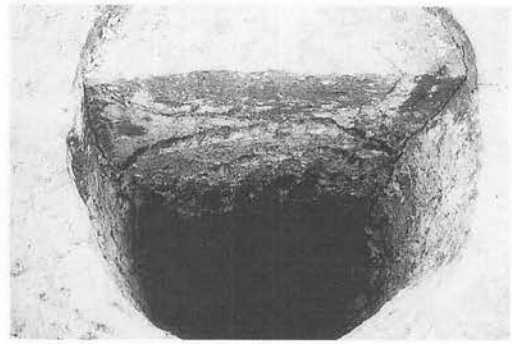


15SK30 遺物出土状況

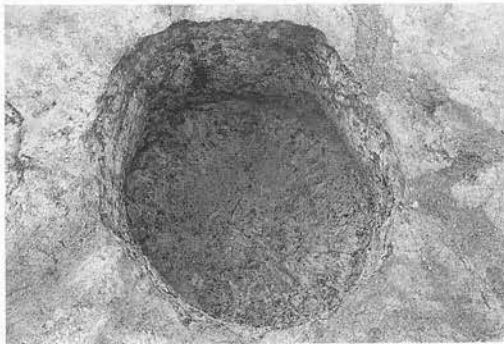
写真図版29 西側調査区の土坑(4)



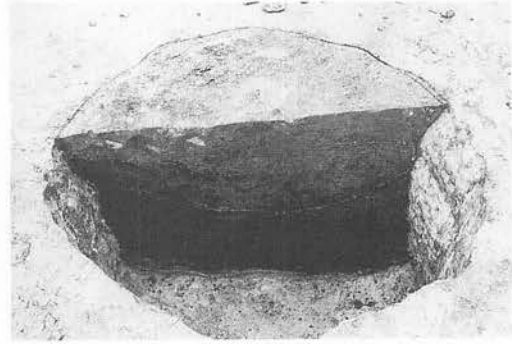
15SK31 完掘



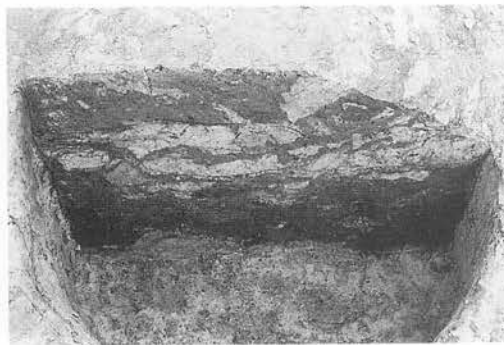
15SK31 断面



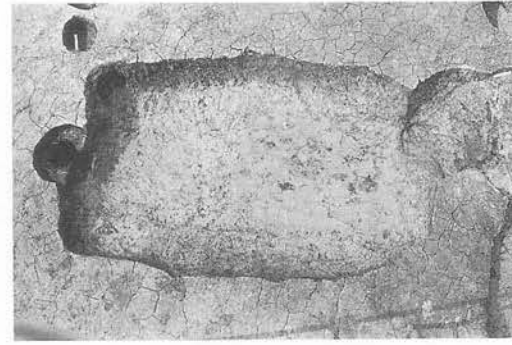
15SK32 完掘



15SK32 断面



15SK33 断面



15SK34 完掘



15SK34 断面

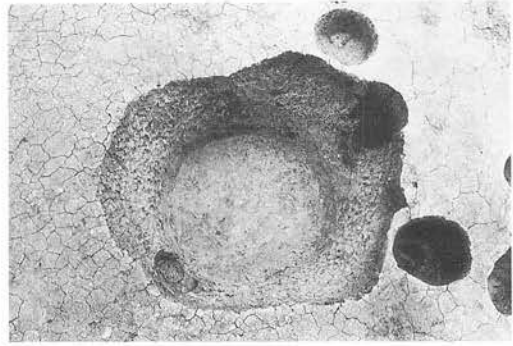


15SK35 完掘

写真図版30 西側調査区の土坑(5)



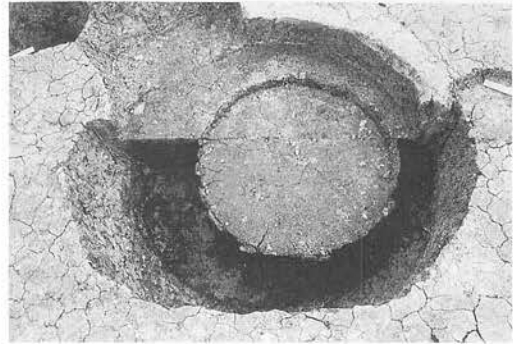
15SK35 断面



15SK36 完掘



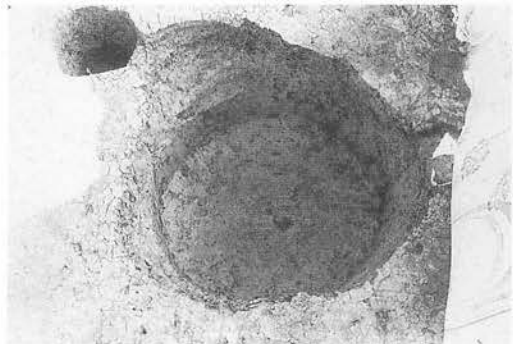
15SK36 断面



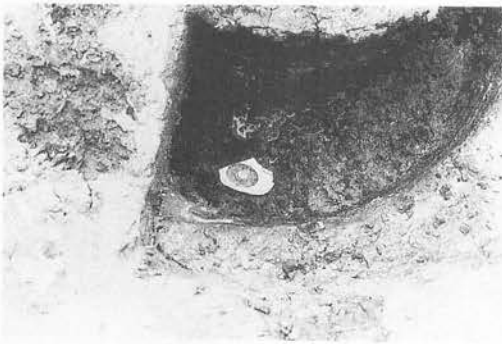
15SK37 断面



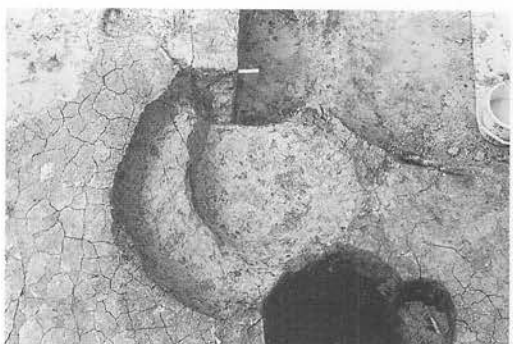
15SK37 桶埋設状況



15SK37 完掘



15SK37 掘方遺物出土状況



15SK38 完掘

写真図版31 西側調査区の土坑(6)





15SK38・39 断面



15SK39 完掘



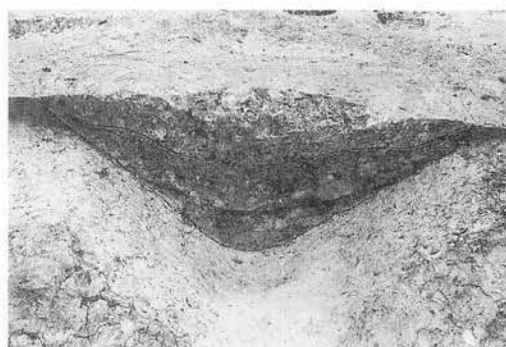
15SK40 完掘



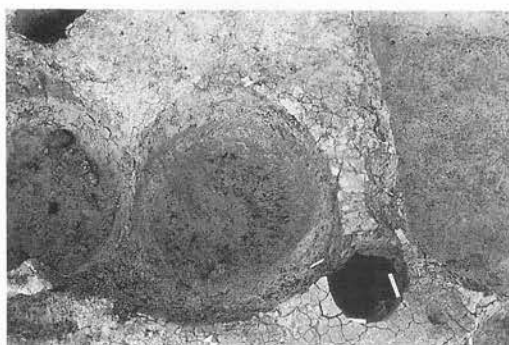
15SK40 断面



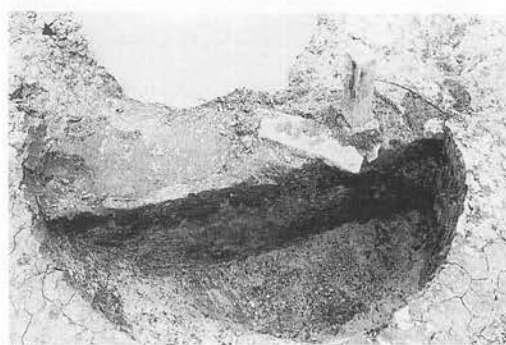
15SK41 完掘



15SK41 断面

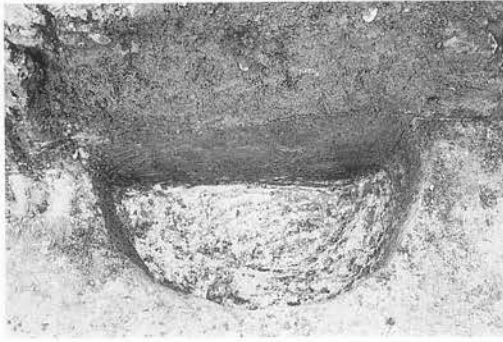


15SK42 完掘



15SK42 断面

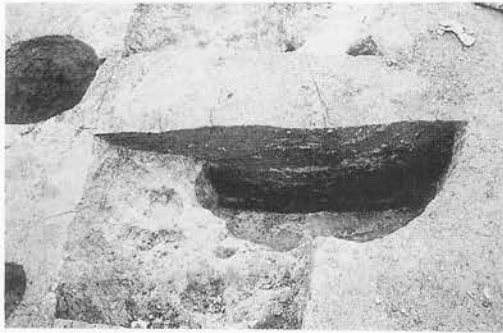
写真図版32 西側調査区の土坑(7)



15SK43 断面



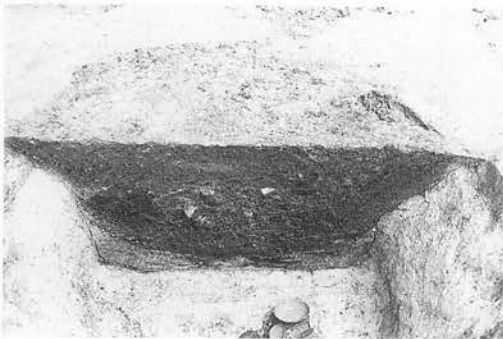
15SK44 完掘



15SK44・15SD32 断面



15SK45 完掘



15SK45 断面



15SK45 遺物出土状況

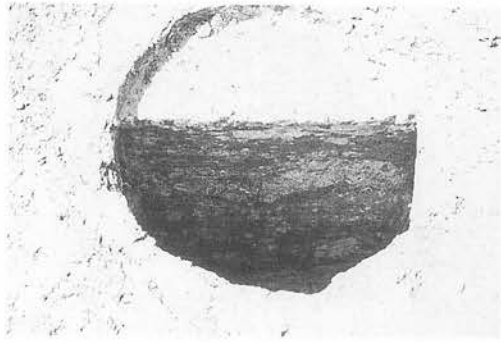


11SK1 完掘

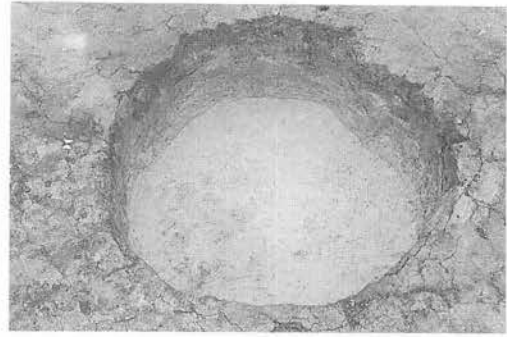


11SK2 完掘

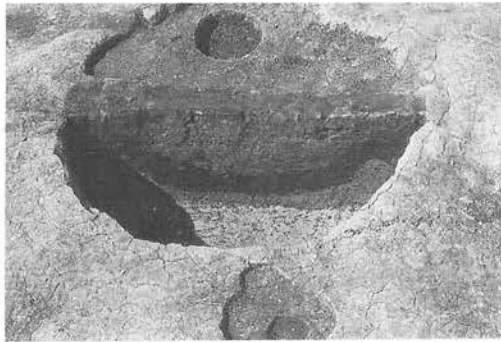
写真図版33 西側調査区の土坑(8)・東側調査区の土坑(1)



11SK2 断面



11SK3 完掘



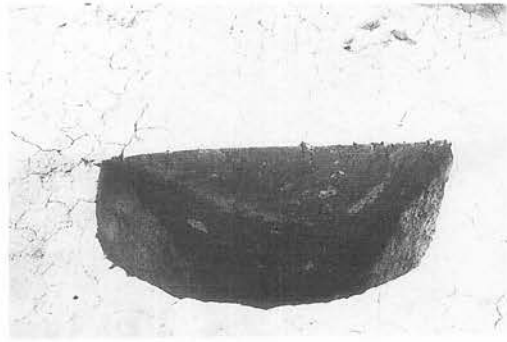
11SK3 断面



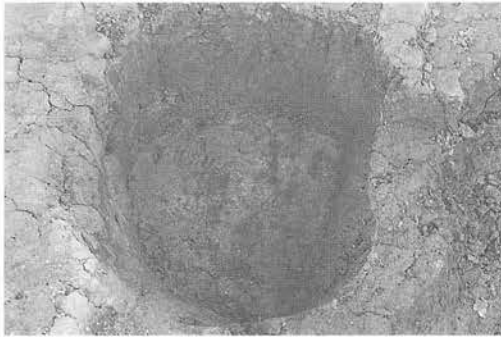
11SK5 完掘



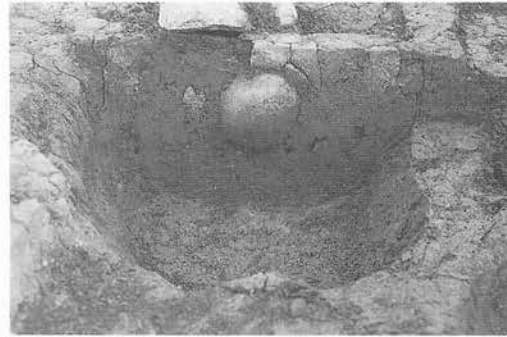
11SK6 完掘



11SK6 断面



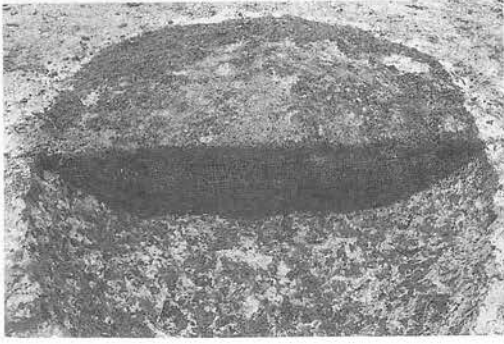
11SK7 完掘



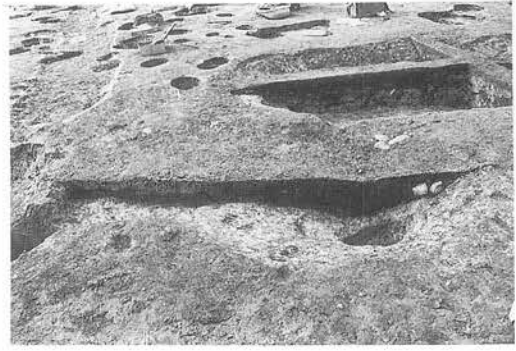
11SK7 断面

写真図版34 東側調査区の土坑(2)

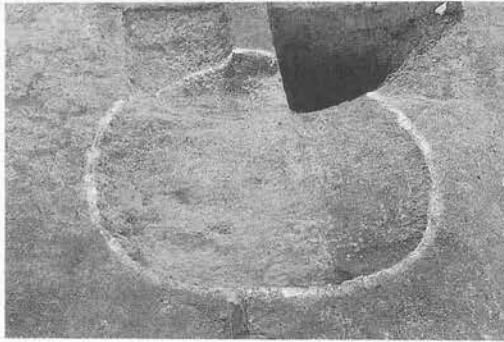




13SK40 完掘



13SK41 断面



13SK43 完掘



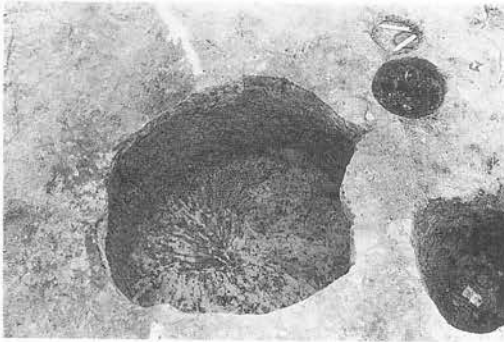
13SK43 断面



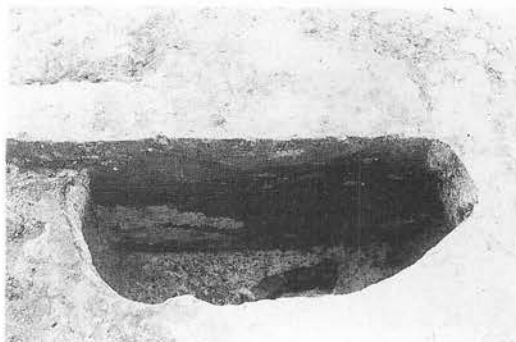
13SK48 完掘



13SK48 断面



13SK49 完掘

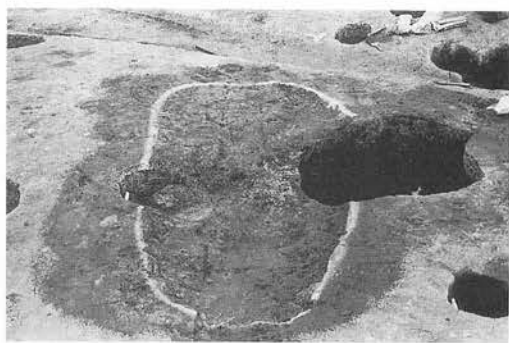


13SK49 断面

写真図版35 東側調査区の土坑(3)



13SK49 遺物出土状況



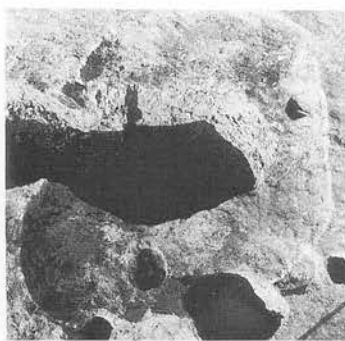
13SK53 完掘



13SK53 断面



13SK54 完掘



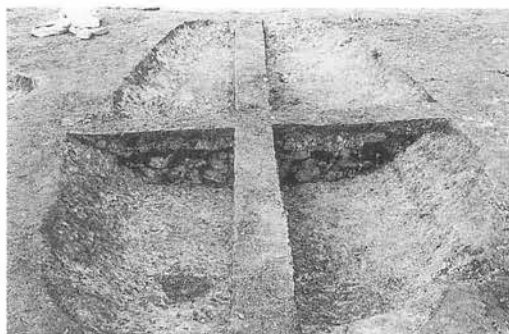
13SK55 完掘



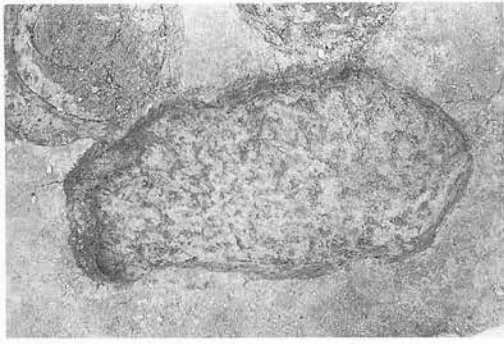
13SK55 断面



13SK56 完掘



13SK57 断面



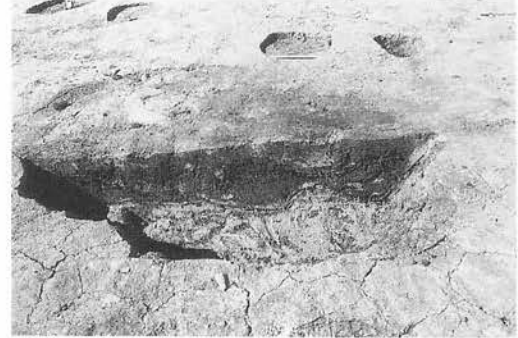
15SK1 完掘



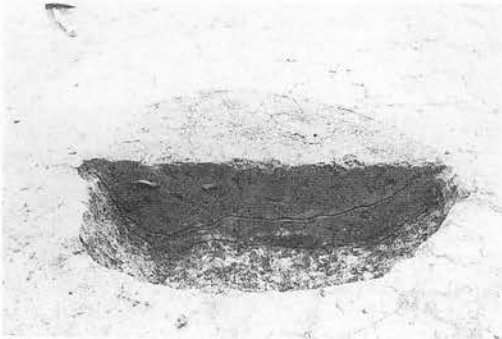
15SK1 断面



15SK3 完掘



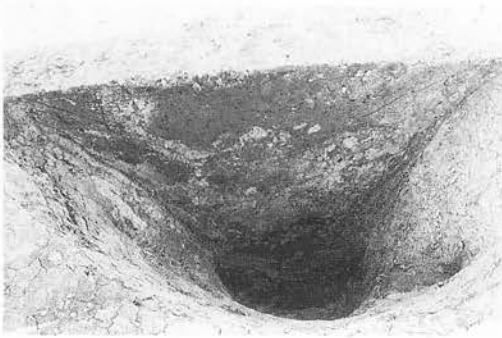
15SK3 断面



15SK4 断面



15SK5 完掘



15SK5 断面



15SK6 断面

写真図版37 東側調査区の土坑(5)



15SK7 完掘



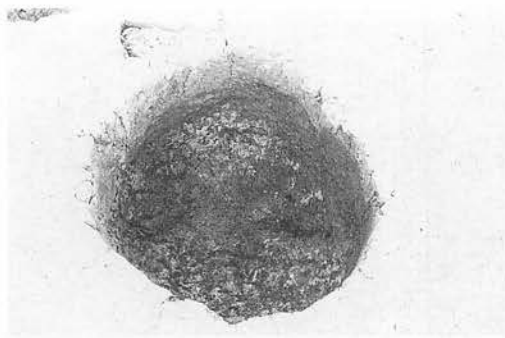
15SK7 断面



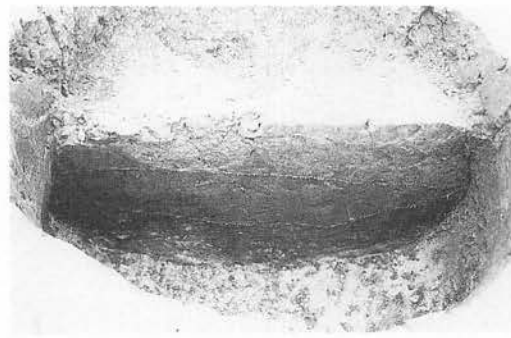
15SK8 完掘



15SK8 断面



15SK9 完掘



15SK9 断面



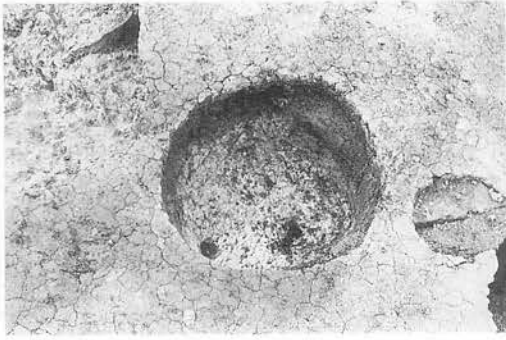
15SK10 完掘



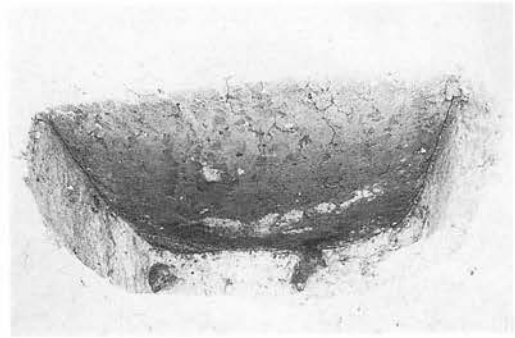
15SK10 断面

写真図版38 東側調査区の土坑(6)





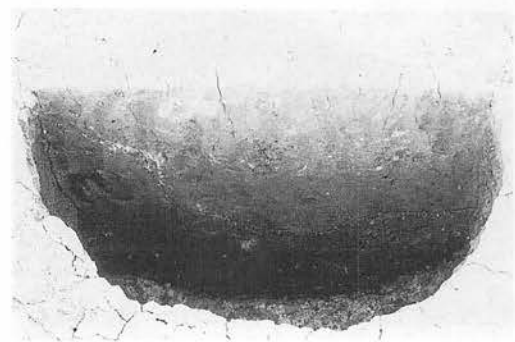
15SK11 完掘



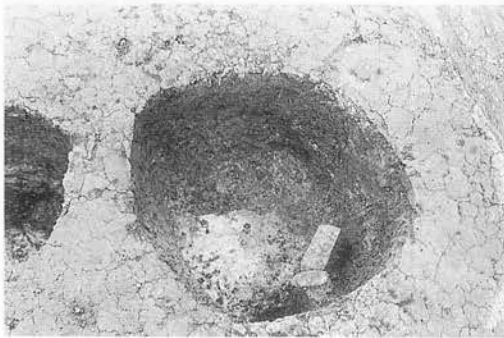
15SK11 断面



15SK12 完掘



15SK12 断面



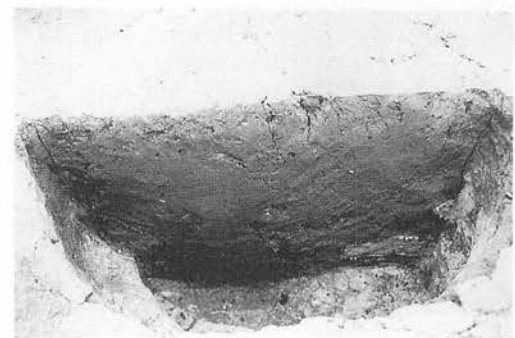
15SK13 完掘



15SK13 断面



15SK14 完掘

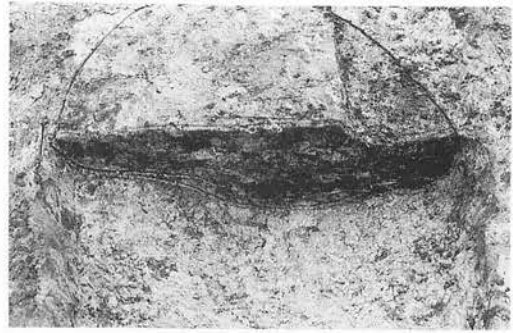


15SK14 断面

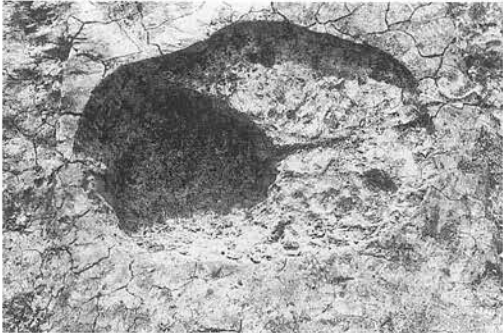
写真図版39 東側調査区の土坑(7)



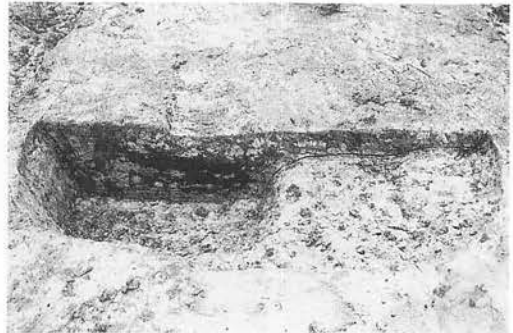
15SK46 完掘



15SK46 断面



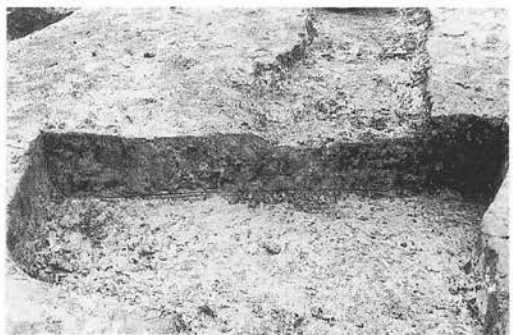
15SK47 完掘



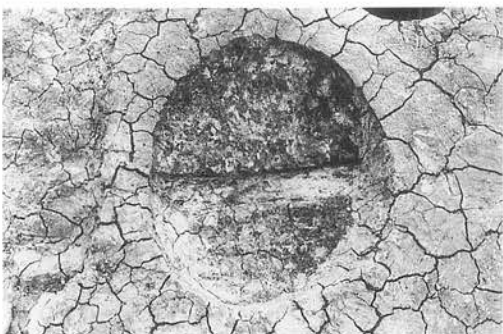
15SK47 断面



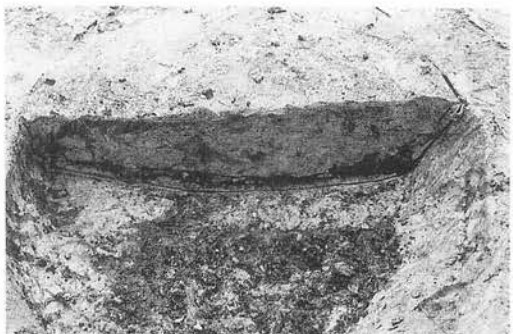
15SK48 完掘



15SK48 断面



15SK49 完掘



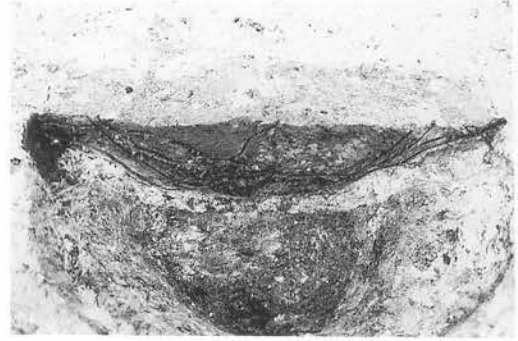
15SK49 断面

写真図版40 東側調査区の土坑(8)





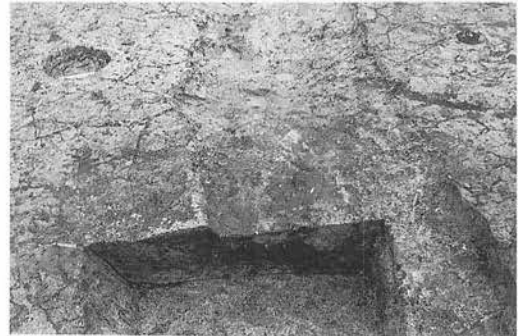
15SK50 完掘



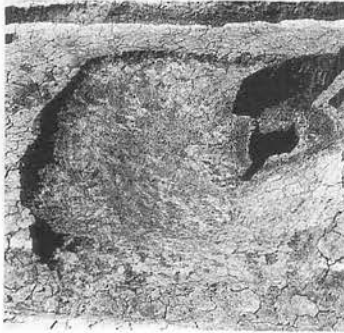
15SK50 断面



15SK51 完掘



15SK51 断面



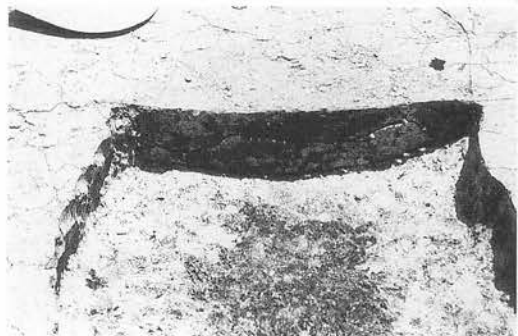
15SK52 完掘



15SK52 断面

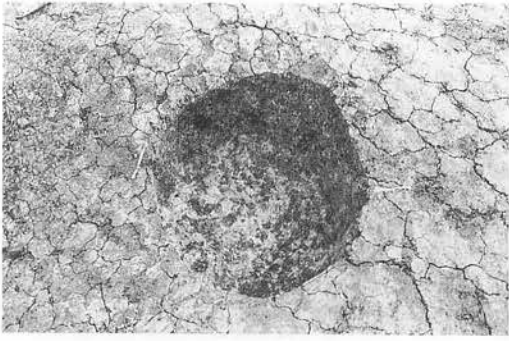


15SK53 完掘

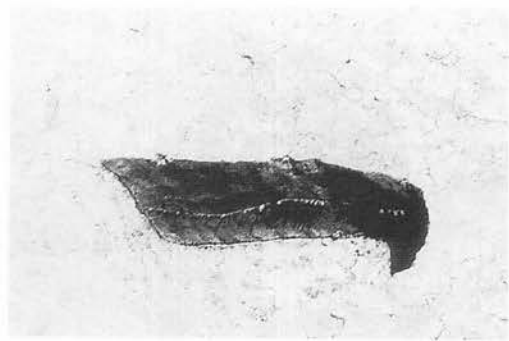


15SK53 断面

写真図版41 東側調査区の土坑(9)



15SK54 完掘



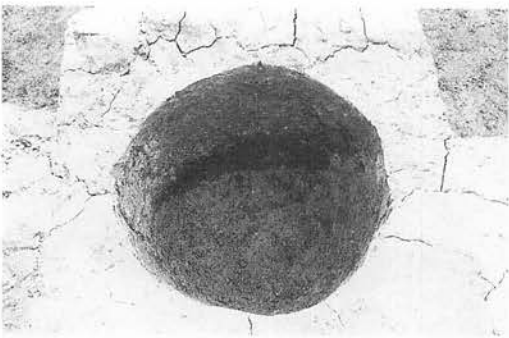
15SK54 断面



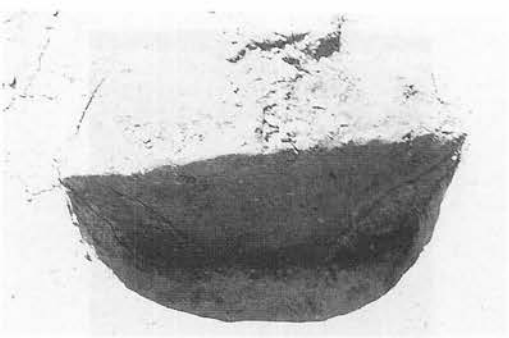
15SK55 完掘



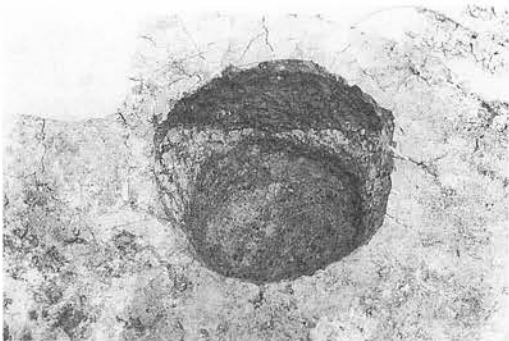
15SK55 断面



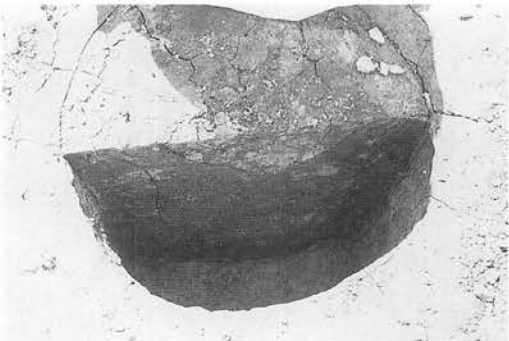
15SK56 完掘



15SK56 断面

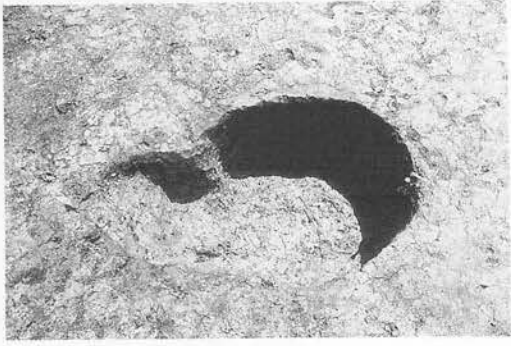


15SK57 完掘

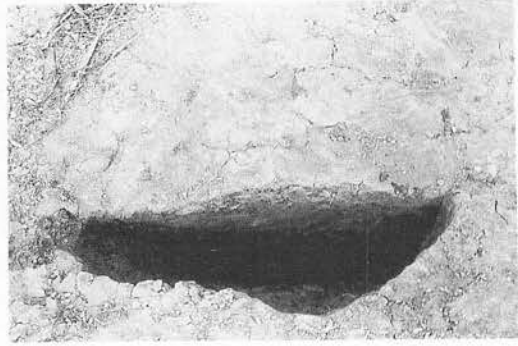


15SK57 断面

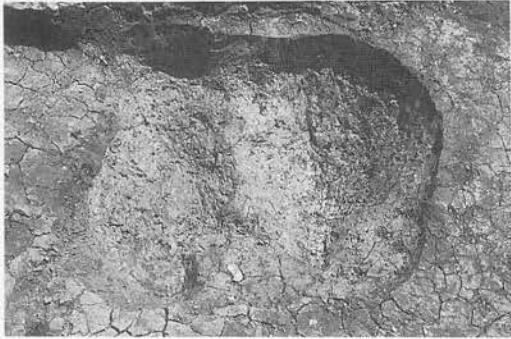
写真図版42 東側調査区の土坑(10)



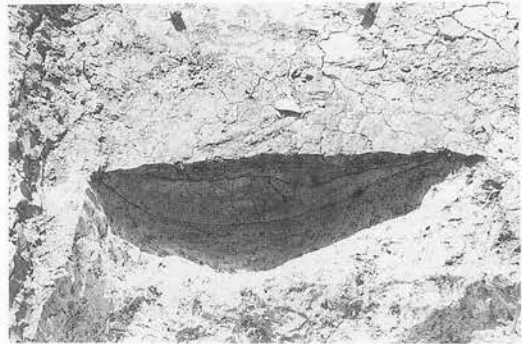
15SK58 完掘



15SK58 断面



15SK59 完掘



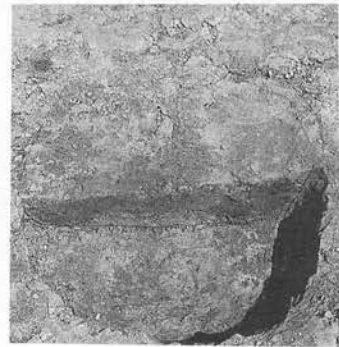
15SK59 断面



15SK60 完掘



15SK61 完掘



15SK61 断面



15SK62 完掘



15SK62 断面

写真図版43 東側調査区の土坑(11)



10SD1 完掘



10SD1 断面



10SD2 完掘



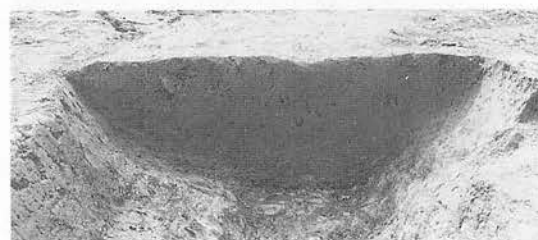
10SD2 断面



10SD3 完掘



10SD3 断面



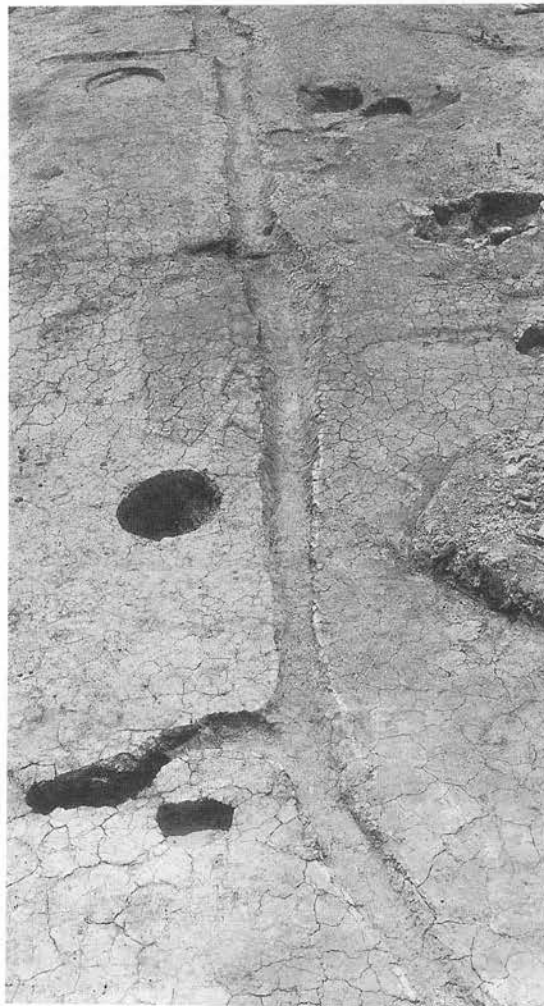
10SD3 断面

写真図版44 西側調査区の溝(1)





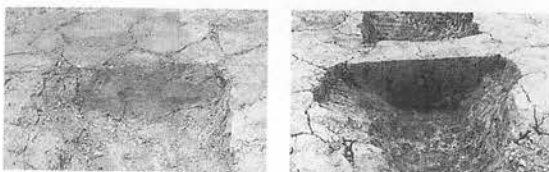
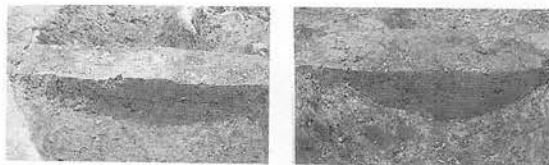
10SD4 完掘



10SD5 完掘



10SD4 断面



10SD4 断面

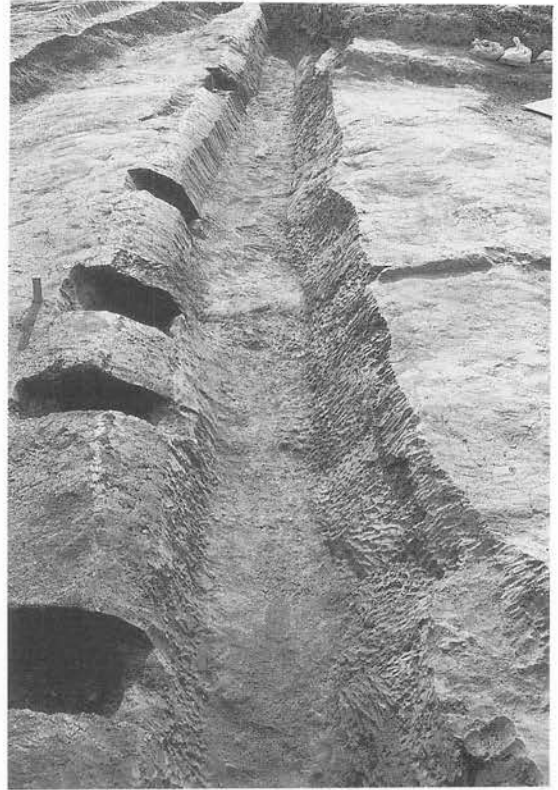


10SD5 断面(上5枚)

写真図版45 西側調査区の溝(2)



10SD6 完掘



10SD7A 完掘



10SD6 断面



10SD7A、7B 断面



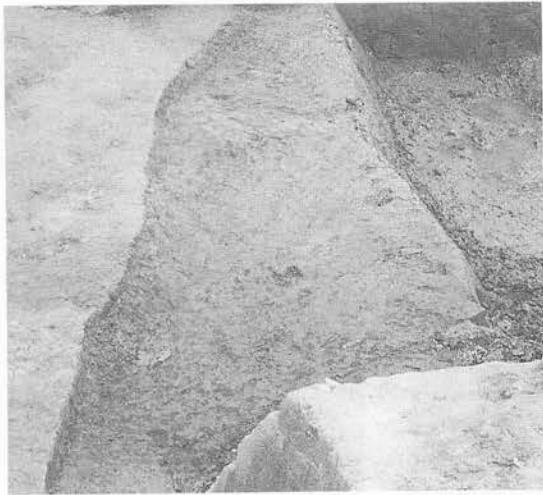
10SD7A、7B 断面



10SD7A、7B 完掘

写真図版46 西側調査区の溝(3)

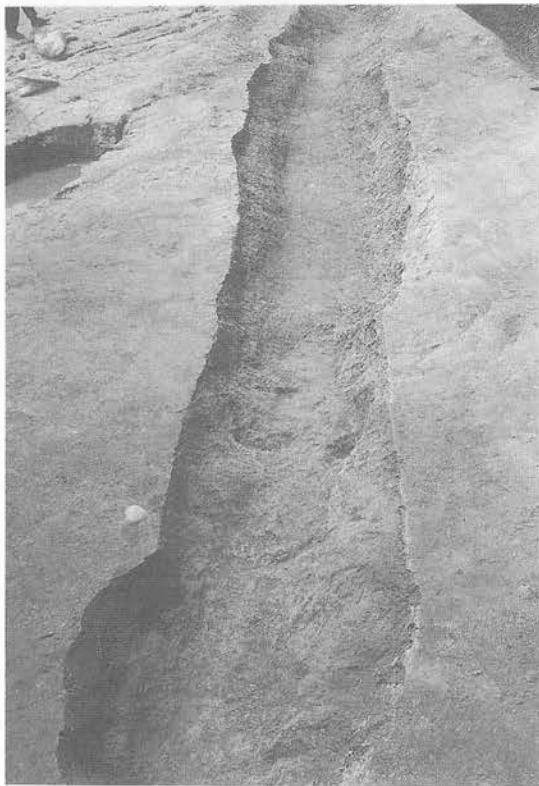




10SD9 完掘



10SD10 完掘



10SD11 完掘



10SD10 断面

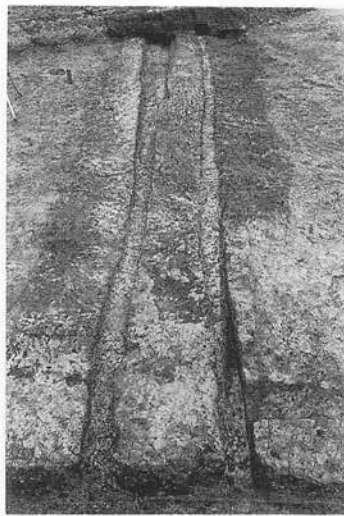


10SD11 断面

写真図版47 西側調査区の溝(4)



15SD14・19 完掘



15SD15・16 完掘



15SD17・18 完掘



15SD14 断面



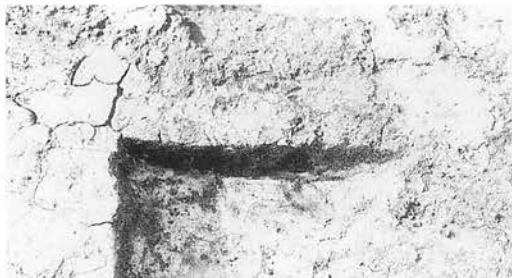
15SD15 断面



15SD16 断面



15SD17 断面



15SD18 断面

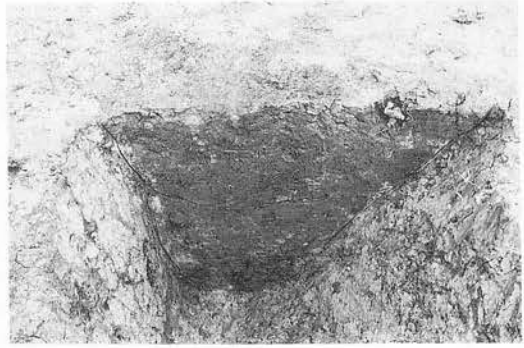


15SD19 断面

写真図版48 西側調査区の溝(5)



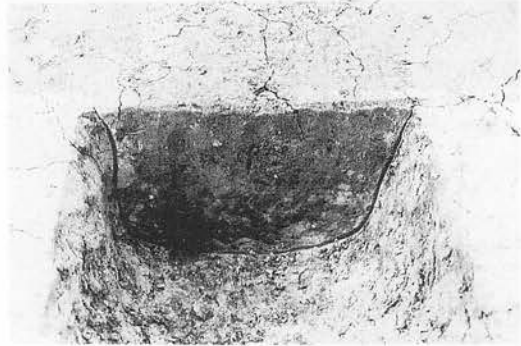
15SD20 断面



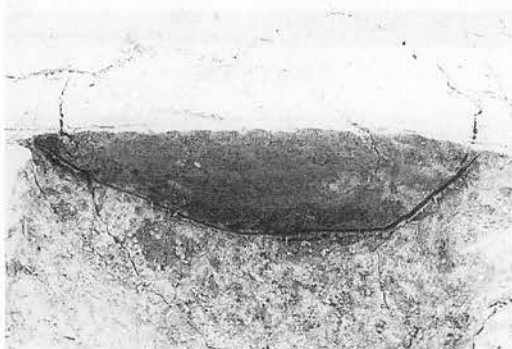
15SD20 断面



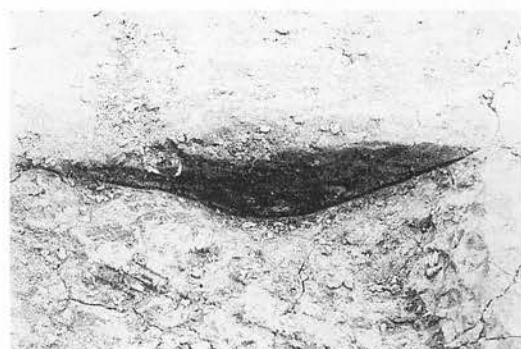
15SD21 完掘



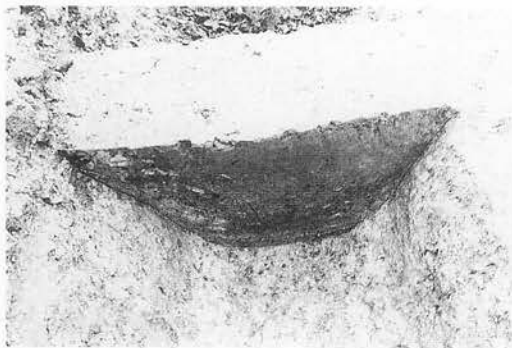
15SD21 断面



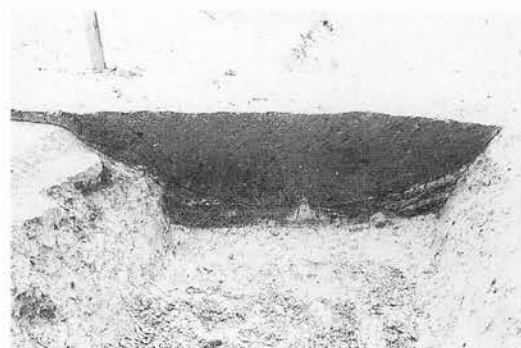
15SD22 断面



15SD23 断面



15SD24 断面



15SD25 断面

写真図版49 西側調査区の溝(6)



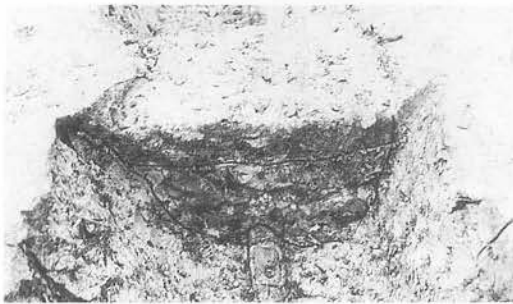
15SD24・25 完掘



15SD26 完掘



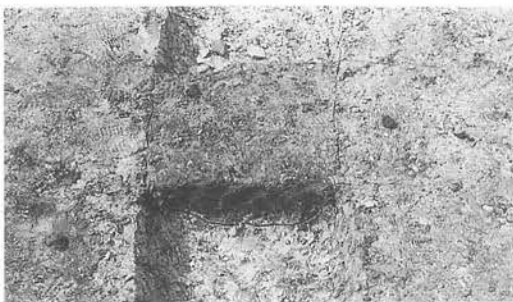
15SD29 断面



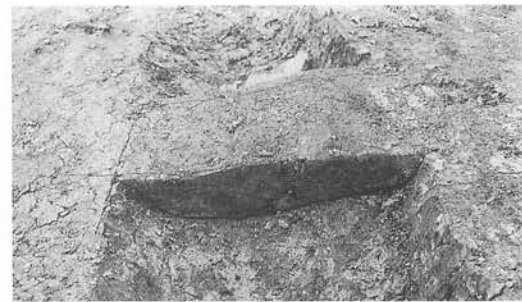
15SD26 断面



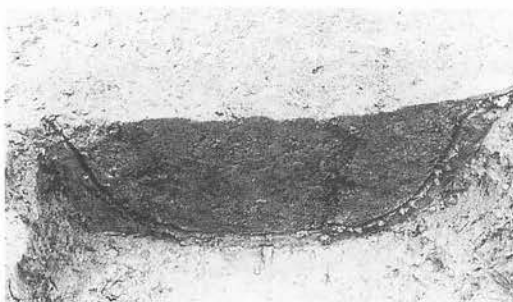
15SD27 完掘



15SD27 断面



15SD28 断面



15SD30 断面



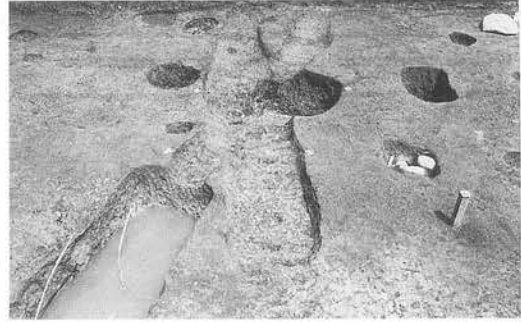
15SD31 断面

写真図版50 西側調査区の溝(7)





15SD30・31 完掘



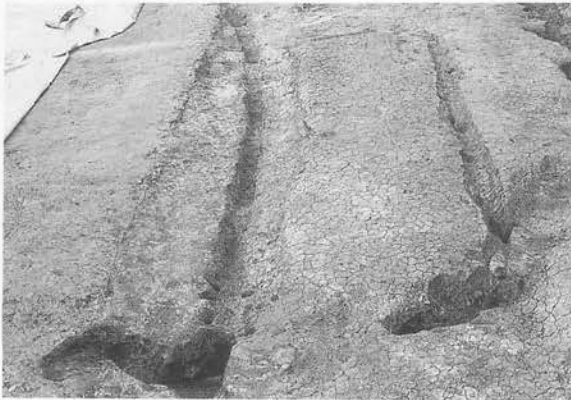
15SD32・33 完掘



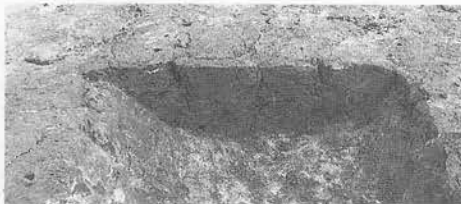
15SD32・33 断面



15SD40 完掘



11SD3・4 完掘

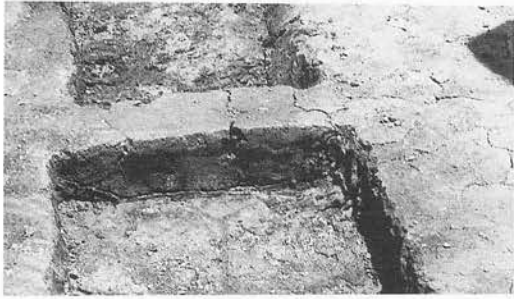


11SD8 断面

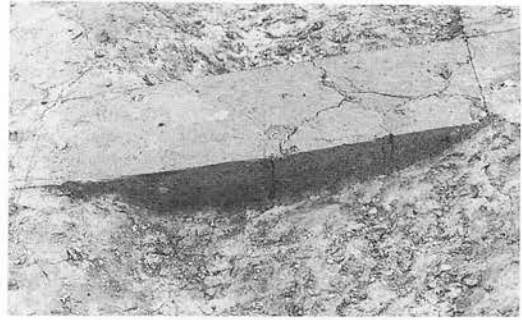


11SD8 完掘

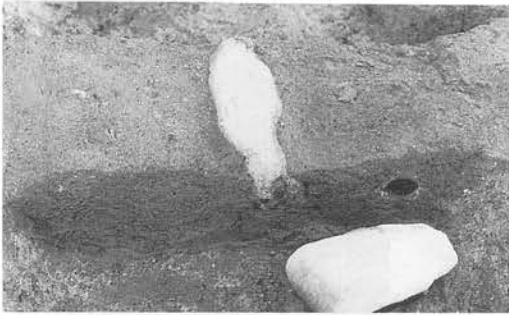
写真図版51 西側調査区の溝(8)・東側調査区の溝(1)



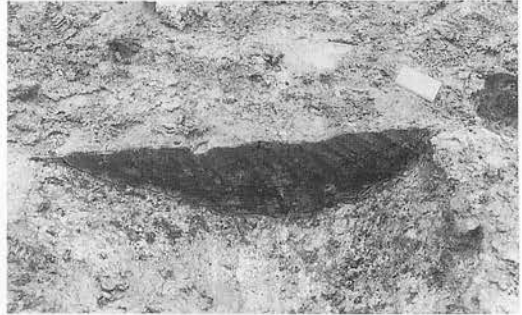
13SD16 断面



13SD17 断面



13SD18 断面



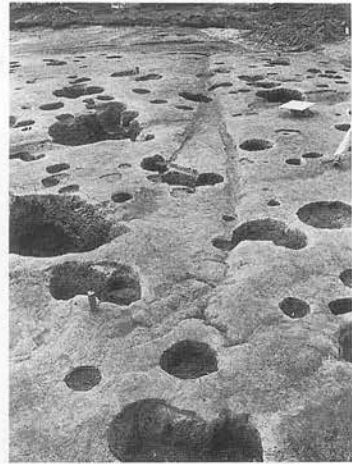
13SD23 断面



13SD23 完掘



13SD25 完掘



13SD26 完掘



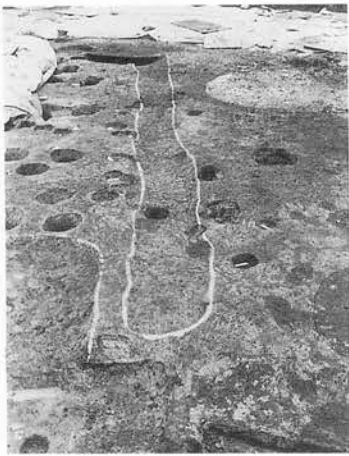
13SD25 断面



13SD26 断面

写真図版52 東側調査区の溝(2)

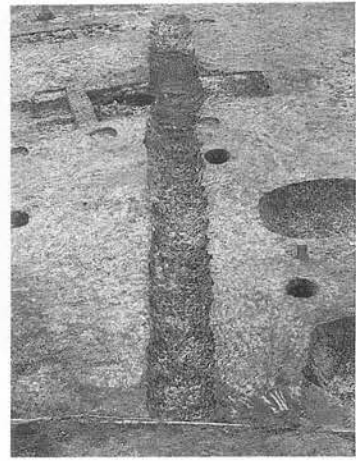




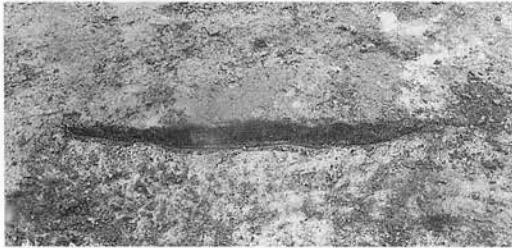
13SD27 完掘



13SD28 完掘



13SD31 完掘



13SD27 断面



13SD28 断面



13SD29・30 完掘



13SD32・33 完掘



13SD29・30 断面

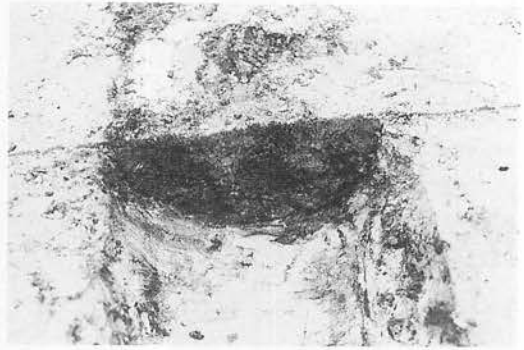


13SD32・33 断面

写真図版53 東側調査区の溝(3)



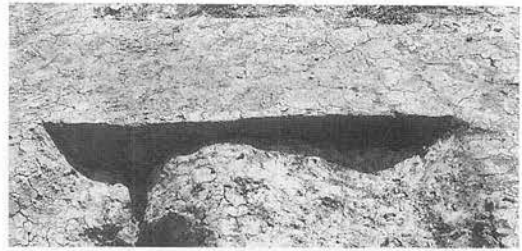
15SD1 完掘



15SD1 完掘



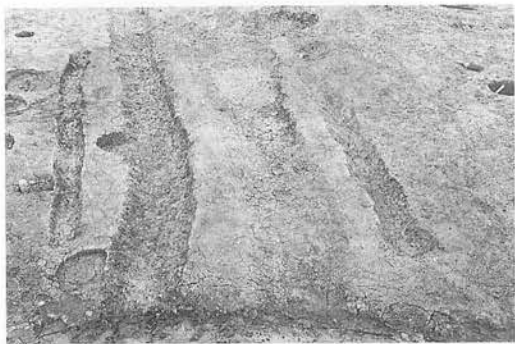
15SD2・11 完掘



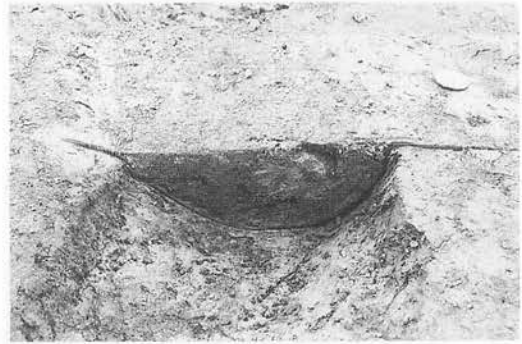
15SD2・11 断面



15SD2 断面



15SD3・4 完掘



15SD4 断面

写真図版54 東側調査区の溝(4)



15SD5 完掘



15SD6 完掘



15SD7 完掘



15SD8 完掘



15SD5 断面



15SD5 断面



15SD7 断面



15SD9・10 完掘

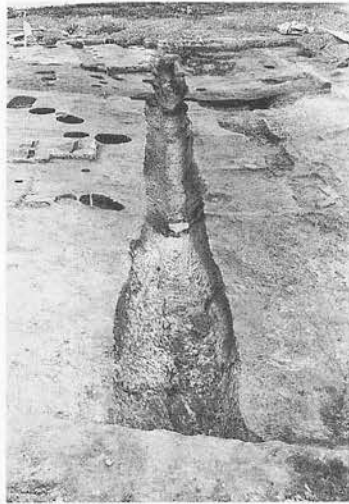


15SD9 断面



15SD10 断面

写真図版55 東側調査区の溝(5)



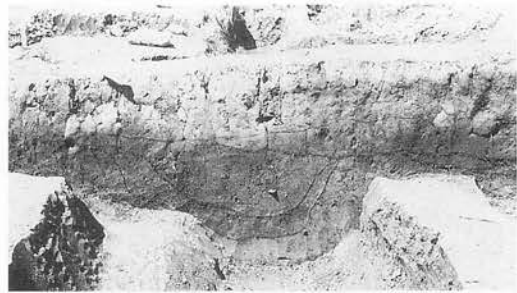
15SD12 完掘



15SD12 完掘



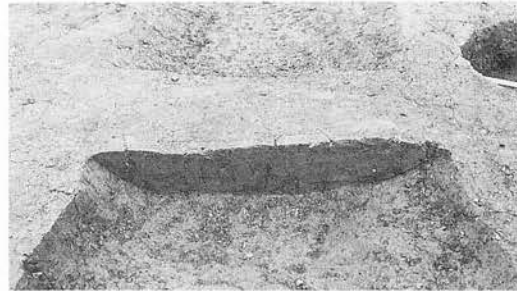
15SD12 南端部分



15SD12 断面



15SD13 完掘



15SD13 断面



15SD34・38・39・40 完掘



15SD34・36・38 完掘

写真図版56 東側調査区の溝(6)

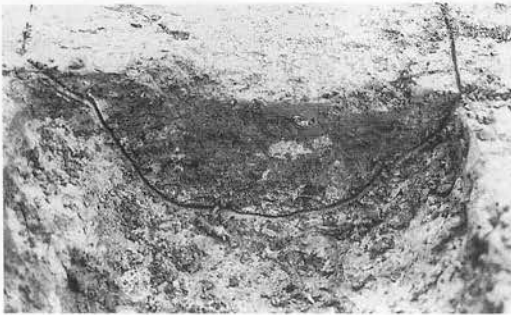




15SD35 完掘



15SD37 完掘



15SD34 断面



15SD35 断面



15SD36 断面

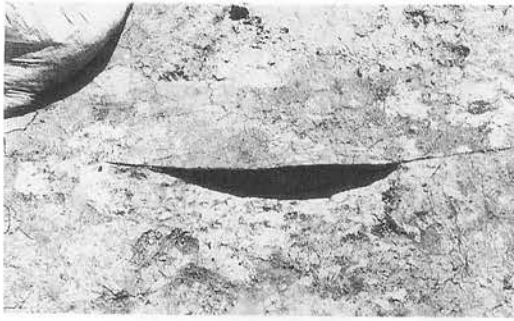


15SD37 断面

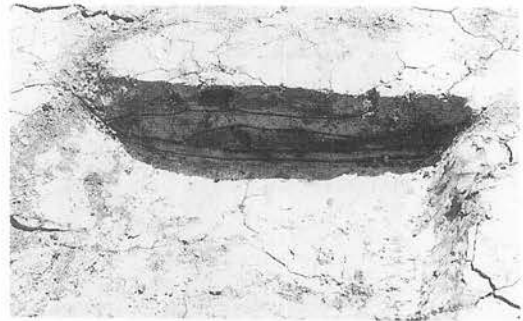


15SD38 断面

写真図版57 東側調査区の溝(7)



15SD39 断面



15SD40 断面



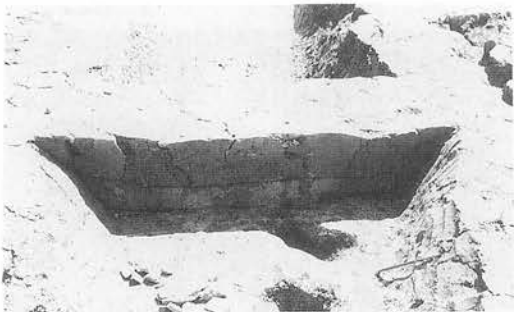
15SD41 完掘



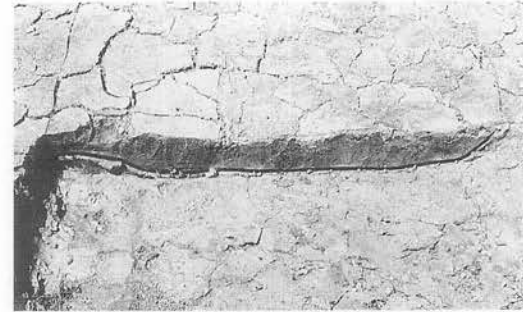
15SD42 完掘



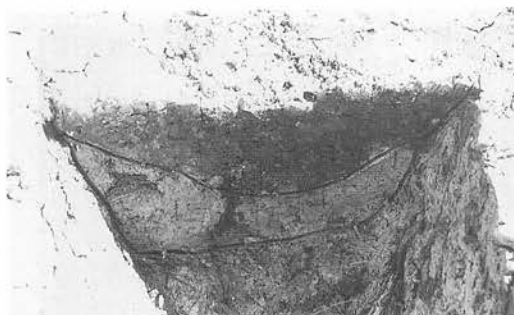
15SD43 完掘



15SD41 断面



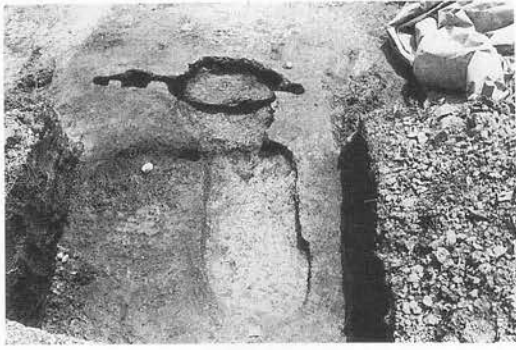
15SD42 断面



15SD43 断面

写真図版58 東側調査区の溝(8)





15SX14 完掘



15SX16 確認



15SX16 完掘



15SX15 確認



15SX15 完掘



15SX17 完掘

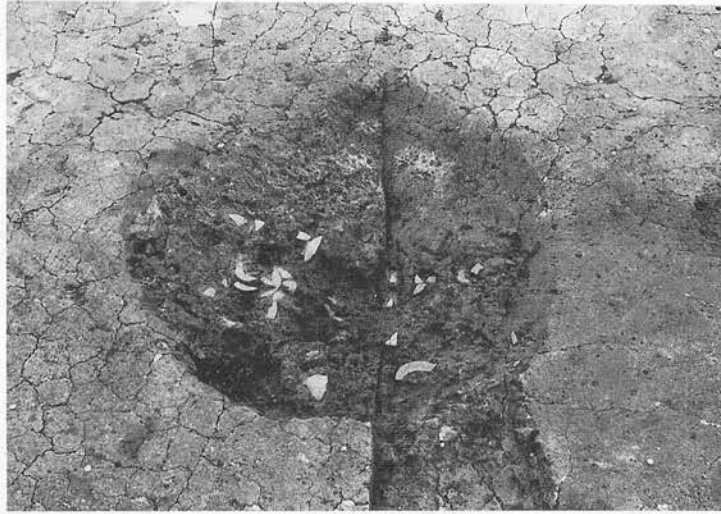


15SX18 断面



15SX18 完掘

写真図版59 西側調査区のSX遺構



11SX2 検出



11SX2 柱状高台かわらけ出土状況

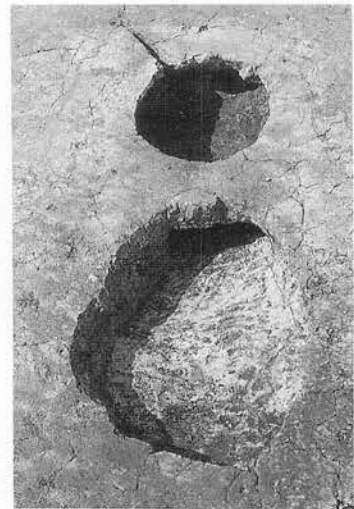
写真図版60 東側調査区のSX遺構(1)



13SX2 完掘



13SX6 完掘



13SX7 完掘



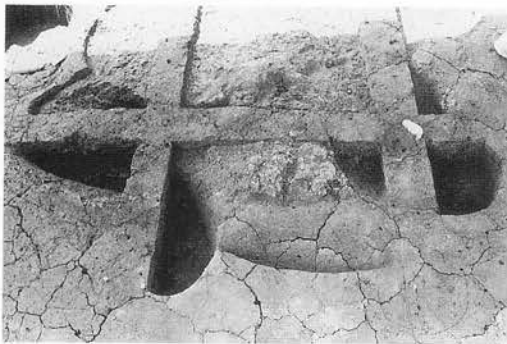
13SX8 完掘



13SX13 完掘



13SX26 断面



13SX14・15 断面

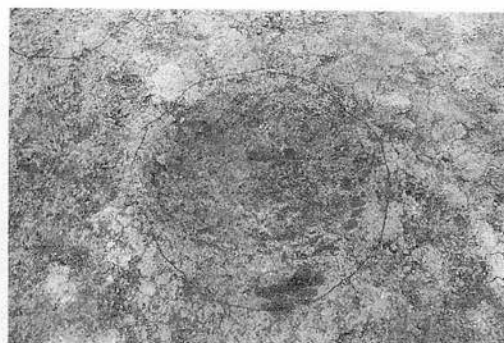


II E5j付近のSX遺構

写真図版61 東側調査区のSX遺構(2)



15SX1 完掘



15SX2 完掘



15SX3 完掘



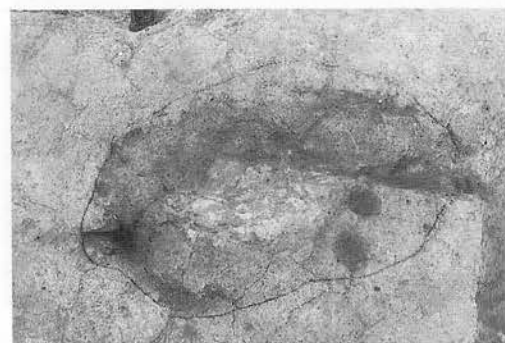
15SX4 完掘



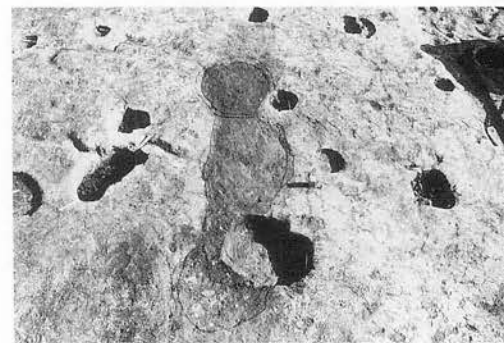
15SX5 完掘



15SX6 完掘



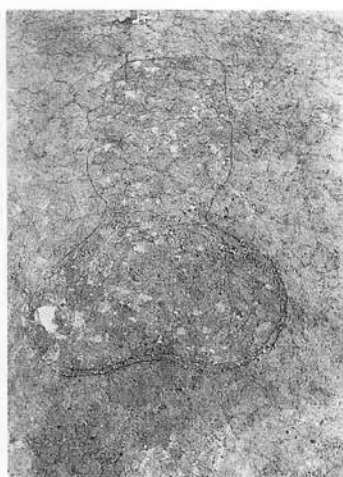
15SX7 完掘



15SX8 確認

写真図版62 東側調査区のSX遺構(3)





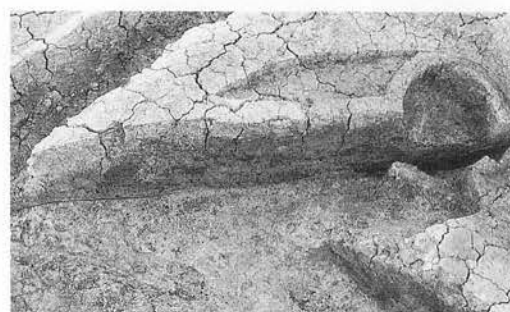
15SX9 確認



15SX9 完掘



15SX9 断面



15SX19 断面



15SX19 確認



15SX20・21 完掘

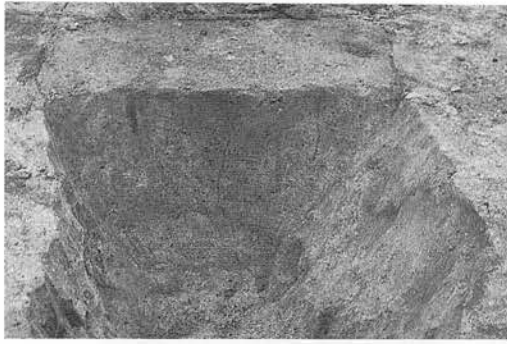


15SX20 断面

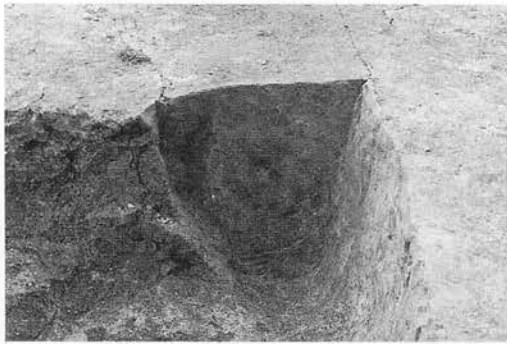


15SX20 断面

写真図版63 東側調査区のSX遺構(4)



13陥し穴1 断面



13陥し穴2 断面



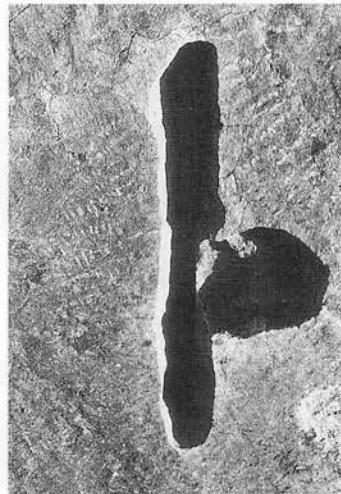
15陥し穴1 断面



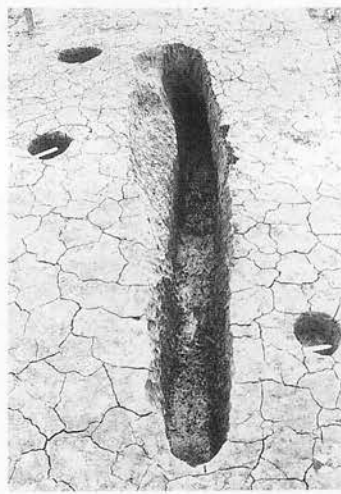
IID6d 遺物出土状況(右下は突帯付四耳壺片)



13陥し穴1 完掘



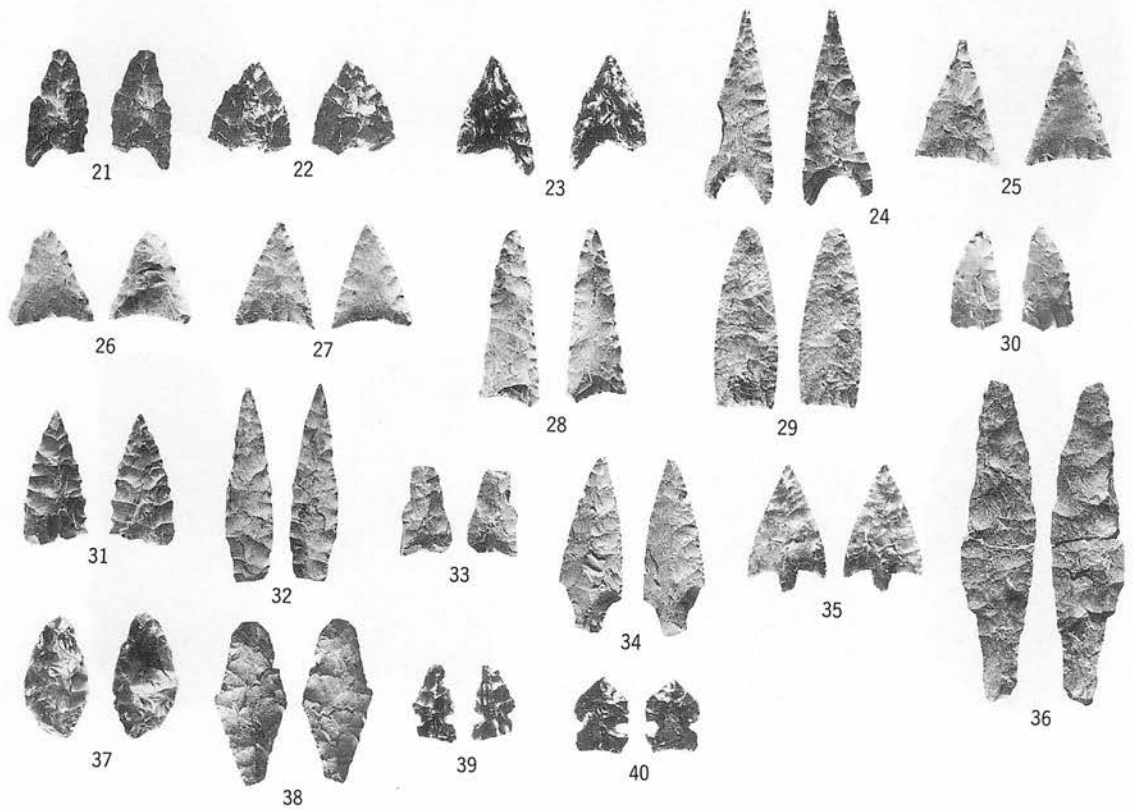
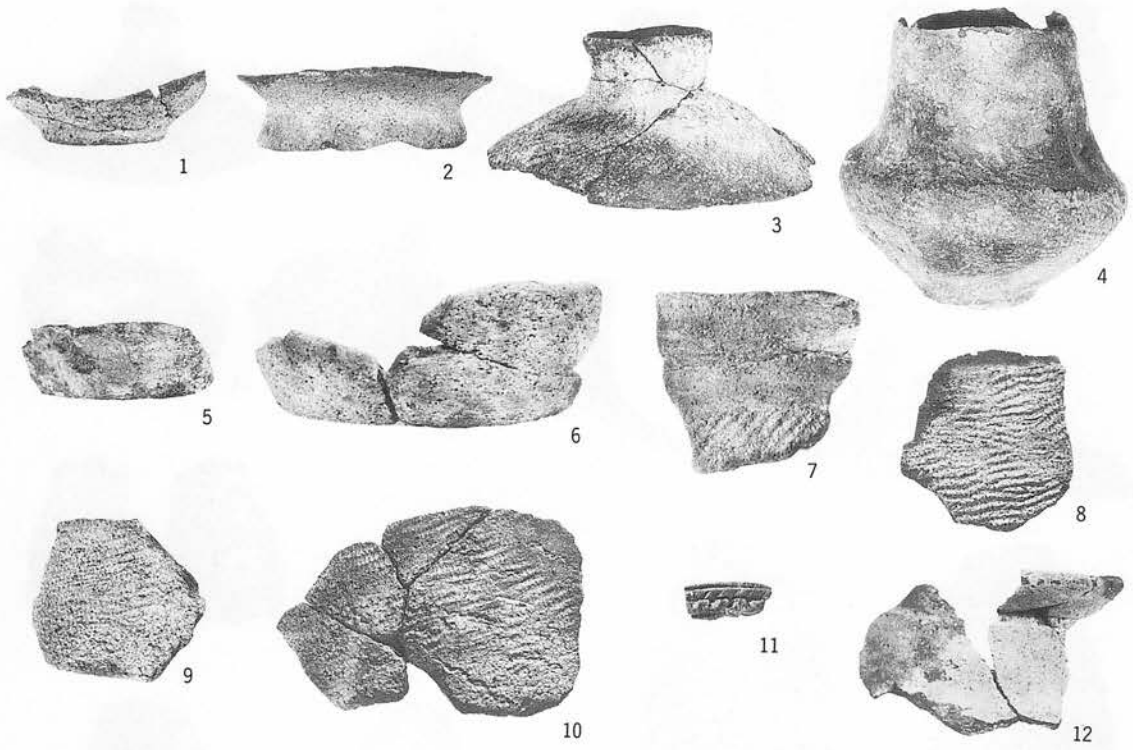
13陥し穴2 完掘



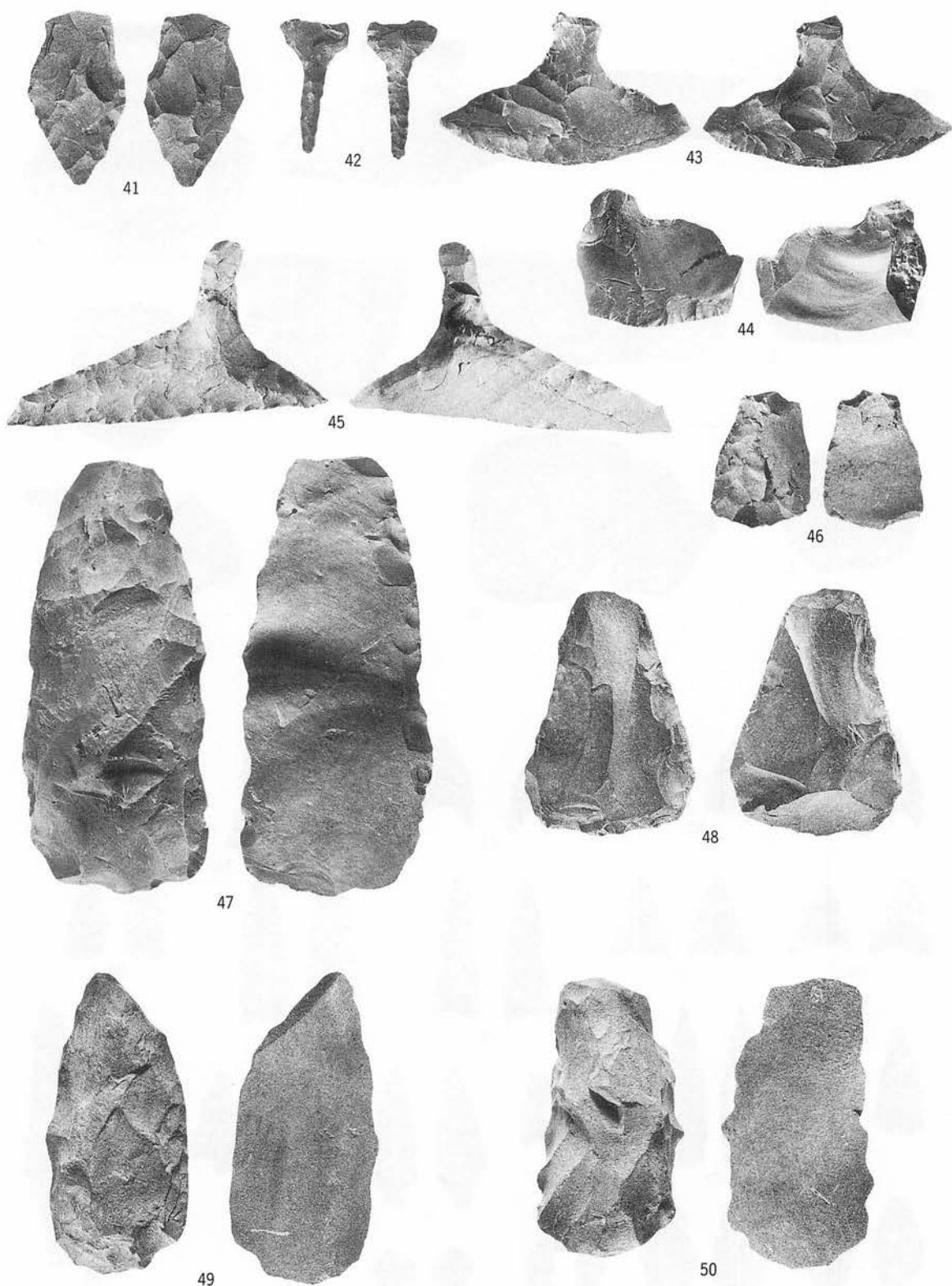
15陥し穴1 完掘

写真図版64 陥し穴遺構





写真図版65 縄文・弥生時代の土器、石器(1)



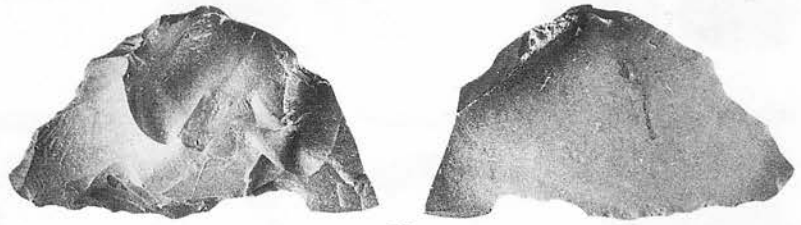
写真図版66 縄文・弥生時代の石器(2)



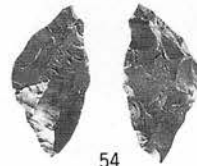
51



52



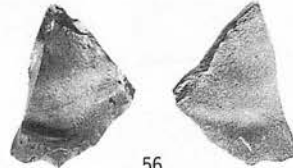
53



54



55

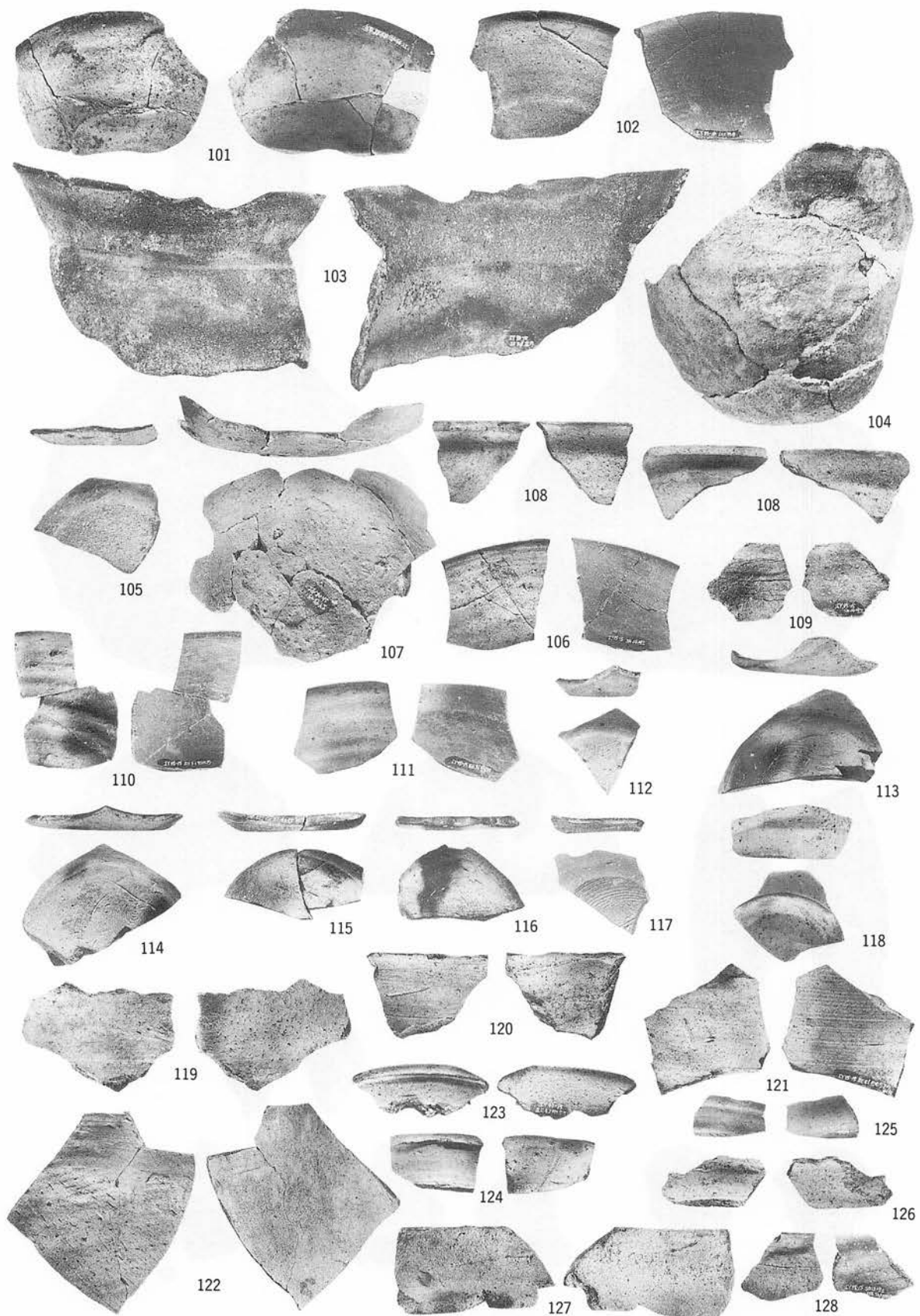


56

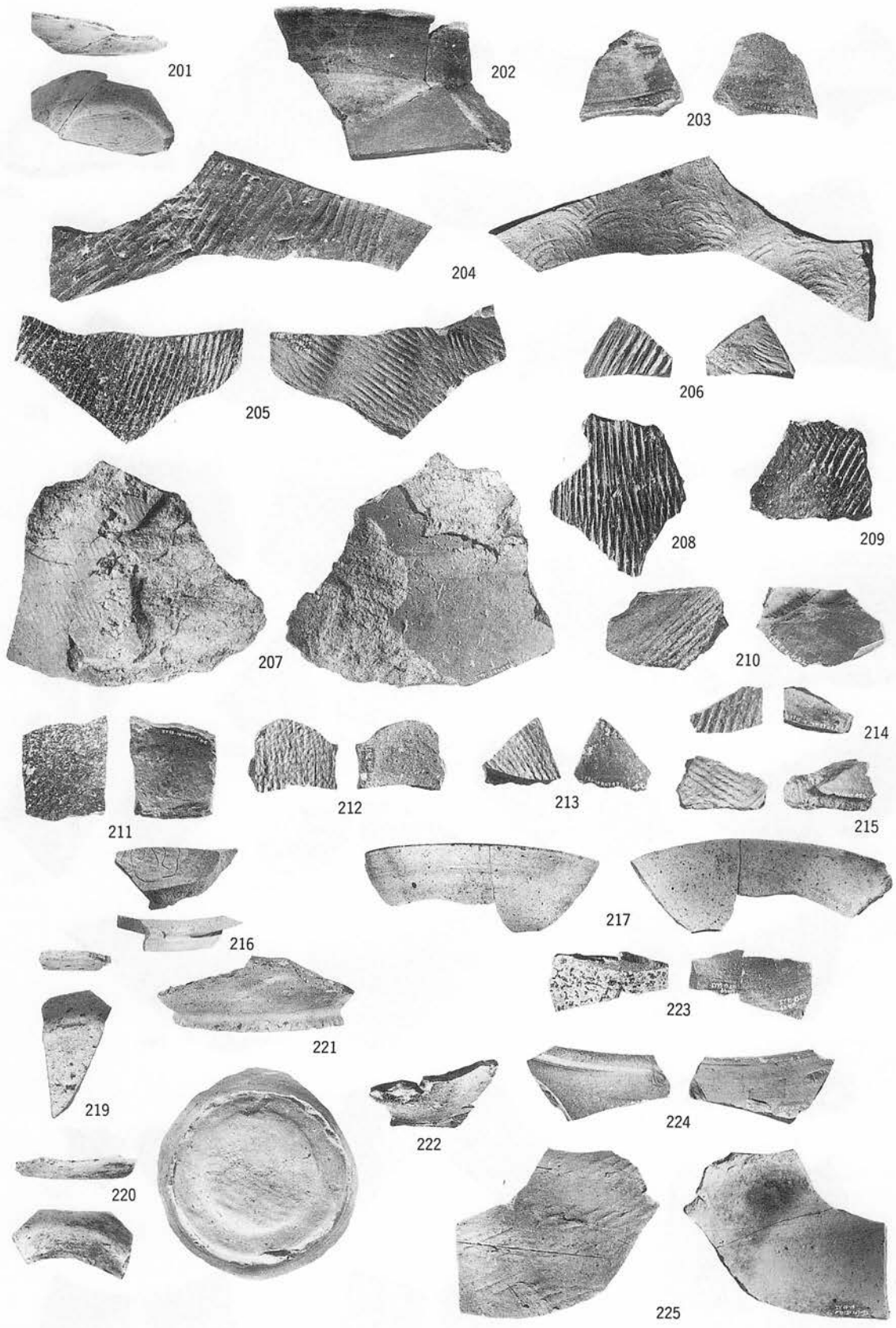


57

写真図版67 縄文・弥生時代の石器(3)

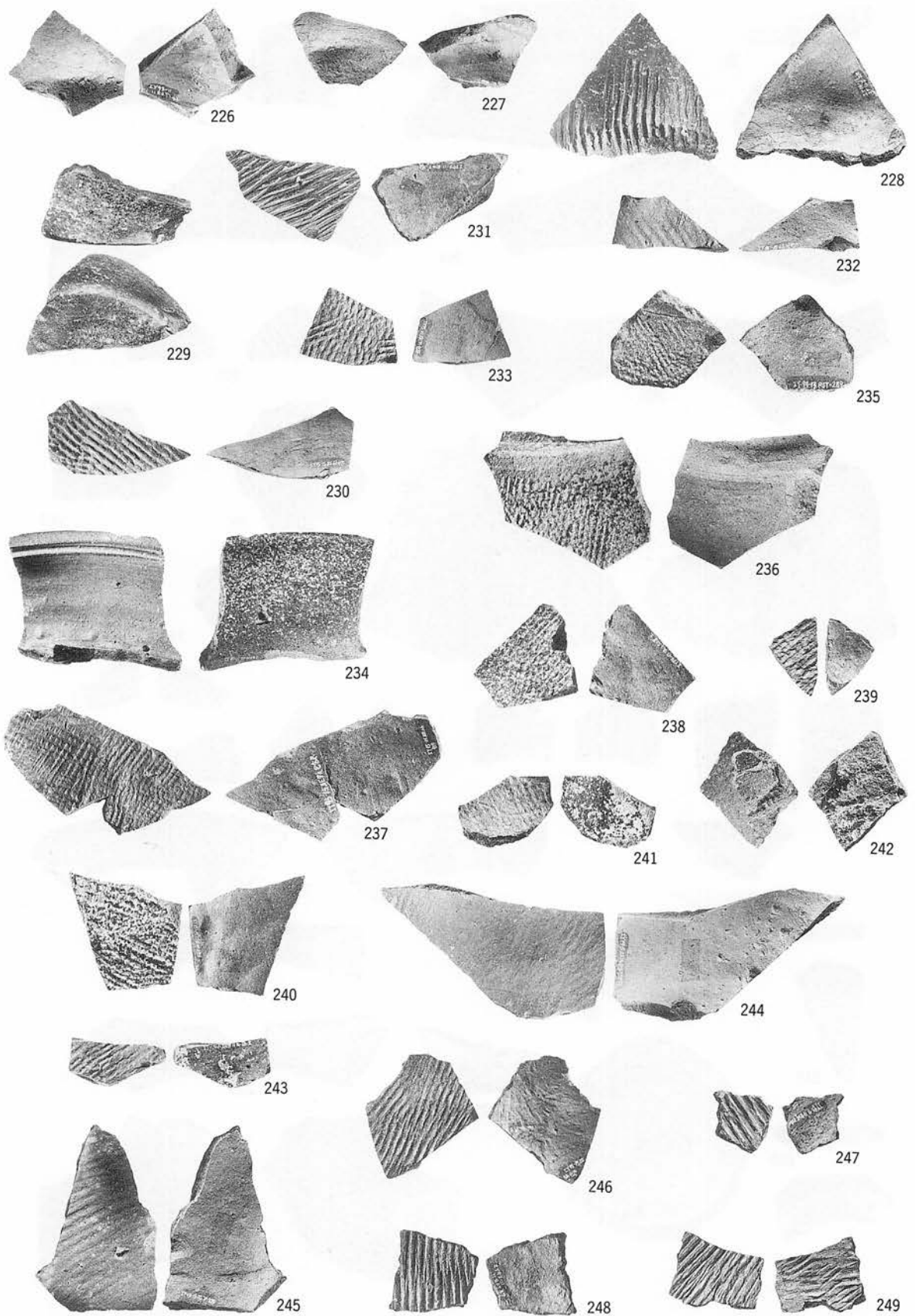


写真図版68 古代の土師器



写真図版69 古代の須恵器(1)



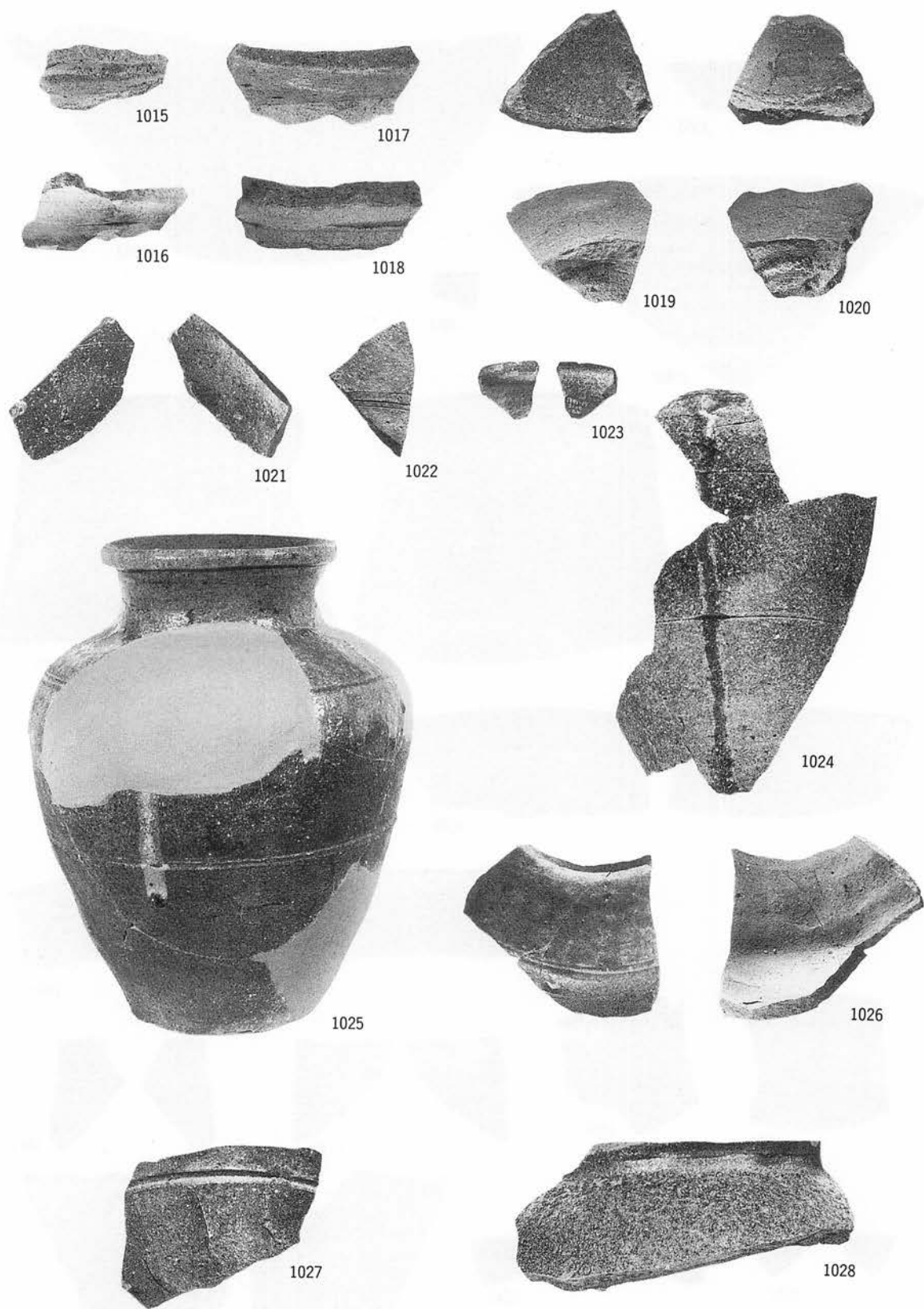


写真図版70 古代の須恵器(2)





写真図版71 西側調査区の常滑産陶器(1)

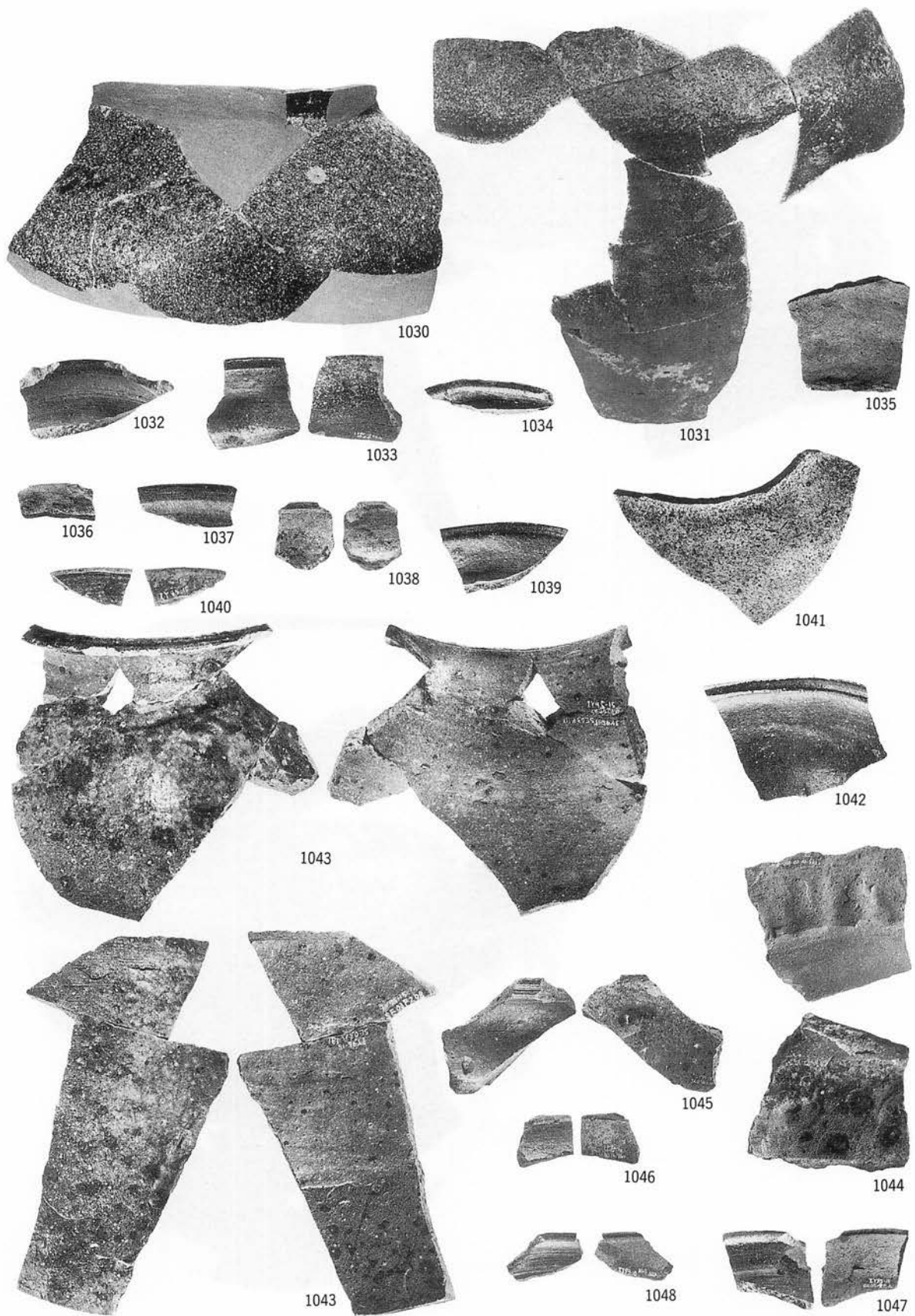


写真図版72 西側調査区の常滑産陶器(2)



1029

写真図版73 西側調査区の常滑産陶器(3)



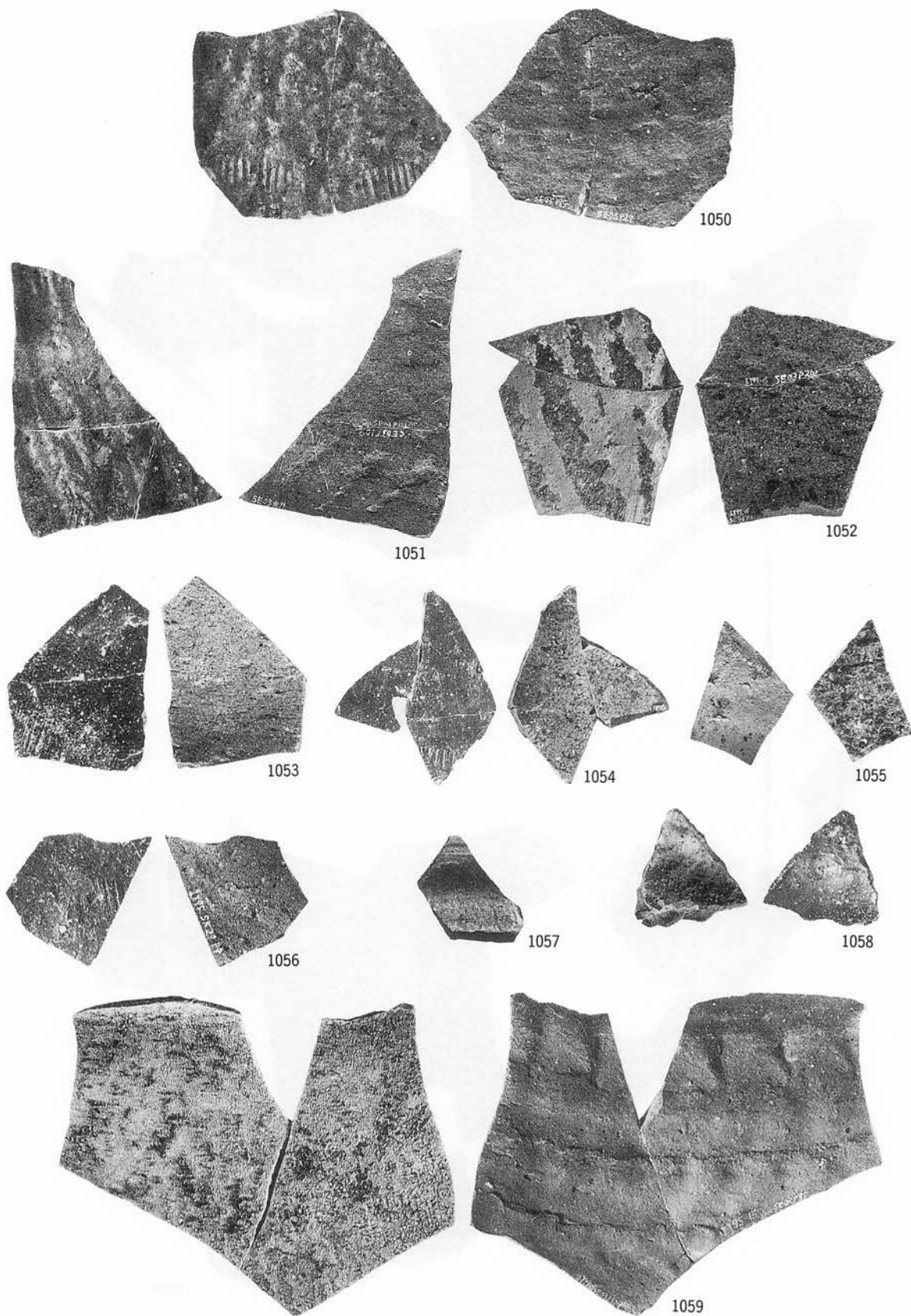
写真図版74 西側調査区の常滑産陶器(4)



1049

写真図版75 西側調査区の常滑産陶器(5)





写真図版76 西側調査区の常滑産陶器(6)

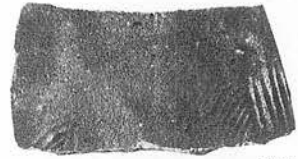




1060



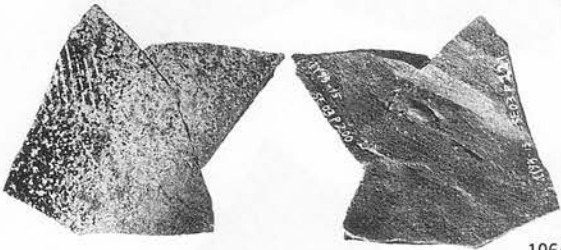
1061



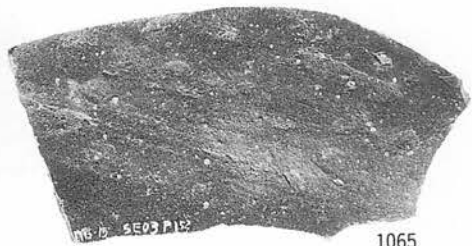
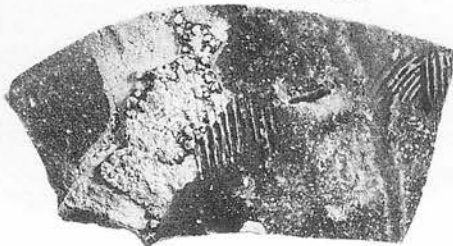
1062



1063

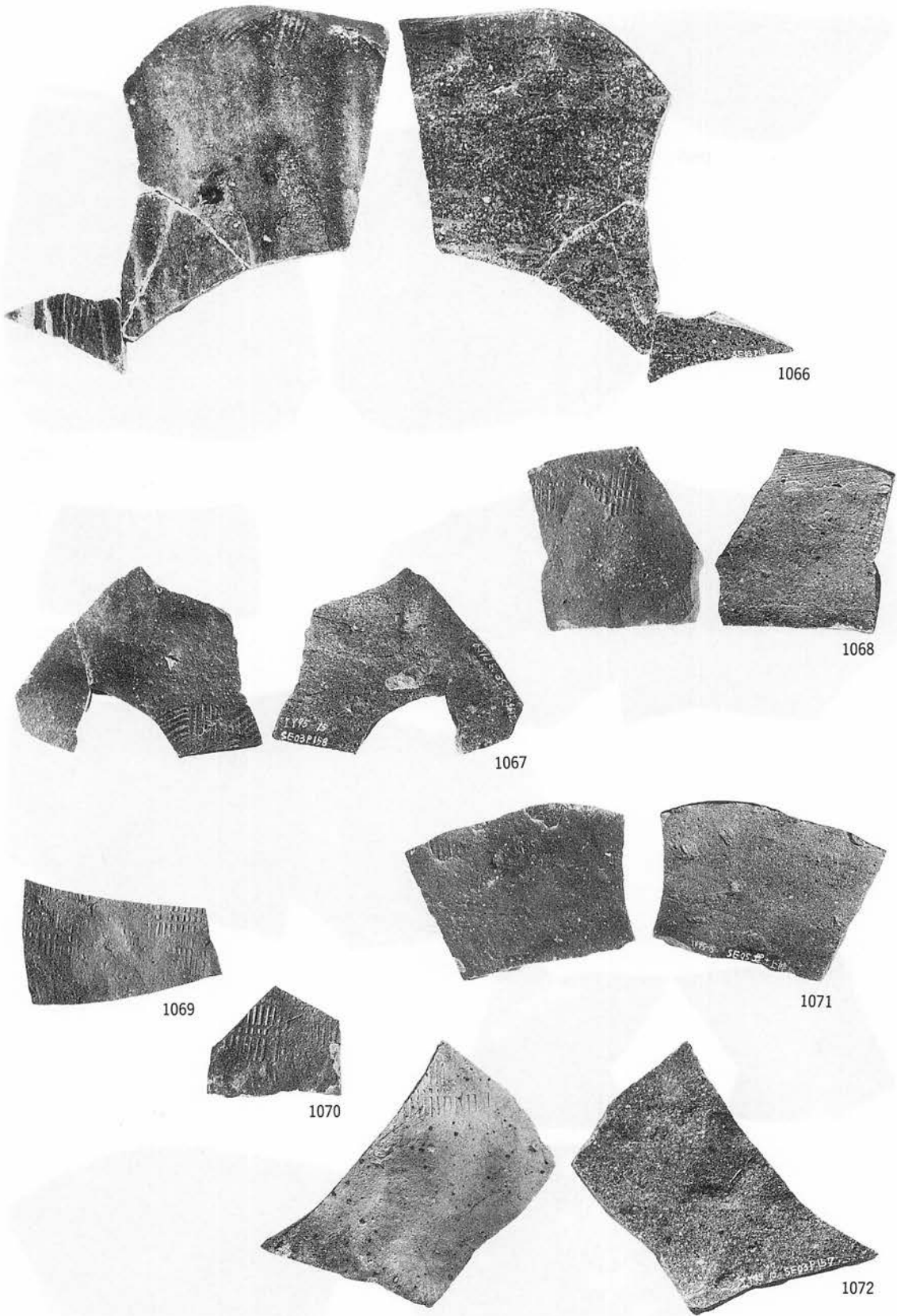


1064

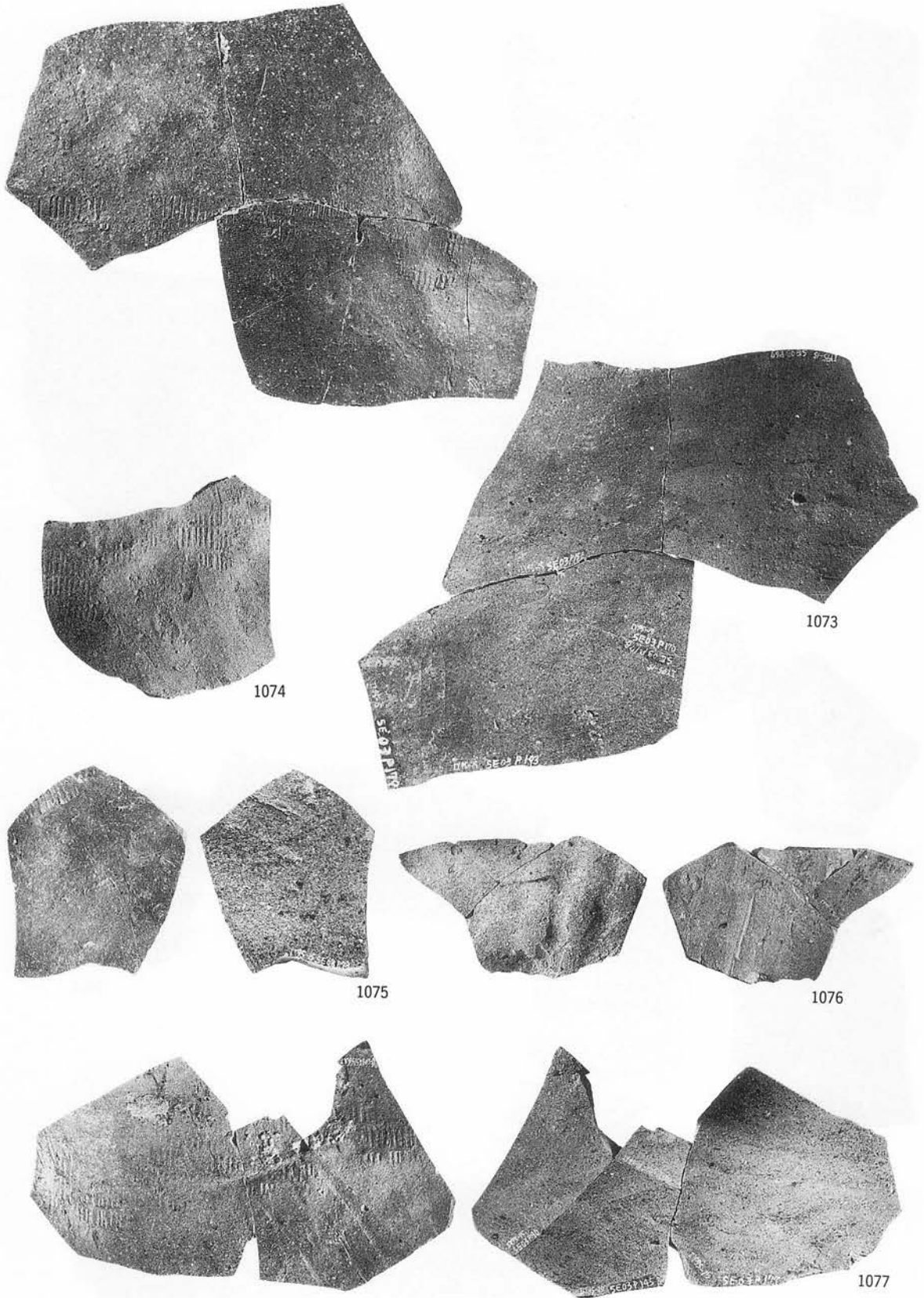


1065

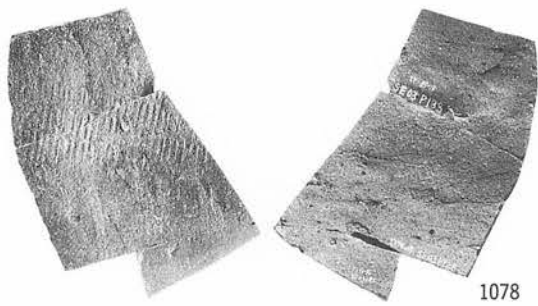
写真図版77 西側調査区の常滑産陶器(7)



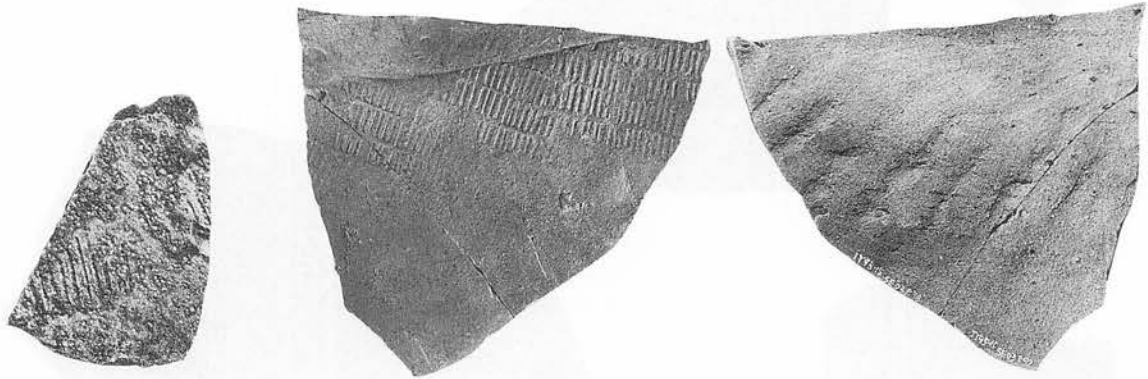
写真図版78 西側調査区の常滑産陶器(8)



写真図版79 西側調査区の常滑産陶器(9)

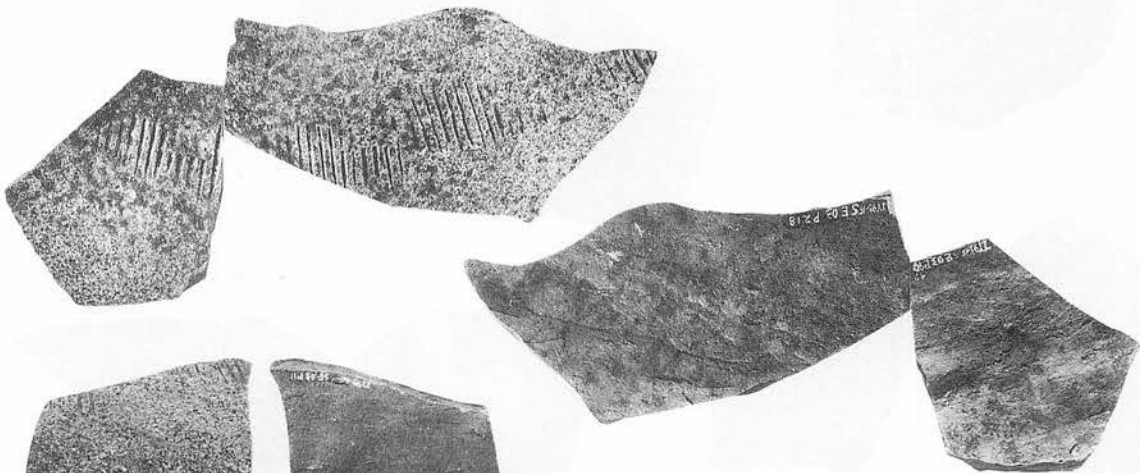


1078

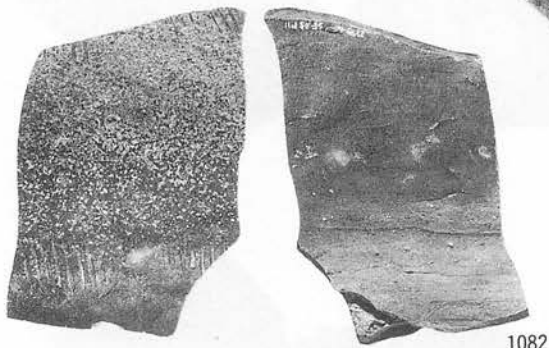


1080

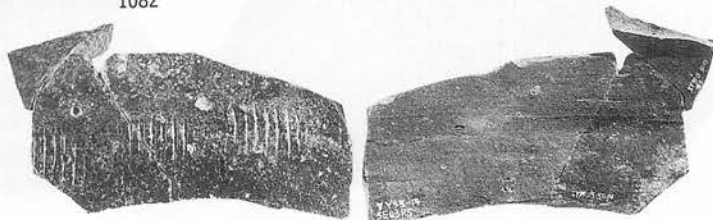
1079



1081

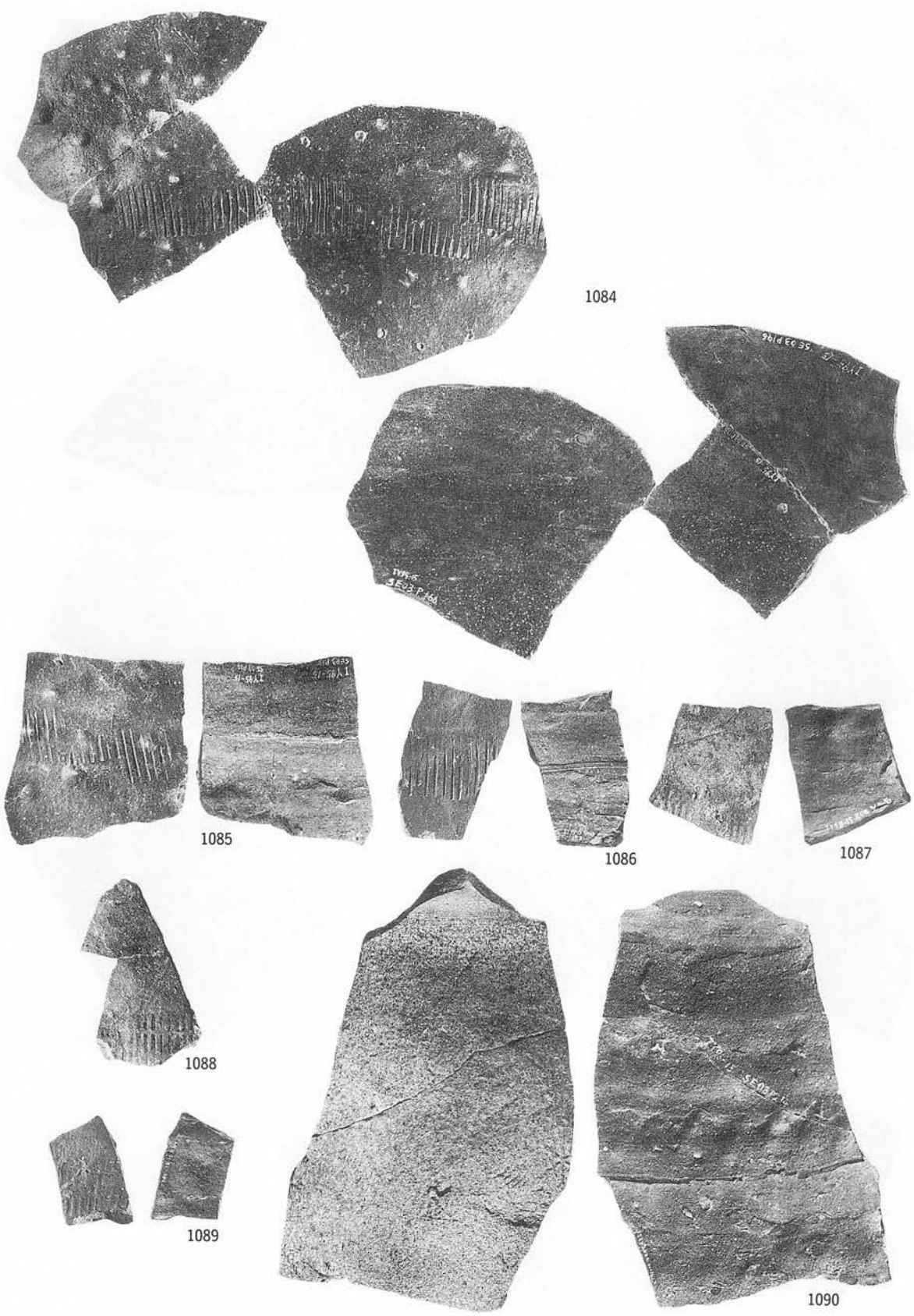


1082



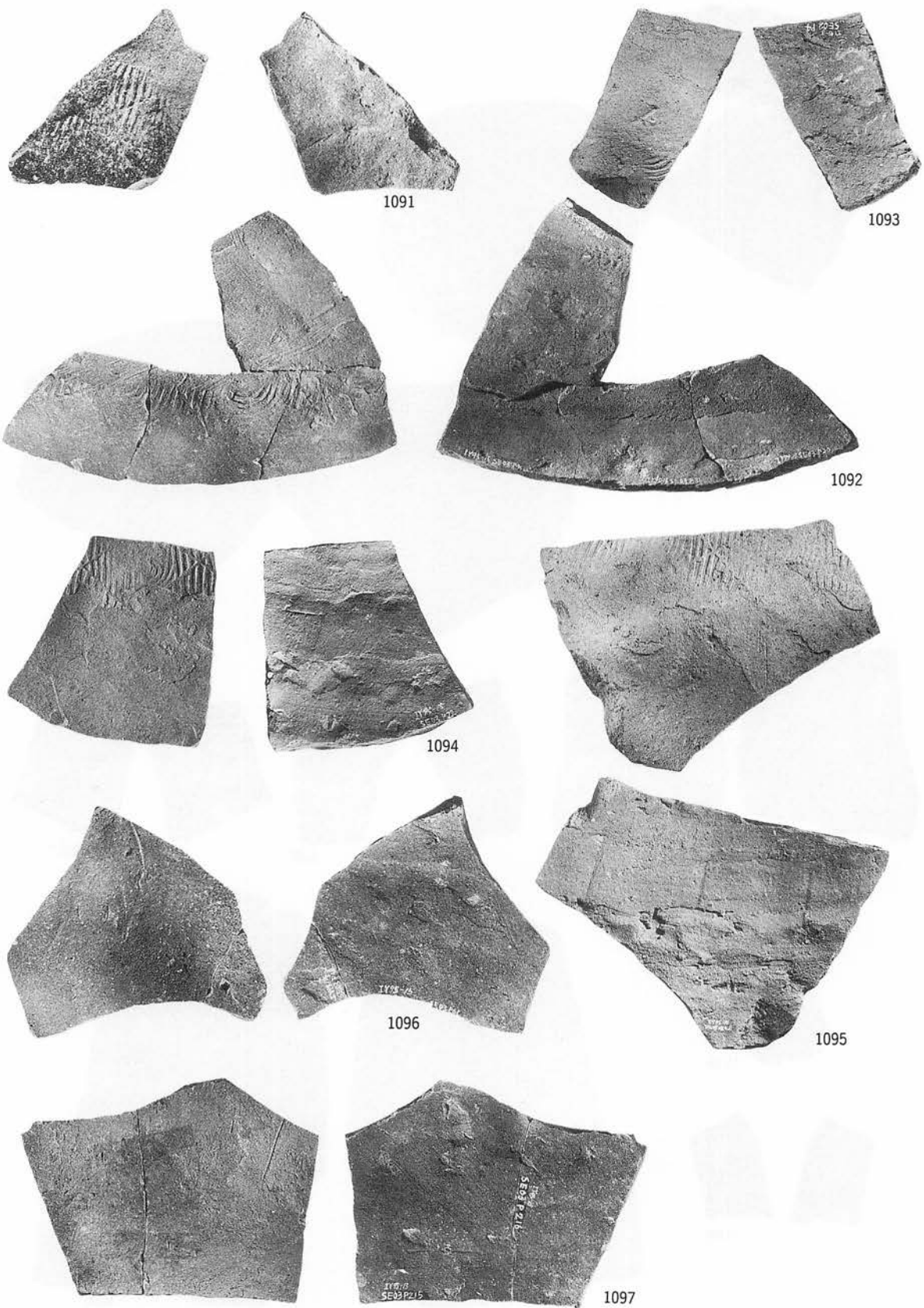
1083

写真図版80 西側調査区の常滑産陶器(10)



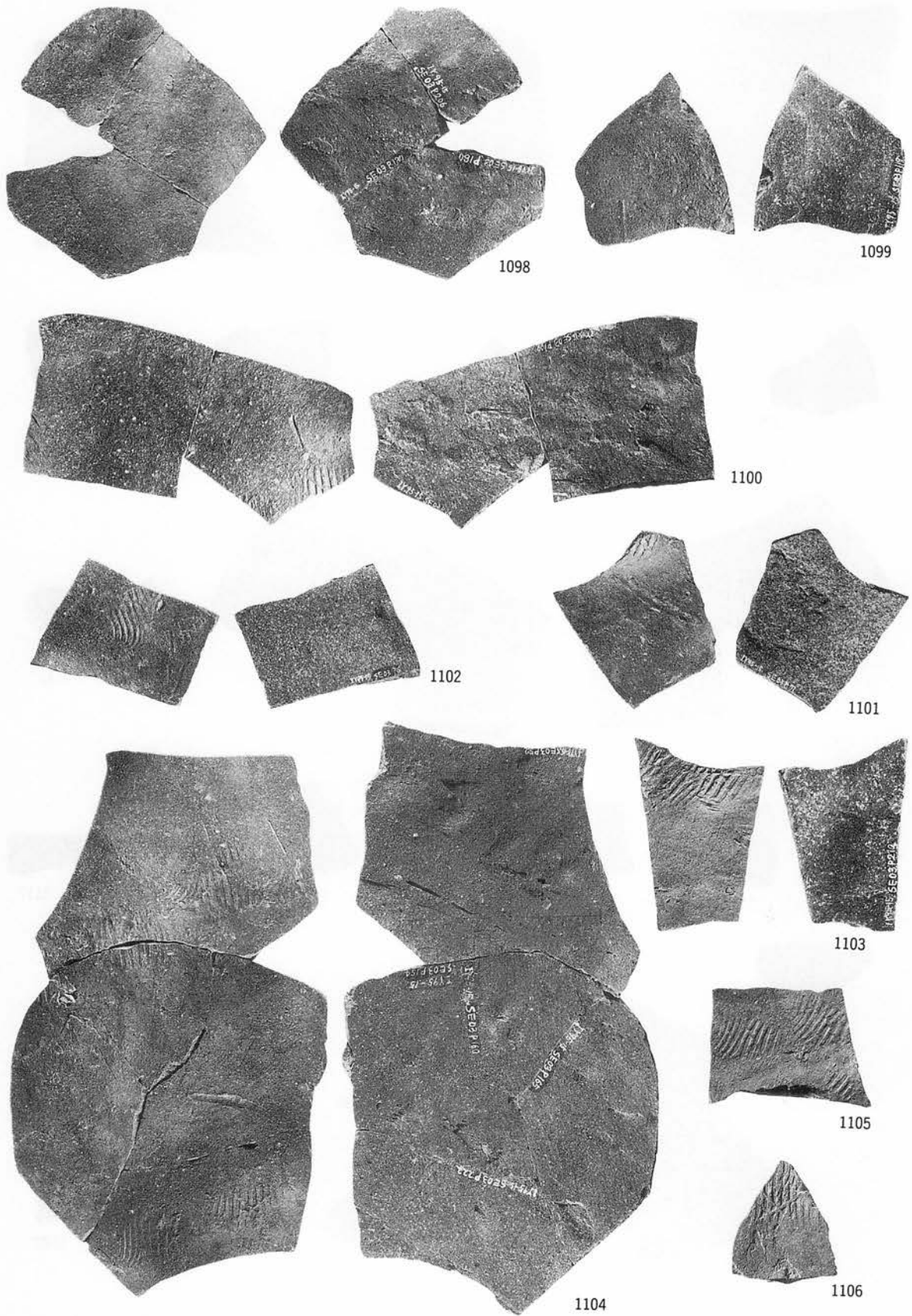
写真図版81 西側調査区の常滑産陶器(11)



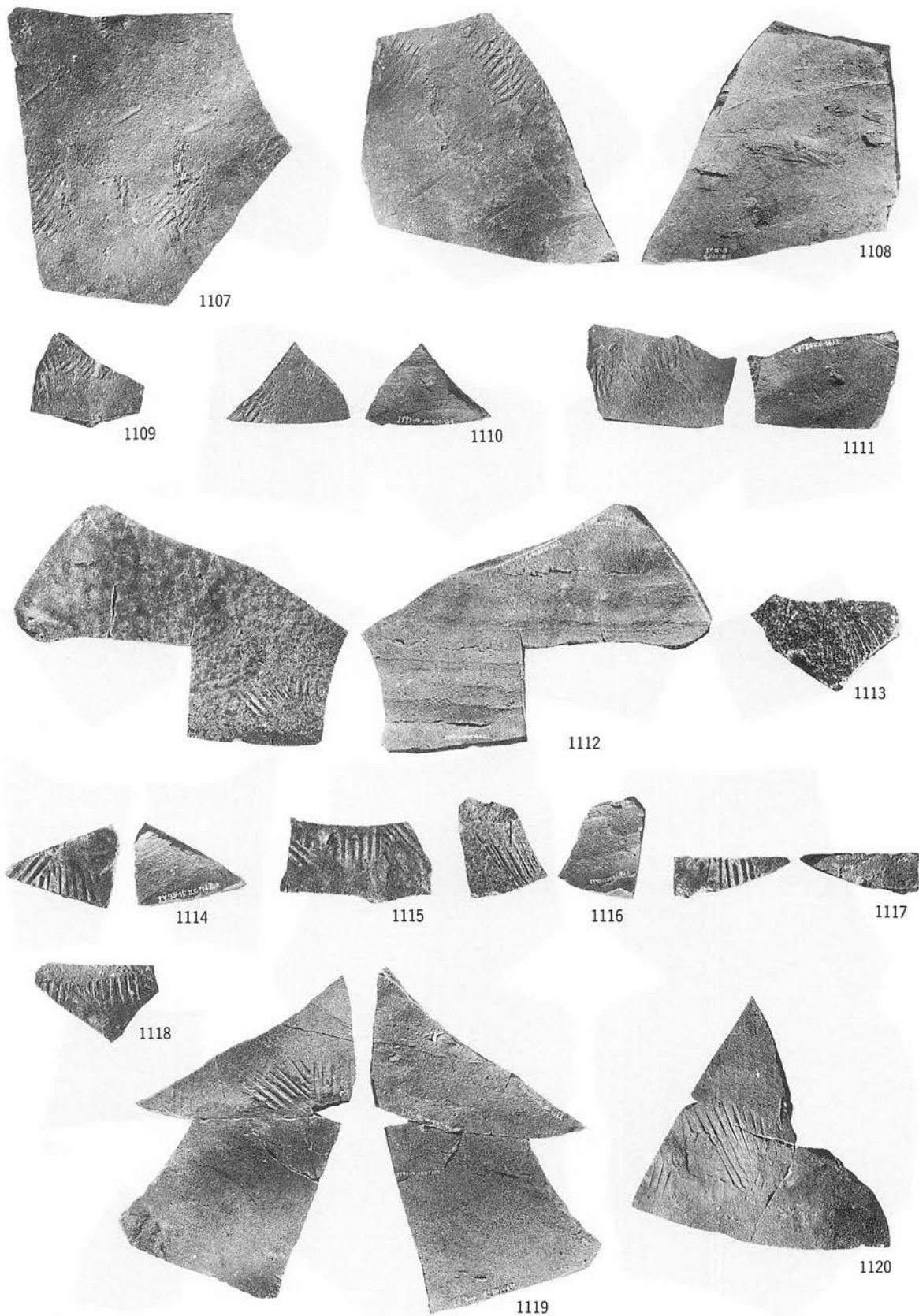


写真図版82 西側調査区の常滑産陶器(12)

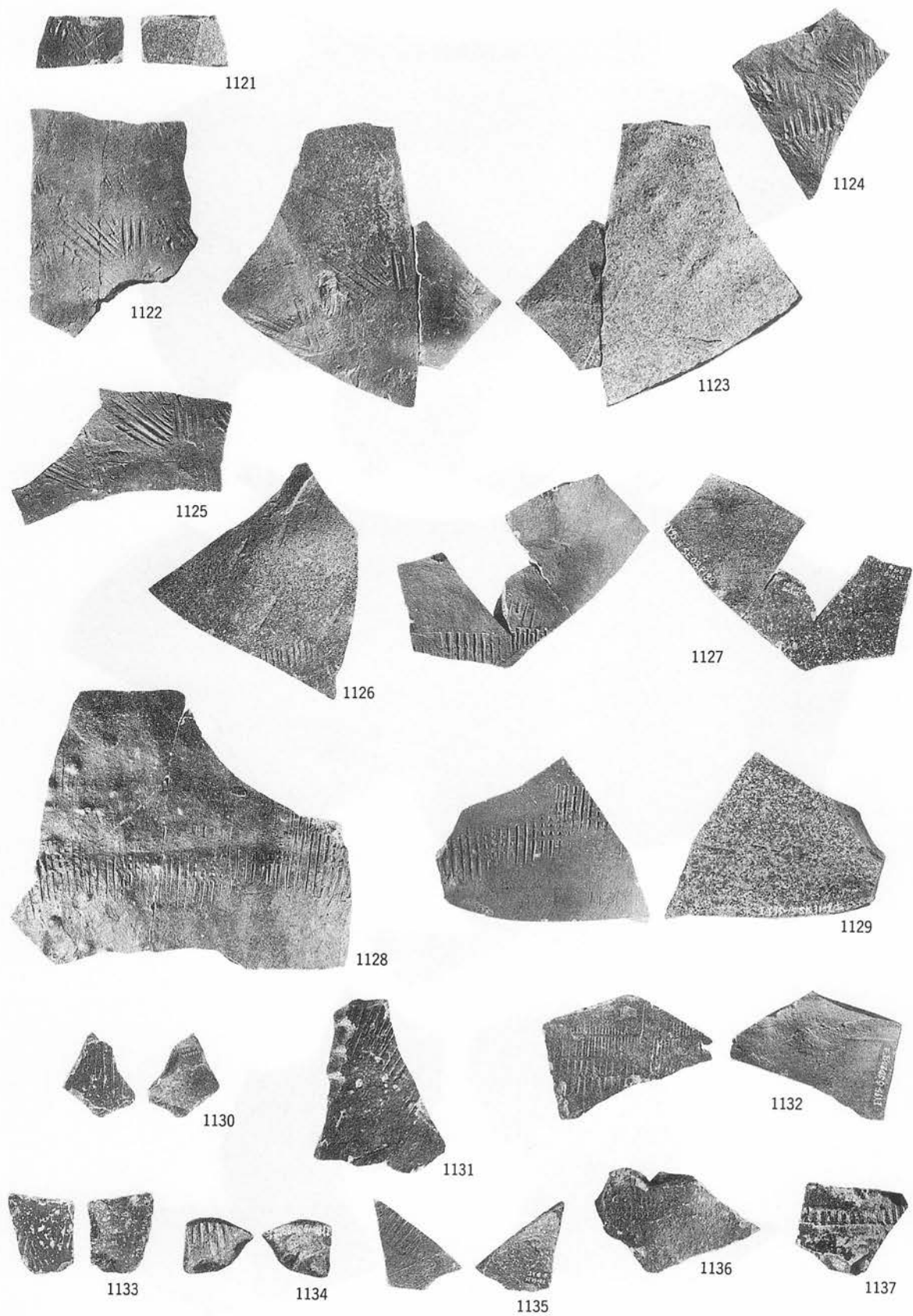




写真図版83 西側調査区の常滑産陶器(13)



写真図版84 西側調査区の常滑産陶器(14)



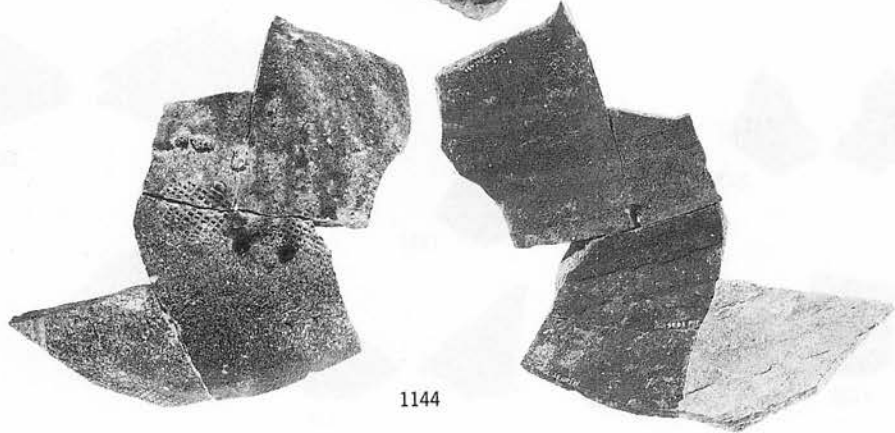
写真図版85 西側調査区の常滑産陶器(15)



1138

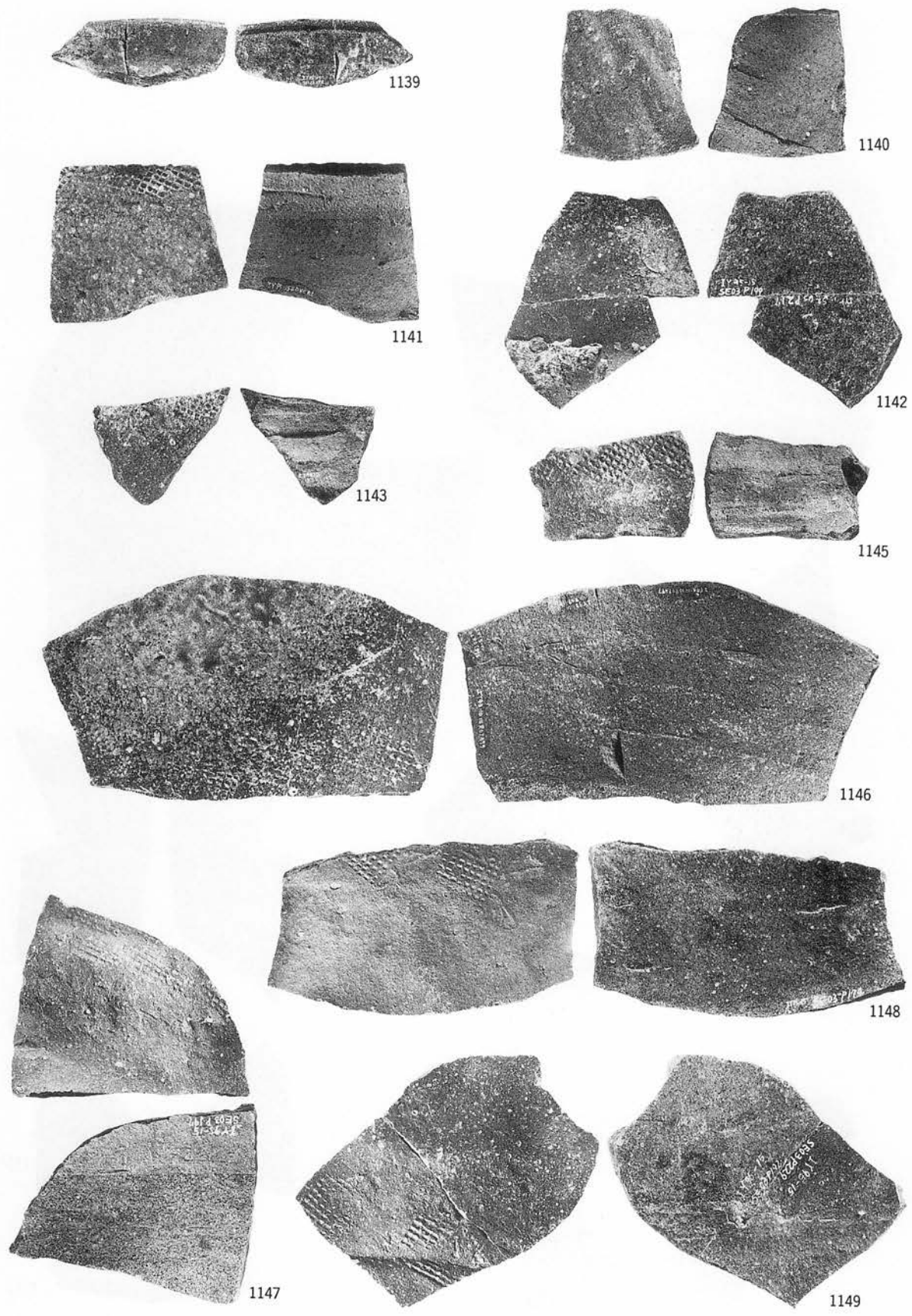


1144

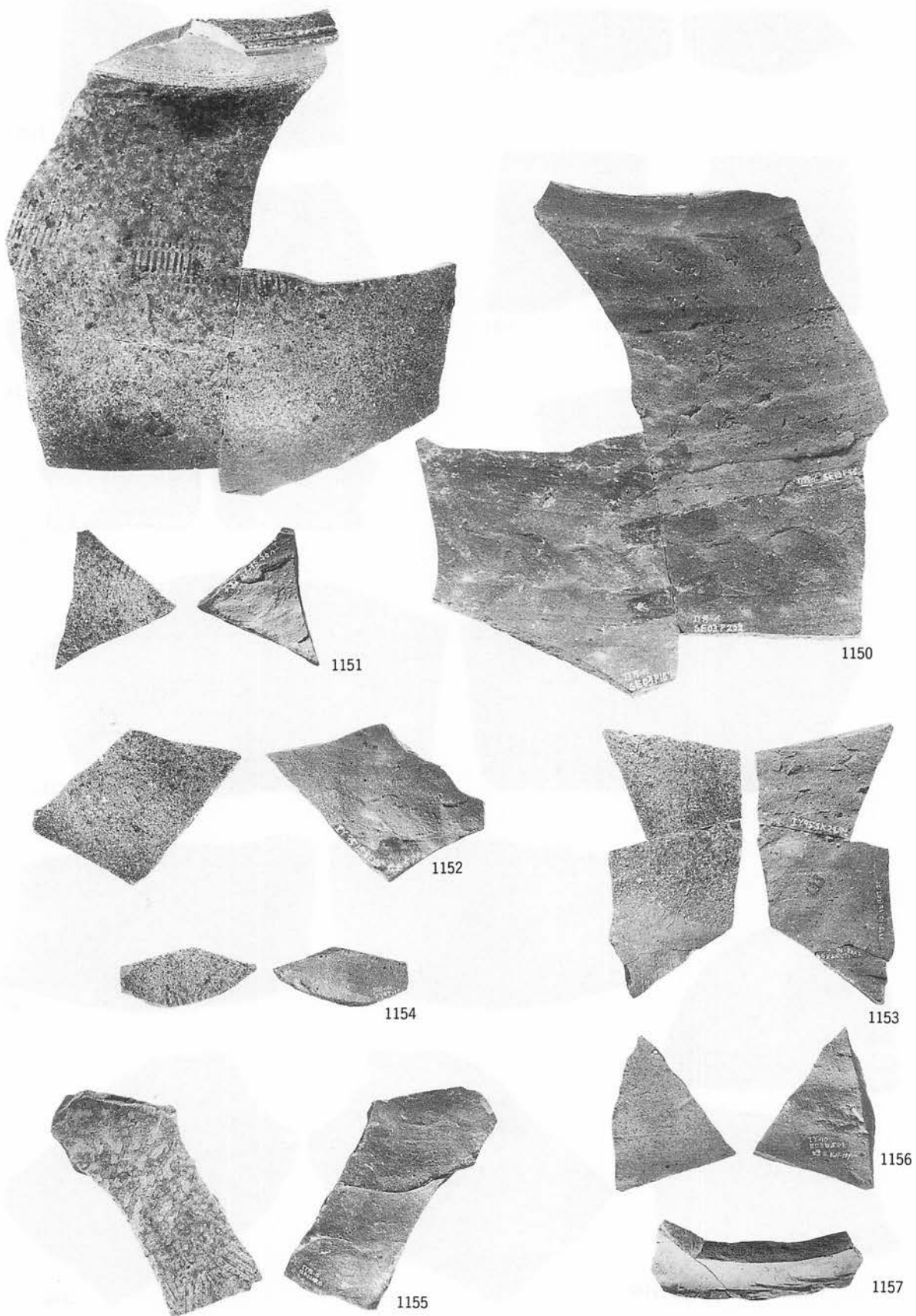


写真図版86 西側調査区の常滑産陶器(16)



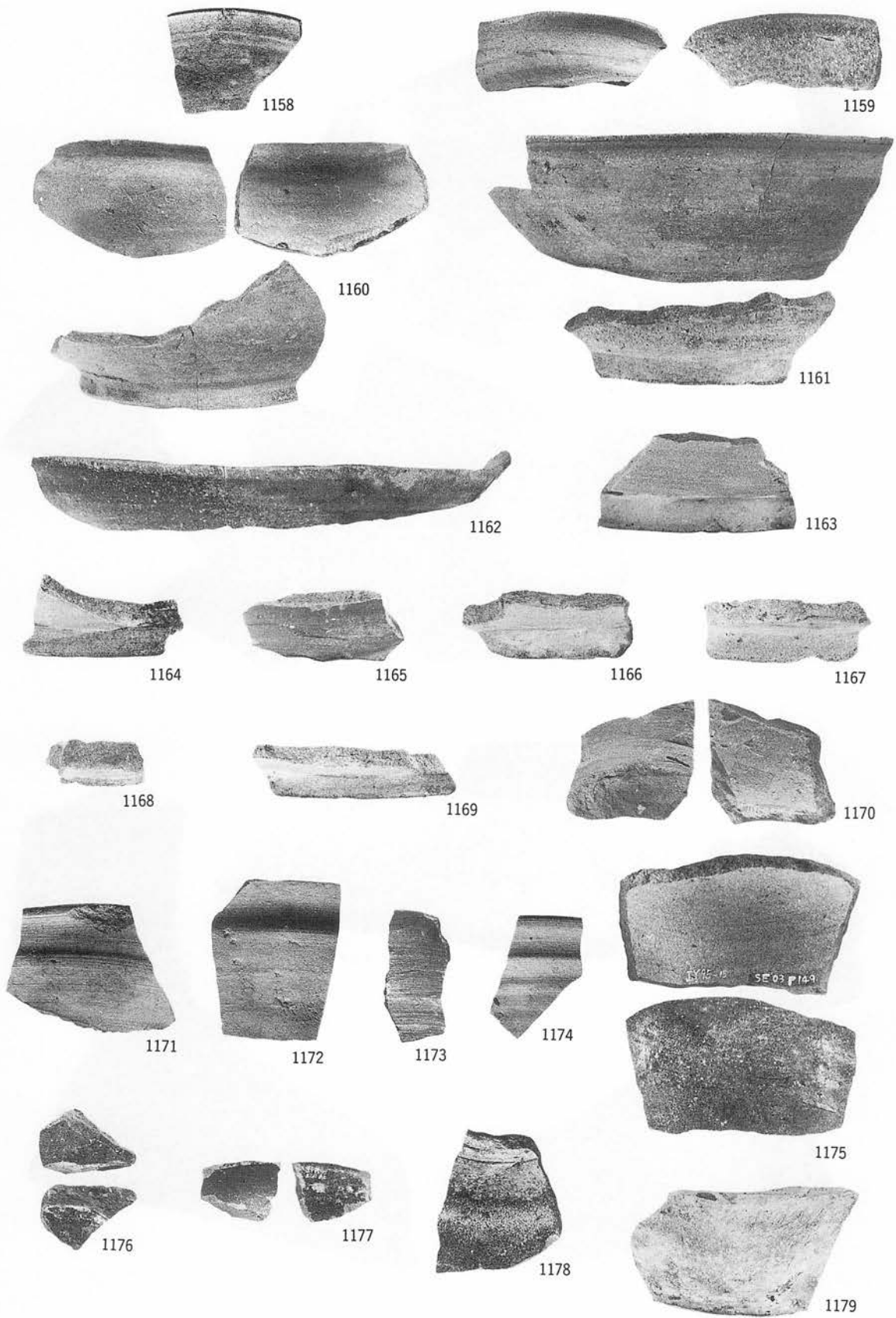


写真図版87 西側調査区の常滑産陶器(17)

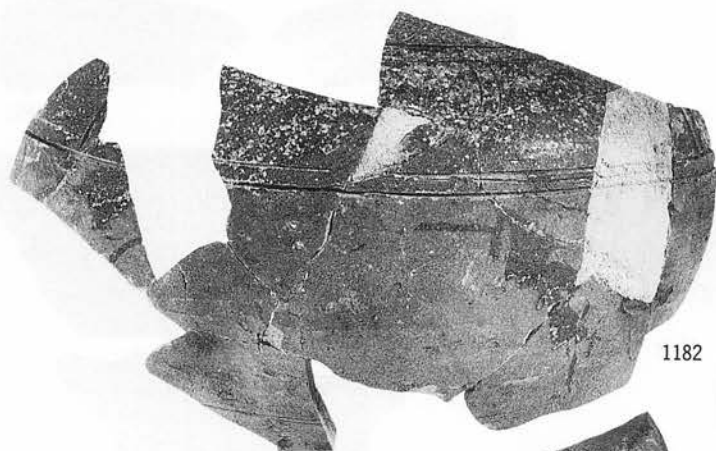


写真図版88 西側調査区の常滑産陶器(18)

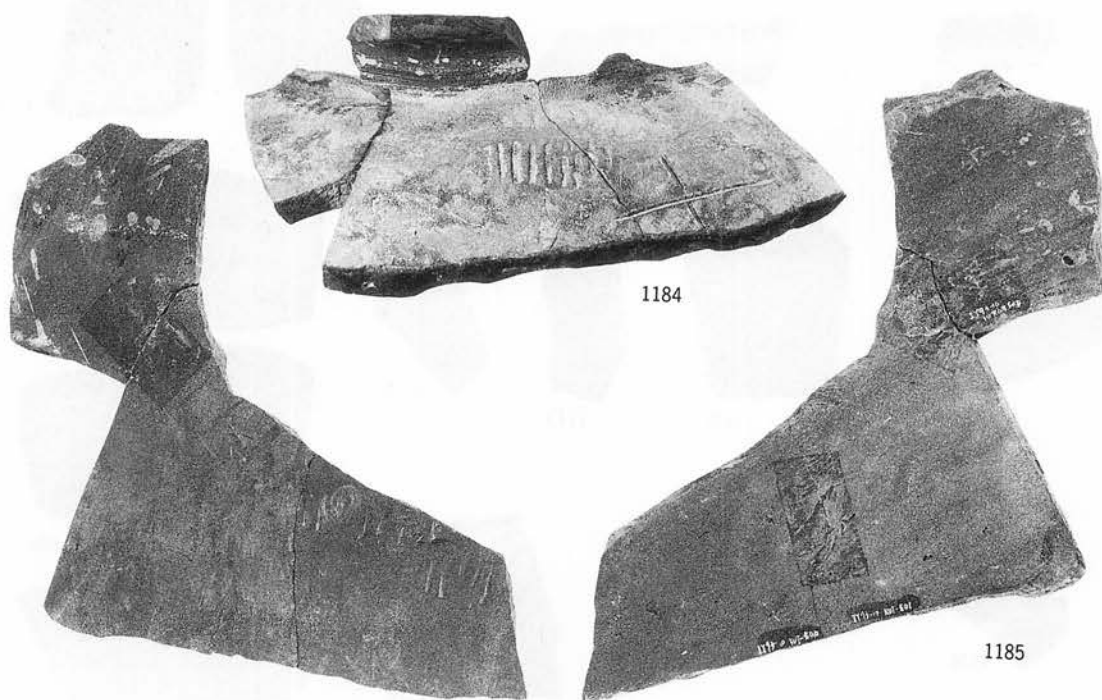
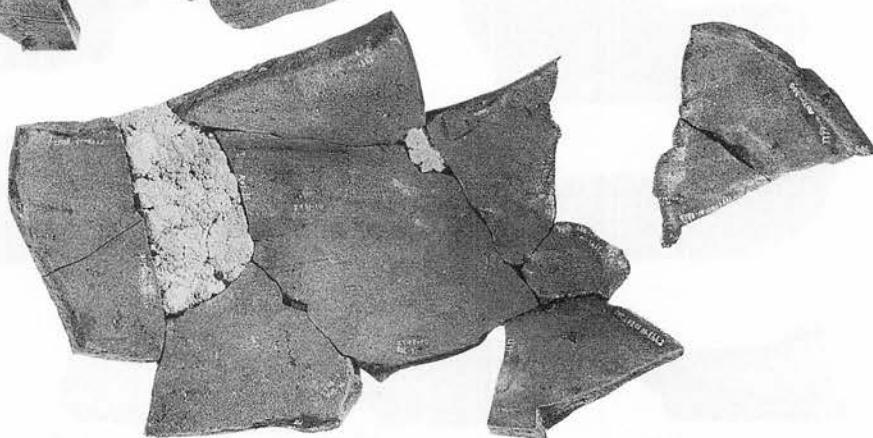




写真図版89 西側調査区の渥美産陶器(1)



1182



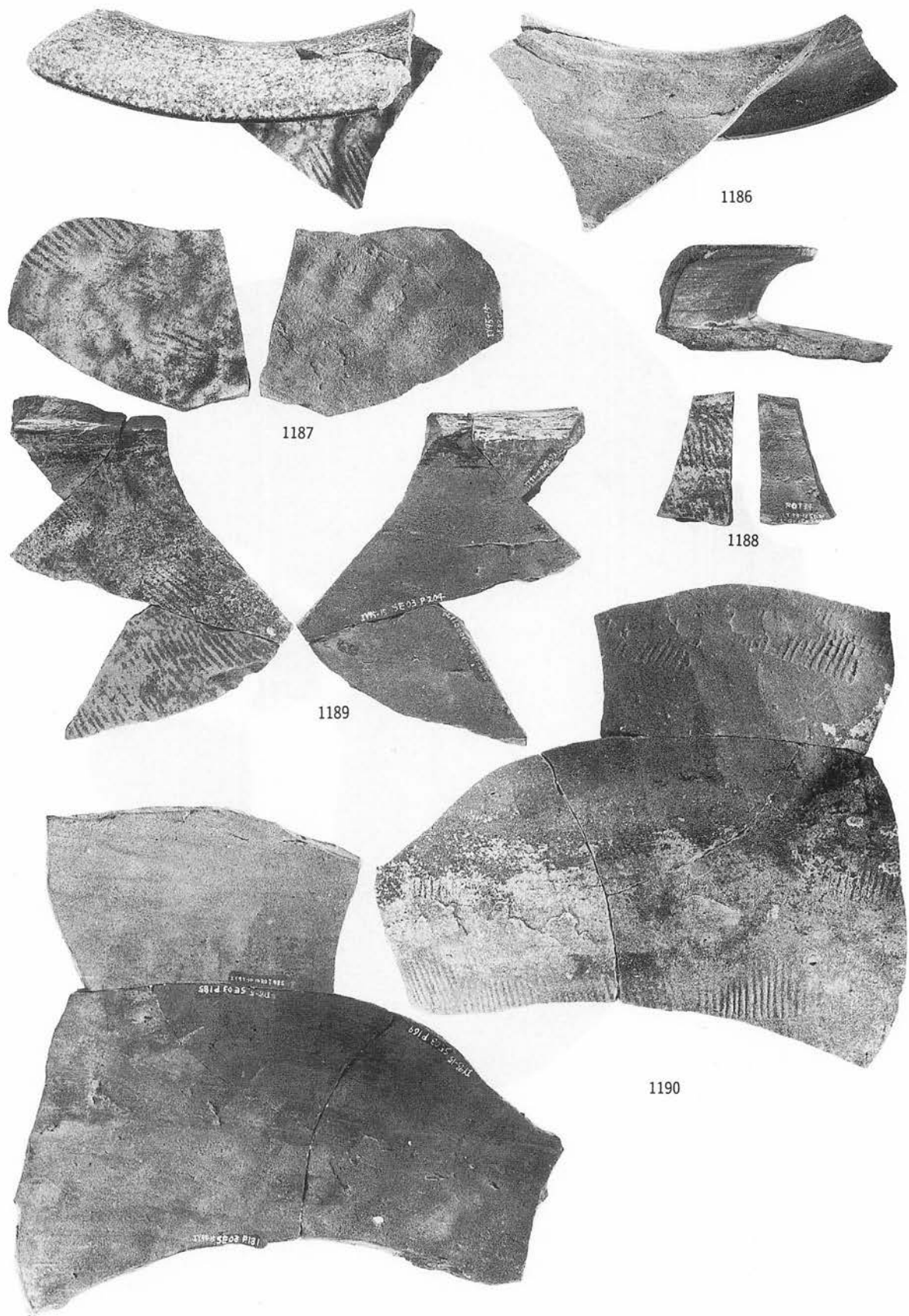
1184

1185

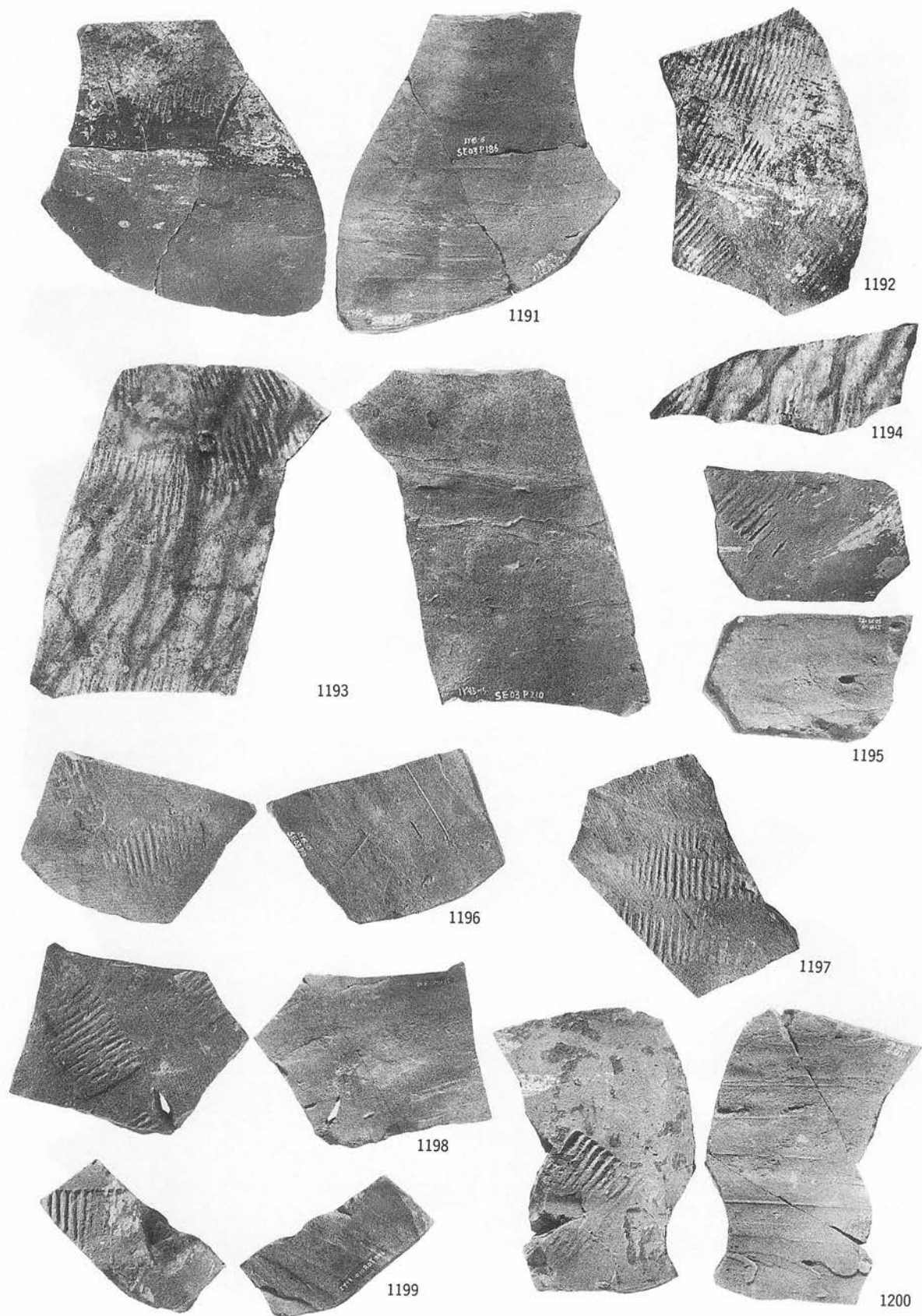
写真図版90 西側調査区の渥美産陶器(2)



写真図版91 西側調査区の渥美産陶器(3)

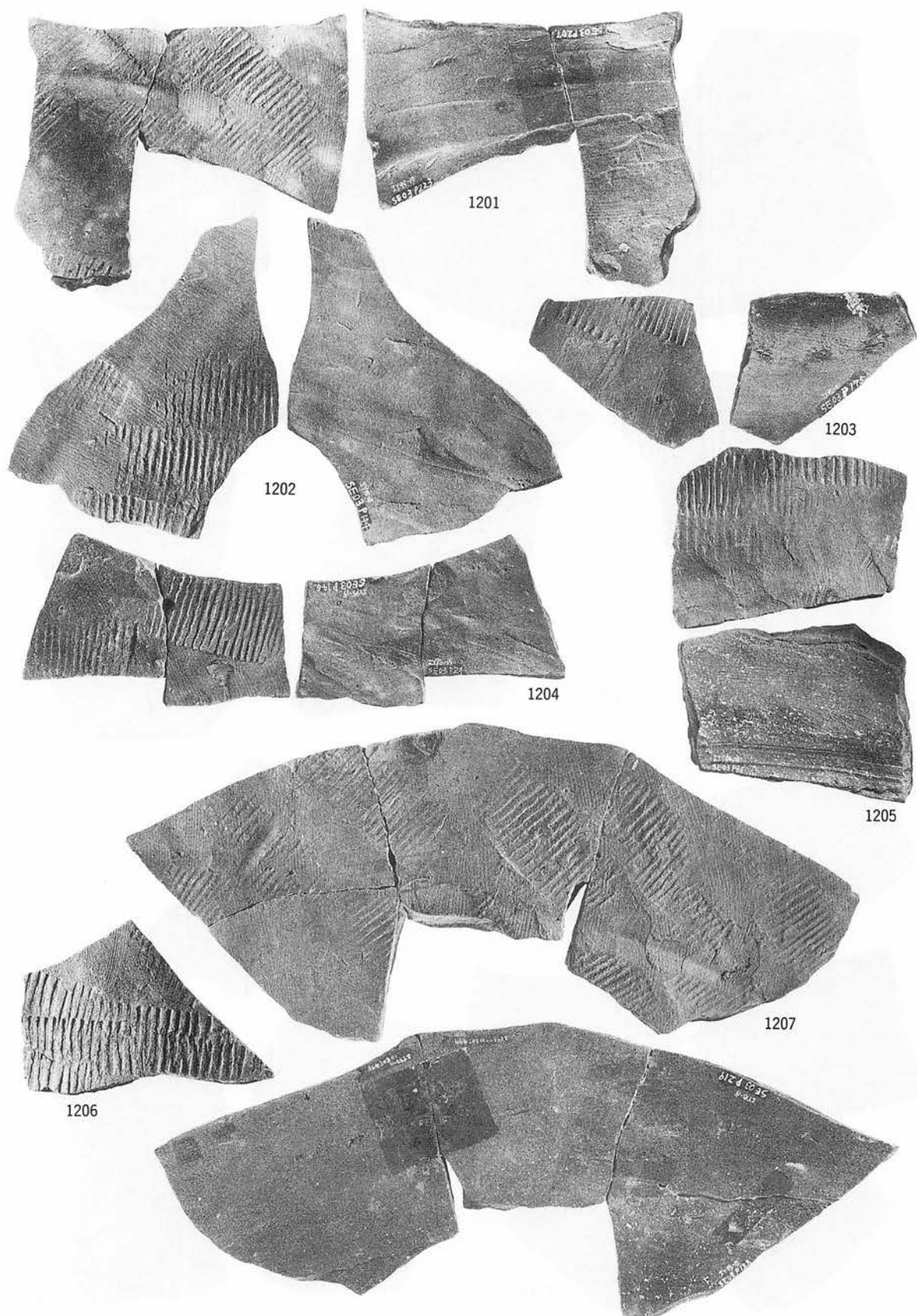


写真図版92 西側調査区の渥美産陶器(4)



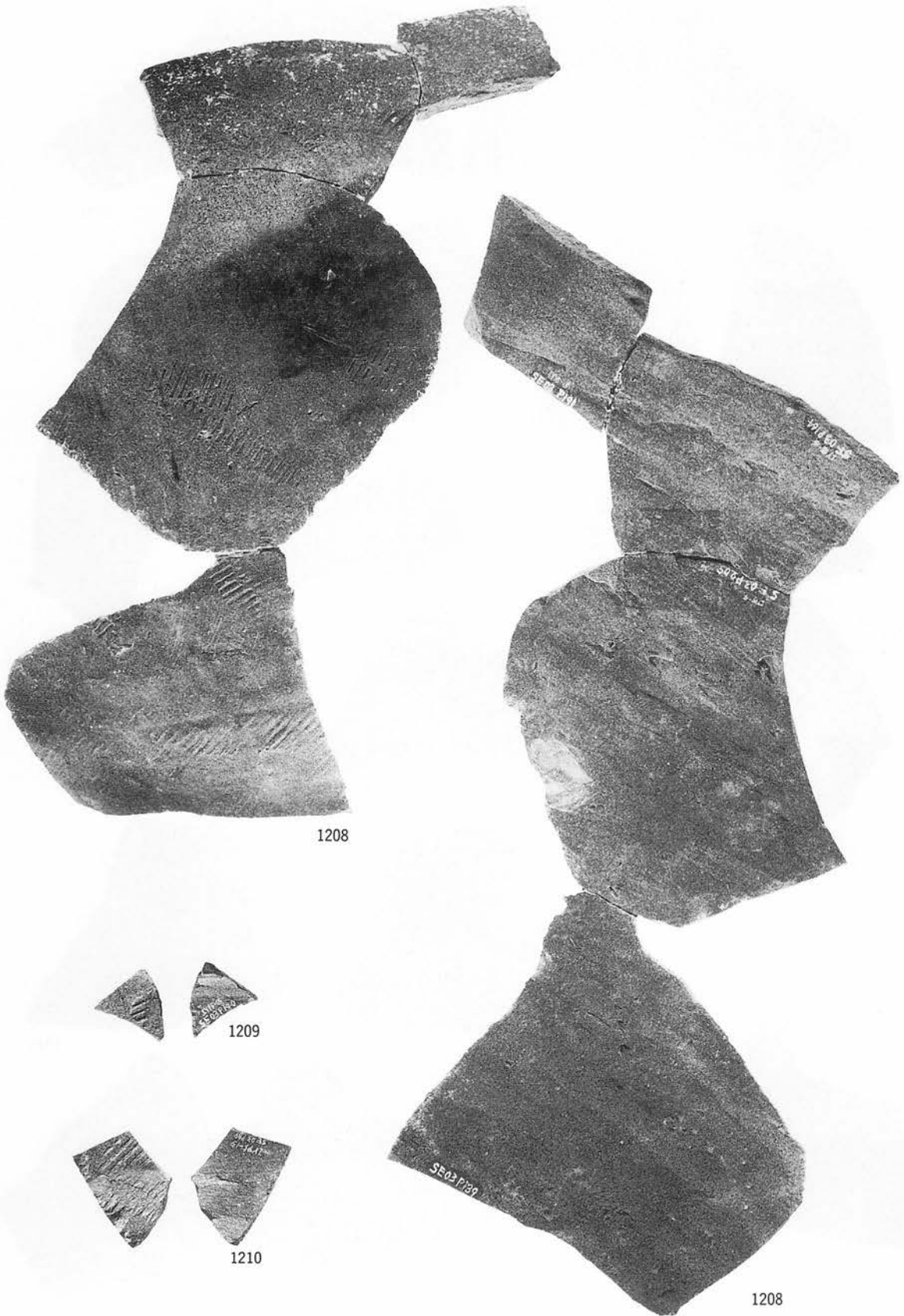
写真図版93 西側調査区の渥美産陶器(5)



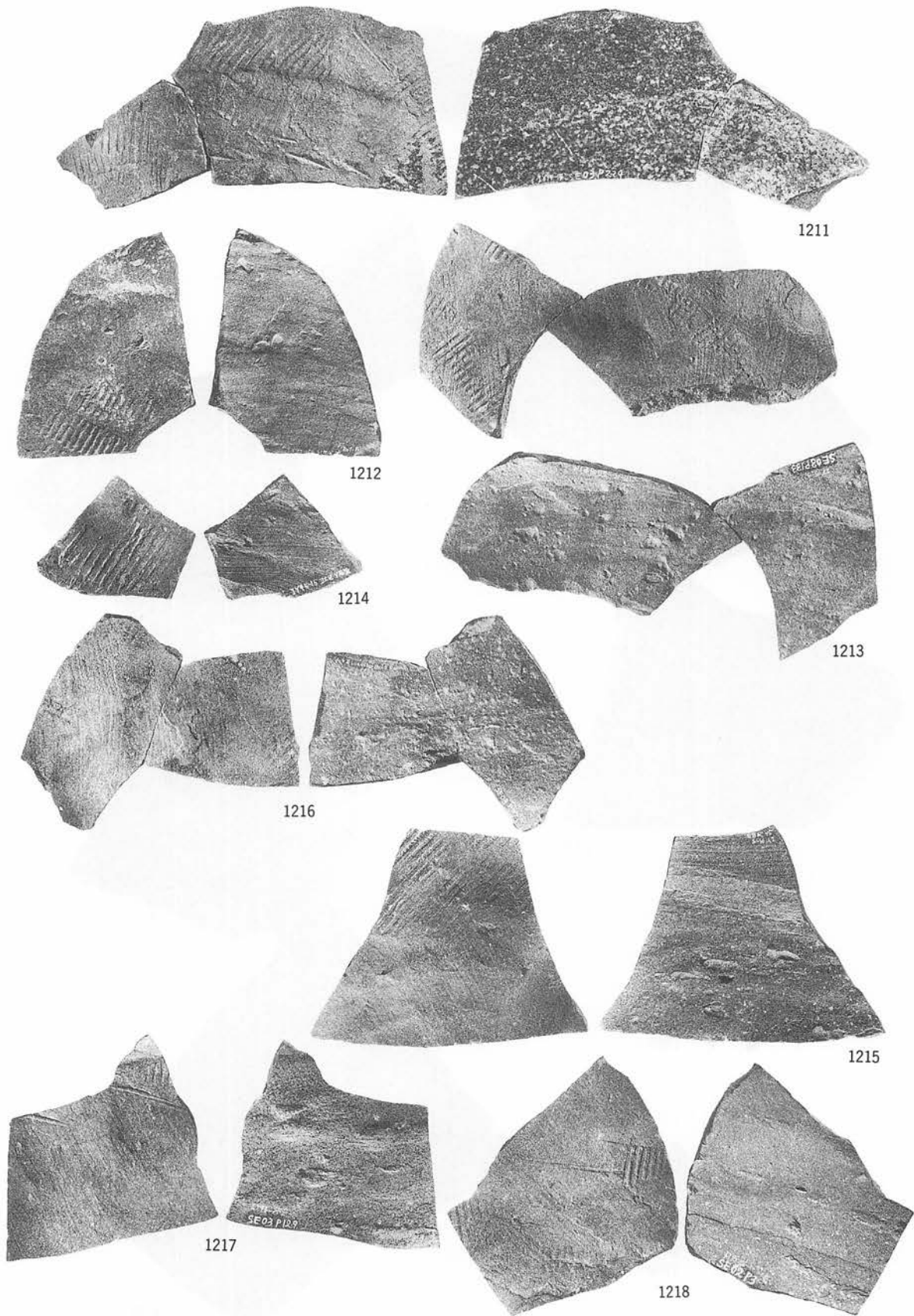


●写真図版94 西側調査区の渥美産陶器(6)

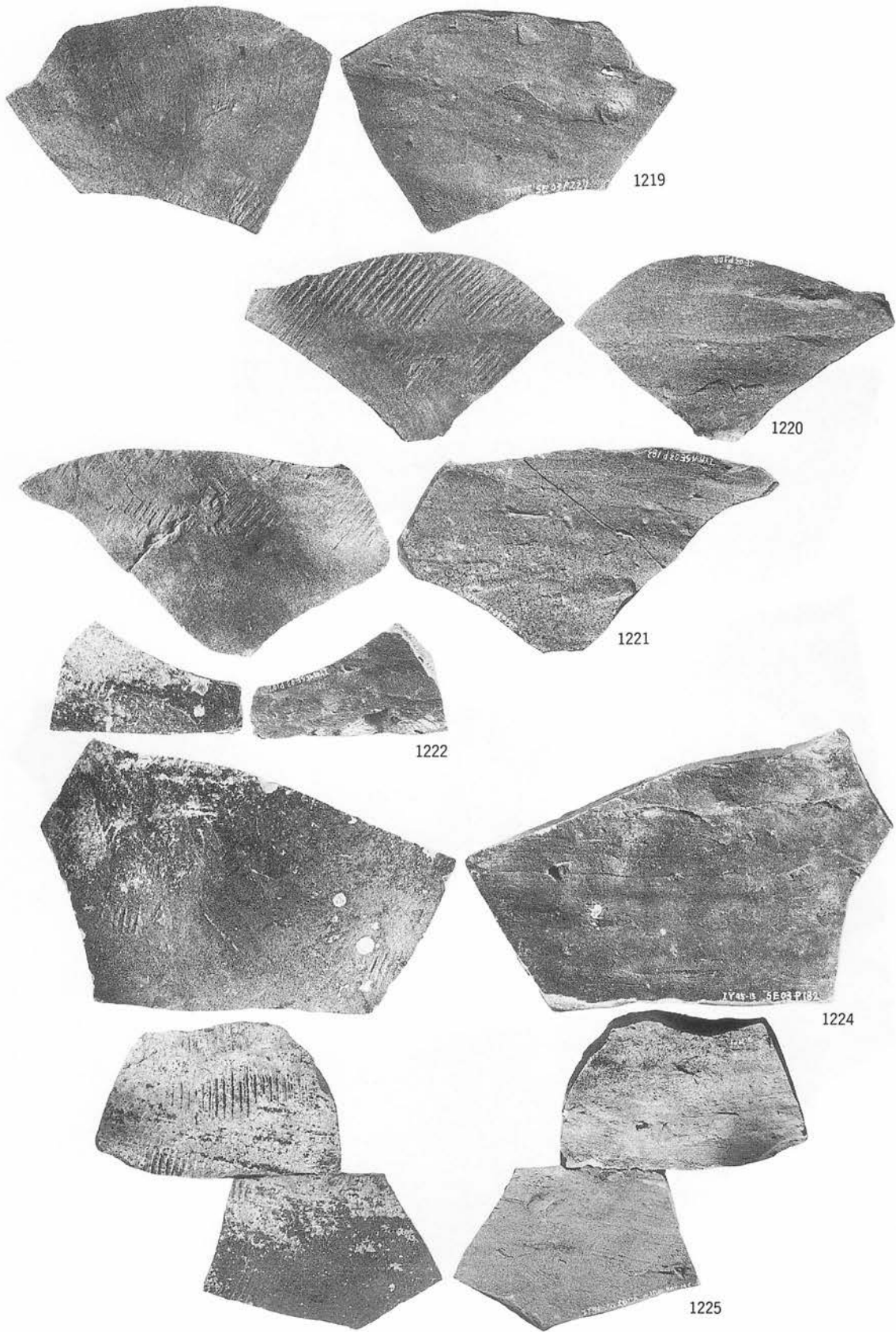




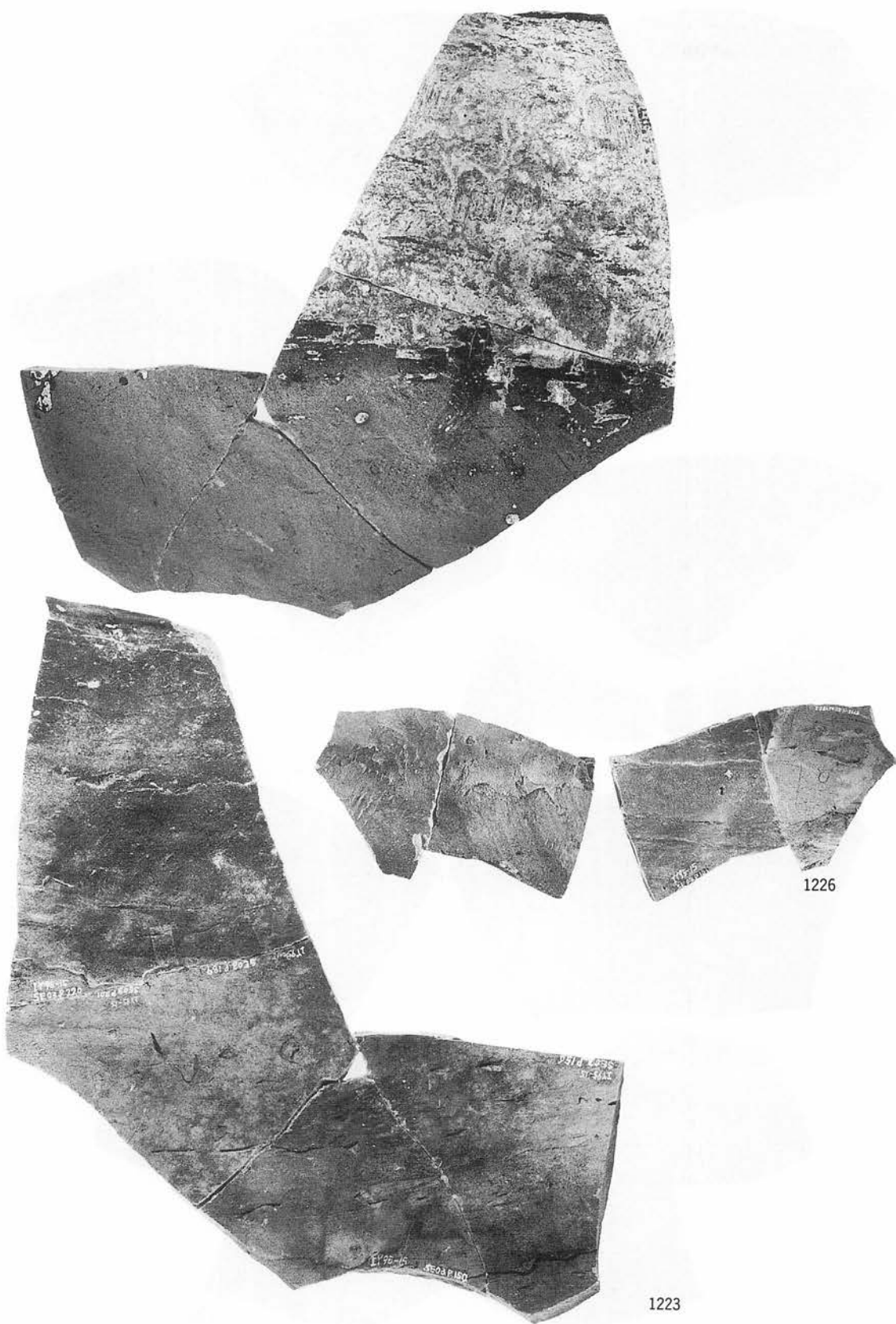
写真図版95 西側調査区の渥美産陶器(7)



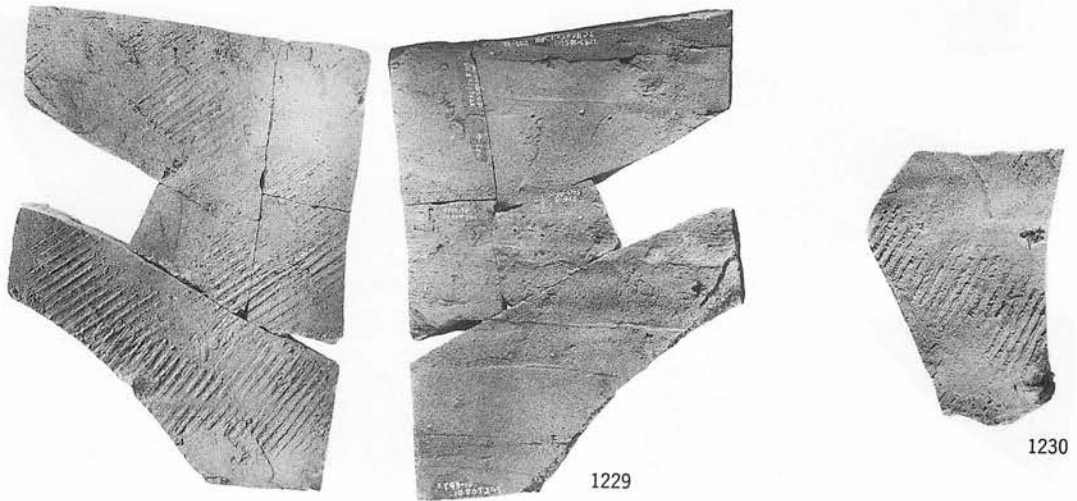
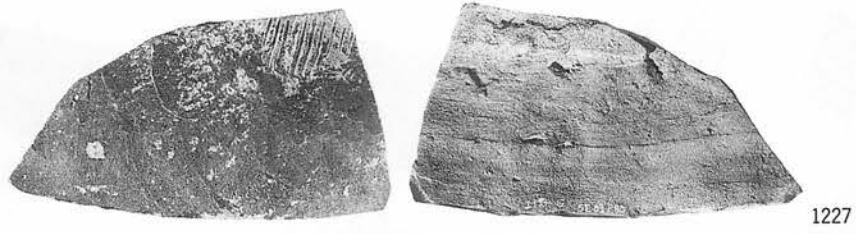
写真図版96 西側調査区の渥美産陶器(8)



写真図版97 西側調査区の渥美産陶器(9)

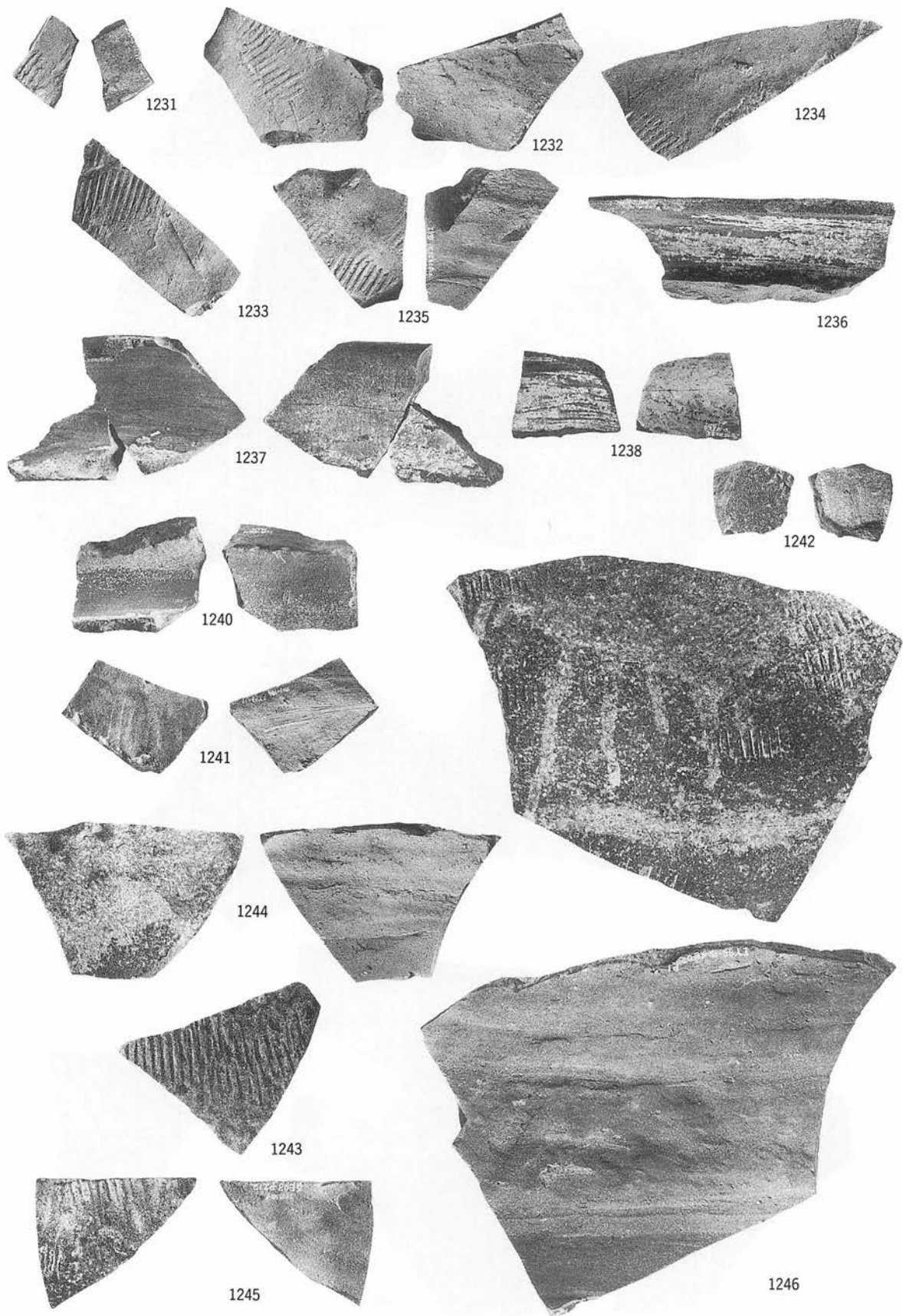


写真図版98 西側調査区の渥美産陶器(10)



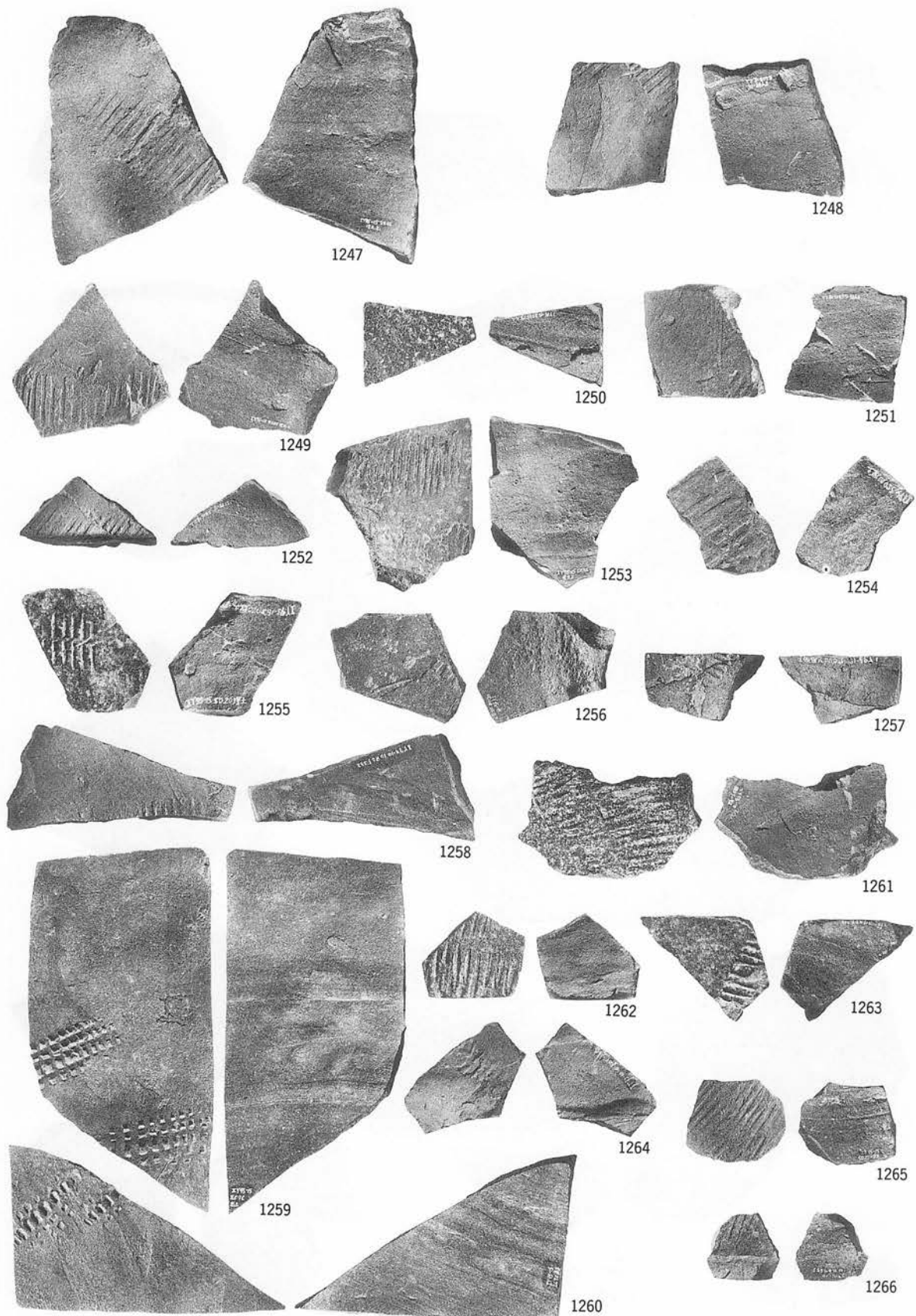
写真図版99 西側調査区の渥美産陶器(11)



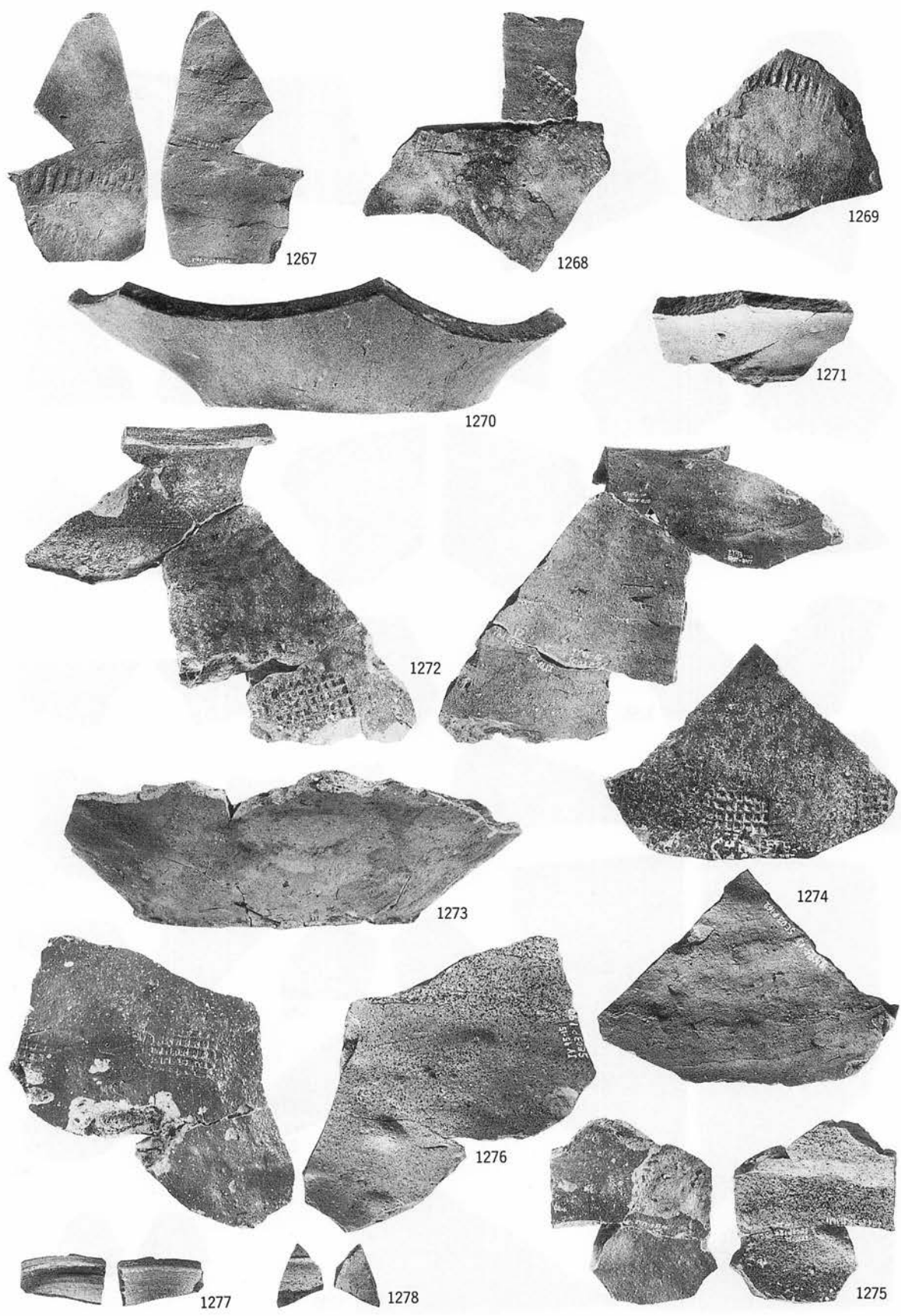


写真図版100 西側調査区の渥美産陶器(12)

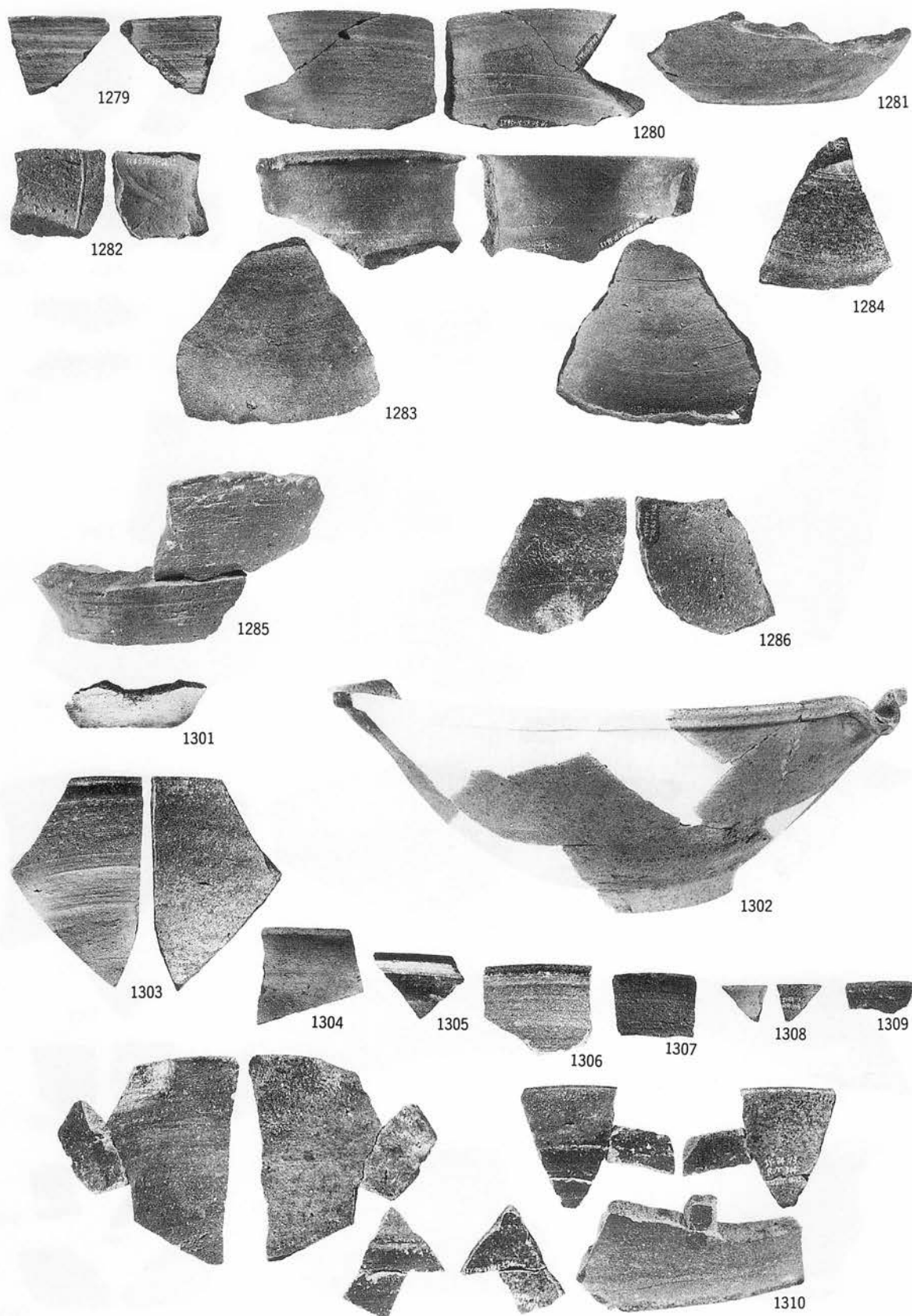




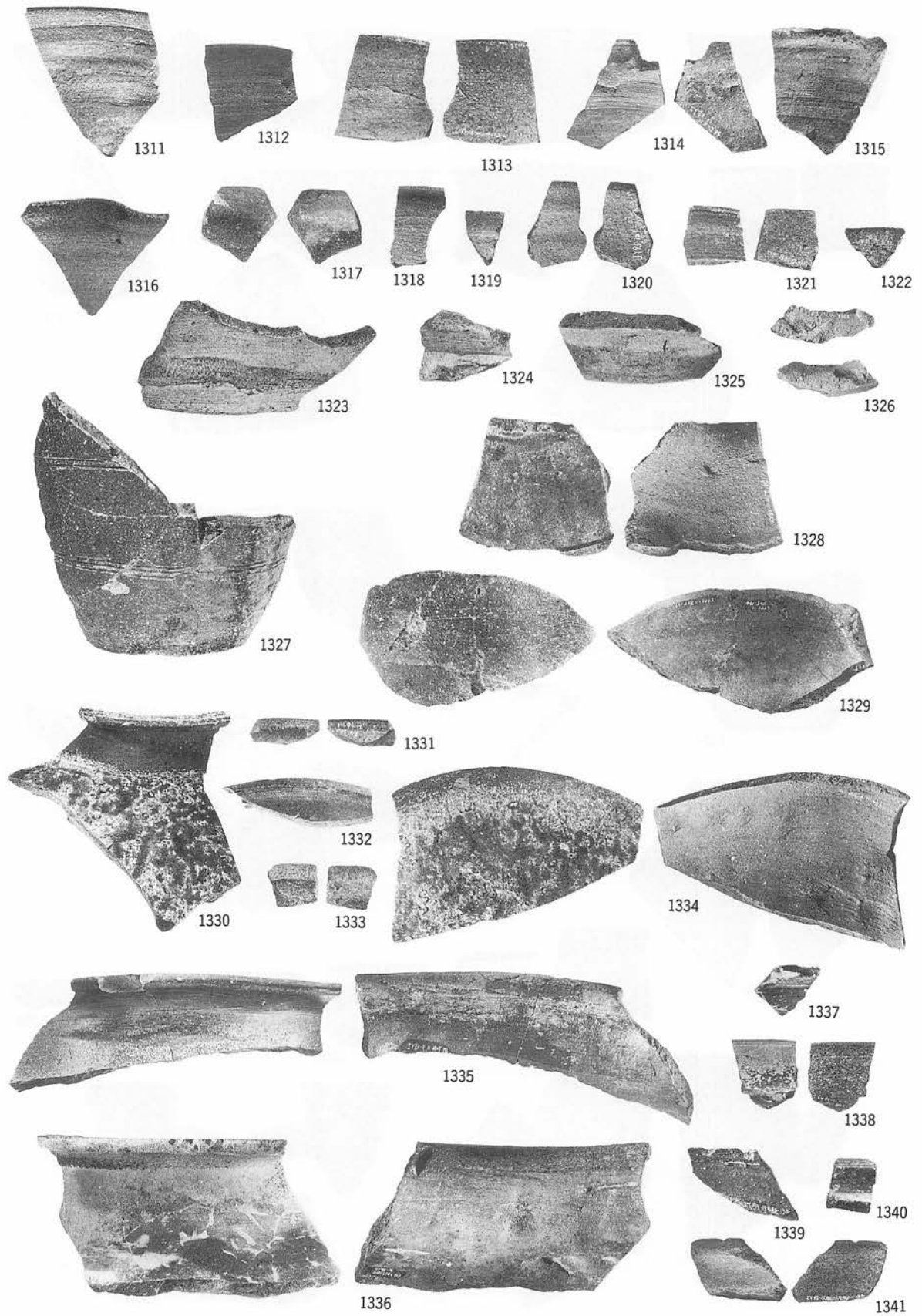
写真図版101 西側調査区の渥美産陶器(13)



写真図版102 西側調査区の渥美産陶器(14)・猿投産陶器

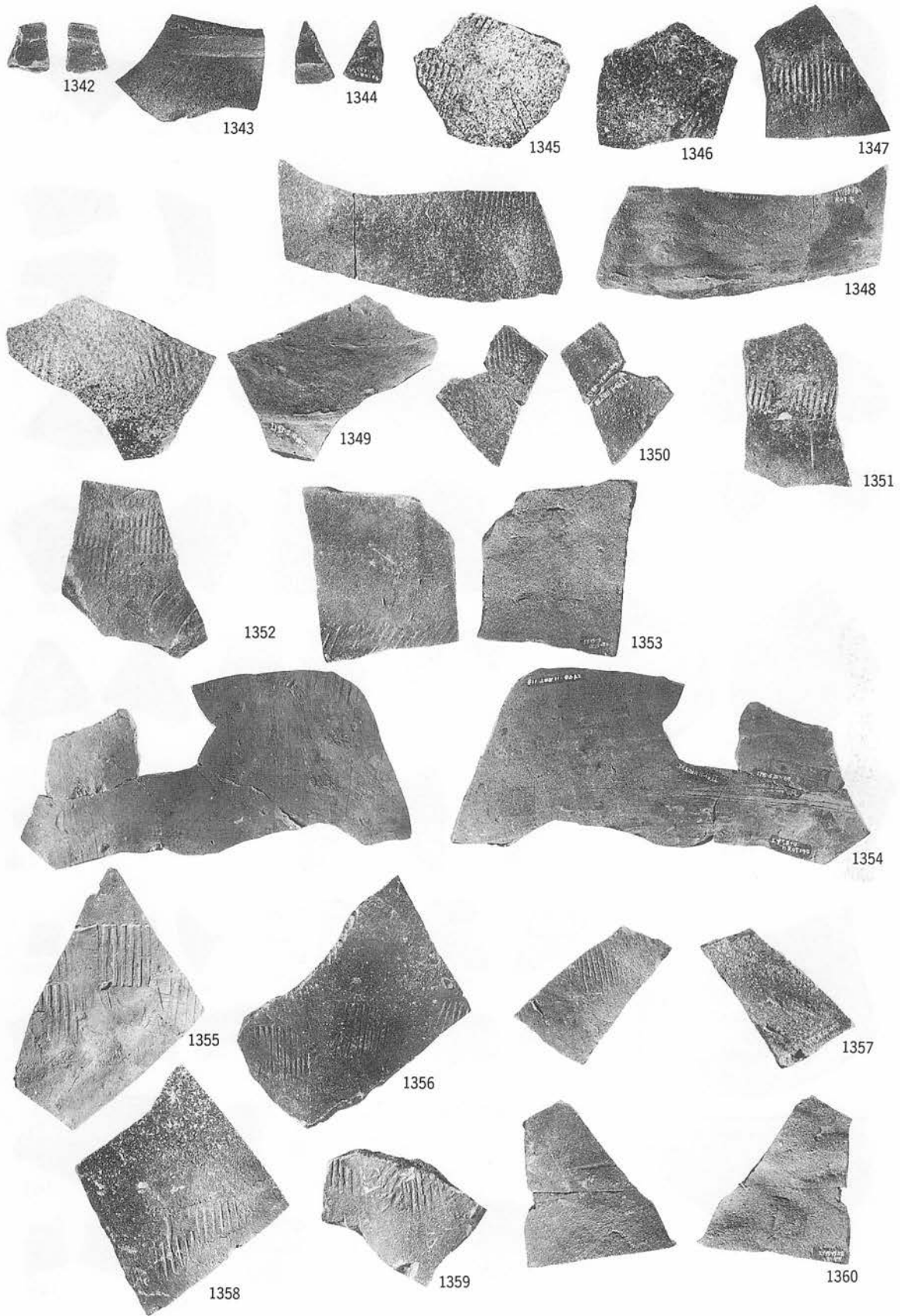


写真図版103 西側調査区の須恵器系・在地産陶器  
東側調査区の常滑産陶器(1)

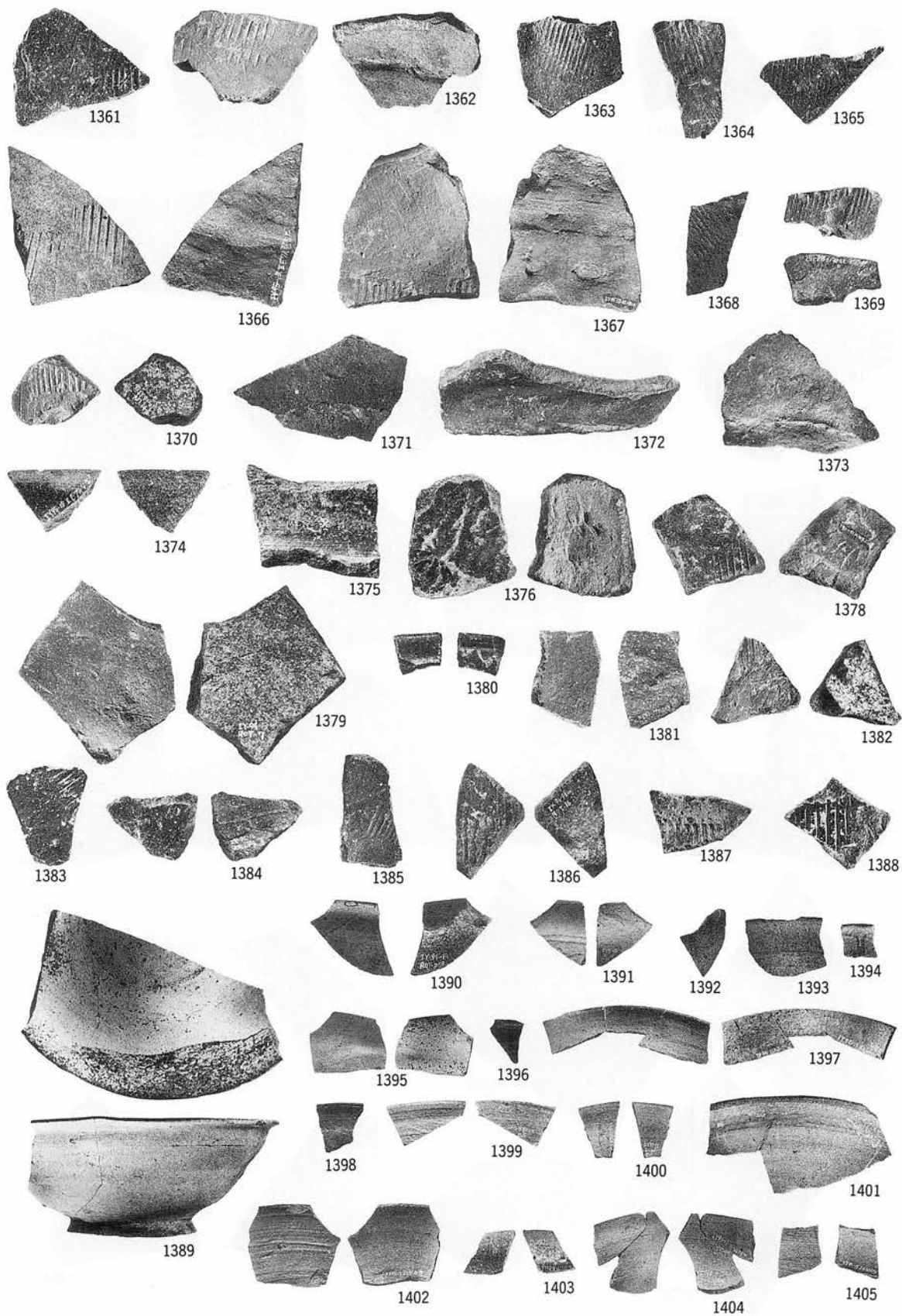


写真図版104 東側調査区の常滑産陶器(2)



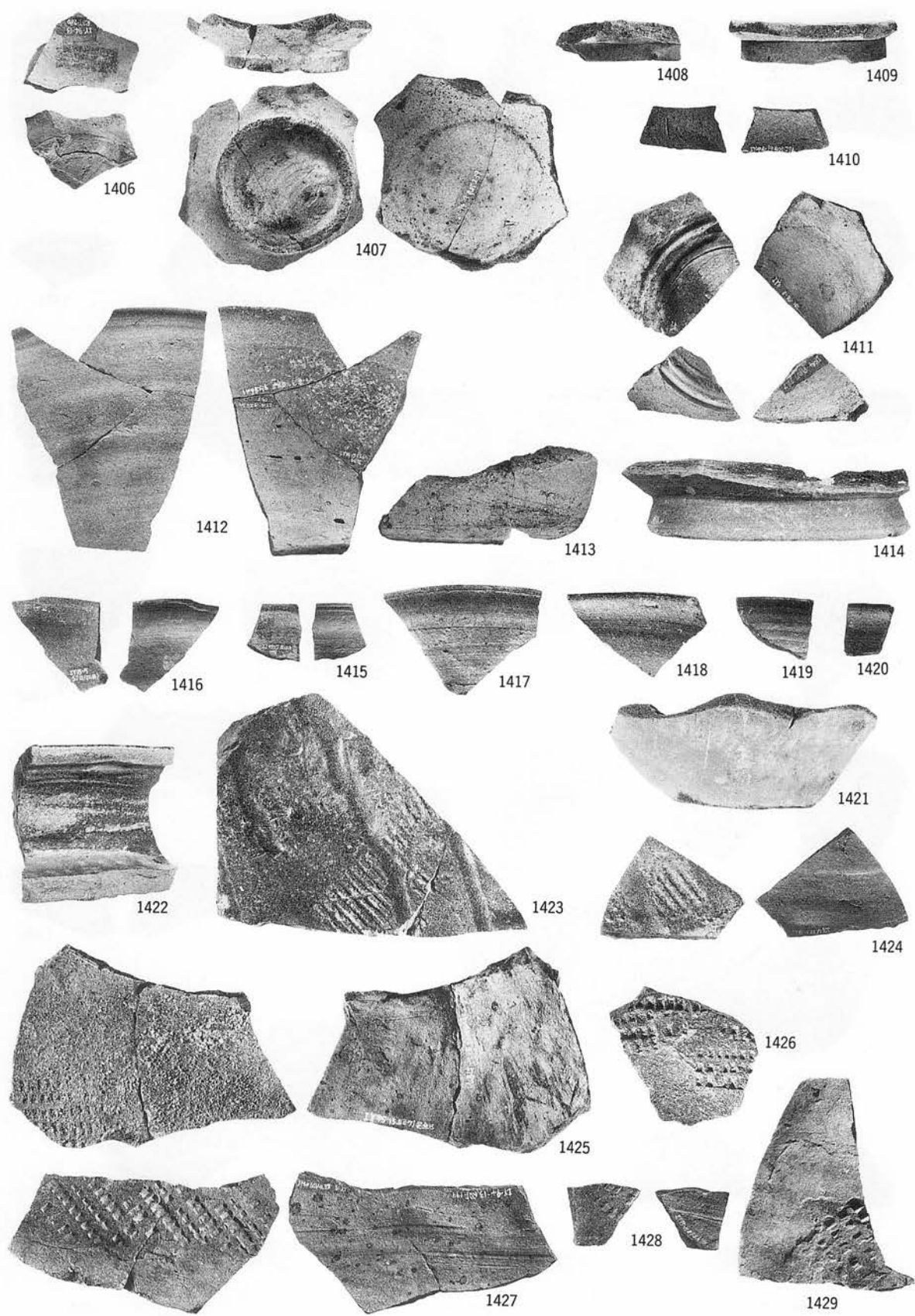


写真図版105 東側調査区の常滑産陶器(3)

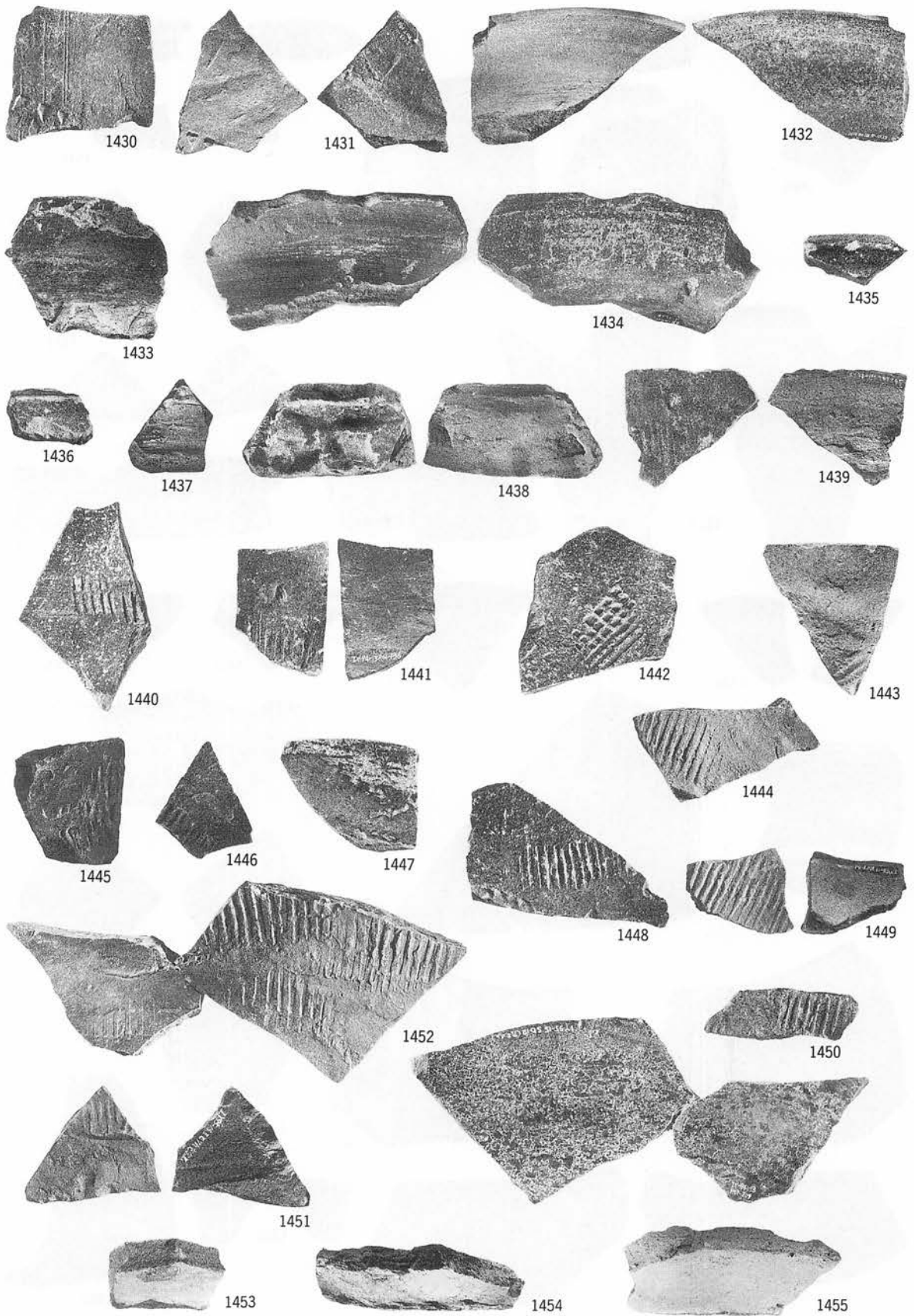


写真図版106 東側調査区の常滑産陶器(4)・渥美産陶器(1)

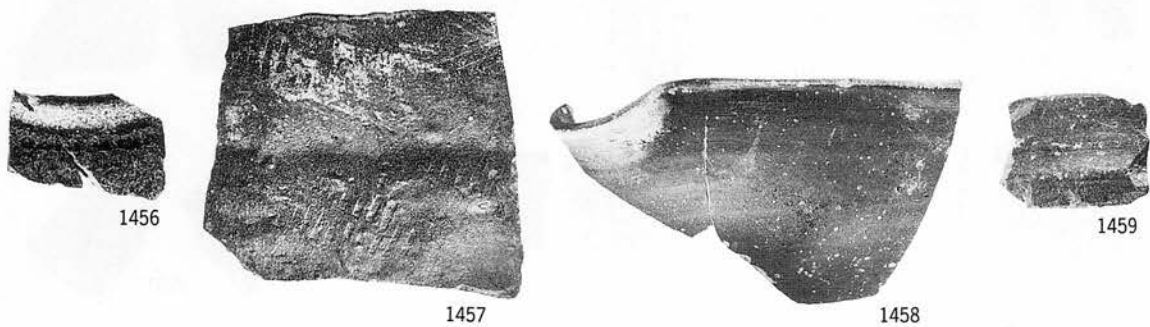




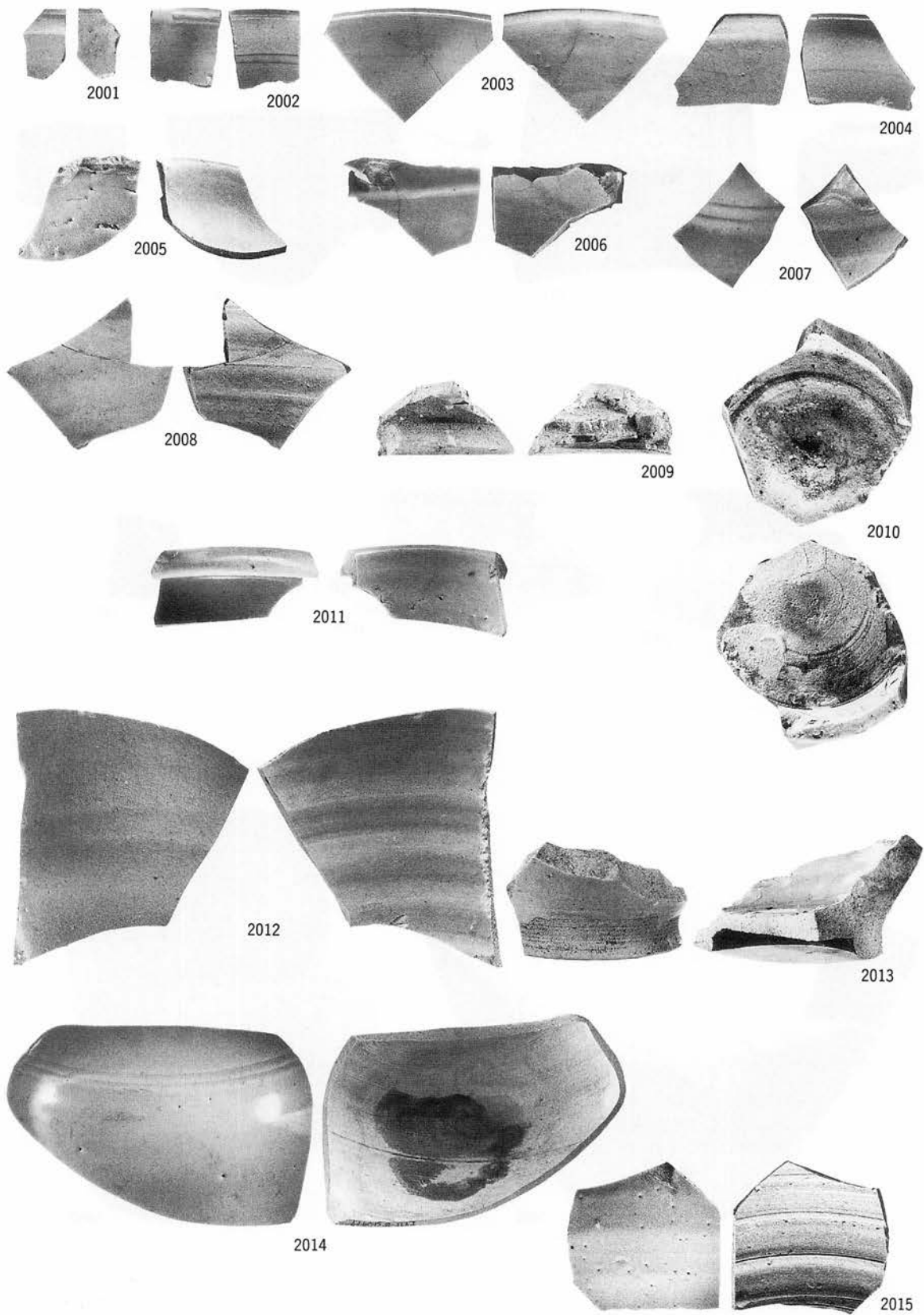
写真図版107 東側調査区の渥美産陶器(2)



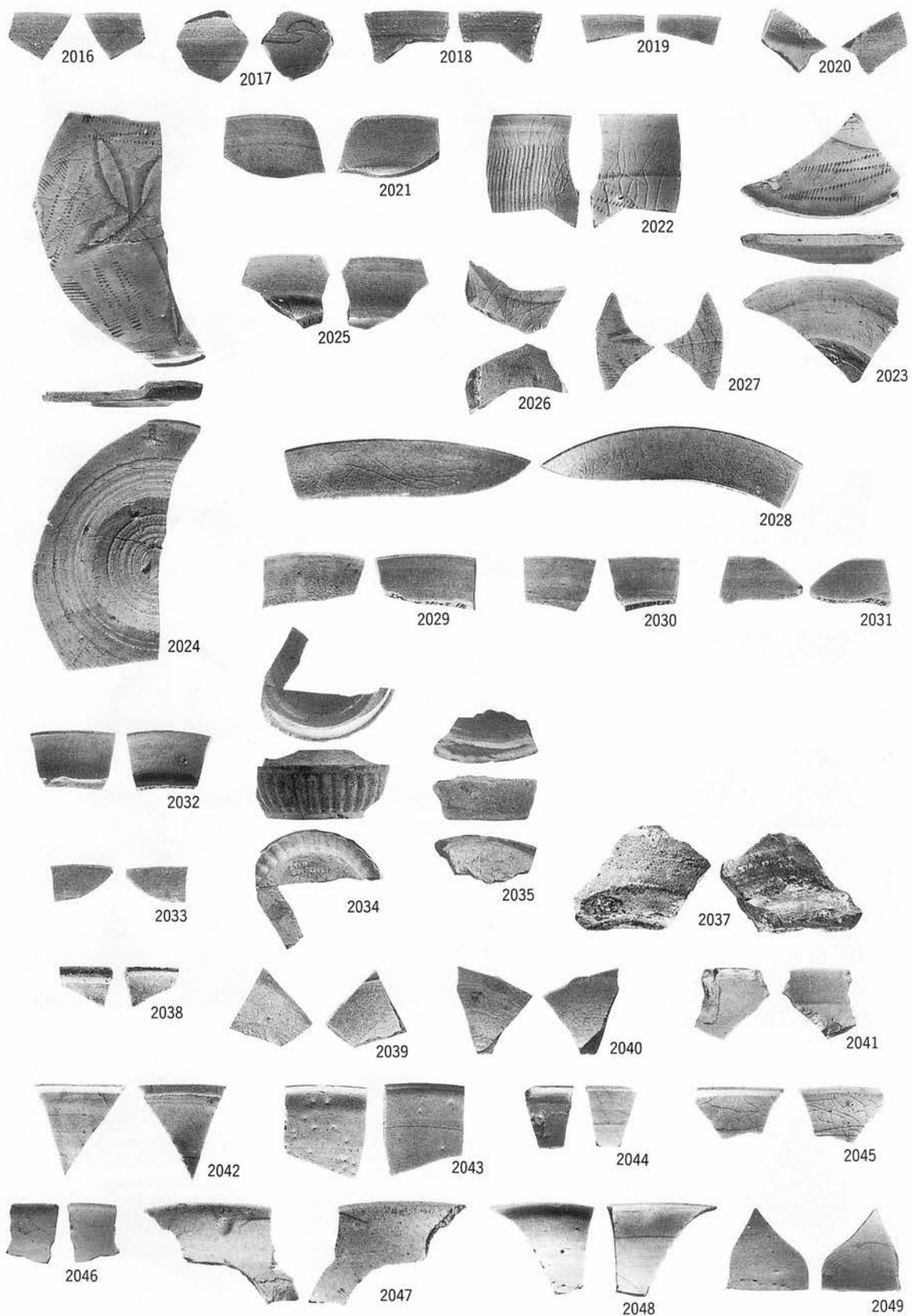
写真図版108 東側調査区の渥美産陶器(3)



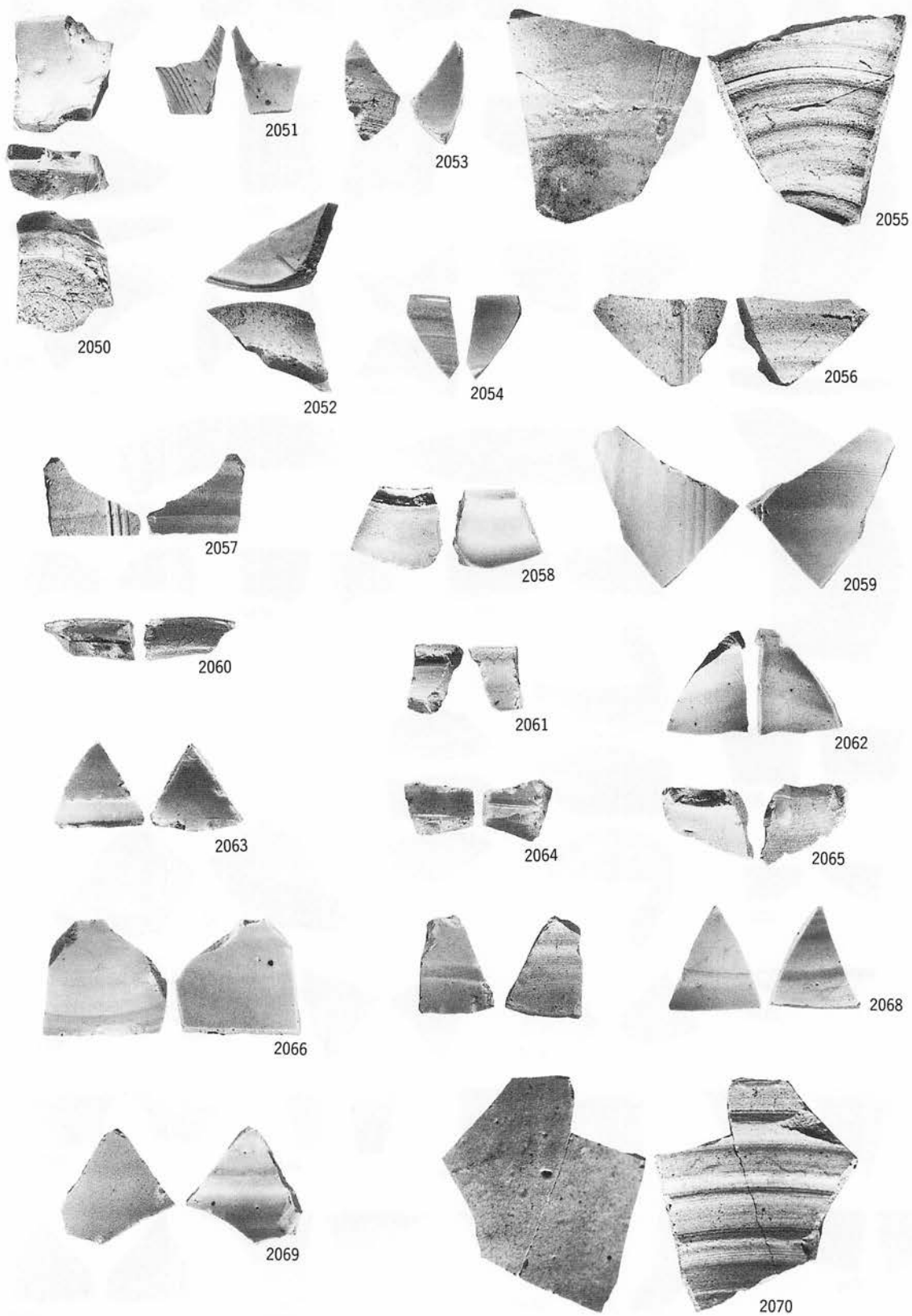
写真図版109 東側調査区の猿投産・須恵器系・在地産陶器



写真図版110 西側調査区の中国産陶磁器(1)

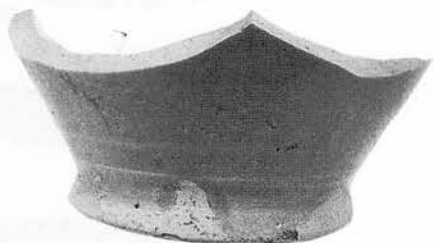
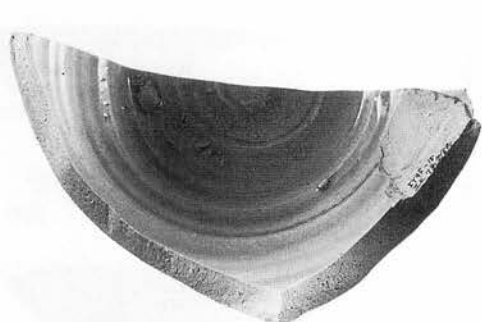


写真図版111 西側調査区の中国産陶磁器(2)  
東側調査区の中国産陶磁器(1)



写真図版112 東側調査区の中国産陶磁器(2)





2072



2073



2074



2075



2076



2077



2078



2079



2080



2081



2082



2083



2084



2085



2086



2087



2088

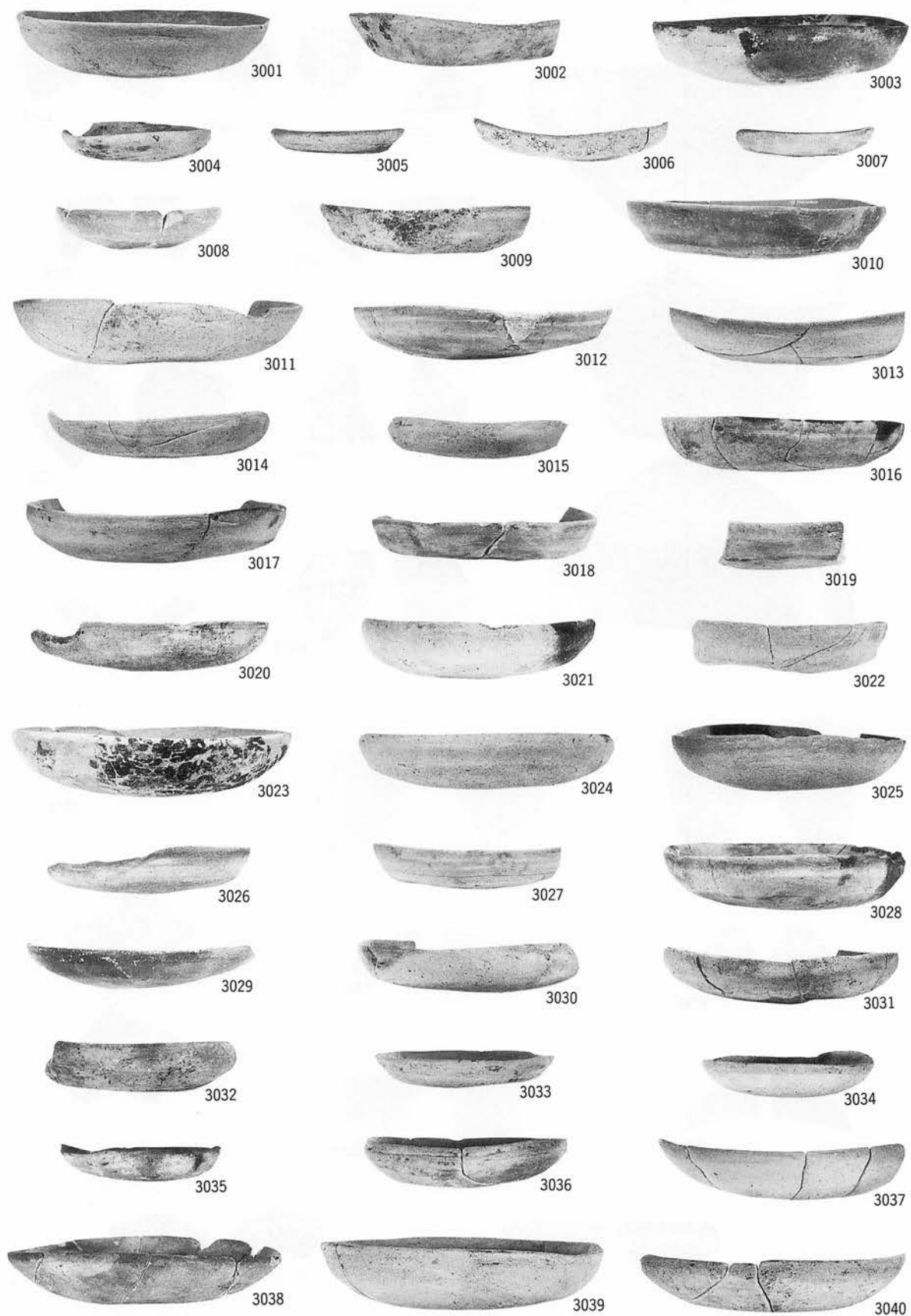


2089

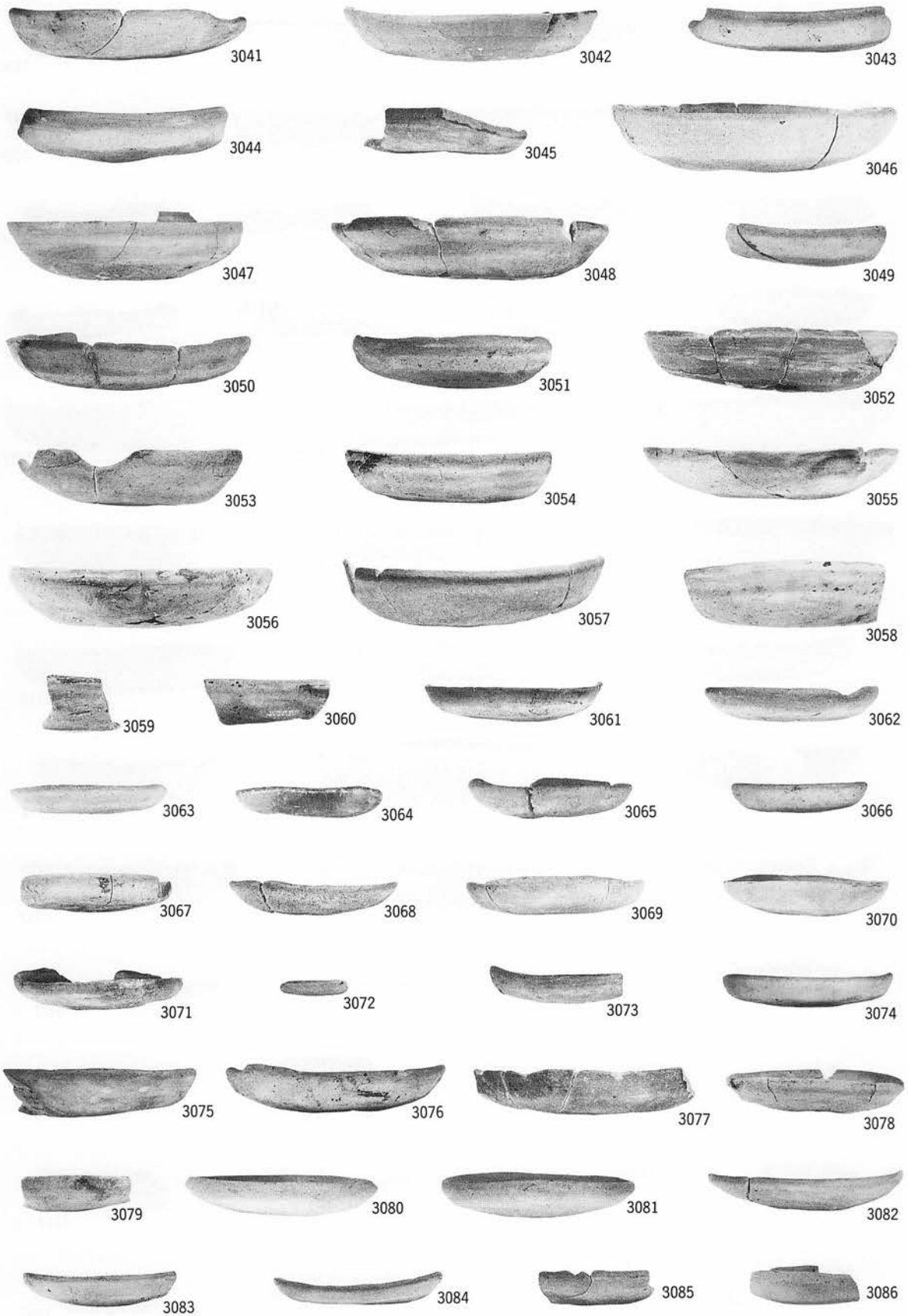


2090

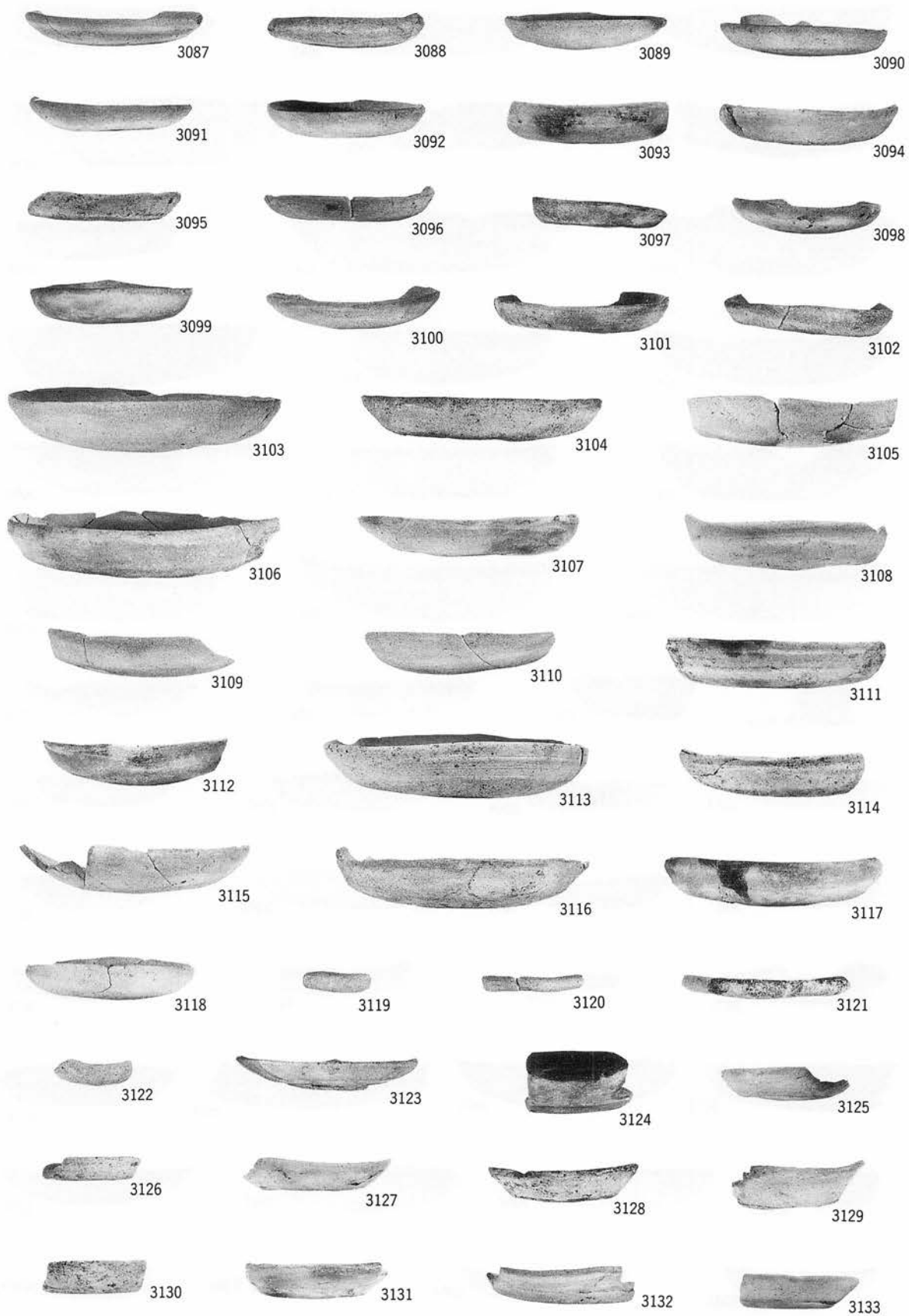
写真図版113 東側調査区の中国産陶磁器(3)



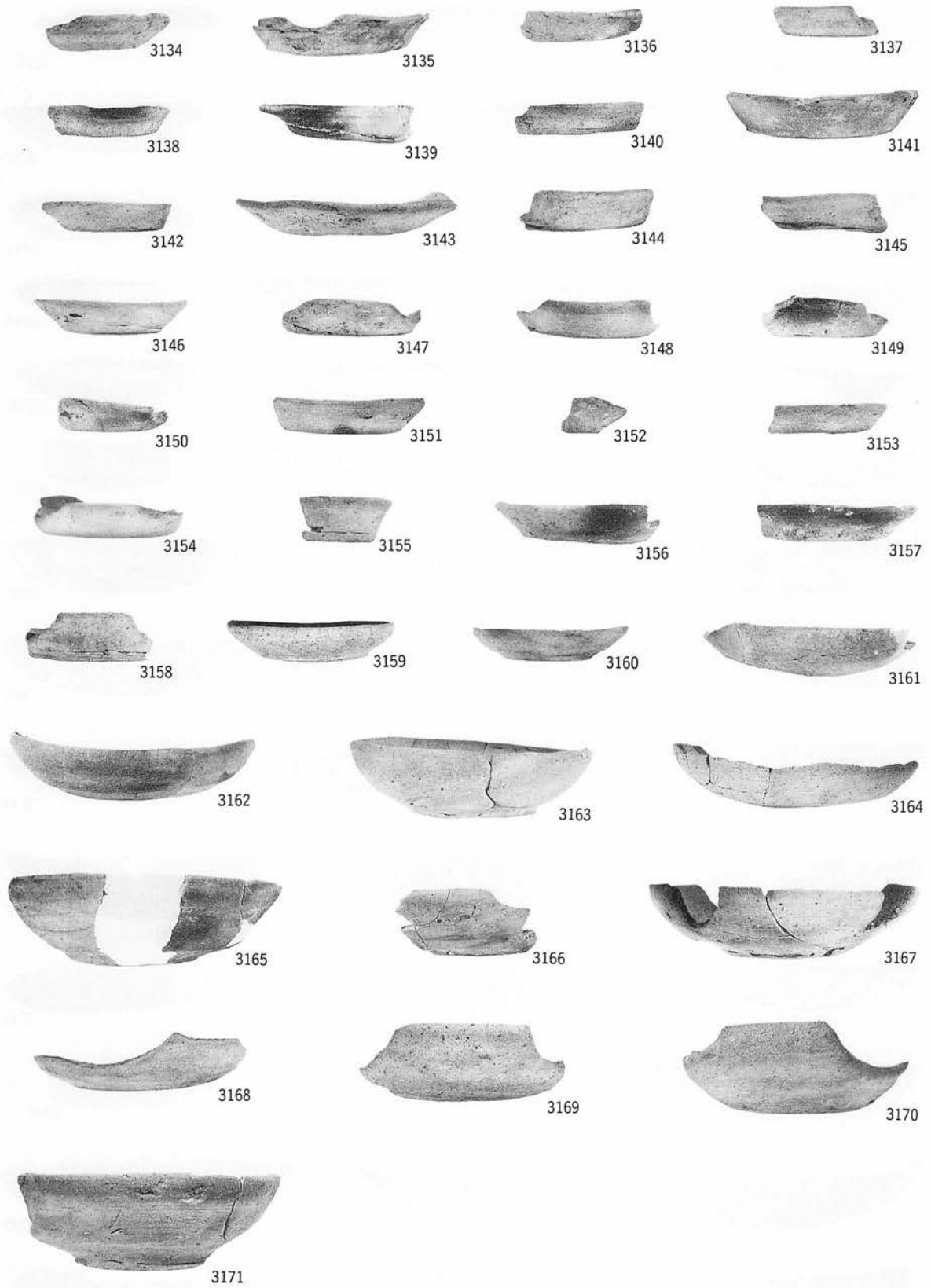
写真図版114 西側調査区のかわけ(1)



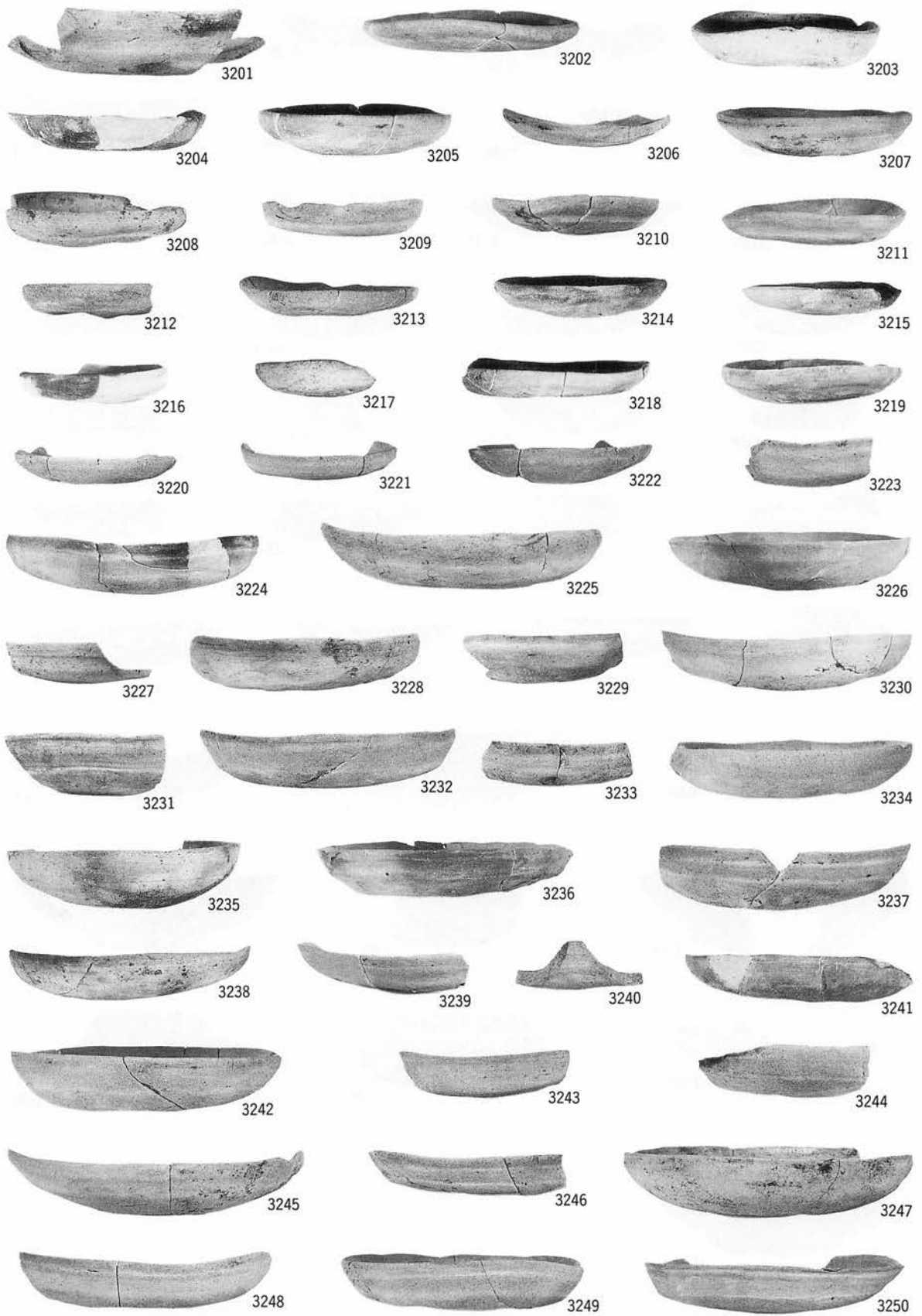
写真図版115 西側調査区のかわれけ(2)



写真図版116 西側調査区のかわらけ(3)

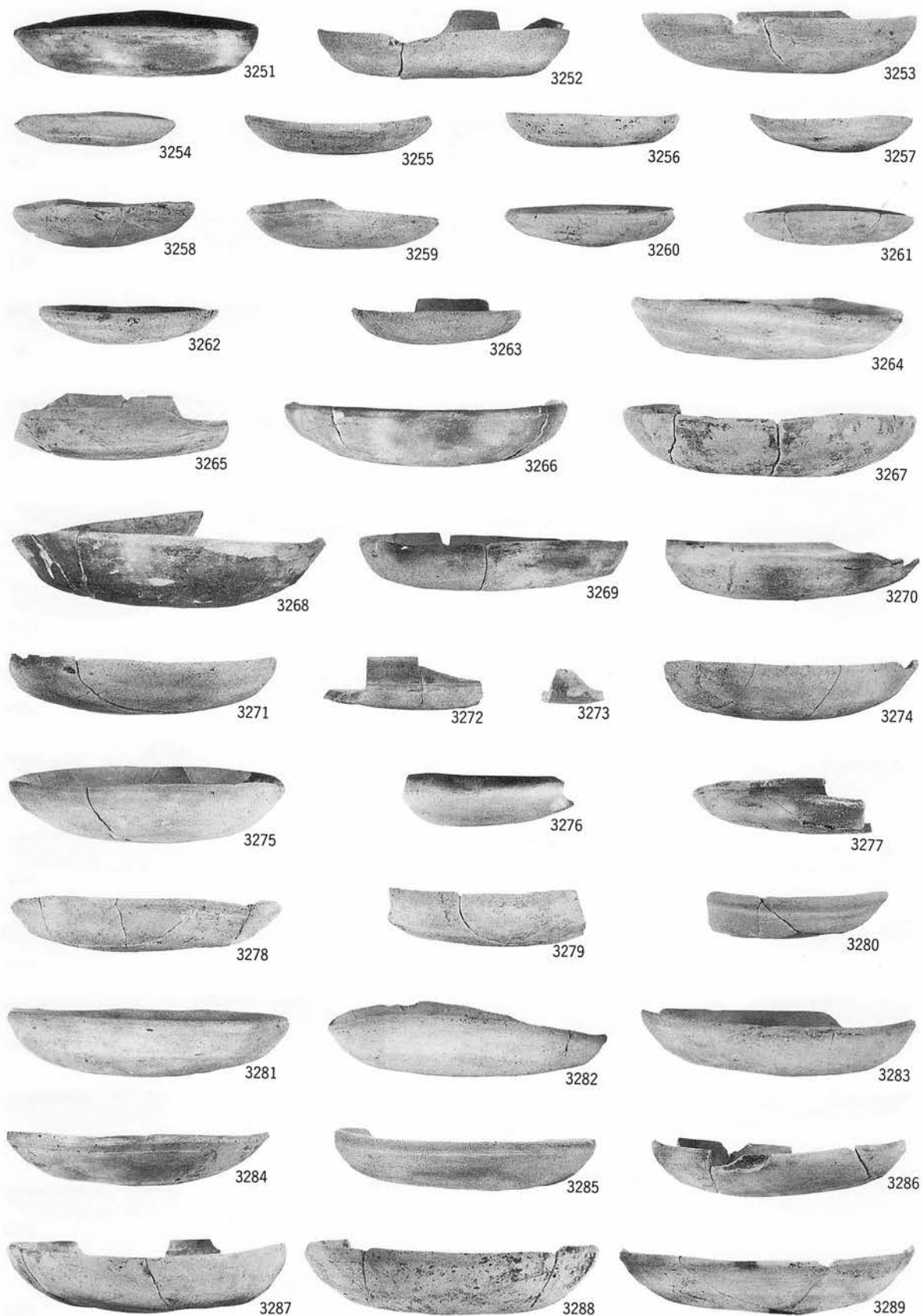


写真図版117 西側調査区のかわれけ(4)

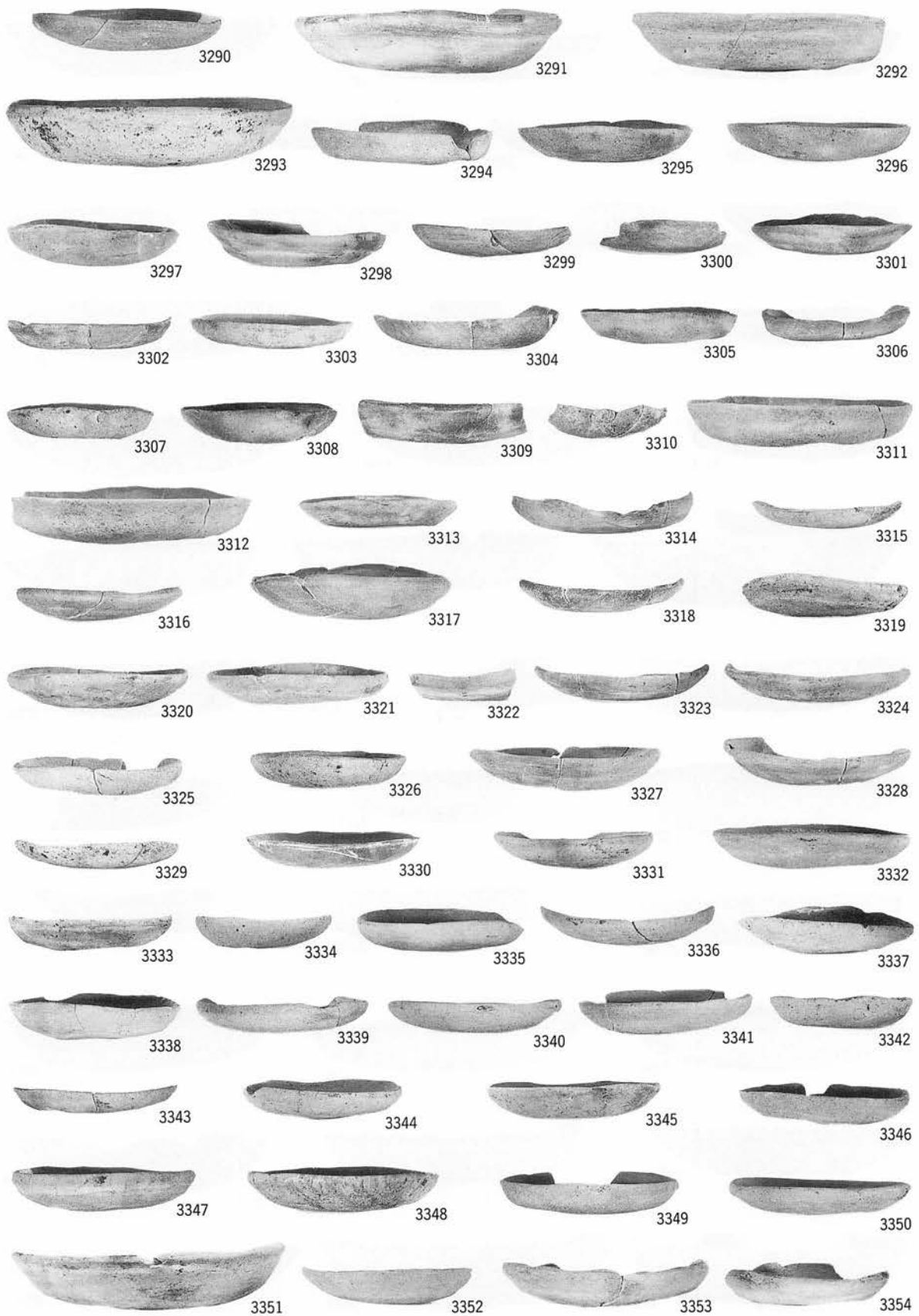


写真図版118 東側調査区のかわけ(1)

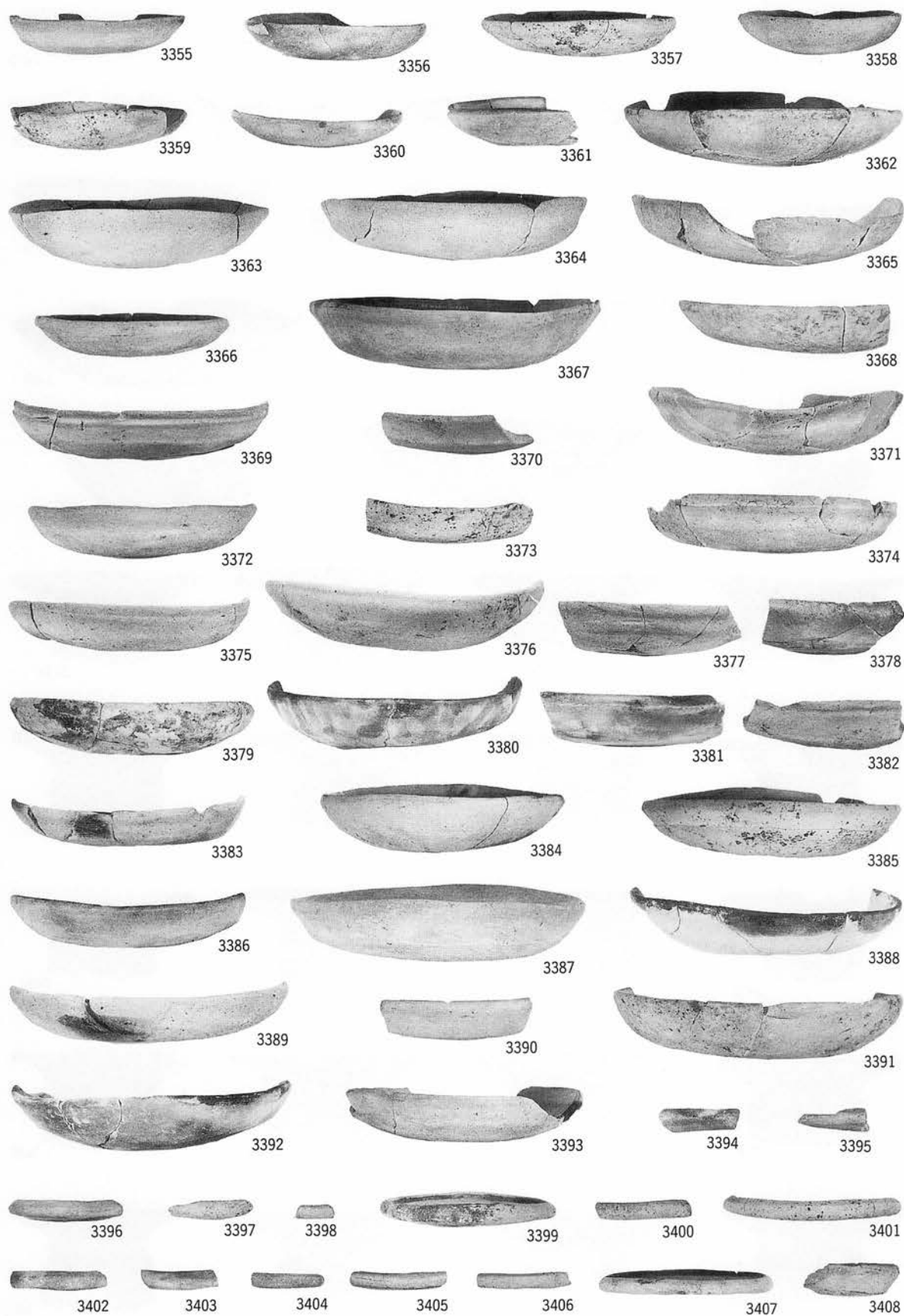




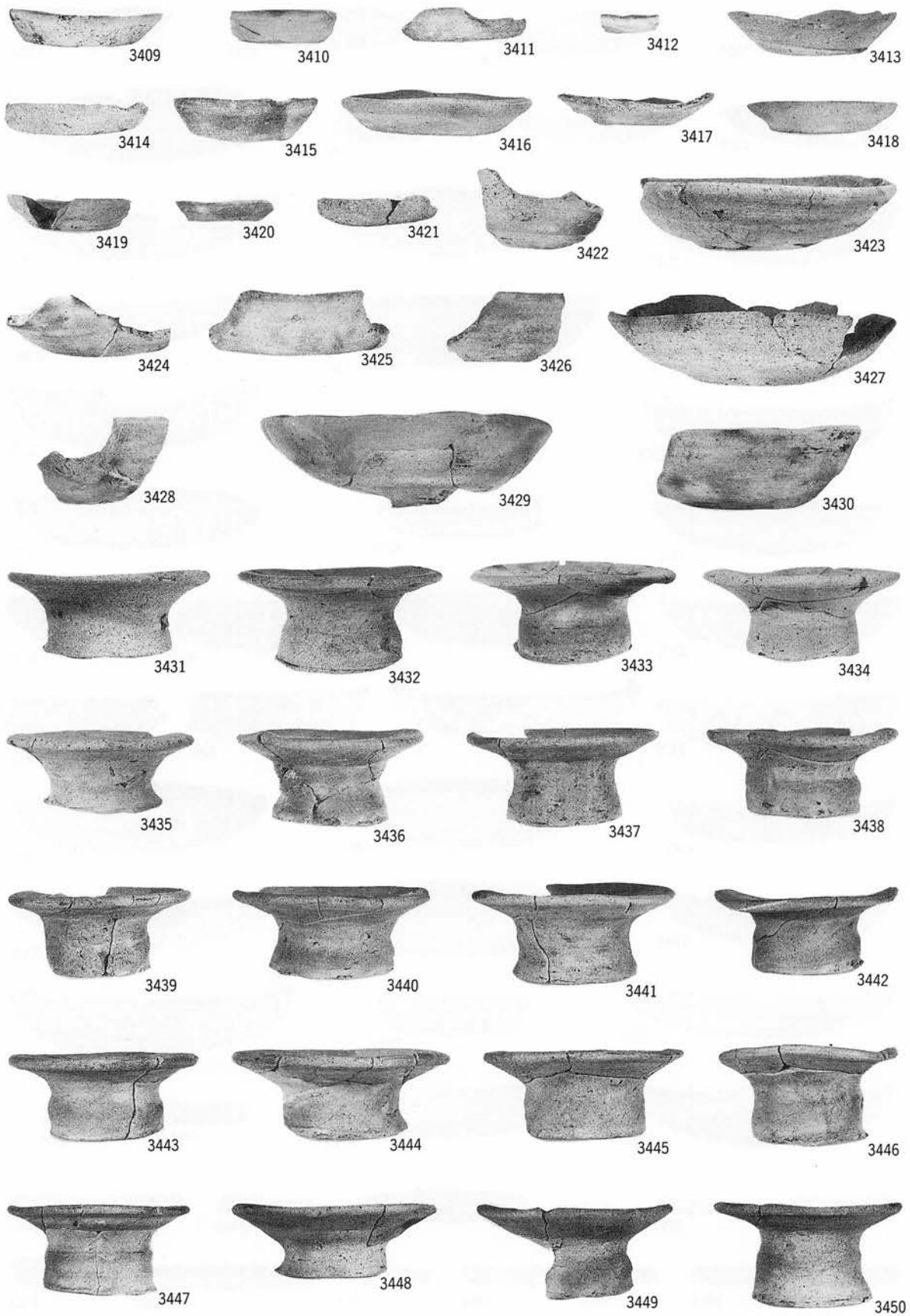
写真図版119 東側調査区のかわけ(2)



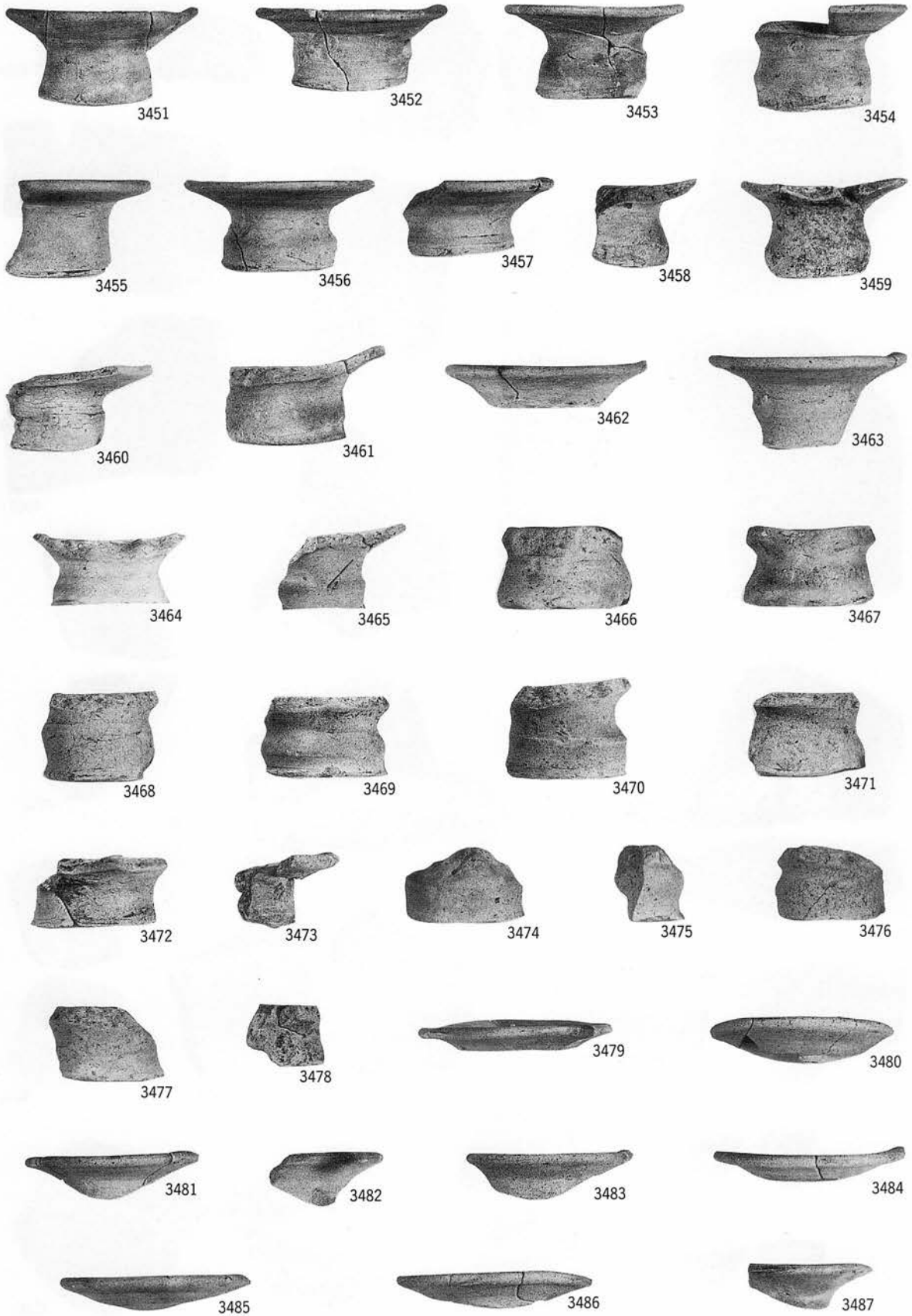
写真図版120 東側調査区のかわれけ(3)



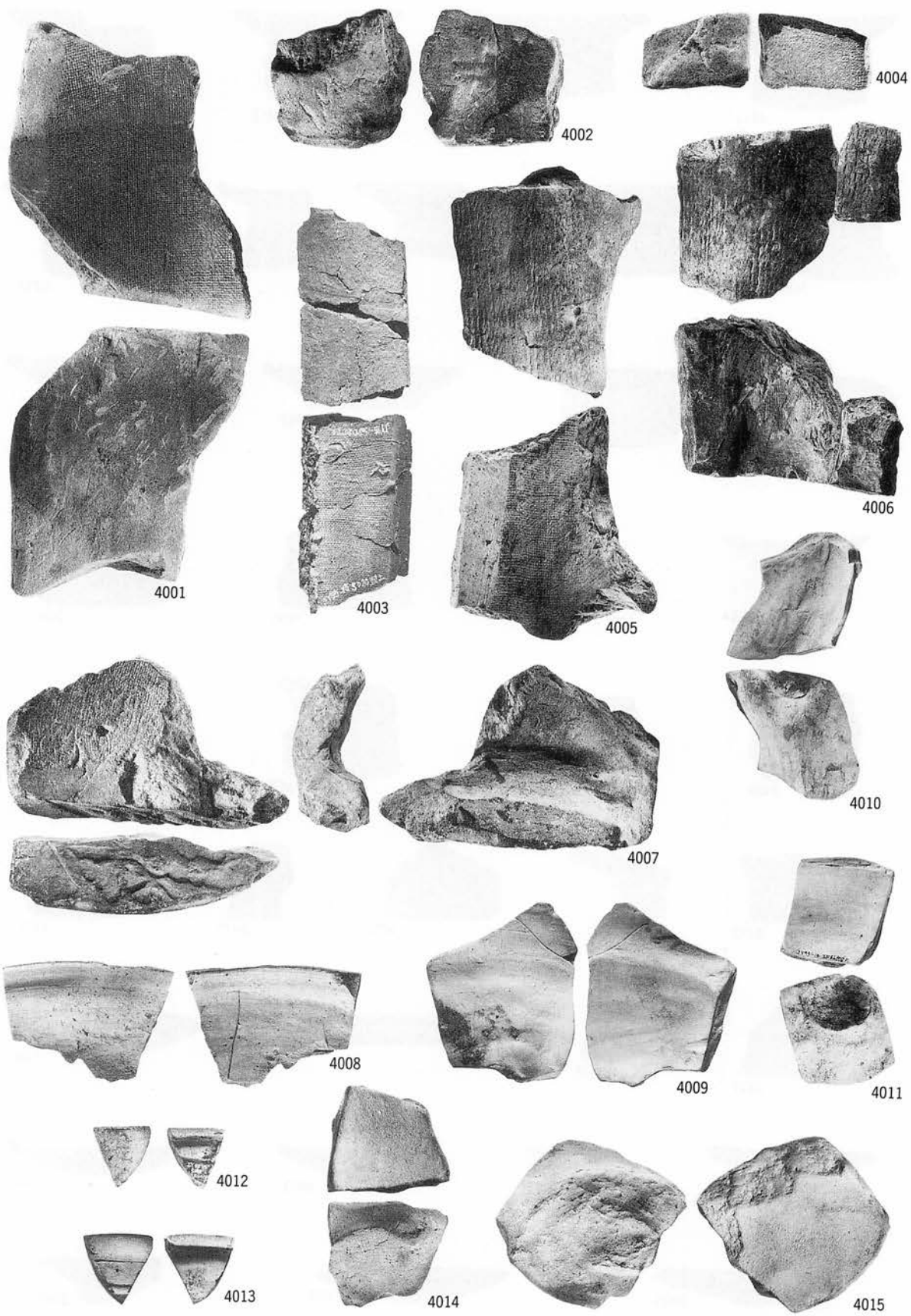
写真図版121 東側調査区のかわらけ(4)



写真図版122 東側調査区のかわれけ(5)

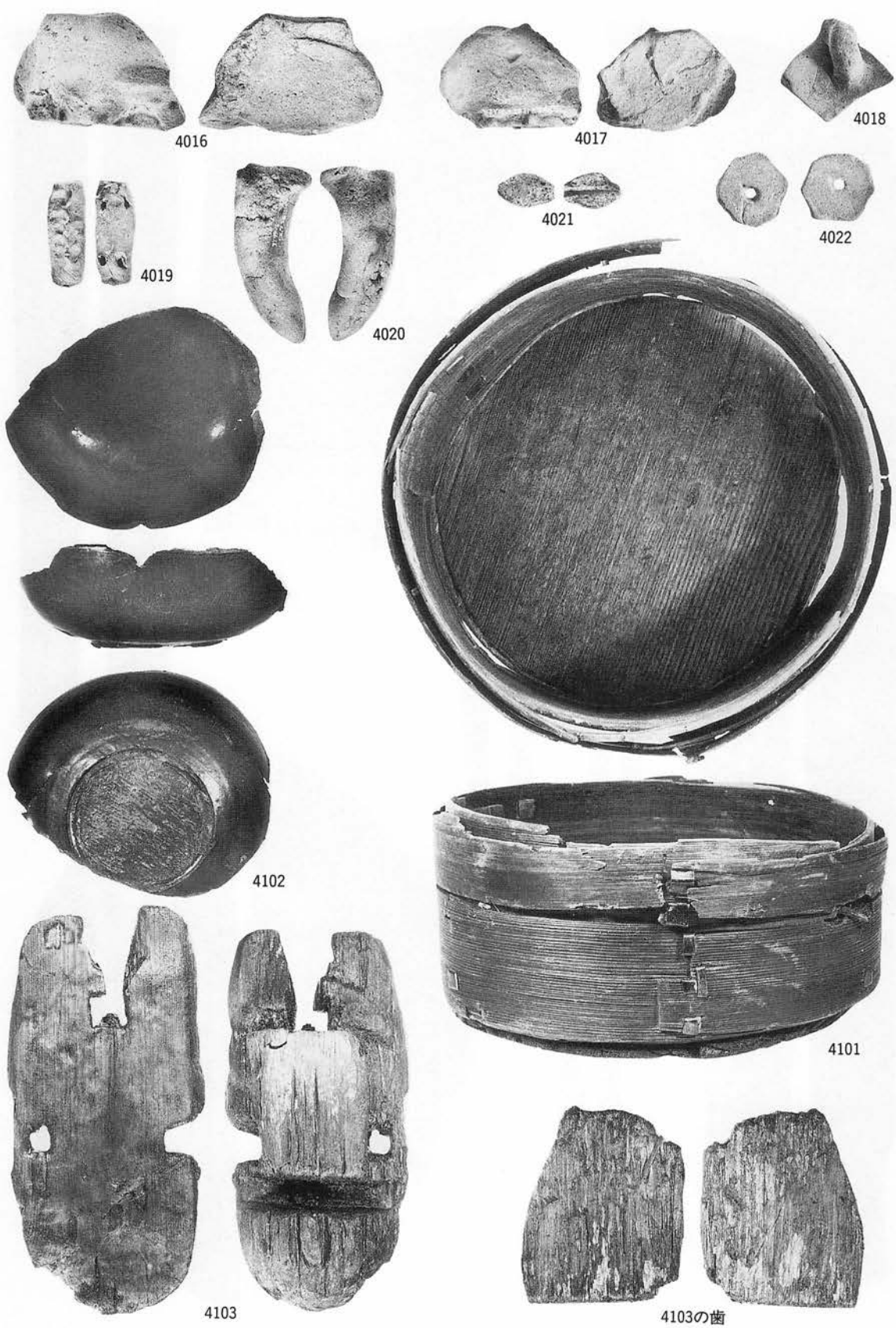


写真図版123 東側調査区のかわれけ(6)

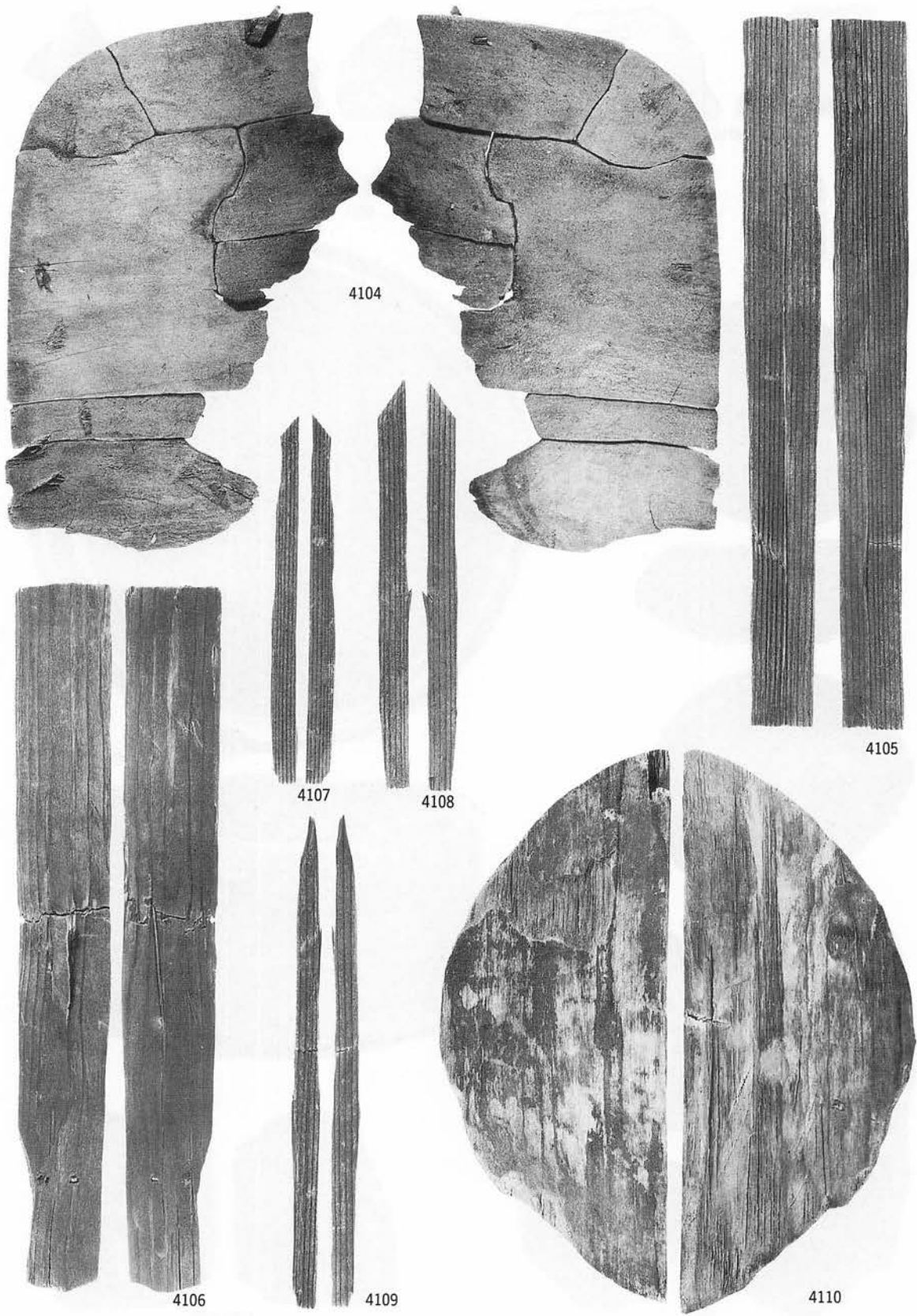


写真図版124 12Cの土製品(1)

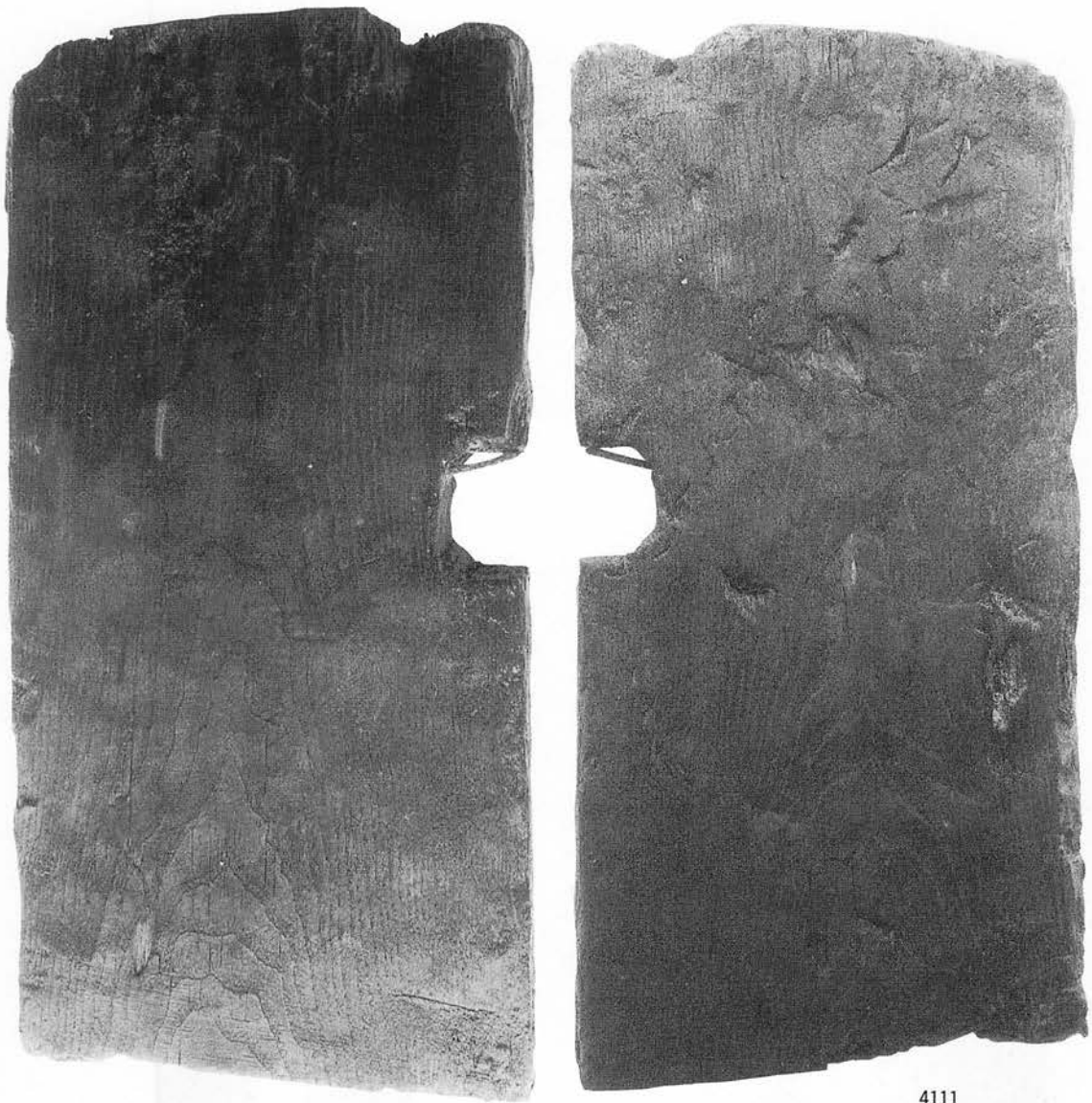




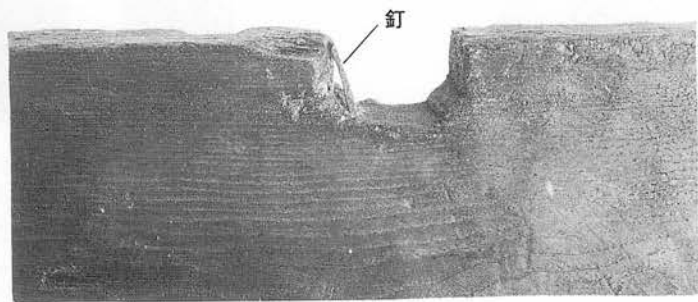
写真図版125 12Cの土製品(2)・12Cの木製品(1)



写真図版126 12Cの木製品(2)

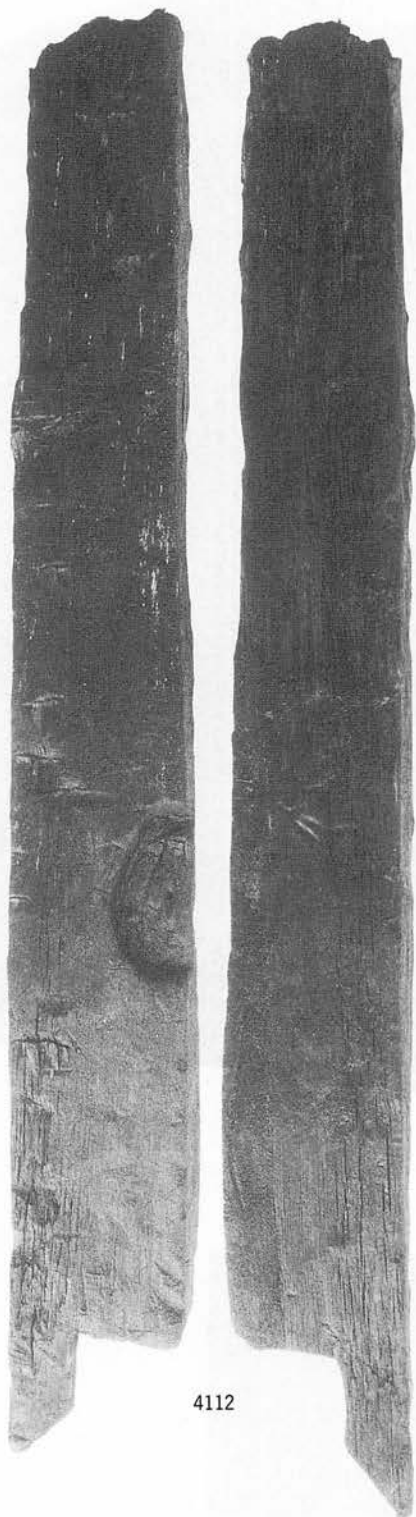


4111

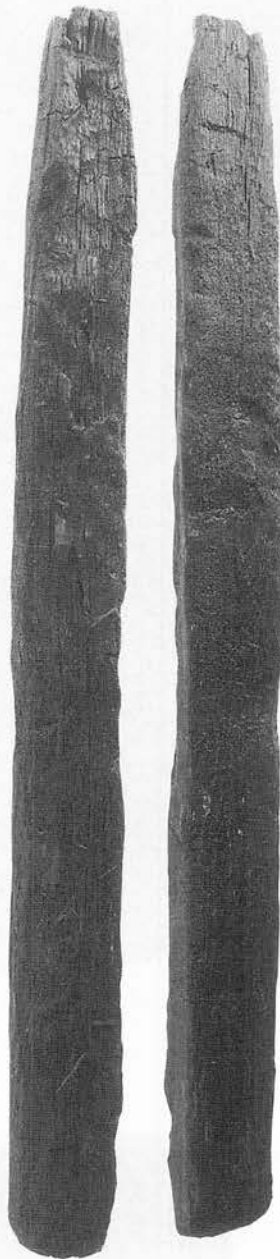


釘

写真図版127 12Cの木製品(3)



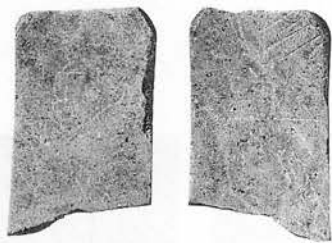
4112



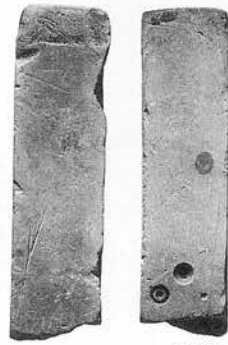
4113

写真図版128 12Cの木製品(4)

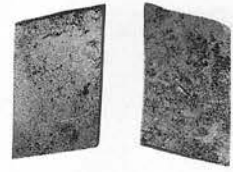




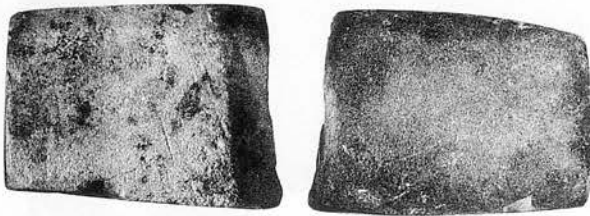
4201



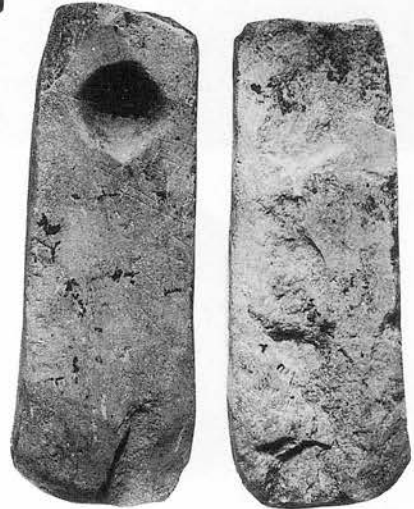
4202



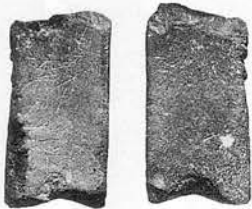
4203



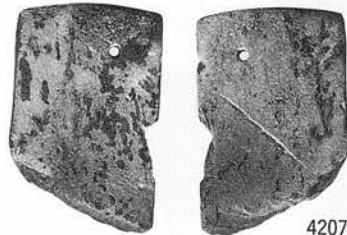
4204



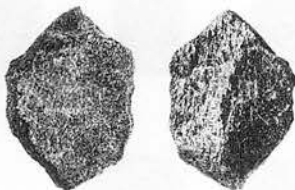
4205



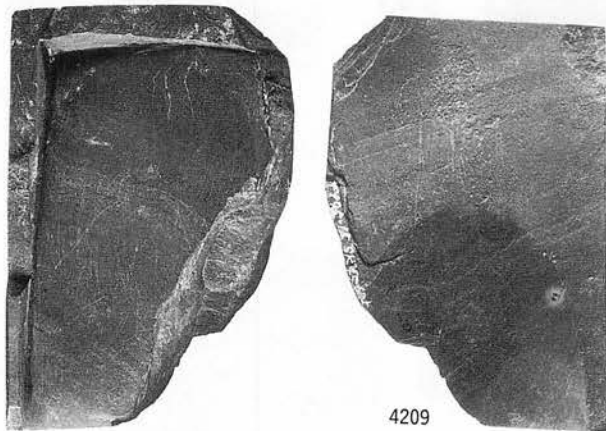
4206



4207

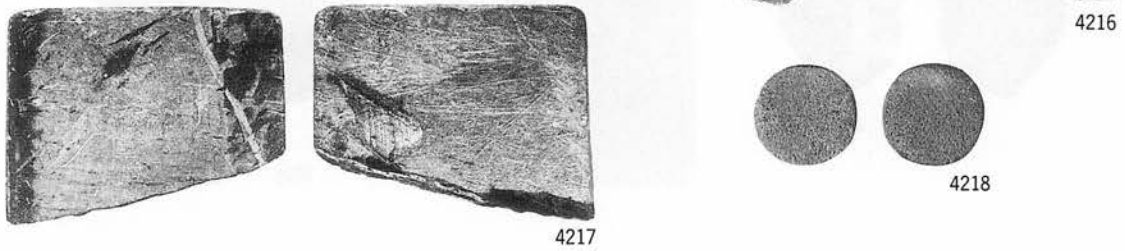
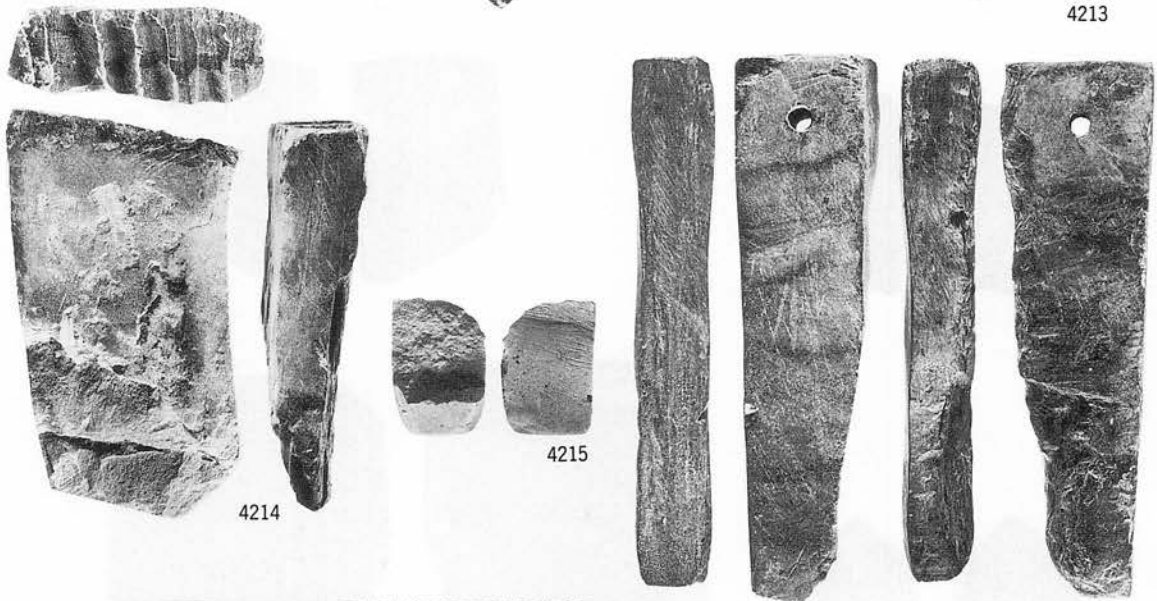
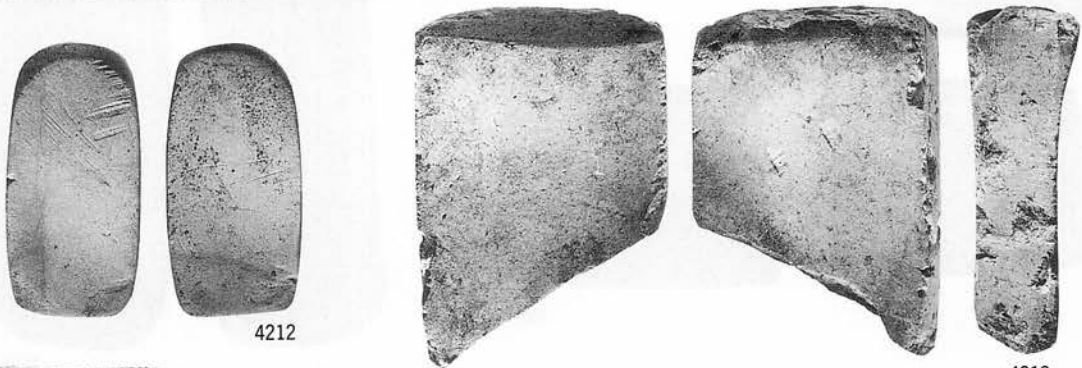
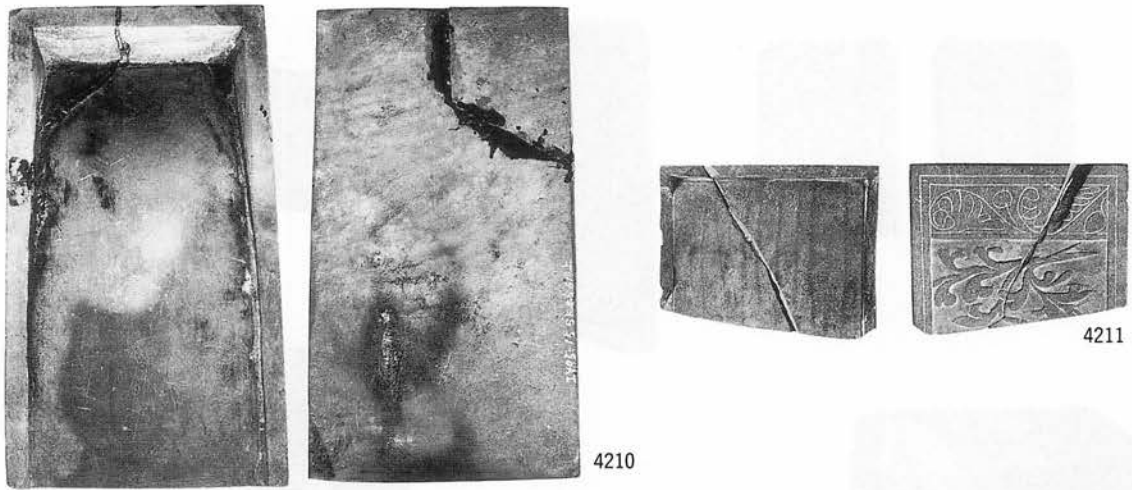


4208



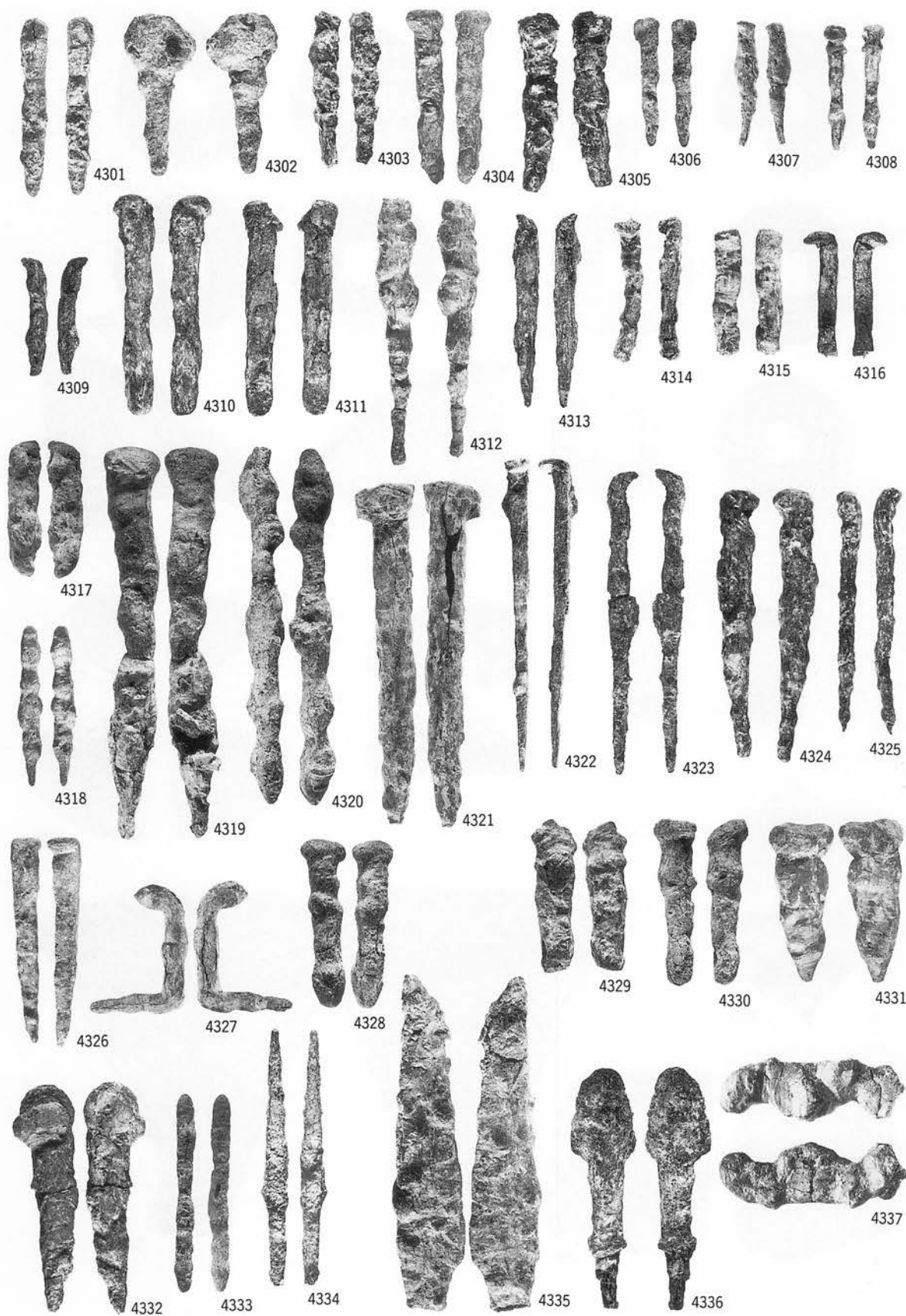
4209

写真図版129 12Cの石製品(1)

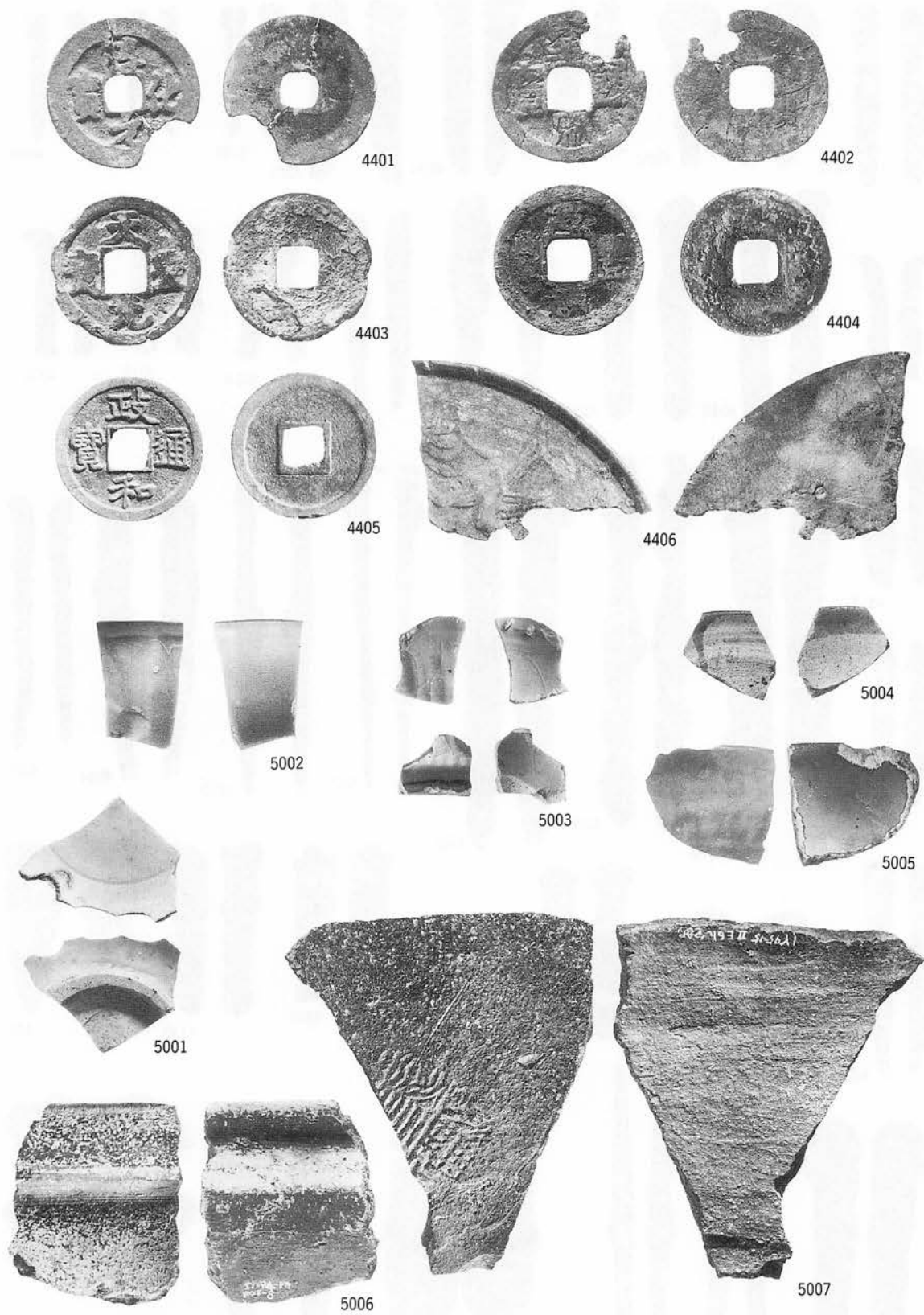


写真図版130 12Cの石製品(2)

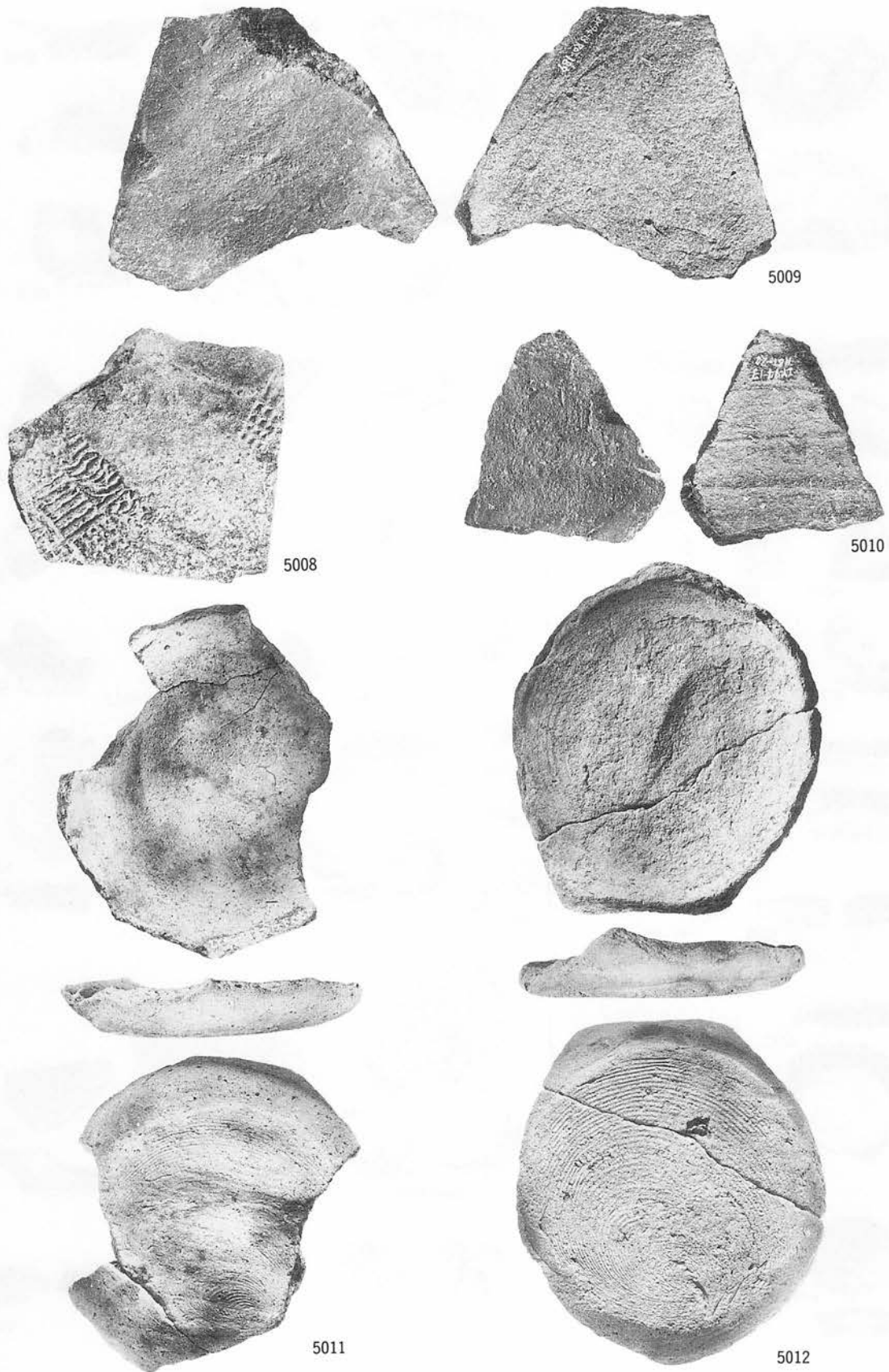




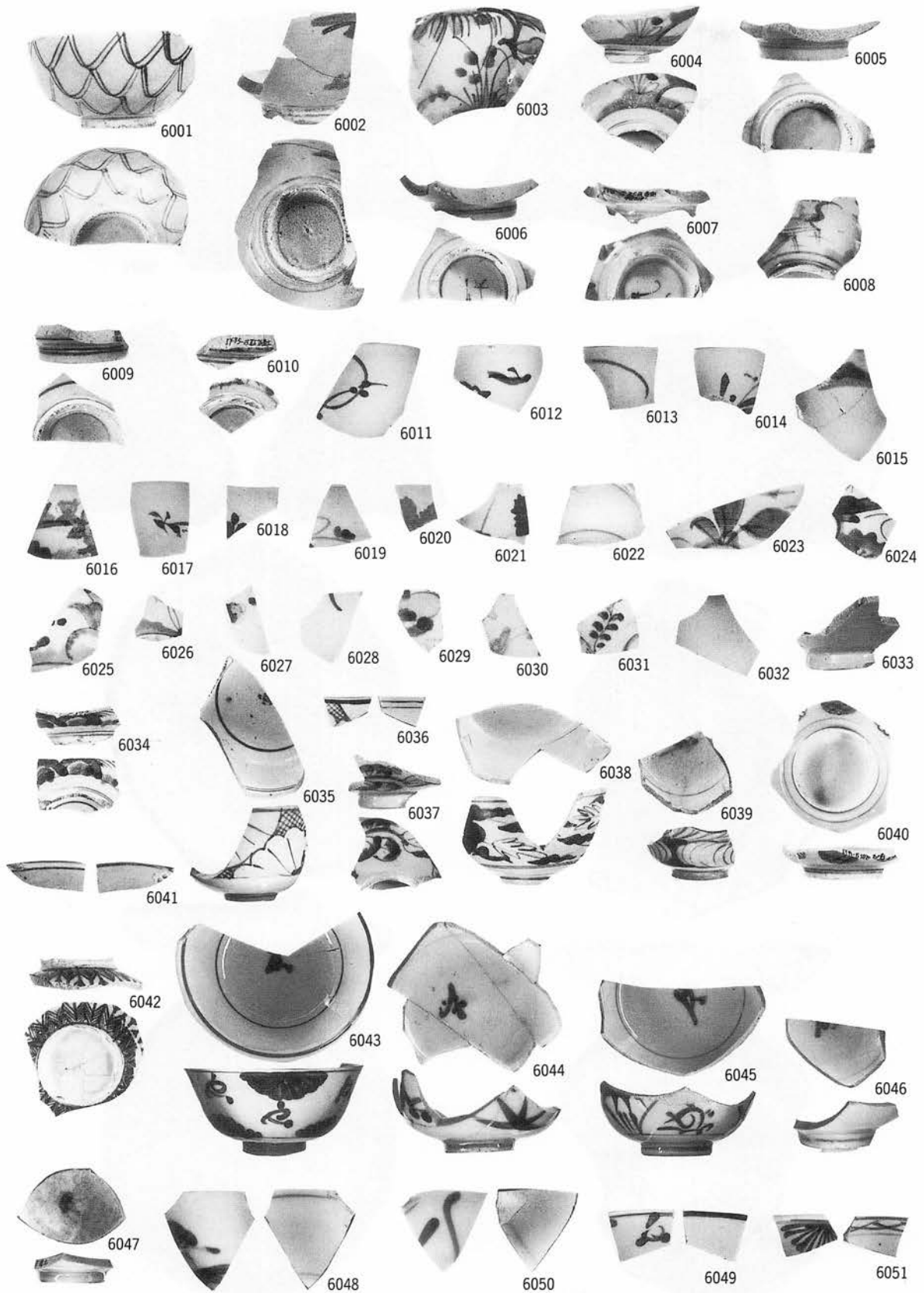
写真図版131 12Cの金属製品(1)



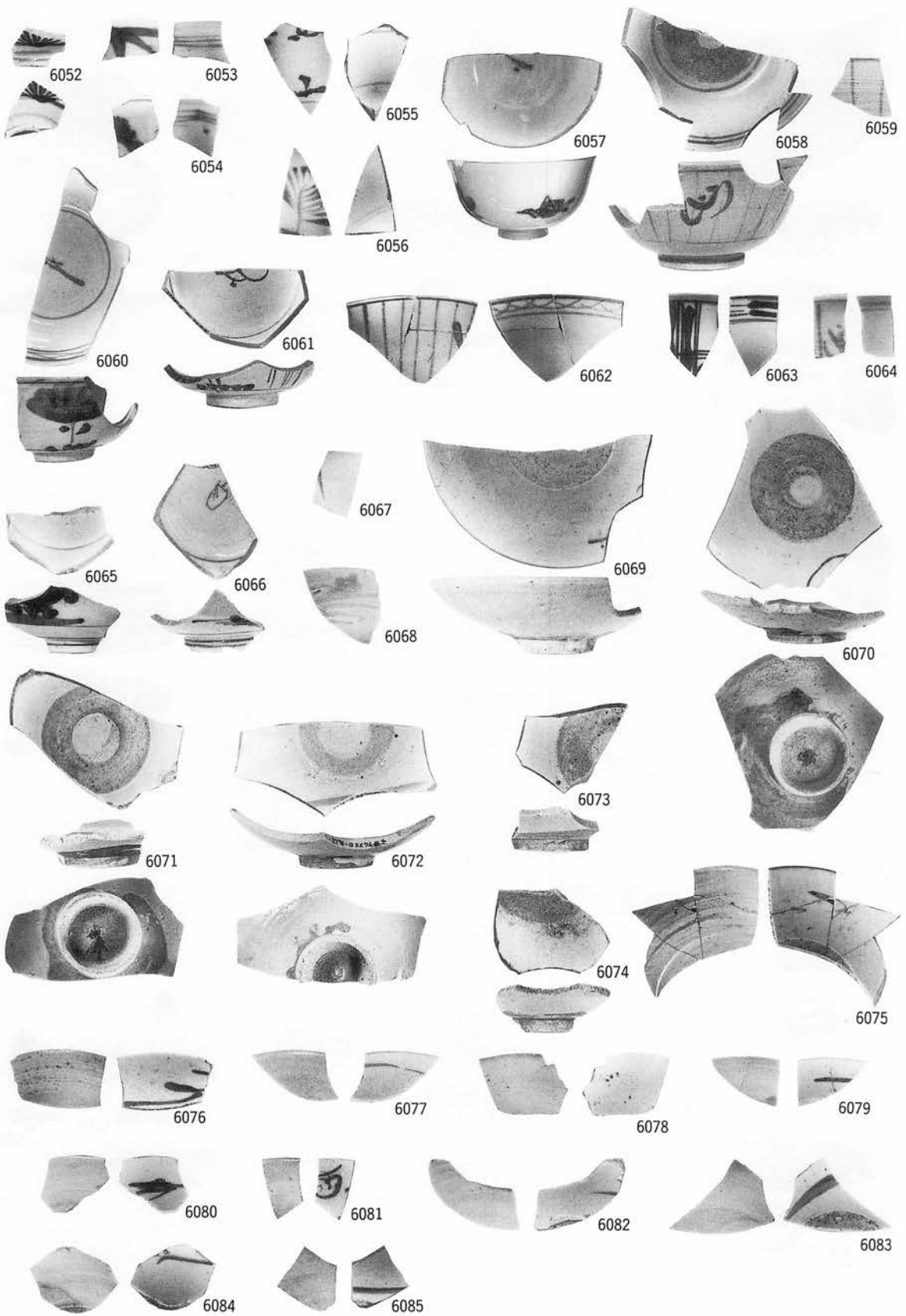
写真図版132 12Cの金属製品(2)・13~15Cの陶磁器(1)



写真図版133 13~15Cの陶磁器(2)、かわらけ

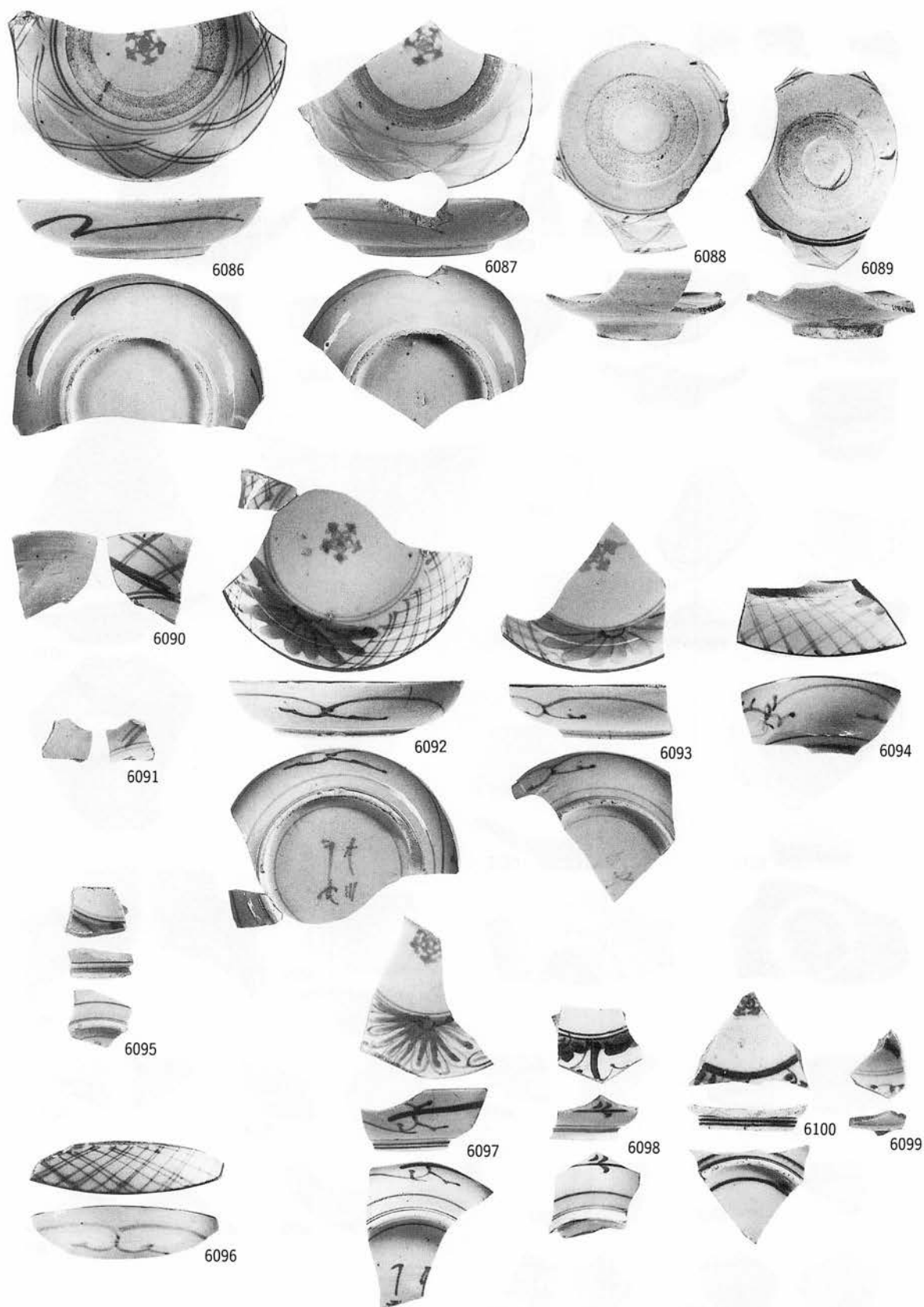


写真図版134 西側調査区の近世陶磁器(1)



写真図版135 西側調査区の近世陶磁器(2)





写真図版136 西側調査区の近世陶磁器(3)

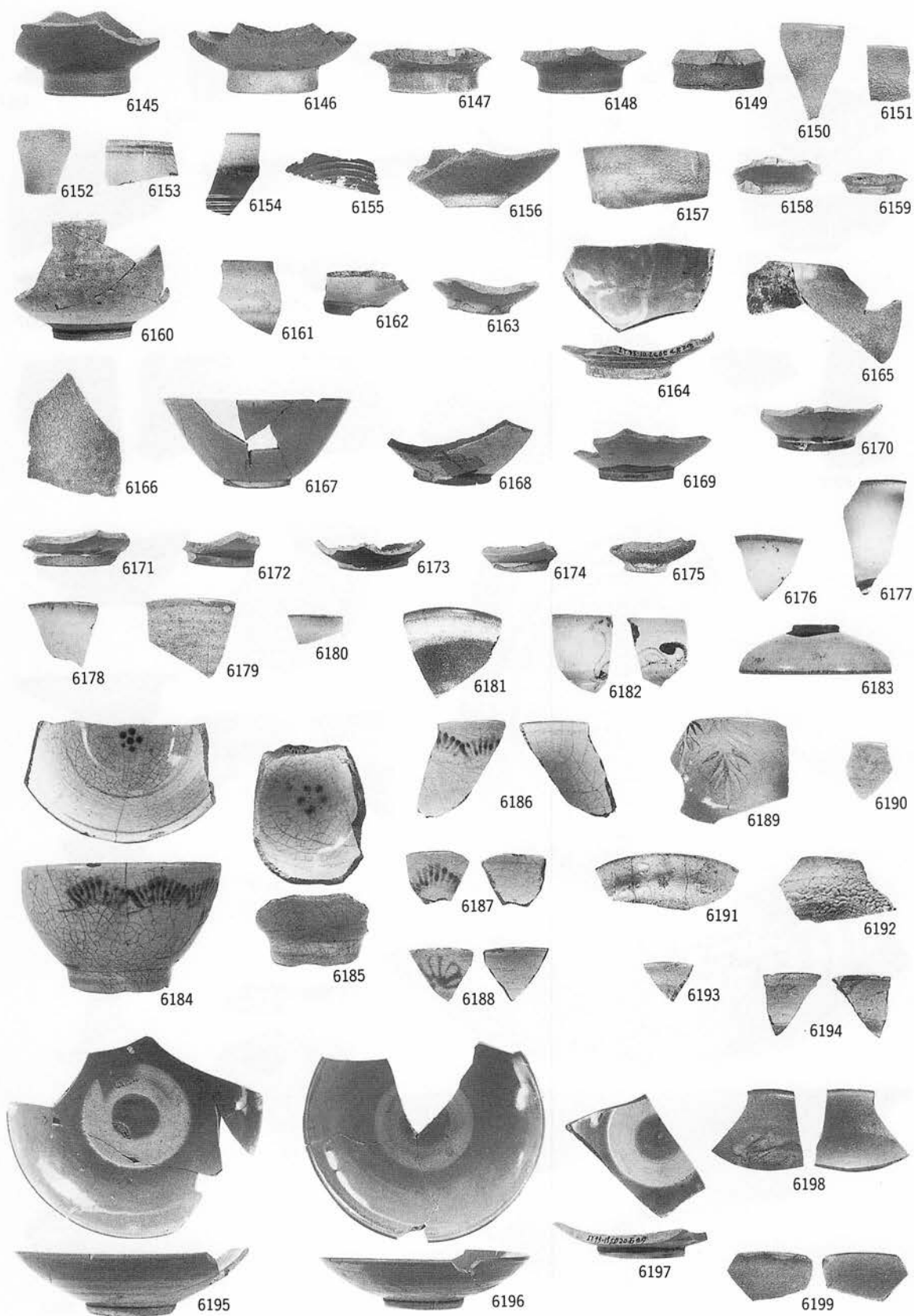




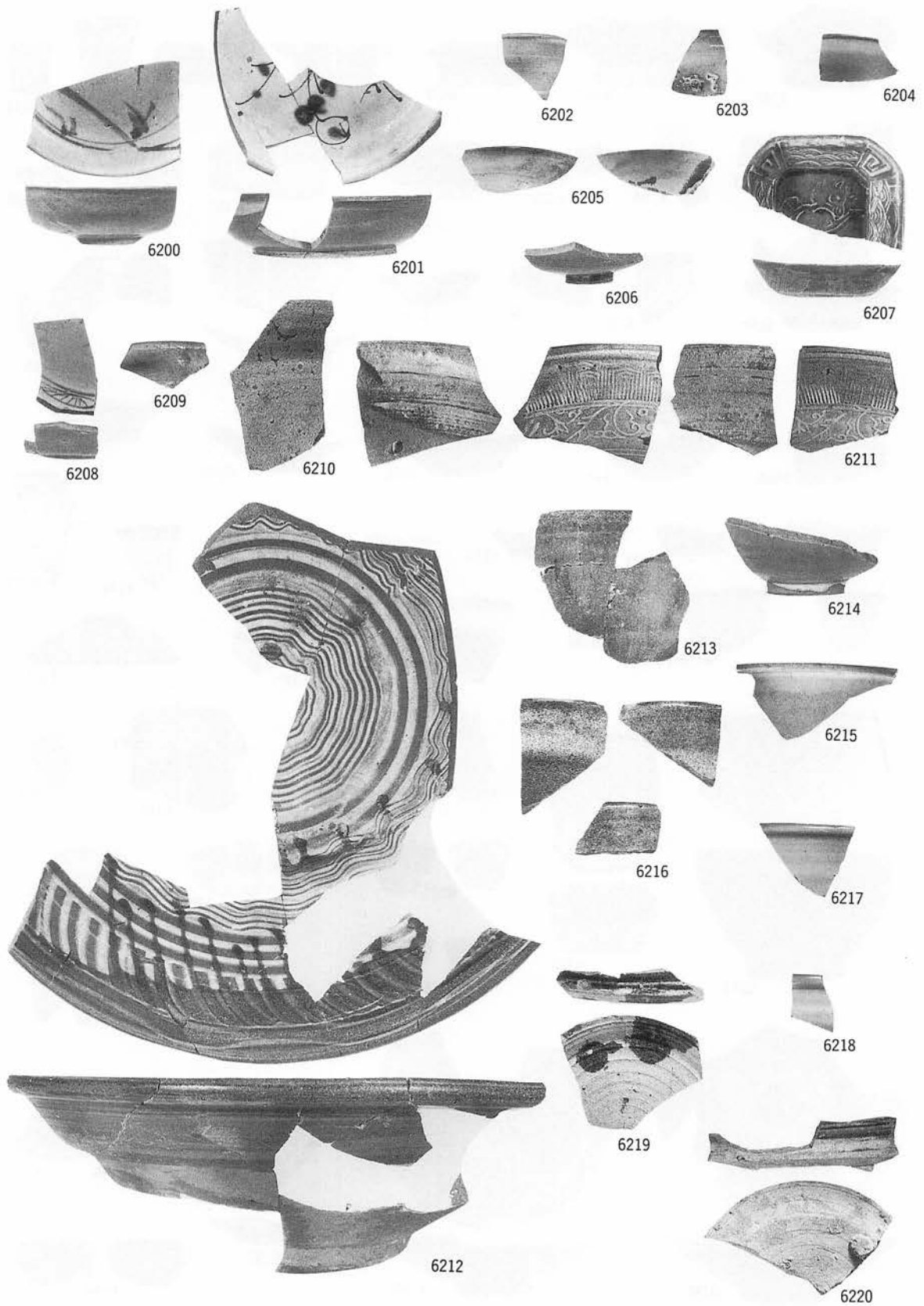
写真図版137 西側調査区の近世陶磁器(4)



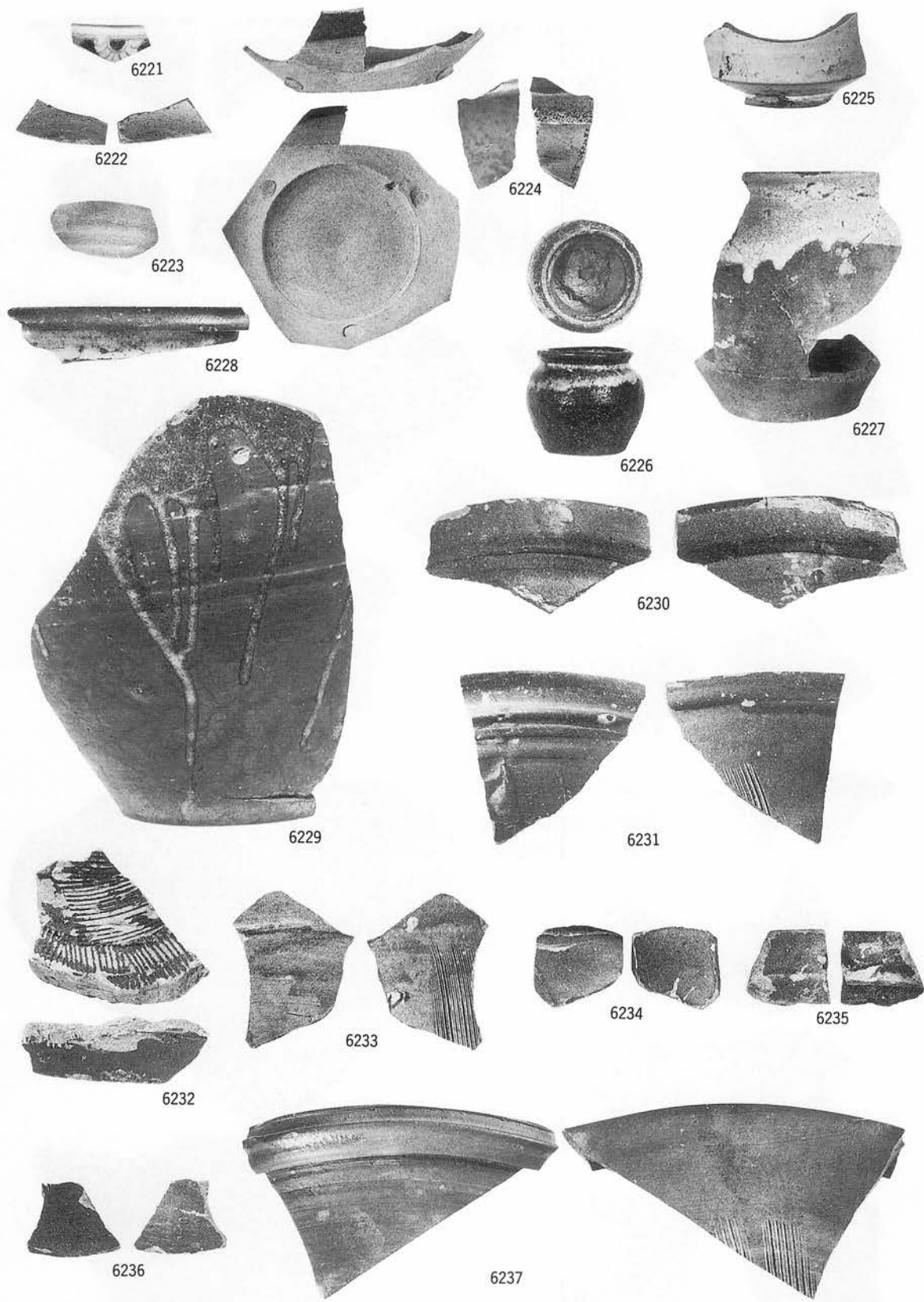
写真図版138 西側調査区の近世陶磁器(5)



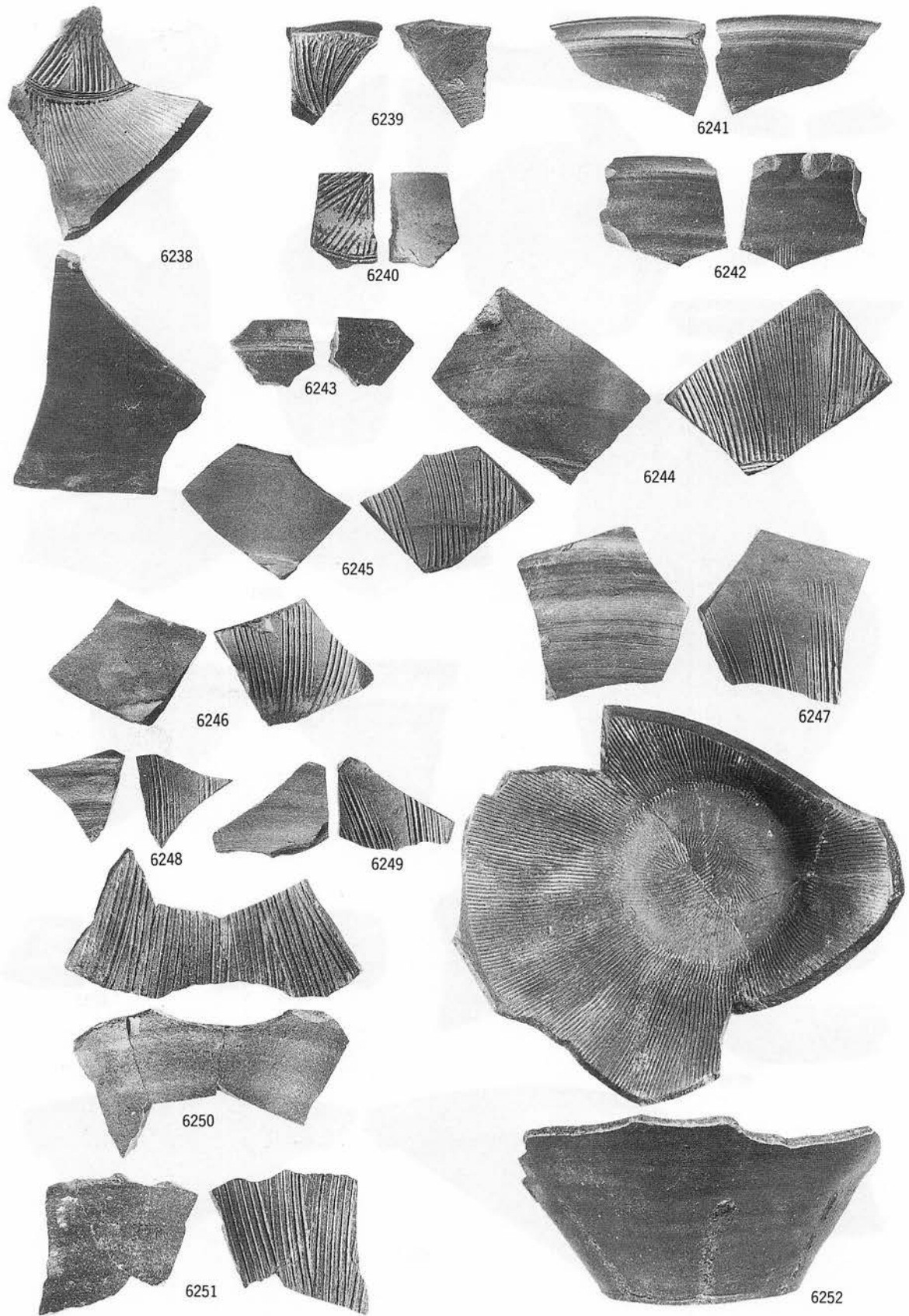
写真図版139 西側調査区の近世陶磁器(6)



写真図版140 西側調査区の近世陶磁器(7)

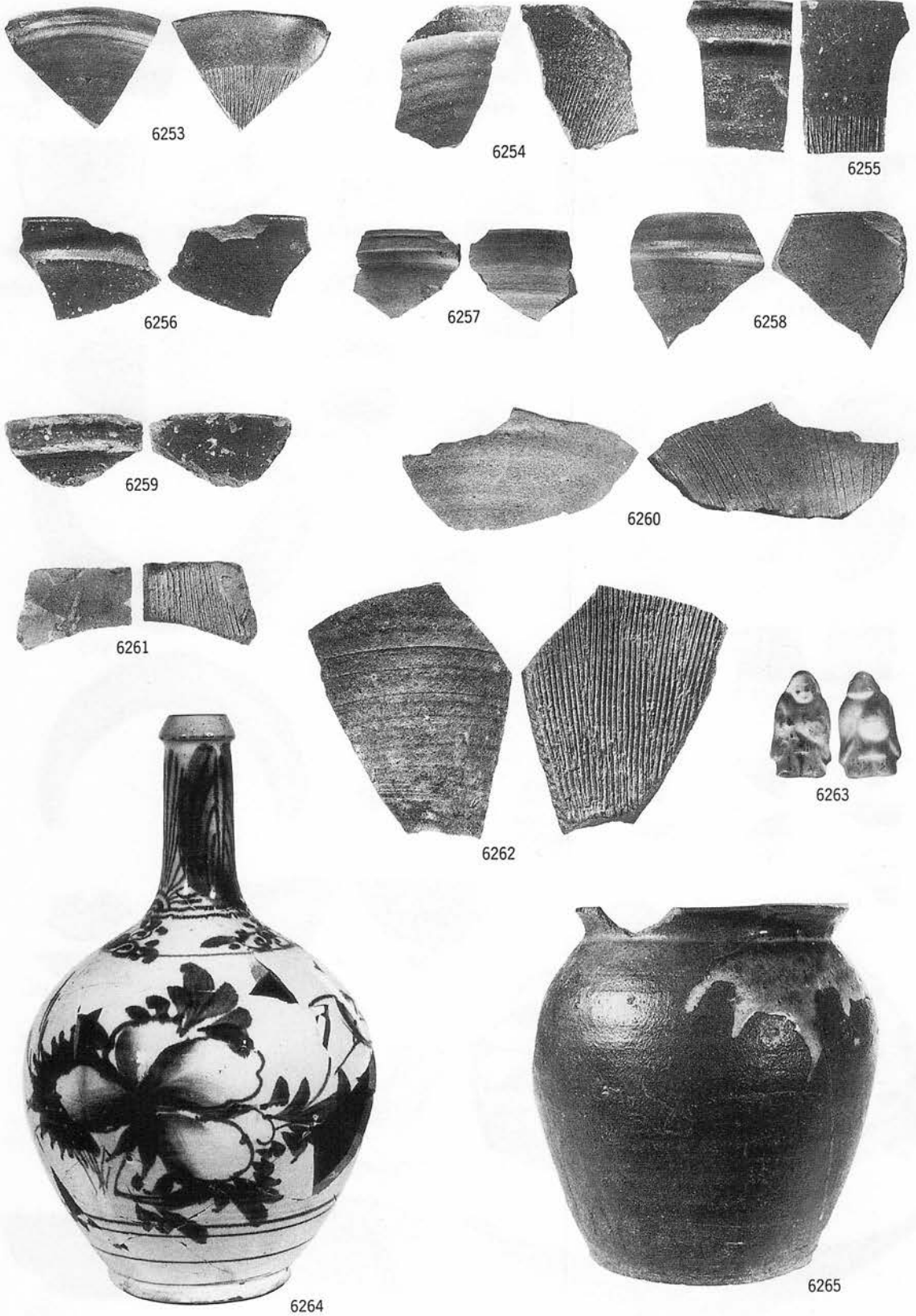


写真図版141 西側調査区の近世陶磁器(8)

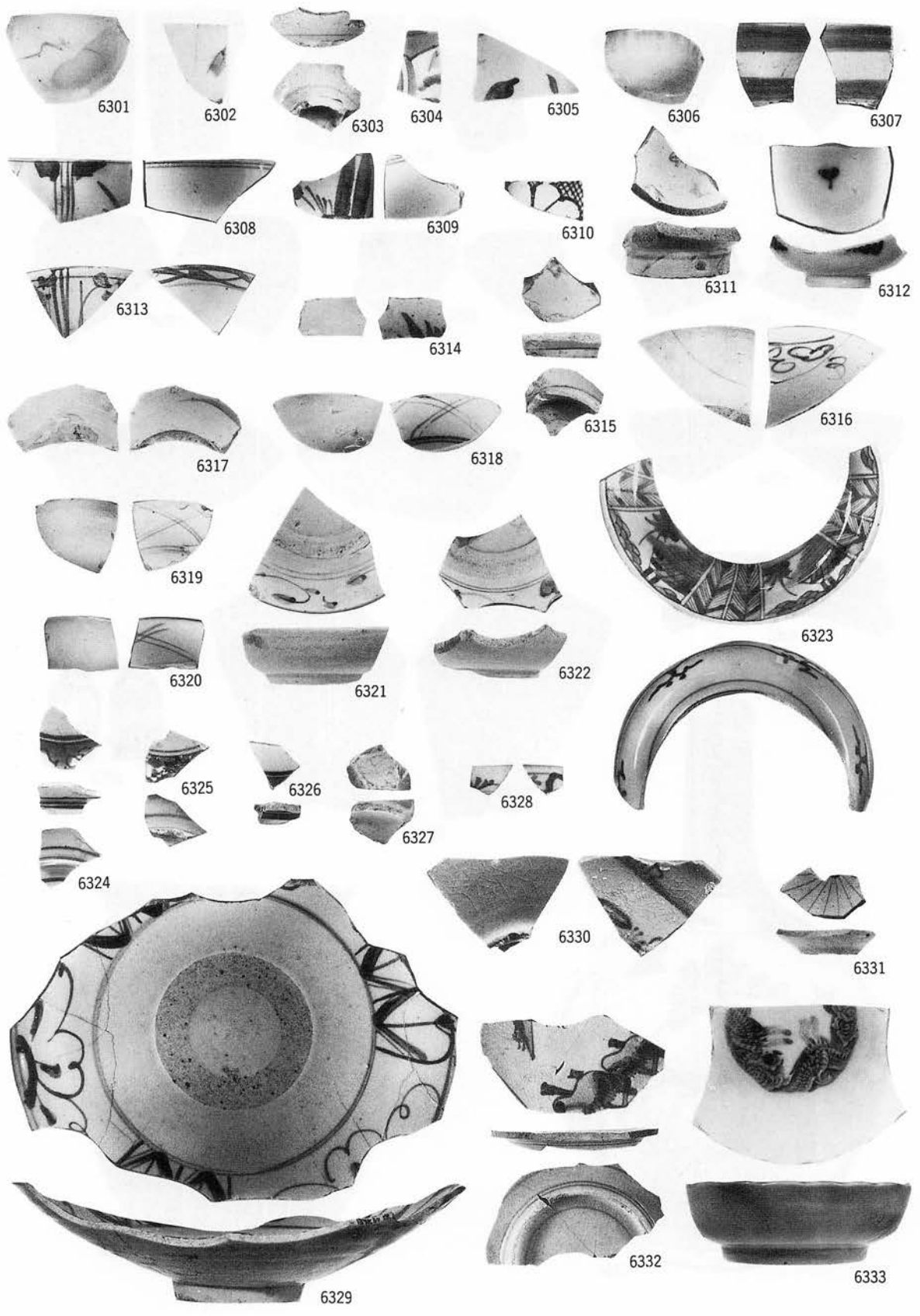


写真図版142 西側調査区の近世陶磁器(9)

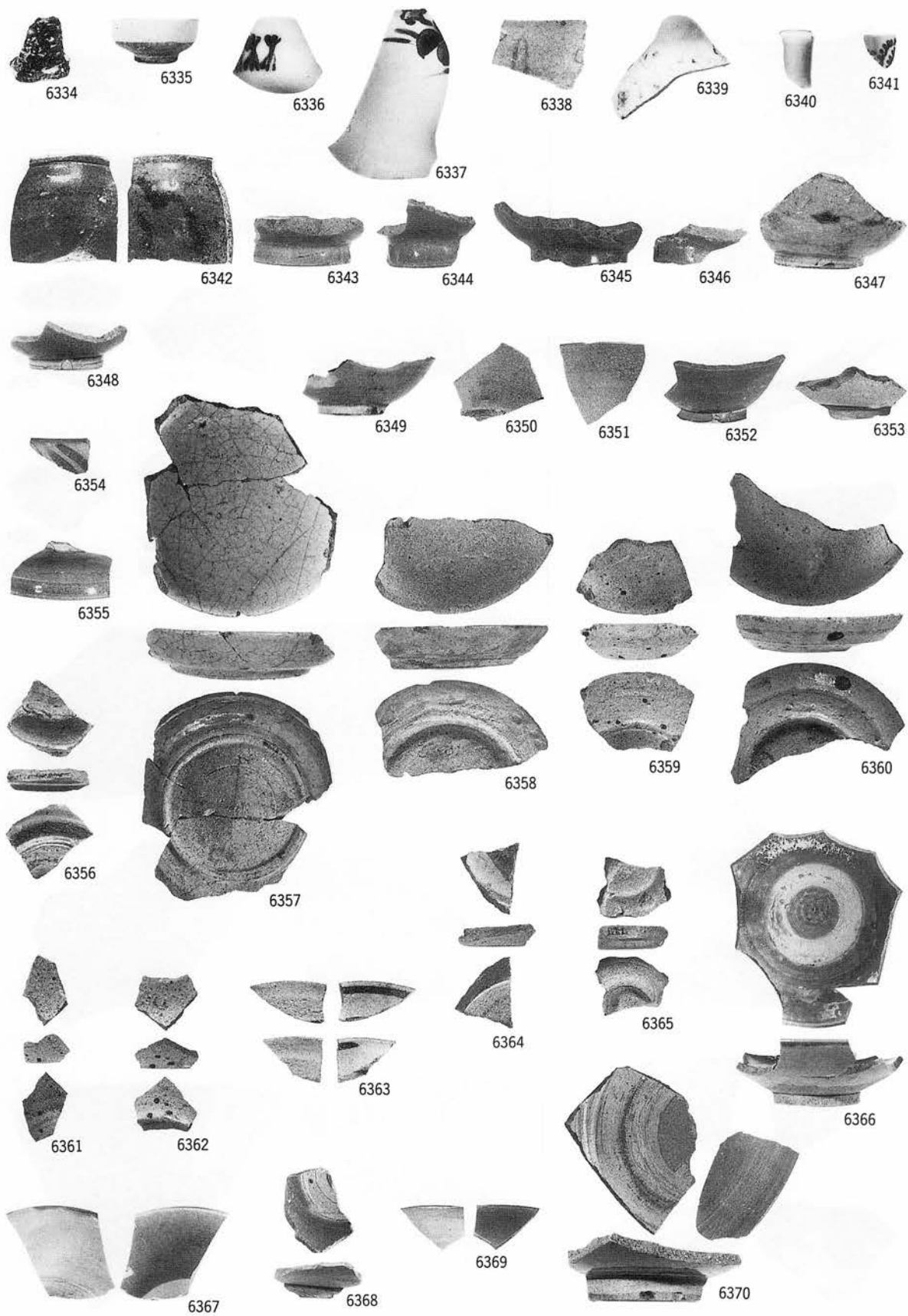




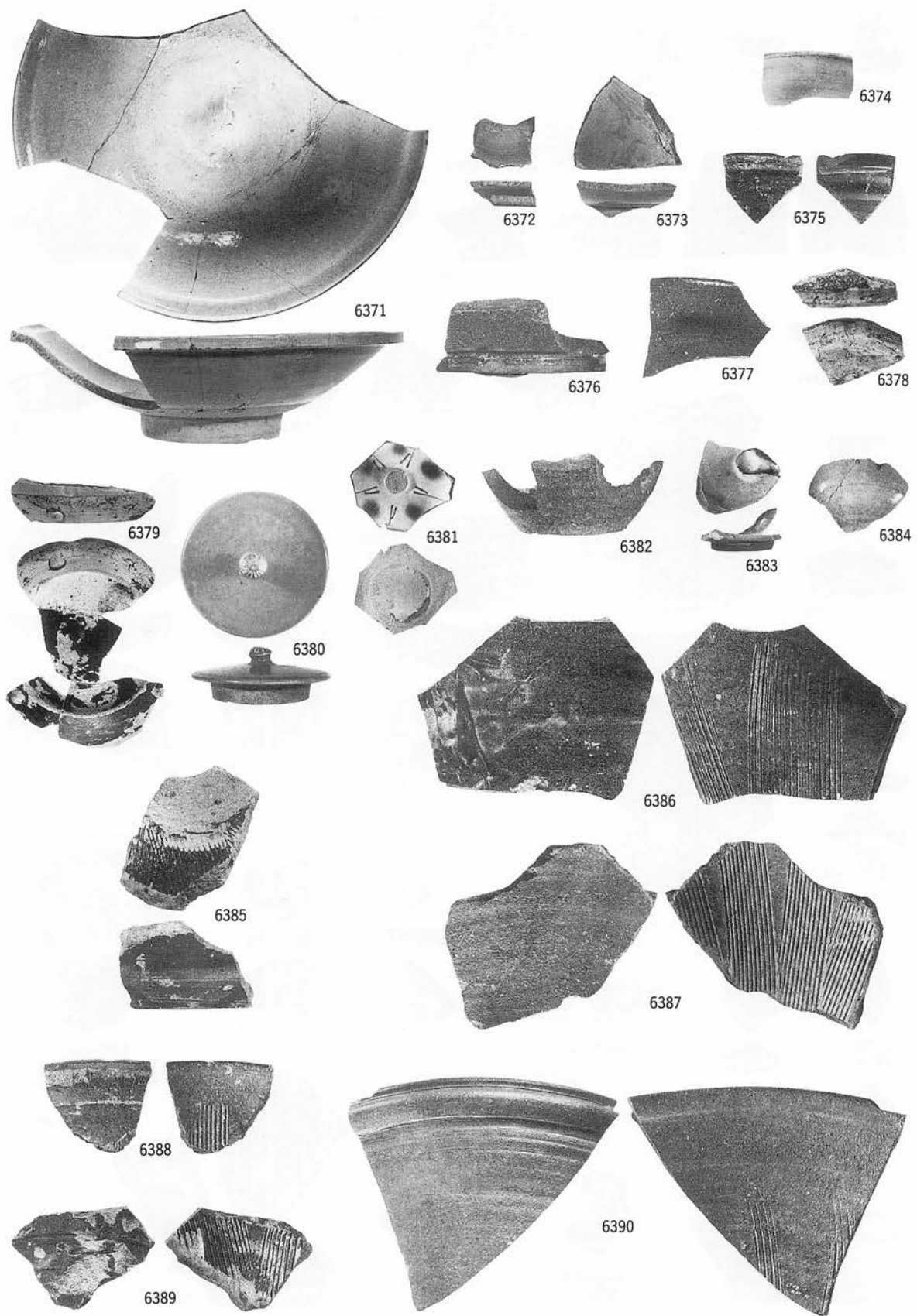
写真図版143 西側調査区の近世陶磁器(10)



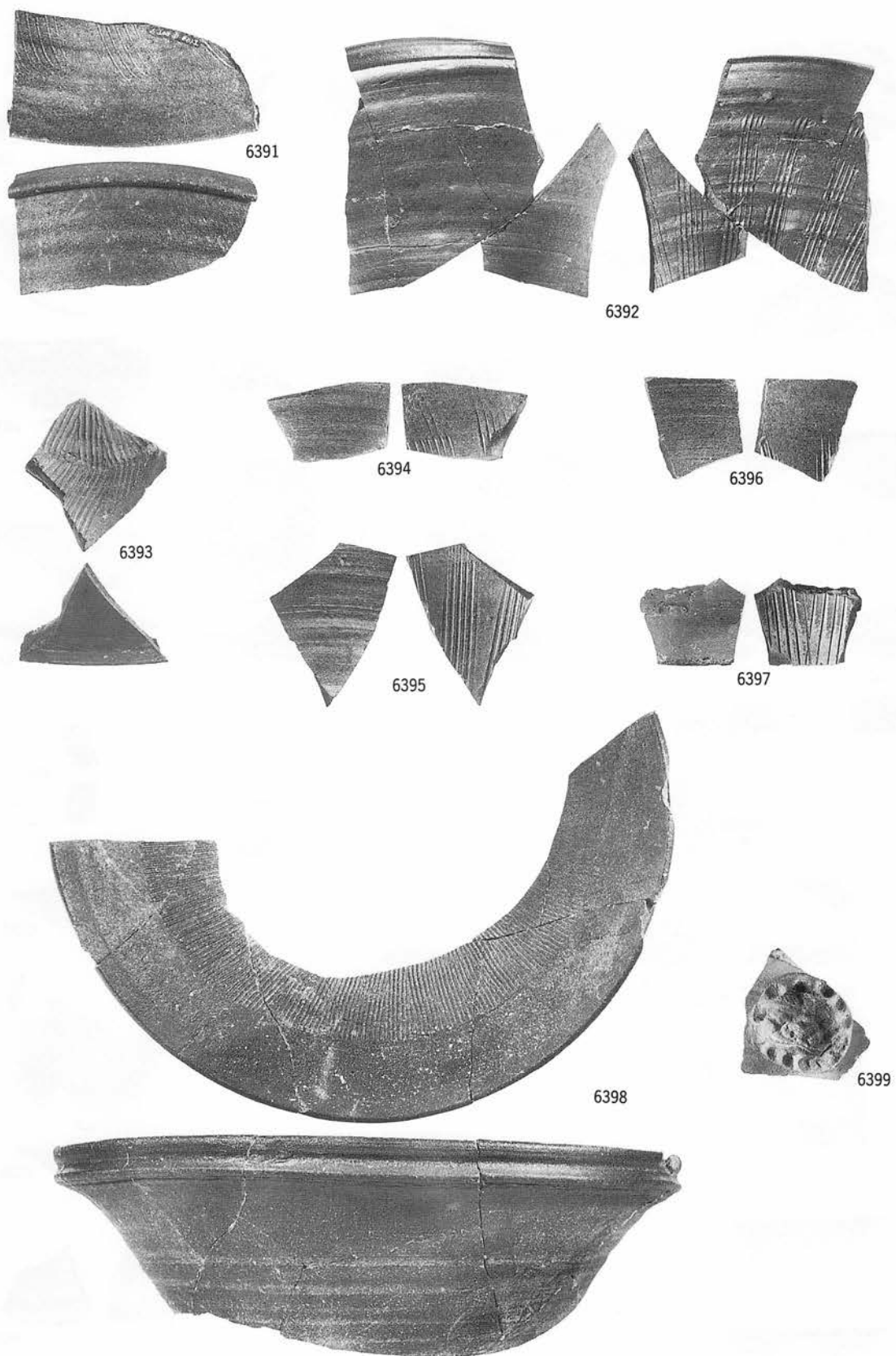
写真図版144 II E 区の近世陶磁器(1)



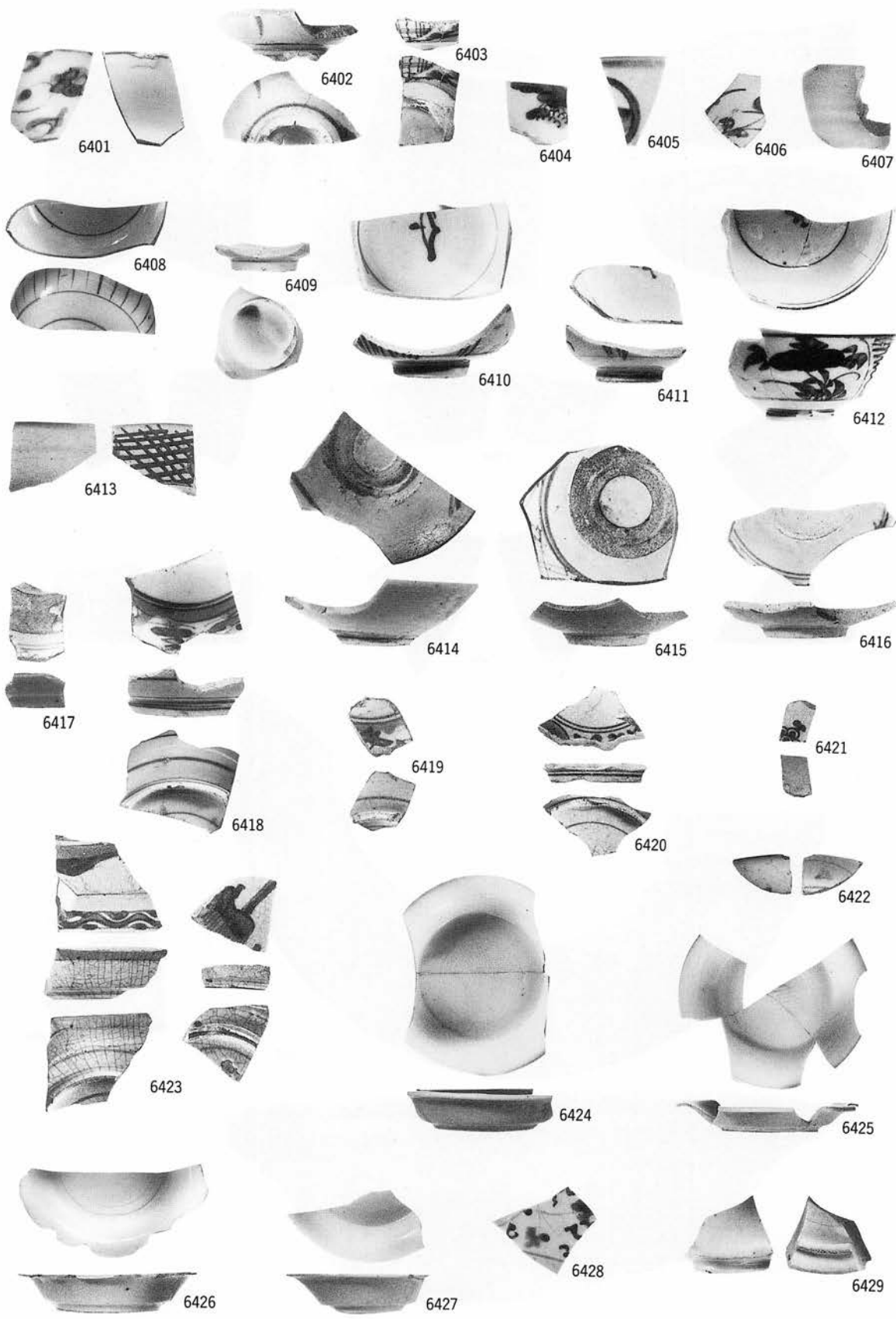
写真図版145 II E 区の近世陶磁器(2)



写真図版146 II E 区の近世陶磁器(3)

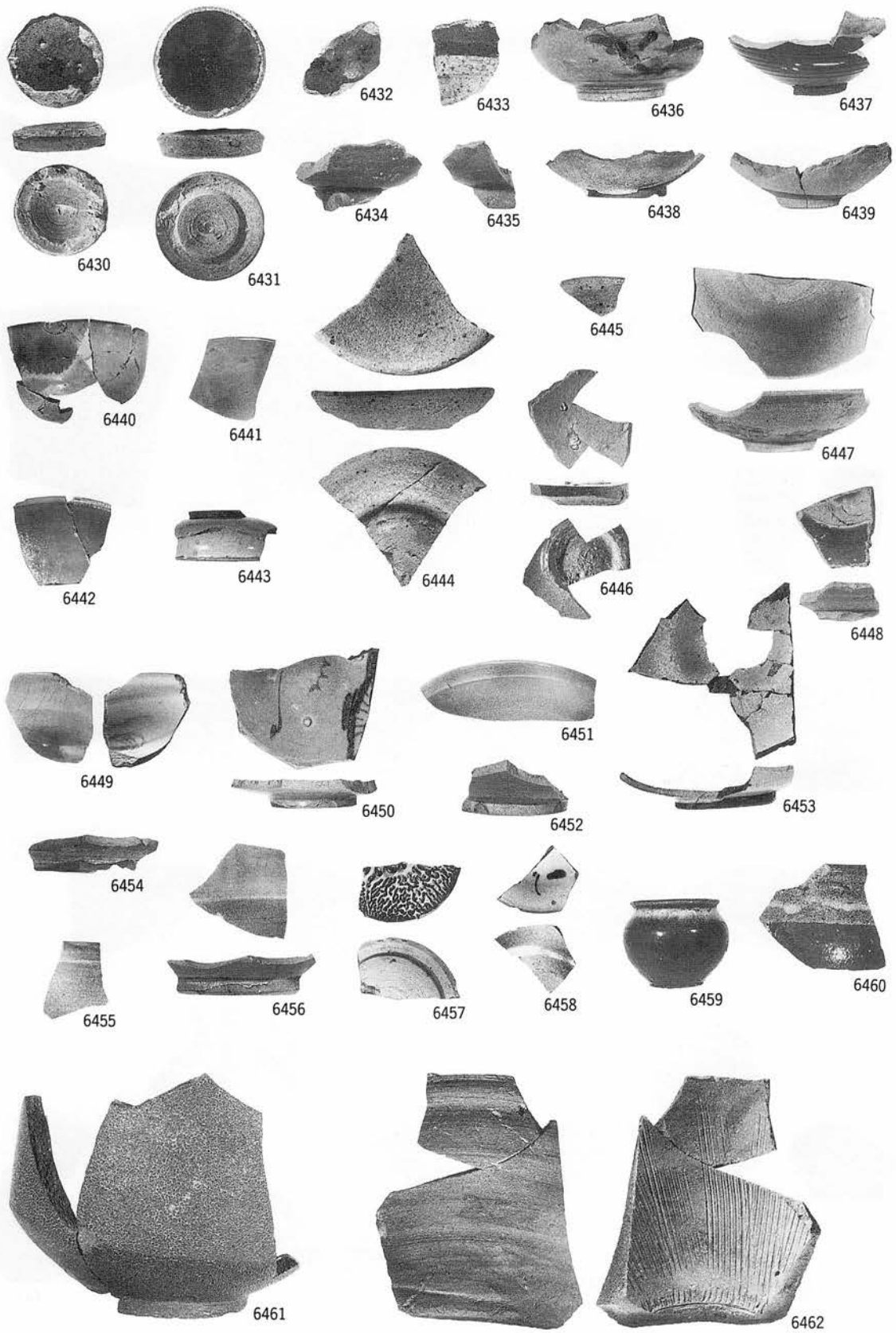


写真図版147 II E 区の近世陶磁器(4)

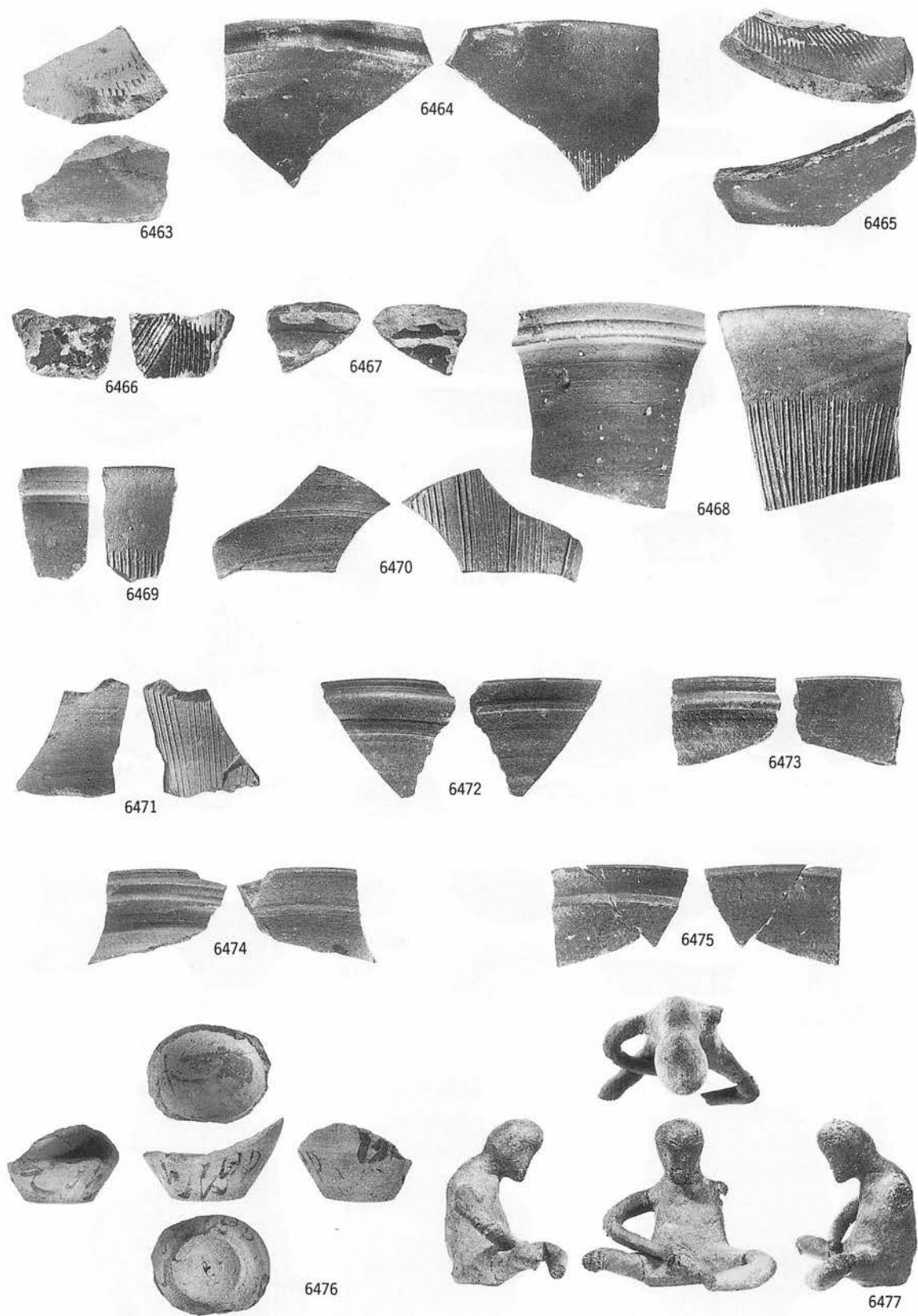


写真図版148 II・III F 区の近世陶磁器(1)

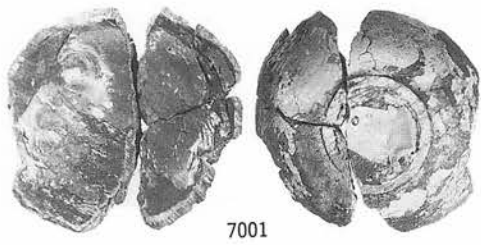




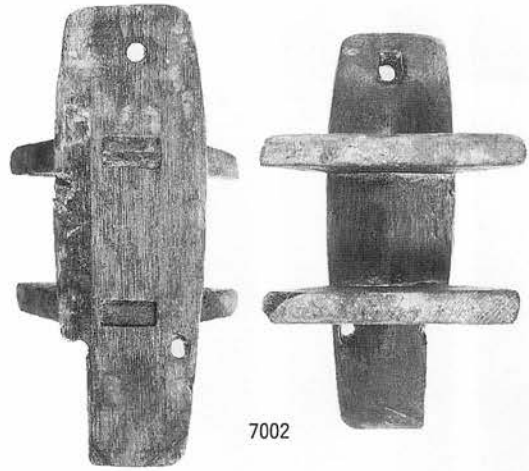
写真図版149 II・III F 区の近世陶磁器(2)



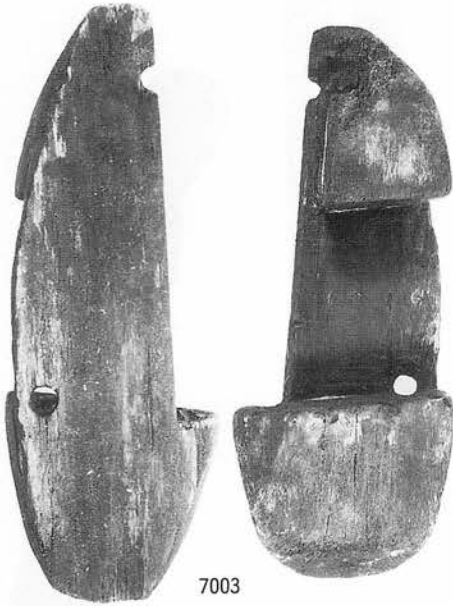
写真図版150 II・III F 区の近世陶磁器(3)



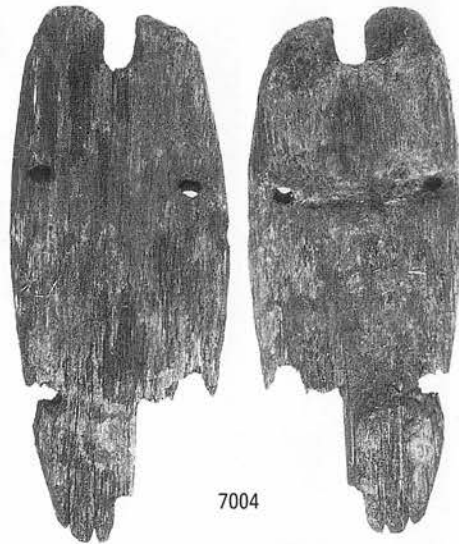
7001



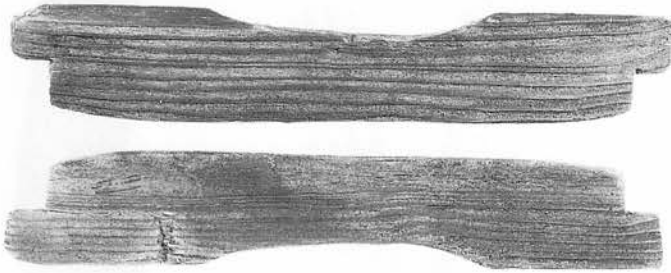
7002



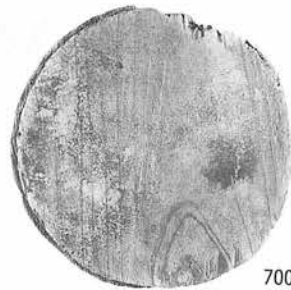
7003



7004

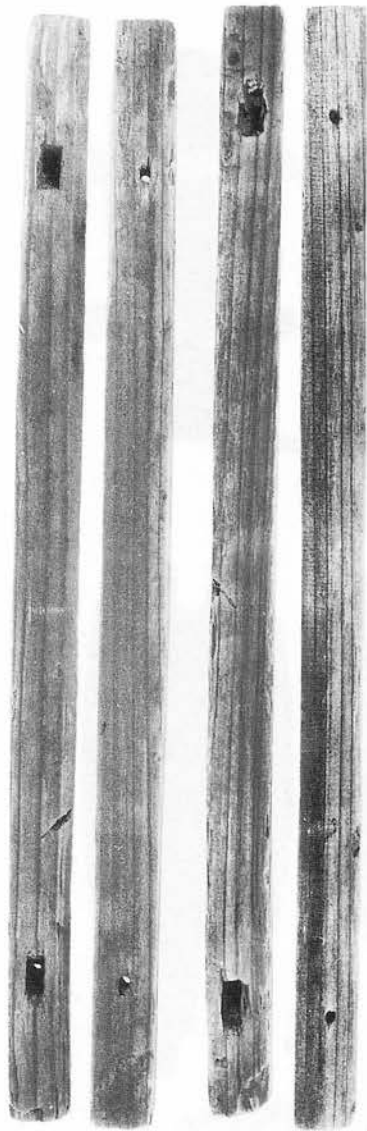


7005



7006

写真図版151 近世の木製品(1)

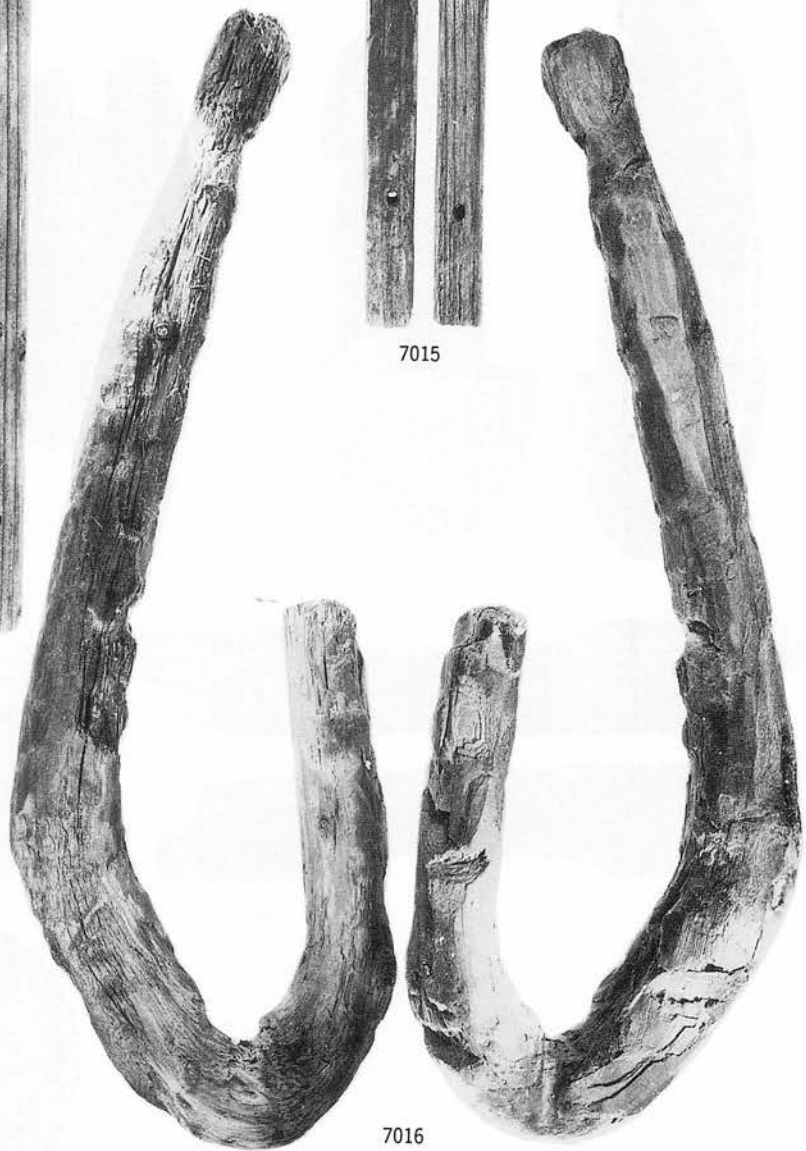


7013

7014

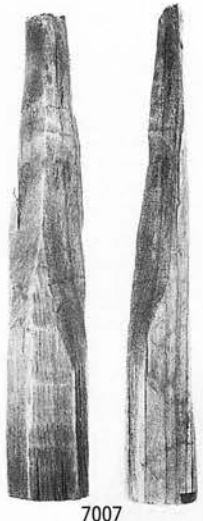


7015

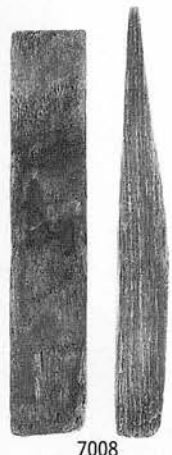


7016

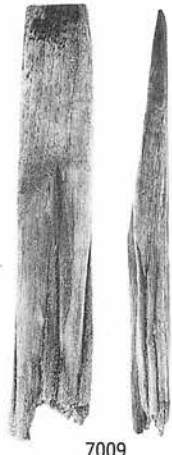
写真図版152 近世の木製品(2)



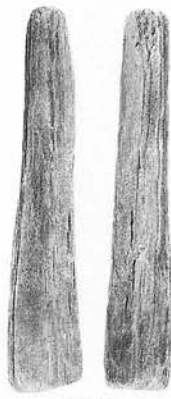
7007



7008



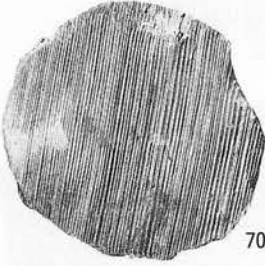
7009



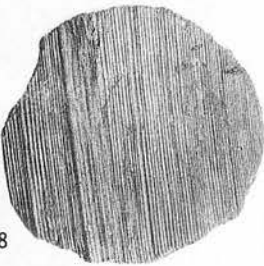
7010



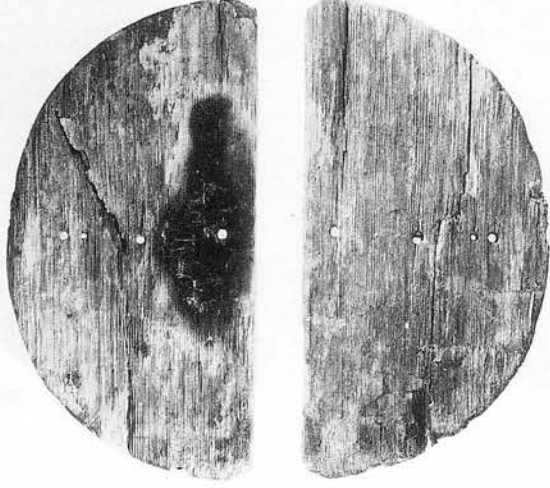
7011



7018



7012



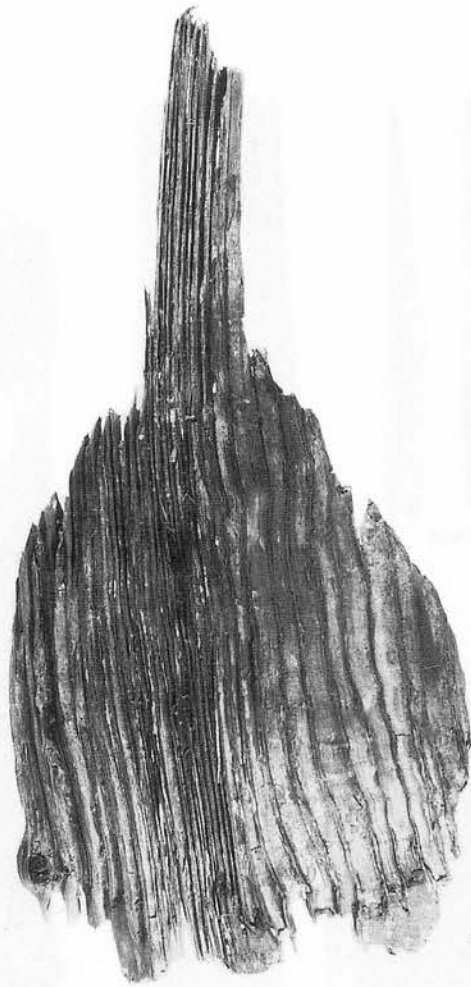
7022



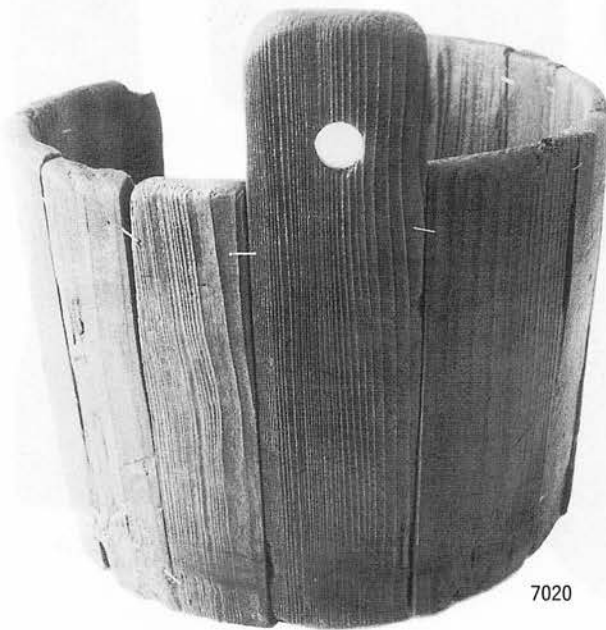
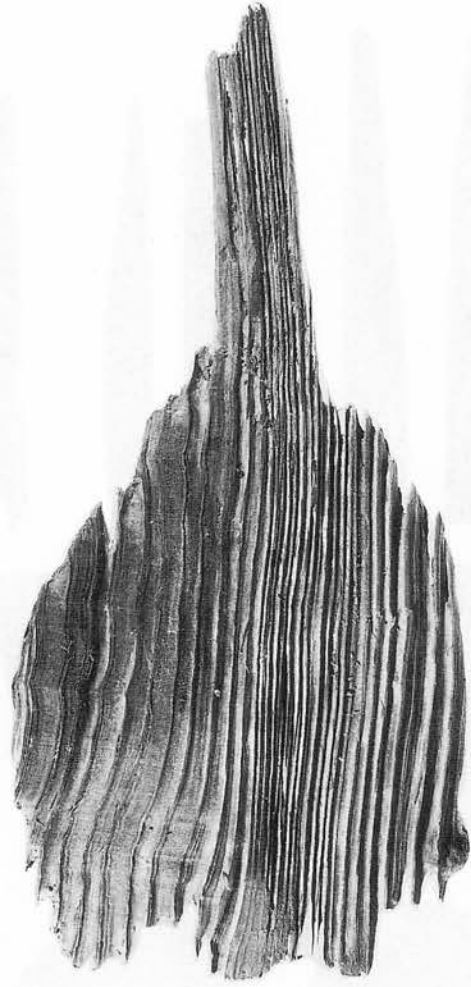
7019

写真図版153 近世の木製品(3)

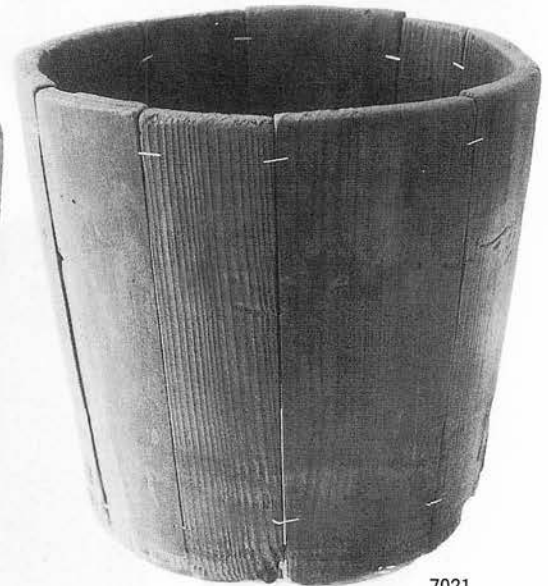




7017



7020



7021

写真図版154 近世の木製品(4)





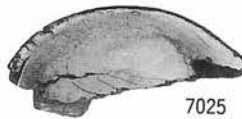
たがは新しいもの  
山田実氏（平泉町長島）組立



7023



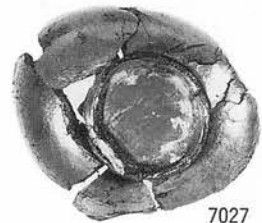
7024



7025

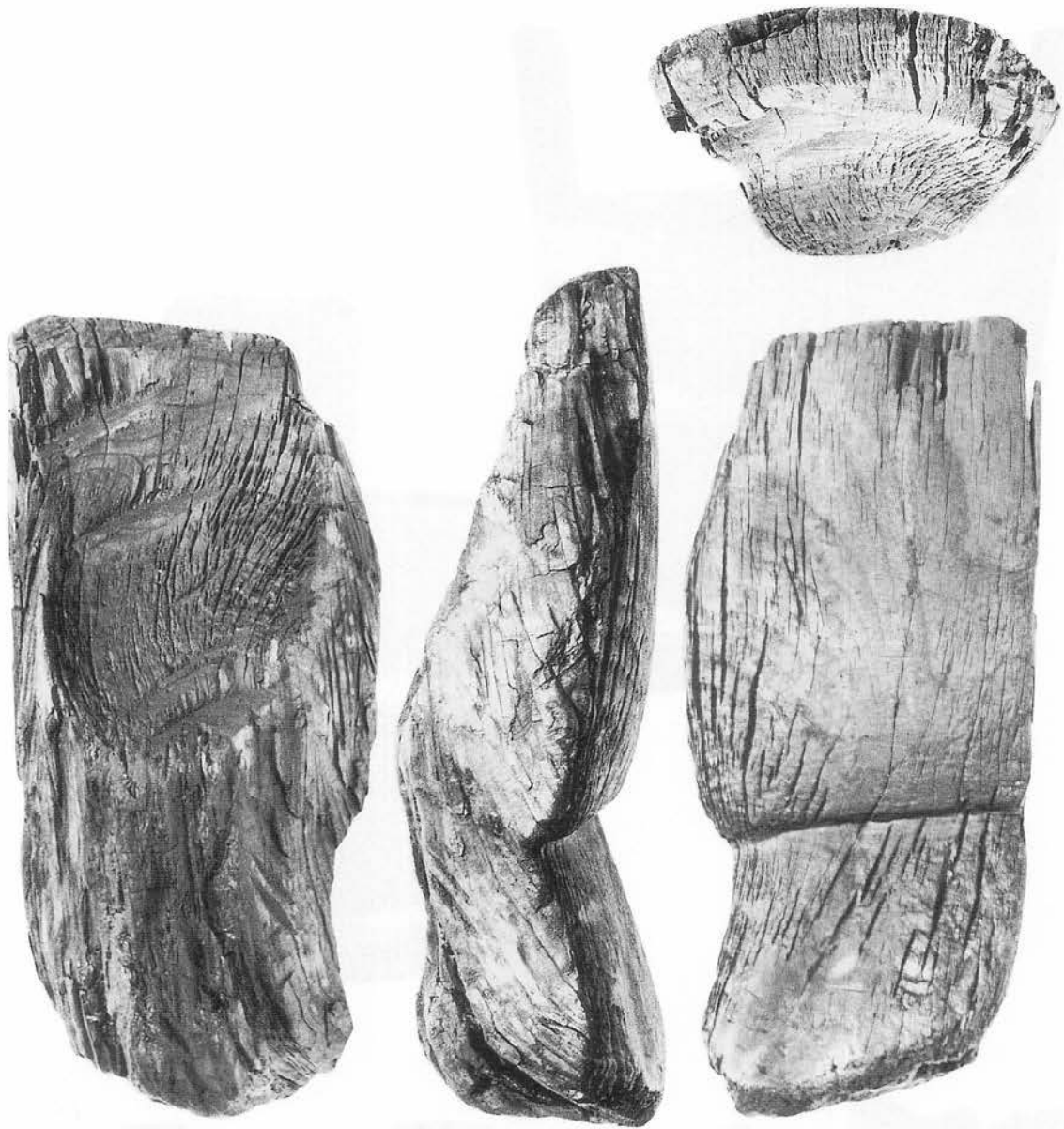


7026



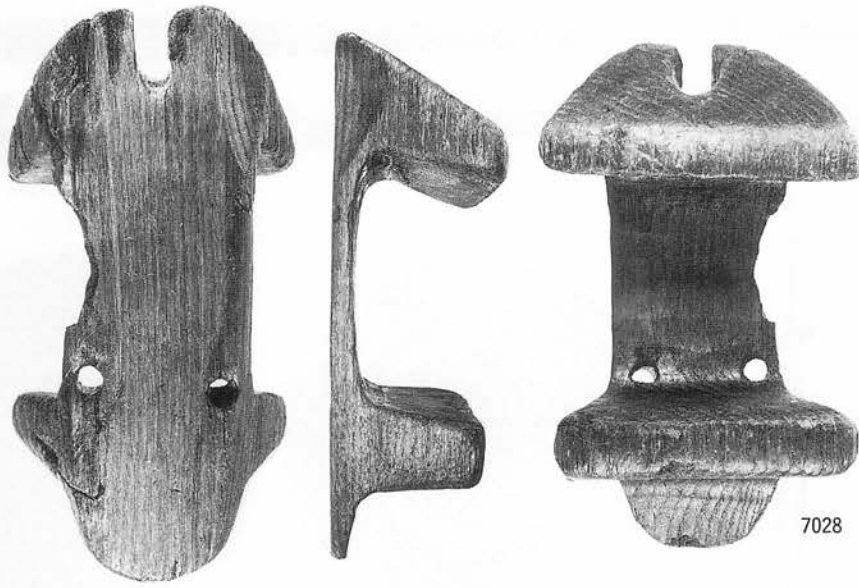
7027

写真図版155 近世の木製品(5)

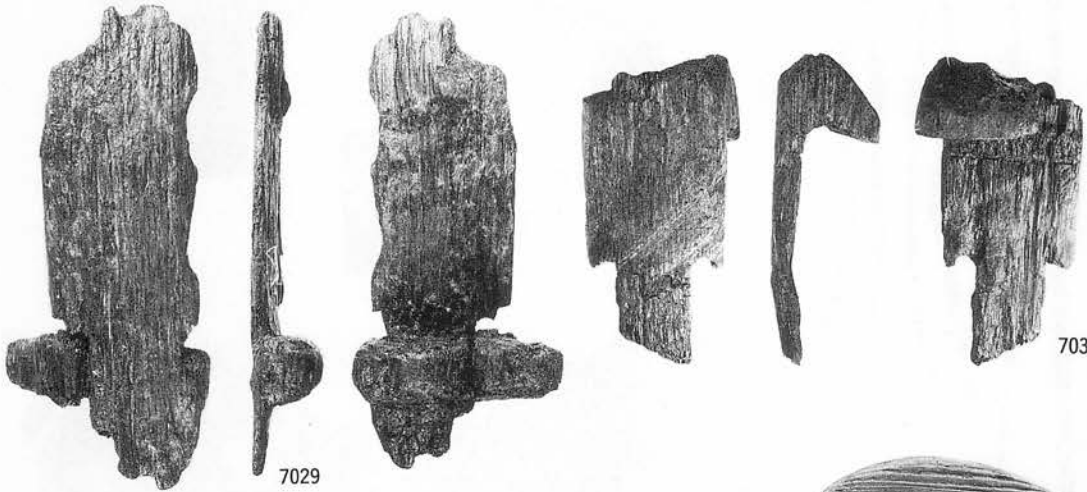


7031

写真図版156 近世の木製品(6)

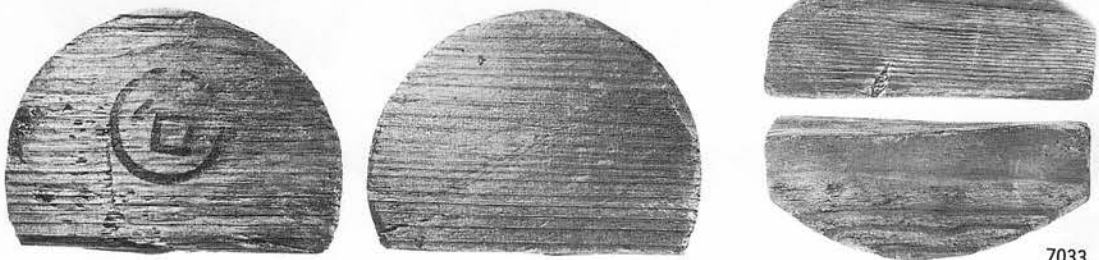


7028



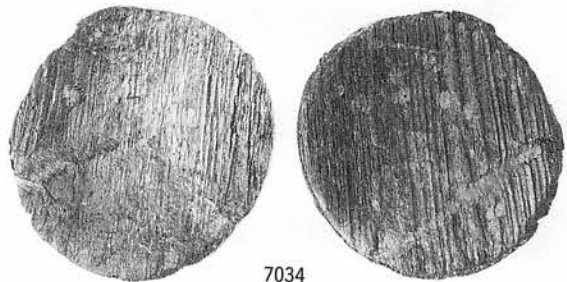
7029

7030



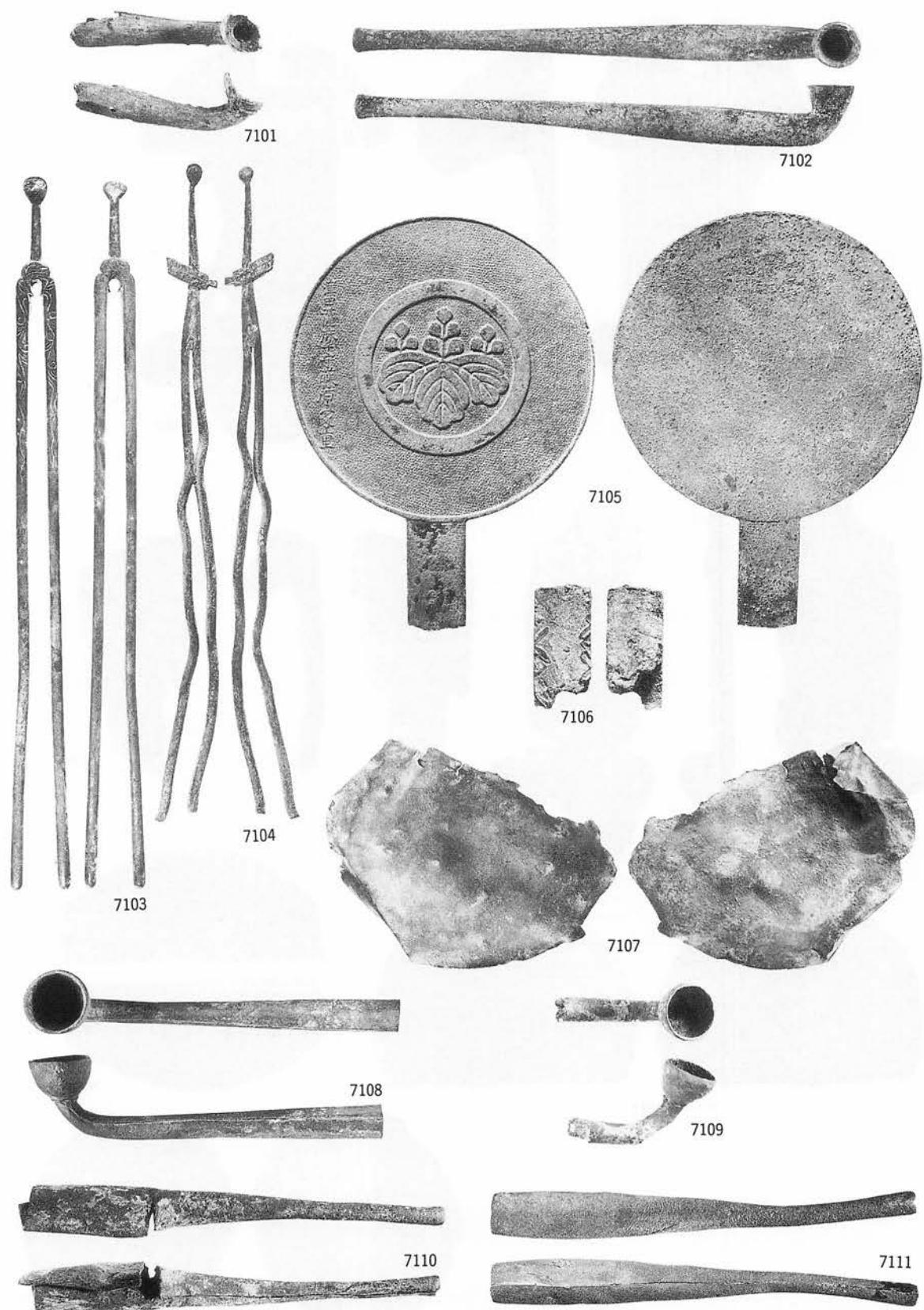
7032

7033

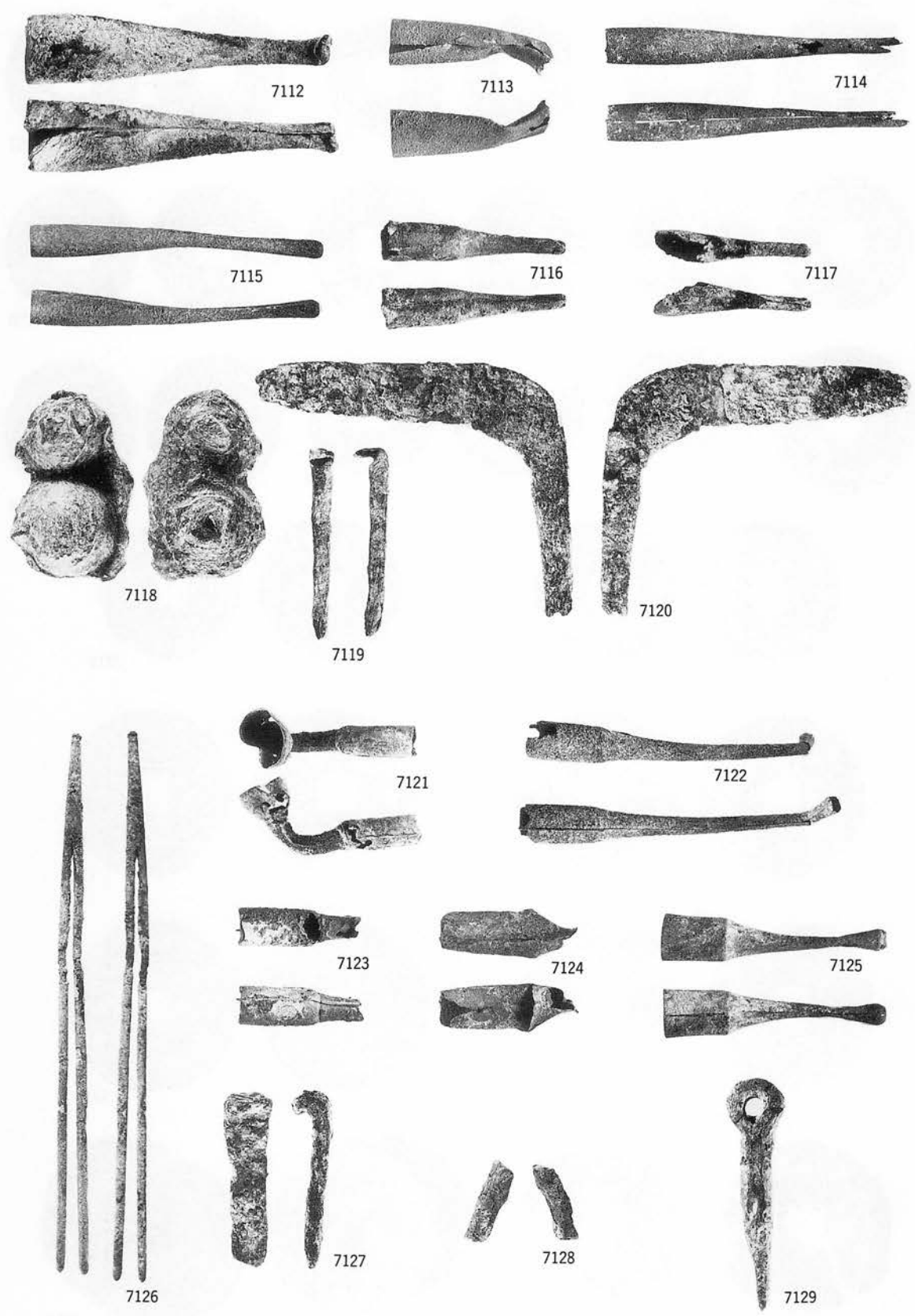


7034

写真図版157 近世の木製品(7)

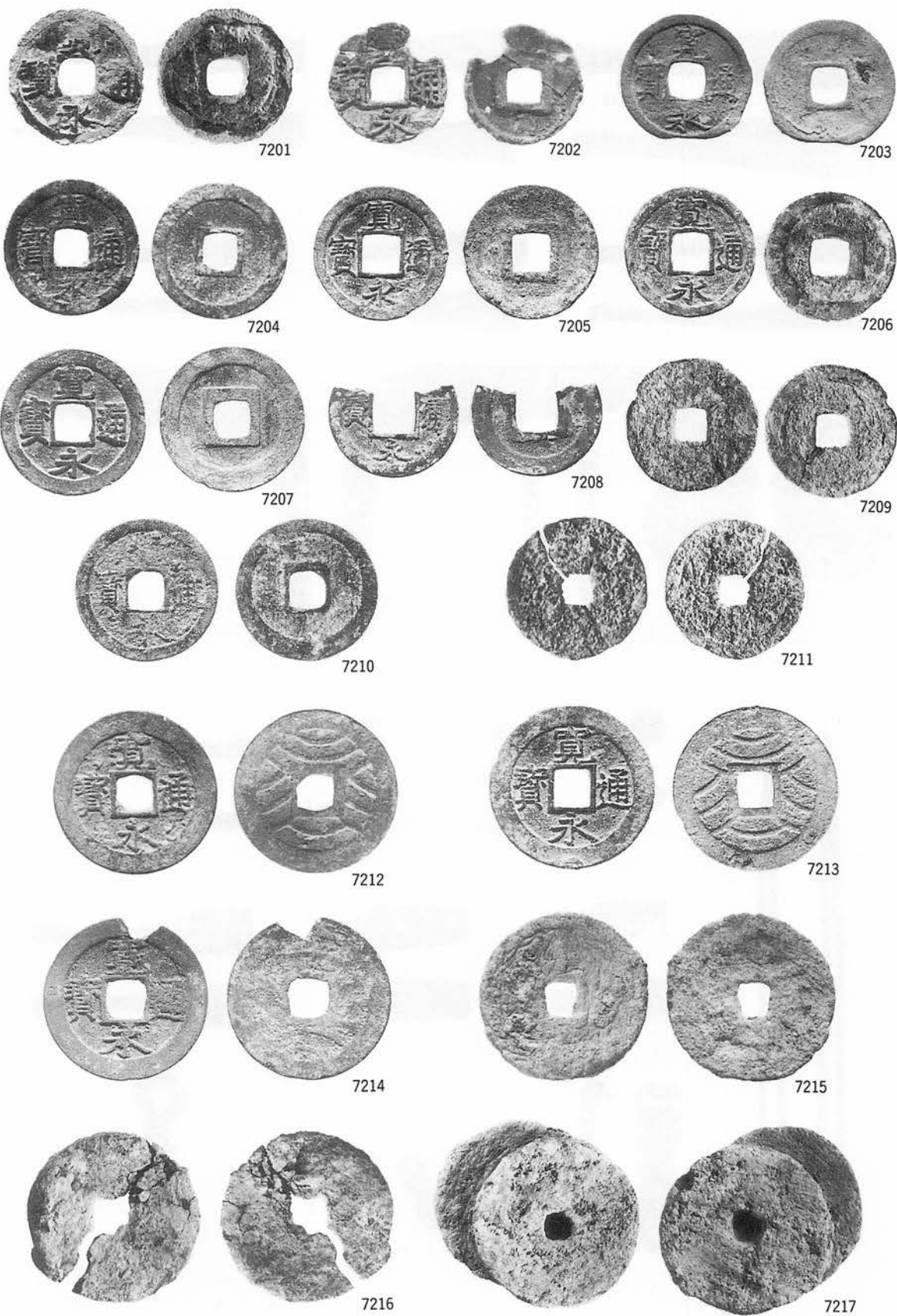


写真図版158 近世の金属製品(1)



写真図版159 近世の金属製品(2)





写真図版160 近世の銭貨(1)





7218

7219



7220



7221



7222



7223



7224



7225



7226



7227



7228



7229



7230

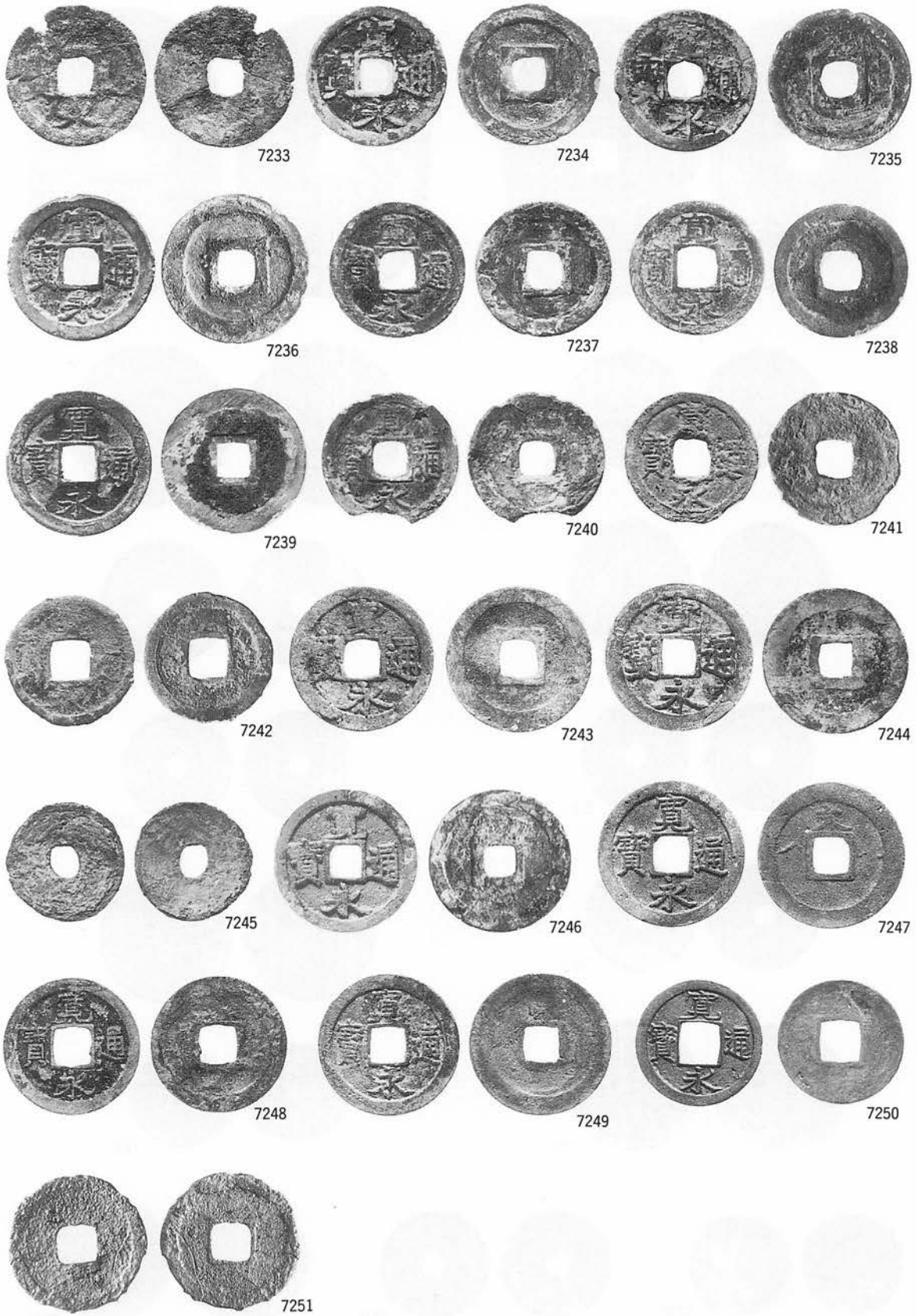


7231

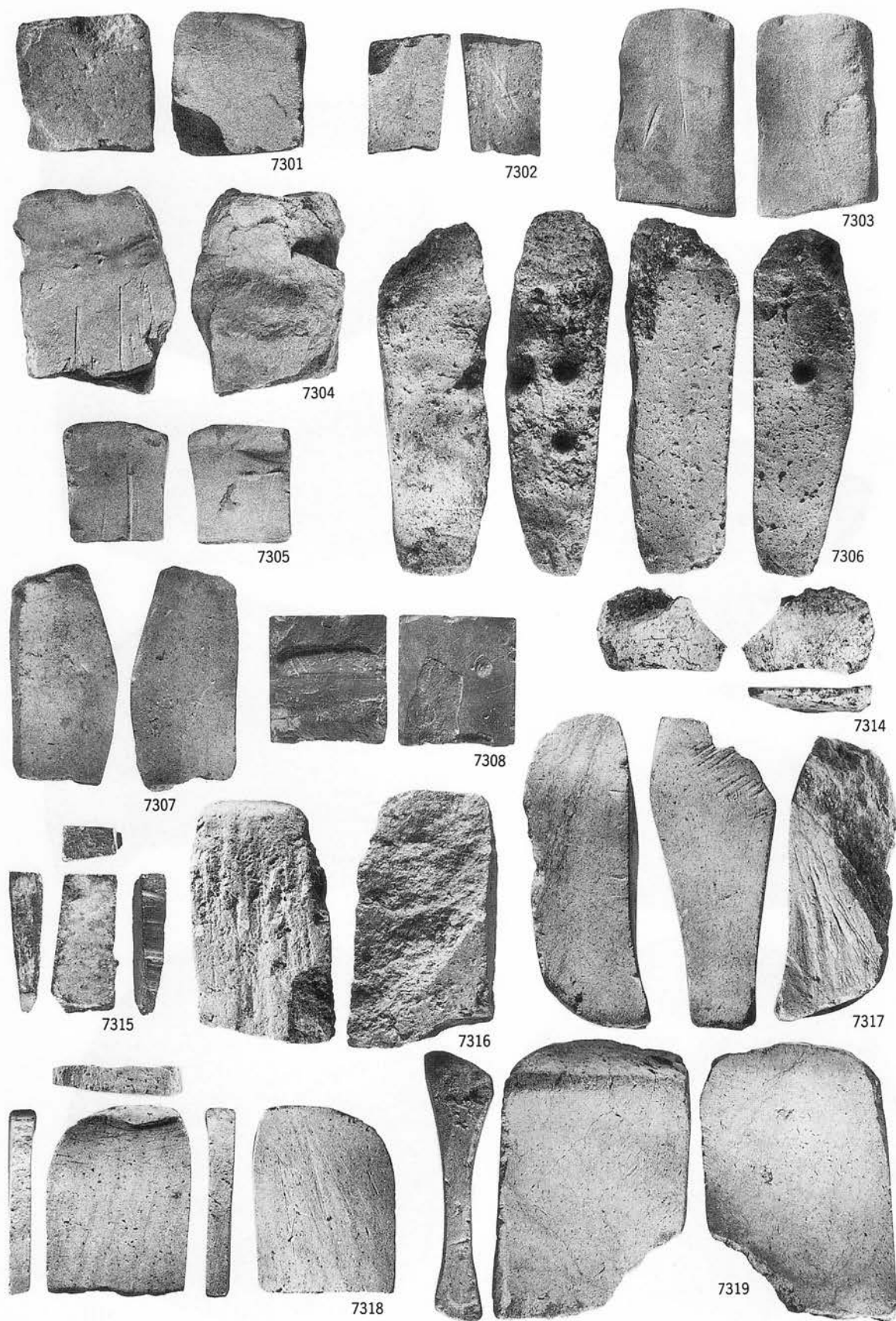


7232

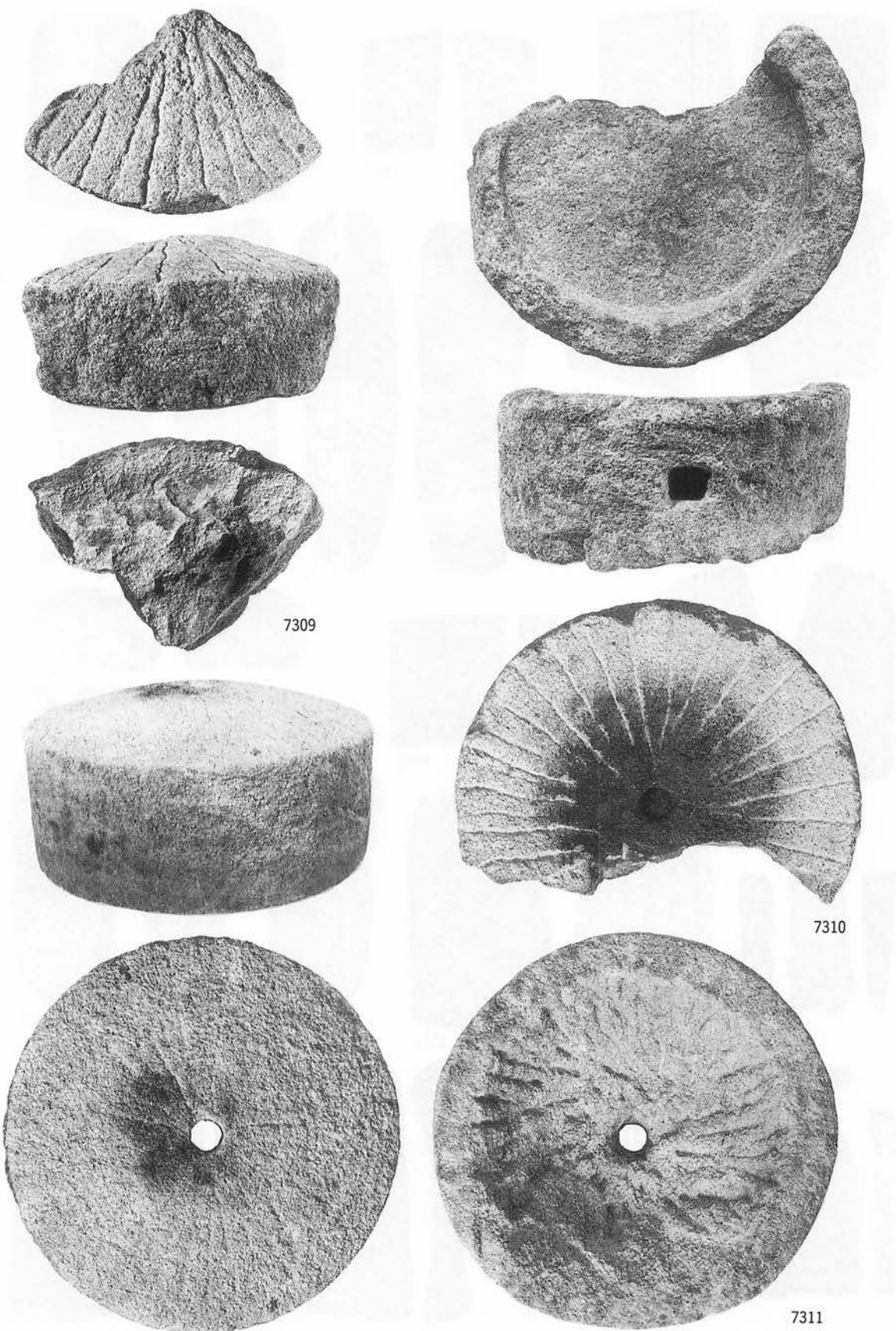
写真図版161 近世の銭貨(2)・近代の銭貨



写真図版162 近世の銭貨(3)



写真図版163 近世の石製品(1)



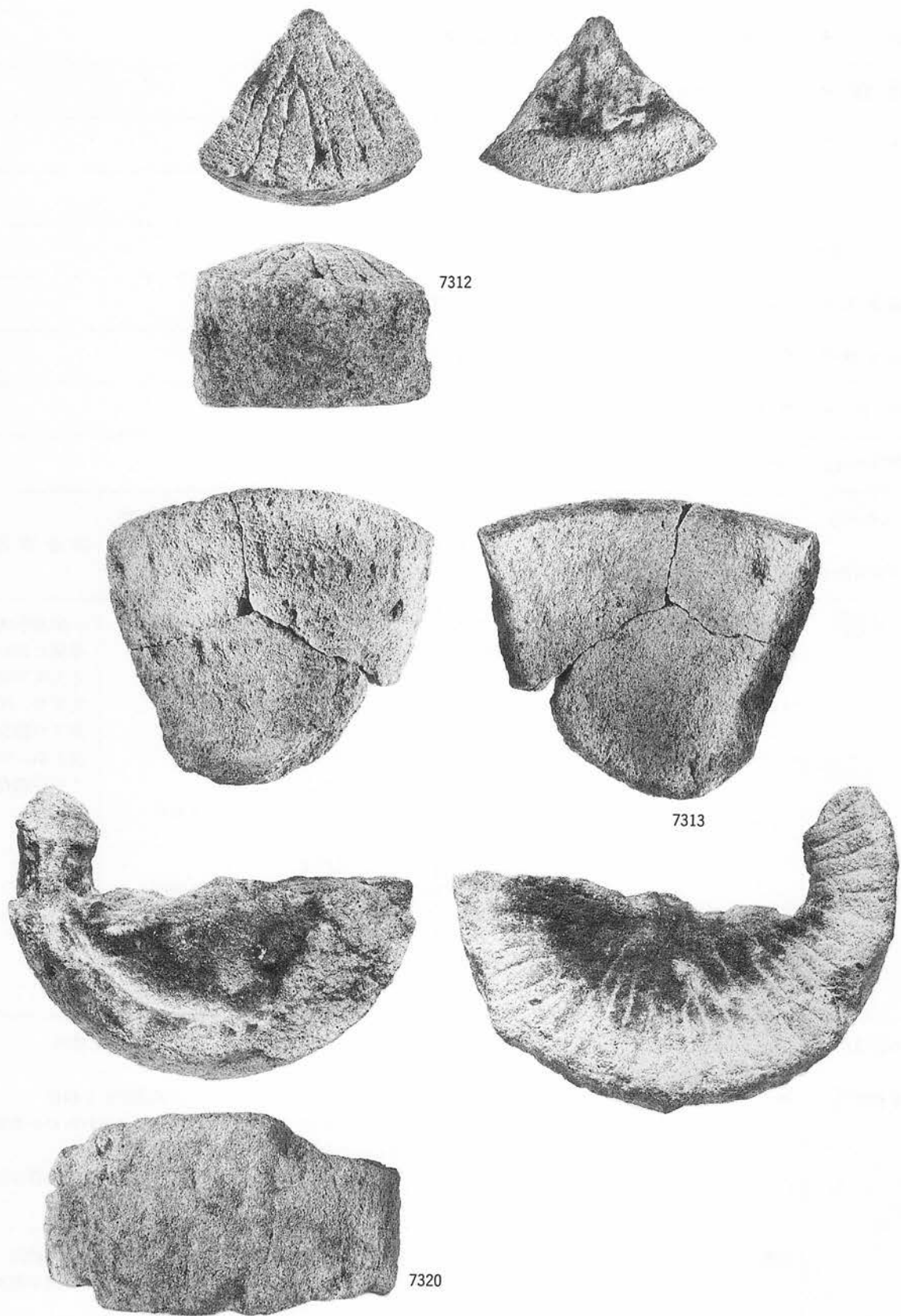
7309

7310

7311

写真図版164 近世の石製品(2)





写真図版165 近世の石製品(3)

報告書抄録

ふりがな	いづみやいせきだいじゅう・じゅういち・じゅうさん・じゅうごじはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書							
副書名	一関遊水地事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第247集							
編著者名	羽柴直人 佐々木 務 笹平克子 吉田 理							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001							
発行年月日	西暦 1997年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いづみやいせき 泉屋遺跡	いわてけんしほいわい 岩手県西磐井 やんひらいづみやちやうひら 郡平泉町平 いづみやいせき 泉字泉屋2- 11ほか	03402	NE76 - 1079	38°58' 59"	141° 7'30"	第10次 19930409～ 19930806 第11次 19930907～ 19930930 第13次 19940414～ 19941104 第15次 19950412～ 19950804	1,523  745  3,050  2,982	一関遊水地 事業に係わ る太田川堤 防工事、国 道4号線改 良工事に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
いせき 泉屋遺跡	都市	12世紀	掘立柱建物 井戸 土坑 溝		国産陶器 中国産陶磁器 かわらけ、瓦、下駄、曲 物、硯、温石、釘、鏡、 漆器		四面廂建物を検出 柱状高台かわらけが集中 して出土 常滑産突帯付四耳壺が出 土	
	屋敷	近世	礎石建物 掘立柱建物 井戸 土坑 溝		陶磁器 漆器、下駄、白、煙管、 かんざし、柄鏡、銭、挽 き白、砥石		近世屋敷を3ヶ所検出 掘立柱民家の変遷を把握 できた	



# 財団法人岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 山 影 源 吉

副 所 長 鷹 羽 康 造

## [管理課]

管 理 課 長 澤 田 寛

主 任 横 山 文 彦

主 事 千 葉 勝 彦

## [調査課]

調 査 課 長 小 田 野 哲 憲

課 長 補 佐 高 橋 與 右 衛 門

〃 工 藤 利 幸

主任文化財 中 川 重 紀

専門調査員 〃 佐々木 清 文

〃 高 橋 義 介

〃 酒 井 宗 孝

〃 菊 池 人 見

文 化 財 小 山 内 透

専門調査員 〃 金 子 佐 知 子

〃 松 本 建 速

〃 菊 地 榮 壽

〃 宮 本 節 子

〃 下 田 隆 衛

〃 濱 田 宏

〃 金 子 昭 彦

〃 晴 山 雅 光

〃 木 戸 口 俊 子

〃 阿 部 勝 則

文 化 財 羽 柴 直 人

専門調査員 〃 星 雅 之

〃 高 木 晃

〃 杉 沢 昭 太 郎

〃 大 道 篤 史

〃 溜 浩 二 郎

〃 村 上 拓

〃 中 村 直 美

期 限 付 川 向 聖 子

専門職員 〃 佐 藤 良 和

〃 篠 根 敬 志

〃 柴 田 慈 幸

〃 鈴 木 浩 二

〃 鈴 木 聡

〃 高 橋 実 央

〃 千 葉 和 弘

〃 平 澤 里 香

〃 山 口 俊 規

〃 山 下 浩 幸

## [資料課]

資 料 課 長 菊 池 強 一

主任文化財 伊 藤 拓

専門調査員

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第247集

泉屋遺跡第 10・11・13・15 次発掘調査報告書

池  
一関遊水地事業発掘調査

印刷 平成9年3月25日

発行 平成9年3月31日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 山口北州印刷株式会社

盛岡市青山4丁目10-5